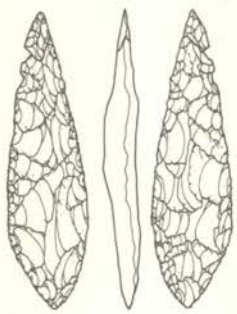
千葉県文化財センター調査報告 第200集

四街道市内黒田遺跡群

—内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

第１分冊



１９９１

千葉県住宅供給公社
財団法人 千葉県文化財センター

四街道市内黒田遺跡群

―内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

第１分冊

１９９１

千葉県住宅供給公社
財団法人 千葉県文化財センター

1．池花南遺跡第１文化層環状ユニット

2．池花南遺跡第１文化層出土台形様石器（2/3）

池花遺跡第３文化層出土主要石器（1/2）

序　　文

四街道市は印旛沼に注ぐ鹿島川や手繰川などの大小の河川に抱かれた緑豊かな台地が広がる地で、古来その恵まれた自然環境のもとで営々と人々の生活の跡が刻まれてまいりました。

一方同市は県都千葉市の東に隣接し、そのすぐれた立地条件から、東京都心あるいは新東京国際空港への交通も整備され、首都圏の外郭部として発展の一途を辿っております。特に昭和56年の市制施行以来、その傾向はますます加速されてきたと言えるでしょう。千葉県住宅供給公社ではこういった状況に対応するべく、既成の「千代田団地」や住宅・都市整備公団によって企画された物井地区土地区画整理事業地に隣接する市北部の内黒田地区に土地区画整理事業を計画いたしました。

千葉県教育委員会では、事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県住宅供給公社をはじめ、関係諸機関との慎重な協議を重ねてまいりました結果、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが担当することとなり、昭和60年３月から昭和62年３月までの２年余に亙って実施いたしました。調査された大割、池花南、池花の３遺跡からは、先土器時代から近世に至るまできわめて幅広い時期の遺構、遺物が検出されました。なかでも池花南遺跡の第２黒色帯中の環状ユニットや池花遺跡の石槍製作跡及びそれら出土の石器群、縄文時代晩期千網期から弥生時代中期須和田期に至る遺物包含層、物井古墳群の一部を構成する多数の古墳などは新しい重要な知見を提供するものとして注目されることと思われます。

このたび、この調査の成果を報告書として刊行するはこびとなりましたが、本書が学術資料として寄与することはもとより、地域の歴史を知る資料として、また文化財の保護と普及のために広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、発掘調査から整理作業、報告書の刊行まで終始御指導と御協力をいただいた千葉県教育庁文化課をはじめ、千葉県住宅供給公社、地元関係諸機関各位に深くお礼申し上げるとともに、酷暑、厳寒にも耐えて発掘調査、整理作業に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表したいと思います。

平成３年３月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　岩瀬良三

凡　　例

1．本書は、千葉県住宅供給公社による内黒田特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書に収める遺跡とその所在地は下記の通りである。

大割遺跡　遺跡コード321－004　四街道市内黒田字立野267－１、他

池花南遺跡　遺跡コード228－007　四街道市内黒田字池花146、他

池花遺跡　遺跡コード228－008　四街道市内黒田字池花158、他

3．発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県住宅供給公社の委託を受け、千葉県教育庁文化課の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが行った。

4．発掘調査及び整理作業は下記の通り実施された。

昭和59年度　調査部長　鈴木道之助　　部長補佐　岡川 宏道　　班長　矢戸 三男
調査研究員　澤野 弘・渡辺 修一

昭和60年度　調査部長　鈴木道之助　　部長補佐　岡川 宏道　　班長　矢戸 三男
調査研究員　渡辺 修一・池田 紀子

昭和61年度　調査部長　鈴木道之助　　部長補佐　岡川 宏道　　班長　矢戸 三男
主任調査研究員　橋本 勝雄
調査研究員　田井 知二・小畑 巌・渡辺 修一・池田 紀子・渡辺 政治

昭和62年度　調査部長　堀部 昭夫　　部長補佐　岡川 宏道　　班長　大原 正義
調査研究員　渡辺 修一

昭和63年度　調査部長　堀部 昭夫　　部長補佐　岡川 宏道　　班長　西山 太郎
主任調査研究員　雨宮龍太郎・奥田 正彦・山口 典子
調査研究員　渡辺 修一・福田 依子

平成元年度　調査部長　堀部 昭夫　　部長補佐　西山 太郎　　班長　谷　旬
主任技師　渡辺 修一

5．本書の執筆、編集は、堀部昭夫、岡川宏道、西山太郎、谷旬の助言のもとに、渡辺修一が行った。

6．第１分冊第１図・第２図の地形図には、国土地理院著作・発行の２万５千分の１「佐倉」を使用した。また第１分冊図版１の航空写真は京葉測量株式会社撮影のものを使用した。

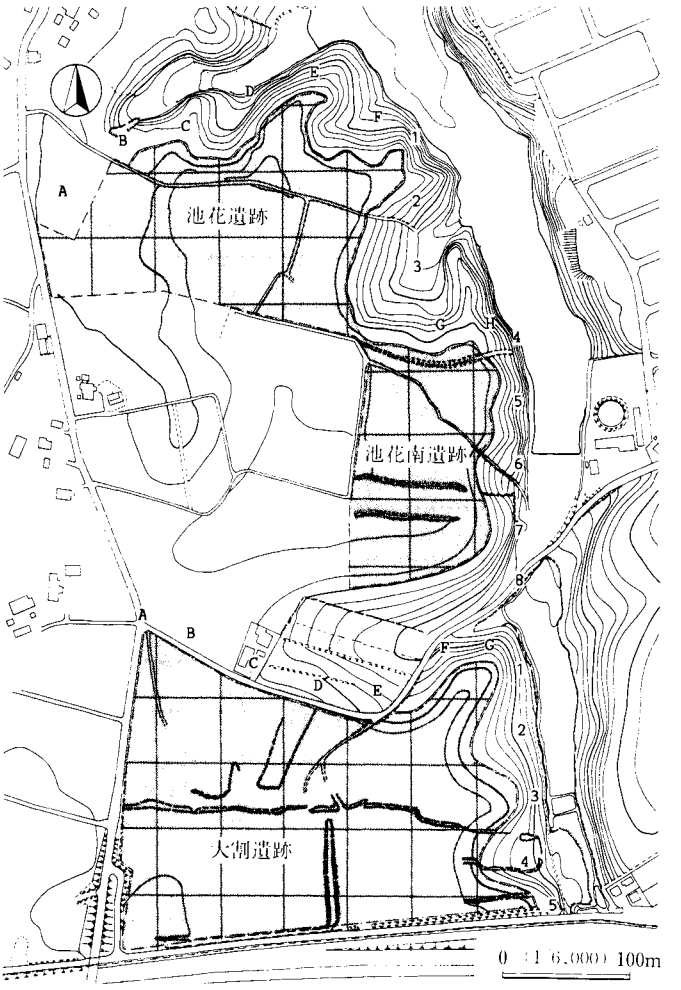
7．発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課をはじめ、千葉県住宅供給公社、四街道市教育委員会及び関係諸機関各位ほか多くの方々から御指導、御助言を賜った。逐一、芳名を列挙しないが、深謝の意を表する次第である。

第１分冊用例

1．第１分冊では先土器時代を扱う。遺跡毎に分割して記述しないことを本書の基本的な編集方針とするが、第１分冊ではそれぞれの遺跡の各文化層を単位として、概ね古い文化層から新しい文化層へと記述を進める。

2．文化層の設定は遺跡毎に行い、下位の(古い段階の)文化層から順に第１文化層、第２文化層、とアラビア数字を用いて称した。

3．遺物(器種別)分布図で使用している記号は、全編を通して統一した。ナイフ形石器と台形様石器、掻器と削器はそれぞれ同一の記号を用いた。



各遺跡の位置関係

本文目次（第１分冊）

序　　文
凡　　例
第１分冊用例
目　　次

Ⅰ．序　章 …… 1
Ⅱ．先土器時代 …… 8
　1．素描 …… 8
　2．大割遺跡第１文化層 …… 10
　3．池花南遺跡第１文化層 …… 16
　4．大割遺跡第２文化層 …… 81
　5．池花遺跡第１文化層 …… 116
　6．大割遺跡第３文化層 …… 128
　7．大割遺跡第４文化層 …… 142
　8．池花南遺跡第２文化層 …… 154
　9．池花遺跡第２文化層 …… 161
　10．大割遺跡第５文化層 …… 164
　11．大割遺跡第６文化層 …… 176
　12．池花遺跡第３文化層 …… 191
　13．池花南遺跡第３文化層 …… 254
　14．大割遺跡第７文化層 …… 268
　15．大割遺跡Ⅲ10ブロック・ブロック外出土遺物 …… 297

第１分冊　挿図目次

第 1 図　内黒田遺跡群の位置と周辺遺跡 …… 2
第 2 図　内黒田遺跡群周辺の古墳分布図 …… 2
第 3 図　周辺地形 …… 3
第 4 図　大グリッドと小グリッド …… 6
第 5 図　土層柱状図 …… 7
第 6 図　大割遺跡IX_L 1 ブロック遺物出土状況 …… 10
第 7 図　大割遺跡IX_L 1 ブロック母岩別分布 …… 10
第 8 図　大割遺跡IX_L 1 ブロック出土石器 …… 11
第 9 図　大割遺跡IX_L 2 ブロック遺物出土状況 …… 12
第 10 図　大割遺跡IX_L 2 ブロック母岩別分布 …… 13
第 11 図　大割遺跡IX_L 2 ブロック出土石器 …… 14
第 12 図　大割遺跡第１文化層遺物垂直分布図 …… 15
第 13 図　池花南遺跡第１文化層クラスター設定図 …… 16
第 14 図　池花南遺跡第１文化層炭化物片集中地点 …… 17
第 15 図　池花南遺跡第１文化層出土石器（１） …… 19
第 16 図　池花南遺跡第１文化層出土石器（２） …… 20
第 17 図　池花南遺跡第１文化層出土石器（３） …… 21
第 18 図　池花南遺跡第１文化層出土石器（４） …… 23
第 19 図　池花南遺跡第１文化層出土石器（５） …… 25
第 20 図　池花南遺跡第１文化層出土石器（６） …… 26
第 21 図　池花南遺跡第１文化層出土石器（７） …… 28
第 22 図　池花南遺跡第１文化層出土石器（８） …… 29
第 23 図　池花南遺跡第１文化層出土石器（９） …… 31
第 24 図　池花南遺跡第１文化層出土石器(10) …… 32
第 25 図　池花南遺跡第１文化層出土石器(11) …… 34
第 26 図　池花南遺跡第１文化層出土石器(12) …… 35
第 27 図　池花南遺跡第１文化層出土石器(13) …… 37
第 28 図　池花南遺跡第１文化層出土石器(14) …… 38
第 29 図　池花南遺跡第１文化層出土石器(15) …… 39
第 30 図　池花南遺跡第１文化層出土石器(16) …… 40

第 31 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(17) …… 41
第 32 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(18) …… 42
第 33 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(19) …… 44
第 34 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(20)…… 45
第 35 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(21) …… 46
第 36 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(22) …… 48
第 37 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(23) …… 49
第 38 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(24) …… 51
第 39 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(25) …… 52
第 40 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(26) …… 54
第 41 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(27) …… 55
第 42 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(28) …… 56
第 43 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(29) …… 58
第 44 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(30)…… 59
第 45 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(31) …… 60
第 46 図　池花南遺跡第 1 文化層遺物垂直分布図 …… 61
第 47 図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器組成 …… 67
第 48 図　池花南遺跡第 1 文化層接合関係集成 …… 74
第 49 図　池花南遺跡第 1 文化層珪質頁岩 1 ・ 2 ・ 4 とその動き…… 75
第 50 図　池花南遺跡第 1 文化層の台形様石器…… 77
第 51 図　池花南遺跡第 1 文化層のその他の石器(1) …… 78
第 52 図　池花南遺跡第 1 文化層のその他の石器(2) …… 79
第 53 図　池花南遺跡第 1 文化層の主な石核 …… 80
第 54 図　大割遺跡IX_U 1 ブロック遺物出土状況 …… 81
第 55 図　大割遺跡IX_U 1 ブロック出土石器 …… 82
第 56 図　大割遺跡IX_U 2 ブロック遺物出土状況 …… 82
第 57 図　大割遺跡IX_U 2 ブロック出土石器 …… 83
第 58 図　大割遺跡IX_U 3 ブロック遺物出土状況 …… 84
第 59 図　大割遺跡IX_U 3 ブロック出土石器 …… 85
第 60 図　大割遺跡IX_U 4 ブロック遺物出土状況 …… 86
第 61 図　大割遺跡IX_U 4 ブロック母岩別分布 …… 87
第 62 図　大割遺跡IX_U 4 ブロック出土石器 …… 87
第 63 図　大割遺跡IX_U 5 ブロック遺物出土状況 …… 88

第64図　大割遺跡IX_U5ブロック母岩別分布 …… 89
第65図　大割遺跡IX_U5ブロック出土石器 …… 89
第66図　大割遺跡IX_U6ブロック遺物出土状況 …… 90
第67図　大割遺跡IX_U6ブロック出土石器 …… 91
第68図　大割遺跡IX_U7ブロック遺物出土状況 …… 91
第69図　大割遺跡IX_U7ブロック母岩別分布 …… 92
第70図　大割遺跡IX_U7ブロック出土石器(1) …… 93
第71図　大割遺跡IX_U7ブロック出土石器(2) …… 94
第72図　大割遺跡IX_U8ブロック遺物出土状況 …… 96
第73図　大割遺跡IX_U8ブロック母岩別分布 …… 96
第74図　大割遺跡IX_U8ブロック出土石器 …… 97
第75図　大割遺跡IX_U9ブロック遺物出土状況 …… 98
第76図　大割遺跡IX_U9ブロック母岩別分布 …… 99
第77図　大割遺跡IX_U9ブロック出土石器 ……100
第78図　大割遺跡IX_U10ブロック遺物出土状況 ……101
第79図　大割遺跡IX_U10ブロック母岩別分布 ……101
第80図　大割遺跡IX_U10ブロック出土石器 ……102
第81図　大割遺跡IX_U11ブロック遺物出土状況 ……104
第82図　大割遺跡IX_U11ブロック母岩別分布 ……104
第83図　大割遺跡IX_U11ブロック出土石器 ……105
第84図　大割遺跡IX_U12ブロック遺物出土状況 ……106
第85図　大割遺跡IX_U12ブロック出土石器 ……107
第86図　大割遺跡第2文化層遺物垂直分布図 ……108
第87図　大割遺跡第2文化層出土石器組成 ……110
第88図　大割遺跡IX_U4～11ブロック石材組成 ……111
第89図　大割遺跡IX_U4～11ブロック黒曜石母岩別組成 ……112
第90図　大割遺跡第2文化層のナイフ形石器と台形様石器 ……114
第91図　池花遺跡VI1ブロック遺物出土状況 ……117
第92図　池花遺跡VI1ブロック母岩別分布 ……118
第93図　池花遺跡VI1ブロック出土石器(1) ……119
第94図　池花遺跡VI1ブロック出土石器(2) ……120
第95図　池花遺跡VI2ブロック遺物出土状況 ……122
第96図　池花遺跡VI2ブロック母岩別分布 ……122

第97図　池花遺跡VI 2 ブロック出土石器 ……123
第98図　VI層段階のナイフ形石器 ……126
第99図　大割遺跡第 3 文化層遺物出土状況 ……129
第100図　大割遺跡第 3 文化層母岩別分布 ……130
第101図　大割遺跡第 3 文化層遺物垂直分布図 ……131
第102図　大割遺跡第 3 文化層出土石器（1） ……132
第103図　大割遺跡第 3 文化層出土石器（2） ……133
第104図　大割遺跡第 3 文化層出土石器（3） ……134
第105図　大割遺跡第 3 文化層出土石器（4） ……135
第106図　大割遺跡第 3 文化層出土石器（5） ……136
第107図　大割遺跡第 3 文化層出土石器組成 ……139
第108図　大割遺跡第 4 文化層遺物出土状況 ……143
第109図　大割遺跡第 4 文化層母岩別分布 ……144
第110図　大割遺跡IV 3 ブロック土坑 ……145
第111図　大割遺跡第 4 文化層遺物垂直分布図 ……146
第112図　大割遺跡第 4 文化層出土石器（1） ……147
第113図　大割遺跡第 4 文化層出土石器（2） ……148
第114図　大割遺跡第 4 文化層出土石器（3） ……149
第115図　大割遺跡第 4 文化層出土石器組成 ……152
第116図　池花南遺跡IV層竪穴遺構 ……155
第117図　池花南遺跡IV層竪穴遺構炭化物分布 ……157
第118図　池花南遺跡第 2 文化層出土石器 ……158
第119図　池花遺跡第 2 文化層遺物出土状況 ……162
第120図　池花遺跡第 2 文化層出土石器 ……163
第121図　大割遺跡第 5 文化層遺物出土状況 ……165
第122図　大割遺跡第 5 文化層母岩別分布 ……167
第123図　大割遺跡第 5 文化層遺物垂直分布図 ……168
第124図　大割遺跡第 5 文化層出土石器（1） ……169
第125図　大割遺跡第 5 文化層出土石器（2） ……170
第126図　大割遺跡第 5 文化層出土石器（3） ……171
第127図　大割遺跡第 5 文化層出土石器組成 ……173
第128図　大割遺跡III 8 ブロック遺物出土状況 ……176
第129図　大割遺跡III 8 ブロック出土石器 ……177

第130図　大割遺跡III 9 ブロック遺物出土状況 ……178
第131図　大割遺跡III 9 ブロック母岩別分布 ……179
第132図　大割遺跡III 9 ブロック出土石器（1） ……180
第133図　大割遺跡III 9 ブロック出土石器（2） ……181
第134図　大割遺跡Ｆ2・Ｆ3区遺物出土状況 ……183
第135図　大割遺跡Ｆ2・Ｆ3区出土石器 ……184
第136図　池花遺跡第3文化層ブロック分布 ……186
第137図　池花遺跡III 1 ブロック遺物出土状況 ……187
第138図　池花遺跡III 2・III 3 ブロック遺物出土状況 ……189
第139図　池花遺跡III 4 ブロック遺物出土状況 ……195
第140図　池花遺跡III 1～4 ブロック母岩別分布 ……193
第141図　池花遺跡III 5 ブロック遺物出土状況 ……196
第142図　池花遺跡III 5 ブロック母岩別分布 ……199
第143図　池花遺跡III 6・III 7 ブロック遺物出土状況 ……197
第144図　池花遺跡III 6・III 7 ブロック母岩別分布 ……200
第145図　池花遺跡III 8 ブロック遺物出土状況 ……201
第146図　池花遺跡III 8 ブロック母岩別分布 ……201
第147図　池花遺跡III 9 ブロック遺物出土状況 ……202
第148図　池花遺跡III 9 ブロック母岩別分布 ……202
第149図　池花遺跡III10ブロック遺物出土状況 ……203
第150図　池花遺跡III10ブロック母岩別分布（1） ……205
第151図　池花遺跡III10ブロック母岩別分布（2） ……205
第152図　池花遺跡第3文化層遺物垂直分布図（1） ……206
第153図　池花遺跡第3文化層遺物垂直分布図（2） ……207
第154図　池花遺跡第3文化層出土石器（1） ……209
第155図　池花遺跡第3文化層出土石器（2） ……210
第156図　池花遺跡第3文化層出土石器（3） ……211
第157図　池花遺跡第3文化層出土石器（4） ……212
第158図　池花遺跡第3文化層出土石器（5） ……214
第159図　池花遺跡第3文化層出土石器（6） ……215
第160図　池花遺跡第3文化層出土石器（7） ……217
第161図　池花遺跡第3文化層出土石器（8） ……219
第162図　池花遺跡第3文化層出土石器（9） ……221

第163図　池花遺跡第３文化層出土石器(10) ……222
第164図　池花遺跡第３文化層出土石器(11) ……223
第165図　池花遺跡第３文化層出土石器(12) ……225
第166図　池花遺跡第３文化層出土石器(13) ……227
第167図　池花遺跡第３文化層出土石器(14) ……228
第168図　池花遺跡第３文化層出土石器(15) ……229
第169図　池花遺跡第３文化層出土石器(16) ……230
第170図　池花遺跡第３文化層出土石器(17) ……231
第171図　池花遺跡第３文化層出土石器(18) ……232
第172図　池花遺跡第３文化層出土石器(19) ……234
第173図　池花遺跡第３文化層出土石器(20) ……236
第174図　池花遺跡第３文化層出土石器(21) ……237
第175図　池花遺跡第３文化層出土石器組成 ……241
第176図　池花遺跡第３文化層主要石器組成(１) ……245
第177図　池花遺跡第３文化層主要石器組成(２) ……247
第178図　池花南遺跡南半部先土器時代石器分布図 ……254
第179図　池花南遺跡III２～III４ブロック遺物出土状況 ……255
第180図　池花南遺跡III２～III４ブロック母岩別分布 ……256
第181図　池花南遺跡第３文化層(III２～III４ブロック)出土石器 ……257
第182図　池花南遺跡III５ブロック遺物出土状況 ……259
第183図　池花南遺跡III５ブロック出土石器 ……259
第184図　池花南遺跡 G4－66区遺物出土状況 ……260
第185図　池花南遺跡 G4－66区出土石器 ……260
第186図　池花・池花南遺跡ブロック外石器出土位置 ……262
第187図　池花南遺跡北半部ブロック外出土石器(１) ……263
第188図　池花南遺跡北半部ブロック外出土石器(２) ……264
第189図　池花南遺跡南半部ブロック外出土石器 ……265
第190図　大割遺跡第７文化層全体図 ……268
第191図　大割遺跡第７文化層遺物出土状況(１) ……269
第192図　大割遺跡第７文化層遺物出土状況(２) ……271
第193図　大割遺跡第７文化層遺物出土状況(３) ……273
第194図　大割遺跡第７文化層母岩別分布(１) ……274
第195図　大割遺跡第７文化層母岩別分布(２) ……275

第196図　大割遺跡第７文化層遺物垂直分布図 ……276
第197図　大割遺跡第７文化層出土石器（１）……277
第198図　大割遺跡第７文化層出土石器（２）……278
第199図　大割遺跡第７文化層出土石器（３）……279
第200図　大割遺跡第７文化層出土石器（４）……280
第201図　大割遺跡第７文化層出土石器（５）……281
第202図　大割遺跡第７文化層出土石器（６）……282
第203図　大割遺跡第７文化層出土石器（７）……283
第204図　大割遺跡第７文化層出土石器（８）……284
第205図　大割遺跡第７文化層出土石器（９）……285
第206図　大割遺跡第７文化層出土石器組成 ……290
第207図　大割遺跡第７文化層出土石器群の構造 ……295
第208図　大割遺跡III10ブロック遺物出土状況・出土石器 ……297
第209図　大割遺跡ブロック外石器出土位置 ……299
第210図　大割遺跡ブロック外出土石器（１）……300
第211図　大割遺跡ブロック外出土石器（２）……301
第212図　大割遺跡ブロック外出土石器（３）……302
第213図　大割遺跡 F4－86区出土石器 ……303

付図１　内黒田遺跡群先土器時代発掘区及び検出ブロック配置図
付図３　池花南遺跡第１文化層環状ユニット遺物分布図
付図４　池花南遺跡第１文化層母岩別分布（１）
付図５　池花南遺跡第１文化層母岩別分布（２）

第１分冊　表目次

第１表　内黒田遺跡群先土器時代文化層一覧 …… 9
第２表　大割遺跡IX_L１ブロック出土石器計測表 …… 11
第３表　大割遺跡IX_L１ブロック出土石器組成表 …… 11
第４表　大割遺跡IX_L２ブロック出土石器計測表 …… 14
第５表　大割遺跡IX_L２ブロック出土石器組成表 …… 14
第６表　池花南遺跡第１文化層出土石器計測表(1) …… 62

第7表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表(2) …… 63
第8表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表(3) …… 64
第9表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表(4) …… 65
第10表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表(5) …… 66
第11表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表(6) …… 67
第12表　池花南遺跡第1文化層出土石器組成表(1) …… 68
第13表　池花南遺跡第1文化層出土石器組成表(2) …… 69
第14表　池花南遺跡第1文化層出土石器組成表(3) …… 70
第15表　池花南遺跡第1文化層母岩別資料クラスター別分布(1) …… 71
第16表　池花南遺跡第1文化層母岩別資料クラスター別分布(2) …… 72
第17表　池花南遺跡第1文化層母岩別資料クラスター別分布(3) …… 73
第18表　大割遺跡IX_U1ブロック出土石器計測表 …… 82
第19表　大割遺跡IX_U2ブロック出土石器計測表 …… 83
第20表　大割遺跡IX_U2ブロック出土石器組成表 …… 83
第21表　大割遺跡IX_U3ブロック出土石器計測表 …… 84
第22表　大割遺跡IX_U3ブロック出土石器組成表 …… 86
第23表　大割遺跡IX_U4ブロック出土石器計測表 …… 88
第24表　大割遺跡IX_U5ブロック出土石器計測表 …… 90
第25表　大割遺跡IX_U6ブロック出土石器計測表 …… 90
第26表　大割遺跡IX_U7ブロック出土石器計測表 …… 95
第27表　大割遺跡IX_U8ブロック出土石器計測表 …… 97
第28表　大割遺跡IX_U9ブロック出土石器計測表 …… 99
第29表　大割遺跡IX_U10ブロック出土石器計測表 …… 103
第30表　大割遺跡IX_U11ブロック出土石器計測表 …… 106
第31表　大割遺跡IX_U12ブロック出土石器計測表 …… 107
第32表　大割遺跡IX_U12ブロック出土石器組成表 …… 107
第33表　大割遺跡第2文化層(IX_U4、5、7～11ブロック)出土石器組成表 …… 109
第34表　池花遺跡VI1ブロック出土石器計測表 …… 120
第35表　池花遺跡VI1ブロック出土石器組成表 …… 121
第36表　池花遺跡VI2ブロック出土石器計測表 …… 124
第37表　池花遺跡VI2ブロック出土石器組成表 …… 124
第38表　大割遺跡第3文化層出土石器計測表 …… 137
第39表　大割遺跡第3文化層出土石器組成表 …… 139

第40表　大割遺跡第４文化層出土石器計測表 ……150
第41表　大割遺跡第４文化層出土石器組成表 ……152
第42表　池花南遺跡第２文化層出土石器計測表 ……158
第43表　池花南遺跡第２文化層出土石器組成表 ……159
第44表　池花遺跡第２文化層出土石器計測表 ……162
第45表　池花遺跡第２文化層出土石器組成表 ……163
第46表　大割遺跡第５文化層出土石器計測表 ……172
第47表　大割遺跡第５文化層出土石器組成表 ……174
第48表　大割遺跡III８ブロック出土石器計測表 ……182
第49表　大割遺跡III９ブロック出土石器計測表 ……183
第50表　大割遺跡III９ブロック南(F2～F3区)出土石器計測表 ……185
第51表　池花遺跡第３文化層出土石器計測表(1) ……238
第52表　池花遺跡第３文化層出土石器計測表(2) ……239
第53表　池花遺跡第３文化層出土石器計測表(3) ……240
第54表　池花遺跡第３文化層出土石器計測表(4) ……241
第55表　池花遺跡第３文化層出土石器組成表(1) ……242
第56表　池花遺跡第３文化層出土石器組成表(2) ……243
第57表　池花遺跡第３文化層出土石器組成表(3) ……244
第58表　池花遺跡第３文化層母岩別資料ブロック別分布(1) ……249
第59表　池花遺跡第３文化層母岩別資料ブロック別分布(2) ……250
第60表　池花南遺跡III２～４ブロック出土石器計測表 ……258
第61表　池花南遺跡III５ブロック出土石器計測表 ……259
第62表　池花南遺跡 G4－66区出土石器計測表 ……260
第63表　池花南遺跡北半部ブロック外出土石器計測表 ……264
第64表　池花南遺跡南半部ブロック外出土石器計測表 ……266
第65表　大割遺跡第７文化層出土石器計測表(1) ……286
第66表　大割遺跡第７文化層出土石器計測表(2) ……287
第67表　大割遺跡第７文化層出土石器計測表(3) ……288
第68表　大割遺跡第７文化層出土石器組成表(1) ……291
第69表　大割遺跡第７文化層出土石器組成表(2) ……292
第70表　大割遺跡III10ブロック出土石器計測表 ……298
第71表　大割遺跡ブロック外出土石器計測表 ……302
第72表　大割遺跡 F4－86区出土石器計測表 ……304

第１分冊　図版目次

図版１　内黒田遺跡群周辺航空写真

図版２　１．大割遺跡第１文化層(IX$_L$１ブロック)
２．大割遺跡第２文化層(IX$_U$１ブロック)
３．大割遺跡第２文化層(IX$_U$２ブロック)

図版３　１．大割遺跡第２文化層(IX$_U$３ブロック)
２．大割遺跡第２文化層(IX$_U$４ブロック)

図版４　１．大割遺跡第２文化層(IX$_U$５ブロック)
２．大割遺跡第２文化層(IX$_U$６ブロック)
３．大割遺跡第２文化層(IX$_U$７ブロック)

図版５　１．大割遺跡第１、２文化層
(IX$_L$２ブロック〔手前〕、IX$_U$８ブロック)
２．大割遺跡第２文化層
(IX$_U$10、11ブロック)
３．大割遺跡第２文化層IX$_U$12ブロック)

図版６　１．大割遺跡第２文化層(IX$_U$９ブロック)
２．大割遺跡第２文化層(IX$_U$９ブロック)

図版７　１．大割遺跡第４文化層(IV１・２ブロック)
２．大割遺跡第４文化層(土坑)

図版８　１．大割遺跡第３文化層(V１～３ブロック)
２．大割遺跡第５文化層(III４～７ブロック)

図版９　１．大割遺跡第６文化層(III９ブロック)
２．大割遺跡第６文化層(III９ブロック)

図版10　１．大割遺跡第７文化層(III１・２ブロック)
２．大割遺跡第７文化層(III３ブロック)

図版11　１．池花南遺跡第１文化層全景
２．同近景(１)
３．同近景(２)
４．同近景(３)

図版12　１．池花南遺跡第２文化層竪穴遺構検出状況
２．同土層断面
３．同全景

図版13　１．池花南遺跡第３文化層(III2,3ブロック)
２．基本土層（池花南遺跡）
３．調査風景
４．調査風景

図版14　１．池花遺跡第１文化層(VI１ブロック)
２．池花遺跡第１文化層(VI２ブロック)
３．池花遺跡第２文化層(III11ブロック)

図版15　１．池花遺跡第３文化層
２．同（III10ブロック）
３．同（III４ブロック）

図版16　１．池花遺跡第３文化層（III１ブロック）
２．同（III６ブロック）
３．同出土状況近景（１）
４．同出土状況近景（２）

図版17　１．大割遺跡炭化物集中地点
２．池花南遺跡炭化物集中地点

図版18　大割遺跡第１文化層出土石器・
第２文化層出土石器（１）

図版19　大割遺跡第２文化層出土石器（２）

図版20　大割遺跡第２文化層出土石器（３）

図版21　大割遺跡第２文化層出土石器（４）

図版22　池花南遺跡第１文化層出土石器（１）

図版23　池花南遺跡第１文化層出土石器（２）

図版24　池花南遺跡第１文化層出土石器（３）

図版25　池花南遺跡第１文化層出土石器（４）

図版26　池花南遺跡第１文化層出土石器（５）

図版27　池花南遺跡第１文化層出土石器（６）

図版28　池花南遺跡第１文化層出土石器（７）

図版29　池花南遺跡第１文化層出土石器（８）

図版30　池花南遺跡第１文化層出土石器（９）

図版31　池花南遺跡第１文化層出土石器（10）

図版32　池花南遺跡第１文化層出土石器（11）

図版33　池花南遺跡第１文化層出土石器（12）

図版34　池花南遺跡第１文化層出土石器（13）

図版35　池花南遺跡第１文化層出土石器（14）

図版36　池花南遺跡第１文化層出土石器（15）

図版37　池花南遺跡第１文化層出土石器（16）

図版38　池花南遺跡第１文化層出土石器（17）

図版39　池花南遺跡第１文化層出土石器（18）

図版40　1．池花遺跡VI 1 ブロック出土石器
　　2．池花遺跡VI 2 ブロック出土石器
図版41　大割遺跡第 3 文化層出土石器（1）
図版42　大割遺跡第 3 文化層出土石器（2）
図版43　大割遺跡第 3 文化層出土石器（3）
図版44　大割遺跡第 4 文化層出土石器
図版45　池花南遺跡第 2 文化層出土石器
図版46　大割遺跡第 5 文化層出土石器（1）
図版47　大割遺跡第 5 文化層出土石器（2）
図版48　大割遺跡第 6 文化層出土石器（1）
図版49　大割遺跡第 6 文化層出土石器（2）・
　　ブロック外出土石器（1）
図版50　大割遺跡ブロック外出土石器（2）
図版51　1．池花南遺跡III 2 ～ 4 ブロック出土石器
　　2．池花南遺跡III 5 ブロック出土石器
　　3．池花南遺跡 G4－66区出土石器
　　4．池花遺跡III11ブロック出土石器
図版52　池花南遺跡ブロック外出土石器
図版53　池花遺跡第 3 文化層出土石器（1）
図版54　池花遺跡第 3 文化層出土石器（2）
図版55　池花遺跡第 3 文化層出土石器（3）
図版56　池花遺跡第 3 文化層出土石器（4）
図版57　池花遺跡第 3 文化層出土石器（5）
図版58　池花遺跡第 3 文化層出土石器（6）
図版59　池花遺跡第 3 文化層出土石器（7）
図版60　池花遺跡第 3 文化層出土石器（8）
図版61　池花遺跡第 3 文化層出土石器（9）
図版62　池花遺跡第 3 文化層出土石器（10）
図版63　池花遺跡第 3 文化層出土石器（11）
図版64　大割遺跡第 7 文化層出土石器（1）
図版65　大割遺跡第 7 文化層出土石器（2）
図版66　大割遺跡第 7 文化層出土石器（3）
図版67　大割遺跡第 7 文化層出土石器（4）

Ⅰ．序　章

調査に至る経緯と概要

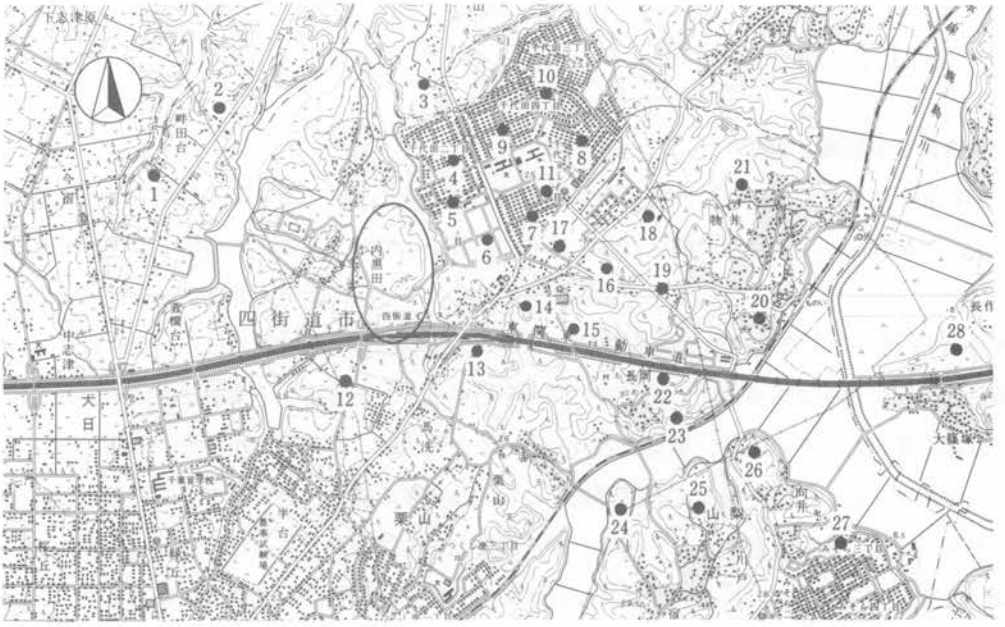
昭和56年に市制を施行した四街道市は千葉県で最も新しい市であるが、県都千葉市に隣接する上、東京都心への交通も整備され、人口増加の著しい地域である。大規模な宅地開発も市内の随所で計画、実施されている。千葉県住宅供給公社では、四街道市北部、既存の「千代田団地」の西側隣接地である内黒田地区に23haに及ぶ区画整理事業を計画したが、これに伴い、千葉県教育庁文化課は事業地内に埋蔵文化財が存在することを確認、千葉県住宅供給公社と慎重な協議を重ねた。その結果、事業地内に所在する大割遺跡、池花遺跡及び近世の塚とされていた「池花塚」についてやむなく発掘調査による記録保存の措置がとられることになった。

当初、埋蔵文化財包蔵地として認められたのは先述の各遺跡であったが、「池花塚」については、大割遺跡の調査が開始された後に、近世の塚ではなく古墳時代後期の円墳であることが明らかになった。また「池花塚」が所在する台地上には、他にも古墳の墳丘と考えられる盛り上がりが観察され、墳丘を失った古墳の存在も含め、台地全体が遺跡である可能性が生じた。そこで池花遺跡の南側に広がる台地を池花II地区と仮称し、その大半の54,000㎡を対象として、千葉県教育庁文化課の指導のもと財団法人千葉県文化財センターが試掘(対象面積の２％：1,080㎡）を行った。その結果、多数の古墳、縄文時代晩期後葉及び弥生時代中期前半の遺物包含層の存在が確認され、18,000㎡が「池花南遺跡」として認定された。従って最終的に記録保存の対象となったのは、大割、池花南、池花の３遺跡である。調査は最も南に位置する大割遺跡から着手され、順次池花南遺跡、池花遺跡へと進められた。

大割遺跡(対象面積56,000㎡)は昭和60年３月に調査を開始した。水道管の埋設工事を先行する必要上、当初東関東自動車道沿いの幅50m分15,000㎡を優先して確認、本調査を行った。まず昭和59年度、60年３月１日から３月31日まで10,000㎡分の確認調査を実施し、60年度、60年４月１日から６月28日までに残り5,000㎡の確認調査及び先行範囲の本調査を終了させた。さらに60年７月１日から残る41,000㎡分の確認調査を開始し、61年３月31日に本調査まですべて終了した。本調査実施面積は計13,900㎡であった。

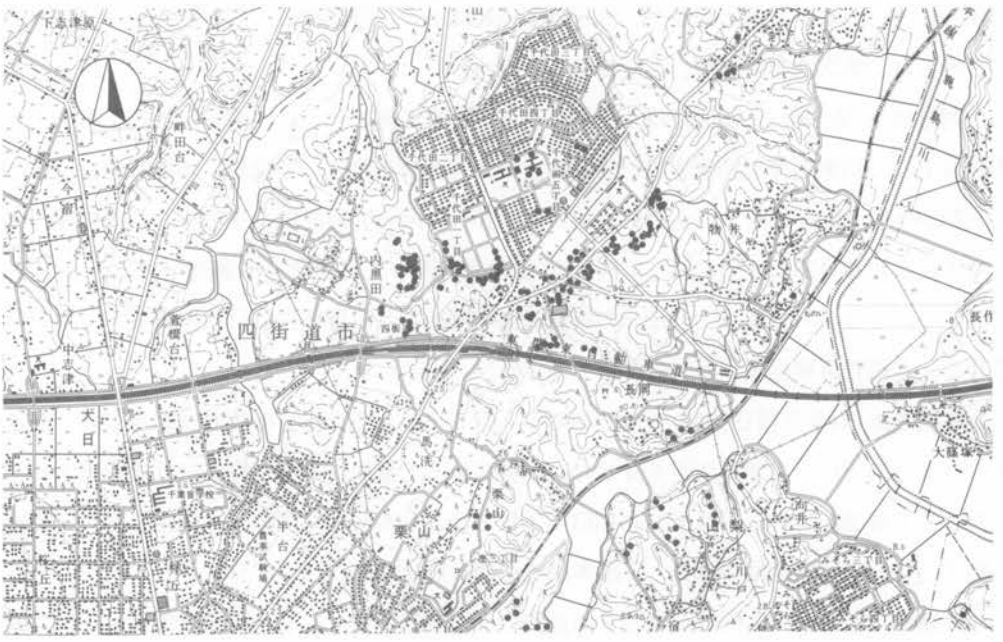
池花南遺跡(対象面積18,000㎡)は昭和61年２月６日から２月28日の間に試掘を行い、前述のとおり３月25日付けで遺跡認定を受けた。試掘によって遺構、遺物の分布はほぼ把握されていたため、上層確認調査は行わず、昭和61年４月１日より本調査を開始し、62年１月31日に調査を終了した。上層は全面本調査、下層本調査面積は計1,350㎡であった。

池花遺跡(対象面積30,000㎡)は池花南遺跡の下層調査と並行して、昭和61年11月１日、確認調査より開始して62年３月31日に本調査を終了した。本調査実施面積は計10,620㎡であった。

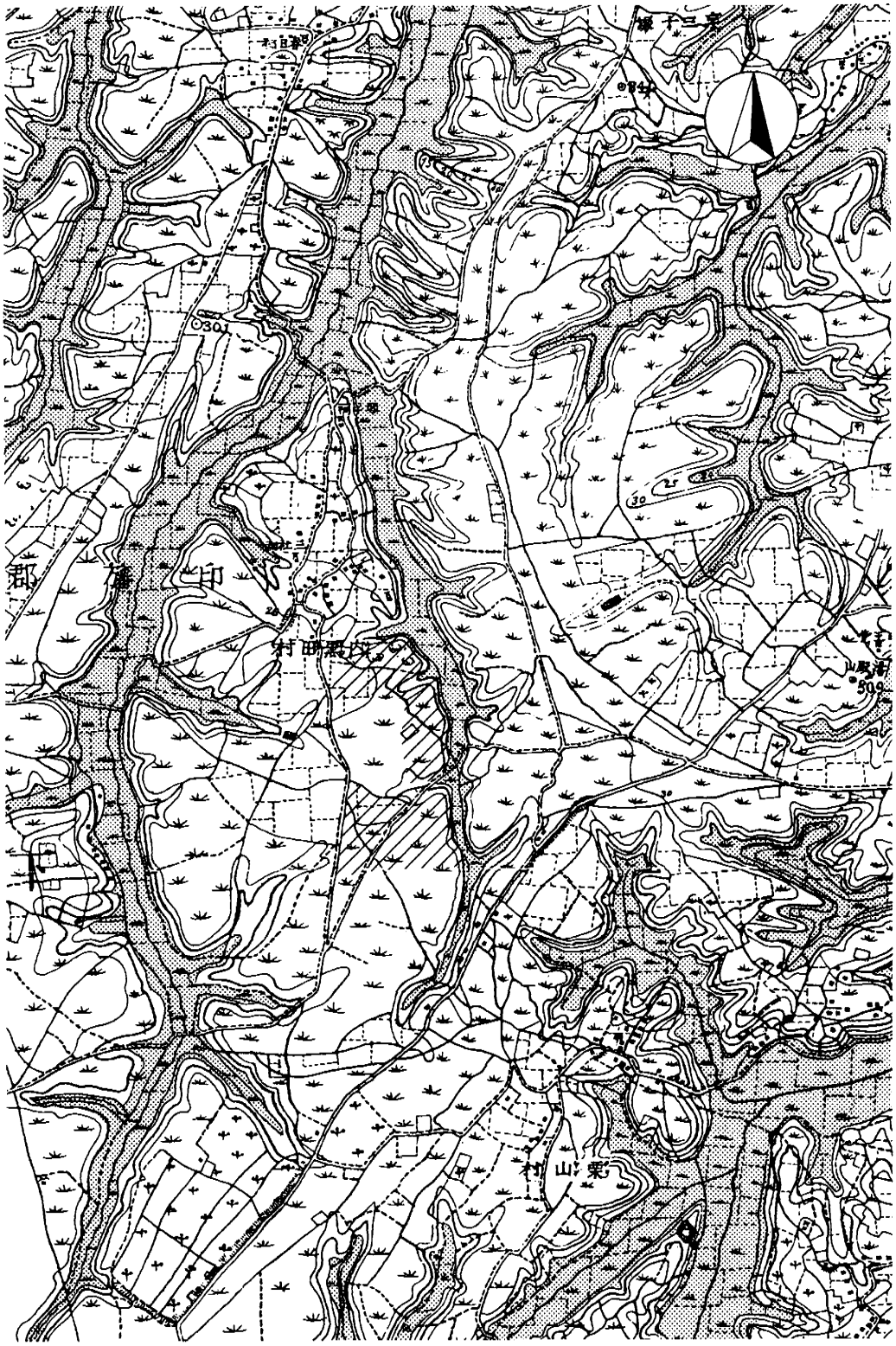


第１図　内黒田遺跡群の位置と周辺遺跡（1/40,000）（「1/25,000 佐倉」）

1	畔田台No.２遺跡	8	千代田遺跡Ⅴ区	15	棒山・呼戸遺跡	22	後山遺跡
2	畔田台No.４遺跡	9	千代田遺跡Ⅵ区	16	新久遺跡	23	入ノ台遺跡
3	生谷古新山南遺跡	10	千代田遺跡Ⅶ区	17	清水遺跡	24	川戸No.１遺跡
4	千代田遺跡Ⅰ区	11	八木原貝塚	18	御山遺跡	25	相ノ谷遺跡
5	千代田遺跡Ⅱ区	12	新山遺跡	19	小屋ノ内遺跡	26	西向井遺跡
6	千代田遺跡Ⅲ区	13	高堀遺跡	20	馬場No.２遺跡	27	前広貝塚
7	千代田遺跡Ⅳ区	14	出口・鐘塚遺跡	21	古屋城跡	28	太田・大篠塚遺跡群



第２図　内黒田遺跡群周辺の古墳分布図（1/40,000）



第３図　周辺地形（1/20,000 明治13年測量 陸軍迅速測図）

遺跡の位置と環境(第1図～第3図)

大割、池花南、池花の3遺跡（以下内黒田遺跡群と総称する）は、北流して印旛沼に注ぐ手繰川とその支流に挟まれた台地上にあり、支流によって開析された谷に面して立地する。周囲の台地は鹿島川側、すなわち東よりに標高は高くなり、沖積地との比高差は大きくなる。四街道市亀崎で標高32m前後を測り、同市物井ではおよそ30m、内黒田遺跡群では26～27mとなる。内黒田遺跡群における谷（近年まで谷津田として利用されていた水田面）との比高は10～11mである。

周辺には多くの遺跡が確認されている。特に隣接する千代田団地に関わる調査、そして内黒田遺跡群とほぼ同じ頃に開始された住宅・都市整備公団物井地区土地区画整理事業に伴う調査によって重要な遺跡が相次いで明らかにされてきている。

まず先土器時代の遺跡としては、物井地区の御山遺跡(18)、清水遺跡(17)、出口・鐘塚遺跡(14)などが知られ、立川ローム最下層からソフトローム層まで幅広く重要な石器群を出土している。また鹿島川の対岸、太田・大篠塚遺跡群(28) では多量の尖頭器石器群を出土しているという。先土器時代の遺跡はその性格上大規模調査によって始めて確認されることが多いため、近傍では他にはまだあまり遺跡が確認されていないが、少し離れると総武本線四街道駅南側の和良比地区、京成線志津駅南側の南志津地区といったところでやはり住宅・都市整備公団による土地区画整理事業に伴って先土器時代の多くの遺跡が調査されている。

縄文時代の遺跡としては、八木原貝塚を中心とした千代田遺跡群(4～11)が著名である。遺構、遺物が多く検出された中心の時期は縄文後晩期である。周囲には御山遺跡、物井地区棒山・呼戸遺跡(15)があり、内黒田遺跡群と合わせ、縄文早期から晩期に至るまで少しずつ場所を移しながら連綿と集団の居住が続いたことを窺わせる。殊に後晩期については内黒田、千代田、物井の各遺跡群は全体で一つの遺跡群と考えて、総合的に考究すべき必要のある重要な地域である。

弥生時代の遺跡としては、相ノ谷遺跡(25)が宮ノ台期の集落跡として知られており、有角石器も出土している。また相ノ谷遺跡に隣接する西向井遺跡(26)では久ケ原期(前半)の集落跡が調査されている。一方物井側の台地では先述の御山遺跡や小屋ノ内遺跡(19)で久ケ原期(後半)の集落跡が検出されている。他に著名な六崎大崎台遺跡や寺崎向原遺跡もこの地域の北東方の程近い位置にある。

古墳時代の遺跡は、集落跡としては千代田遺跡Ⅴ区が知られているのみであるが、この地域には後期古墳が多数分布しており、調査もかなり進んでいる。印旛沼周辺では屈指の群集墳である。従来、「千代田古墳群」、「物井古墳群」などと分散的に把握されてきたが、今回報告する内黒田の古墳も含めて全体が物井古墳群として捉えられ、群構成、墓域の変遷などを分析しうる稀有な古墳群の一つである。さらにその外縁には山梨古墳群、栗山古墳群、亀崎古墳群など

の小規模な群集墳が分布しており、物井古墳群との関係が注目されるところである。

古代の遺跡としてはあまり多くは知られていないが、その中では千代田遺跡Ⅰ区の集落跡が目立った存在である。また最近物井地区の小屋ノ内遺跡で大規模な集落跡が検出されている。しかし内黒田遺跡群周辺は、奈良時代、平安時代においては古墳時代と相似た状況でむしろ墓域として活用されていたと考えられ、小規模な方墳が多く発見されている。方形周溝遺構とも方形周溝状遺構とも呼ばれてきた小規模方墳は奈良時代を通して従前の古墳時代の墓域を踏襲するように多数築かれている。それらは千代田遺跡Ⅴ区や御山遺跡などの遺跡で見られる他、内黒田遺跡群でも多く検出されている。

中世以降の遺跡としては、物井・古屋城跡が挙げられる。前記「小屋ノ内」遺跡の地名も古屋城に関係するものと言われているが、城郭自身の詳細についてはまだ充分に知られていない。周辺の中近世城郭としては和良比地区の堀込城跡が知られ、未報告であるがほぼ全域を調査し得たものとして注目される。しかし城郭を除くと該期の遺構、遺物の報告例は現在のところ皆無である。

周辺遺跡の参考文献

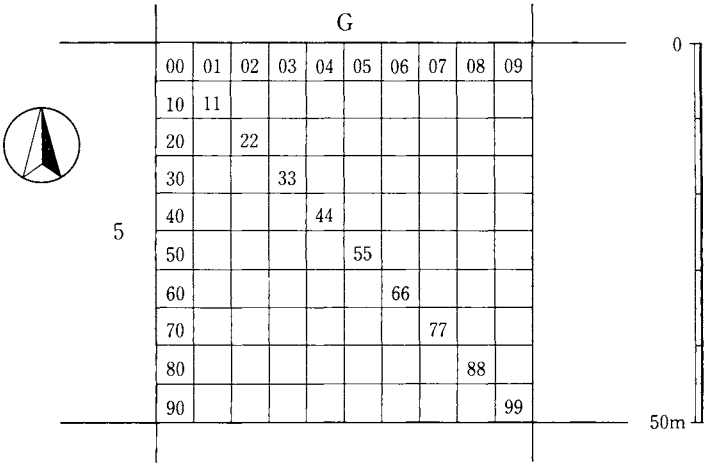
米内邦雄・宮入和博『千代田遺跡～千葉県印旛郡四街道町～』四街道千代田遺跡調査会 1972
「物井小屋ノ内遺跡調査略報」『四街道市の文化財』16号四街道市教育委員会 1990
新井和之・中西克也『千葉県四街道市入ノ台第2遺跡発掘調査報告書』四街道市教育委員会 1990
新井和之・他『北総線』東京電力北総線遺跡調査会 1982
栗本佳弘・他『東関東自動車道(千葉－成田線)関係埋蔵文化財発掘調査報告書』千葉県文化財保護協会 1970
米内邦雄『大崎台遺跡』大崎台遺跡発掘調査団 1973
柿沼修平・他『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅲ』佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1985～1987
渋谷興平・他『千葉県佐倉市寺崎遺跡群発掘調査報告書』佐倉市寺崎遺跡群調査会 1987

調査の方法

調査は、大割遺跡と池花遺跡については確認調査から本調査、池花南遺跡については試掘、遺跡認定から本調査へという手順で行われた。

【調査区の設定】　公共座標に合わせて遺跡を覆う50m×50mの包含網を設定して大グリッドとした。池花遺跡と池花南遺跡については、同一台地上にあるために共通のグリッド番号を付し、大割遺跡については独自のグリッド番号を付した。グリッド番号は東西をアルファベットで、南北をアラビア数字で表した。また大グリッドはそれぞれ5m×5mの小グリッドに100等分し、第4図のように番号を付した。

【上層の調査】　縄文時代以降の確認調査は、まず重機によって、東西方向に8mの間隔をおきながら幅2mの耕作土を除去し、次に人力で2m×4mの調査坑を1箇所／100m²(8%)の



第4図　大グリットと小グリッド

割合で当間隔に入れ、その間にさらに任意に調査坑を入れて、最終的に全体の10%の面積の遺構、遺物の有無を確認し本調査に移行した。池花南遺跡の場合は確認調査を行っていないが、試掘の段階ですでに確認調査に準ずるような方法を取った。また墳丘を遺存した古墳については当初から本調査範囲として対応した。

【下層の調査】　先土器時代の確認調査は、1箇所／100㎡(4%)の割合で2m×2mの調査坑を設定して行った。本調査は、遺物等が検出された地点について拡張して掘削し、遺構や遺物集中の把握に努めた。

内黒田遺跡群の基本層序

当遺跡群の層序は第5図のとおりである。ローム層の層厚は、東京湾岸に比べて薄いが、各層の色調等の相違は比較的明瞭で分層は容易である。遺跡群の中では、ローム各層の相違は大割遺跡で最も明瞭で、池花南遺跡、池花遺跡の順で北方に至るにしたがって不明瞭になる傾向があった。また遺跡群全体に新期テフラ層が良好に遺存した部分が多かった。以下大割遺跡F5－03区の観察から、層序を説明する。

Ⅰ　：表土(現在の耕作、木根・草根による撹乱土)層。

Ⅱa：黒褐色土～黒色土。比較的締まりがよい腐植土層。

Ⅱb：褐色土～明褐色土。新期テフラ層。縄文時代後期の遺物は、主として本層上位以上に包含され、したがってテフラの降下は縄文時代後期以前である。しかし縄文時代早期～前期の遺物は本層より下位にある傾向が認められる。縄文時代中期の遺物は少ないため判然としない。

Ⅱc：暗褐色土。褐色土斑を若干含む腐植土層。下位はソフトロームに漸移する。

III　：黄褐色軟質ローム。所謂ソフトローム層。

IV　：明褐色硬質ローム。上部はソフトロームに取り込まれ、最下部が遺存すると考えられる。特徴的な赤色スコリア粒を含み、全体に赤みを帯びて明色。

V　：褐色硬質ローム。第１黒色帯に相当する。若干の赤色、黒色スコリア粒を含む。

VI　：明黄褐色硬質ローム。A.T.を含む層。A.T.は地点によりブロック状に含まれる。

VII　：褐色硬質ローム。第２黒色帯上部に相当する。赤色、黒色スコリア粒がやや多く含まれる。

IXａ：暗褐色硬質ローム。第２黒色帯下部の上半。赤色、黒色、暗緑色スコリア粒を含む。

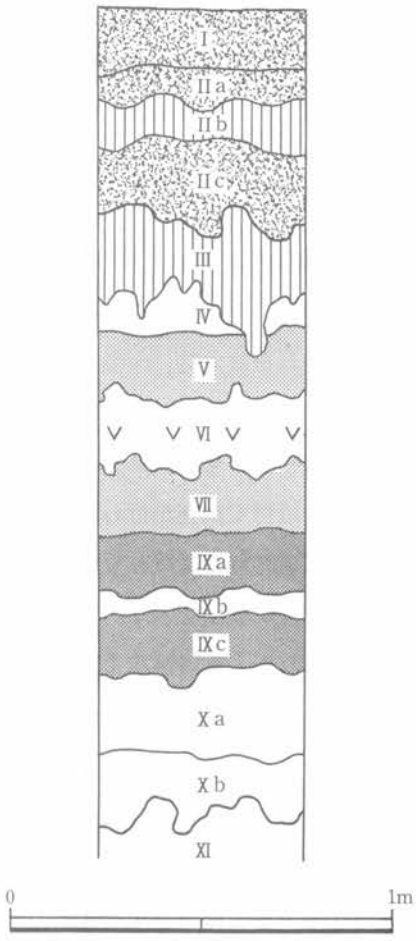
IXｂ：褐色ローム。第２黒色帯下部の間層。スコリア粒を多く含み、明色でやや軟質。

IXｃ：暗褐色硬質ローム。第２黒色帯下部の下半。IXａ層に似るが、さらにやや暗色で、暗緑色スコリア粒が目立つ。

Ｘａ：茶褐色ローム。赤色、黒色、暗緑色スコリア粒を含む。Ｘｂ層に比して明色。

Ｘｂ：暗茶褐色ローム。立川ローム最下層。やや軟質でスコリア粒を殆ど含まない。

XI　：暗灰褐色～暗茶褐色軟質ローム。武蔵野ローム最上層。粘性高い。



第５図　土層柱状図

補記　報告者はかつて市原市千原台地区の調査に従事した際、草刈遺跡の一部でIV層が厚く遺存することを認めた。そこは台地上段から緩斜面を経て一段下がったテラス状地形であり、IV層の厚さは65cm に及び、上位はあまりスコリア粒等を含まない明色のローム、中位には暗色帯、下位は赤色スコリア粒を特徴的に含むロームであることを確認、それぞれをIVａ層、IVｂ層、IVｃ層とした。それに照らして見れば、多くの遺跡で部分的に残るIV層は、草刈遺跡のIVｃ層とほぼ同じ内容のものである。

II．先土器時代

1．素描

先土器時代の遺物は、大割遺跡、池花南遺跡、池花遺跡いずれにおいても豊富に検出されている。単純に「ブロック」という単位を使えば、その設定の仕方にもよるが、およそ70ケ所に及ぶ。それらは大略、大割遺跡７層、池花南遺跡３層、池花遺跡３層の文化層に分けて把握される。本書ではそれぞれの遺跡の下位の文化層より、○○遺跡第１文化層、○○遺跡第２文化層……と呼ぶ。第１表はそれらを一覧する形で表現し、さらに当センターの手によって内黒田遺跡群の近傍で調査が行われた南志津地区、物井地区の主要遺跡を対照させたものである。

内黒田遺跡群では概ね立川ローム各層より遺物が検出されているが、X層に限っては遺構、遺物とも一切検出できなかった。従って遺跡群中最古の文化層は、IXｃ層中に生活面を有すると考えられる大割遺跡第１文化層である。また僅かに上位に位置する(IXｂ～IXｃ層にかけて)と思われる池花南遺跡第１文化層がある。池花南遺跡第１文化層は該期では南関東でも屈指の規模を持つ環状に巡るユニットを形成していたが、環状ユニットの構造、石器群の内容(台形様石器を主体とする)共に注目すべきものがある。また池花南遺跡の東方約0.6kmには産出層準をほぼ同じくする物井地区出口・鐘塚遺跡という大遺跡があり、両者の関係が重視される。

IXａ層に生活面を想定できるのは大割遺跡第２文化層である。小規模なブロックがやや広範囲に拡散する傾向を持つ。石刃を客体的にしか含まず、黒曜石製の剝片ナイフを中心器種とする石器群である。

VI層に生活面を持つものとして池花遺跡第１文化層がある。いずれも比較的小規模なブロックながら、その出土石器群は綾瀬市寺尾遺跡第VI文化層に対比される特徴的な内容を持つ。

V層に生活面を持つものとして大割遺跡第３文化層がある。殆ど掻器しか含まないという際立った特徴を有する。その特徴からは小金井市新橋遺跡IV下層、成田市新東京国際空港No.6遺跡に対比されるが、時期的な特徴というより遺跡の性格に帰属する問題であろう。

IV層に生活面を持つものとして大割遺跡第４文化層及び池花南遺跡第２文化層がある。大割遺跡は数種のナイフ形石器と角錐状石器を有する典型的な石器群で小規模な土坑を伴う。池花南遺跡は竪穴遺構とその出土遺物が相当する。

ソフトローム層中からは各遺跡とも複数種の石器群が検出されている。まず大割遺跡では第５文化層としたIII４～７ブロックで粗製石刃を素材とするナイフ形石器群が、第５文化層とあまり大きな時期差がないと思われる第６文化層では周縁加工の石槍を中心とする石器群が、第７文化層としたIII１～３ブロックで細石刃石器群が、それぞれまとまって出土している。

池花南遺跡では縄文時代以降の包含層、遺構が広範囲に存在し、調査がほぼ全面に及んだため、ソフトローム中の遺構、遺物が良好な形で遺存しなかったきらいがあり、遺物点数も多くない。全体を第3文化層としたが、まとまったものとしてはIII1～4ブロックがあり、折断石刃を主体にした石器群を出土した。他は単独出土に近い形で、ナイフ形石器や石槍などが点々と分布していた。

池花遺跡では第2文化層としたIII11ブロックが小型、横長剝片素材のナイフ形石器を持つ。安定した層序が不詳であるが、本来IV層前後を産出層準とするものではないかと考えられる。そして大規模なユニットとしてIII1～10ブロック(第3文化層)があり、石槍を製作していた遺跡としては本県でも指折りの内容を有する資料を追加することになった。

	大割遺跡	池花南遺跡	池花遺跡	物井地区・南志津地区の主な遺跡	
IIc層	第7文化層 III1～3ブロック				大林I文化層
III層	第6文化層 III8,9ブロック F2,F3区	第3文化層 III5ブロック 古墳群下層 III6ブロック	第3文化層 III1～10ブロック 第2文化層 III11ブロック		大林IIa文化層 御塚山Ia文化層 大林IIb文化層
	第5文化層 III4～7ブロック	III1～4ブロック		御山VIIIb文化層	大林III文化層 御塚山Ib文化層
IV層	第4文化層 IV1～3ブロック	第2文化層 IV竪穴遺構		御山VIIIa文化層 御山VII文化層	大林IV文化層 御塚山II文化層
V層	第3文化層 V1～3ブロック				
VI層			第1文化層 VI1～3ブロック	御山VI文化層	大林V文化層
VII層				御山V文化層	
IXa層	第2文化層 IXU1～15ブロック			御山IV文化層	大林VI文化層
IXb層					
IXc層	第1文化層 IXL1～2ブロック	第1文化層 環状ユニット		出口・鐘塚IX層 御山III文化層	大林VII文化層
Xa層				御山II文化層	清水X層
Xb層					
TcL				御山I文化層	
ML					

第1表　内黒田遺跡群先土器時代文化層一覧

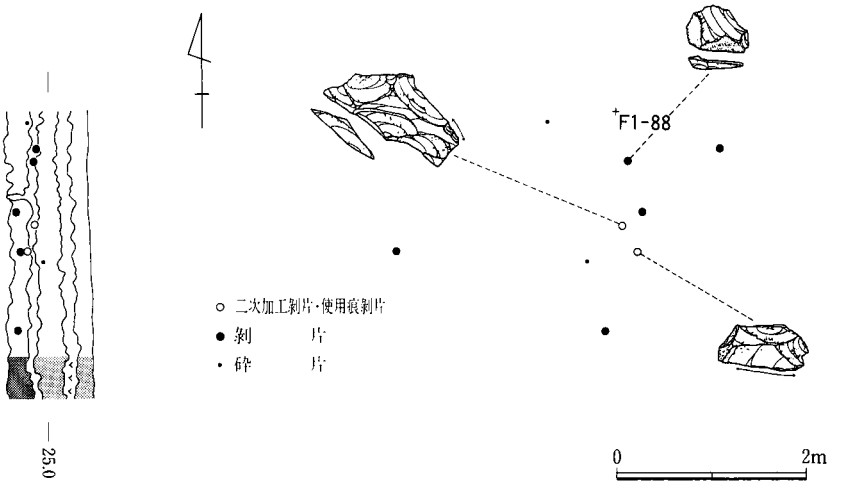
2．大割遺跡第1文化層

①概観

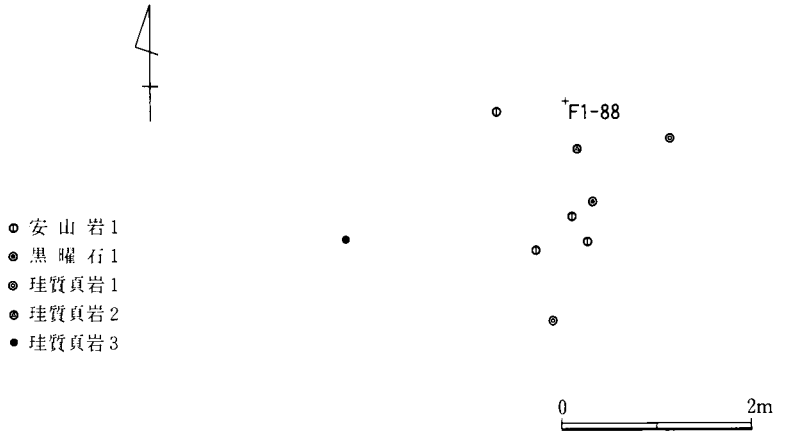
大割遺跡IX_L1ブロック及びIX_L2ブロックを大割遺跡第1文化層とする。IX_L1ブロックは遺跡北東端に、IX_L2ブロックは遺跡東縁ほぼ中央に、ともに単独と言える形で存在し、IXb層～IXc層から集中して遺物を出土している。おそらくIXc層中に生活面を想定できるものと考えられるがIX_L2ブロックの方が若干下位に位置するようである。両ブロックの関連性は指摘できない。

②IX_L1ブロック

出土状況（第6図、第7図、図版2-1）　およそ2m×3.5mの狭い範囲の中で剥片、砕片が



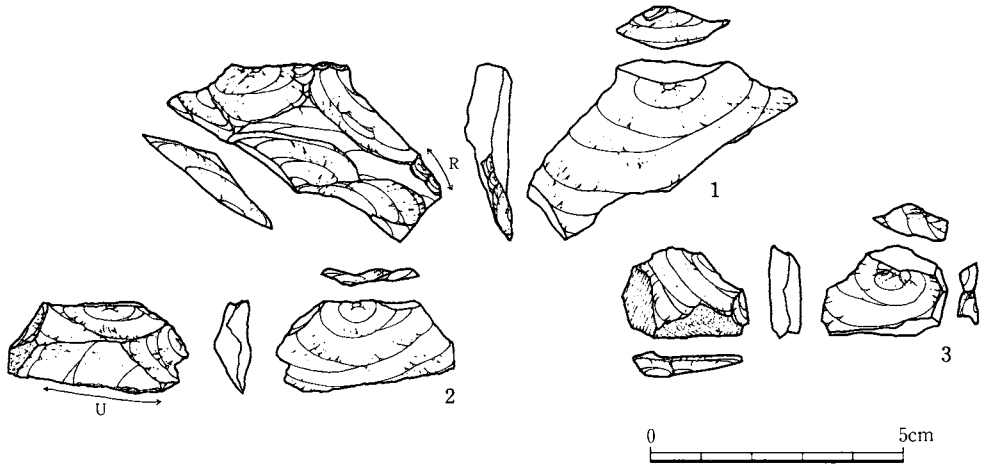
第6図　大割遺跡IXL 1ブロック遺物出土状況（1/80）



第7図　大割遺跡IXL 1ブロック母岩別分布（1/80）

計9点出土した小規模ブロックである。台地北東端の細く張り出した先端部分に立地している。土層は地形的な要因からか、IXb層は明瞭に認められたものの、IXa層とVII層の境界は不明瞭であった。遺物はIXb層からIXc層に含まれて出土しており、また上下のレベル差は大きなものではなかった。

出土遺物（第8図、図版18）　剥片3点を図示した。1と2は同一母岩(安山岩1)から生産された横長剥片で、ともに背面に求心的な剥離痕を残している。打点周回型の剥片剥離作業が



第8図　大割遺跡IXL1ブロック出土石器（2/3）

第2表　大割遺跡IX_L1ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角	欠損	使用痕
1	二次加工剥片	F1-88-2	安山岩	1	36.2	55.2	9.3	11.01	−	−	−
2	使用痕剥片	F1-88-3	安山岩	2	17.9	35.9	7.7	4.53	−	−	○
3	剥片	F1-88-1	珪質頁岩	2	18.0	23.7	6.2	3.00	−	−	−

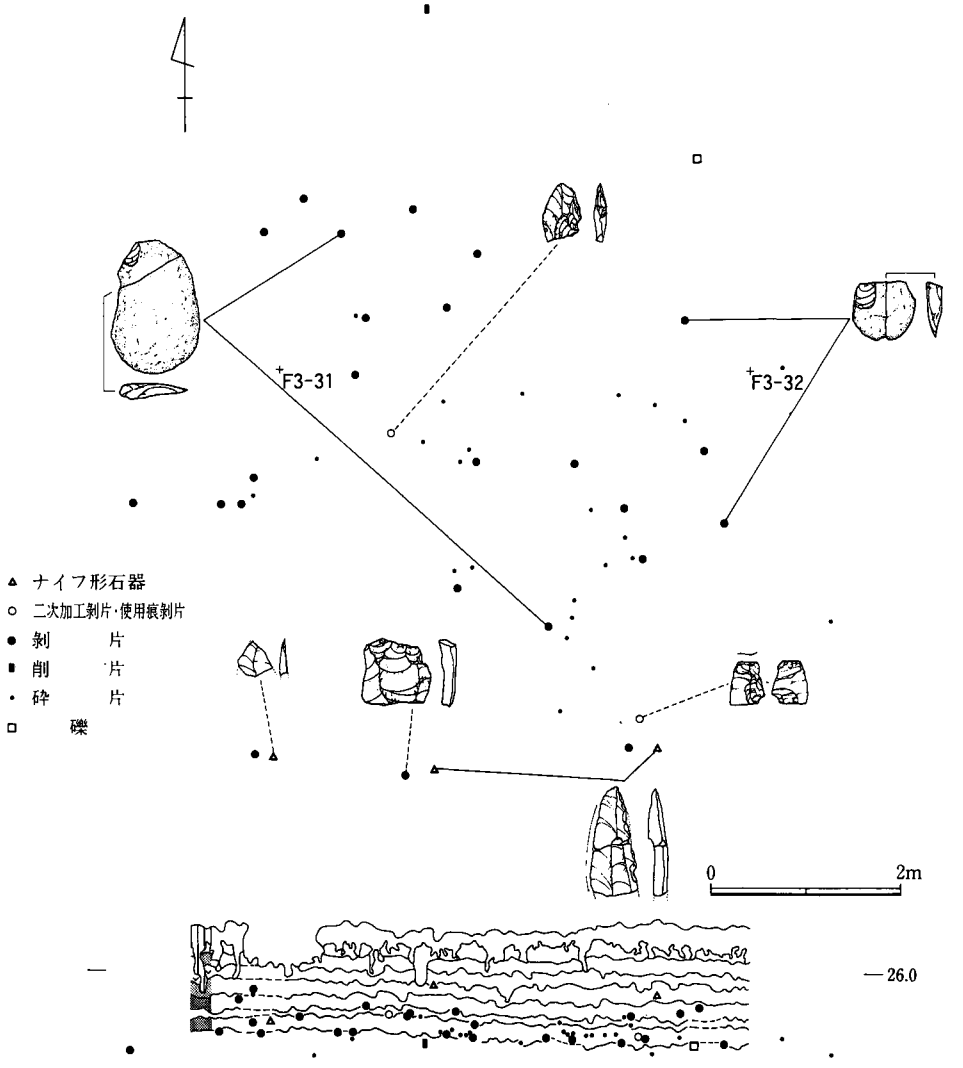
第3表　大割遺跡IX_L1ブロック出土石器組成表

器種 / 個体番号	ナイフ形石器	削器	掻器	彫器	揉錐器	楔形石器	石斧	二次加工剥片	使用痕剥片	折断剥片	剥片	砕片	石核	敲石	礫	計	総重量g
安山岩1	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	2	−	−	−	4	16.98
黒曜石1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	2.69
珪質頁岩1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	2	18.33
珪質頁岩2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	3.00
珪質頁岩3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	2.10
珪質頁岩小計	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	−	−	4	23.43
総計	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	5	2	−	−	−	9	43.10

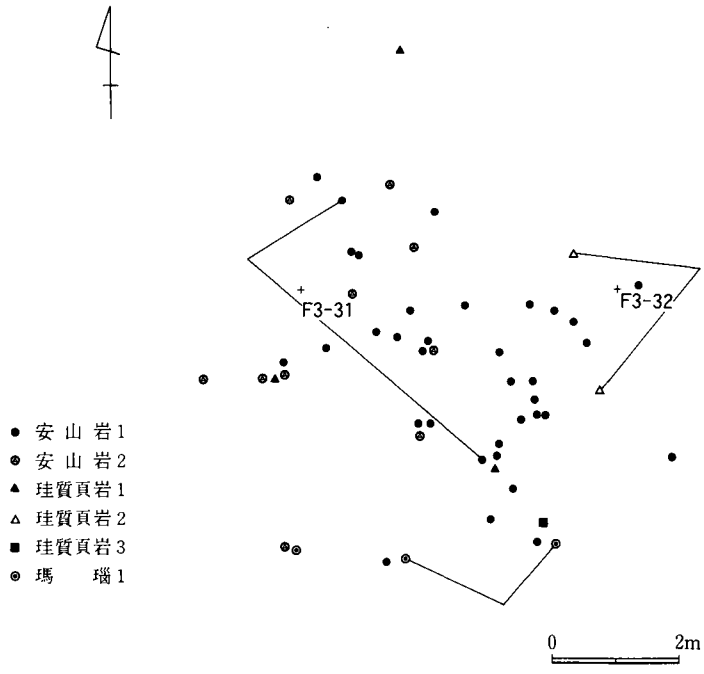
行われたと考えられる。1は二面の折断面を持っており、背面右端には2つの連続した小剥離痕があって明らかに二次加工と思われる。2は加工痕はないものの横長台形の剥片の下縁が比較的鋭利な刃部を形成しており、ほぼ全体に微細な刃こぼれが見られる。3は珪質頁岩製の貝殻状剥片で、ほぼ同じ層準に位置する池花南遺跡第1文化層で多量に消費される珪質頁岩と同質の石材である。

IX_L2ブロック

出土状況（第9図、第10図、図版5-1）　東西約7m、南北約8mの範囲に51点の遺物が比較的分散的な状況で出土した。ブロックの立地は広く見れば台地縁辺部ではあるが、安定した



第9図　大割遺跡IX_L2ブロック遺物出土状況（1/80）

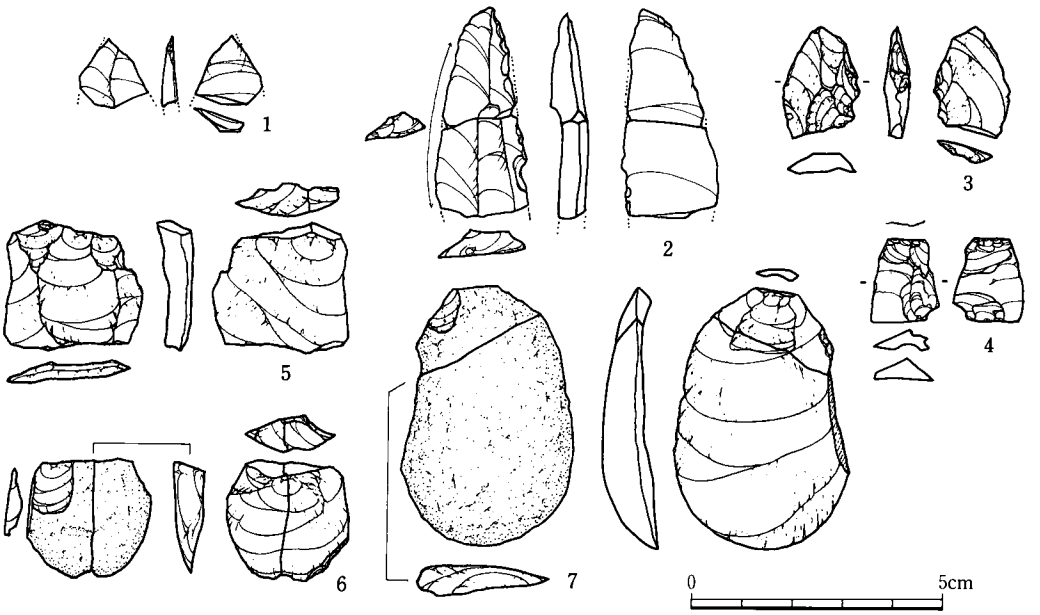


第10図　大割遺跡IXL2ブロック母岩別分布（1/120）

平坦な地形上に存在した。遺物が出土したレベル差はⅦ層からＸａ層、およそ0.8m に及ぶが、大半がIXｂ層～IXｃ層に含まれ、とくに安定したレベルはIXｃ層中にあると考えられる。

このブロックのすぐ南には隣接してIX_U8ブロックが存在するが、産出層準に極端な隔たりがないため、厳密には両ブロックの分離は困難であると言えるかも知れない。実際当ブロックに含めている瑪瑙製のナイフ形石器（２）については、出土レベルが高くⅦ層相当のレベルより出土しているため、むしろIX_U8ブロックに帰属する可能性はある。しかしIX_U8ブロックは問題の石器から若干の間隔を置いてしかも狭い範囲に集中的に分布していること、IX_U8ブロックを構成する石材は殆どが黒曜石であること、IX_U8ブロックが含められる第２文化層は、IX_U11ブロックに１点剝片が存在する他は瑪瑙を基本的に持たないこと、そして２と同一母岩から製作されたナイフ形石器（１）の出土層準がIXｃ層であることなどから、ここでは当IX_L2ブロックに帰属させることとした。

出土遺物（第11図、図版18）　１、２は先述のように、いずれも同一母岩（瑪瑙１）から製作されたナイフ形石器の欠損品である。ともに石刃素材か。１は先端のみが遺存するもので、背面右側縁先端に細かい Blunting 加工が施されている。２は右側縁に連続的な加工を施すものの、Blunting のような密で急斜なものではない。反対の左側縁にはほぼ全面に刃こぼれが観察される。３点以上に折損しており、２点が遺存、接合した。



第11図　大割遺跡ⅨL 2ブロック出土石器（2/3）

第4表　大割遺跡$Ⅸ_L$ 2ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	F3-30-1	瑪瑙	1	13.6	13.5	2.9	0.41	24°	○	−
2	ナイフ形石器	F3-31-1•9	瑪瑙	1	41.8	18.4	6.1	4.12	34°	○	○
3	二次加工剥片	F3-31-32	安山岩	1	23.0	15.8	5.2	1.62	−	−	−
4	二次加工剥片	F3-31-6	珪質頁岩	3	16.6	14.3	4.1	0.91	−	−	−
5	剥片	F3-31-5	安山岩	1	31.1	30.2	7.5	4.98	−	−	−
6	剥片	F3-31-23 F3-21-9	珪質頁岩	2	23.9	24.4	6.2	3.90	−	−	−
7	剥片	F3-31-21 F3-21-2	安山岩	1	51.6	35.9	9.4	19.08	−	−	−

第5表　大割遺跡$Ⅸ_L$ 2ブロック出土石器組成表

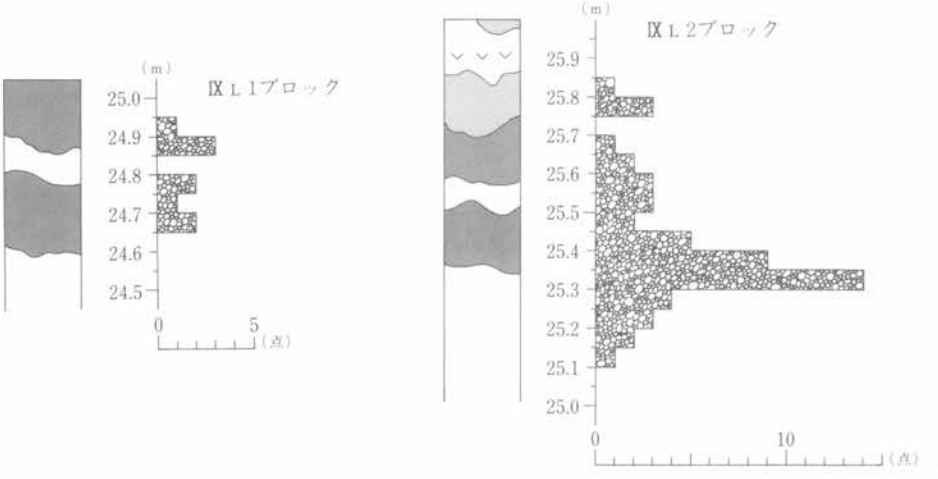
	ナイフ形石器	二次加工剥片	剥片	削片	砕片	計	総重量g
珪質頁岩 1	−	−	1	1	1	3	2.71
珪質頁岩 2	−	−	1	−	−	1	3.90
珪質頁岩 3	−	1	−	−	−	1	0.91
瑪瑙 1	2	−	−	−	−	2	4.53
安山岩 1	−	1	11	−	22	34	63.20
安山岩 2	−	−	9	−	1	10	25.20
合計	2	2	22	1	24	51	100.45

3、4は加工痕を持つ剝片とした。3は小型の安山岩製横長剝片を素材にした石器で、背面打面寄りに加工が施されている。見方によっては、鈍いが尖頭部を企図したものと考えることができるが、剝離角は平坦なものと急斜なものを併用し、尖頭部側に急斜な調整を用いている。同様の石器は池花南遺跡第1文化層の台形様石器とした中に見られる(第37図-131)。4は上端の潰れを重視すれば楔形石器とするべきか。5～7は剝片である。6が珪質頁岩である他は3と同じ安山岩で不定形の剝片が多く生産されているが、石核は残されていなかった。

④大割遺跡第1文化層のまとめ

当文化層はあまり大きなブロックを残さず、ブロックの数、遺物の点数も限られている。中心的な石材は安山岩である。IX_L2ブロックでは安山岩1の母岩消費が行われて小型貝殻状剝片が多く残されている。しかしどちらのブロックも石核を遺存せず、遺跡の形成が短時の内に終了して、石核及び有用な石器はさらに他の遺跡へ持ち去られたと考えなければならない。他方、IX_L2ブロックから出土した瑪瑙1のナイフ形石器2点は、確実に当文化層に帰属するとすれば搬入品ということになるが、他の石器、剝片類とは様相を異にする石器であると言える。

重要な問題は、産出層準が近い池花南遺跡第1文化層との関係である。とりわけIX_L1ブロックはほぼ産出層準を同じくしていると言える。両遺跡間には接合関係はないし、また共通母岩を見いだすこともできない(大割遺跡安山岩1と池花南遺跡安山岩8は極めて酷似しているが、同一母岩とする積極的な根拠はない)が、剝片生産技術、石材の選択においては共通性が高いと言わねばならない。したがって両遺跡には同一集団が関与している可能性を考慮する必要もあろう。ただその積極的な論証は勿論、その否定も不可能である。



第12図　大割遺跡第1文化層遺物垂直分布図

3．池花南遺跡第1文化層

①概観

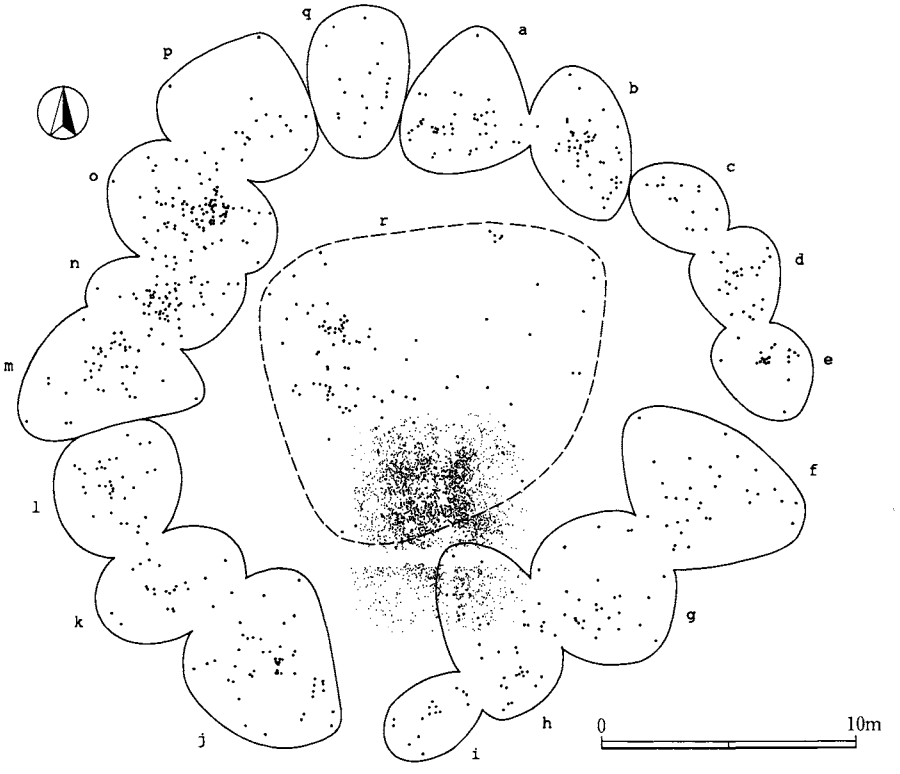
池花南遺跡北半部、G5区からH5区にかけて環状ユニットを構成する。内黒田遺跡群調査区内では同時期の遺構、遺物は他に検出されなかった。遺物総点数は740点である。

環状ユニット(環状ブロック群)は所謂“ブロック”の集合体と見ることが許されようが、現実には遺物がほぼ途絶なく環状に巡っており、“ブロック”の単位をいかに設定するか極めて困難な状況にある。従って、当文化層に限っては“ブロック”という用語を使用せず、便宜的に“クラスター”(cluster)という単位を用い、隣接するクラスター相互は明解には区切らないこととする。

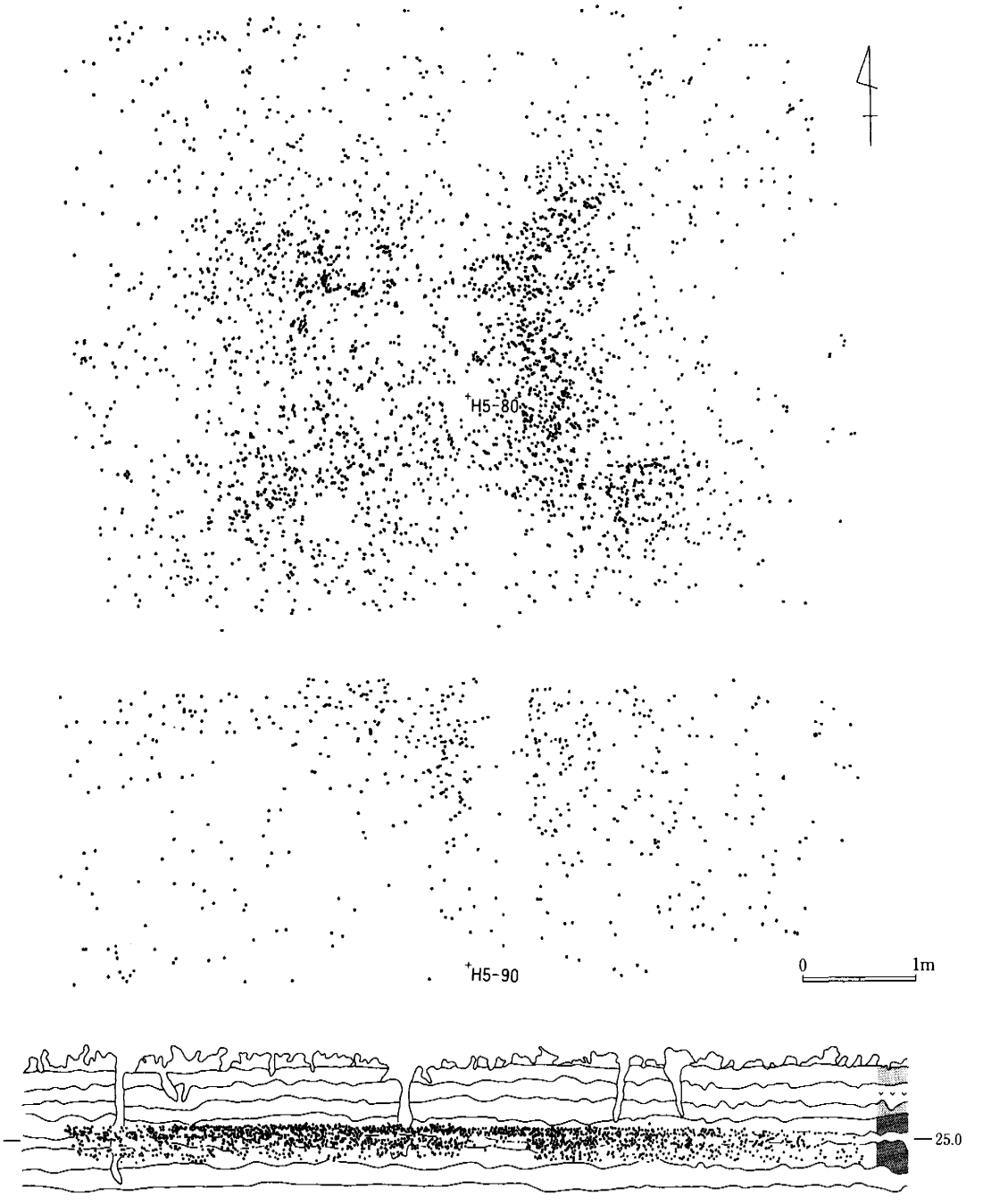
②出土状況(付図3、付図4)

出土層位はVI層からX層に及び、最大レベル差は約0.8mあるが、最も安定した出土層位はIX層中位、IXb層とIXc層の境付近にある。

全体の平面分布は東西およそ30.5m、南北およそ28.5mの環状を呈する。しかし密度は一様



第13図　池花南遺跡第1文化層クラスター設定図（1/300）



第14図　池花南遺跡第１文化層炭化物片集中地点

ではなく、いくつかの集中地点の集合体をなしている。ここで仮に周縁部について17単位（クラスターａ～ｑ）の、中央部について１単位（クラスターｒ）のクラスターを設定する（第13図）。特に集中度が高いのはａ、ｂ、ｍ、ｎ、ｏの各クラスターと言えようか。この傾向は当文化層の主体的器種である台形石器の集中傾向ともほぼ一致する。また中央部のクラスターｒについてはその北西寄りに集中する傾向を見せるものの、全体には散漫な分布を示す。

クラスターｒの南寄りからクラスターｈにかけては炭化物片の集中地点（第14図）が見られた。炭化物片はいずれも微細なものであった。炭化物の垂直分布は、その上半部を失ってしまったが、IX層中位（IXｂ層）に中心があるものと思われる。

③出土遺物

母岩別資料の個体毎に記述する。

ここでは“ナイフ形石器”と“台形様石器”の器種名を使い分けているが、“ナイフ形石器”は刺突具としての機能を果たし得るような尖頭部を持つものとする。

珪質頁岩１（第15図、第16図上半、図版22）　１から６が小型の台形様石器である。すべて横長の貝殻状剝片を用い、切出形の刃部を持っている。加工は平坦剝離によるが、腹面、背面両面からの加工はまずない。１は左側縁（打面側）を急斜な加工によって形態を整えてから、腹面基部側に平坦剝離を加える。２～４は部分的な調整のみで石器を完成させている。２は打面を残し、３は折断面をそのまま保持している。５、６は比較的広範囲に調整加工を施しているかのようであるが、５は打面（旧作業面）を一部取り込み、また６の右側縁は打面、石核調整を残す。

７も、異論が予想されるものの、一応台形様石器とした。やや大きめの分厚い剝片を素材としている。ここで調整加工と考える剝離は、若干の粗さが指摘できるが、腹面基部に集中して行われている。２片接合。

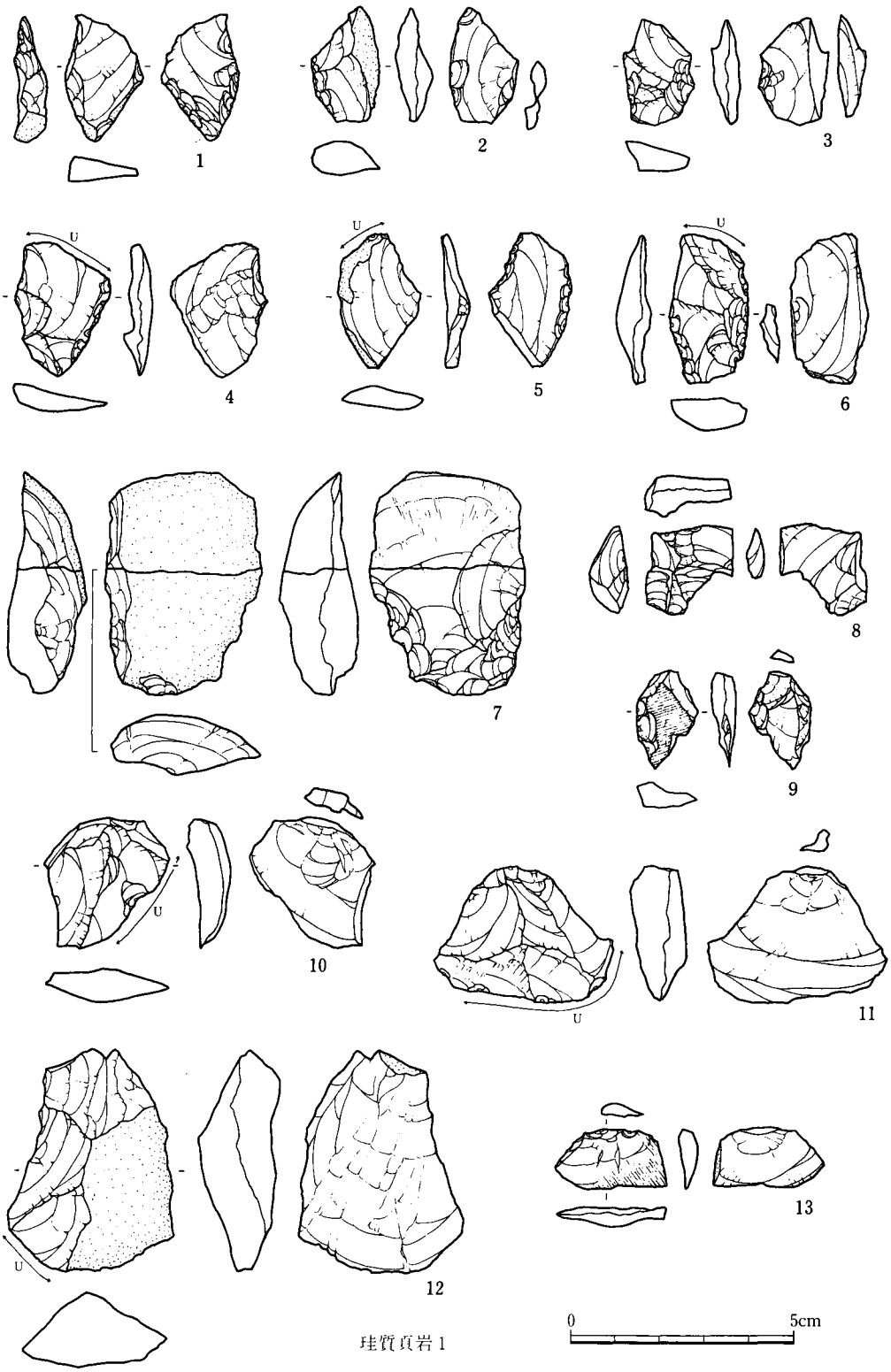
８は楔形石器と考えておく。部分的ではあるが、上下両端に細かい潰れが観察できる。

９は両側縁に顕著な二次加工が見られる小型の剝片。若干欠損するが鋭い尖頭部を持ち、刺突具としての機能を持つ石器かも知れない。

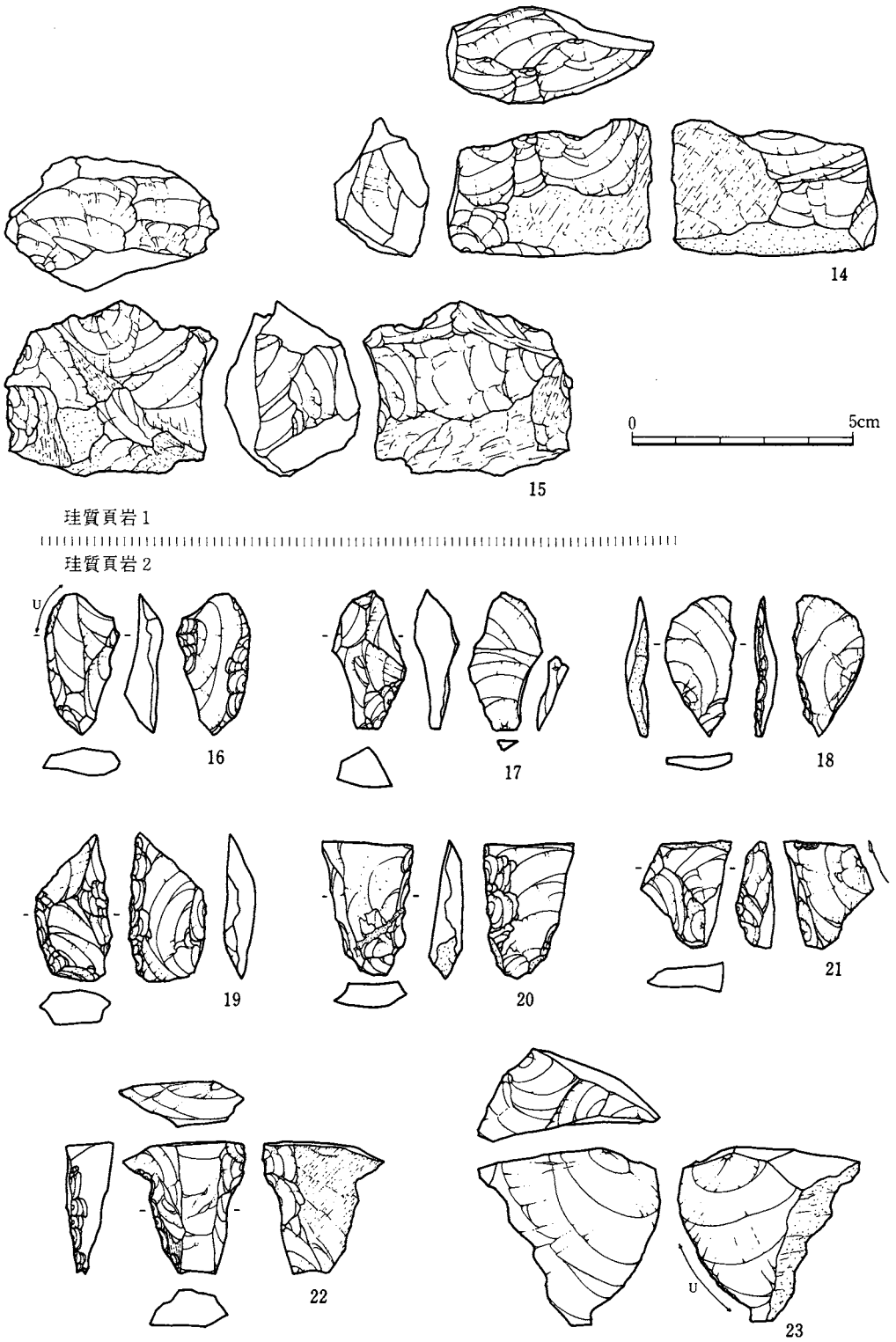
10～13は剝片である。10～12には微細な刃こぼれが観察できる。

14、15は石核である。いずれも礫皮面及び節理面を残しており、粗く割られた角礫、角柱礫を用いている。長辺に沿って打点を移動して数度の剝片剝離を行い、次にその作業面を打面として同様の工程を繰り返したものと考えられ、台形様石器の素材である貝殻状剝片を生産している。

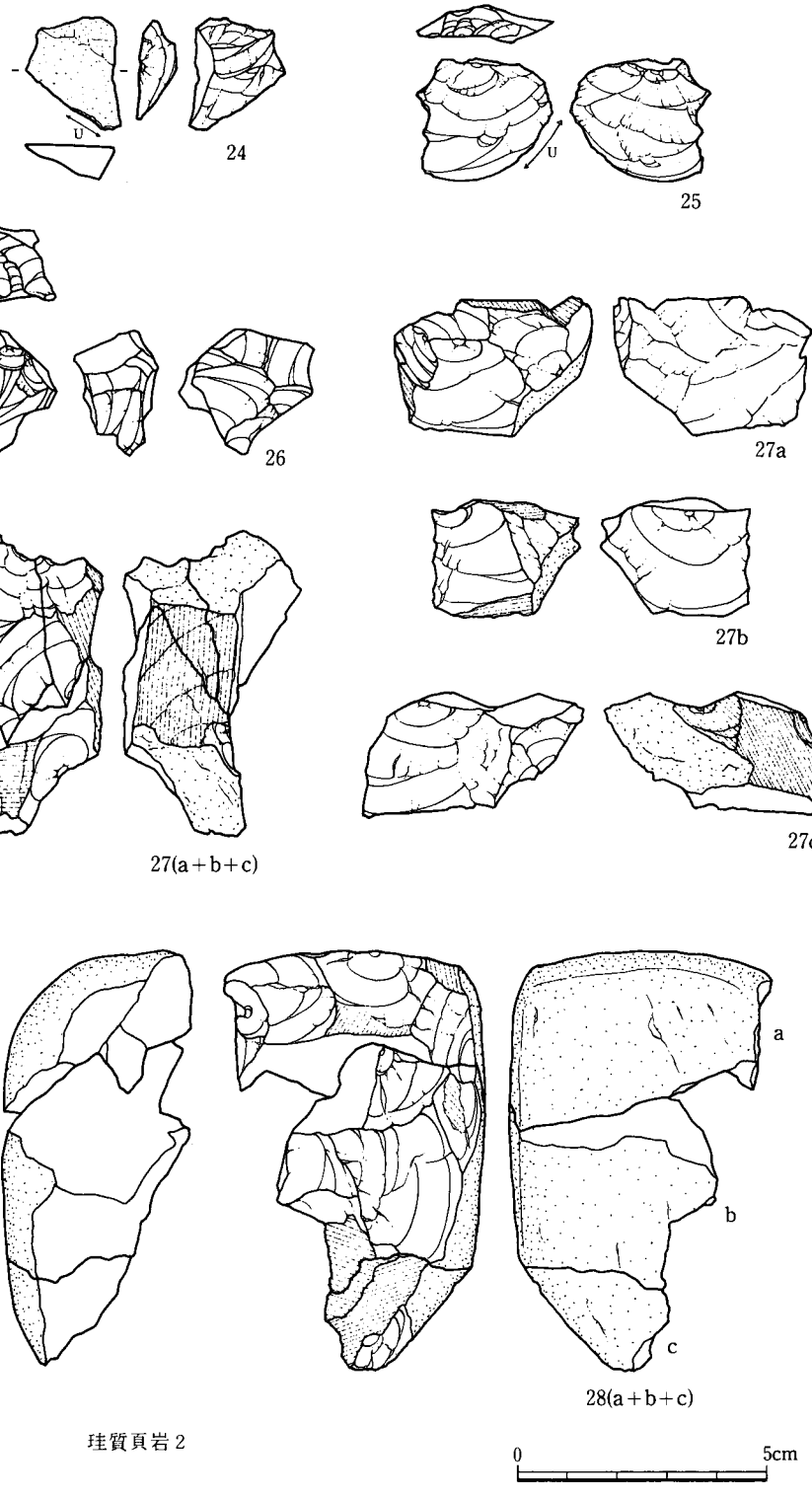
接合資料は７のみである。比較的ユニット全体に分布するがそれはTool及び有用な剝片としてであり、石核を含む集中はクラスターｂにあった。



第15図　池花南遺跡第1文化層出土石器(1)（2/3）



第16図　池花南遺跡第1文化層出土石器(2)（2/3）



第17図　池花南遺跡第１文化層出土石器(3)（2/3）

礫皮面やそれに近い部位は褐色、中心の良質な部分は暗灰色～暗緑色。

珪質頁岩2（第16図下半、第17図、図版23）　質的に珪質頁岩1によく類似しており、生産される石器も同種のものである。

16～21が台形様石器である。16は横長剝片を素材とし、左側縁基部の腹面側と打瘤部分に加工を施しているが、打瘤を充分除去しきれていない。先端は鈍い尖頭状を呈する。17も鈍い尖頭部を持つ台形様石器。先端は厚みがある。基部右側縁背面側に加工が施されている。18は切出状の刃部を持つ。礫皮面を打面とする横長剝片を素材とし、剝片末端側の一部(基部)に加工を施す。一見側縁全体に加工が及んでいるように見えるが、刃部に近い方は二次加工ではない。19も切出状の刃部を有する。当文化層の小型の台形様石器の中では最も丁寧な加工を施されたものである。打面を一部残しているが、両側縁ほぼ全面に加工が及ぶ。20、21は水平な刃部を持つもの。20は右側縁腹面に加工がある。21は線状の打面を残し、また末端は石核底面を残すが、加工は石核底面側の一部に集中して急斜に施される。

22は削器とした。節理面を主要剝離面とするやや厚みのある折断剝片を素材とし、左側縁にscraper-edgeが作出されている。

23～25は剝片である。23はやや大型の剝片の末端に微細な刃こぼれが見られるもの。大きく打面を残しているが、その構成から、求心的な剝離が行われた作業面を打面とし(90°の打面転移)、今度は打点を後退させながら連続的に剝離が行われたことが窺われる。24は折断剝片、25は小型貝殻状剝片で、末端の一部に微細な刃こぼれが観察できる。

26は石核である。古い面(実測図右)は求心的な剝離痕を示すが、石核が小型化すると横方向の打点移動によって剝離作業が行われたと見られる(実測図上、左)。最終的にはかなり細かい剝離痕を残している。

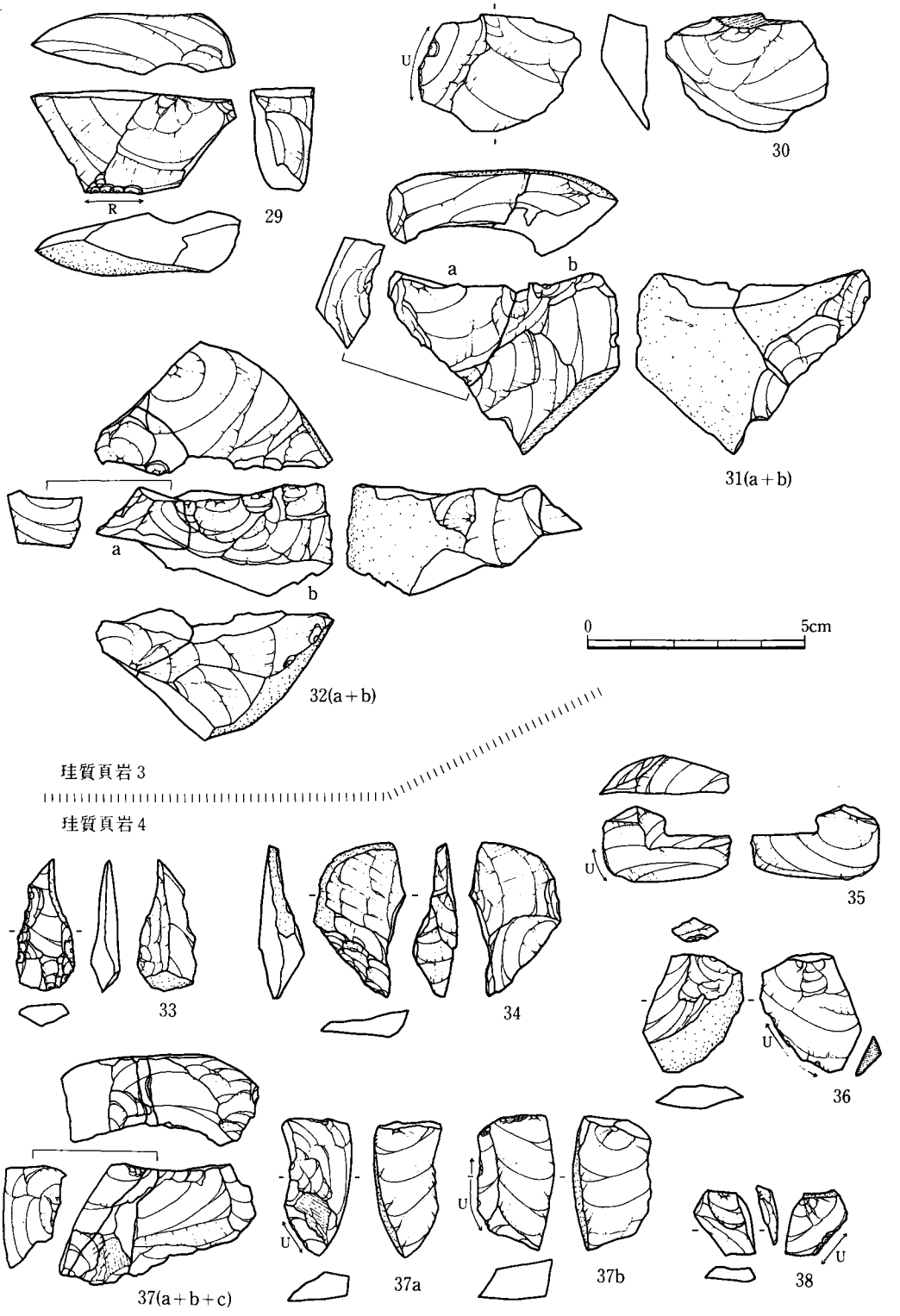
27、28は接合資料である。共に良質な部分でないため、あまり有効な剝片剝離が行われていない。特に28は節理面で分割されているのみである。28bはaとの分割後の剝離痕が観察されるため一応石核とした。

全体の分布ではクラスターnへの集中度が高い。

礫皮面やそれに近い部分は褐色。中心のより珪質な部分は暗灰色であるが、珪質頁岩1よりは明色。

珪質頁岩3（第18図上半、図版24）　29は本来はやや大きめの折断剝片から、折断面を打面として横長剝片を剝離した石核であるが、下端に加工が施されている。二次加工の範囲が狭いため削器とはしなかったが、機能的には削器としてよいであろう。30は剝片で、使用痕と見られる微細な刃こぼれが左側縁に観察される。

31、32は石核である。共に接合資料であるが、31は最終の剝離で折れ、32は残核となった後に折断または折損したものと思われる。同一作業面で打面を変えながら剝離を行った痕跡が見



第18図　池花南遺跡第1文化層出土石器(4)（2/3）

られるが、32はさらに厚みを減じた後に、打点を横位移動させながら細かい剝離作業を行っている。

分布はクラスターａに集中する。色調は黄褐色で、灰色、紫褐色の部分を交える。

珪質頁岩４（第18図下半、第19図上半、図版24）　33はナイフ形石器とする。主要剝離面は腹面左半。鋭い尖頭部を持ち、背面にのみ腹面側からの加工が平坦剝離によって施される。

34は台形様石器である。半円形の横長剝片を用いる。当初腹面側基部(台形様石器としての)に加工を加えたが、剝離が大き過ぎたため、次に背面側基部に加工を施している。

35、36は共に使用痕と思われる微細な剝離が見られる剝片。

37は剝片３点の接合資料である。剝離の順序は37ｃ→37ｂ→37ａ。剝片剝離が繰り返されて板状になった石核から、まずｃが折断されて有効な作業面を作り出し、次に連続的に打点を後退させてｂ、ａが生産されている。ａ、ｂは共に右側縁に礫皮面を残し、左側縁に使用痕と考えられる細かい剝離が観察される。

38～41は剝片である。38は使用痕を認める小型の剝片。41の接合は剝離と同時に砕けたものらしい。

42は石核である。薄い板状を呈する。求心的な剝離痕が見られる。

石核を含む集中はクラスターｋに存在すると考えてよかろう。剝片類はユニット全体に動いている。

当文化層では良質な石材である。緑がかった灰褐色で礫皮面は褐色を呈する。

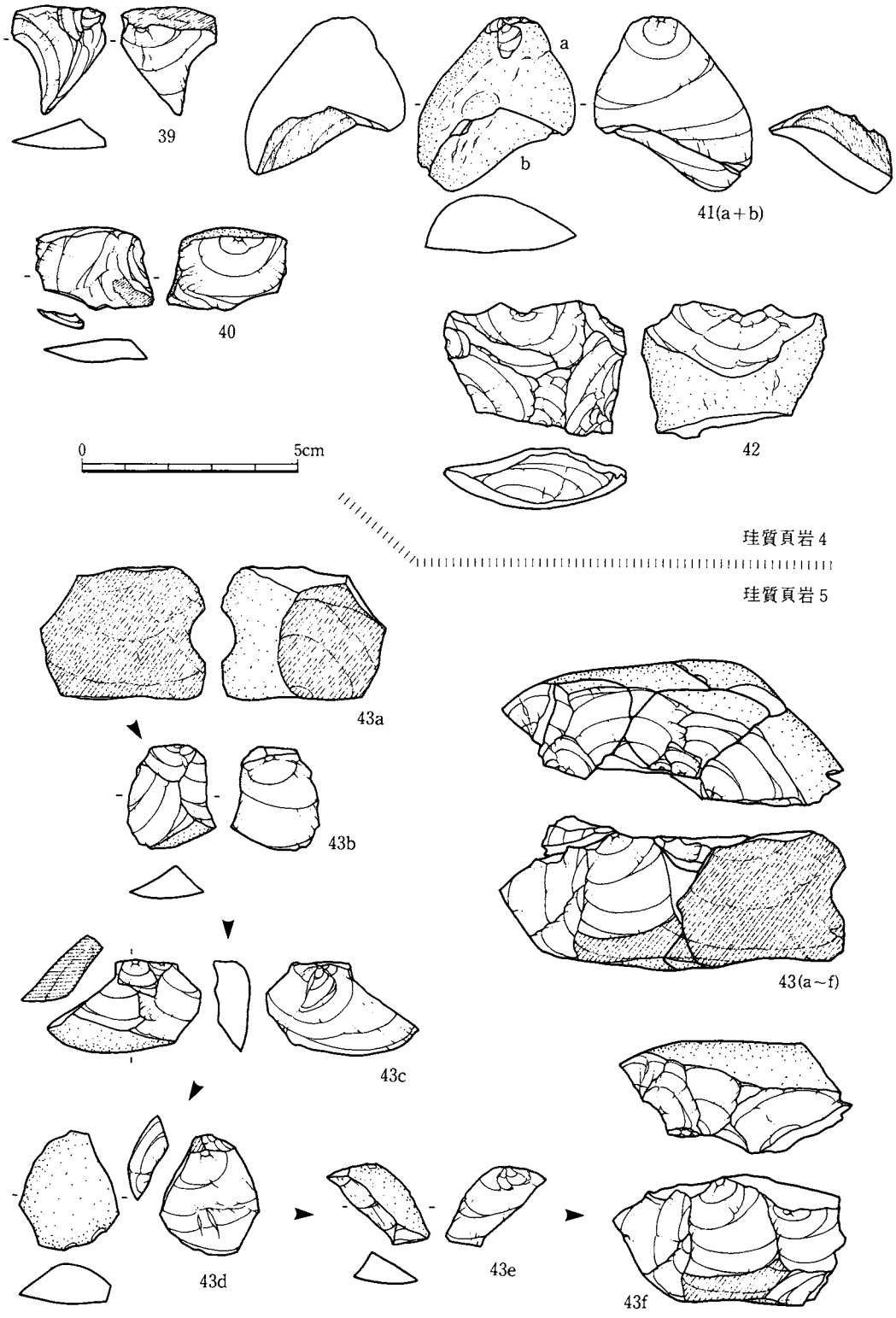
珪質頁岩５（第19図下半､図版25）　珪質頁岩４と共に当文化層では最も良質な石材の一つ。出土した６点がすべて接合した。本来あまり大きな原石ではなかったと思われるが、基本的には長軸方向に打点を横移動させて数回の剝離作業を行い、次に打面と作業面を交替させて同様の剝離作業を繰り返したと考えられる。43の接合資料は作業の終わりに近い段階を表現するが、43ａは節理面で割れてしまった剝片で、43ｄは43ａの剝離痕である節理面を打面とし、43ｅは43ｄの剝離痕を打面としている。石核43ｆにはさらに新しい剝離痕が数枚見られるが、生産された剝片は遺跡内に現存しなかった。

ほぼクラスターｄに集まって分布した。色調は灰褐色。礫皮面は褐色である。

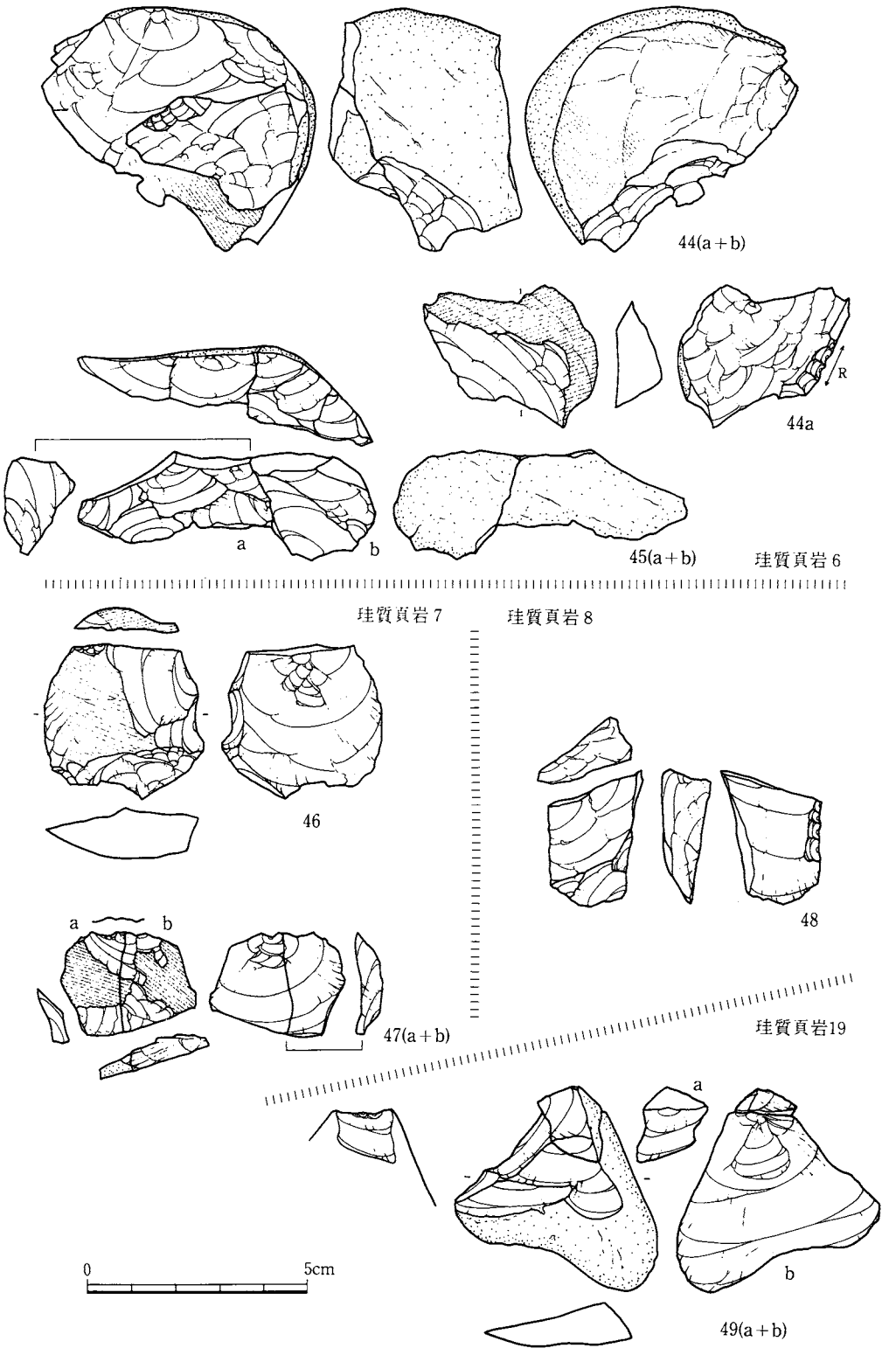
珪質頁岩６（第20図、図版25）　44は石核と剝片の接合例である。石核側の接合面は一枚のネガ面で構成されているが、その一部に節理面を見せる。節理面で接合している。剝片44ａは石核44ｂより剝離された剝片石核よりさらに剝離されている。44ａは加工痕を持ち、削器として機能したものと考えられる。45は石核の接合例である。45ｂは途中で折断乃至折損しており、45ａはその後も剝片が採られている。

クラスターｌ～ｍとクラスターｒに分散的に分布。明灰褐色～明褐色。

珪質頁岩７（第20図、図版25）　46は剝片である。背面構成と右側縁から打面と作業面の転



第19図　池花南遺跡第1文化層出土石器(5)（2/3）



第20図　池花南遺跡第1文化層出土石器(6)（2/3）

換が観察される。背面には求心的な剝離痕が残されているが、石核は小型のものであったらしい。47ａ、ｂは折断剝片である。石核底面を残している。暗緑色。

珪質頁岩８（第20図、図版25）　48は二次加工が見られる折断剝片である。折断面は２面あり、主要剝離面側に加工を施す。やはり削器とすべきかも知れない。暗褐色。

珪質頁岩９～18　それぞれ１点ずつ剝片(珪質頁岩９だけは剝片１＋砕片１)を遺跡に残すのみである。加工痕が見られるものはないが、小型の貝殻状剝片が多く、そのまま石器とされたものもあろう。

珪質頁岩19（第20図、図版25）　珪質頁岩４、５に似た比較的良質な石材である。剝片３点が残されており、うち２点が接合する。49は接合資料。背面には礫皮面を大きく残している。背面に残された剝離痕から見る限り、作業面は移されておらず、打面再生を行いつつ同一方向からの剝離が繰り返されているようである。49ｂはやや大型の剝片で大略三角形を呈するが、下縁に極く微細な刃こぼれ状の剝離が観察される。灰褐色。

珪質頁岩20（第21図、図版26）　出土した３点すべてが接合している(50)。しかし節理の発達によりあまり有効な剝離が行われていない。全体が折断面を持つが、50ａとｂ、ｃは節理面によって分割され、さらにｂ、ｃを含んでいた石塊は節理面によって分割されている。50ｂはｃを石核とし、節理面を打面として剝離された剝片である。

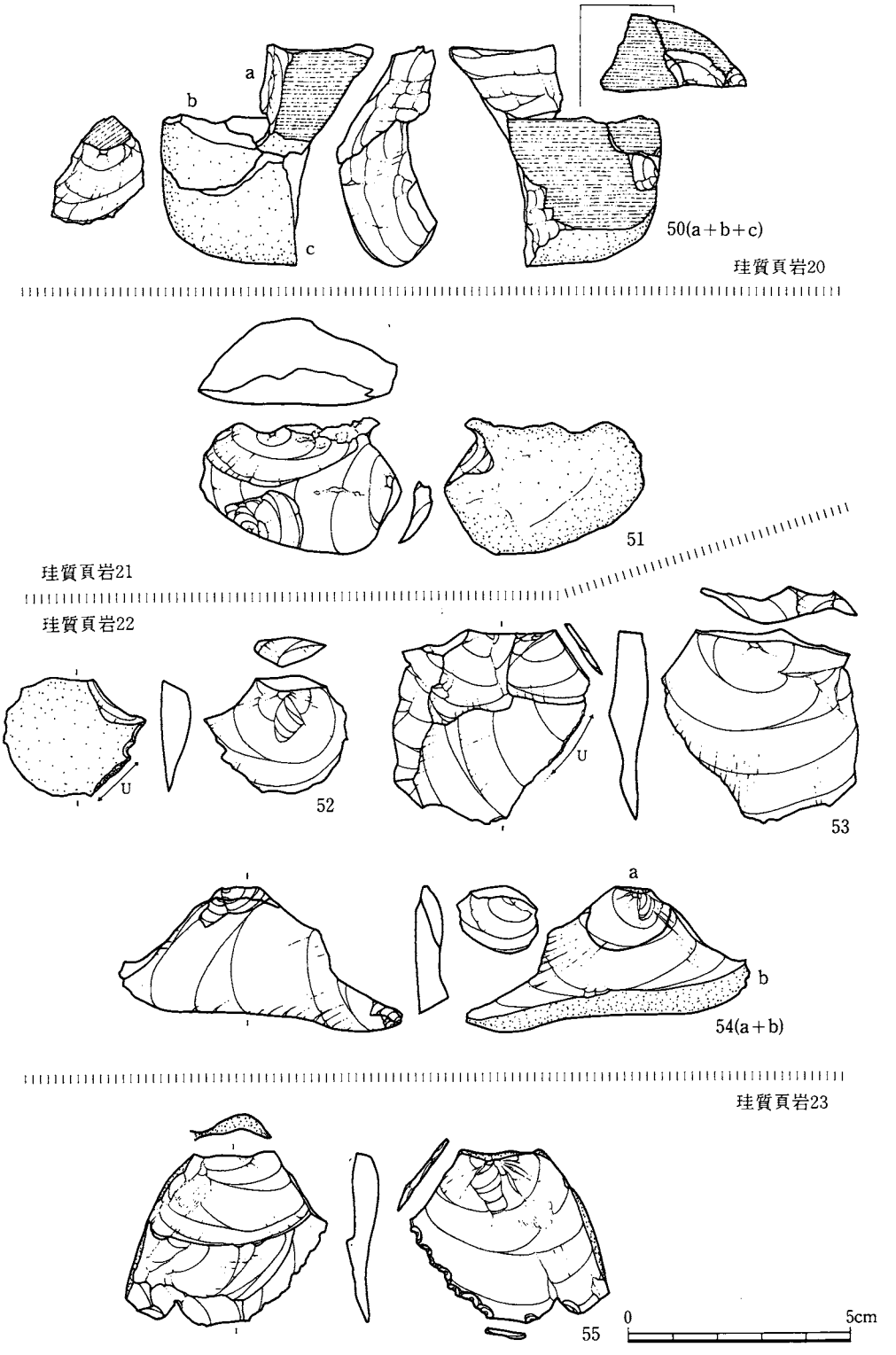
この接合関係はクラスターｈ(ａ、ｂ)とクラスターｒ(ｃ)間に見られた。色調は礫皮面とその近くは褐色または赤褐色であるが、内部は乳白色から灰褐色である。

珪質頁岩21（第21図、図版26）　51は石核である。背面全体を礫皮面とするやや分厚い剝片に２ケ所の剝離痕が残されている。風化が著しい。明褐色～灰褐色。

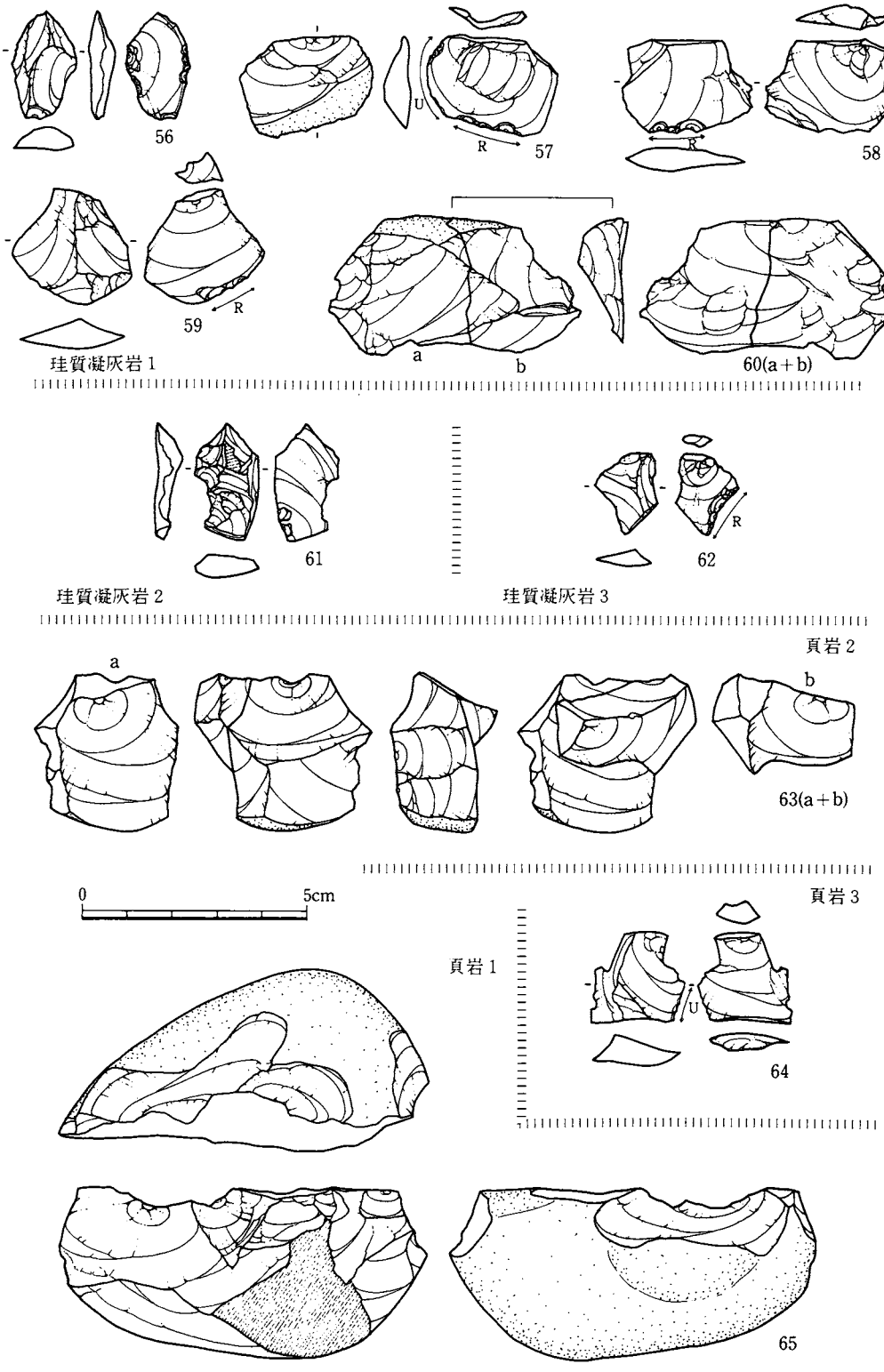
珪質頁岩22（第21図、図版26）　52は風化面を背面とする貝殻状の剝片である。縁辺の一部に連続した微細な剝離が見られ、使用痕と考える。53も使用痕と思われる微細な剝離が見られる剝片である。打面は複剝離で旧作業面と考えられる。54は剝片と砕片の接合例である。かなり横長の剝片で末端は礫皮面を残している。打面も礫皮面であるので厚みの小さい石核を利用しているらしい。砕片は打面及び打瘤を除去する形で剝離されている。底縁と背面右側縁はかなり鋭い尖頭部を形作るが、その部分にも二次加工と考えられる剝離が施されており、錐状の尖頭部の作出を企図していた可能性がある。黒褐色。

珪質頁岩23（第21図、図版26）　53は当文化層によく見られるやや大形の貝殻状剝片を利用した削器と考えられる石器である。背面左側縁から打面までは礫皮面によって覆われている。背面構成からは、礫皮面を打面として打点を周回させ求心的な剝離作業をおこなった痕跡が窺える。腹面の縁辺の一部に連続した鋸歯状の剝離が施されている。灰褐色。礫皮面は明褐色。

珪質凝灰岩１（第22図、図版26）　剝片及び剝片製の石器ばかりが残されている個体で、石核は存在しない。56は小型の横長剝片を用いた台形様石器である。背面左側縁をそのまま鈍い



第21図　池花南遺跡第1文化層出土石器(7)（2/3）



第22図　池花南遺跡第1文化層出土石器(8)（2/3）

尖頭部として利用しているようであり、加工は打瘤部と末端部の中央付近に比較的細かい剝離で施される。背面には求心的な剝離痕が残されている。

57～59はいずれも同じタイプの二次加工が施される剝片である。貝殻状の剝片が用いられ、打面側をそのままにして反対の末端部に数回の調整剝離を加える。59を除くと剝離は平坦であり、台形様石器の加工と変わるところはない。打面と加工部分を対にして側縁と見れば台形様石器とすることも全く不可能ではないと思われる。60は折断剝片の接合例。当文化層ではやや大きめの横長剝片を折断によって他の小型剝片とほぼ同等の大きさにしようとしたものと考えられる。

クラスターｊからクラスター１の間に点々と分布する。赤褐色。

珪質凝灰岩２（第22図、図版26）　台形様石器１点のみ(61)である。ほぼ90°弱の尖頭部を持つ。打面部は折断によって失われており、左側縁に加工を施すが、基部の加工はかなり大きくまた深く入っている。赤褐色。

珪質凝灰岩３（第22図、図版26）　剝片１点のみ(62)である。小さな菱形を呈する剝片であるが、腹面右側縁末端よりに二次加工が施されている。珪質凝灰岩前掲２個体に比して若干透明感があり、褐色。

頁岩１（第22図、図版27）　石核１点のみ(65)である。小ぶりの長楕円形の礫を素材としている。当初節理面で割れ、その節理面を打面として１度剝離が行われ、さらに作業面を換えて数度の剝離を行った後、今度は２度目の作業面を打面として剝離作業が行われたと考えられる。礫皮面、風化面、節理面は暗褐色であるが、内部は黒色～黒褐色。

頁岩２（第22図、図版27）　剝片ばかり５点が出土した。63は剝片２点の接合資料である。残された剝離痕からは頻繁に打面が換えられていることが窺われる。63ａが先に剝離され、63ｂは90°打面を移して剝離されたものである。礫皮面は褐色～赤褐色であるが、内部は灰褐色～灰白色。

頁岩３（第22図、図版27）　この個体もまた剝片ばかり５点が出土した。64はそれらのうち使用痕と見られる刃こぼれが観察される剝片を掲載したものである。黒褐色。

頁岩４剝片１点のみ。台形を呈する小型の剝片。暗灰色。

チャート１（第23図、第24図、図版27）　チャートの中で最も量的に多かった個体である。一応剝片としたもの49点、砕片としたもの６点の計55点が出土しており、接合関係も非常に豊富であるが、剝片として有効に剝離されたものは少なく、過半が発達した節理によって破砕したものである。

実測図に示したのは加工乃至刃こぼれが認められる剝片２点である。66は折断剝片のようであるが、加撃と同時に二分されたと考えられる小型の剝片の末端の一部にnotch状の剝離が加えられたものである。67は半円形の横長剝片の背面右側縁に極く微細な刃こぼれ状の剝離が観

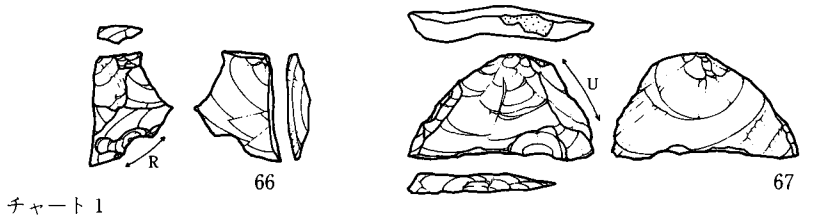
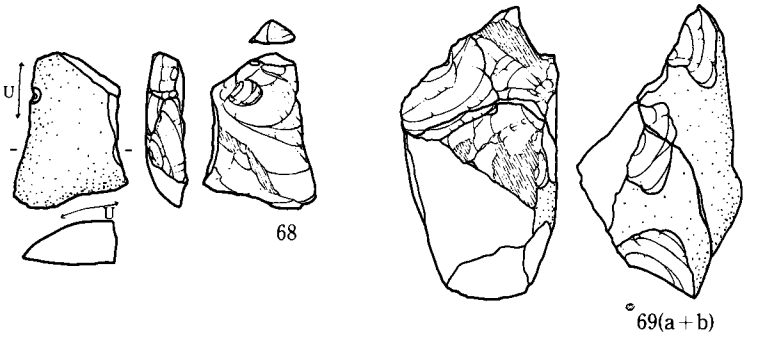


チャート 1



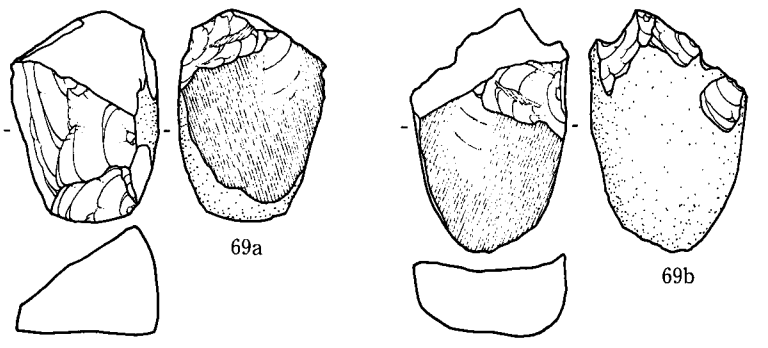
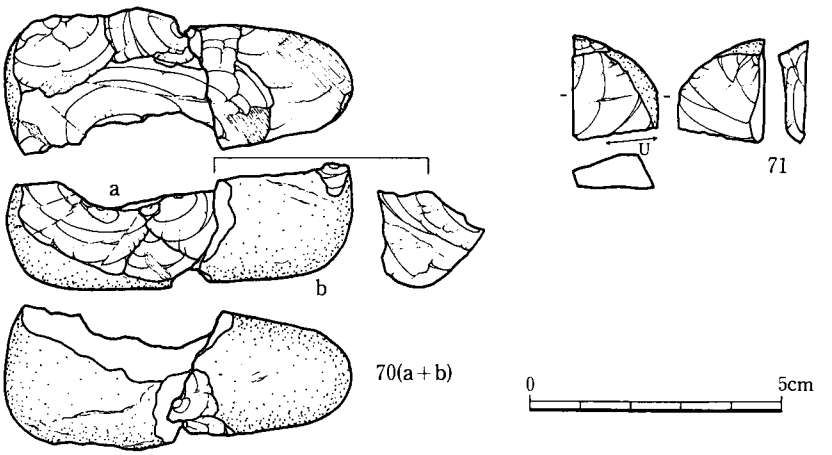
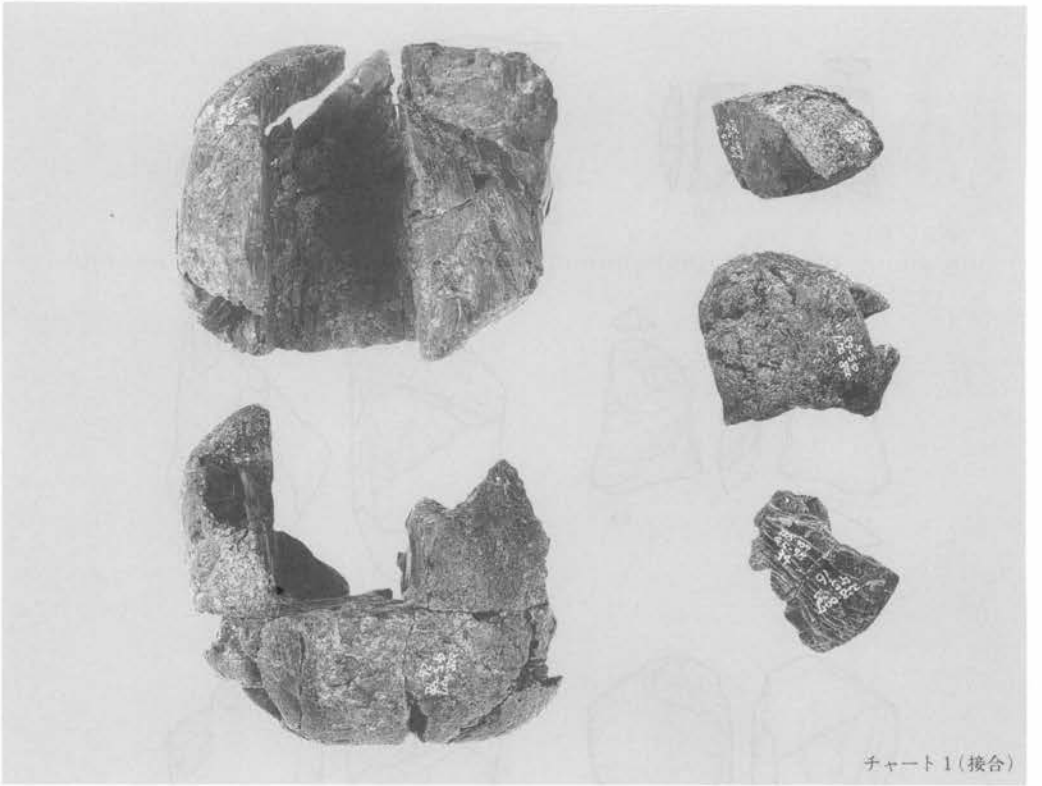


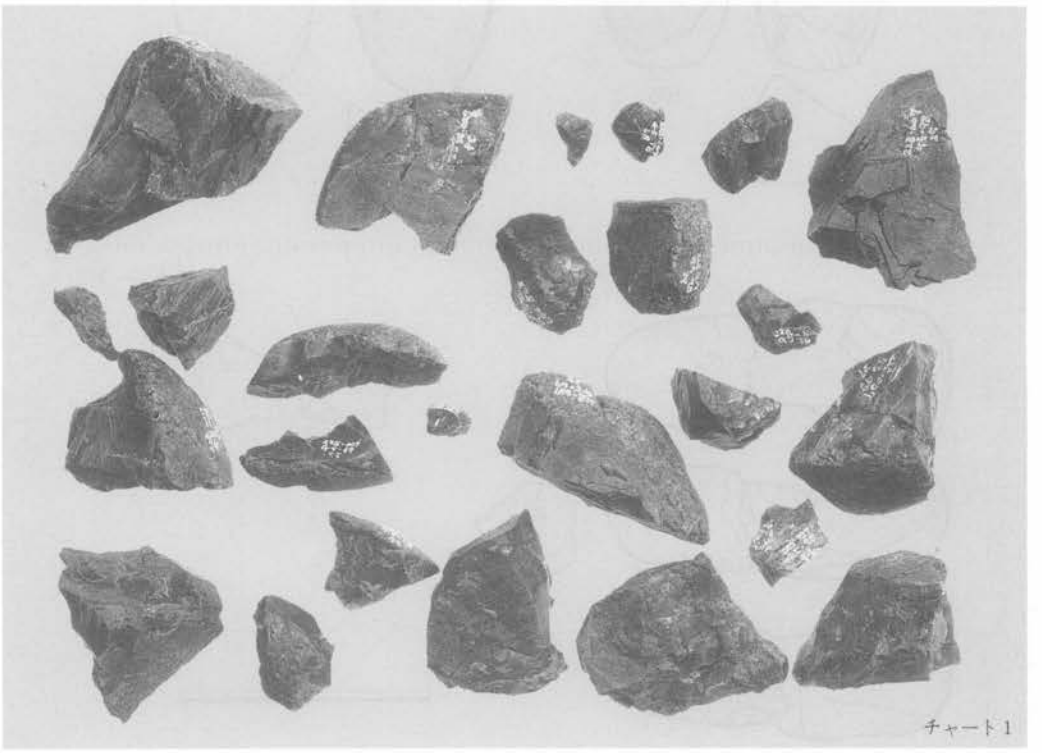
チャート 2

チャート 3



第23図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(9)（2/3）





第24図　池花南遺跡第1文化層出土石器(10)（2/3）

察されるものである。見方によっては切出状の刃部を持つ石器と言いうる。

第24図は節理によって破砕した石屑とその接合状況である。このように砕けた石屑が過半を占めるにも拘わらず、この個体はクラスターｊ、クラスターｋ、クラスターｎ、クラスターｒに離れて分布(集中するのはｊとｒ)しており、またクラスターｊ、ｋ、ｒ間には接合関係が認められる。この接合関係からは幾つかの石塊に分割、移動後各所で破砕したと言い切ることもできず、解釈が難しい。暗青緑色。礫皮面及び節理面は灰緑色。

チャート２（第23図、図版27）　68は剝片である。右側縁に折断面を持ち、左側縁の一部と下縁の一部に使用痕とおぼしき微細な刃こぼれが見える。

69は接合資料。69ａはかなり分厚い剝片であるが、企図に反して節理面で割れてしまった故かと考えられる。緑がかった黒褐色。

チャート３（第23図、図版27）　70は石核であるが、礫皮面が広く見られ元来偏平な礫が素材となっていたことを窺わせる。剝片剝離作業の最中に二つに折損したようであるが、70ｂはさらにその後の小さな剝離痕を残している。

71は剝片で、これも66と同様折断剝片のようであるが、やはり加撃の際に同時に割れたものらしい。下縁に微細な剝離を残す。使用痕と考えられる。緑がかった灰褐色～緑灰色。

チャート４（第25図、図版28）　72は台形様石器と剝片の接合資料である。剝片72ａは扇形を呈する横長の剝片で、刃部や尖頭部として機能しうる箇所を有している。台形様石器72ｂは72ａを生産した作業面を打面として剝離された、背面に大きく礫皮面を残すやや大型の横長剝片を素材としているが、入念な加工が加えられ、当文化層の台形様石器の中では特異な、撥形に近い形状をしている。まず腹面右側縁の打瘤を除去するために比較的大きな剝離を行った後、側縁全体、特に基部側に丁寧な調整を加える。しかる後、腹面左側縁に粗い調整を行ってさらに背面からより丁寧な調整によって形状を整え、基部の作出に努めている。

この個体は他に小さな剝片を１点残すのみであった。青黒色。

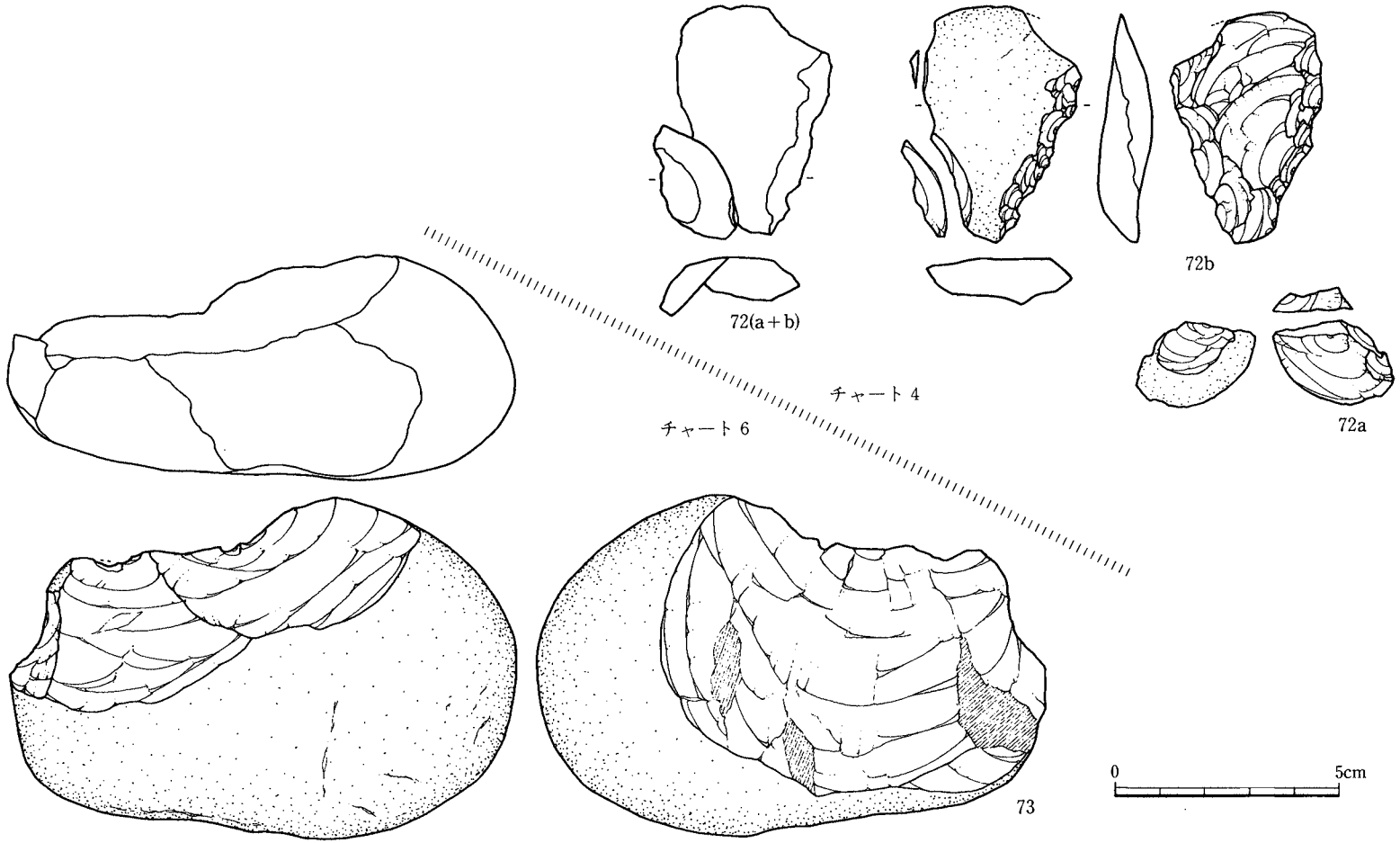
チャート５　剝片３点だけの個体である。実測図は掲載しなかった。

チャート６（第25図、図版28）　石核１点のみ(73)である。仮に実測図右をＡ面、左をＢ面とすれば、まずＡ面において一枚の大きな剝離を行い、次にそれを打面とし、Ｂ面を作業面として数回の剝離作業を行っている。遺跡内に剝片を遺存しなかった。青灰色。

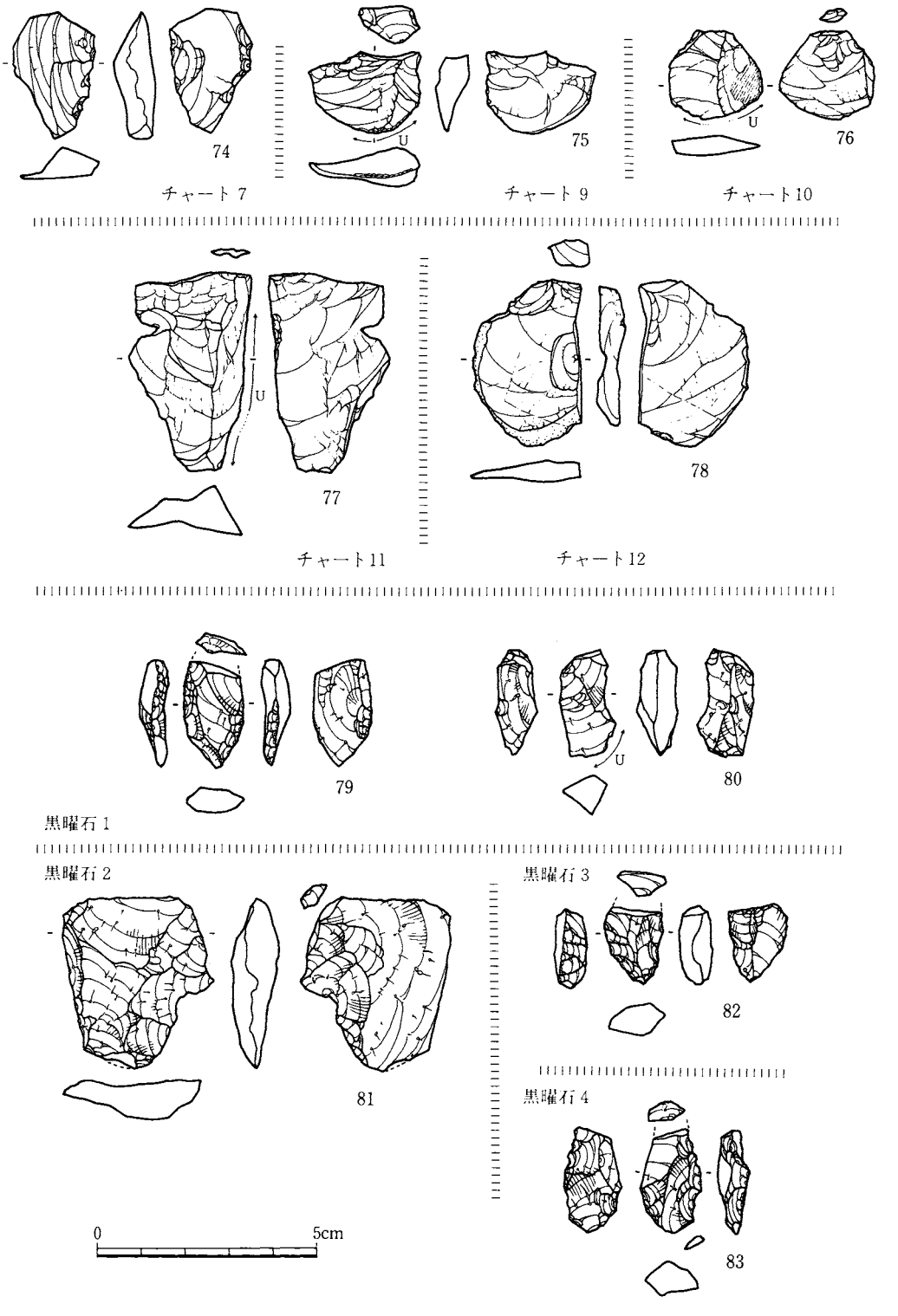
チャート７（第26図、図版28）　台形様石器１点のみ(74)である。主として腹面両側縁に加工を施す。刃部は鈍い尖頭状を呈すると言えなくもないが、無論尖頭部を意識して製作されたものではないであろう。乳白色に褐色あるいは青灰色の縞目。

チャート８　小礫１点のみである。

チャート９（第26図、図版28）　全体で７点の“剝片”が出土しているが、やはり節理が発達して塊状に砕けたものが多い。75はその中で唯一の有用な剝片と言えるもので、下縁の一部



第25図　池花南遺跡第１文化層出土石器(11)（2/3）



第26図　池花南遺跡第1文化層出土石器(12)（2/3）

に微細な剝離痕が認められる。削器のような機能を考定しうるか。緑灰褐色～青灰褐色。

チャート10（第26図、図版28）　剝片4点と砕片1点が出土している。やはり節理等で複雑に割れたものがある。76は下縁に極く微細な剝離痕を残す小型の剝片。緑がかった黒褐色。

チャート11（第26図、図版28）　剝片3点を出土した。チャート10によく類似した石材であるが、この個体の方がやや良質。77はやや縦長の剝片で腹面左側縁に使用痕と考えられる刃こぼれが観察できる。緑がかった黒褐色。

チャート12（第26図、図版28）剝片1点のみ(78）である。これも折断剝片のようであるが、打点から加撃方向に沿って割れており、剝離時に同時に割れたものと推測しうる。加工痕、使用痕ともに認められない。緑がかった黒褐色。

チャート13、14　小さな剝片、砕片を少量出土した。実測図は掲載しなかった。

黒曜石1（第26図、図版28）　当文化層は黒曜石の出土量が極端に少なく、その割にToolが多い。基本的には消費石材ではないと言える。中ではこの個体のみ剝片、砕片を出土している。

79は横長剝片を素材とした小型のナイフ形石器である。先端を欠失していると思われる。調整は急斜な刃潰し加工ではなく、台形様石器と同様の平坦剝離によっている。左側縁(打面側)の加工によってedgeを緩め、右側縁(末端側)を刃部として一部に加工を施して基部を作出している。80は角柱状の剝片であるが、一部に使用痕と見られる刃こぼれが観察される。

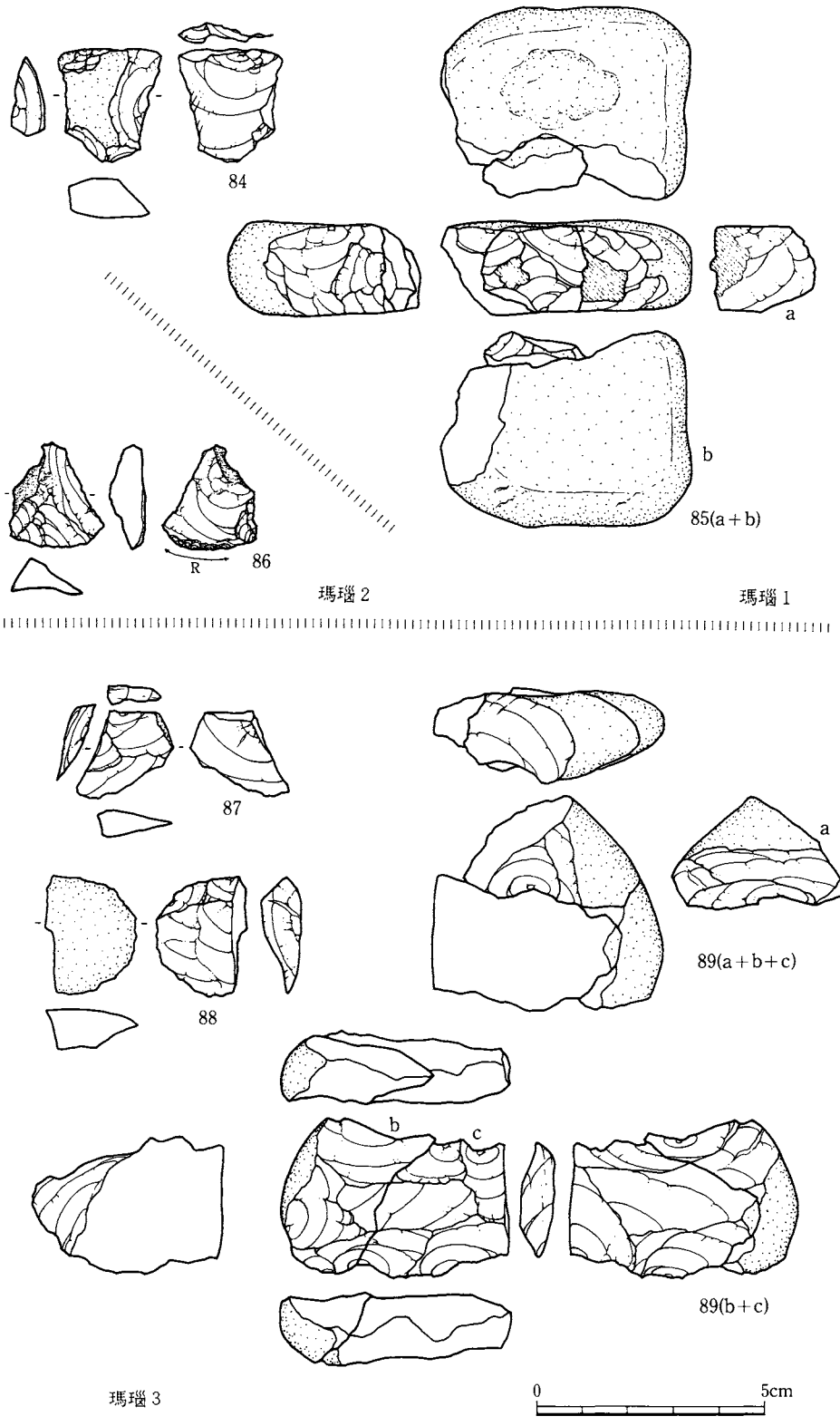
若干の夾雑物、気泡が目立つが、当文化層では良質な黒曜石。漆黒。

黒曜石2（第26図、図版28）　台形様石器1点のみ(81)である。やや大振りな矩形の剝片を素材とし、まず背面右側縁(打面側)に、次に腹面左側縁(同じく打面側)に粗い剝離を施して調整としている。背面構成からは求心的な剝離痕が観察される。夾雑物の多い粗悪黒曜石。透明感はなく、黒色とやや淡色の縞目が見える。

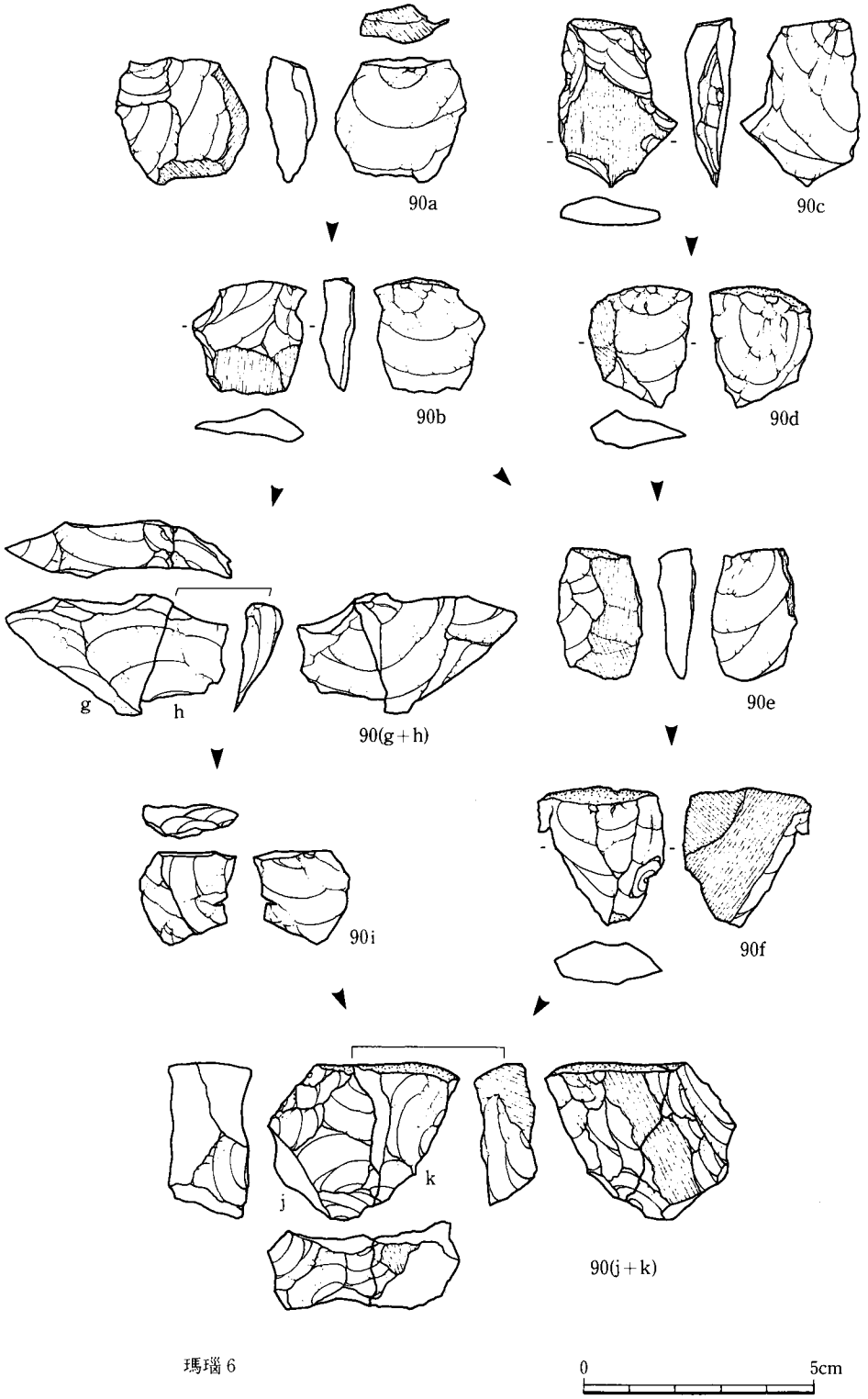
黒曜石3（第26図、図版28）　ナイフ形石器1点のみ(82)である。縦長剝片を素材としているらしい。79に比して急斜な加工を施している。左側縁を刃部としていたらしいが、先端を欠失したため、刃部は全く遺存しない。腹面の上方に若干の潰れと上からの剝離が見られるため、ピエス・エスキーユとして転用された可能性も指摘しておく。暗褐色の縞目を持つ。

黒曜石4（第26図、図版28）　ナイフ形石器1点のみ(83）である。素材剝片の形状は不詳。79と同種の石器であるが、加工を施した部分は鋸歯状を呈している。やはり先端を欠失する。半透明で夾雑物も少なく、比較的良質な黒曜石である。

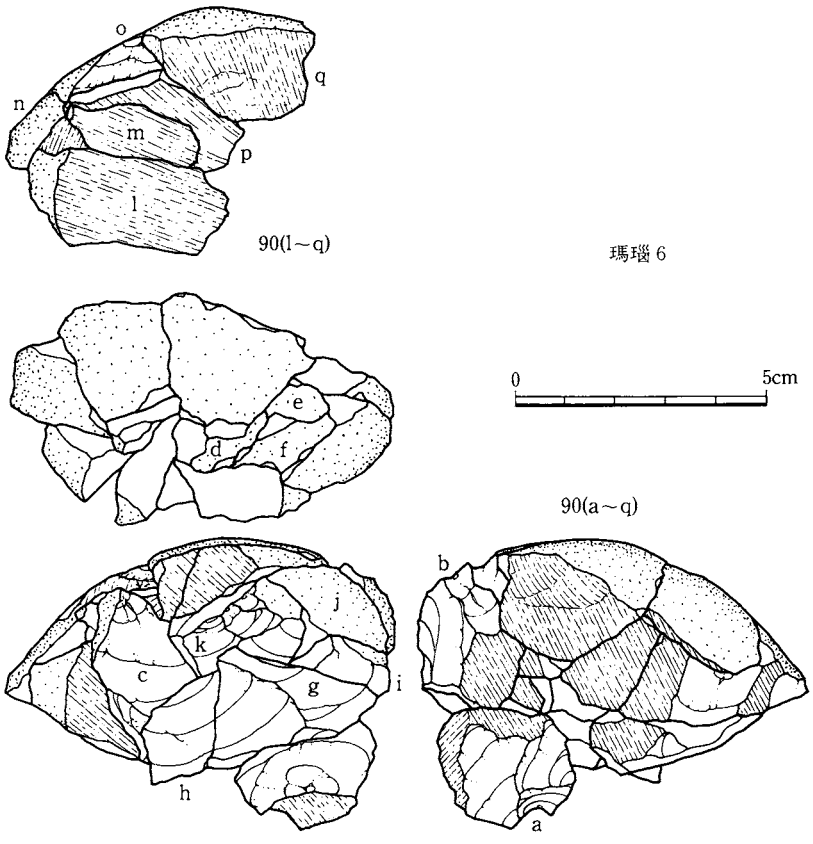
瑪瑙1（第27図、図版29）　細かく砕けやすい個体である。84は台形の剝片。85は剝片と石核の接合資料である。石核の遺存部分から判断するに、元来底の浅い偏平な素材であったと思われる。85aは礫皮面を打面にして底面に達する台形の剝片が得られたものであるが、85bに残る他の剝離痕からはあまり有用な剝片が得られていないことを窺わせる。淡い橙色を帯び、半透明。



第27図　池花南遺跡第1文化層出土石器(13)（2/3）



第28図　池花南遺跡第１文化層出土石器(14)（2/3）



第29図　池花南遺跡第１文化層出土石器(15)（2/3）

瑪瑙２（第27図、図版29）　剝片、砕片が計９点出土した。瑪瑙の中では良質な石材で、比較的鋭利な剝片が生産されている。86はそれらの中で唯一加工痕を持っていたものである。扇形の剝片の末端、腹面側に細かい連続した剝離が加えられている。微かに黄橙色を帯び、透明度が高い。

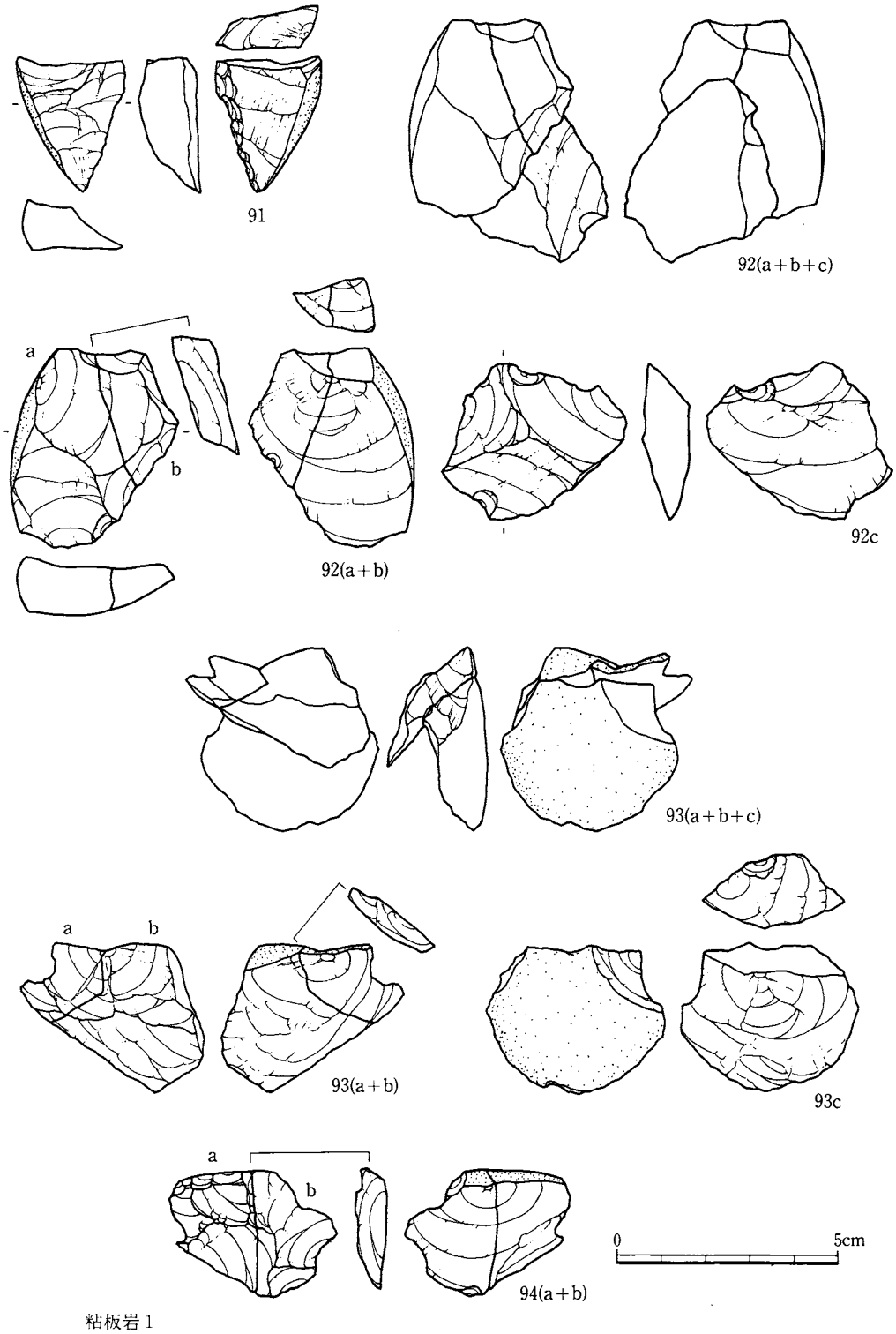
瑪瑙３（第27図、図版29）　87、88に折断剝片２点を図示した。87は薄く鋭利な剝片で、打面部を基部、折断面を背とすることによって鋭い刃部とすることができる。88は背面が礫皮面で覆われた楕円形の剝片をほぼ二分している。

89は３点の接合資料である。瑪瑙１と同じく原石は比較的偏平な礫であったらしい。89ｂ＋89ｃは石核であり、表裏両面とも横位の打点移動によって上下から剝離作業を行っている。

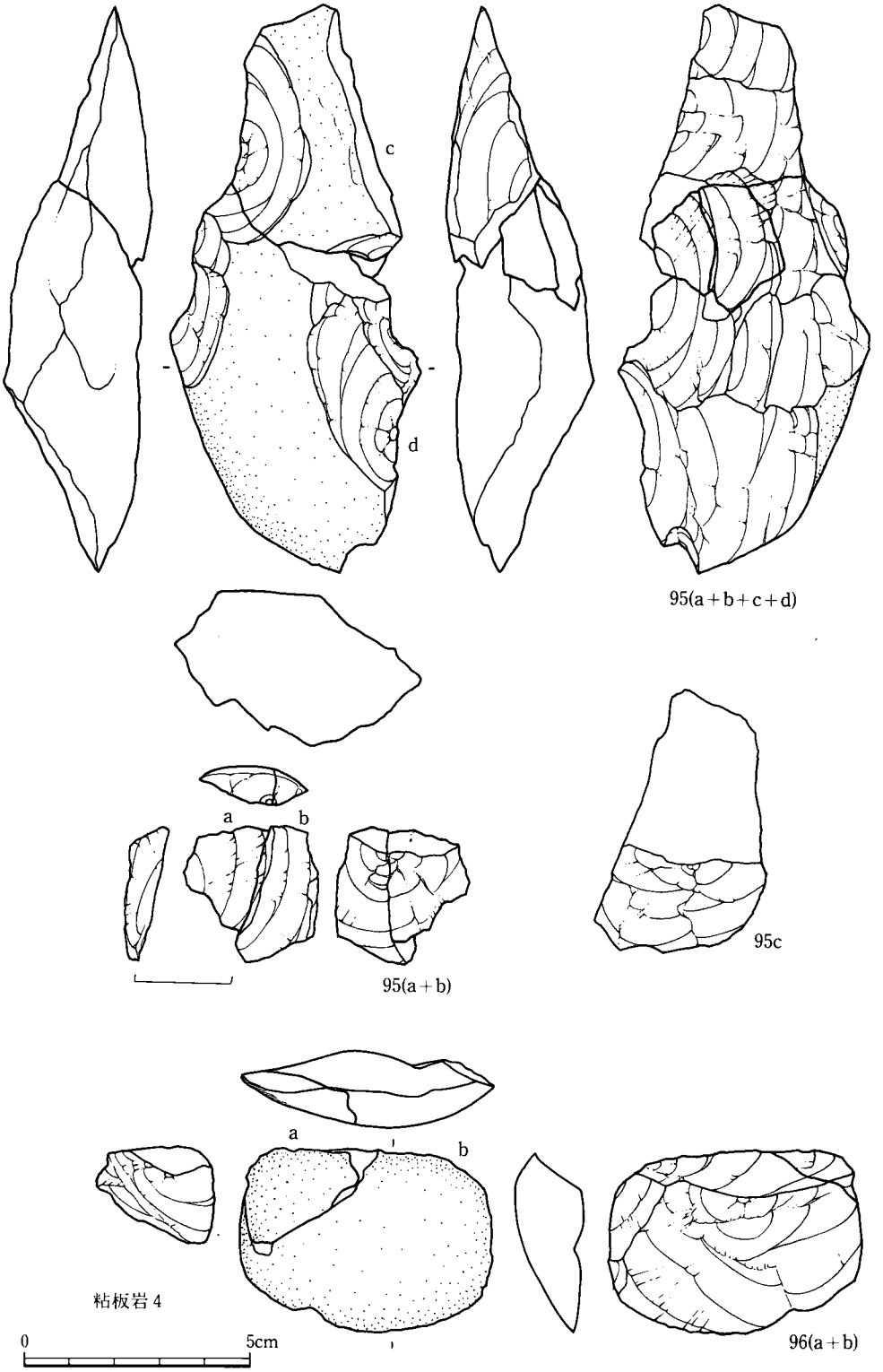
クラスターｍに集中して分布する。礫皮面は橙褐色、内部は微かに黄色を帯び、半透明。

瑪瑙４～５　剝片２～３点を遺存するのみ。実測図は掲載しなかった。

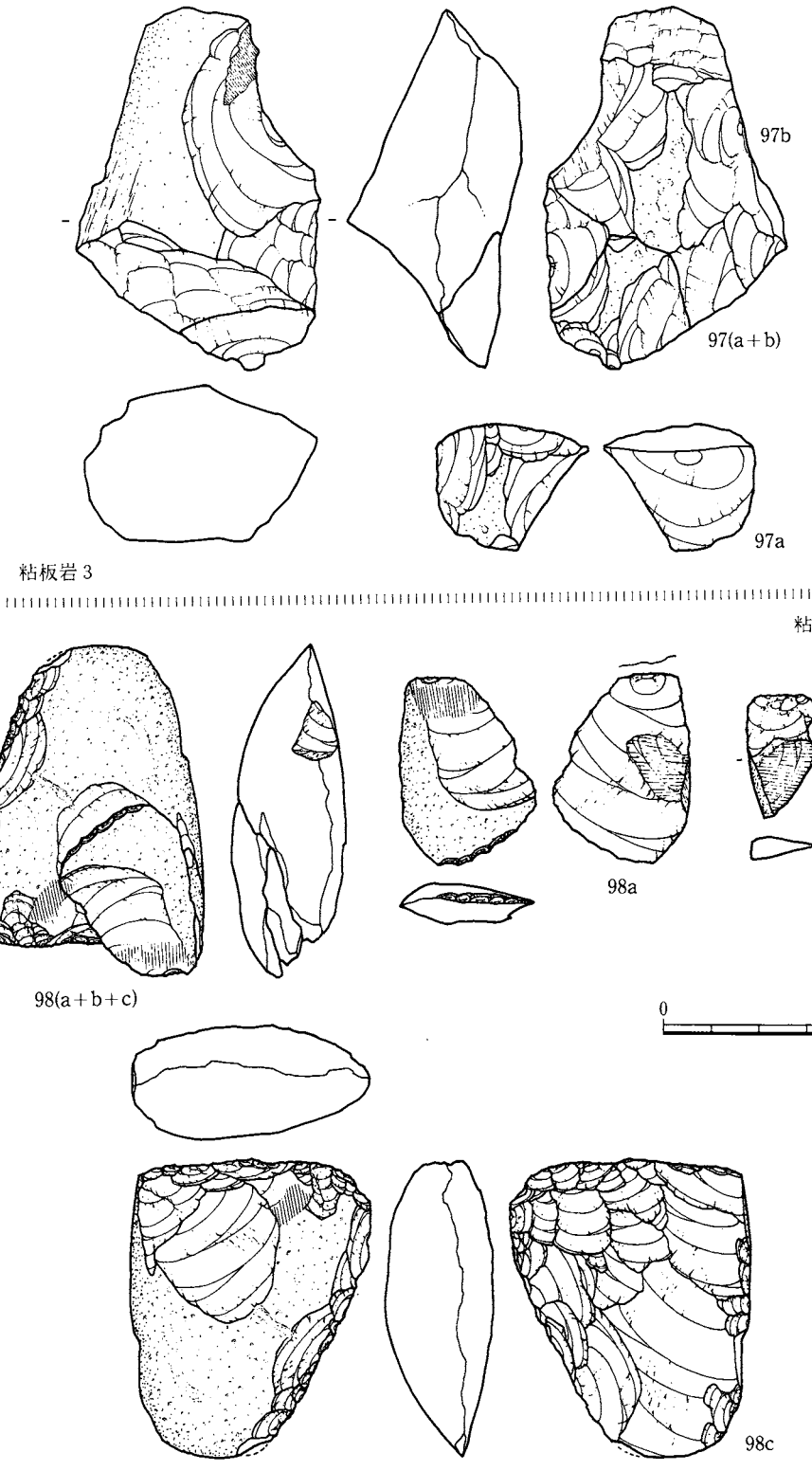
瑪瑙６（第28図、第29図、図版30）　17点が接合する(90)。遺存部分の剝離作業は、概ね礫皮面を、一部(90ｇ、ｈ、ｉ)は旧作業面を打面として行われ、台形剝片または横長剝片を得て



第30図　池花南遺跡第1文化層出土石器(16)（2/3）



第31図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(17)（2/3）



第32図　池花南遺跡第1文化層出土石器(18)（2/3）

いる。旧作業面において生産された剥片は90ａを遺存するのみで、他は搬出されたものと考えられる。また節理が発達しており、特に90１～ｐは節理面で砕けたものである。加工痕を有するものは存在しない。クラスターｏに集中して分布した。乳白色で礫皮面及び節理面は橙褐色を呈する。

粘板岩１（第30図、図版31）　91は末端側を残した折断剥片の腹面左側縁に加工を施した削器である。下端は鋭い尖頭部を形成している。92～94は剥片を示す。94は折断によって台形様の剥片を得ている。クラスターｈに主体がある。緑がかった黒灰色。

粘板岩２　剥片、砕片が少量出土している。実際には石斧の調整剥片であると考えられる。実測図は掲載しなかった。

粘板岩３（第32図、図版31）　97は石核と剥片の接合資料である。97ａは目的剥片ではなく、石斧の作出を企図して未完に終わったようである。クラスターｂに集中する。黒灰色。

粘板岩４（第31図、図版32）　95は97と同様、石核と剥片の接合資料である。やはり石斧の作出を企図して未完に終わった個体と考えられる。96、特に96ｂは大型の剥片であるが、打角の大きさから見ても石斧の調整剥片であり、また96ａ、ｂともに粗い研磨による削痕が一部に観察される。粘板岩３と同じくクラスターｂに集中する。暗灰色。

粘板岩５（第32図、図版32）　98の接合資料は本来、98(ａ＋ｂ＋ｃ)の位置で石斧として使用されたものである。その一部に刃部として研磨された痕が残存している。破損と再生を繰り返して次第に小型化し、ついには本来の刃部側を潰して反対の基部側を刃部として使用しようとした意図が窺われる(98ｃ)。なお98ａは破損時の剥片または再調整剥片に加工を加えて削器としたものである。クラスターｏ～ｐより出土した。青みを帯びた黒灰色。

粘板岩６（第33図、図版33）　粘板岩１～４に類似した個体であるが、遺された剥片を観察すると打角が小さいことが指摘できる。99～101に剥片を図示しておく。クラスターｃとクラスターｎの間に接合関係を持っている。暗灰色。

粘板岩７（第33図、図版33）　102は折断面において３点が接合する。一応石核とする。

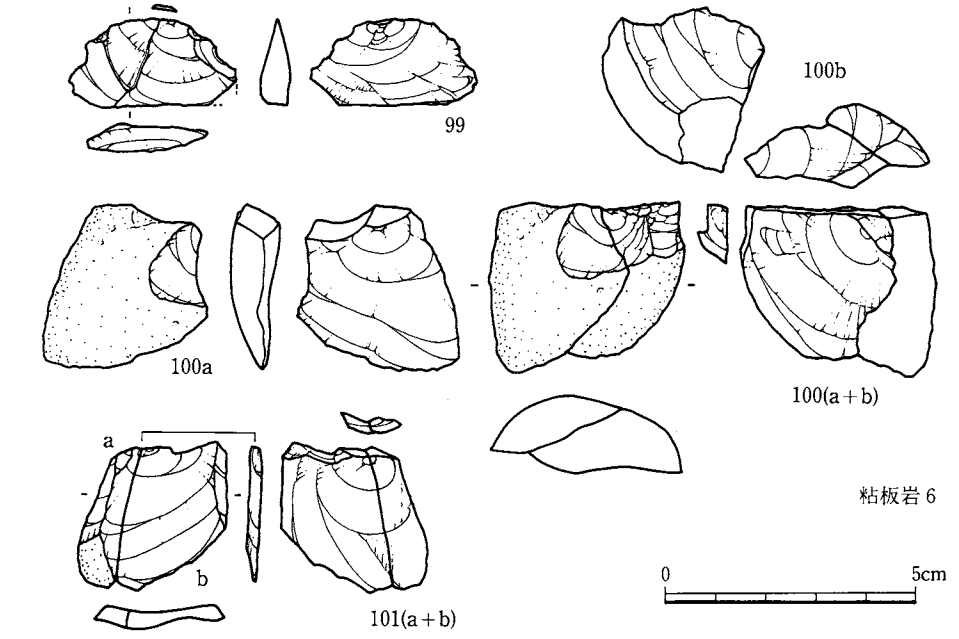
粘板岩８　石斧調整剥片らしい剥片が４点出土した。実測図は掲載しなかった。

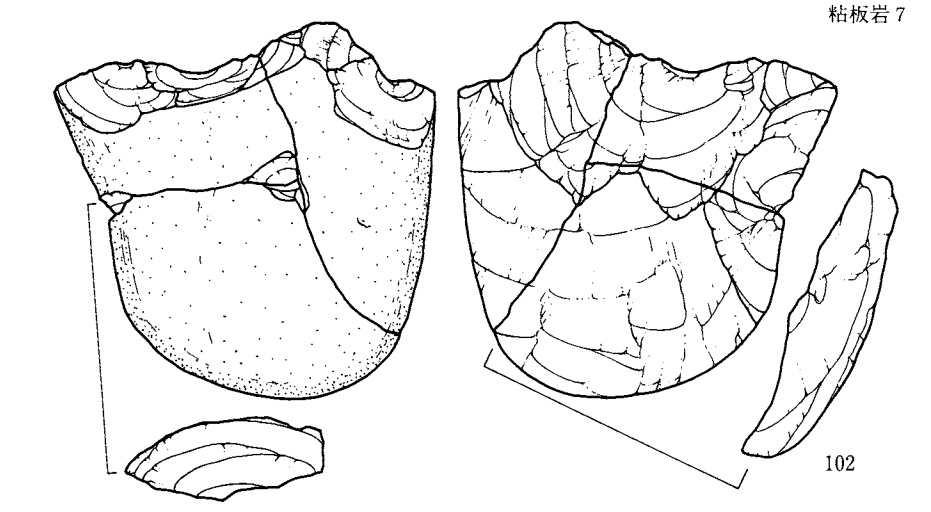
粘板岩９（第33図、図版33）　大型の偏平な剥片１点のみ(103)である。背面全体が礫皮面で覆われる横長の剥片であるが、長軸方向の加撃が加えられたらしく腹面左半近くを覆う弾けた剥離痕と背面左縁に細かい剥離痕が見られる。暗灰色。

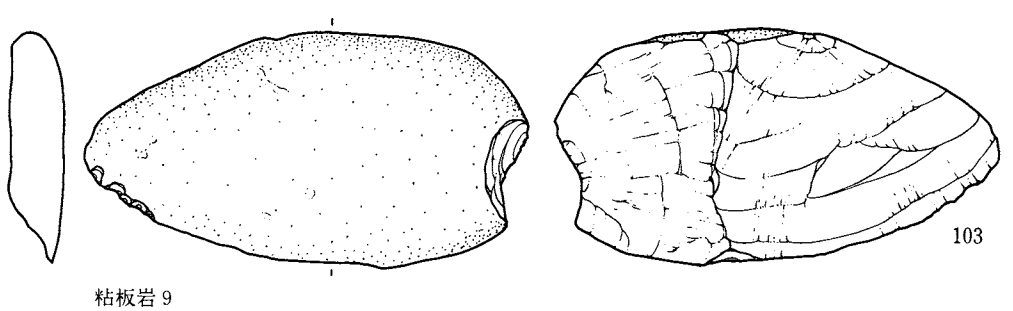
粘板岩10　小さな剥片１点のみである。実測図は掲載しなかった。

珪質粘板岩１　剥片１点のみ。実測図は掲載しなかった。

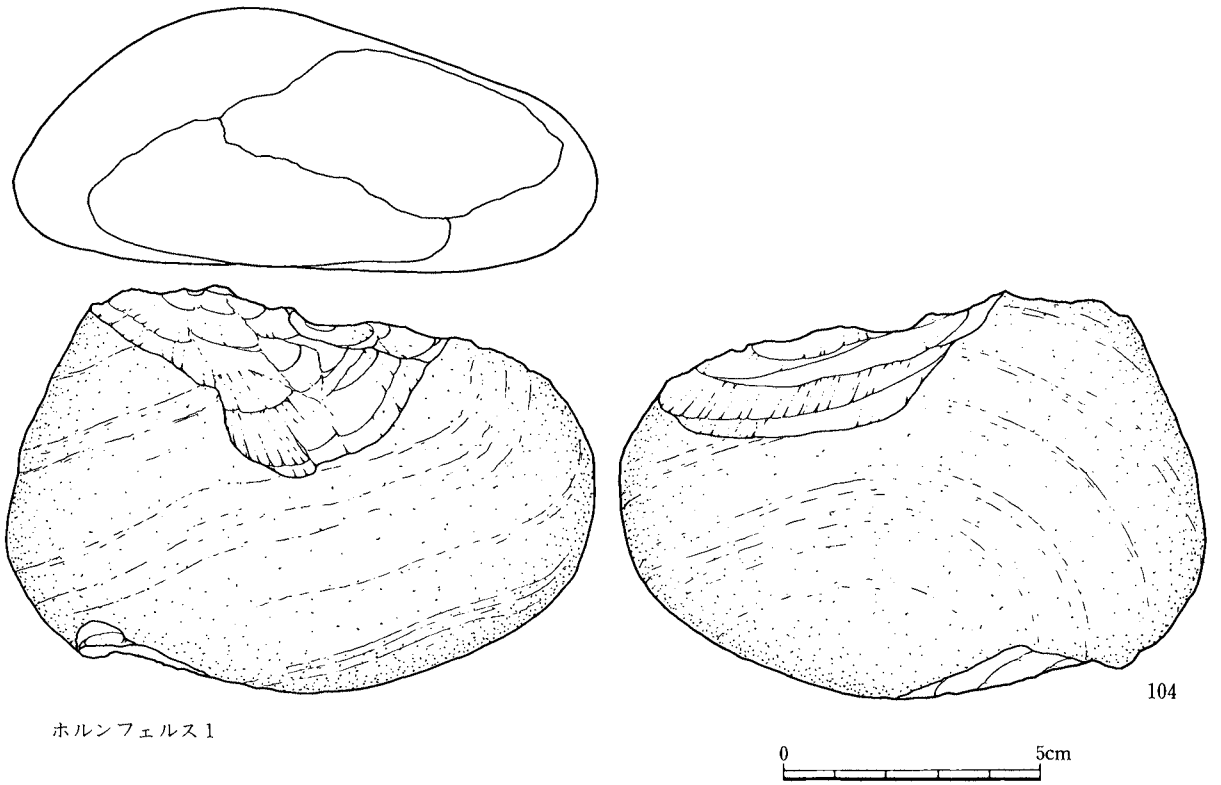
ホルンフェルス１（第34図、図版33）　変成を受けた粘板岩で、石核１点のみ(104)である。有用な剥離作業は行いえていない。層面の重畳が縞目となって見えている。全面風化が著しい。暗灰色。



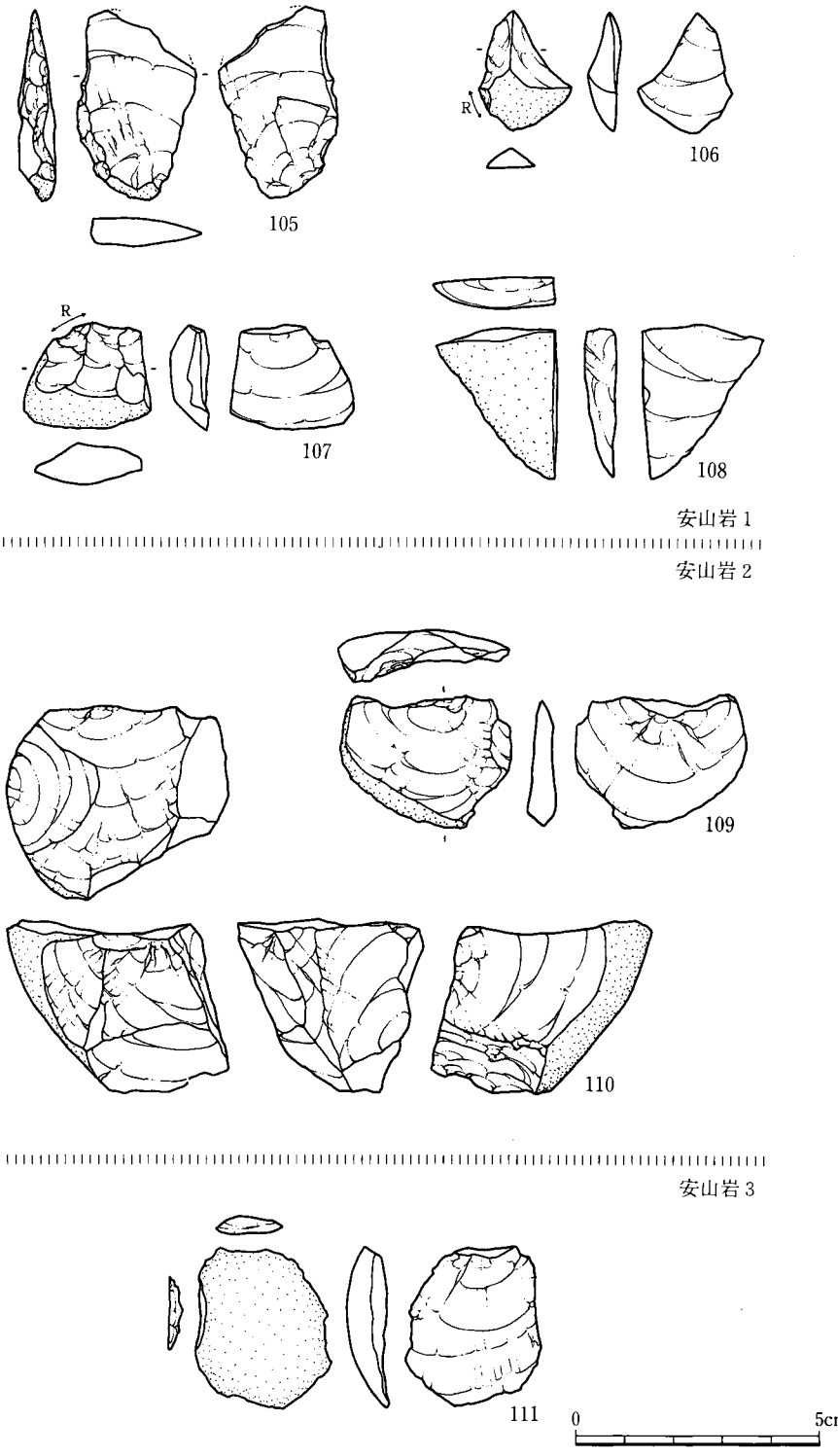




第33図　池花南遺跡第１文化層出土石器(19)（2/3）



第34図　池花南遺跡第1文化層出土石器⑳（2/3）



第35図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器 (21) (2/3)

ホルンフェルス２　ホルンフェルス１によく似た個体。剥片３点のみ。

安山岩１（第35図、図版34）　風化の著しい緻密質安山岩である。石核を遺跡内に遺存しない。105は台形様石器である。刃部は欠損しているが、切出形と言ってよい形状ではなかったかと考えられる。調整は一側縁ほぼ全体に及ぶが、blunting 加工の如くである。

106～108は剥片である。106と107には僅かではあるが加工痕が見られ、とくに106は鋭い尖頭部と刃部を有する石器として用いられたのではないかと思われる。108は礫皮面を背面としているが、二箇所を折断することで直角三角形状の、尖頭部と刃部を持つ剥片を得ている。

比較的分散的な分布を示す。礫皮面は灰褐色。風化面は明灰色～灰白色。

安山岩２（第35図、図版34）　109に貝殻状剥片の例を示した。このような小型の剥片がいくつか残されているが、加工痕をもつものは存在しない。110は多面体状の石核。打面が頻繁に転移していることが窺える。

クラスターｂ、ｇ、ｌの間で分有関係があり、そのうちクラスターｂに石核が存在した。風化面は明灰色であるが、新鮮な面は黒色。

安山岩３（第35図、図版34）　剥片及び少量の砕片のみが遺存する個体。111に一例を示す。礫皮面、風化面は黒褐色、新鮮な面は黒色。

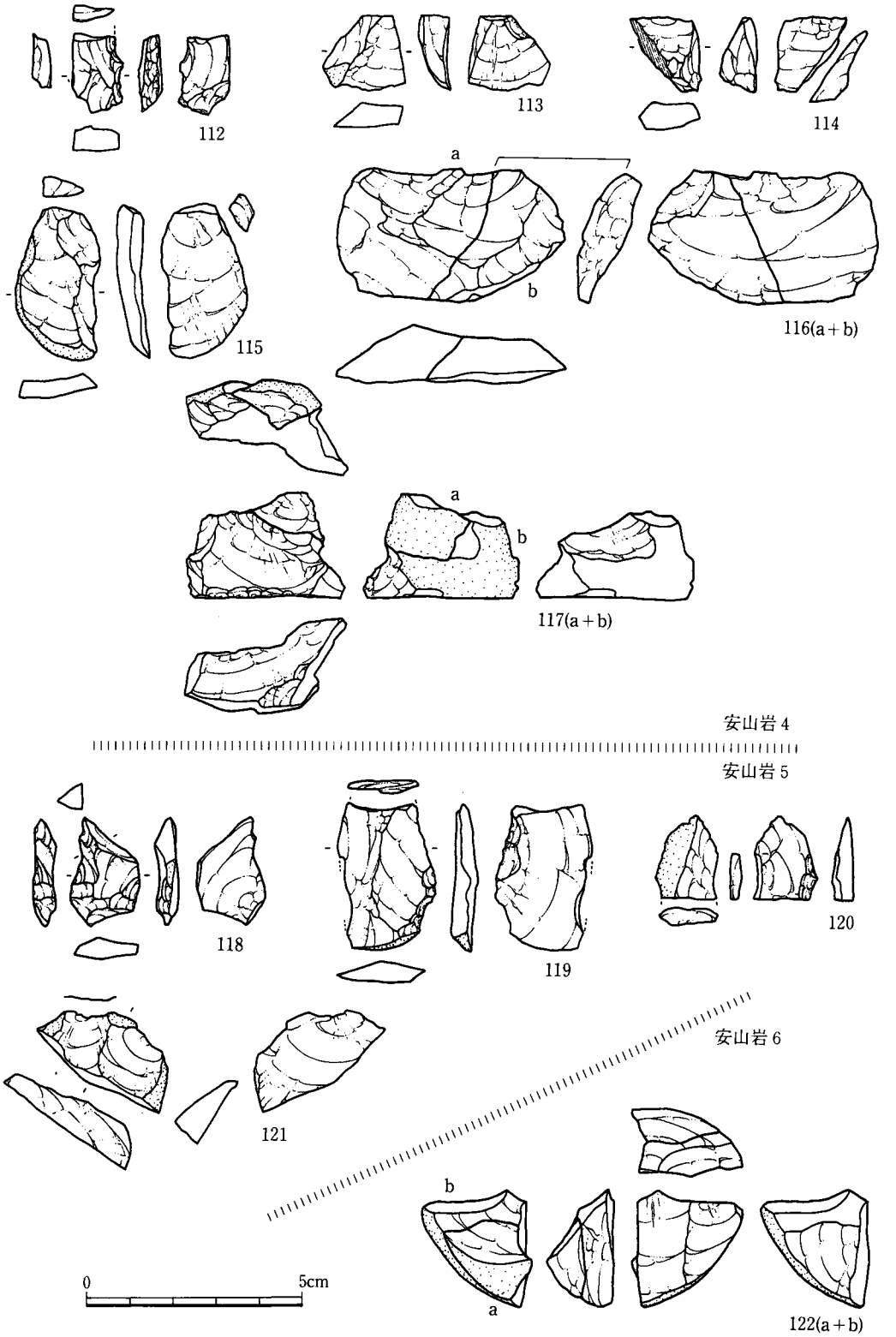
安山岩４（第36図、図版34）　安山岩では最も多量に剥片を遺存する個体である。112はナイフ形石器の基部と考えられるが、欠損部分が大きく、本来の形状は判らない。横長剥片を素材として、打面側に blunting 加工を施している。113と114はともに台形の小型剥片である。113の基部に僅かに加工痕が見えるが、殆どそのまま台形石器、切出形の石器として有用であったと思われる。115は縦長の剥片。116はやや大振りの横長剥片を二つに折断したものである。

117は剥片と石核の接合資料である。剥片117a を剥離した面を打面とした剥離痕が残されている。

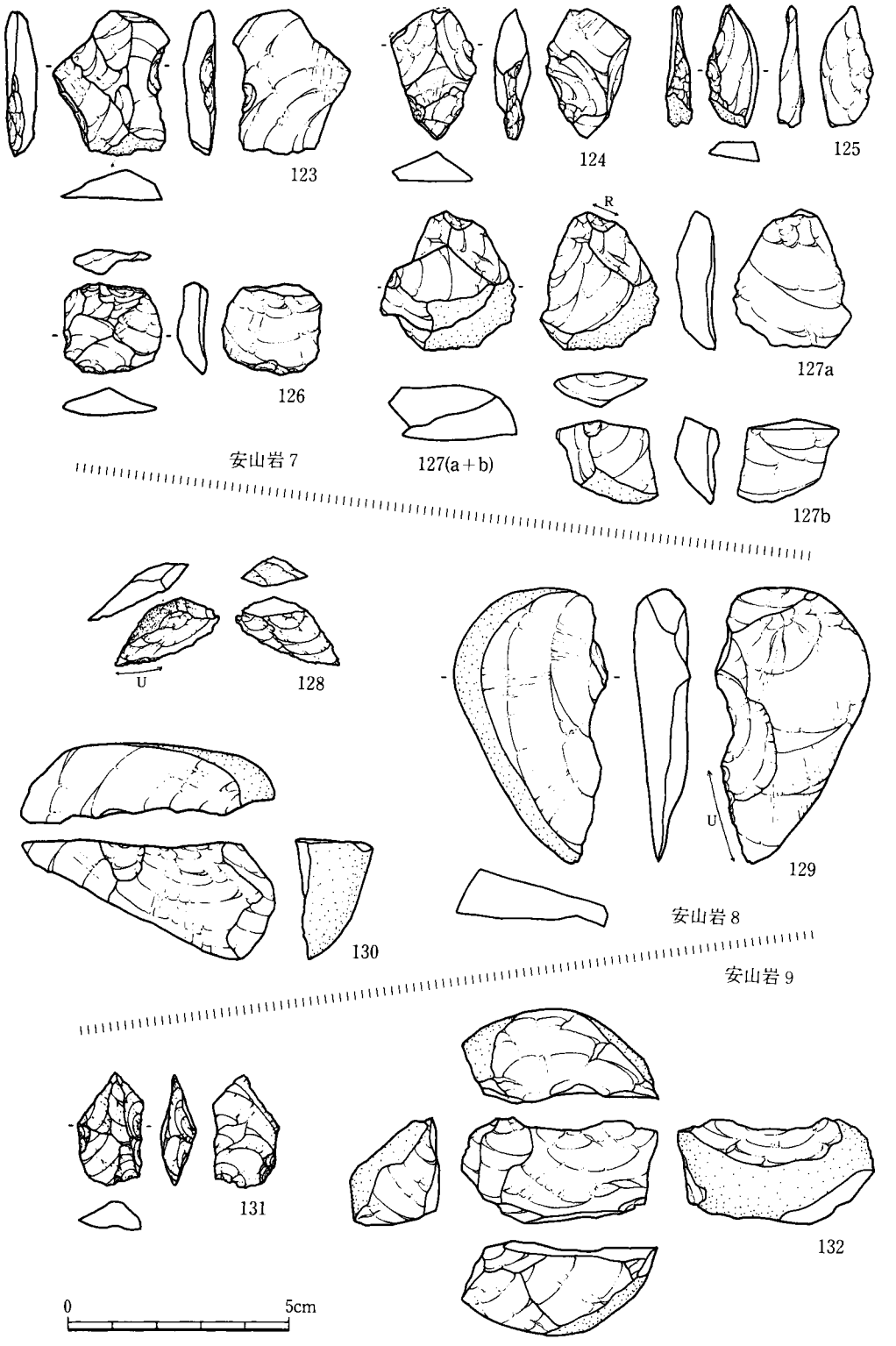
クラスターｌを中心にクラスターｆ、ｎにも分布する。礫皮面、風化面は青みを帯びた黒灰色。新鮮な面は黒色。

安山岩５（第36図、図版34）　石核を残さない個体である。台形様石器が３点含まれる。118は小型の横長剥片を素材とする石器で、刃部を水平に見れないわけではないが、むしろ尖頭部の作出を主眼に置いた石器であると考える。119も横長剥片を素材とする石器で、欠損部が大きいため、本来の形状は不詳である。打面側の側縁全体に表裏から調整を加えている。120は鈍い尖頭部を有すると言える石器である。下方は欠損か折断かは判らない。やはり横長剥片素材であり、打面はそのまま残し、腹面の末端側に調整を加える。121は横長剥片の末端を折断したものである。礫皮面、風化面は暗灰色、新鮮な面は黒色。

安山岩６（第36図、図版34）　122は２点接合する資料である。礫皮面、風化面は青みを帯びた灰色。新鮮な面は黒色。



第36図　池花南遺跡第1文化層出土石器(22)（2/3）



第37図　池花南遺跡第1文化層出土石器(23)（2/3）

安山岩7（第37図、図版35）　この個体も石核を残さないが、台形様石器等を比較的多く持っている。123、124は台形様石器である。123は切出形の刃部を有する石器で、二側縁に加工を持つ。打面側、背面左側縁の加工は急斜である。124は鈍い尖頭部を持つ石器で、左側縁は折断面とし、右側縁はまず腹面側に平坦な剝離の調整を加え、次に急斜な調整を施している。

125はナイフ形石器である。小ぶりの横長剝片を素材として打面側を潰している。刃部は鋭利ではないが先端角は鋭い。

126は矩形の剝片の末端に加工痕と思われる剝離が見られるもの。127は剝片2点の接合である。127aは基部背面に加工痕らしき剝離が見られる。127bは基部側を折断されている。

クラスターjに集中するが、クラスターnにも分有される。礫皮面、風化面は若干青みを帯びた灰色。新鮮な面は黒色。

安山岩8（第37図、図版35）　128は小型の剝片であるが、尖頭状の形態を持つ。加工を施さず、下縁をそのまま刃部とし、尖頭器として使用したかと思われる。細かい刃こぼれが見られる。129は大振りの剝片の末端側に微細な剝離痕が見られる石器である。また使用痕に先んじて大きめの剝離痕が入っている。

130はおよそ半分を礫皮面で覆われた石核である。古い剝離面または分割面を打面とし、打点を横移動させて剝離作業を行っている。礫皮面、風化面は暗灰褐色、新鮮な面は黒色。

安山岩9（第37図、図版35）　131は台形様石器である。さほど鋭利とは言えないが尖頭部を持つ。背面右側縁と基部に加工を施すが、側縁の加工は急斜なものである。

132は石核である。小型の角礫を素材としており、同一打面で作業面を転移させた後、打面と作業面を置換させている。

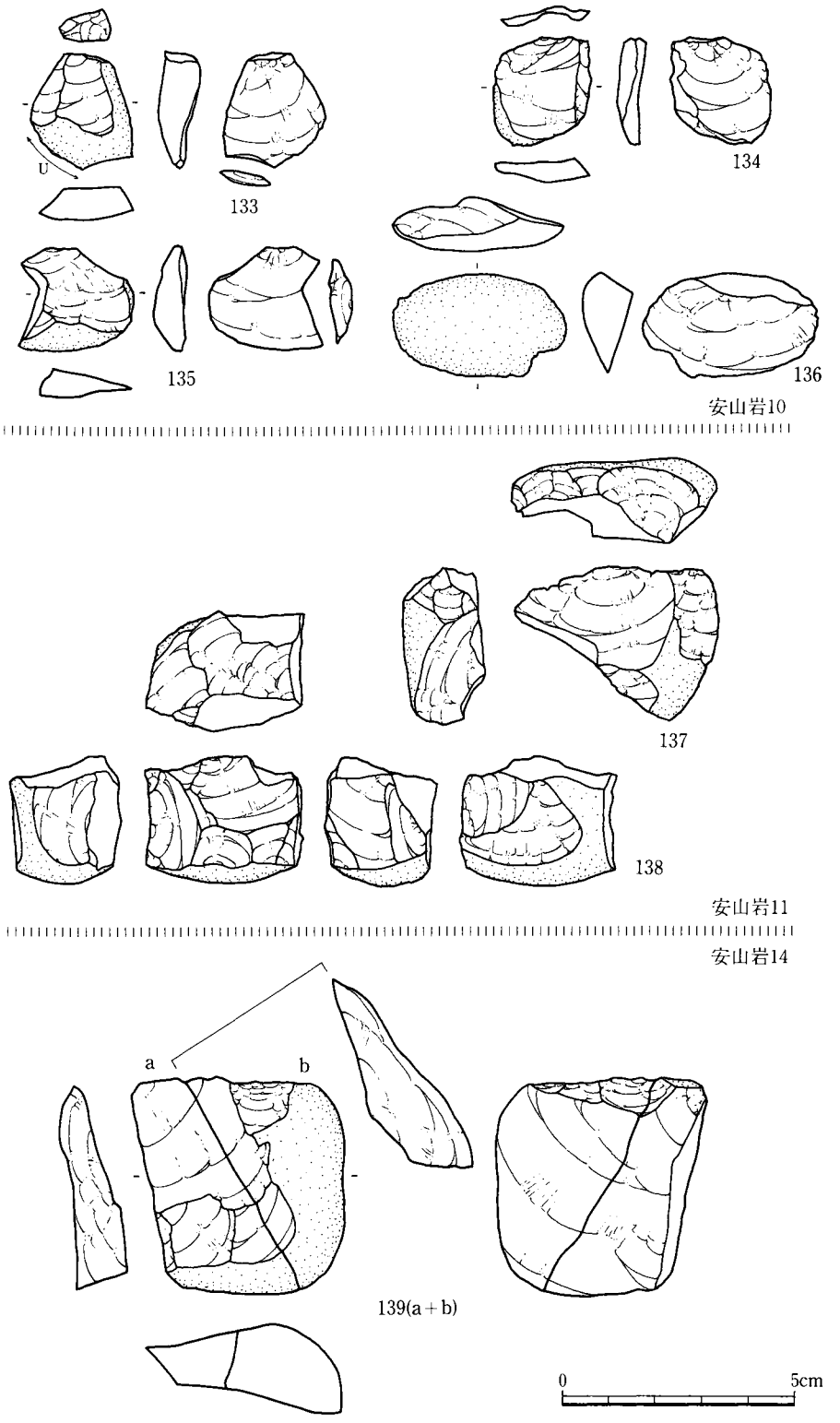
石核がクラスターeに、剝片類はクラスターfにある。礫皮面、風化面は暗灰褐色、新鮮な面は黒色。

安山岩10（第38図、図版35）　石核を遺存しない個体である。剝片を4点図示した。133～135はいずれも台形、矩形を呈する剝片であり、加工痕を持たないがそのまま石器として用いられたであろう。133の末端には使用痕と見られる微細な剝離が顕著に残る。136は礫皮面が背面を覆う横長剝片である。礫皮面、風化面は暗灰色、新鮮な面は黒色。

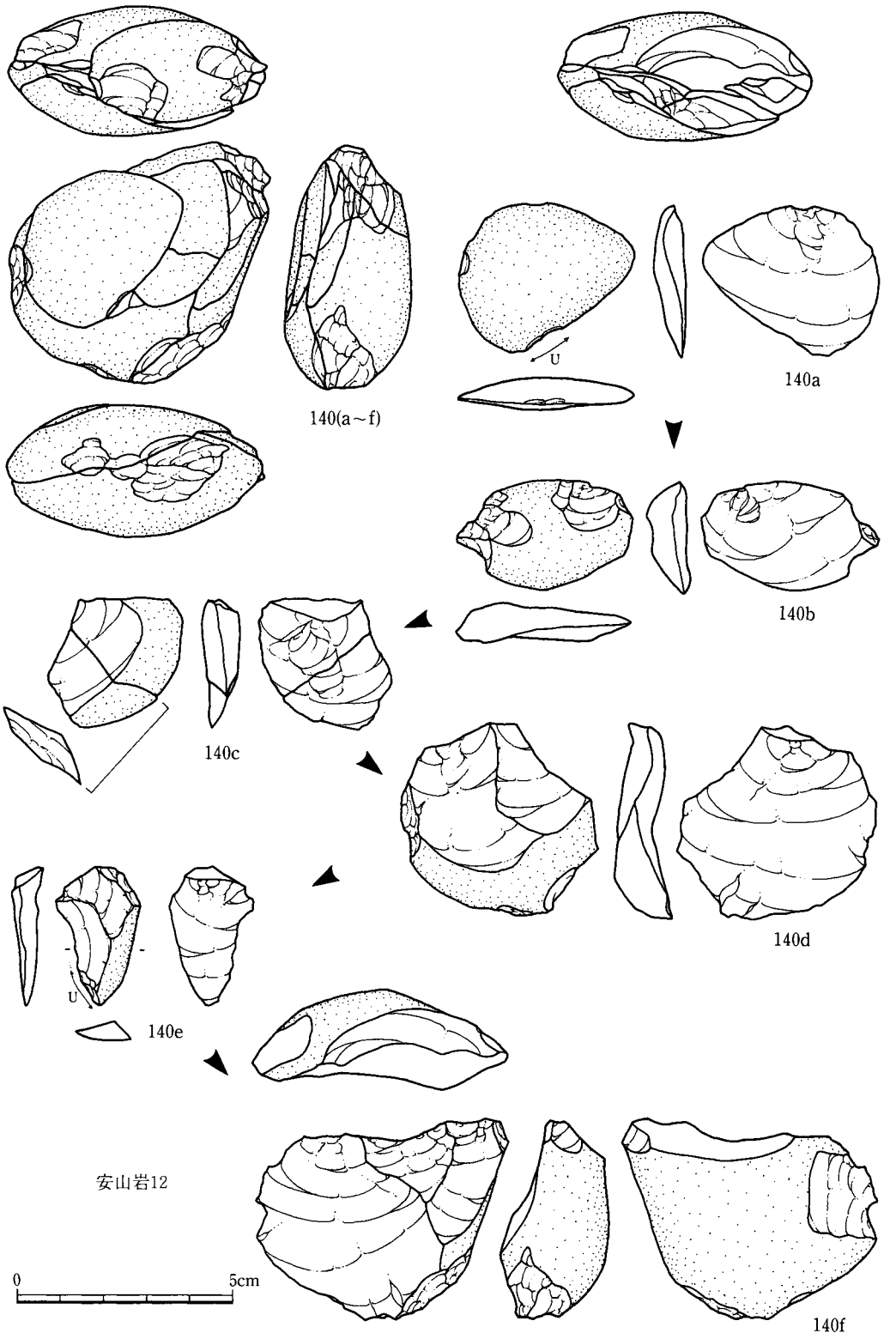
安山岩11（第38図、図版35）　石核2点に対して剝片は3点しか遺存せず、生産された主要な剝片は遺跡外に搬出されている。円礫を分割して素材にしたと考えられる。137は偏平な部分であったため、打面と作業面を置換するタイプの剝離作業を、138は作業面を移しながら打点を周回させ求心的な剝離作業を行っている。

石核がクラスターeにあり、剝片はクラスターdとfにある。礫皮面、風化面は暗灰褐色、新鮮な面は黒色。

安山岩12（第39図、図版36）　全点が接合し、ほぼ原礫の形状まで復原された。周囲には比



第38図　池花南遺跡第１文化層出土石器(24)（2/3）



第39図　池花南遺跡第１文化層出土石器(25)（2/3）

較的細かい調整剝離が数箇所に見られ、打面を作るのに試行を重ねた跡が窺われる。まず140aが剝離されているが、その剝離痕を打面として140bが剝離される。140bが実際の打面作出剝片であり、その剝離痕を打面として打点を横移動させ、140c、d、eが剝離されている。140a及び140eには刃こぼれが観察されるが、とくに140eは、加工痕は持たないが、尖頭器として供用されたと考えられる。

すべてクラスターdから出土している。礫皮面、風化面は灰白色～青灰色、新鮮な面は黒色。

安山岩13　安山岩12とよく似た個体で、剝片2点が出土したのみである。

安山岩14（第38図、図版35）　139は分厚い剝片で3つ以上に折れており、うち2片が遺存して接合した。礫皮面、風化面は灰白色、新鮮な面は暗灰色～灰色。

安山岩15　剝片1点が出土した。実測図は掲載しなかった。

安山岩16（第40図、図版36）　剝片1点(141）が出土したのみである。礫皮面、風化面は暗灰色、新鮮な面は黒色。

安山岩17　剝片1点が出土した。実測図は掲載しなかった。

安山岩18（第42図、図版36）　敲石(155）である。下端に敲打による潰れが見られる。暗青灰色。

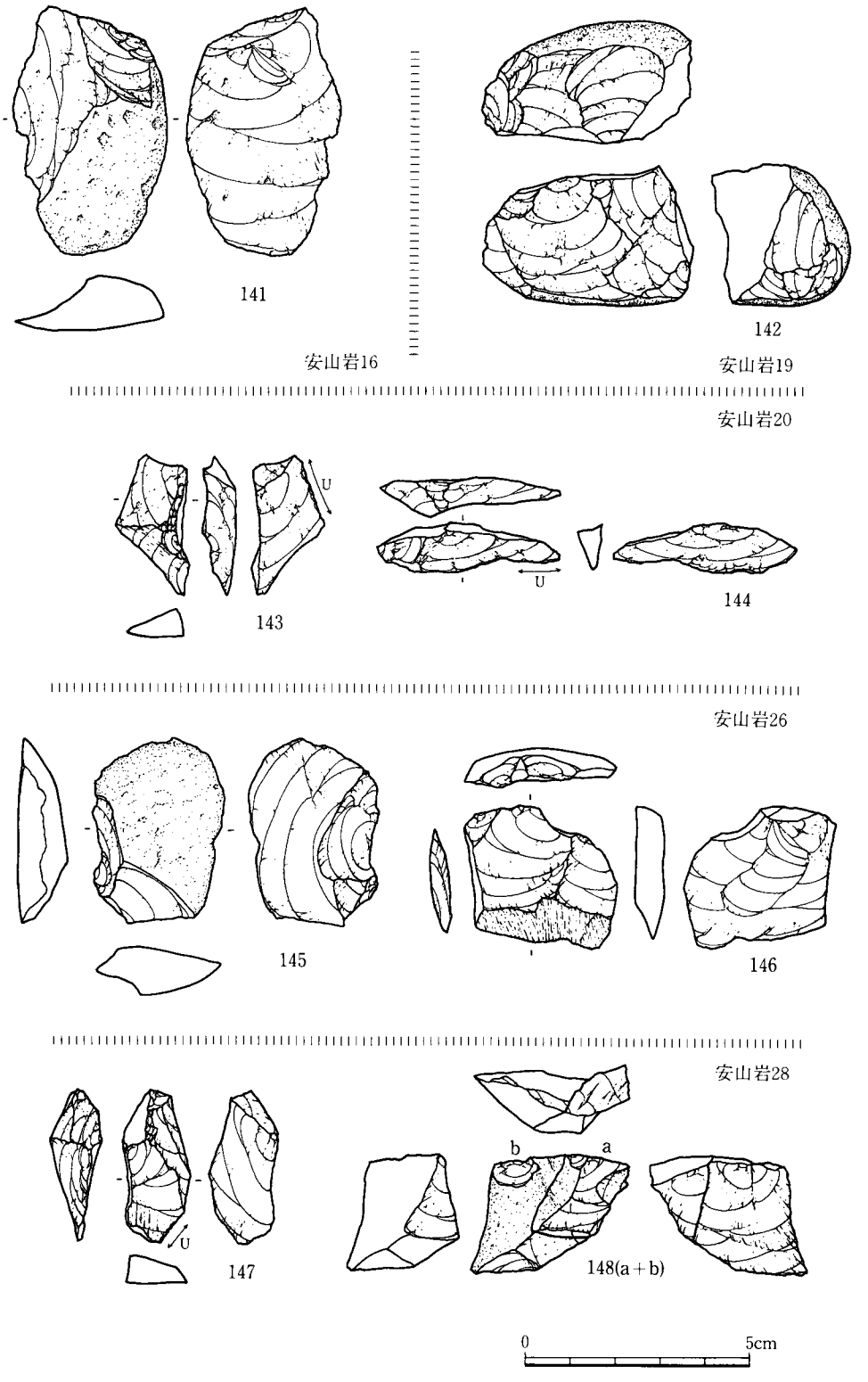
安山岩19（第40図、図版36）　石核1点、剝片1点が出土した。石核(142）は、基本的には打面と作業面を置換しながら剝離作業を行うものである。礫皮面、風化面は暗灰褐色、新鮮な面は黒色。

安山岩20（第40図、図版36）　剝片2点が出土した。ともに使用痕と思われる微細な剝離が観察される。143は不整な形状の剝片で、末端は尖頭状を呈するが、刃こぼれは腹面右側縁の上寄りに見られる。144は横長の剝片で背面右縁を尖頭部として用いたらしく、微細な刃こぼれを残している。

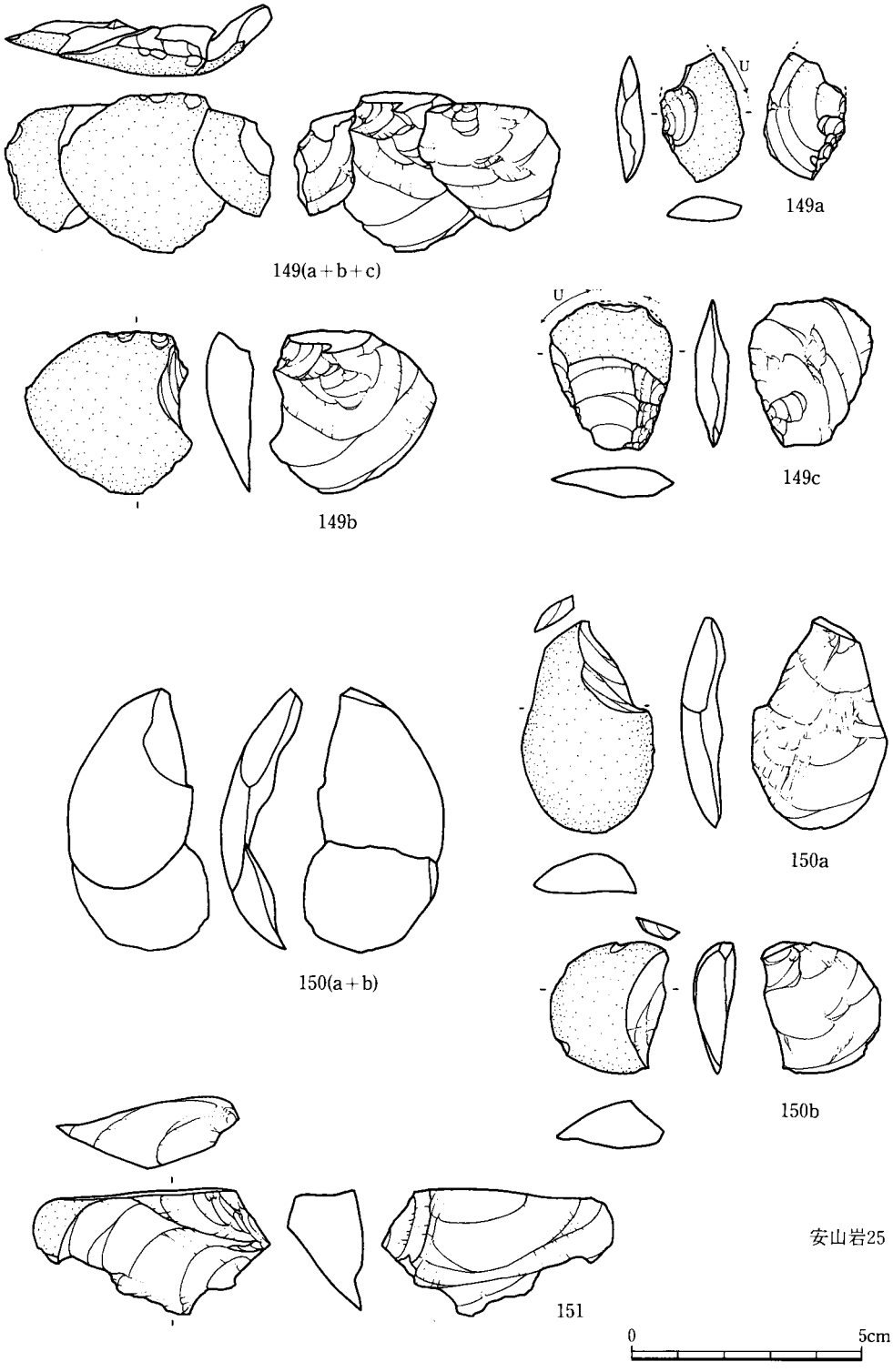
安山岩21～24　それぞれ剝片を1点ずつ遺跡に残すのみである。良質な剝片はない。実測図は掲載しなかった。

安山岩25（第41図、図版37）　良質な安山岩である。149は台形様石器2点と剝片1点の接合資料である。打点を周回させて良好な貝殻状剝片を連続的に得ており、いずれも礫皮面を大きく残す。149aは残念なことに調査時に先端を欠失してしまった。剝片の形状をそのまま利用してあまり鋭くはないが、尖頭部を持った石器であったと思われる。簡単な調整によって打瘤、打面を取り去られている。149cはやはり打面部の背面側に集中的に調整を加えた石器で、刃部は湾曲しているがほぼ水平に位置する。149a、149cともに刃部には使用痕らしき微細な剝離が見られる。

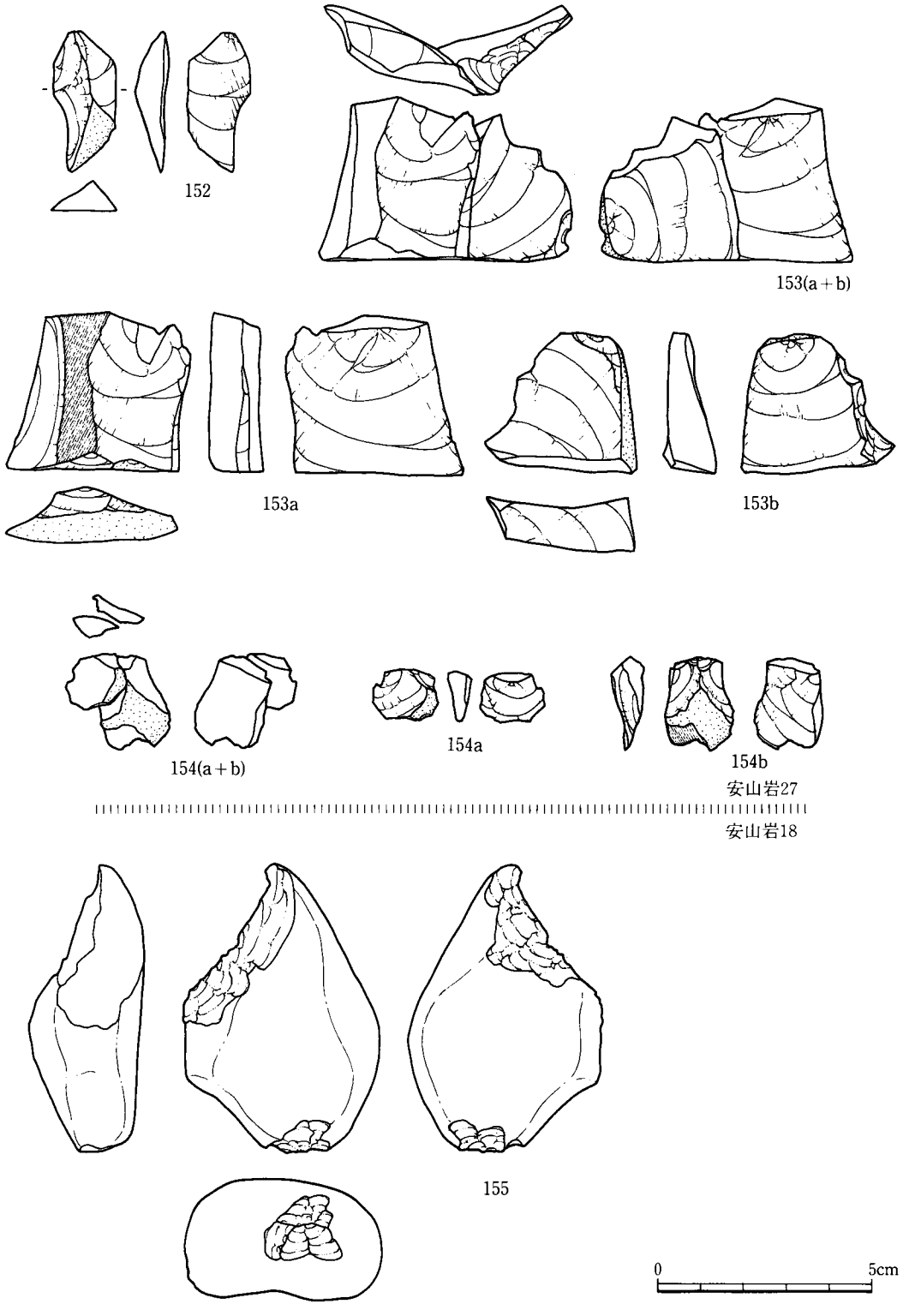
150は剝片2点の接合資料である。やはり149と同じく礫皮面を大きく残し、打点を周回させて剝離作業を行ったものである。151は打点直下に折れ面を持つ剝片である。



第40図　池花南遺跡第1文化層出土石器(26)（2/3）



第41図　池花南遺跡第1文化層出土石器(27)（2/3）



第42図　池花南遺跡第1文化層出土石器(28)（2/3）

149の接合関係はクラスターqとクラスターoの間にある。礫皮面は黄灰色～暗褐色、風化面は灰白色、新鮮な面は黒色～黒褐色。

安山岩26（第40図、図版38）　145は7（珪質頁岩1）と同様の石器で、一応台形様石器としておく。横長剝片を素材とし、比較的大きな剝離で打面、打瘤を潰している。146は剝片で、背面左側縁に折断面が見える。背面構成からは打撃方向を換えず、打点を横位に移動させて剝離作業を行ったことが窺える。安山岩25とよく似た石質であるが、剝片剝離の方法に若干の相異があると言える。安山岩25とともに石核を遺存しない。礫皮面は黄灰色～黒灰色、風化面は黄灰色～灰白色、新鮮な面は黒色～黒褐色。

安山岩27（第42図、図版37）　153は剝片2点の接合資料である。同一方向の剝離を打点移動で繰り返し153aが剝離された後、打面と作業面を置換して数回（2回）の剝離を行い、さらに打面を90°転移させて153bが剝離されている。152は末端が尖頭状を呈する剝片、154は小型の剝片の接合資料である。

良質な安山岩である。剝片ばかりで石核を残していない。概ねクラスターrに集中するが、クラスターoとクラスターpの間に接合関係がある。礫皮面は黒褐色、節理面は褐色～灰色、風化面は灰色、新鮮な面は黒色。

安山岩28（第40図、図版38）　147は末端の一部に微細な刃こぼれが見られる剝片。148は剝片2点の接合資料である。90°の打面転移が窺われる。礫皮面は灰色～黒褐色、風化面は緑灰色、新鮮な面は黒色。

安山岩29（第43図、図版38）　石核と剝片計4点が全点接合する（156）。拳大の礫を素材としており、打面と作業面を入れ換えながら剝離作業を繰り返していくものである。礫皮面、風化面とも暗灰色、新鮮な面は黒色。

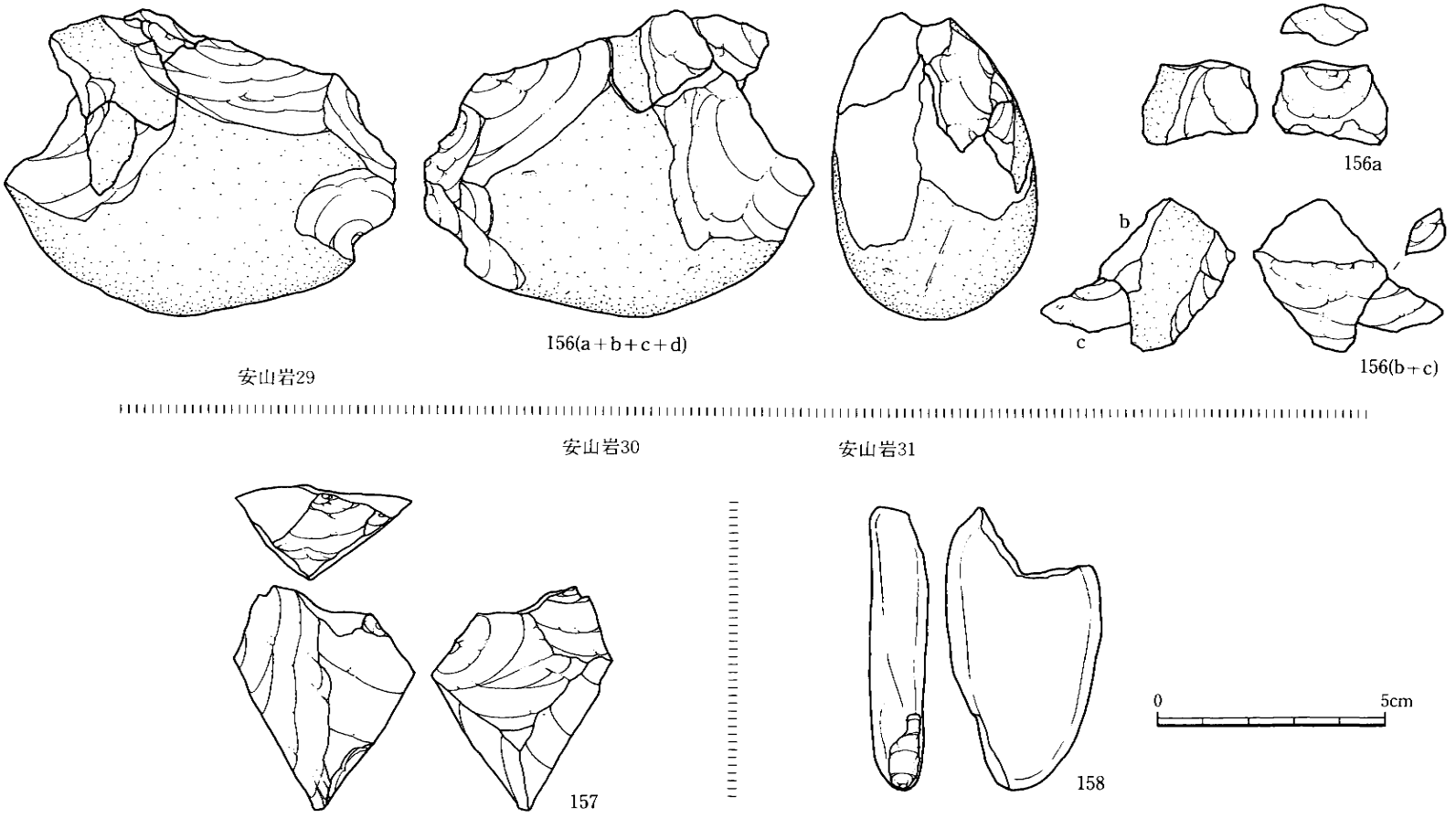
安山岩30（第43図、図版38）　157は剝片素材の石核であるが、主要剝離面はよく解らない。やはり打面と作業面の置換による剝離痕が観察される。風化が著しい。やや褐色を帯びた灰色。

安山岩31（第43図、図版38）　敲石1点のみ（158）である。下端に若干の潰れと打撃によると思われる剝離痕がある。青みを帯びた灰色。

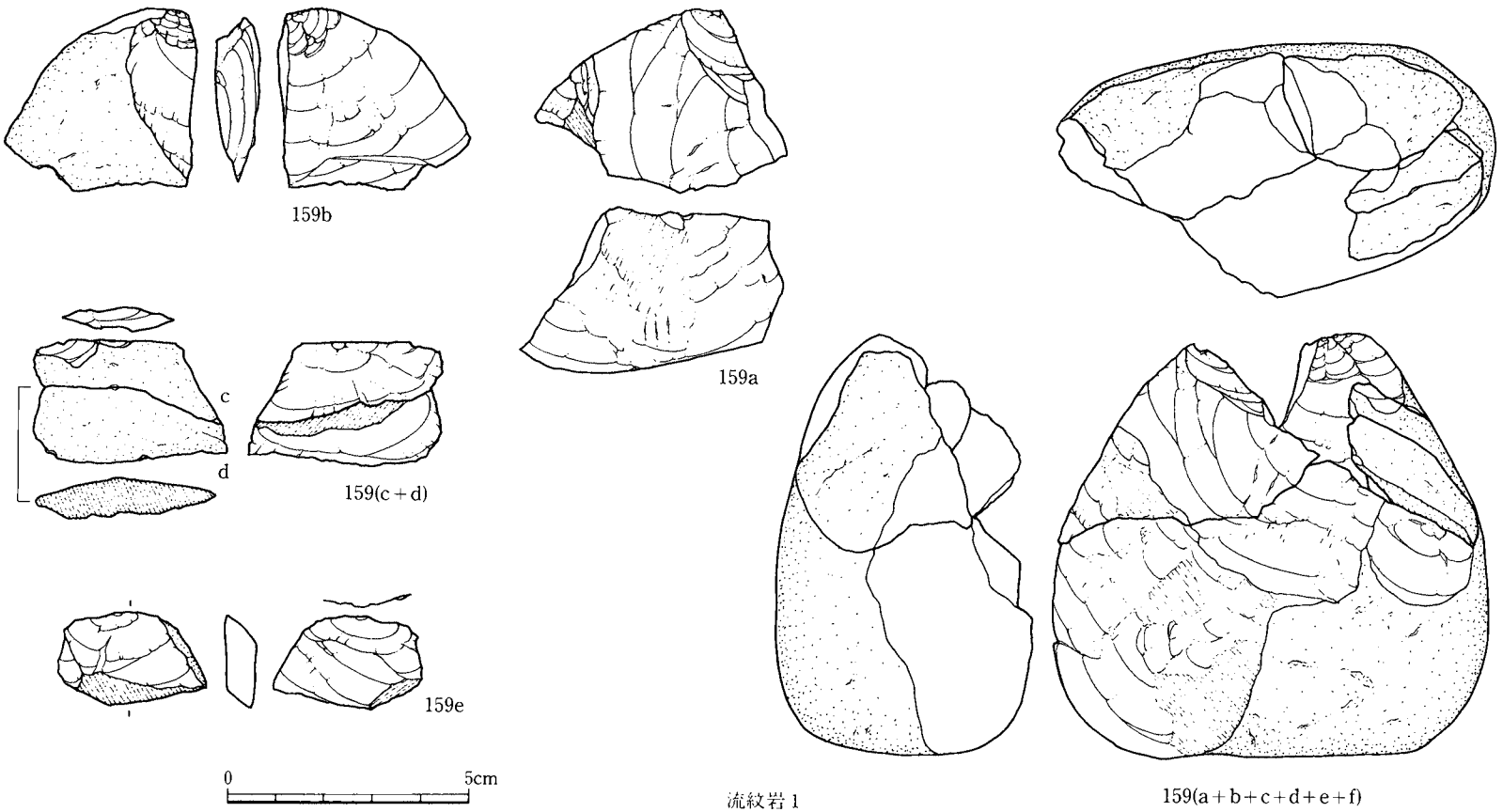
安山岩32　剝片1点のみである。実測図は掲載しなかった。

流紋岩1（第44図、図版39）　石核1点と剝片、砕片7点が出土したが、剝片4点と石核が接合した（159）。拳大の礫を素材としている。159bの剝離痕を打面として159（c＋d）、159eが剝離されており、この例も同種の楕円礫素材の石核に共通する打面作業面置換型の剝片剝離と言うことができる。最後に剝離されたのが159aであるが、これは打面再生剝片と言いうるか。しかしこの後剝離作業は行われていないと思われる。

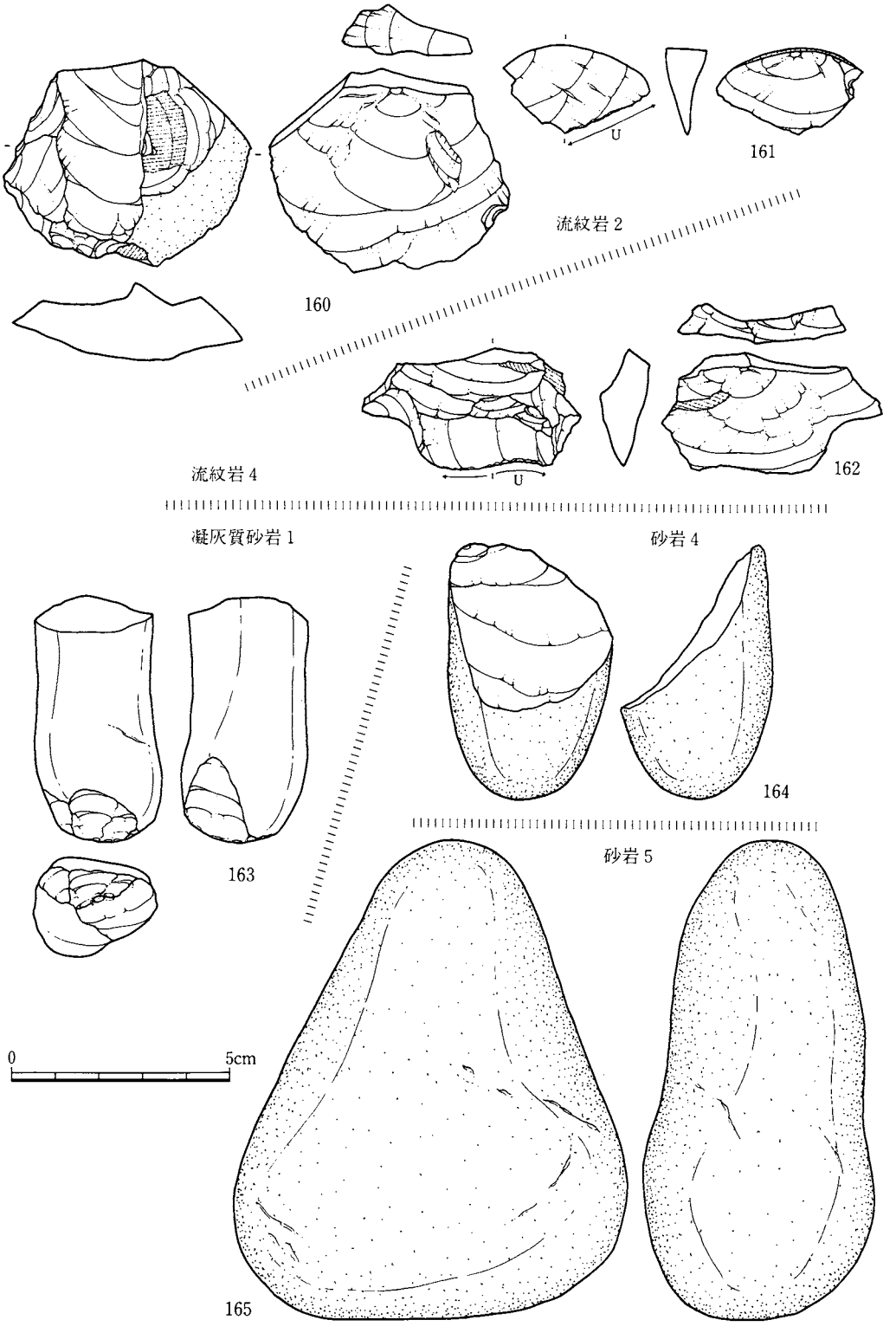
剝片はクラスターcに、石核はクラスターhに存在した。礫皮面は褐色～緑褐色、内部は緑褐色～暗灰緑色。



第43図　池花南遺跡第１文化層出土石器(29)（2/3）



第44図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器(30)（2/3）



第45図　池花南遺跡第 1 文化層出土石器 (31) (2/3)

流紋岩 2（第45図、図版39）　剝片ばかり遺存する個体である。160は大型の剝片で背面左側縁に二次加工が見られ、削器としての機能を想定することができる。161は礫皮面を打面とする横長剝片であるが、直線的な下縁を刃部として使用した刃こぼれが顕著に認められる。尖頭器と考えることができる。礫皮面は明褐色、内部は暗灰色～黒灰色。

流紋岩 3　細かい剝片ばかり遺存する個体である。実測図は掲載しなかった。

流紋岩 4（第45図、図版39）　剝片 1 点のみ(162）である。横長の剝片で下縁に微細な刃こぼれが観察される。緑灰色。

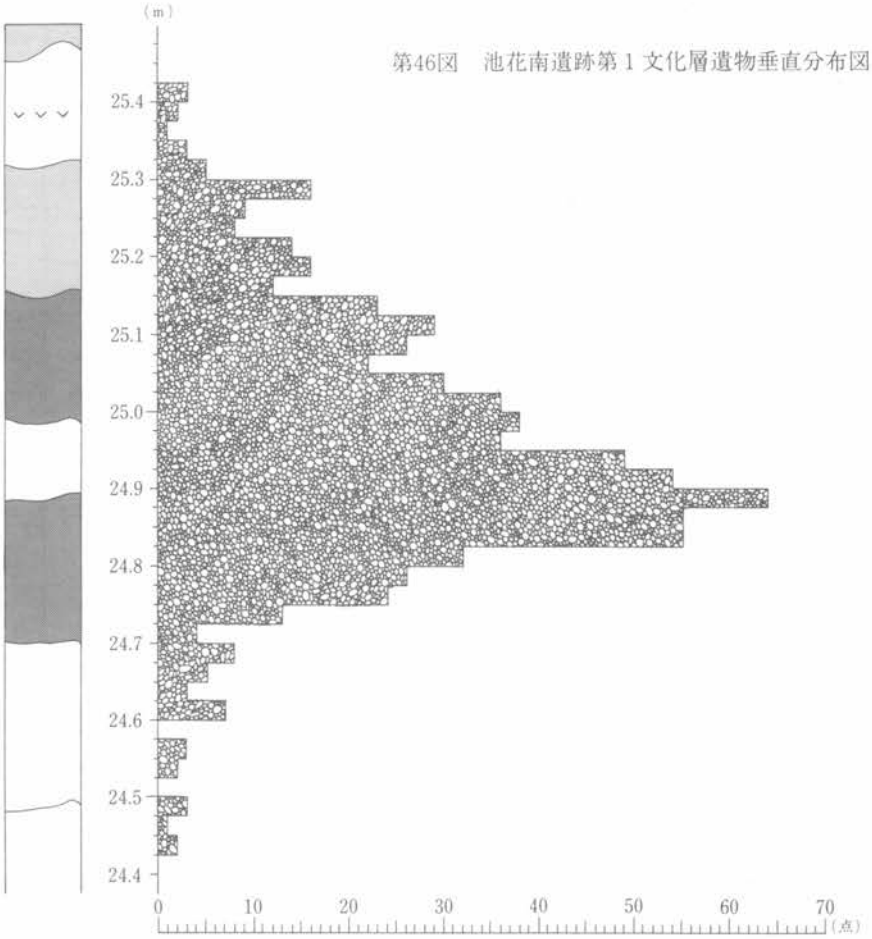
流紋岩 5 ～ 6　ともに剝片 1 点ずつを残すのみであった。実測図は掲載しなかった。

凝灰質砂岩 1（第45図、図版29）　敲石である(163)。上端は折損しており、下端には打撃による潰れと剝離が残されている。淡緑褐色。

砂岩 1 ～ 3　剝片が 1 点～数点出土したのみである。実測図は掲載しなかった。

砂岩 4（第45図、図版29）　一応石核としたが、164が 1 点出土したのみである。緑灰色。

砂岩 5（第45図、図版29）　略三角形状の礫である(165)。敲打他使用痕などは一切認められない。暗灰褐色。



第46図　池花南遺跡第 1 文化層遺物垂直分布図

第6表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表 (1)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角 調整角	欠損	使用痕
1	台形様石器	G5-68-33	珪質頁岩	1	28.3	17.8	7.5	2.81	36°	−	−
2	台形様石器	H5-50-3	珪質頁岩	1	26.0	16.1	7.6	2.53	38°	−	−
3	台形様石器	H5-81-36	珪質頁岩	1	22.3	17.8	6.0	2.00	30°	−	−
4	台形様石器	H5-90-17	珪質頁岩	1	30.0	22.4	5.7	2.81	34°	−	○
5	台形様石器	H5-51-4	珪質頁岩	1	29.8	19.2	5.1	2.41	38°	−	○
6	台形様石器	H5-80-11	珪質頁岩	1	33.3	17.8	7.4	4.04	26°	−	○
7	台形様石器	H5-70-35 H5-70-38	珪質頁岩	1	48.9	35.0	14.8	26.71	44°	−	−
8	楔形石器	G5-57-40	珪質頁岩	1	23.7	20.4	8.4	2.82	−	−	−
9	二次加工剥片	G5-68-49	珪質頁岩	1	21.6	13.7	6.1	1.29	50°	−	−
10	使用痕剥片	G5-67-106	珪質頁岩	1	33.3	27.0	7.7	5.84	−	−	○
11	使用痕剥片	G5-87-3	珪質頁岩	1	31.5	40.7	11.4	11.56	−	−	○
12	使用痕剥片	H5-81-21	珪質頁岩	1	51.1	37.6	17.0	23.32	−	−	○
13	剥片	H5-72-4	珪質頁岩	1	13.5	25.2	4.3	1.42	−	−	−
14	石核	H5-51-5	珪質頁岩	1	31.6	46.5	21.7	31.97	−	−	−
15	石核	H5-51-8	珪質頁岩	1	38.6	50.1	29.1	54.63	−	−	−
16	台形様石器	H5-51-2	珪質頁岩	2	31.7	16.8	7.4	3.06	32°	−	○
17	台形様石器	G5-67-58	珪質頁岩	2	31.0	15.1	10.8	2.97	60°	−	−
18	台形様石器	G5-67-43	珪質頁岩	2	32.0	15.8	4.8	1.92	22°	−	−
19	台形様石器	G5-69-57	珪質頁岩	2	32.6	16.8	7.2	3.58	40°	−	−
20	台形様石器	H5-51-7	珪質頁岩	2	31.0	20.6	7.5	3.94	36°	−	−
21	台形様石器	H5-51-23	珪質頁岩	2	25.5	19.7	9.5	3.14	38°	−	−
22	削器	H5-71-45	珪質頁岩	2	29.3	27.2	10.5	6.83	64°	−	−
23	使用痕剥片	H5-50-27	珪質頁岩	2	39.7	40.8	18.7	18.25	−	−	○
24	使用痕剥片	G5-69-34	珪質頁岩	2	25.5	20.7	7.9	2.60	−	−	○
25	使用痕剥片	G5-49-21	珪質頁岩	2	25.4	28.1	7.6	3.70	−	−	○
26	石核	H5-70-31	珪質頁岩	2	24.3	25.8	16.7	7.99	−	−	−
27a	石核	G5-68-46	珪質頁岩	2	28.4	41.5	18.0	18.54	−	−	−
27b	剥片	G5-67-99	珪質頁岩	2	22.1	30.3	13.4	8.31	−	−	−
27c	剥片	G5-67-113	珪質頁岩	2	26.1	50.7	16.5	14.01	−	−	−
28a	剥片	G5-67-93	珪質頁岩	2	54.2	47.3	28.2	66.04	−	−	−
28b	石核	G5-67-94	珪質頁岩	2	41.2	55.6	34.6	85.14	−	−	−
28c	剥片	G5-67-60	珪質頁岩	2	31.3	21.1	17.3	10.57	−	−	−
29	二次加工剥片	H5-50-8	珪質頁岩	3	24.0	46.8	14.1	16.28	60°	−	○
30	使用痕剥片	H5-70-36	珪質頁岩	3	28.7	38.7	10.4	8.71	−	−	○
31a	石核	G5-58-68	珪質頁岩	3	24.9	31.8	14.1	9.04	−	−	−
31b	石核	G5-59-37	珪質頁岩	3	39.5	29.5	18.3	20.19	−	−	−
32a	石核	H5-50-11	珪質頁岩	3	17.2	21.3	14.8	3.48	−	−	−
32b	石核	G5-59-38	珪質頁岩	3	26.4	40.1	24.5	26.93	−	−	−
33	ナイフ形石器	G5-87-29	珪質頁岩	4	30.8	14.3	6.8	2.21	76°	−	−
34	台形様石器	G5-87-20	珪質頁岩	4	35.0	20.9	9.5	4.88	52°	−	−
35	使用痕剥片	H5-70-32	珪質頁岩	4	17.5	29.4	7.8	3.04	−	−	○
36	使用痕剥片	H5-60-6	珪質頁岩	4	27.7	18.9	5.5	3.15	−	−	○
37a	使用痕剥片	H5-80-30	珪質頁岩	4	31.1	15.7	9.7	3.51	−	−	○
37b	使用痕剥片	H5-80-20	珪質頁岩	4	30.8	17.2	7.9	5.43	−	−	○
37c	剥片	H5-80-16	珪質頁岩	4	24.0	34.0	17.0	10.31	−	−	−
38	使用痕剥片	G5-77-120	珪質頁岩	4	11.5	18.2	3.8	0.77	−	−	○

第7表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表 (2)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
39	剥片	G5-87-22	珪質頁岩	4	25.5	22.4	6.9	2.37	−	−	−
40	剥片	G5-87-24	珪質頁岩	4	19.3	27.5	5.2	3.45	−	−	−
41a	剥片	H5-51-53	珪質頁岩	4	36.4	37.1	12.4	14.87	−	−	−
41b	剥片	H5-51-24	珪質頁岩	4	15.8	31.3	6.4	2.68	−	−	−
42	石核	G5-87-19	珪質頁岩	4	31.4	42.5	13.0	16.92	−	−	−
43a	剥片	H5-62-22	珪質頁岩	5	30.8	38.5	17.0	20.21	−	−	−
43b	剥片	H5-62-25	珪質頁岩	5	23.6	20.7	7.8	3.06	−	−	−
43c	剥片	H5-62-23	珪質頁岩	5	21.8	35.4	7.7	5.58	−	−	−
43d	剥片	G5-49-20	珪質頁岩	5	27.7	22.9	9.5	5.68	−	−	−
43e	剥片	H5-62-26	珪質頁岩	5	18.5	24.4	7.0	1.85	−	−	−
43f	石核	H5-62-24	珪質頁岩	5	33.4	54.9	24.2	49.26	−	−	−
44a	二次加工剥片	G5-76-7	珪質頁岩	6	31.3	41.7	12.5	12.98	86°	−	−
44b	石核	G5-77-108	珪質頁岩	6	54.7	62.6	32.6	116.26	−	−	−
45a	石核	G5-79-33	珪質頁岩	6	19.8	43.5	12.5	8.79	−	−	−
45b	剥片	G5-79-23	珪質頁岩	6	24.2	35.8	18.5	10.10	−	−	−
46	剥片	G5-77-100	珪質頁岩	7	34.5	34.7	11.3	14.86	−	−	−
47a	剥片	G5-77-99	珪質頁岩	7	24.6	15.1	7.1	2.21	−	−	−
47b	剥片	G5-77-122	珪質頁岩	7	22.8	18.9	7.0	3.11	−	−	−
48	二次加工剥片	G5-69-32	珪質頁岩	8	30.0	22.1	11.5	5.98	46°	−	−
49a	剥片	G5-98-1	珪質頁岩	19	19.2	13.5	8.2	1.25	−	−	−
49b	使用痕剥片	G5-98-2	珪質頁岩	19	39.8	46.4	11.2	13.81	−	−	○
50a	剥片	H5-90-14	珪質頁岩	20	35.1	24.8	11.9	7.41	−	−	−
50b	剥片	H5-90-9	珪質頁岩	20	26.1	18.8	10.0	3.21	−	−	−
50c	石核	H5-70-33	珪質頁岩	20	33.6	31.0	17.5	24.36	−	−	−
51	石核	H5-62-34	珪質頁岩	21	31.0	44.6	17.3	15.66	−	−	−
52	使用痕剥片	G5-57-26	珪質頁岩	22	26.1	32.4	6.5	4.37	−	−	○
53	使用痕剥片	G5-57-56	珪質頁岩	22	42.7	45.3	9.8	15.37	−	−	○
54a	砕片	G5-98-40	珪質頁岩	22	14.6	18.0	3.3	0.79	−	−	−
54b	二次加工剥片	G5-98-24	珪質頁岩	22	25.1	63.7	6.4	7.91	−	−	−
55	削器	H5-72-10	珪質頁岩	23	37.8	45.5	8.9	10.33	28°	−	−
56	台形様石器	G5-98-20	珪質凝灰岩	1	24.5	14.2	4.4	1.40	36°	−	−
57	二次加工剥片	G5-87-7	珪質凝灰岩	1	21.9	29.5	6.6	3.95	80°	−	○
58	二次加工剥片	G5-98-32	珪質凝灰岩	1	20.9	28.6	5.9	3.37	58°	−	−
59	二次加工剥片	G5-49-7	珪質凝灰岩	1	26.6	27.0	7.1	3.44	88°	−	−
60a	切断剥片	G5-77-104	珪質凝灰岩	1	29.5	32.0	12.3	8.36	−	−	−
60b	切断剥片	G5-77-106	珪質凝灰岩	1	32.0	25.4	10.0	5.95	−	−	−
61	台形様石器	H5-80-13	珪質凝灰岩	2	26.1	14.4	5.2	1.48	66°	−	−
62	二次加工剥片	G5-88-9	珪質凝灰岩	3	18.4	14.2	5.0	0.76	−	−	−
63a	剥片	G5-79-31	頁岩	2	34.1	28.9	17.3	18.50	−	−	−
63b	剥片	G5-79-44	頁岩	2	20.0	30.5	12.0	5.46	−	−	−
64	使用痕剥片	G5-58-82	頁岩	3	20.0	20.0	5.9	2.19	−	−	○
65	石核	G5-89-2	頁岩	1	39.2	83.5	40.0	130.20	−	−	−
66	二次加工剥片	G5-58-138	チャート	1	21.6	16.3	6.4	1.88	78°	−	−
67	使用痕剥片	G5-67-79	チャート	1	21.5	37.3	6.8	5.43	−	−	○
68	使用痕剥片	G5-68-30	チャート	2	31.1	22.2	8.3	6.04	−	−	○
69a	剥片	H5-72-2	チャート	2	39.1	28.9	22.0	27.29	−	−	−
69b	石核	H5-72-8	チャート	2	49.8	31.1	25.0	29.12	−	−	−

第8表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表 (3)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
70a	石核	H5-50-23	チャート	3	26.7	41.4	17.7	23.72	–	–	–
70b	石核	H5-50-24	チャート	3	25.4	39.2	20.2	22.16	–	–	–
71	使用痕剥片	H5-40-4	チャート	3	20.1	17.6	7.1	2.73	–	–	○
72a	剥片	H5-62-32	チャート	4	18.9	28.7	6.6	3.55	–	–	–
72b	台形様石器	H5-62-45	チャート	4	50.5	34.2	10.3	16.81	32°	○	–
73	石核	H5-51-22	チャート	6	76.0	111.9	47.1	445.00	–	–	–
74	台形様石器	H5-41-4	チャート	7	28.4	19.2	8.1	3.15	36°	–	–
75	使用痕剥片	G5-98-23	チャート	9	20.8	26.3	10.1	3.25	–	–	○
76	使用痕剥片	G5-67-70	チャート	10	20.9	21.2	4.9	2.08	–	–	○
77	使用痕剥片	G5-67-62	チャート	11	45.1	26.7	10.9	9.97	–	–	○
78	剥片	H5-41-3	チャート	12	37.8	27.2	7.3	6.14	–	–	–
79	ナイフ形石器	G5-89-3	黒曜石	1	23.3	13.6	6.0	1.80	32°	○	–
80	使用痕剥片	G5-88-3	黒曜石	1	23.7	13.0	9.3	2.06	–	–	○
81	台形様石器	H5-80-22	黒曜石	2	40.3	37.3	9.4	9.65	34°	○	–
82	ナイフ形石器	H5-50-5	黒曜石	3	16.5	13.4	7.3	1.57	52°	○	–
83	ナイフ形石器	H5-50-22	黒曜石	4	23.3	13.8	6.5	1.70	62°	○	–
84	剥片	H5-90-25	瑪瑙	1	24.6	23.0	8.5	4.99	–	–	–
85a	剥片	H5-62-44	瑪瑙	1	21.8	23.3	8.0	3.72	–	–	–
85b	石核	H5-62-42	瑪瑙	1	41.5	55.0	21.2	68.64	–	–	–
86	二次加工剥片	G5-58-124	瑪瑙	2	23.0	20.9	7.7	2.27	66°	–	–
87	折断剥片	G5-67-107	瑪瑙	3	18.6	16.1	5.3	1.45	–	–	–
88	折断剥片	G5-67-54	瑪瑙	3	25.9	20.3	8.9	4.59	–	–	–
89a	剥片	G5-67-46	瑪瑙	3	23.3	38.5	27.9	13.87	–	–	–
89b	石核	G5-67-40	瑪瑙	3	34.4	33.3	13.1	12.13	–	–	–
89c	石核	G5-67-53	瑪瑙	3	28.7	41.8	14.4	15.74	–	–	–
90a	剥片	G5-58-115	瑪瑙	6	27.7	29.2	11.2	8.12	–	–	–
90b	剥片	G5-58-91	瑪瑙	6	24.3	24.1	6.6	3.43	–	–	–
90c	剥片	G5-57-52	瑪瑙	6	36.1	26.2	10.5	8.55	–	–	–
90d	剥片	G5-58-72	瑪瑙	6	25.6	22.4	8.4	3.86	–	–	–
90e	剥片	G5-58-116	瑪瑙	6	27.5	18.5	7.7	4.07	–	–	–
90f	剥片	G5-57-29	瑪瑙	6	29.3	28.5	11.4	7.38	–	–	–
90g	剥片	G5-58-117	瑪瑙	6	25.4	35.6	11.5	8.76	–	–	–
90h	剥片	G5-68-31	瑪瑙	6	20.6	15.9	8.7	2.14	–	–	–
90i	剥片	G5-58-142	瑪瑙	6	18.5	20.7	7.1	2.91	–	–	–
90j	石核	G5-58-70	瑪瑙	6	34.1	24.3	16.3	13.27	–	–	–
90k	石核	G5-58-84	瑪瑙	6	31.1	28.3	16.8	10.95	–	–	–
90l	剥片	G5-57-41	瑪瑙	6	38.9	21.1	14.3	14.22	–	–	–
90m	剥片	G5-58-128b	瑪瑙	6	29.2	17.1	7.7	3.03	–	–	–
90n	剥片	G5-58-108	瑪瑙	6	33.1	21.4	20.8	10.74	–	–	–
90o	剥片	原位置不明	瑪瑙	6	25.4	23.4	8.3	5.60	–	–	–
90p	剥片	G5-58-128a	瑪瑙	6	35.3	16.9	18.3	8.71	–	–	–
90q	剥片	G5-58-129	瑪瑙	6	24.8	36.2	21.9	15.51	–	–	–
91	削器	H5-90-15	粘板岩	1	35.0	24.1	13.0	7.65	58°	–	–
92a	剥片	H5-90-8	粘板岩	1	43.0	28.2	12.0	15.06	–	–	–
92b	剥片	H5-90-22	粘板岩	1	30.2	15.6	9.3	4.36	–	–	–
92c	剥片	H5-90-16	粘板岩	1	31.5	42.5	12.2	14.76	–	–	–

第9表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表 (4)

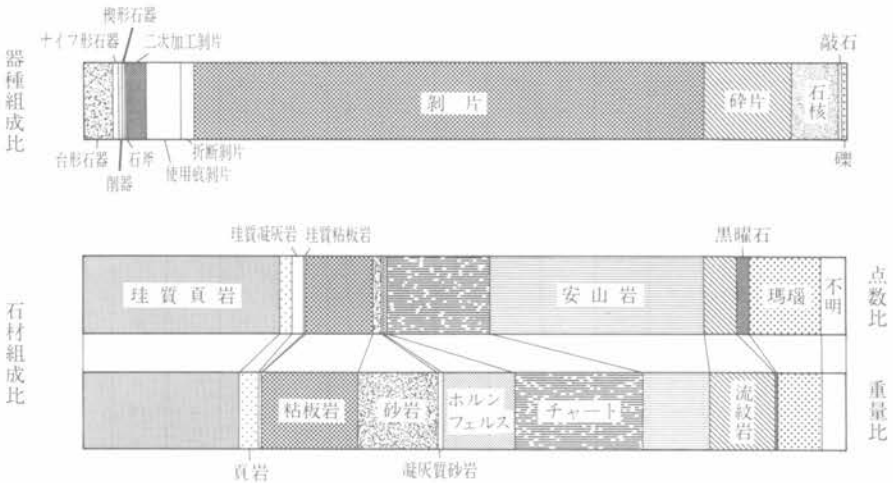
挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
93a	剥片	H5-61-6	粘板岩	1	17.5	22.6	5.4	1.71	—	—	—
93b	剥片	H5-61-5	粘板岩	1	32.7	33.5	7.7	7.04	—	—	—
93c	剥片	H5-51-26	粘板岩	1	37.2	37.3	12.5	15.39	—	—	—
94a	切断剥片	H5-90-19	粘板岩	1	27.1	19.7	8.4	3.73	—	—	—
94b	切断剥片	H5-90-13	粘板岩	1	29.0	21.2	7.7	3.14	—	—	—
95a	剥片	H5-51-35	粘板岩	4	24.9	19.8	8.1	2.36	—	—	—
95b	剥片	H5-51-38	粘板岩	4	31.0	17.3	6.7	3.17	—	—	—
95c	剥片	H5-51-30	粘板岩	4	58.4	35.0	18.0	32.24	—	—	—
95d	石核	H5-51-31	粘板岩	4	90.0	49.8	32.0	132.73	—	—	—
96a	剥片	H5-51-32	粘板岩	4	20.8	26.4	7.4	3.61	—	—	—
96b	剥片	H5-51-3	粘板岩	4	40.7	56.3	16.3	33.67	—	—	—
97a	剥片	H5-51-20	粘板岩	3	25.3	31.9	17.1	9.42	—	—	—
97b	石核	H5-51-55	粘板岩	3	62.5	51.4	33.4	102.48	—	—	—
98a	削器	G5-58-98	粘板岩	5	38.1	35.0	8.0	7.77	64°	—	—
98b	剥片	H5-58-93	粘板岩	5	25.6	15.0	5.2	2.11	—	—	—
98c	石斧	G5-57-38	粘板岩	5	63.7	49.9	21.8	85.14	46°	—	—
99	剥片	G5-57-43	粘板岩	6	17.4	32.7	6.2	3.51	—	○	—
100a	剥片	H5-52-3	粘板岩	6	39.6	31.3	9.5	10.07	—	—	—
100b	剥片	G5-67-114	粘板岩	6	30.7	31.1	18.7	12.46	—	—	—
101a	剥片	G5-67-91	粘板岩	6	28.0	9.5	3.7	1.03	—	—	—
101b	剥片	G5-67-105	粘板岩	6	31.7	20.0	3.6	2.19	—	—	—
102a	石核	H5-80-25	粘板岩	7	63.8	33.5	15.0	34.26	—	—	—
102b	石核	H5-81-14	粘板岩	7	41.4	28.0	16.2	27.08	—	—	—
102c	石核	H5-90-24	粘板岩	7	44.0	54.5	17.5	53.60	—	—	—
103	使用痕剥片	G5-99-3	粘板岩	9	45.5	88.6	10.6	54.00	—	—	○
104	石核	G5-99-10	ホルンフェルス	1	81.0	115.6	50.5	616.00	—	—	—
105	台形様石器	G5-77-85	安山岩	1	35.1	26.6	8.6	5.95	44°	○	—
106	二次加工剥片	H5-62-7	安山岩	1	24.5	19.0	6.2	1.43	—	—	—
107	二次加工剥片	H5-90-20	安山岩	1	22.4	26.3	8.1	3.79	—	—	—
108	折断剥片	H5-51-18	安山岩	1	30.4	24.8	6.9	4.39	—	—	—
109	剥片	G5-67-42	安山岩	2	26.3	35.5	6.4	6.86	—	—	—
110	石核	H5-51-6	安山岩	2	36.3	42.4	40.1	64.66	—	—	—
111	剥片	H5-62-12	安山岩	3	31.5	28.5	8.2	7.14	—	—	—
112	二次加工剥片	G5-57-50	安山岩	4	19.0	11.9	5.6	1.61	78°	○	—
113	二次加工剥片	G5-77-112	安山岩	4	18.6	20.0	7.3	2.24	—	—	—
114	剥片	G5-87-6	安山岩	4	23.1	13.9	8.5	2.18	—	—	—
115	剥片	G5-79-29	安山岩	4	36.0	19.6	5.8	4.38	—	—	—
116a	折断剥片	G5-77-117	安山岩	4	31.0	35.6	11.7	11.97	—	—	—
116b	折断剥片	G5-77-115	安山岩	4	37.2	24.2	9.6	8.65	—	—	—
117a	剥片	G5-58-88	安山岩	4	18.1	16.3	6.2	1.93	—	—	—
117b	石核	G5-58-75	安山岩	4	20.2	39.8	16.0	11.61	—	—	—
118	台形様石器	H5-82-8	安山岩	5	25.1	16.5	5.6	1.91	56°	—	—
119	台形様石器	H5-40-3	安山岩	5	33.8	23.6	5.6	4.93	28°	○	—
120	二次加工剥片	G5-69-64	安山岩	5	19.3	14.6	5.0	1.43	—	—	—
121	折断剥片	H5-50-21	安山岩	5	24.5	31.4	8.5	4.48	—	—	—
122a	剥片	G5-77-121	安山岩	6	17.7	22.7	8.9	2.54	—	—	—
122b	石核	G5-77-123	安山岩	6	26.6	24.8	10.5	6.18	—	—	—

第10表　池花南遺跡第1文化層出土石器計測表 (5)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
123	台形様石器	G5-67-89	安山岩	7	33.4	27.0	7.5	5.77	38°	−	−
124	台形様石器	G5-98-22	安山岩	7	29.9	19.6	7.7	3.75	40°	○	−
125	ナイフ形石器	G5-98-37	安山岩	7	27.8	12.5	6.6	1.84	−	−	−
126	二次加工剥片	G5-98-6	安山岩	7	20.4	22.5	6.2	3.11	−	−	−
127a	二次加工剥片	G5-67-80	安山岩	7	31.0	27.9	8.7	6.20	−	−	−
127b	折断剥片	G5-67-83	安山岩	7	21.0	17.3	9.5	3.44	−	−	−
128	使用痕剥片	G5-59-37	安山岩	8	28.0	34.7	5.1	5.80	−	−	−
129	使用痕剥片	H5-91-2	安山岩	8	61.1	35.0	11.5	23.14	−	−	○
130	石核	H5-90-7	安山岩	8	28.5	57.2	15.5	20.37	−	−	−
131	台形様石器	G5-69-40	安山岩	9	25.4	14.8	7.4	2.27	54°	−	−
132	石核	H5-62-39	安山岩	9	29.4	44.5	20.2	22.33	−	−	−
133	使用痕剥片	H5-51-36	安山岩	10	24.2	23.5	7.4	4.15	−	−	○
134	剥片	H5-51-1	安山岩	10	23.0	21.7	5.0	2.61	−	−	−
135	剥片	H5-51-37	安山岩	10	22.4	24.8	6.6	3.10	−	−	−
136	剥片	H5-51-13	安山岩	10	21.4	37.5	11.4	8.88	−	−	−
137	石核	H5-62-37	安山岩	11	32.6	44.3	17.6	23.03	−	−	−
138	石核	H5-72-6	安山岩	11	25.8	36.0	23.6	31.59	−	−	−
139a	剥片	H5-72-7	安山岩	14	54.2	24.8	15.5	20.58	−	−	−
139b	剥片	H5-82-5	安山岩	14	50.5	26.8	15.9	20.16	−	−	−
140a	使用痕剥片	H5-62-13	安山岩	12	33.8	41.2	7.1	9.05	−	−	○
140b	剥片	H5-62-49	安山岩	12	24.7	41.2	7.4	7.84	−	−	−
140c	剥片	H5-62-14	安山岩	12	21.4	25.8	8.2	4.92	−	−	−
140d	剥片	H5-62-5	安山岩	12	16.6	25.4	5.6	2.33	−	−	−
140e	剥片	H5-62-18	安山岩	12	45.4	44.9	12.5	21.92	−	−	−
140f	二次加工剥片	H5-62-20	安山岩	12	30.9	19.2	6.4	2.64	−	−	○
140g	石核	H5-62-17	安山岩	12	43.1	59.6	21.8	56.29	−	−	−
141	剥片	G5-79-43	安山岩	16	54.8	34.8	12.8	21.99	−	−	−
142	石核	H5-62-43	安山岩	19	34.0	49.0	28.1	54.21	−	−	−
143	使用痕剥片	G5-58-102	安山岩	20	30.6	15.9	7.7	2.72	−	−	−
144	使用痕剥片	G5-79-36	安山岩	20	10.8	41.4	8.0	2.55	−	○	−
145	台形様石器	G5-88-4	安山岩	26	41.3	29.6	11.2	13.02	42°	−	−
146	剥片	G5-98-33	安山岩	26	33.3	33.0	7.2	8.41	−	−	−
147	使用痕剥片	H5-71-42	安山岩	28	32.4	15.9	12.0	4.15	−	−	○
148a	剥片	G5-58-74	安山岩	28	17.4	26.3	7.5	3.25	−	−	−
148b	剥片	G5-58-73	安山岩	28	27.0	25.3	8.1	6.00	−	−	−
149a	台形様石器	G5-49-19	安山岩	25	27.9	17.5	5.5	2.81	42°	○	○
149b	剥片	G5-49-14	安山岩	25	36.6	35.7	10.0	11.15	−	−	−
149c	台形様石器	G5-58-87	安山岩	25	31.7	27.0	7.5	5.67	32°	○	○
150a	剥片	G5-99-4	安山岩	25	45.1	29.1	9.0	11.40	−	−	−
150b	剥片	G5-98-30	安山岩	25	28.3	25.2	9.3	6.11	−	−	−
151	折断剥片	G5-49-22	安山岩	25	29.0	52.3	17.3	16.91	−	−	−
152	剥片	H5-81-37	安山岩	27	33.1	15.0	6.7	2.25	−	−	−
153a	剥片	G5-58-99	安山岩	27	36.3	39.5	11.2	20.56	−	−	−
153b	剥片	G5-58-122	安山岩	27	33.0	32.8	10.8	11.04	−	−	−
154a	剥片	G5-79-32	安山岩	27	11.5	15.1	5.4	0.71	−	−	−
154b	剥片	G5-79-34	安山岩	27	20.9	16.4	6.0	1.78	−	−	−

第11表　池花南遺跡第１文化層出土石器計測表 (6)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
155	敲石	G5-57-37	安山岩	18	66.0	46.0	27.0	86.23	－	－	－
156a	剥片	H5-80-23	安山岩	29	17.9	25.5	9.1	3.80	－	－	－
156b	剥片	H5-80-29	安山岩	29	31.0	21.9	16.0	10.11	－	－	－
156c	剥片	H5-80-26	安山岩	29	21.7	12.9	7.8	1.65	－	－	－
156d	石核	H5-80-24	安山岩	29	59.9	83.7	40.4	225.89	－	－	－
157	石核	H5-82-7	安山岩	30	49.3	36.3	21.1	27.27	－	－	－
158	敲石	H5-62-41	安山岩	31	61.7	33.1	10.6	31.57	－	－	－
159a	剥片	H5-51-46	流紋岩	1	40.9	55.4	30.3	54.10	－	－	－
159b	剥片	H5-52-4	流紋岩	1	37.1	38.7	16.3	23.31	－	－	－
159c	剥片	H5-51-45	流紋岩	1	16.5	39.7	6.5	4.24	－	－	－
159d	剥片	H5-51-47	流紋岩	1	17.0	40.3	9.0	5.46	－	－	－
159e	剥片	H5-51-43	流紋岩	1	19.6	30.7	7.8	4.37	－	－	－
159f	石核	H5-90-6	流紋岩	1	66.1	90.5	51.6	369.00	－	－	－
160	剥片	G5-59-36	流紋岩	2	47.8	56.9	18.2	42.67	72°	－	－
161	使用痕剥片	G5-68-44	流紋岩	2	20.4	33.7	8.4	4.21	－	－	○
162	使用痕剥片	G5-77-90	流紋岩	4	28.4	50.2	9.3	11.94	－	－	○
163	敲石	H5-62-30	凝灰質砂岩	1	56.3	27.5	22.8	45.75	－	－	－
164	石核	H5-62-8	砂岩	4	59.0	37.6	32.5	75.94	－	－	－
165	礫	G5-77-113	砂岩	5	107.5	91.8	53.9	621.00	－	－	－



第47図　池花南遺跡第１文化層出土石器組成

第12表　池花南遺跡第１文化層出土石器組成表(1)

	台形様石器	ナイフ形石器	削器	楔形石器	石斧	二次加工剥片	使用痕剥片	折断剥片	剥片	砕片	石核	敲石	礫	計	総重量g
珪質頁岩 1	6	−	−	1	−	1	4	−	28	2	2	−	−	44	283.76
珪質頁岩 2	6	−	1	−	−	−	3	1	38	1	3	−	−	53	407.00
珪質頁岩 3	−	−	−	−	−	1	1	−	9	−	4	−	−	15	116.48
珪質頁岩 4	1	1	−	−	−	−	5	−	12	3	1	−	−	23	87.36
珪質頁岩 5	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	1	−	−	6	85.64
珪質頁岩 6	−	−	−	−	−	3	−	−	3	−	2	−	−	8	167.18
珪質頁岩 7	−	−	−	−	−	−	−	−	4	1	−	−	−	5	22.14
珪質頁岩 8	−	−	−	−	−	1	−	−	2	1	−	−	−	4	6.92
珪質頁岩 9	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	2	5.62
珪質頁岩 10	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	4.63
珪質頁岩 11	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	1.46
珪質頁岩 12	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	0.28
珪質頁岩 13	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	0.27
珪質頁岩 14	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	3.86
珪質頁岩 15	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	10.82
珪質頁岩 16	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	1.81
珪質頁岩 17	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	1.42
珪質頁岩 18	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	4.88
珪質頁岩 19	−	−	−	−	−	−	1	−	2	−	−	−	−	3	27.10
珪質頁岩 20	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	1	−	−	3	34.98
珪質頁岩 21	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	1	−	−	5	50.36
珪質頁岩 22	−	−	−	−	−	1	2	−	3	3	−	−	−	9	34.78
珪質頁岩 23	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	10.33
珪質凝灰岩 1	1	−	−	−	−	3	−	2	2	1	−	−	−	9	22.26
珪質凝灰岩 2	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1.48
珪質凝灰岩 3	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	0.76
頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	130.20
頁岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	−	−	−	5	32.85
頁岩 3	−	−	−	−	−	−	1	−	4	−	−	−	−	5	14.35
頁岩 4	−	−	−	−	−	−	0	−	1	−	−	−	−	1	2.40
チャート 1	−	−	−	−	−	1	1	−	47	6	−	−	−	55	380.58
チャート 2	−	−	−	−	−	−	1	−	4	−	1	−	−	6	72.55
チャート 3	−	−	−	−	−	−	1	−	6	−	2	−	−	9	75.54
チャート 4	1	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	3	21.40
チャート 5	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	3	3.17
チャート 6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	445.00
チャート 7	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3.15
チャート 8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	5.29
チャート 9	−	−	−	−	−	−	1	−	6	−	−	−	−	7	62.79
チャート 10	−	−	−	−	−	−	1	−	3	1	−	−	−	5	43.45
チャート 11	−	−	−	−	−	−	1	−	2	−	−	−	−	3	16.25
チャート 12	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	6.14
チャート 13	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	3	4.48
チャート 14	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	2	1.40
黒曜石 1	−	1	−	−	−	−	1	−	4	3	−	−	−	9	11.66
黒曜石 2	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	9.65
黒曜石 3	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1.57
黒曜石 4	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1.70

第13表　池花南遺跡第１文化層出土石器組成表(2)

	台形様石器	ナイフ形石器	削器	楔形石器	石斧	二次加工剥片	使用痕剥片	折断剥片	剥片	砕片	石核	敲石	礫	計	総重量g
瑪瑙 1	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	1	−	−	6	82.90
瑪瑙 2	−	−	−	−	−	1	−	−	6	2	−	−	−	9	23.71
瑪瑙 3	−	−	−	−	−	−	−	−	9	1	1	−	−	11	94.72
瑪瑙 4	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	2	4.72
瑪瑙 5	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	3	2.57
瑪瑙 6	−	−	−	−	−	−	−	−	30	8	1	−	−	39	173.75
粘板岩 1	−	−	1	−	−	−	−	2	10	2	−	−	−	15	91.08
粘板岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	5	6	−	−	−	11	34.81
粘板岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	1	−	−	6	153.80
粘板岩 4	−	−	−	−	−	−	−	−	7	−	1	−	−	8	209.96
粘板岩 5	−	−	1	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	3	95.02
粘板岩 6	−	−	−	−	−	−	−	−	14	−	−	−	−	14	78.95
粘板岩 7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	3	114.94
粘板岩 8	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	−	−	4	15.78
粘板岩 9	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	54.00
粘板岩 10	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	0.85
珪質粘板岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	2.49
ホルンフェルス 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	616.00
ホルンフェルス 2	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	3	34.75
安山岩 1	1	−	−	−	−	2	−	1	12	3	−	−	−	19	97.20
安山岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	8	3	1	−	−	12	136.31
安山岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	6	3	−	−	−	9	29.86
安山岩 4	−	−	−	−	−	2	−	3	15	10	1	−	−	31	83.42
安山岩 5	2	−	−	−	−	1	−	1	3	4	−	−	−	11	33.64
安山岩 6	−	−	−	−	−	−	−	1	6	3	1	−	−	11	25.48
安山岩 7	2	1	−	−	−	2	−	1	7	5	−	−	−	18	61.10
安山岩 8	−	−	−	−	−	−	2	−	4	−	−	−	−	6	86.04
安山岩 9	1	−	−	−	−	−	−	−	4	−	1	−	−	6	33.81
安山岩 10	−	−	−	−	−	−	1	−	5	1	−	−	−	7	25.25
安山岩 11	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	2	−	−	5	62.99
安山岩 12	−	−	−	−	−	−	1	1	4	−	1	−	−	7	104.99
安山岩 13	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	2	8.43
安山岩 14	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	3	50.11
安山岩 15	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	7.46
安山岩 16	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	21.99
安山岩 17	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	12.40
安山岩 18	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	86.23
安山岩 19	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	2	69.84
安山岩 20	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	2	5.27
安山岩 21	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	1.66
安山岩 22	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	22.74
安山岩 23	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	15.81
安山岩 24	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	1.30
安山岩 25	2	−	−	−	−	−	−	1	9	−	−	−	−	12	84.86
安山岩 26	1	−	−	−	−	−	−	−	8	1	−	−	−	10	76.88
安山岩 27	−	−	−	−	−	−	−	−	11	−	−	−	−	11	57.34
安山岩 28	1	−	−	−	−	−	1	−	6	2	−	−	−	10	22.80
安山岩 29	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	1	−	−	4	241.45

第14表　池花南遺跡第１文化層出土石器組成表(3)

	台形様石器	ナイフ形石器	削器	楔形石器	石斧	二次加工剥片	使用痕剥片	折断剥片	剥片	砕片	石核	敲石	礫	計	総重量 g
安山岩 30	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	27.27
安山岩 31	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	31.57
安山岩 32	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	1.12
流紋岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	6	1	1	−	−	8	462.52
流紋岩 2	−	−	−	−	−	−	1	−	11	−	−	−	−	12	88.97
流紋岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	9	−	−	−	−	9	12.46
流紋岩 4	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	11.94
流紋岩 5	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	3.63
流紋岩 6	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	1.84
凝灰質砂岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	45.75
砂岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	5.93
砂岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	3	1	−	−	−	4	9.86
砂岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	0.69
砂岩 4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	75.94
砂岩 5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	621.00
石質不明 1	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	2	104.82
石質不明 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	76.02
石質不明 3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	6.59
石質不明 4	−	−	−	−	−	−	1	−	4	−	−	−	−	5	9.66
識別不能	−	−	−	−	−	−	−	−	10	4	−	−	1	15	12.63
珪質頁岩計	13	1	2	1	−	7	17	1	121	12	15	−	−	190	1369.08
珪質凝灰岩計	2	−	−	−	−	4	−	2	2	1	−	−	−	11	24.50
頁岩計	−	−	−	−	−	−	1	−	10	−	1	−	−	12	179.80
チャート計	2	−	−	−	−	1	6	−	78	8	4	−	1	100	1141.19
黒曜石計	1	3	−	−	−	−	1	−	4	3	−	−	−	12	24.58
瑪瑙計	−	−	−	−	−	1	−	−	55	11	3	−	−	70	382.37
粘板岩計	−	−	2	−	1	−	1	2	47	8	5	−	−	66	849.19
珪質粘板岩計	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	2.49
ホルンフェルス計	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	1	−	−	4	650.75
安山岩計	10	1	−	−	−	7	7	9	128	35	10	2	−	209	1626.62
流紋岩計	−	−	−	−	−	−	2	−	28	1	1	−	−	32	581.36
凝灰質砂岩計	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	45.75
砂岩計	−	−	−	−	−	−	−	−	5	1	1	−	1	8	713.42
石質不明計	−	−	−	−	−	−	1	−	7	−	−	−	1	9	197.09
識別不能計	−	−	−	−	−	−	−	−	10	4	−	1	−	15	12.63
総計	28	5	4	1	1	20	36	14	499	84	41	3	4	740	7800.82
百分率	3.8	0.7	0.5	0.1	0.1	2.7	4.9	1.9	67.4	11.4	5.5	0.4	0.5	99.9	

第15表　池花南遺跡第１文化層母岩別資料クラスター別分布(1)

個体番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	接合関係
珪質頁岩 1	2	8(2)	−	1	2	2	6	2	1	1	−	1	−	3	4	1	−	11	r
珪質頁岩 2	1	3	−	1	−	1	−	1	−	1	−	−	1	28(2)	−	2	3	10(1)	m−n n−r n
珪質頁岩 3	10(3)	1	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	2	a−o a
珪質頁岩 4	1	3	−	−	−	−	−	4	−	−	7(1)	2	−	1	1	−	1	3	b h
珪質頁岩 5	−	−	−	5(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	d−q
珪質頁岩 6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1(1)	4	−	−	−	−	3(1)	l−m r
珪質頁岩 7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	4	−	−	−	−	−	−	l
珪質頁岩 8	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	3	
珪質頁岩 9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	
珪質頁岩 10	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	
珪質頁岩 11	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	
珪質頁岩 12	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
珪質頁岩 13	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	
珪質頁岩 14	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	
珪質頁岩 15	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	
珪質頁岩 16	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	
珪質頁岩 17	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
珪質頁岩 18	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	
珪質頁岩 19	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	1	−	−	−	−	−	−	−	j
珪質頁岩 20	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1(1)	h−r
珪質頁岩 21	3	−	−	−	2(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	a
珪質頁岩 22	−	−	−	−	−	−	−	1	−	2	−	−	2	1	3	−	−	−	j
珪質頁岩 23	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
珪質凝灰岩 1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	3	−	1	1	−	−	−	l
珪質凝灰岩 2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
珪質凝灰岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	
頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1(1)	
頁岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	3	r
頁岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	4	−	−	−	
頁岩 4	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
チャート 1	−	−	−	−	−	2	1	−	−	15	6	−	−	3	1 7	−	−	15	j−k−r j n
チャート 2	−	−	−	−	−	2(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	1	f
チャート 3	4(1)	−	−	−	−	−	1	−	−	3	1	−	−	−	−	−	−	−	a
チャート 4	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	e
チャート 5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	−	1	
チャート 6	−	1(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
チャート 7	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
チャート 8	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
チャート 9	1	−	−	−	−	−	2	−	−	1	−	−	−	−	−	3	−	−	
チャート 10	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	1	1	−	−	1	
チャート 11	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	
チャート 12	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
チャート 13	−	−	−	−	−	−	1	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
チャート 14	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
黒曜石 1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	4	−	−	−	−	−	−	1	
黒曜石 2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
黒曜石 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	
黒曜石 4	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	

第16表　池花南遺跡第１文化層母岩別資料クラスター別分布(2)

個体番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	接合関係
瑪瑙 1	−	−	−	−	2(1)	1		1	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	e
瑪瑙 2	−	−	4	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	1	2	−	−	−	
瑪瑙 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	10(1)	−	−	−	1	−	m
瑪瑙 4	−	−	1	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
瑪瑙 5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	1	
瑪瑙 6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	35(1)	2	−	1	o−p
粘板岩 1	−	1	−	−	−	−	−	9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	b−r h
粘板岩 2	−	4	−	−	−	1	−	−	1	−	−	−	4	−	1	−	−	−	
粘板岩 3	−	5(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	b
粘板岩 4	−	8(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	b
粘板岩 5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2	−	−	o−p
粘板岩 6	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3	8	−	1	−	−	c−n n
粘板岩 7	−	−	−	−	−	−	1(1)	1(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	g−h
粘板岩 8	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	
粘板岩 9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	
粘板岩 10	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	
凝質粘板岩 1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
ホルンフェルス 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1(1)	−	−	−	−	−	−	
ホルンフェルス 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	
安山岩 1	−	2	−	3	−	−	1	2	−	1	−	−	1	2	1	−	4	2	g
安山岩 2	−	2(1)	−	−	−	−	4	1	−	−	−	1	3	−	1	−	−	−	
安山岩 3	−	−	−	5	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	
安山岩 4	−	1	−	1	1	2	1	−	−	−	−	7	1	5	7(1)	2	−	3	lno
安山岩 5	2	−	−	−	−	2	−	−	2	−	−	−	−	−	3	1	−	1	
安山岩 6	2	1	−	−	−	2	−	−	−	−	−	5(1)	−	−	−	−	−	1	l
安山岩 7	−	−	−	−	−	−	−	−	1	8	−	1	−	3	5	−	−	−	o
安山岩 8	1	−	−	−	−	−	1	2(1)	1	−	−	−	−	−	−	−	−	2	
安山岩 9	−	−	−	−	2(1)	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	
安山岩 10	−	4	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	2	−	−	−	
安山岩 11	−	−	−	3	1(1)	1(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 12	−	−	−	7(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	d
安山岩 13	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 14	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	f
安山岩 15	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 16	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	
安山岩 17	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 18	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	
安山岩 19	−	−	−	−	2(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 20	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	
安山岩 21	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 22	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 23	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 24	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	
安山岩 25	−	4	−	−	−	−	−	1	−	2	−	−	−	−	1	−	4	−	o−q j
安山岩 26	−	2	−	−	−	−	1	2	−	2	2	−	−	−	−	−	−	1	
安山岩 27	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	3	1	−	6	o−p r
安山岩 28	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	−	4	o
安山岩 29	−	−	−	−	−	−	−	1	3(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	h

第17表　池花南遺跡第１文化層母岩別資料クラスター別分布(3)

個体番号	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	接合関係
安山岩 30	−	−	−	−	−	1(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 31	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
安山岩 32	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	
流紋岩 1	−	−	6	−	−	−	−	1(1)	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	c−h
流紋岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	7	4	−	−	1	−	
流紋岩 3	9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
流紋岩 4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	
流紋岩 5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	
流紋岩 6	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
凝灰質砂岩 1	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
砂岩 1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
砂岩 2	1	2	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
砂岩 3	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
砂岩 4	−	−	−	1(1)	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	
砂岩 5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	

※数字は遺物総点数であるが，括弧内にはそのうちの石核点数を示してある。稀に複数の遺物が接合して１点の石器あるいは石核として把握されることがあるが，異なったクラスター間での接合の場合は本表ではそれぞれの欄に１点ずつ記載されている。接合関係は，クラスター間の接合については“x−y”のように，クラスター内の接合については“z”のように記してある。それは接合点数にかかわりなく，また接合資料の数も略し，接合関係の有無のみを示したものである。

④母岩別資料の分布と遺跡の構成

ここまで主要な母岩別資料についてごく簡単に各クラスターへの分布状況を記してきたが、全資料の分布状況を一覧したのが第15表〜第17表である。表に示した114母岩のうち、量が僅少で単一クラスター内か隣接クラスター内に分布するものも多い。ここではそういったものを除き、まず特徴的な分布を示す母岩について通観してみたい。

珪質頁岩　多量に出土しているのが珪質頁岩１・２である。珪質頁岩１は遺跡全体に散布する傾向があるものの石核を含む集中がクラスターｂにあり、またクラスターｅからｉまで素材剥片が多く分布、クラスターｇにピークがある。台形様石器や楔形石器としてはクラスターｈ及びｏに分布する。珪質頁岩２はクラスターｎとｒに石核を持つが、クラスターｎの集中度が非常に高い。台形様石器はクラスターｂとｒにある。

珪質頁岩４はクラスターａ〜ｂ、ｈ、ｋ〜ｌにやや目立って分布する。石核はクラスターｋにあるが、素材剥片のまとまりがいくつかに分散する点が興味深い。珪質頁岩５は出土した６点がすべて接合した。石核を含めた主体はクラスターｄにあるが、剥片１点がクラスターｑに離れて出土している。珪質頁岩６はクラスターｌ〜ｍ、ｒの双方に石核を持つまとまりが見られた。

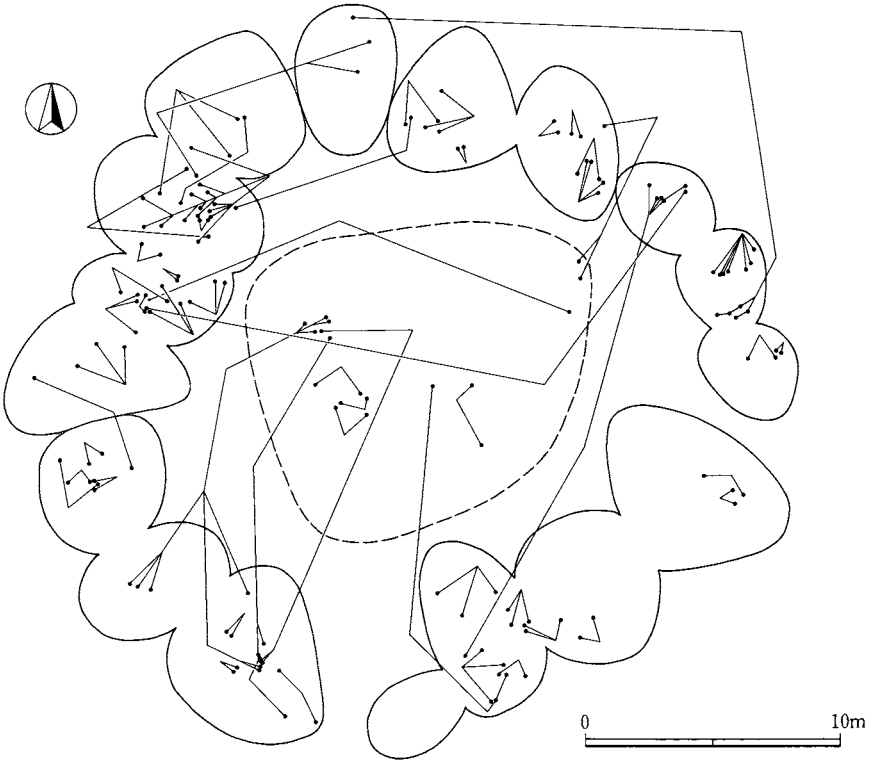
チャート　チャート１の量が他を圧するが、有効な剥片生産が行われておらず砕けてしまった個体である。しかしクラスターｊ〜ｋ、ｎ〜ｏ、ｒの３カ所に集中して豊富な接合関係を持ち、母岩の分割の状況が捉えられる。チャート３は石核を含む集中がクラスターａにあるが、

クラスターｊ～ｋにもややまとまると言える。

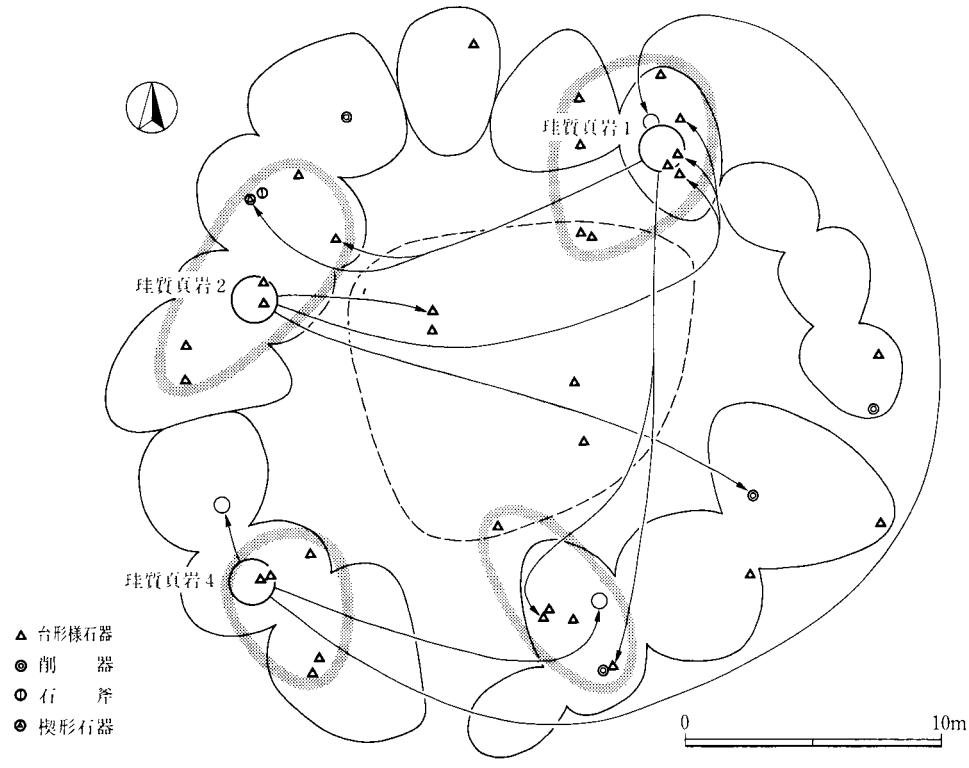
粘板岩　全体的にあまり分散しない点に特徴がある。粘板岩３・４はクラスターｂに集中するが、それらは石斧の作出をめざして未完に終わったと思われるもの。石斧とその再調整剝片（削器に転用）他が接合する粘板岩５はクラスターｏ～ｐに分布する。

安山岩　珪質頁岩ほどではないが、量的に豊富な個体が存在する。安山岩１は極端に分散的であるが、安山岩２はクラスターｂ、ｈ、ｍに少しずつまとまり、石核はクラスターｂに遺存する。点数の多い安山岩４はクラスター１～ｐに広く分布し、中心的なクラスターｏに石核を残すが、クラスターｄ～ｇまでにも比較的少量ながらまとまりがある。クラスターｅ付近には安山岩が多く分布する傾向があり、安山岩９・11・12・19の石核を含むまとまりがある。

当文化層では全体として母岩毎の遺物点数が少なく分布が小さくまとまる例が多いが、広範な分布を示すものでも無秩序に散布するのではないのは明らかである。前記の各個体の例でも、石核を伴った集中が１～２の特定のクラスターに存在し、また剝片のまとまりが離れたクラスターに存在したケースが多い。さらに主体的器種である台形様石器が多く生産されている場合にはそれらはより広い範囲に分布する傾向がある。ここで試みにクラスター毎の石核点数を見てみよう。



第48図　池花南遺跡第１文化層接合関係集成（1/300）



第49図　池花南遺跡第1文化層珪質頁岩1・2・4とその動き（1/300）
（網円内は台形様石器が比較的集中する範囲）

a：4　b：6　c：0　d：3　e：5　f：3　g：1　h：4　i：0
j：0　k：1　l：3　m：1　n：2　o：2　p：0　q：0　r：4

周縁部のクラスターの石核点数には連続的な増減の波が読み取れよう。ここから仮にクラスターa～b(～c)、クラスターd～f、クラスターg～i、クラスターj～l、クラスターm～o（～q）のまとまりが想定できる。このように見ると本来はそれらにクラスターrを加えた6単位のブロックによって遺跡は構成されていたとも考えることができようか。

第49図は、台形様石器を最も多く生産した珪質頁岩のうちでも量的なまとまりのある珪質頁岩1・2・4を任意に選んでそれらの分布を概念化したものである。珪質頁岩1はクラスターbで集中的に消費されていると考えられるが、クラスターgを中心としたところとクラスターn～oに相当数の素材剝片が存在し、また台形様石器等としてはクラスターhとクラスターoに分布する。珪質頁岩2はクラスターnで集中的に消費されているが、3点の台形様石器がクラスターbに分布する他、クラスターf・rにも1点の台形様石器が存在した。また概念図には明示していないが、クラスターrにも分割されてそこでも石器生産を行っている可能性がある。珪質頁岩4はクラスターkで消費されていると考えられるが、クラスターa～b、クラス

ターｈ、クラスターｒにも数点ずつの剝片が移動している。以上のような状況は、母岩の分割及び消費、素材剝片の供給、製品としての台形様石器の供給等がクラスターｂ、クラスターｈ、クラスターｋ、クラスターｎをそれぞれ中心とした地点間で相互依存的に行われていたことを示すものと言えよう。また第49図には台形様石器が比較的集中する範囲を網円で示しておいたが、それが前述の４地点によく合致することは歴然である。

ここに抽出した３母岩の動きは極めて象徴的な現象として見ることができるが、また他の母岩（特に安山岩の多くの個体）ではクラスターｅ周辺で活発な母岩消費が行われている状況がある。ただそこでは他の地点との母岩分割や素材・石器の供給といった関係が明瞭ではない傾向がある。しかしいずれにしても前記の周縁部５単位、中央部１単位の想定の妥当性は首肯されてよいであろう。

⑤石器群の様相

当文化層で出土した石器群の中心的器種は、これまで台形様石器と記述してきた石器であることは言うまでもない。この種の石器は、本書のように台形様石器とされたり○○系ナイフ形石器あるいは○○型ナイフ形石器とされることもあって、必ずしも呼称が統一されていない。しかし多くの場合、その呼称は技術的基盤を念頭において、とくに縦長剝片を素材として急斜な刃潰し加工が施されるナイフ形石器に対置してなされていよう。

当文化層で出土した台形様石器は、総体として見れば素材の供給から調整まで共通の基盤のうえに生産されているが、形態的には、そこに偶然性を加味して見るにしてもきわめて多様であり、すべてが同一の機能を有していたとは考え難い。ここで仮に台形様石器とした石器を形態分類しておきたい。

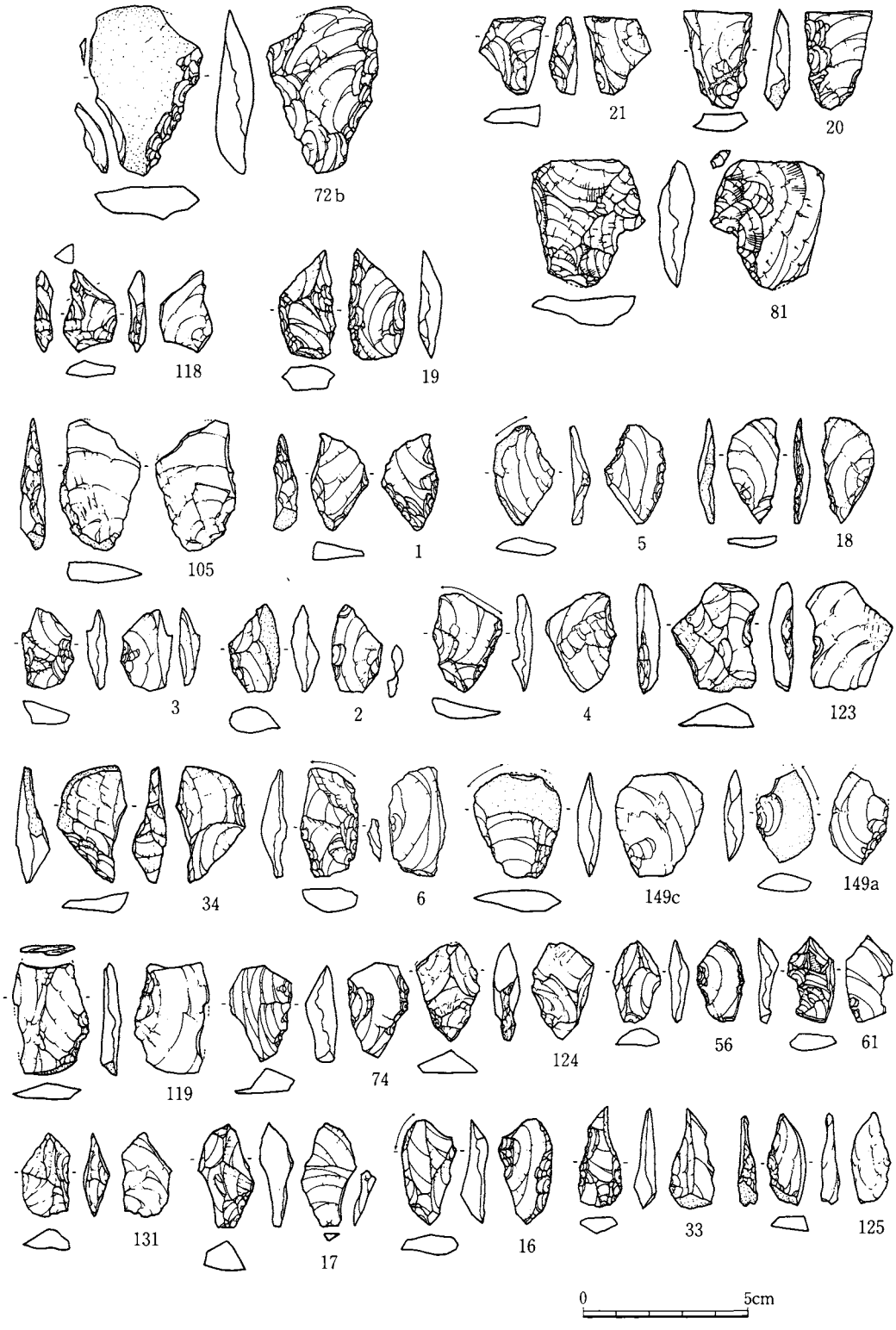
ａ　未加工の刃部がほぼ水平であるもの　……　20、21、72ｂ、81、149ｃなど

ｂ　刃部が側縁に対して傾斜するもの　……　１、２、３、４、５、６、18、19、34、105、123など

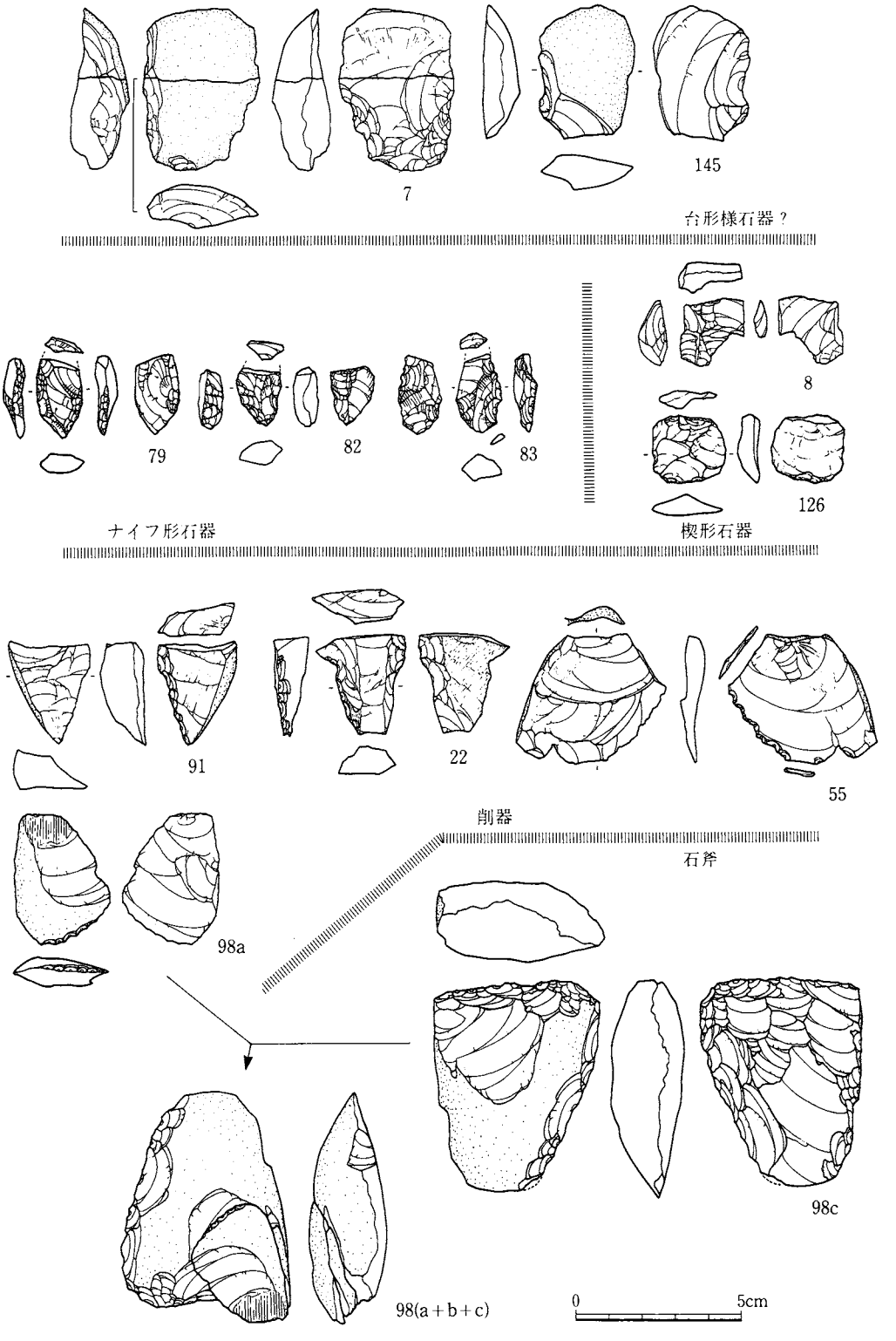
ｃ　鈍い尖頭部を有するもの　……　16、17、56、61、(74)、124、131など

ｄ　側縁の一部を刃部とし鋭い尖頭部を持つもの　……　33、125　……　他の台形様石器と同様に作られるが、本文中ではナイフ形石器とした

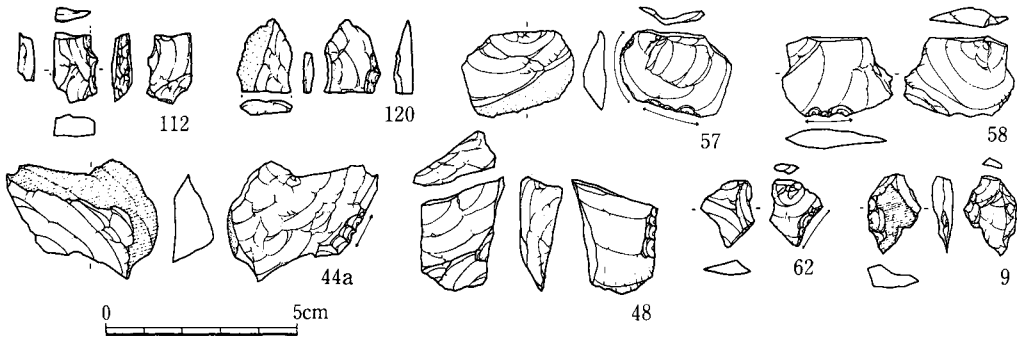
ａ類のうち72ｂは整った撥形を呈し、基部の調整が入念であり、他の石器と区別する必要があるか。また72ｂと149ｃは湾曲した刃部を有する。しかしいずれも刃部は薄く鋭利である。ｂ類は薄く鋭利な刃部を持つものと、19、118のように厚みのあるものがある。仮に前者をｂ１類、後者をｂ２類としておこうか。ｂ２類は断面三角形の尖頭部を形成しているが、それが企図されたものである可能性は濃厚であろう。鈍い尖頭部を持つとしたｃ類も、先端の断面形は厚み



第50図　池花南遺跡第１文化層の台形様石器（1/2）



第51図　池花南遺跡第１文化層のその他の石器(1)（1/2）

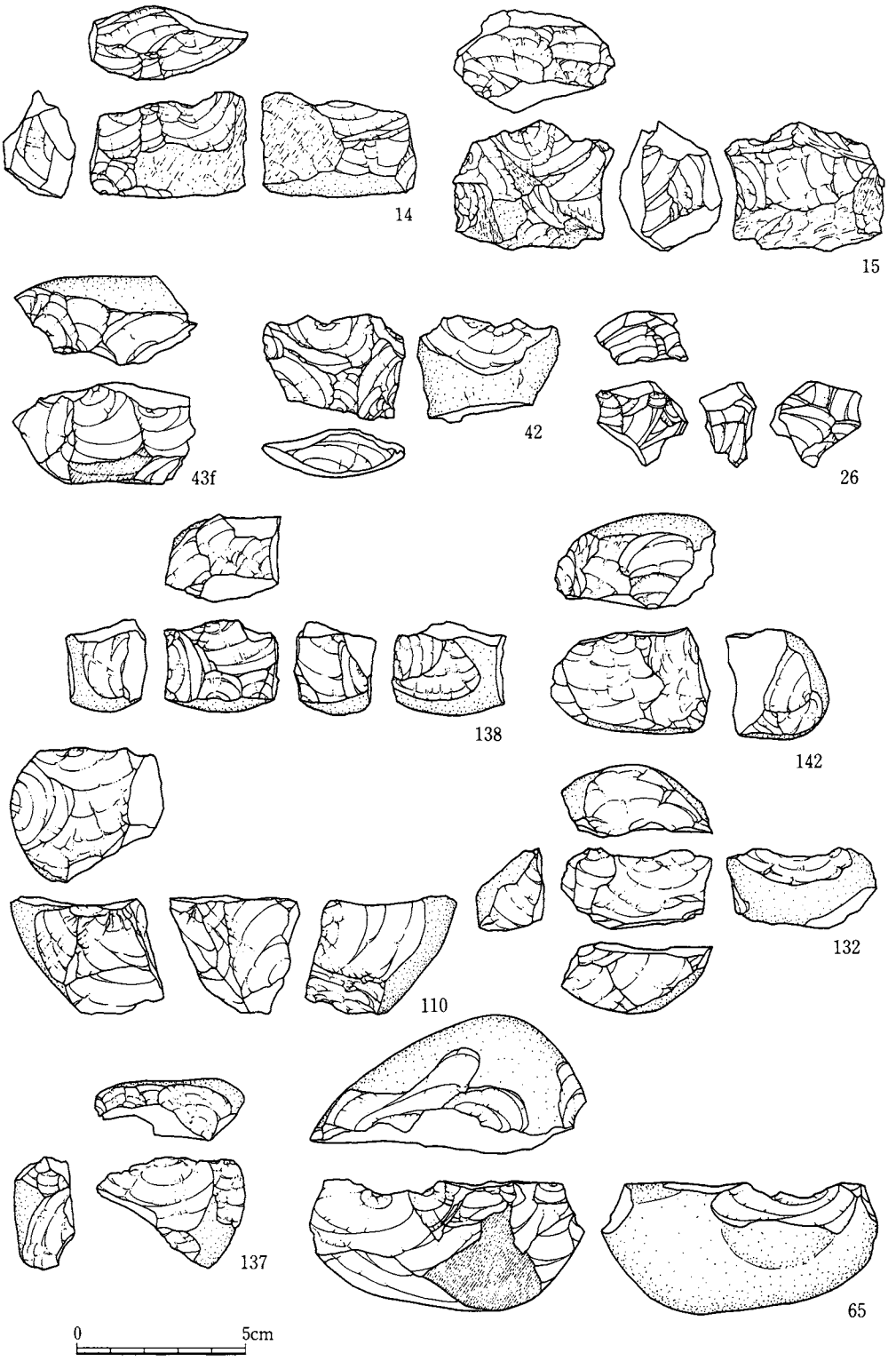


第52図　池花南遺跡第１文化層のその他の石器(2)（1/2）

がありａ類やｂ１類とは異なった性格を想定しなければならない。ｄ類は鋭い尖頭部を持ち、黒曜石製のナイフ形石器、79、82、83に類するものと考えられるだろうか。これらの形態差は台形様石器とした多くの石器が、機能的にはかなりの種に分類でき、それぞれの石器の機能がきわめて限定されたものであるかどうかは措いても、本来的には複数器種を含んでいることは疑問の余地がない。なお、一応台形様石器とした７や145は石核としておくべきかもしれない。

台形様石器以外の石器は量的に豊富ではなく、器種の呼称としては削器、石斧以外ほとんど見るべきものがないが、やはり機能を想定すれば、削器あるいは刃器の他に刺突機能を有すると思われる尖頭部を持つ石器があり、台形様石器（ナイフ形石器）の一部と機能が重複している可能性がある。当文化層出土石器群は、器種の呼称としてはきわめて単純な組成を示しているように見えるが、内実はさほど限定的なものではなかったと言うことができる。しかしながら器種分化はまだ明確ではなく、かなり未発達な段階と言えよう。

第53図に主な石核を集成しておいたが、一見して判るようにそこでは打面と作業面を置換しながら剝片剝離を繰り返す工程が観察される。剝離角が90°に近く、打面と作業面の関係も90°前後のものから、剝離角が小さく打面と作業面が表裏の関係にあるものがあるが、それは石核素材の形状あるいは剝片剝離の進行の度合いによって制約されたものであろう。本来石核は、拳大またはそれよりやや小さい礫または分割礫を素材とするものが多い。



第53図　池花南遺跡第１文化層の主な石核（1/2）

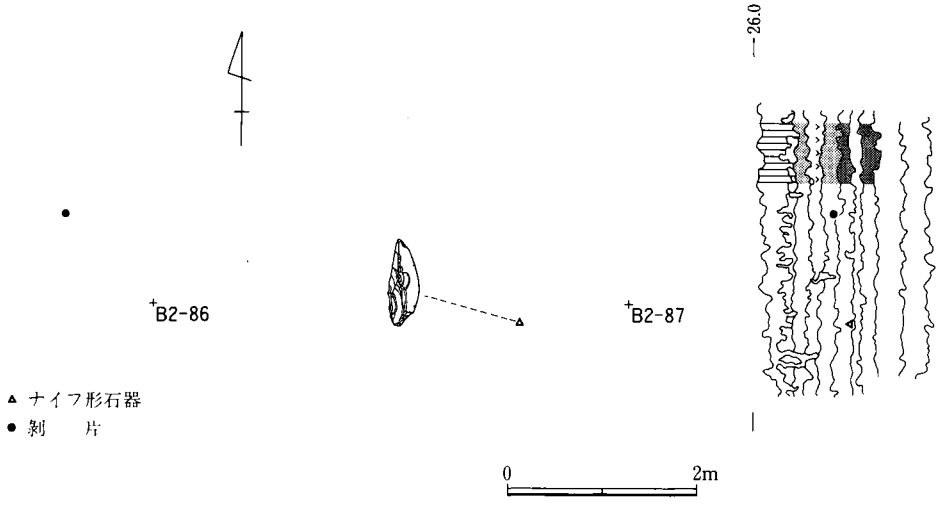
4．大割遺跡第2文化層

①概観

IXa層中に生活面を想定できる文化層を大割遺跡第2文化層とする。小規模なブロックが多いが、ブロックの数では大割遺跡中最も多く、IX_U1～IX_U12ブロックが相当する。主にⅦ層からIXa層より遺物が出土している。IX_U1、IX_U2ブロックを除く殆どのブロックが遺跡東半に集中しているが、それらの中で数個体の黒曜石を少しずつ分有する形で有機的な関係を示すのがIX_U4、5、7、8、9(a,b,c)、10(a,b)の6箇所のブロックである。それらと凝灰岩及び砂岩の共有関係が認められるIX_U11ブロックを加えた7箇所のブロックについては、共通の母岩別資料番号を付した。石器群の特徴としては基本的に石刃をもたず、その半面特徴的な横長剥片製ナイフ形石器が少量含まれるが、位置的には離れたIX_U1ブロックにも一見類似したナイフ形石器が存在した。また一方、IX_U12ブロックは様相の全く異なった台形様石器を出土しており、出土層準も若干上位にあるように思われる。したがって当文化層は厳密にはさらに細分されるものである。第2a文化層、第2b文化層と言えようか。

②IX_U1ブロック

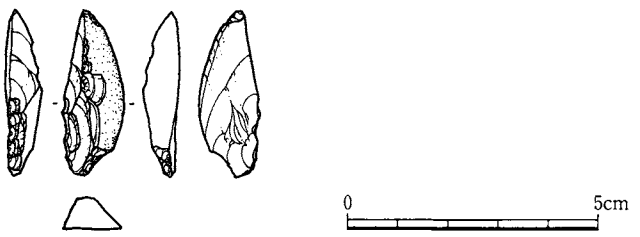
出土状況（第54図、図版2-2）　遺物は2点出土しただけである。珪質頁岩製のナイフ形石器と黒曜石製の剥片で、その間隔はおよそ4.9m。ナイフ形石器がIXa層、剥片がⅦ層から出土した。



第54図　大割遺跡IX_U1ブロック遺物出土状況（1/80）

出土遺物（第55図、図版18）　1はナイフ形石器である。折断面を持つ剥片を素材としているが、打点直下で割れたものであろう。剥片の末端は刃部としてそのまま利用し、打面寄りに

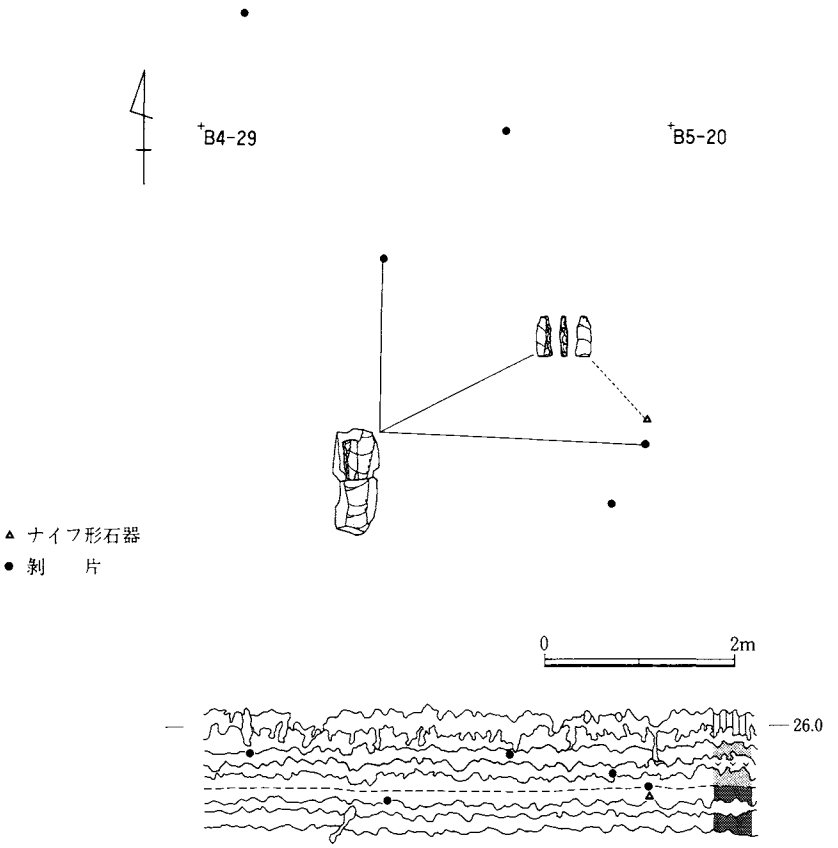
急斜な加工を加えて基部としている。また尖頭部には細かい剥離痕が見られる。剥離痕は刃部背面のみならず腹面の先端にも見られるが、これらは明らかに先端からの加撃によるものであろう。



第55図　大割遺跡Ⅸu1ブロック出土石器（2/3）

第18表　大割遺跡Ⅸu 1 ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	B 2 − 86 − 1	珪質頁岩	33.3	11.4	9.1	2.29	40°	—	○

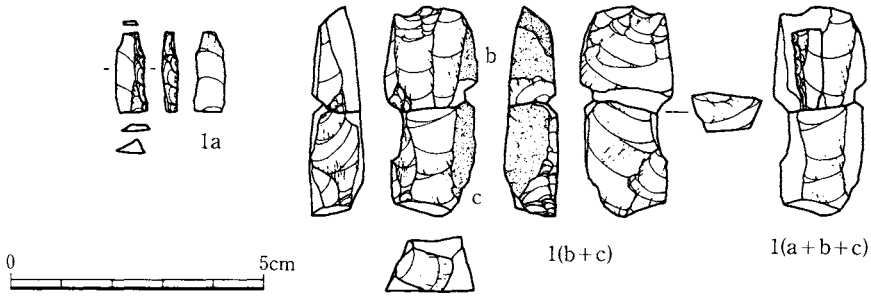


第56図　大割遺跡Ⅸu2ブロック遺物出土状況（1/80）

③IX_U2ブロック

出土状況（第56図、図版2-3）　これも遺物点数計6点の小規模なブロックであり、散漫な分布状態を示していた。遺物は暗灰色の頁岩4点(同一母岩)、黄褐色と暗茶褐色の珪質頁岩1点ずつであるが、頁岩のほうはIXa層～VII層から出土したものの珪質頁岩のほうはかなり浮いて、V層相当のレベルより出土している。したがって珪質頁岩の2点は、このブロックで一括できない可能性も濃厚である。

出土遺物（第57図、図版18）　1aは非常に小型のナイフ形石器の欠損品であるが、先端は元来の形状を留め、鋭利な尖頭部を有していない。一側縁加工である。1aが接合するのが1bであり、本来は1cと接合して1点の剥片であるが、1bと1cが折れた後に1aが剥離されているため、石核とする。



第57図　大割遺跡IX_U2ブロック出土石器（2/3）

第19表　大割遺跡IX_U2ブロック出土石器計測表

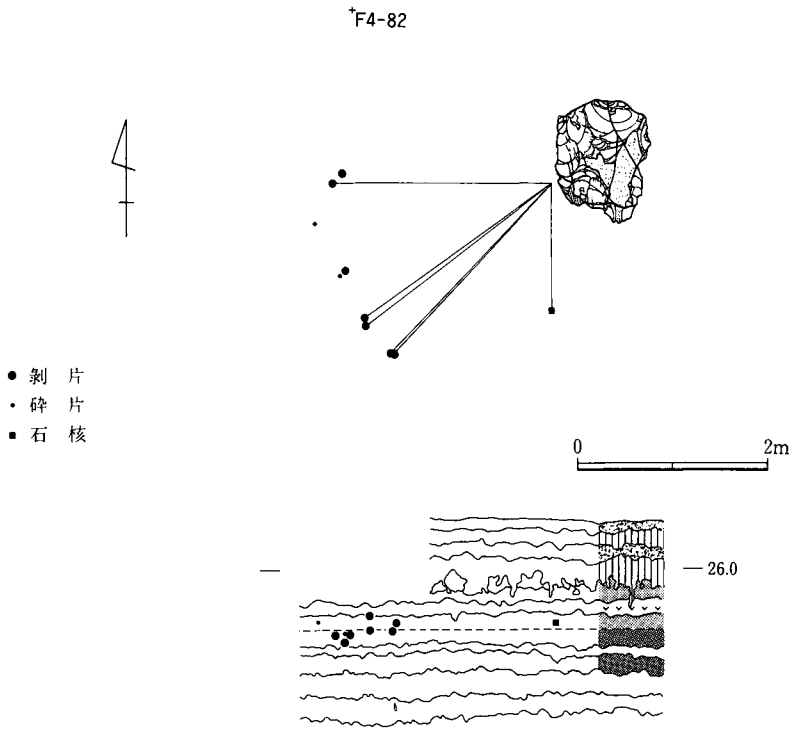
挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	B4－29－6	頁岩	16.0	6.2	3.3	0.29	32°	—	—
2	剥片	B4－29－3・7	頁岩	42.0	19.6	11.8	11.06	—	—	—

第20表　大割遺跡IX_U2ブロック出土石器組成表

	ナイフ形石器	剥片	計	総重量g
頁岩 1	1	3	4	11.75
珪質頁岩 1	—	1	1	0.27
珪質頁岩 2	—	1	1	1.40
合計	1	5	6	13.42

④IX_U3ブロック

出土状況（第58図、図版3-1）　2.5m×2mの狭い範囲に、10点の遺物が分布する小規模なブロックである。産出層準はIXa層～Ⅶ層である。安山岩の砕片と珪質頁岩の剝片が1点ずつ残されているが、他はすべて同一母岩のチャートの石核及び剝片・砕片によって構成されており、うち6点が接合する。

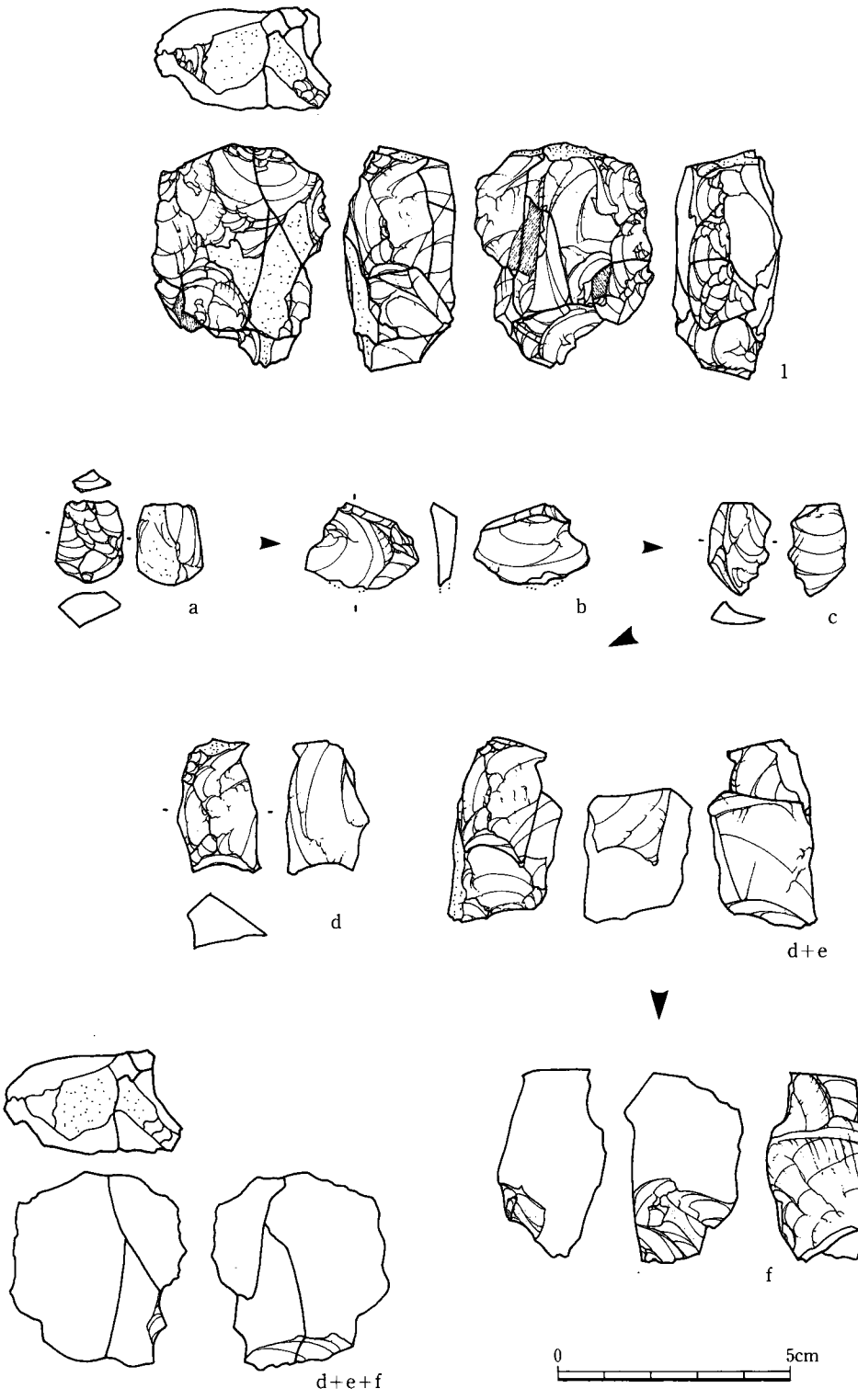


第58図　大割遺跡IX_U3ブロック遺物出土状況（1/80）

出土遺物（第59図、図版18）　接合資料を示す。1a、1b、1cは小型の貝殻状剝片であるが、1aは半ば節理で砕けたものである。1bは節理面を打面として、1cは1bの剝離痕を打面として剝離されたもの。灰黒色～黒色のチャート。

第21表　大割遺跡IX_U3ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損	使用痕
1a	剝片	F4-81-5	チャート	14.0	17.6	6.6	1.79	—	—
1b	剝片	F4-82-4	チャート	13.3	24.8	6.6	2.44	—	—
1c	剝片	F4-81-2	チャート	16.1	13.6	4.5	1.08	—	—
1d	剝片	F4-82-6	チャート	17.4	29.6	13.0	5.48	—	—
1e	剝片	F4-82-7	チャート	22.1	30.5	12.7	8.32	—	—
1f	石核	F4-82-5	チャート	40.2	25.4	21.3	23.92	—	—



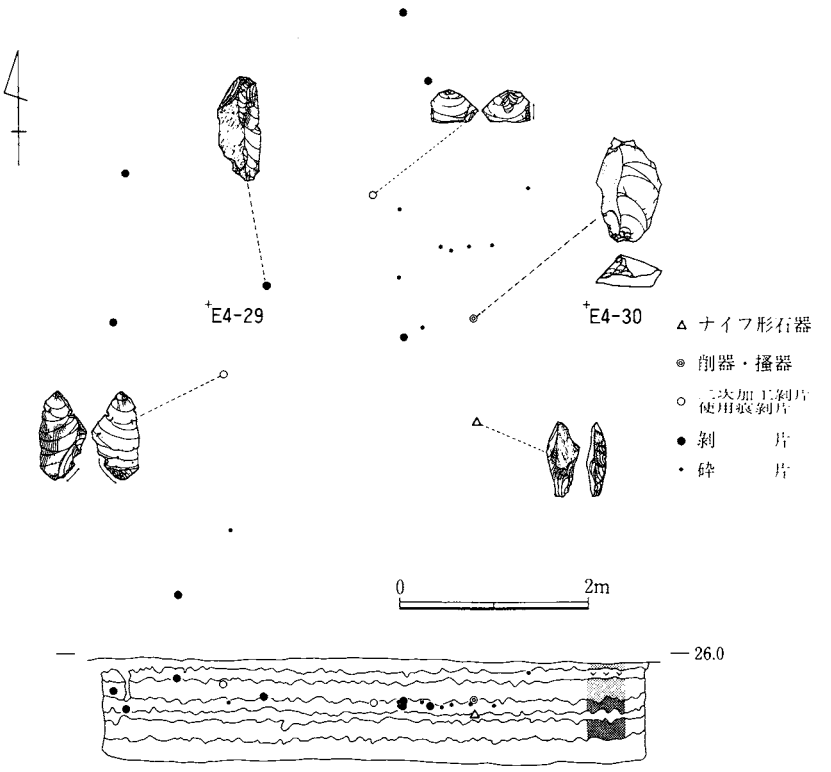
第59図　大割遺跡Ⅸu3ブロック出土石器（2/3）

第22表　大割遺跡 IX_U 3 ブロック出土石器組成表

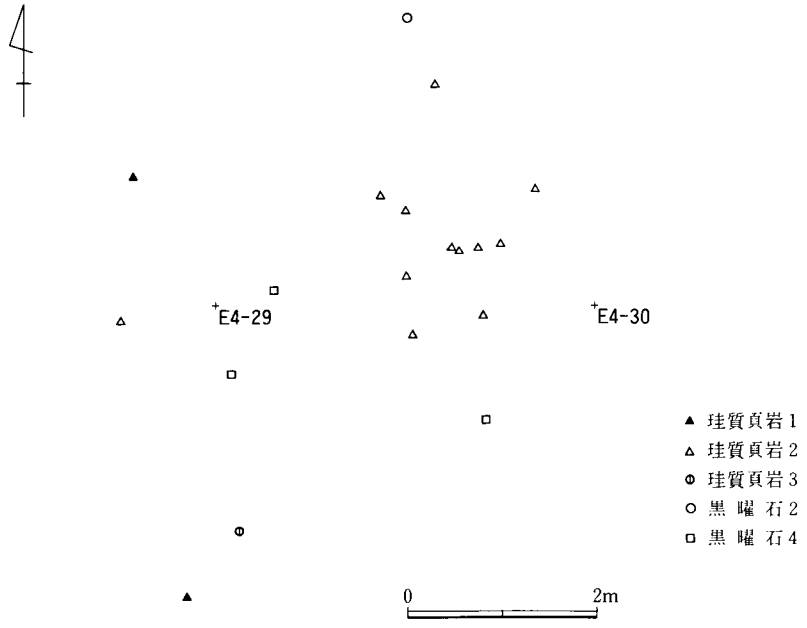
	剥　片	砕　片	石　核	計	総重量g
チャート　1	6	1	1	8	43.38
珪質頁岩　1	1	−	−	1	1.78
安 山 岩　1	−	1	−	1	0.09
合　　計	7	2	1	10	45.25

⑤IX_U4ブロック

出土状況（第60図、第61図、図版３-2）　長径6.5m、短径4.5m の楕円形の範囲に分布していたブロックであるが、分布密度は比較的希薄で全体で19点の遺物を出土したに過ぎない。産出層準は他のブロックとほぼ同じで、IX a 層からⅦ層にかけて出土しており、特にIX a 層に集中している。ブロックの範囲の中では北東よりの部分の集中度が高いが、それらの遺物は特定の個体(珪質頁岩２)に限定され、しかも砕片が多い。



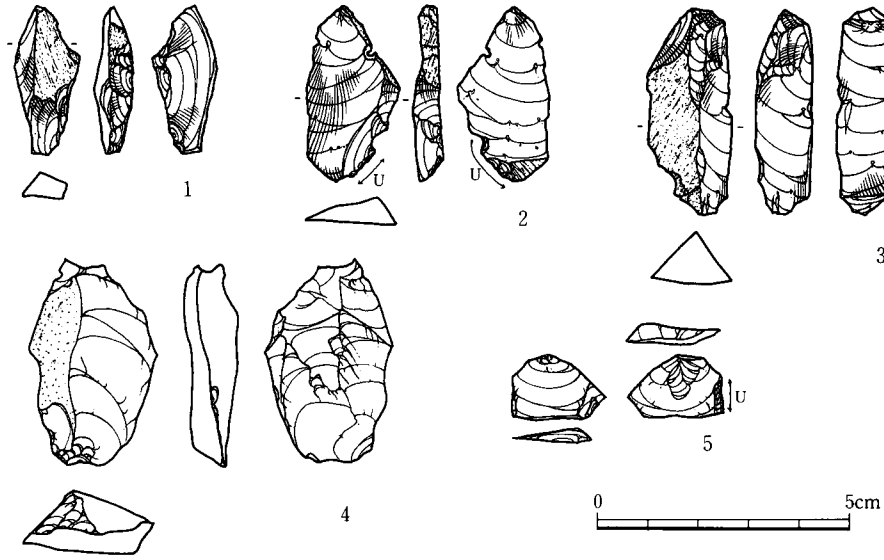
第60図　大割遺跡IXu4ブロック遺物出土状況（1/80）



第61図　大割遺跡Ⅸu4ブロック母岩別分布（1/80）

出土遺物（第62図、図版19）　石材組成は珪質頁岩を中心に構成され、他に黒曜石が4点出土している。

1～3は黒曜石製の石器である。いずれも良質な黒曜石4が使われている。1は横長剝片を素材としたナイフ形石器。背面には一部礫皮面を残し、また主要剝離面と同一方向の剝離痕が



第62図　大割遺跡Ⅸu4ブロック出土石器（2/3）

残されている。尖頭部はあまり鋭利ではない。打面側ほぼ全体に粗い刃潰し加工が施されている。この石器と同種のナイフ形石器としてIX$_U$9ブロックのナイフ形石器(第77図8a)があり、共に注目されるものであるが、その点については後に触れる。2と3は1と同一母岩製と考えられる縦長剥片。2の末端にのみ刃こぼれが観察されるが、いずれにしても1とともに石器として搬入されたものと思われる。

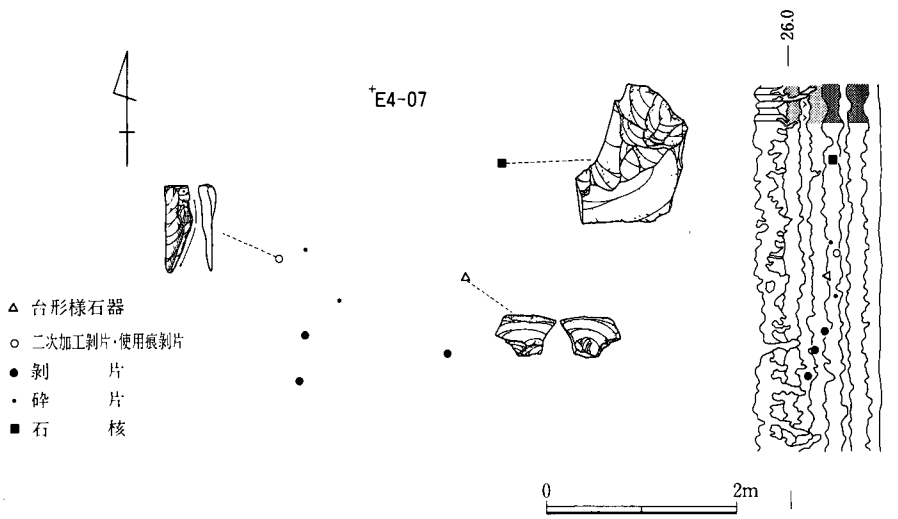
4、5はいずれも珪質頁岩2製の石器。暗緑色。4は掻器で、主要剥離面側打面部及び打瘤部分に加工が施されている。5は小型の貝殻状剥片で、腹面右側縁に連続した細かい剥離が見られる。使用痕と考える。

第23表　大割遺跡IX$_U$4ブロック出土石器計測表

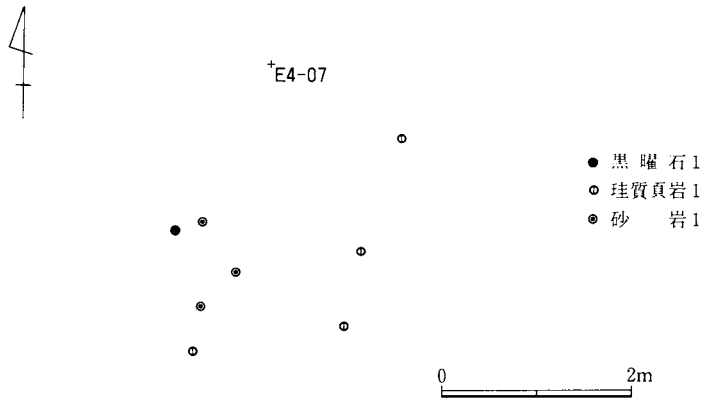
挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角 調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	E4-29-6	黒曜石	4	13.4	29.1	7.7	2.33	−	−	−
2	使用痕剥片	E4-29-1	黒曜石	4	33.7	21.0	6.2	2.59	−	−	○
3	剥片	E4-19-1	黒曜石	4	40.7	17.0	11.8	6.58	−	−	−
4	掻器	E4-29-4	珪質頁岩	2	39.8	25.2	11.8	9.54	44°	−	−
5	使用痕剥片	E4-19-9	珪質頁岩	2	13.1	19.4	3.9	1.03	−	−	○

⑥IX$_U$5ブロック

出土状況（第63図、第64図、図版4-1）　IX$_U$4ブロックの北西方約10mに位置するブロックであり、やはり小規模ブロックである。分布範囲は長径3.2m、短径2mに収まり、出土点数も計8点と少なく分散的である。母岩別資料の個体毎にまとまって分布する傾向があるとも言える



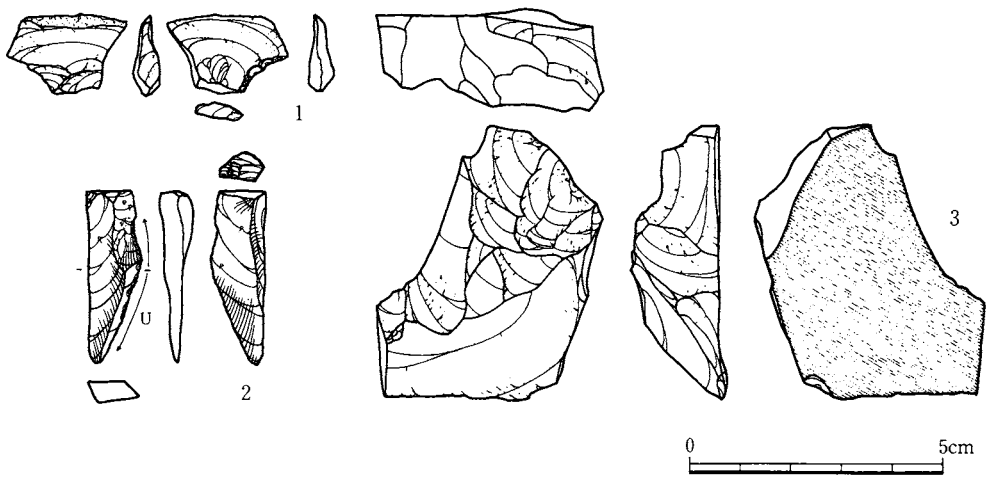
第63図　大割遺跡IX$_U$5ブロック遺物出土状況（1/80）



第64図　大割遺跡IXu5ブロック母岩別分布（1/80）

が、元来点数が少ないこともあってとくに特徴とも言い難い。産出層準はIX a 層を中心として一部VI～VII層から出土している。

出土遺物（第65図、図版19）　珪質頁岩1が4点出土したが、うち1と3の2点を図示した。1は台形様石器で、小型の貝殻状剝片を素材とし、腹面右側縁に細かい剝離で加工を施している。3は石核である。板状の剝片を素材とするものであるが、主要剝離面は節理面で覆われる。作業面に交錯する剝離痕は、概ね同一方向からの打撃によるものである。一方2は黒曜石製の剝片である。漆黒で透明感に乏しい黒曜石1が用いられており、他に黒曜石製の石器は存在しない。打点直下で二つに折れたため縦長を呈するが、折断面によってbluntingの効果を得ており、その反対側、背面右側縁を刃部、末端を尖頭部としてナイフ形石器と同様の機能を持った石器であると考えられる。また刃部には顕著な刃こぼれが観察される。



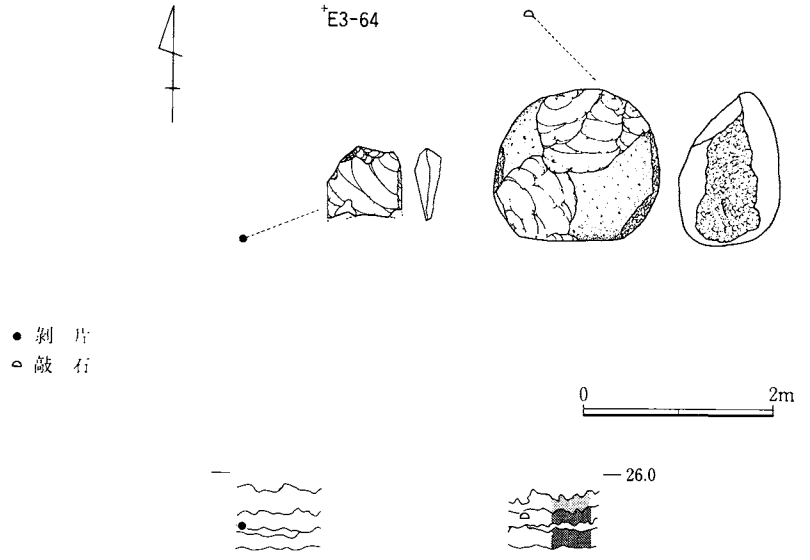
第65図　大割遺跡IXu5ブロック出土石器（2/3）

第24表　大割遺跡IX_U5ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	台形様石器	E4-07-2	珪質頁岩	1	16.4	25.5	5.8	1.65	—	—	—
2	使用痕剥片	E4-06-1	黒曜石	1	34.4	11.8	6.3	1.85	—	—	○
3	石核	E4-07-1	珪質頁岩	1	40.1	59.3	17.1	35.00	—	—	—

⑦IX_U6ブロック

出土状況（第66図、図版4-2）　遺物は2点出土しただけである。ともにIXa層からの出土で、その間隔は3.9mを測る。

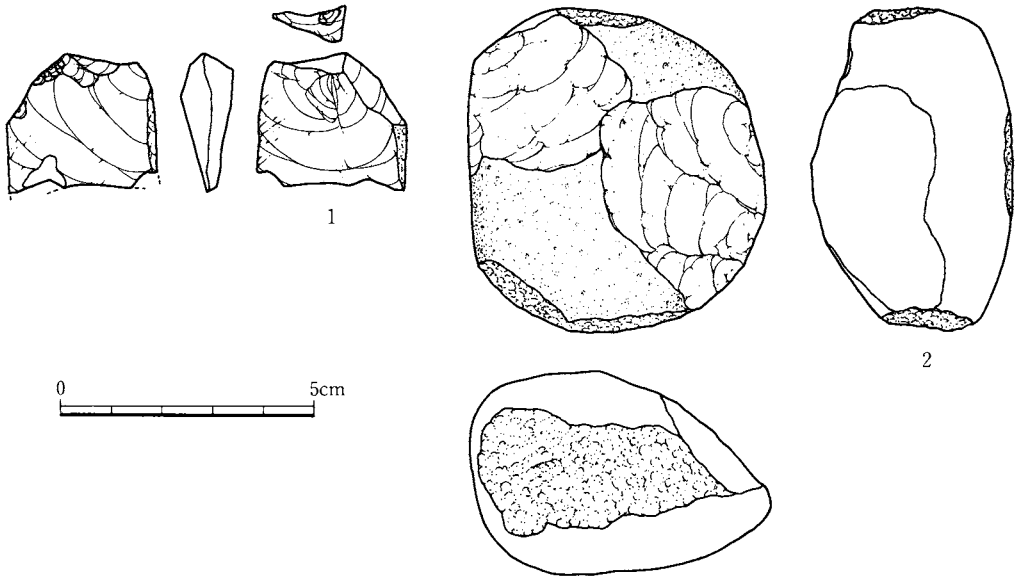


第66図　大割遺跡IX_U6ブロック遺物出土状況（1/80）

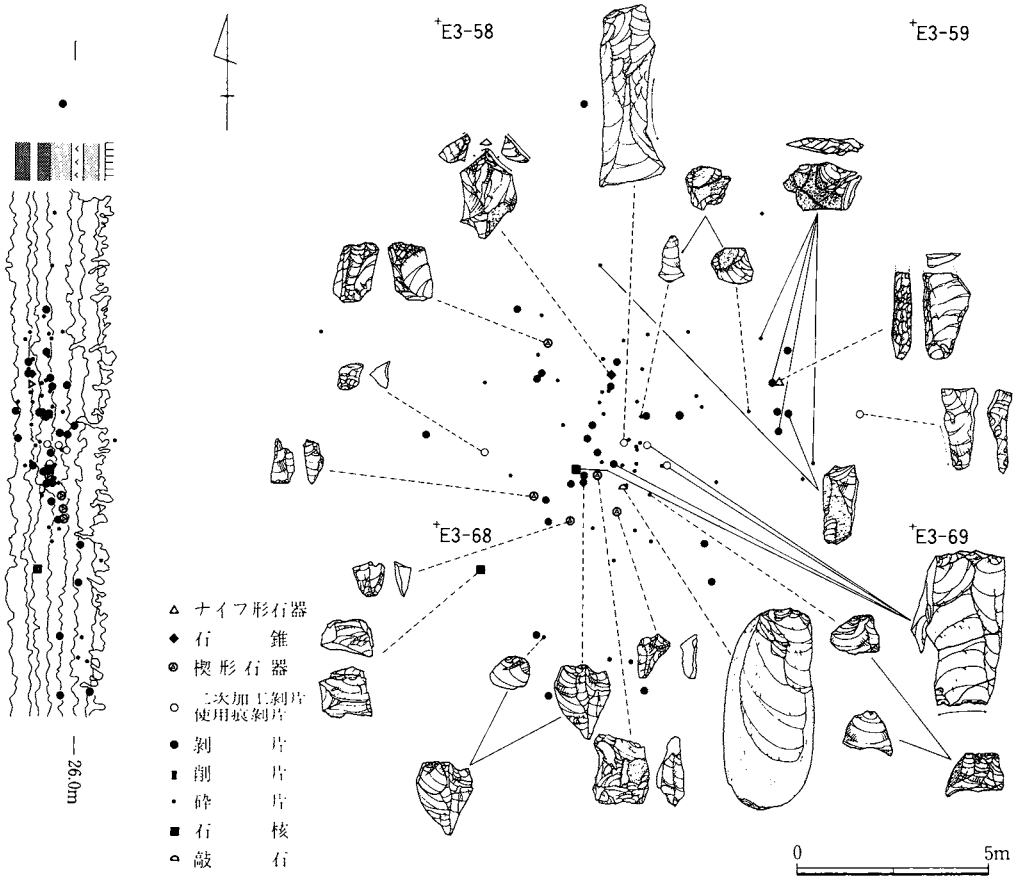
出土遺物（第67図、図版19）　1は頁岩製の剥片。風化が進み、全体が黄白色を呈するが、新鮮な面は暗灰色である。末端は比較的鋭利な刃部をなす。2は多孔質安山岩製の敲石である。風化が激しく使用痕が鮮明に観察されないが、表裏の敲打痕と側面の敲打痕の性格は異なると思われる。またいずれにしても間接的な打撃に用いられた可能性が高い。

第25表　大割遺跡IX_U6ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損	使用痕
1	剥片	F3-63-1	頁岩	28.9	31.9	9.3	7.22	○	—
2	敲石	F3-64-1	安山岩	64.9	60.2	41.4	198.16	—	—



第67図　大割遺跡Ⅸu6ブロック出土石器（2/3）

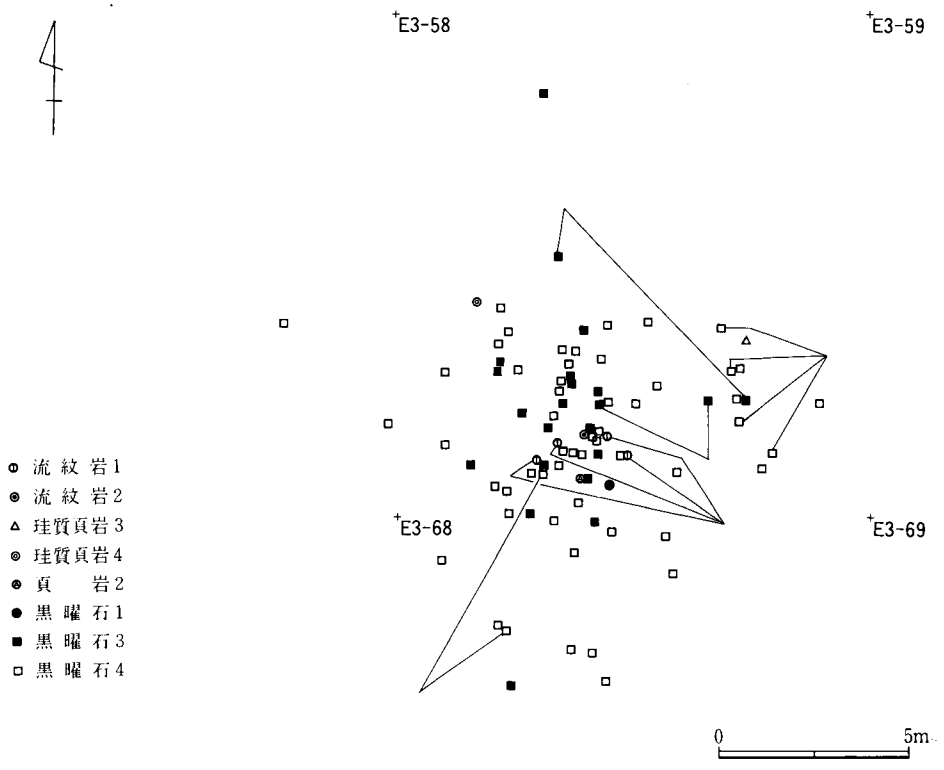


第68図　大割遺跡Ⅸu7ブロック遺物出土状況（1/80）

⑧IX_U7ブロック

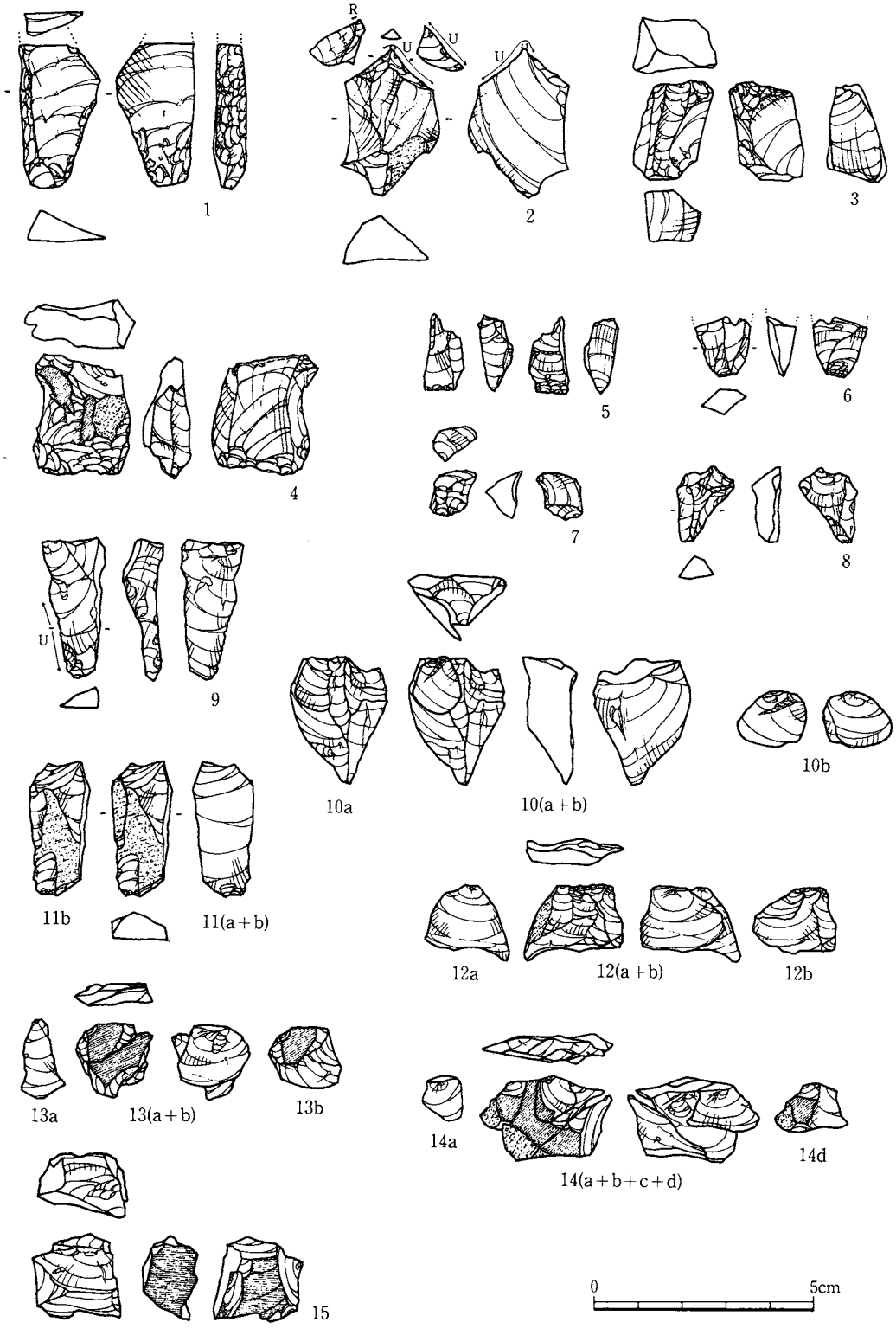
出土状況（第68図、第69図、図版4-3）　東西、南北とも約5mの広がりを持つブロックである。黒曜石を主体とするブロックで、当文化層では比較的集中度は高い。総点数は85点。遺物の垂直移動が激しく、最大レベル差は1mを越えIII層からX層上面に及んでいるが、主としてIXa層～VII層から出土しており、最も安定したレベルはIXa層にある。

遺物はナイフ形石器、石錐各1点の他、楔形石器及び楔形石器削片など黒曜石3、4製の石器が中心となるが、母岩別個体毎の分布に偏りは認められない。

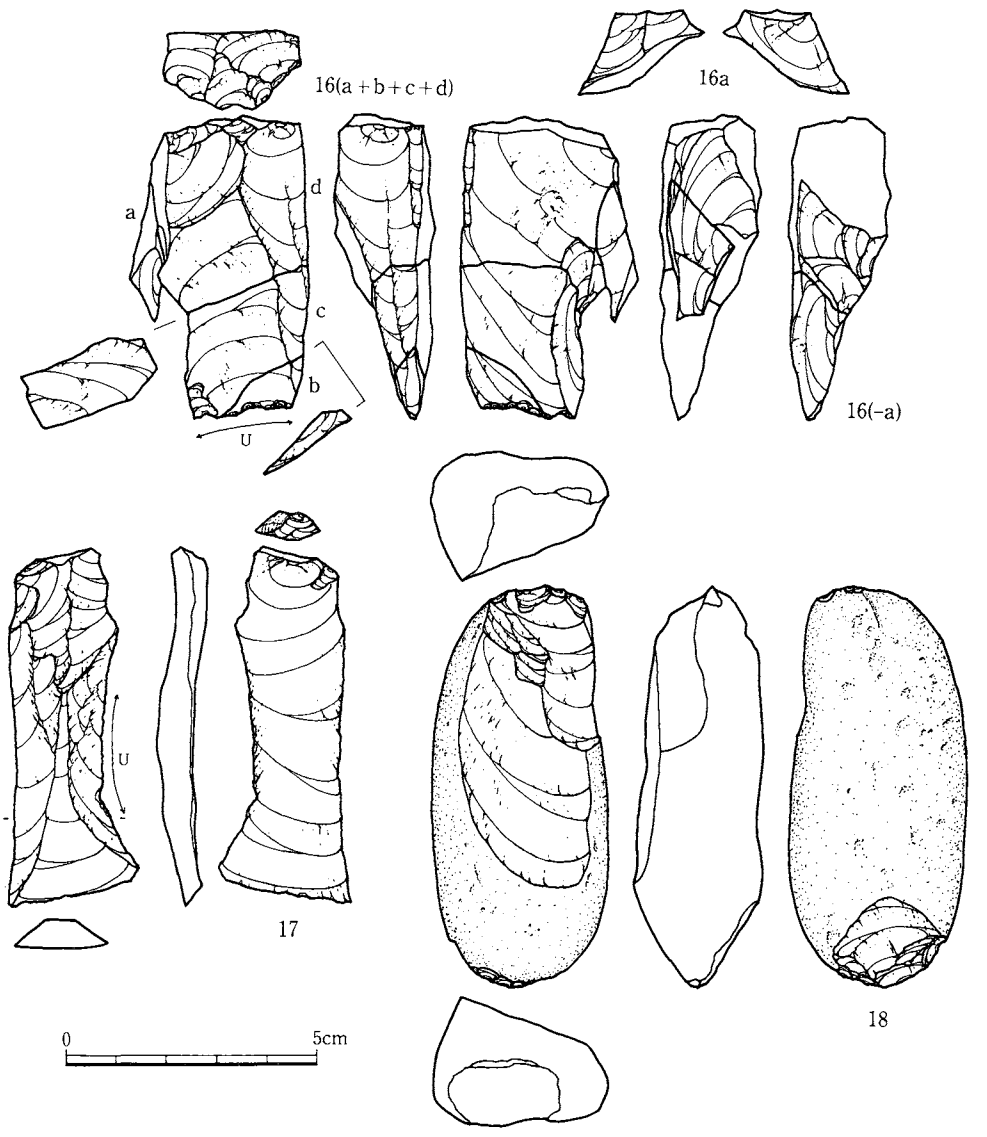


第69図　大割遺跡IXu7ブロック母岩別分布（1/80）

出土遺物（第70図、第71図、図版20）　1は黒曜石4の縦長剝片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器である。先端側を欠損している。腹面の基部調整が施され、背面左側縁のbluntingは背腹両面から行われるが、殆どが背面からのものである。2は先端を欠損するが、欠損部脇の左側縁に見える加工によって石錐と考える。1と同じ黒曜石4から作られた石器で、一部礫皮面を残した分厚い剝片を素材としている。3～8、11は楔形石器及び楔形石器削片である。3は上端に特徴的な潰れがあるが、全体に分厚く角柱に近い形状で下端は折損していると思われる。対して4は偏平な形状で、上下端に潰れが認められる。5～8はいずれも楔形石器の端部が折損したものであろう。11bは楔形石器削片であり、狭小な砕片(11a)が接合している。9



第70図　大割遺跡Ⅸu7ブロック出土石器(1)（2/3）



第71図　大割遺跡IXU7ブロック出土石器(2)（2/3）

は剝片。背面左側縁は鋭利な刃部をなし、ごく微細な刃こぼれが観察される。10、12～14は剝片、砕片の接合例である。当ブロックではこれらのような小さな剝片が多く存在する。15には黒曜石の小型の石核を示した。12が黒曜石１、６、11、13が黒曜石３、他はいずれも黒曜石４である。

次に黒曜石以外の石器を示す。16は流紋岩の接合資料。石刃状の縦長剝片も含めて生産された剝片石核で打面調整が行われている。最終的に16a他小型の剝片が剝離されているが、その後b+cを折断して矩形の剝片としている。それには刃こぼれが認められる。bとcは折損であろうと思われる。17は凝灰岩製の石刃である。調整打面を持ち比較的整った形状を示しているが、

第26表　大割遺跡IX_U7ブロック出土石器計測表

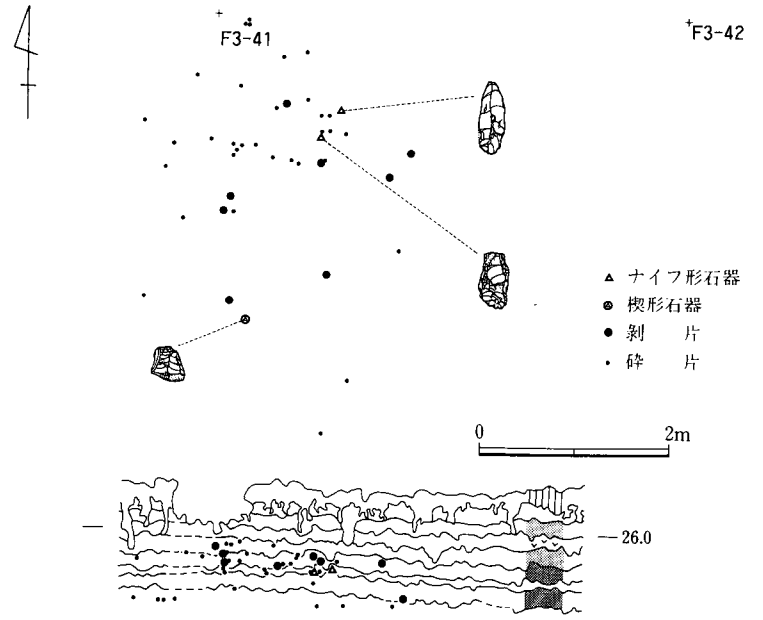
挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	E3-58-68	黒曜石	4	32.8	17.7	8.1	3.91	28°	○	−
2	揉錐器	E3-58-52	黒曜石	4	33.9	20.9	11.9	6.59	−	○	○
3	楔形石器	E3-58-49	黒曜石	4	27.1	14.6	12.7	4.82	−	−	−
4	楔形石器	E3-58-58	黒曜石	4	24.0	23.2	10.8	6.00	−	−	−
5	楔形石器	E3-58-4	黒曜石	4	17.2	8.4	7.5	0.91	−	−	−
6	楔形石器	E3-58-6	黒曜石	3	14.0	12.7	5.8	0.72	−	○	−
7	楔形石器	E3-58-2	黒曜石	4	10.2	10.9	7.8	0.56	−	−	−
8	楔形石器	E3-58-7	黒曜石	4	15.7	13.5	6.3	0.89	−	−	−
9	使用痕剥片	E3-58-19	黒曜石	4	31.7	9.0	7.9	2.58	−	−	○
10a	砕片	E3-68-15	黒曜石	4	12.4	15.1	3.1	0.93	−	−	−
10b	剥片	E3-58-10	黒曜石	4	22.4	29.9	13.7	4.74	−	−	−
11a	砕片	E3-58-32	黒曜石	3	14.3	5.5	2.2	0.13	−	−	−
11b	削片	E3-58-75	黒曜石	3	30.9	13.7	9.5	2.62	−	−	−
12a	砕片	E3-58-1 (原位置不明)	黒曜石	1	16.5	19.5	3.1	0.93	−	−	−
12b	砕片	E3-58-13	黒曜石	1	14.3	19.5	3.6	0.87	−	−	−
13a	砕片	E3-58-25	黒曜石	3	19.0	11.5	3.2	0.45	−	−	−
13b	砕片	E3-58-29	黒曜石	3	14.6	16.9	3.5	0.73	−	−	−
14a	砕片	E3-58-24	黒曜石	4	11.1	9.0	2.0	0.17	−	−	−
14b	剥片	E3-58-22	黒曜石	4	20.2	21.7	5.0	1.24	−	−	−
14c	剥片	E3-58-20	黒曜石	4	8.8	23.6	6.0	0.86	−	−	−
14d	砕片	E3-58-18	黒曜石	4	11.3	17.4	4.0	0.51	−	−	−
15	石核	E3-68-7	黒曜石	4	20.7	21.5	14.6	4.76	−	−	−
16a	剥片	E3-58-39	流紋岩	1	17.7	28.8	6.4	1.72	−	−	−
16b	使用痕剥片	E3-58-65	流紋岩	1	11.2	17.5	3.9	0.59	−	−	○
16c	使用痕剥片	E3-58-64	流紋岩	1	24.4	34.0	12.3	8.40	−	−	○
16d	石核	E3-58-9	流紋岩	1	38.4	32.6	20.6	27.37	−	−	−
17	使用痕剥片	E3-58-62	凝灰岩	1	69.4	23.0	7.9	11.89	−	−	○
18	敲石	E3-58-60	頁岩	1	79.2	34.7	24.2	94.70	−	−	○

背面構成は複雑である。18は頁岩製の敲石。

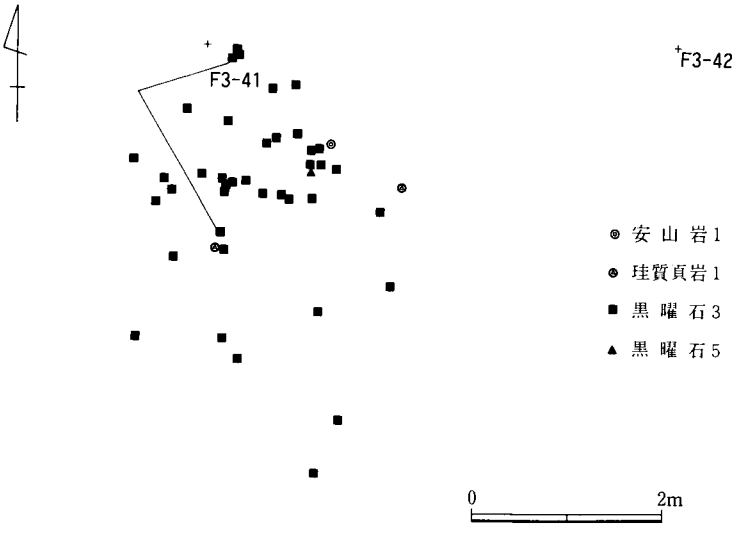
⑨IX_U8ブロック

出土状況（第72図、第73図、図版5-1）　前項IX_U7ブロックの東方およそ15mの地点に位置するブロックで、黒曜石が主体となる点、分布密度等両者はよく類似する。東西およそ3m、南北およそ4.5mの範囲に計44点の遺物が分布した。集中度は北寄りで高く、また砕片が集中している。遺物の垂直移動も比較的大きく、Ⅶ層上面からX層まで0.7mに及ぶ。しかし最も安定したレベルはIXa層にある。

遺物はナイフ形石器2点、楔形石器1点の他は剥片、砕片であるが、IX_U7ブロックでやや少なかった黒曜石3によって殆どが占められている。しかし2点のナイフ形石器は他の個体の製品が持ち込まれているのは興味深い。



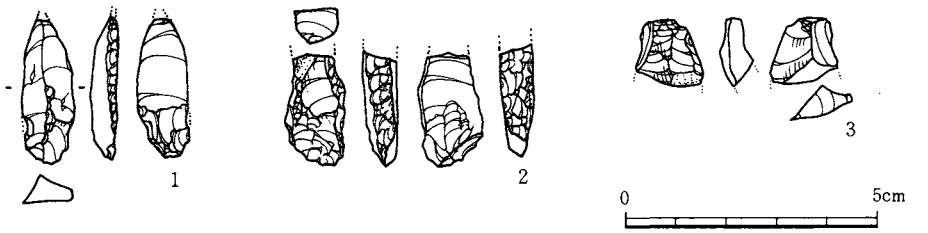
第72図　大割遺跡Ⅸu8ブロック遺物出土状況（1/80）



第73図　大割遺跡Ⅸu8ブロック母岩別分布（1/80）

出土遺物（第74図、図版19）　1は安山岩製一側縁加工のナイフ形石器である。腹面の基部加工が顕著に認められ、bluntingは背面右側縁ほぼ全体に腹面側から施されている。尖頭部に僅かに欠損がある。2は黒曜石5の二側縁加工のナイフ形石器。縦長剥片素材で尖頭部側を欠

損している。従って刃部は不明である。この石器は幅に比して厚みがあり、角柱状を呈する。また打面を一部残している。3は黒曜石3の楔形石器の残欠。



第74図　大割遺跡IXU8ブロック出土石器(2/3)

第27表　大割遺跡IXU8ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	F3-41-18	安山岩	1	28.5	10.7	5.9	1.75	50°	○	−
2	ナイフ形石器	F3-41-21	黒曜石	5	23.5	12.1	7.1	2.26	−	○	−
3	楔形石器	F3-41-13	黒曜石	3	14.7	13.0	6.2	0.85	−	○	−

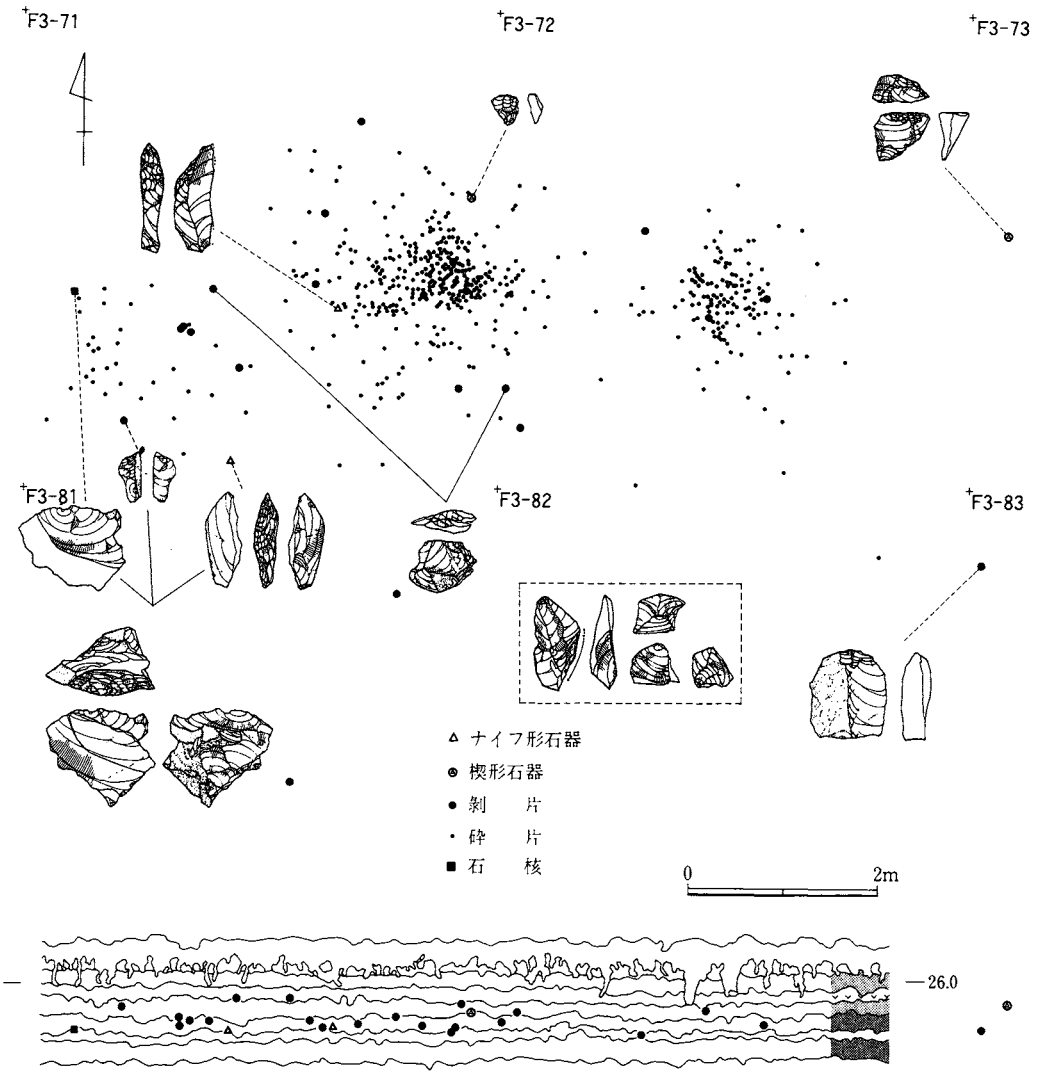
⑩IX_U9ブロック

出土状況（第75図、第76図、図版6）　3つの集中地点が連接して存在し、また相互に密接な関連を有するため、一括してIX_U9ブロックとして記述する。

IX_U8ブロックから南に約15m、IX_U7ブロックからは南東にやはり約15mの位置にあり、ほぼ東西に3つの遺物集中(クラスター)が連接している。西からクラスターa、b、cとする。黒曜石の砕片を含むブロックであるが、クラスターaが中では分布密度が希薄であり、対してクラスターbからは多量の砕片が出土している。各クラスターの規模については、クラスターaがおよそ2m×2m、クラスターbがおよそ3.5m×3.5m、クラスターcがおよそ2.5m×3mであり、またそれらからやや離れた位置からも数点の遺物が出土した。

3つのクラスターのうち、クラスターaは黒曜石1と黒曜石2がほぼ相半ばしていると言えるが、クラスターbは黒曜石1が圧倒的な割合を占め、黒曜石2は客体的である。また逆にクラスターcは黒曜石2が主体で黒曜石1は客体的である。他の個体は微量ずつ存在するに過ぎないが、IX_U7ブロックに接合資料として存在した流紋岩の剝片、砕片が2点出土しているのは興味深い。

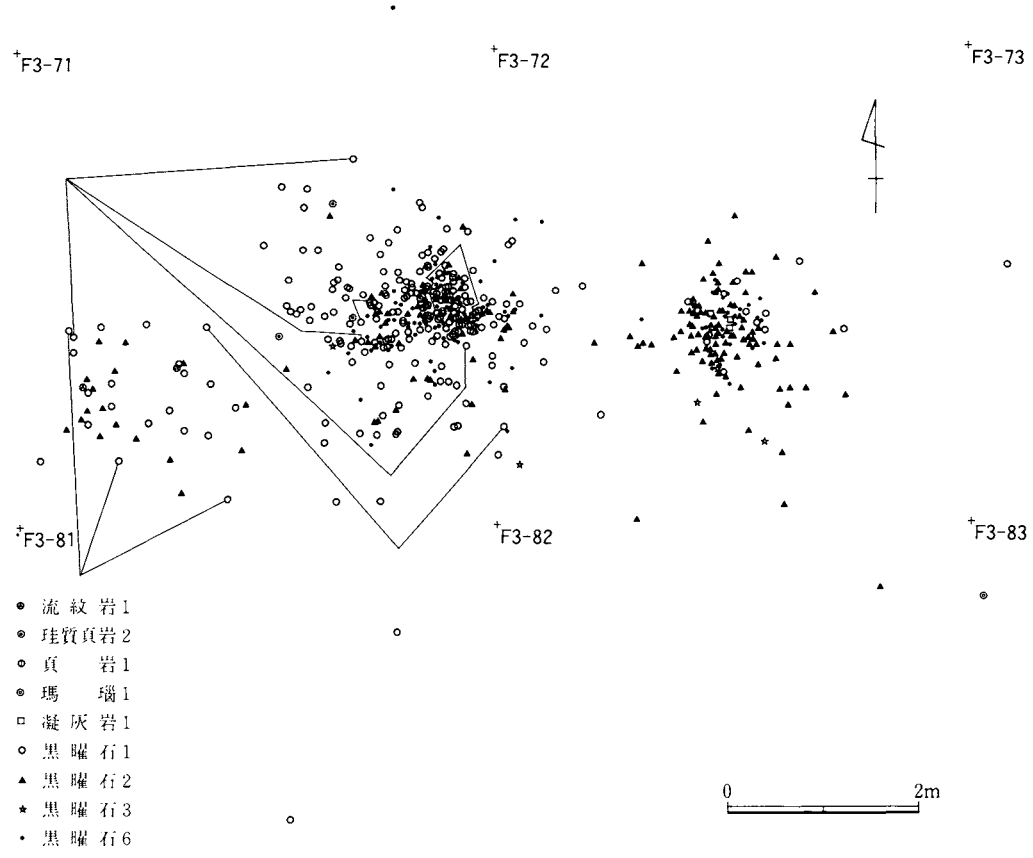
遺物の垂直分布は、最大レベル差で約0.7m、VI層からIX層下部までの移動があるが、やはり安定したレベルはIXa層にあった。



第75図　大割遺跡Ⅸu9ブロック遺物出土状況（1/80）

出土遺物（第77図、図版19）　遺物総点数570点のうち定型的な石器としてはナイフ形石器2点があるだけであり、他は楔形石器、剥片、石核が少量と大量の砕片である。

1は黒曜石3の縦長剥片を素材としたナイフ形石器。加工は左側縁の先端側にのみ施されて尖頭部を作出している。クラスターb出土。2は原位置不明の剥片であるが、確実に本ブロックに帰属するもの。黒曜石1。背面右側縁に細かい刃こぼれ状の剥離が認められる。3、4は楔形石器とする。3はクラスターcの東に若干離れた位置から出土している。5は小型の剥片同士の接合例。6も3と同じくやや離れた位置から出土した剥片で、唯一の瑪瑙製。末端側を折断されている。7は石核で非常に小型。これも原位置不明であるが、確実に本ブロックに帰属する。

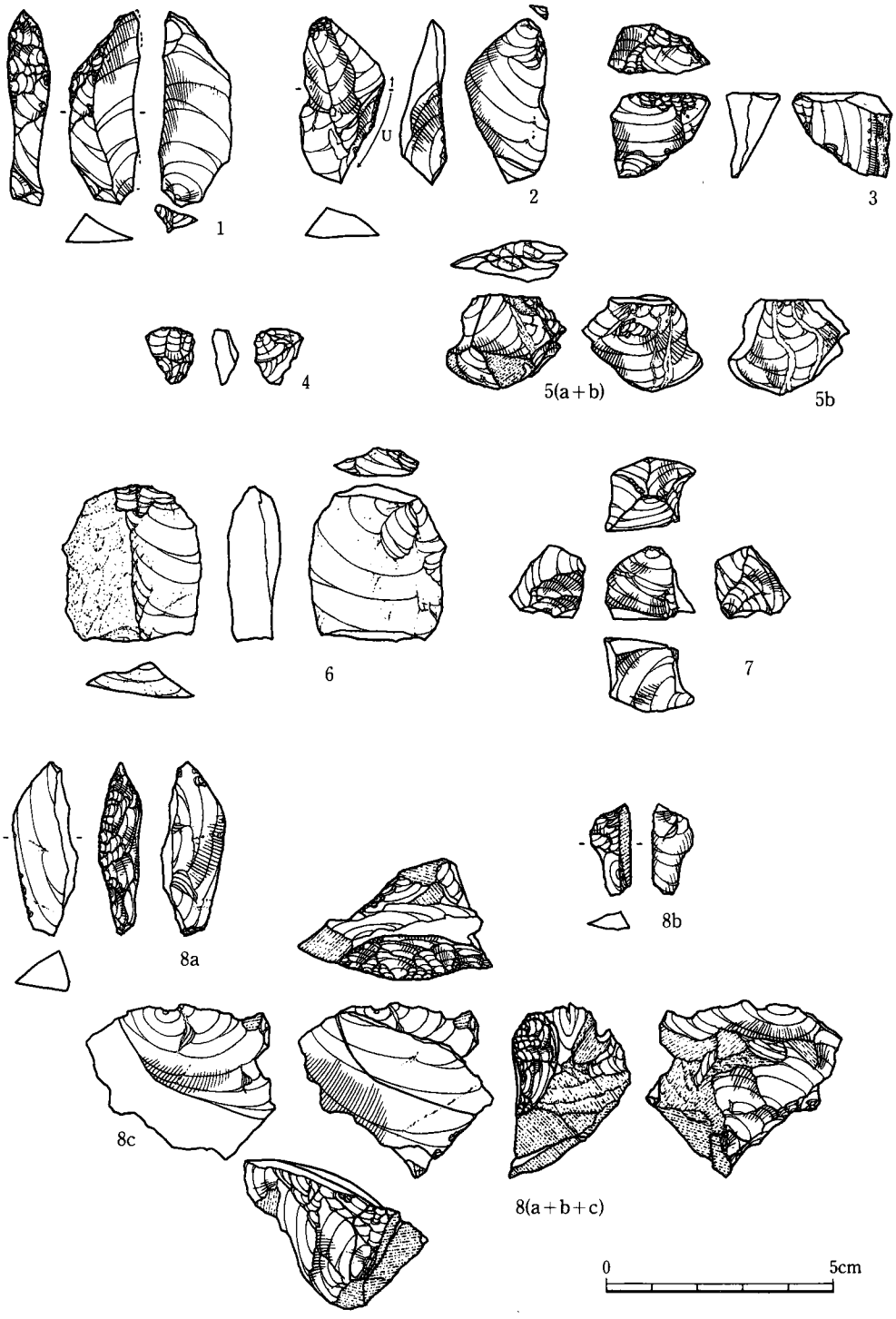


第76図　大割遺跡ⅨU9ブロック母岩別分布（1/80）

第28表　大割遺跡ⅨU 9 ブロック出土石器計測表

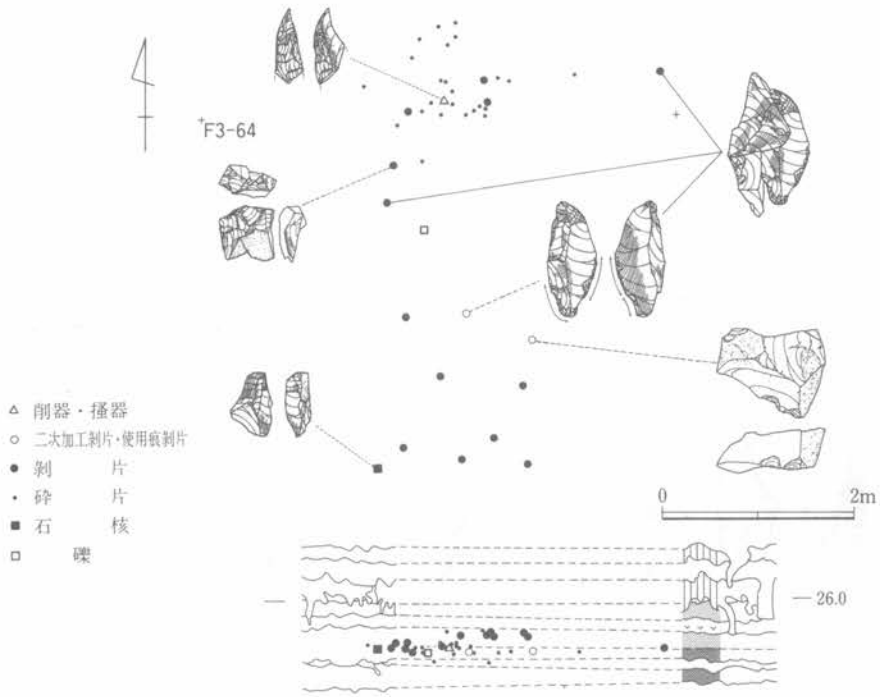
挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	F3-71-101	黒曜石	3	41.8	15.4	9.2	4.28	38°	○	−
2	使用痕剥片	F3-83-18（原位置不明）	黒曜石	1	35.9	21.2	10.3	4.41	−	−	○
3	楔形石器	F3-73-1	黒曜石	1	14.4	22.2	11.5	2.96	−	−	−
4	楔形石器	F3-71-382	黒曜石	1	12.5	10.6	4.8	0.49	−	−	−
5 a	剥片	F3-71-75	黒曜石	1	21.0	19.8	4.7	1.29	−	−	−
5 b	剥片	F3-71-15	黒曜石	1	20.7	27.3	6.0	2.21	−	−	−
6	剥片	F3-83-17	瑪瑙	1	34.7	30.8	11.9	12.15	−	−	−
7	石核	F3-71-371（原位置不明）	黒曜石	1	26.0	18.5	15.3	4.09	−	−	−
8 a	ナイフ形石器	F3-71-70	黒曜石	1	36.3	13.9	9.5	3.72	46°	−	−
8 b	剥片	F3-71-1	黒曜石	1	16.6	8.6	4.2	0.61	−	−	−
8 c	石核	F3-71-86	黒曜石	1	37.3	42.4	20.7	19.49	−	−	−

8は接合資料である。分厚い剥片を石核にして、打面と作業面を入れ換えながら、幅がほぼ規定された横長剥片がおそらく2回生産されている。殿山技法に類似していると言える。8a は

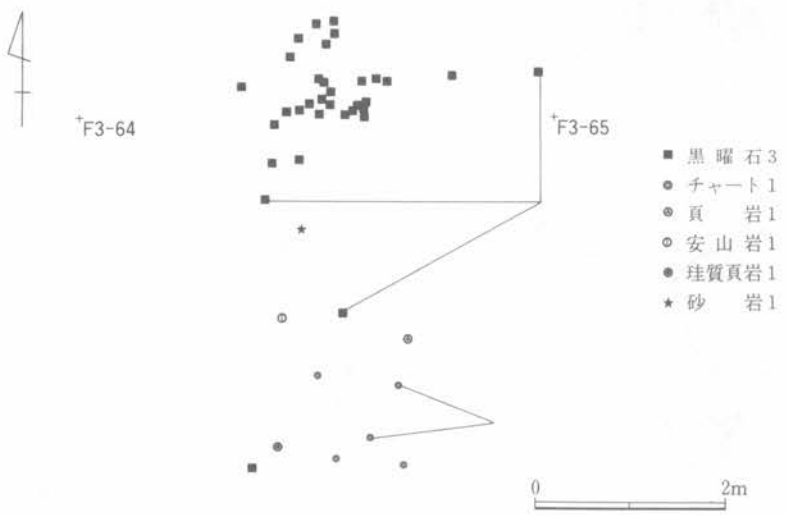


第77図　大割遺跡Ⅸu9ブロック出土石器（2/3）

それらの剥片のひとつを素材とするナイフ形石器である。背面は石核の主要剥離面をそのまま残している。またナイフ形石器の素材となる横長剥片の他に、小型の剥離痕が見られ、剥片8bが接合する。



第78図　大割遺跡Ⅸu10ブロック遺物出土状況（1/80）



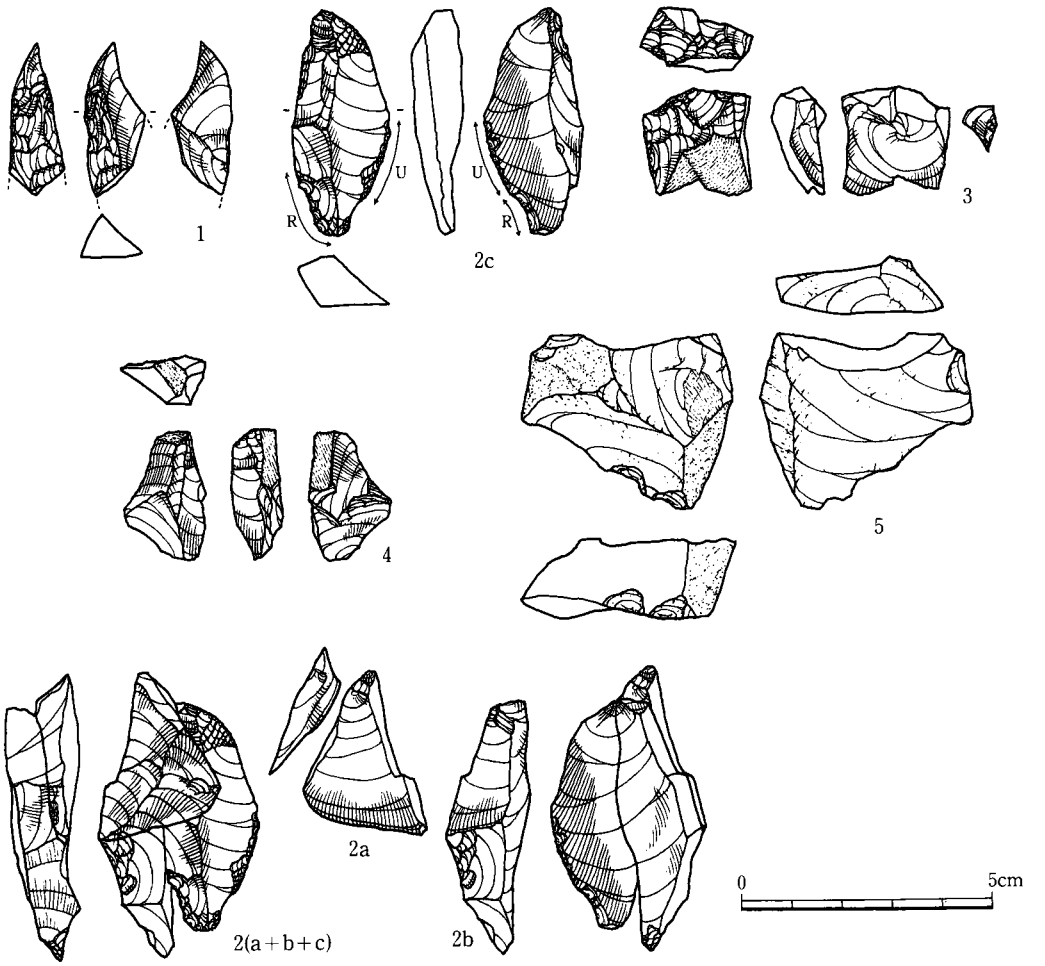
第79図　大割遺跡Ⅸu10ブロック母岩別分布（1/80）

⑪IX_U10ブロック

出土状況（第78図、第79図、図版５-2）　IX_U8ブロックやIX_U9ブロックの東方約15mの位置に存在した。本ブロックは前項IX_U9ブロック同様、２つの集中地点の連接とも見えるが、１つのブロックとして一括して記述する。また仮にａ、ｂの２つのクラスターを設定する。

黒曜石３が分布する範囲がIX_U10ブロックであるが、南北約4.5m、東西約３ｍの範囲に40点の遺物が出土した。その中で黒曜石３を主体とする範囲をクラスターａ、チャートが分布する範囲をクラスターｂとする。砕片（黒曜石３）はクラスターａだけから出土した。出土層準はⅦ層からⅨｂ層、レベル差は0.4mであり、また安定したレベルはⅨａ層中にあった。

出土遺物（第80図、図版21）　５を除いてすべて黒曜石３製の石器である。１はナイフ形石器の尖頭部の破片である。先端は嘴状を呈する。２は剝片３点の接合資料である。打点を後退させながらの連続的な剝離作業の結果生産された剝片であるが、2bと2cは打点直下で２つに折



第80図　大割遺跡IX_U10ブロック出土石器（2/3）

れたものである。背面構成からは左側を打面として連続的に剝離作業がなされたことが知れる。2c の末端付近には顕著な加工痕がありそこを基部として、背面右側縁、腹面左側縁には連続的な刃こぼれ状の剝離痕が観察される。3 は剝片であるが、多くの細かい剝離痕が交錯している。上端と左端に潰れが見られ、楔形石器削片の性格を有するものかも知れない。4 は小型の石核である。5 は頁岩製の剝片で折断によって打面が失われている。下端には加工痕と思われる小剝離が 2 ケ所に施されている。

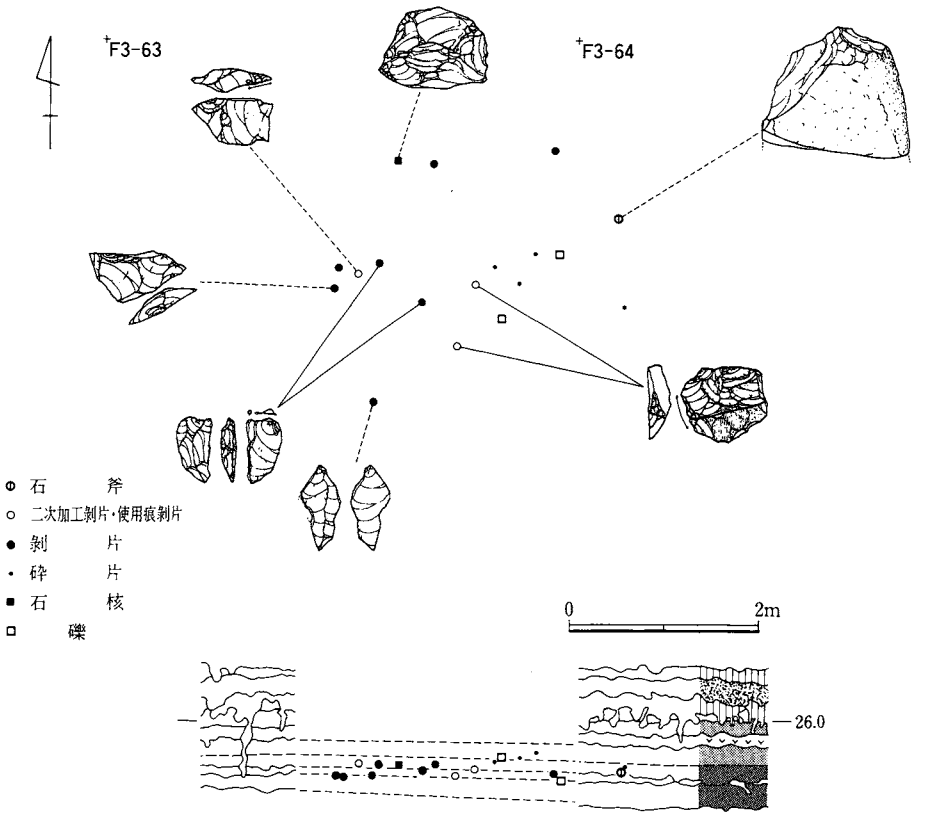
第29表　大割遺跡IX_U10ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	F3-54-18	黒曜石	3	30.6	12.2	10.8	2.43	−	○	−
2a	剝片	F3-64-13	黒曜石	3	32.4	26.3	7.3	3.68	−	−	−
2b	剝片	F3-54-16	黒曜石	3	49.7	14.7	10.3	5.84	−	−	−
2c	二次加工剝片	F3-64-16	黒曜石	3	44.3	21.0	9.4	6.04	28°	−	○
3	剝片	F3-64-12	黒曜石	3	21.1	23.6	11.0	4.44	−	−	−
4	石核	F3-64-24	黒曜石	3	25.5	16.2	14.6	2.71	−	−	−
5	二次加工剝片	F3-64-17	頁岩	3	35.7	42.5	14.7	20.04	−	−	−

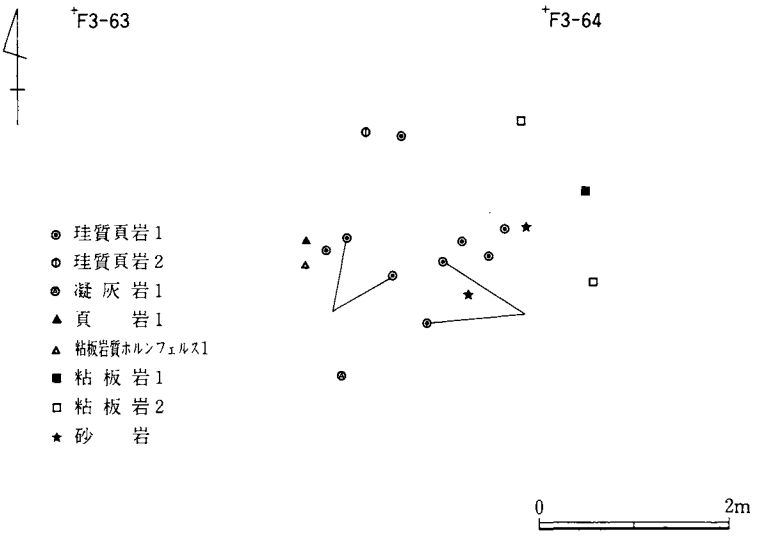
⑫IX_u11ブロック

出土状況（第81図、第82図、図版5-2）　IX_U10ブロックのすぐ西に隣接するブロックである。遺物分布範囲は南北約2.5m、東西約3mで総点数16点。出土層準はⅦ層からIXb層までであり、最大レベル差は約0.4m である。中心はIXa層にあるが、他のブロックから見ると若干下位に位置するような印象を受ける。しかし少量ではあるが他のブロックとの共通母岩(IX_u10ブロックとの間に砂岩1、IX_U7ブロックとの間に凝灰岩1)を持っており、同一の文化層で捉えることができる。

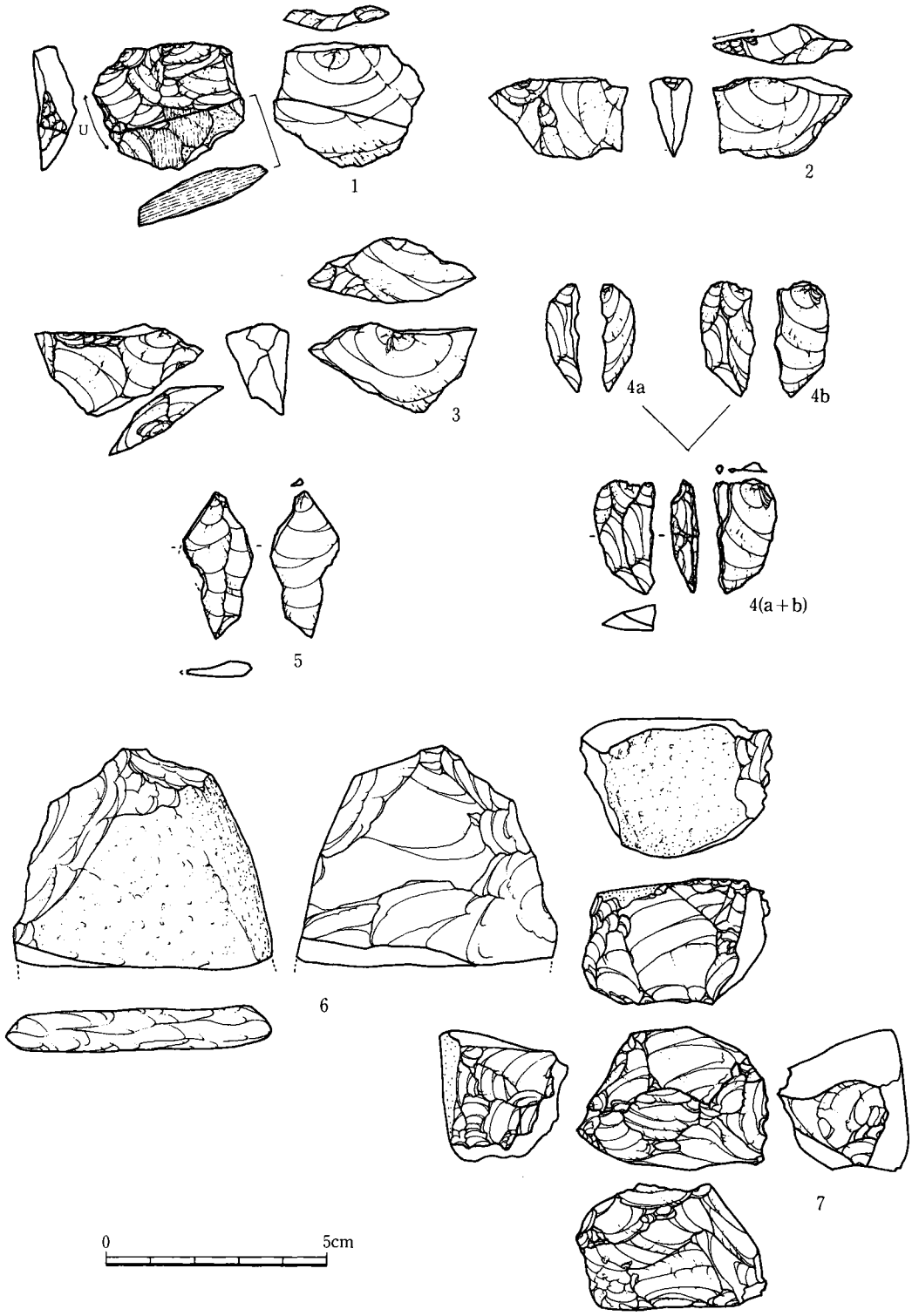
出土遺物（第83図、図版21）　1、2、4が珪質頁岩9から生産された剝片である。1は背面左側縁に急斜な加工があり、掻器のような機能を想定できるが、剝片中央の節理面で折れている。加工途中で折損した可能性もある。2は打面に negative bulb を有する小剝離があって、二次加工と思われるが、その目的、石器の機能は不詳。4は小剝片2点の接合例である。3は粘板岩質ホルンフェルスの剝片で、2によく似た横長剝片である。5は凝灰岩の石刃。第71図17と同一母岩である。6は粘板岩製の偏平な石器。石斧の断片であろう。7は貝殻状剝片を生産した石核。概ね打面と作業面を置換しながら、2～3度打点移動を行って剝片を取っている。



第81図　大割遺跡Ⅸu11ブロック遺物出土状況（1/80）



第82図　大割遺跡Ⅸu11ブロック母岩別分布（1/80）



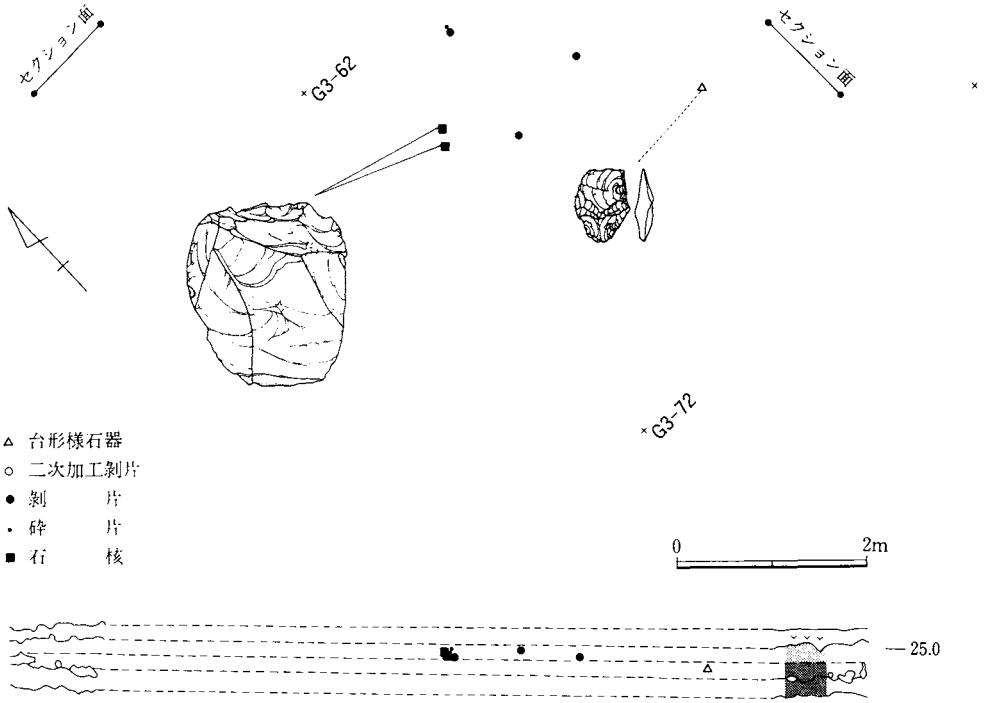
第83図　大割遺跡Ⅸu11ブロック出土石器（2/3）

第30表　大割遺跡IX_U11ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損	使用痕
1	二次加工剥片	F3−63−18	珪質頁岩	9	24.4	35.1	9.8	9.54	—	—
		F3−63−19								
2	二次加工剥片	F3−63−14	珪質頁岩	9	19.0	31.7	9.3	4.02	—	—
3	剥片	F3−63−13	ホルンフェルス	1	27.2	33.7	14.3	8.65	—	—
4a	剥片	F3−63−15	珪質頁岩	9	24.8	7.9	5.7	0.83	—	—
4b	剥片	F3−63−16	珪質頁岩	9	26.0	12.1	4.5	1.26	—	—
5	剥片	F3−63−17	凝灰岩	1	31.3	16.7	4.3	1.58	○	—
6	石斧？	F3−64−26	粘板岩	2	53.4	59.7	14.9	53.93	○	—
7	石核	F3−63−9	珪質頁岩	10	30.6	40.4	29.7	48.08	—	—

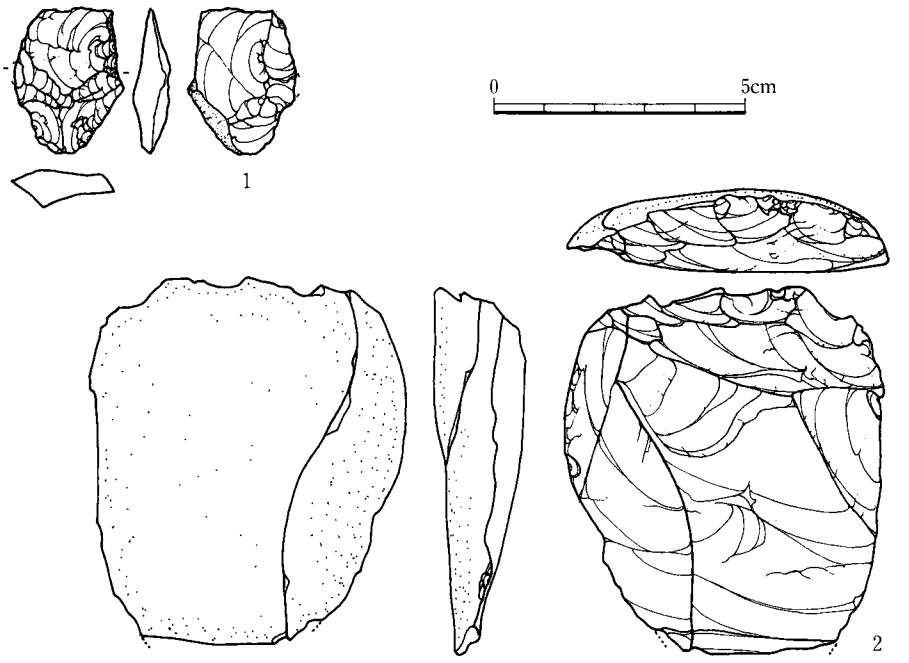
⑬IX_U12ブロック

出土状況（第84図、図版5-3）　大割遺跡の東端、若干舌状に張り出した台地先端部に他のブロックとはやや離れて位置する小規模ブロックである。緩斜面に立地するため、土層断面図への投影に正確さが欠けるかも知れないが、産出層準はⅦ層からIXa層で、とくにⅦ層に集中している。遺物分布範囲は東西、南北とも約2.5mであるが、長径3m弱に細長く分布する。総点数7点。



第84図　大割遺跡IX_U12ブロック遺物出土状況（1/80）

出土遺物（第85図、図版21）　1は台形様石器である。青黒色のチャート製でやや横長の貝殻状剥片を横に用い、基部及び右側縁に平坦剥離で調整加工を加えている。刃部はほぼ水平に意図されている。同種の石器は大割遺跡第2文化層中には他に存在しない。2は石核とする。背面を礫皮面で覆われた大振りの剥片の打面側に、背面を打面とした剥離痕が残されている。青黒色～青灰色の頁岩製。



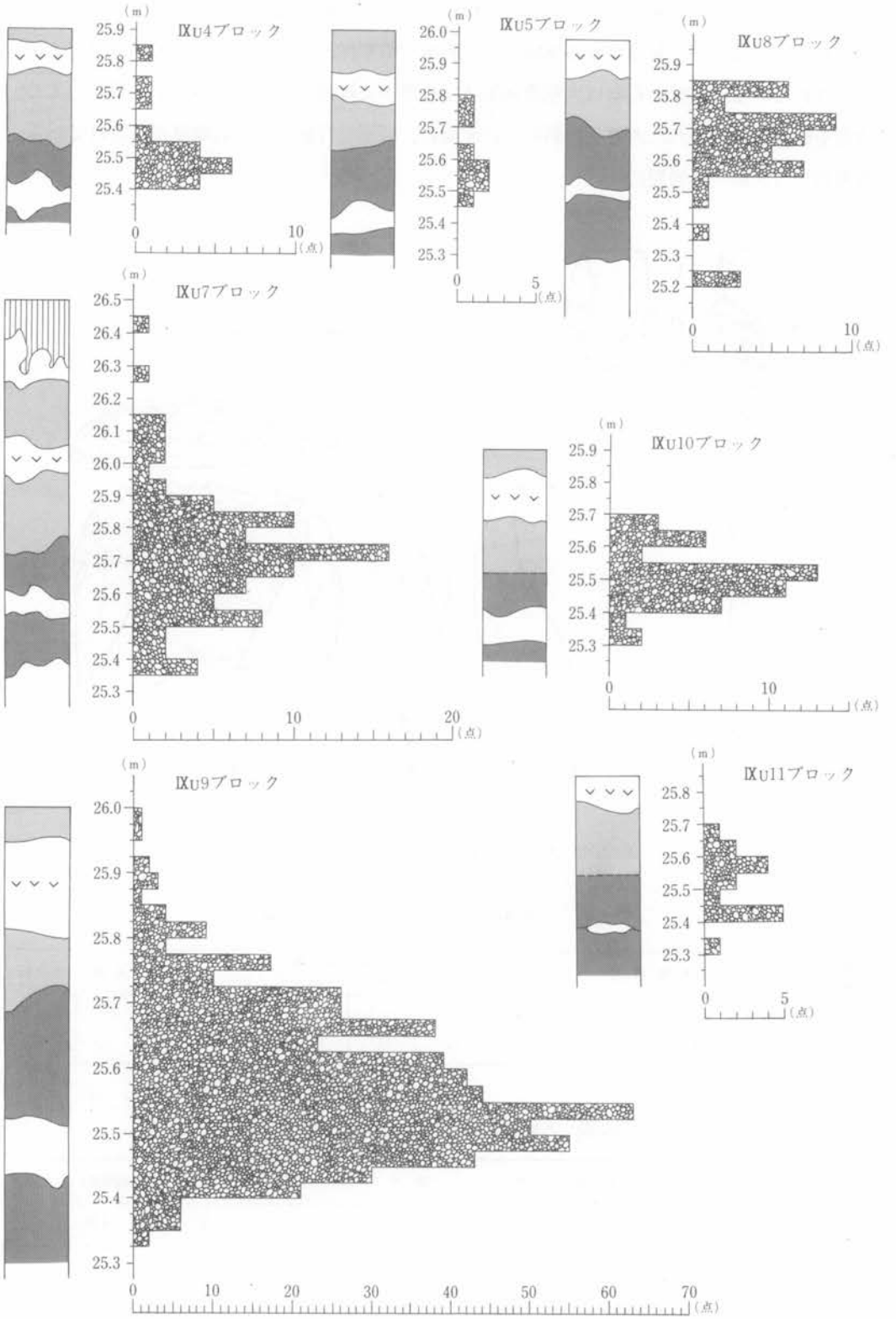
第85図　大割遺跡IX$_U$12ブロック出土石器（2/3）

第31表　大割遺跡IX$_U$12ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角	欠損	使用痕
1	台形様石器	G3－62－6	チャート	28.3	21.3	8.3	4.22	26°	○	－
2	石核	G3－62－1	頁岩	63.2	73.7	19.3	97.83	－	－	－

第32表　大割遺跡 IX$_U$12ブロック出土石器組成表

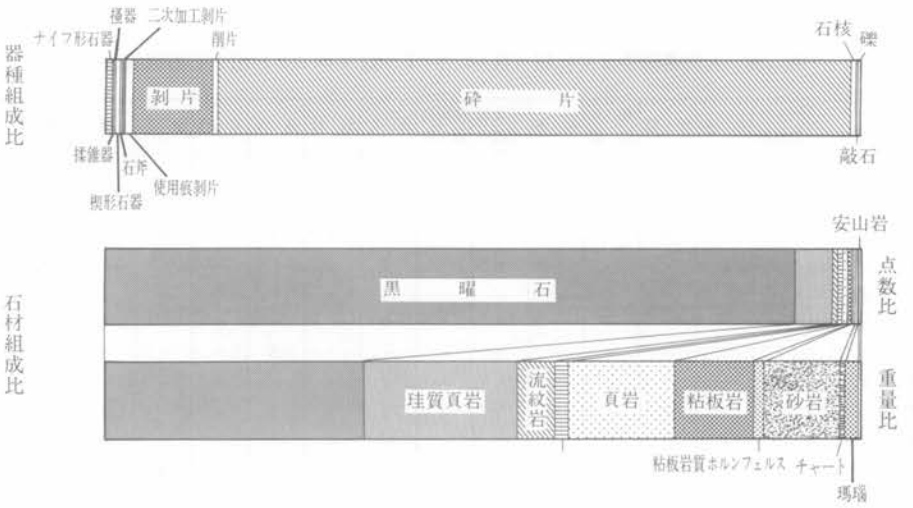
	台形様石器	剥片	砕片	石核	計	総重量g
チャート 1	1	1	－	－	2	4.91
頁岩 1	－	1	－	1	2	99.42
黒曜石 1	－	－	1	－	1	0.05
瑪瑙 1	－	1	－	－	1	1.95
合計	1	3	1	1	6	106.33



第86図　大割遺跡第２文化層遺物垂直分布図

第33表　大割遺跡第2文化層（IX_U 4，5，7～11ブロック）出土石器組成表

	ナイフ形石器	石錐	掻器	楔形石器	石斧	二次加工剥片	使用痕剥片	剥片	削片	砕片	石核	敲石	礫	計	総重量 g
珪質頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	5	−	−	1	−	−	6	44.29
珪質頁岩 2	−	−	1	−	−	−	1	3	−	7	−	−	−	12	17.70
珪質頁岩 3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	1.00
珪質頁岩 4	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	2	10.63
珪質頁岩 5	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	11.55
珪質頁岩 6	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	2	11.59
珪質頁岩 7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	5	−	−	−	5	1.32
珪質頁岩 8	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	2.50
珪質頁岩 9	−	−	−	−	−	2	−	2	−	3	−	−	−	7	18.10
珪質頁岩 10	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	48.08
頁岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	94.70
頁岩 2	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	16.18
頁岩 3	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	1	20.04
粘板岩 1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	2	−	−	−	3	7.13
粘板岩 2	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	53.93
粘板岩 3	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	2	24.67
砂岩 1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	3	4	79.98
ホルンフェルス 1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	8.65
チャート 1	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	−	−	−	4	2.90
凝灰岩 1	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	2	13.47
凝灰岩 2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	3	0.14
流紋岩 1	−	−	−	−	−	−	1	2	−	1	1	−	−	5	42.43
黒曜石 1	1	−	−	2	−	−	2	17	−	232	2	−	−	256	93.09
黒曜石 2	−	−	−	−	−	−	−	2	−	175	−	−	−	177	14.89
黒曜石 3	2	−	−	2	−	1	−	19	1	72	1	−	−	98	60.73
黒曜石 4	2	1	−	4	−	1	2	16	1	29	1	−	−	57	98.63
黒曜石 5	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2.26
黒曜石 6	−	−	−	−	−	−	−	1	−	123	−	−	−	124	2.55
（識別不能）															
瑪瑙 1	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	12.15
安山岩 1	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	2	1.99
珪質頁岩計	−	−	1	−	−	2	1	16	−	16	2	−	−	38	166.76
頁岩計	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	1	−	3	130.92
粘板岩計	−	−	−	−	1	−	−	2	−	3	−	−	−	6	85.73
砂岩計	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	3	4	79.98
ホルンフェルス計	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	8.65
チャート計	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	−	−	−	4	2.90
凝灰1岩計	−	−	−	−	−	−	1	1	−	3	−	−	−	5	13.61
流紋岩計	−	−	−	−	−	−	1	2	−	1	1	−	−	5	42.43
黒曜石計	6	1	−	8	−	2	4	55	2	631	4	−	−	713	272.15
瑪瑙計	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	12.15
安山岩計	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	2	1.99
総計	7	1	1	8	1	5	7	84	2	655	7	1	3	782	817.27
百分率	0.9	0.1	0.1	1.0	0.1	0.6	0.9	10.7	0.3	83.8	0.9	0.1	0.4	99.9	



第87図　大割遺跡第２文化層出土石器組成

⑭大割遺跡第２文化層のまとめ(1) 遺跡の構造

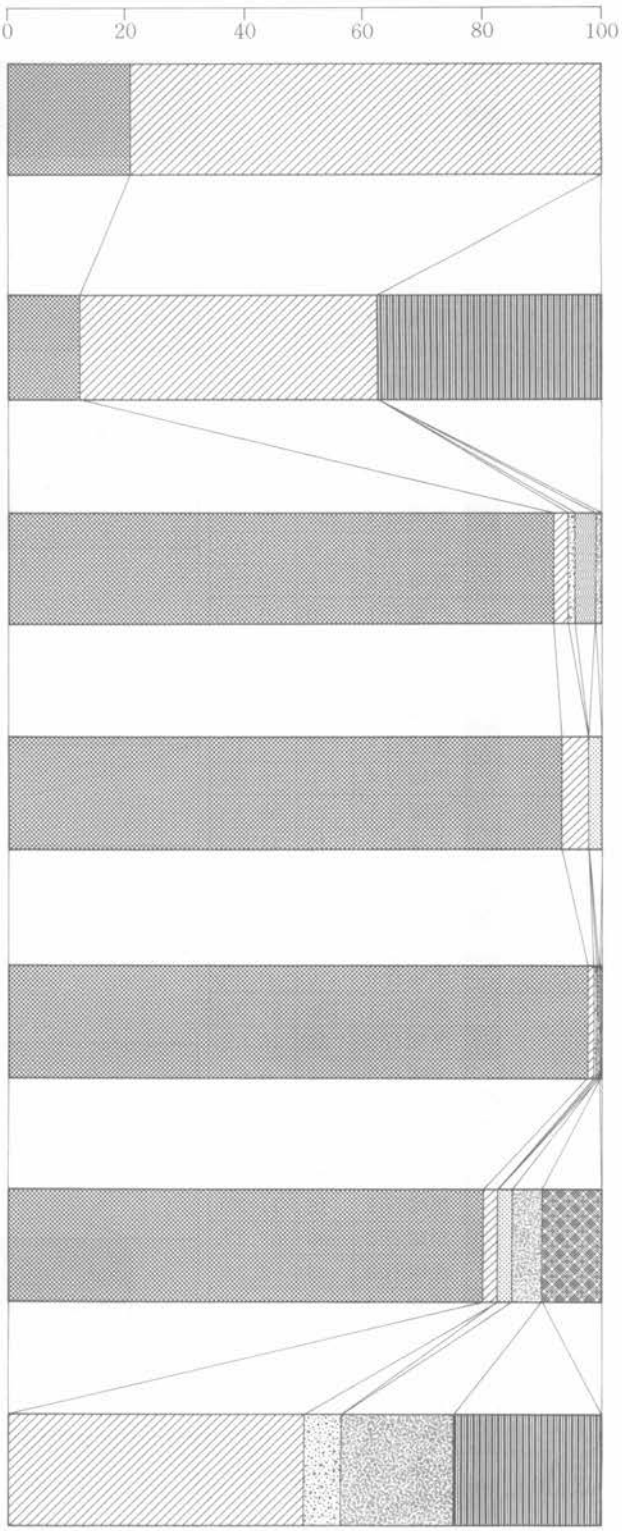
既に述べたように、当文化層の過半のブロックは共有母岩を介して連環をなしている。遺跡東半、E3、E4、F3区に集中的に分布するIX_U4～11ブロックが該当するが、それらの石材組成を見ると明らかに二分される傾向を持つことが判る。それをグラフ化したのが第88図であるが、IX_U4、5、11ブロックは珪質頁岩を主体としており、黒曜石はあっても客体的である。それに対してIX_U7～10ブロックの主体は圧倒的に黒曜石である。黒曜石を主体に持つブロックは中心的位置に分布し、また概して遺物出土点数が多く、それぞれブロック内で母岩消費が行われた形跡を持つ。珪質頁岩を主体にもつブロックはいずれも出土点数が少ない。

黒曜石は全体で母岩番号１～５の計５個体が識別された。また微細な砕片で識別が不能のものを黒曜石６としたが、それらの殆どは黒曜石１か黒曜石２のはずである。上記黒曜石５個体のうち、黒曜石５はIX_U8ブロック出土のナイフ形石器１点のみであり、遺跡内で母岩消費が行われたのは黒曜石１～４の４個体である。各ブロックにおいては、主体的に含まれる個体はそれぞれ異なるが、それをグラフ化したのが第89図である。黒曜石の各個体毎の分布状況を概観すれば次の通りである。

黒曜石１：IX_U9ブロックに集中し、特にクラスターｂに圧倒的である。ナイフ形石器と石核の接合資料はクラスターａから出土しているが、主として隣接しあったクラスターａ及びクラスターｂで消費されていると見られる。遺物の大半は blunting chip と考えられる微細な砕片である。またIX_U5ブロックへは石器として１点搬出されている。

黒曜石２：この個体もIX_U9ブロックに集中する。黒曜石１とは逆にクラスターｃに特に多く含まれる。やはり微細な砕片が殆どを占める。しかし遺跡内には、石器は１点も残されていなかった。

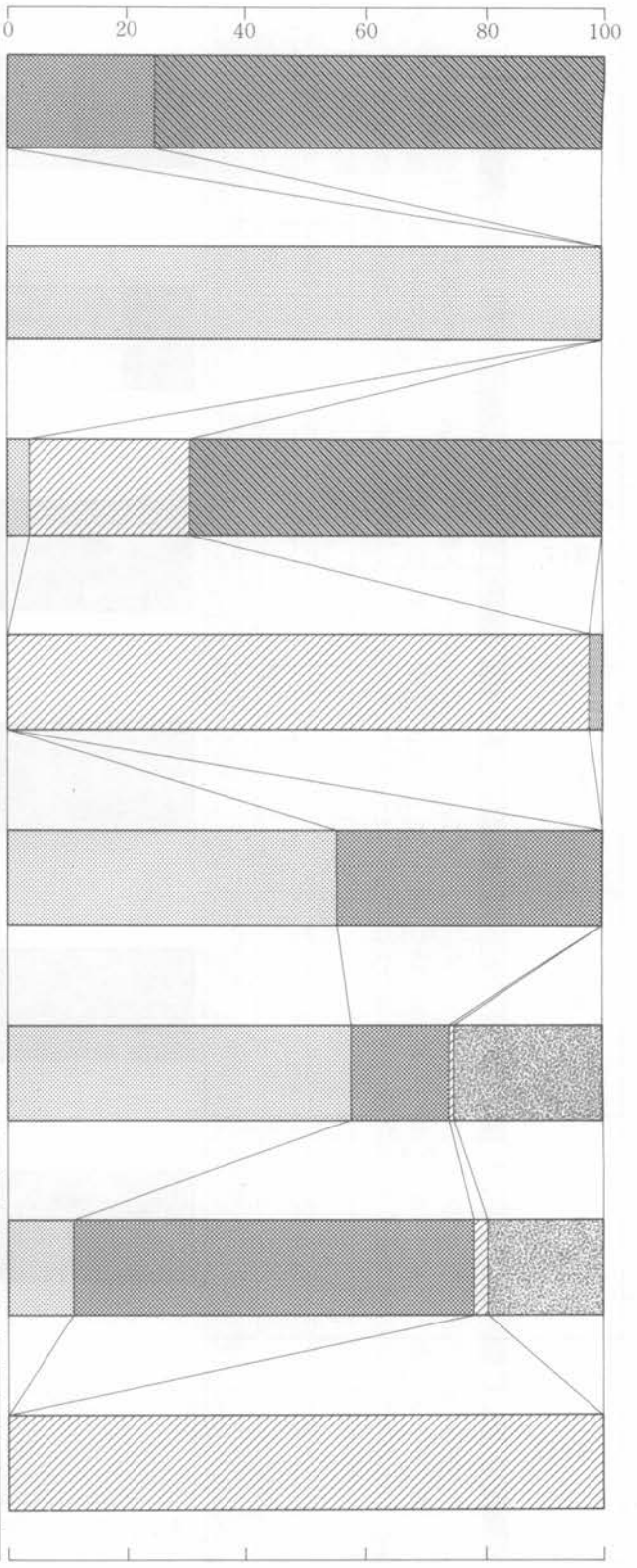
ⅨU4	黒曜石	4	21.1%
	珪質頁岩	15	78.9%
	凝灰岩	0	0.0%
	流紋岩	0	0.0%
	安山岩	0	0.0%
	頁岩・砂岩	0	0.0%
	粘板岩	0	0.0%
	チャート	0	0.0%
	瑪瑙	0	0.0%
ⅨU5	黒曜石	1	12.5%
	珪質頁岩	4	50.0%
	凝灰岩	0	0.0%
	流紋岩	0	0.0%
	安山岩	0	0.0%
	頁岩・砂岩	0	0.0%
	粘板岩	3	37.5%
	チャート	0	0.0%
	瑪瑙	0	0.0%
ⅨU7	黒曜石	78	91.8%
	珪質頁岩	2	2.4%
	凝灰岩	1	1.2%
	流紋岩	3	3.5%
	安山岩	0	0.0%
	頁岩・砂岩	1	1.2%
	粘板岩	0	0.0%
	チャート	0	0.0%
	瑪瑙	0	0.0%
ⅨU8	黒曜石	41	93.2%
	珪質頁岩	2	4.5%
	凝灰岩	0	0.0%
	流紋岩	0	0.0%
	安山岩	1	2.3%
	頁岩・砂岩	0	0.0%
	粘板岩	0	0.0%
	チャート	0	0.0%
	瑪瑙	0	0.0%
ⅨU9	黒曜石	557	97.7%
	珪質頁岩	5	0.9%
	凝灰岩	3	0.5%
	流紋岩	2	0.4%
	安山岩	0	0.0%
	頁岩・砂岩	2	0.4%
	粘板岩	0	0.0%
	チャート	0	0.0%
	瑪瑙	1	0.2%
ⅨU10	黒曜石	32	80.0%
	珪質頁岩	1	2.5%
	凝灰岩	0	0.0%
	流紋岩	0	0.0%
	安山岩	1	2.5%
	頁岩・砂岩	2	5.0%
	粘板岩	0	0.0%
	チャート	4	10.0%
	瑪瑙	0	0.0%
ⅨU11	黒曜石	0	0.0%
	珪質頁岩	8	50.0%
	凝灰岩	1	6.3%
	流紋岩	0	0.0%
	安山岩	0	0.0%
	頁岩・砂岩	3	18.8%
	粘板岩	4	25.0%
	チャート	0	0.0%
	瑪瑙	0	0.0%



※ホルンフェルスは粘板岩に含まれる。

第88図　大割遺跡ⅨU4～11ブロック石材組成

ⅨU4	黒曜石1	0	0.0%
	黒曜石2	1	25.0%
	黒曜石3	0	0.0%
	黒曜石4	3	75.0%
	黒曜石5	0	0.0%
	黒曜石6	0	0.0%
ⅨU5	黒曜石1	1	100.0%
	黒曜石2	0	0.0%
	黒曜石3	0	0.0%
	黒曜石4	0	0.0%
	黒曜石5	0	0.0%
	黒曜石6	0	0.0%
ⅨU7	黒曜石1	3	3.8%
	黒曜石2	0	0.0%
	黒曜石3	21	26.9%
	黒曜石4	54	69.2%
	黒曜石5	0	0.0%
	黒曜石6	0	0.0%
ⅨU8	黒曜石1	0	0.0%
	黒曜石2	0	0.0%
	黒曜石3	40	97.6%
	黒曜石4	0	0.0%
	黒曜石5	1	2.4%
	黒曜石6	0	0.0%
ⅨU9a	黒曜石1	21	55.3%
	黒曜石2	17	44.7%
	黒曜石3	0	0.0%
	黒曜石4	0	0.0%
	黒曜石5	0	0.0%
	黒曜石6	0	0.0%
ⅨU9b	黒曜石1	186	57.9%
	黒曜石2	53	16.5%
	黒曜石3	2	0.6%
	黒曜石4	0	0.0%
	黒曜石5	0	0.0%
	黒曜石6	80	24.9%
ⅨU9c	黒曜石1	15	11.2%
	黒曜石2	90	67.2%
	黒曜石3	3	2.2%
	黒曜石4	0	0.0%
	黒曜石5	0	0.0%
	黒曜石6	26	19.4%
ⅨU10	黒曜石1	0	0.0%
	黒曜石2	0	0.0%
	黒曜石3	32	100.0%
	黒曜石4	0	0.0%
	黒曜石5	0	0.0%
	黒曜石6	0	0.0%



第89図　大割遺跡ⅨU4～10ブロック黒曜石母岩別組成

黒曜石３：IX_U7、８、10ブロックに多く含まれていた。いずれのブロックも砕片が過半を占めているが、中での顕著な相違としてIX_U10ブロックにナイフ形石器他の石器が含まれている点であろう。またIX_U9ブロッククラスターｂにはIX_U10ブロックのものと同種のナイフ形石器が搬出されている。

黒曜石４：IX_U7ブロックに集中する。ここではナイフ形石器、石錐を遺存するが、その他に楔形石器としたものが多い。しかしそれらは本来的な楔形石器と言うより、両極剝片及び両極石核としての性格を付与し得る可能性が高い。一方IX_U4ブロックにも３点の遺物が存在したが、それらはいずれも石器として搬入されたものである。

以上のことから、黒曜石の石器生産は黒曜石１、２を消費した系列(IX_U9ブロック)と、黒曜石３、４を消費した系列(IX_U7、８、10ブロック)の２単位が認められることになる。その両単位の間には微量の搬出搬入関係があり、おそらく同時併存は疑いないと考えられる。前者をＡ系列、後者をＢ系列とする。Ａ系列、すなわちIX_U9ブロックの３つのクラスターは連続的に形成されたと思われるが、黒曜石２の石器と石核はすべてが持ち去られ黒曜石１の石器はその一部が残されていることを考慮すると、母岩消費の順序があったとすれば黒曜石１→黒曜石２という順序が考えられ、同時にｂ→ｃというクラスターの形成順序も想定される。一方Ｂ系列では、まずIX_U7ブロックで黒曜石４が消費された後黒曜石３が消費され始め、次にIX_U10ブロックに移り、さらにIX_U8ブロックに移ったと思われるが、最終的に石核は遺存しない。このＢ系列のあり方は石器生産が断続的であったことを思わせる。実際、IX_U8ブロックのナイフ形石器２点は遺跡外より搬入されたものである。

黒曜石を主体として持たないブロック(IX_U4、５、11)は他の石材を集中的に消費した形跡もなく、石器生産とは別の性格を考慮すべきであろう。その場合、IX_U11ブロックはIX_U10ブロックに付随する可能性が高く、またIX_U4ブロックはIX_U7ブロックに、IX_U5ブロックはIX_U9ブロックにそれぞれ付随する可能性が考えられる。IX_U7ブロックとIX_U11ブロックが同じ凝灰岩1の石刃を保有するのもIX_U7ブロックとIX_U10ブロックの関係から首肯できよう。

したがって上記のことから、大割遺跡第２文化層の中核をなすブロック群を２単位の生活単位からなる集落の痕跡と見ることができようか。なお本項で検討の対象とならなかったブロックについては、存在位置が分散的である以上に、それらの内容はいずれも独立的であった。

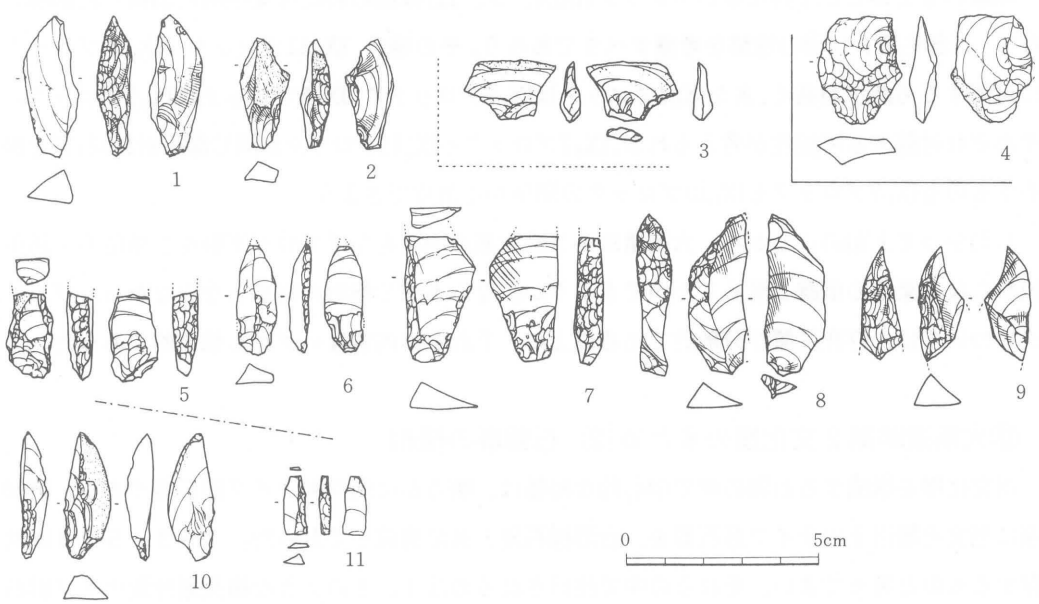
⑮大割遺跡第２文化層のまとめ(2) 石器群の様相

当文化層を構成する石器の中で中心的な器種は、明らかに剝片製ナイフ形石器である。第90図に当文化層出土のナイフ形石器を、台形様石器と共に集成しておいた。１～３、５～９は共存するものと考えてよい。それらの中で注目されるのは１、２のような横長剝片製ナイフ形石器である。特に１は石核と接合しており、時期は隔絶しているものの、織笠昭の言う“殿山技

法”[1]との関係が問題となるところである。本来“殿山技法”の“技術的特徴”とされるのは、石核となる剝片を折断することによって生産される剝片の幅を規定すること、連続的な剝離工程であること、剝離角が55°前後であることなどである。そういった点を比較すれば当資料はそれらの特徴に該当するものではないことが判る。実際問題、そもそも当資料は底面を有しておらず、“殿山技法”とも“国府型(類似)ナイフ”とも無縁のものであろう。しかしながらかかる横長剝片製ナイフ形石器の類例は、該期の石器群の中には乏しかったのは事実である。横剝ぎの技法が時期と地域とを問わず普遍的に存在し得るものとしても、重要な資料を追加した結果になったとは言える。

冒頭に述べたことであるが、当文化層には石刃が微量含まれるに過ぎない。IX層上部からVII層にかけては石刃が欠落する傾向があることは既知の事実であり、当文化層出土の石器群はその事実に合致することになる。しかしそこには一定の組成は示されているであろうものの、ひとつの集団の持っていた完結した石器組成ではあり得ない。また微量ながら含まれる石刃に対する評価も明確になされなければならないだろう。さらにもうひとつの問題は楔形石器についてである。黒曜石を多く含む主要なブロックには必ず楔形石器が存在していたが、それらはピエス・エスキーユとしてより両極石核及び両極剝片として位置付け得る可能性を既に述べた。田村隆は第2黒色帯上部に楔形石器が卓越することを、石器群に対する両極技法の大きな関与として指摘している[2]が、当文化層においてもその指摘を充分考慮する必要があり、一般的な剝片剝離の他に両極技法による石器生産過程が付加されていたと見ることができようか。

ところでIX$_U$12ブロックに関しては、小規模ブロックで出土点数も僅かであるが、他のブロッ



第90図　大割遺跡第2文化層のナイフ形石器と台形様石器

クとは若干異なった石器を出土している。第90図4の台形様石器がそれで、3の台形様石器の加工が比較的急斜で基部の作出を企図しているのに対し、4は平坦剝離による側縁調整となっている。このタイプの台形様石器はIX層上部～VII層段階になるときわめて類例が乏しくなるが、対比するとすれば、佐倉市の芋窪遺跡[3]で重要な石器群が出土している。出土層準はほぼ同じと考えられる。大割遺跡では第2文化層の主体より若干上位に位置する可能性を示唆したが、その当否は別としても台形様石器の系譜を明確にする上で貴重な資料が追加されたことは確かであろう。

註1　織笠昭「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』72-4 1987

2　田村隆・野口行雄「第5章芋窪遺跡」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』(財)千葉県文化財センター 1989

3　前掲註2

5．池花遺跡第1文化層

①概観

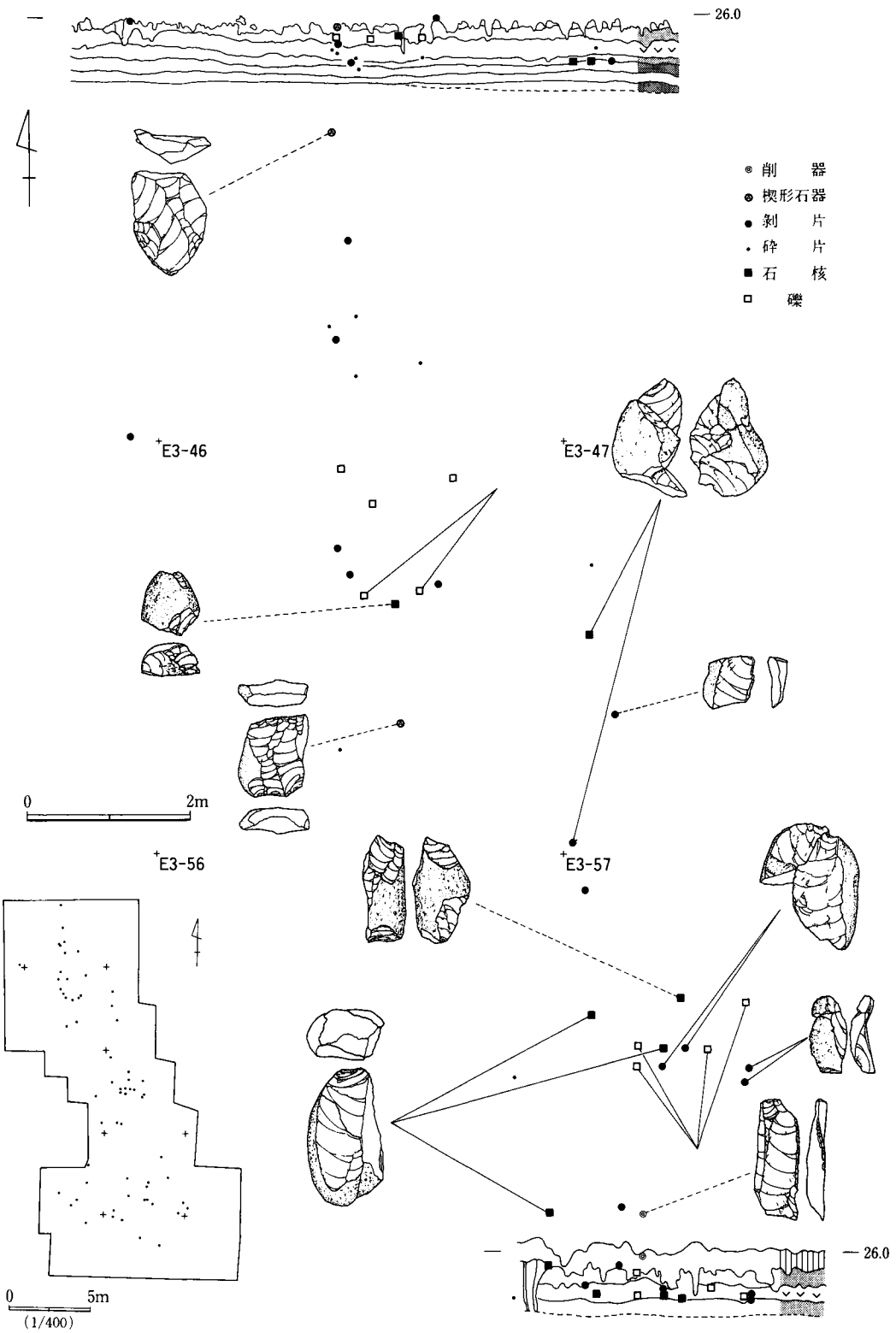
VI層に生活面を想定できる文化層である。内黒田遺跡群中では池花遺跡の東縁部に2つのブロックが所在したに過ぎない。VI1ブロック、VI2ブロックとする。両ブロックは相接するように検出されたが、含まれる石器群は明らかに異なる。VI1ブロックには両極打法が圧倒的に多用され、ピエス・エスキーユの他に両極石核や両極打法によって砕けた石片などが殆どを占める。VI2ブロックは黒曜石の剝片製ナイフ形石器によって特徴づけられる石器群である。両ブロックには石刃が客体的に含まれている。両ブロック間には共有母岩はない。

②VI1ブロック

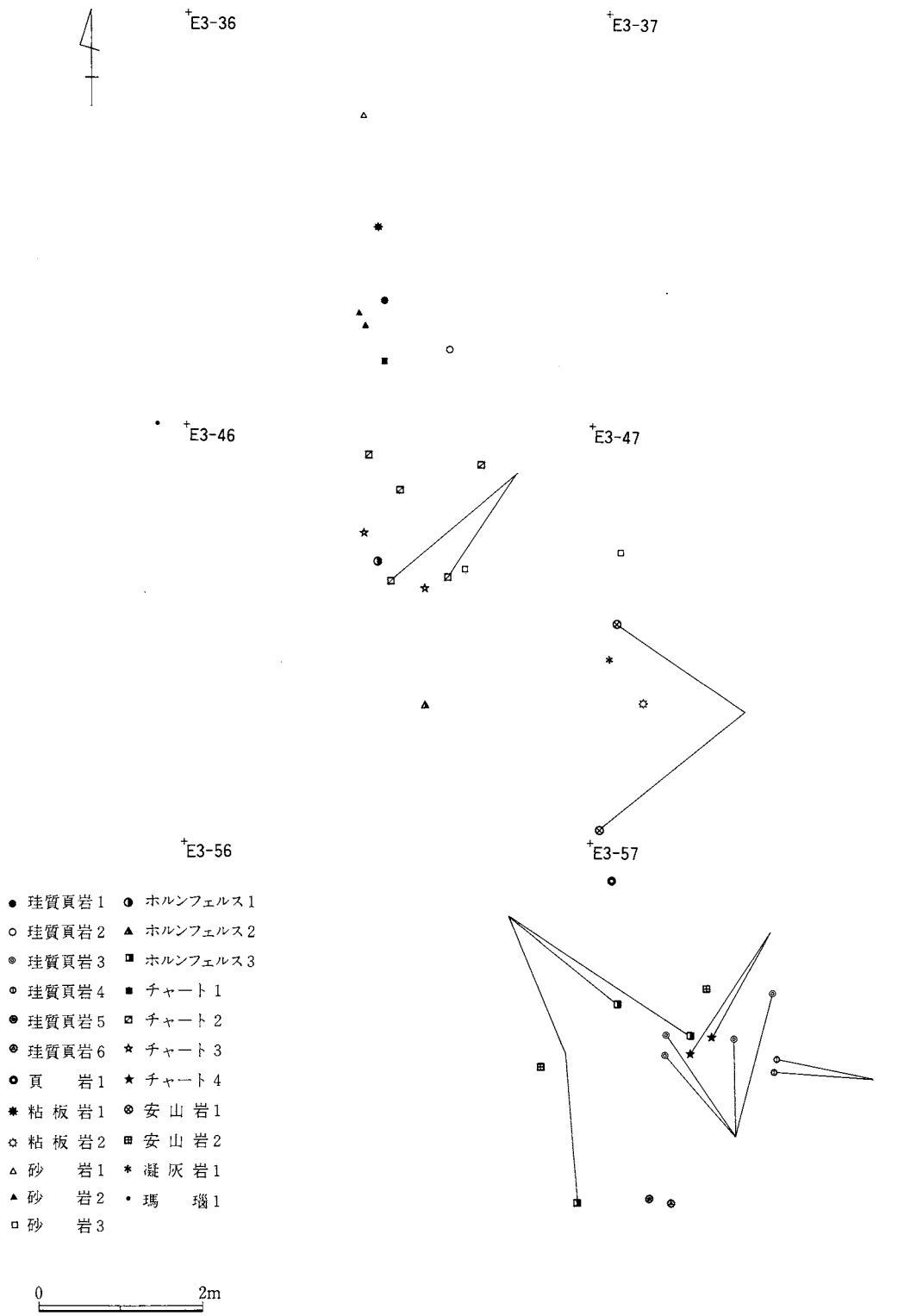
出土状況（第91図、第92図、図版14-1）　ブロックは南北に非常に長く、見方によっては2つのブロックと見ることもできよう。全体で純粋に南北方向には13.2mを測り、東西には7.6mあるが、北半部(仮にクラスターaとできようか)は南北7.5m、東西6.0m、南半部(仮にクラスターbとする)は南北4.5m、東西2.9mの範囲に分布する。VI1a、VI1b各ブロックの中央部にはやや遺物が集中する箇所があるが、概して分布密度は疎らである。接合資料は6個体あるが、砕けた石片同士や両極打法によって剝離したものである故か、距離を隔てて接合するものはない。垂直方向には変動が大きい。投影図ではVI層からVII層に及んでいる。特に北半部クラスターaではむしろVI層に包含される石器のほうが少ない。南半部クラスターbではやはり上下動、特に上方への動きが激しいが、VI層に安定したレベルを有していると言える。母岩別資料(と言っても単体の資料も多いが)の分布は、小さくまとまる傾向にある。

出土遺物（第93図、第94図、図版40）　1は石刃の背面右側縁に連続的な小剝離を施す削器である。背面構成から見ると単設打面のようであるが、左側縁に古い剝離痕が残されており、打面が転移されていることが解る。2と3は剝片である。3は折れ面で接合しているが、この折れ面は剝片剝離時に同時に生じたものであると考えられる。2は粘板岩2、3は珪質頁岩4。4、5はピエス・エスキーユである。4は粘板岩起源ホルンフェルスの偏平な礫を素材としている。5は硬質砂岩の剝片製。

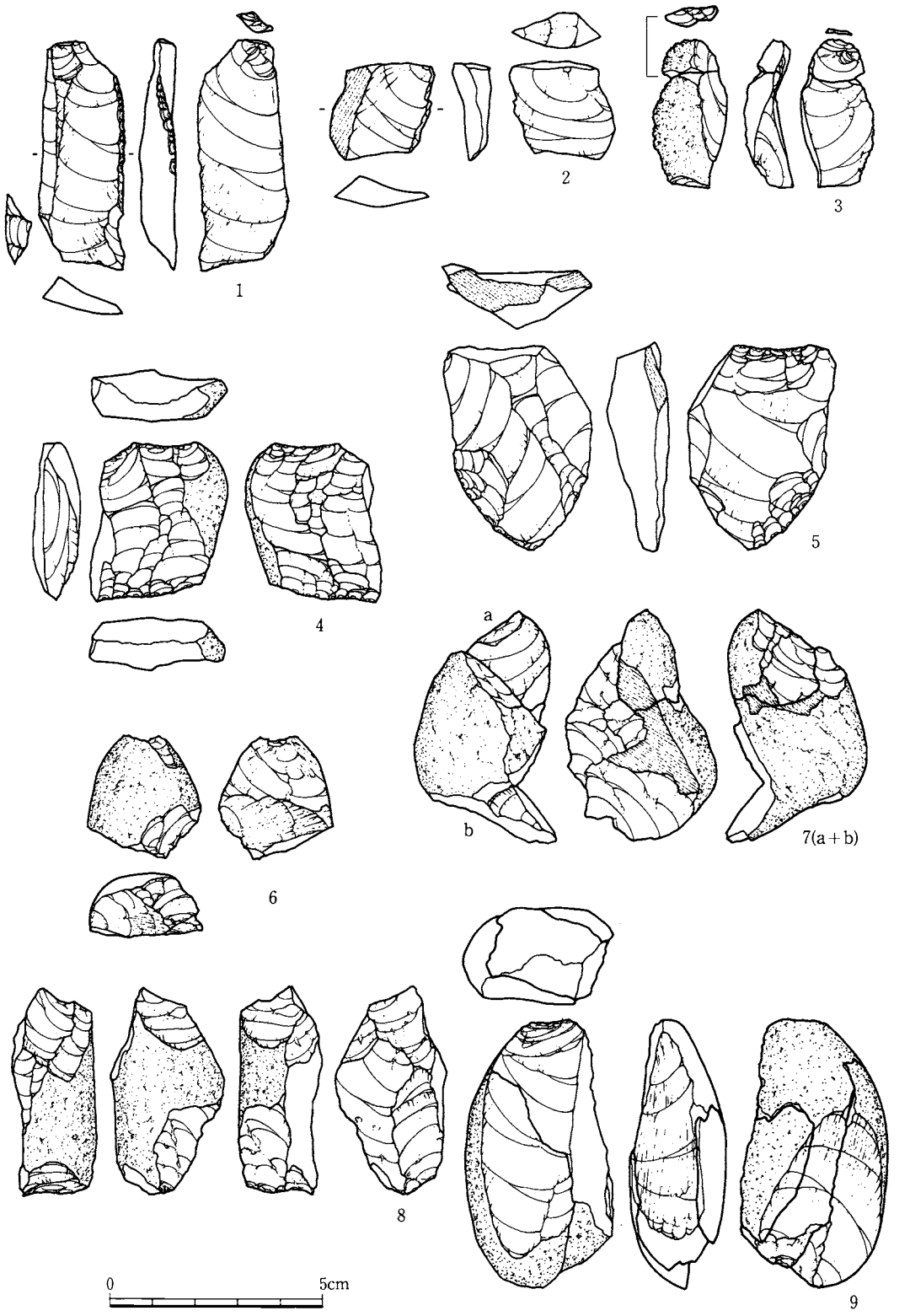
6～10は両極打法による石核及び剝片である。石核の典型的なものが8と9で、上下端に両極加撃による潰れが観察される。9はさらに節理面で3つに割れている。6、7はやや複雑な割れ方をしているが、上端にはやはり潰れが残されている。10は剝片2点の接合資料である。同じく上端に潰れが観察されるが、10aは概ね節理面で割れ、10bは残った石核からさらに剝離されている。6:チャート3、7:安山岩1、8:安山岩2、9:ホルンフェルス(粘板岩質)、10:チャート4。



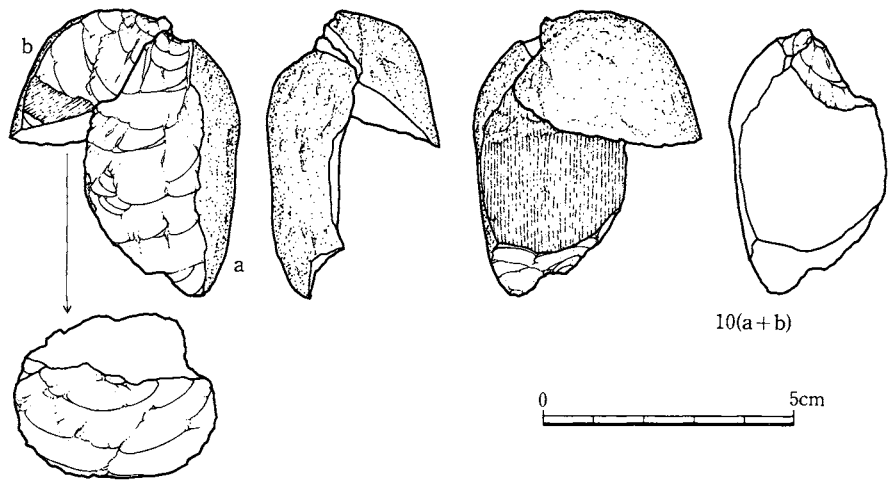
第91図　池花遺跡Ⅵ1ブロック遺物分布状況（1/80）



第92図　池花遺跡Ⅵ1ブロック母岩別分布（1/80）



第93図　池花遺跡Ⅵ1ブロック出土石器(1)(2/3)



第94図　池花遺跡VI1ブロック出土石器(2)（2/3）

第34表　池花遺跡VI 1 ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	削器	E3-57-14	珪質頁岩	6	55.7	20.7	8.9	7.86	64°	−	○
2	剥片	E3-47-4	粘板岩	2	23.9	24.9	9.0	3.94	−	−	−
3	剥片	E3-57-11,12	珪質頁岩	4	34.9	17.4	9.9	4.68	−	○	−
4	楔形石器	E3-46-12	ホルンフェルス	2	37.2	32.3	11.0	15.83	−	−	−
5	楔形石器	E3-36-1	砂岩	1	47.1	33.2	12.1	18.66	−	−	−
6	石核	E3-46-3	チャート	3	29.4	26.6	15.8	12.80	−	−	−
7a	剥片	E3-47-5	安山岩	1	22.3	22.4	15.1	7.41	−	−	−
7b	石核	E3-47-2	安山岩	1	51.4	34.9	34.1	44.52	−	−	−
8	石核	E3-57-4	安山岩	2	48.3	26.3	23.7	26.47	−	−	−
9	石核	E3-56-2 E3-57-2,7	ホルンフェルス	3	62.1	35.3	21.1	52.21	−	−	−
10a	剥片	E3-57-16	チャート	4	53.7	31.3	15.6	22.23	−	−	−
10b	剥片	E3-57-8	チャート	4	33.4	39.4	20.4	25.05	−	−	−

③VI 2 ブロック

出土状況（第95図、第96図、図版14-2）　VI 1 ブロックの南に近接して検出されたブロックである。南北4.2m、東西8.0m の範囲に分布するが、分布密度はVI 1 ブロックと同様疎らである。またブロックの中で密度の高い箇所も存在しない。石材が黒曜石 1 を除いて単体ばかりであり、接合資料はない。垂直方向には大きなレベル差があり、約0.8m を測る。投影図で見ると多くがVI層前後に位置するが、極端な例はソフト・ローム層よりも上位に浮いているものすらあった。当ブロックは製品や、顕著な加工がなくても使用痕が見られたり、石器としての使用に充分耐えるものが多く、そういった石器とそれ以外との分布の偏りはとくに指摘できないが、ナイフ

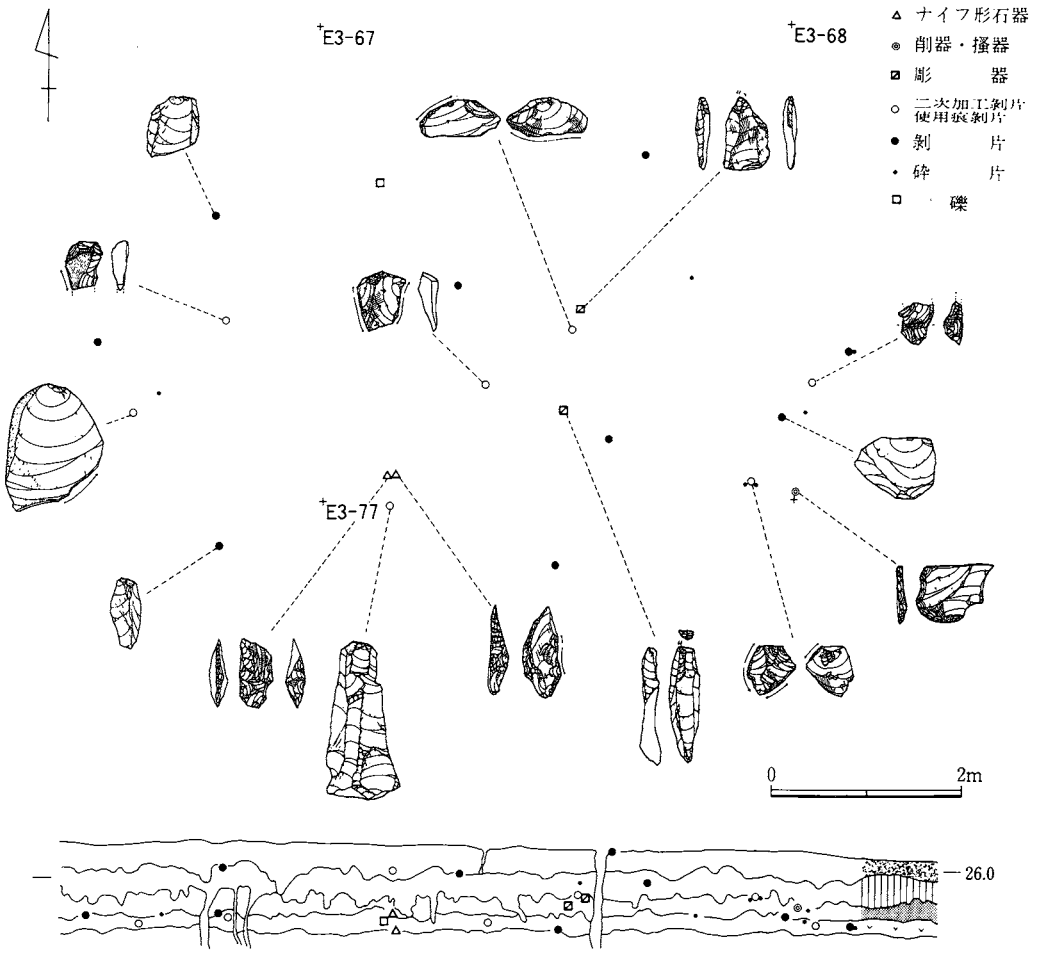
第35表　池花遺跡VI 1 ブロック出土石器組成表

	削　器	楔形石器	剥　片	砕　片	石　核	礫	計	総重量g
珪質頁岩 1	−	−	−	1	−	−	1	0.26
珪質頁岩 2	−	−	−	1	−	−	1	0.60
珪質頁岩 3	−	−	−	1	−	4	5	44.66
珪質頁岩 4	−	−	1	−	−	−	1	4.68
珪質頁岩 5	−	−	1	−	−	−	1	2.47
珪質頁岩 6	1	−	−	−	−	−	1	7.86
頁　岩 1	−	−	1	−	−	−	1	9.09
粘板岩 1	−	−	1	−	−	−	1	3.88
粘板岩 2	−	−	1	−	−	−	1	3.94
砂　岩 1	−	1	−	−	−	−	1	18.66
砂　岩 2	−	−	1	1	−	−	2	20.31
砂　岩 3	−	−	1	1	−	−	2	34.59
ホルンフェルス 1	−	−	1	−	−	−	1	45.81
ホルンフェルス 2	−	1	−	−	−	−	1	15.83
ホルンフェルス 3	−	−	−	−	1	−	1	52.21
チャート 1	−	−	−	1	−	−	1	0.37
チャート 2	−	−	−	5	−	−	5	14.29
チャート 3	−	−	1	−	1	−	2	14.16
チャート 4	−	−	2	−	−	−	2	47.28
瑪　瑙 1	−	−	1	−	−	−	1	1.04
安山岩 1	−	−	1	−	1	−	2	51.93
安山岩 2	−	−	−	1	1	−	2	27.20
珪質頁岩計	1	−	2	3	−	4	10	60.53
頁　岩計	−	−	1	−	−	−	1	9.09
粘板岩計	−	−	2	−	−	−	2	7.82
砂　岩計	−	1	2	2	−	−	5	73.56
ホルンフェルス計	−	1	1	−	1	−	3	113.85
チャート計	−	−	3	6	1	−	10	76.10
瑪　瑙計	−	−	1	−	−	−	5	1.04
安山岩計	−	−	1	1	2	−	4	79.13
総　計	1	2	13	12	4	4	36	421.12
百分率	2.8	5.6	36.1	33.3	11.1	11.1	100.0	

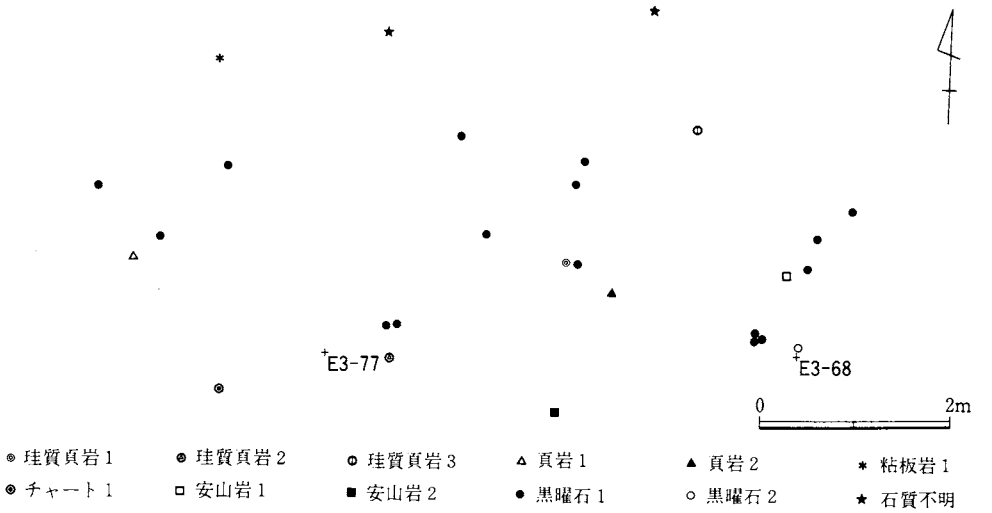
形石器2点が中央やや南よりに互いに接するように出土したのは注目される。

出土遺物（第97図、図版40）　黒曜石製の石器が多い。5の削器を除いてすべて同一母岩と考えられる。1、2はナイフ形石器である。1は縦長剥片素材で、鋭い尖頭部を有する2側縁加工の美麗なものである。左側縁のblunting加工は腹面側、背面側双方から施されている。2は切出状の刃部を有する横長剥片素材のものである。加工は2側縁に丁寧に施されている。この2者は対照的なものであるが、ナイフ形石器の基本的な組成を構成するものであろう。ともに黒曜石1。

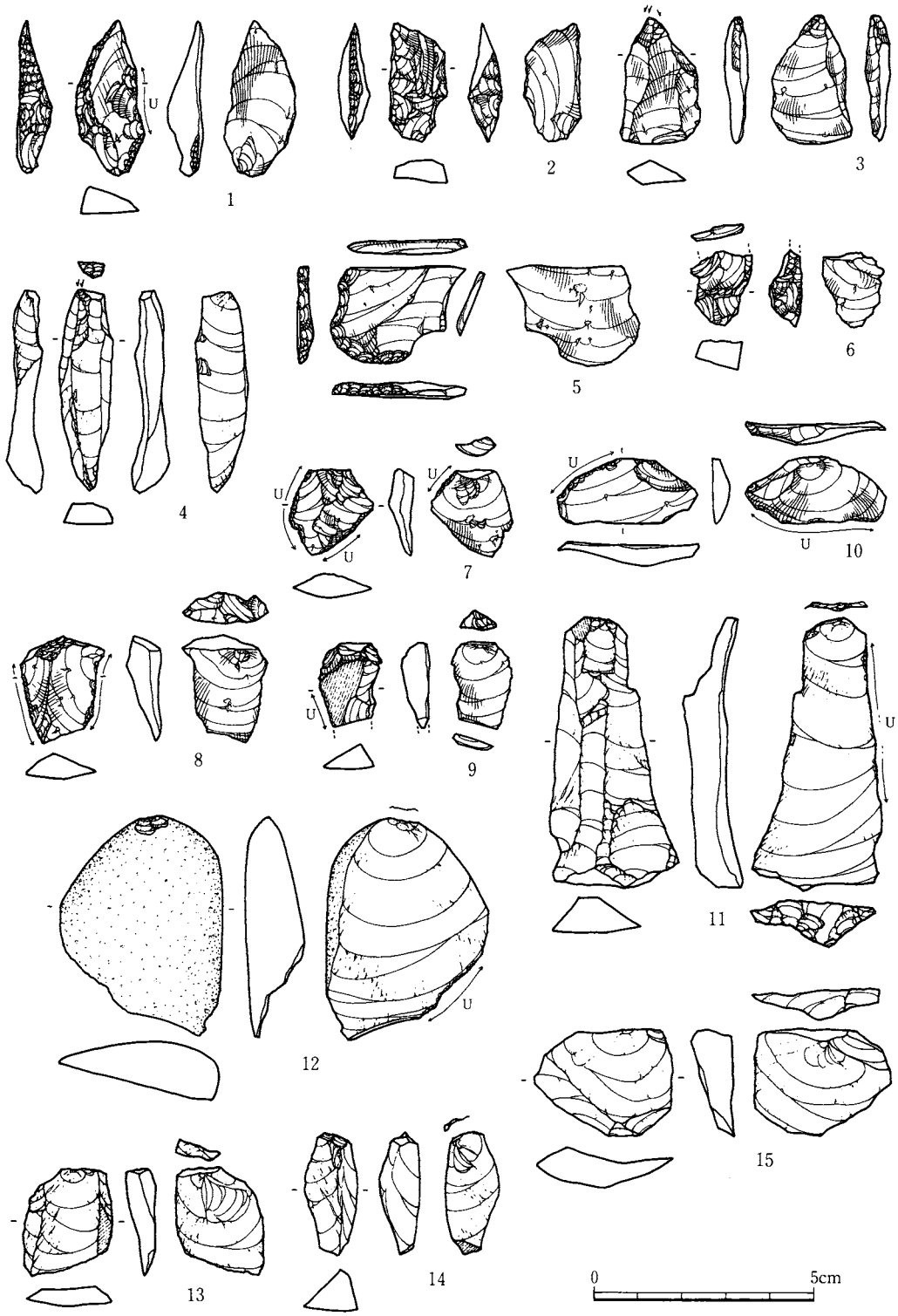
3、4は彫器である。黒曜石1の剥片の打面部側から両側縁に樋状剥離が加えられている。



第95図　池花遺跡Ⅵ2ブロック遺物出土状況（1/80）



第96図　池花遺跡Ⅵ2ブロック母岩別分布（1/80）



第97図　池花遺跡Ⅵ2ブロック出土石器（2/3）

第36表　池花遺跡VI 2 ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	E3-67-14	黒曜石	1	35.8	14.6	7.8	2.97	62°	−	○
2	ナイフ形石器	E3-67-7	黒曜石	1	24.3	13.4	7.3	1.96	28°	−	−
3	彫刻刀形石器	E3-67-3	黒曜石	1	28.9	18.4	5.7	2.36	78°	−	−
4	彫刻刀形石器	E3-67-6	珪質頁岩	1	45.1	7.2	9.1	3.54	88°	−	−
5	削器	E3-68-2	黒曜石	2	22.3	31.4	3.7	2.59	36°	−	−
6	二次加工剥片	E3-68-4	黒曜石	1	16.9	13.4	7.3	1.19	−	○	−
7	使用痕剥片	E3-67-15	黒曜石	1	20.4	17.4	6.0	1.47	−	−	○
8	使用痕剥片	E3-67-13	黒曜石	1	22.8	19.3	7.6	2.06	−	−	○
9	使用痕剥片	E3-66-1	黒曜石	1	18.8	13.7	6.9	1.31	−	○	○
10	使用痕剥片	E3-67-4	黒曜石	1	14.5	31.8	4.9	1.64	−	−	○
11	使用痕剥片	E3-77-2	珪質頁岩	2	60.5	29.3	10.1	13.21	−	−	○
12	使用痕剥片	E3-66-4	頁岩	1	51.0	37.3	12.6	25.44	−	−	○
13	剥片	E3-66-2	粘板岩	1	24.2	20.1	5.8	2.45	−	−	−
14	剥片	E3-76-1	チャート	1	27.2	11.9	9.4	2.40	−	−	−
15	剥片	E3-67-10	安山岩	1	24.9	31.8	8.3	4.71	−	−	−

第37表　池花遺跡VI 2 ブロック出土石器組成表

	ナイフ形石器	削器	彫刻刀形石器	二次加工剥片	使用痕剥片	剥片	砕片	礫	計	総重量 g
珪質頁岩 1	−	−	1	−	−	−	−	−	1	3.54
珪質頁岩 2	−	−	−	−	1	−	−	−	1	13.21
珪質頁岩 3	−	−	−	−	−	−	1	−	1	0.40
珪質頁岩 4	−	−	−	−	−	1	−	−	1	2.50
頁岩 1	−	−	−	−	1	−	−	−	1	25.44
頁岩 2	−	−	−	−	−	1	−	−	1	1.65
粘板岩 1	−	−	−	−	−	1	−	−	1	2.45
チャート 1	−	−	−	−	−	1	−	−	1	2.40
黒曜石 1	2	−	1	1	4	2	7	−	17	17.56
黒曜石 2	−	1	−	−	−	−	−	−	1	2.59
安山岩 1	−	−	−	−	−	1	−	−	1	4.71
安山岩 2	−	−	−	−	−	1	−	−	1	5.21
石質不明 1	−	−	−	−	−	1	−	−	1	7.14
石質不明 2	−	−	−	−	−	−	−	1	1	0.99
合計	2	1	2	1	6	9	8	1	30	89.79

先端角はおよそ78°。4は彫器かどうかの判断に微妙なものを残すが、珪質頁岩1の石刃の打面部から左側縁に樋状剝離が加えられていると思われる。先端角はおよそ88°。なおこの石器は調整打面を持つ。5は削器である。黒曜石であるが、唯一他とは別母岩である。3方に折断面を持ち、下縁から左側縁にかけて刃部が形成されている。

6はナイフ形石器の基部の可能性がある石器。右側縁に二次加工痕が見えるが、決して丁寧なものではなく、加工途中で破損した未製品と考えるべきかもしれない。7～10には黒曜石製

の使用痕を有する剝片を示した。それらのうち7～9は類似性の高いもので、小振りの剝片の側縁部に例外なく連続的な微細剝離痕が観察される。顕著な加工痕を持たないため、独立した器種とすることができないが、特定の機能を付与されていた石器の可能性がある。10は横長剝片であるが刃こぼれの状況が7～9によく似ており、同種の石器と言えるか。

11は両設打面の石刃。珪質頁岩2。腹面右側縁に微細な剝離痕が見えるが、明確な使用痕かどうかは判断が難しい。12は頁岩製の剝片である。末端の一部に刃こぼれが見られる。この剝片は打面部(上端)の観察から両極打法によって剝離されていると考えられるが、そうすると当ブロックとVI1ブロックとの関係を推測させる唯一の資料ということになる。

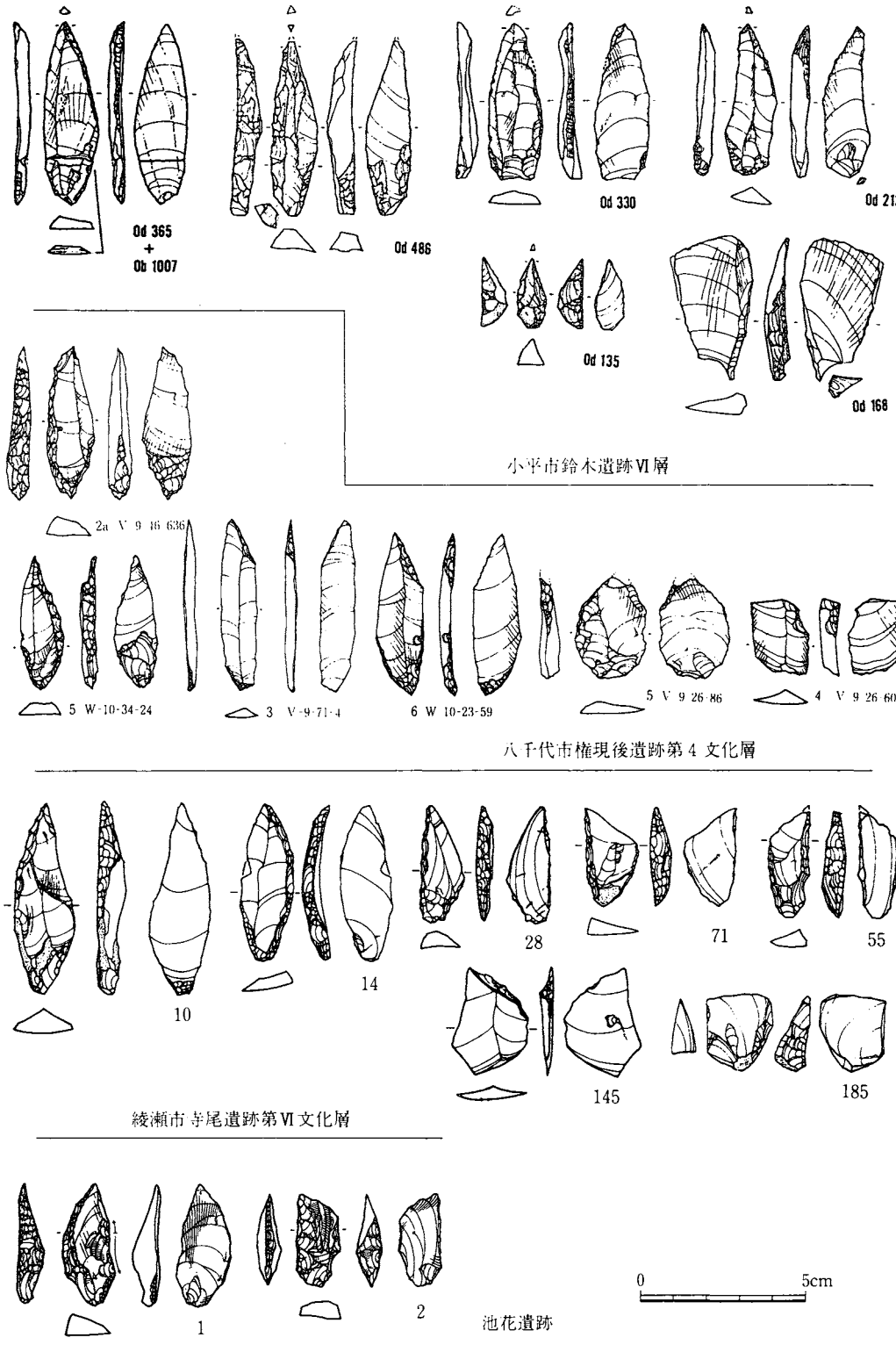
13～15に剝片を例示する。13は粘板岩製で、VI1ブロックの2とよく似ており、また同一母岩の可能性もない訳ではない。14はチャート製で断面三角形の小型品。15は風化の著しい安山岩である。

④池花遺跡第1文化層のまとめ

ブロックの構成　当文化層のブロック群は、明言はできないけれども、遺物分布の連続性や僅かながら共通要素として見られる両極打法から、同一集団によって残された、性格の異なるブロックの結合と考えたい。VI2ブロックには搬入されたと考えられる石器が主体的に分布し、このブロックが石器製作空間ではなく、生活空間もしくは何らかの作業空間であったのは明解である。他方VI1ブロックはほぼ全面的に両極打法に頼った石器(素材)製作空間と考えることができる。VI1ブロックの中でピエス・エスキーユと考えてよいと思われる石器は2点しかないが、両極打撃を多用したことがピエス・エスキーユの作出を目的としたのか、それとも他の石器素材をも得ようとしたのかは明確ではない。ただいずれにしても、やはり特定の作業を背景としたブロックではなかったかと考えられる。

石器群の様相　VI1ブロックが両極打法を多用したことは再三述べた通りであるが、ここではVI2ブロックについて少し考えて見たい。南関東地方におけるVI層(L3下部)段階の代表的な石器群としては、下総台地では八千代市権現後遺跡第4文化層[1]1武蔵野台地では小平市鈴木遺跡VI層[2]、相模野台地では綾瀬市寺尾遺跡第VI文化層[3]などがある(第98図)。該期の石材には黒曜石が多く選択されるようになることはこれまでにも指摘されているが、上記の3遺跡は黒曜石の組成比率が9割前後あるいはそれ以上である。そういった点では池花遺跡VI2ブロックも同じ傾向を持つと言える。しかし石器群の内容については若干の差異が見られる。

権現後遺跡は石刃が出土しており、ナイフ形石器もまず石刃素材と思われる細身のものが多い。横長剝片を素材とするナイフ形石器は、報告書で見る限り存在しない。鈴木遺跡も同様で、主体となるナイフ形石器は圧倒的に石刃素材であり、石刃も多数出土している。しかし寺尾遺跡の場合は異なる様相を示す。主たる石材として黒曜石が選択されているのは同様であるが、



第98図　Ⅵ層段階のナイフ形石器（1/2）

ナイフ形石器には縦長剥片素材と横長剥片素材の2者があり、縦長剥片素材のものは先鋭な尖頭部を有し、刃部の長いものが多いが、横長剥片素材のものは切出形の刃部を有するものが多く生産されている。鈴木遺跡では打面調整を伴う発達した石刃技法が見られ、また権現後遺跡でも鈴木遺跡のような石刃技法が垣間見られたのであるが、寺尾遺跡では石刃状の剥片も存在はするが、接合資料などから打面調整を行わず、打面転移が頻繁な工程が観察されている。つまりナイフ形石器の様相の違いと結合して、剥片剥離工程の違いが見られるのである。池花遺跡の場合、ナイフ形石器は僅か2点しか出土していないが、その2点が寺尾遺跡における代表的な2者と極めてよく類似している。また石核や接合資料を遺存しないが、剥片類から察するに一般的剥片剥離工程が主体で、調整打面を持つ石刃は客体的にしか含まれないという特徴を有する。寺尾遺跡では他に多量の折断剥片が出土しているが、池花遺跡の小型剥片類をそれらに対比することができるかも知れない。したがって池花遺跡第1文化層(VI2ブロック)の石器群は寺尾遺跡第VI文化層の石器群と親縁関係にあると指摘できる。

以上の事実は、ナイフ形石器に見るバラエティーの相違、背景となる剥片剥離工程の相違が決して地域差などで理解し得るものではないことを示している。寺尾、池花両遺跡における切出形の刃部を持つナイフ形石器(服部隆博による2b形態[4])への要請は、剥片剥離工程を石刃(的)連続的縦長剥片剥離技術から切り離し、さらに鋭い尖頭部を有するナイフ形石器(服部隆博による1c形態)をも同様の技術基盤から生産する。池花遺跡第1文化層の資料は先述の大規模な各遺跡に比して量的には微々たるものに過ぎないが、寺尾遺跡に対比される石器群が、房総半島においても(権現後遺跡からも程近い位置に)提示できたことは意義深いと言うことができる。

註1　橋本勝雄・他『八千代市権現後遺跡』　(財)千葉県文化財センター　1984

2　織笠昭・松村(織笠)明子・他『鈴木遺跡Ⅰ』　鈴木遺跡刊行会　1987

3　白石浩之・鈴木次郎『寺尾遺跡』　神奈川県教育委員会　1980

4　服部隆博「関東地方における第VI層段階の石器群」石器文化研究会第1回研究討論会資料　1988

6．大割遺跡第３文化層

①概観

Ｖ層中に生活面を想定できる文化層である。大割遺跡の北縁、現在は浅くなだらかなくぼみを呈する埋没谷に面して３つのブロックが近接して存在した。Ｖ１、Ｖ２、Ｖ３ブロックとする。定形的な石器として保有するのは掻器だけという際立った特徴を有する。内黒田遺跡群中には同じ産出層をもつブロックは他に存在しなかった。ブロック名を３つに分割したが、それらは密接なまとまりを持つユニットを構成するため、以下一括して記述することにする。

②出土状況（第99図、第100図、図版8-1）

大割遺跡C2区、調査範囲北縁の台地に縁辺部に立地する。現地形はより北に（池花南遺跡側に）向かうにしたがって緩やかに傾斜を開始するが、ローム層は現地形の傾斜を超えて傾斜しており、ブロックの立地地点から既に斜面が始まっている。明らかに埋没谷に面して立地していたものと思われる。ブロックは３基が西北西から東南東にかけて並んでいる。西からＶ１ブロック、Ｖ２ブロック、Ｖ３ブロックとする。

Ｖ１ブロックは東西約3.8m、南北約4.6mの範囲に分布し、３ブロックの中で最も集中度の高いブロックである。絶対的な点数も多く、母岩別資料から見ても最も多くの個体を含んでいるが、特に安山岩１の集中が目立っている。石核を１点しか含まない。

Ｖ２ブロックは東西約3.2m、南北約4.3mの範囲に分布し、最も散漫な分布状況を示すブロックである。母岩別資料の分布では、珪質頁岩８の集中が目立つが、瑪瑙や安山岩を殆どあるいは全く含まないのも特徴的である。また石核を３点含むのも特徴と言える。

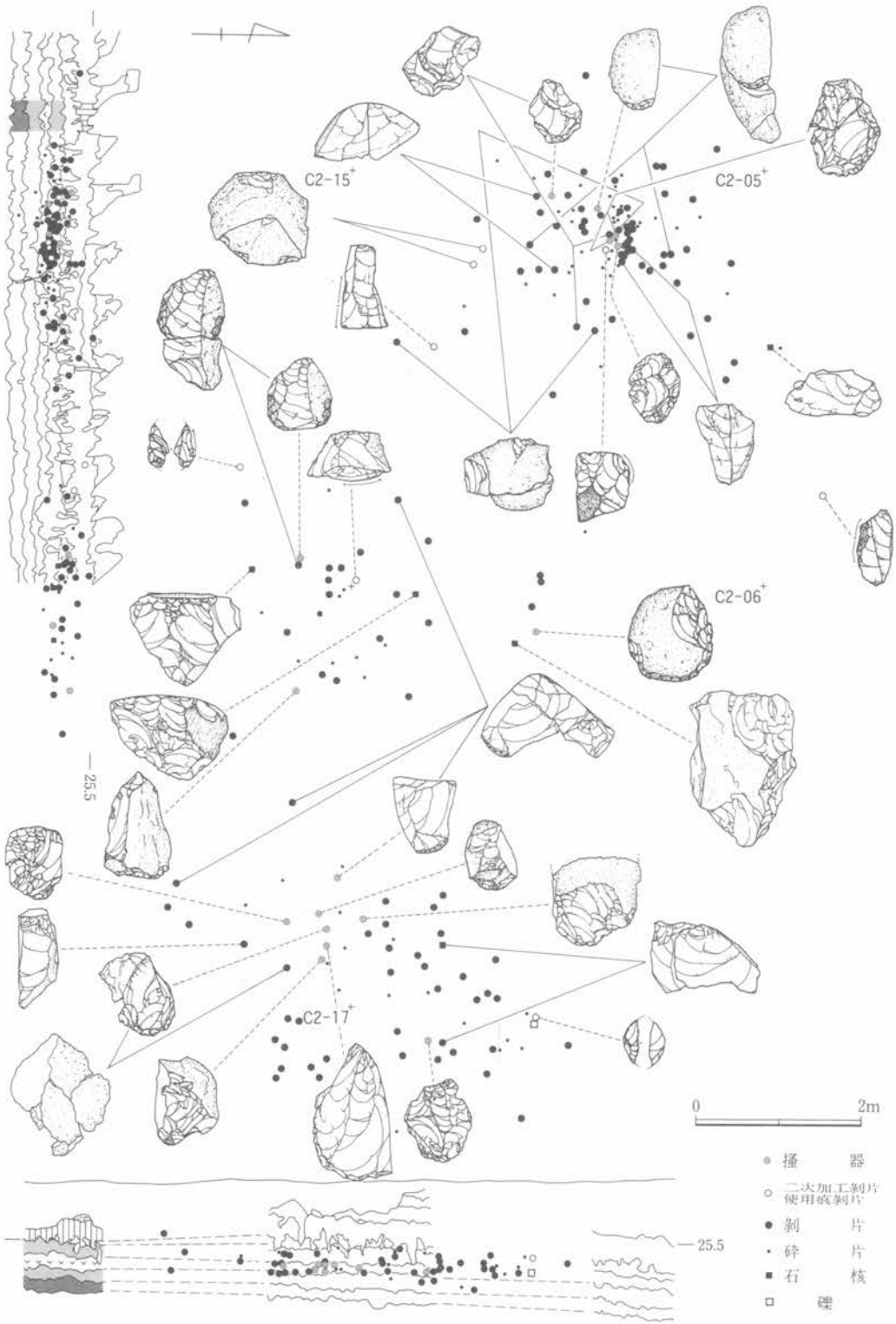
Ｖ３ブロックは東西約3.9m、南北約4.9mの範囲に分布する。全体に均質な密度で遺物が分布しているが、その中央部に掻器が集中しているのが目立っている。

接合関係は比較的豊富に見られると言ってよいかも知れないが、ブロック間にまたがる接合関係はＶ２－Ｖ３ブロック間に存在した。

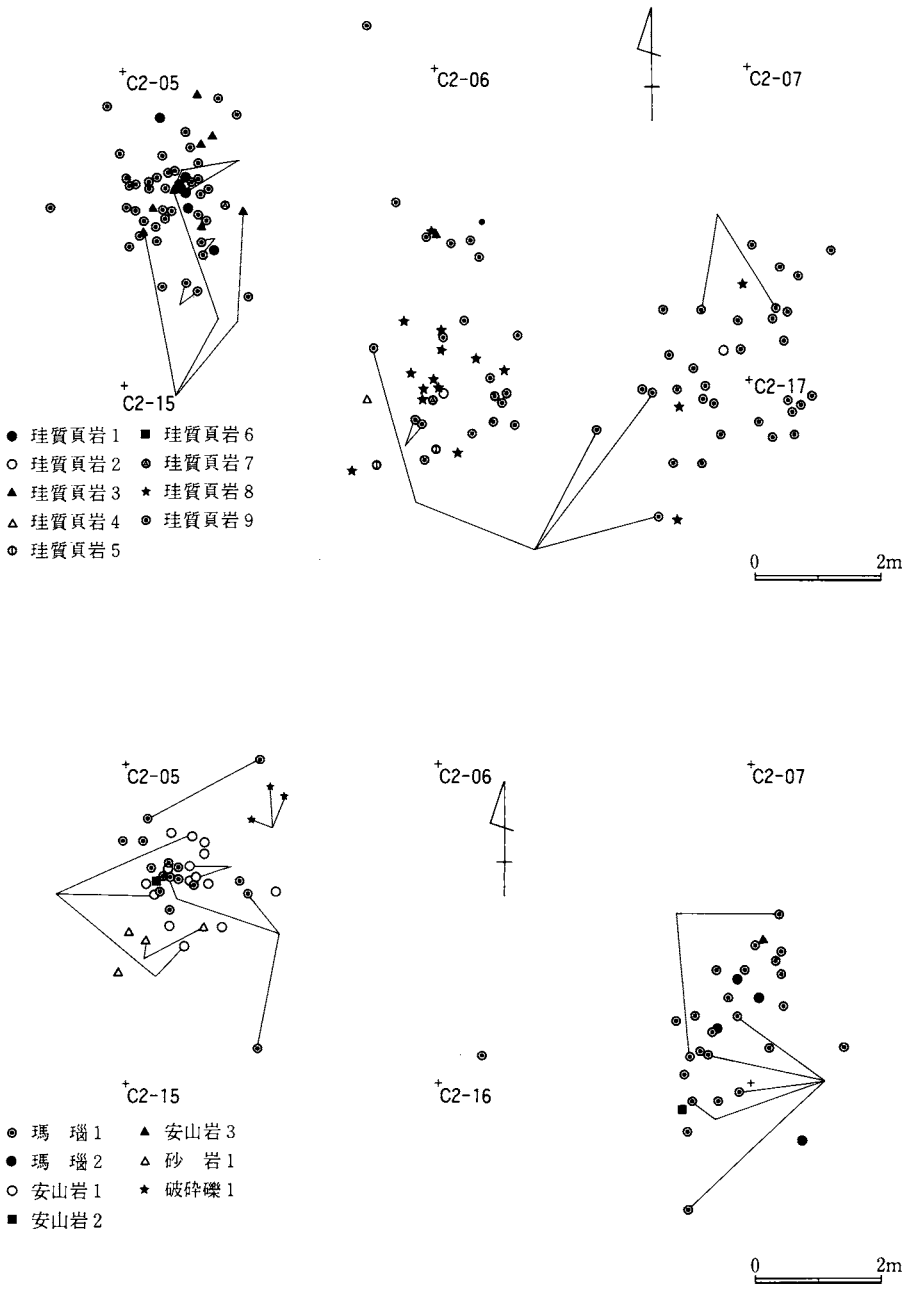
垂直分布についてはIII層からIX層までと非常に幅広く、単純にレベル差をとればおよそ1.1mにも及ぶが、これは遺物検出面自体が傾斜しているためでもある。土層断面への投影図（第101図）もそれを考慮して見る必要がある。調査時の観察では、安定したレベルは明らかにＶ層にあった。

③出土遺物（第102図～第106図、図版41～43）

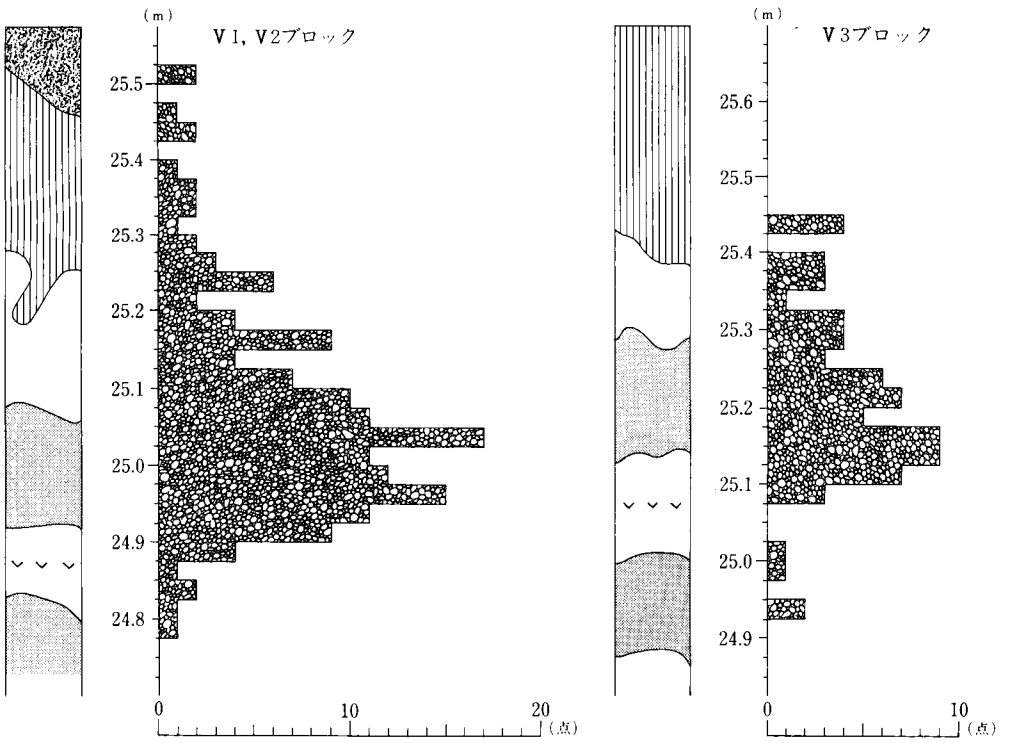
先に述べたように掻器が圧倒的に多いブロックである。不定形だが厚みのある剥片が生産され、掻器の素材となっている。15ａまでを掻器とする。



第99図　大割遺跡第３文化層遺物出土状況（1/80）



第100図　大割遺跡第3文化層母岩別分布（1/120）



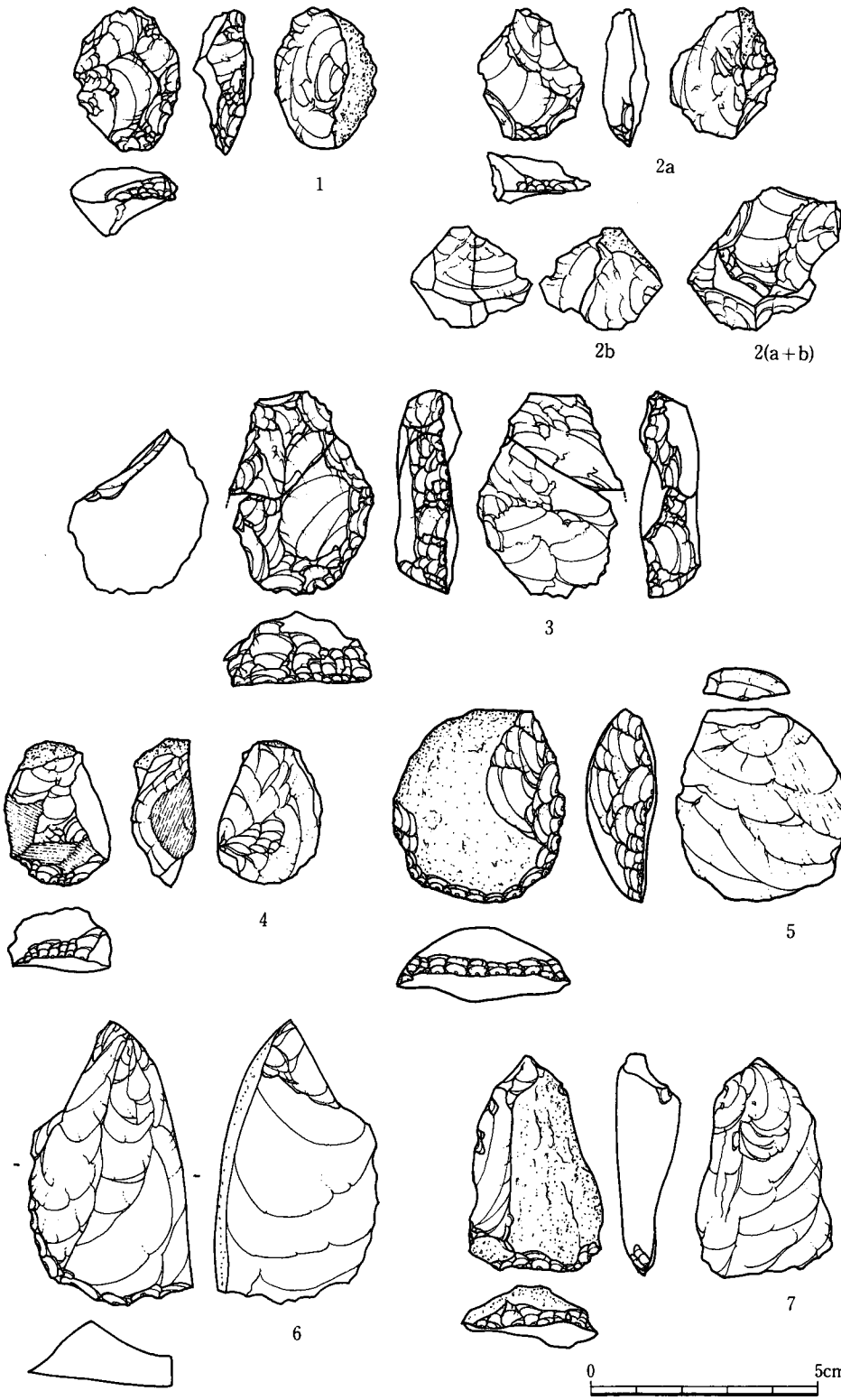
第101図　大割遺跡第3文化層遺物垂直分布図

1と2aは同一母岩(珪質頁岩3)から生産された掻器である。どちらも小型の横長剝片の背面の一部に加工を加えるが、加工範囲はあまり広くない。2aは剝片2b(これ自体2片接合)と接合しているが、2bは2aと大きさ、形状ともよく似た剝片で、かかる小型掻器を複数製作しようとした意図が窺われるが、2bは残念ながら折損している。

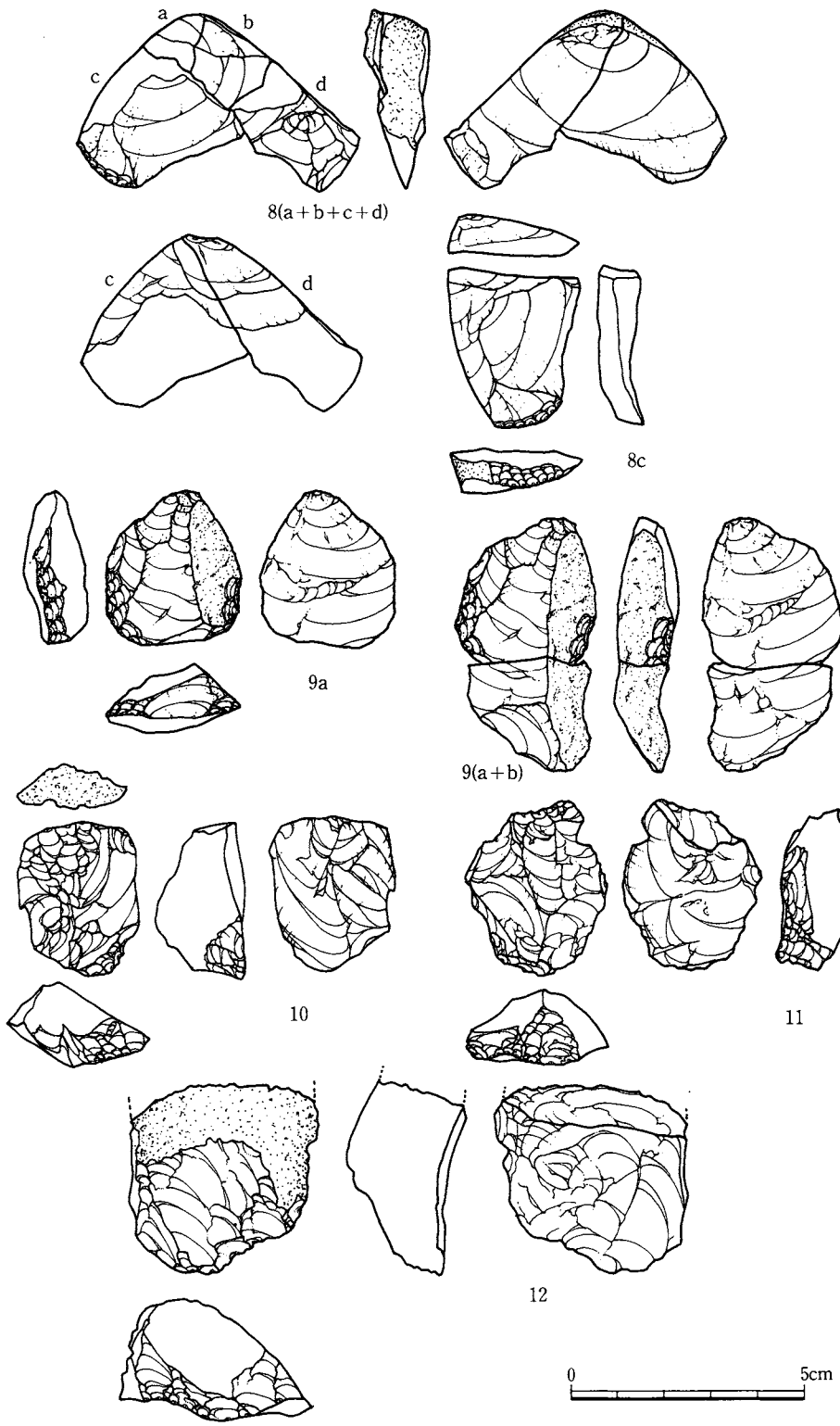
3は2つに折れているが元来1点の掻器である。均一に厚みのある剝片を素材としており、広い範囲に丁寧で急斜な加工が施される。珪質頁岩1。これと同種の石器と言えるのが5である。剝片の下半部の周縁を半円形に加工が取り囲んでいる。珪質頁岩9。それに対して4は1や2aと同様、小型で厚みのある横長剝片の一部に加工を加えたものである。珪質頁岩8。

6、7はやや大ぶりで縦長の剝片を素材としたものである。6の方は背面左側縁にまで加工が回り込んでいるが、末端の刃部は7と共に比較的直線的であると言えるかもしれない。いずれも珪質頁岩9。

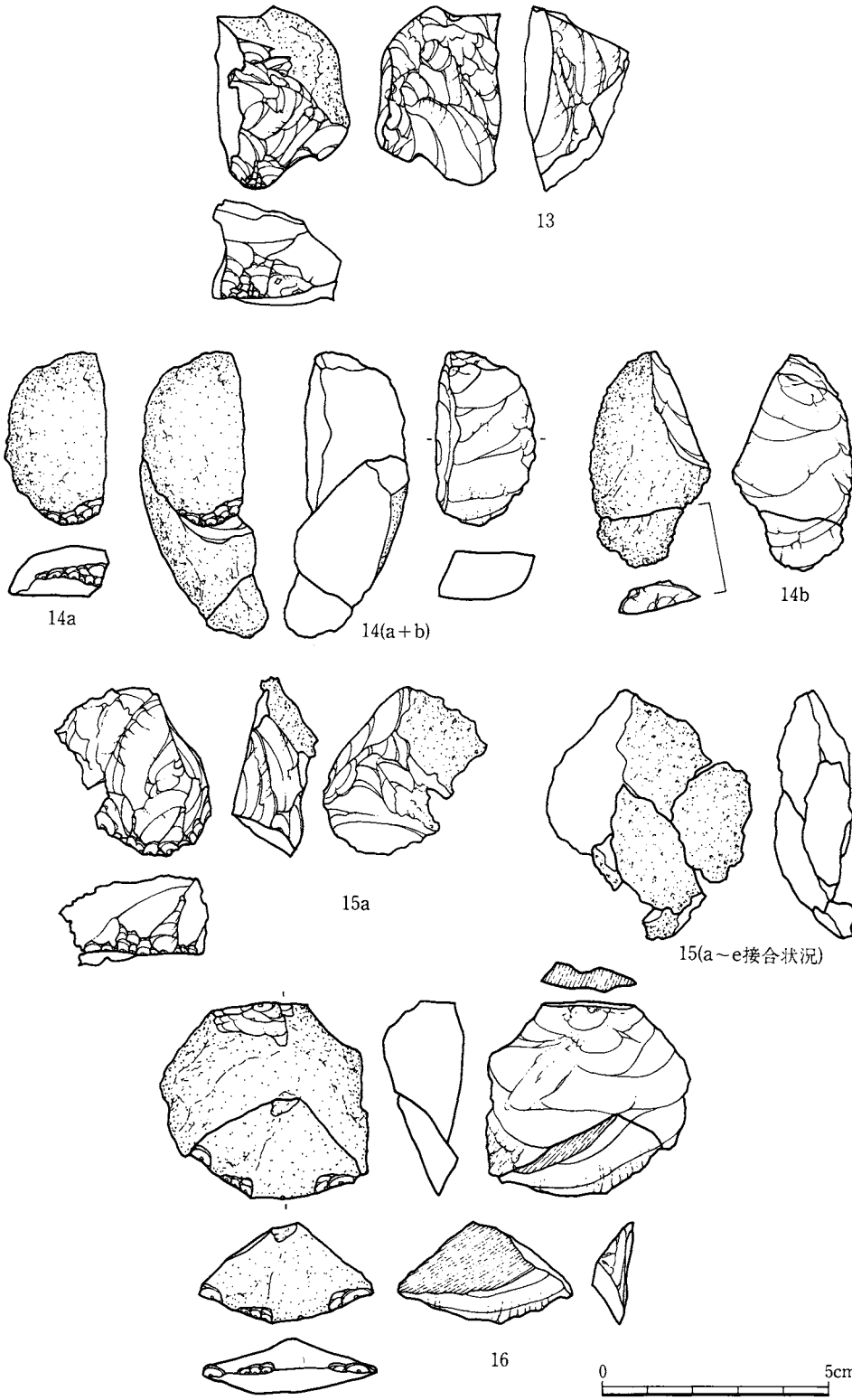
8は接合資料である。礫皮面を打面とし、打点を後退させながら横長剝片を剝離する過程が示されている。8cと8dは折断され、8cを掻器として利用している。やはり珪質頁岩9である。9は2点が接合するものであるが、縦長剝片の末端側を折断によって切り捨てている。加工は折断面を中心に左右に施されており、あるいは折断面をも刃部として取り込まれているとする



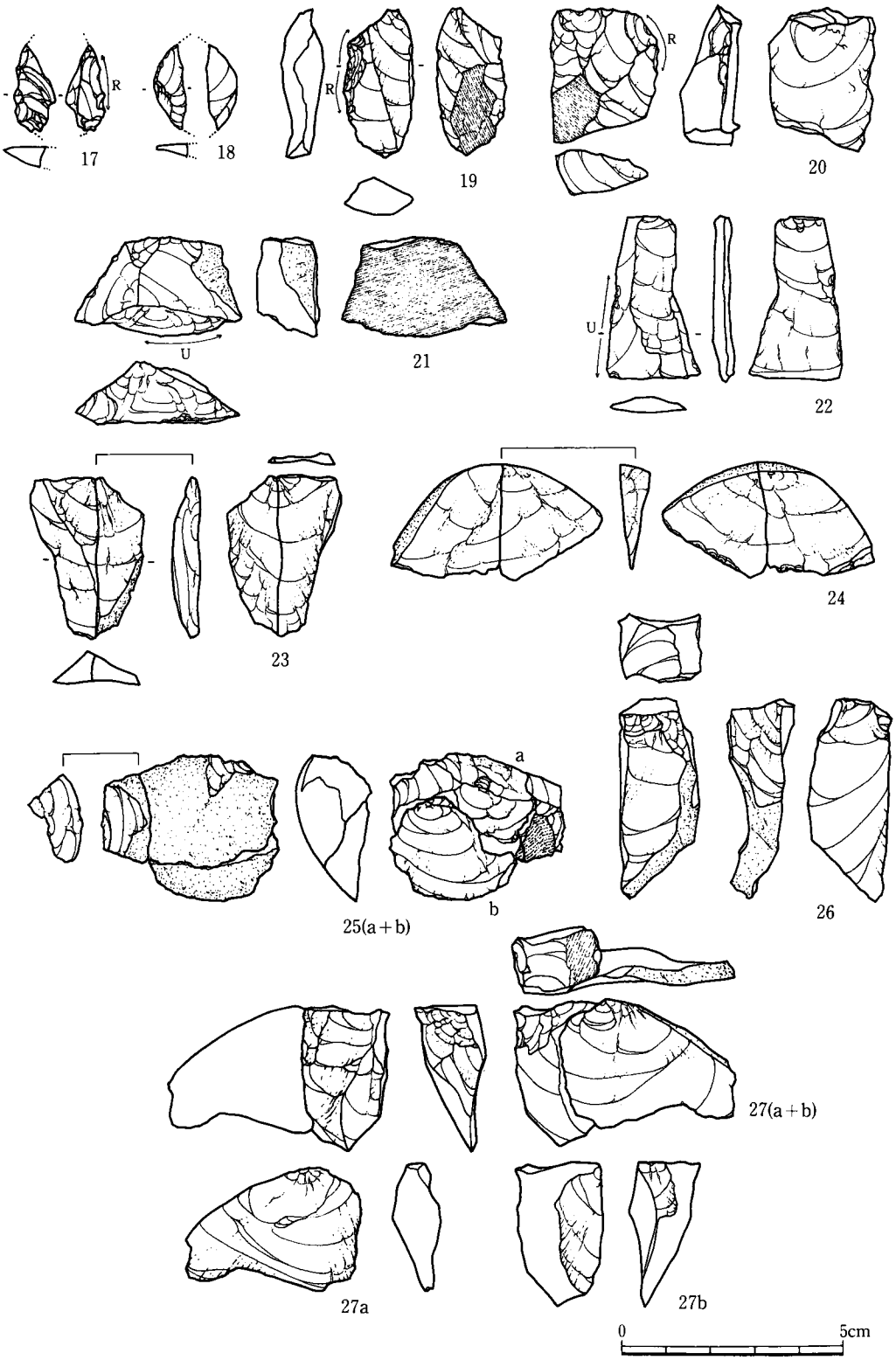
第102図　大割遺跡第3文化層出土石器(1)（2/3）



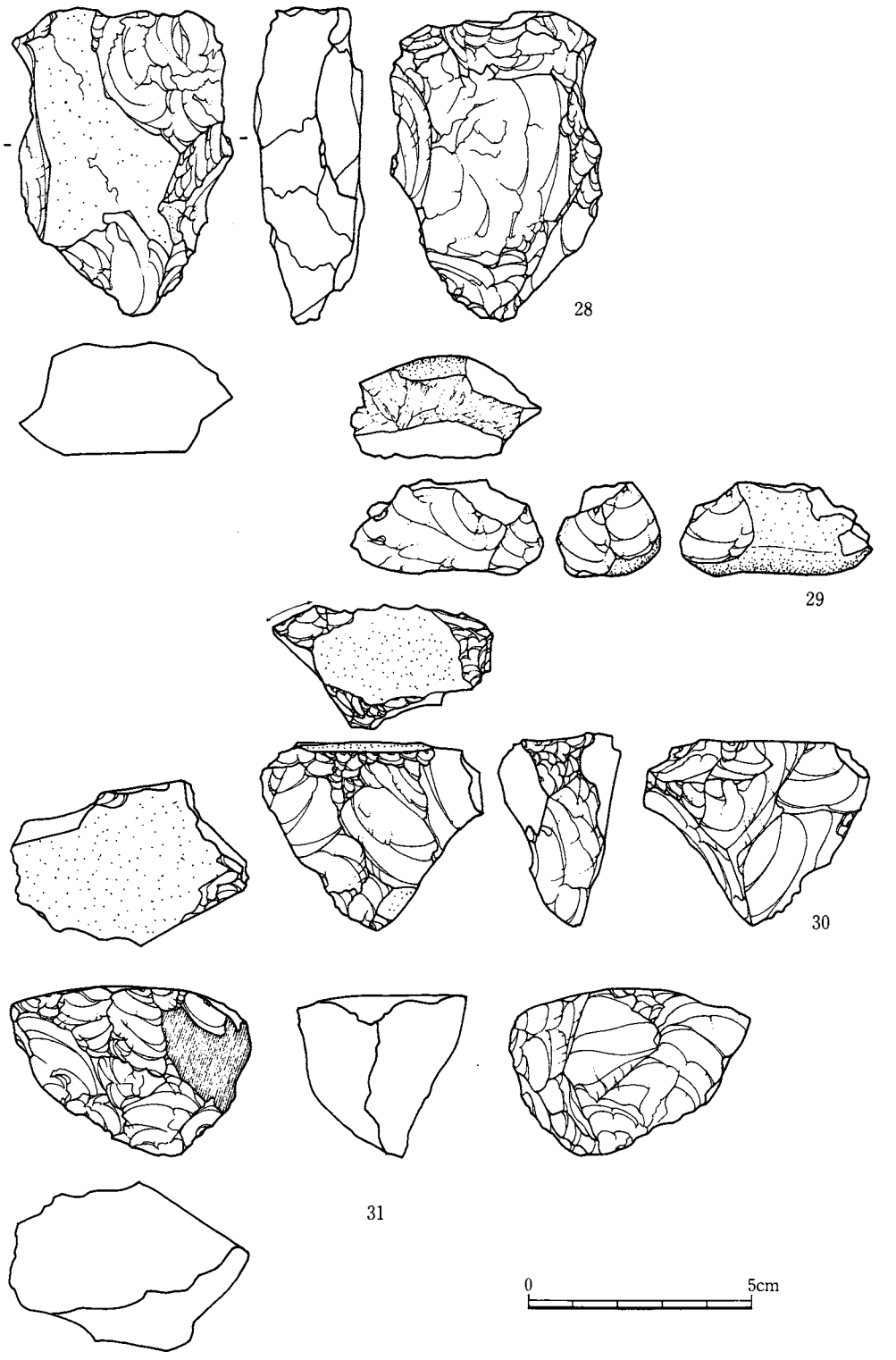
第103図　大割遺跡第３文化層出土石器(2)（2/3）



第104図　大割遺跡第３文化層出土石器(3)（2/3）



第105図　大割遺跡第3文化層出土石器(4)（2/3）



第106図　大割遺跡第３文化層出土石器(5)（2/3）

第38表　大割遺跡第３文化層出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	掻器	C2-05-13	珪質頁岩	3	31.3	23.5	13.8	8.18	60°	−	−
2 a	掻器	C2-05-22	珪質頁岩	3	24.7	29.4	10.8	5.66	66°	−	−
2 b	剥片	C2-05-30,71	珪質頁岩	3	28.0	23.4	11.4	5.25	−	−	−
3	掻器	C2-05-51	珪質頁岩	1	43.9	32.9	13.0	19.68	66°	○	−
4	掻器	C2-16-6	珪質頁岩	8	29.4	21.8	14.4	10.18	62°	−	−
5	掻器	C2-06-24	珪質頁岩	9	42.8	38.4	16.5	26.33	64°	−	−
6	掻器	C2-16-4	珪質頁岩	9	61.6	43.5	18.8	28.90	64°	−	−
7	掻器	C2-16-18	珪質頁岩	9	47.0	30.0	13.5	14.70	66°	−	−
8 a	剥片	C2-16-17	珪質頁岩	9	12.3	15.0	4.6	0.66	−	−	−
8 b	剥片	C2-05-5	珪質頁岩	9	17.5	21.7	6.1	1.39	−	−	−
8 c	掻器	C2-16-15	珪質頁岩	9	32.4	29.2	9.0	8.82	68°	−	−
8 d	剥片	C2-16-23	珪質頁岩	9	47.6	18.7	9.4	8.28	−	−	−
9 a	掻器	C2-15-2	珪質頁岩	9	32.4	30.6	12.9	13.00	70°	−	−
9 b	剥片	C2-15-1	珪質頁岩	9	24.4	26.5	10.5	5.36	−	−	−
10	掻器	C2-16-13	瑪瑙	1	33.0	29.4	19.5	14.50	68°	−	−
11	掻器	C2-07-7	珪質頁岩	9	37.6	30.1	15.5	14.50	72°	−	−
12	掻器	C2-06-12	瑪瑙	1	42.4	43.9	22.0	32.60	86°	○	−
13	掻器	C2-16-3	珪質頁岩	9	38.9	29.1	22.0	25.74	70°	−	−
14 a	掻器	C2-05-77	安山岩	1	37.4	24.0	11.2	11.73	70°	−	−
14 b	剥片	C2-05-38,63	安山岩	1	47.2	27.1	12.9	13.65	−	−	−
15 a	掻器	C2-16-5	瑪瑙	1	37.7	34.7	15.4	14.40	68°	−	−
16 a	剥片	C2-05-42	珪質頁岩	9	36.8	45.4	16.5	23.96	−	−	−
16 b	二次加工剥片	C2-05-41	珪質頁岩	9	23.4	38.4	9.5	4.85	−	−	−
17	二次加工剥片	C2-15-4	珪質頁岩	8	19.2	9.6	5.3	0.92	−	○	−
18	二次加工剥片	C2-07-2	珪質頁岩	9	19.3	6.8	4.5	0.47	−	○	−
19	二次加工剥片	C1-95-1	珪質頁岩	9	34.5	16.1	9.5	4.49	−	−	−
20	二次加工剥片	C2-05-73	珪質頁岩	9	30.4	26.2	12.1	9.79	−	−	−
21	使用痕剥片	C2-05-16	珪質頁岩	8	23.2	37.6	15.8	9.99	−	−	○
22	使用痕剥片	C2-05-7	珪質頁岩	6	37.7	21.3	5.0	3.26	−	−	○
23	剥片	C2-05-15,65	安山岩	1	37.5	25.8	8.7	5.55	−	−	−
24	剥片	C2-05-10,37	砂岩	1	27.6	49.1	7.2	8.43	−	−	−
25 a	剥片	C2-05-29,70	瑪瑙	1	25.3	39.9	14.2	16.08	−	−	−
25 b	剥片	C2-05-6	瑪瑙	1	20.5	29.2	8.4	4.02	−	−	−
26	剥片	C2-16-11	珪質頁岩	9	18.3	45.1	15.0	10.99	−	−	−
27 a	剥片	C2-07-15	珪質頁岩	9	28.6	41.2	8.1	7.22	−	−	−
27 b	石核	C2-06-15	珪質頁岩	9	34.1	25.1	14.3	10.60	−	−	−
28	石核	C2-06-25	珪質頁岩	9	70.3	47.5	25.3	91.80	−	−	−
29	石核	C2-95-2	瑪瑙	1	22.6	42.9	20.1	18.04	−	−	−
30	石核	C2-15-7	珪質頁岩	9	44.2	44.2	25.0	44.70	−	−	−
31	石核	C2-06-26	珪質頁岩	9	34.1	25.1	143.0	10.60	−	−	−

ならば、半円形に刃部を有する掻器となる。珪質頁岩9。

10～13は加工範囲が狭いタイプの掻器である。調整角はこういったタイプの掻器の方が急斜である傾向が窺われる。10と12が瑪瑙1。11と13が珪質頁岩9。

14は掻器と剥片の接合資料。背面に大きく礫皮面を残している。14aは打点直下に折れ面を持つ剥片の末端に加工を施したものである。14bは14aの剥離痕を大きく残している剥片で、14aとほぼ同様の掻器の素材となり得るものである。この場合scraper-edgeの作出は見られないが、末端が折断されており、折断面にさらに加工を加える意図があったものかも知れない。安山岩1。

15aは瑪瑙1の掻器。腹面側に加工を施している。これには4点の剥片が接合しているが、いずれも礫皮面を背面とし、非常に風化が進んだ部分で有用な剥片となり得ていない。

16は略円形を呈する剥片で、下縁の一部に小剥離痕が断続的に見られるものである。この剥片は剥片剥離と同時に節理面で割れており、石器として利用されたのは菱形を呈する下半部だけと見られる。珪質頁岩9。

17、18は共に加工痕を有する剥片であるが、小さく割れて本来の石器の形状など不詳。19は縦長で分厚い剥片の背面左側縁に二次的な剥離を施したものであるが、その企図は不明。20はやはり厚みのある剥片の一部に加工痕を持つ。これは掻器としたほうがよいかも知れない。17が珪質頁岩8である他は珪質頁岩9。

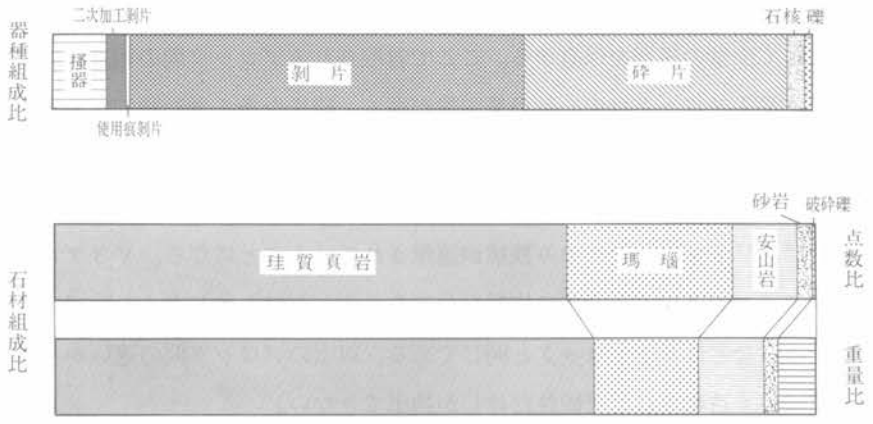
21、22は微細な刃こぼれ状の剥離痕が観察される剥片。21は節理面で剥離された剥片の下縁に刃こぼれが見られるが、その刃角からすると機能は掻器と同様か。22は石刃状の形状を有する縦長剥片。左側縁に細かい刃こぼれが目立つ。21は珪質頁岩8、22は珪質頁岩6。

23～25は剥片の接合例である。ただし23と24は打点直下で剥離と同時に折れたと思われるもの。24の腹面側末端には小剥離痕が見られるが、これを使用痕と判断すべきかどうかは難しい問題である。23は安山岩1、24は砂岩1、25は瑪瑙1。

26は角柱状をなす剥片。27は剥片と石核の接合資料である。28～31に石核を集めた。28は分厚い剥片を素材として周縁から横長剥片を剥離しているが、節理の発達により有効な剥片剥離が行い得たとは言い難い。29は小型の石核で上方からの加撃によって小型の剥片が剥離されている。瑪瑙1の非常に風化が進んだ部分。30、31は同種の石核と言い得る。求心的な剥離が行われているが、最終的にはいずれも礫皮面を打面として小型の剥離痕を残す。29を除いてすべて珪質頁岩9。

③大割遺跡第3文化層のまとめ

ユニットの構成　当文化層は近接する3つのブロックによって構成される。このブロック群が同一集団によって同時に形成されたのは疑うべくもない。またそれらのブロックは、分布密



第107図　大割遺跡第３文化層出土石器組成

第39表　大割遺跡第３文化層出土石器組成表

	掻 器	二次加工剥片	使用痕剥片	剥 片	砕 片	石 核	礫	計	総重量g
珪質頁岩 1	1	−	−	−	4	−	−	5	21.37
珪質頁岩 2	−	−	−	1	2	−	−	3	6.65
珪質頁岩 3	2	−	−	8	−	−	−	10	26.67
珪質頁岩 4	−	−	−	−	1	−	−	1	1.09
珪質頁岩 5	−	−	−	1	2	−	−	3	2.32
珪質頁岩 6	−	−	1	−	−	−	−	1	3.26
珪質頁岩 7	−	−	−	2	−	−	−	2	7.01
珪質頁岩 8	1	1	1	11	3	−	−	17	34.37
珪質頁岩 9（識別不能）	7	3	1	49	36	4	−	100	550.42
瑪瑙 1	3	−	−	26	13	1	−	43	124.97
瑪瑙 2	−	−	−	3	1	−	−	4	1.49
安山岩 1	1	−	−	3	10	−	−	14	48.45
安山岩 2	−	−	−	2	−	−	−	2	5.66
安山岩 3	−	−	−	−	−	−	1	1	22.35
砂岩 1	−	−	−	3	1	−	−	4	18.20
破砕礫	−	−	−	−	−	−	1	1	45.58
珪質頁岩計	11	4	3	72	48	4	−	142	653.16
瑪瑙計	3	−	−	29	14	1	−	47	126.46
安山岩計	1	−	−	5	10	−	1	17	76.46
砂岩計	−	−	−	3	1	−	−	4	18.20
破砕礫計	−	−	−	−	−	−	1	1	45.58
総計	15	4	3	109	73	5	2	211	919.86
百分率	7.1	1.9	1.4	51.7	34.6	2.41	0.9	100.0	

度の差は比較的顕著に見られるが、その構成にはあまり差が見られない。いずれのブロックも剝片を主体として少量の掻器を保有する。ここで看取されるブロック間の相違を列挙すれば次の如くである。Ｖ１ブロックは中心部の集中度が高く、砕片を多く含む傾向がある。また掻器も同様に中央部に集中している。Ｖ２ブロックは点数がやや少なく、散漫な分布を示す。掻器は集中することなく、むしろ周縁に点在する。石核を目立って含むのはこのブロックだけである。換言すれば、Ｖ２ブロックにのみ残核が遺棄されていることになる。Ｖ３ブロックは集中度はＶ２ブロックと大差なく、全体に均質な分布を示す。石核を殆ど含まない点、中央部に掻器を集中させる点などはＶ１ブロックと同じである。以上のブロック間の違いからは、Ｖ２ブロックが中では古く遺棄された可能性だけしか抽出できない。

母岩別資料の分布　当文化層で主体を占める石材は珪質頁岩である。珪質頁岩は全部で9個体分の番号が付されているが、過半数を占める珪質頁岩９はいずれのブロックにも豊富に存在した。しかしそれは礫皮面が褐色で内部が緑がかった灰褐色または暗灰色のものの総称で、同一母岩と複数母岩の両方の可能性があって充分に識別できないものである。他の珪質頁岩の個体では珪質頁岩１、３、８がそれぞれ一定量を持っているが、珪質頁岩１と３は殆どすべてがＶ１ブロックにあり、珪質頁岩３が１点Ｖ２ブロックにあるだけである。他方珪質頁岩８はＶ２ブロックに主体があり、ブロックの中心的位置に存在する他、Ｖ３ブロックにも分有されている。Ｖ２ブロックとＶ３ブロックの間には珪質頁岩９の接合資料もあり、Ｖ１ブロックとの間よりも密な関係にあると言えよう。

珪質頁岩以外の石材では注目すべき現象が見られる。まずＶ２ブロックは１点を除き、珪質頁岩以外の個体を保有しない。Ｖ３ブロックでは瑪瑙が珪質頁岩に匹敵するほどの点数を有して出土している。その主体となる瑪瑙１はＶ１ブロックでも多く出土しており、分割されて消費されたことも考えられる。他にはＶ１ブロックに安山岩が集中的に存在し、その主体となる安山岩１は他のブロックには存在しなかった。

ユニットの形成　上記の事実より、次のようなことが考えられる。Ｖ２ブロックとＶ３ブロックは密接な関係にあり、Ｖ２ブロックが先に廃絶した可能性が考えられるから、Ｖ２ブロック→Ｖ３ブロックという形成順序が想定される。Ｖ１ブロックはＶ２、Ｖ３ブロックと無関係ではあり得ないものの、より独立的な傾向を持っている。したがって断定はできないが、ブロックの内容に殆ど差がないことから、同時に２つの単位が併存していた可能性がある。

石器群の様相　当文化層から出土した石器群は、既に述べているように掻器を主体とした特徴的なものである。当文化層出土の掻器には分類するとすれば３つのタイプがある。Ａ：刃部がほぼ半周するもの、Ｂ：不定型で刃部の形成が一端に留まるもの、Ｃ：器体が縦長で刃部が直線的なもの、である。特にＢが目立つのが特徴と言えようか。同様に掻器を主体的器種として持つ石器群には、東京都小金井市新橋遺跡[1]Ⅳ下層出土石器群、成田市新東京国際空港Ｎｏ.6遺

跡出土石器群[2]が代表的なものとして挙げられる。両遺跡ともIV層下部に当たり、大割遺跡よりも若干上位に位置することになるが、時期は比較的近いものと言える。大割遺跡と他の2遺跡との違いは、他遺跡には刃部がほぼ全周する円形掻器が多く含まれることである。ただいずれにしてもこのような特徴的な内容を持つ遺跡が各地に存在することは、特定の(しかし普遍的な)作業とそれに伴う行動パターンを背景としたものであるのは間違いないことであろう。ちなみに新東京国際空港No.6遺跡のブロックの規模や配置は大割遺跡に瓜二つである。

註 1　中津由紀子・千浦美智子・小田静雄・J.E.Kidder『新橋遺跡』　国際基督教大学考古学研究センター　1977

2　野口行雄「No.6遺跡」『木の根』(財) 千葉県文化財センター　1981

7．大割遺跡第4文化層

①概観

IV層中に生活面を想定できる文化層である。下総台地におけるIV層は、通常武蔵野台地におけるIV層相当部分の過半を遺存せず、IV層下部に相当する。当文化層も例外ではない。

ブロックは大割遺跡の北西端、B1区に、3つが近接して検出された。IV1、IV2、IV3ブロックとする。IV3ブロックには小規模な土坑を伴う。ナイフ形石器と角錐状石器を主要器種とする典型的な石器群を出土した。ブロック名を3つに分割しているが、大割遺跡第3文化層同様、密接なまとまりを持つユニットを構成するため、一括して記述することにする。IV層に生活面を想定できる遺構、遺物としては、他に池花南遺跡第2文化層がある。両者に直接的な関連性は認められず、また純粋客観的に先後関係を判断する材料もない。

②出土状況(第108図、第109図、図版7-1)

V1～3ブロックが面していた埋没谷の最奥部に臨んで立地する。ブロックは北東から西そして南とL字形に3つが近接して存在した。北東側のものをIV1ブロック、西側のものをIV2ブロック、南側のものをIV3ブロックとする。

IV1ブロックは南北4.7m、東西4.2mの範囲に分布し、遺物点数は最も多い。最も北側に集中度の高い地点が位置し、南へ行くにしたがって分布密度が希薄になる傾向を持つ。母岩別資料の分布は特徴的であるが、それについては後述する。

IV2ブロックは南北4.0m、東西5.0mの範囲に分布し、IV1ブロックに比べ全体に散漫である。粗密の差はない。toolが少ない。

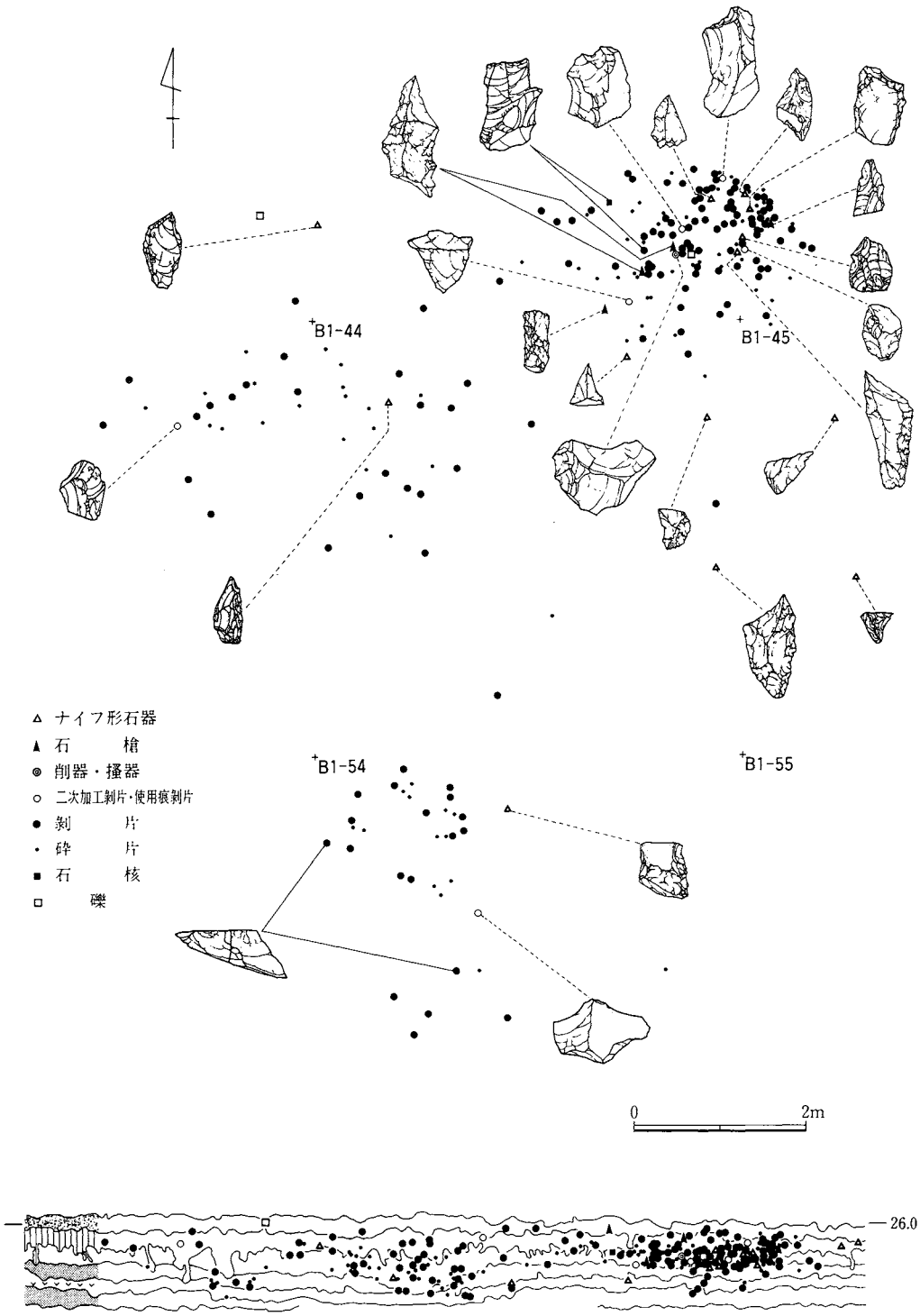
IV3ブロックは南北3.9m、東西4.0mの範囲に分布している。IV1ブロックよりは疎らであるが、やや集中する範囲があり、重複して土坑が検出された。その部分の遺物は掘り込みと共に落ち込んでいる。

接合関係は乏しい。3例の接合資料があるが、いずれもブロック内での接合であり、しかも2例は折れ面での接合である。

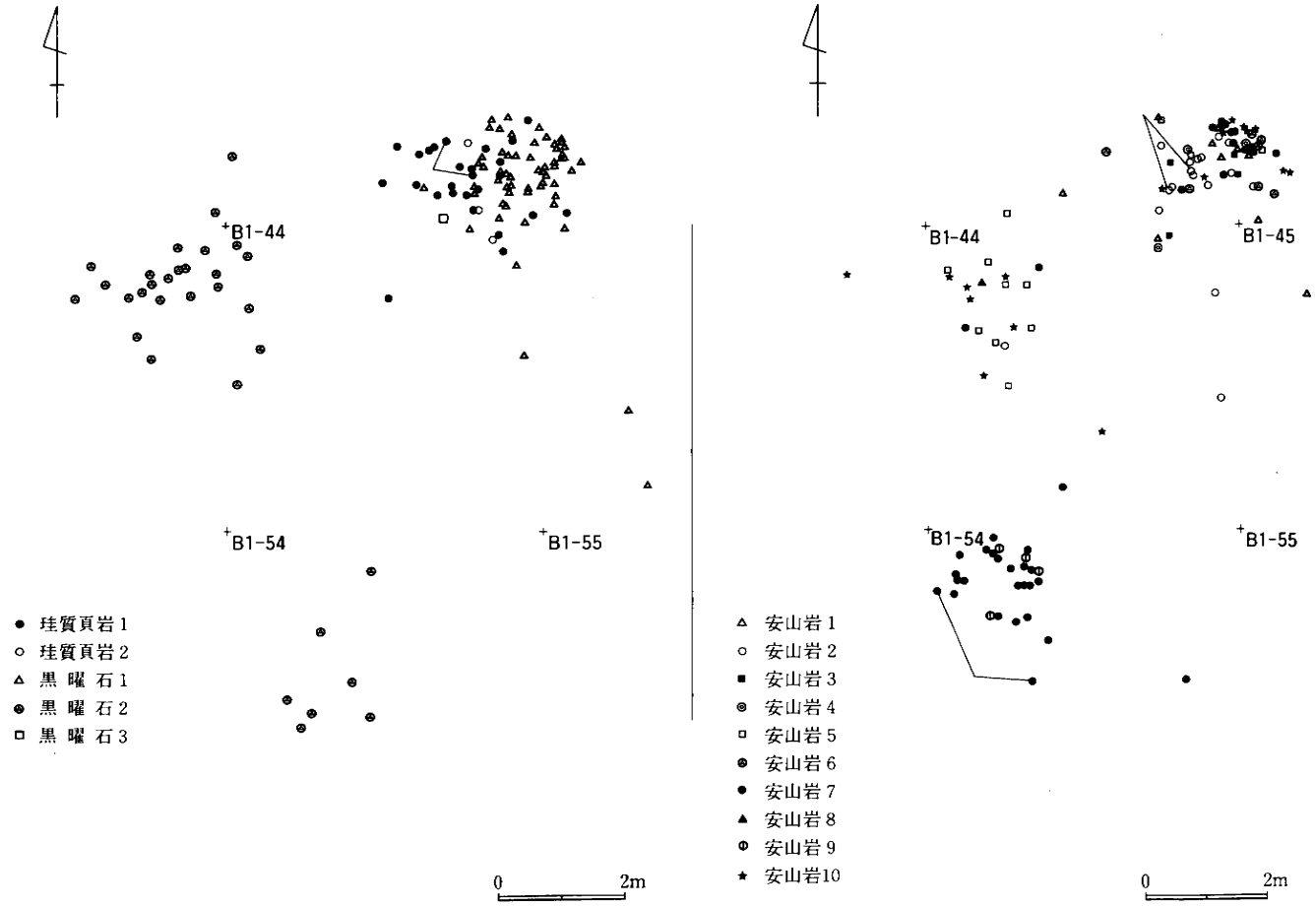
垂直分布は幅広い。土坑部分の落ち込みを除いてもIIc層からVI層まで、およそ0.8mのレベル差が認められる。しかし大多数がIV層前後に集中していた。

③土坑(第110図、図版7-2)

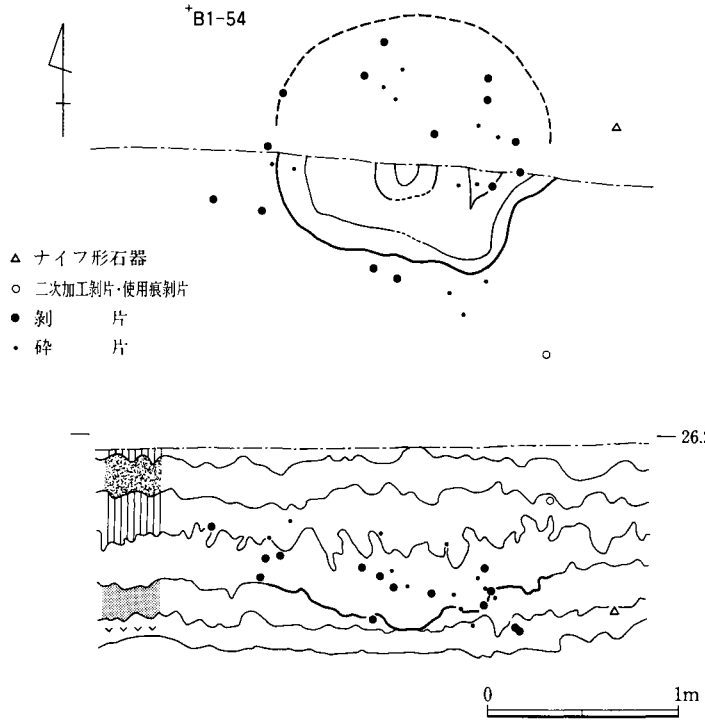
検出状況　IV3ブロックの中核部分に検出されたものである。IV1ブロック、IV2ブロックの調査中、土層断面図の作図のため調査区の南壁面にsection trenchを掘削する際に新たに多くの遺物が検出された。そのため新たなブロックが検出されたと判断し、調査区をさらに南へ



第108図　大割遺跡第4文化層遺物出土状況（1/80）



第109図　大割遺跡第4文化層母岩別分布（1/120）

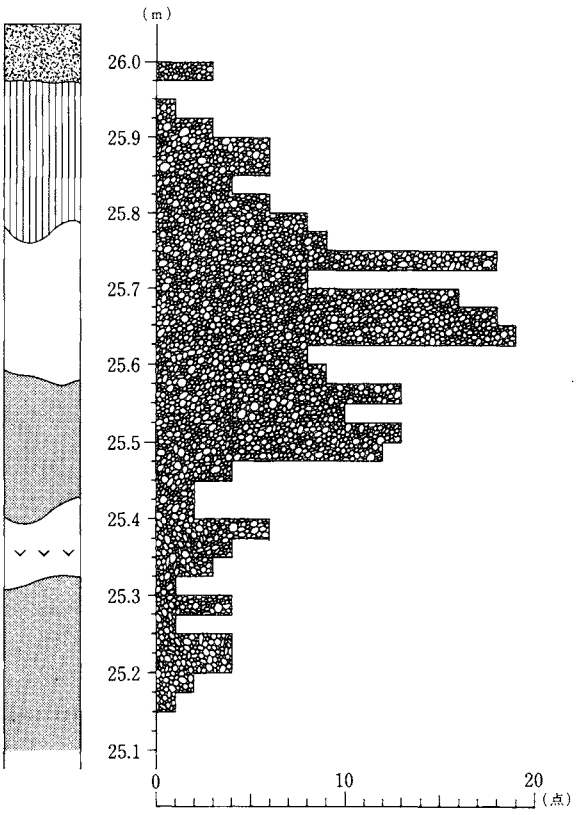


第110図　大割遺跡Ⅳ3ブロック土坑（1/40）

拡張することになったが、その際作図面はそのまま残し、section belt を残す形で調査を進めた。調査時に、遺物の出土レベルがⅣ1、Ⅳ2ブロックに比して若干下位にあるのではないかという印象を得たが、遺物取り上げ後、再び土層断面図の作成を開始すると、果してⅣ層が遺物集中地点で落ち込んでいることが確認された。その時既に、遺構は section trench によって半ば消失していた。

遺構の調査　ハードローム中の遺構の掘り込みは、断面でこそ把握し易いものの平面プランの掌握には非常な困難が伴う。当遺構の場合、土層断面でⅤ層を切り込んでいることが判明していたため、周囲をⅤ層上面まで掘り下げて、特に遺構の存在が予想される範囲を注意深く精査した。落ち込んでいる土質は基本的にⅣ層と同一で、赤色スコリアを多く含んで全体に赤っぽい明褐色を呈し、Ⅴ層は微妙に黒みを帯びた黄褐色で、何とかプランを把握し、捩鎌を用いて僅かずつ掘り進んだ。

遺構は径1.5m 前後の円形乃至楕円形の浅い皿状土坑をなしていたと思われる。しかし現実に調査できたのは幅0.5m 強の範囲に過ぎなかった。掘り込み面は厳密には把握できないが、Ⅳ層中にあることは間違いない。遺物は土坑内及び周縁から、あたかも廃棄されたかのように28点が出土した。大半が剥片及び砕片であったが、周縁部からナイフ形石器の欠損品と加工痕のある剥片が出土している。



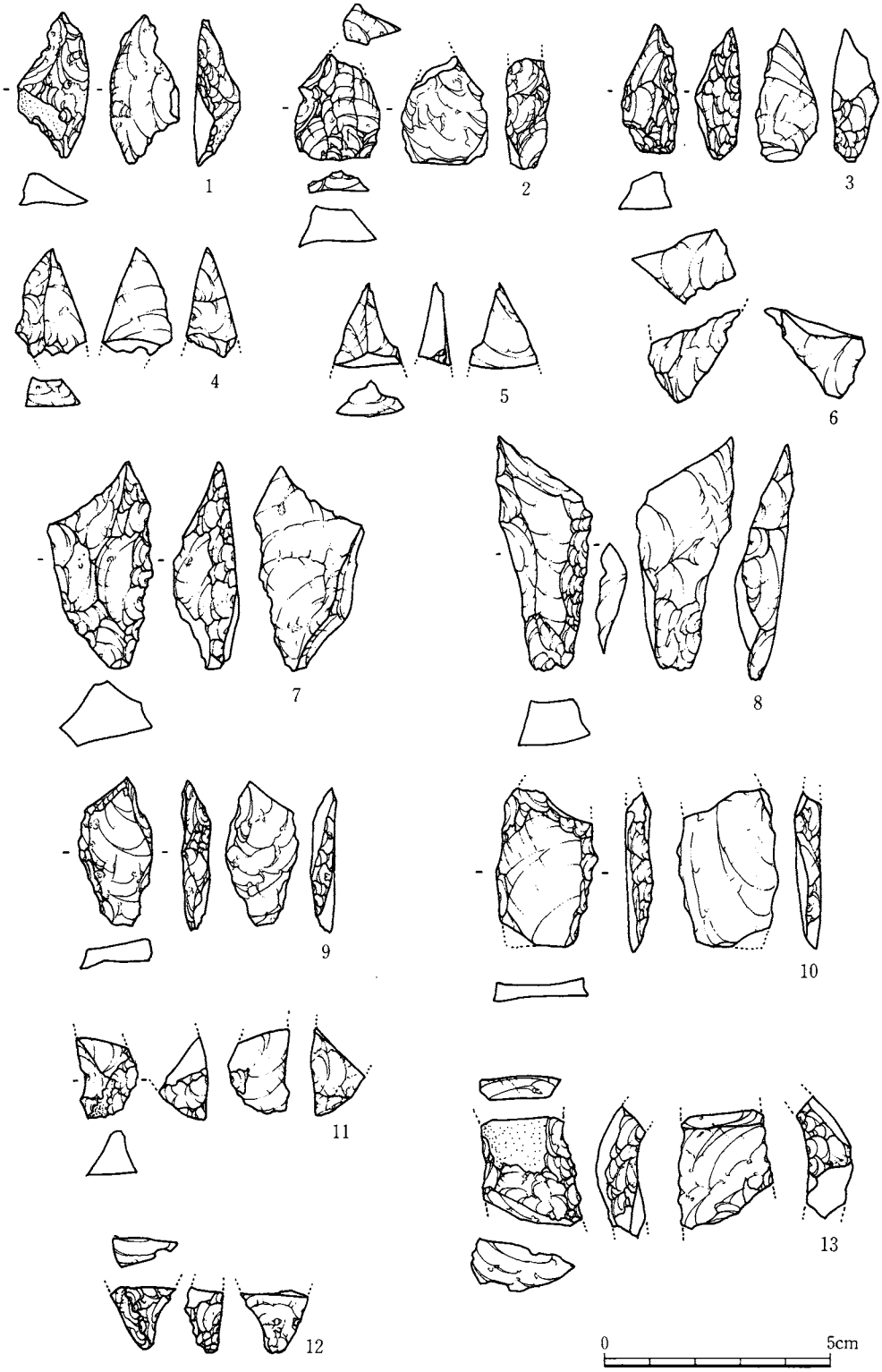
第111図　大割遺跡第４文化層遺物垂直分布図

④出土遺物(第112図～第114図、図版44)

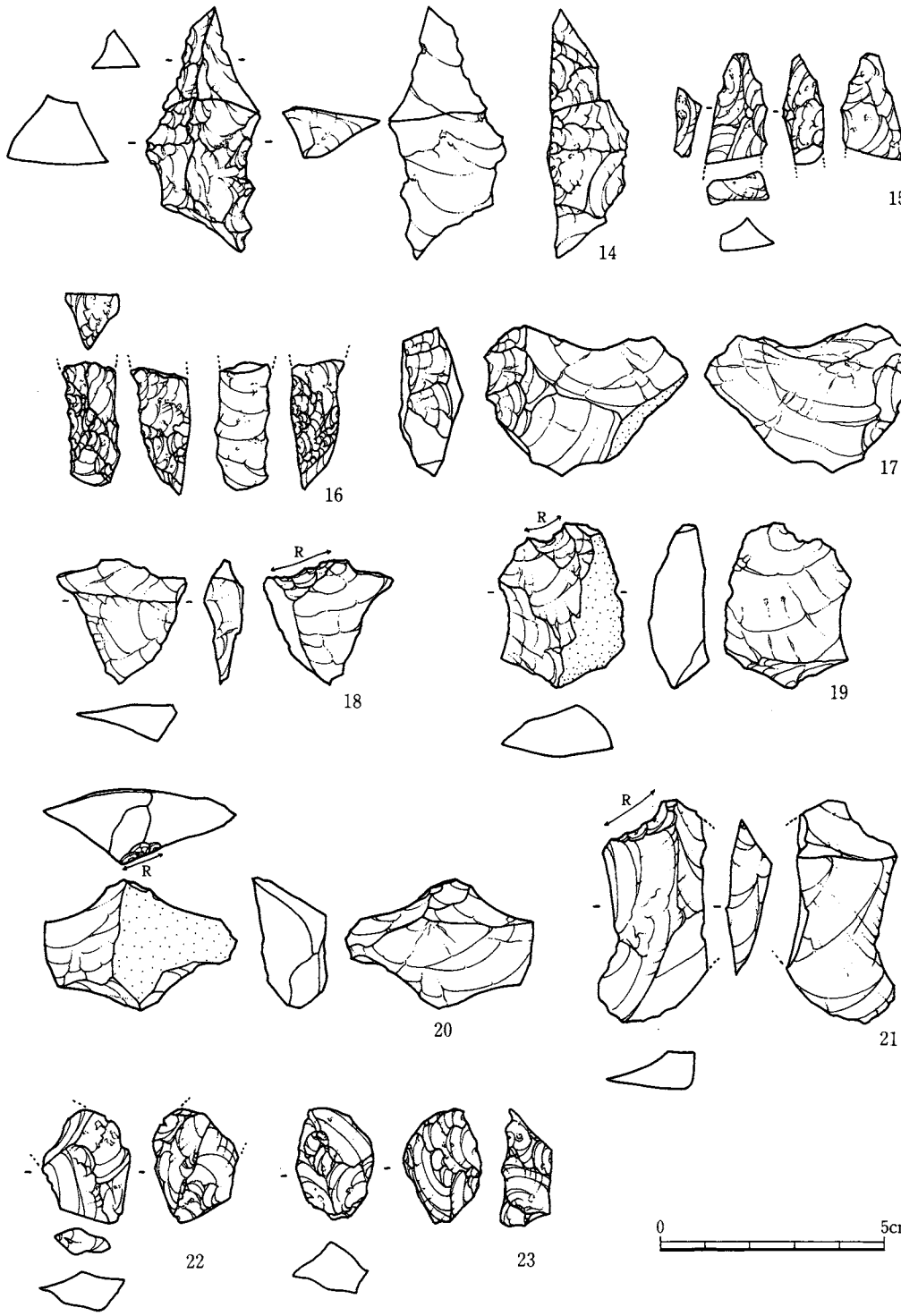
定型的な器種としてはナイフ形石器及び角錐状石器がある。１～13までをナイフ形石器とする。１～５までが鋭い尖頭部を有するナイフ形石器である。

１は厚みのある横長剥片を素材としており、一側縁加工である。打面側に加工を施して尖頭部を作出している。尖頭部の加工痕は大きな剥離によって構成されているが、基部の加工は細かい剥離で構成されている。２も一側縁加工であるが、寸詰まりの縦長剥片を用いている。基部に底面を残す。１、２は共に黒曜石１。３は安山岩８製の二側縁加工の小型品。縦長剥片製で、打面側を基部として用いており、打面をそのまま残している。厚く断面三角形状を呈し、加工は比較的入念。４、５はナイフ形石器尖頭部の破片である。鋭い尖頭部であるが、他のナイフ形石器と同様厚みがあって断面が三角形となる。４が安山岩２、５が安山岩４。

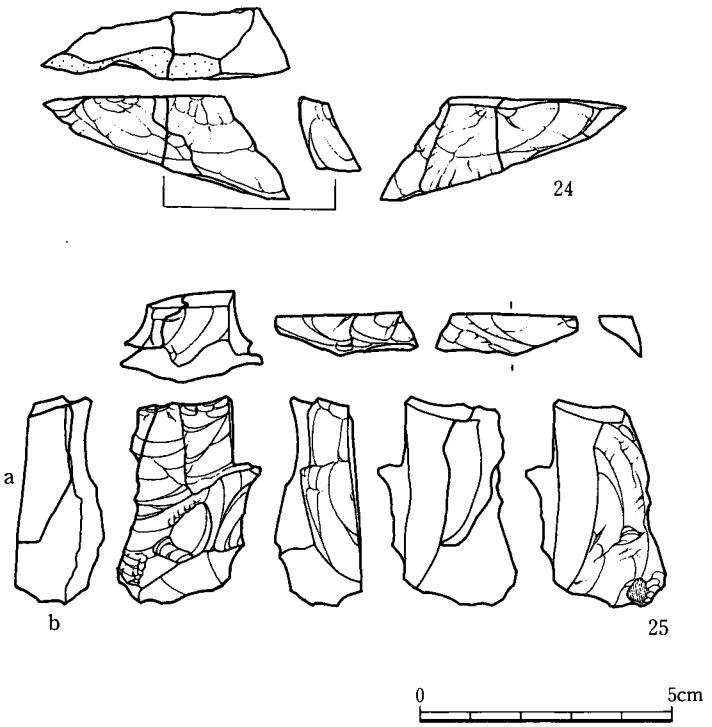
７～９は切出形の刃部を有するもので、尖頭部の形状はやや鈍くなる。７、８は共に横長剥片製で打面を残している。背面の打面側に加工痕のように見える剥離は石核調整痕である。背面末端側に施される加工は比較的大きな剥離が用いられている。７が安山岩２、８が安山岩３でいずれもやはり厚みがある。９は黒曜石２の偏平な二側縁加工品。左側縁の blunting は入念



第112図　大割遺跡第4文化層出土石器(1)（2/3）



第113図　大割遺跡第4文化層出土石器(2)（2/3）



第114図　大割遺跡第4文化層出土石器(3)（2/3）

である。10は欠損しているが、9と同種のナイフ形石器であった可能性がある。安山岩4。13も二側縁加工のナイフ形石器の欠損品であるが、本来の形状は不明である。黒曜石2。6、11、12はナイフ形石器の基部と考えられるものである。ただ12のような場合には角錐状石器の基部と厳密に峻別できない。6が安山岩1。11が安山岩2。12が黒曜石1。

14～16は角錐状石器(尖頭器様石器)である。14は安山岩2製で、右側縁の加工は部分的であり、特に尖頭部の作出は左側縁の加工のみによって行われている。未加工の刃部を残しているという点でナイフ形石器との峻別は困難な石器である。15、16は黒曜石製の角錐状石器である。15は尖頭部の破片で左側縁には折断面を持ち、それを積極的に利用した石器であったと考えられる。16は基部破片である。当文化層の角錐状石器の中では最も入念な加工を施したもの。整美な三角柱状を呈している。主要剝離面には手は加わっていないが、右側縁、左側縁とも加工は背稜側と腹面側の双方から施されている。15は黒曜石1、16は黒曜石3。

17～23は加工痕の見られる剝片である。17は仮に削器としたが、二次加工の剝離痕は大きく刃部は鋸歯状を呈している。18、19は打面を除去するように二次的な剝離が施された石器であるが、その意図は不詳である。17～19は安山岩2。20は打面部、背面側から小さな剝離が施されている。21は背面の打面側に小剝離痕が見られるもの。ともに安山岩7。22、23は黒曜石製

第40表　大割遺跡第4文化層出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	B1-35-28	黒曜石	1	32.5	15.3	9.6	2.92	46°	−	−
2	ナイフ形石器	B1-35-41	黒曜石	1	24.4	19.0	10.1	4.15	−	○	−
3	ナイフ形石器	B1-44-37	安山岩	8	29.1	13.1	9.3	3.39	52°	−	−
4	ナイフ形石器	B1-34-32	安山岩	2	24.5	15.6	10.2	2.20	54°	○	−
5	ナイフ形石器	B1-44-38	安山岩	4	18.4	15.3	8.1	1.10	48°	○	−
6	ナイフ形石器	B1-45-1	安山岩	1	21.3	22.7	17.9	2.49	−	○	−
7	ナイフ形石器	B1-44-24	安山岩	2	45.1	23.5	14.2	10.96	54°	−	−
8	ナイフ形石器	B1-34-54	安山岩	3	51.2	20.5	10.4	9.20	68°	−	−
9	ナイフ形石器	B1-34-26	黒曜石	2	32.1	16.2	5.4	2.53	40°	−	−
10	ナイフ形石器	B1-35-25	安山岩	4	34.6	21.9	6.7	5.50	−	○	−
11	ナイフ形石器	B1-44-27	安山岩	2	17.4	15.1	10.3	1.96	−	○	−
12	ナイフ形石器	B1-45-2	黒曜石	1	13.5	13.3	7.5	1.13	−	○	−
13	ナイフ形石器	B1-54-10	黒曜石	2	24.7	21.1	11.1	5.89	−	○	−
14	角錐状石器	B1-34-18,63	安山岩	2	55.3	26.1	17.0	14.73	−	−	−
15	角錐状石器	B1-35-12	黒曜石	1	25.1	13.1	8.6	2.26	−	○	−
16	角錐状石器	B1-34-6	黒曜石	3	28.5	12.0	11.6	3.50	−	○	−
17	削器	B1-34-61	安山岩	2	32.2	45.5	13.5	14.73	−	−	−
18	二次加工剥片	B1-34-92	安山岩	2	25.3	27.3	9.7	4.30	88°	−	−
19	二次加工剥片	B1-34-19	安山岩	2	35.4	30.3	12.3	11.03	48°	−	−
20	二次加工剥片	B1-54-23	安山岩	7	29.8	42.6	18.5	13.49	−	−	−
21	二次加工剥片	B1-34-78	安山岩	7	48.6	23.9	10.2	8.94	50°	○	−
22	二次加工剥片	B1-43-4	黒曜石	2	23.5	21.7	8.9	3.53	56°	○	−
23	二次加工剥片	B1-35-5,56	黒曜石	1	24.5	16.1	11.3	4.03	−	−	−
24	剥片	B1-54-20,26	安山岩	7	21.3	51.8	13.3	8.69	−	−	−
25a	剥片	B1-34-13	珪質頁岩	1	13.1	27.9	6.0	1.76	−	−	−
25b	石核	B1-34-28	珪質頁岩	1	42.0	17.9	20.5	16.38	−	−	−

の加工のある石器。22は打面部を基部とした尖頭器状の石器と思われる。尖頭部を折損している。黒曜石2。23は本来部厚な剥片で実測図では右端の面が主要剥離面である。裏面全体が二次的な剥離面で覆われている。黒曜石1。

24には底面を残す剥片の例を示した。背面には2枚の剥離痕が残されているが、連続的に横長剥片が生産されたことが窺える。本例は打点直下で2つに折損している。安山岩7。25は石核と剥片の接合例である。横長剥片の剥離痕が残されているが、接合する剥片は最終的には別の剥片石核から剥離されたもの。珪質頁岩1。

⑤大割遺跡第4文化層のまとめ

母岩別資料の分布とユニットの構成　近接する3つのブロックによって構成される。その点では第3文化層のユニットと同じである。3つのブロックのうちではⅣ1ブロックの集中度が特に高く、また単に遺物点数だけでなく、製品が含まれる比率が一際高くなっている。例えば

主要器種であるナイフ形石器と角錐状石器で見れば、全体で16点のうち、13点が集中している。このブロックは遺物点数では全体の65%であるが、ナイフ形石器と角錐状石器の点数では全体の81%を占める。しかしそれ以上に興味深いのはブロック間の共有母岩が少ないことである。当文化層では接合資料がブロック内に限られることは既に述べたが、それは母岩別資料の分布からすれば容易に首肯できる。当文化層で大半を占める石材は安山岩と黒曜石である。まず安山岩について各ブロックに含まれる個体を列挙すれば次のとおりである。

IV1ブロック：安山岩1、2、3、4、5、6、7、10

IV2ブロック：安山岩2、5、7、8、10

IV3ブロック：安山岩7、9

以上のうち安山岩10は識別不能のものの総称であるから、除外して考える。複数のブロックに亙って分布しているのは安山岩2、5、7である。安山岩2はIV1ブロックに主体的に分布し、IV2ブロックには1点存在するだけである。また安山岩5はIV2ブロックに主体的に分布し、IV1ブロックには3点存在するだけである。したがってこの2個体は分有関係ではなく、また隣接するブロックであるため、単に飛んで分布するだけということも考えられる。他方安山岩7はIV3ブロックの主体となる個体であるが、IV1ブロックの中心部分にもまとまって分布しており、IV2ブロックにも2点存在している。次に黒曜石の分布を示す。いずれも粗悪な黒曜石である。

IV1ブロック：黒曜石1、3

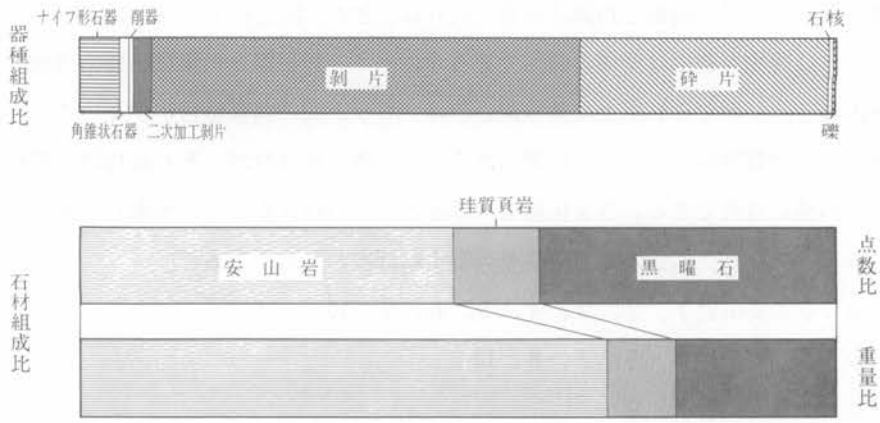
IV2ブロック：黒曜石2

IV3ブロック：黒曜石2

黒曜石3は角錐状石器1点だけである。搬入品であると考えられる。したがって黒曜石1はIV1ブロック、黒曜石2はIV2、3ブロックと完全に1個体ずつ分割されており、互いに干渉することはない。以上をまとめると安山岩では3つのブロックはそれぞれ少しずつ他との関係を保持しているように見えるが、黒曜石ではIV1ブロックが他に対して独立的である。また珪質頁岩についてはIV1ブロックにしか存在しない。

ユニットの形成　3つのブロックのなかではIV1ブロックが特徴的な様態を示す。残された石器を見ると、加工途中、あるいは折損したものかと思われるものが目立ち、遺跡が廃棄されたままの状況を示しているようである。IV2、3ブロックはそれ以前に形成されていたものか。IV1ブロックが独自に保有する石材については、新しく獲得された個体と考えることができるが、それにしても明瞭に独立的であるので、集団は一時この遺跡を離れていたことも考えられる。またIV3ブロックには土坑が残されていたが、その性格については不詳と言わざるを得ない。

石器群の様相　当文化層の石器は剝片製のナイフ形石器と角錐状石器によって特徴付けられ



第115図　大割遺跡第4文化層出土石器組成

第41表　大割遺跡第4文化層出土石器組成表

	ナイフ形石器	角錐状石器	削器	二次加工剥片	剥片	砕片	石核	礫	計	総重量g
珪質頁岩1	−	−	−	−	14	10	1	−	25	38.76
珪質頁岩2	−	−	−	−	−	3	−	−	3	1.35
黒曜石1	3	1	−	1	35	20	−	−	60	58.79
黒曜石2	2	−	−	1	18	12	−	−	33	31.62
黒曜石3	−	1	−	−	−	−	−	−	1	3.50
安山岩1	1	−	−	−	9	1	−	−	11	46.80
安山岩2	3	1	1	2	9	1	−	−	17	84.88
安山岩3	1	−	−	−	4	−	−	−	5	15.66
安山岩4	2	−	−	−	1	−	−	−	3	8.39
安山岩5	−	−	−	−	11	1	−	−	12	20.69
安山岩6	−	−	−	−	5	2	−	−	7	8.05
安山岩7	−	−	−	2	24	15	−	−	41	84.58
安山岩8	1	−	−	−	−	−	−	−	1	3.39
安山岩9	−	−	−	−	3	1	−	−	4	9.55
安山岩10（識別不能）	−	−	−	−	3	13	−	1	17	28.51
珪質頁岩計	−	−	−	−	14	13	1	−	28	40.11
黒曜石計	5	2	−	2	53	32	−	−	94	93.91
安山岩計	8	1	1	4	69	34	−	1	118	310.50
総計	13	3	1	6	136	79	1	1	240	444.52
百分率	5.4	1.3	0.4	2.5	56.7	32.9	0.4	0.4	100	

る。剥片ナイフは横長剥片素材のものも目立つ。ナイフ形石器には鋭い尖頭部を持つものと切出形石器の両者があるが、厚みのあるものが多く、特に前者は尖頭部の形状など角錐状石器との親縁関係が指摘できると言えようか。

角錐状石器は、関東地方においては出現時期が極めて限定され、また西日本からの強い影響

力の下に成立した石器であることはここで改めて言うまでもない。当文化層の産出層準は武蔵野台地に対照させればIV層下部に当たり、ほぼ同時期の類似の石器群は枚挙に暇がない。ところで角錐状石器の出現は、尖頭器石器群の出現への先駆をなすものだとされることが多いが、下総台地では角錐状石器を含む石器群から後続の尖頭器石器群への推移が明確ではない。たしかに角錐状石器と石槍(槍先形尖頭器)とは簡単には接続しない。むしろ角錐状石器や石槍以外の、尖頭器としてのナイフ形石器との組成の推移を捉えなおすことが必要ではないだろうか。当文化層を前後する時期は、横剝ぎの技法が卓越する時期でもある。当文化層出土遺物にも横長剝片が多く見られる。特に24は石核底面を残す剝片であり、板状剝片石核の存在を疑わせるものがあるが、当文化層からは石核は基本的に出土していないため厳密には判断できない問題である。しかし24と同一母岩の剝片類にも他に同様のものは見当たらない。まして国府型(類似)ナイフ形石器も存在しない。とすると24は偶発的なものであると考えざるを得ない。実際の出土遺物群の観察からも、原則として一般的な剝片剝離工程の範疇で収まる石器群と理解しておきたい。

8．池花南遺跡第2文化層

①概観

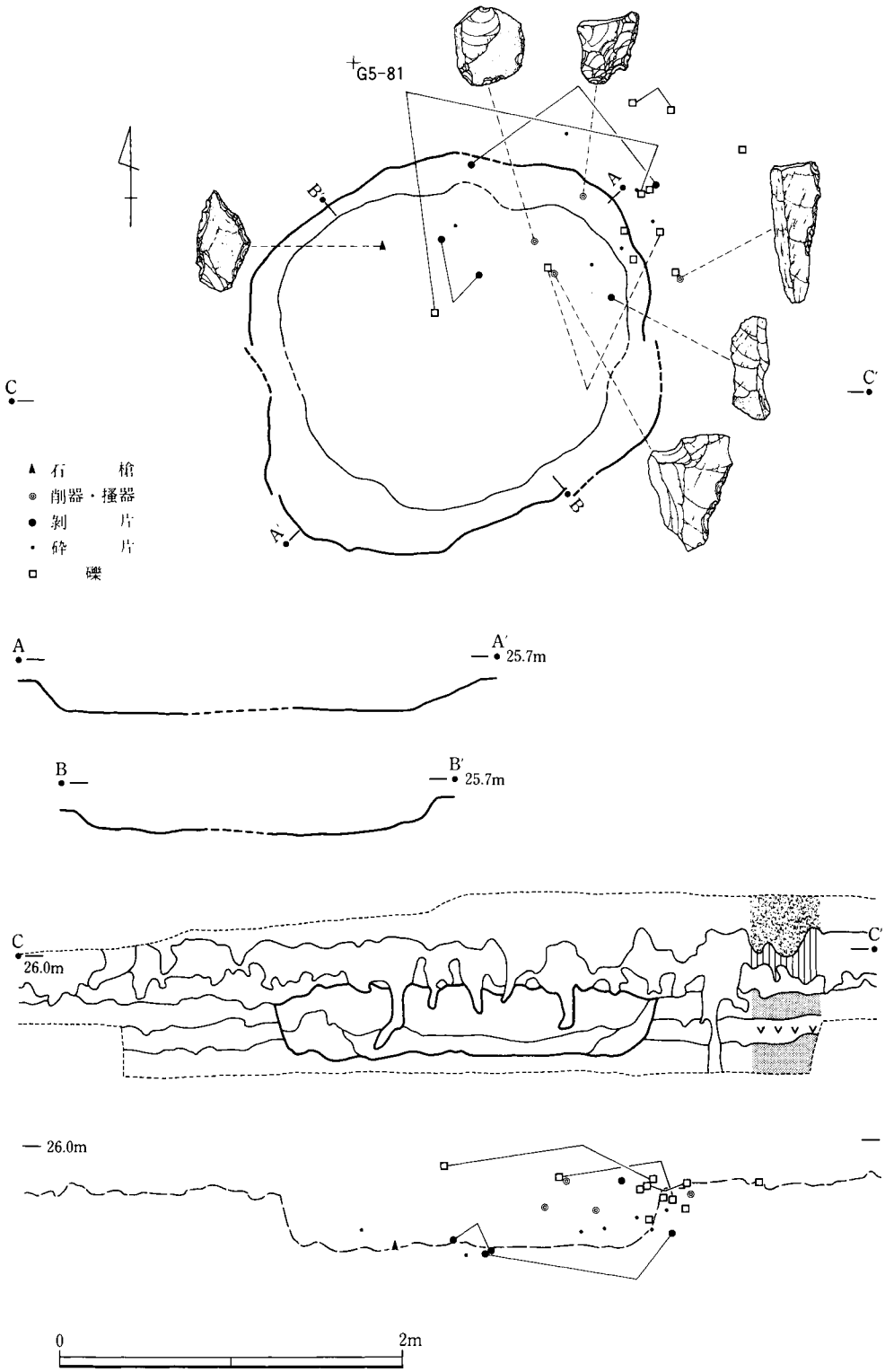
大割遺跡第4文化層と同様、IV層に生活面を有していたと考えられる文化層である。遺構・遺物は大きく広がりを見せることなく、竪穴遺構1基が検出されたのみである。竪穴遺構からは特徴的な石器群と無数の炭化物粒が検出されたが、言うまでもなく先土器時代はかかる遺構の検出例が極めて乏しく、全国的に見ても注目すべき重要な成果である。

②竪穴遺構(第116図、図版12)

検出状況　当遺構が検出された地点は、事前の確認調査によって数点の石器が出土していたが、本調査における拡張時に、2m×2mの確認trenchがブロックの中核部分付近に設定されていると判断し、確認trenchの南壁面を生かす形でsection beltを設定して調査区を拡張した。重機によって表土層のみを除去した後、まずsection beltの北側を掘り下げていったが、そのうち石器と共に炭化物が目立って検出された。一旦掘削を中止して炭化物が分布する範囲を観察すると、炭化物の分布範囲のみ土色が微妙に異なっていることが判明した。範囲はbeltの北側で半円形を示した。土色の違いは大割遺跡の土坑と同じで、炭化物の分布範囲だけが赤色スコリアを多く含んだ赤みを帯びた色調を示した。そのため、V層を切り込んだ遺構の存在が予想された。そこでsection beltの北側に幅30cmのsection trenchを設定して掘り下げ、まず断面観察を行うことにした。

断面観察の結果、遺構の掘り込み面はIV層とV層の境付近かやや上方、明らかにV層とVI層を切り込んで床面はVII層に達していた。炭化物粒は落ち込みの中には非常に多く、それより外側には目立って少なくなることも把握できた。覆土は基本的にIV層下部のロームと同一であるが、やや汚れた印象があった。ここに至って当遺構は明瞭な竪穴遺構であると判断されたが、大割遺跡の項でも述べたように平面的には遺構範囲の把握は極めて難しい。幸い当遺構はVI層を切り込んでいるため、平面的な調査の進め方として、曖昧な判断の下に調査するよりもはっきりプランを把握した方がよいと考え、土色の判別し易いVI層上面まで、炭化物のdottingを行いながら周囲を含めて掘り下げ、その後に遺構覆土を除去することにした。

遺構　遺構は長径約2.6m、短径約2.2mの隅丸方形を呈する。床面は概ねflatと判断した。厳密には微妙な凹凸があってもそれを再現できないことは言うまでもないが、そのような凹凸は遺構廃絶後の自然環境の要因によって生じるものであろうから、その再現は不要であると考える。掘り込みの深さは断面から判断する限り40cm前後である。掘り込み面は第116図ではIV層とV層の境になるが、実際にはその判断は不可能であり、若干上位になる可能性も考えている。遺構内には柱穴等の付帯施設は一切検出されなかった。しかしこれとて存在したとしても



第116図　池花南遺跡Ⅳ層竪穴遺構（1/40）

検出が可能だったかどうかは微妙な問題である。なお3層に分けた遺構覆土は次の如くであった。

1層：黒色、明橙色、赤色スコリア粒子を含む。全体に赤みを帯びるが、IV層より僅かに暗色である。

2層：黒色、明橙色スコリア粒子を含む。V層に近い色調を示すが、部分的にはより暗色の箇所がある。若干軟質。

3層：赤色、明橙色スコリア粒子を含む。黒色スコリア少量。やや白みを帯びた色調を示す。若干軟質。

以上であるが、その差は微妙である。また接する自然土層に影響されている要素もあろう。いずれにしてもIV層に極めて近似した土を基本とし、切り込んでいるV層、VI層の土も交えながら僅かに軟質でかつ僅かに腐植質であるという観察結果であった。

③炭化物粒子分布状況(第117図)

竪穴遺構とその周辺には多くの炭化物粒子が含まれていた。しかし遺構の内外では全くその密度が異なっていた。第117図の平面分布図からは明らかに遺構内に炭化物粒子が集中していることが容易に理解できよう。垂直分布図では上位が希薄であるが、それは遺構検出以前に掘り下げてしまった部分で、section belt の範囲しか dotting されていないためである。

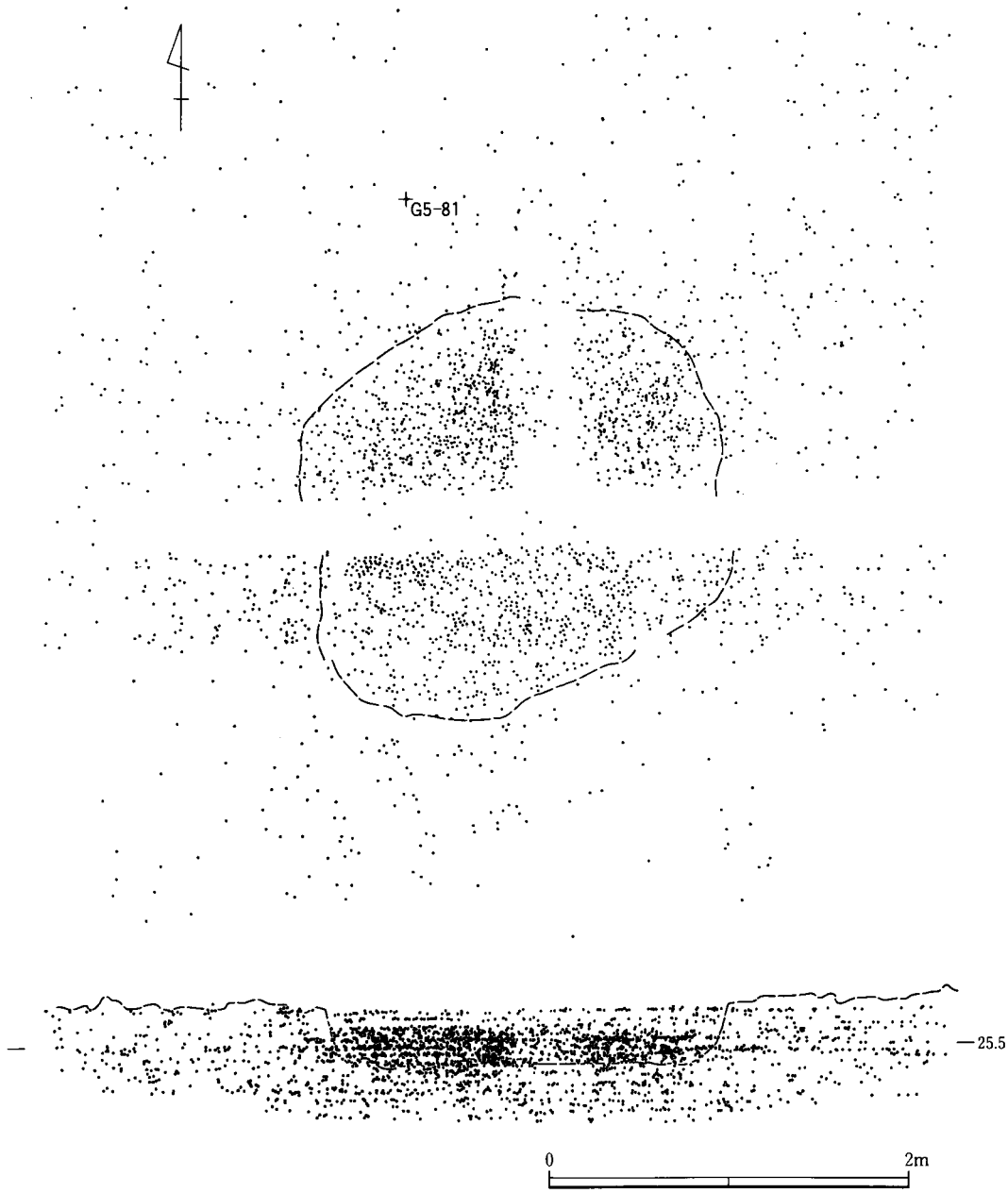
④遺物出土状況(第116図)

遺物は計28点が出土した。出土位置は遺構の北東側に集中している。遺構内にある遺物はほぼ床面から、壁面近くや遺構外にある遺物は浮いて出土する傾向が窺われる。このことからも当遺構の遺構としての信憑性は明らかであると言うことができる。ところでこの遺物出土状況は北東側から遺構内に流れ込んでいるような状態を示すが、遺構廃絶後に遺物が捨てられた際の状況をそのまま反映するものであろうか。

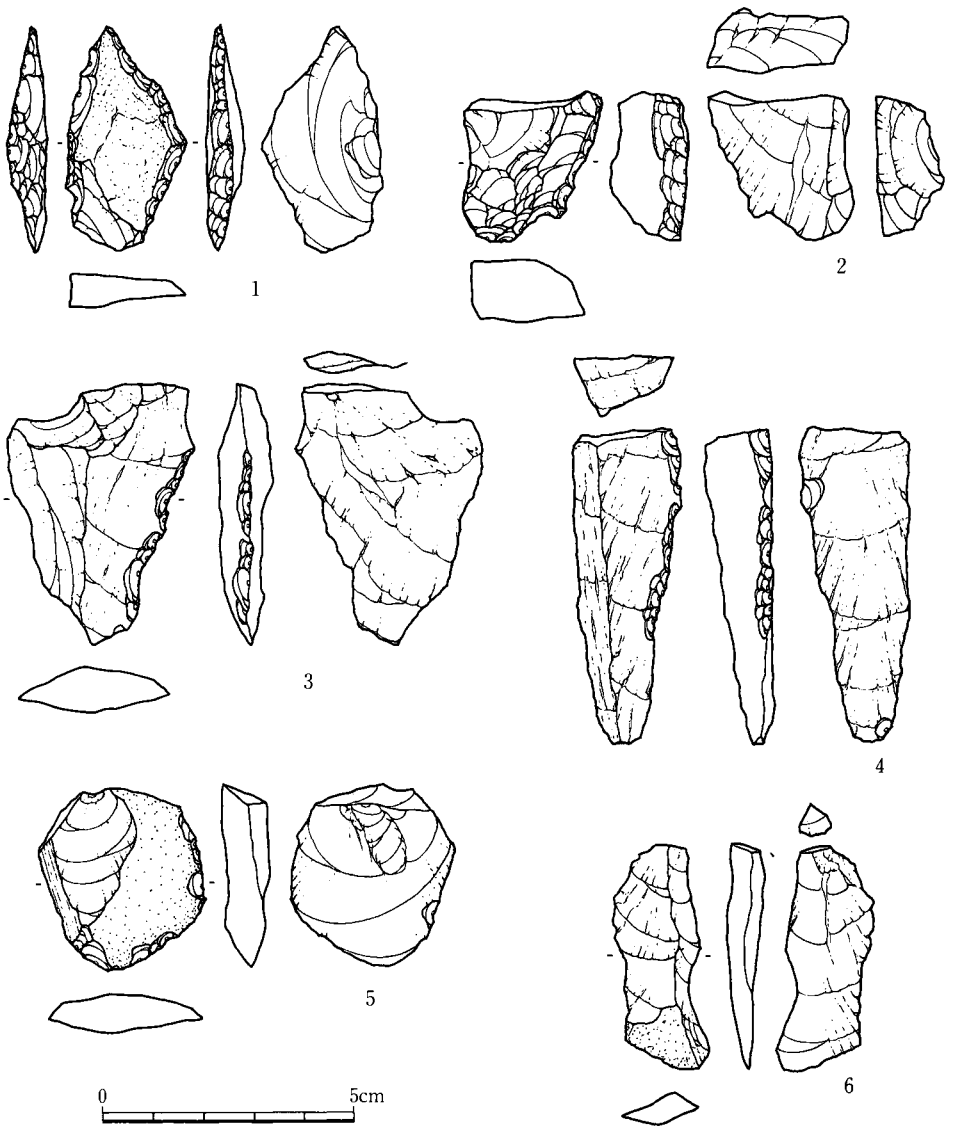
⑤出土遺物(第118図、図版45)

石器、剝片、砕片の他に破砕礫がある。実測図には剝片も含め、6点を図示した。

1は石槍とする。横長剝片素材で左側縁は完全に blunting 加工であるが、ナイフ形石器の刃部に相当する部分にも加工が及んでおり、尖頭部の作出をより意識したものと思われる。右側縁の加工は削器の刃部に近い。腹面は全く手が加わっていない。この石器は類例に乏しいが、八千代市権現後遺跡第3文化層、第14ブロックの安山岩製の石槍(図23-5)が最も近似していると言えようか。凝灰岩製。2は掻器とする。粘板岩の分厚な剝片を素材として縁辺に急斜な加工を施し、2面を折断する。折断よりも調整が先行している。3、4は削器である。3は2と



第117図　池花南遺跡Ⅳ層竪穴遺構炭化物分布（1/40）



第118図　池花南遺跡第２文化層出土石器（2/3）

第42表　池花南遺跡第２文化層出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	石槍	G5−81−21	凝灰岩	1	44.1	24.6	7.9	7.24	−	−	−
2	削器	G5−81− 9	粘板岩	1	29.4	36.5	13.7	13.96	68°	−	−
3	削器	G5−81−16	粘板岩	2	49.9	26.9	29.5	56.82	52°	−	−
4	削器	G5−81− 4	凝灰角礫岩	1	62.2	21.5	13.8	15.29	64°	−	−
5	二次加工剥片	G5−81−10	頁岩	1	33.9	35.5	8.6	9.40	−	−	−
6	剥片	G5−81− 8	凝灰岩	2	45.0	22.9	701	4.44	−	−	−

は別個体の粘板岩製で右側縁の大半に刃部が作られている。4は石英安山岩製で、断面三角形の長い剝片の打面側を折断し、右側縁に刃部を作出したもの。5は加工痕のある剝片。調整剝離が連続的でないため、削器とはしなかったが、機能的には削器と同様のものと考えられる。流紋岩の略円形の剝片を素材としており、左側縁にある節理面を含め未加工の部分も刃部として使用されたと思われる。6は凝灰岩の剝片。石材は1とよく似ているが、若干細粒。

他の遺物は図版45に全点を掲載した。小さな剝片及び砕片と共に破砕した焼礫が目立った。

⑥池花南遺跡第2文化層のまとめ

遺構　当文化層では先土器時代では稀少な遺構を、非常に信頼性の高い形で検出、調査し得たところに意義深いものがある。しかしこの遺構の性格については明らかであるとは言い難い。

千葉県内では竪穴状の遺構として、東金市道庭遺跡と市原市ナキノ台遺跡で検出されたものがある。両遺跡ともに未報告であり詳細は不明であるが、いずれも柱穴状のピットを有しており、住居址状の遺構と言われる。それらの形状は不整の円形または楕円形で、径3m前後を測る。当文化層の遺構はそれらの遺構と比較してより小さく、また柱穴状の付帯施設も検出されず、遺構の形状だけからすると墓壙としての可能性を指摘できないではない。その場合は当然ながら、遺構の名称も竪穴遺構ではなく土壙と呼ぶのが正しい。しかしながら遺物の出土状況、

第43表　池花南遺跡第2文化層出土石器組成表

	石槍	削器	二次加工剝片	剝片	砕片	礫	計	総重量g
珪質頁岩 1	−	−	−	2	−	−	2	1.54
頁岩 1	−	−	1	−	−	−	1	9.40
粘板岩 1	−	1	−	−	2	−	3	14.43
粘板岩 2	−	1	−	−	−	−	1	14.56
粘板岩 3	−	−	−	−	1	−	1	0.24
粘板岩 4	−	−	−	−	1	−	1	0.56
粘板岩 5	−	−	−	−	1	−	1	0.64
砂岩 1	−	−	−	−	−	1	1	2.52
砂岩 2	−	−	−	−	−	1	1	31.01
砂岩 3	−	−	−	−	−	5	5	105.41
砂岩 4	−	−	−	−	−	1	1	56.82
砂岩 5	−	−	−	−	−	1	1	71.79
凝灰岩 1	1	−	−	−	−	−	1	7.24
凝灰岩 2	−	−	−	1	−	−	1	4.44
凝灰岩 3	−	−	−	−	−	2	2	103.42
凝灰岩 4	−	−	−	−	−	1	1	31.96
凝灰角礫岩 1	−	1	−	−	−	−	1	15.29
凝灰角礫岩 2	−	−	−	−	−	2	2	46.20
チャート 1	−	−	−	2	1	−	3	1.77
合計	1	3	1	5	6	14	30	519.24

多量の炭化物の存在などからすれば墓址としての可能性は否定的であると言えよう。

問題は炭化物をいかに評価するかであろう。肉眼観察では焼土は全く見られなかった。また破砕礫は礫群の存在を想定させるが、それらの出土状況は明らかに別処からここに廃棄されたことを示している。したがって当遺構が火処を伴った遺構であったことにはならない。結局、結論を示すのは不可能であり、類似の遺構例が検出、報告されるのを待つ他はないと言える。

遺物　石槍とした尖頭器(1)が特徴的である。後出の石槍と系譜上の連続性を持つならば、石槍文化の先駆的な石器とすることができるがどうであろうか。これに類似した石器は、既に指摘したように八千代市権現後遺跡第3文化層にある。権現後遺跡第3文化層はIV層を産出層準とし、したがって当文化層とほぼ同時期と考えることができる。権現後遺跡では他に削器状の尖頭器(第14ブロック-4)と半両面加工の比較的整美な石槍(第12ブロック-8)が出土している。これらはいまだ例は少ないながらある一時期を特徴づける石器となり得るものであるが、残る問題としては、角錐状石器を尖頭器の主体として持つ石器群との関係がある。産出層準は大割遺跡第4文化層との比較からもあまり差がなく、大きな時期差があるとは思えない。資料の増加を待って検討を加えたい問題である。

註1　橋本勝雄・他『八千代市権現後遺跡』(財)千葉県文化財センター　1984

2　道庭遺跡調査会による調査　担当者である小高春雄の教示による

3　(財)千葉県文化財センター年報No.9　1983

9．池花遺跡第2文化層

①概観

池花遺跡の北東端近く、F2区にIII11ブロックが検出された。大半の遺物がソフト・ローム層から出土したためIII11ブロックとしたが、実際にはハード・ローム層の遺存が悪く、IV層は完全にソフト化しており、IV層～V層相当の位置から出土した遺物がある。III層のブロック群としては第3文化層とした後述のIII1～10ブロックがあるが、当ブロックは位置がやや離れており、石器群の内容も全く異なって明らかに古相を呈するため、第2文化層とした。遺物点数は僅少であるが、特徴的な石器として横長剝片製のナイフ形石器がある。

②出土状況(第119図、図版14-3)

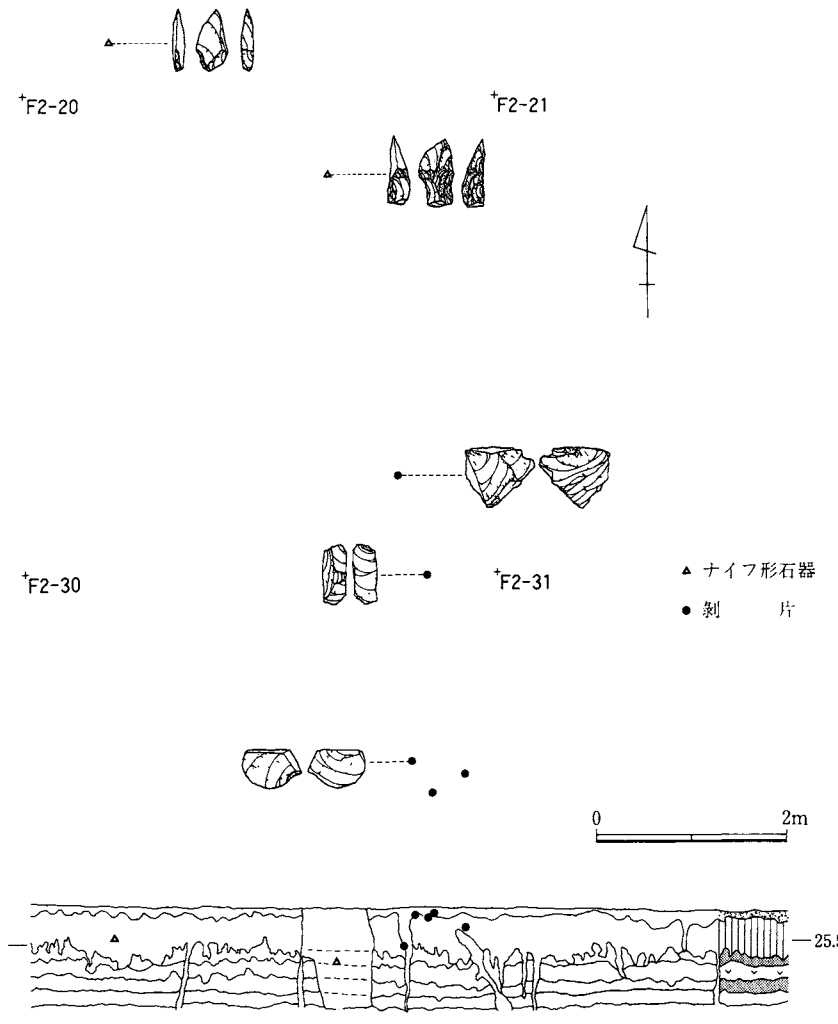
ブロックは、台地が小さく舌状に張り出す部分の基部にあたる平坦面上に位置する。遺物点数は僅か8点(1点は原位置不明)で極めて散漫な分布を示し、分布範囲は南北7.8m、東西3.7mである。ナイフ形石器2点が北側にやや離れて点在し、南寄りに剝片類が若干まとまる傾向を見せるが、全体としては南北方向に列をなして分布していると言える。

垂直分布は図の通りIII層上面からIV層上面に及び、レベル差は約0.6mである。先述のようにロームの上位は遺存が悪く、ソフト・ローム直下はV層上位から中位になる。したがってナイフ形石器2点(1、2)と剝片1点(4)はほぼIV層下位からV層に位置づけられる。しかし他の遺物は、それら3点と比べてかなり浮いた位置にあり、また偶然か必然か、北寄りの3点と他とで出土層位が分かれることになる。そうすると全体を同一の単位として把握できるかという問題が残る。現実に出土遺物は単体資料が殆どで、遺物相互の関連性を証明することはできない。

③出土遺物(第120図、図版51)

1、2はナイフ形石器である。1は緑がかった灰褐色を呈する珪質頁岩の横長剝片を素材とする。末端の一部を尖頭部、刃部として利用しており、まず打面、打瘤を除去するように左側縁に大きめの剝離が施され、さらに左右下とも入念な基部加工が加えられている。基部はもともとの剝片の厚さを生かして左右から調整することによって角柱状に仕上げられている。2は明確ではないが、流紋岩質の凝灰岩と思われる。素材は二方向折断の剝片で、元来の剝片の形状等は不明である。折断で得られた尖頭部を利用しており、加工は左側縁の基部にのみ施されている。

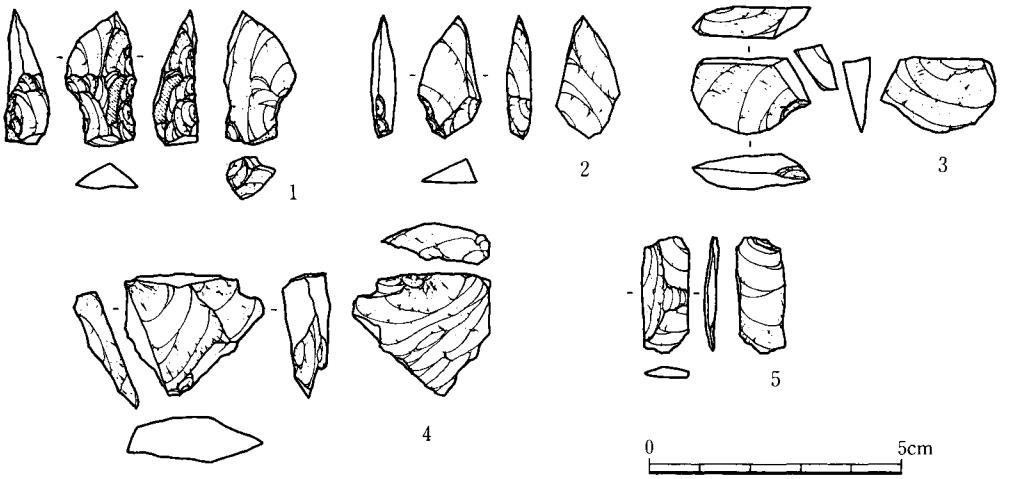
3～5は剝片を例示した。3、4は安山岩(別個体)製、5は瑪瑙製。3は折断によって2と同種の石器を目指したものかもしれない。



第119図　池花遺跡第２文化層遺物出土状況（1/80）

第44表　池花遺跡第２文化層出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	F2-20-1	珪質頁岩	1	27.0	13.8	9.0	2.51	32°	−	−
2	ナイフ形石器	F2-10-1	凝灰岩	1	24.5	12.6	4.7	0.86	30°	−	−
3	剥片	F2-30-2	安山岩	1	14.8	23.1	6.3	2.09	−	○	−
4	剥片	F2-20-2	安山岩	1	23.8	28.0	8.6	5.68	−	−	−
5	剥片	F2-30-1	瑪瑙	1	22.79	9.5	2.2	0.54	−	−	−



第120図　池花遺跡第２文化層出土石器（2/3）

④池花遺跡第２文化層のまとめ

当文化層は貧弱な規模のブロック１基によって構成されると一応の判断はしたが、時期の異なる遺物が重複している可能性も捨て切れないものである。勿論ブロックの性格も不分明である。出土した中で目立つ存在であるナイフ形石器、とりわけ１は横長剝片を素材とし、分厚く角柱状をなしているが、その特徴は大割遺跡第４文化層の石器群の特徴の一つに挙げたものと同様である。大割遺跡第４文化層は、時期的にはIV下層相当に位置付けられ、ここでは池花遺跡III11ブロックの、少なくとも一部の石器の出土層準からするとほぼ同時期と考えても矛盾はないとだけ指摘しておきたい。

第45表　池花遺跡第２文化層出土石器組成表

	ナイフ形石器	剝　片	計	総重量g
珪質頁岩　1	1	−	1	2.51
珪質頁岩　2	−	2	2	10.33
凝灰岩　1	1	−	1	0.86
瑪　瑙　1	−	1	1	0.54
安山岩　1	−	2	2	8.45
合　計	2	5	7	22.69

10．大割遺跡第５文化層

①概観

大割遺跡の第５文化層から第７文化層まではソフト・ローム中から検出されたものである。したがって層位的な上下関係から分離されたものではなく、抽出されたユニットを相模野や武蔵野の重層的な資料の援用によって分離したものである。大割遺跡第５文化層は、結論を先取りして言えば、相模野第IV期後半、武蔵野IV上層に対比される石器群を出土したユニットであり、他には同時期の遺構、遺物は検出されなかった。

検出されたユニットは遺跡の南西隅近く、南西方向から入る埋没谷に面するように位置していた。埋没谷は現地形では殆ど痕跡を留めていなかったが、かつてはもっと明確な谷地形をなしていたようである。ユニットは互いに近接して分布する４つのブロックにより構成される。４～７ブロックである。出土した石器群は粗製の石刃を素材とする複数種のナイフ形石器が主体となっている。

②出土状況(第121図、第122図、図版８-2)

全体では４箇所の集中が見られるため４つのブロックを設定したが、厳密には平面分布は完全に分離されるものではない。見方によっては環状分布を呈していると言えるが、勿論池花南遺跡第１文化層のようなものとは性格が異なる。

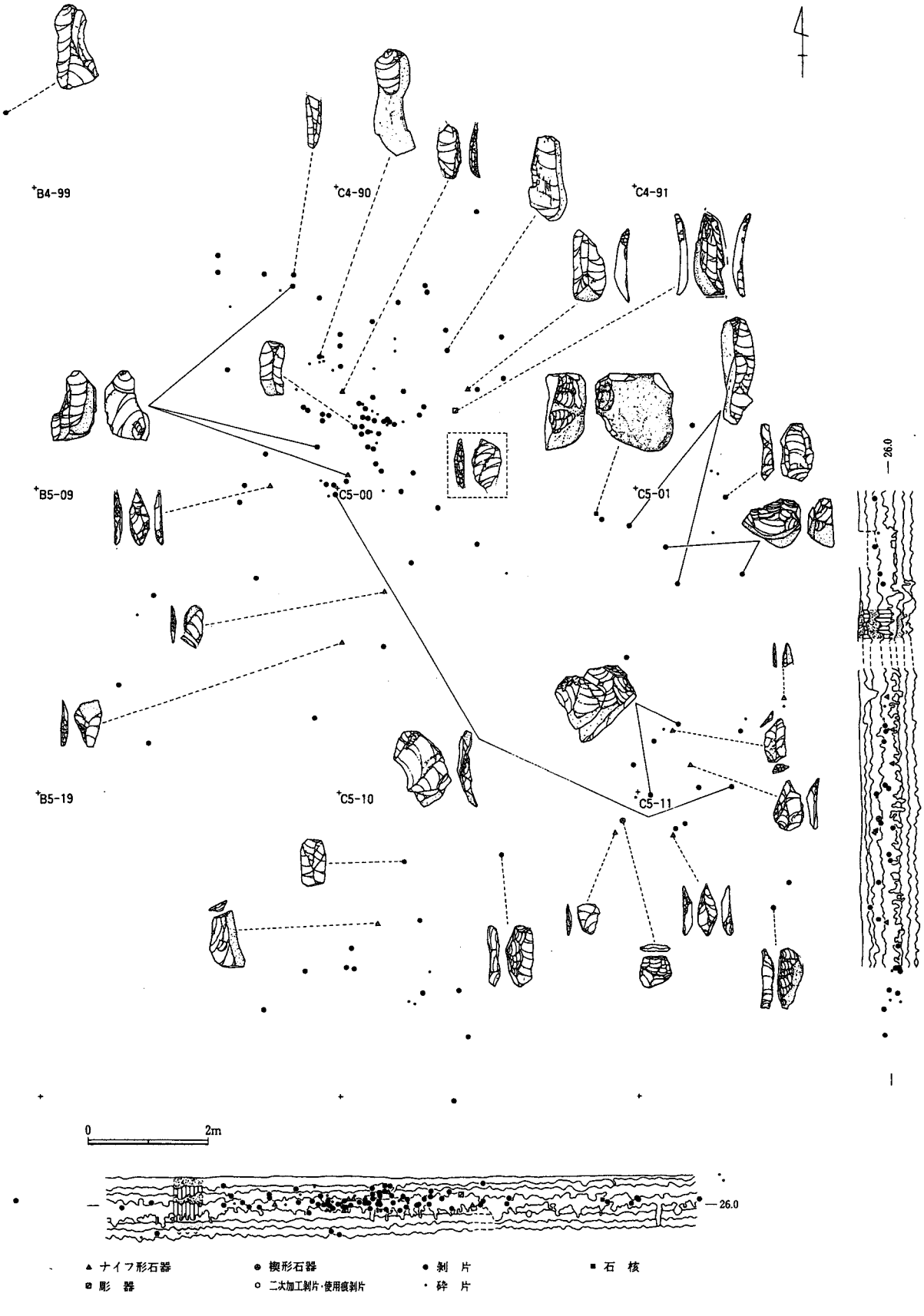
北西側の集中をIII４ブロックとする。遺物点数、集中度共に他を凌駕している。分布範囲は南北8.8m、東西6.4mを測るが、１点だけ北西に離れて出土したものもある。中央部には特に集中する箇所が見られ、多くは剝片である。ブロックの中にはナイフ形石器６点と彫器１点が含まれるが、とくに集中する傾向等は指摘できず、むしろ分散的であると言える。

北東側の集中をIII５ブロックとする。南北2.6m、東西2.5mの範囲に分布する。総点数僅か11点で最も散漫な分布傾向を示す。製品を含まない。

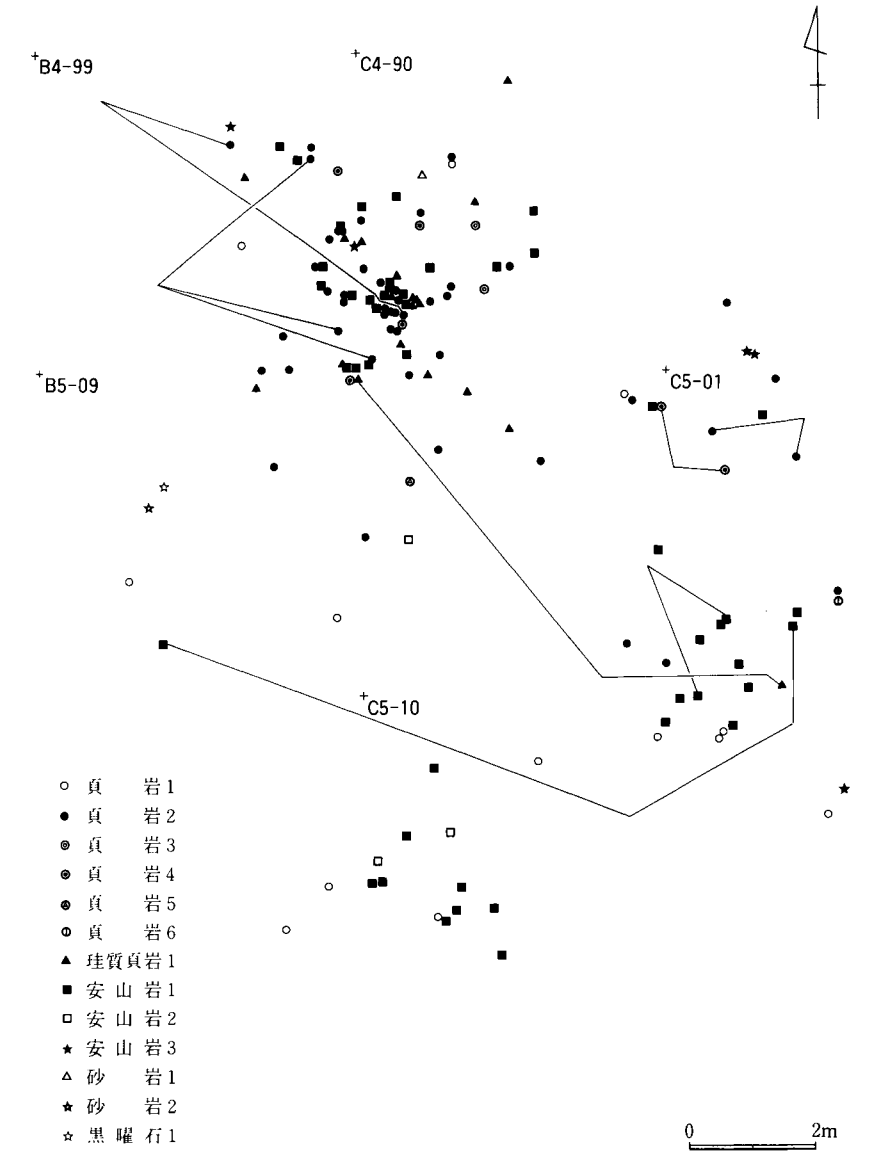
南東側の集中をIII６ブロックとする。南北3.7m、東西2.9mの範囲に分布する。総点数22点であるが、ナイフ形石器５点と楔形石器１点を含んでいる。

南西側の集中をIII７ブロックとする。南北4.1m、東西3.9mの範囲に分布する。遺物総点数16点でナイフ形石器１点を含む。

包含される土層は先に述べたようにIV層であるが、上下移動は他の文化層と同様かなり幅があり、レベル差は約0.7m。浮いてIV層中より出土したものも多い。すぐ北側には細石刃石器群を出土したブロックが並んでいたが、出土層準には殆ど差がないと言って差し支えない。母岩別の個体分類は比較的容易であったが、複数ブロックに亙って分布する個体も多く、逆に顕著な偏りを示す個体が見当たらない。これはそれぞれのブロックが同時に緊密な関係を以て形成



第121図　大割遺跡第５文化層遺物出土状況（1/80）

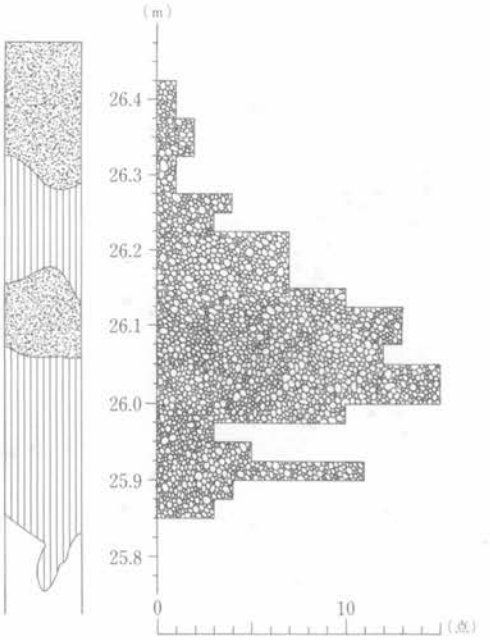


第122図　大割遺跡第5文化層母岩別分布（1/120）

されたことを示すものであろう。接合関係はIII 4ブロックとIII 6ブロックの間に認められた。

③出土遺物(第124図～第126図、図版46・47)

1～10、11a、12、13がナイフ形石器である。当文化層のナイフ形石器には多種のバラエティーがあり、一括して同一器種とすることはできない。そこでまず分類を示し、分類毎に記述を進める。



第123図　大割遺跡第５文化層遺物垂直分布図

A：尖頭器である。一側縁加工と二側縁加工、あるいは部分的な加工など多様なものがあり得るが、加工のあり方は素材の形態に影響され易い要素があるため、ここでは細別は行わない。

B：先鋭な尖頭部を持たない一側縁加工品である。

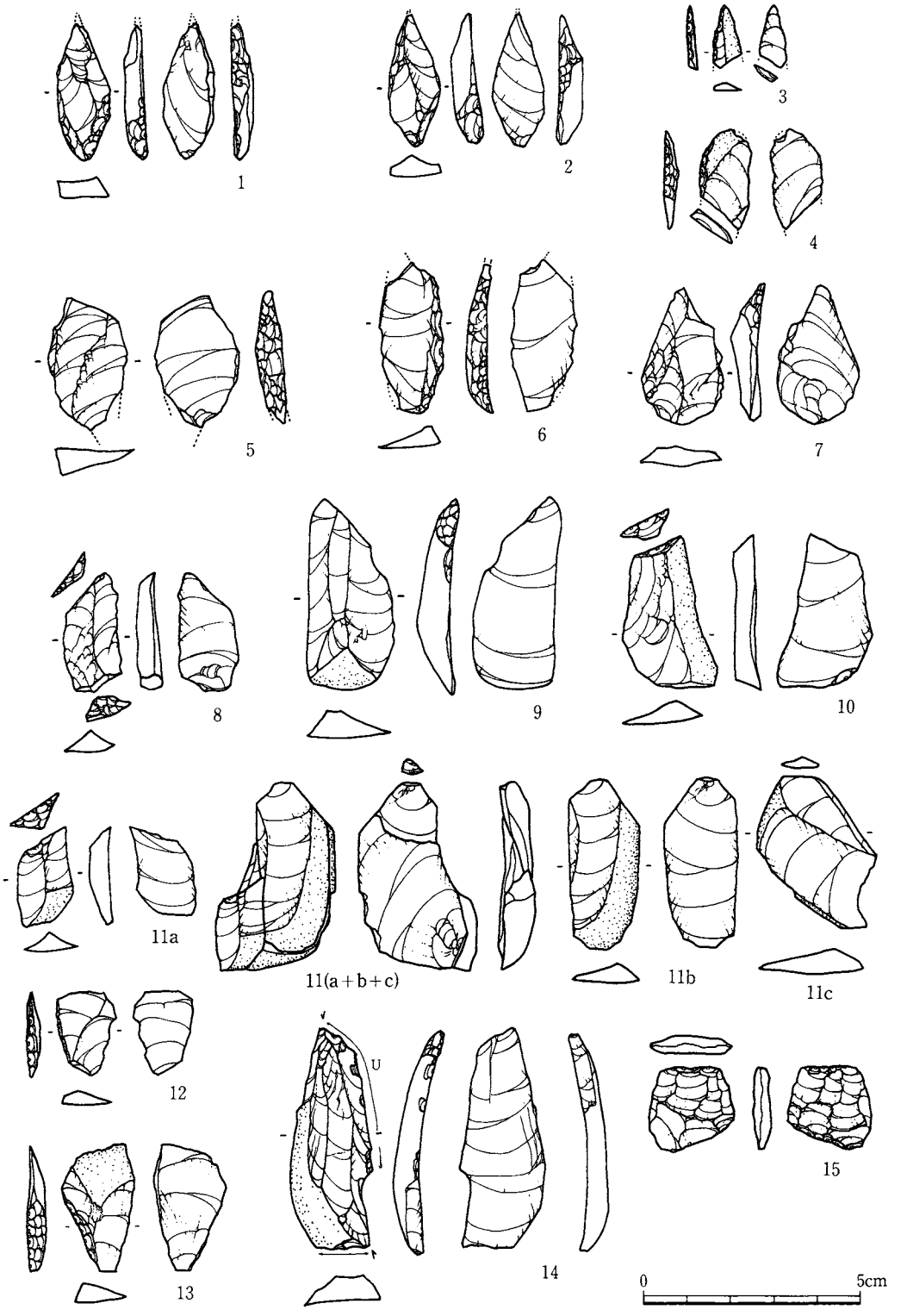
C：截頂石刃である。素材の一端を急斜に断ち切るもの。

D：台形石器である。

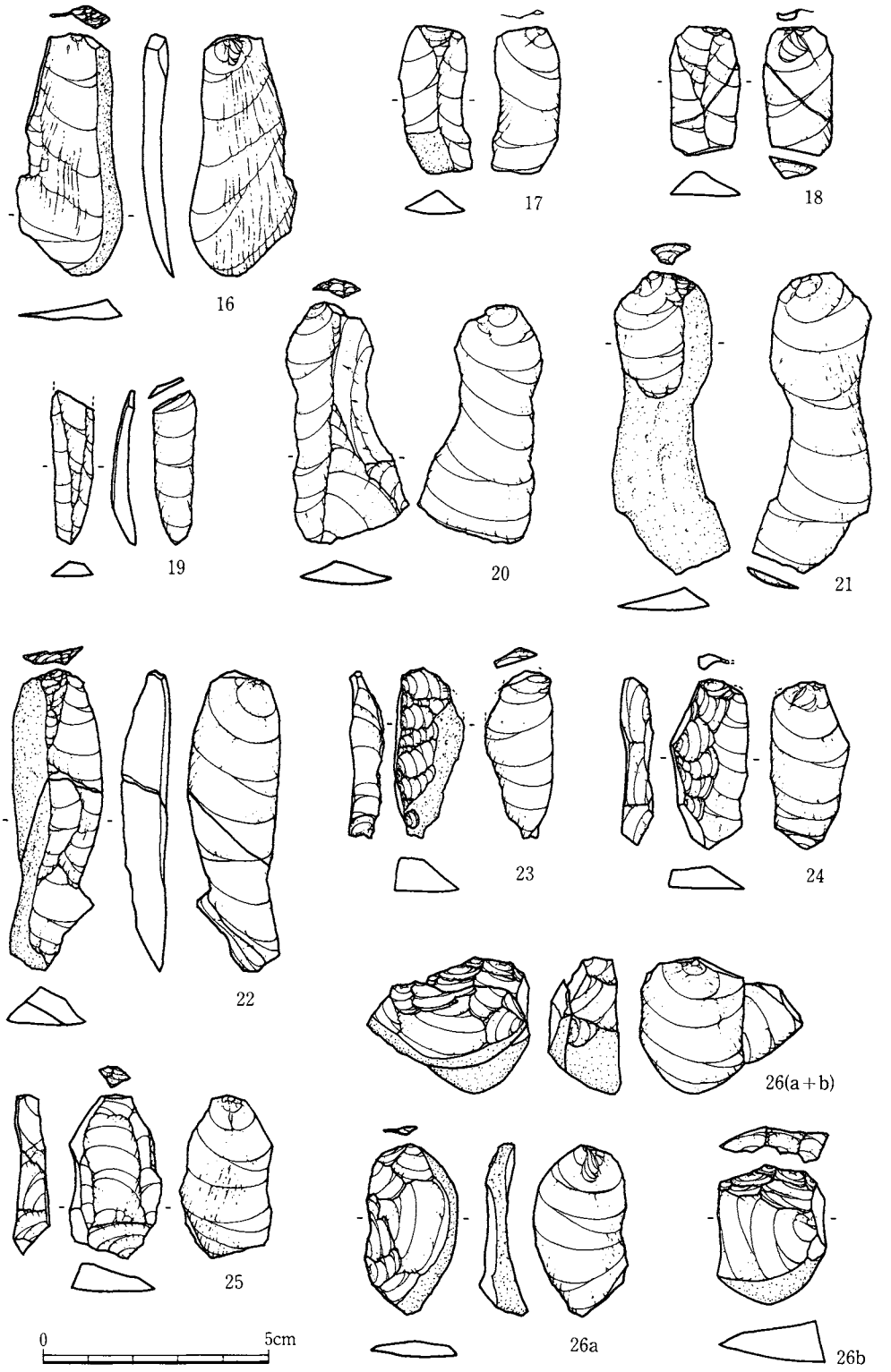
A類に分類されるのが１～３、７である。１と２は二側縁加工で、美麗な木葉形を呈する。両者は大きさ、長幅比ともにきわめて近い。３は尖頭部の破片である。非常に薄く、これも本来小型の製品であったと思われる。背面刃部側には礫皮面を残している。７は幅広の形状を示すもので、加工部位は先端右側縁に限られる。加工部位だけを見れば截頂石刃と同様であるが、素材の形状を生かして尖頭部の作出を企図したことは明らかであろうと思われる。１と３が頁岩２、２が頁岩１、７が安山岩１である。

B類に分類されるのが４～６である。いずれも欠損しているが、一側縁全体に腹面側からの加工が及んでいる。４が頁岩５、５、６が頁岩２である。

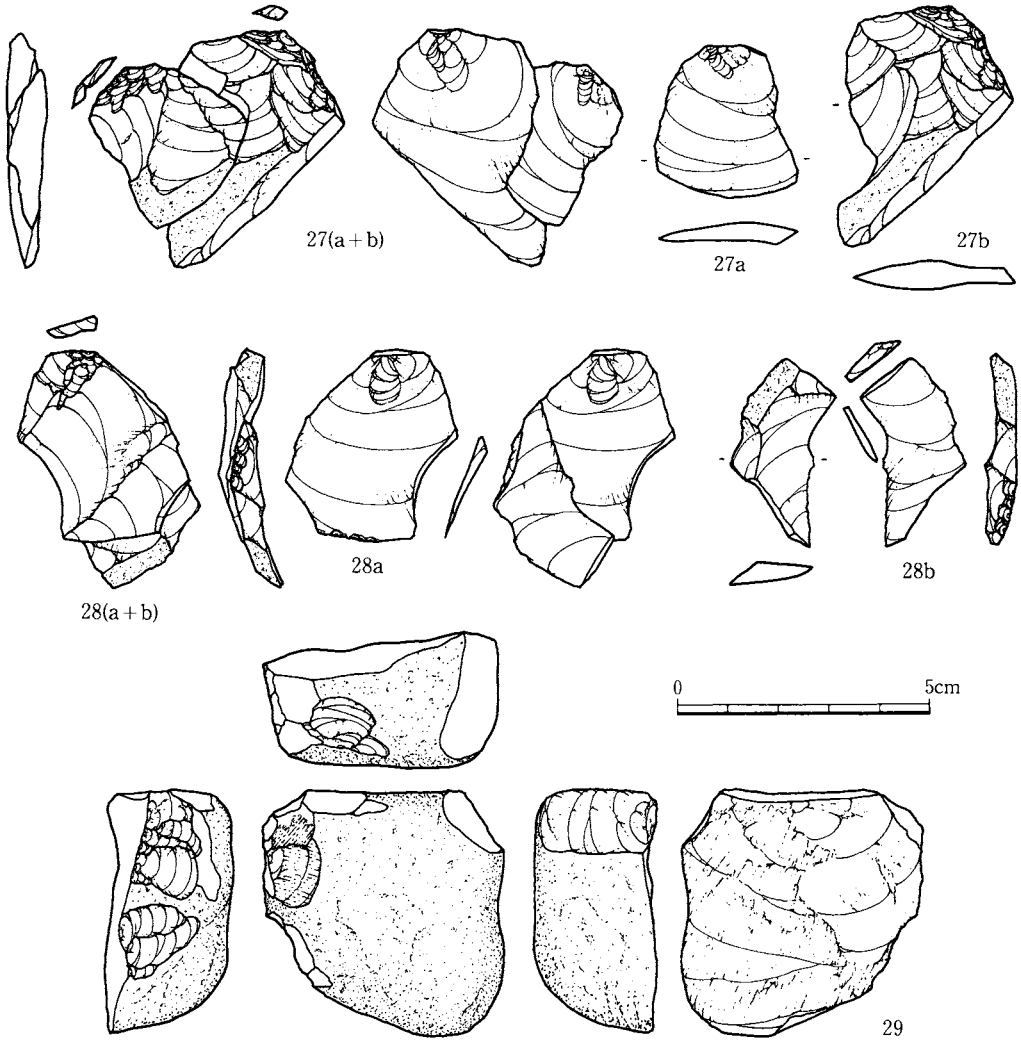
C類に分類されるのが８～11aである。素材の末端はそのまま生かし、打面部側を断ち落とすものが多い。９～11aがそうであるが、折断の後に細部調整を施していると考えられる。８は末端側を先端として断ち切っているが、打面側も打瘤を除去するためか調整が加えられている。



第124図　大割遺跡第5文化層出土石器(1)（2/3）



第125図　大割遺跡第5文化層出土石器(2)（2/3）



第126図　大割遺跡第5文化層出土石器(3)（2/3）

なお11はナイフ形石器C類と剥片2点の接合資料であるが、ナイフ形石器の素材の用い方や打面転移が観察される好例である。8～10が安山岩1、11が頁岩2。

D類に分類されるのが12、13である。寸詰まりの縦長剥片の末端を刃部として用い、打面側を折断し、一側縁に調整を加えて台形に整えている。12が頁岩1、13が頁岩2。

14は彫器である。彫器の出土は本例が唯一。石刃を素材とし、頭部と末端を調整した後、頭部左側縁と末端右側縁に樋状剥離を加えている。右側縁には刃こぼれが観察される。小坂型類似の彫器と言えよう。頁岩3。15は小型の楔形石器である。安山岩1。

16～28に剥片と剥片の接合例を示す。22までを石刃とする。16は14の彫器と同一母岩で当文化層の中ではやや異質な石材である。遺跡内では母岩消費が行われていまい。調整打面を有す

第46表　大割遺跡第５文化層出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角 調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	B4-99-8	頁岩	2	31.6	12.2	4.8	2.04	50°	○	−
2	ナイフ形石器	C5-11-4	頁岩	1	31.2	12.0	6.0	1.72	38°	○	−
3	ナイフ形石器	C5-01-18	頁岩	2	14.5	6.7	2.2	0.17	30°	○	−
4	ナイフ形石器	C5-00-2	頁岩	5	23.1	12.4	3.7	0.78	17°	○	−
5	ナイフ形石器	C4-90-45 (原位置不明)	頁岩	2	30.3	18.5	7.0	3.29	26°	○	−
6	ナイフ形石器	C4-90-4	頁岩	2	34.0	15.2	6.6	2.42	24°	○	−
7	ナイフ形石器	C5-01-9	安山岩	1	31.5	28.6	6.2	2.49	54°	−	−
8	ナイフ形石器	C5-01-17	安山岩	1	27.2	13.5	5.7	1.62	38°	−	−
9	ナイフ形石器	C4-90-54	安山岩	1	44.7	20.0	8.5	5.69	54°	−	−
10	ナイフ形石器	C5-10-1	安山岩	1	35.3	21.0	6.7	3.78	38°	−	−
11a	ナイフ形石器	C4-90-52	頁岩	2	23.1	13.2	5.4	1.25	38°	−	−
11b	剥片	B4-99-14	頁岩	2	39.4	17.7	7.5	3.66	−	−	−
11c	剥片	B4-99-3	頁岩	2	35.0	28.5	6.8	4.23	−	−	−
12	ナイフ形石器	C5-10-16	頁岩	1	19.7	14.2	3.1	0.77	20°	−	−
13	ナイフ形石器	C5-00-16	頁岩	2	29.0	17.4	5.0	1.97	18°	−	−
14	彫刻刀形石器	C4-90-14	頁岩	3	50.1	14.3	7.5	7.65	−	−	○
15	楔形石器	C5-10-15	安山岩	1	19.3	19.2	4.8	2.15	−	−	−
16	剥片	C4-90-23	頁岩	3	52.7	23.1	5.2	5.18	−	−	−
17	剥片	C4-90-41	安山岩	1	33.3	19.9	6.6	3.28	−	−	−
18	剥片	C5-10-9	安山岩	1	29.5	15.6	7.7	3.50	−	−	−
19	剥片	B4-99-15	頁岩	2	34.0	10.1	5.8	1.29	−	−	−
20	剥片	B4-88-4	頁岩	2	47.3	27.5	6.0	6.51	−	−	−
21	剥片	B4-99-19	頁岩	2	63.7	28.5	6.8	9.01	−	−	−
22	剥片	C5-00-19 C5-01-2	頁岩	4	66.7	24.0	9.0	11.76	−	−	−
23	使用痕剥片	C5-11-2	頁岩	1	37.3	15.5	8.0	4.55	−	○	○
24	剥片	C5-10-17	頁岩	1	37.2	17.5	7.6	4.93	−	○	−
25	剥片	C5-01-4	頁岩	2	35.8	20.4	8.0	5.15	−	−	−
26a	剥片	C5-01-5	頁岩	2	37.4	23.0	9.0	4.96	−	−	−
26b	剥片	C5-01-1	頁岩	2	31.3	24.7	10.9	8.70	−	−	−
27a	剥片	C5-11-13	安山岩	1	45.0	48.7	7.2	8.71	−	−	−
27b	剥片	C5-01-8	安山岩	1	30.8	30.4	5.7	4.64	−	−	−
28a	剥片	C5-01-11	珪質頁岩	1	39.0	33.7	7.5	6.46	−	−	−
28b	二次加工剥片	B5-09-10	珪質頁岩	1	29.4	26.8	6.0	2.95	−	−	−
29	石核	C5-00-12	頁岩	1	47.9	50.4	24.9	83.28	−	−	−

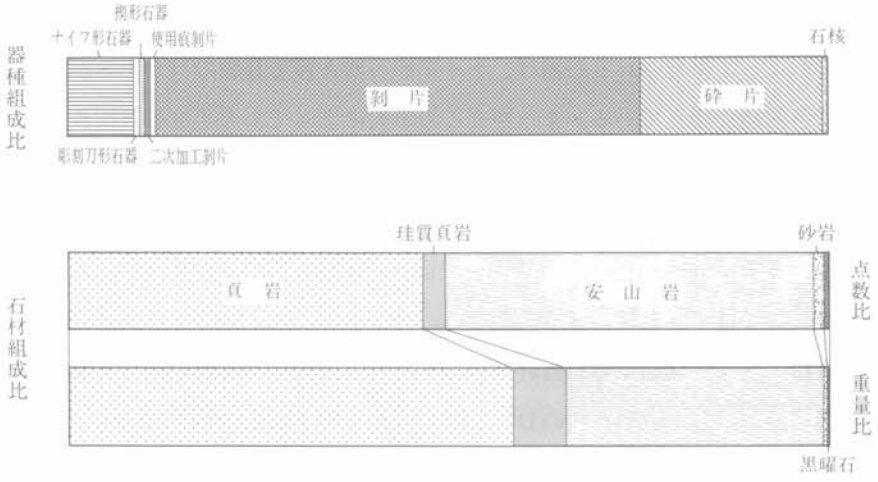
る。17、18はともに安山岩１製で寸詰まりのもの。19～21は頁岩２製、22は頁岩４製で調整打面を持つものが多い。それらのうち20の背面構成は他より複雑で、90°方向の打面転移を見ることができる。18と22は節理面で折れている。23、24は打面調整痕の残る打面再生剥片である。23からは90°打面転移を窺うことができる。ともに頁岩１。25はやはり打面転移を窺い知ることができる剥片である。頁岩２。26～28には接合資料を示した。26、28は打面再生、打面転移に関わるものであり、26b の打面から右側縁にかけて整った剥離痕を残している。また28について

は、28aの剥離後、28bの左側縁に見られるように1回剥片剥離が行われているが、また28bが28a背面の剥離痕と同一方向に剥離されている。他方27は周縁からの剥離痕が交錯している。

29は唯一残された石核である。分厚い剥片で、主要剥離面側から周縁に小振りの剥離痕が見られるが、有効な剥片剥離は行われてはいない。

④大割遺跡第5文化層のまとめ

ユニットの構成　母岩別資料で量的にまとまった個体としては、頁岩1、2、安山岩1がある。それらは頁岩2がIII 4ブロックに、頁岩1がIII 6、III 7ブロックに中心的に分布する傾向を見せるが、比較的分散的な分布を示している。また安山岩1はIII 6、III 7ブロックに多いが、いずれのブロックにも含まれ、偏りは少ない。したがって当文化層のユニットはきわめて緊密な一体性を帯びているということができる。しかし一方器種別の分布を見ると顕著な偏りが認められる。改めて述べるまでもなく当文化層の主要石器はナイフ形石器であるが、彫器他を含めて加工された製品の分布は明らかにIII 4ブロックとIII 6ブロックに集中している。当文化層ではblunting chipの出土が皆無に等しく、仮に調査時に全点が捕捉されなかった可能性を考えてみてもナイフ形石器の調整加工の場をユニット内のどこかに想定するのは困難である。それゆえナイフ形石器の粗密の差(と言うより有無の差)をいかに説明すべきか解答に窮するところである。ただあくまで可能性として指摘できることは、当ユニットが2単位によって構成されているのではないかということである。III 4ブロックはナイフ形石器A類1点、B類3点、C類2点、D類1点、彫器1点を含み、それらの製品は頁岩2から生産されたものを主体とする。製品が認められないIII 5ブロックは点数が少ないが、最も多く含まれるのが頁岩2である。よってIII 4、III 5ブロックを一つの単位と考える。単位Aとする。III 6ブロックはナイフ形石器



第127図　大割遺跡第5文化層出土石器組成

第47表　大割遺跡第５文化層出土石器組成表

	ナイフ形石器	彫刻刀形石器	楔形石器	二次加工剥片	使用痕剥片	剥　片	砕　片	石　核	計	総重量g
頁岩１	2	−	−	−	1	8	1	1	13	114.71
頁岩２	6	−	−	−	−	31	9	−	46	140.49
頁岩３	−	1	−	−	−	1	−	−	2	12.83
頁岩４	−	−	−	−	−	2	3	−	5	14.22
頁岩５	1	−	−	−	−	−	−	−	1	0.78
頁岩６（識別不能）	−	−	−	−	−	−	1	−	1	0.52
珪質頁岩１	−	−	−	1	−	14	4	−	19	33.45
砂岩１	−	−	−	−	−	1	−	−	1	1.89
砂岩２	−	−	−	−	−	−	1	−	1	2.08
黒曜石１	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.26
安山岩１	4	−	1	−	−	29	14	−	48	123.76
安山岩２	−	−	−	−	−	3	−	−	3	11.80
安山岩３（識別不能）	−	−	−	−	−	3	2	−	5	26.80
頁岩計	9	1	−	−	1	42	14	1	68	283.55
珪質頁岩計	−	−	−	1	−	14	4	−	19	33.45
砂岩計	−	−	−	−	−	1	1	−	2	3.97
黒曜岩計	−	−	−	−	−	1	−	−	1	0.26
安山岩計	4	−	1	−	−	35	16	−	56	162.36
総　計	13	1	1	1	1	93	35	1	146	483.59
百分率	8.9	0.7	0.7	0.7	0.7	63.7	24.0	0.7	100.1	

A類３点、C類１点、D類１点、楔形石器１点を含むが、頁岩１の製品全点（２点）と安山岩１の製品の過半を有する。Ⅲ７ブロックには製品はナイフ形石器C類１点が認められるに過ぎないが、頁岩１と安山岩１が多く分布し、よってⅢ６、Ⅲ７ブロックをもう一つの単位と考えることができる。これを単位Bとする。安山岩１は母岩別資料の分布のみで見たときにはあまり明確ではなかったが、ここにおいて単位Bによって主体的に保有されていた個体であることが解る。両単位によって保有される石器は、ナイフ形石器A類とB類のバランスが異なるが、それぞれがほぼ各器種を揃えている。また逆にこの事実によって、ナイフ形石器A類とB類が、他の２類（截頂石刃と台形石器）に対してよりも親縁関係にあると考えることができる。

当ユニットは、中央の空白部分を挟んで対向するかのように残された２基ずつのブロックによって構成される２単位から成り立っている。しかしながら各ブロック及びユニット総体の性格についてはここでは不詳と言わざるをえない。

石器群の様相　当文化層出土の石器群は石刃を持ち、先鋭な尖頭部を持つA類、一側縁加工のB類、截頂石刃のC類、台形石器のD類という大きくは４類に分類されるナイフ形石器を主体とする。このような特徴は、いわゆる“砂川期石器群”と同様の組成を示している。整美な石刃製ナイフ形石器が主導的なこの時期は相模野台地では第Ⅳ期とされるが、当石器群はもし

対照させるとするとその後半期に相当すると言えるであろう。相模野第IV期後半は石刃技法主導型あるいはその名残を持ちながら、90°打面転移も行われるようになること、また二側縁加工のナイフ形石器の形状の変化(長幅比の減少)、小型化が認められることが指摘されている[1]。これは武蔵野台地におけるIV中層からIV上層への変化と対応している。大割遺跡の石器群は相模野IV期後半、武蔵野IV上層の石器群よりも全体にさらに小型であり、石刃と言い得るものも持ちながら、同一の工程の中で、最終的には打面転移を繰り返して小型の剝片をも多く生産している(これらには多分に石材の制約が影響しているかもしれないが)。かかる剝片類は台形石器あるいは切出形石器などの素材となるものがある。その点では相模野や武蔵野の石器群も同様である。以上のようなことから冒頭に述べたように当文化層の石器群を相模野IV期後半に並行させて問題はないと言える。

最後にもう一つ石材の問題を指摘しておきたい。当文化層で主体的に使用されている石材は頁岩1、2と安山岩1であるが、それらが北関東で言う黒色頁岩と黒色安山岩であることである[2]。群馬県地方で多用されるそれらの石材は、下総台地でも時おり用いられるが、このことが石器群の様相といかに関わっているのか興味深い問題である。

註1 鈴木次郎「ナイフ形石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現～相模野第IV期石器群の構造的理解～」 神奈川考古22 1986

2 田村隆の教示による

11．大割遺跡第６文化層

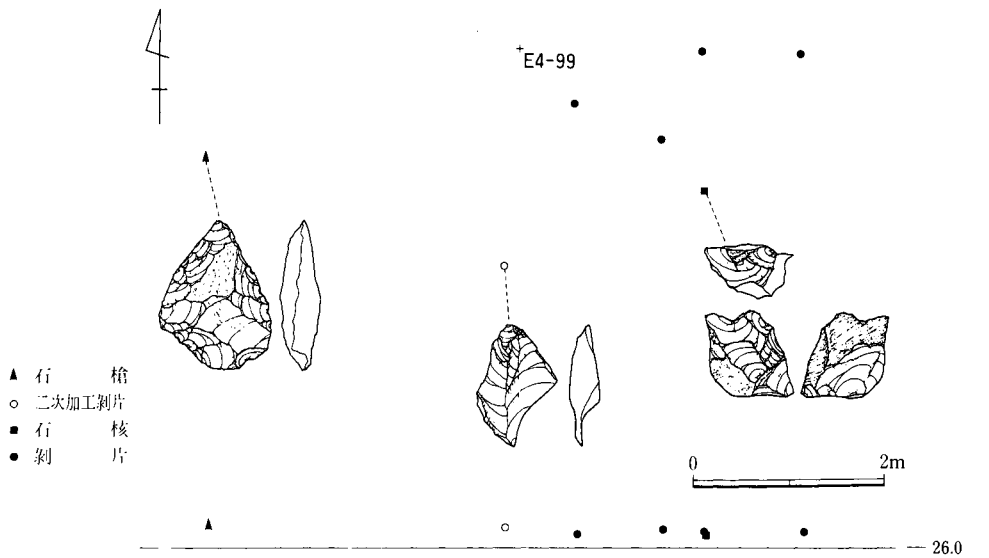
①概観

大割遺跡のソフト・ローム層中から検出された資料のうち、石槍を中心とする石器群を抽出して設定した文化層である。大割遺跡では細石刃石器群よりも明らかに後出と考えられる石槍は出土しなかったが、層位的な上下関係が認められないため、文化層の設定自体が安易かつ曖昧なものにならざるを得ない。

ブロックとしてはIII８、９ブロックがあり、またIII９ブロックの南に石槍が点々と散布する箇所が見られた。第６文化層としてまとめたのは以上であるが、他に後に提示する単独出土の石器の中にも明らかに同時期の石槍と考えられるものが存在する。ブロックは石槍が製作されていたような集中度の高いものはなく、全体の遺物点数も少ない。またIII８、III９ブロック間に直接的な関連性は認められなかった。III９ブロックとその南縁の石槍の特徴からは編年的位置はほぼ明確であるが、III８ブロックの石器群は新しく位置付けられる可能性も充分ある。

②III８ブロック

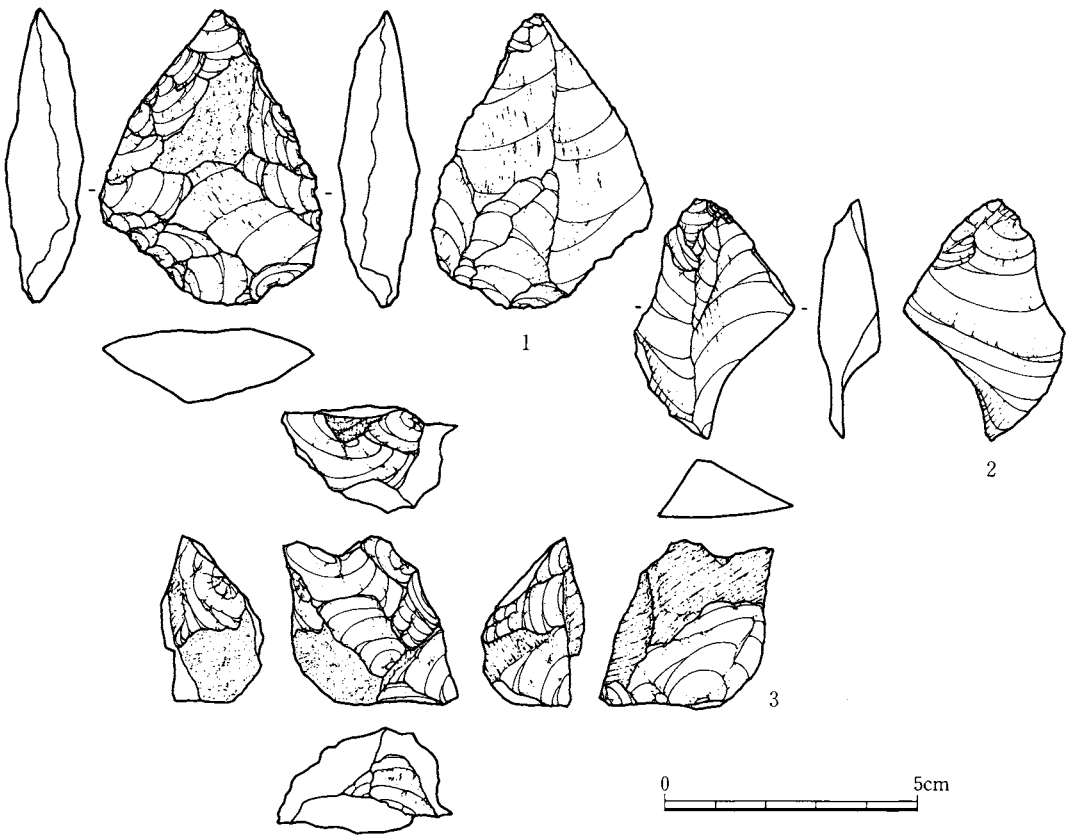
出土状況（第128図）　このブロックは縄文時代遺物包含層の調査中に検出、調査されたものである。包含されていたのはIIｃ層からIII層にかけてであり、調査中にはブロックの存在には気付かず、遺物包含層の整理の段階で抽出された。しかし石器の分布の把握には殆ど漏れはないと思われる。



第128図　大割遺跡III８ブロック遺物出土状況（1/80）

出土遺物点数は僅か7点である。東西6.3m、南北2.2mと東西に細長く分布するが、東寄りに同一母岩(オパール)の石核と剥片が分布し、やや離れて安山岩の石槍と瑪瑙の剥片が認められた。垂直方向には殆どレベル差がない。上位及び下位の遺物が失われたかのようであるが、これより下位からは遺物は出土しなかった。

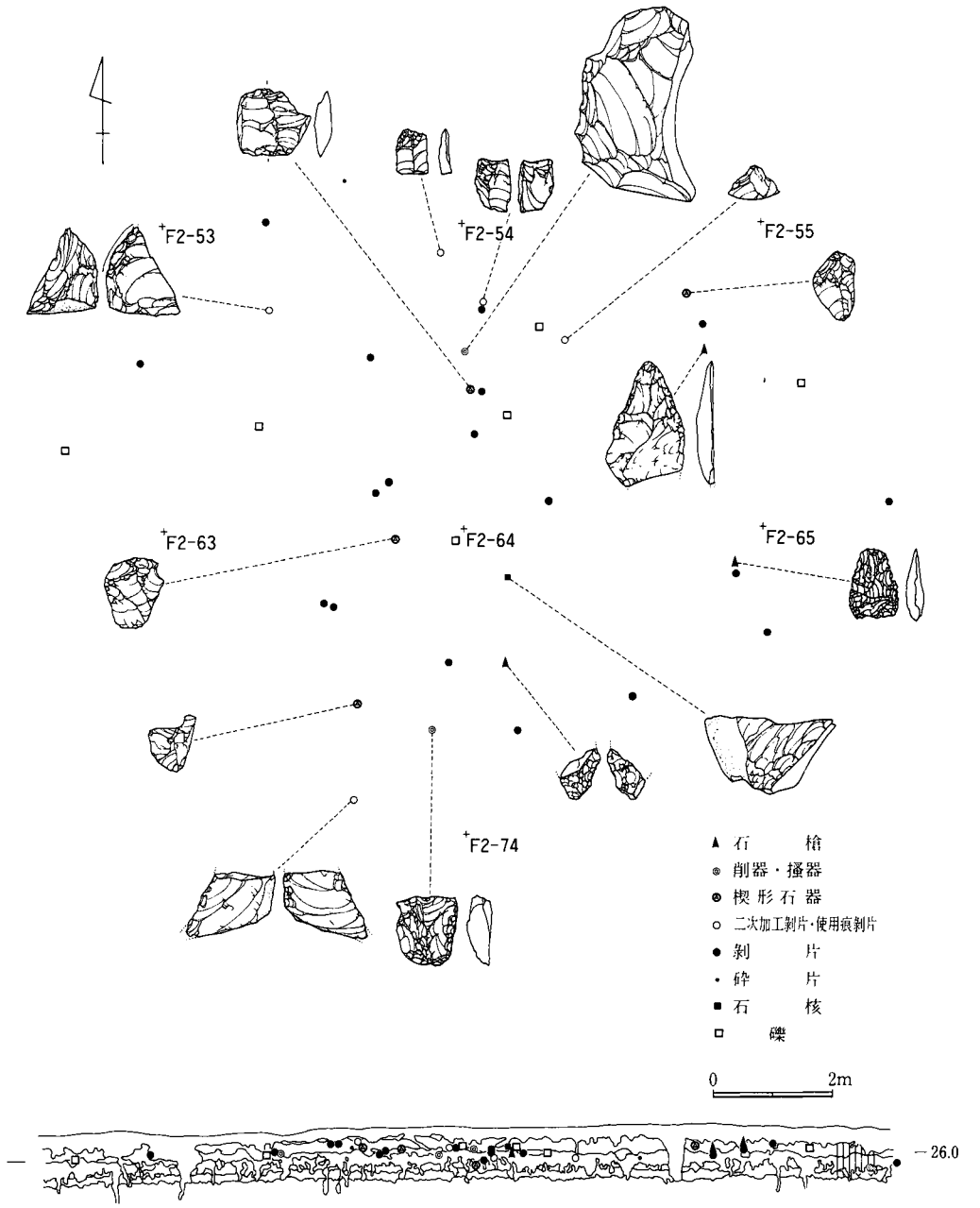
出土遺物（第129図、図版49）　1は安山岩製の、石槍未製品と考えられる石器である。縦長剥片素材であり、腹面右側縁側に主要剥離面を残している。加工痕は主として背面側の周縁に施されているが、未だ整形の段階で粗い剥離痕しか認められない。しかしこの先調整が進んだとしても、腹面側はあまり手を加えられないかも知れない。2は瑪瑙製の剥片であるが、本来尖頭状の形状を持っており、小型の石槍の素材となるものであろう。先端には加工痕を残しており、打面、打瘤は失われている。3はオパール製の石核である。節理面で分割された剥片を素材としていると思われる。周縁から求心的な剥離を行っている。当ブロックからはこの石核と明らかに同一母岩と考えられる剥片が4点出土した。それらは節理が発達しているため部分的にはあまり良好な剥離をしていない不定型の剥片である。加工痕は見られない。石核とは接合しなかった。



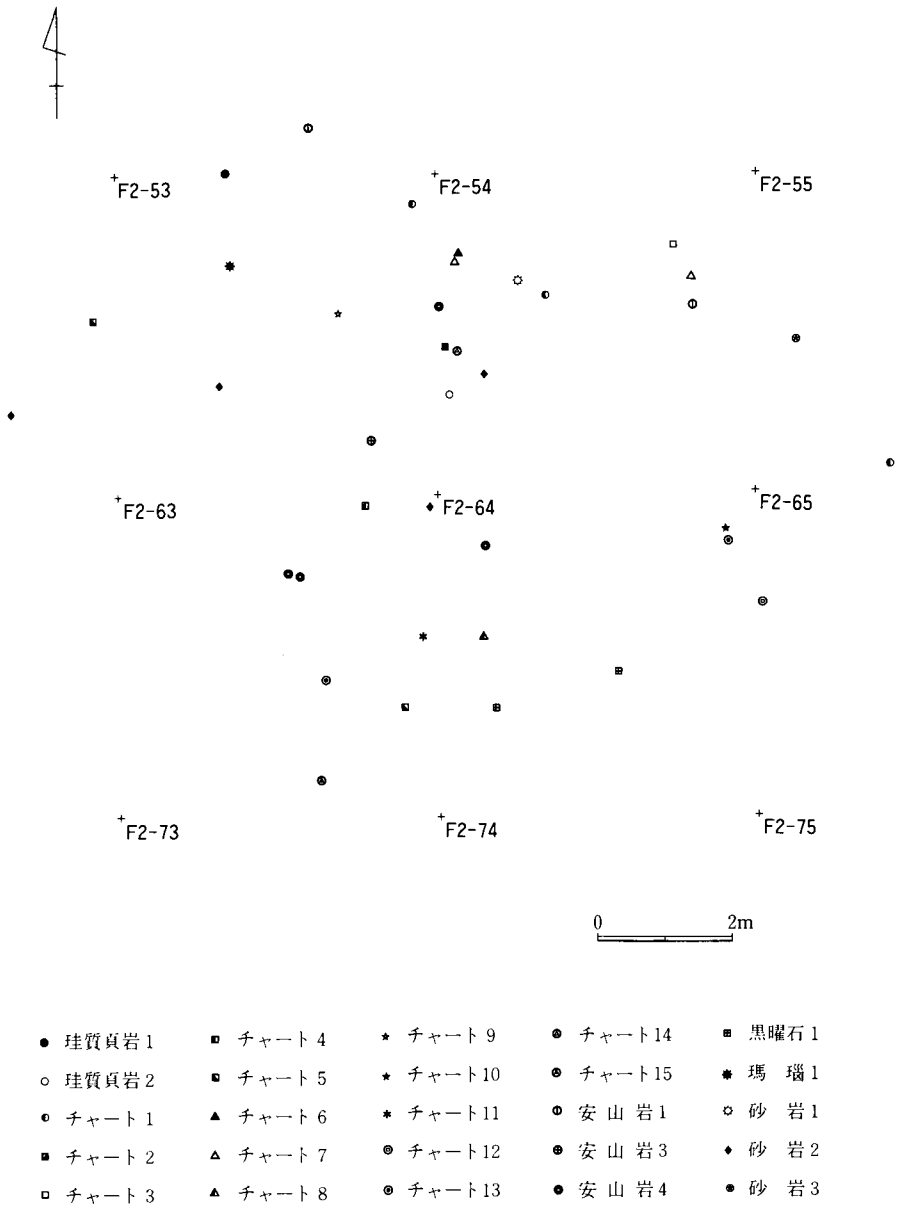
第129図　大割遺跡III8ブロック出土石器（2/3）

③III 9 ブロック

出土状況（第130図、図版 9 ）　遺跡の北東端近く、IX_L1ブロックが乗る細長く舌状に張り出した部分の付け根付近に検出された。分布範囲はかなり大きく、南北10.2m、東西13.9m の楕円形をなして分布していた。しかし分布密度は薄く、全体で40点に満たない。また特に集中する箇所も持たない。この地点はローム層上部の遺存が悪く、V層すら遺存しない部分があるの



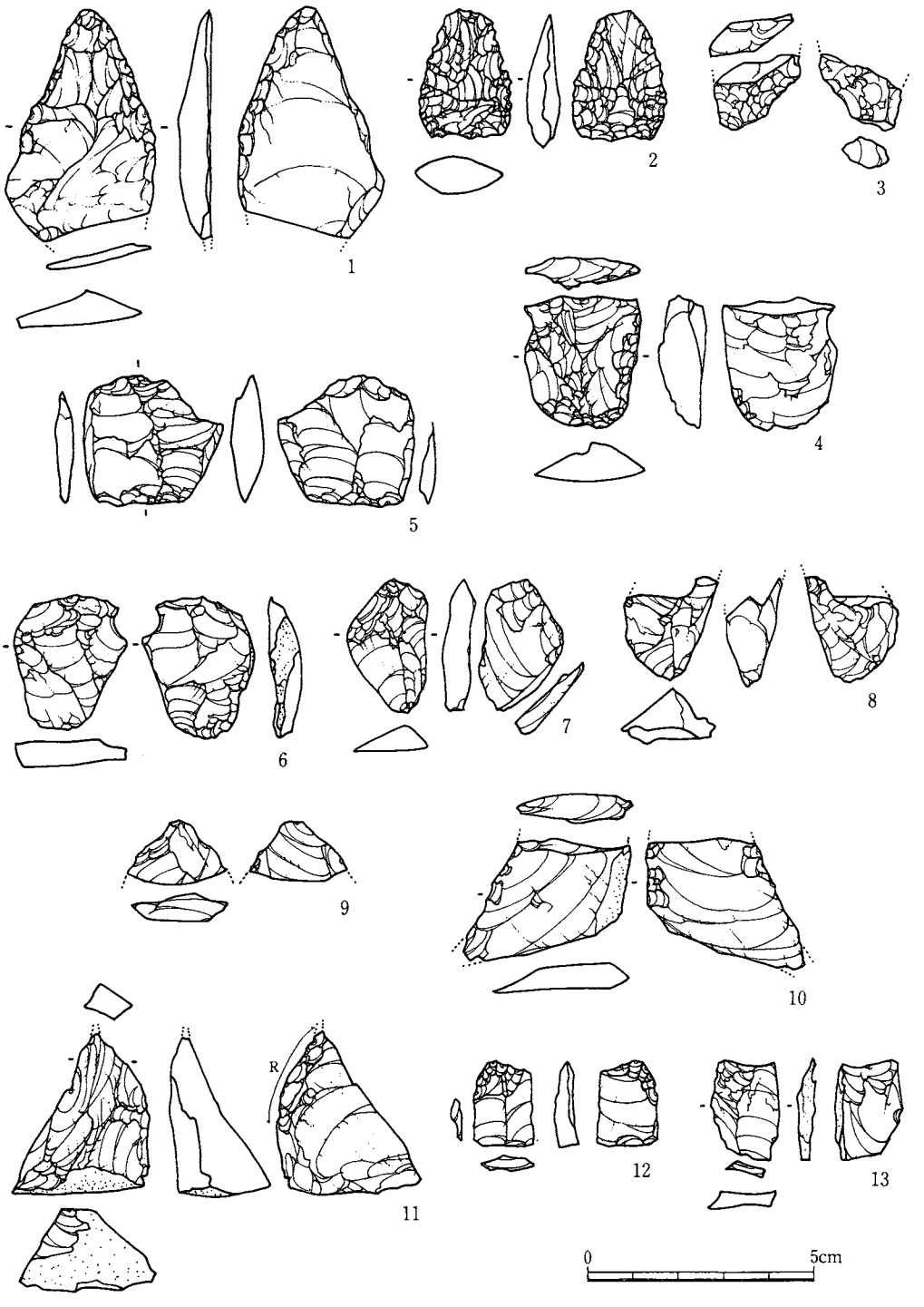
第130図　大割遺跡III9ブロック遺物出土状況（1/120）



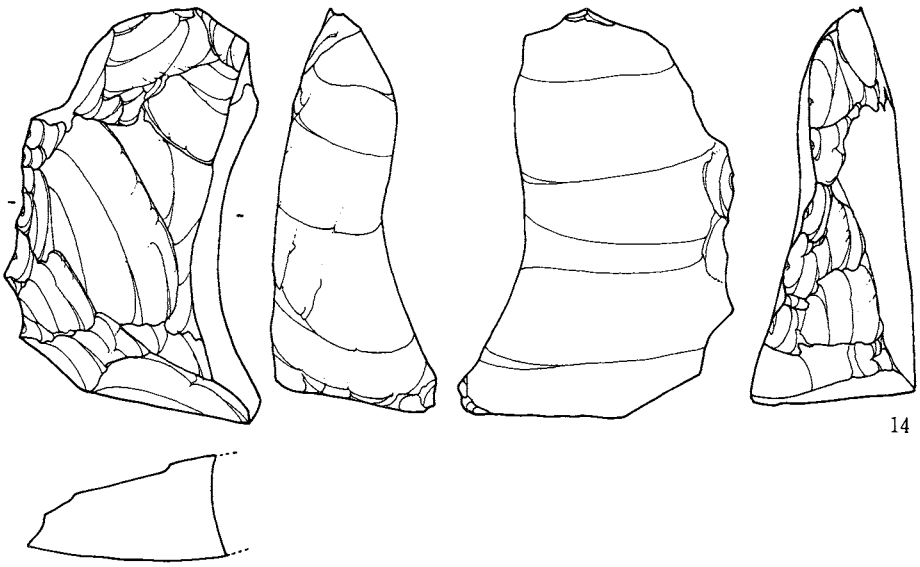
第131図　大割遺跡III9ブロック母岩別分布（1/120）

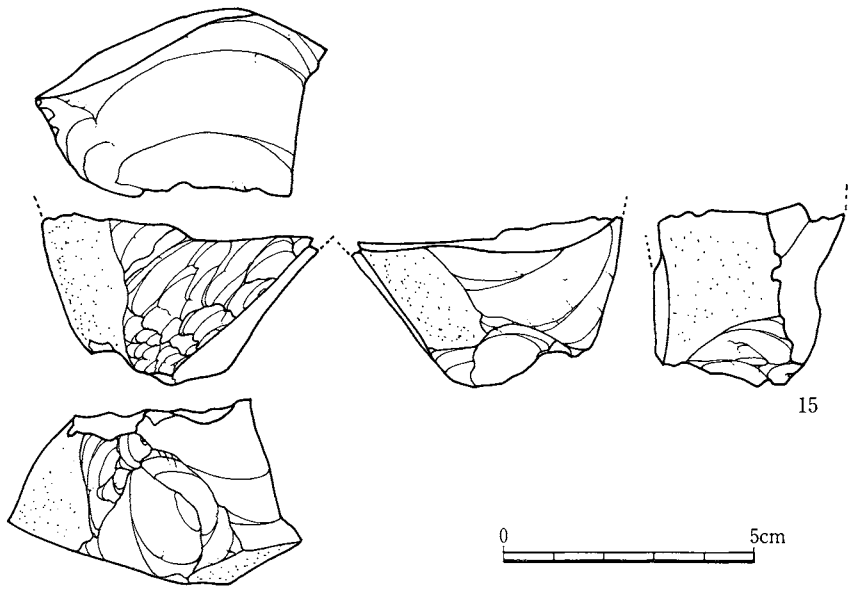
で留意する必要があるが、出土層準はII層からIII層にかけてである。このブロックには砕片が殆ど含まれず、逆に加工された石器の比率が高い傾向がある。

出土遺物（第132図、第133図、図版48）　1は安山岩1製の石槍である。薄手の縦長剝片が素材となっており、細部加工は表裏とも周縁にのみ施される。基部を折損している。2はチャート10製の整美な両面加工の石器である。鋭い尖頭部を有さないが、石槍とする。3は石槍の



第132図　大割遺跡Ⅲ9ブロック出土石器(1)（2/3）





第133図　大割遺跡Ⅲ9ブロック出土石器(2)（2/3）

基部破片と考えられる石器。表面右側縁、裏面左側縁にのみ細部加工が認められ、あるいは調整途中で欠損したものか。チャート８。４は矩形の剝片を素材にした削器である。背面右側縁と末端に刃部が作出されている。調整角は緩やか。チャート５。

５～７はいずれも楔形石器である。いずれも青黒色～暗青灰色のチャートを素材とする。５及び６の潰れは一方向であるが、７については二方向に潰れが観察される。８も楔形石器とし、その下端側のみが遺存したものと考える。

９～13までに加工痕のある剝片を示した。９はチャート１製で、表裏とも周縁の一部に加工痕を持っており、石槍(未製品)の欠損品である可能性がある。10はチャート15製の剝片の頭部及び末端(一部)を欠損するもので、左右両側縁に細かく平坦な剝離痕を有するものである。小剝離ではあるがこれはむしろ両極加撃によるものかも知れない。11は当ブロック唯一の瑪瑙製の分厚な剝片を素材とするもので、主として腹面左側縁に連続的な加工痕が見られる。あるいは揉錐器かとも思われるが、それにしては先端の加工が不充分である。削器と考えるべきであろうか。12、13は小型の剝片の縁辺の一部に加工痕を有するものである。12はチャート１製で頭部側に表裏両面からの剝離痕を持っている。チャート６製の13も同様である。

14、15は砂岩質ホルンフェルスの石器。14は大型で分厚い剝片を素材とする削器である。背面左側縁にのみ調整が加えられている。調整剝離は全体に粗雑である。調整角はやや急斜。15は一応石核としたが、14と同じような剝片が素材となっているものである。

第48表　大割遺跡Ⅲ８ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損	使用痕
1	石槍	E４－98－２	安山岩	57.8	43.0	15.1	30.95	—	—
2	二次加工剝片	E４－98－１	瑪瑙	47.9	32.0	12.2	10.46	—	—
3	石核	E４－99－３	オパール	31.2	45.8	20.9	19.26	—	—

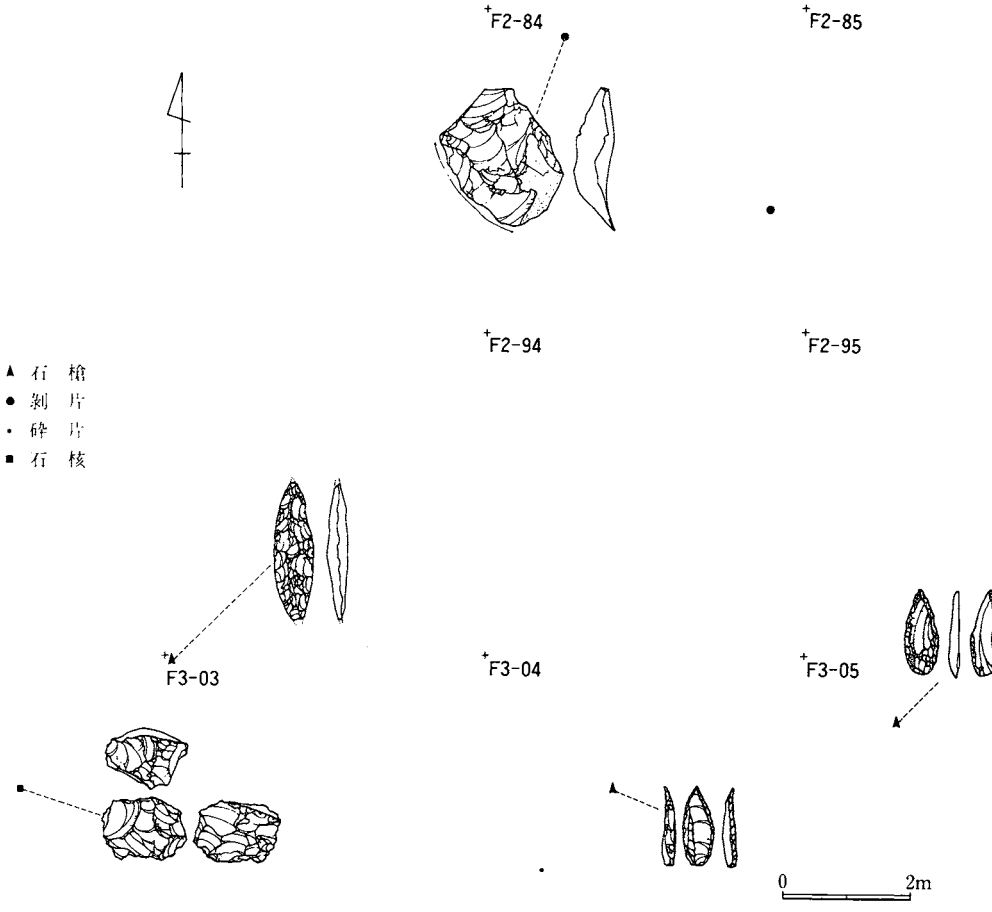
④Ⅲ９ブロック南側

出土状況（第134図）　Ⅲ９ブロックの南、Ｆ２区とＦ３区の境界付近に、Ⅲ９ブロックと同時期と考えられる石器が点在する箇所があった。確認調査時に石槍の存在を認めており、広範囲に発掘区を設けて調査したが、遺物分布は極めて疎で、とくにブロックを形成していなかった。全体の遺物点数に比して石槍３点と製品の比重が高い。出土層準はⅢ層からⅣ層である。

出土遺物（第135図、図版49）　１～３に石槍を示す。それぞれタイプが異なるものである。１は狭長でやや厚みのある両面加工品である。オパール１(母岩番号はⅢ９ブロックと一連)製で先端、基部共に僅かに欠損している。２は小型の周縁加工品である。縦長剝片製で打面、打瘤をそのまま残し、左右両側縁にblunting と言い得るような急斜な加工を施している。３も２

第49表　大割遺跡Ⅲ９ブロック出土石器計測表

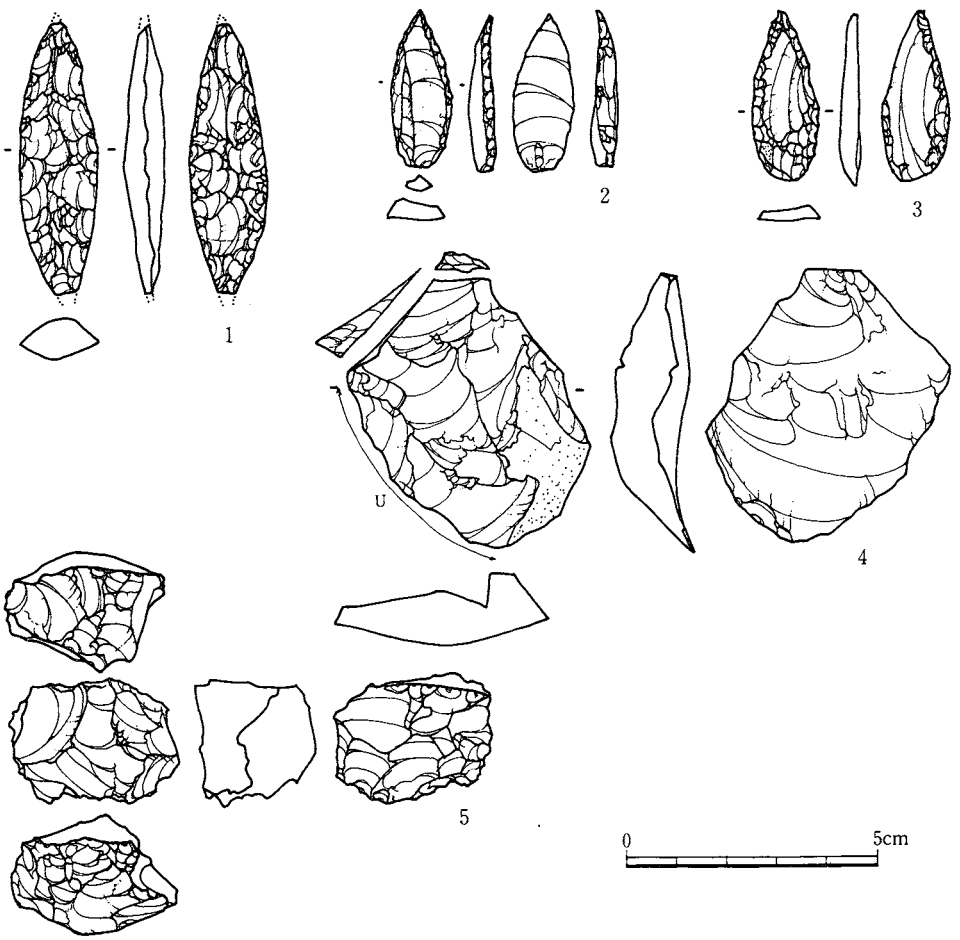
挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	石槍	F2-54-10	安山岩	1	47.0	31.6	7.5	10.17	—	○	—
2	石槍	F2-64-1	チャート	10	28.7	20.1	7.5	4.28	—	—	—
3	石槍	F2-64-7	チャート	8	13.6	19.2	7.2	1.83	—	○	—
4	削器	F2-63-8	チャート	5	28.2	24.8	9.3	6.52	34°	—	—
5	楔形石器	F2-54-4	チャート	2	26.7	20.0	9.0	6.53	—	—	—
6	楔形石器	F2-63-1	チャート	4	29.4	23.3	5.9	5.01	—	—	—
7	楔形石器	F2-54-12	チャート	3	20.5	15.3	5.0	1.29	—	—	—
8	楔形石器	F2-63-10	チャート	13	21.6	18.5	9.8	2.93	—	○	—
9	二次加工剥片	F2-54-9	チャート	1	13.6	20.7	5.8	1.55	—	○	—
10	二次加工剥片	F2-63-9	チャート	15	28.5	35.4	6.0	6.23	—	○	?
11	二次加工剥片	F2-53-2	瑪瑙	1	34.9	20.0	16.2	12.53	80°	○	—
12	二次加工剥片	F2-53-9	チャート	1	19.9	13.5	4.8	1.42	—	—	—
13	二次加工剥片	F2-54-7	チャート	6	22.0	14.2	4.8	1.88	—	—	—
14	削器	F2-54-5	ホルンフェルス	1	79.8	42.4	29.5	115.16	76°	○	—
15	石核	F2-64-8	ホルンフェルス	1	28.0	57.5	33.7	60.44	—	○	—



第134図　大割遺跡Ｆ２・Ｆ３区遺物出土状況（1/120）

と同様、周縁加工の石槍であるが、素材が横長剝片で全く異なり、周縁の調整も緩斜なものである。背面側の調整角は腹面側のそれよりもやや急である。腹面側の調整が主として打瘤の除去等、整形を目的として行われたことが、腹面左側縁にはあまり加工が施されておらず、また腹面右側縁の加工が平坦であることから窺われる。2は珪質頁岩3、3は珪質頁岩4。以上の3点は形状、加工が異なるが、全体としては単一時期の典型的な組成を示すものであり、他遺跡においてもいくつかの類例を指摘することができる。例えば印西町木苅峠遺跡第23ユニット[1]や大和市下鶴間長堀遺跡第II文化層[2]などである。それらは言うなれば“下鶴間長堀型”石器群とでもできようか。大割遺跡の上記の石槍もそれらと全く同一の特徴を有していると言える。

4はやや大型の剝片で、下縁の一部に刃こぼれと考えられる微細な剝離が観察されるものである。2の石槍と同一母岩と考えられる珪質頁岩3。5は瑪瑙製の石核。細かい剝離痕が複雑に交錯しているが、頻繁な打面の転移が窺われる。



第135図　大割遺跡F2・F3区出土石器（2/3）

第50表　大割遺跡Ⅲ９ブロック南（Ｆ２～Ｆ３区）出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損	使用痕
1	石槍	Ｆ３－03－１	オパール	1	52.4	15.4	8.1	6.17	○	－
2	石槍	Ｆ３－04－３	珪質頁岩	3	30.0	12.3	5.1	2.02	－	－
3	石槍	Ｆ３－05－１	珪質頁岩	4	33.2	13.1	4.7	1.89	－	－
4	使用痕剥片	Ｆ２－84－１	珪質頁岩	3	53.0	40.8	11.8	26.78	－	○
5	石核	Ｆ３－02－２	瑪瑙	2	22.9	32.9	24.7	17.26	－	－

⑤大割遺跡第６文化層のまとめ

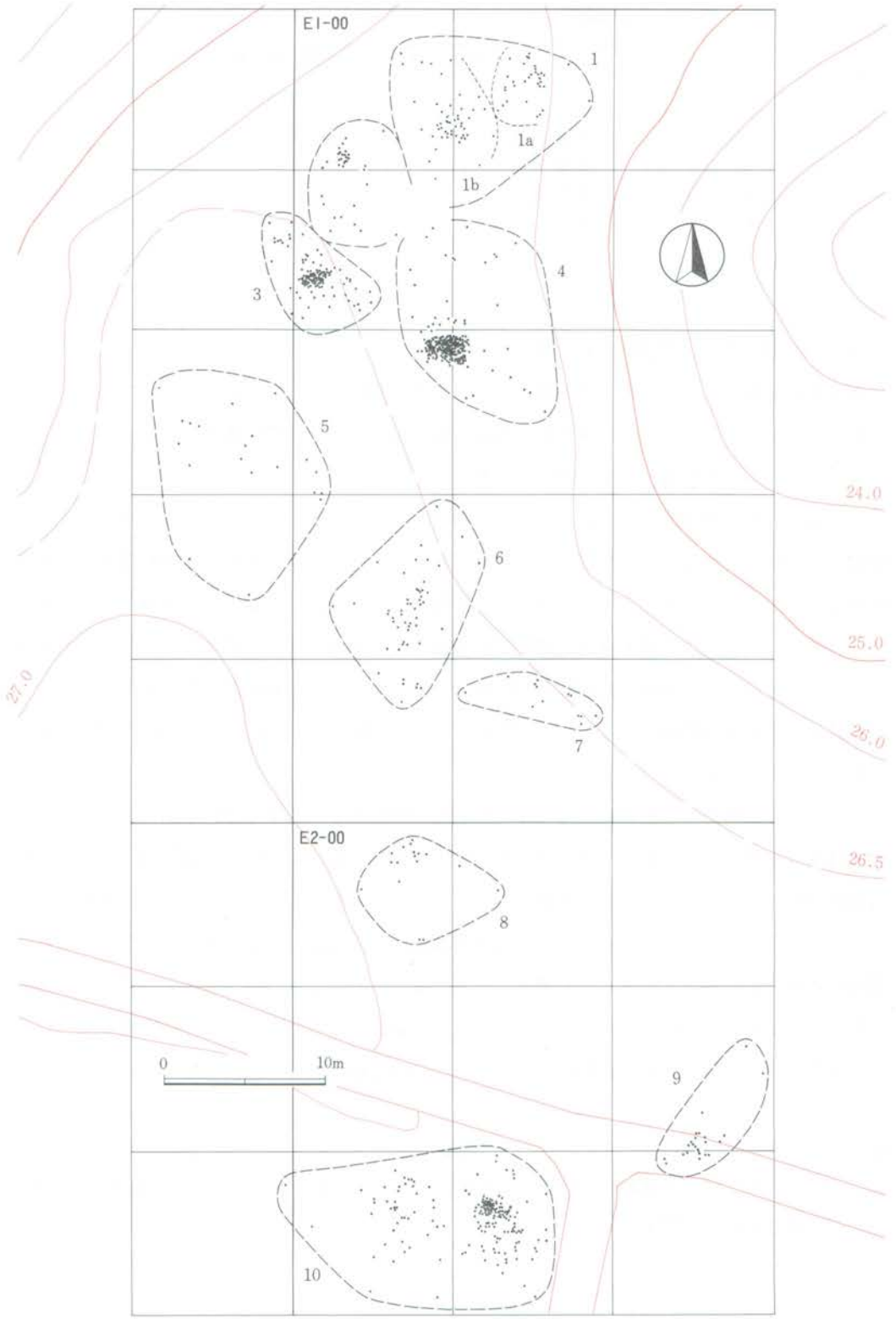
当文化層は最初に述べたように石槍を主体とする石器群によって設定したものである。しかしⅢ８ブロックに関してはその編年的位置が明確ではなく、ここではⅢ９ブロックとその南側から出土した石器群に限ってまとめておきたい。

当石器群の中で特徴的なものは、Ｆ３区北部に点在した３点の石槍である。小型、薄手の周縁加工の石槍とやや厚手の両面加工の石槍との組み合わせは、既に触れた木苅峠遺跡や下鶴間長堀遺跡にきわめて共通する要素である。またⅢ９ブロック出土の安山岩製周縁加工の石槍やチャート製両面加工の石槍もほぼ同時期に位置付けても矛盾はないと考えられる。ただしⅢ９ブロックとその南側に分布した石器群の関係については、母岩別資料に単体資料が多いため、殆ど具体的な関係は指摘できない。ただⅢ９ブロックの黒曜石１と同一母岩の剝片がF2－84区において出土しているのみである。

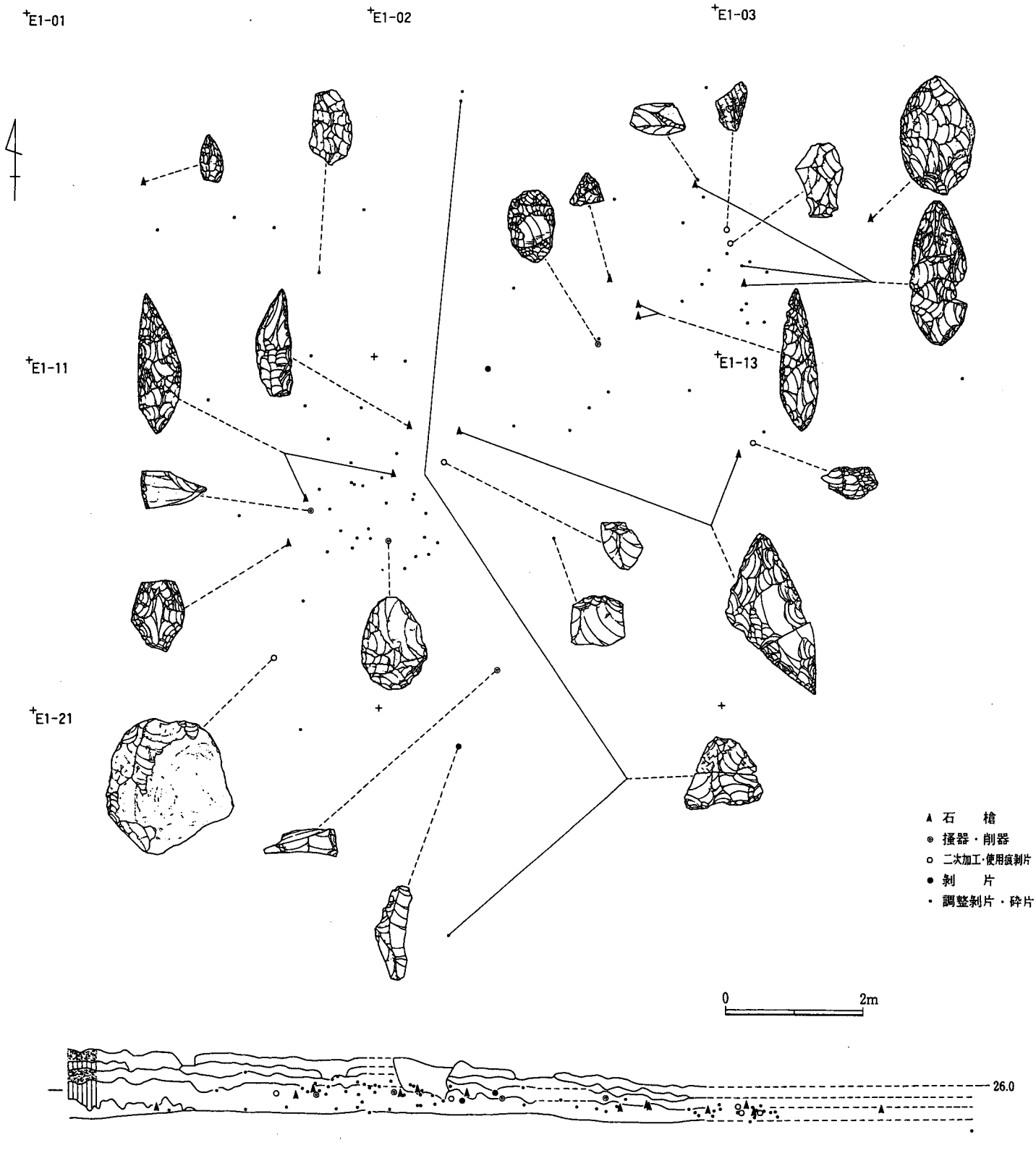
このような石槍を持つ石器群にはナイフ形石器が伴出する。豊富な資料を出土した下鶴間長堀遺跡第Ⅱ文化層では、形状や大きさが石槍と大差がないが、未加工の刃部を有するナイフ形石器が共伴している。また木苅峠遺跡でも１点のナイフ形石器が出土している。一方大割遺跡ではナイフ形石器が伴っていない。これは大割遺跡の出土点数が少ないためかも知れないが、遺跡の性格による差異であることも考えられる。またその場合には石槍とナイフ形石器の機能の差あるいは共通性を吟味しなくてはなるまい。石器群の内容については、池花遺跡第３文化層の報告の後に、再び尖頭器石器群全体についての中で検討を加えたいと思う。

註１　鈴木道之助「木苅峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書』千葉県都市公社1975

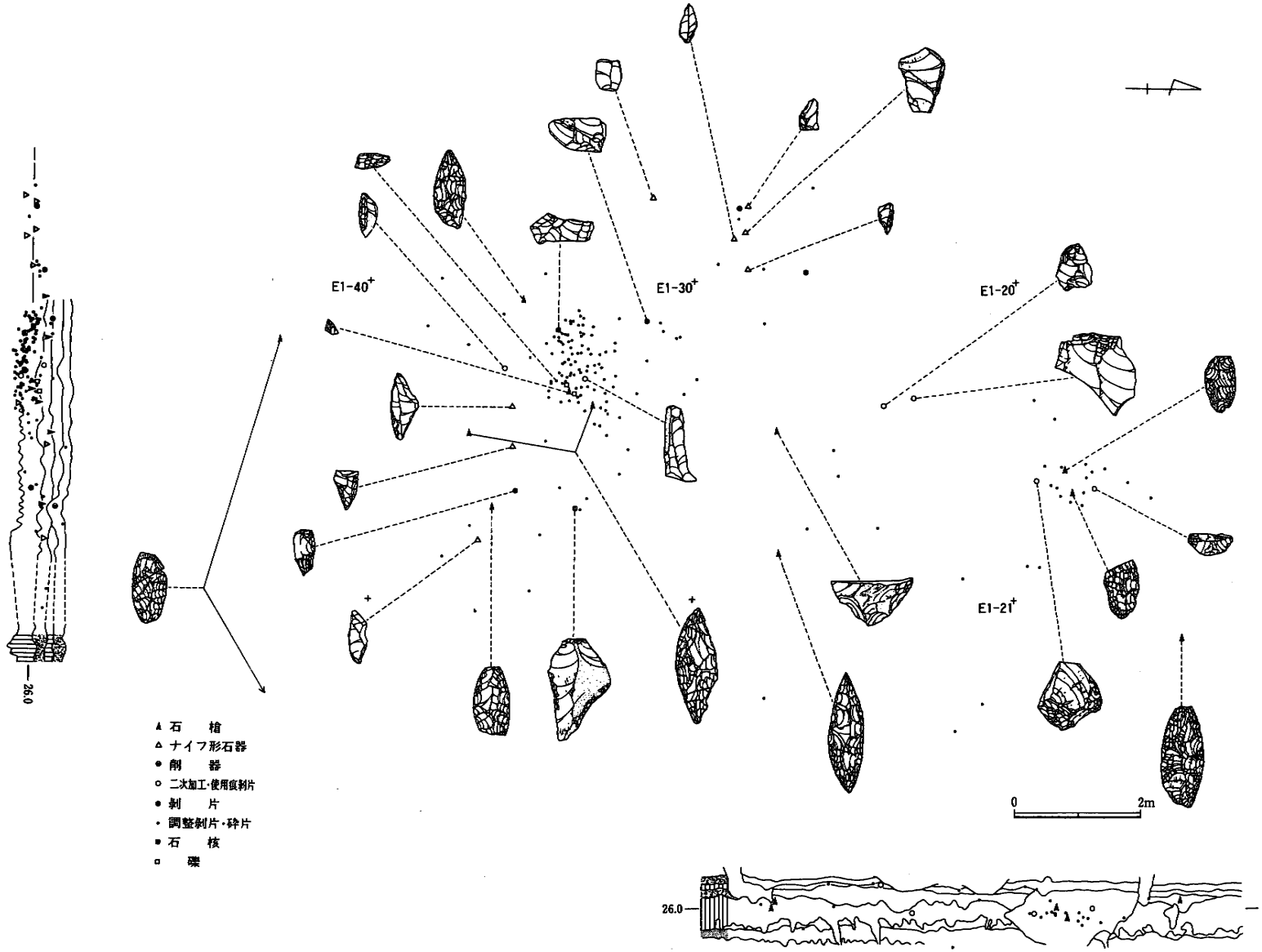
２　中村喜代重「下鶴間長堀遺跡第文化層」『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告』大和市教育委員会1984



第136図　池花遺跡第３文化層ブロック分布(1/400)



第137図　池花遺跡Ⅲ1ブロック遺物出土状況（1/80）



第138図　池花遺跡Ⅲ2・Ⅲ3ブロック遺物出土状況（1/80）

12．池花遺跡第３文化層

①概観

ソフト・ローム層中から検出された資料のうち、ナイフ形石器終末段階の石槍製作に関わる資料を以て池花遺跡第３文化層とする。当文化層は池花遺跡の中央北辺、北北東に向かって舌状に突出した地区に10箇所のブロックを遺していた。全体の分布範囲は南北80m弱、東西40m弱と広範囲に及び、遺物総点数は1,100点余であった。

ブロックの配置は第136図に示した。ブロックの分布は大きく見ると３群に分けられるように思える。まず北端、台地先端にはIII１～III４までの４つのブロックがまとまっている。概して遺物点数が多い。とくにIII４ブロックには石槍の調整剝片が密集していた。それらのうちIII１ブロックは母岩別資料の分布から２つに分割して捉え得るものである。つぎに中央部にはIII５～III８までの４つのブロックが分布する。ブロック間には若干の空隙があり、また遺物点数はいずれも少ない。最後に南端、台地平坦部に移行した辺りにIII９、III10の２つのブロックが分布する。III10ブロックにはやはり石槍調整剝片が多数集中していた。このブロックは一見２つの集中を持っているようにも見えるが、ここではとくに分けることはできなかった。

出土遺物は幾つかのバラエティーを持つ多数の石槍とその調整剝片が主体となり、ナイフ形石器、削器、掻器が加わる。これに類した組成を持つ遺跡は、下総台地では船橋市西の台遺跡（第６、７ユニット）があるが、むしろ相模原市中村遺跡第III文化層の石器群が最も近似した様相を示している。

②出土状況（図版15、16）

III１ブロック（第137図、第140図）　遺跡北端に位置するブロックである。東西11.8m、南北12.1mという広範囲に分布する。西はIII２ブロック、南はIII４ブロックに接する。III４ブロックとの境界は明確ではないが、石槍調整剝片の接合資料を当ブロックに入れた。当ブロックは分布密度の高い部分が北東側と南西側の２箇所に認められる。単純に両者を明確に区切ることは困難であるが、石材の分布をみると２単位の設定が可能となる。北東側をクラスターａ、南西側をクラスターｂとする。クラスターａ、ｂ共に珪質頁岩と黒曜石は含んでいるが、クラスターａの主体的石材は凝灰岩（母岩別資料番号凝灰岩１）であり、クラスターｂには殆ど含まれない石材である。一方クラスターｂは安山岩１、２を主体として保有し、逆にクラスターａには安山岩は含まれない。以上の事実より当ブロックは２つに分割して考えることが可能である。当ブロックからは未製品を含む石槍が多く出土している。それらは密度の高い中核部分に集中していた。当ブロックの出土層準は、III層上位を中心としてII層下位からIII層下位までであった。

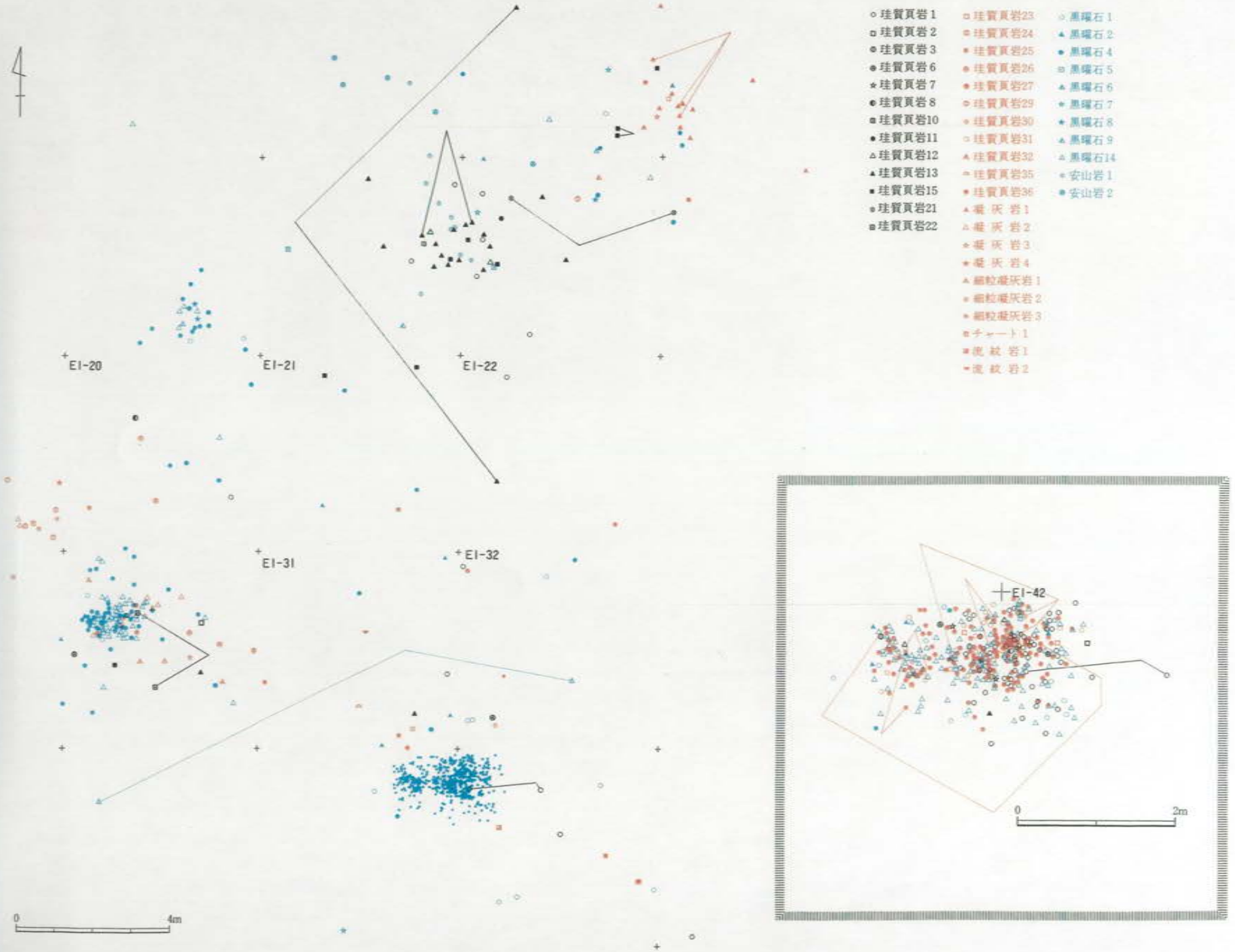
III 2 ブロック（第138図、第140図）　III 1 ブロックの南西側に接して所在したブロックである。またさらに南西にはIII 3 ブロックが、南東にはIII 4 ブロックが相接する。南北6.5m、東西5.2m の分布範囲を持つものとして設定するが、最も北寄りに高密度の部分があり、また中央に空白部とも言うべきものがある。遺物点数は少ない。当ブロックの特徴としては、総遺物点数に対する黒曜石の比率が高いことが挙げられる。出土層準はIII層中位付近に集中していた。

III 3 ブロック（第138図、第140図）　III 2 ブロックの南西に隣接して検出されたブロックである。分布範囲は南北8.2m、東西7.4m を測る。当ブロックは中央に顕著な集中地点を持ち、石槍調整剝片、とくに黒曜石の調整剝片が多く出土した。しかし黒曜石製の石器は殆ど出土していない。また当ブロックの顕著な特徴としてはナイフ形石器が非常に多く含まれていることが挙げられよう。ことに細粒凝灰岩、凝灰岩製のナイフ形石器は全点が当ブロックから出土している。当初、異時期の石刃製ナイフ形石器のブロックが偶然重複して出土した可能性も考えたが、ここでは当ブロックに、したがって当文化層に帰属するものとして報告する。それらナイフ形石器群はブロックの周縁部に 2 つの集中箇所を持って、中核の石槍調整剝片の集中を北西と南東の両側から挟むようにして分布していた。またブロックの中核部分にも細粒凝灰岩の石刃 1 点の存在が認められた。これらの石器はいずれにしても当文化層の中で重要な位置付けが与えられよう。当ブロックの出土層準はII層下位からIII層下面に及ぶ。中央の調整剝片の集中箇所は周囲より若干落ち込んでいるように思われる。

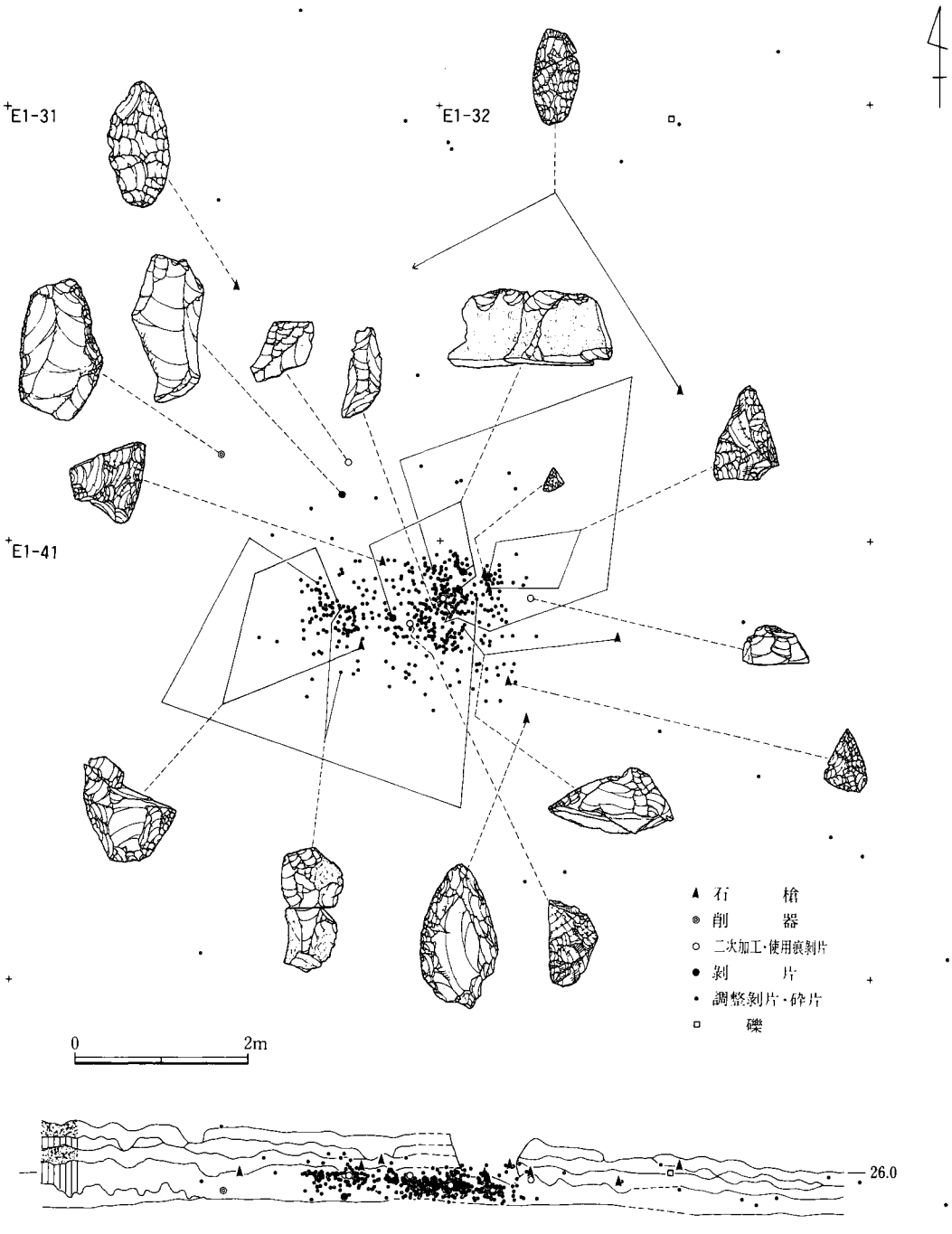
III 4 ブロック（第139図、第140図）　III 1 ブロックの南に位置するブロックで、遺物点数は当文化層中最も多い。勿論大半が石槍調整剝片である。南北11.3m、東西9.5m と比較的広い遺物分布範囲を持つが、出土遺物の多くが中央の集中箇所から出土した。しかし石槍、削器などの石器は周縁部からも多く出土している。母岩別資料の個体数も多い。当ブロックの集中箇所には黒曜石と珪質頁岩の調整剝片が多量に存在した。しかし細片が多いため母岩別資料個体識別ができないものが多いのは残念である。なお当ブロック出土の石槍片(黒曜石 6)とIII 3 ブロック出土の石槍片が接合している。出土層準はII層下位からIII層下面までであるが、分布ピークはIII層中位やや下方にあった。

III 5 ブロック（第141図、第142図）　III 1 〜III 4 ブロックの南西方にやや離れて検出されたブロックである。南北12.5m、東西10.1m と分布範囲は広いが、分布密度は極めて疎である。加工のある石器や石核などが北端に集中する。当ブロックから 1 点だけ出土したナイフ形石器は石槍を製作した石材と同一母岩(珪質頁岩 1)ながら細粒凝灰岩製のナイフ形石器と同種で、注目されるものである。出土層準にはばらつきがあるが、III層上位を中心とする。

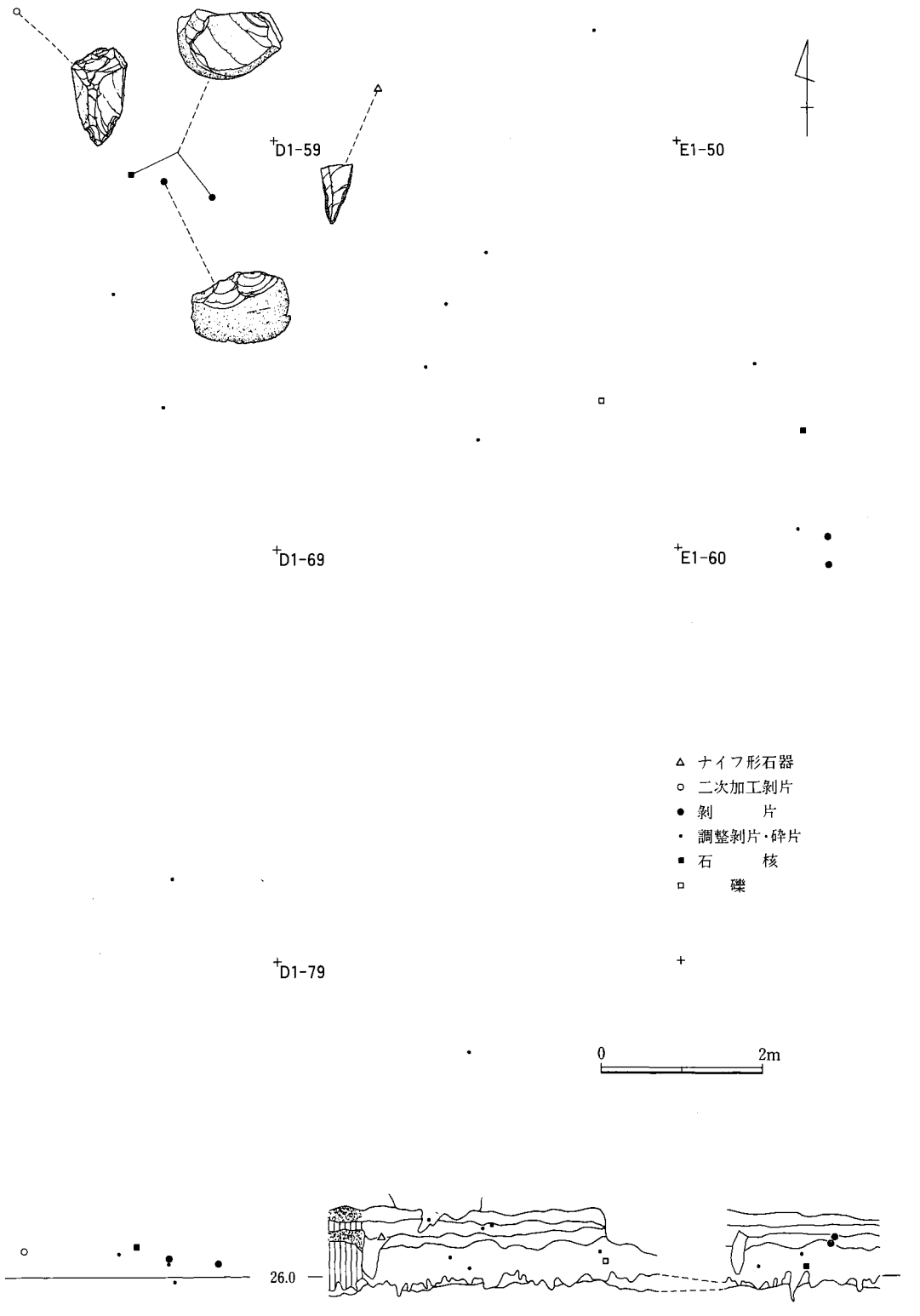
III 6 ブロック（第143図、第144図）　当文化層に属するブロック群のほぼ中央、III 4 ブロックの南方、III 5 ブロックの南東方にやや間隔を置いて検出された。分布範囲は南北11.9m、東西9.1m を測る。分布状況は比較的散漫ではあるが、中央には密度の高い部分がある。しかしそ



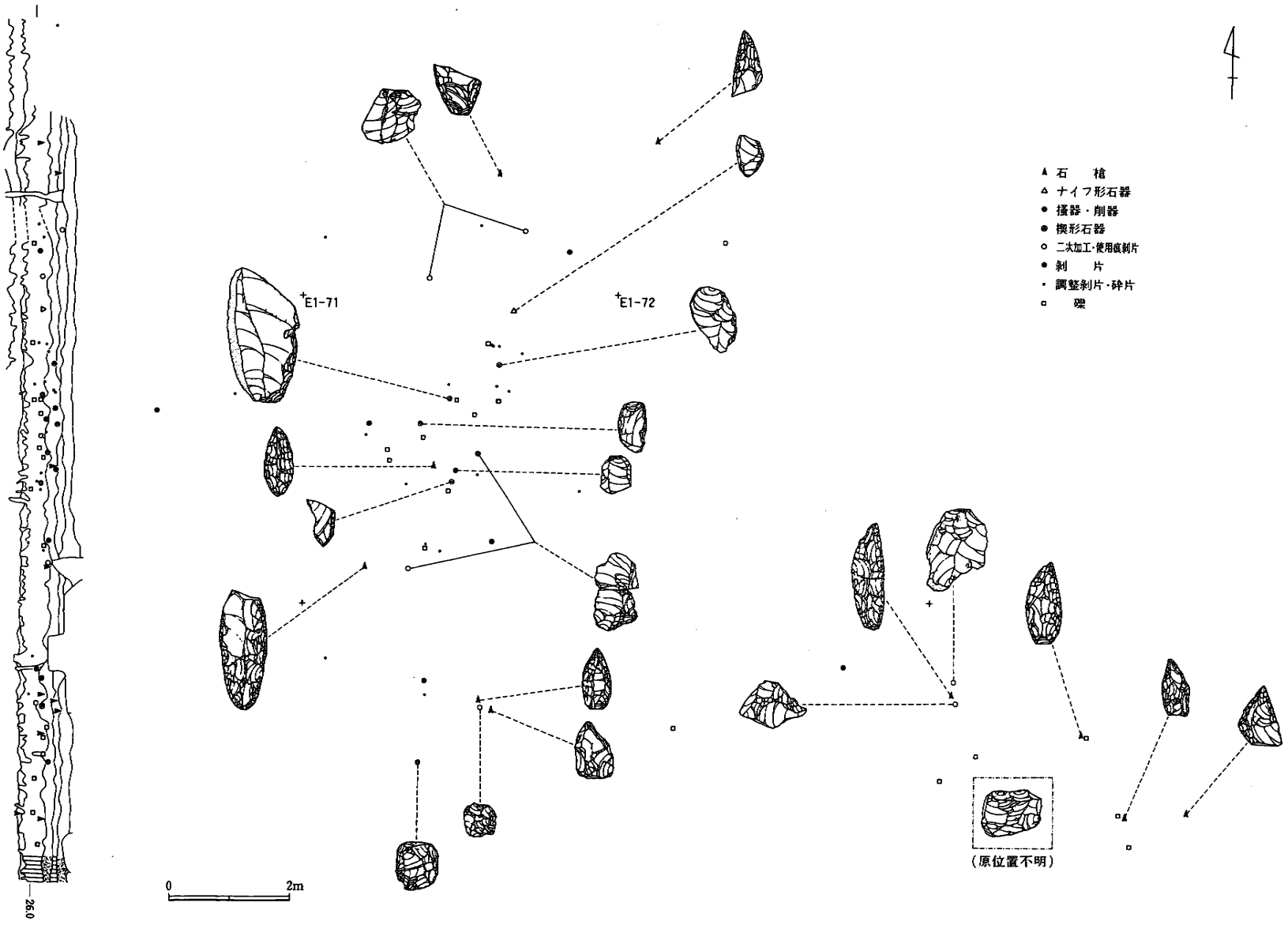
第140図　池花遺跡Ⅲ 1～4 ブロック母岩別分布(1/120)



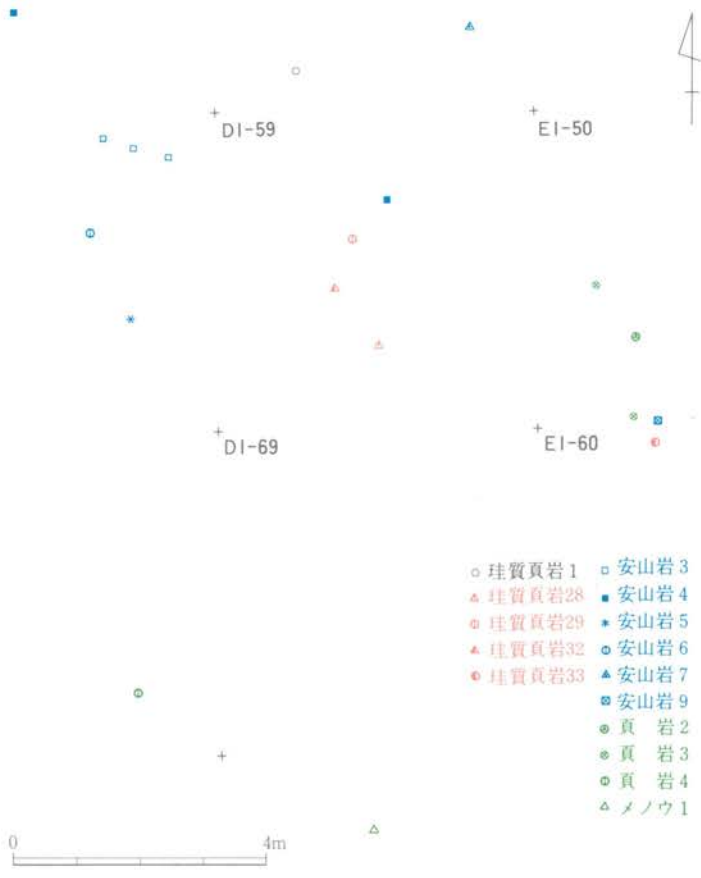
第139図　池花遺跡Ⅲ4ブロック遺物出土状況（1/80）



第141図　池花遺跡Ⅲ5ブロック遺物出土状況（1/80）



第143図　池花遺跡Ⅲ6・Ⅲ7ブロック遺物出土状況（1/80）

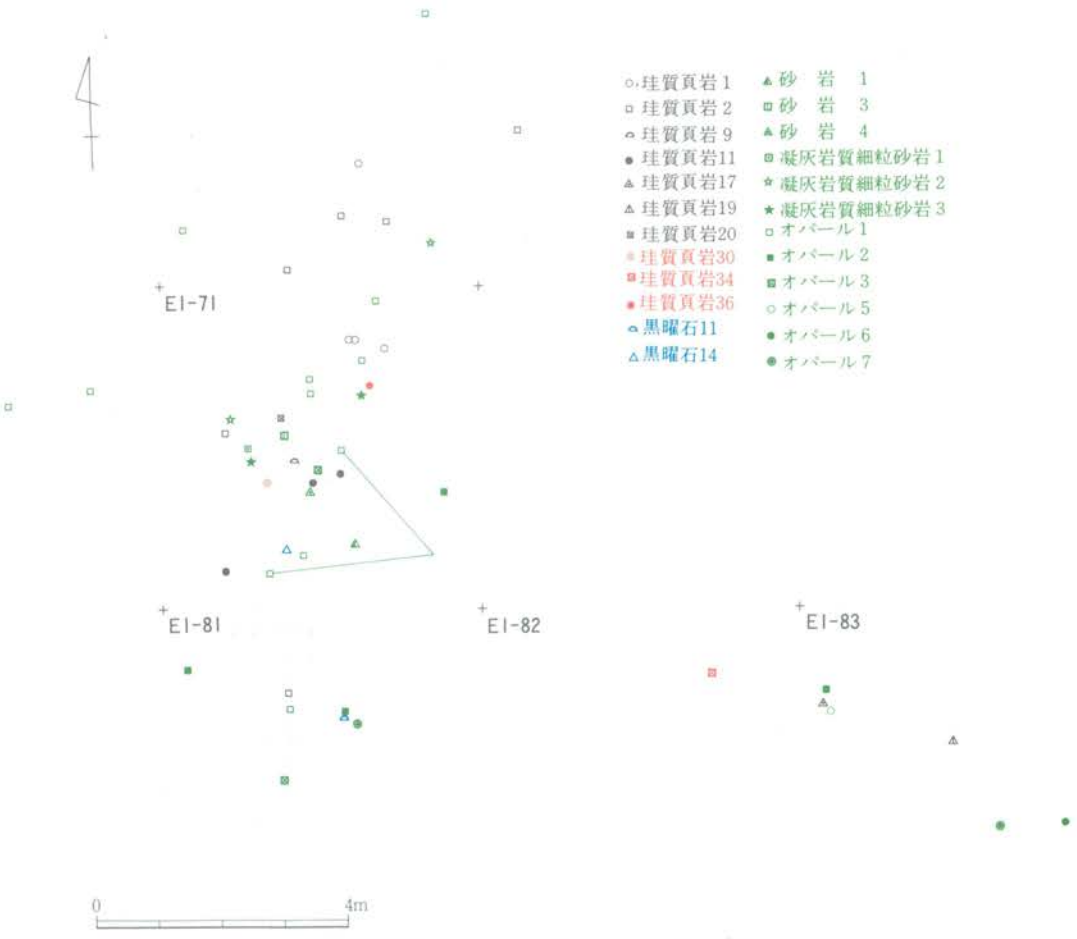


第142図　池花遺跡III 5ブロック母岩別分布(1/120)

こは石槍等の調整剝片はあまり見られず、礫が多いのが特徴と言える。出土石器には石槍、掻器、削器など多様なものがあるが、オパール製の石器が目立った存在となっている。また石槍は片面加工のものが多いのも特徴として挙げることができる。出土層準は他のブロックと同様、III層中位から上位にピークがあった。

III 7ブロック（第143図、第144図）　III 6ブロックの南東に隣接する小規模ブロックである。分布範囲は東西に長く8.3m、南北方向には2.8mを測る。石器と礫が点々と分布するだけと言えるブロックで、全体の点数に比べ、石槍が非常に目立っていよう。またIII 6ブロックと同様、礫が多い。図上で原位置不明とした石核は、出土グリッドはE1－83区と特定でき、確実に当ブロックに帰属するものである。出土層準はIII層中位から上位である。

III 8ブロック（第145図、第146図）　III 6ブロックとIII10ブロックの中間やや北寄りに位置するブロックである。分布範囲は南北、東西とも6.2mを測る。分布状況は散漫であった。ただブロックの北端には、調整剝片が若干集中する部分が認められた。それ以外は石槍を主体に石器が点々と分布する。石材は安山岩、黒曜石、珪質頁岩が見られるが、北端に集中する調整剝

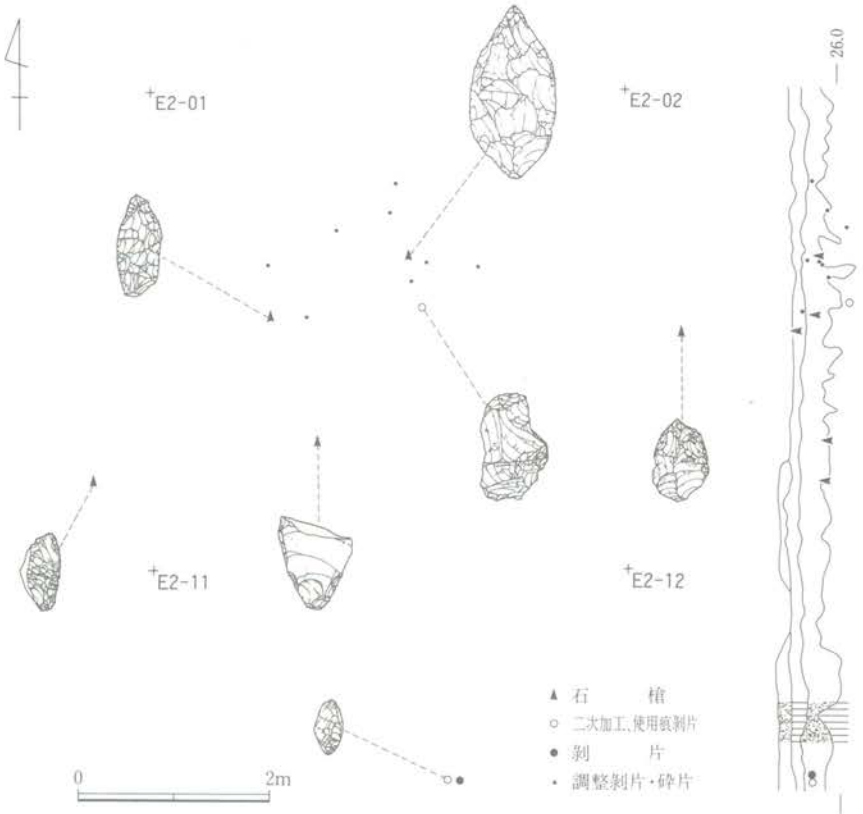


第144図　池花遺跡Ⅲ6・Ⅲ7ブロック母岩別分布(1/120)

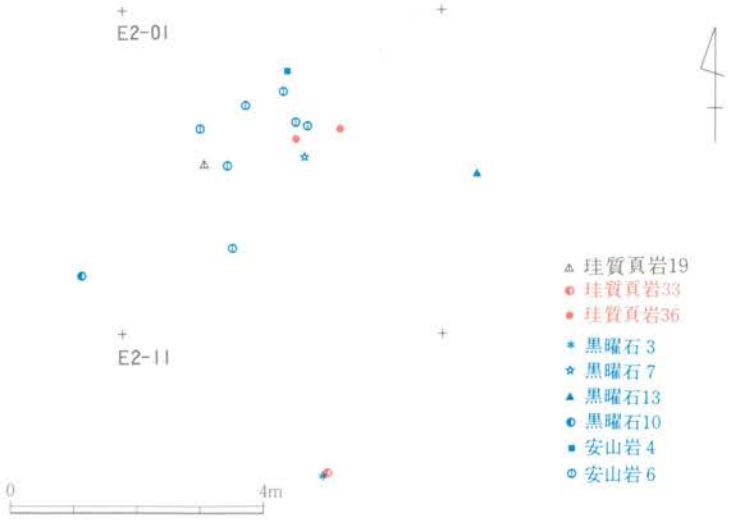
片の多くは2点の石槍と同じ安山岩6であった。出土層準はⅢ層上位を中心としていた。

Ⅲ9ブロック（第147図、第148図）　当文化層の南端近く、Ⅲ10ブロックとは若干の距離を置いて検出されたブロックである。このブロックも遺物点数は少ない。その大半はE2－45杭の周辺南北3.0m、東西3.7mの範囲に殆ど石槍調整剝片のみが分布しており、2点がそこから北東に離れて出土した。そのため全体では、単純に計測すると南北7.0m、東西6.1mの分布範囲を有することになる。他のブロックと違い、石器を含んでいないのが特徴と言えようか。垂直分布はばらつきが大きいが、やはりⅢ層中位から上位にピークが見られた。

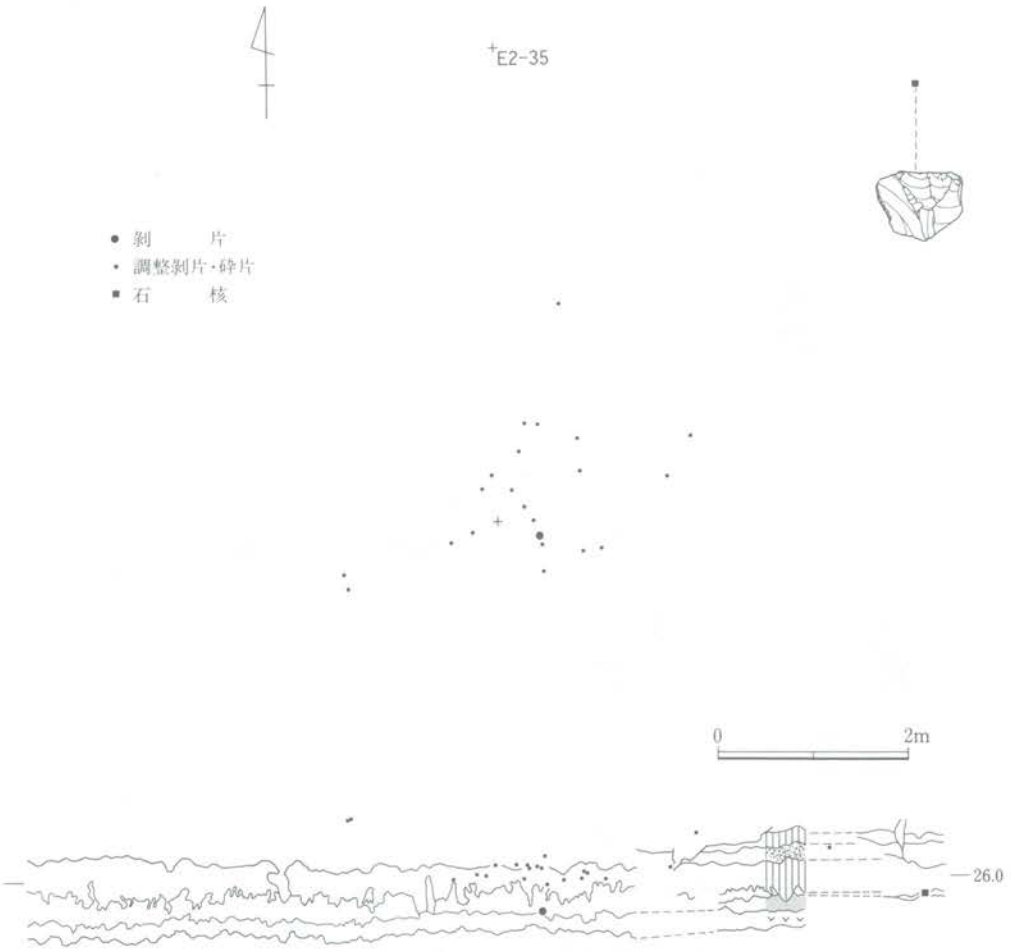
Ⅲ10ブロック（第149図～第151図）　最も南に位置するブロックである。南半部のブロックでは最も出土遺物点数が多い。分布範囲は広大で南北12.2m、東西16.4mを測るが、西半部と東半部に別れるように見え、とくに東半部中央には石槍調整剝片が多量に集中していた。しかしここには石槍は出土していない。一方西半部は散漫な分布状況であるが、石槍や掻器といった石器が点々と分布している。当ブロックの主体的消費石材は珪質頁岩であるが、石槍はオパールや黒曜石でブロック内で生産されたものではない。Ⅲ層中位にピークを持つ垂直分布を示す。



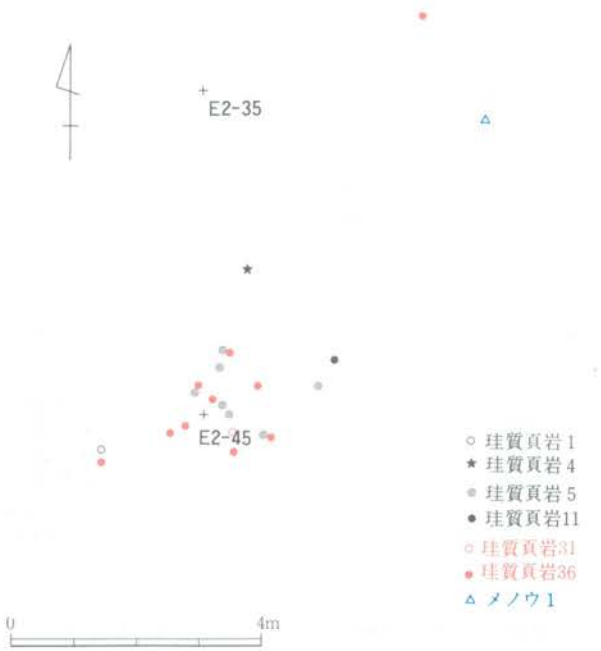
第145図　池花遺跡Ⅲ8ブロック遺物出土状況（1/80）



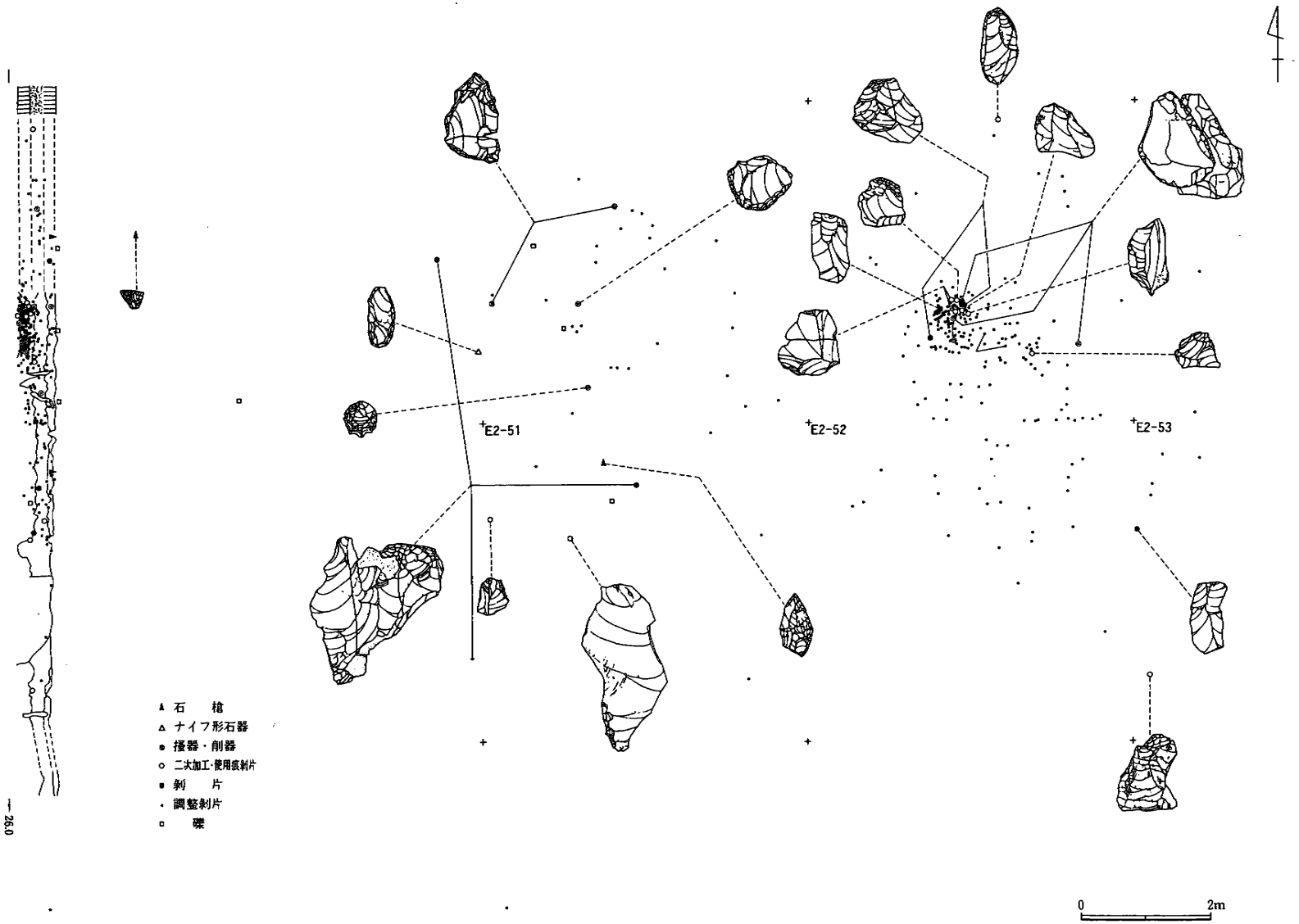
第146図　池花遺跡Ⅲ 8 ブロック母岩別分布(1/120)



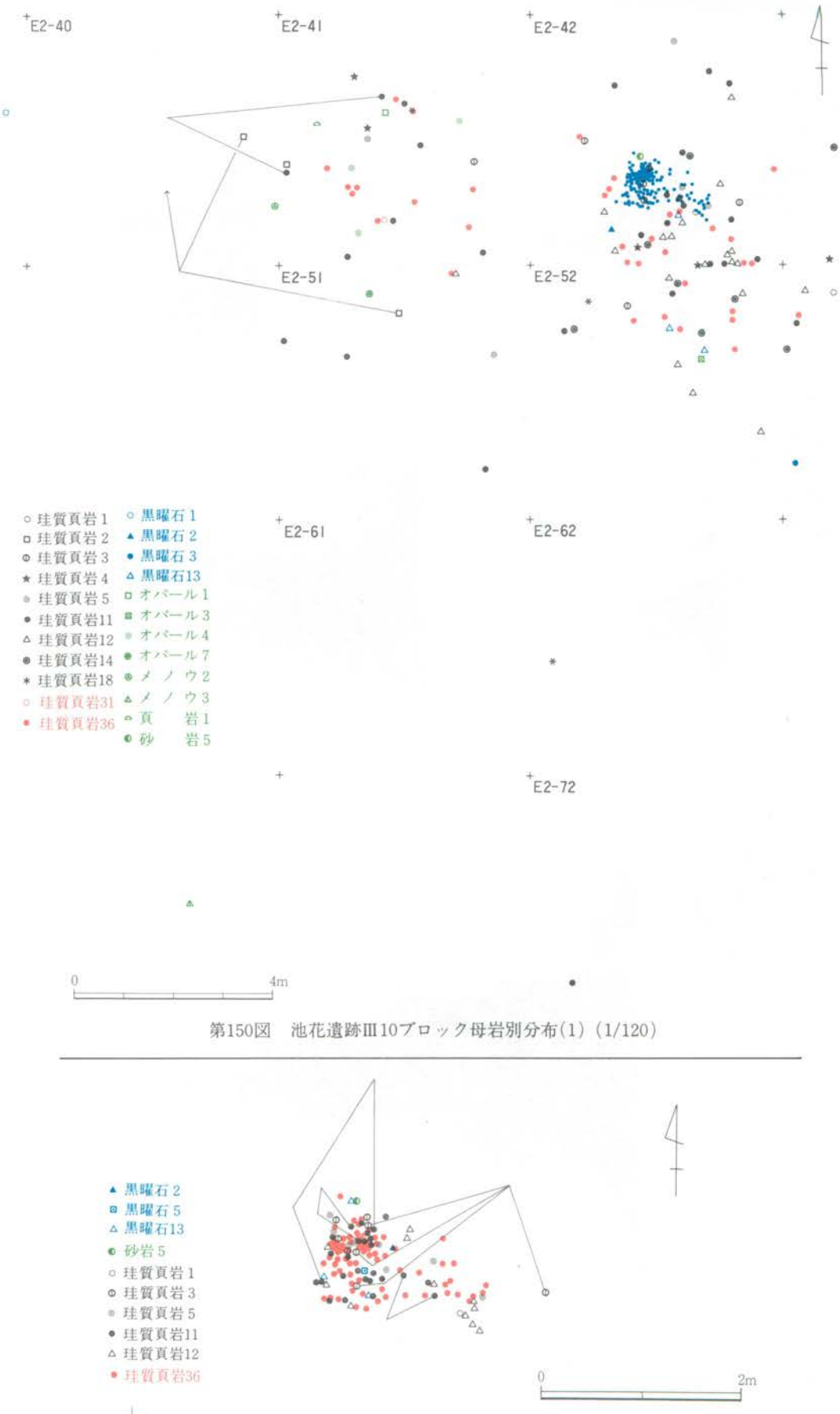
第147図　池花遺跡Ⅲ9ブロック遺物出土状況（1/80）



第148図　池花遺跡Ⅲ 9 ブロック母岩別分布(1/120)

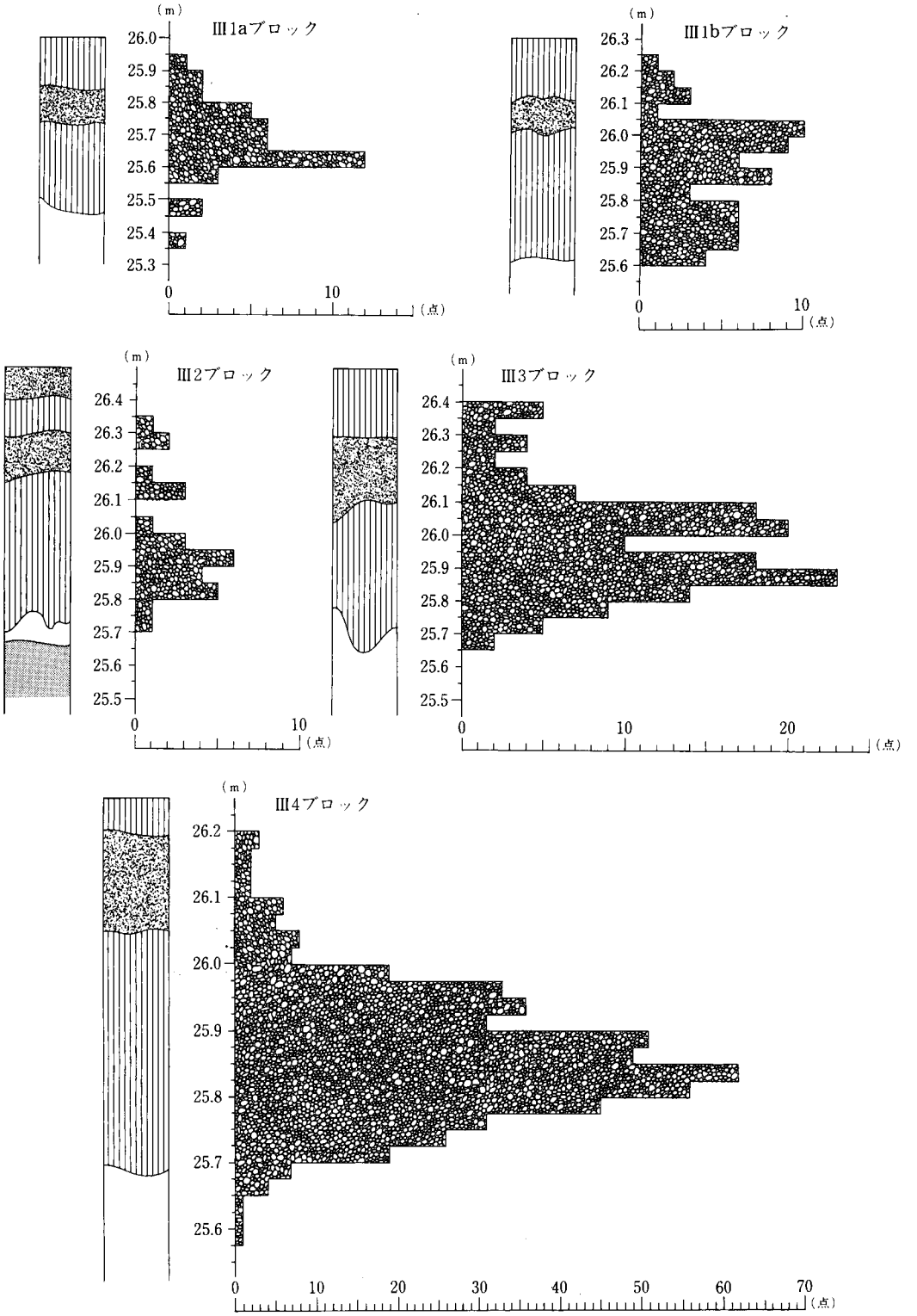


第149図　池花遺跡Ⅲ10ブロック遺物出土状況（1/80）

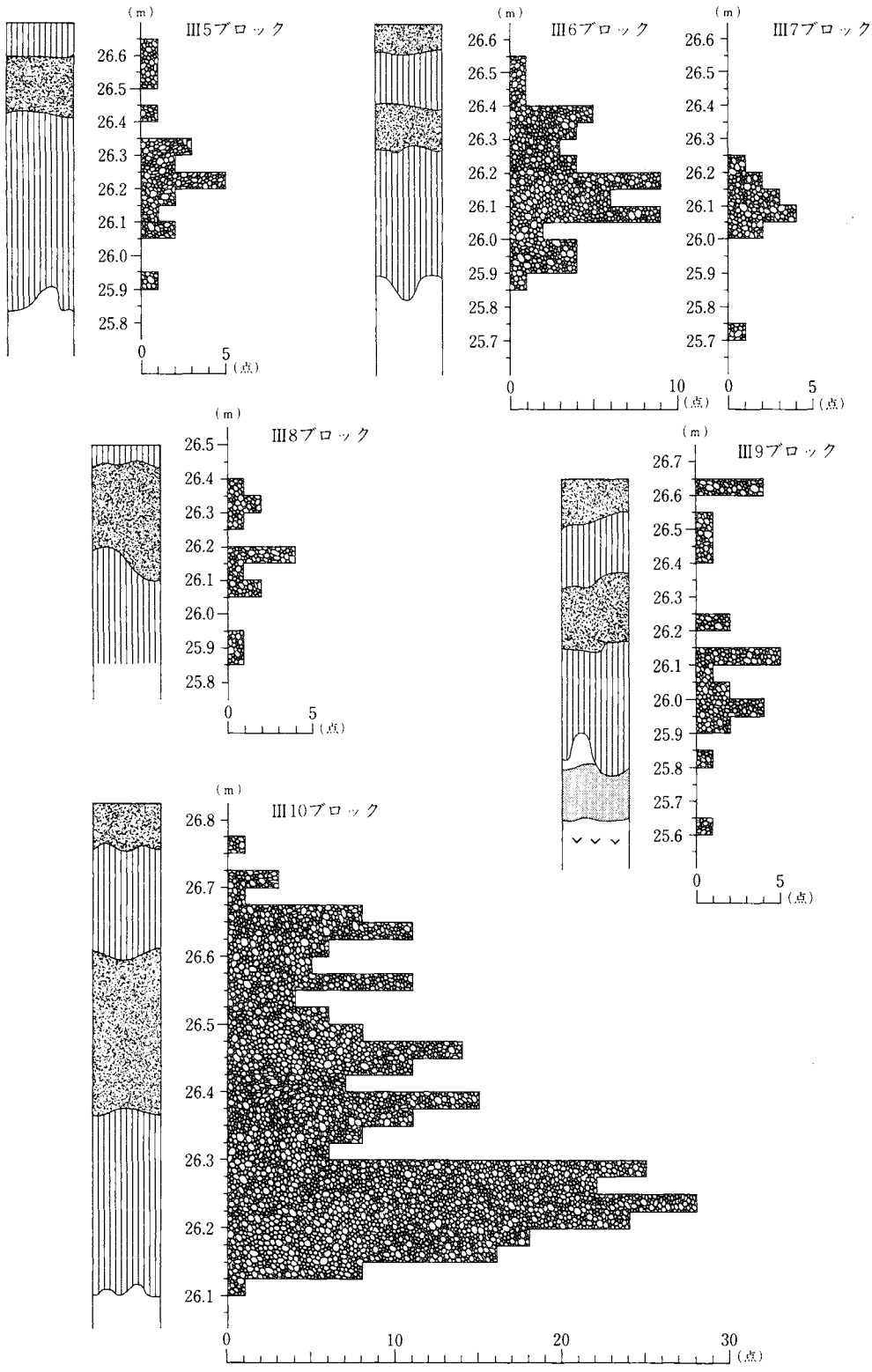


第150図　池花遺跡Ⅲ10ブロック母岩別分布(1)（1/120）

第151図　池花遺跡Ⅲ10ブロック母岩別分布(2)（1/60）



第152図　池花遺跡第３文化層遺物垂直分布図(1)



第153図　池花遺跡第３文化層遺物垂直分布図(2)

③出土遺物

当文化層は複数のブロック間に密接な関係が認められることが多いため、ブロック毎に出土遺物を記述する方法を取らず、全体を一括して扱う。その際、母岩別資料の個体毎に遺物を記載していくこととする。本来まず器種分類の上で類別にしたがって記載するのが望ましいかもしれないが、器種分類等については、後に他遺跡との比較を含めて検討したい。

珪質頁岩1（第154図、図版53）　暗褐色～黒褐色を呈する良質な頁岩である。東北地方で言う「硬質頁岩」と同じ。主にIII1b、III4ブロックなどに分布していた。

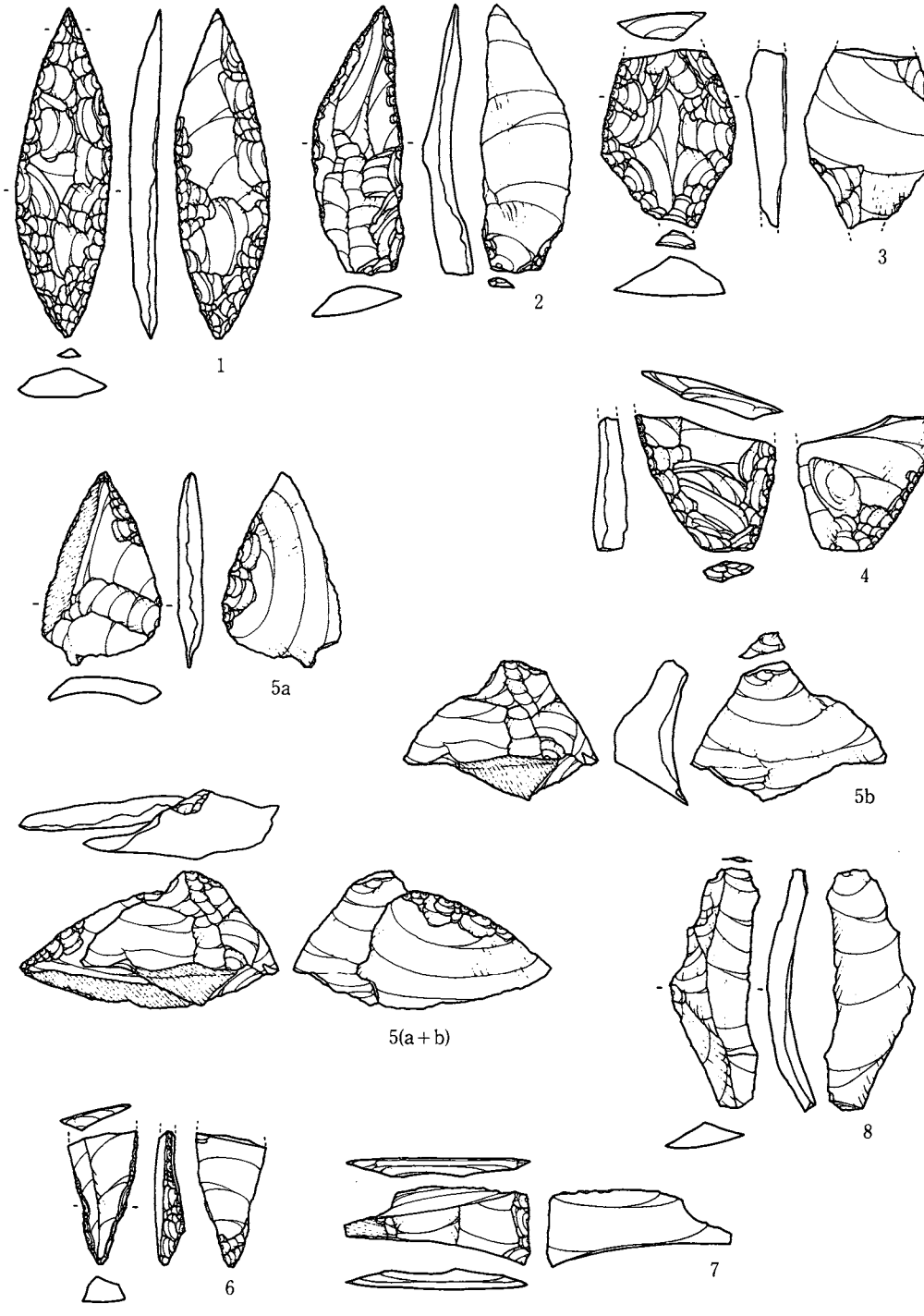
石槍が5点ある。1は半両面加工の優品で完形である。縦長剥片素材で、腹面の調整は基部側と右側縁に限られる。背腹の切り合い関係は、概ね先端側は背面の調整が、基部側は腹面の調整が勝っている。2は周縁加工品であるが、石槍の素材剥片ではなく、尖頭状の大ぶりな調整剥片を素材として先端側のおよそ半分の周縁に細かい調整を施しており、また基部側は打面を残したまま側縁の一部に細かい調整を加えているだけである。3は基部、尖頭部ともに欠損するもの。腹面にも剥離痕が認められるが、基本的には片面加工としてよいであろう。本例はやや特異な形状をしており、とくに基部は有舌尖頭器を思わせる。4も欠損品である。素材の段階で殆ど打瘤らしきものがなかったからか打面を残しており、腹面は右側縁の一部に最終的な細かい調整が加えられているのみである。5は接合資料で、本来2点の調整剥片が接合したものであるが、5aは尖頭状の調整剥片を利用してその一部に調整を加え、石槍としたものである。まず腹面側に打面、打瘤を除去するために剥離を施し、次に背面から右側縁の先端側に仕上げの調整が施される。

6はナイフ形石器である。石刃状の縦長剥片を素材としており、腹面の基部加工と二側縁に急斜なbluntingが施される典型的なものである。尖頭部側を折損している。7は削器の一部であろうか。薄く幅広の剥片を素材とし、右側縁に刃部が作出されている。上下ともに折断面を有している。

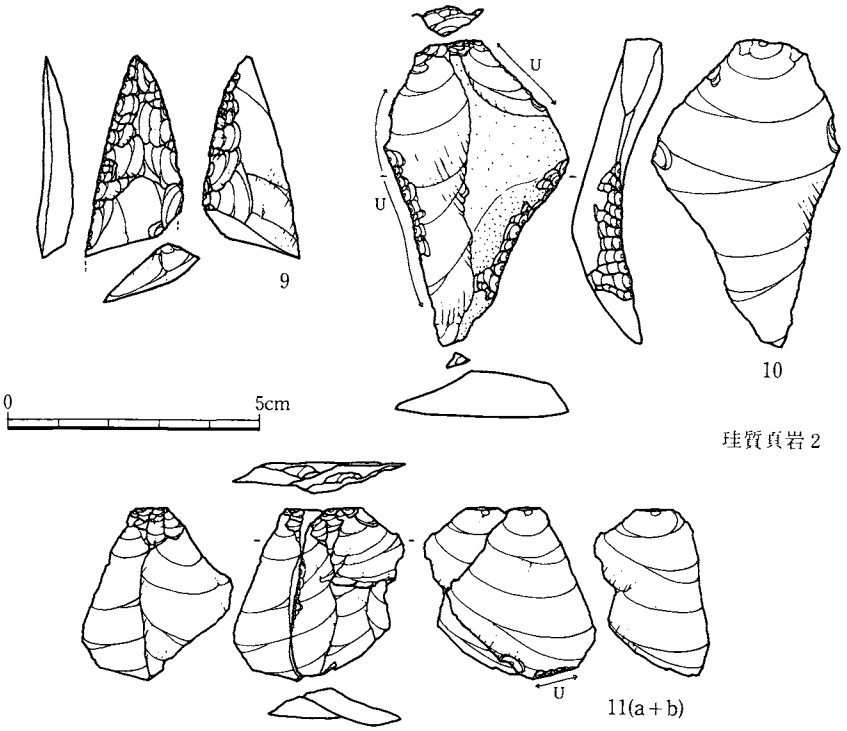
当個体と判断された遺物は多くが石槍調整剥片であるが、8に縦長剥片の例を示しておく。

珪質頁岩2（第155図、第156図、図版54）　珪質頁岩1とよく似た暗褐色～黒褐色の個体である。珪質頁岩1よりも肉眼で見える鉱物粒子が微細で、さらに緻密な印象を与える。遺物総点数はあまり多くなく、おもにIII6ブロックとIII10ブロックに大型の石器や剥片として分布している。また両ブロック間には接合関係も見られた。

9は半両面加工の石槍の欠損品で尖頭部側のみ遺存する。1によく似た例であるが、右側縁の調整は腹面側の方が後から施されている。10は削器である。厚みのある大振りの剥片の右側縁の一部に比較的急斜な加工が、左側縁の一部には緩やかな剥離痕が観察される。また左側縁と右側縁打面寄りには刃こぼれ状の微細な剥離痕が観察される。なおこの石器は他の石器とは離れてIII3ブロックより出土した。



第154図　池花遺跡第3文化層出土石器(1)（2/3）

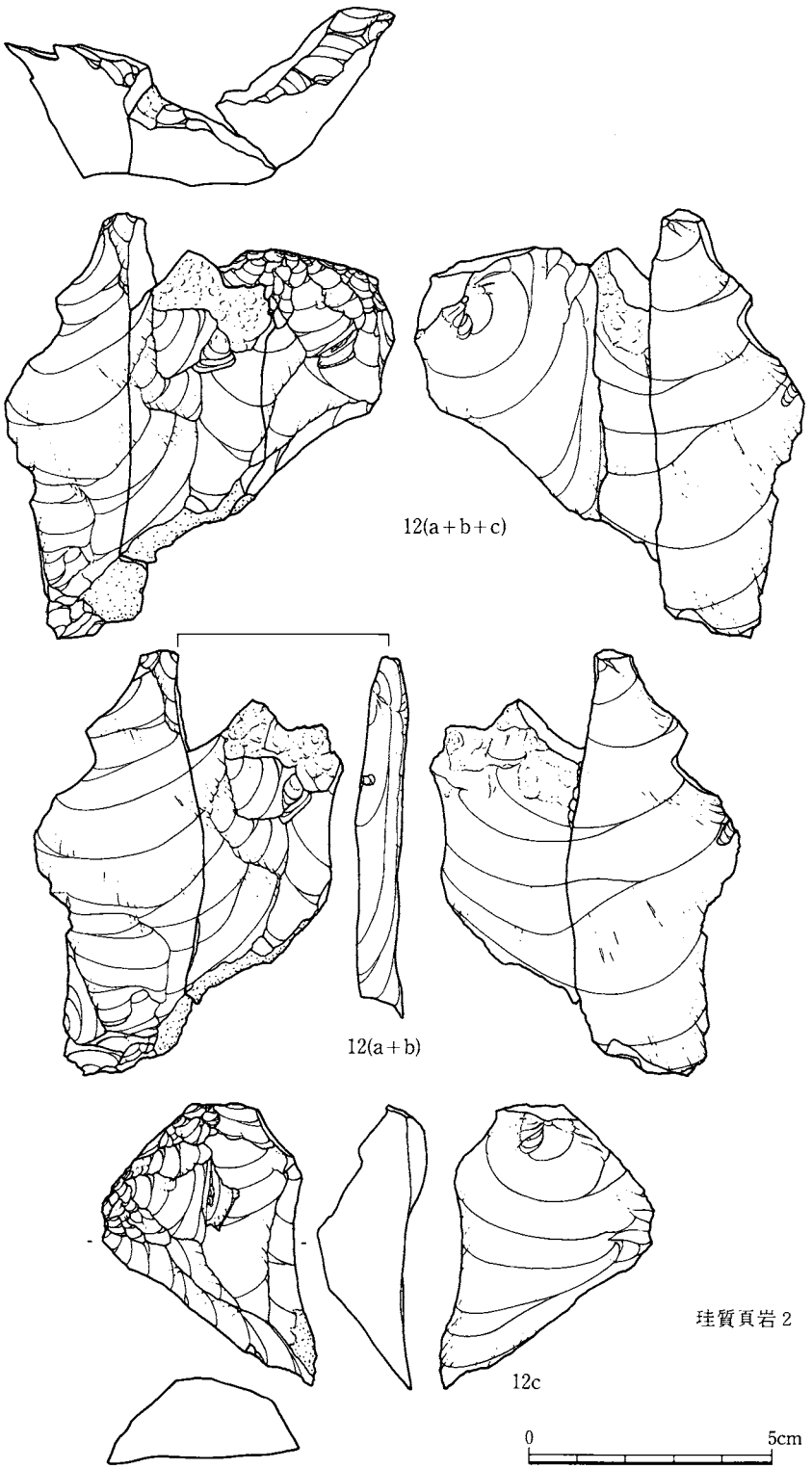


第155図　池花遺跡第3文化層出土石器(2)（2/3）

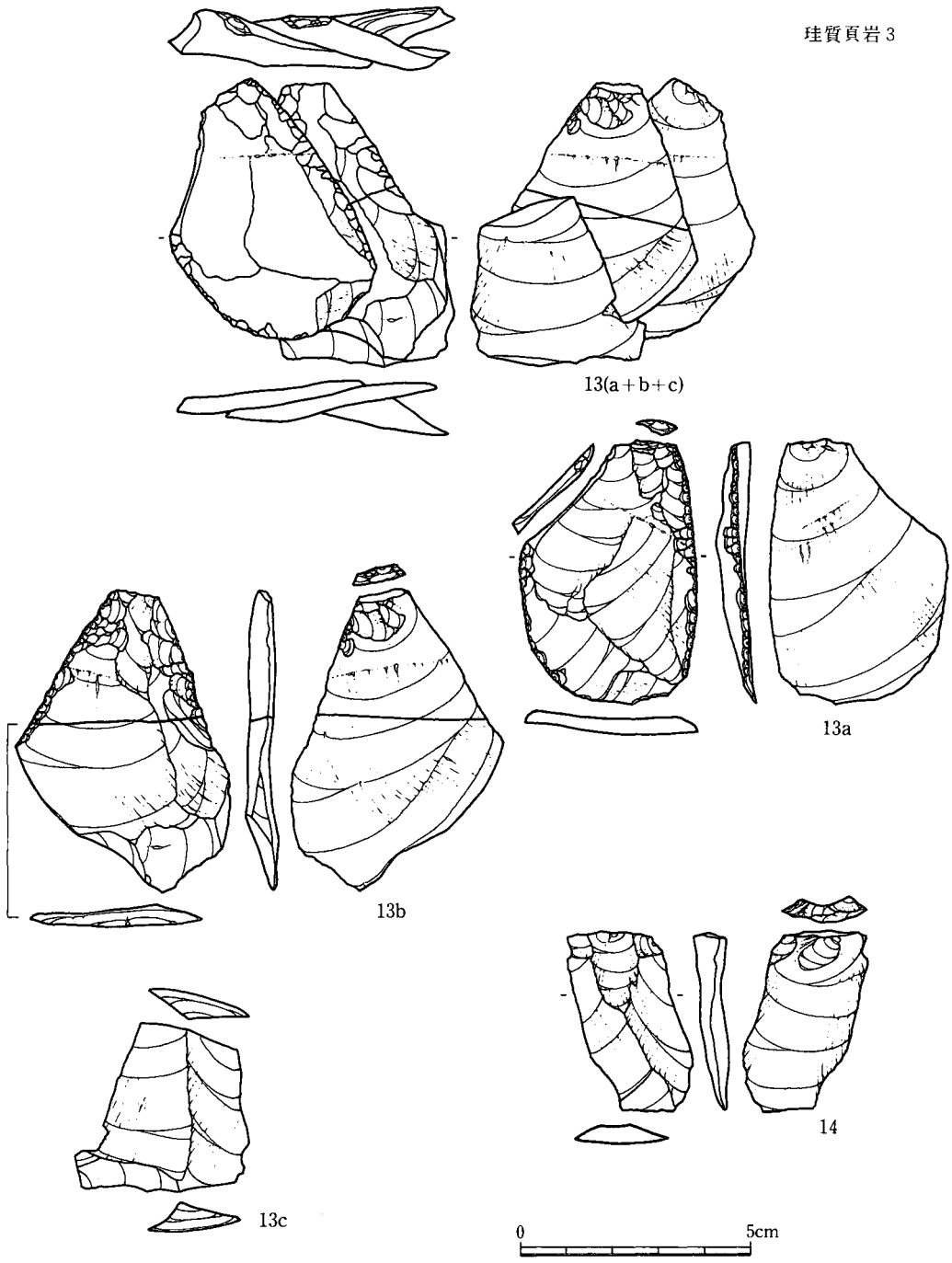
11と12は接合資料を示す。11は連続的に剝離された小型不定型剝片2点の接合資料である。いずれも打面縁調整痕があり、またいずれも二次的な小剝離痕を持っている。11aは背面左側縁に、11bは腹面の末端に刃こぼれと思われる連続的剝離痕が観察されるが、この2点の石器にいかなる性格を考定しうるか不詳。12は厚みのある大振りな剝片3点の接合資料である。12aと12bは折断面での接合であり、元来1回の剝離によって生産されたものであるが、主要剝離面の末端側は次第に整合しなくなる。したがって打撃と同時に打点直下に亀裂が生じ、2点に折れたものと考えられる。また12bは頭部がさらに折れている。12cは10に近似した形状の分厚い剝片であるが、加工痕、使用痕ともに認められなかった。

珪質頁岩3（第157図、図版55）　暗灰色の良質な頁岩である。量的には多くなく、III10ブロックに集中する。

13は3点の接合資料である。いずれも薄くflatな剝片を得るのに成功している。13aと13bは削器として仕上げられている。13aは小判形に近い整った形状を持つ剝片の両側縁に細かい連続的な剝離を加えることで刃部が作出されている。左側縁の打面寄りには折断面が見られる。これは不整な部分を除去したものとも考えられるが、あるいは使用法に関わる調整である可能性もあろうか。13bも13aと同じく偏平な剝片を素材とした削器であるが、これは狭い扇形をなし



第156図　池花遺跡第3文化層出土石器(3)（2/3）



第157図　池花遺跡第3文化層出土石器(4)（2/3）

ている。これも左右両側縁に加工が施されているが、整った刃部が作出されているのは左側縁であり、右側縁は整形のみを目的としたものであろう。中央で折損している。13c は未加工の剝片で上下両端を折断されており、両側縁は鋭利な刃部を形成する。なお13a、13b ともに打面を残しているが、いずれも打面調整痕と見られる小剝離が観察される。3点は打点をスライドさせながら連続的に剝離されたものであるが、古い剝離痕を併せて見れば、石核の周縁を周回するように打点を移動していることが推察される。14はやや小振りな剝片で13c と同様両側縁は鋭利である。やはり打面は小剝離痕で覆われている。

珪質頁岩4　調整剝片(砕片)が数点III10ブロックから出土した。実測図は掲載しなかった。

珪質頁岩5（第158図、図版53）　暗灰褐色の良質な石材である。III 9 ブロックとIII10ブロックから調整剝片(砕片)がまとまって出土している。石器は1点のみである。15は節理面で剝がれた剝片で、背面左側縁の直線的な部分に使用痕と見られる微細な剝離がある。

珪質頁岩6（第158図、図版53）　灰褐色の頁岩。出土点数は少なく、III 3 ブロックとIII 4 ブロックで計4点が出土したのみである。石器は石槍1点がある。16は半両面加工の石槍で基部を欠損している。この石器の下半部は概ね腹面の調整が後から施されており、おそらく加工の際に腹面左側縁下端の剝離が大きすぎたものと思われる。しかしその後にも2箇所に新しい小剝離を施していることが観察され、このまま石器として使用された可能性は充分に考えられる。

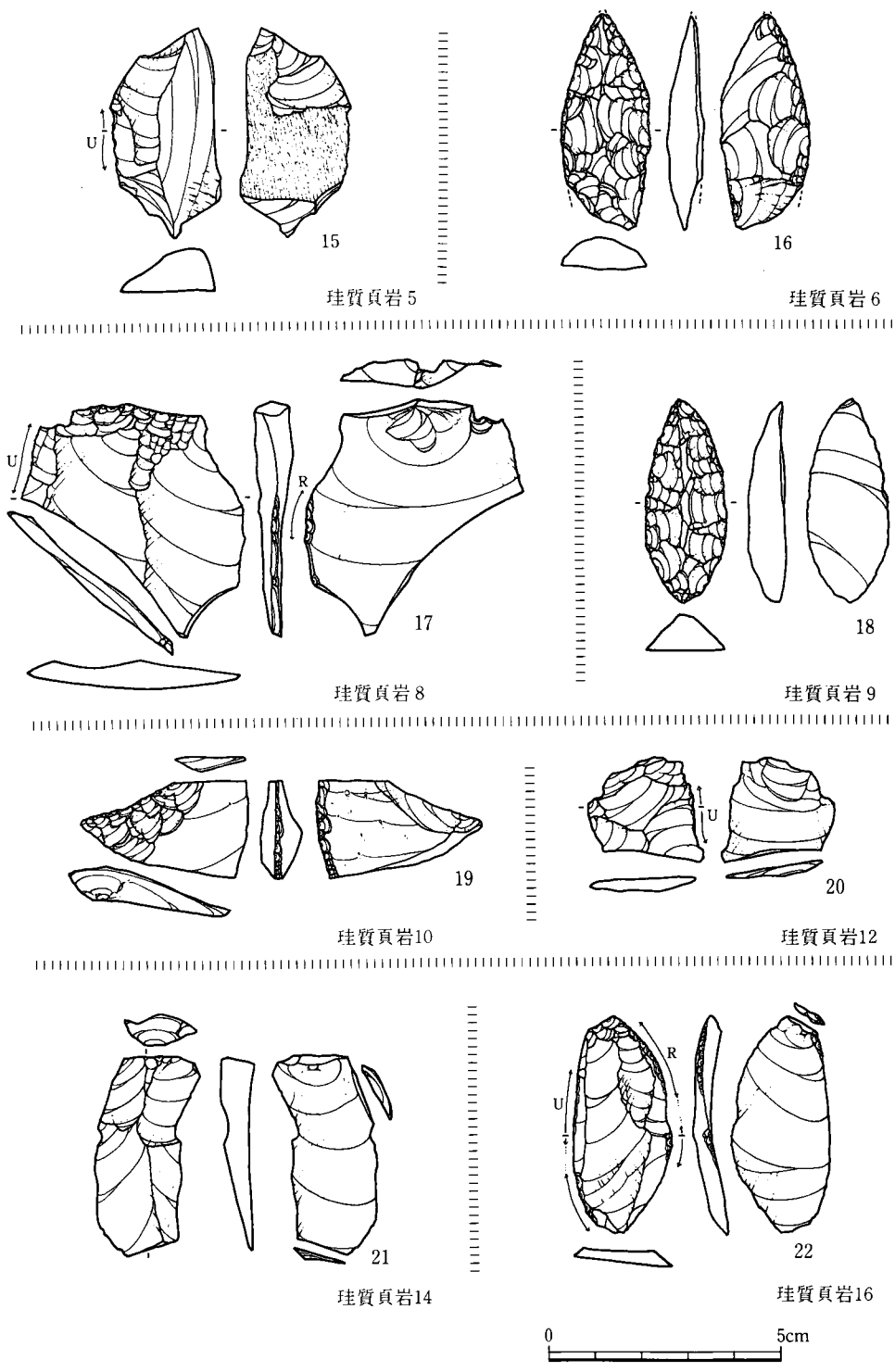
珪質頁岩7　調整剝片(砕片)が2点だけの個体である。実測図は掲載しなかった。

珪質頁岩8（第158図、図版53）　黒褐色の良質な頁岩である。単体の個体で、III 2 ブロックから出土した。17がそれで、やや大ぶりで偏平な剝片である。末端は2面の折断面により失われている。腹面左側縁の一部には加工痕かあるいは使用痕かと見られる剝離が観察され、さらに背面左側縁にも刃こぼれ状のごく微細な剝離痕がある。

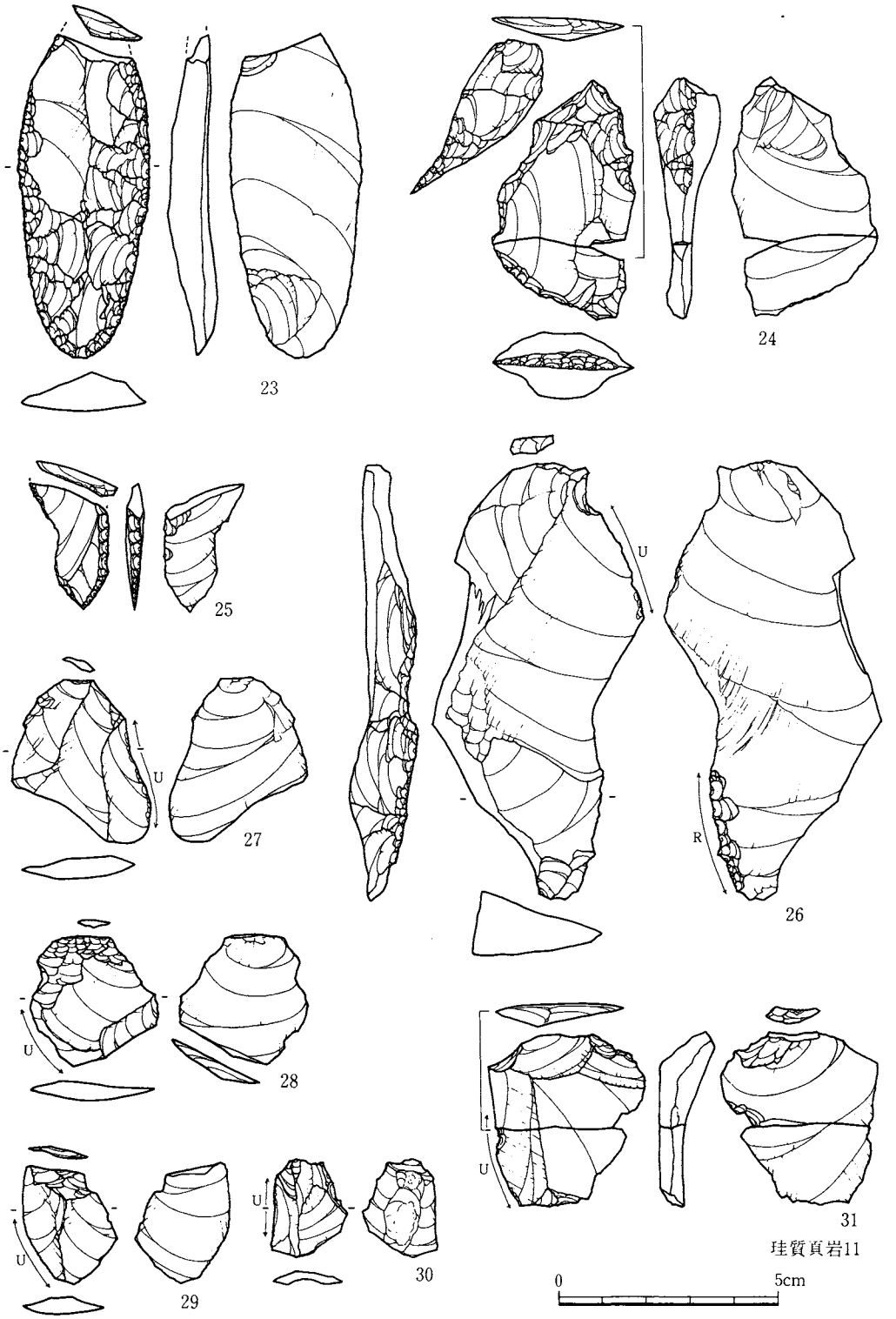
珪質頁岩9（第158図、図版53）　これも単体の個体である。やや灰色を帯びた明褐色で、若干の夾雑物は見えるもののやはり良質な石材である。18はIII 6 ブロックから出土した片面加工の石槍。断面が三角形状を示す厚みのあるものである。同種の石器はIII 6 、III 7 ブロックで多く見られるが、オパール製が多く、珪質頁岩製は少ない。

珪質頁岩10（第158図、図版53）　褐色のきわめて緻密で光沢のある頁岩。前2個体と同じく単体資料である。19はIII1b ブロックから出土した。背腹の判断が困難であるので表裏で表現するが、表面は左側縁に石槍の調整と同様の加工が施されており、本来石槍の製作を目的としたものであったことは明確であろう。しかし上下両端ともに折れているため、元来の形状は不詳である。他方裏面の左側縁には細かい剝離が連続的に加えられている。これは明らかに scraper edge の作出を目的としたものであろう。石槍素材が加工途中で折損したため削器としたものであろうか。

珪質頁岩11（第159図、第160図、図版56）　暗褐色を呈する良質の頁岩である。調整剝片(砕



第158図　池花遺跡第3文化層出土石器(5)（2/3）



第159図　池花遺跡第３文化層出土石器(6)（2/3）

片)としてIII10ブロックに多量に分布している。また石器としてはIII 6 ブロックにも分布する。分布傾向は珪質頁岩 2 と同様で質的にも類似している。

石槍と見られるのは23の 1 点のみである。片面加工で尖頭部を欠損している。調整剝離は背面全体を覆っておらず、とくに尖頭部側にそれは顕著である。周縁加工品と言えるかもしれない。また基部は弧状を呈する特異なものである。実測図からは削器とも見えるが、周縁の調整は scraper edge を形成していない。

24は掻器とする。末端に急斜な加工によって直線的な刃部を作出している。頭部側は両側縁とも顕著な調整が施されており、それによって打面が失われている。この調整は何らかの形で使用法に関わっていると思われる。25は削器と考える。末端は鋭利な尖頭状をなしている。背面右側縁に整った連続的な加工が施されている。

26～31に加工痕ないし使用痕が認められる剝片を示した。26は大型の剝片で左側縁には剝離痕と打面縁調整痕が残されており、打面転移が観察される好例。腹面左側縁には顕著な加工痕を持つ。調整角は緩やかで縁部は若干鋸歯状を呈しており、その企図は不詳である。また頭部側の一部には刃こぼれ状の微細な剝離が見られる。27～31はいずれも側縁の一部に刃こぼれ状の使用痕が観察されるものである。32には剝片 2 点の接合例を示した。

珪質頁岩12（第158図、図版57）　明褐色の頁岩である。殆どがIII10ブロックに集中し、生産された石器を遺跡内に遺存しない個体で、すべて調整剝片(砕片)である。20は調整剝片であるが、背面右側縁にごく微細な剝離痕が観察されるものである。

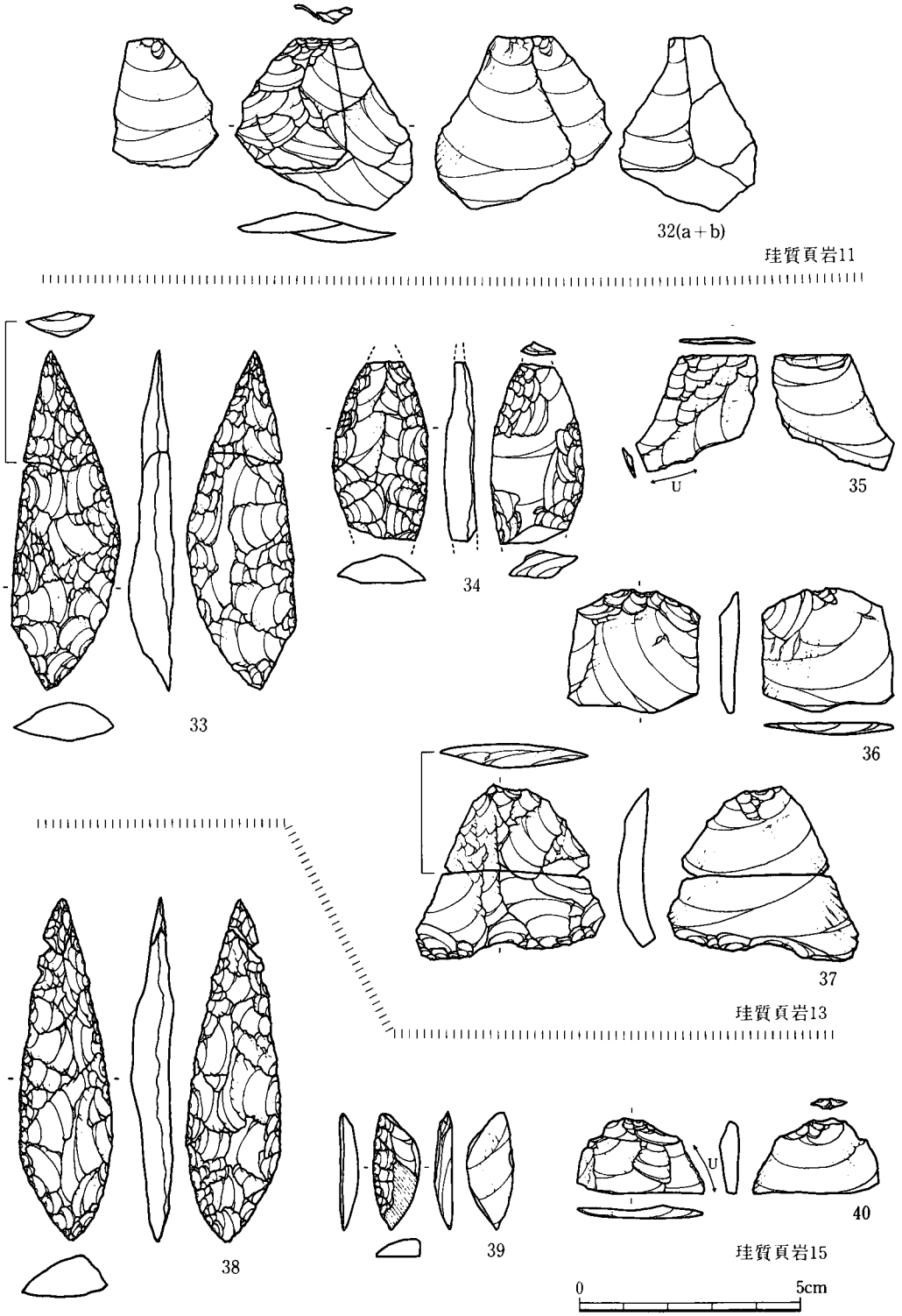
珪質頁岩13（第160図、図版55）　明褐色～褐色の良質な頁岩である。III 1 、III 3 、III 4 ブロックに分布し、とくにIII 1 ブロックに多い。

石槍が 2 点出土している。33は折れた 2 点が接合したものでやや細身の両面加工品である。最大幅は下位にあり、形態は38(珪質頁岩15)と共通するが、いびつで左側縁が直線的なのに比して右側縁は大きく湾曲している。また表面下位の高まりを除去し切れていない。しかしそのことを無視するとすれば、むしろこれは基部側の欠損を再加工した可能性も考えることができる。34は尖端、基部両側を折損した片面加工の石槍である。33とは異なり最大幅が中央付近にくる、 1 と同種のものであろう。腹面右側縁下位の調整の一部に negative bulb が残る以外は、仕上げは背面の調整によってなされている。縦長剝片素材。

35～37に石槍調整剝片の例を示した。35の下縁の一部には微細な刃こぼれが認められる。37は point flake としては大きなもののひとつで、末端が石槍の対縁に達している。

珪質頁岩14（第158図、図版57）　灰褐色の頁岩である。全点がIII10ブロックに分布する。21には剝片を一例だけ示した。縦長剝片で、両側縁は薄く鋭利。

珪質頁岩15（第160図、図版57）　明灰褐色の頁岩である。珪質頁岩13に似た個体であるが、やや粗粒の印象があり、光沢もない。分布は珪質頁岩13と同様III 1 ～III 4 ブロックに含まれる



第160図　池花遺跡第３文化層出土石器(7)（2/3）

が、量的には少ない。

石槍が1点ある。38は折損した尖頭部が接合したものである。整美な両面加工の石槍で最大幅が著しく下位に位置する。しかし側面図で判るように、前記33同様、表面中央の瘤状の高まりが除去されていない。しかしこれらは未製品と考える必要はないと思う。単純に形態を比較すれば、先土器時代終末～縄文時代草創期の石槍にも通じるものがありながら、仕上げの若干の粗さは否めないところであろう。

39は石槍の周縁部のような加工が施されている。調整剝片ではなく、石槍の加工途中に欠損した破片と考えるべきか。40は調整剝片の背面右側縁に微細な刃こぼれが観察されるもの。

珪質頁岩16（第158図、図版57）　暗褐色で光沢のある良質な石材。単体資料で、III10ブロックの出土である(22)。長楕円形の薄手の剝片であり、周縁には削器刃部状の細かい剝離が認められる。加工痕と思われるものは背面右側縁頭部寄りと背面左側縁末端寄りが顕著である。他にも刃こぼれ状の微細な剝離痕が見られる。

珪質頁岩17（第161図、図版57）　珪質頁岩16同様、暗褐色の良質な頁岩であり、また単体資料である。41はIII 7 ブロックから出土した片面加工の石槍である。縦長剝片素材で、細身であるのに対し厚みが大きく、断面形は直角三角形状を呈する。鞍状の高まりを除去しないまま仕上げたのか、この形状が意図的なものであるのかは判断が難しいが、同種の小型品である18を中型化した石器とも言えようか。

珪質頁岩18　調整剝片4点がIII10ブロックから出土した。実測図は掲載しなかった。

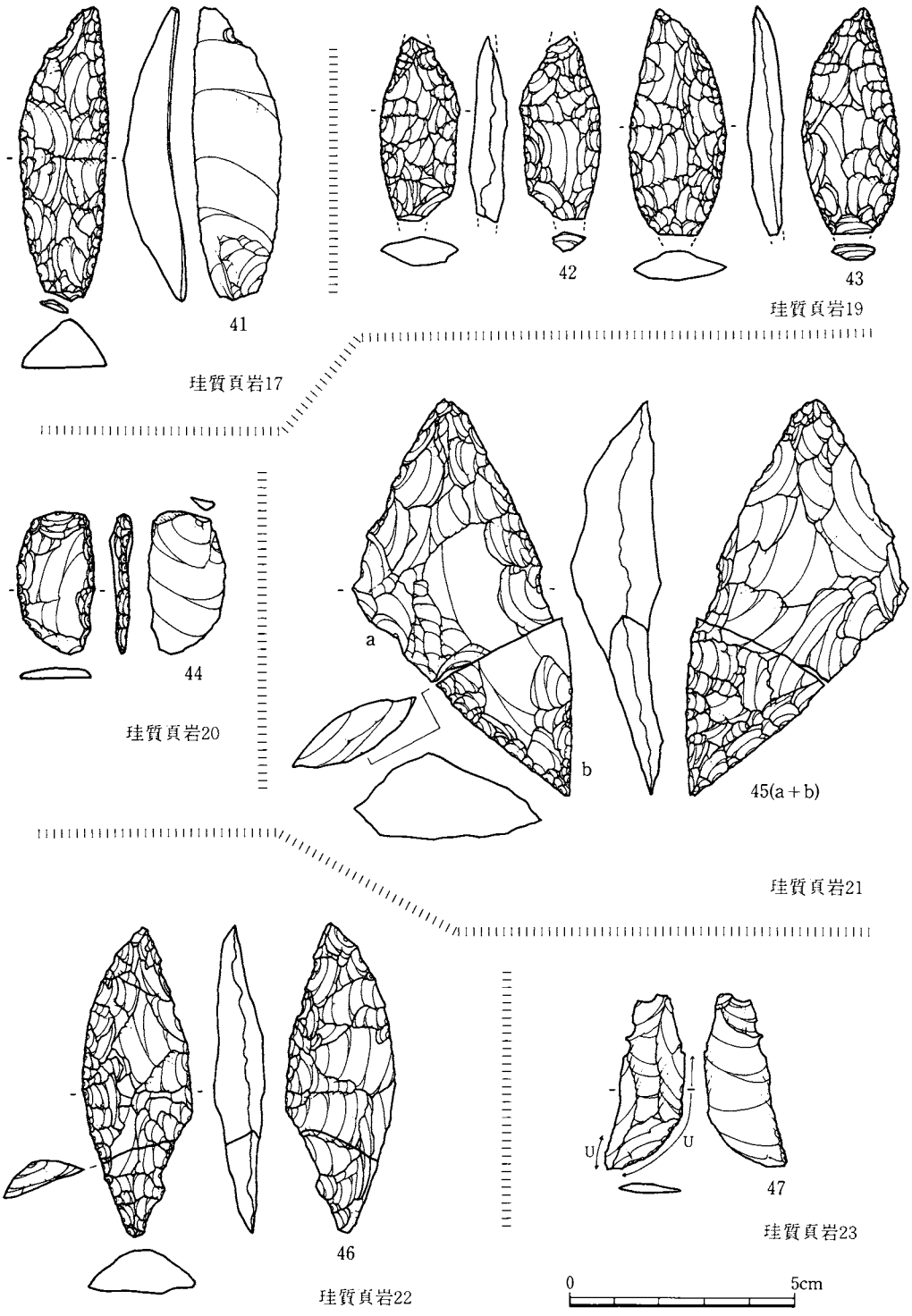
珪質頁岩19（第161図、図版57）　灰褐色～明茶褐色の良質な頁岩である。石槍2点以外に当個体と識別された遺物はなかった。III 7 ブロックとIII 8 ブロックの出土である。

石槍は2点とも完全な両面加工のものである。また比較的長幅比が小さく、形態的特徴からも珪質頁岩製の石槍としては小数派と言えよう。42は上下両端を欠損する。概ね表裏とも左側縁の調整によって仕上げている。43は基部を若干欠損し、尖頭部の形状はややいびつである。42とは逆に、表裏とも右側縁の調整によって仕上げている。

珪質頁岩20（第161図、図版57）　暗茶褐色の頁岩で単体資料である。44はIII 6 ブロックから出土したもので、小型の削器と考える。打面、打面縁調整痕を残し、それ以外の周縁ほぼ全体に加工を施している。調整角は40°前後で、剝片本来の厚さがないので調整剝離痕自体も細かいものとなっている。

珪質頁岩21（第161図、図版57）　褐色の頁岩。III 1 ブロックから石槍2点が出土したが、両者は折断面で接合した。45がそれで、興味深い資料である。実測図左をA面、同右をB面として説明する。

先鋭な尖頭部は45bにあり、とくにB面の調整は進んでおり、また尖頭部を上にして見たA面右側縁の調整も整っている。対して45aの調整はまだ不充分である。しかしながら45aには



第161図　池花遺跡第３文化層出土石器(8)（2/3）

45bとの折断面を切る2枚の剝離痕があり、折断後に調整を施されていることは明確である。その場合、45aは実測図の上端を尖頭部とする石槍となる。勿論その尖頭部は鈍重であり、A面の鞍状の瘤も高すぎて、未製品の段階にあることは言うまでもない。問題はこの石槍が元来どのような形に企図されていたかであろう。これが折断されない状態で石槍として完成されたならば、当文化層の石槍の中で最大級となるのは疑い得ない。しかし当文化層の組成を見ると大型の石槍は明らかに要請されていない。そこで考えられるのは全体の「尖頭器」自体が素材として搬入されていることである。実際に当個体に属する遺物は遺跡内からは他に出土しておらず、調査時の漏れや識別不能の遺物の中に含まれることを考慮したとしても、この「尖頭器」の加工の場を遺跡内に求めることはできない。したがって素材として搬入された後、小型ないし中型の石槍を生産すべく45aと45bへの折断が行われ、その後殆ど調整を加えられないまま残置されたと考えておくべきであろう。

珪質頁岩22（第161図、図版57）　前掲珪質頁岩21と同様、2点が接合して1点の石槍となったもの(46)で、他の遺物は見られない。暗茶褐色の良質な頁岩でIII 3ブロックの出土である。46は横長剝片素材の可能性が濃厚(裏面右側縁下半に主要剝離面が遺存するか？)な石槍である。両面加工ではあるが、裏面の調整は左側縁の一部を除き平坦で、打瘤の除去にその主眼がおかれているものと思われ、半両面加工に近いもの。表面左側縁に比べ、右側縁は直線的である。これは右側縁下半(屈曲点以下)の調整が新しい剝離によって覆われていることから、若干の欠損の後の再調整に起因する可能性もあると言えよう。

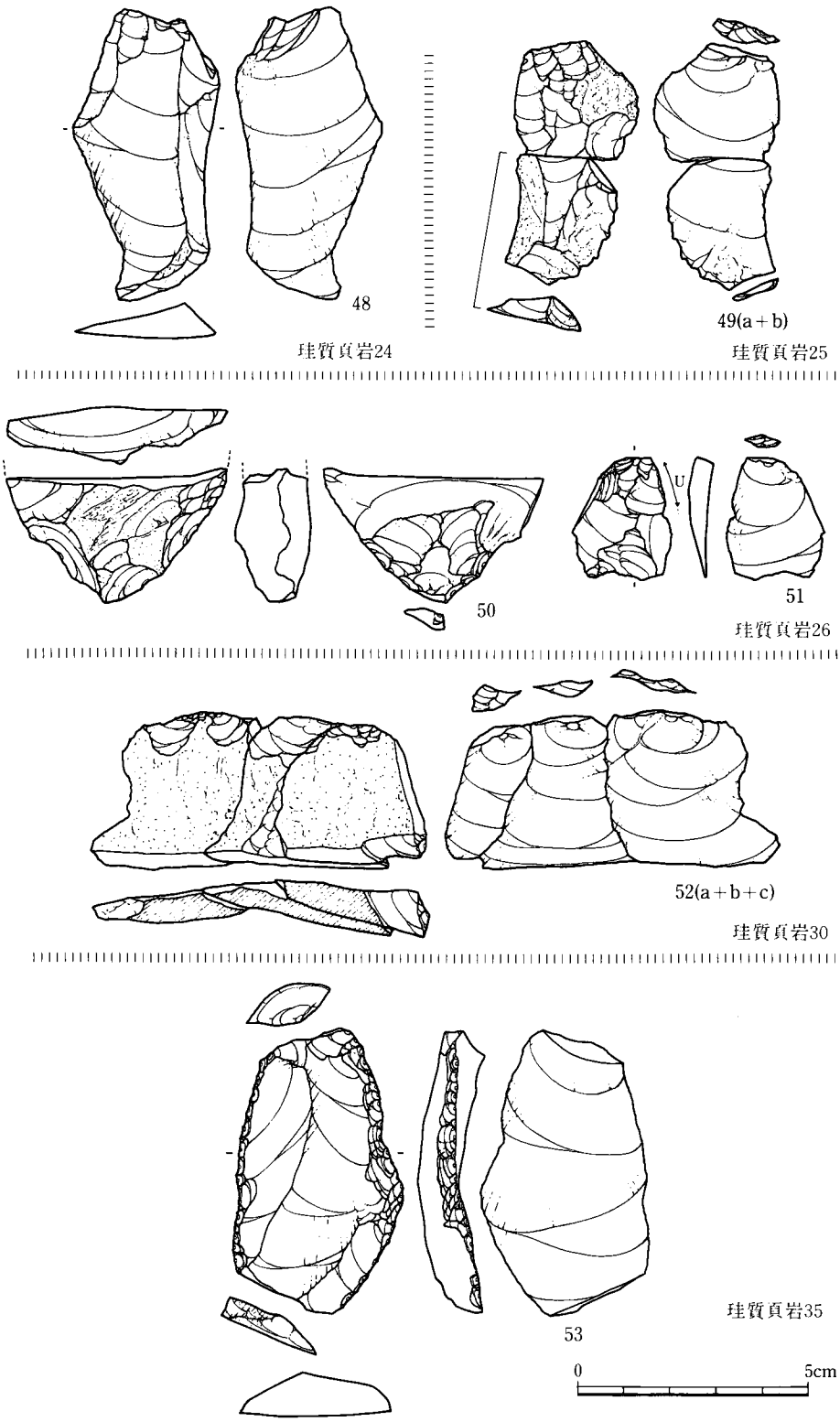
珪質頁岩23（第161図、図版58）　暗褐色の頁岩。数点の調整剝片がIII 4ブロックとIII 1ブロックに遺されていた。47はそれらの中で微細な刃こぼれが観察される例である。とくに背面右側縁中位から末端にかけてが顕著である。

珪質頁岩24（第162図、図版58）　褐色の個体。単体資料である。48は剝片で、打面が弾け飛んでいる。III 4ブロック出土。

珪質頁岩25（第162図、図版58）　褐色～明褐色の緻密な頁岩であるが、やや節理の発達があり、あまり良質な石材とは言えない。49はIII 4ブロックから出土したもので、やや大振りの調整剝片の折損または折断されたものである。打面及び打面縁には石槍周縁部の調整痕が残されている。折断面の一部は節理面である。

珪質頁岩26（第162図、図版58）　明褐色の頁岩である。III 2ブロックとIII 3ブロックに少量分布していた。1点の石槍片があり、他は石槍調整剝片(砕片)である。50は石槍未製品の折損したものであろう。背腹両面から調整が加わっているが粗いもので、打面、打瘤が見られ、主要剝離面を大きく遺しており、まだ早い段階の未製品であろう。51は調整剝片の側縁の一部に微細な剝離痕が観察されるもの。

珪質頁岩27～29　いずれも調整剝片(砕片)が1点から数点見られるもの。III 3、III 4、III 5



第162図　池花遺跡第３文化層出土石器(9)（2/3）

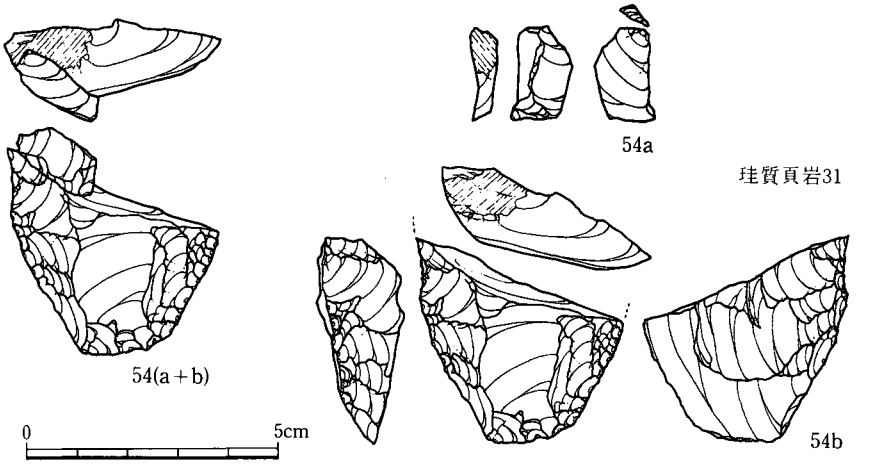
ブロックと遺跡北部から出土している。実測図は掲載しなかった。

珪質頁岩30（第162図、図版58）　黒褐色を呈する頁岩である。良質な石材ではあるが、遺跡内から出土している遺物は礫皮面付近を使用しているため、黄灰色を帯び、風化が顕著。全体でも10点に満たないが、III 4 ブロックに集中して出土している。過半が砕片であるが剝片が 3 点あり、接合した(52)。この接合資料は背面に礫皮面、底面に節理面を大きく残しており、石核の縁辺を、打点を横移動しながら連続的に剝離されたものである。二次的な調整痕、使用痕は認められなかった。

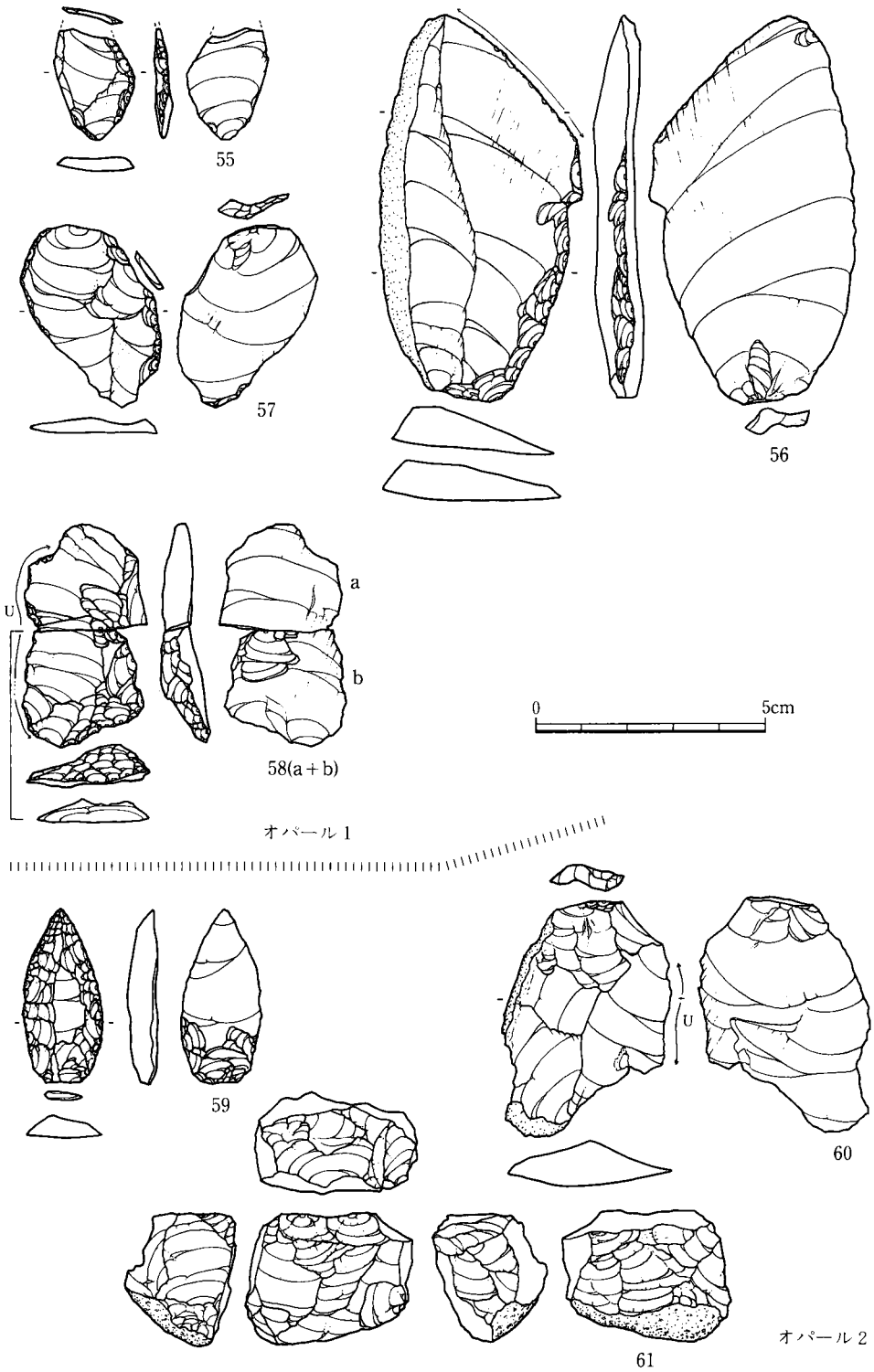
珪質頁岩31（第163図、図版58）　黒色の良質な頁岩である。出土遺物の殆どが調整剝片(砕片)で、III 4 ブロックに集中している。石器としては石槍 1 点 (54b)があり、調整剝片(54a)と接合している。この石槍は基部だけが遺存している。接合する54a は54b の尖頭部側(遺跡からは持ち出されたか) を折断後に調整したものである。その折断が折損なのか意図的な折断なのかは充分には明らかにできないが、本来の石槍がかなり大型のものであろうこと、そして大型品にしては調整が不充分であると思われることから、もともとこれは素材として搬入されたものであると判断したい。また遺跡内での加工途中に折損したのであれば、54 b の調整痕に調整剝片が接合してもよいように思われ、ここでもより小型の石槍を生産すべく折断→加工の過程が行われた可能性を指摘しておきたい。

珪質頁岩32～34　剝片や調整剝片(砕片)が 1 ～ 3 点出土している個体である。実測図は掲載しなかった。

珪質頁岩35（第162図、図版58）　暗灰褐色～灰白色と色調の変化の大きい石材である。単体資料で、53はIII 4 ブロックから出土した削器である。頭部、末端を折断して形を整えており、両側縁全体に加工を施す該期の典型的な削器となっている。



第163図　池花遺跡第 3 文化層出土石器(10)（2/3）



第164図　池花遺跡第３文化層出土石器(11)（2/3）

珪質頁岩36　珪質頁岩で個体識別不能のものを一括して珪質頁岩36とした。概ね褐色、暗褐色の頁岩で、III 4 ブロックやIII10ブロックといった集中度の高いブロックに含まれる調整剝片のうち、微細なものなど識別判定の困難なものである。

オパール 1（第164図、図版59）　乳白色の非常に珪質な石材である。礫皮面は淡緑褐色。圧倒的にIII 6 ブロックに集中する。全体の点数に比して石器の割合が高い。

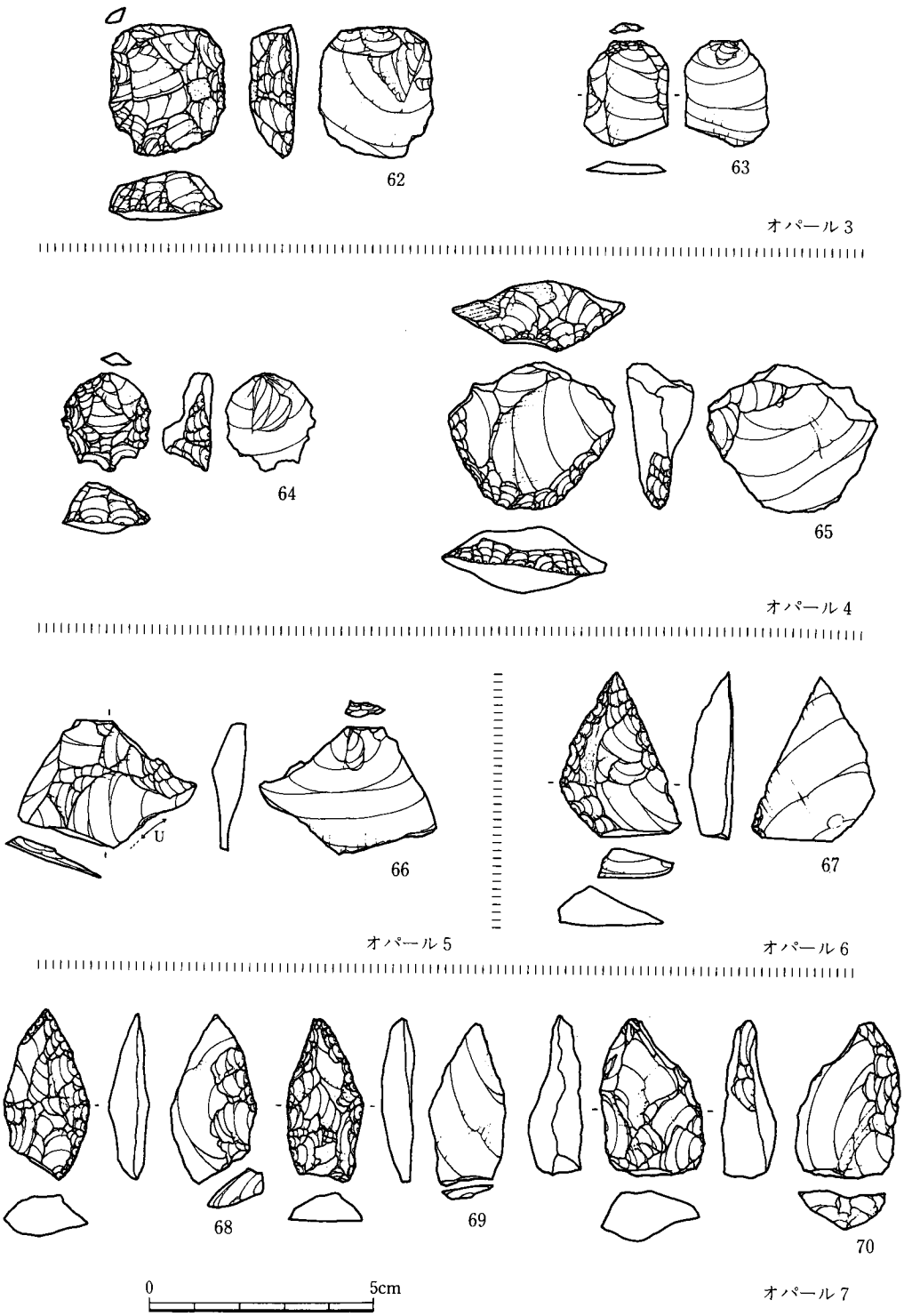
55は尖頭部を有するであろうこと、未加工の刃部を持つことからナイフ形石器とする。偏平な石器で、背面左側縁下端は若干の剝離によって基部を調整しているため、打面は失われている。右側縁の加工はあまり急斜ではない。56は大型の削器である。背面構成でも大振りな剝片を剝離したことが窺われる。打面は平坦。実測図の背面左側縁は礫皮面、右側縁は連続的な調整剝離が施されている。またこの石器は上部(末端)を鋭利な刃部として残しており、刃こぼれと考えられる細かい剝離痕を認めることができる。この刃部を重視し、調整を刃潰しと考えると、先鋭な尖頭部を持たないもののナイフ形石器に類するものと見ることもできないではないが、ここではあくまで削器としておく。57も削器である。小振りで偏平な剝片を素材とする。両側縁とも細かく連続的な加工痕を有する。58は接合資料である。折れ面での接合であるが、おそらく折断と考えることができる。しかし実測図の背面左側縁には、連続はしないものの58ａ、58ｂ両者を通じた刃こぼれ状の微細な剝離が観察される。58ｂは折断後、折断面側の角を調整し、素材の頭部側に集中的に加工を加えて掻器としている。

オパール 2（第164図、図版59）　乳白色～若干透明感のある淡褐色の石材。オパール 7 と同一母岩である可能性がある。III 6 、III 7 ブロックに分布。

59は小型の石槍である。腹面の基部に加工痕が認められるが、ほぼ片面加工と言ってよい石器であろう。背面は中央部を未加工のまま残し、周縁から40°～50°前後の調整角で加工がなされているが、とくに周縁加工品と言うべきものではない。60は剝片の一部に刃こぼれ状のごく微細な剝離が見られる例である。61は石核である。当文化層においては、石核はきわめて珍しい。礫皮面を含めると 6 面体を呈するもので、実測図における上から下への方向の剝離が多用されている。細かい剝離痕が多いが、いかなる目的をもったものか。

オパール 3（第165図、図版59）　白みがかった褐色～灰褐色の良質な石材。わずか 3 点の個体で、III 6 ブロックで 2 点、III10ブロックで 1 点が出土した。62は掻器である。隅丸方形に整形されており、 3 方に刃部が作出されている。調整角はいずれもあまり急斜なものではない。63は剝片の例である。

オパール 4（第165図、図版59）　白みがかった淡灰褐色～灰褐色の良質な石材。オパール 3 と同じく全体で 3 点のみの個体で、III10ブロックから出土した。掻器が 2 点ある。64は円形を呈する小型のもので、側縁中位以下に調整剝離を施している。この石器は、末端側に至るにしたがって厚みが大きくなり、また調整角も急斜となる。65はやや幅広の例である。半円形の縁



第165図　池花遺跡第3文化層出土石器(12)（2/3）

辺ほぼ全体に調整が施されている。調整角は64に比べて緩やかである。また頭部側は打面を残さず、全体が二次的剝離痕で覆われており、腹面にも2箇所の剝離痕が認められる。つまり刃部作出とは別にかなり手が加えられていることになる。この石器の形状は当文化層の他の掻器とも異なったものであるが、それはまた意図的なものであり、機能や使用法と結び付いていることになる。

オパール5（第165図、図版59）　やや赤みを帯びた乳白色の石材。部分的に赤褐色の強い箇所がある。単体資料。66は剝片でIII 7ブロックからの出土である。末端の一部に刃こぼれが観察される。

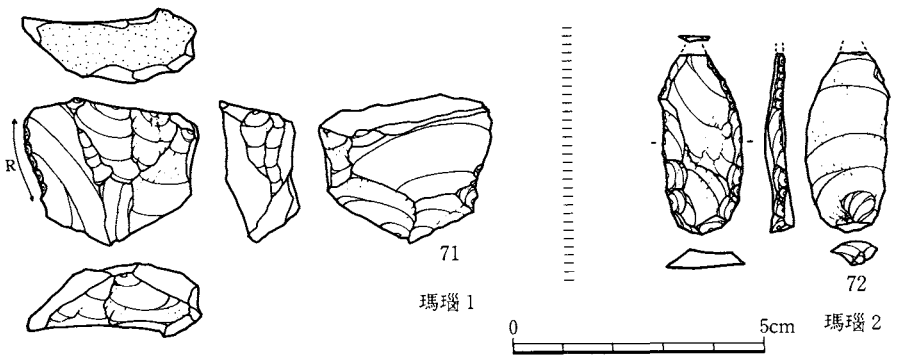
オパール6（第165図、図版59）　橙褐色を帯びた乳白色の石材。この個体も単体資料でIII 7ブロックに含まれていた。67は片面加工の小型の石槍(未製品)である。素材の末端を尖頭部側に用い、頭部側を折断して大きさを規定している。この段階では、背面左側縁の調整角が急斜なのに対して右側縁のそれが緩やかであり、しかも右側縁下端は未加工のままである。しかし加工を施された部分はかなり丁寧に調整されており、しかも未加工部分にも刃こぼれのような細かい剝離痕が認められる。したがってこの石槍は明らかに未製品と判断すべきものではあるが、実際にはこのままで石器として活用されていた可能性も否定できない。

オパール7（第165図、図版59）　乳白色～若干透明感のある淡褐色の石材で、オパール2と同一母岩である可能性が濃厚なものである。3点の遺物が出土しているが、いずれも石槍である。出土ブロックはIII 6、III 7、III10ブロックに分散している。

68は半両面加工の小型石槍である。横長剝片素材であり、これは片面加工を基本としながら打瘤を除去するために腹面の調整が加えられていることは明白である。基部側の折れ面は、おそらく折損ではなく、他の小型石槍の基部の形状から察するに、当初から企図された折断であろう。III10ブロック出土。69は片面加工の小型石槍である。腹面の調整が見られないのは素材の使い方が異なるからであろう。基部はやはり折断されている。大きさ、形状ともに59や68と同一の規格で生産されたと考えられる石器である。III 7ブロック出土。70は68と同様、横長剝片を素材とする半両面加工の石槍である。腹面の加工はやはり打瘤を除去しようとしたものであろうが、まだ厚みは取れていない。また背面の加工はあまり進んでおらず、形状も不整である。未製品と考える。基部には折断面を有している点は他の同種の石槍と共通している。

瑪瑙1（第166図、図版60）　淡い橙色の半透明の瑪瑙である。量的には僅少で、石核が1点と剝片または砕片が1点出土しているだけである。71は石核で礫皮面を有し、概ね天地二方向からの剝離痕が認められる。縁辺の一部には連続的な二次的調整痕があり、最終的に削器として用いられたものか。III 9ブロックから出土した。

瑪瑙2（第166図、図版60）　若干橙色がかった透明感の少ない瑪瑙。単体資料である。72はナイフ形石器で、縦長剝片の末端を尖頭部とし、打面を残す。加工は右側縁のほぼ全体と左側



第166図　池花遺跡第３文化層出土石器(13)（2/3）

縁の一部に施されている。調整角は比較的緩やか。この石器は未加工の刃部を持つためナイフ形石器とするが、実際の機能面では周縁加工の石槍と厳密に区別する必要があるかどうか疑わしい。

瑪瑙３　砕片１点のみの資料である。実測図は掲載しなかった。

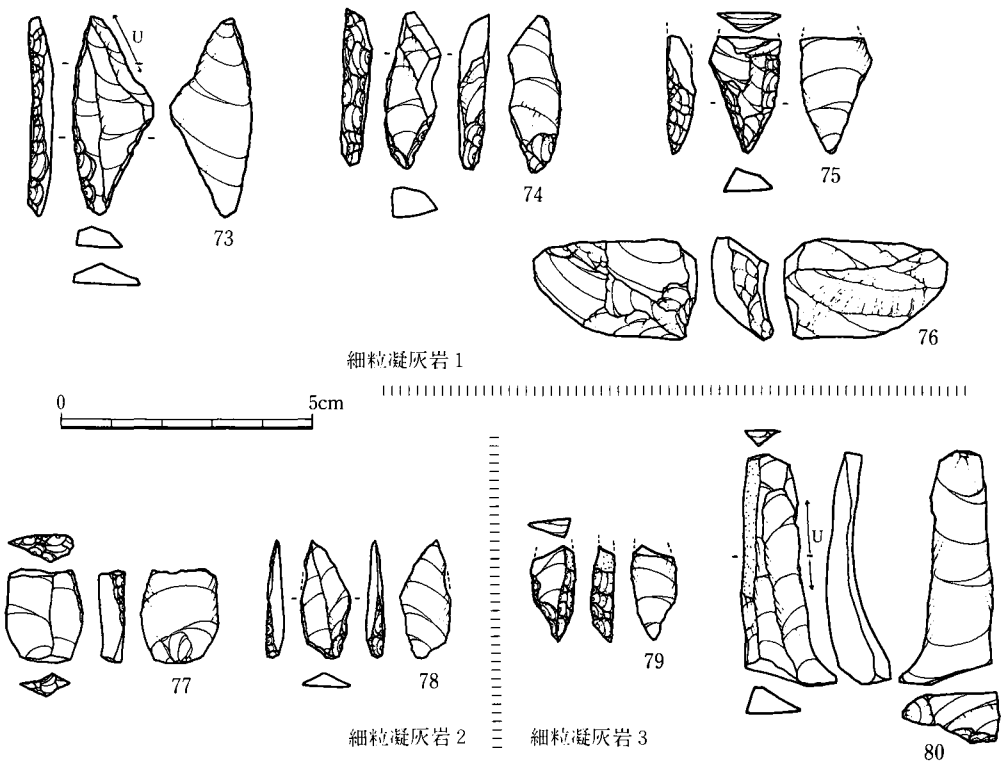
細粒凝灰岩１（第167図、図版60）　当文化層出土の凝灰岩には、緻密で硬質な印象のものと流紋岩質凝灰岩の二者があり、前者を神奈川県方面で「細粒凝灰岩」と呼称されている凝灰岩に近いものと考え、当文化層においても細粒凝灰岩と呼ぶことにする。この個体は褐色を帯びた淡緑色を呈するもので、４点出土し全点がIII３ブロックの出土である。

ナイフ形石器が３点ある。いずれも二側縁加工品で石刃製と考えられる。73は先端を僅かに欠損するようであるが、ほぼ完形のもの。刃部にはごく微細な刃こぼれが観察される。刃潰し加工はすべて腹面側からのものである。74は右側縁が大きく刈れた形状をしているが、これも完形であろう。blunting は背腹双方から施される。また73、74ともに腹面の基部加工が認められる。75は尖頭部を折損するものである。左側縁の刃潰し加工は背腹両側から施され急斜なものであるが、右側縁は腹面側からのみで調整角が緩やかである。なお以上のナイフ形石器の他に剝片が１点出土している(76)が、これもナイフ形石器と一緒に石器として搬入されたものであろう。

細粒凝灰岩２（第167図、図版60）　前個体よりもより珪質な凝灰岩である。緑がかった淡灰褐色を呈する。２点のナイフ形石器がIII３ブロックから出土した。

77は小型の截頂石刃である。調整打面を持つ石刃素材で、右側縁の一部に blunting を施し、頂部をほぼ水平に断ち切っている。78は長さが２ cm 余の非常に小型のナイフ形石器で二側縁加工品である。基本的に左側縁を刃潰しし、右側縁は基部側のみの加工としている。尖頭部は先鋭である。

細粒凝灰岩３（第167図、図版60）　褐色を帯びた淡緑色を呈する良質な石材である。遺物点



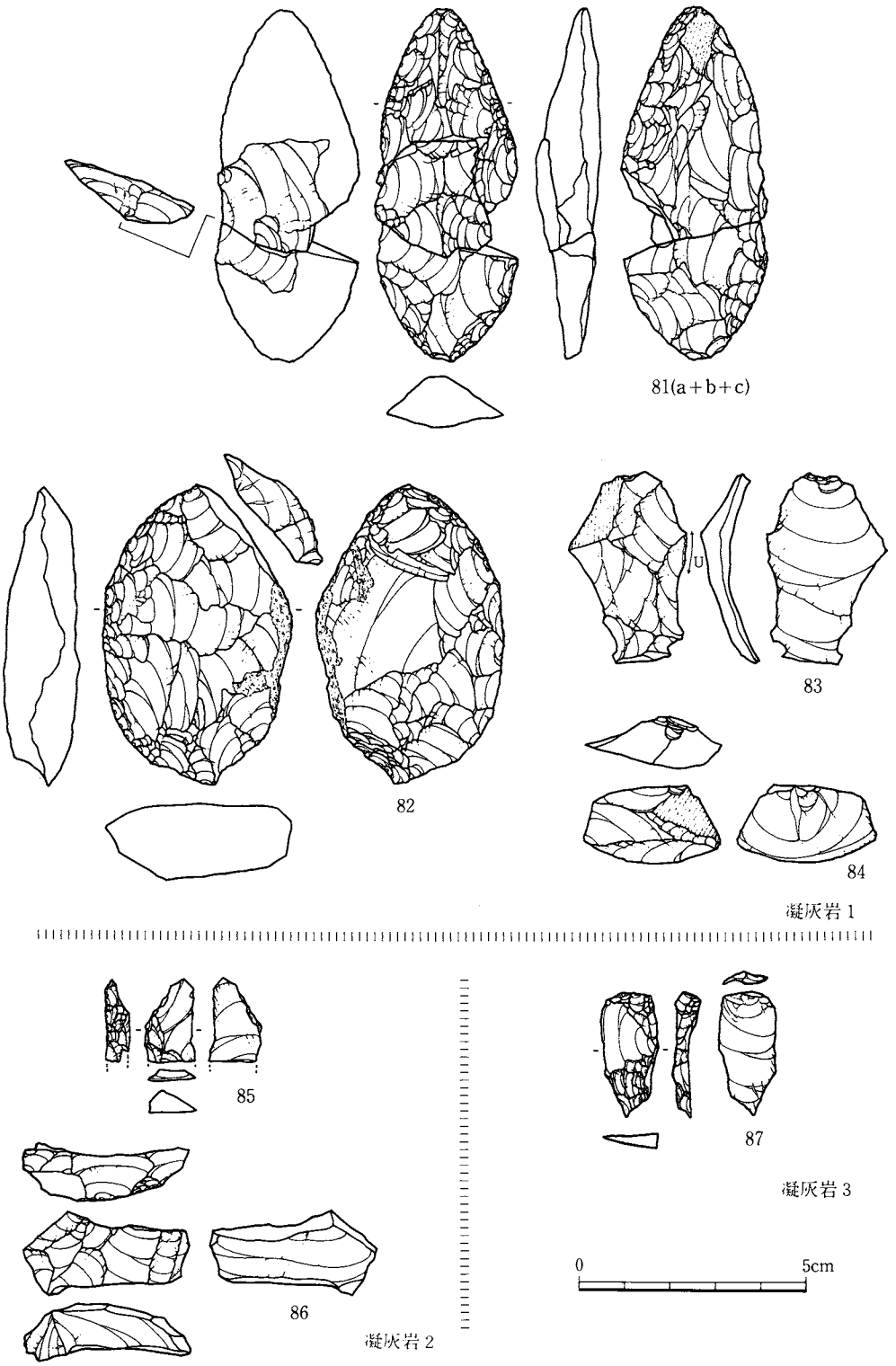
第167図　池花遺跡第3文化層出土石器(14)（2/3）

数は2点。いずれもIII 3ブロックの出土である。

79は尖頭部側を欠損する二側縁加工のナイフ形石器である。完形であっても78同様小型品であろうと思われる。左側縁のbluntingは腹面側から、右側縁のbluntingは背面側から施されている。また右側縁の一部には礫皮面をそのまま取り込んでいる。80は石刃である。両設打面。末端は底面に達している。小型のナイフ形石器の素材ともなるものであろうが、当遺跡には石器として搬入されたものであろう。右側縁には刃こぼれと考えられるごく微細な剝離痕が認められた。なお細粒凝灰岩製の遺物は全点図化した。

凝灰岩1（第168図、図版60）　若干褐色を帯びた淡緑色。石槍他一定量の調整剝片が出土しているが、すべてIII 1ブロック、とくにクラスターaに含まれていた。

2点の石槍未製品が含まれる。81は3点接合。折損した石槍未製品に調整剝片1点が接合した。石槍は半両面加工であり、概ね整形はなされている。接合した調整剝片は中央部の高まりを除去しようとして剝離されたものであろうが、意に反して大きく剝がれすぎたものと思われる。82も石槍未製品である。主要剝離面を一部残しており、まだ整形も充分進んでいない。背面左側縁には細かい調整痕が認められるが、右側縁には礫皮面を残し、また折断面も見られる。整形の初期段階では折断が重要な技法であったと思われる。83、84は調整剝片の例を示した。



第168図　池花遺跡第3文化層出土石器(15)（2/3）

いずれも調整があまり進まない段階のものであろう。83の背面右側縁には刃こぼれ状の細かい剝離痕が残されていた。

凝灰岩2（第168図、図版61）　黄白色～灰白色の流紋岩質凝灰岩である。量的には多くないが、全点III 3ブロックの出土である。

85はナイフ形石器の欠損品。尖頭部側だけ遺存している。刃潰し加工は腹面側からのみ施されている。86に示したのは石核(断片)である。石刃石核の頭部側だけが遺存したかのようであり、石刃状の剝離痕が外周に、打面部には打面調整痕が残されている。

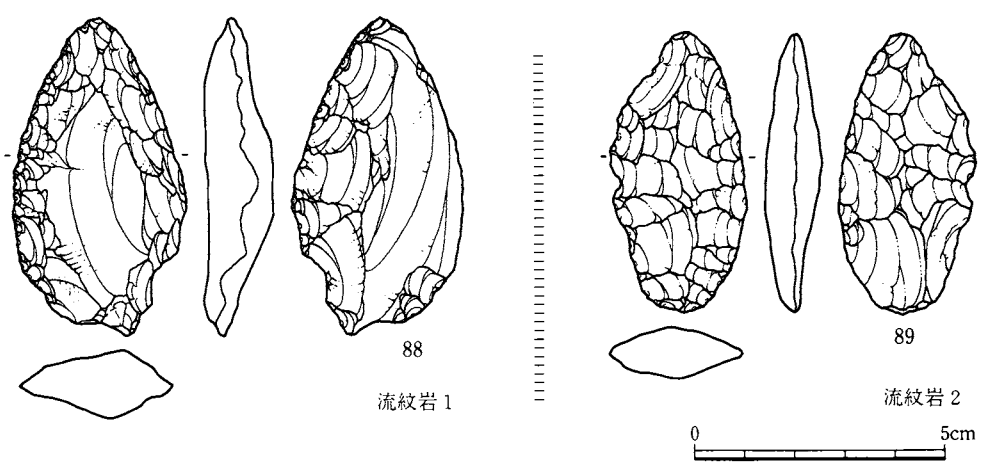
凝灰岩3（第168図、図版61）　黄白色の凝灰岩で、前2個体より珪質である。全体で3点のみの個体。III 3ブロックで2点、III 1ブロックで1点が出土した。87には剝片の例を示した。背面構成から90°打面転移が窺える。打面縁調整がさかんに行われている。

凝灰岩4　剝片1点のみの単体資料。III 3ブロック出土。実測図は掲載しなかった。

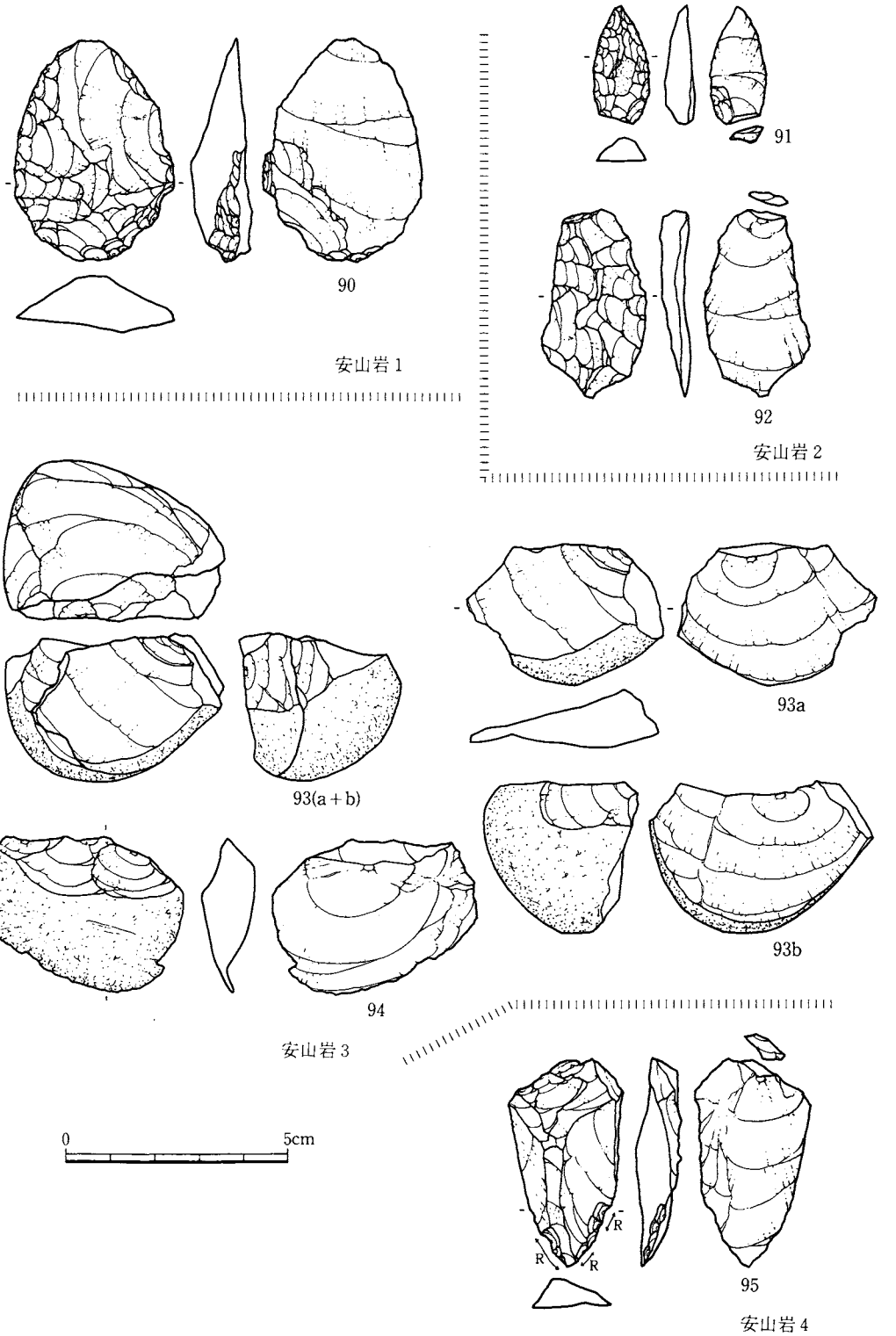
流紋岩1（第169図、図版61）　淡褐色。単体資料でIII 4ブロックから出土した。88は石槍未製品である。横長剝片素材で、腹面は打点側である左側縁に集中的に調整を加えて打瘤の除去を行っているが、まだ充分ではない。また尖頭部は鈍い。この個体は他に調整剝片等全く出土していないことから、粗く調整した段階で、素材として他遺跡から持ち込まれた可能性を考えなくてはならないであろう。

流紋岩2（第169図、図版61）　黄白色で風化のきわめて著しい石材である。前個体と同様単体資料で、III 4ブロックからの出土。89は石槍である。風化によって周縁部は円くなっており、稜線も場所によってははっきりしない。また微細な調整痕は読み取れなくなっている。両面加工で、黒曜石製の石槍に近い形状のものである。

安山岩1（第170図、図版61）　風化面暗褐色、新鮮な面は黒色の安山岩。総点数10点で、す



第169図　池花遺跡第3文化層出土石器(16)（2/3）



第170図　池花遺跡第 3 文化層出土石器(17)（2/3）

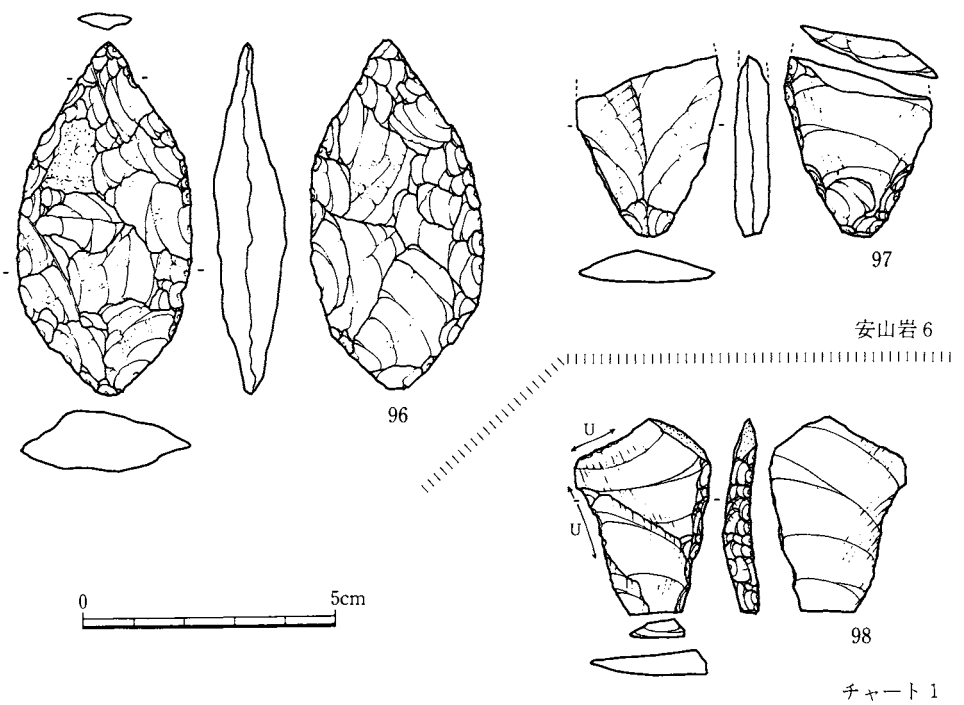
べてIII1bブロックから出土した。90は尖頭状の形態を意識された石器ではあろうが、石槍とするには先鋭な尖頭部を持たず、また先端が薄すぎる。ここでは下縁の急斜な調整を重視して、掻器または削器として考えておく。

安山岩2（第170図、図版61）　風化面はやや黄色みを帯びた暗褐色、新鮮な面は黒色の安山岩である。少量の個体でIII1ブロックからのみ出土した。91は片面加工の石槍である。当文化層最小の石槍で、基部に折断面が見られ、オパール製の多くの小型石槍と形状、特徴が全く同じと言える。92は石槍調整剝片である。

安山岩3（第170図、図版61）　風化面暗褐色～黒褐色、新鮮な面は黒色の安山岩。剝片、石核計3点だけの個体でいずれもIII5ブロックの出土である。93は石核と剝片の接合資料である。拳大よりもやや小さな円礫を用いていると思われ、打面と作業面を置換しながら剝離作業を進めている。94も同一母岩から剝ぎ取られた剝片である。より早い段階で生産されたものであるが、93とは接合しなかった。93a、94ともに二次的な加工痕や使用痕は認められなかった。

安山岩4（第170図、図版62）　風化面は黄色みを帯びた暗褐色、新鮮な面は黒色の安山岩。やはり3点だけの個体で、III5ブロックとIII8ブロックに分かれて出土した。95は一部に加工痕を有する剝片である。加工痕は末端だけに集中し、鋭い尖頭部を形成している。他に調整の跡を持たないが、石槍と同様の機能を持った石器であろう。

安山岩5　砕片1点だけの単体資料である。実測図は掲載しなかった。



第171図　池花遺跡第3文化層出土石器(18)（2/3）

安山岩6（第171図、図版62）　風化面黒褐色、新鮮な面は黒色の安山岩。石槍2点の他は少量の砕片がある。殆どがIII 8ブロックの出土である。96は両面加工の石槍である。調整は若干の粗さが見られるが、形態は比較的よく整えられている。表裏とも右側縁の調整により仕上げている。97も石槍と考えられる石器である。折損して基部側しか遺存していないため、全体が不詳であるが、背面にはあまり手を加えず、腹面の周縁を加工している。

安山岩7～9　それぞれ剝片または調整剝片(砕片)1点のみの単体資料である。実測図は掲載しなかった。

チャート1（第171図、図版62）　青黒色～青みを帯びた暗褐色のチャートである。ナイフ形石器が1点あり、当文化層唯一のチャート製の遺物である。III 3ブロックから出土した。

98は一側縁加工のナイフ形石器でやや傾斜した切出状の刃部を持っている。基部は素材の打点側を折断し、右側縁に急斜な刃潰し加工を施して略台形状にしている。折断や刃潰しを加えない縁辺は薄く鋭利であり、一部に刃こぼれ状の微細な剝離痕が見られる。尖頭部を有さないナイフ形石器として希少なもの。

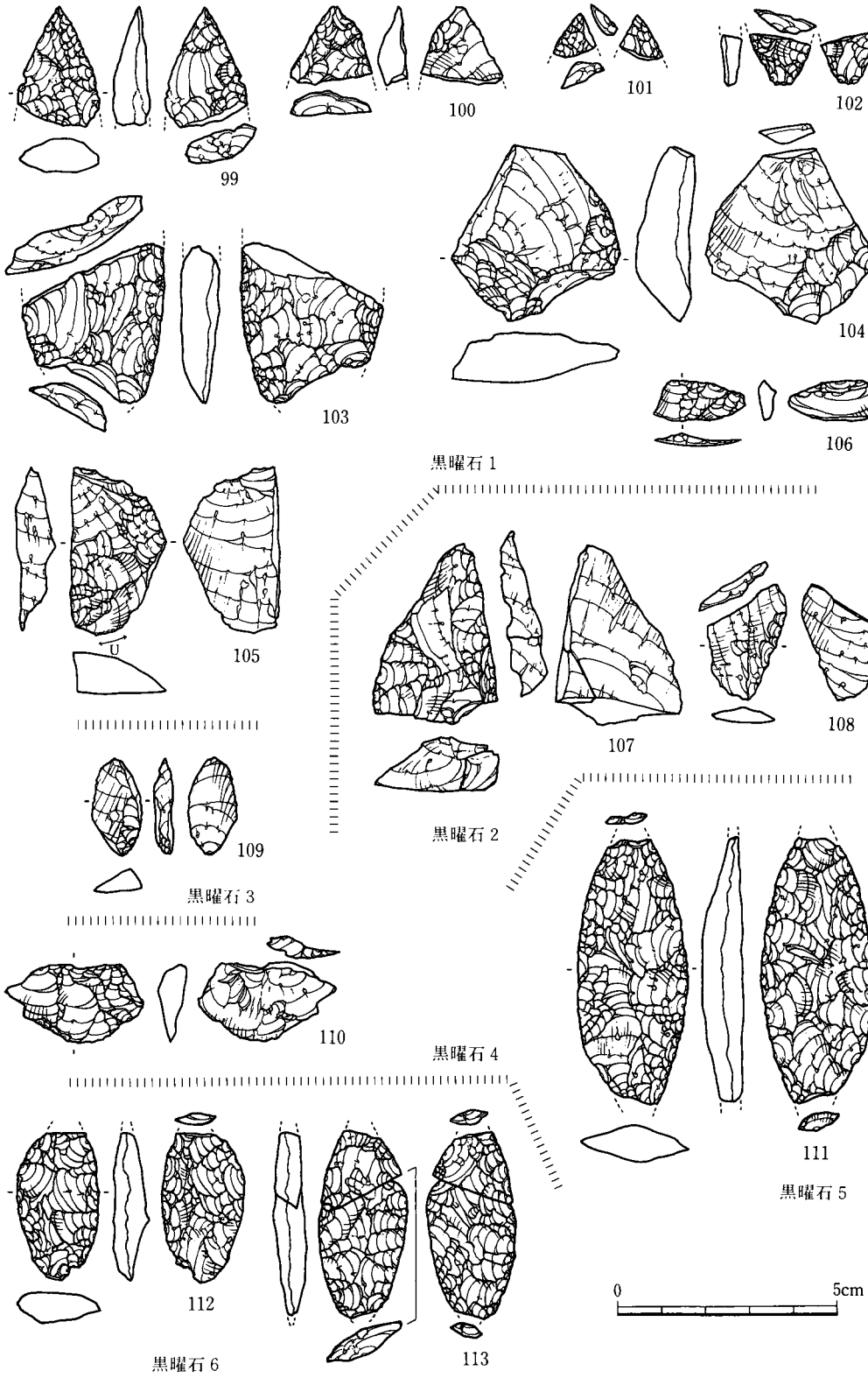
黒曜石1（第172図、図版62）　やや透明度の低い黒曜石で気泡などかなり多い。石槍等数点の石器の他、調整剝片も多い。III 1～III 4ブロックに分布、とくにIII 3、III 4ブロックに集中していた。

石槍が5点ある。いずれも欠損品で一部しか遺存しないものが多い。半両面加工と両面加工の二者があり、また両面加工と言っても表裏の判別がつくものがある。99～101は石槍の尖頭部と考えられる破片である。100が半両面加工。102は半両面加工の石槍基部破片である。端部は尖らず、僅かに水平に調整されている。103はやや大振りの石槍で、両端を折損している。加工は両面に施されるが、裏面の調整は表面に比べ平坦である。

104は台形に近い形状を呈する剝片で、背面右側縁の一部と下端に二次加工痕が認められる。削器と考えるべきであろうか。105は末端に僅かな刃こぼれが観察される剝片である。背面左側縁は折断面ではない。106は石槍調整剝片の例である。

黒曜石2（第172図、図版62）　透明度がなく、気泡、夾雑物が多く、粗悪な印象を与える黒曜石である。III 4ブロックに圧倒的に集中する。107は石槍未製品と考える。背面左側縁の一部に調整が加えられ、右側縁にも調整痕が窺えるが、成功しなかったものか。右側縁に砕片が接合している。108は頭部を欠損するが、背面、腹面とも右側縁に連続的な加工痕を有する剝片である。腹面の加工は細かく特徴的である。

黒曜石3（第172図、図版62）　黒みが少なく透明感のある黒曜石であるが、気泡がかなり目立つ。単体資料でIII 8ブロックからの出土である。109は小型の剝片で、僅かな加工痕を認めることができる。加工痕と見られる剝離は打点のすぐ脇の背面にあり、打面縁調整痕と見まがうものである。実際、打面縁調整痕がこの剝離に隣接してあり、主要剝離面に切られているが、



第172図　池花遺跡第３文化層出土石器(19)（2/3）

件の剝離は主要剝離面を切っている。この加工痕を基部調整と考えて、この石器をナイフ形石器とすることもできようか。

黒曜石4（第172図、図版63）　気泡、夾雑物の多い、やや粗悪な黒曜石で、III 1～4ブロックから多量の調整剝片を出土しているが、製品は遺跡内に留めていなかった。110は石槍調整剝片のひとつであるが、下縁の一部に二次的な剝離痕が観察され、刃こぼれ状のものと思われる。

黒曜石5（第172図、図版63）　若干気泡が目立つが、漆黒で当文化層の黒曜石の中では比較的良質なものである。石槍1点と調整剝片2点と少量しか出土しておらず、分布も分散的であった。111は上下両端を折損する石槍で、両面加工の整美なものである。表裏とも右側縁の調整によって仕上げている部分が多い。III 2ブロック出土。

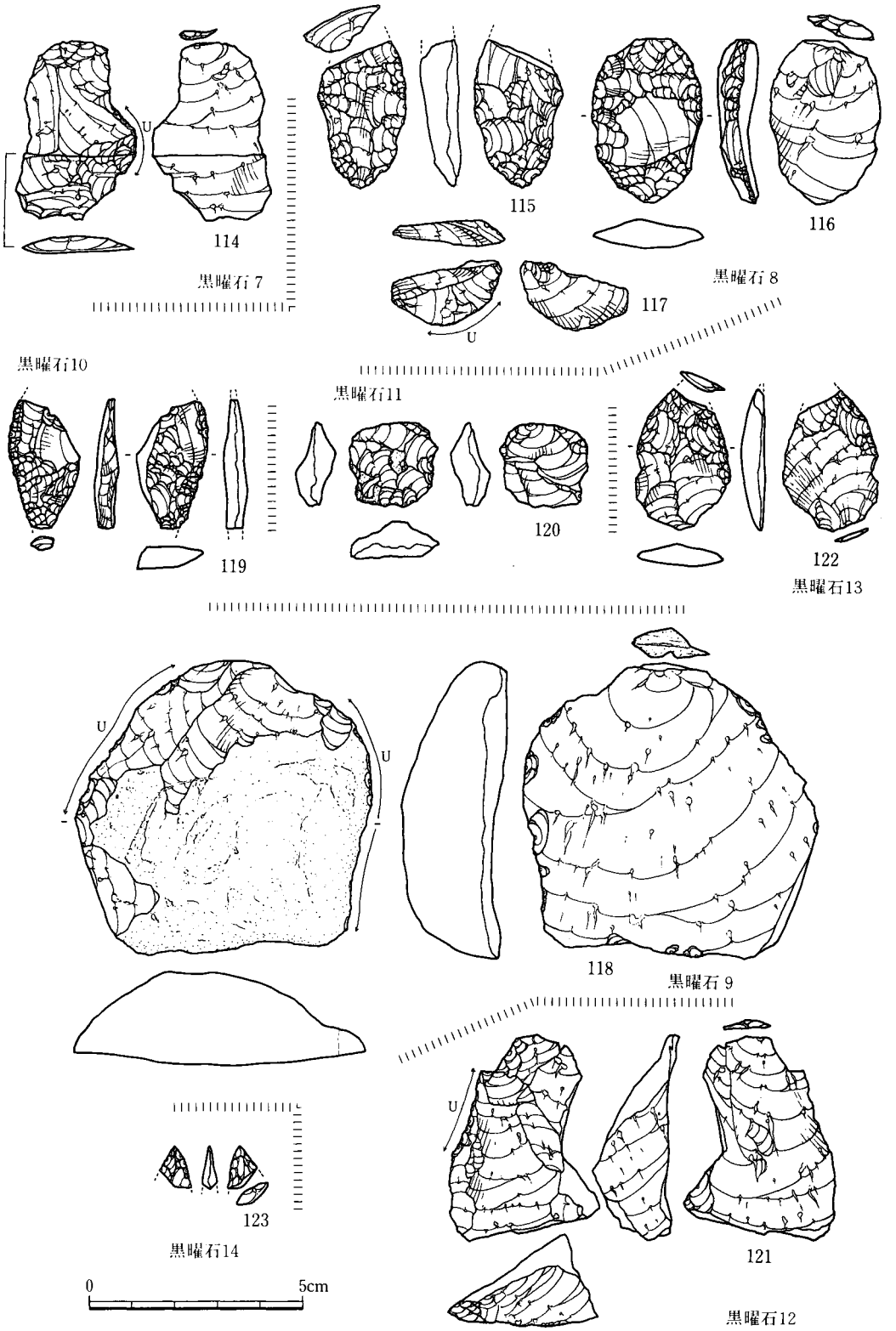
黒曜石6（第172図、図版63）　透明感があまりなく、やや褐色を帯びた白っぽさのある黒曜石である。石槍2点のみの個体。112、113ともに両面加工の石槍であり、基本的に111と同種でやや小型のものである。112は表面の、113は表裏ともに右側縁の調整で仕上げられている。黒曜石5、6の石槍は黒曜石1の石槍とは若干異なるが、個体による差は何を意味するものであろうか。112はIII 2ブロック、113はIII 3ブロックとIII 4ブロックにまたがって出土し、2片が接合した。

黒曜石7（第173図、図版63）　漆黒の黒曜石であるが、夾雑物が多く縞状の構造が見られ、それに沿って割れやすいものである。単体資料でIII 8ブロックの出土である。114は不定型の剝片で、やはり調整剝片に由来するものであるが、背面右側縁に二次的剝離痕が認められる。加工痕または使用痕と見られるが、その性格は不詳である。

黒曜石8（第173図、図版63）　透明感のない黒曜石で、やや白っぽさがある。また他の個体と同様、気泡が目立つものである。III 1、III 2ブロックから石器のみ3点を出土した。

115は尖頭部を欠損する石槍で、両面に加工が及ぶものである。しかし一部に主要剝離面を残しており、腹面の調整角は小さくstepを呈するに対し、背面の調整角は大きくflatである。したがって半両面加工品とするものである。116は削器である。楕円形を呈し、末端は尖頭部を形成するかのようではある。この形状は当然意識されたものであろう。調整は打面と背面右側縁にある折れ面部分を除きほぼ全周している。117は小型の剝片で、下縁の一部に刃こぼれ状の微細な剝離痕が認められる。

黒曜石9（第173図、図版63）　気泡、夾雑物の多い粗悪黒曜石である。単体資料でIII1bブロックから出土した。118は背面に礫皮面を大きく残す、円盤状の大型剝片である。当文化層では原礫あるいはそれに近い形で石核が持ち込まれていることは考えられず、遺跡内に限れば打面作出剝片等の意味は付与できまい。この剝片も何らかの素材として搬入されたものと思われる。しかしこの周縁には広く、使用痕と見られる細かい剝離痕が観察される。削器あるいはそれに類したものとして用いられた石器であろう。



第173図　池花遺跡第３文化層出土石器(20)（2/3）

黒曜石10（第173図、図版63）　気泡等が殆どない良質の黒曜石である。透明度も高い。当文化層の中ではやや異質な黒曜石で、単体資料。III 8 ブロック出土。119は石槍の基部(あるいは尖頭部？)破片で、背腹両面ともに加工は全面に及んではいない。背腹の調整には115と同様、flat flaking と step flaking の差があり、腹面の調整は打瘤の除去を主眼としたもので入念なものではなかったと言える。横長剝片素材である。

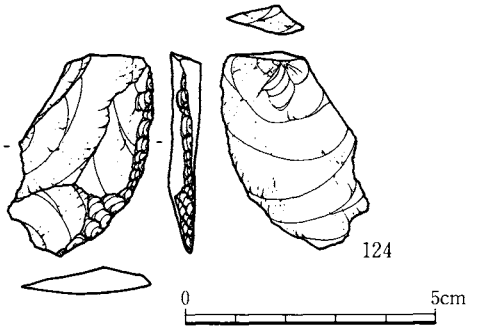
黒曜石11（第173図、図版63）　これも気泡等が殆どない良質の黒曜石であるが、透明度はきわめて低い。やはり単体資料で、III 6 ブロックから出土した。120は表面は 2 方から、裏面は 1 方からの顕著な剝離痕が見られる隅円方形を呈する石器である。削器あるいは掻器に類した石器とも思われるが、不詳である。

黒曜石12（第173図、図版63）　気泡が多い粗悪な石材である。この個体も単体資料で、III10ブロックから出土した。121は厚みのある剝片である。顕著な加工痕を認めることはできないが、背面左側縁には微細な刃こぼれ状の剝離痕が認められる。

黒曜石13（第173図、図版63）　やや気泡等が目立つものの比較的良質な黒曜石である。単体資料でIII 8 ブロックの出土である。122は、おそらく調整剝片に由来する薄手の素材に調整を施した石槍である。尖頭部を欠損する。調整が及ぶ範囲は尖頭部側に限られ、基部は全くの未加工である。まず背面を整えた後、腹面右側縁に調整を加えて仕上げている。

黒曜石14（第173図、図版63）　小さな調整剝片(砕片)等で個体識別不能のものを黒曜石14とした。III 3 、III 4 ブロックといった黒曜石を多く保有するブロックに当然ながら多数含まれることになった。これらの中に製品が 1 点だけ認められた。123の石槍尖頭部破片がそうであり、III 3 ブロックから出土した。両面加工品である。

当文化層からは、他に頁岩 4 個体、砂岩 5 個体、凝灰質砂岩 3 個体が出土している。礫あるいは砕片などで、図は掲載しなかった。また完全に同時期かどうかの判断はできないが、単独出土の遺物として F2－07区出土の安山岩製の削器がある(第174図－124)。最も近いIII 9 ブロックからでも50m以上離れた位置にあった。



第174図　池花遺跡第 3 文化層出土石器(21)（2/3）

第51表　池花遺跡第3文化層出土石器計測表 (1)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	石槍	E1-20-106	珪質頁岩	1	71.2	20.7	6.5	8.70	−	−	−
2	石槍	E1-12-104	珪質頁岩	1	58.2	20.1	8.5	6.10	−	−	−
3	石槍	E1-11-118	珪質頁岩	1	39.3	30.0	7.5	8.21	−	○	−
4	石槍	E1-61-103	珪質頁岩	1	29.5	30.2	7.5	4.86	−	○	−
5a	石槍	E1-42-115	珪質頁岩	1	41.9	24.9	5.3	3.77	−	−	−
5b	石槍調整剥片	E1-42-121	珪質頁岩	1	28.3	43.2	14.0	8.33	−	−	−
6	ナイフ形石器	D1-49-103	珪質頁岩	1	22.7	14.8	6.2	2.07	80°	○	−
7	削器	E1-12-113	珪質頁岩	1	16.7	40.3	4.0	2.16	38°	−	−
8	剥片	E1-22-102	珪質頁岩	1	50.6	21.5	7.3	3.95	−	−	−
9	石槍	E1-62-101	珪質頁岩	2	39.6	19.8	6.6	3.65	−	○	−
10	削器	E1-30-109	珪質頁岩	2	61.1	37.7	14.5	17.14	40°	−	○
11a	使用痕剥片	E1-61-105	珪質頁岩	2	33.2	22.1	4.6	2.62	−	−	○
11b	使用痕剥片	E1-61-102	珪質頁岩	2	33.4	29.1	4.3	2.80	−	−	○
12a	剥片	E1-81-102	珪質頁岩	2	86.4	35.7	16.9	30.44	−	−	−
12b	剥片	E2-40-17	珪質頁岩	2	62.3	32.6	13.0	21.30	−	−	−
12c	剥片	E2-51-28	珪質頁岩	2	62.8	42.7	18.0	33.43	−	−	−
13a	削器	E2-42-119	珪質頁岩	3	56.5	39.7	6.0	10.93	34°	−	−
13b	削器	E2-42-69,167	珪質頁岩	3	61.1	47.7	5.7	13.58	34°	−	−
13c	剥片	E2-42-151	珪質頁岩	3	36.5	38.4	7.1	7.50	−	−	−
14	剥片	E2-42-82	珪質頁岩	3	41.1	23.5	5.8	4.94	−	−	−
15	使用痕剥片	E2-42-89	珪質頁岩	5	41.6	23.9	9.7	9.98	−	−	○
16	石槍	E1-30-192	珪質頁岩	6	46.1	19.3	8.7	5.88	−	○	−
17	二次加工剥片	E1-20-110	珪質頁岩	8	51.5	46.5	7.0	11.49	56°	−	○
18	石槍	E1-71-121	珪質頁岩	9	43.4	17.8	7.8	5.59	−	−	−
19	削器	E1-11-104	珪質頁岩	10	21.2	36.3	6.6	4.49	34°	−	−
20	使用痕剥片	E2-42-38	珪質頁岩	12	22.8	21.8	4.0	1.40	−	−	○
21	剥片	E2-53-5	珪質頁岩	14	41.9	21.3	7.0	4.06	−	−	−
22	二次加工剥片	E2-42-1	珪質頁岩	16	46.4	22.7	5.5	3.80	62°	−	○
23	石槍	E1-71-133	珪質頁岩	11	73.6	30.9	9.7	21.40	−	○	−
24	掻器	E2-41-7,43	珪質頁岩	11	54.9	34.5	15.9	17.61	44°	−	−
25	削器	E1-71-123	珪質頁岩	11	29.8	18.8	3.9	1.29	50°	○	−
26	二次加工剥片	E2-51-12	珪質頁岩	11	98.4	50.1	14.5	42.35	58°	−	○
27	使用痕剥片	E2-42-88	珪質頁岩	11	35.8	31.7	5.2	4.11	−	−	○
28	使用痕剥片	E2-42-137	珪質頁岩	11	29.8	29.4	4.9	3.26	−	−	○
29	使用痕剥片	E1-12-110	珪質頁岩	11	25.4	23.0	4.0	1.68	−	−	○
30	使用痕剥片	E2-51-60	珪質頁岩	11	21.8	17.1	3.7	0.97	−	−	○
31	使用痕剥片	E2-42-84,86	珪質頁岩	11	38.7	37.2	8.5	8.78	−	−	○
32a	石槍調整剥片	E2-42-87	珪質頁岩	11	30.3	24.6	6.3	2.69	−	−	−
32b	石槍調整剥片	E2-42-127	珪質頁岩	11	39.2	31.1	4.2	2.99	−	−	−
33	石槍	E1-11-105 E1-12-108	珪質頁岩	13	75.6	24.5	9.7	12.77	−	−	−
34	石槍	E1-30-114	珪質頁岩	13	40.7	21.9	7.0	6.37	−	○	−
35	使用痕剥片	E1-31-108	珪質頁岩	13	25.8	27.2	2.6	1.46	−	−	○
36	石槍調整剥片	E1-12-122	珪質頁岩	13	27.1	31.7	5.0	4.03	−	−	−
37	石槍調整剥片	E1-02-1 E1-22-101	珪質頁岩	13	37.6	43.2	6.5	7.83	−	−	−
38	石槍	E1-02-115,116	珪質頁岩	15	69.6	21.3	9.6	10.19	−	−	−

第52表　池花遺跡第３文化層出土石器計測表 (2)

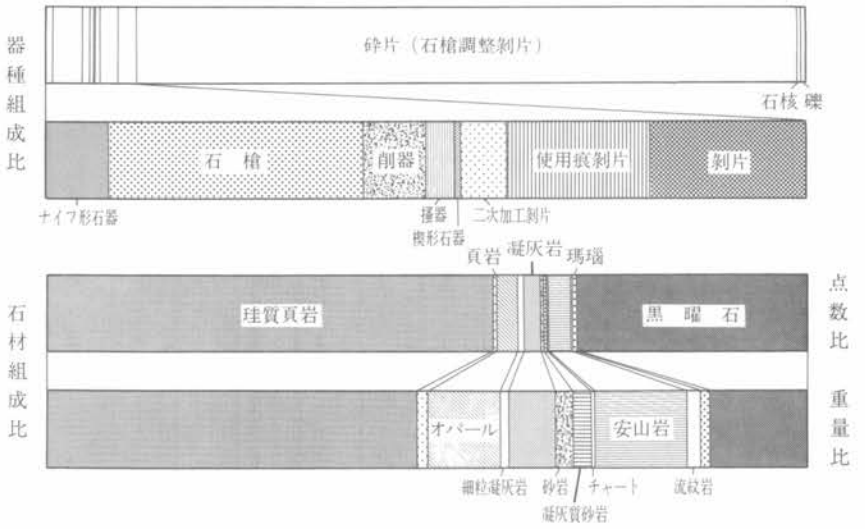
挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
39	二次加工剥片	E1-30-117	珪質頁岩	15	26.1	14.8	3.7	0.93	38°	－	－
40	使用痕剥片	E1-42-109	珪質頁岩	15	16.6	29.9	4.0	1.68	－	－	○
41	石槍	E1-83-104	珪質頁岩	17	65.7	19.8	12.5	12.53	－	－	－
42	石槍	E2-01-110	珪質頁岩	19	41.2	17.7	7.7	5.26	－	○	－
43	石槍	E1-83-112	珪質頁岩	19	50.4	22.0	7.0	8.34	－	○	－
44	削器	E1-71-113	珪質頁岩	20	31.3	17.5	5.0	2.11	40°	－	－
45a	石槍	E1-13-101	珪質頁岩	21	61.7	45.0	10.8	37.35	－	－	－
45b	石槍	E1-12-107	珪質頁岩	21	32.3	31.5	10.0	7.65	－	－	－
46	石槍	E1-30-116,174	珪質頁岩	22	68.5	24.4	11.2	13.21	－	－	－
47	使用痕剥片	E1-42-153	珪質頁岩	23	33.9	15.4	3.5	1.37	－	－	○
48	剥片	E1-31-107	珪質頁岩	24	63.6	33.3	8.5	10.40	－	－	－
49a	剥片	E1-41-105	珪質頁岩	25	27.8	27.6	7.8	6.10	－	－	－
49b	剥片	E1-41-107	珪質頁岩	25	28.5	23.7	6.2	3.80	－	－	－
50	石槍	E1-20-31	珪質頁岩	26	29.3	47.8	16.5	17.05	－	○	－
51	使用痕剥片	E1-20-103	珪質頁岩	26	26.3	21.2	4.5	1.82	－	－	○
52a	剥片	E1-41-115	珪質頁岩	30	29.3	32.7	9.7	4.84	－	－	－
52b	剥片	E1-42-103	珪質頁岩	30	31.6	40.7	7.2	7.68	－	－	－
52c	剥片	E1-42-226	珪質頁岩	30	33.2	36.9	6.6	7.19	－	－	－
53	削器	E1-31-103	珪質頁岩	35	61.1	38.2	14.0	22.87	56°	－	－
54a	石槍調整剥片	E1-41-296	珪質頁岩	31	18.2	11.0	5.1	0.86	－	－	－
54b	石槍	E1-41-109	珪質頁岩	31	34.5	44.9	7.6	18.45	－	○	－
55	ナイフ形石器	E1-71-101	オパール	1	24.0	12.1	3.7	1.47	50°	○	－
56	削器	E1-71-111	オパール	1	81.4	44.4	10.0	36.57	34°	－	○
57	削器	E1-71-104	オパール	1	37.0	32.3	5.5	4.08	52°	－	－
58a	使用痕剥片	E1-71-132	オパール	1	27.4	24.0	5.8	3.27	－	－	○
58b	掻器	E1-71-126	オパール	1	28.1	29.1	8.2	5.10	38°	－	○
59	石槍	E1-81-105	オパール	2	36.7	17.4	5.5	3.63	－	－	－
60	使用痕剥片	E1-83-105	オパール	2	48.8	36.0	9.7	14.16	－	－	○
61	石核	E1-83-111	オパール	2	27.8	35.1	22.0	27.23	－	－	－
62	掻器	E1-81-104	オパール	3	29.8	25.7	11.1	9.66	60°	－	－
63	剥片	E1-71-122	オパール	3	23.4	18.5	3.7	1.35	－	－	－
64	掻器	E2-41-20	オパール	4	21.1	19.4	9.5	3.29	60°	－	－
65	掻器	E2-41-49	オパール	4	33.6	37.5	15.2	12.73	44°	－	－
66	使用痕剥片	E1-83-103	オパール	5	28.3	40.0	7.6	6.03	－	－	○
67	石槍	E1-83-110	オパール	6	35.9	26.3	8.0	6.62	－	－	－
68	石槍	E2-51-23	オパール	7	37.0	19.7	9.6	4.88	－	－	－
69	石槍	E1-83-108	オパール	7	36.4	16.8	6.5	3.72	－	－	－
70	石槍（未成品）	E1-81-106	オパール	7	34.6	22.6	11.5	8.33	－	－	－
71	石核	E2-35-20	瑪瑙	1	31.0	34.6	14.5	12.85	－	－	○
72	ナイフ形石器	E2-40-12	瑪瑙	2	35.7	15.9	5.0	2.61	46°	○	○
73	ナイフ形石器	E1-30-189	細粒凝灰岩	1	39.8	16.1	4.9	2.66	38°	－	○
74	ナイフ形石器	E1-30-113	細粒凝灰岩	1	31.6	11.0	5.8	2.16	54°	－	－
75	ナイフ形石器	E1-30-115	細粒凝灰岩	1	23.6	14.4	4.9	1.41	38°	○	－
76	剥片	E1-30-102	細粒凝灰岩	1	20.4	33.0	10.5	6.02	－	－	－
77	ナイフ形石器	D1-39-101	細粒凝灰岩	2	13.9	15.3	5.5	1.60	30°	－	－
78	ナイフ形石器	D1-29-206	細粒凝灰岩	2	23.5	10.0	3.6	0.61	30°	○	－
79	ナイフ形石器	D1-29-208	細粒凝灰岩	3	18.9	8.9	5.0	0.70	36°	○	－

第53表　池花遺跡第３文化層出土石器計測表 (3)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
80	使用痕剥片	E1-30-162	細粒凝灰岩	3	45.6	21.3	11.0	5.14	–	–	○
81a	石槍調整剥片	E1-03-103	凝灰岩	1	27.5	26.9	6.2	3.78	–	–	–
81b	石槍	E1-03-101	凝灰岩	1	53.2	31.7	12.0	16.80	–	–	–
81c	石槍	E1-02-114	凝灰岩	1	27.3	31.3	10.0	6.58	–	–	–
82	石槍（未成品）	E1-03-109	凝灰岩	1	66.0	41.1	17.0	46.72	–	–	–
83	使用痕剥片	E1-03-104	凝灰岩	1	40.6	25.1	11.0	4.53	–	–	○
84	石槍調整剥片	E1-02-114	凝灰岩	1	16.6	30.1	8.8	3.88	–	–	–
85	ナイフ形石器	D1-29-202	凝灰岩	2	18.4	11.5	5.4	0.94	30°	○	–
86	石核	E1-30-133	凝灰岩	2	17.9	36.0	10.2	7.16	–	–	–
87	剥片	E1-30-194	凝灰岩	3	27.9	13.5	6.0	1.32	–	–	–
88	石槍（未成品）	E1-42-122	流紋岩	1	62.6	34.7	14.1	22.32	–	–	–
89	石槍	E1-31-102	流紋岩	2	55.3	27.3	10.9	11.27	–	–	–
90	削器	E1-12-121	安山岩	1	51.0	36.6	12.7	19.86	46°	–	–
91	石槍	E1-01-103	安山岩	2	27.1	13.2	6.8	2.47	–	–	–
92	石槍調整剥片	E1-01-16	安山岩	2	41.4	24.3	5.6	4.50	–	–	–
93a	剥片	D1-58-101	安山岩	3	31.6	45.3	11.0	16.31	–	–	–
93b	石核	D1-58-104	安山岩	3	34.1	49.9	33.1	59.17	–	–	–
94	剥片	D1-58-103	安山岩	3	33.4	46.3	13.5	17.73	–	–	–
95	二次加工剥片	D1-48-101	安山岩	4	46.5	26.5	10.5	9.80	66°	–	○
96	石槍	E1-01-105	安山岩	6	69.8	34.7	13.0	27.59	–	–	–
97	石槍	E2-01-2	安山岩	6	32.1	30.5	6.0	6.79	–	○	–
98	ナイフ形石器	D1-29-205	チャート	1	39.7	27.6	7.5	5.65	26°	–	○
99	石槍	E1-42-113	黒曜石	1	27.1	19.2	8.1	3.29	–	○	–
100	石槍	E1-02-117	黒曜石	1	18.1	18.1	5.9	1.48	–	○	–
101	石槍	E1-42-132	黒曜石	1	11.7	9.9	3.8	0.26	–	○	–
102	石槍	D2-49-1	黒曜石	1	11.2	13.8	4.7	0.54	–	○	–
103	石槍	E1-41-112	黒曜石	1	32.4	37.7	9.0	8.14	–	○	–
104	二次加工剥片	E1-10-109	黒曜石	1	39.7	39.2	11.7	14.06	44°	–	–
105	使用痕剥片	E1-41-116	黒曜石	1	37.8	23.4	9.8	7.11	–	–	○
106	石槍調整剥片	E1-30-106	黒曜石	1	9.6	20.1	4.4	0.66	–	–	–
107	石槍（未成品）	E1-42-129,131	黒曜石	2	41.1	27.2	13.4	9.49	–	–	–
108	二次加工剥片	E1-03-105	黒曜石	2	25.1	17.9	4.0	1.04	42°	–	–
109	二次加工剥片	E2-11-101	黒曜石	3	21.5	11.0	5.1	0.83	–	–	–
110	使用痕剥片	E1-13-102	黒曜石	4	18.0	30.5	5.9	2.40	–	–	○
111	石槍	E1-11-101	黒曜石	5	60.6	26.4	8.5	13.02	–	○	–
112	石槍	E1-10-104	黒曜石	6	32.9	19.2	7.5	4.63	–	○	–
113	石槍	E1-40-101 E1-32-103	黒曜石	6	41.5	20.4	6.5	5.36	–	○	–
114	使用痕剥片	E2-01-107	黒曜石	7	42.2	30.0	4.5	4.89	–	–	○
115	石槍	E1-10-116	黒曜石	8	34.8	20.9	8.8	5.21	–	○	–
116	削器	E1-02-105	黒曜石	8	39.1	26.4	9.1	8.00	48°	–	–
117	使用痕剥片	E1-10-103	黒曜石	8	27.3	13.5	5.9	1.38	–	–	○
118	使用痕剥片	E1-11-117	黒曜石	9	72.5	68.7	21.2	24.00	–	–	○
119	石槍	E2-00-101	黒曜石	10	29.3	16.5	4.8	2.17	–	○	–
120	二次加工剥片	E1-81-108	黒曜石	11	19.6	21.3	8.0	2.66	–	–	–
121	使用痕剥片	E2-53-10	黒曜石	12	44.9	34.9	19.1	17.97	–	–	○
122	石槍（未成品）	E2-02-101	黒曜石	13	32.6	22.5	5.4	3.41	–	○	–
123	石槍	E1-30-182	黒曜石	14	9.1	7.8	3.6	0.14	–	○	–

第54表　池花遺跡第３文化層出土石器計測表（4）

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角 調整角	欠損	使用痕
124	削器	F2-07-43	安山岩	－	40.1	30.2	5.9	5.80	40°	－	－



第175図　池花遺跡第３文化層出土石器組成

④母岩別資料の分布と遺跡の構成

当文化層に属するブロックは相互に関連性を有していることは当初述べた。ここではそれを具体的に明らかにするために、母岩別資料(個体別資料)の分布、接合関係を検討し、遺跡全体の構成や性格、またブロック毎の性格などを抽出したい。

全体を概括的に見れば、近接して存在するブロック群としてⅢ１～Ⅲ４ブロック、Ⅲ６・Ⅲ７ブロックといったグループがあるが、視覚的に捉えられるかかるグループ内においてはやはり共有母岩も目立っている。とくにⅢ１～Ⅲ４ブロックと他とは黒曜石、凝灰岩の消費とオパールの保有の有無において明瞭に分割される。まずこのように予見されるグループのうち、Ⅲ１～Ⅲ４ブロックについて見てみよう。

Ⅲ１～Ⅲ４ブロックに主体的に分布する主要な個体を列挙すれば次のようになる。

珪質頁岩１、13・15、凝灰岩及び細粒凝灰岩全個体、安山岩１、２、黒曜石１、２、４

ここではⅢ６・Ⅲ７・Ⅲ10ブロックに多く含まれるオパールが全く存在しない。また逆にⅢ６～Ⅲ10ブロックに全く含まれないか、あっても少量の凝灰岩や黒曜石が、Ⅲ１～Ⅲ４ブロックでは中心的な石材の一つとして用いられている点が大きな特徴と言える。

第55表　池花遺跡第３文化層出土石器組成表(1)

	石　槍	ナイフ形石器	削　器	掻　器	楔　形石　器	二次加工剥片	使用痕剥　片	剥　片	調整剥片（砕片）	石　核	礫	計	総重量ｇ
珪質頁岩 1	5	1	1	−	−	−	−	1	88	−	−	96	91.55
珪質頁岩 2	1	−	1	−	−	−	2	3	3	−	−	10	116.37
珪質頁岩 3	−	−	1	−	−	−	−	1	8	−	−	10	43.59
珪質頁岩 4	−	−	−	−	−	−	−	−	7	−	−	7	6.59
珪質頁岩 5	−	−	−	−	−	−	1	−	18	−	−	19	20.03
珪質頁岩 6	1	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	4	7.87
珪質頁岩 7	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	2	3.41
珪質頁岩 8	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	11.49
珪質頁岩 9	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	5.59
珪質頁岩 10	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	4.49
珪質頁岩 11	1	−	1	1	−	1	6	−	44	−	−	54	156.95
珪質頁岩 12	−	−	−	−	−	−	1	−	35	−	−	36	36.30
珪質頁岩 13	2	−	−	−	−	−	1	1	18	−	−	22	49.54
珪質頁岩 14	−	−	−	−	−	−	−	1	9	−	−	10	19.32
珪質頁岩 15	1	−	−	−	−	1	1	−	6	−	−	9	18.84
珪質頁岩 16	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	3.80
珪質頁岩 17	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	12.53
珪質頁岩 18	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	4	9.06
珪質頁岩 19	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	13.60
珪質頁岩 20	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2.11
珪質頁岩 21	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	52.65
珪質頁岩 22	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	13.21
珪質頁岩 23	−	−	−	−	−	−	1	−	3	−	−	4	5.24
珪質頁岩 24	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	10.40
珪質頁岩 25	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	4	15.83
珪質頁岩 26	1	−	−	−	−	−	1	−	3	−	−	5	20.54
珪質頁岩 27	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	2	2.70
珪質頁岩 28	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	3.33
珪質頁岩 29	−	−	−	−	−	−	−	−	6	−	−	6	7.47
珪質頁岩 30	−	−	−	−	−	−	−	3	7	−	−	10	39.63
珪質頁岩 31	1	−	−	−	−	−	−	−	28	−	−	29	26.51
珪質頁岩 32	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	3	3.43
珪質頁岩 33	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2	13.13
珪質頁岩 34	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	4.75
珪質頁岩 35	−	−	1	0	−	−	−	−	−	−	−	1	22.87
珪質頁岩 36	−	−	−	−	−	−	−	−	293	−	−	293	38.66
オパール 1	−	1	2	1	−	−	1	1	7	−	−	13	74.52
オパール 2	1	−	−	−	−	−	1	−	3	1	−	6	51.39
オパール 3	−	−	−	1	−	−	−	1	1	−	−	3	11.20
オパール 4	−	−	−	2	−	−	−	−	1	−	−	3	16.38
オパール 5	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	1	6.03
オパール 6	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	6.62
オパール 7	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	16.93
瑪瑙 1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	2	18.28
瑪瑙 2	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2.61
瑪瑙 3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	1.05

第56表　池花遺跡第３文化層出土石器組成表(2)

	石槍	ナイフ形石器	削器	掻器	楔形石器	二次加工剥片	使用痕剥片	剥片	調整剥片(砕片)	石核	礫	計	総重量g
細粒凝灰岩 1	－	3	－	－	－	－	－	1	0	－	－	4	12.25
細粒凝灰岩 2	－	2	－	－	－	－	－	－	1	－	－	3	2.56
細粒凝灰岩 3	－	1	－	－	－	－	1	－	－	－	－	2	5.84
凝灰岩 1	2	－	－	－	－	－	1	－	11	－	－	14	93.88
凝灰岩 2	－	1	－	－	－	－	－	1	3	1	－	6	9.38
凝灰岩 3	－	－	－	－	－	－	－	1	2	－	－	3	1.83
凝灰岩 4	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	9.25
流紋岩 1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	22.32
流紋岩 2	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	11.27
安山岩 1	－	－	1	－	－	－	－	－	9	－	－	10	44.27
安山岩 2	1	－	－	－	－	－	－	1	3	－	－	5	9.14
安山岩 3	－	－	－	－	－	－	－	2	－	1	－	3	93.21
安山岩 4	－	－	－	－	－	1	－	－	2	－	－	3	13.65
安山岩 5	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	3.24
安山岩 6	2	－	－	－	－	－	－	－	6	－	－	8	56.49
安山岩 7	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	1.80
安山岩 8	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	0.05
安山岩 9	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	10.12
チャート 1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	5.65
黒曜石 1	5	－	－	－	－	1	1	－	27	－	－	34	59.12
黒曜石 2	1	－	－	－	－	1	－	－	18	－	－	20	19.39
黒曜石 3	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	1	0.83
黒曜石 4	－	－	－	－	－	－	1	－	74	－	－	75	51.00
黒曜石 5	1	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	3	16.11
黒曜石 6	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	11.40
黒曜石 7	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	1	4.89
黒曜石 8	1	－	1	－	－	－	1	－	－	－	－	3	14.59
黒曜石 9	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	1	24.00
黒曜石 10	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	2.17
黒曜石 11	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	1	2.66
黒曜石 12	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	1	17.97
黒曜石 13	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	3.41
黒曜石 14	1	－	－	－	－	－	－	－	199	－	－	200	14.03
頁岩 1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	5.23
頁岩 2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	18.43
頁岩 3	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	2.52
頁岩 4	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	2	0.10
砂岩 1	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	7.26
砂岩 2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	11.06
砂岩 3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	1.83
砂岩 4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	23.99
砂岩 5	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	1	1.05
凝灰質砂岩 1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	4.73
凝灰質砂岩 2	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	2	40.13
凝灰質砂岩 3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	2	1.64

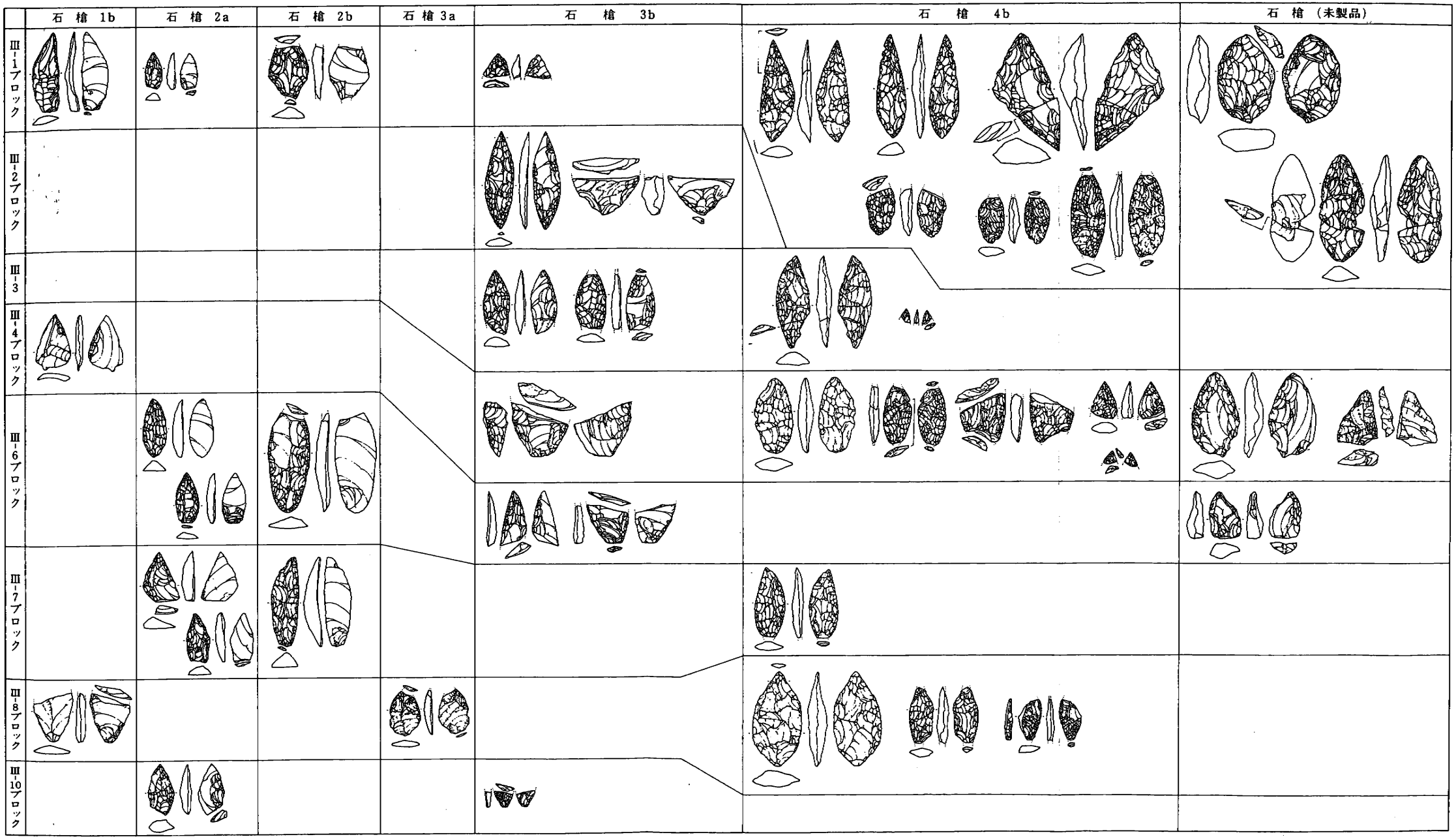
第57表　池花遺跡第３文化層出土石器組成表(3)

	石槍	ナイフ形石器	削器	掻器	楔形石器	二次加工剥片	使用痕剥片	剥片	調整剥片(砕片)	石核	礫	計	総重量g
珪質頁岩計	19	1	7	1	−	4	14	14	595	−	−	655	913.38
オパール計	5	1	2	4	−	−	3	2	12	1	−	30	183.07
瑪瑙計	−	1	−	−	−	−	−	−	2	1	−	4	21.94
細粒凝灰岩計	−	6	−	−	−	−	1	1	1	−	−	9	20.65
凝灰岩計	2	1	−	−	−	−	1	3	16	1	−	24	114.34
流紋岩計	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	33.59
安山岩計	3	−	1	−	−	1	−	4	23	1	−	33	231.97
チャート計	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	5.65
黒曜石計	13	−	1	−	1	3	6	−	320	−	−	344	241.57
頁岩計	−	−	−	−	−	−	−	−	3	1	1	5	26.28
砂岩計	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	3	5	45.19
凝灰質砂岩計	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	3	5	46.50
総計	44	11	11	5	1	8	25	27	973	5	7	1117	1884.13
百分率	3.9	1.0	1.0	0.4	0.1	0.7	2.2	2.4	87.1	0.4	0.6	99.8	

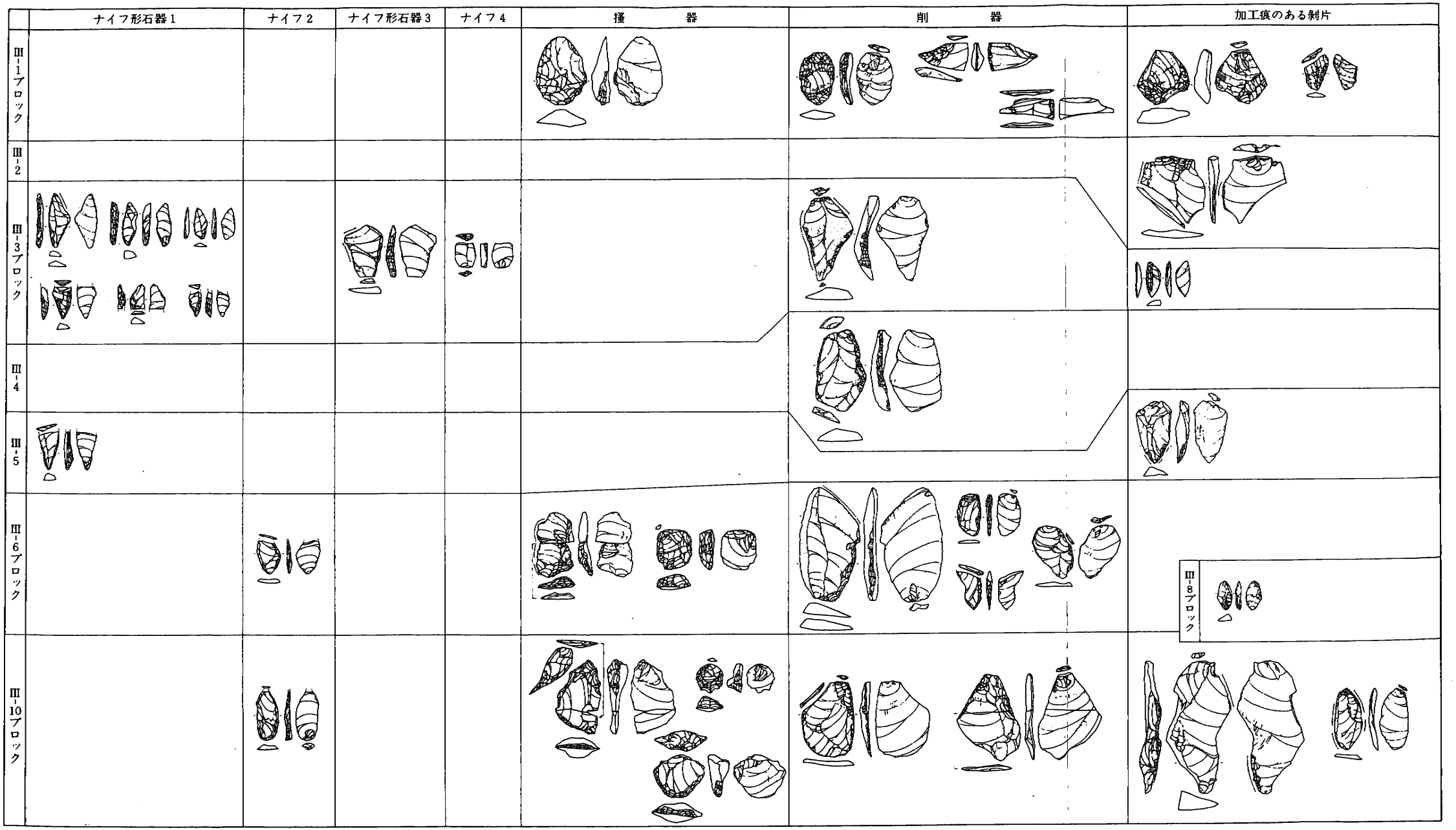
凝灰岩１はIII１ブロックで消費され、石槍の調整剥片と石槍未製品２点が出土している。凝灰岩の他の個体は少量ずつしか存在しないが、分布するのはIII１ブロックとIII３ブロックのみである。黒曜石については、黒曜石１、２、４が量的に多く、III１～４ブロック全体に分布するが、黒曜石１、２はIII４ブロックを中心に、黒曜石４はIII３ブロックを中心に石器製作が行われ、その製品が他のブロックにも存在するという傾向を見せる。黒曜石の他の個体は単体の石器あるいはそれに準ずる在り方で各ブロックに広く分布する。珪質頁岩については、III１～４ブロックで石器の生産が行われている個体として、珪質頁岩１、13、30が挙げられる。珪質頁岩１はIII４ブロックで集中的に消費されているが、生産された石器はIII１、III２ブロックの他、III５、III６ブロックにも保有されていた。珪質頁岩30もIII４ブロックに調整剥片が多く残されている。石槍とした石器が存在したが、これはおそらくブランクとして搬入されたものの残欠で、生産された石槍は他に持ち出されている。珪質頁岩13はIII１ブロックで石器生産が行われ、生産された石器はIII３、III４ブロックにも保有されていた。

以上のようにIII１～４ブロックでは、個体によって場を変えながら、主としてIII１ブロックとIII４ブロックで石器を生産し、そこで生産された石器はほぼIII１～４ブロックの範囲内に拡散して分布するという傾向を見せた。ここでは各ブロックの密接な関係と他からの相対的な独立性は明らかである。

同じように近接して検出されたブロックにIII６、III７ブロックがある。この２つのブロックは遺物点数自体少なく、集中的に石器を生産した形跡は顕著には残されていない。これらの中で特徴的な石材として保有されるのがオパールである。石槍を含まないオパール１の量がやや多く、III６ブロックに集中している。他の個体は少量ずつ分散する傾向が認められ、石器単体



第176図　池花遺跡第３文化層主要石器組成(1)



第177図　池花遺跡第3文化層主要石器組成(2)

第58表　池花遺跡第3文化層母岩別資料ブロック別分布(1)

個体番号	Ⅲ1aブロック 点数	石槍	他	Ⅲ1bブロック 点数	石槍	他	Ⅲ2ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ3ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ4ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ5ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ6ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ7ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ8ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ9ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ10ブロック 点数	石槍	他
珪質頁岩1	−	−	−	7	1	1	1	1	−	1	−	−	82	1	−	1	−	1	4	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	1	−	−	−	−	−	6	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−
珪質頁岩3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	11	−	2
珪質頁岩4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	6	−	−
珪質頁岩5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	7	−	−	11	−	1
珪質頁岩6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩8	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩9	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩10	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩11	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	1	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	45	−	6
珪質頁岩12	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	32	−	1
珪質頁岩13	1	−	−	15	1	−	−	−	−	2	1	−	3	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩14	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	9	−	−
珪質頁岩15	2	1	−	4	−	−	1	−	−	1	−	1	1	−	1	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩16	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
珪質頁岩17	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩18	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−
珪質頁岩19	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩20	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩21	①	①	−	①	①	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩22	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩23	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩24	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩25	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩26	−	−	−	−	−	−	2	1	1	3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩27	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩28	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩29	−	−	−	1	−	−	−	−	−	4	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩30	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	9	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩31	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	30	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩32	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩33	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩34	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩35	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
珪質頁岩36	2	−	−	−	−	−	−	−	−	4	−	−	203	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	13	−	−	68	−	−
オパール1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	12	−	5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
オパール2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	1	−	3	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
オパール3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−
オパール4	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	2
オパール5	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−
オパール6	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
オパール7	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	1	1	−	−	−	−	−	−	1	1	−
瑪瑙1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−
瑪瑙2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1
瑪瑙3	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−

※点数はすべての器種を含む総点数である。「石槍」欄は総点数のうち石槍点数，「他」欄はナイフ形石器，掻器，削器，加工痕及び使用痕を残す剥片の合計点数である。珪質頁岩36は識別不能の珪質頁岩をまとめたもの。

第59表　池花遺跡第３文化層母岩別資料ブロック別分布(2)

個体番号	Ⅲ1aブロック 点数	石槍	他	Ⅲ1bブロック 点数	石槍	他	Ⅲ2ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ3ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ4ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ5ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ6ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ7ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ8ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ9ブロック 点数	石槍	他	Ⅲ10ブロック 点数	石槍	他
細粒凝灰岩1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
細粒凝灰岩2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
細粒凝灰岩3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
凝灰岩1	13	2	1	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
凝灰岩2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
凝灰岩3	1	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
凝灰岩4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
流紋岩1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
流紋岩2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
安山岩1	－	－	－	10	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
安山岩2	－	－	－	5	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
安山岩3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
安山岩4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	1	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－
安山岩5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
安山岩6	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	7	2	－	－	－	－	－	－	－
安山岩7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
安山岩8	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
安山岩9	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
チャート1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
黒曜石1	2	－	1	1	－	－	2	－	1	4	－	－	24	3	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－
黒曜石2	1	－	1	1	－	－	1	－	－	2	－	－	14	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－
黒曜石3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－
黒曜石4	5	－	1	1	－	－	19	－	－	43	－	－	7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
黒曜石5	－	－	－	1	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
黒曜石6	－	－	－	－	－	－	1	1	－	①	①	－	①	①	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
黒曜石7	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－
黒曜石8	1	－	1	－	－	－	2	1	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
黒曜石9	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
黒曜石10	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－
黒曜石11	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
黒曜石12	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	1
黒曜石13	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－
黒曜石14	2	－	－	1	－	－	5	－	－	50	1	－	127	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6	－	－
頁岩1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
頁岩2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
頁岩3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
頁岩4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
砂岩1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
砂岩2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
砂岩3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
砂岩4	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
砂岩5	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－
凝灰質砂岩1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
凝灰質砂岩2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
凝灰質砂岩3	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
合　計	55	5	5	34	4	5	36	5	4	140	5	10	525	9	5	19	－	2	45	6	10	9	4	2	16	5	2	23	－	－	209	2	16

※黒曜石14は識別不能の黒曜石をまとめたものである。

として分布していると言ってよいだろう。III6、III7ブロック双方に含まれる個体はオパール2、7があり、未製品を含む石槍が多い。またそれら以外のブロックとの関係では、オパール3、7がIII10ブロックとの間に共有されている。III6、III7ブロックにおいてはオパール以外に珪質頁岩製の石器が目立つ存在ではある。しかしそれらは個体毎には少量で、石槍他の石器の比率が高く(単体資料も多い)、基本的に別所で生産された石器が持ち込まれたものである。石槍が持ち込まれている珪質頁岩1はIII4ブロックで石器生産が行われているし、同様に石槍他が持ち込まれている珪質頁岩11はIII10ブロックで石器生産が行われているものである。

以上からIII6、III7ブロックは、石器製作以外の性格を持った空間であり、そこで検出された石器は他所から持ち込まれたものである。遺跡内の他のブロックとは、III10ブロックとの関係がより密接であると言うことができる。

III10ブロックは、III9ブロックとともに他のブロック群とはやや離れて検出されたブロックである。III9ブロックは、石器を含まず小規模であるが、遺物点数の30%を占める珪質頁岩5をIII10ブロックと共有しており、III10ブロックに付随する空間であると考えられる。一方III10ブロックでは石槍調整剝片が多量に検出されており、石器製作空間であったことは明らかである。そこでは珪質頁岩3、5、11、12が消費される。

III10ブロックと他のブロックとの母岩共有関係については、珪質頁岩5の調整剝片がIII9ブロックにも分布する他、珪質頁岩11製の石器がIII6ブロック及びIII1ブロックに存在する。また珪質頁岩2、オパール3、7、黒曜石1、2、5が他のブロックと共有関係にあるが、これらは他所から持ち込まれた石器であり、うち黒曜石1の石槍などはIII4ブロックで生産されたものであろう。以上のようにこのブロックはIII1～4ブロック、III6、7ブロックのいずれとも関係を持つが、主要な石材の組成からすると、凝灰岩及び黒曜石を多用するIII1～4ブロックよりも、オパールを特徴的に含むことで共通するIII6、7ブロックとの関係が重視される。

以上、母岩別資料の分布を母岩個々の組成をも含めて通観した。ここに報告する10箇所のブロック群が同時期に形成されていることはもはや歴然であるが、そこではIII1～4ブロックと10ブロックの2箇所に石器(石槍)製作空間が認められた。おそらくその2箇所は時間を異にして形成されたものではなく、2つの単位によって隣接して作業の場が設けられたと解しておきたい。そして石器製作空間がブロック群のほぼ両端に認められ、他のブロックはその中間に存在していた。中間の各ブロックの性格は判然とせず、III5ブロック及びIII8ブロックに至っては遺物量も少なく、他のブロックとの関係も不明瞭である。III6及びIII7ブロックについてはIII10ブロックとの関係が密接であると指摘したが、しかしIII1～4ブロックとの関係も否定できず、それら石器製作空間ではないと考えられるブロック群の位置関係からしてもむしろ2単位の生活空間はある部分では共有されていたことを示すものと言えようか。

なお母岩別資料の各ブロックへの分布状況は第58表、第59表に一覧した。

⑤石器群の様相

当文化層からは先述のとおり石槍、ナイフ形石器、掻器、削器などの比較的単純な器種構成になる石器群が出土している。石槍生産に関連するという遺跡の性格上、石器群の主体を占めるのは当然多種の石槍であるが、ここに示される器種組成や石器の特徴は、下総台地でも示準となるべき内容を持っていよう。まず出土石器群の特徴を器種毎に通観してみる。

石槍　石槍1：周縁加工のもの。ナイフ形石器のbluntingのような急斜な剝離を施すものを1a、部分的で平坦な剝離を施すものを1bとする。当文化層には1aは存在せず、1bが少量存在するに過ぎないが、調整剝片を利用しているものが目立つ。

石槍2：片面加工のもの。小型で幅に対して厚みがあるものを2a、中型のものを2bとする。当文化層では前者にオパールが特徴的に用いられる。

石槍3：半両面加工のもの。小型で長幅比の小さいものを3a、中型で長幅比の大きいものを3bとする。3aは殆ど見られないが、3bは4bとともに主体的存在。石材は主として珪質頁岩が選択される。

石槍4：両面加工のもの。石槍3と同様、小型品を4a、中型品を4bとする。4aは皆無であるが、4bは3bとともに当文化層の中心的な石器である。珪質頁岩と黒曜石が用いられるが、両者の形状はやや異なる。

ナイフ形石器　ナイフ形石器1：縦長剝片素材の二側縁加工品で、左右非対称のもの。ナイフ形石器では主体的なもので、凝灰岩系が圧倒的に多い。

ナイフ形石器2：二側縁加工品で左右対称あるいはそれに準じるもの。2点のみで瑪瑙とオパールが用いられる。

ナイフ形石器3：切出形または台形の刃部を有するもの。当文化層ではチャート製の1点だけで、一側縁加工品。

ナイフ形石器4：所謂截頂石刃である。1点のみで、ナイフ形石器1に共通の凝灰岩を用いる。

掻器　掻器と言っても小型で円形～矩形に近いものがやや目立つ程度で、量的には少ない。それらにはオパールが特徴的に用いられている。

削器　珪質頁岩などのやや大ぶりな剝片の側縁に連続的な調整を施すものが多い。特に削器と呼称しなかったものでも、削器としての機能を考定すべきものもある。

その他の石器　剝片の一部に連続的な調整剝離を加えるものの他、尖頭部を意識的に作出したとも思われるもの(石槍未製品とすべきか)などもある。また石槍調整剝片に使用痕と考えられる微細な剝離痕が観察されるものが多い。

石槍では「有樋尖頭器」を全く含まない点が重要である。また掻器(特に尖頭状の素材を用いるもの)の量が少なく、彫器は存在しない。「有樋尖頭器」を主体とする遺跡とは大きく異なっ

た組成を示すと言えよう。石槍は半両面加工乃至両面加工の中型品と片面加工の小型品の組み合わせが基本になると考えられる。一見やや大型の石槍が存在するように思えるが、それらは完成された石槍ではなく、未製品であるかブランクの残欠である。また先述の2器種の石槍のうち遺跡で生産されているのは中型品のみである。

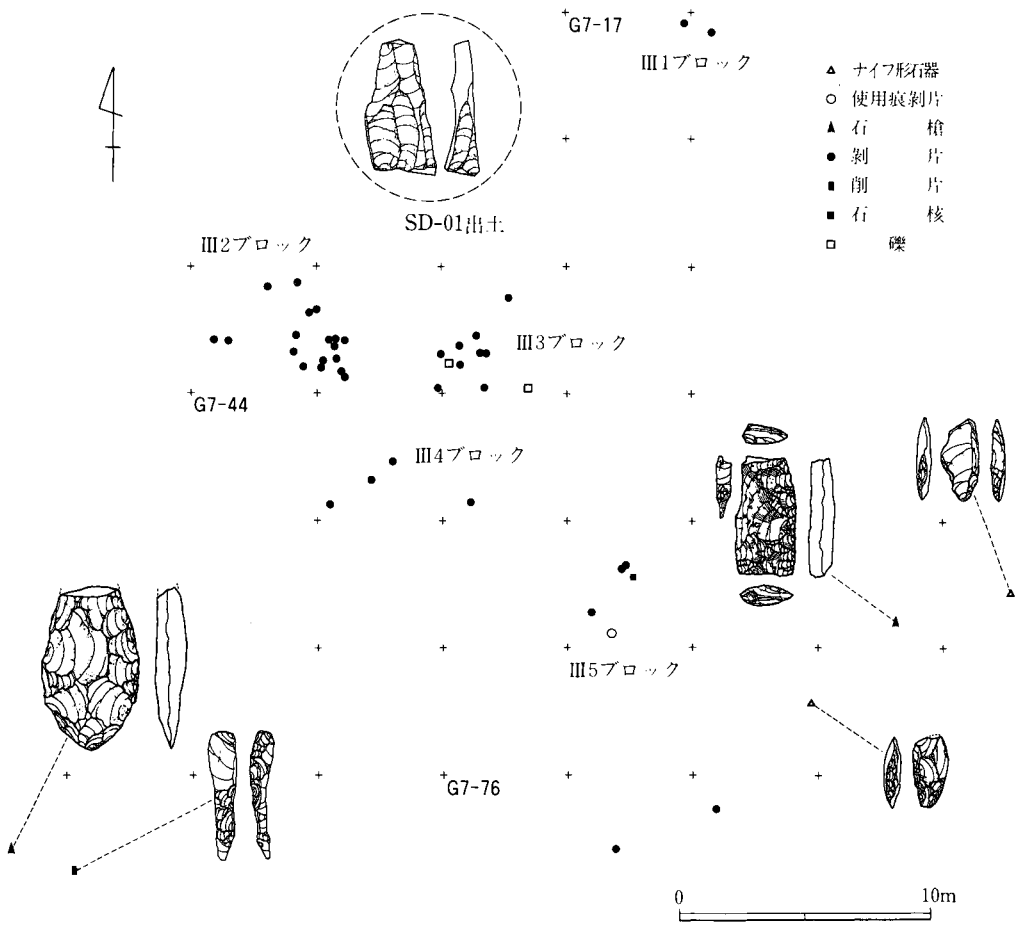
下総台地においては、内容の公表された遺跡に限ってであるが、当石器群の特徴に類するまとまった資料は見られない。細石刃石器群以前の石槍主体の石器群では、有樋尖頭器を含まない石器群として船橋市西の台遺跡ユニット1～5の資料があるが、そこでは長幅比の小さい黒曜石製の小型品が主体で様相は異なる。相模野台地ではV期の石器群である中村遺跡第III文化層、月見野上野遺跡第1地点第IV文化層、寺尾遺跡第II文化層などの資料が、ナイフ形石器を少量含む中型石槍主体の石器群であるが、中では中村遺跡第III文化層の石槍が最も近似した様相を呈していると言える。池花遺跡第3文化層はおそらくそれらの資料に対比されるものであろう。しかしナイフ形石器について見れば、基本的に相模野第IV期後半のそれを残存させているような印象を与える。いずれにしても微細な所まで比較すると現時点では「遺跡の個性」が強いという面は否めない。

13．池花南遺跡第３文化層

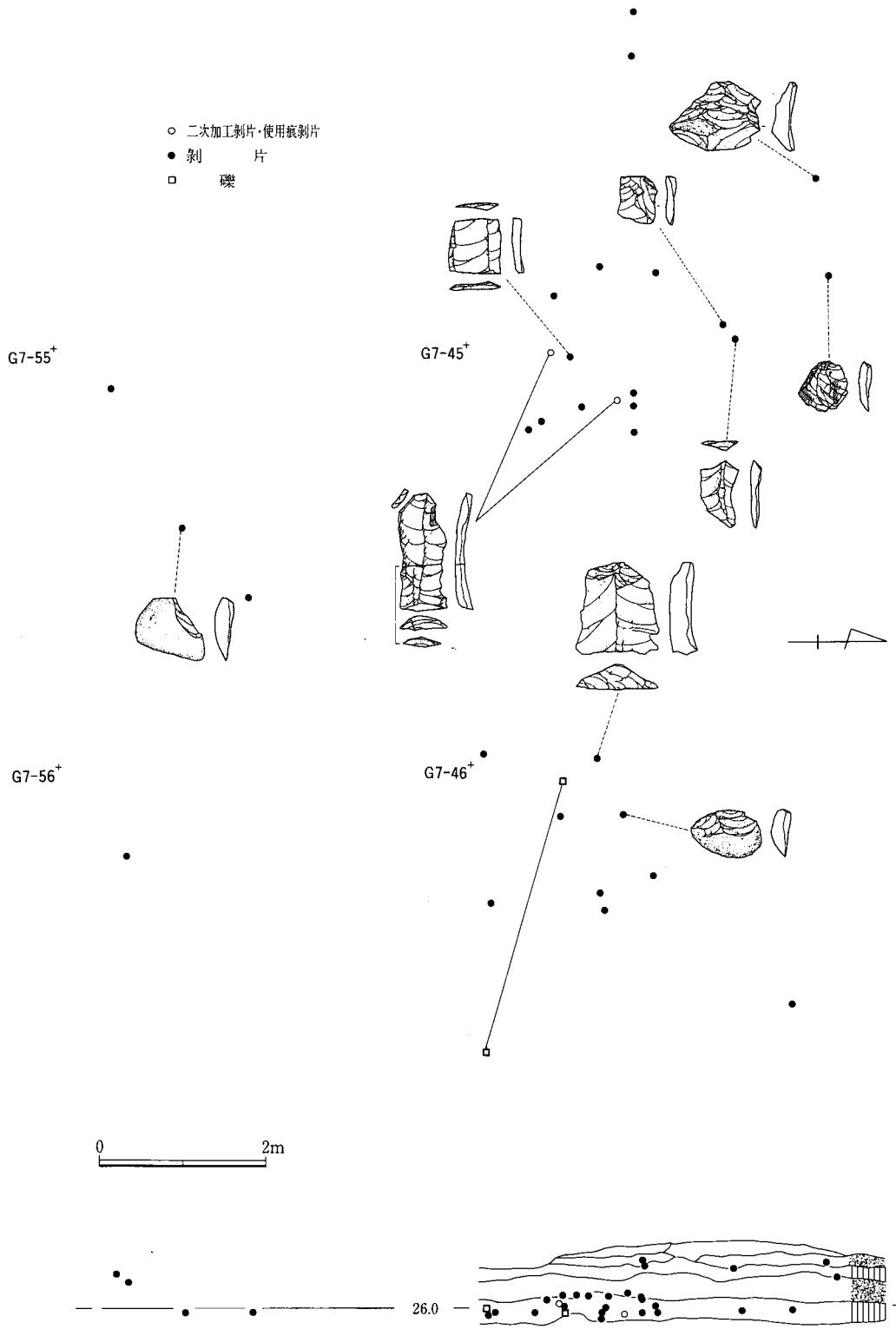
①概観

池花南遺跡のソフト・ローム中からは、小規模ブロックあるいは単独出土、遺構覆土への混入といった形で多様な石器が出土している。当然ながらそれらには時期が異なるものが含まれているが、池花南遺跡では一括して第３文化層とする。石器の分布は大きく見ると遺跡の北半部と南半部に分けることができる。

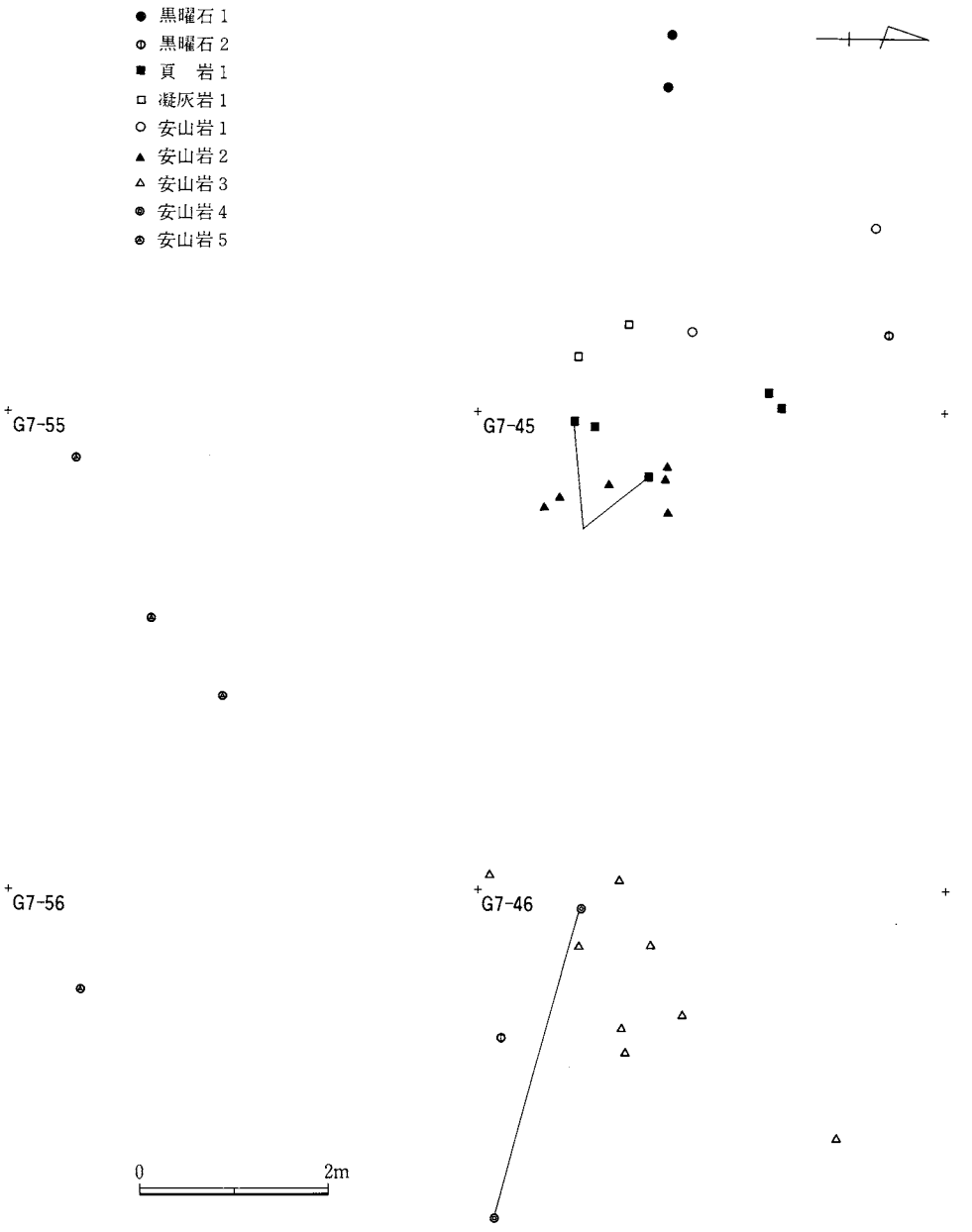
南半部はＧ７区に５箇所の小規模なブロックが検出され、また台地の南縁に沿って並ぶようにして点々と石器が出土した(第178図)。ブロック群出土の石器群は特徴的な遺物を含んでいないが、折断石刃あるいはそれに準ずる剥片を中心的な器種として保有するものがある。一方北半部では、遺跡北端でナイフ形石器が１点単独で出土している他、古墳群の下層や周溝内で石槍や同未製品などがブロックを形成せずに分布していた。



第178図　池花南遺跡南半部先土器時代石器分布図（1/300）



第179図　池花南遺跡Ⅲ2～Ⅲ4ブロック遺物出土状況（1/80）



第180図　池花南遺跡Ⅲ2～Ⅲ4ブロック母岩別分布（1/80）

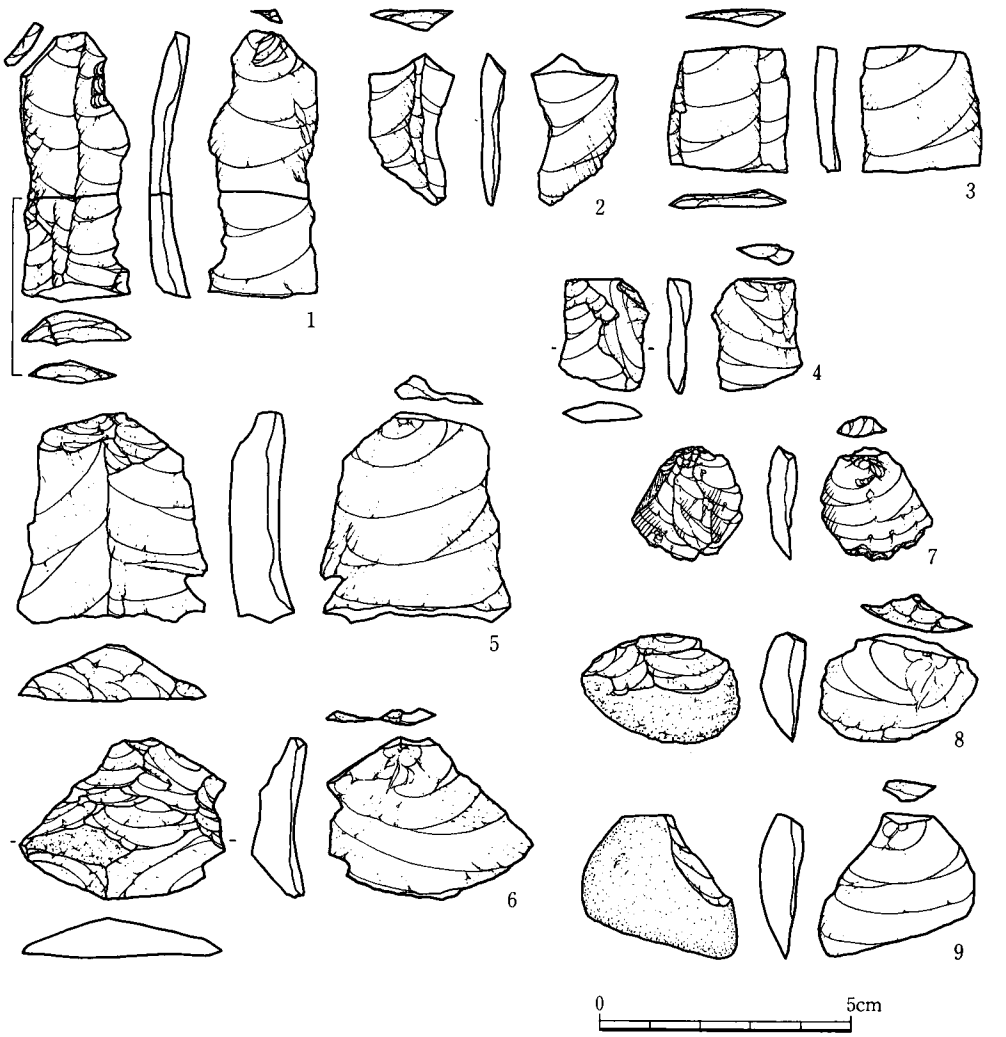
②Ⅲ1ブロック

G7－17、18区で安山岩製の剝片が2点出土したのを以てⅢ1ブロックとする。ともに風化の激しい貝殻状を呈する剝片で、加工痕等二次的な剝離痕は観察されなかった。次に述べるⅢ2～Ⅲ4ブロックと連環をなすものかもしれないが、個体識別は明確には判定できなかった。また実測図は掲載しなかった。

③III 2 ～III 4 ブロック

出土状況（第179図、図版13－１）　III 1 ブロックの南西に10m余隔ててIII 3 ブロックがあり、その西にIII 2 ブロックが、南西にIII 4 ブロックが隣接して検出された。III 2 ブロックは最も遺物点数が多く、南北3.7m、東西5.1m の範囲に分布する。安山岩や黒曜石の剝片に混って頁岩製の折断石刃及び剝片が中心的位置で出土した。III 3 ブロックは南北3.8m、東西3.6m の分布範囲を持つ。殆どが安山岩製の剝片によって構成される。III 4 ブロックは 4 点の剝片のみによって構成されるブロックで東西5.6m と長く分布した。上記各ブロックの間には 3 ～ 4 mの空隙がある。出土層準は基本的にIII層であるが、一部II a ～II b 層に浮いて出土したものもある。

出土遺物（第181図、図版51）　1 ～ 4 は頁岩 1 製の遺物で、1 ～ 3 が折断石刃である。実測図で判るように 1、3 は少なくとも 3 点以上には折断されていることになる。1 は折断面で 2



第181図　池花南遺跡第 3 文化層（III2～III4ブロック）出土石器（2/3）

第60表　池花南遺跡Ⅲ２～４ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1a	切断石刃	G7-35-31	頁岩	1	32.9	22.1	4.8	3.39	20°	－	－
1b	切断石刃	G7-35-60	頁岩	1	20.8	21.2	6.3	2.79	－	－	－
2	切断石刃	G7-34-118	頁岩	1	29.3	19.5	5.1	1.74	20°	－	－
3	切断石刃	G7-35-49	頁岩	1	24.4	24.2	4.3	2.75	26°	－	－
4	剥片	G7-34-45	頁岩	1	22.1	17.6	4.7	1.64	22°	－	－
5	剥片	G7-35-57	安山岩	3	41.5	39.0	11.0	16.24	－	－	－
6	剥片	G7-34-32	安山岩	1	32.4	41.1	10.0	9.92	－	－	－
7	剥片	G7-34-83	黒曜石	2	23.0	22.6	5.9	2.21	－	－	－
8	剥片	G7-36-53	安山岩	3	22.0	32.5	9.9	5.58	－	－	－
9	剥片	G7-45-134	安山岩	5	25.2	35.0	8.4	5.38	－	－	－

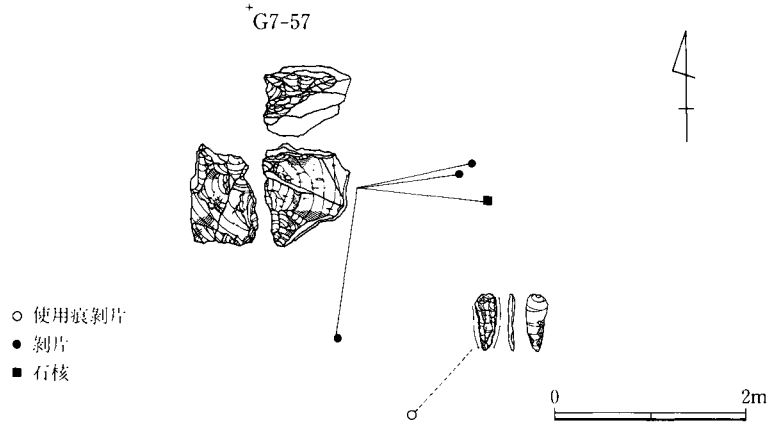
点が接合したもので、頭部側の例である。1aの背面右側縁には二次加工痕が観察される。２は末端側の、３は中間の例である。４は完形の剥片であるが１～３と同様の性格を持った石器であることは疑いあるまい。これらは点数が少ないため計測値により規格性を立証することができないが、植刃石器として捉えて問題はないものと思われる。

５～９は剥片である。５は背面構成から縦長剥片を連続的に剥離したことが窺われる。両側縁は鋭利な刃部状をなし、末端は折断ではなく底面である。６～９は貝殻状剥片で、掲載しなかった他の剥片も類似のものが多い。なおⅢ２～Ⅲ４ブロックの北側に存在した溝SD－01覆土中から安山岩製の石刃(第189図８)が出土しているが、これは当ブロック群と関係がある遺物である可能性がある。

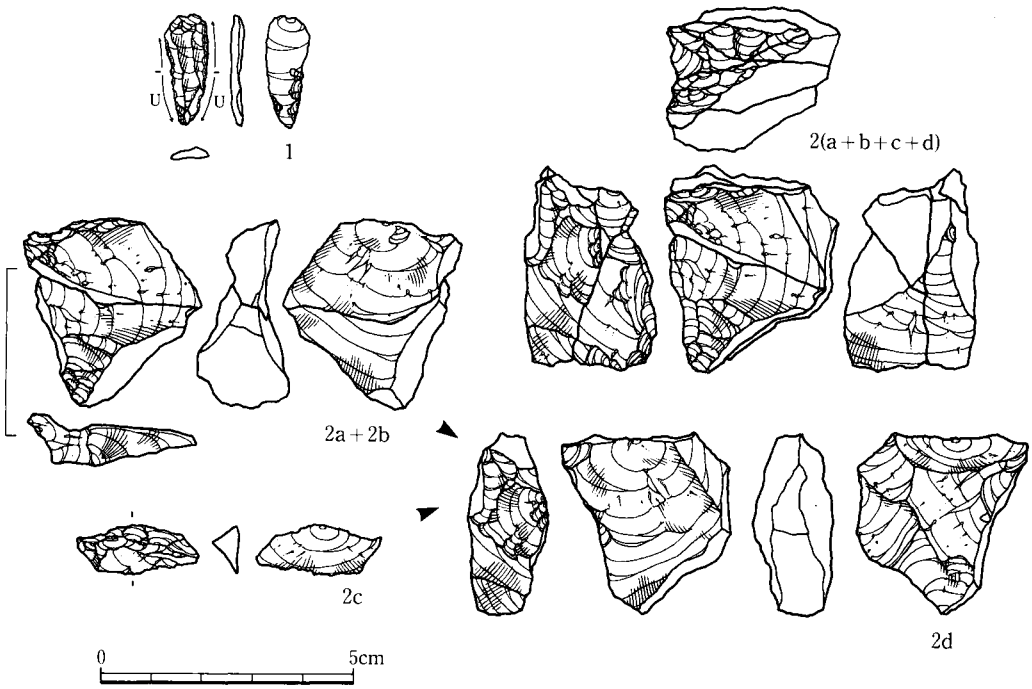
④Ⅲ５ブロック

出土状況（第182図）　Ⅲ２～Ⅲ４ブロックの南東６m余離れて、黒曜石製の遺物が５点出土した箇所があり、Ⅲ５ブロックとする。縄文時代～弥生時代の遺物包含層調査中に検出された。分布範囲は南北2.6m、東西1.6m。４点接合する接合資料及び細石刃状の遺物１点が検出されたが、周辺には他に石器は認められなかった。出土層準はいずれもⅢ層上位である。

出土遺物（第183図、図版51）　１は細石刃状の剥片である。両側縁には細かい剥離痕が観察される。背面の剥離痕から見ても石器の機能についても細石刃と考えてよいものであろうが、他に同種の石器がなく、また細石刃核も見られないため、ここでは使用痕を残す剥片とするに留める。２は接合資料である。１とは別個体の黒曜石で、石核と剥片３点が接合した。しかしこの４点は打点の状況からするに同時に割れたものである。また2bの下端には下方からの剥離と潰れが観察される。したがってこれらは両極打法によって割れたものと判断される。石核2dの左側面には2(a＋b)剥離後の新しい剥離痕が残されている。



第182図　池花南遺跡Ⅲ5ブロック遺物出土状況（1/80）



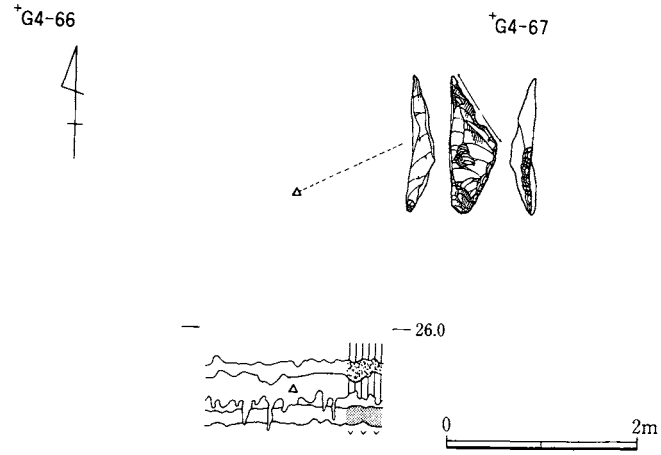
第183図　池花南遺跡Ⅲ5ブロック出土石器（2/3）

第61表　池花南遺跡Ⅲ5ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
1	使用痕剥片	G7-57-380	黒曜石	1	21.6	9.5	2.5	0.40	−	−	○
2a	剥片	G7-57-142	黒曜石	2	20.6	36.9	9.5	3.81	−	−	−
2b	剥片	G7-57-280	黒曜石	2	31.1	29.7	16.0	7.72	−	−	−
2c	剥片	G7-57-281	黒曜石	2	9.4	24.1	5.6	0.66	−	−	−
2d	石核	G7-57-66	黒曜石	2	36.3	33.1	15.1	16.40	−	−	−

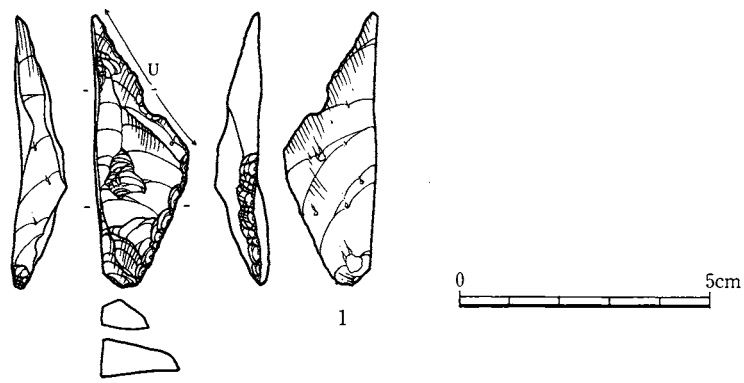
⑤ G4－66区

出土状況（第184図）　遺跡北端部のG4－66区では、確認調査時にナイフ形石器1点を検出し、拡張区を設定して本調査に移行したが、先土器時代の遺構、遺物は一切検出できなかった。石器はIII層中より出土したが、当地点においてはIV層はあまり良好に遺存していなかった。



第184図　池花南遺跡G4-66区遺物出土状況（1/80）

出土遺物（第185図、図版51）　黒曜石製のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、右側縁にのみ加工を施したものである。調整打面を残す。また背面左側縁の尖頭部寄りに細かい調整痕が観察される。先端は先鋭な尖頭状をなし、刃部には使用痕と考えられる刃こぼれ状の剥



第185図　池花南遺跡G4-66区出土石器（2/3）

第62表　池花南遺跡G4－66区出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角	調整角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	G4－66－1	黒曜石	―	54.0	18.8	12.0	6.06	42°	66°	―	○

離痕が極めて顕著である。左側縁には石核の主要剝離面と思われるポジ面を残しているが、この石器の主要剝離面とはおよそ90°前後の角度をなしており、blunting 面と同様のものとして取り込まれている。したがってもしこのナイフ形石器を分類するとしたら、二側縁加工のナイフ形石器と同様のものとして分類されなければならない。

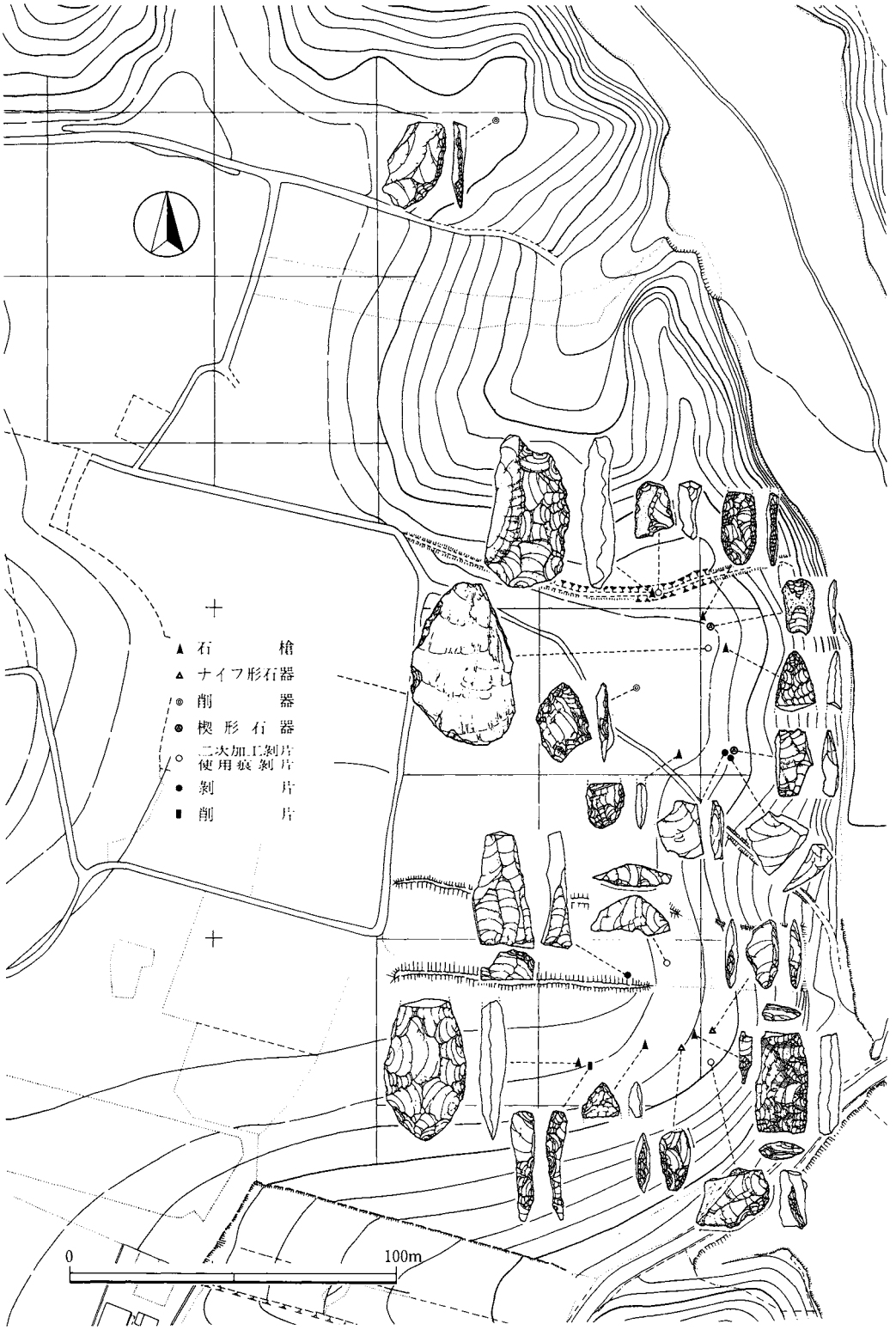
⑥遺跡北半部ブロック外

出土状況　池花南遺跡北東部の古墳が集中する部分はIII層が破壊されている箇所が多いが、古墳周溝覆土内などから石槍や剝片が出土している。しかしIII層が遺存した範囲においては石器がまとまって出土することはなかった。

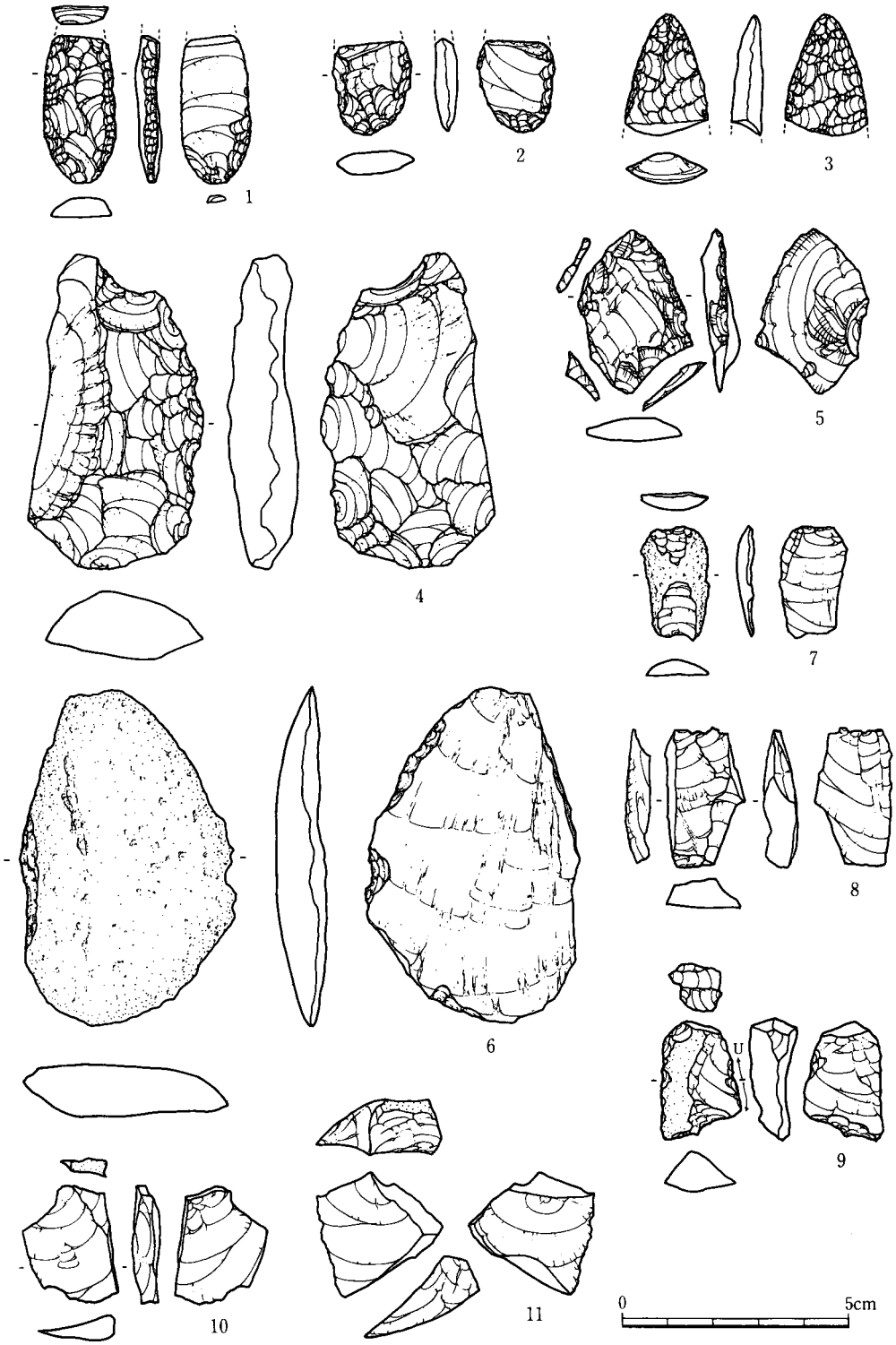
出土遺物（第187図、第188図、図版52）　1～3は石槍である。いずれも折損している。1は淡褐色を帯びた乳白色オパール製の縦長剝片を素材とする周縁加工品。打面、打瘤を残す。腹面基部には調整剝離が周縁に見られるが、打瘤の除去にはなっていない。周縁の調整角は55°～70°と削器の刃部に近似した加工となっている。最大幅が下位にあり、小型品である。幅に比して長い細身の形態を示すと思われるが、尖頭部を欠損しているため正確な形状は解らない。2も周縁加工の小型石槍である。調整角は1に比べて遥かに緩やかで、また階段状剝離となっている所が多くあまり丁寧な加工は施されていない。やはり尖頭部側を折損している。3は両面加工の石槍の尖頭部(または基部)である。淡褐色～褐色の良質な珪質頁岩製であり、加工は丁寧で断面は整ったレンズ状を呈している。1、2よりもやや大ぶりの石器。これら周縁加工の小型石槍と両面加工の石槍の組み合わせは、大割遺跡第6文化層と共通するものであるが、大きさ、形状など若干異なる要素もある。

4は緑がかった淡褐色の頁岩製の石器で両面が平坦な剝離面で覆われており、初期段階の石槍の未製品である可能性が高い。5は黒曜石の横長剝片を素材とする石器で、鈍い尖頭状を呈する。背面右側縁(末端)には連続的な調整剝離が認められ、削器と考えることができる。6は背面が礫皮面で覆われる結晶片岩の大ぶりな剝片で、腹面の周縁に二次的な剝離痕を有するものである。削器としての機能を考えることができる。

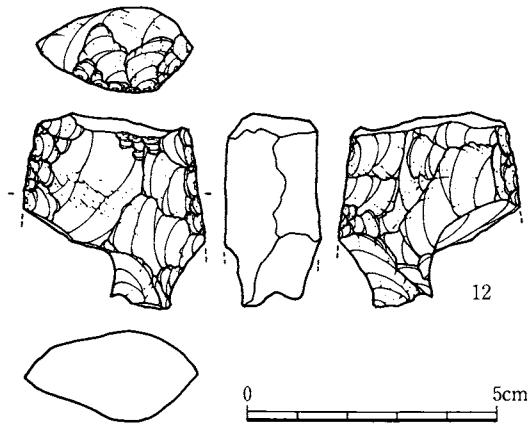
7、8はチャート製でともに楔形石器としたが、ピエス・エスキーユではなく、両者ともに両極剝片と考えられるものである。9～11には剝片を示した。9には刃こぼれ状の剝離が見られる。また10は打点直下で折れている。7～11には縄文時代の遺物が含まれる可能性がある。12は縄文時代前期の住居跡であるSI－01覆土中から出土したものであるが、先土器時代終末期の石槍断片と考えられる両面加工石器である。4に酷似した頁岩製で、上下とも折損または折断されている。上の折断面には二次的な剝離痕が残されており、またその面を打面とした細かい剝離痕も表面に見られ、植刃としての加工である可能性は充分である。しかしこの石器の断面形は極めて分厚いレンズ状を呈し、幅も大きいため、植刃石器とするには疑問もある。



第186図　池花・池花南遺跡ブロック外石器出土位置（1/2,000）



第187図　池花南遺跡北半部ブロック外出土石器(1)（2/3）



第188図　池花南遺跡北半部ブロック外出土石器(2)（2/3）

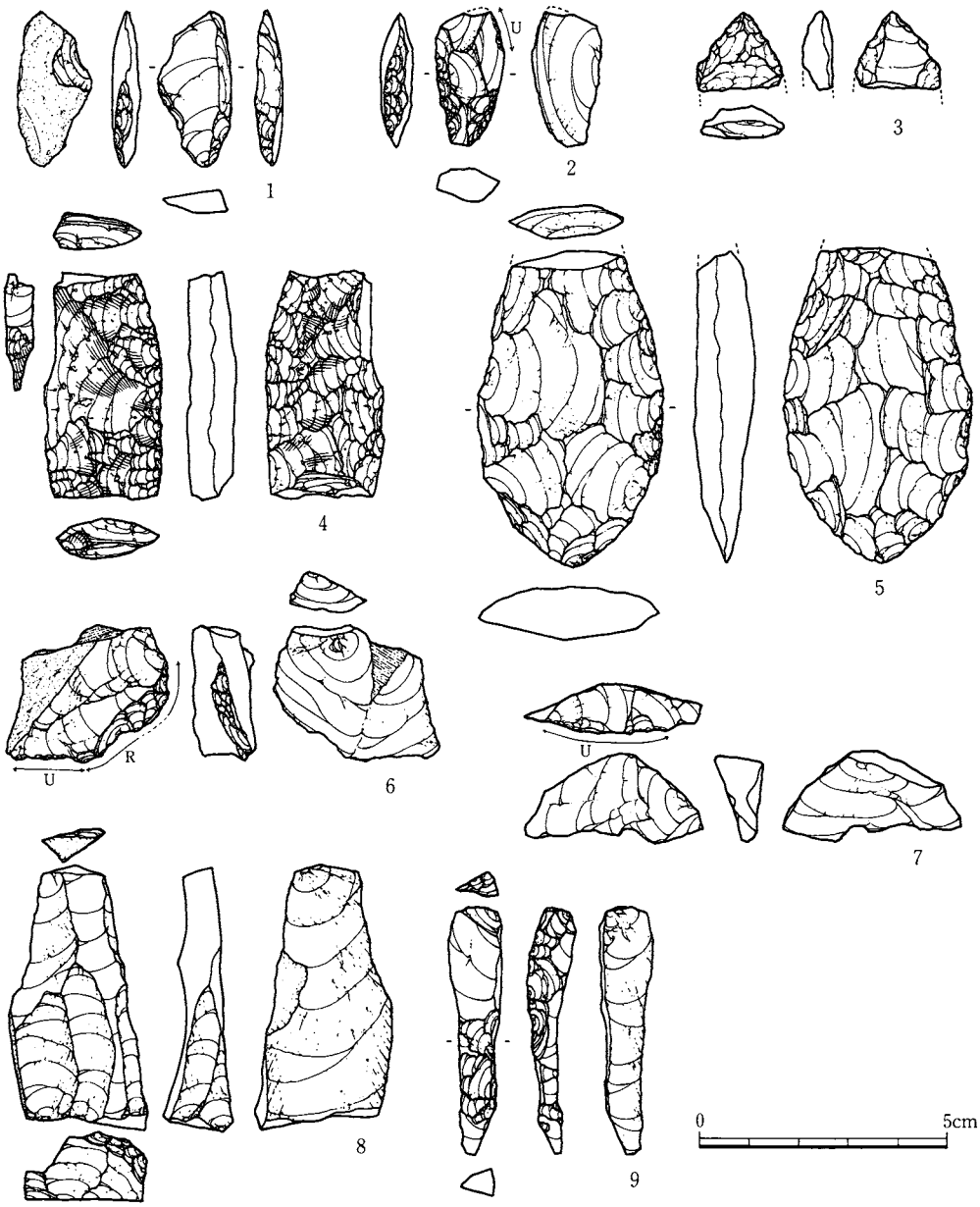
第63表　池花南遺跡北半部ブロック外出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	調整角	欠損	使用痕
1	石槍	SX−04−7	オパール	32.8	25.9	5.4	3.58	—	○	—
2	石槍	SX−03−3	チャート	20.1	17.9	5.4	2.38	—	○	—
3	石槍	H5−21−30	珪質頁岩	26.9	20.0	7.2	2.90	—	○	—
4	石槍(未製品)	SD−04 一括	頁岩	68.3	35.7	15.1	38.70	—	—	—
5	削器	SX−02 一括	黒曜石	22.7	34.2	6.0	4.35	54°	?	—
6	二次加工剥片	H5−20−49	結晶片岩	73.0	48.2	11.0	45.24	—	—	—
7	楔形石器	H5−10−67	チャート	24.3	14.8	3.4	1.34	—	—	—
8	楔形石器	SX−12 一括	チャート	31.1	17.3	7.0	3.82	—	—	—
9	使用痕剥片	SD−04 一括	チャート	26.2	18.0	11.7	4.43	—	—	○
10	剥片	SX−12 一括	瑪瑙	26.1	19.8	5.1	2.54	—	—	—
11	剥片	SX−12 一括	チャート	29.6	28.0	11.2	5.92	—	—	—
12	石槍	SI−01−182	頁岩	38.0	36.2	17.5	24.03	—	○	—

⑦遺跡南半部ブロック外

出土状況（第186図）　G7区で調査されたIII1ブロック～III5ブロックについては既に記述したが、その周辺ではブロックをなさずにいくつかの石器が出土している。遺跡北半部と異なり、遺構密度が希薄なため遺構覆土内からの出土はほとんどなく、縄文～弥生時代遺物包含層の調査に伴って出土したものが多い。

出土遺物（第189図、図版52）　1、2はナイフ形石器である。ともに切出状の刃部を有する。1は背面の殆どが礫皮面で覆われる折断剥片を素材としている。加工は腹面の二側縁に認められるが、いずれも基部側だけに留まっており、腹面右側縁は折断面を取り込んだものである。青黒灰色のチャート製。2は灰褐色の珪質頁岩の横長剥片を素材とするもので、背面の二側縁に加工が施される。加工は1のそれに比べて緩斜なものであるが、左側縁の加工よりも右側縁



第189図　池花南遺跡南半部ブロック外出土石器（2/3）

の方が粗雑で階段状剝離が目立っている。刃部の一部を欠損する。また右側縁の一部に刃こぼれ状の小剝離が観察される。1、2はほぼ同時期の石器と見てよいものであろうか。

3～5は石槍またはそれに準ずるものである。3は黒灰色を呈する安山岩製の石槍尖頭部破片である。半両面加工で幅と厚みが比較的大きい。4は黒曜石製の石器で、長大な尖頭器を折断したものである。植刃と考えられる。表面左側縁の上方からの剝離は、植刃としての装着時における意図的な加工かあるいは装着時の欠損かいずれかであろう。本ノ木技法による石器に

第64表　池花南遺跡南半部ブロック外出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角	欠損	使用痕
1	ナイフ形石器	H5－50－42	チャート	32.7	15.6	6.0	2.66	38°	—	—
2	ナイフ形石器	G7－68－364	珪質頁岩	14.7	28.3	6.8	2.61	22°	○	○
3	石槍	G7－66－232	安山岩	15.6	17.0	6.0	1.49	—	○	—
4	石槍(植刃)	G7－59－196	黒曜石	45.7	24.4	9.0	13.23	—	?	—
5	石槍	G7－72－353	安山岩	63.7	37.9	12.0	30.20	—	○	—
6	二次加工剥片	H7－70－8	チャート	26.5	35.7	16.7	9.40	—	—	○
7	使用痕剥片	SX－01－2	チャート	19.0	36.1	8.3	3.78	—	—	○
8	剥片(石刃)	SD－01－1	安山岩	52.5	27.0	14.2	16.22	—	—	—
9	削片	G7－73－110	チャート	50.2	10.9	8.3	3.45	—	—	—

は通常黒曜石を用いることはなく、希少な例と言えようか。5は安山岩製のやや大型の石槍である。風化面は暗褐色、新しい面は黒色を呈する。両面加工の整美な木葉形をしており、最大幅が下位にある。表裏ともに右側縁の調整によって仕上げられている。実測図では尖頭部を欠損しているものとして考えたが、この石器の下部は基部とするには薄く、先鋭ではないもののこちらが尖頭部となる可能性もあるかと思われる。4、5は先土器時代最終末に位置付けられる。両者はほぼ同時期のものと考えてよいであろう。

6、7は剥片で、加工痕または使用痕が認められるものである。6は若干透明感のある青灰色のチャート製である。一部節理によって複雑な割れかたをしている。背面の右側縁には二次加工と思われる剥離痕が連続しており、また下縁には刃こぼれ状のごく微細な剥離が認められる。7は暗灰色のチャート製横長剥片で、打面の背面側の縁部に細かい剥離痕が連続的に観察される。これは打面調整とは異なり、削器あるいは掻器のような用途に用いられた際の使用痕と考えておく。8は安山岩製の石刃である。両設打面の石核から剥離され、底面を残しているが、下位からの剥離痕及び打面調整痕が良好に遺存している。背面の上位からの剥離面にはバルブが失われており、当石刃の剥離に先立って打面再生が行われたことは明らかである。ただ打面は新しい傷によって観察不能であった。これは溝SD－01から出土したものであるが、出土位置の南側にはIII 2～III 4ブロックが検出されており、そこでは安山岩製の剥片が多く出土している。当石刃は安山岩3に近似しているが明確な判断はできない。しかしそれらのブロック群に関係がある遺物である可能性は否定できない。9は青灰色のチャート製で断面が三角形を呈する削片である。背稜には連続的に剥離が認められる。遺跡内からはこの削片に関わると思われる石器は出土しなかった。

⑧池花南遺跡第3文化層のまとめ

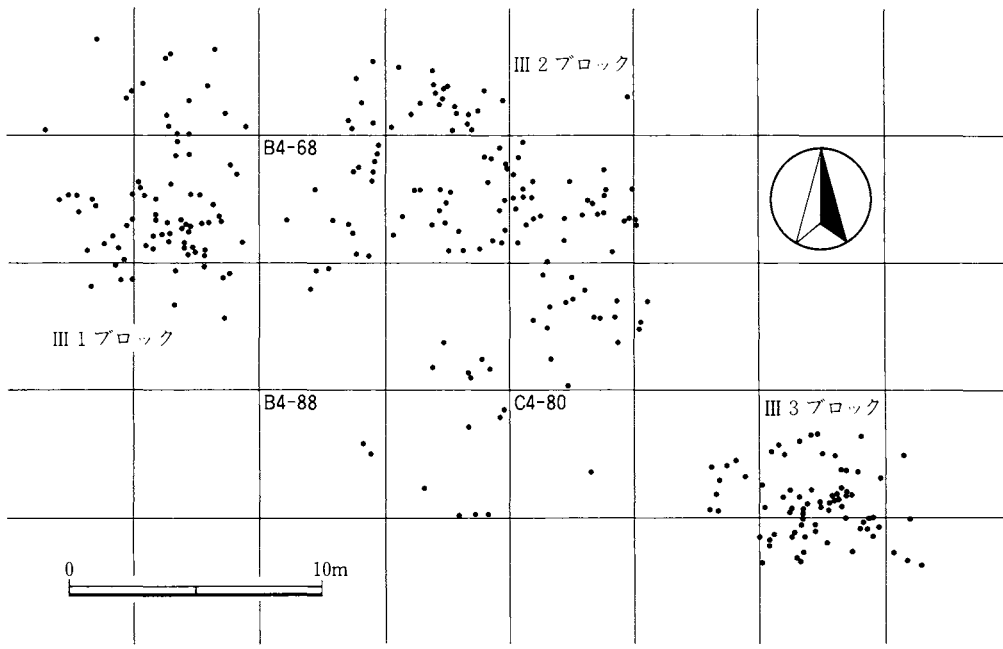
当文化層は当初述べたように明らかに時期が異なるものを一括して扱ったものである。中に

はナイフ形石器の一般的終末段階から先土器時代最終末期までの遺物が含まれる。特徴的なまとまった石器群は存在しないが、Ⅲ2～Ⅲ4ブロックの折断石刃を含む石器群は、典型的な製品を保有しないながら重要な位置を占めるであろうし、遺跡北半部で出土した数点の石槍群は大割遺跡第6文化層や池花遺跡第3文化層との対比資料として重視されるべきである。ただ残念なことにいずれの資料も余りに断片的ではあった。

14．大割遺跡第７文化層

①概観

細石器を代表的器種とする文化層である。大割遺跡のソフト・ローム中から検出された資料のうち、細石器を示準として明らかに分離される一群を第７文化層とした。したがって層位的に厳密に分離されるものではない。位置は大割遺跡の西南部で、第５文化層のブロック群の北側に３基のブロックが隣接して検出された(第190図)。西からⅢ１、Ⅲ２、Ⅲ３ブロックとする。全体の遺物分布範囲は東西約35m、南北は20m余りである。周辺地形は概ね平坦であるが、西南方向からは埋没谷が入り込んでおり、ブロック群はその谷に面するように立地する。現地形でもごく緩やかな傾斜を持つが、ローム層の傾斜は若干大きかった。大割遺跡では他に同時期と判断される遺構、遺物は検出されていない。また内黒田遺跡群全体を見ても然りである。出土石器群は、一般に「野岳・休場型」[1]、「野辺山型」[2]、あるいは「矢出川技法」[3]の名で呼称されている形態の細石核によって代表される。使用石材は珪質頁岩が他を圧倒する。

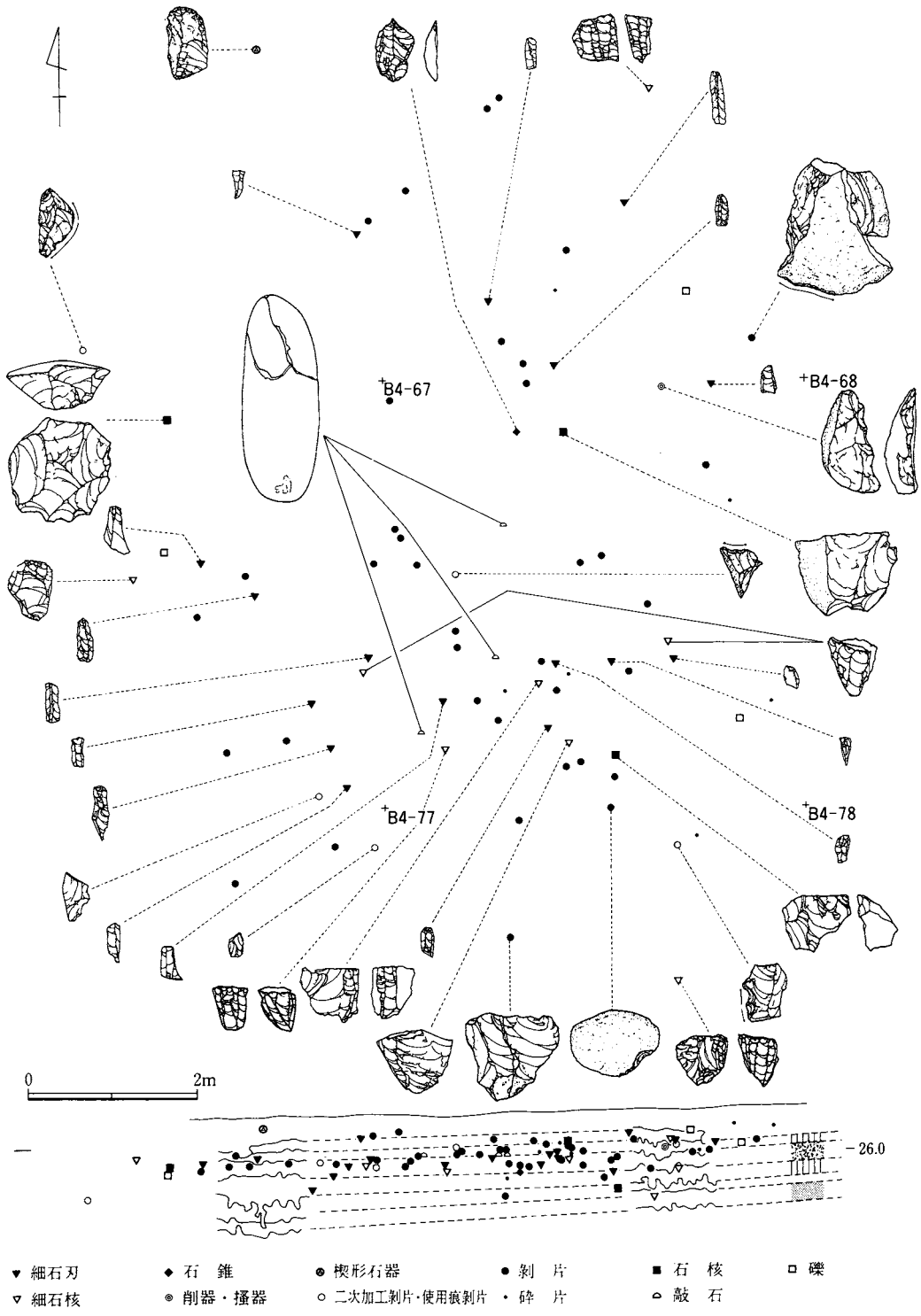


第190図　大割遺跡第７文化層全体図（1/300）

②出土状況(第191図～第195図、図版10)

全体では３箇所の集中が見られるため３つのブロックを設定した。ただしⅢ１ブロックとⅢ２ブロックは互いに接しており、明確に分離できるものではない。

西端に位置するのがⅢ１ブロックである。南北約11.0m、東西約8.1mの分布範囲を持つ。全



第191図　大割遺跡第７文化層遺物出土状況(1)（1/80）

体として密度はあまり高くないが、南寄りに中心があり、北半部は散漫な分布を示す。剝片や細石刃などは全体に拡散する傾向がある(強いて言うならば細石刃が南半部西縁に並ぶ)ものの細石核は南半部に集中する傾向を見せる。また当ブロックからは敲石が3つに破損して出土しているが、その出土位置は細石核の分布に重複していると言えようか。

中央に位置するのがIII 2ブロックである。3つのブロックのうち最も分布範囲が広く、遺物点数も多いが、やはり分布密度はあまり高くない。範囲は南北約18.2m、東西およそ14.3mを測る。傾向としては、III 1ブロックとは逆に北半部の分布が濃密で南半部が希薄である。細石刃、細石核共にとくに集中することはなく、またブロックの規模の割には点数が少ない。当ブロックの特徴としては削器、あるいは削器状の加工痕を有する剝片が目立つことと、楔形石器が多いことである。

東端に位置するのがIII 3ブロックである。南北約5.4m、東西約8.4mの分布範囲を持つ。ブロックの規模としては最も小さいが、中心部の密度が他に比べて幾分濃密であると言える。細石核は中央部付近に5点出土しているが、とくに集中すると言える程ではない。当ブロックでは安山岩の剝片、石核が目立つ存在である。また掻器と尖頭器(end blade か?)が当ブロックにのみ検出されている。

遺物の出土層準はII層からIII層にかけてであり、とくに漸移層辺りに集中する。どのブロックも0.5～0.6m前後の遺物の垂直移動が看取される(第196図)。

③出土遺物(第197図～第205図、図版64～67)

細石刃、細石核およびその調整剝片のほか、否定形的な剝片石器が多く出土している。

細石刃　1～28、44aが細石刃である。ただし1は残念なことに実測図作成後紛失し、現在では詳細は明らかではない。28点中25点までが珪質頁岩製で他は黒曜石製。当遺跡においても折断は普遍的に行われており、殆どが分割されたものである。ほぼ完形のものとして僅かに16及び44aの2点が見られるに過ぎない。頭部側の例としては、1、2、7、8、9、10、12、13、14、17、19、21、22、23、25の計15点と最も多きを数える。次に胴部の例として3、11、18、20、24、26の計6点、尾部の例として4、5、6、15、27、28の計6点がある。無論折損したものもあろうし、例えば20は本来あまり長くないもので両端を欠損していると思われる。折断面の観察からは、それが困難なものが中にはあるが、折断時の加撃方向にとくに明確な傾向性は見いだせない。「野岳・休場型」の細石刃は3分割を基本とすると言われるが、当遺跡の細石刃は個別の石器レベルでは2分割が想定されるものも多い。細石刃に加工痕と考えられる二次的剝離痕を有するものは存在しない。使用痕が観察されるものは多い。どちらかの一側縁に使用痕が認められるものは、5、6、7、8、12、17、18、23、24、26の10点があり、二側縁共に使用痕が認められるものは、14、27の2点がある。なお29は微細な剝片であるが、使用痕の

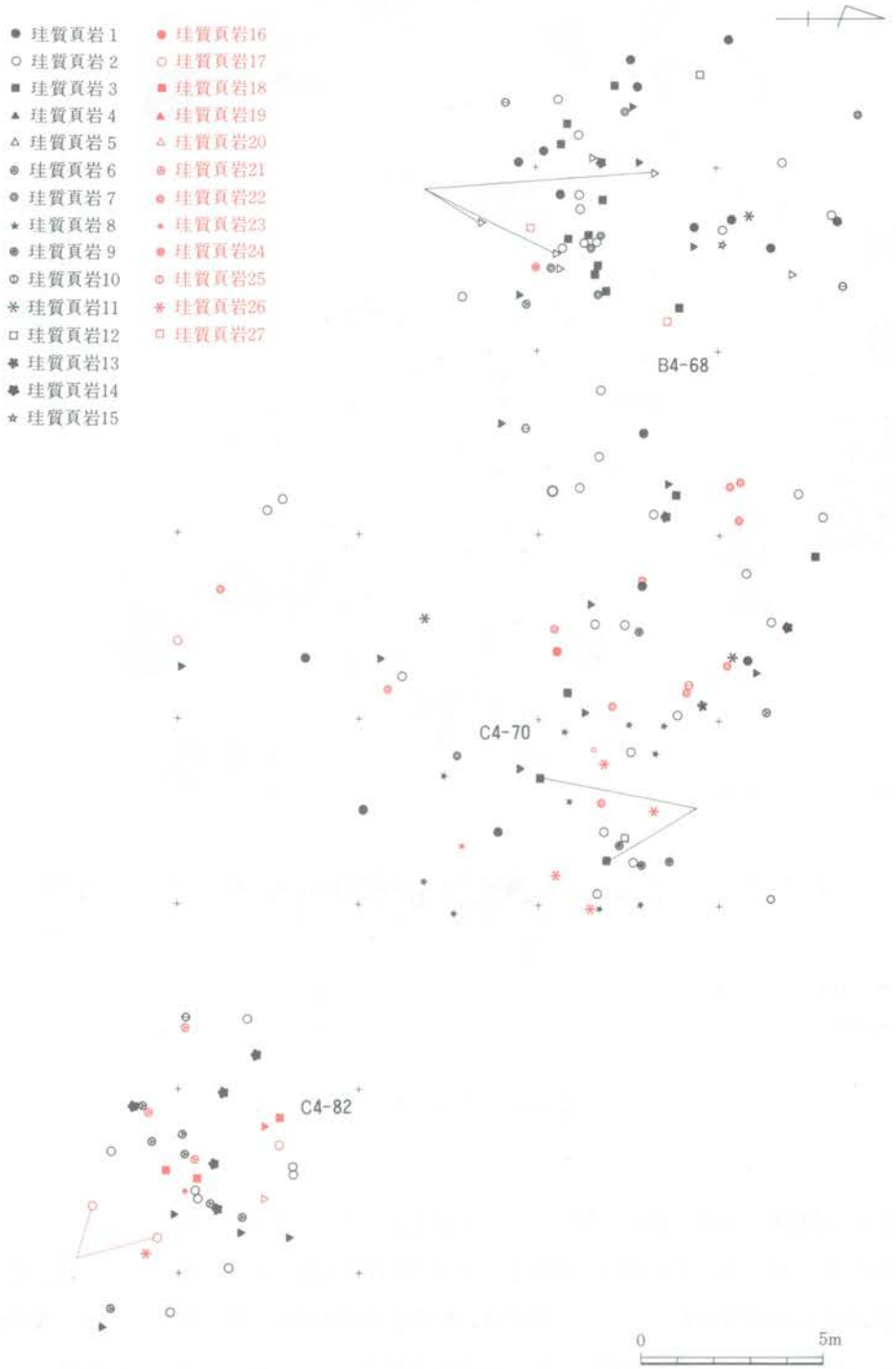
第192図　大割遺跡第７文化層遺物出土状況(2)（1/80）

第193図　大割遺跡第７文化層遺物出土状況(3)（1/80）

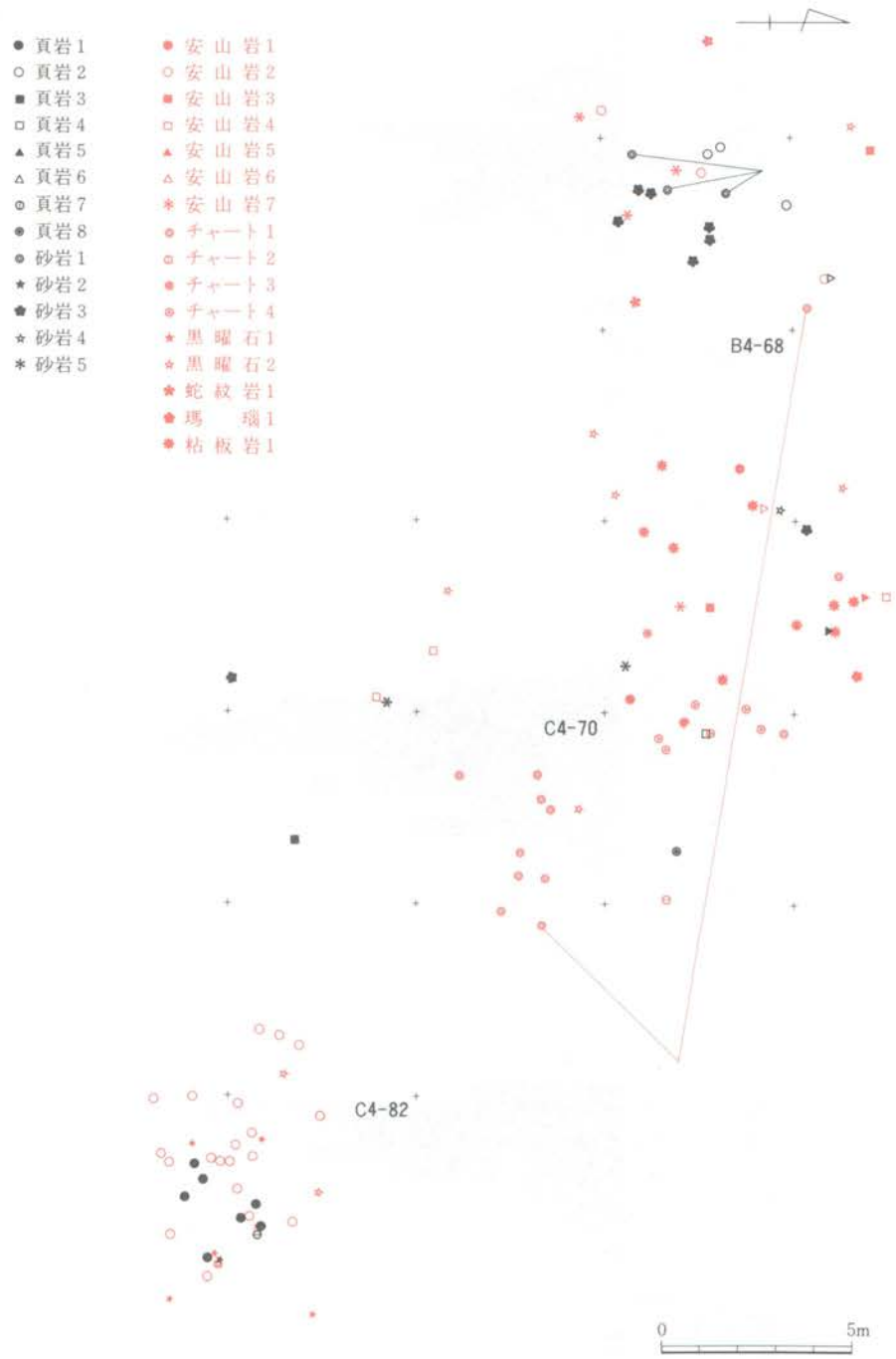
状況等から細石刃と同様の機能を想定することができ、ここに並列して掲載した。

細石核　30～40、42～45の計15点がある。すべて珪質頁岩製であり、細石刃の一部に見られた黒曜石の細石核は残されていない。形状はいわゆる半円錐形の石核が基本となる。残核形態を細かく分類することに重要な意味があるか否かは別として、それらは幾つかの基準によって次のように分類される。

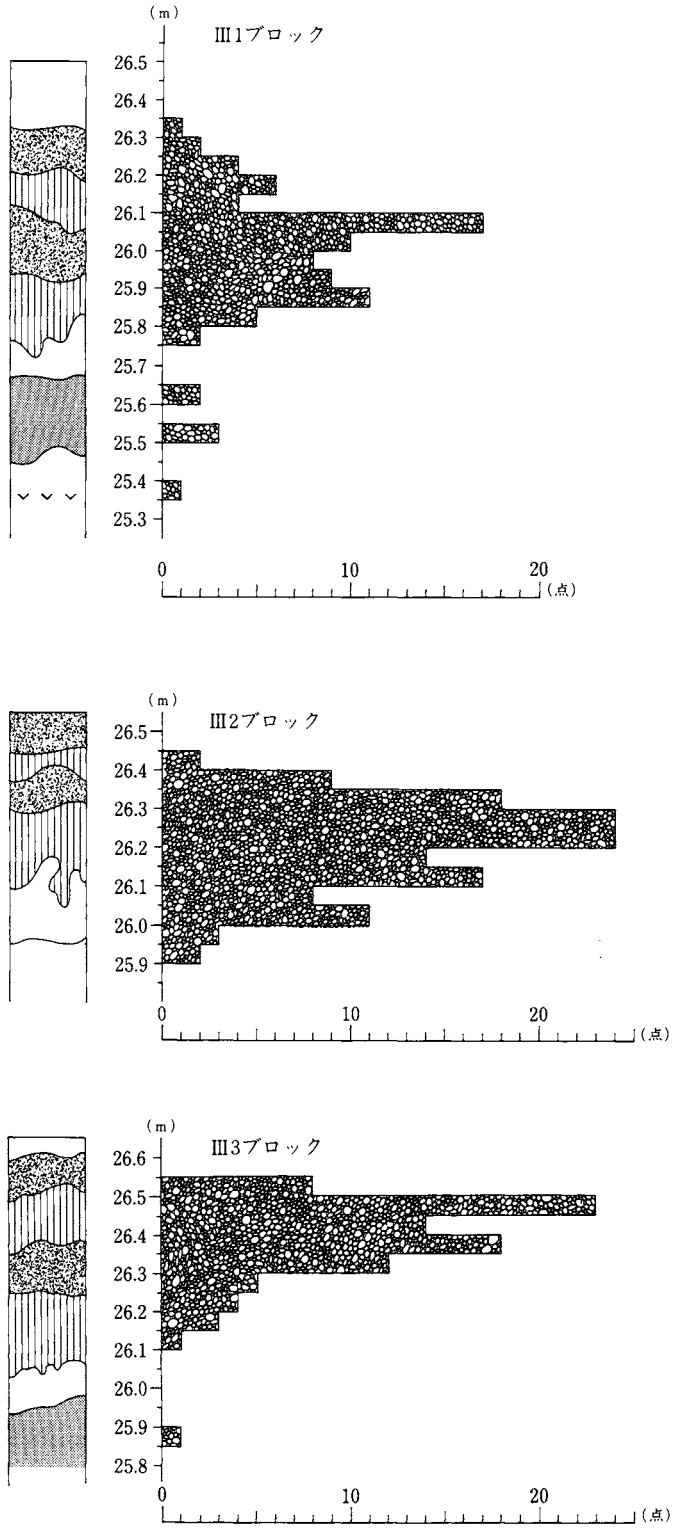
剥離の在り方；単設打面のものを１、両設打面のものを２とする。



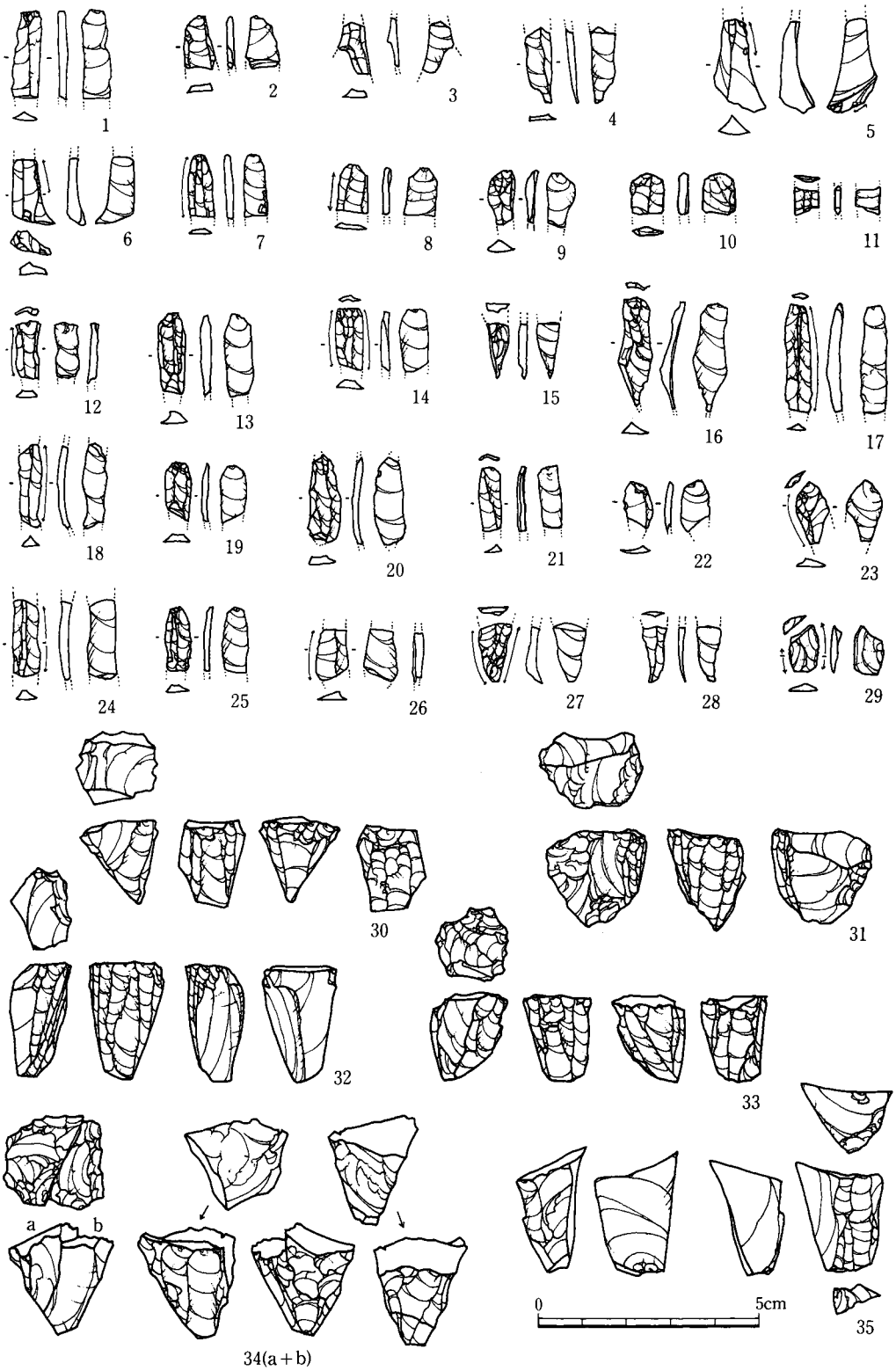
第194図　大割遺跡第7文化層母岩別分布(1)（1/200）



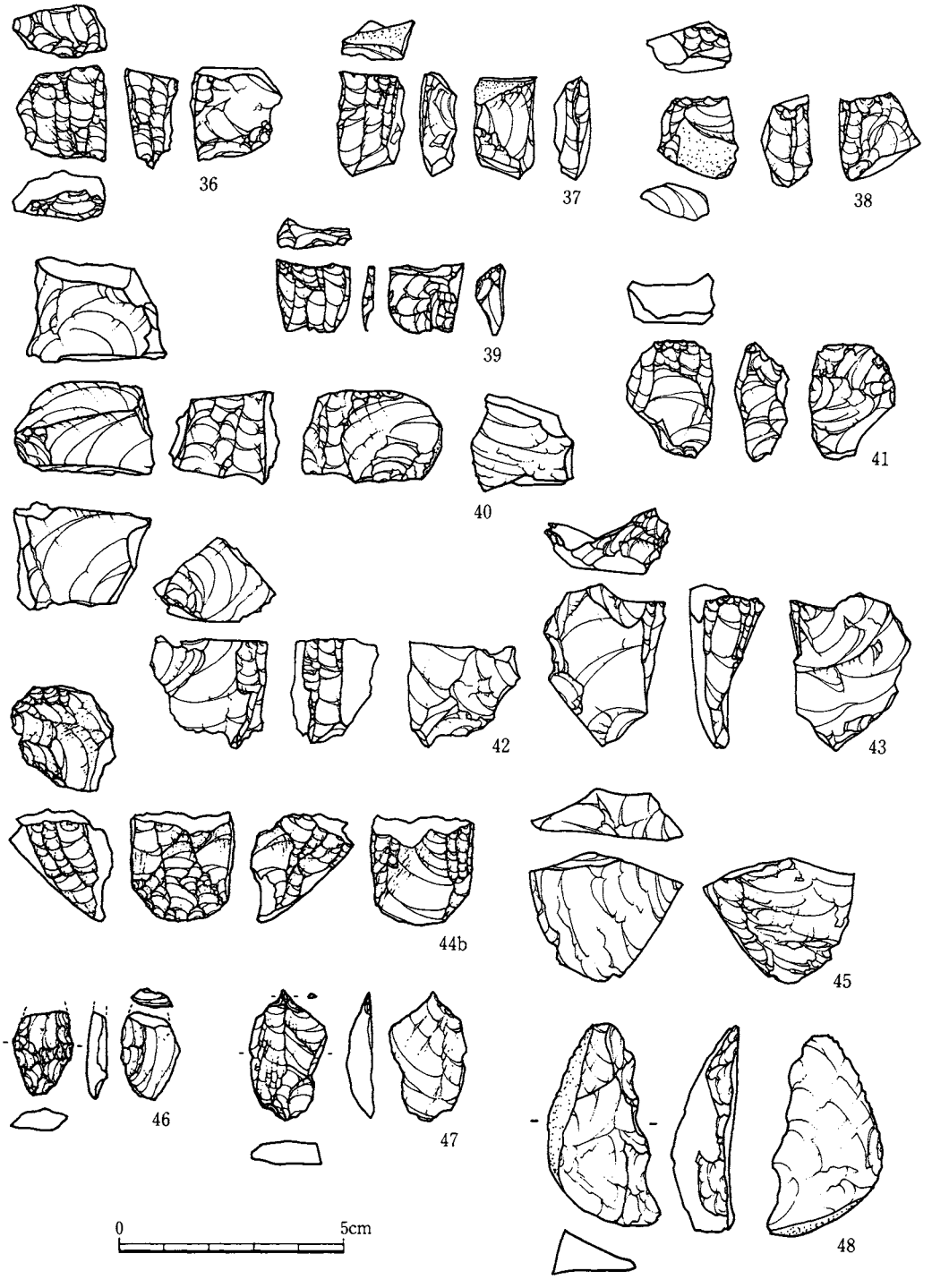
第195図　大割遺跡第7文化層母岩別分布(2)（1/200）



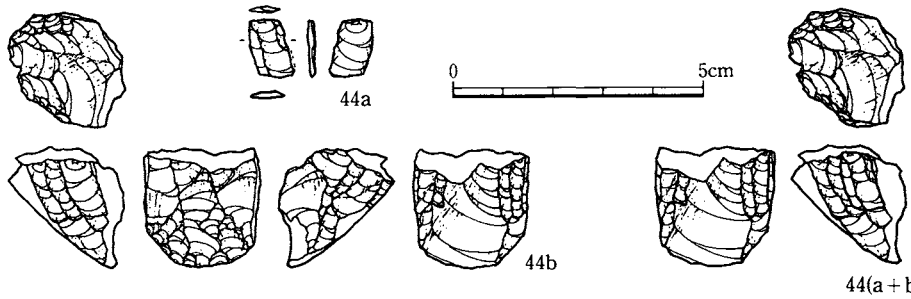
第196図　大割遺跡第７文化層遺物垂直分布図



第197図　大割遺跡第7文化層出土石器(1)（2/3）



第198図　大割遺跡第７文化層出土石器(2)（2/3）



第199図　大割遺跡第7文化層出土石器(3)（2/3）

打面の在り方；平坦打面のものをａ、調整打面のものをｂとする。

剝片の一端に作業面を設定するものをｆとする。元来剝片素材でも石核調整がなされたものはこれには入れない。

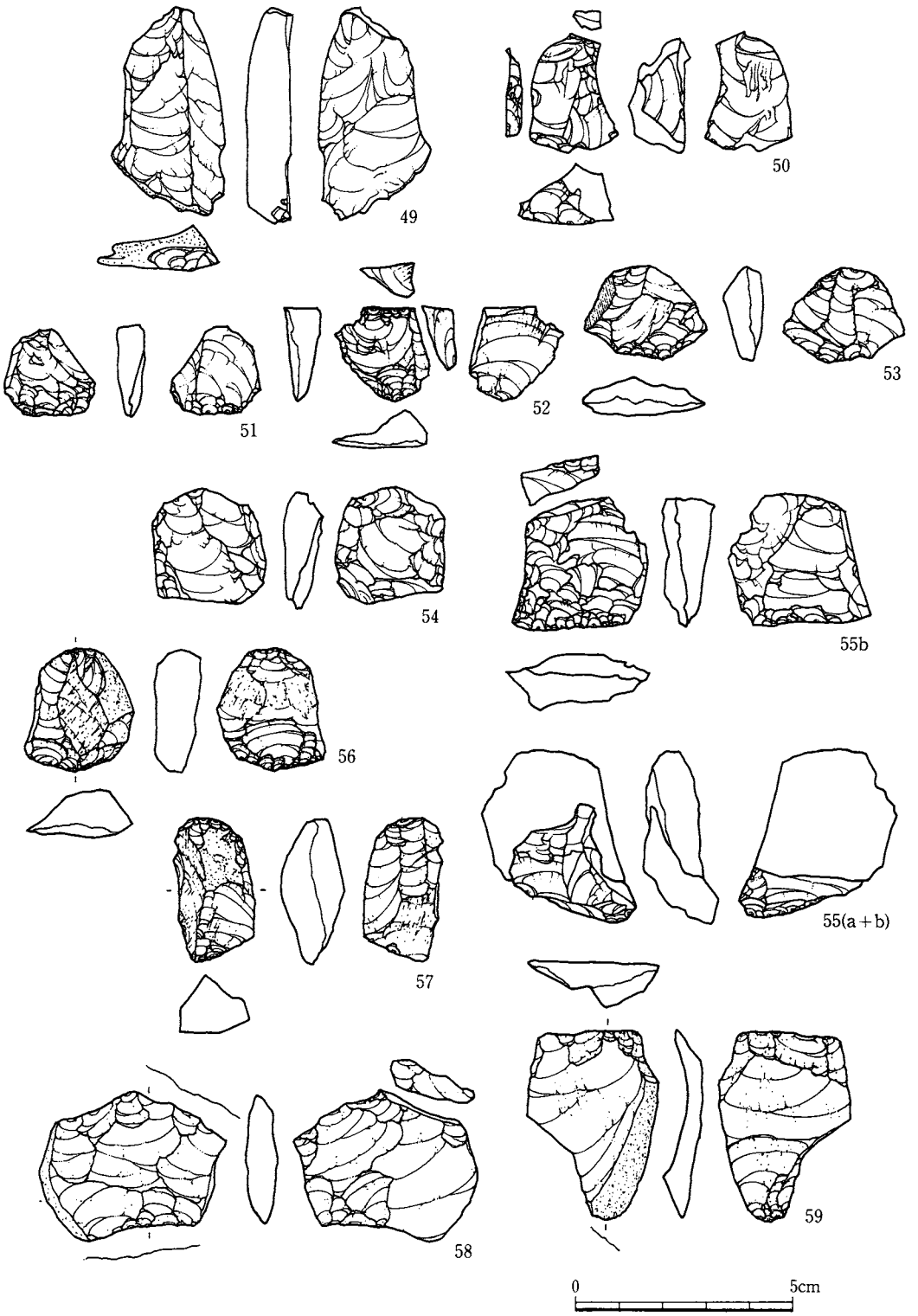
１ａ類に分類されるものは37、42の２点がある。１ｂ類には31、32、33、38、39、44の６点が含まれ、最も多く見られる。２ａ類は30、40の２点が認められる。２ｂ類は34、35、36の３点がある。43は２ bf 類、45は２ af 類とすることができようか。ただ単設打面であるか両設打面であるか、あるいは打面調整を行うか行わないかはとくに選択的に決定されたのではないと考えられる。現在残る石核にはそういった意味で偶発的な要素があろう。なお、41は元来細石核であったものが楔形石器に転用されているものである。細石刃の剝離痕の一部が残されており、また細石刃剝離時の打面が一部残されているようである。

細石核と細石刃の接合は44の一例のみ見られた。出土ブロックはIII３ブロックである。44a はほぼ完形であるが長幅比が小さく寸詰まりのもの。この個体(珪質頁岩17)は珪質頁岩の中でも珪化度が低く、良質な印象を与えない。

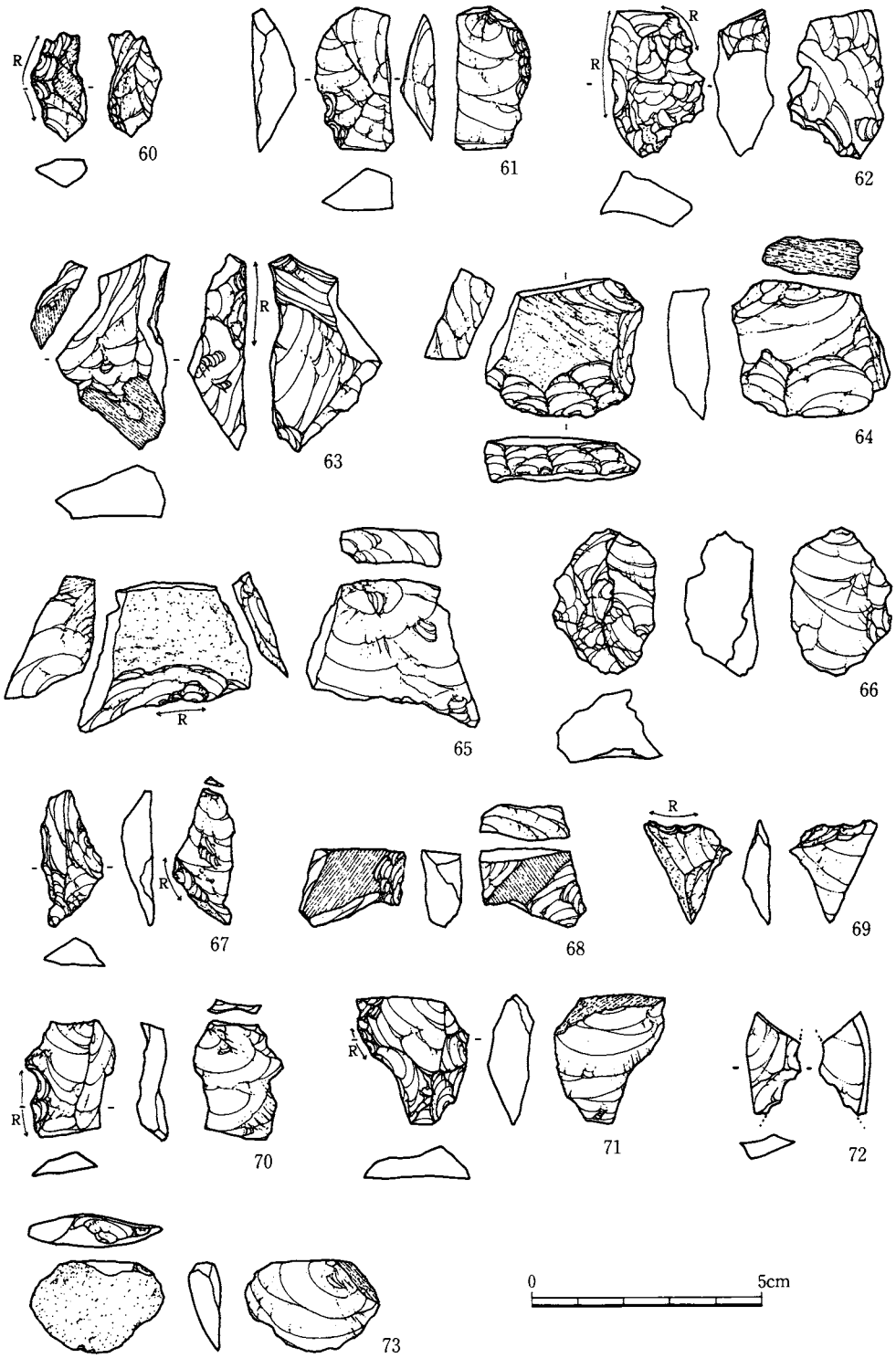
「尖頭器」　46の１点がある。安山岩２製で尖頭部を欠失している。横長剝片素材で腹面には打瘤の除去を目的としたと思われる調整痕が認められる。背面は周縁に加工が施される。非常に小型の石器で、end blade である可能性があるが、細石刃とは全く異なる石材が使用されていることに疑問が残る。

他の剝片石器　47は石錐である。珪質頁岩１製のやや縦長の剝片の頭部に加工を施し、錐部を作出している。48は削器である。安山岩２製の横長剝片を用いて、打面部側に刃部を形成している。49、50は掻器である。両者共に珪質頁岩６で縦長の剝片の末端に刃部を持つ点も共通している。また刃部調整角はいずれも急斜なものである。

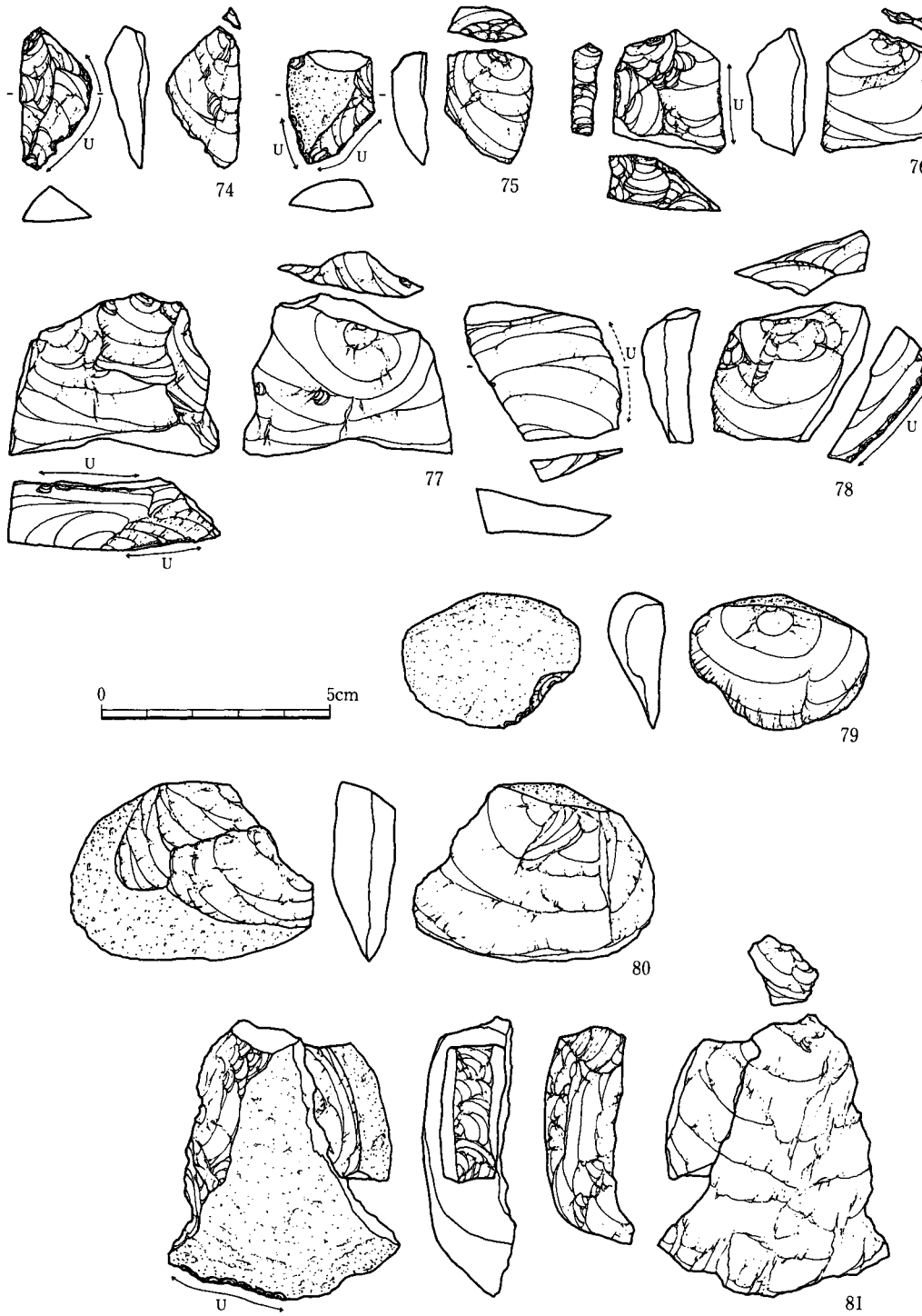
加工痕を有する剝片は他にも数多い。60～72までに示したが、64、68を明確な削器とすることができる以外にも削器あるいは掻器としての機能を想定できる石器が多い。60は砕けた小さな剝片であるが、左側縁に二次的剝離痕が見られる。元来、より大きな削器であったものか。



第200図　大割遺跡第７文化層出土石器(4)（2/3）



第201図　大割遺跡第７文化層出土石器(5)（2/3）

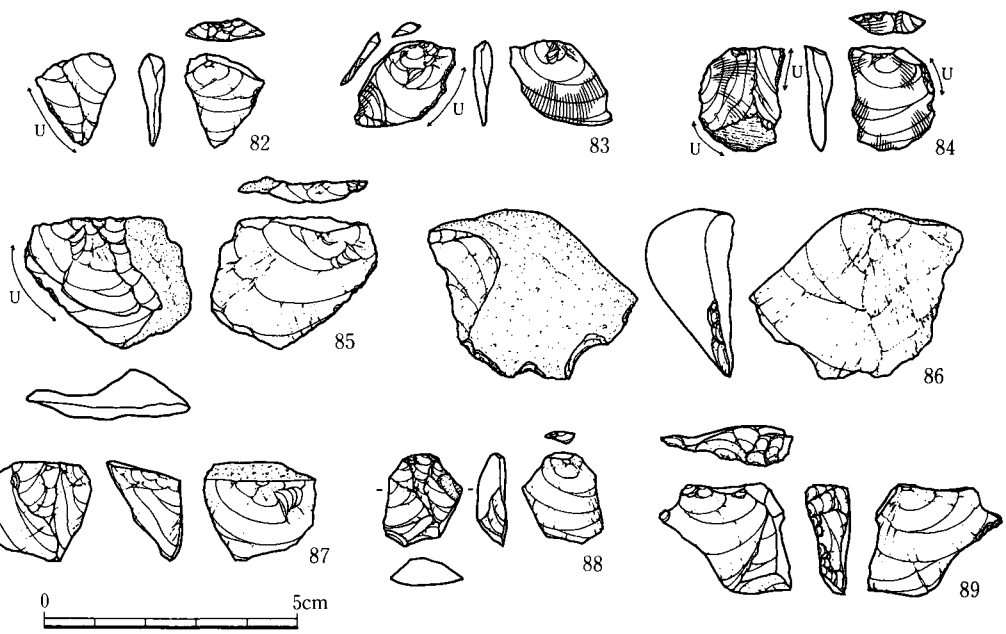


第202図　大割遺跡第７文化層出土石器(6)（2/3）

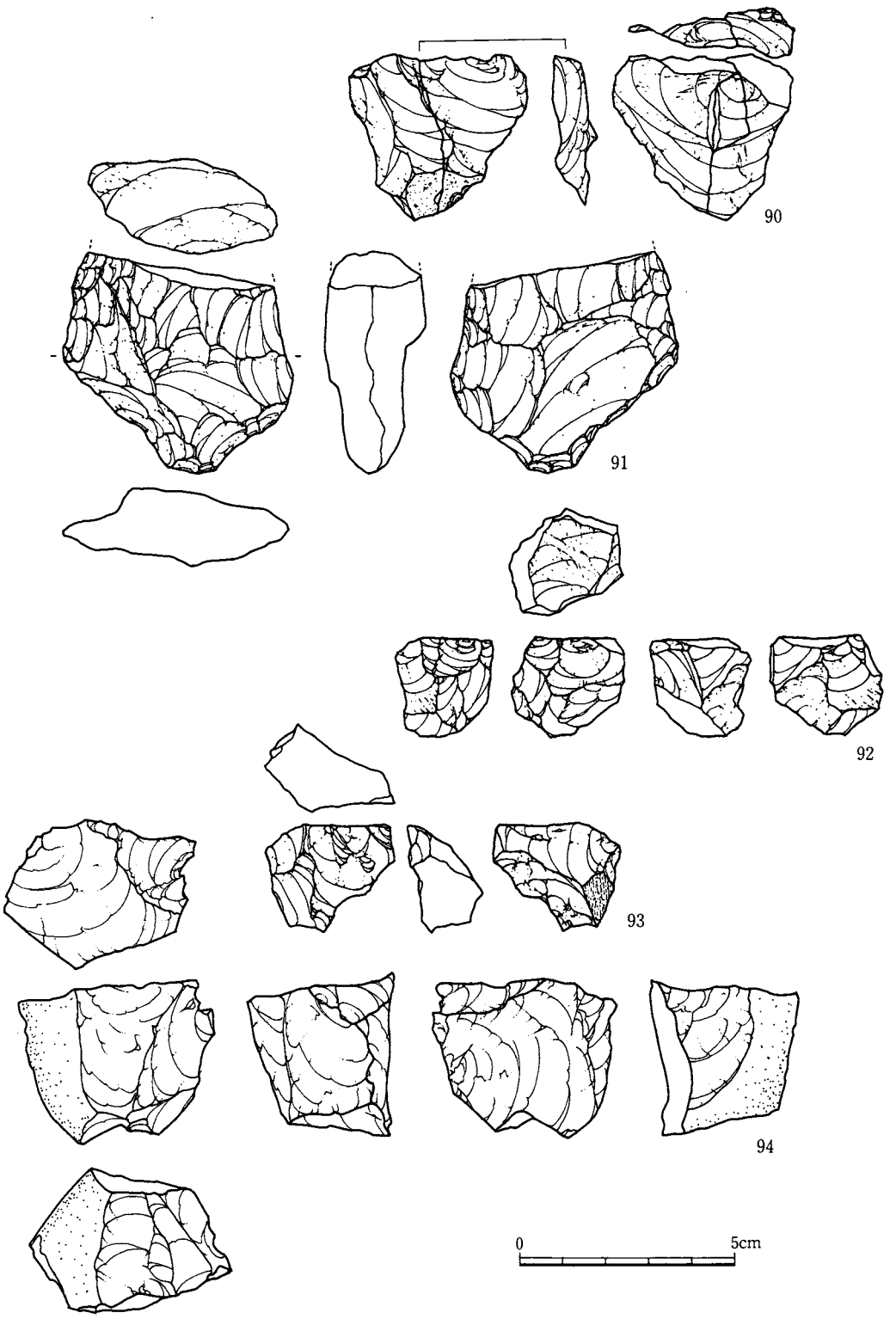
61は折断面を持つ剝片の、折断面の反対側である背面左側縁(腹面右側縁)全体に刃部が作出されているものである。上半は腹面に、下半は背面に二次加工が施される。62は分厚い剝片の縁辺の一部に急斜な剝離が加えられるものである。とくに右側縁端部の加工痕は掻器刃部のような機能を発揮するものと思われる。63は折断されたと思われるやや大振りな剝片の折断面に二次加工が認められるものである。60、61、63は珪質頁岩製、62はチャート製。

64、68は同じ粘板岩1製の削器である。64は大略矩形を呈する板状の剝片の下縁全体に整った刃部が形成されている。68は表裏とも節理面で割れているため主要剝離面がよく解らず、また上方は折れていると思われるが、やはり板状の剝片で右側縁に二次加工痕を持つ。65は珪質頁岩4製の分厚い台形を呈する剝片の下縁中央に僅かな二次的な剝離痕を有するものである。性格はよく判らない。66は両極打法によって打ち割られたと思われる剝片で、中央に高い稜を持つ。細石核ブランクを得る時の副次的生産物か。二次的剝離痕は背面左側縁、腹面右側縁の一端に認められる。珪質頁岩10。67は珪質頁岩23の狭小な剝片で腹面左側縁下方に二次加工が認められる。69は安山岩3製の逆三角形を呈する剝片の頭部に加工が施されているものである。末端は鋭い尖頭状をなす。70は珪質頁岩4の剝片の左側縁に加工痕を有するもので、その一部はノッチ状の剝離になっている。71も左側縁の一部、湾曲して張り出した部分に加工痕を有するものである。珪質頁岩1。72は上下端とも折れているが、右側縁に連続的な加工痕があったと推定されるものである。安山岩2。

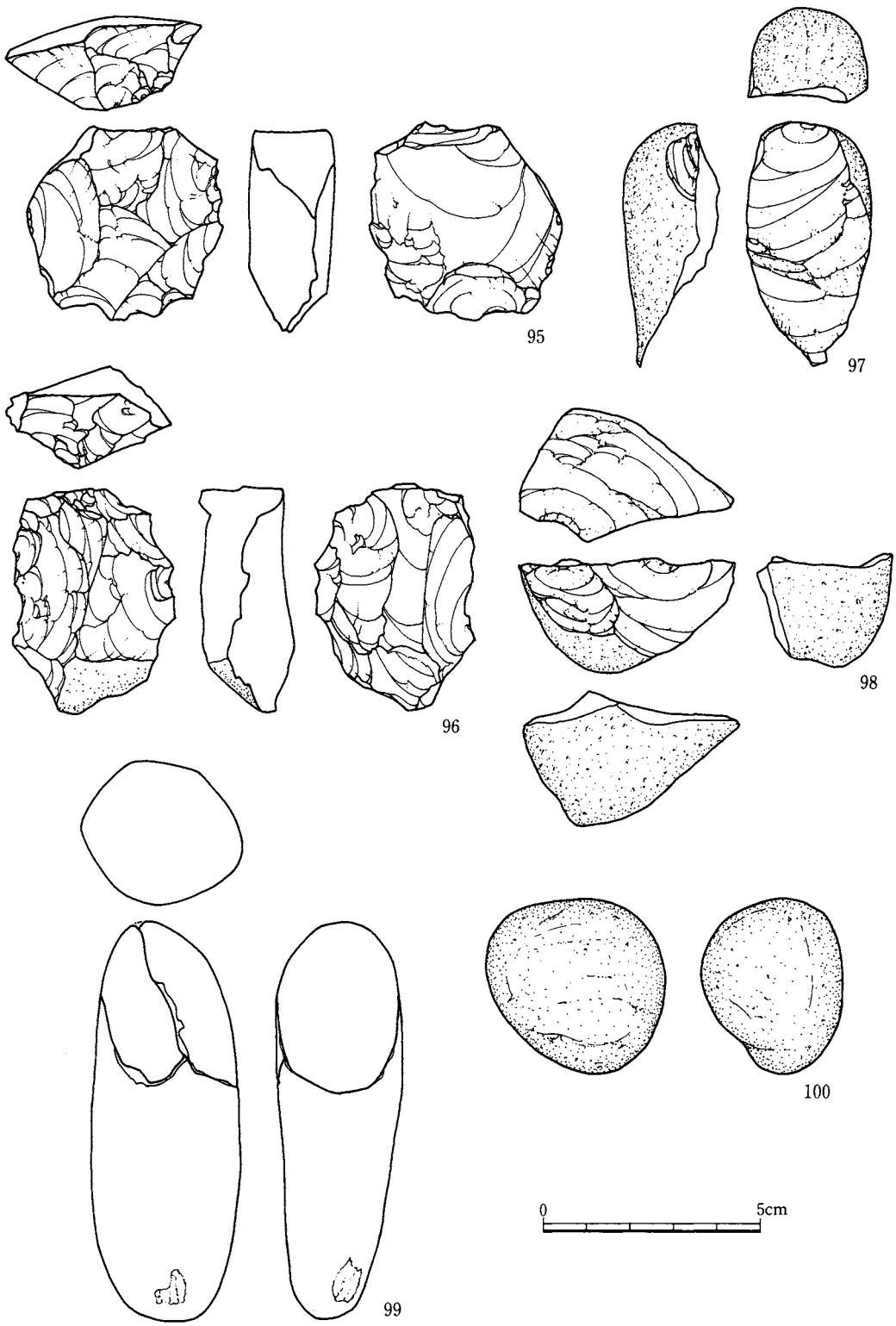
顕著な二次加工痕を持たないが、使用痕と思われる刃こぼれ状の微細な剝離を認めるものを



第203図　大割遺跡第7文化層出土石器(7)(2/3)



第204図　大割遺跡第７文化層出土石器(8)（2/3）



第205図　大割遺跡第７文化層出土石器(9)（2/3）

第65表　大割遺跡第７文化層出土石器計測表(1)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	打角 剥離角	分割部位	欠損	使用痕
1	細石刃	C4－82－16	珪質頁岩	—	20.2	6.6	2.3	—	—	T	—	—
2	細石刃	B4－67－11	珪質頁岩	1	12.0	6.6	1.9	0.17	106°	T	—	—
3	細石刃	C4－70－1	珪質頁岩	1	11.9	6.6	2.2	0.12	—	D	?	—
4	細石刃	B4－66－9	珪質頁岩	1	17.3	5.7	1.8	0.12	—	B	—	—
5	細石刃	B4－66－15	珪質頁岩	1	20.2	11.9	6.2	0.69	—	B	—	○
6	細石刃	B4－67－38	珪質頁岩	2	14.8	9.9	4.1	0.39	—	B	—	○
7	細石刃	B4－59－13	珪質頁岩	2	14.5	5.5	1.6	0.16	104°	T	—	○
8	細石刃	C4－92－22	珪質頁岩	2	11.0	7.5	1.7	0.15	116°	T	—	○
9	細石刃	B4－67－22	珪質頁岩	2	12.4	6.3	2.1	0.16	120°	T	—	—
10	細石刃	B4－69－21	珪質頁岩	2	10.3	8.1	2.7	0.22	114°	T	—	—
11	細石刃	B4－88－3	珪質頁岩	2	6.6	5.6	1.4	0.05	—	D	?	—
12	細石刃	B4－66－6	珪質頁岩	2	12.6	5.3	1.9	0.13	98°	T	—	○
13	細石刃	C4－60－17	珪質頁岩	2	18.3	6.1	2.2	0.29	108°	T	—	—
14	細石刃	C4－82－7	珪質頁岩	2	14.3	6.8	2.5	0.21	114°	T	—	○
15	細石刃	B4－67－20	珪質頁岩	3	12.5	4.8	1.8	0.12	—	B	—	—
16	細石刃	B4－66－8	珪質頁岩	3	24.5	7.9	3.5	0.37	—	K	○	—
17	細石刃	B4－57－4	珪質頁岩	5	24.4	5.9	3.3	0.42	114°	T	—	○
18	細石刃	B4－69－13	珪質頁岩	3	18.7	5.2	2.2	0.15	—	D	—	○
19	細石刃	B4－67－29	珪質頁岩	3	12.8	6.3	1.6	0.16	116°	T	—	—
20	細石刃	B4－66－12	珪質頁岩	7	19.4	7.1	1.9	0.26	—	D	?	—
21	細石刃	B4－57－9	珪質頁岩	11	14.9	4.9	2.1	0.16	116°	T	—	—
22	細石刃	B4－67－15	珪質頁岩	7	11.2	6.2	1.3	0.09	—	T	—	—
23	細石刃	B4－59－7	珪質頁岩	14	13.7	7.8	2.0	0.17	108°	T	?	○
24	細石刃	B4－66－4	珪質頁岩	14	17.9	6.3	1.9	0.26	—	D	—	○
25	細石刃	B4－57－12	珪質頁岩	15	14.6	6.0	1.9	0.15	102°	T	—	—
26	細石刃	B4－68－18	黒曜石	2	11.1	7.0	2.4	0.18	—	D	—	○
27	細石刃	C4－82－20	黒曜石	1	12.6	7.7	3.7	0.24	—	B	—	○
28	細石刃	B4－56－11	黒曜石	2	12.7	5.3	1.2	0.04	—	B	—	—
29	使用痕剥片	B4－76－1	珪質頁岩	1	6.9	10.9	2.1	0.15	—	—	○	○
30	細石核 2a	C4－70－5	珪質頁岩	1	20.6	15.4	18.0	4.81	72°	—	—	—
31	細石核 1b	B4－77－14	珪質頁岩	2	21.1	16.2	20.8	7.40	86°	—	—	—
32	細石核 1b	C4－60－25	珪質頁岩	2	25.8	13.3	16.6	5.57	80°	—	—	—
33	細石核 1b	B4－67－39	珪質頁岩	1	18.9	14.9	16.3	5.31	76°	—	—	—
34a	細石核 2b	B4－67－16	珪質頁岩	5	20.5	22.6	13.7	4.27	—	—	—	—
34b	細石核 2b	B4－66－5	珪質頁岩	5	21.0	22.7	12.5	4.66	80°	—	—	—
35	細石核 2b	C4－82－12	珪質頁岩	19	24.2	18.1	14.8	5.82	86°	—	—	—
36	細石核 2b	B4－57－5	珪質頁岩	10	21.3	20.8	11.6	5.48	76°	—	—	—
37	細石核 1a	C4－82－17	珪質頁岩	20	23.0	13.4	8.3	3.30	74°	—	—	—
38	細石核 1b	B4－58－12	珪質頁岩	2	19.1	17.6	11.2	4.31	82°	—	—	—
39	細石核 1b	C4－82－9	珪質頁岩	6	15.0	15.9	6.3	1.47	74°	—	—	—
40	細石核 2a	C4－60－29	珪質頁岩	12	22.0	22.2	30.4	16.30	78°	—	—	—
41	楔形石器	B4－66－16	珪質頁岩	1	25.6	20.6	11.9	5.27	—	—	—	—
42	細石核 1a	B4－67－24	珪質頁岩	3	23.0	18.6	24.3	9.30	80°	—	—	—
43	細石核 2bf	C4－82－41	珪質頁岩	6	35.2	26.2	15.8	9.61	74°	—	—	—
44a	細石刃	C4－92－30	珪質頁岩	17	12.1	7.6	1.5	0.18	—	K	○	—
44b	細石核 1b	C4－92－14	珪質頁岩	17	28.5	22.6	23.3	14.08	82°	—	—	—
45	細石核 2af	B4－67－43	珪質頁岩	2	28.2	33.7	10.0	8.49	80°	—	—	—

※分割部位　T：頭部、D：胴部、B：尾部、K：ほぼ完形

第66表　大割遺跡第７文化層出土石器計測表(2)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
46	「尖頭器」	C4-92-25	安山岩	2	18.0	13.0	4.6	1.23	－	○	－
47	石錐	B4-67-5	珪質頁岩	1	28.4	17.3	6.4	2.65	－	－	－
48	削器	B4-67-2	安山岩	2	44.3	24.8	14.0	13.25	60°	－	－
49	掻器	C4-82-6	珪質頁岩	6	49.9	26.1	11.1	12.61	66°	－	－
50	掻器	C4-92-16	珪質頁岩	6	27.3	21.0	12.6	6.41	62°	－	－
51	楔形石器	B4-69-7	珪質頁岩	2	21.6	20.7	7.6	2.53	－	－	－
52	楔形石器	C4-82-8	珪質頁岩	4	22.2	19.3	8.4	2.98	－	－	－
53	楔形石器	B4-69-26	粘板岩	1	21.9	26.5	8.9	4.42	－	－	－
54	楔形石器	B4-59-17	粘板岩	1	25.4	25.6	9.4	6.51	－	－	－
55a	楔形石器削片	C4-60-23	珪質頁岩	3	26.9	28.7	16.7	10.43	－	－	－
55b	楔形石器	C4-60-26	珪質頁岩	3	30.8	31.1	11.3	16.56	－	－	－
56	楔形石器	C4-92-18	珪質頁岩	26	28.6	24.4	10.7	7.64	－	－	－
57	楔形石器	B4-56-9	珪質頁岩	7	33.4	16.6	15.4	7.46	－	－	－
58	楔形石器	B4-68-11	安山岩	1	31.9	42.2	7.6	13.26	－	－	－
59	楔形石器	C4-82-14	安山岩	2	43.2	30.3	10.3	8.10	－	－	－
60	二次加工剥片	C4-82-19	珪質頁岩	2	22.8	12.8	8.1	1.61	68°	?	－
61	二次加工剥片	B4-59-19	珪質頁岩	22	31.8	16.0	8.0	4.59	62°	－	－
62	二次加工剥片	C4-70-2	チャート	1	32.0	21.2	12.7	7.14	66°	－	－
63	二次加工剥片	B4-69-23	珪質頁岩	1	42.6	23.8	12.7	9.67	76°	－	－
64	削器	B4-69-8	粘板岩	1	30.8	33.1	8.2	11.71	38°	－	－
65	二次加工剥片	B4-69-11	珪質頁岩	4	32.2	37.1	14.9	15.43	60°	－	－
66	二次加工剥片	B4-78-5	珪質頁岩	10	31.5	22.7	15.6	8.71	－	－	－
67	二次加工剥片	C4-70-11	珪質頁岩	23	30.1	13.2	7.0	1.78	－	－	－
68	削器	B4-59-11	粘板岩	1	17.4	22.6	8.3	3.68	68°	?	－
69	二次加工剥片	B4-67-35	安山岩	3	23.1	18.5	6.9	1.44	70°	－	－
70	二次加工剥片	B4-77-11	珪質頁岩	4	25.1	20.3	6.8	2.32	58°	－	－
71	二次加工剥片	B4-89-3	珪質頁岩	1	27.7	23.4	10.5	4.48	70°	－	－
72	二次加工剥片	B4-66-10	安山岩	2	21.9	11.4	5.2	1.22	－	○	－
73	剥片	C4-60-9	頁岩	4	20.1	29.5	7.4	4.08	－	－	－
74	使用痕剥片	B4-56-10	珪質頁岩	1	31.5	16.3	8.9	2.93	－	－	○
75	使用痕剥片	B4-69-19	珪質頁岩	4	25.0	20.2	7.6	3.62	－	－	○
76	使用痕剥片	C4-60-31	珪質頁岩	2	26.3	25.4	12.9	8.72	－	－	○
77	使用痕剥片	C4-81-8	珪質頁岩	10	34.4	45.8	15.2	27.46	－	－	○
78	使用痕剥片	C4-93-5	珪質頁岩	2	30.3	33.3	11.9	11.25	－	－	○
79	剥片	B4-77-12	珪質頁岩	24	30.1	40.4	13.4	14.22	－	－	－
80	剥片	B4-69-14	砂山	4	39.9	53.3	13.6	24.46	－	－	－
81	使用痕剥片	B4-57-2 C4-71-3	チャート	1	60.8	50.7	16.8	61.55	－	○	○
82	使用痕剥片	B4-89-6	珪質頁岩	22	18.0	15.9	4.8	0.85	－	－	○
83	使用痕剥片	C4-81-1	黒曜石	2	16.5	20.3	4.1	0.85	－	－	○
84	使用痕剥片	C4-82-11	黒曜石	2	20.2	16.2	5.5	1.42	－	－	○
85	使用痕剥片	C4-60-34	チャート	2	25.9	32.7	10.3	5.80	－	－	○
86	二次加工剥片	B4-89-2	砂山	4	33.7	40.9	16.9	17.56	－	－	－
87	剥片	C4-82-28	珪質頁岩	21	18.7	22.4	14.4	4.23	－	－	－
88	剥片	C4-81-7	珪質頁岩	21	17.7	15.4	5.9	1.54	－	－	－
89	剥片	B4-79-5	珪質頁岩	11	22.3	26.2	8.1	3.20	－	－	－
90	剥片	B4-67-7•44 C4-71-3	珪質頁岩	5	37.6	41.1	10.0	15.27	－	○	－

第67表　大割遺跡第７文化層出土石器計測表 (3)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角調整角	欠損	使用痕
91	打製石斧？	B4-68-5	砂岩質ホルンフェルス	1	50.8	52.2	23.1	55.54	−	○	−
92	石核	B4-69-16	チャート	3	23.5	30.2	22.7	10.05	−	−	−
93	石核	B4-67-26	珪質頁岩	5	24.2	30.5	17.1	7.14	−	−	−
94	石核	B4-67-3	珪質頁岩	4	35.1	44.6	33.5	55.90	−	−	−
95	石核	B4-66-17	珪質頁岩	12	45.2	44.9	20.2	45.60	−	−	−
96	石核	B4-69-4	珪質頁岩	13	36.8	50.1	18.0	37.76	−	−	−
97	石核	C4-92-4	安山岩	2	56.1	28.1	21.8	38.20	−	−	−
98	石核	C4-82-37	頁岩	7	26.6	50.9	30.4	31.70	−	−	−
99	敲石	B4-67-6,34,40	砂岩	1	91.4	33.8	30.6	143.8	−	○	○
100	原石	B4-69-29	珪質頁岩	25	40.7	40.9	31.9	70.52	−	−	−

74～78、81～85に示した。74～76、82は珪質頁岩製、83、84は黒曜石２製、85はチャート２製で、いずれも鋭利な刃部をなす側縁に使用痕が観察されるものである。またそれらは細石核調整剝片を石器に転用したものが多い。一方77、78は上記の石器と異なり、剝離面、主要剝離面に対し直交する面に微細な剝離痕が観察される例である。77は底面の上下両縁に、78は左側面に使用痕がある。74～76、82～85は刃器として77、78は削器としての機能を有していたと推察される。81は折れ面で２点が接合した。末端の一部に連続した微細剝離痕が認められる。

73、79、80、86は粗製貝殻状剝片である。あるいは85もこれに加えられる。とくに73、79は背面が礫皮面によって覆われている。これらの中では79が良質な珪質頁岩24で細石核ブランク作出時の打面作出剝片である可能性もあるが、73は頁岩４、80、86は砂岩４で粗粒の石材が用いられており、目的的な粗製刃器であろうと考えられる。なお73、79、86には二次的な剝離痕が見られるが、73、79については加工痕ないし使用痕とは明断できない。

87～89に細石核調整剝片を示す。87は初期の調整による産物である。88は調整の進んだ段階で作業面の作出あるいは再生に係るものであろう。この２点は珪質頁岩21製。89は打面から右側面にかけて背面を打面とした剝離痕が連続しており、その一部は細石刃の剝離痕と思われる。また背面には打面調整痕と考えられる小剝離痕が認められ、あきらかにこれは打面再生剝片である。珪質頁岩11。90はやや大振りな剝片の接合資料であるが、剝離時の加撃によって３点に破砕されて剝離されたものである。

楔形石器　41以外に51～59までの９点を楔形石器とする。53、54が粘板岩１、58が安山岩１、59が安山岩２であり、他はすべて珪質頁岩製。51～53はほぼ台形を呈する小型品である。54、55bはほぼ矩形を呈するが、これらは四辺に剝離痕を残すものである。また55bには加撃によって弾けた55aが接合している。55bの下縁には典型的な潰れ、微細剝離痕が観察されるのは勿論であるが、55aの下縁にも同様の微細剝離痕が認められる。56、57は厚みがあり、とくに57は角

柱状とも言い得るもの。58は全体に薄手のものであるが、下縁からの剝離によって素材の形状が大きく変わっている。59は横長のもので、剝離面の稜線も不明瞭なほど風化が進んでいる。腹面側には打面と主要剝離面の一部が残されている。これら楔形石器は41を加えて計10点を数えるが、その半数の5点がIII 2ブロックから検出されている。

打製石斧？　91は砂岩質ホルンフェルスを用いた石器で、過半を欠損しているものと思われる。欠損部の形状、調整、使用痕などが明らかでないので何とも言い難いが、打製石斧状の石器である。刃部があるとすれば下縁ではなく欠損部側か。

石核　92、93は小型の石核である。92は暗赤色のチャート製で上方からの剝離痕が多く見られる。上面の打面は再生され、さらに細かい剝離痕が残されている。遺跡内に剝片は遺存しない。93は珪質頁岩5製で、多方向からの剝離痕が交錯している。94は賽子状を呈する石核である。一部に礫皮面を残すが、概ね各面単位で剝片が生産されている。珪質頁岩4。95、96は円盤状を呈する石核である。いずれも大型の剝片を素材としており、求心的な剝離痕が残されている。剝片生産は背腹両面で行われるが、背面側が剝片剝離痕で覆われるのに対し、両者共に主要剝離面は大きく残されている。また打面側はいずれも背面側からの加撃が観察される。この2点はきわめて類似した珪質頁岩で同一母岩であった可能性があるが、明断できないため別個体とする。97、98はともに礫皮面を大きく残した石核である。97は安山岩2製で分割痕とも言える大きな一枚の剝離痕が見られる。98は頁岩7製で分割面を打面として2枚の剝離痕を残している。

敲石　99の1点が見られるのみである。粗粒の砂岩の棒状礫を用いており、上端で破損していたものが接合した。また下端近くの側面には敲打痕が2箇所に認められる。III 1ブロックのほぼ中央部で出土した。

原石　100は鶏卵大より若干小ぶりの円礫である。細石器に多用される石材に類した質の珪質頁岩である。この礫も細石核となるべく遺跡に搬入された石材か。

④大割遺跡第7文化層のまとめ

母岩別資料の分布とユニットの構成　当文化層においては資料の点数に比して接合資料に乏しい。したがってユニット構成の考察には主として母岩別資料分析に頼ることになるが、当文化層の主体となる珪質頁岩は母岩別分類の困難なものが多く、大きな誤りはないとしても若干の誤りは含んでいる可能性があることを初めに記しておく。

まず珪質頁岩の分布では、量的にまとまった個体でもユニット全体に分布するものと特定のブロックに集中的に分布するものがある。

ユニット全体に分布する個体は珪質頁岩2、4である。

珪質頁岩2には細石刃9点と細石核4点が含まれており、それらは各ブロックに散らばって

いる。また他に剝片も多く点数比、重量比共に大きな割合を占めるが、これには複数の個体が分離できなかった可能性もあり、殊更重視すべき現象ではないかも知れない。珪質頁岩４も、剝片主体の個体であるが、複数個体が分離できなかった可能性は同様にある。

Ⅲ１ブロックに主体的に分布する個体には珪質頁岩１、３、５、７がある。

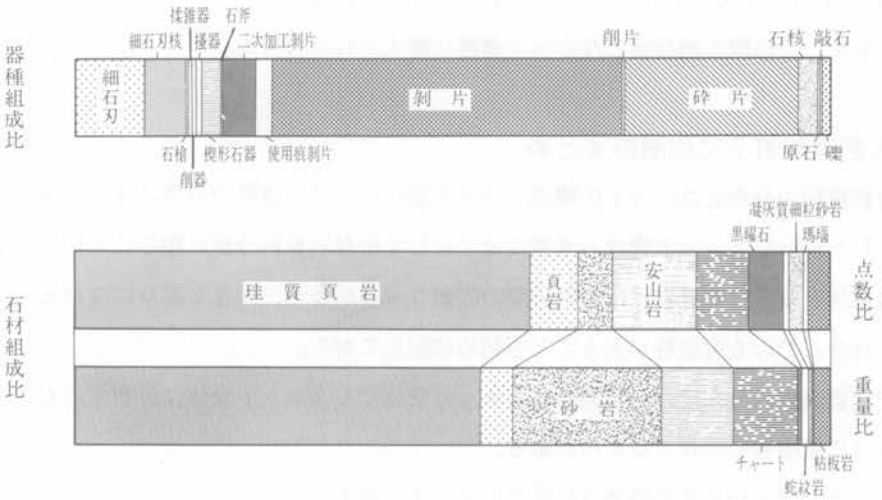
これらはいずれも細石刃を生産した個体である。うち珪質頁岩１、３、７はⅢ２ブロックにも分布の広がりを見せるが、細石刃、細石核についてはともに１点ずつを除けばすべてⅢ１ブロックにあり、とくに細石核はブロック南半部に集中する。他に単体資料では珪質頁岩15(細石刃１点）と珪質頁岩17(細石核１点)がⅢ１ブロックから出土している。

Ⅲ２ブロックに主体的に分布する個体には珪質頁岩８、９、22、26がある。

うち珪質頁岩26についてはⅢ３ブロックにも１点分布する。上記４個体には細石刃、細石核は一切含まれていない。これは特徴的な現象として評価できる。単体資料またはごく少量の個体としては珪質頁岩11、12、13、24、25がある。珪質頁岩11には細石刃１点、珪質頁岩12には細石核１点が含まれ、珪質頁岩25は原石として搬入された小礫である。

Ⅲ３ブロックに主体的に分布する個体には珪質頁岩６、14、そして少量の個体であるが珪質頁岩17がある。

これら３個体はいずれも細石刃を生産した個体である。珪質頁岩６及び17は細石核がⅢ３ブロック内に残されている。また珪質頁岩17についてはブロック内で細石刃と細石核の接合資料が見られる。他方珪質頁岩14には細石刃２点があるが、それらはⅢ１ブロックとⅢ２ブロックに１点ずつ離れて出土しており、Ⅲ３ブロックには細石核の調整剝片のみが残されている。他に単体資料またはごく少量の個体として珪質頁岩18、19、20、21、23がある。これらのうち珪



第206図　大割遺跡第７文化層出土石器組成

第68表　大割遺跡第７文化層出土石器組成表(1)

個体番号	細石刀	細石核	尖頭器	石錐	掻器	削器	二次加工剥片	使用痕剥片	剥片	楔形石器	打製石斧	削片	砕片	石核	原石	敲石	礫	計	総重量（g）
珪質頁岩１	4	2	−	1	−	−	2	2	4	1	−	−	1	−	−	−	−	17	46.94
珪質頁岩２	9	4	−	−	−	−	1	2	14	1	−	−	9	−	−	−	−	40	82.84
珪質頁岩３	4	1	−	−	−	−	−	−	8	1+1	−	−	−	−	−	−	−	15	39.04
珪質頁岩４	−	−	−	−	−	−	2	1	10	1	−	−	1	1	−	−	−	16	119.32
珪質頁岩５	1	1+1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	1	−	−	−	6	32.05
珪質頁岩６	−	2	−	−	2	−	−	−	4	−	−	−	3	−	−	−	−	11	23.74
珪質頁岩７	2	−	−	−	−	−	−	−	2	1	−	−	2	−	−	−	−	7	8.77
珪質頁岩８	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	7	−	−	−	−	10	34.68
珪質頁岩９	−	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	2	−	−	−	−	4	2.18
珪質頁岩10	−	1	−	−	−	−	1	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	41.65
珪質頁岩11	1	−	−	−	−	−	−	−	2	−	−	−	−	−	−	−	−	3	4.45
珪質頁岩12	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	2	61.90
珪質頁岩13	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	37.76
珪質頁岩14	2	−	−	−	−	−	−	−	5	−	−	−	2	−	−	−	−	9	8.45
珪質頁岩15	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	0.15
珪質頁岩16	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1.00
珪質頁岩17	1	1	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	4	15.12
珪質頁岩18	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	3	1.22
珪質頁岩19	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	5.82
珪質頁岩20	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3.30
珪質頁岩21	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	3	6.96
珪質頁岩22	−	−	−	−	−	−	1	1	10	−	−	−	−	−	−	−	−	12	26.62
珪質頁岩23	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	2	2.64
珪質頁岩24	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	14.22
珪質頁岩25	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	1	70.52
珪質頁岩26	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	−	−	3	−	−	−	−	5	9.19
珪質頁岩27	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	−	−	−	−	2	9.28
頁岩１	−	−	−	−	−	−	−	−	6	−	−	−	1	−	−	−	−	7	23.84
頁岩２	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	3	2.01
頁岩３	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3.54
頁岩４	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	4.08
頁岩５	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	2.06
頁岩６	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1	0.65
頁岩７	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	31.65
頁岩８	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	0.91
粘板岩１	−	−	−	−	−	2	−	−	1	2	−	−	4	−	−	−	−	9	31.90
砂岩１	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1③	−	③	143.80
砂岩２	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	6.51
砂岩３	−	−	−	−	−	−	−	−	6	−	−	−	2	−	−	−	−	8	16.83
砂岩４	−	−	−	−	−	−	1	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	2	42.02
ホルンフェルス１	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	1	55.54
チャート１	−	−	−	−	−	−	1	1	6	−	−	−	4	−	−	−	−	12	90.84
チャート２	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	5.80
チャート３	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	1	10.05
チャート４	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	−	3	−	−	−	−	6	6.98
蛇紋岩１	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	2	2	9.06
瑪瑙１	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	1	1.75

第69表　大割遺跡第７文化層出土石器組成表(2)

個体番号	細石刀	細石核	尖頭器	石錐	掻器	削器	二次加工剥片	使用痕剥片	剥片	楔形石器	打製石斧	削片	砕片	石核	原石	敲石	礫	計	総重量（g）
安山岩１	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	2	16.84
安山岩２	－	－	1	－	－	1	2	－	11	1	－	1	5	1	－	－	－	23	101.93
安山岩３	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	1	－	－	－	－	2	2.20
安山岩４	－	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	1	－	－	－	－	3	5.10
安山岩５	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	1	0.23
安山岩６	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1.12
安山岩７	－	－	－	－	－	－	－	－	4	－	－	－	2	－	－	－	－	6	6.48
黒曜石１	1	－	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	4	－	－	－	－	7	3.09
黒曜石２	2	－	－	－	－	－	－	2	－	－	－	－	3	－	－	－	－	7	3.31
珪質頁岩計	26	16	－	1	2	－	8	7	74	6+1	－	－	36	4	1	－	－	181	709.81
頁岩計	－	－	－	－	－	－	－	－	13	－	－	－	1	1	－	－	1	16	68.74
粘板岩計	－	－	－	－	－	2	－	－	1	2	－	－	4	－	－	－	－	9	31.90
砂岩計	－	－	－	－	－	－	1	－	8	－	1	－	2	－	－	1	－	13	264.70
チャート計	－	－	－	－	－	－	1	2	9	－	－	－	7	1	－	－	－	20	113.67
蛇紋岩計	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2	2	9.06
瑪瑙計	－	－	－	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	－	－	1	1.75
安山岩計	－	－	1	－	－	1	2	－	20	2	－	1	10	1	－	－	－	38	133.90
黒曜石計	3	－	－	－	－	－	－	2	2	－	－	－	7	－	－	－	－	14	6.40
総計	29	16	1	1	2	3	12	11	128	10+1	1	1	67	7	1	1	3	294	1339.73
百分率	9.6	5.5	0.3	0.3	0.7	1.0	4.1	3.8	43.7	3.4	0.3	0.3	22.9	2.4	0.3	0.3	1.0	99.9	

※砂岩計の中にはホルンフェルスも含まれる。

質頁岩19、20は細石核が単独で出土したものであり、また珪質頁岩21は細石核調整剥片が３点検出されたものである。珪質頁岩20と21については同一母岩である可能性もある。

ここまで細石器の素材となった母岩が大きな割合を占める珪質頁岩を検討してきたが、上記の事実より、Ⅲ１ブロックとⅢ３ブロックの２箇所に細石刃生産の単位があり、それらは相互にあまり干渉しあっていないということが抽出される。

珪質頁岩以外の資料の分布はどうであろうか。まず黒曜石２がユニット全体に分布することが挙げられる。この場合、Ⅲ２ブロックに最も多い４点が分布し、Ⅲ１ブロックに細石刃１点が、Ⅲ３ブロックに使用痕のある剥片２点が見られた。この母岩別分類については珪質頁岩２、４の場合とは異なり、まず誤りはないと思われる。ユニット全体に分布する個体は他に見当たらない。ある程度まとまった個体で特徴的なものを抽出すると次のようになる。

Ⅲ１ブロックには砂岩３がまとまっており、２点はⅢ２ブロックにも分布する。この個体は砂岩の中では細粒のもので一般的な小型の剥片ばかりである。

Ⅲ２ブロックにはチャート１と粘板岩１がまとまっている。チャート１は１点がⅢ１ブロックにも離れて出土している。ともに剥片ばかりで、一部には加工が施され、削器などとなっている。

Ⅲ３ブロックには頁岩１、安山岩２、黒曜石１がまとまっている。頁岩１、安山岩２はあまり特徴のない剥片群であるが、安山岩２には削器及びそれに準ずる加工痕のあるもの、そして

「尖頭器」が含まれる。また安山岩2は3点がIII1ブロックからも出土している。黒曜石1は細石刃1点の他、細石核は残されていないものの、細石核調整剝片がIII3ブロックに集中して見られ、微細な調整剝片1点がIII2ブロックからも出土した。

これらの個体群の検討を経てもIII1ブロックとIII3ブロック相互の相対的な独自性は動かない。全体を通じて母岩別資料の分布には明らかなパターンが認められる。III1ブロックまたはIII3ブロックに主体的に分布する個体は細石刃生産に係るものが多く、他ブロックと母岩を共有する場合は少量がIII2ブロックにある。III2ブロックに主体的に分布する個体は細石刃生産に係るものが殆どない。いずれのブロックにも分布する個体はあまりなく、個体識別が不充分な可能性のある珪質頁岩2、4を除けば黒曜石2しか残らないが、これはIII2ブロックに主体的に分布し、少量がIII1ブロックとIII3ブロックに分有されるものと見ることもできよう。以上を要するに当ユニットは、互いに独立性を持ちながら細石刃生産を行った二つのブロックと、それら双方と一定の関係を保有する一つのブロックによって構成されることになる。

ユニットの形成　当ユニットを構成する各ブロックの同時性はここであらためて述べるまでもあるまい。またこれまで見てきたように、III1ブロックとIII3ブロックは相対的に独立的な石器製作空間であったのはほぼ明らかである。残るIII2ブロックであるが、このブロックにも細石刃及び細石核が含まれているものの量的には少ない。とくに細石核はその中心部には全く見られず、細石刃も分散的である。また個別の石器だけでなく細石刃生産に係る母岩別資料自体も主体的には分布しない。よってこのブロックの性格を他と同一視することはできない。代わってIII2ブロックに目立って検出されたのは、削器及びそれに準ずる加工を施された石器、楔形石器、そして粗製貝殻状剝片である。このブロックの場合、内部には石核が2点しか出しておらず、しかもその両者とも単体資料であって、細石刃以外の石器製作空間と考えるには非常な無理がある。したがってこのブロックは、削器、刃器、楔形石器などを用いる何らかの作業空間であり、またその空間は、母岩別資料の分布の検討より、石器製作において認められた2単位集団の共有の場であったと考えることができる。

ところで当ユニットは総体としては長径40m弱の南に開いた弧状分布を示している。三単位前後の遺物集中が連接する場合、弧状分布になることはよく見られる。大割遺跡でも第3文化層(V1～V3ブロック)、第4文化層(IV1～IV3ブロック)において観察されている。さらに第5文化層(III4～III7ブロック)も、環状分布に近いものでありながら西南方に遺物の途絶する部分がある。それらの開析方向は、大割遺跡の場合いずれも地形の規制に従っているように思える。すなわち当ユニットも含めていずれも埋没谷に面するように立地するが、開析方向は谷方向、つまり浅い窪みに対して開いている。これは単に埋没谷に面して並列するからという理由だけではなく、浅い窪地が集団にとって意味ある空間として認識されていたからにほかならないと思われる。

石器群の様相　当文化層出土石器群全体の組成は第68表～第69表に示したが、ここではまず石器群をいくつかのグループに分割してみたい。

グループA；細石刃。珪質頁岩の多くがこの生産に充てられる。

グループB；グループAの細石刃の生産工程で多量に生じる調整剝片などを素材にした石器で、部分的な加工が施された小型の剝片や石錐、縁辺に微細な刃こぼれのある剝片など。

グループC；一般的剝片剝離工程により生産される剝片を素材とする石器。珪質頁岩の一部や安山岩、粘板岩、チャートなどが用いられ、掻器、削器などがつくられるものをC1。砂岩など粗粒の石材を用いた貝殻状剝片をC2とする。

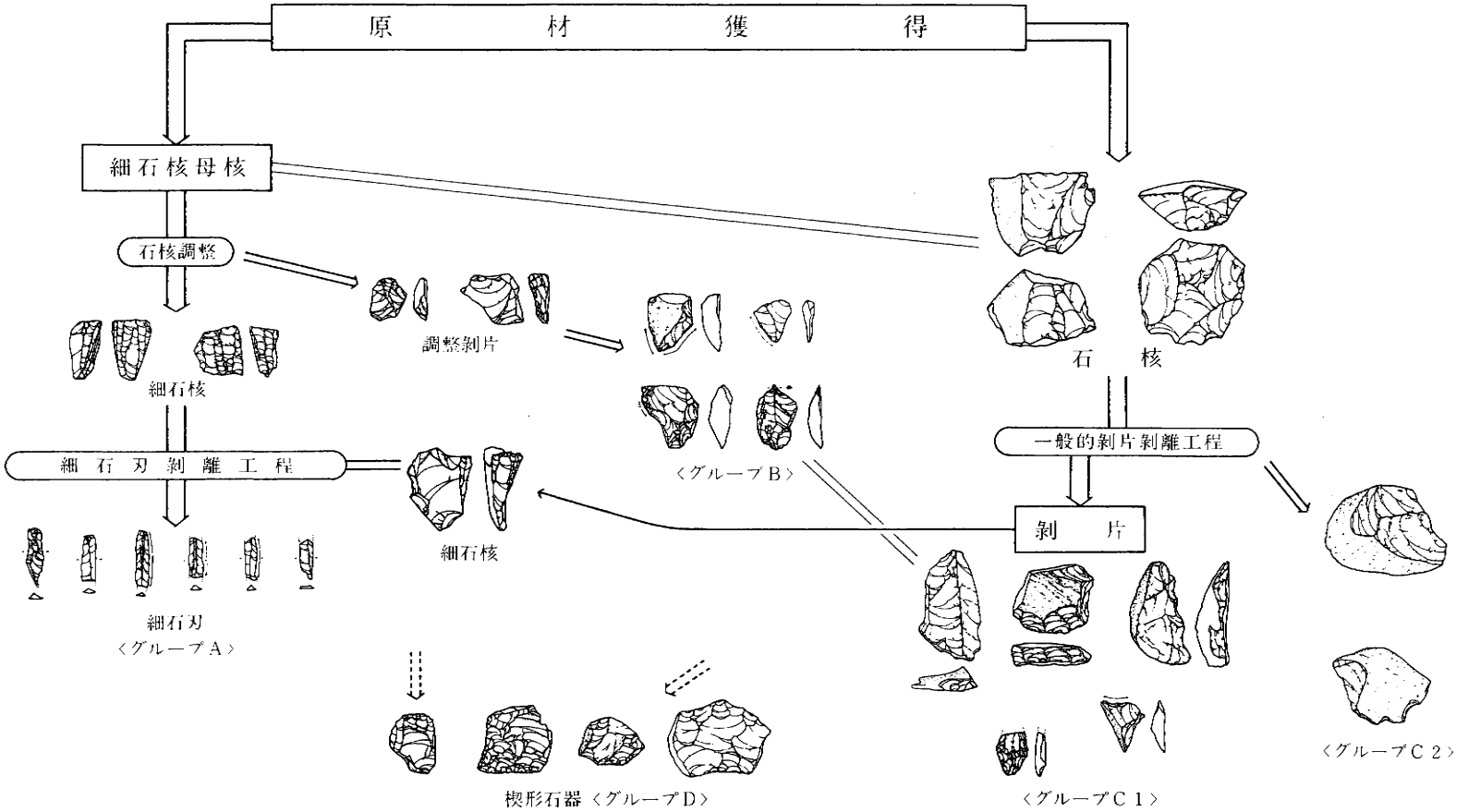
グループD；楔形石器。グループA、Bの工程からもグループCの工程からもつくられているが、近隣地域の類似石器群と比較して明らかに目立った存在であるため別グループとする。

石器群を生産する工程としては、細石刃生産を目的とした工程と剝片石器の生産を目的とした工程の2本の柱が並立している。その流れを表現したのが第207図である。図上では剝離の結果としての細石核、石核が剝離工程の前に置かれているが、便宜的手段として諒解願いたい。

原材が獲得されるとき、石材の選択は生産される石器、製作技法を念頭に置いてなされるであろうことは言うまでもない。当石器群においては、細石刃の生産には珪質頁岩(あるいは黒曜石)のみが用いられ、粘板岩や砂岩が細石刃に用いられることはない。しかしながら珪質頁岩などの良質な石材が獲得された場合、その特定の母岩がいかに消費されるかは当初から決定的なものではなく、分割・消費の過程の中において選択的に決定されよう。細石核の調整により調整剝片が生じ、石核から一般的剝片剝離工程によって剝片が生産されるが、逆にそのようにして素材を供給されたグループB及びグループC1の石器から見れば、精緻、微細な打面調整などは別として、細石核の調整と剝片生産は全く同レベルの過程と映る。また目的的な剝片か調整剝片かの区分は、それが打面再生などに係るものでなければやや曖昧となるのではないか。さらに言えば剝片生産を行ったある残核が、その後に若干の調整を加えられて細石核として供されることもありうる。とすれば図示した2点の石核などは細石核母核となりうるものである。勿論剝片も細石核の素材となる。そういった意味で当石器群に並立すると述べた二工程は、総体として見れば連鎖として成立しているとも言えるであろう。

さて当石器群の組成は、細石刃、掻器、削器(二次加工剝片)、刃器(使用痕剝片)、楔形石器を主要器種として、石錐及び尖頭器が付加されるという構成をとっている。他遺跡と比較した場合、楔形石器の卓越と礫器の欠如が特徴的である。

細石刃についてはここではとくに言及しない。また掻器、削器(二次加工剝片)については次の4種から構成される。



第207図　大割遺跡第7文化層出土石器群の構造

1．縦長の剝片の末端に急斜な調整を施す、いわゆるEnd-scraper。49、50。

2．いわゆるSide-scraper。48、60、64など。

3．いわゆるNotched-scraper。69、70など。

4．剝片の一端に部分的な調整を施すもの。62、71など。

当遺跡からは尖頭状の削器は出土していないが、これらの構成はこれまでに知られている多くの遺跡と基本的に大きく変わるものではない。また刃器、刃こぼれ状の微細剝離痕が認められる剝片群が多く含まれる点も然りである。

楔形石器、これについては他遺跡とは異なって明らかに目立つ存在となっている。野岳・休場型細石器石器群を豊富に出土した遺跡中楔形石器を含む遺跡自体少数であるが、それらの遺跡の中でも比率は小さい。最近報告された佐倉市大林遺跡第Ⅰ文化層[4]には楔形石器は2点しか存在せず、全体の中での比率は僅か0.3%に過ぎない。質量ともに豊富な相模野台地の細石器石器群にしても、大和市上草柳第3遺跡中央第Ⅰ文化層[5]、座間市栗原中丸遺跡第2文化層[6]で少量見られる程度である。対して大割遺跡の場合、楔形石器の組成比率は10点、3.4%と多く、Toolと認められる範囲内では13.5%に達する。時期を越えて普遍的に存在し続けるという楔形石器の性格上、とくに強調するに当たらないかも知れないが、当遺跡の特徴の一つとして指摘しておきたい。

註1　鈴木忠司「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石器文化」古代文化32-8 1971

2　佐藤達夫「旧石器・無土器(先土器)時代」『日本考古学の視点上』日本書籍 1974

3　安蒜政雄「日本の細石核」駿台史学47 1979

4　田村隆・他『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書』千葉県文化財センター　1989

5　堤隆・他『一般国道246号(大和・厚木バイパス）地域内遺跡発掘調査報告書』大和市教育委員会　1984

6　鈴木次郎・他『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター　1984

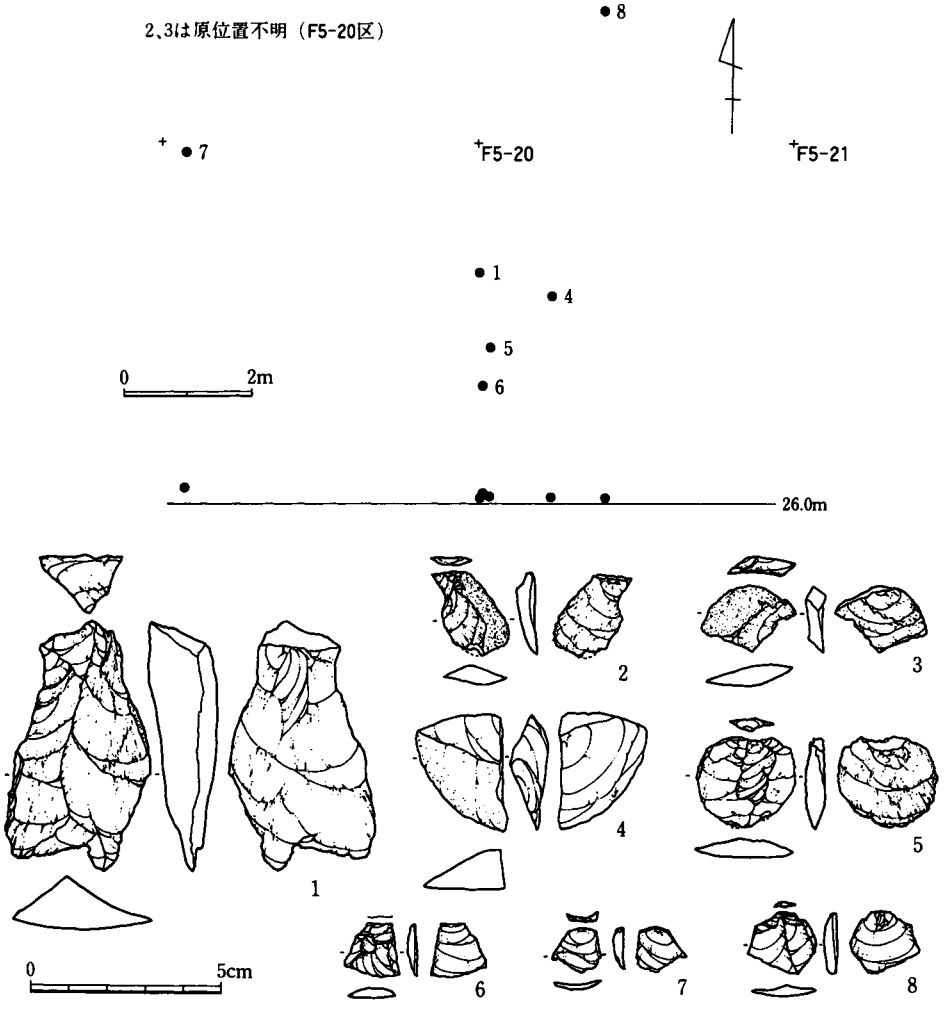
15. 大割遺跡III10ブロック・ブロック外出土遺物

①概観

大割遺跡ではソフト・ローム層から検出されたまとまった資料は3枚の文化層に分けて把握されたが、ブロックを形成しないで単独で出土した遺物についてはその帰属する時期を決しえないものが多い。またソフト・ローム層中から検出されたうちIII10ブロックは、すべて剝片のみによって構成され、やはり帰属時期の判断材料を有さない。ここではそれらを一括して紹介しておくことにする。

②III10ブロック

出土状況（第208図）　遺物総点数は8点である。うち安山岩製の剝片5点と珪質頁岩製の剝



第208図　大割遺跡III10ブロック遺物出土状況（1/120）・出土石器（1/2）

第70表　大割遺跡Ⅲ10ブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	個体番号	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損	使用痕
1	剥片	F5－20－1	安山岩	1	64.3	37.2	18.0	27.2	－	－
2	剥片	F5－20 一括	安山岩	1	22.5	20.8	4.8	1.4	○	－
3	剥片	F5－20 一括	安山岩	2	18.0	22.5	5.1	1.6	－	－
4	剥片	F5－20－4	安山岩	4	30.7	23.4	11.0	5.5	－	－
5	剥片	F5－20－2	安山岩	3	23.4	26.0	5.0	3.1	－	－
6	剥片	F5－20－3	珪質頁岩	1	13.6	15.0	2.5	0.4	－	－
7	剥片	E5－29－2	珪質頁岩	2	11.1	13.2	2.3	0.3	－	－
8	剥片	F5－10－3	珪質頁岩	2	16.3	17.4	3.5	0.9	－	－

片1点計6点は南北1.7m、東西1.1mの範囲に分布するが、珪質頁岩製の剥片2点が北方と北東方に間隔を置いて出土した。離れて出土した2点は同一母岩と判断されるが、中心部の珪質頁岩1点は別個体であり、剥片2点は同一ブロックに入れて捉えないほうがよいかも知れない。当ブロックは縄文時代遺物包含層の調査中に検出されたものであるが、使用石材からは明らかに先土器時代の遺物群であると判断される。出土層準はII層下位からIII層上位である。

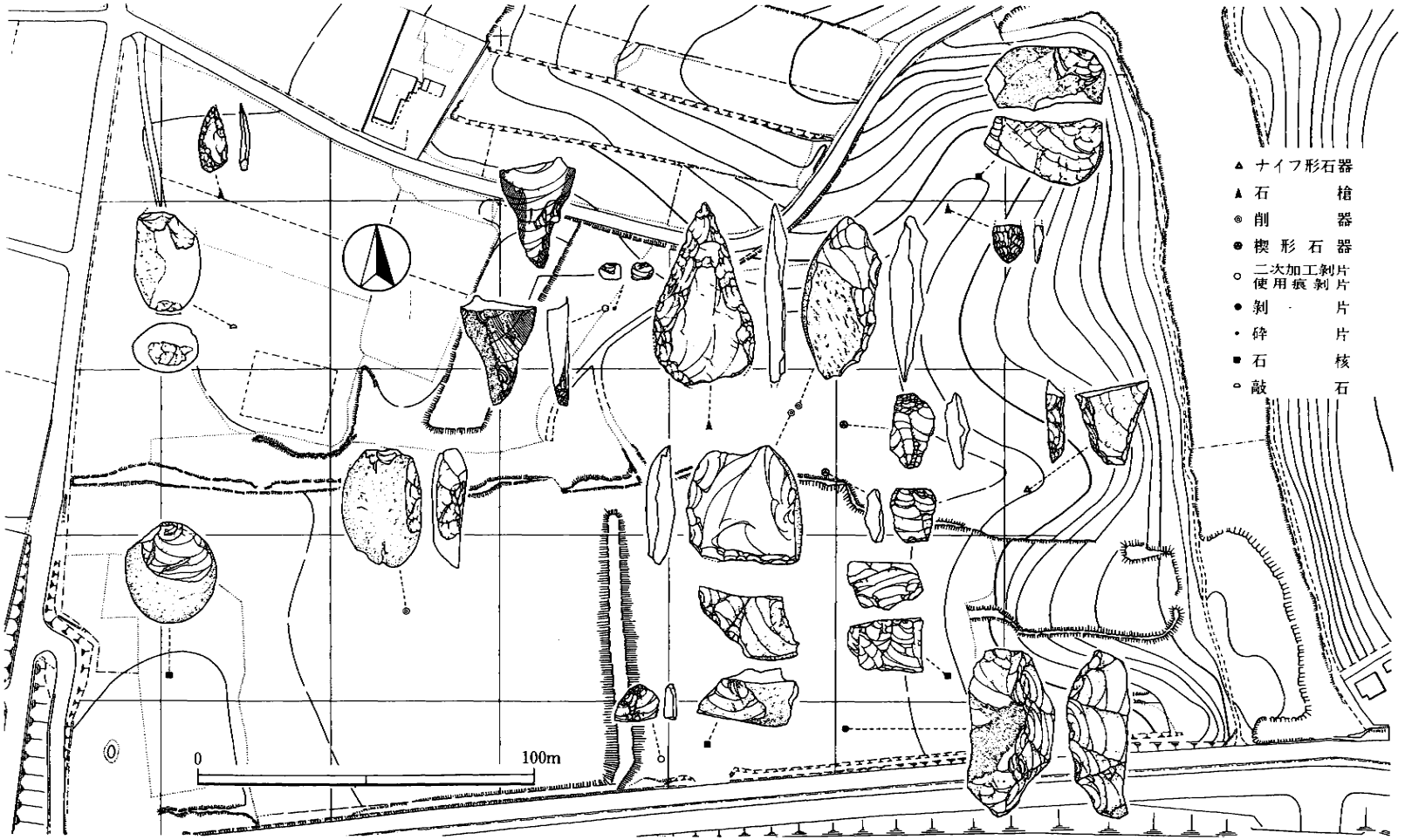
出土遺物（第208図）　1～5が安山岩製の剥片である。1と2が同一母岩と考えられる以外は単体資料である。4は打点直下で折れている。6～8は珪質頁岩製の小型の剥片である。6は線状打面を持つが、何らかの調整剥片であった可能性がある。また7、8のような小型剥片はいかなる性格を持ったものか。

③ブロック外出土遺物(第210図～第212図、図版49、50)

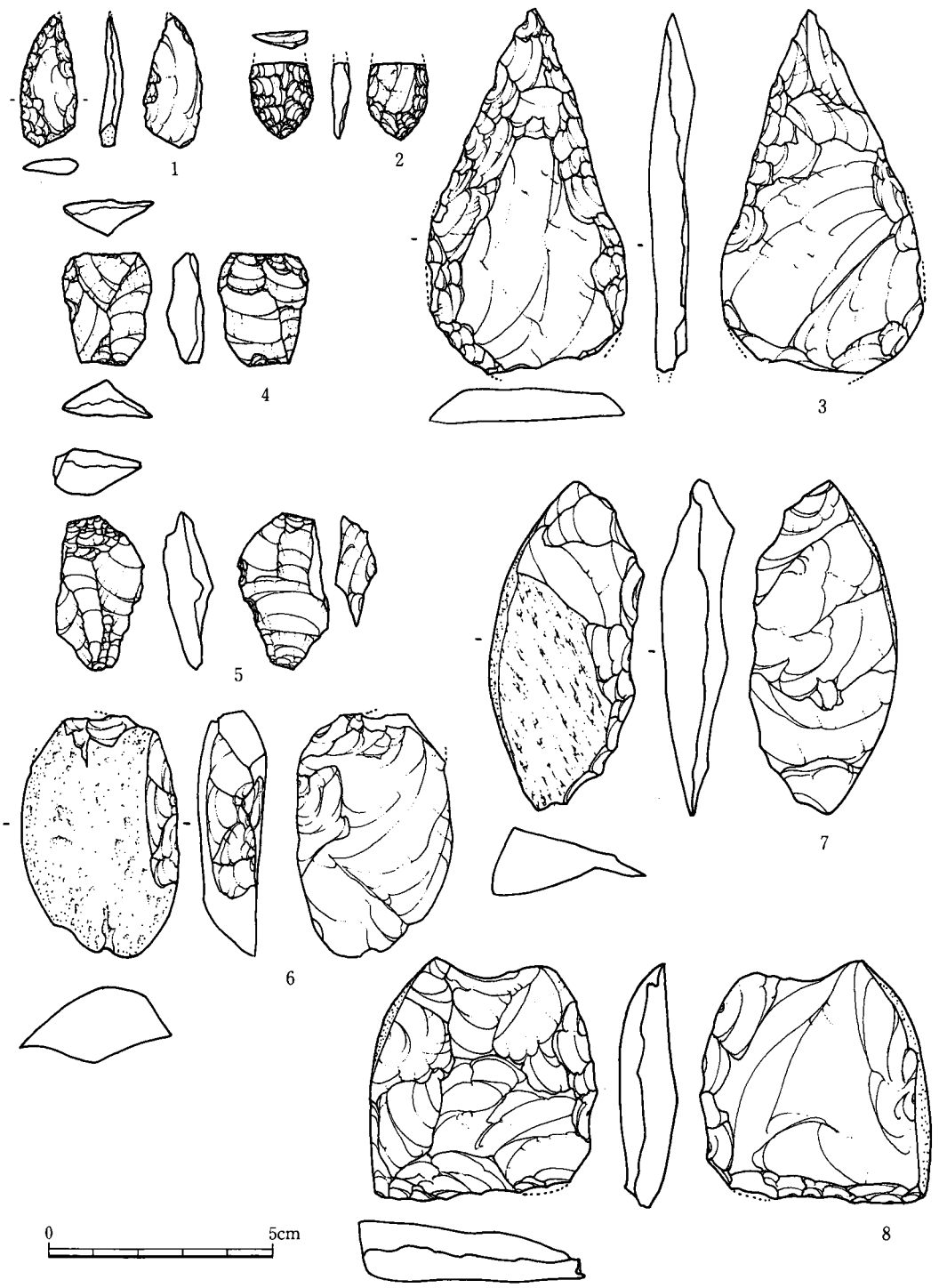
ここでは16点の石器を報告する。他にもいくつかの剥片が出土しているがとりわけ特徴的なものは見られない。

石槍が3点ある。1は安山岩製の小型石槍である。偏平な横長剥片素材で加工は周縁に限られる。調整角は平坦で、III9ブロック南出土の横長剥片素材の石槍(第135図3)と同種のものと言えよう。2はチャート製の石槍で半両面加工のもの。やはり横長剥片を素材としていると考えられる。腹面の調整は周縁のみに施される。尖頭部を欠損している。この石器の出土地点は9ブロックの北20メートル余りで、III9ブロックから見たF3区の石槍群出土地点までの距離とほぼ等しくなる。3は安山岩製の大型石槍である。元来素材が偏平なため周縁のみを加工したものか。基部を一部欠損するが、完形であったとしても最大幅が著しく下位にあることは間違いないと思われる。

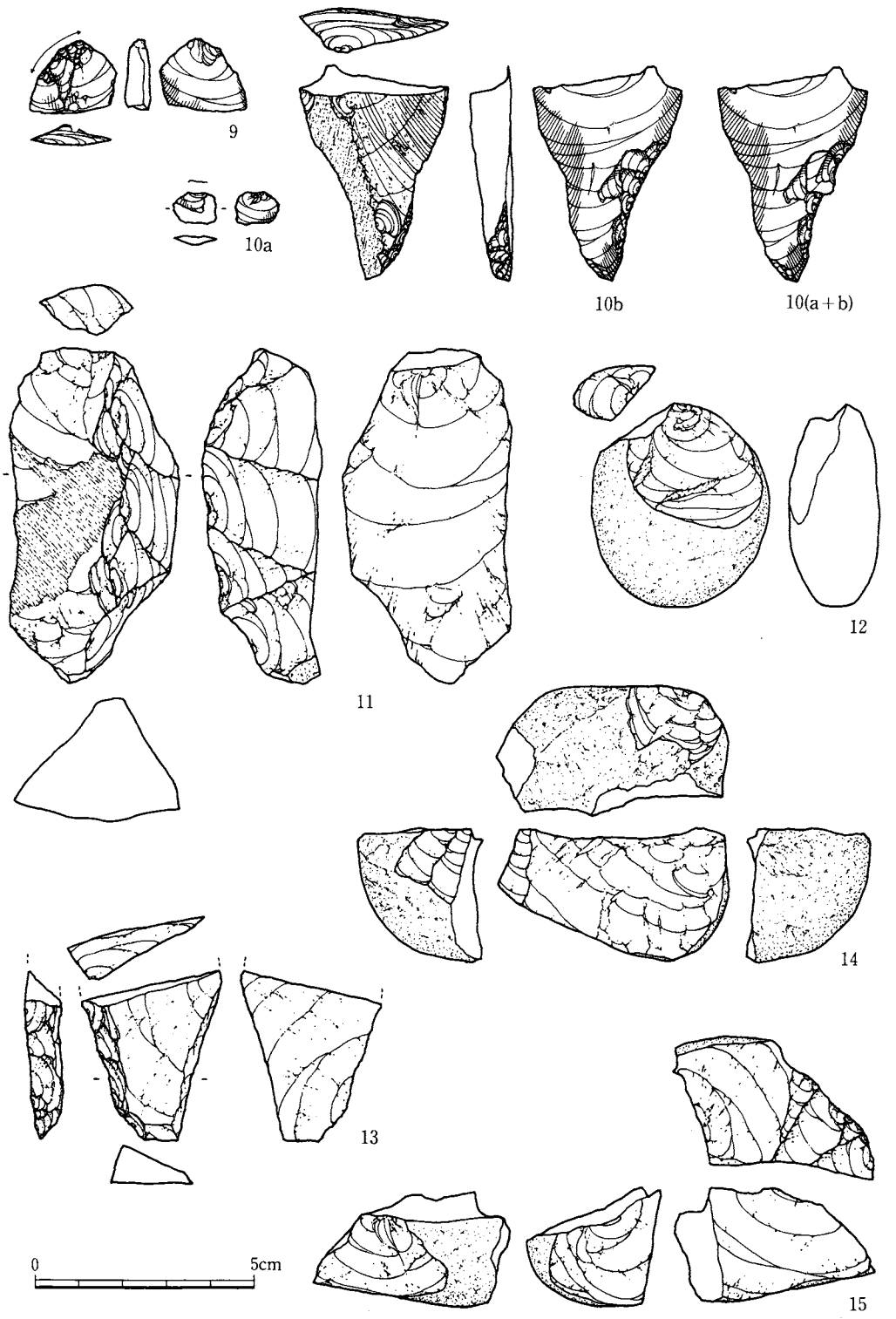
ナイフ形石器は1点ある。13は安山岩の一側縁加工品で基部側が遺存する。横長の素材を用いる幅広のナイフ形石器で、打面側にbluntingを施している。またbluntingに類した加工痕を持つ石器に10bがある。黒曜石製で頭部側を折損しており、背面右側縁の末端近くに急斜な加工



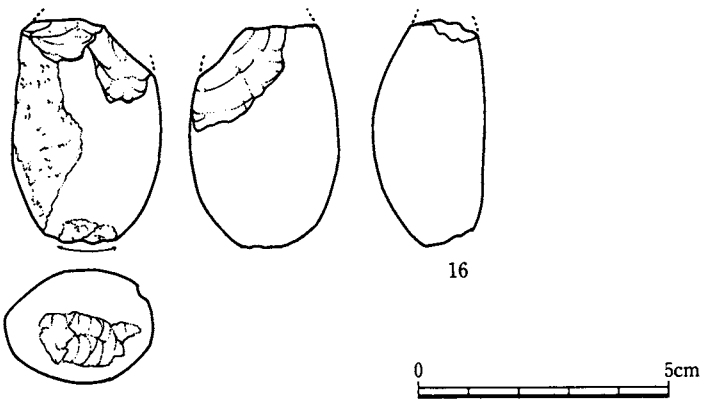
第209図　大割遺跡ブロック外石器出土位置（1/2,000）



第210図　大割遺跡ブロック外出土石器(1)（2/3）



第211図　大割遺跡ブロック外出土石器(2)（2/3）



第212図　大割遺跡ブロック外出土石器(3)（2/3）

第71表　大割遺跡ブロック外出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	刃角 調整角	欠損	使用痕
1	石槍	SD−02−一括	安山岩	29.0	12.5	4.5	1.52	—	○	—
2	石槍	F2−06−1	チャート	17.3	13.4	3.9	0.99	—	○	—
3	石槍	E3−32−1	安山岩	80.7	45.1	9.2	31.55	—	○	—
4	楔形石器	E3−69−4	頁岩	24.3	20.0	8.9	3.42	—	—	—
5	楔形石器	SK−09−一括	珪質頁岩	34.1	20.6	9.6	5.29	—	—	—
6	削器	C4−44−1	安山岩	53.5	34.8	15.6	36.49	78°	○	—
7	削器	E3−27−15	砂岩	73.6	33.0	15.7	36.10	42°	—	—
8	削器	E3−27−16	砂岩	51.7	53.3	13.1	42.74	54°	○	—
9	二次加工剥片	D5−39−10	黒曜石	16.1	21.0	5.4	1.31	—	—	—
10a	砕片	D2−66−1	黒曜石	7.7	10.1	1.7	0.13	—	—	—
10b	二次加工剥片	D2−66−2	黒曜石	47.5	34.1	8.6	8.56	—	—	—
11	剥片	F5−10−一括	安山岩	75.2	39.2	29.9	67.46	—	—	—
12	石核	B4−80−4	珪質頁岩	47.0	41.7	20.2	47.57	—	—	—
13	ナイフ形石器	G3−71−1	安山岩	35.4	32.2	9.9	9.83	刃22° 調72°	○	—
14	石核	F1−88−6	珪質頁岩	53.2	35.8	33.4	50.07	—	—	—
15	石核	E5−22−2	安山岩	30.6	51.4	27.8	32.64	—	—	—
16	敲石	B2−74−1	砂岩	45.0	30.9	22.5	32.30	—	○	○

を施しているが、腹面の右側縁にも緩斜な調整痕が連続的に施されており、石器の性格が判然としない。なおこの石器の腹面の剥離痕に砕片1点(10a)が接合した。

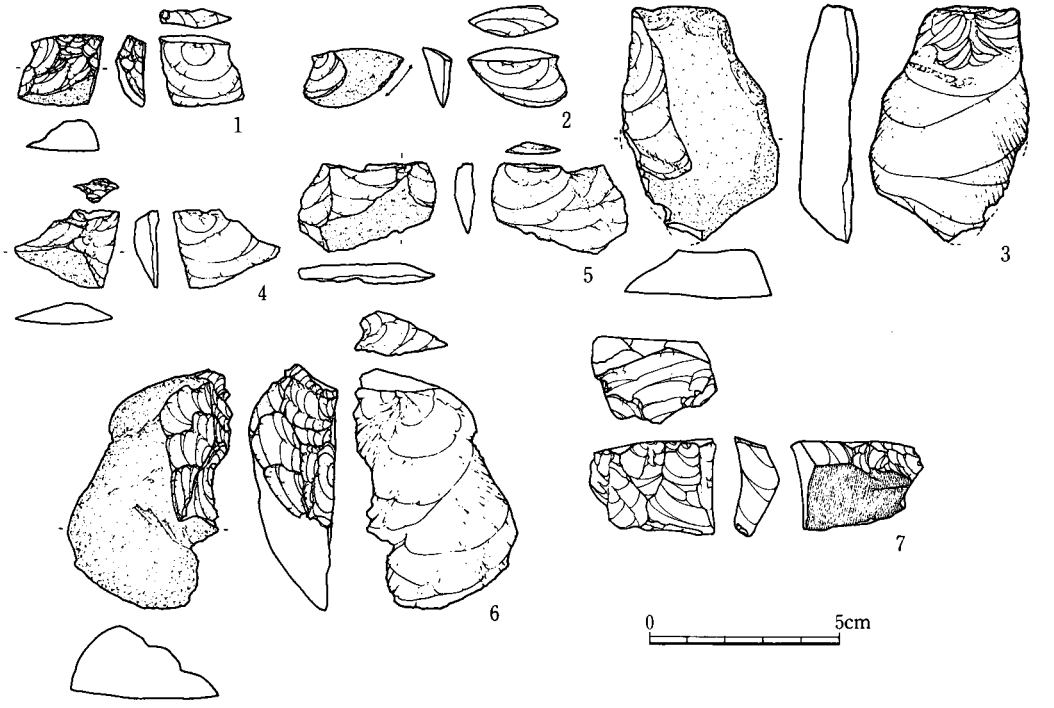
削器は3点出土した。6は安山岩の分厚い剥片の右側縁に加工を施したもの。調整角は急斜である。7、8は砂岩の同一母岩製で出土位置も近接していたが、周辺では他に石器は出土していない。7は縦長の素材で背面右側縁に、8はほぼ矩形を呈し主として主要剥離面の二縁にともに緩斜な調整を加えている。また性格不明の加工痕を有する剥片が1点ある。9がそれで末端側を折断された黒曜石の小型剥片の頭部側に二次的剥離痕が観察され、それにより打面、

打瘤が失われている。4、5は楔形石器である。4が頁岩製、5が珪質頁岩製で、いずれも両極石核と考えるべきか。

11は剝片である。右側面には縦長剝片の規則的な剝離痕が残されており、また背面の小剝離痕は打面調整痕と思われ、当資料は石刃石核の打面再生剝片と考えられる。安山岩製。石刃生産に関係する遺物は当資料の周辺からは全く検出されていない。150m 西方には粗製石刃及び小型のナイフ形石器を生産した大割遺跡第5文化層のブロック群があるが、同一母岩と見做せる資料は見いだせない。12、14、15は石核である。12は珪質頁岩の偏平な小礫の一端を欠いて打面を作出し、礫の長軸方向に沿って1回の剝片剝離を行っている。13は節理の発達した珪質頁岩の小礫を素材としており、入手された時点で既に形成されていた平坦な礫皮面を打面として分割痕かと思える大きな剝離痕が残されている。またさらに2枚の小剝離が認められるが、いずれにしても有効な剝片剝離が行いえず廃棄されたものであろう。15は安山岩製で上方からの剝離痕が3面見られる。最終的には上面に細かい剝離が残されている。16は敲石である。きめの粗い砂岩製で、上端を欠損している。下端には敲打痕が顕著である。

④ F4－86区出土遺物(第213図)

上層の確認調査中に誤って出土状況を記録せずに採集された先土器時代の遺物群がある。し



第213図　大割遺跡 F4-86 区出土石器（1/2）

第72表　大割遺跡第Ｆ４－86区出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	欠損	使用痕
1	剥片	F4－86 一括	珪質頁岩	19.1	22.1	7.7	3.2	－	－
2	使用痕剥片	F4－86 一括	珪質頁岩	17.2	26.1	7.5	2.0	－	○
3	剥片	F4－86 一括	珪質頁岩	60.9	41.2	13.6	36.5	○	－
4	剥片	F4－86 一括	安山岩	20.2	27.1	5.8	2.2	－	－
5	剥片	F4－86 一括	安山岩	23.1	37.2	4.7	4.1	－	－
6	剥片	F4－86 一括	安山岩	62.8	40.3	22.4	52.5	－	－
7	石核	F4－86 一括	チャート	24.1	33.1	23.7	20.0	－	－

かもその存在が確認されたのは整理作業が開始された後であり、残念なことに改めて状況を把握することができなかった。出土遺物はF4－86区の一括遺物として取り上げられた9点の剥片及び石核である。上層確認調査中の出土であることからⅢ層を出土層準とするのは疑いないと考えられる。また先土器時代の遺物であるのもほぼ間違いないが、帰属時期については特徴的な石器が含まれないこともあって判然としない。本来Ⅲ11ブロックとも言うべきものであり、さらに多くの遺物が存在した可能性も考えられるが、遺物の分布状況等がもはや掌握できないため、ブロックの呼称を用いることは控える。

剥片6点と石核1点を図示する。1、2は珪質頁岩の同一母岩から剥離された剥片で2の一部に刃こぼれ状の微細な剥離痕が観察される。3も珪質頁岩製の大型剥片である。珪質頁岩としては比較的風化しやすい石材である。背面の大半が礫皮面で覆われており、また礫皮面を打面とするものである。4～6は安山岩製の剥片である。それらのうち4、5は同一母岩と思われる。7はチャート製の石核である。同一母岩の小剥片が1点あるが接合はしない。

写　真　図　版

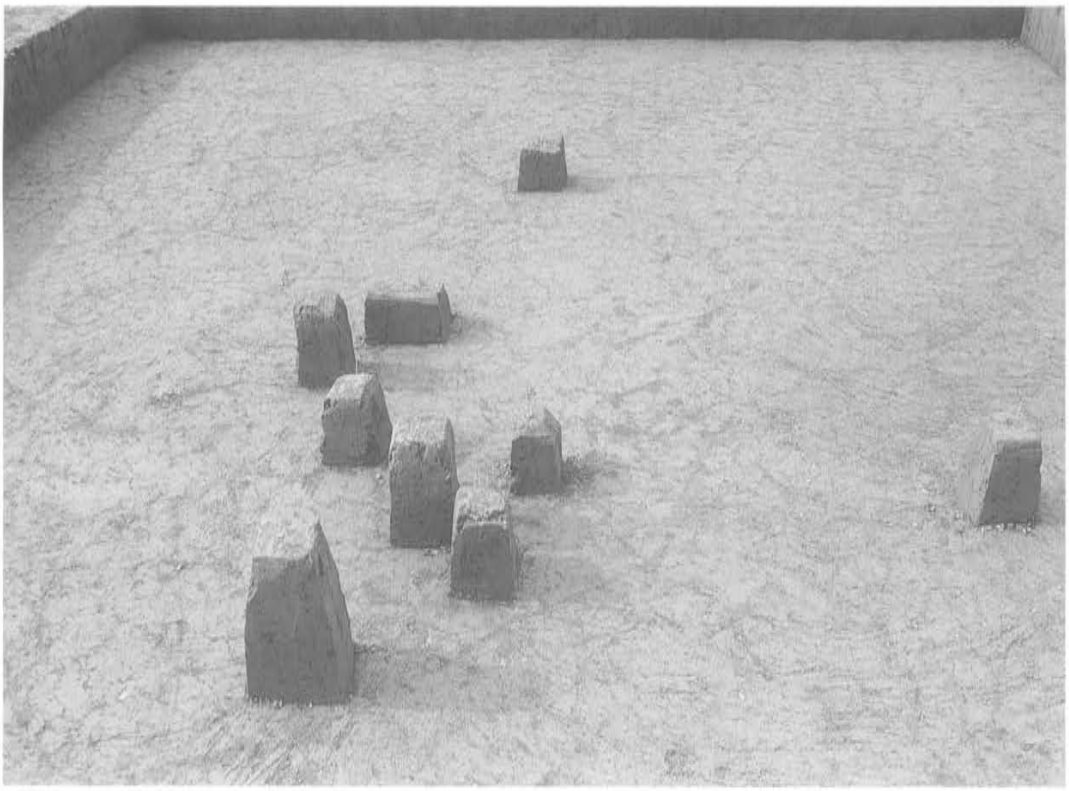
内黒田遺跡群周辺航空写真（1967年撮影、約1/13,000）

図版　2

1．大割遺跡第1文化層（Ⅸ$_{L}$ 1ブロック）

2．大割遺跡第2文化層（Ⅸ$_{U}$ 1ブロック）

3．大割遺跡第2文化層（Ⅸ$_{U}$ 2ブロック）



1．大割遺跡第２文化層（Ⅸu３ブロック）

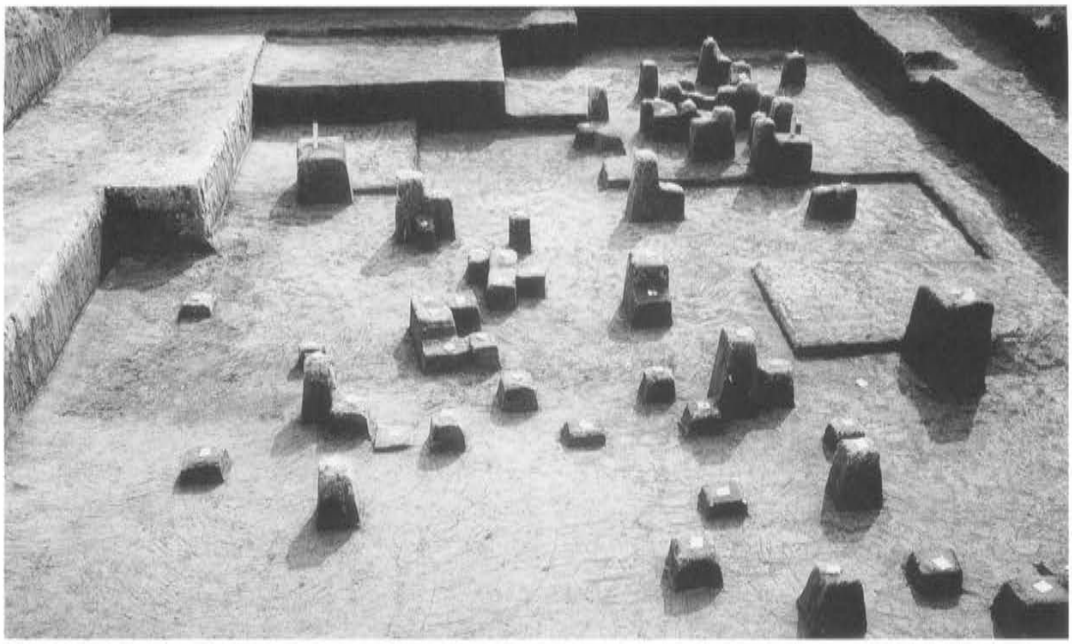
2．大割遺跡第２文化層（Ⅸu４ブロック）

図版　4

1．大割遺跡第２文化層（Ⅸu５ブロック）

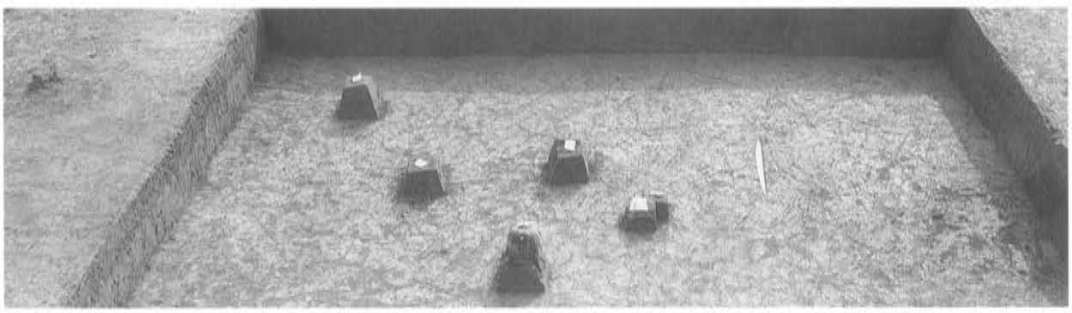
2．大割遺跡第２文化層（Ⅸu６ブロック）

3．大割遺跡第２文化層（Ⅸu７ブロック）

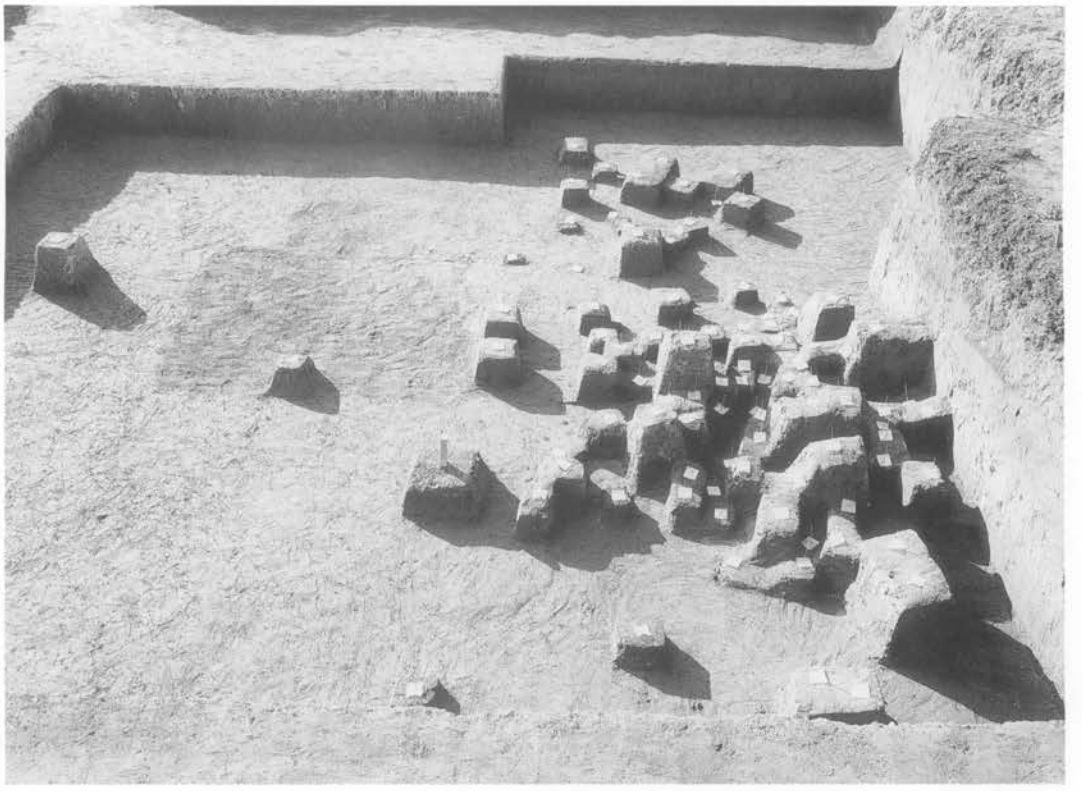


1．大割遺跡第１，２文化層（ⅨL２ブロック(手前)，ⅨU８ブロック）

2．大割遺跡第２文化層（ⅨU10，11ブロック）



3．大割遺跡第２文化層（ⅨU12ブロック）



1．大割遺跡第２文化層（Ⅸu９ブロック）

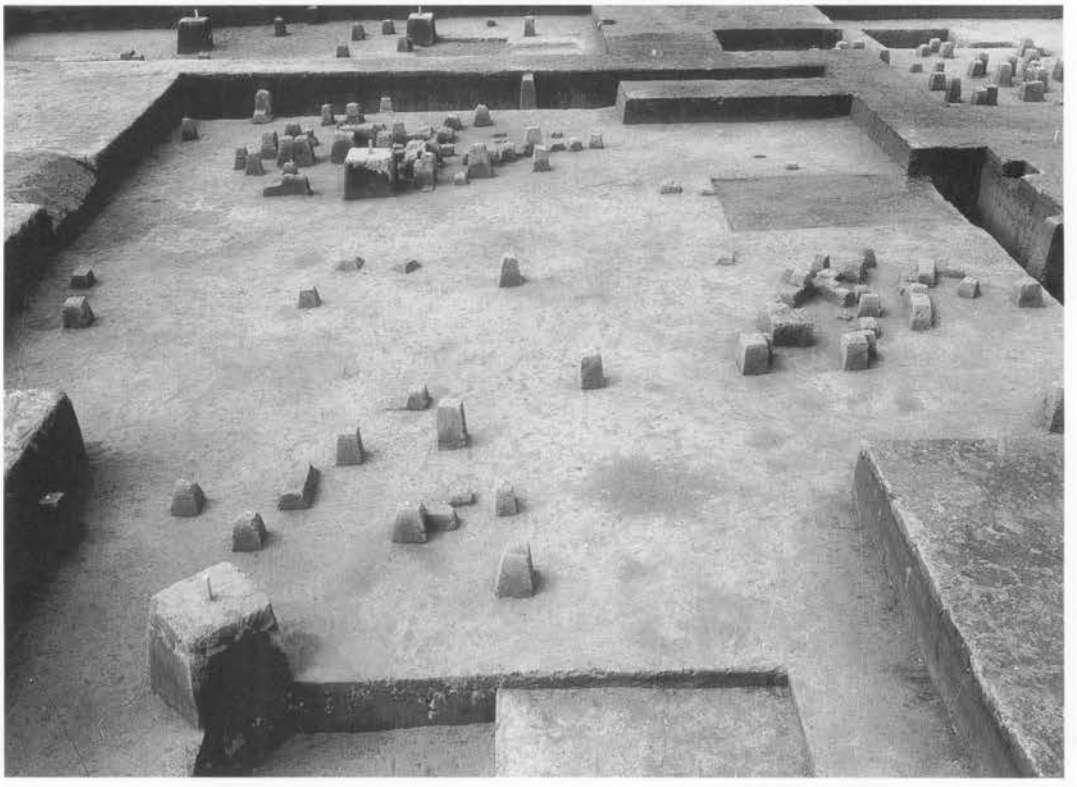
2．大割遺跡第２文化層（Ⅸu９ブロック）

1．大割遺跡第4文化層（Ⅳ1，2ブロック）

2．大割遺跡第4文化層（土坑）

図版　8

1．大割遺跡第３文化層（Ⅴ１～３ブロック）



2．大割遺跡第５文化層（Ⅲ４～７ブロック）

1．大割遺跡第６文化層（Ⅲ９ブロック）

2．大割遺跡第６文化層（Ⅲ９ブロック）

1．大割遺跡第７文化層（Ⅲ１，２ブロック）

2．大割遺跡第７文化層（Ⅲ３ブロック）

1．池花南遺跡第1文化層全景

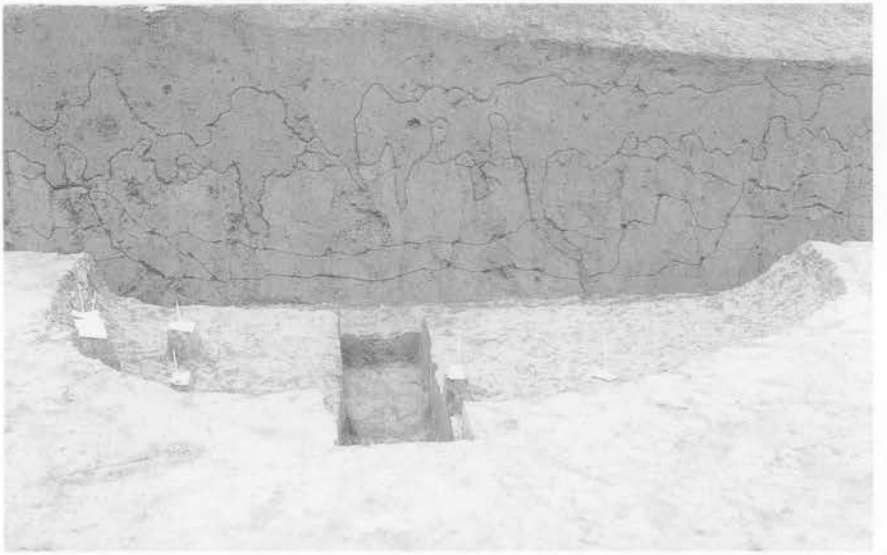
2．同近景(1)

3．同近景(2)

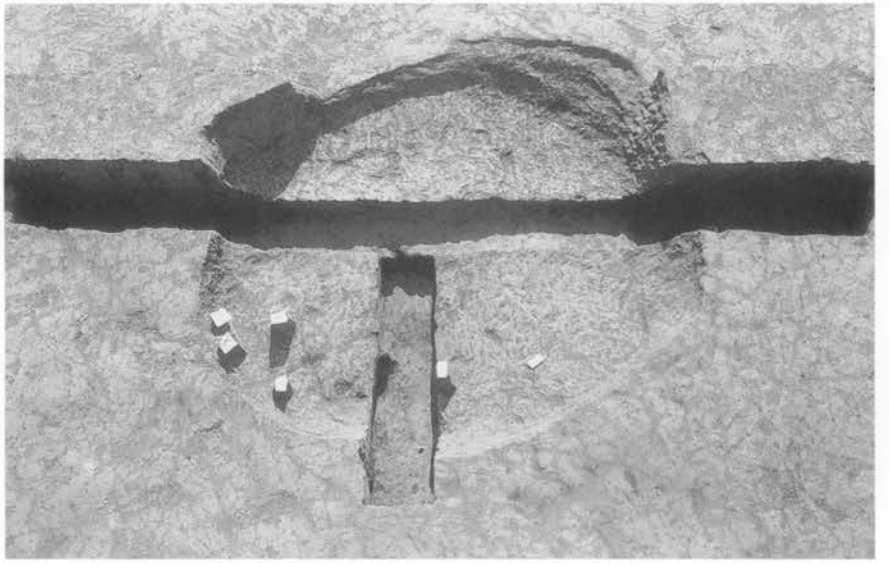
4．同近景(3)

図版　12

1．池花南遺跡
第２文化層
竪穴遺構検出状況

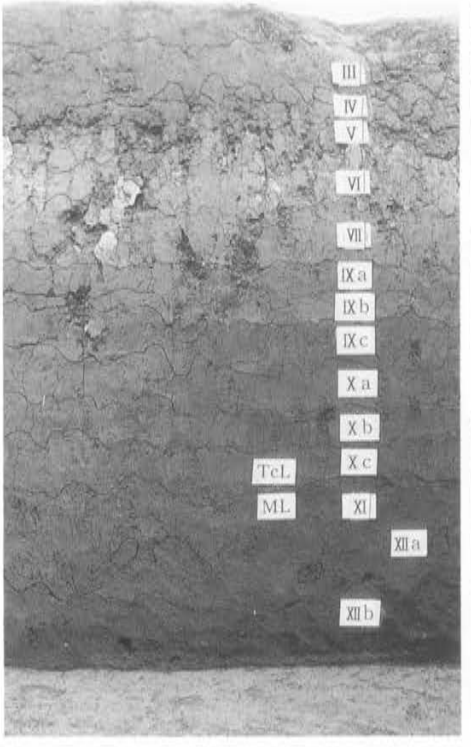


2．同土層断面

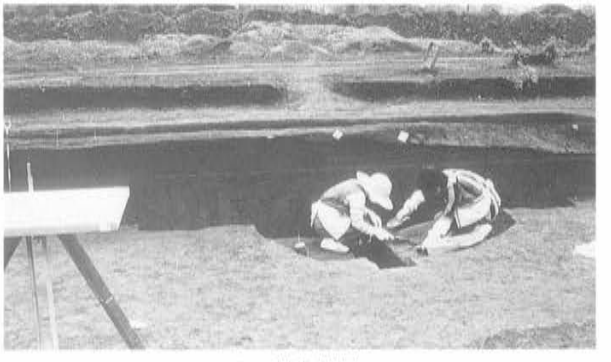


3．同全景

1．池花南遺跡第３文化層（Ⅲ２，３ブロック）



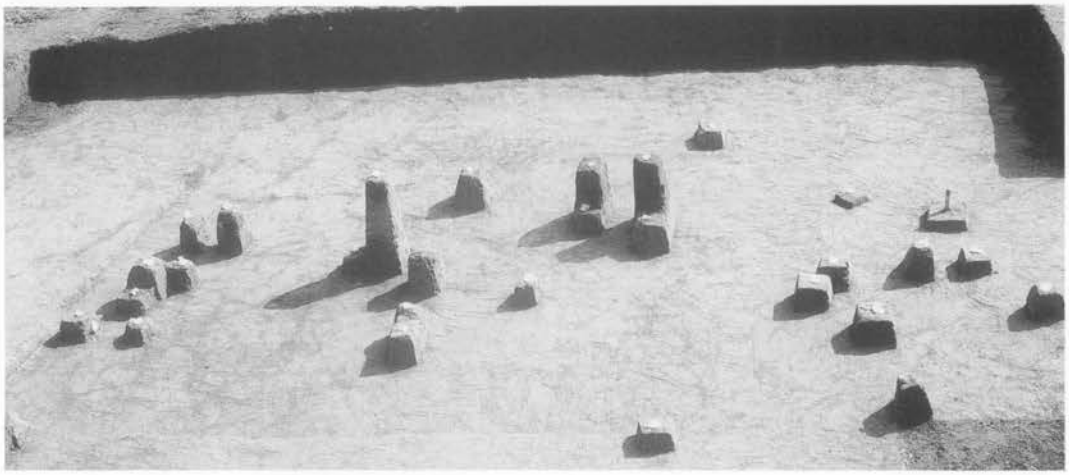
2．基本土層（池花南遺跡）



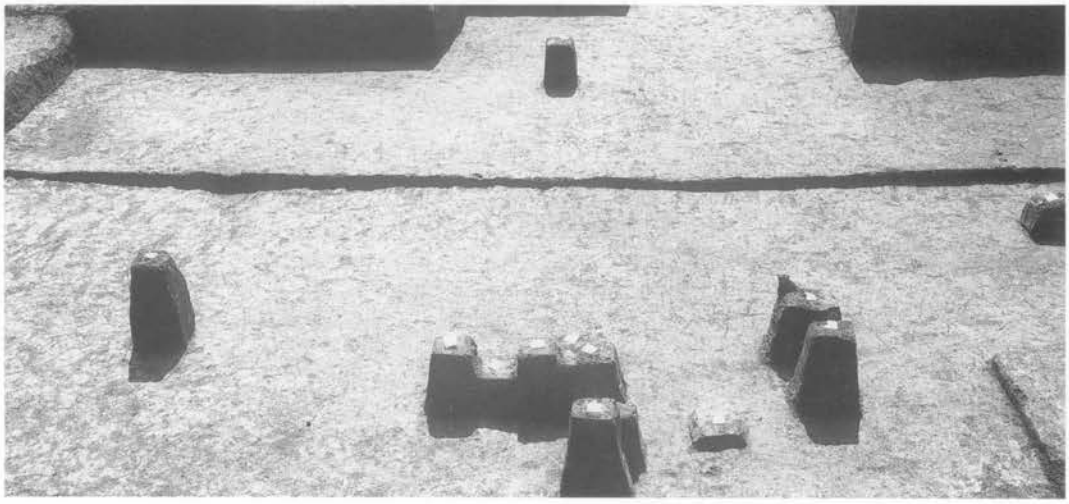
3．調査風景

4．調査風景

1．池花遺跡第１文化層（Ⅵ１ブロック）



2．池花遺跡第１文化層（Ⅵ２ブロック）



3．池花遺跡第２文化層（Ⅲ11ブロック）

1．池花遺跡第３文化層

2．同（Ⅲ10ブロック）

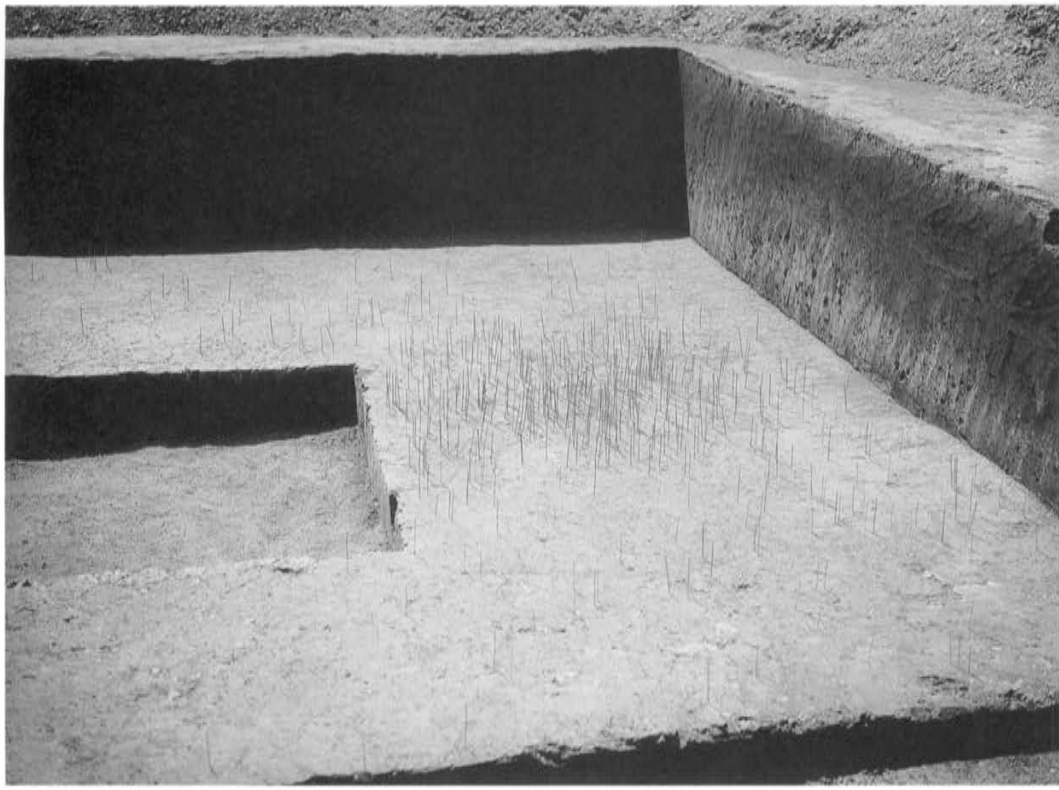
3．同（Ⅲ４ブロック）

1．池花遺跡第３文化層（Ⅲ１ブロック）

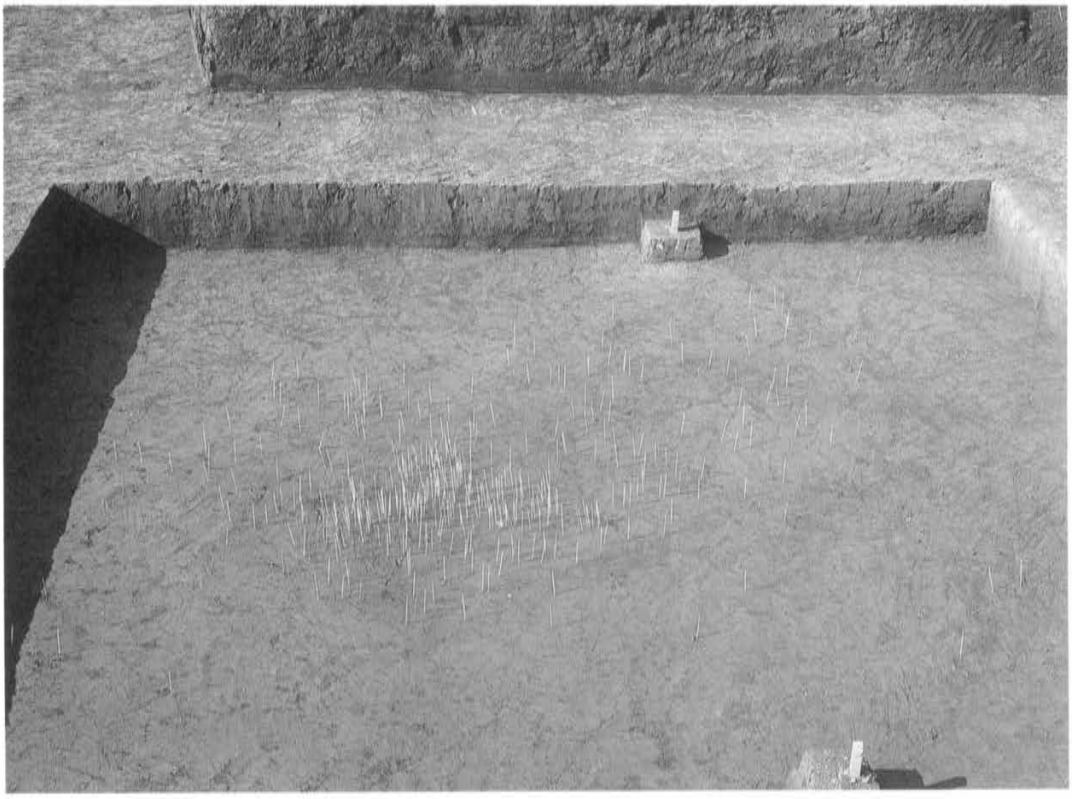
2．同（Ⅲ６ブロック）

3．同出土状況近景(1)

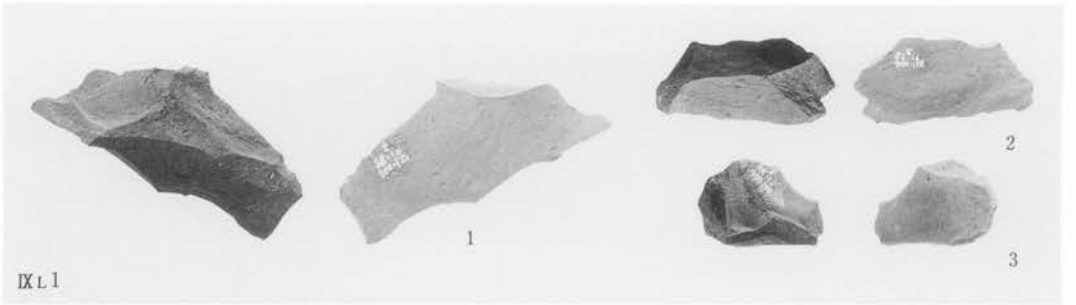
4．同出土状況近景(2)

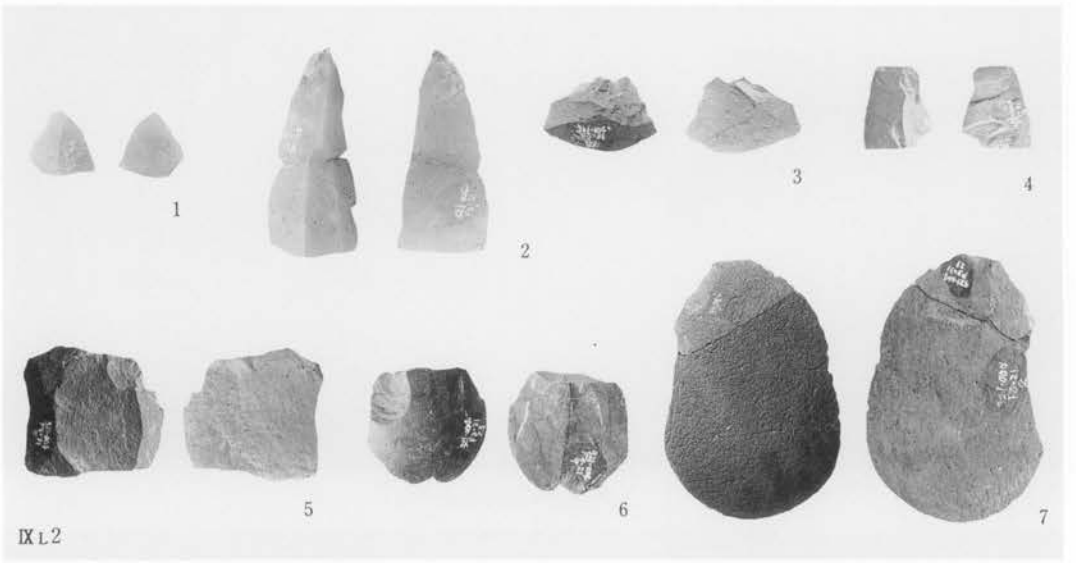


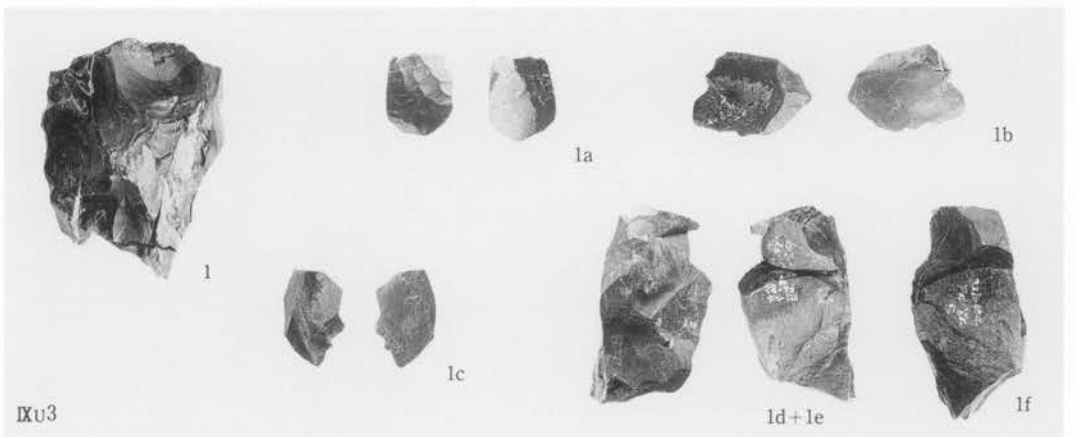
1．大割遺跡炭化物集中地点



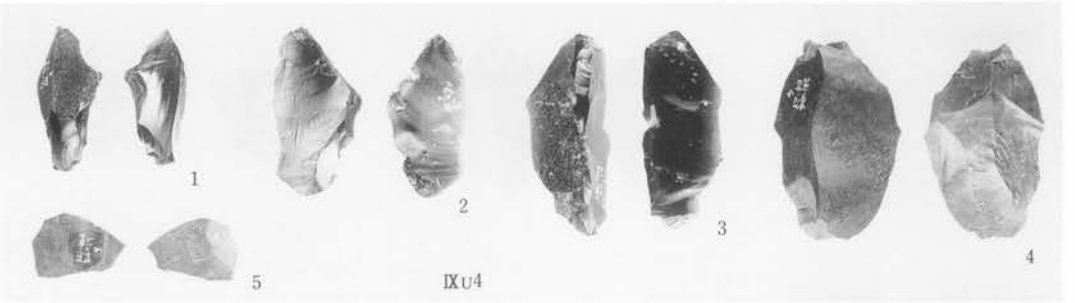
2．池花南遺跡炭化物集中地点



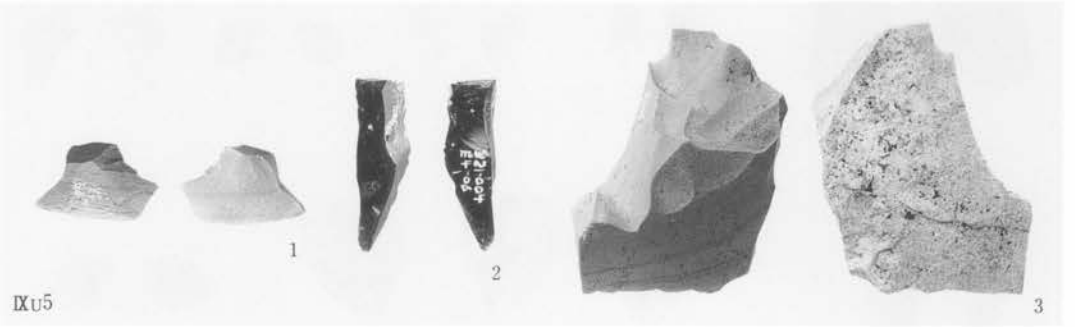




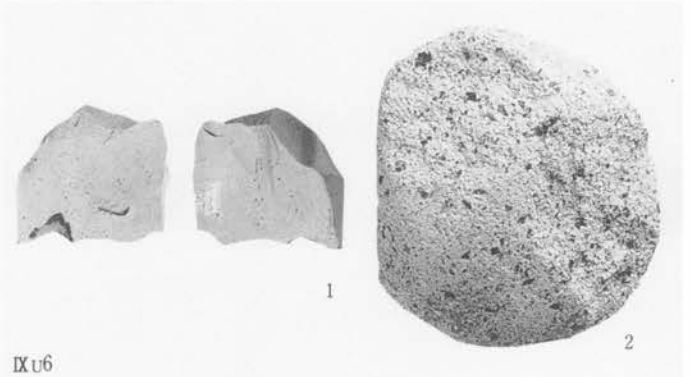
大割遺跡第1文化層・第2文化層出土石器(1)



IXU4

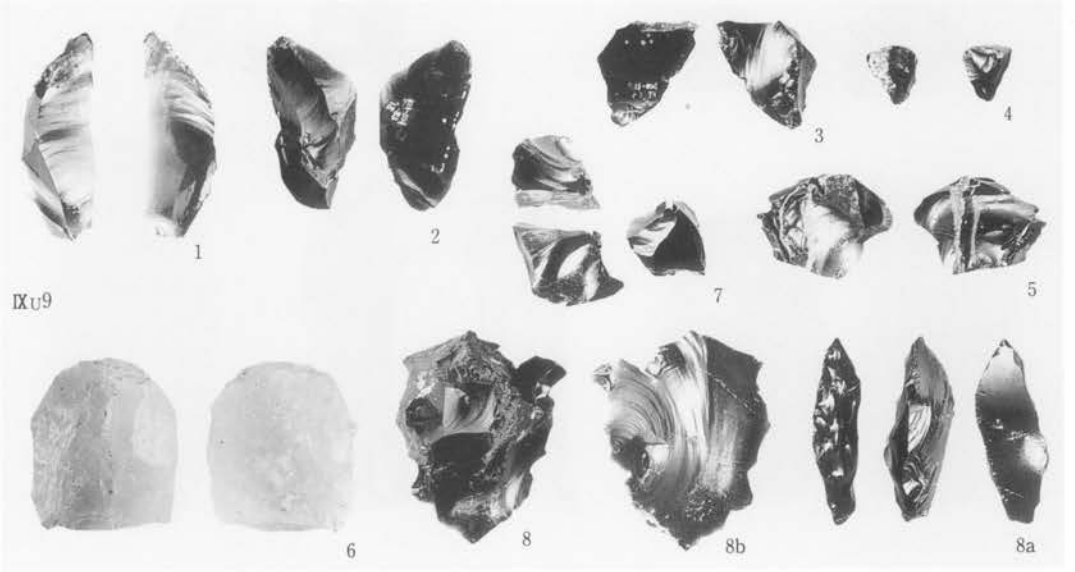


IXU5



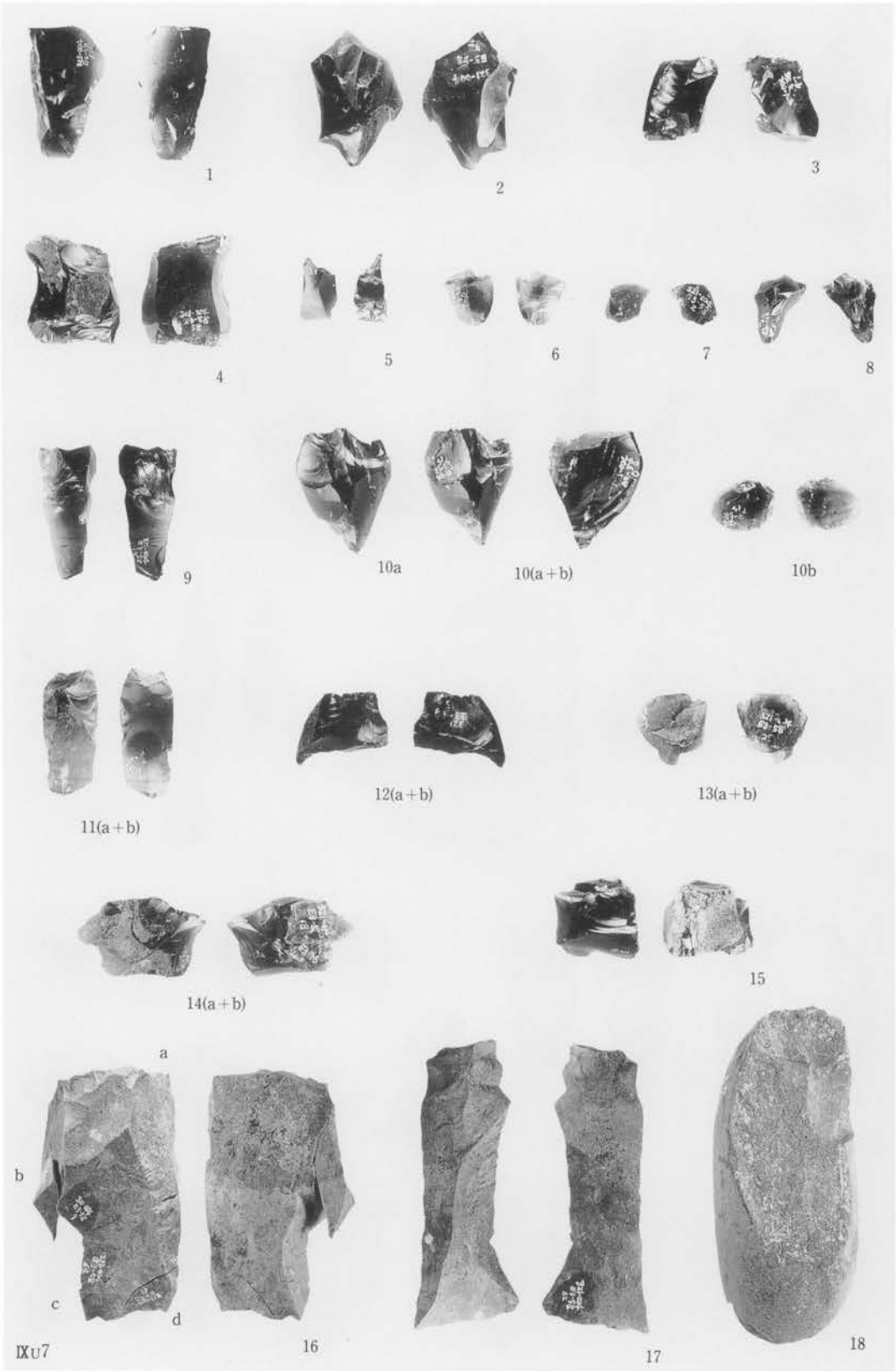
IXU6

IXU8

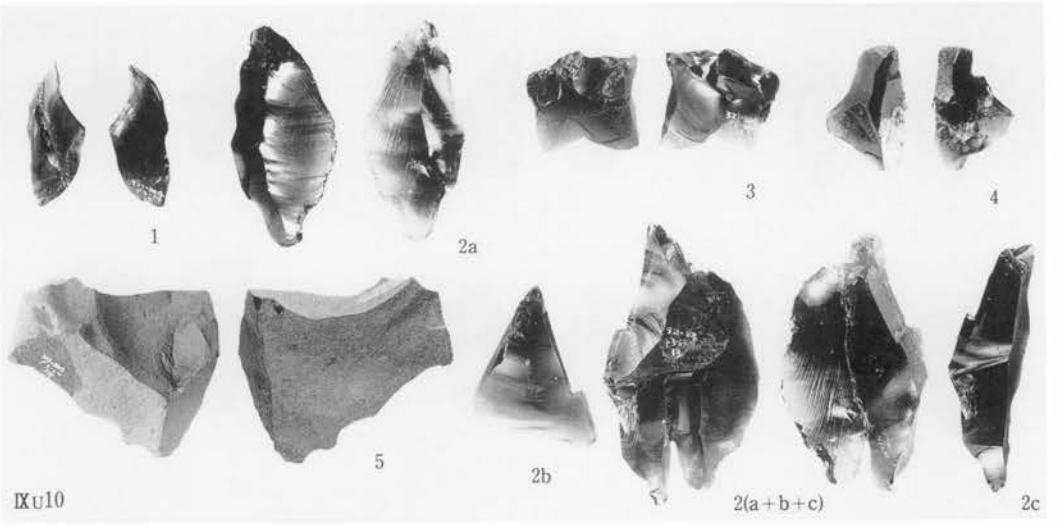


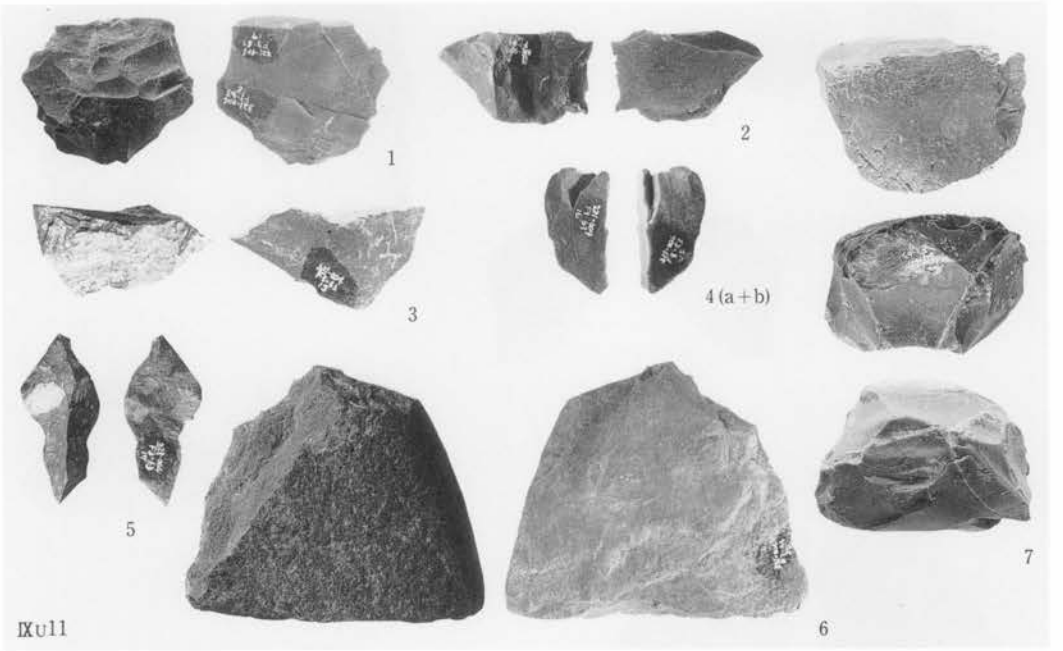
IXU9

大割遺跡第2文化層出土石器(2)

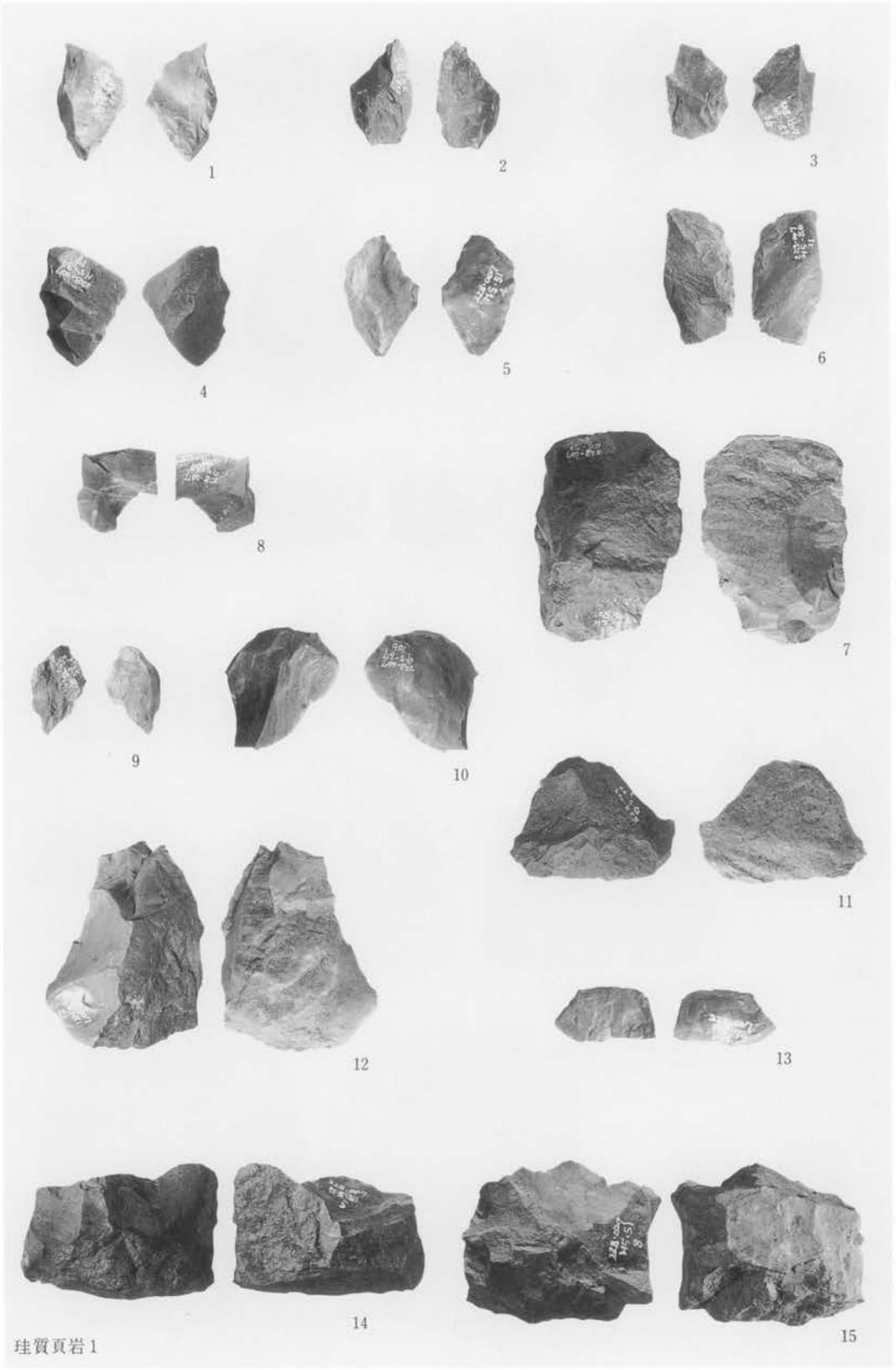


大割遺跡第２文化層出土石器(3)

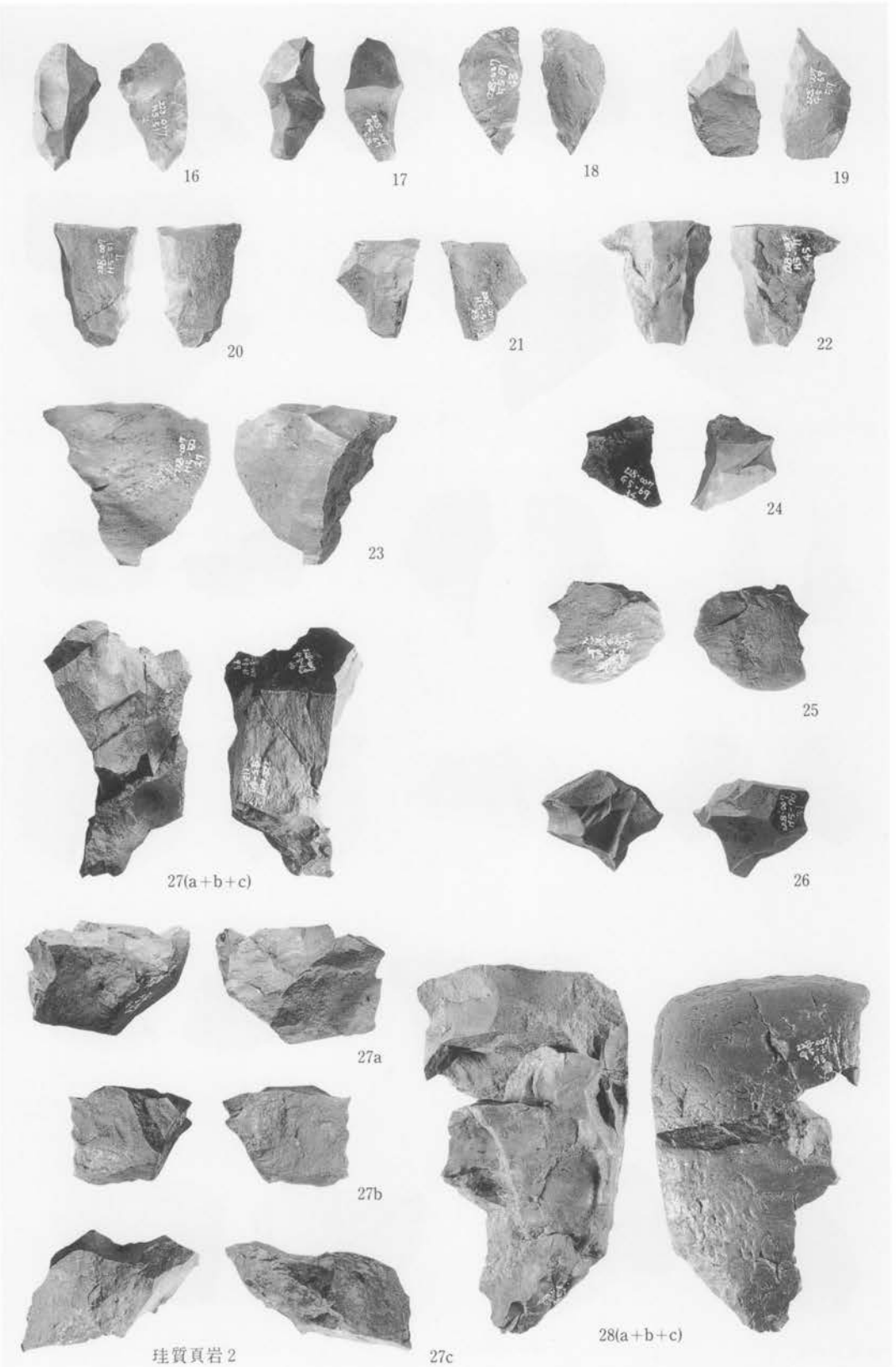




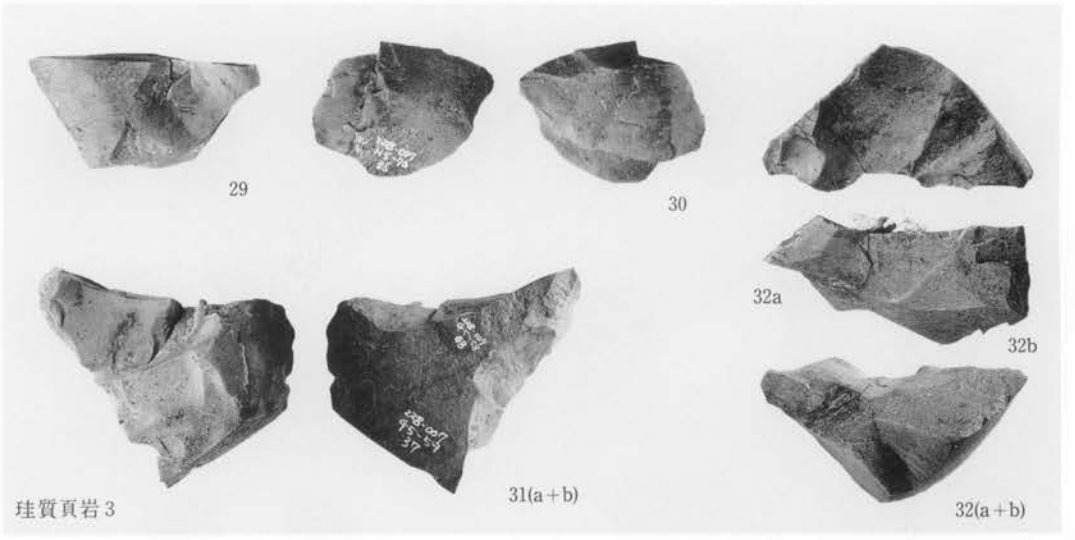
大割遺跡第2文化層出土石器(4)

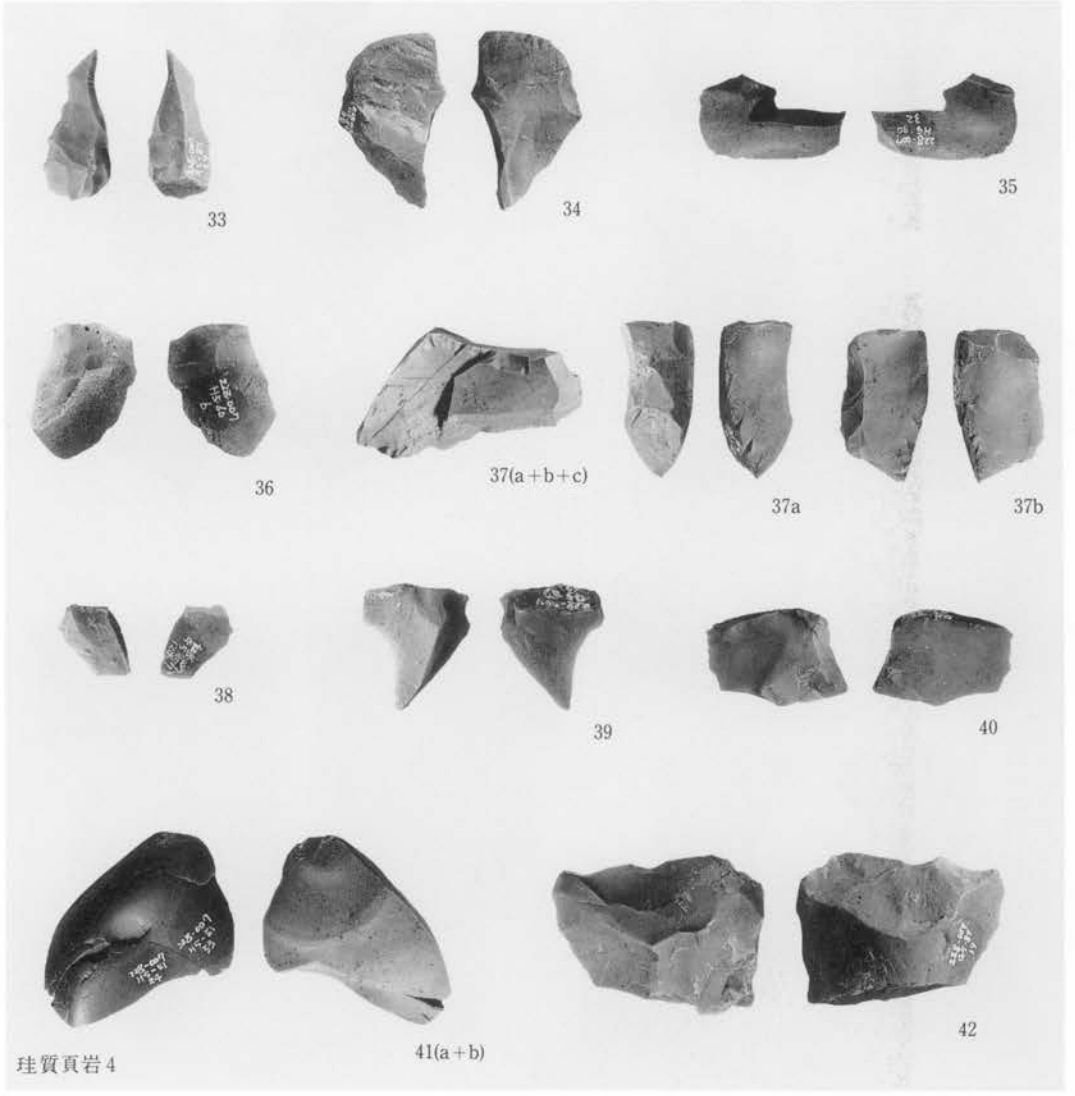


池花南遺跡第1文化層出土石器(1)

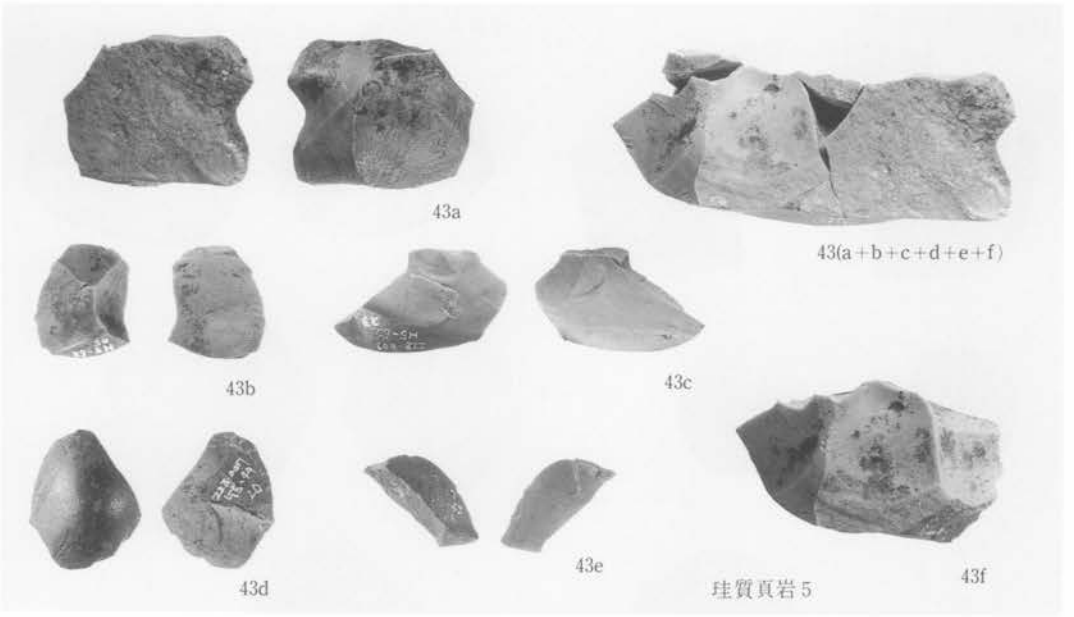


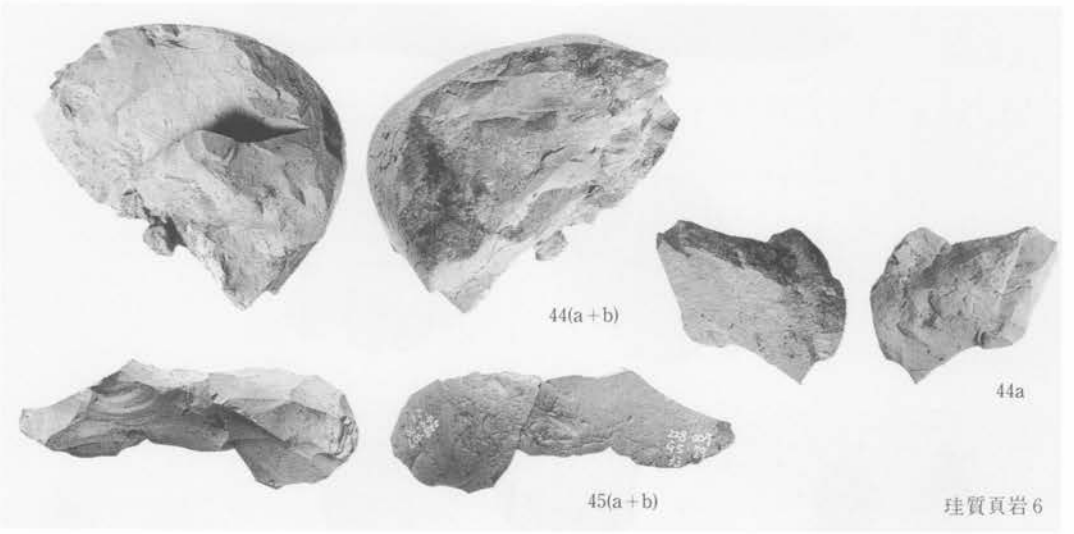
池花南遺跡第 1 文化層出土石器(2)

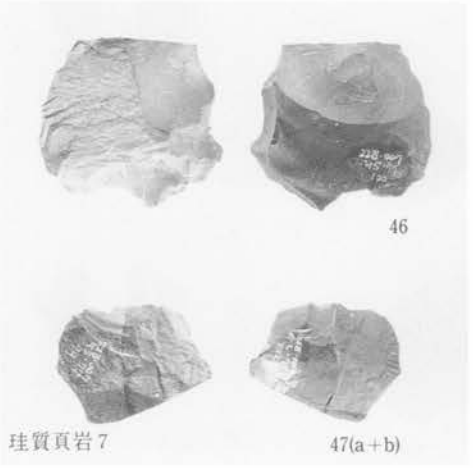


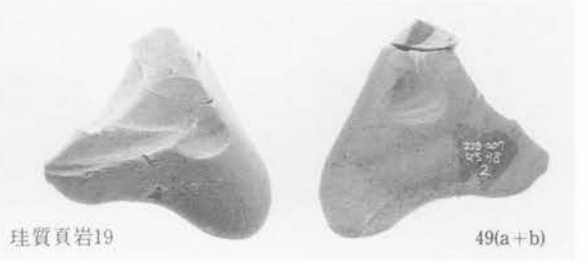


池花南遺跡第1文化層出土石器(3)









池花南遺跡第1文化層出土石器(4)

珪質頁岩20

50(a＋b＋c)

珪質頁岩21

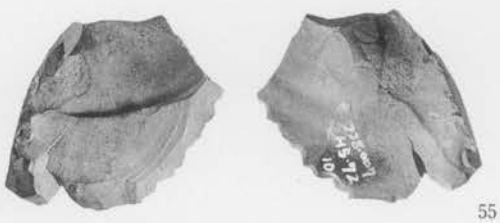
51

52

53

54(a＋b)

珪質頁岩22



55

珪質頁岩23

56

57

58

59

60(a＋b)

珪質凝灰岩1

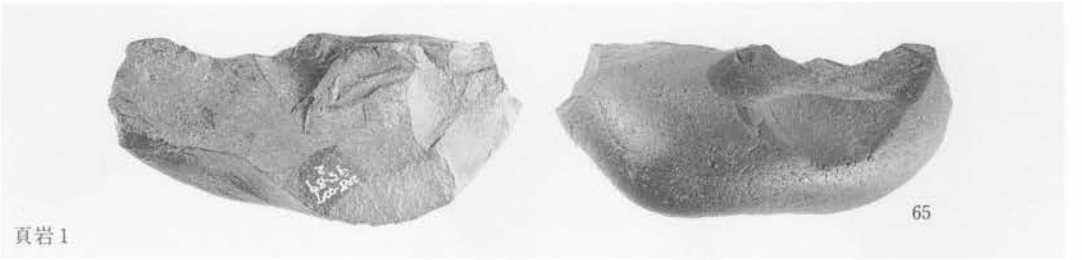
61

珪質凝灰岩2

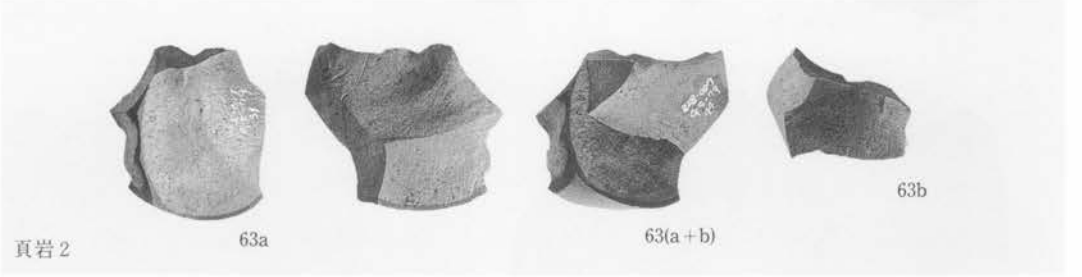
62

珪質凝灰岩3

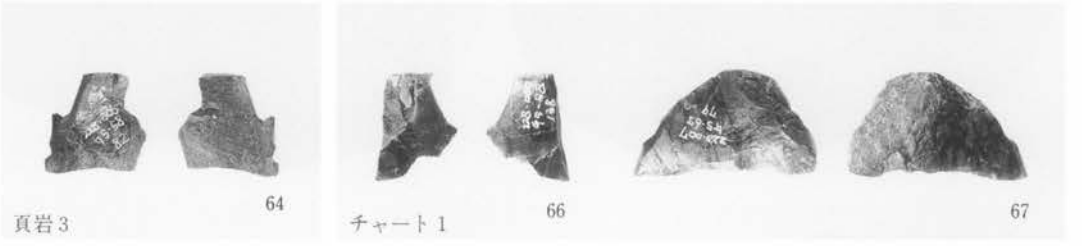
池花南遺跡第1文化層出土石器(5)



頁岩1　65

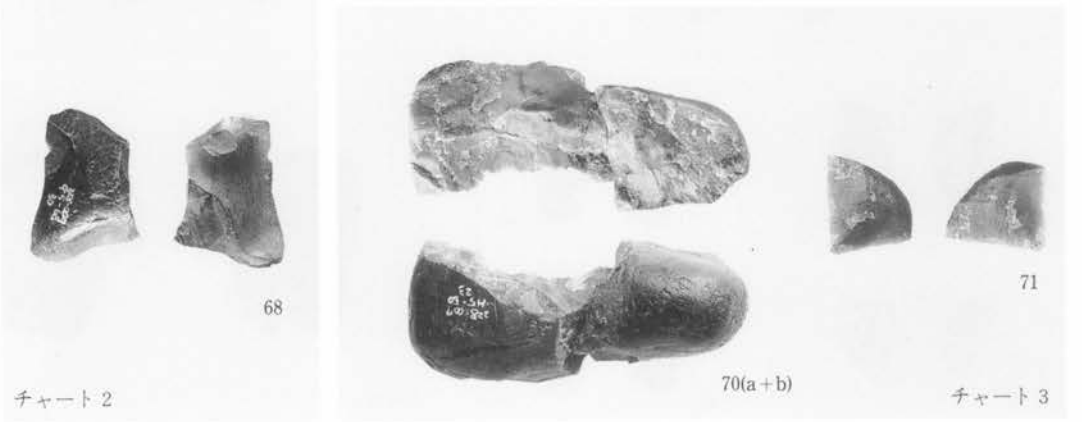


頁岩2　63a　63(a+b)　63b



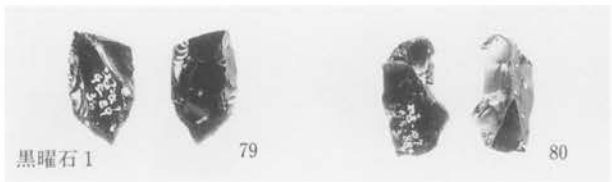
頁岩3　64　チャート1　66　67

69(a+b)　69a　69b



68　チャート2　70(a+b)　71　チャート3

池花南遺跡第1文化層出土石器(6)

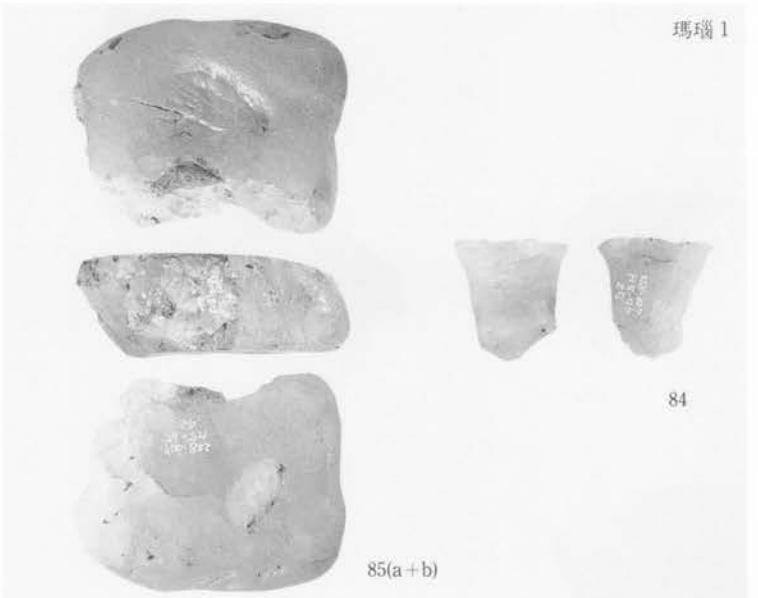


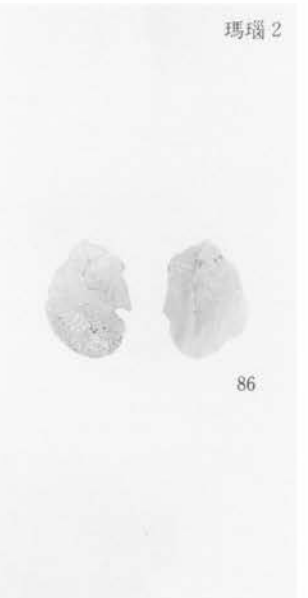
池花南遺跡第 1 文化層出土石器(7)

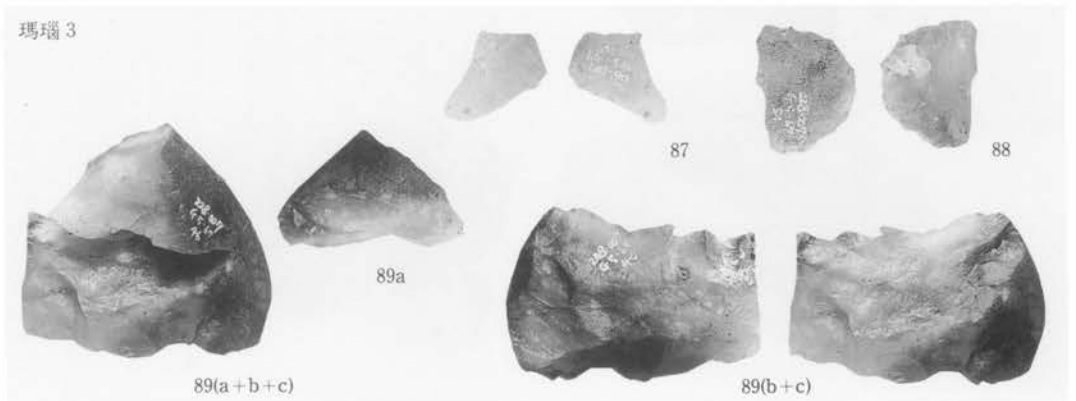
163
凝灰質砂岩 1

164
砂岩 4

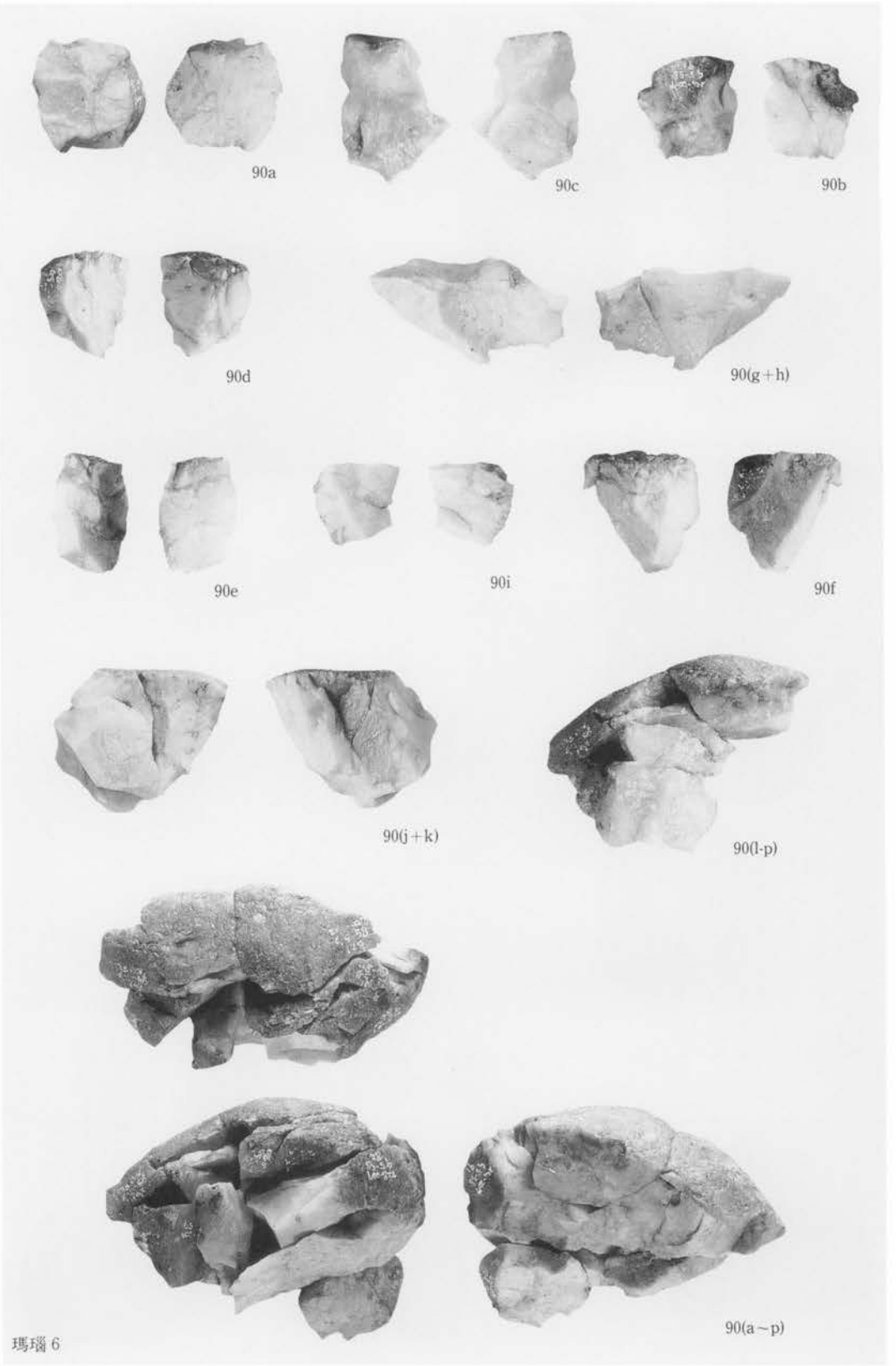
砂岩 5
165


瑪瑙 1
84
85(a+b)

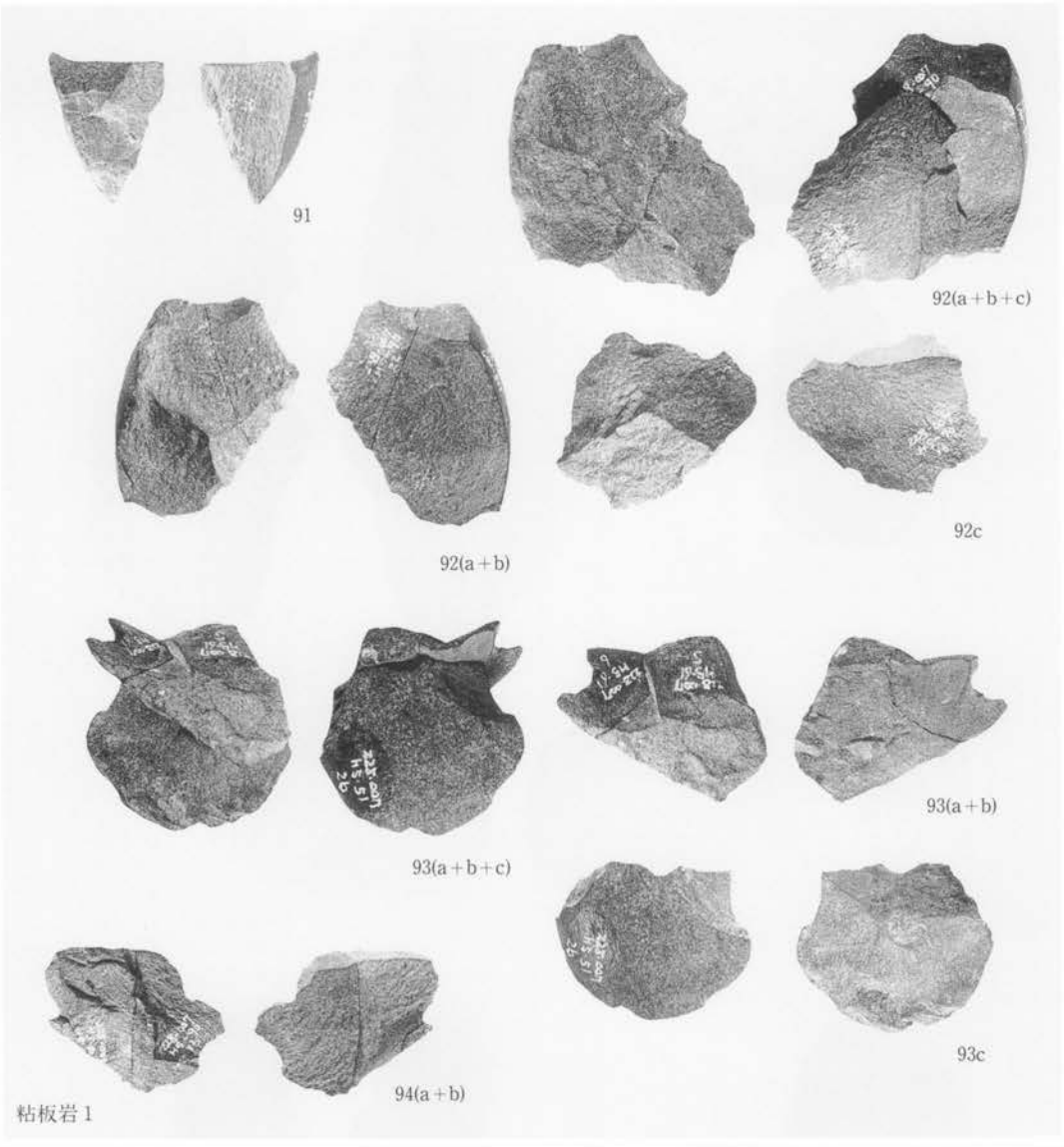

瑪瑙 2
86

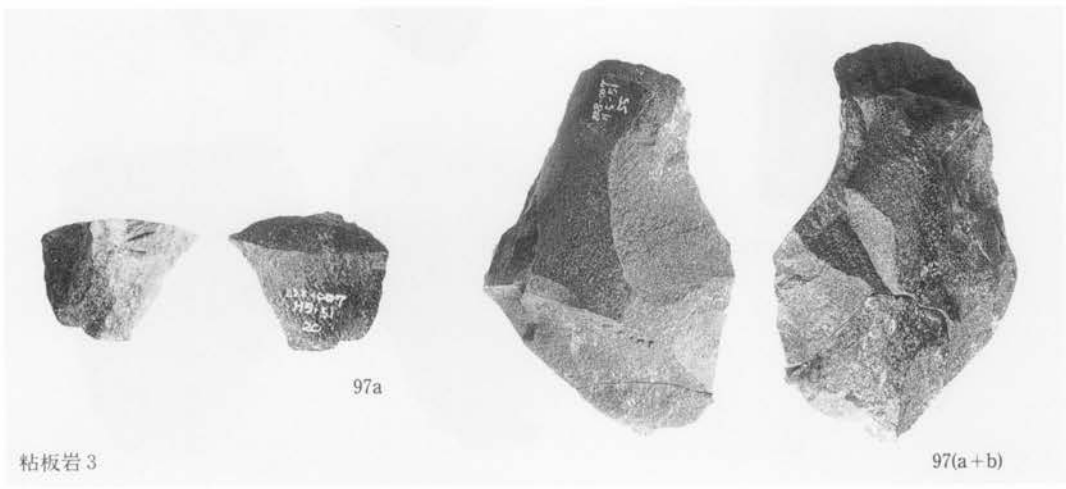

瑪瑙 3
87
88
89a
89(a+b+c)
89(b+c)

池花南遺跡第 1 文化層出土石器(8)

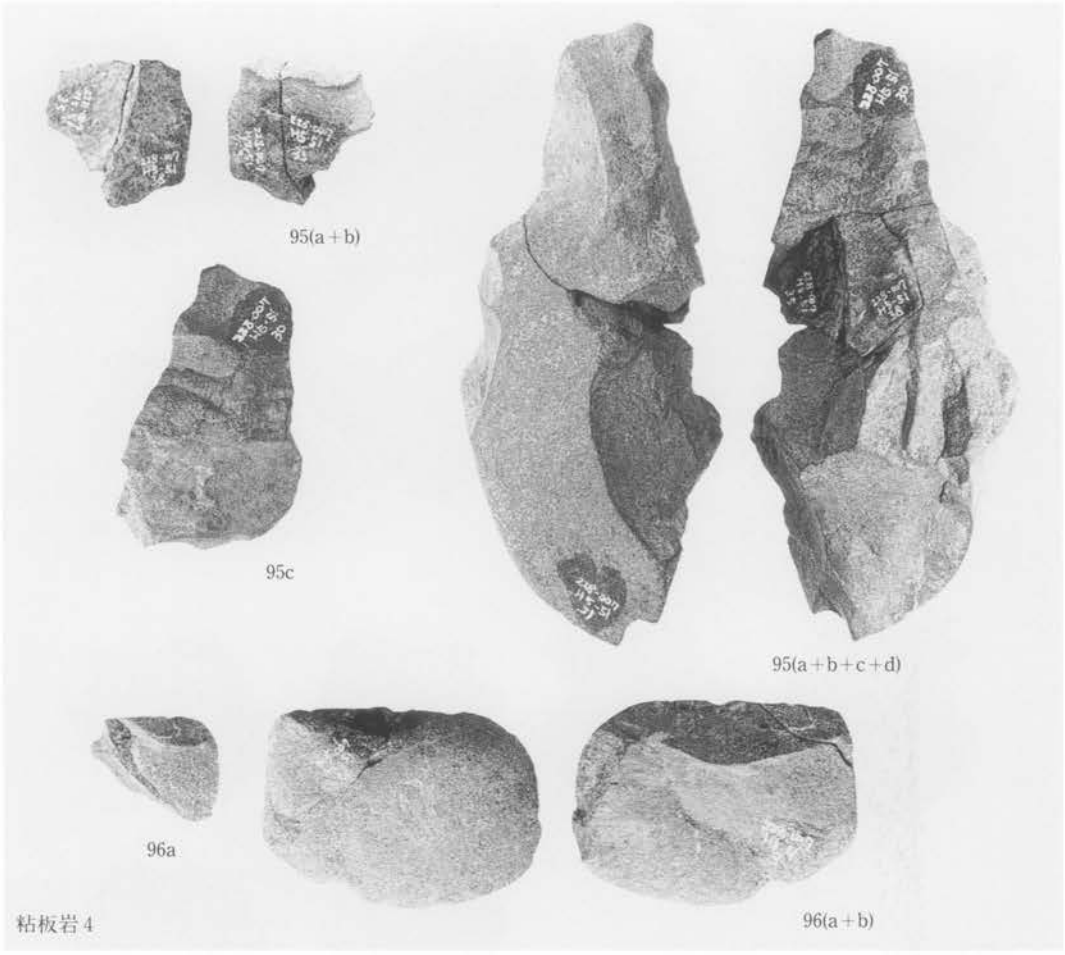


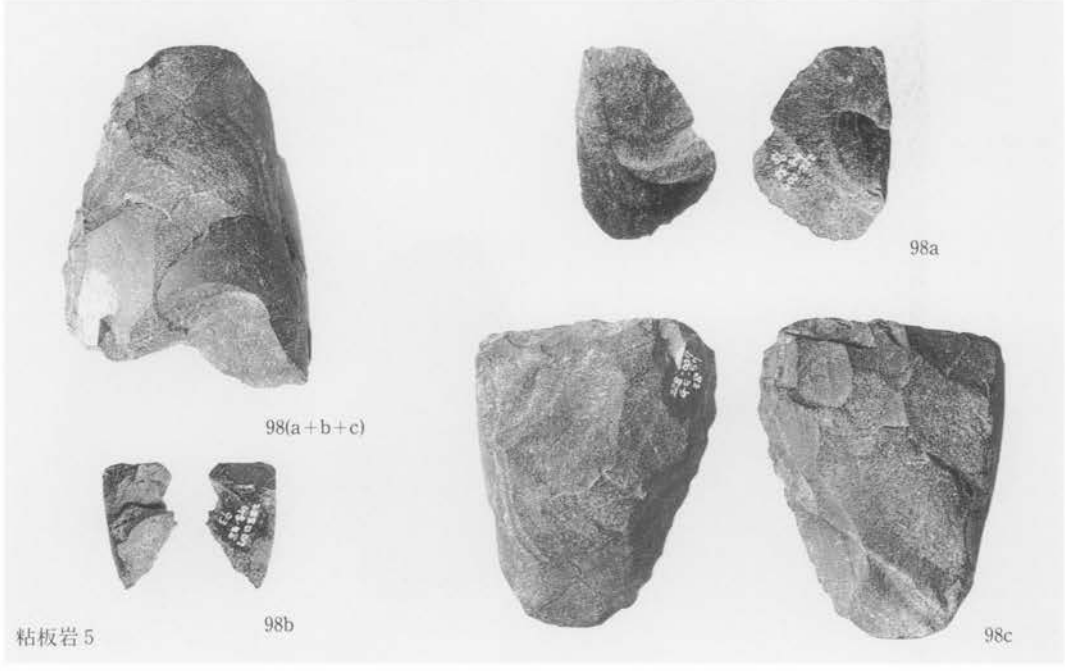
池花南遺跡第 1 文化層出土石器(9)



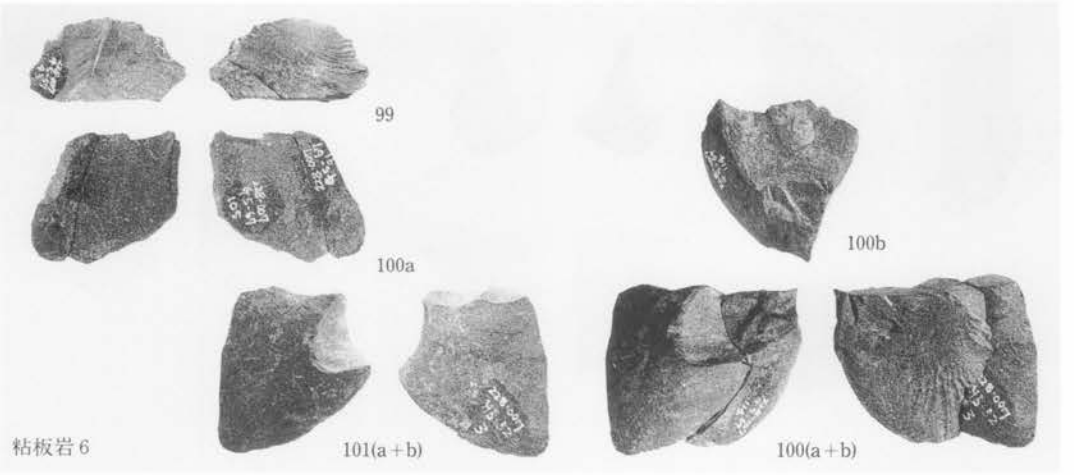


池花南遺跡第1文化層出土石器(10)

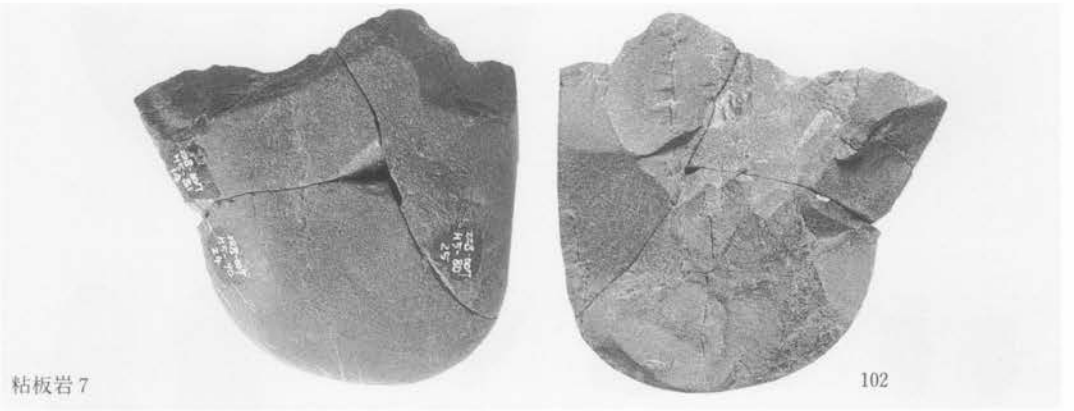




池花南遺跡第 1 文化層出土石器(1)



粘板岩 6

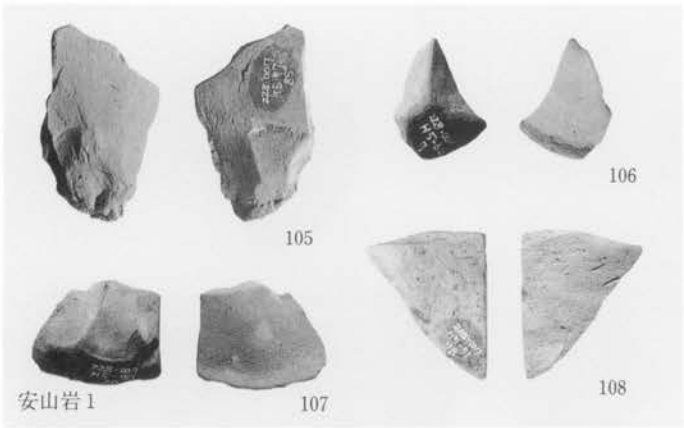


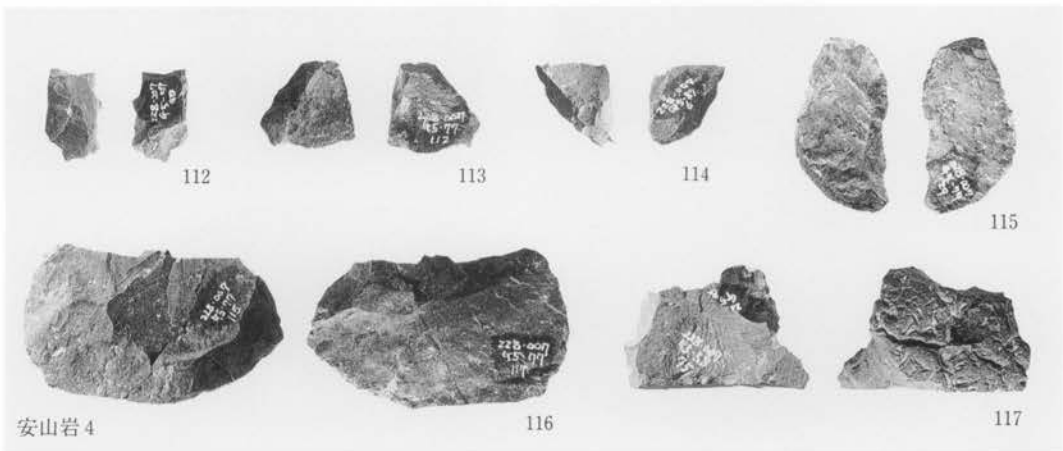
粘板岩 7

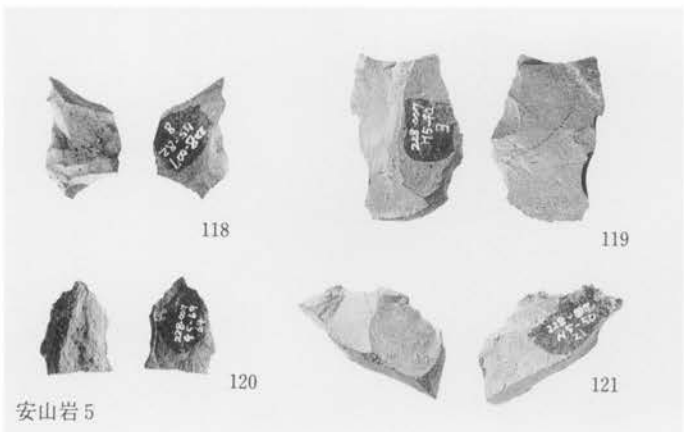
粘板岩 9

ホルンフェルス 1

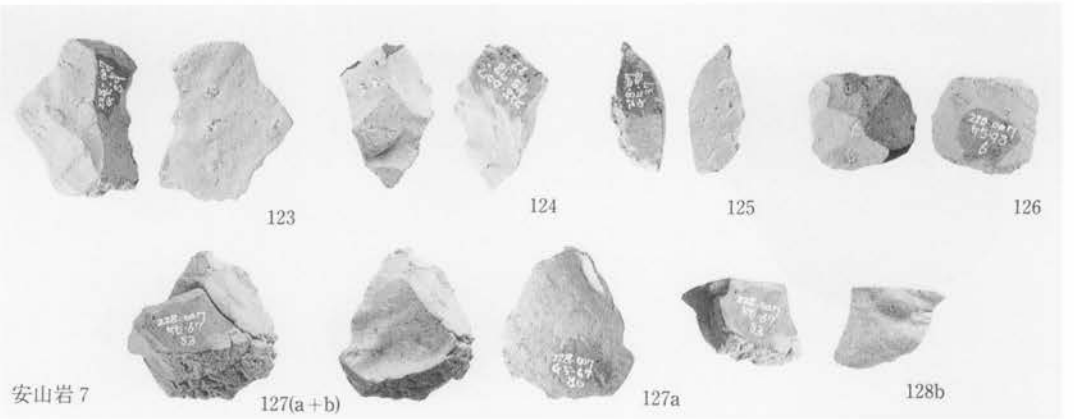
池花南遺跡第 1 文化層出土石器(12)

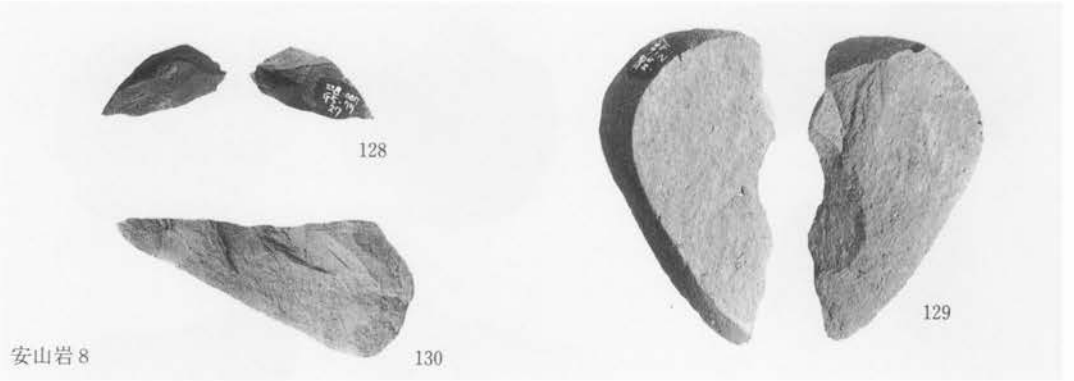


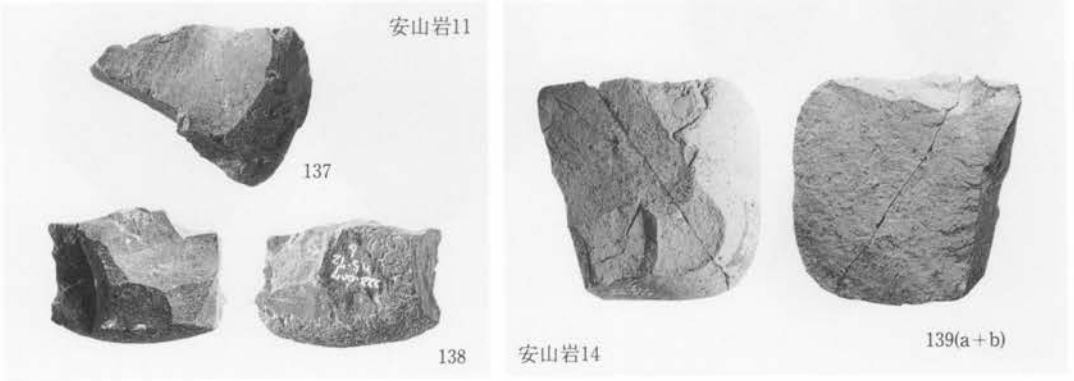




池花南遺跡第 1 文化層出土石器(13)







池花南遺跡第 1 文化層出土石器(14)

140(a～f)

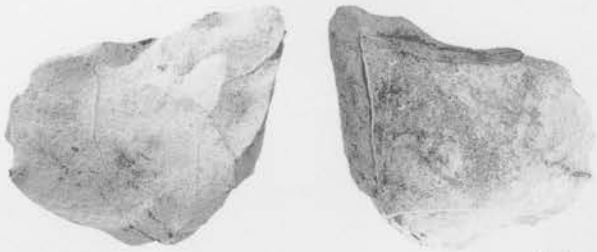
140a

140b

140c

140e

140d



140f

安山岩12

141

安山岩16

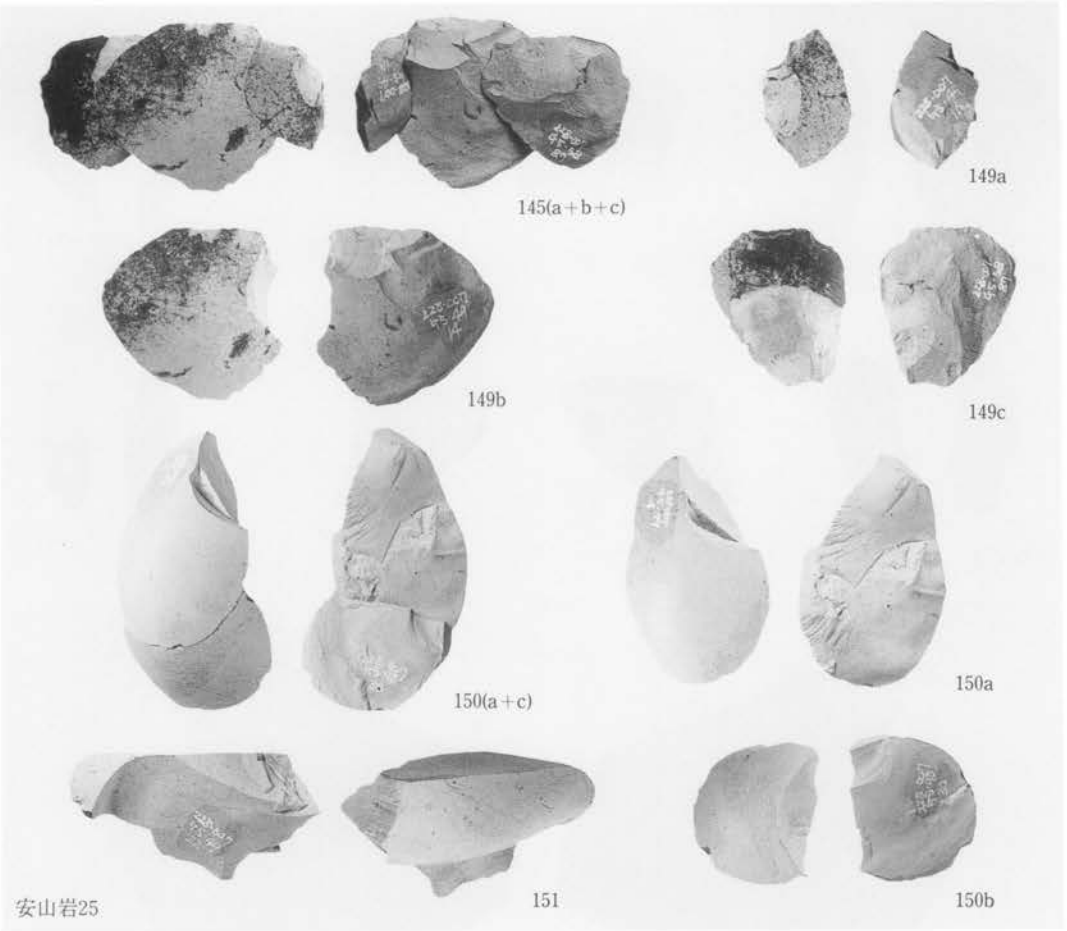
142

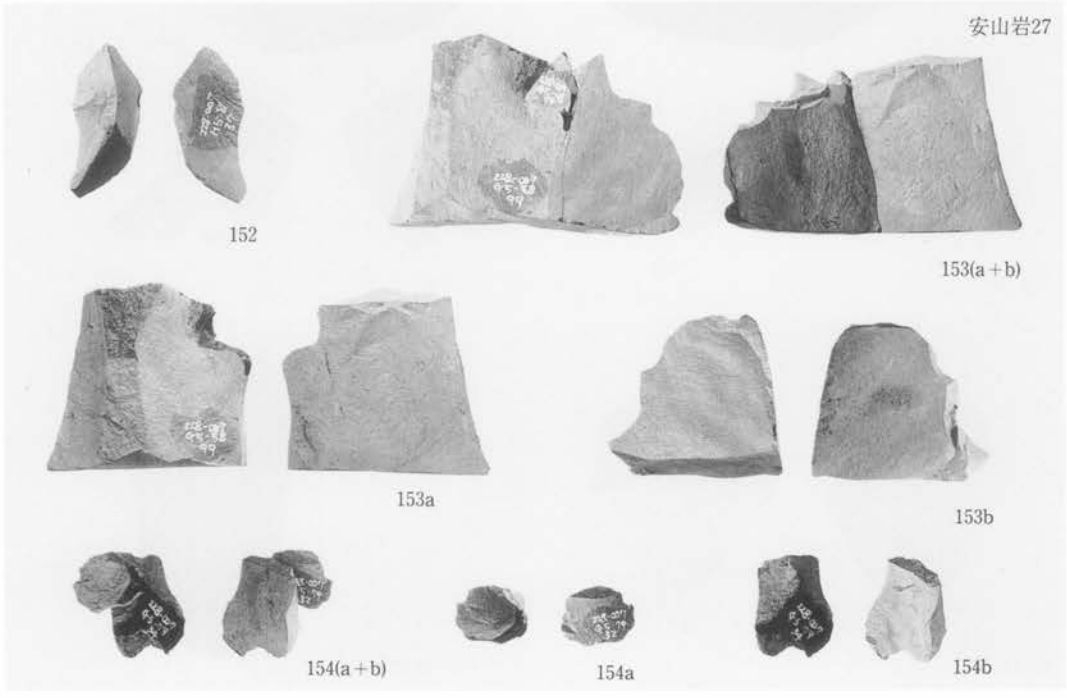
安山岩19

155

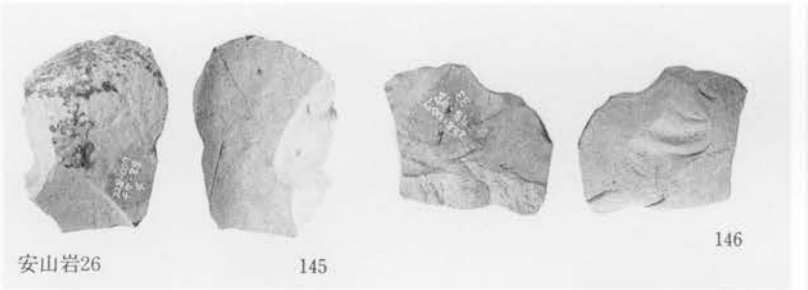
安山岩18

池花南遺跡第 1 文化層出土石器(15)





池花南遺跡第 1 文化層出土石器(16)


安山岩26

145

146

安山岩28

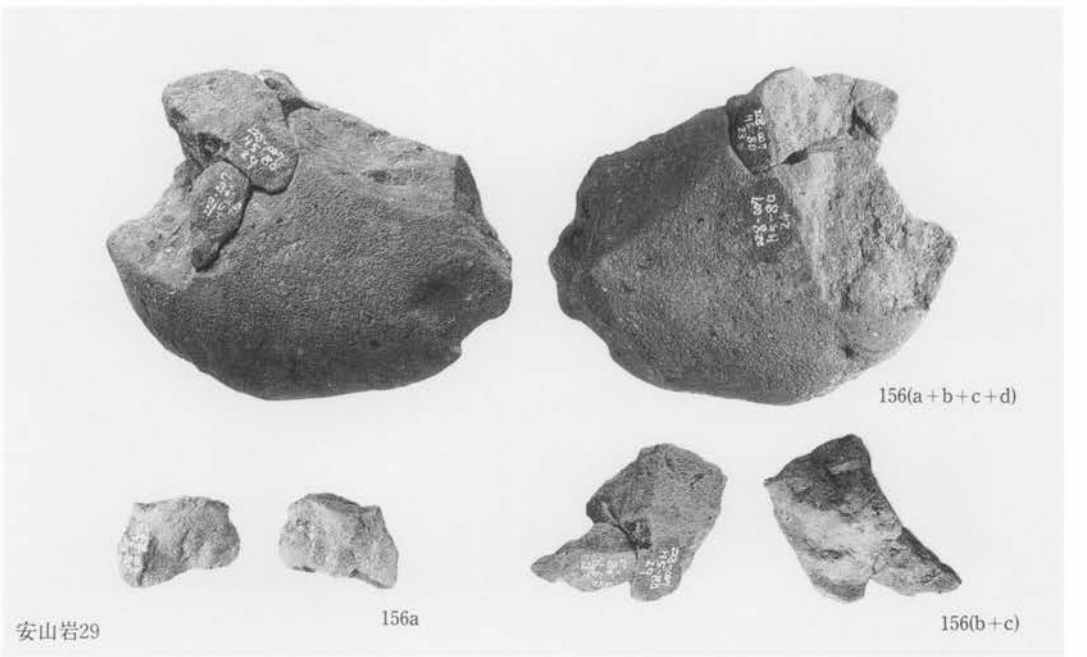
147

148

143

144

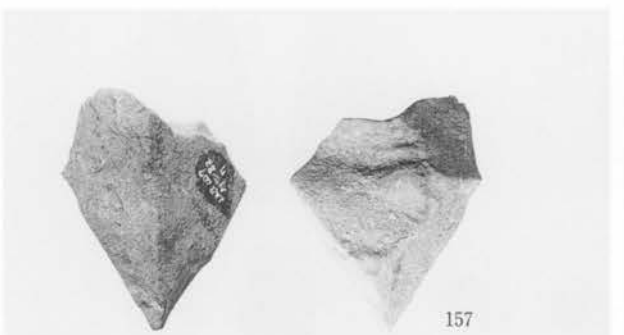
安山岩20


156(a+b+c+d)

156a

156(b+c)

安山岩29

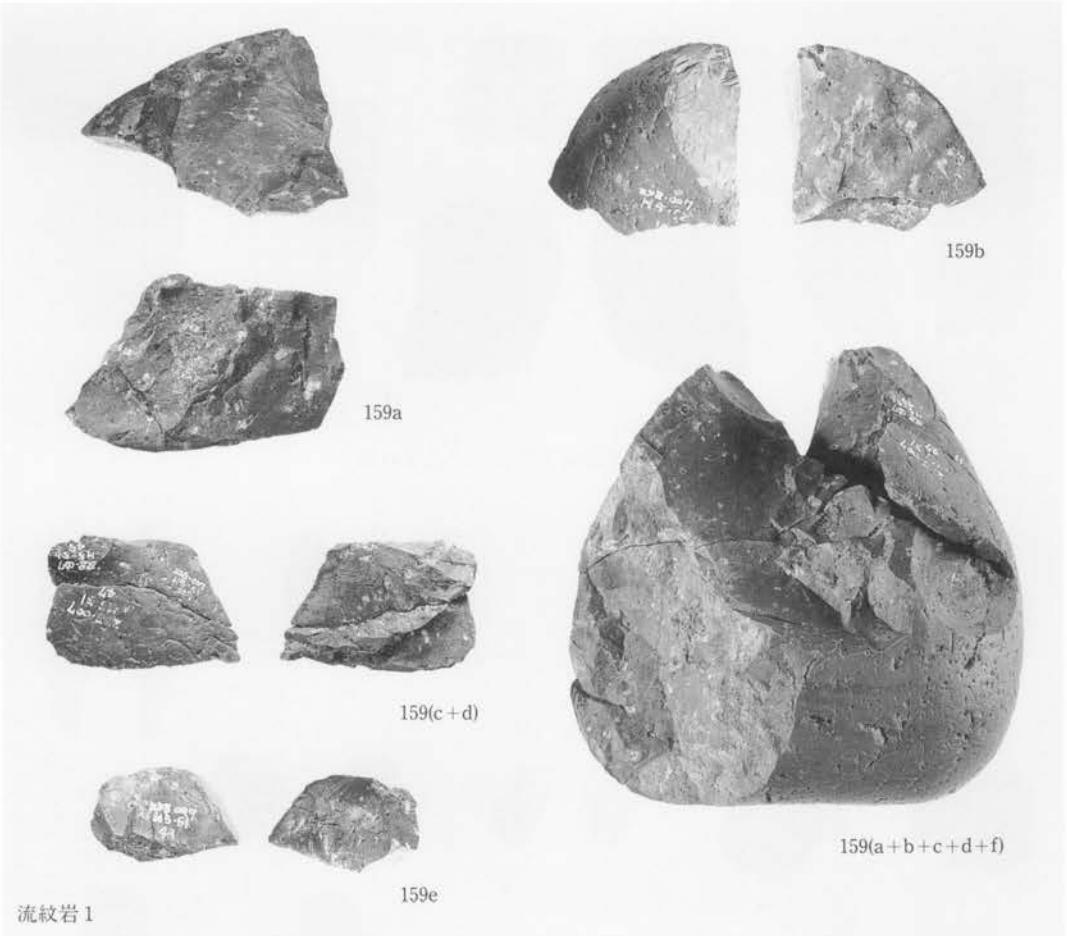

157

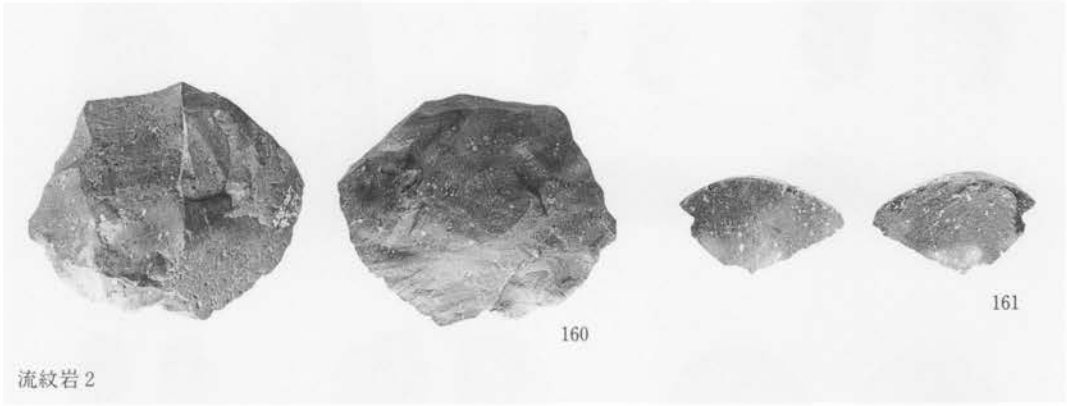
安山岩30

158

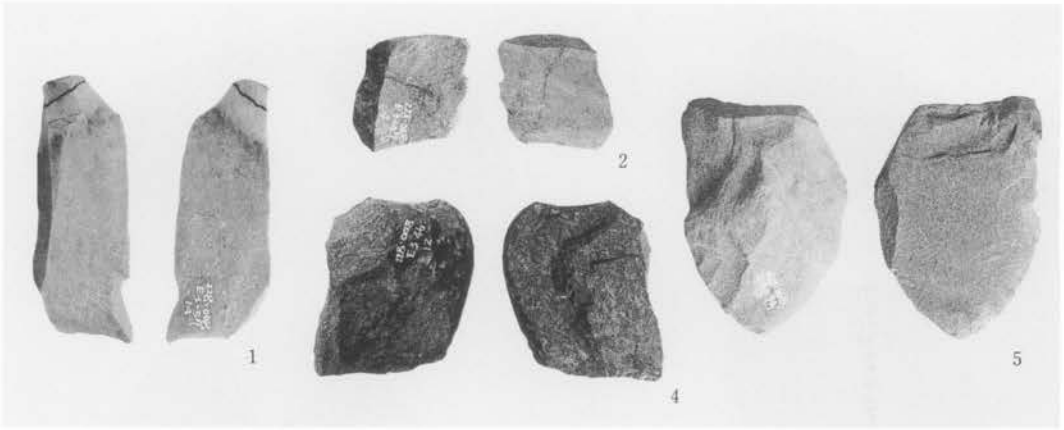
安山岩31

池花南遺跡第 1 文化層出土石器(17)

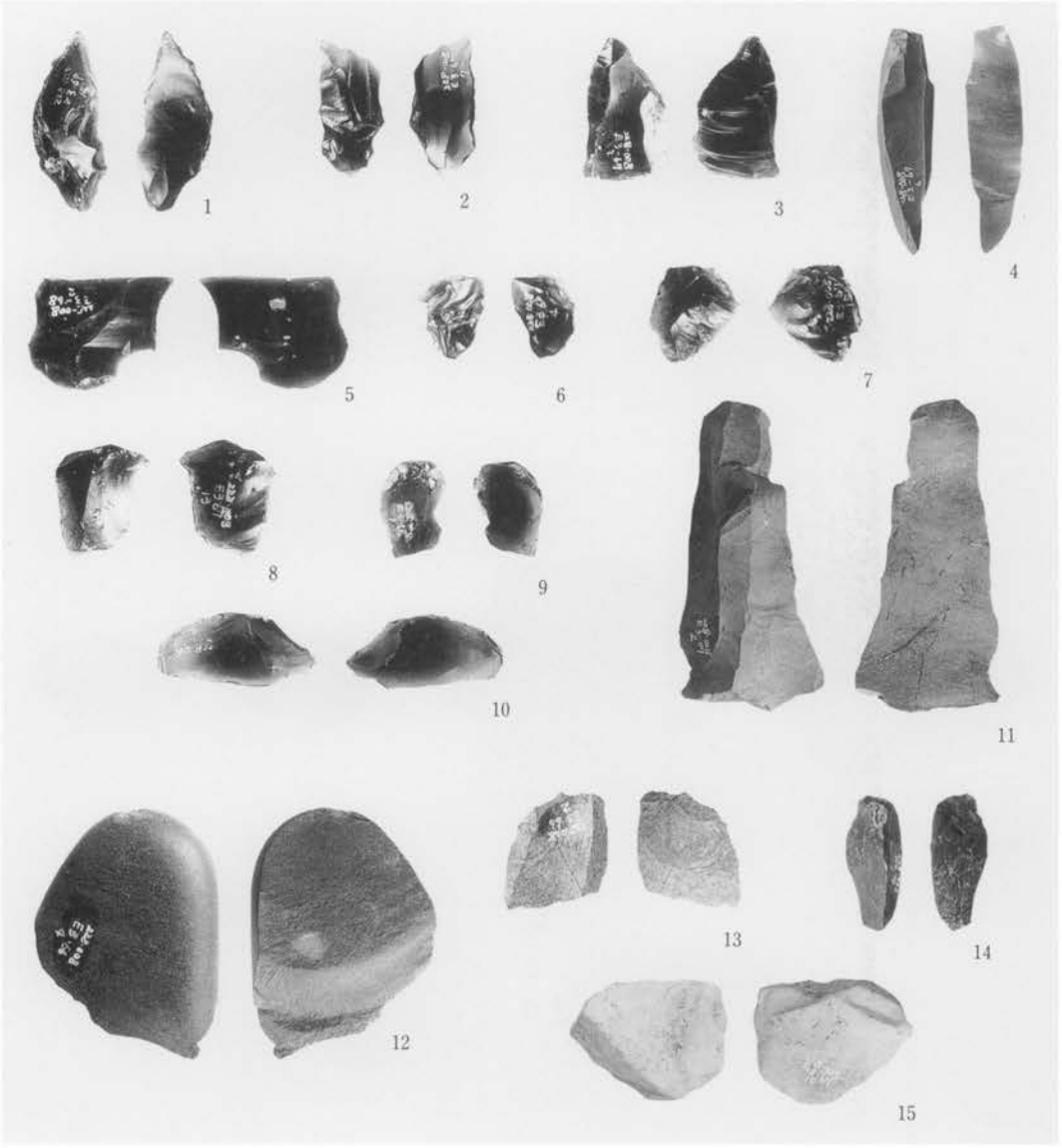




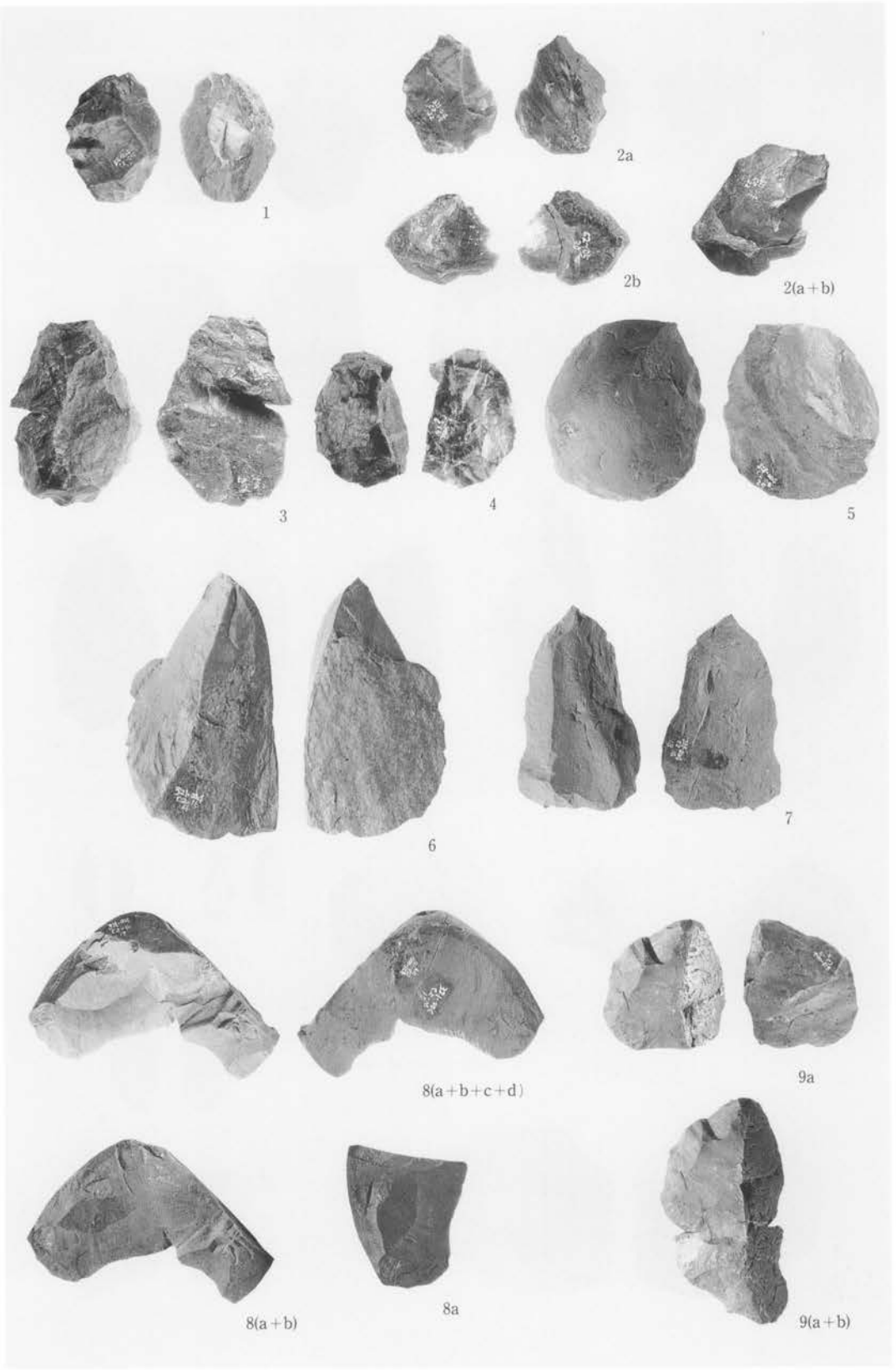
池花南遺跡第 1 文化層出土石器(18)



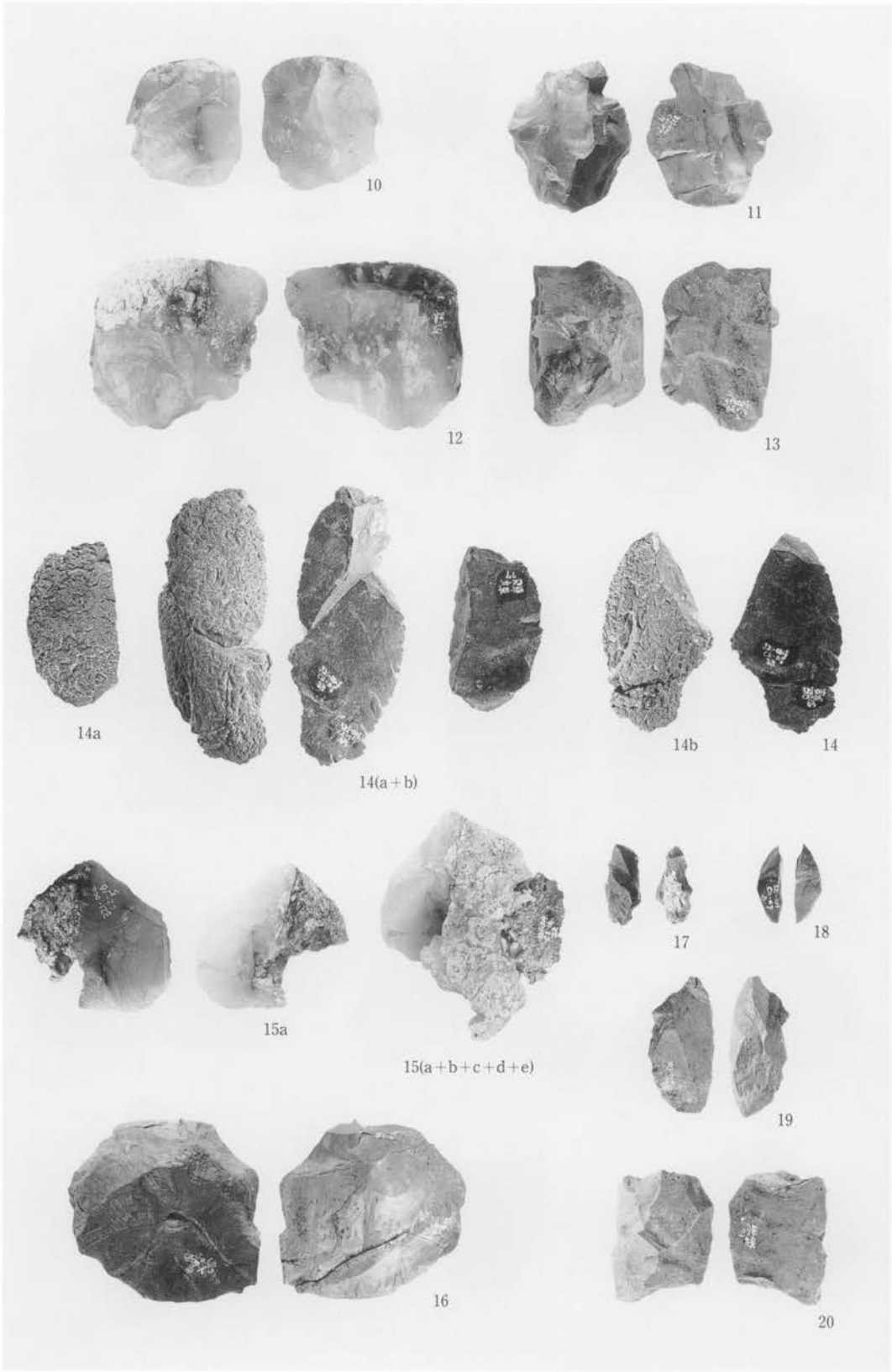
1．池花遺跡Ⅵ 1 ブロック出土石器



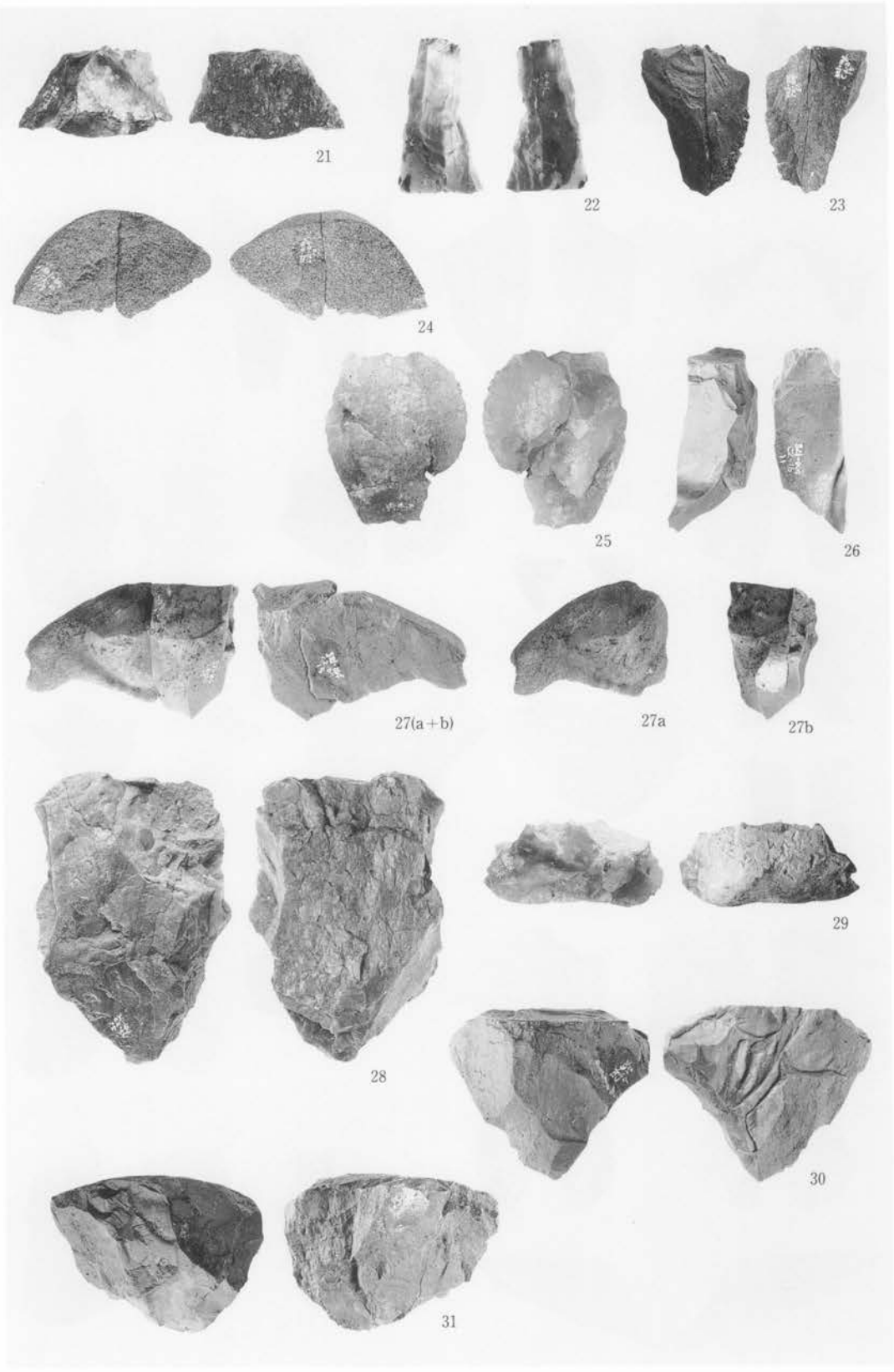
2．池花遺跡Ⅵ 2 ブロック出土石器



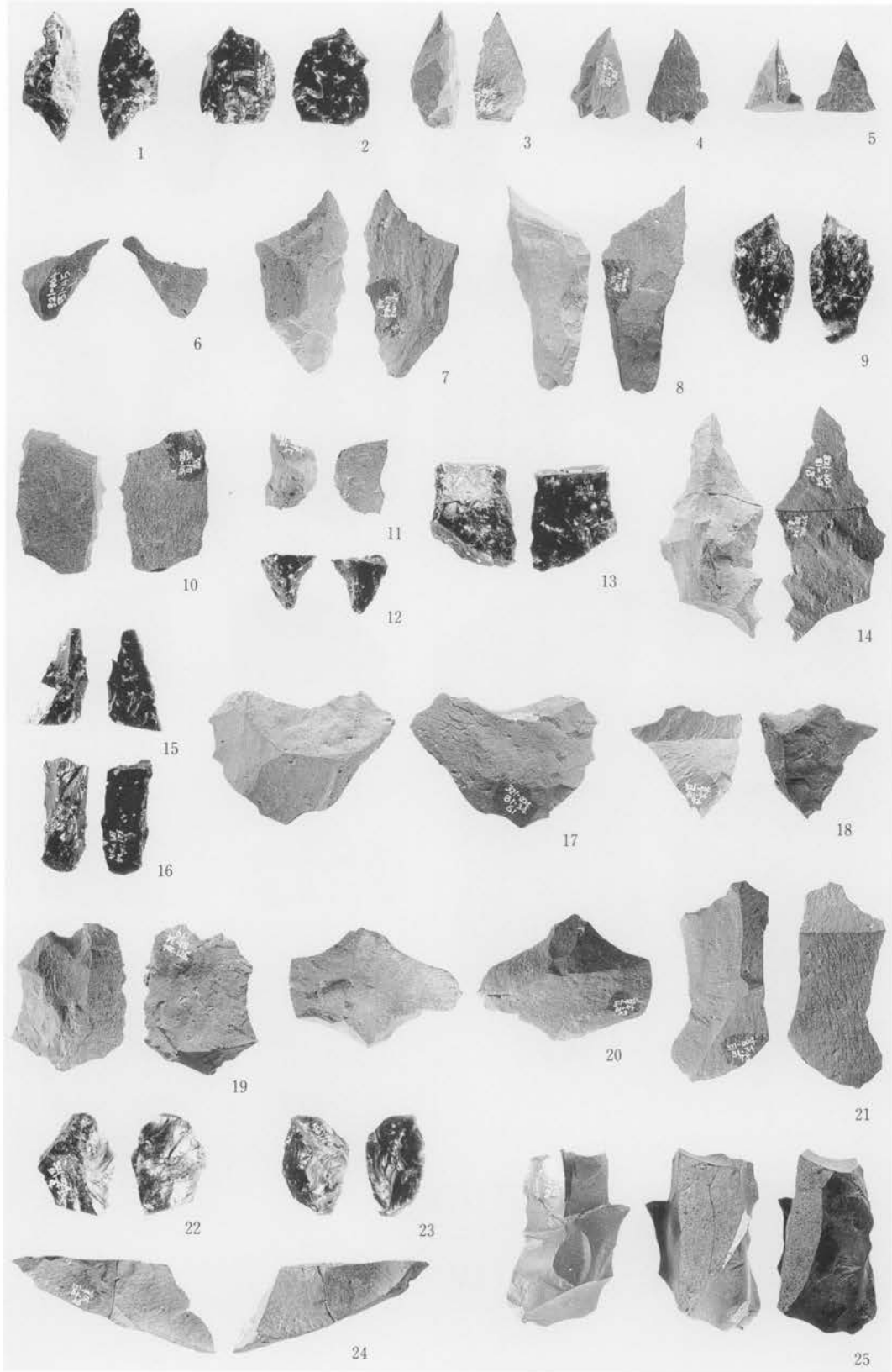
大割遺跡第3文化層出土石器(1)



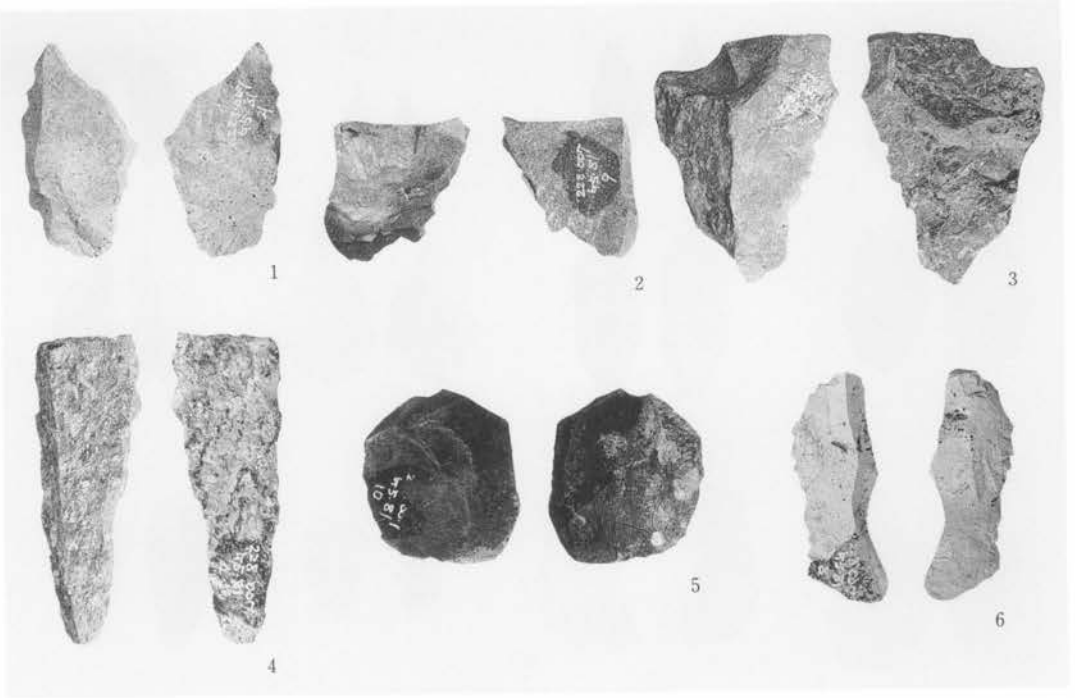
大割遺跡第 3 文化層出土石器 (2)

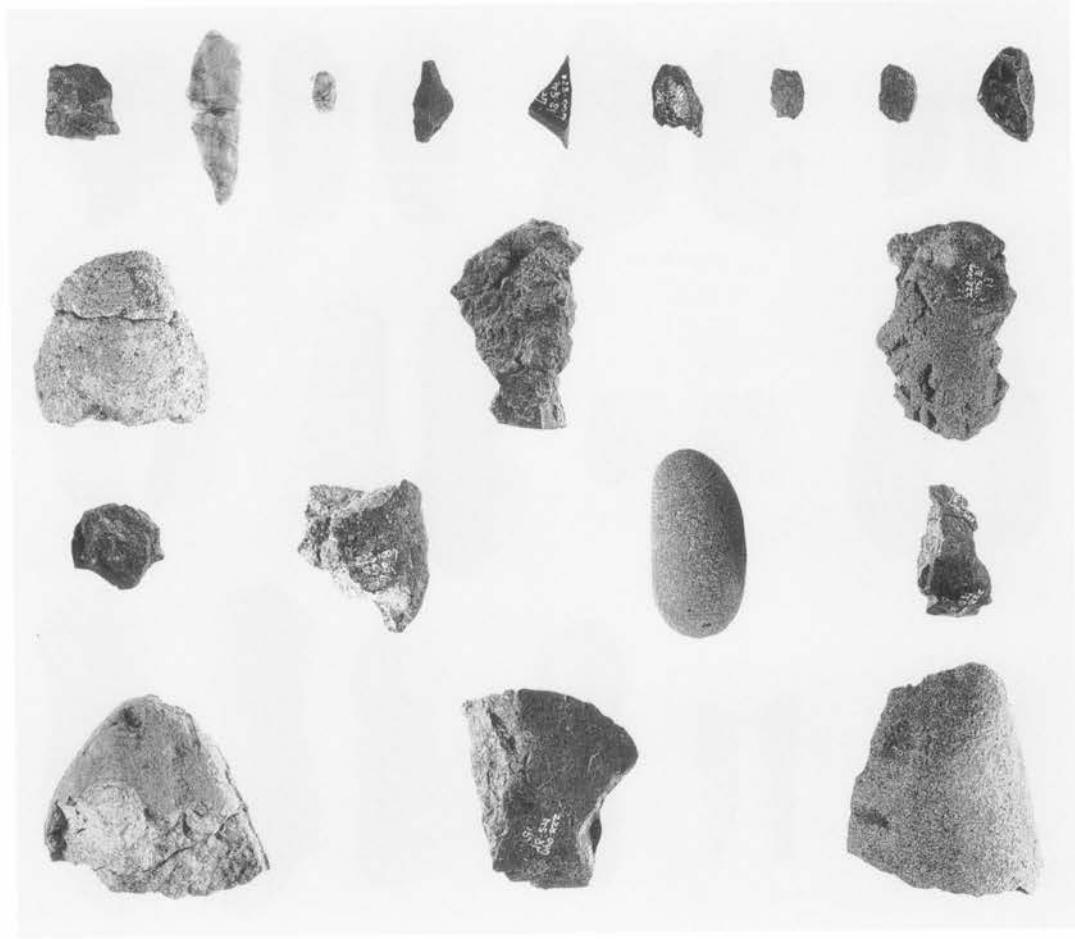


大割遺跡第3文化層出土石器(3)

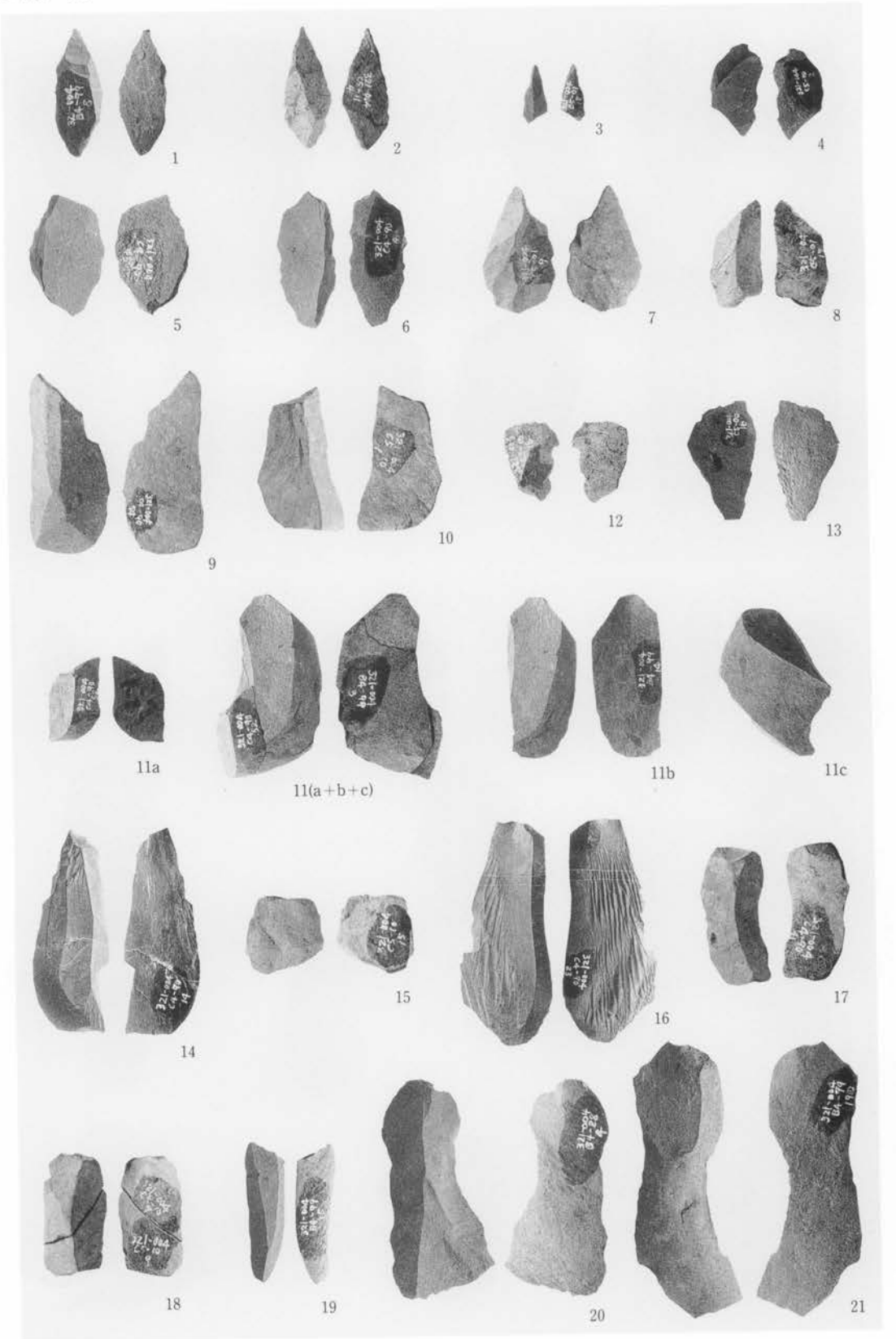


大割遺跡第 4 文化層出土石器

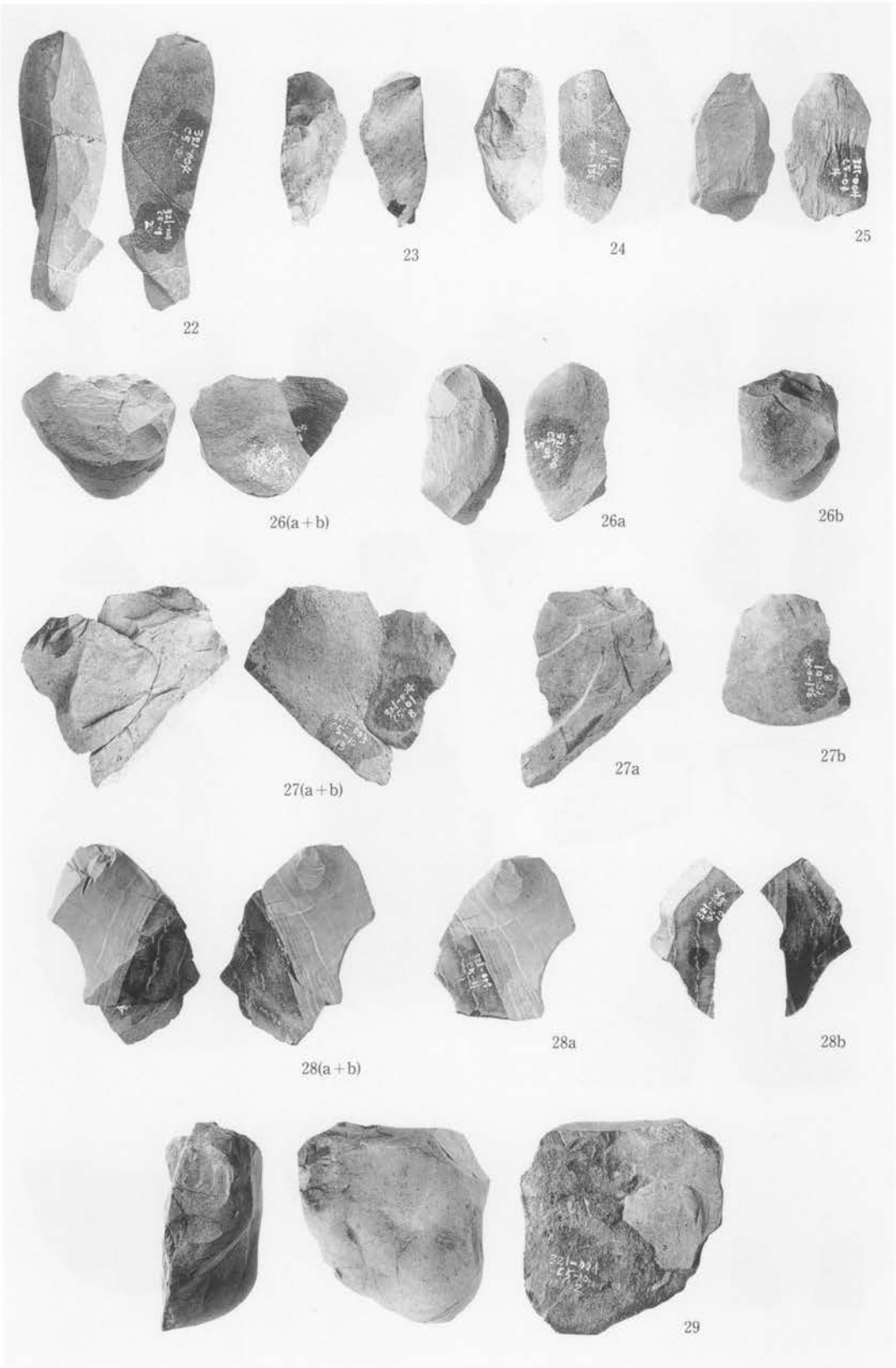




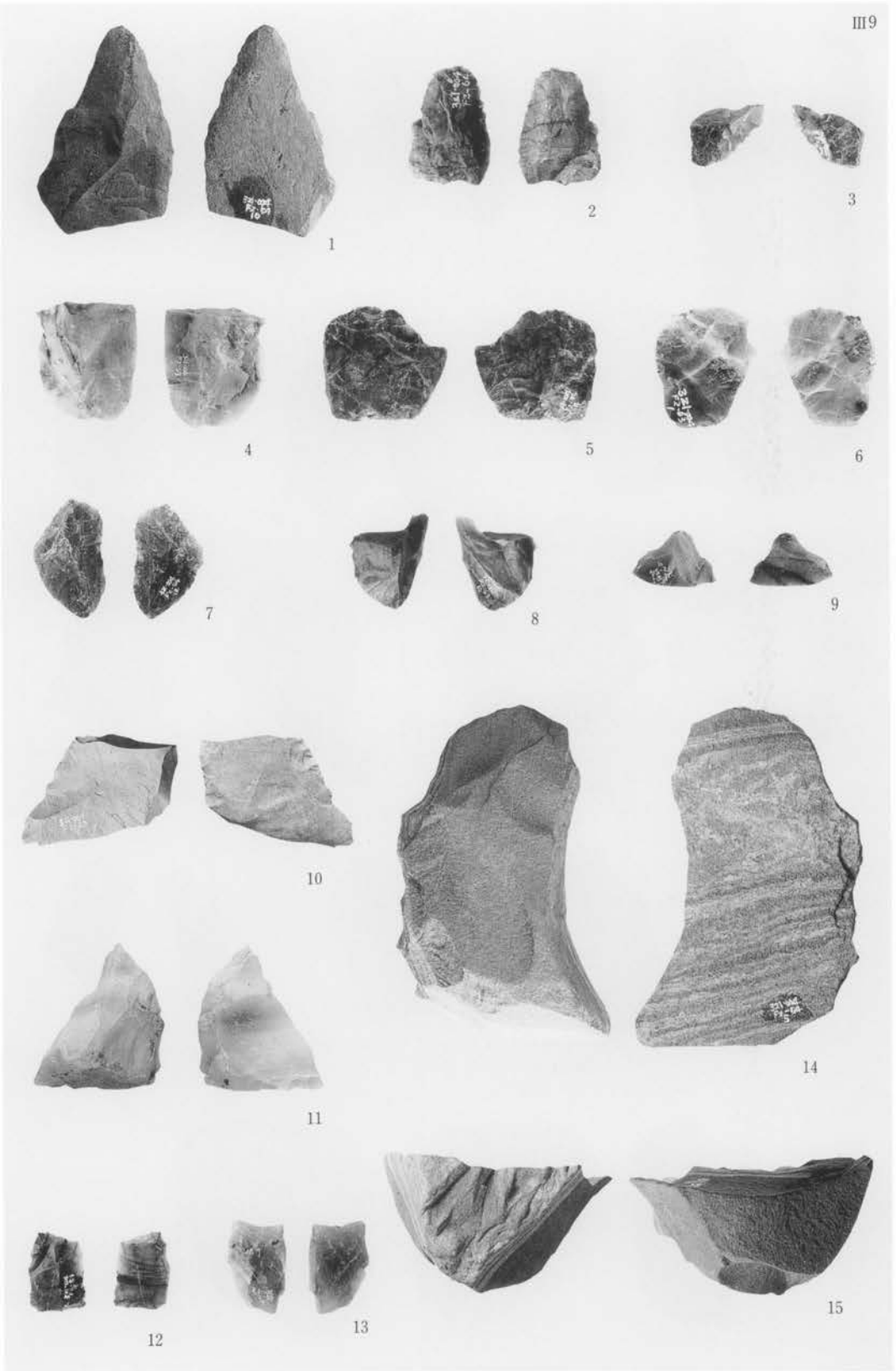
池花南遺跡第２文化層出土石器



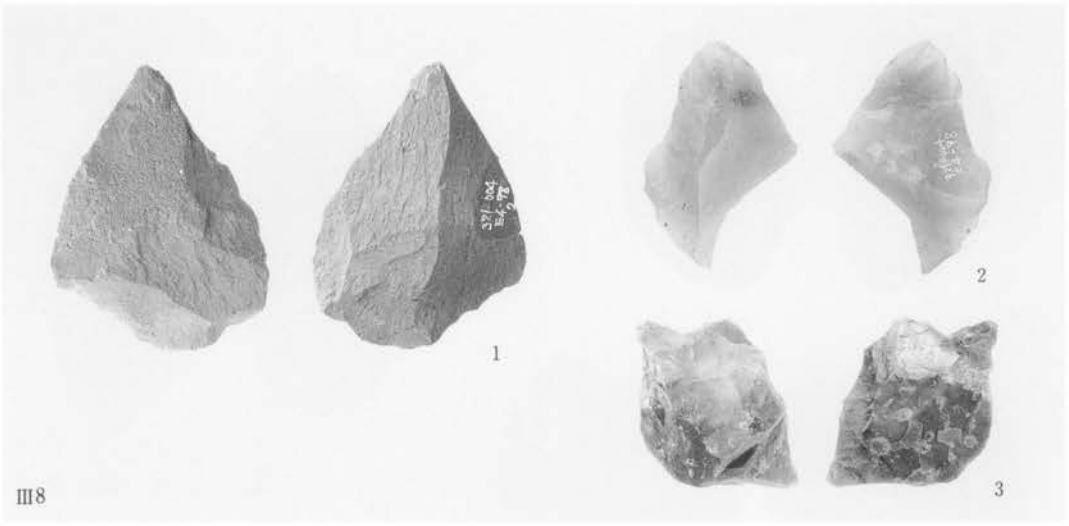
大割遺跡第5文化層出土石器(1)

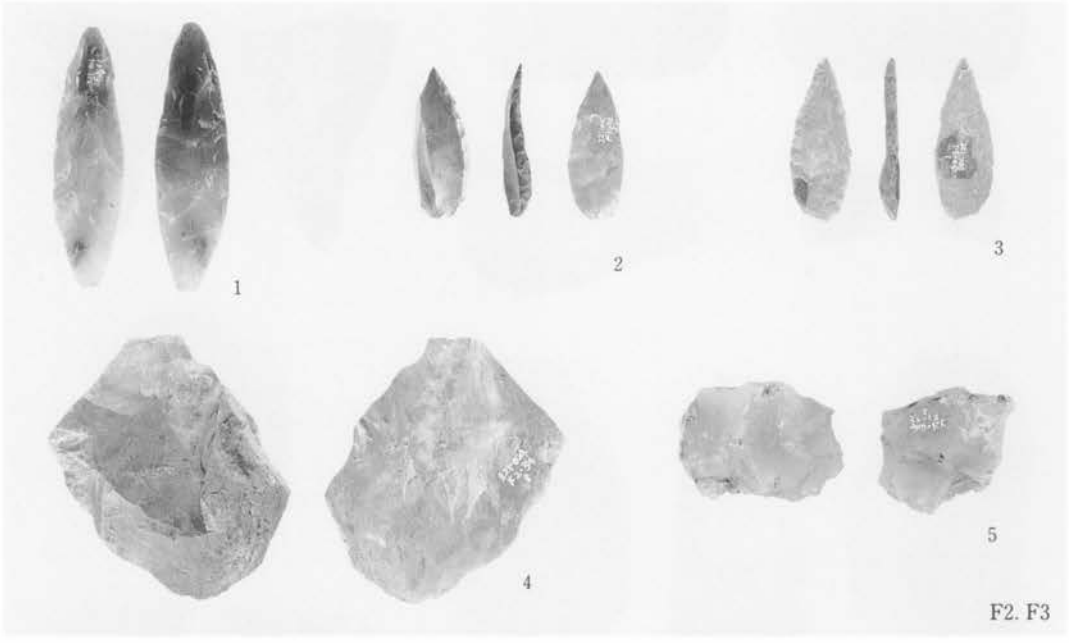


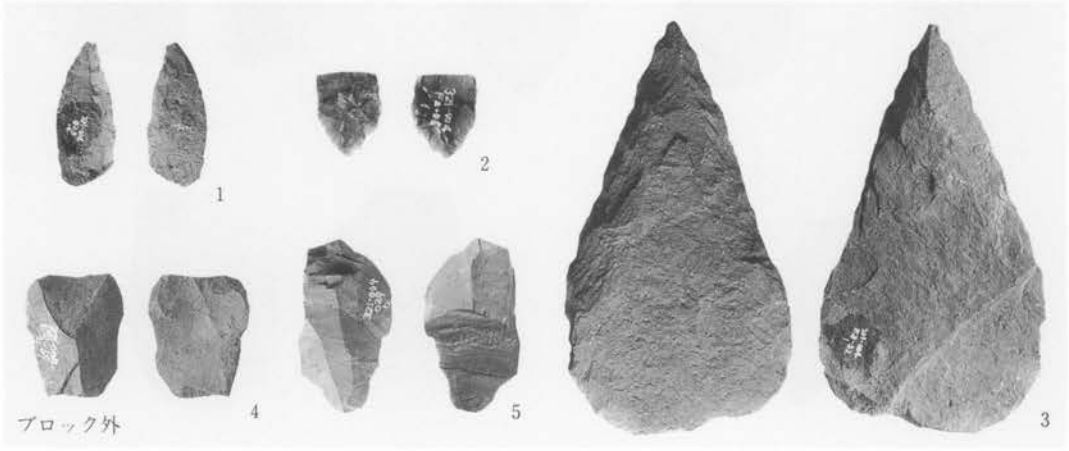
大割遺跡第 5 文化層出土石器(2)



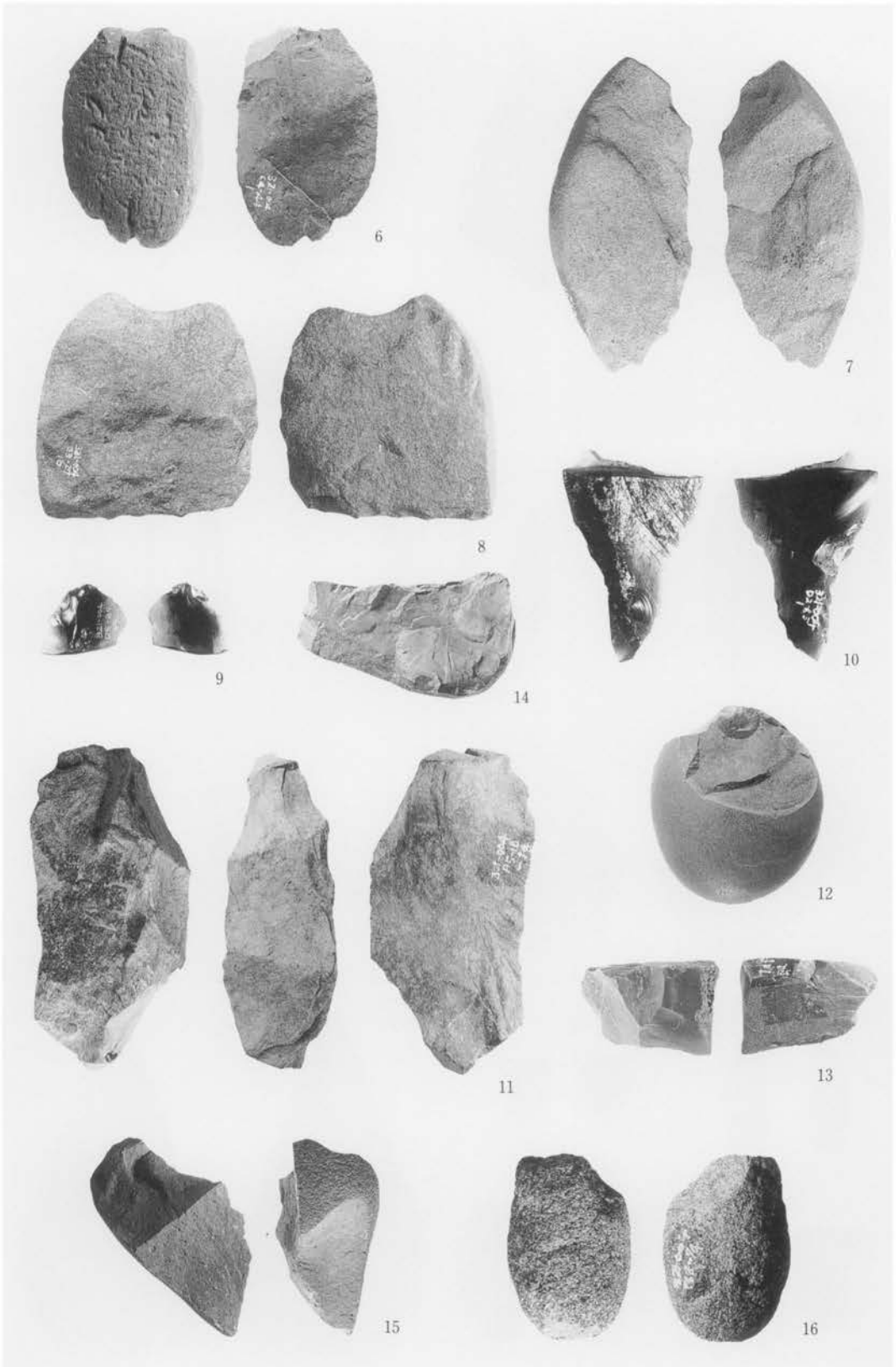
大割遺跡第 6 文化層出土石器(1)



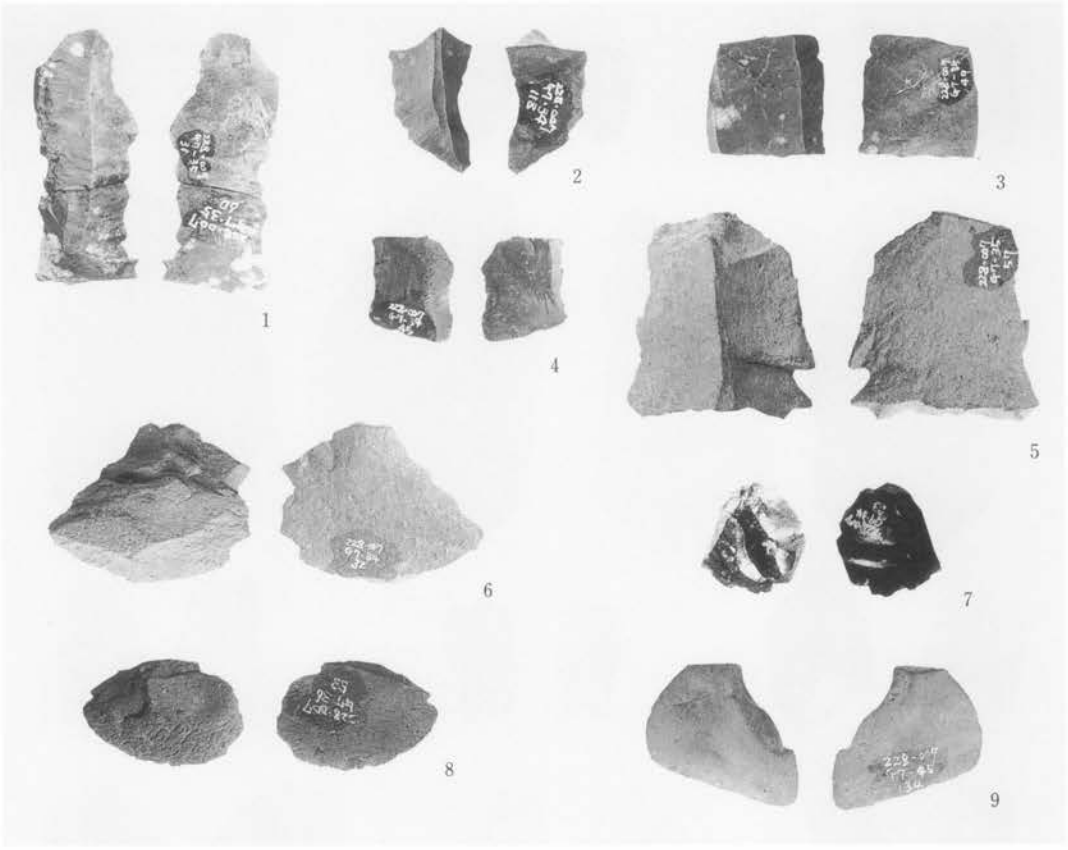




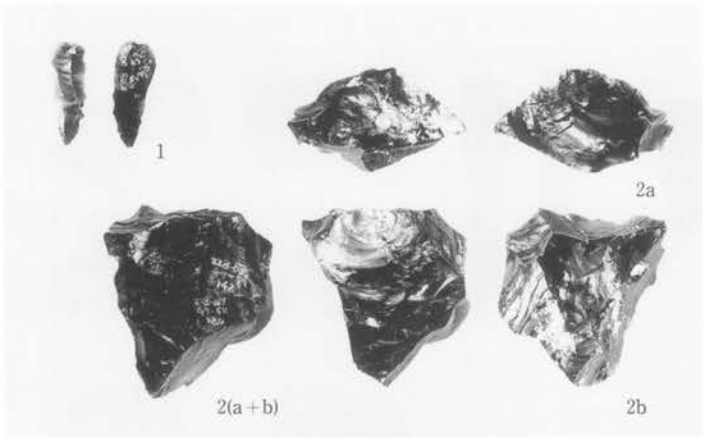
大割遺跡第6文化層出土石器(2)・ブロック外出土石器(1)



大割遺跡ブロック外出土石器(2)



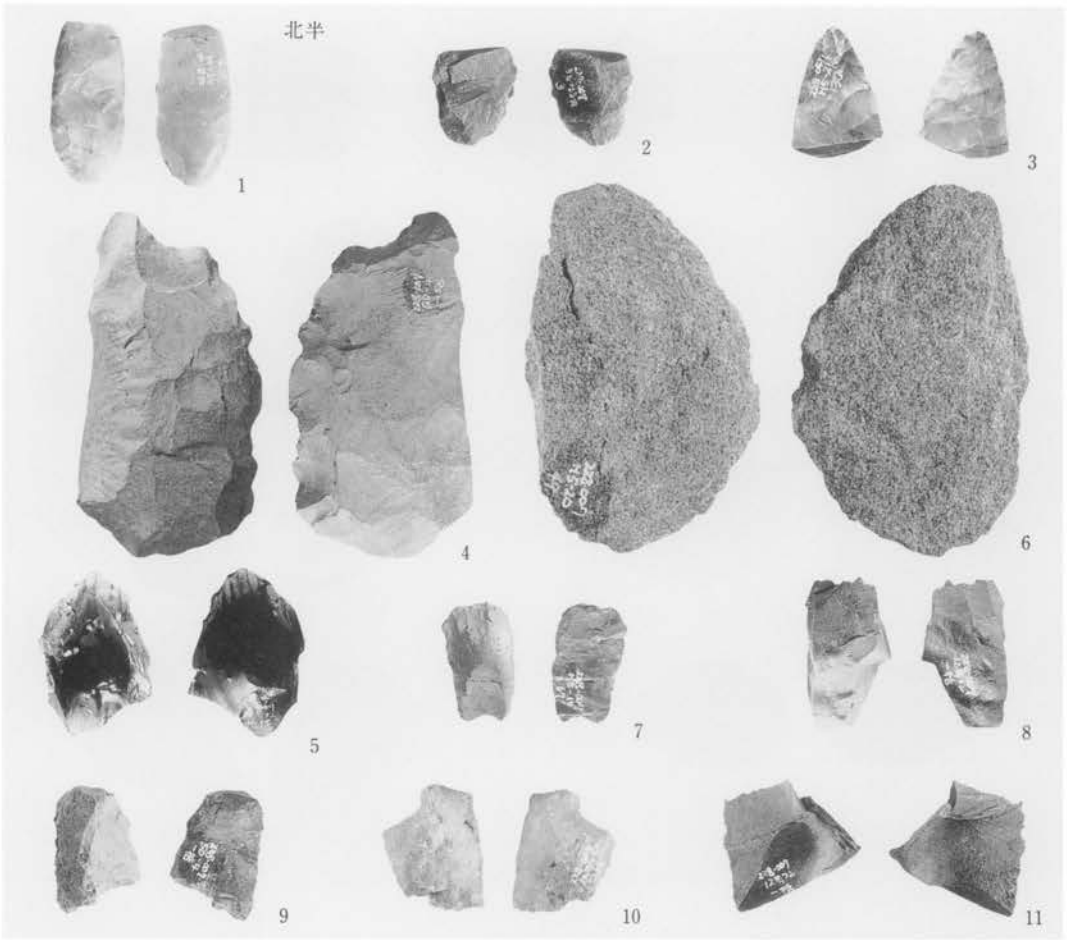
1．池花南遺跡Ⅲ２～４ブロック出土石器

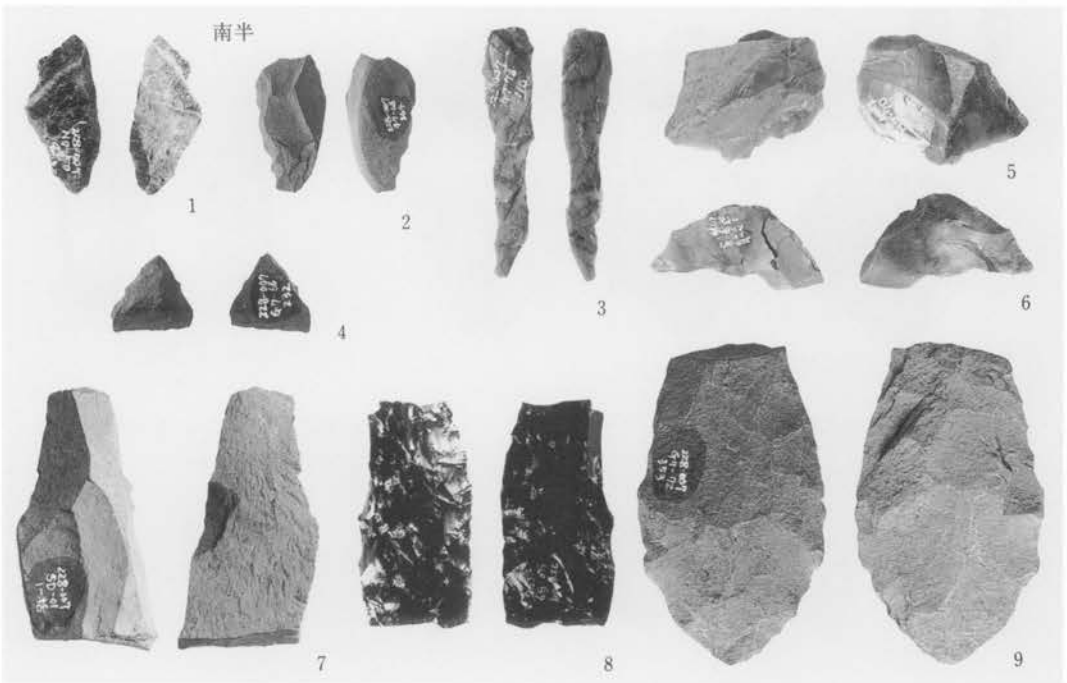


2．池花南遺跡Ⅲ５ブロック出土石器

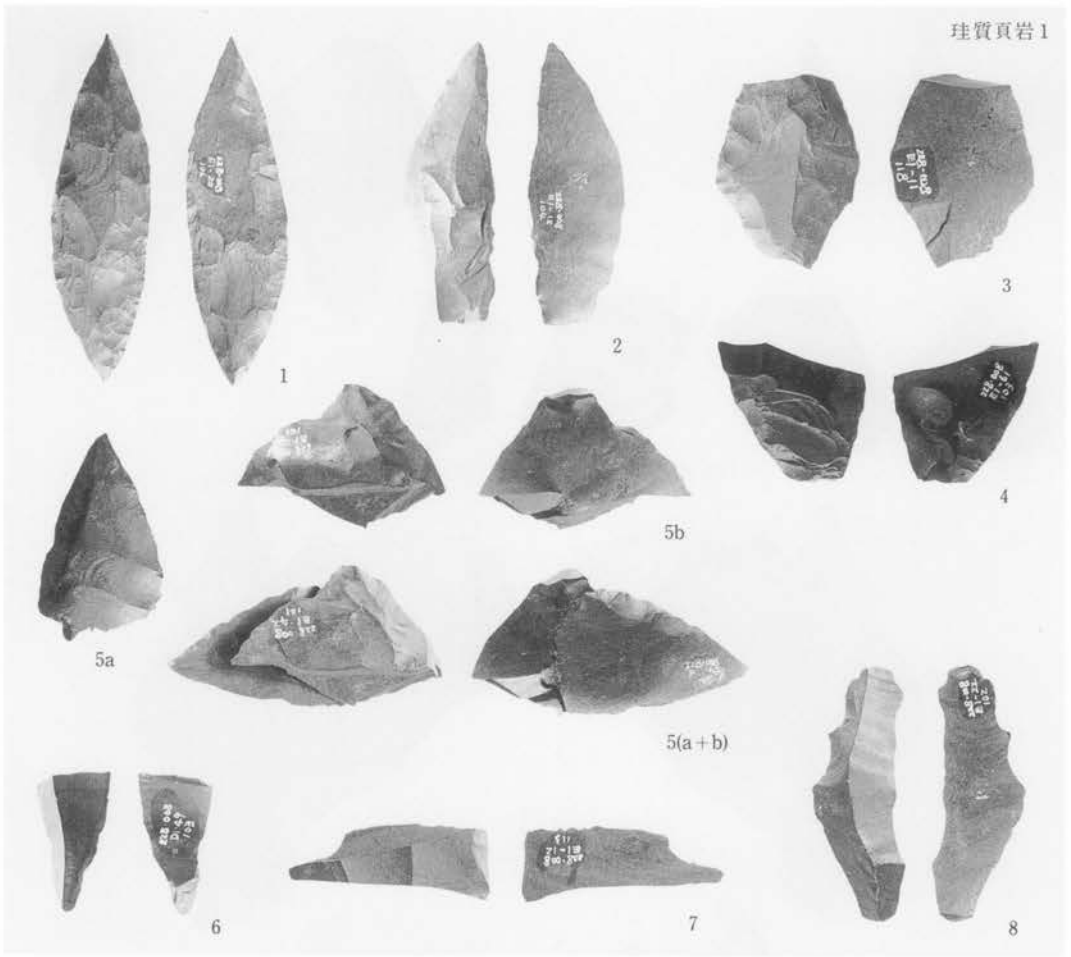
3．池花南遺跡G4-66区出土石器

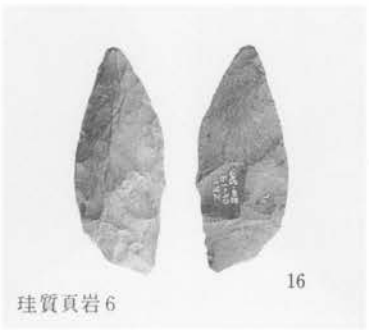
4．池花遺跡Ⅲ11ブロック出土石器

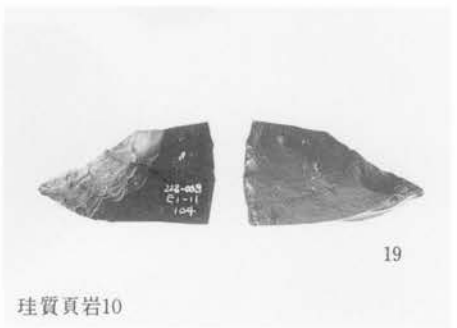




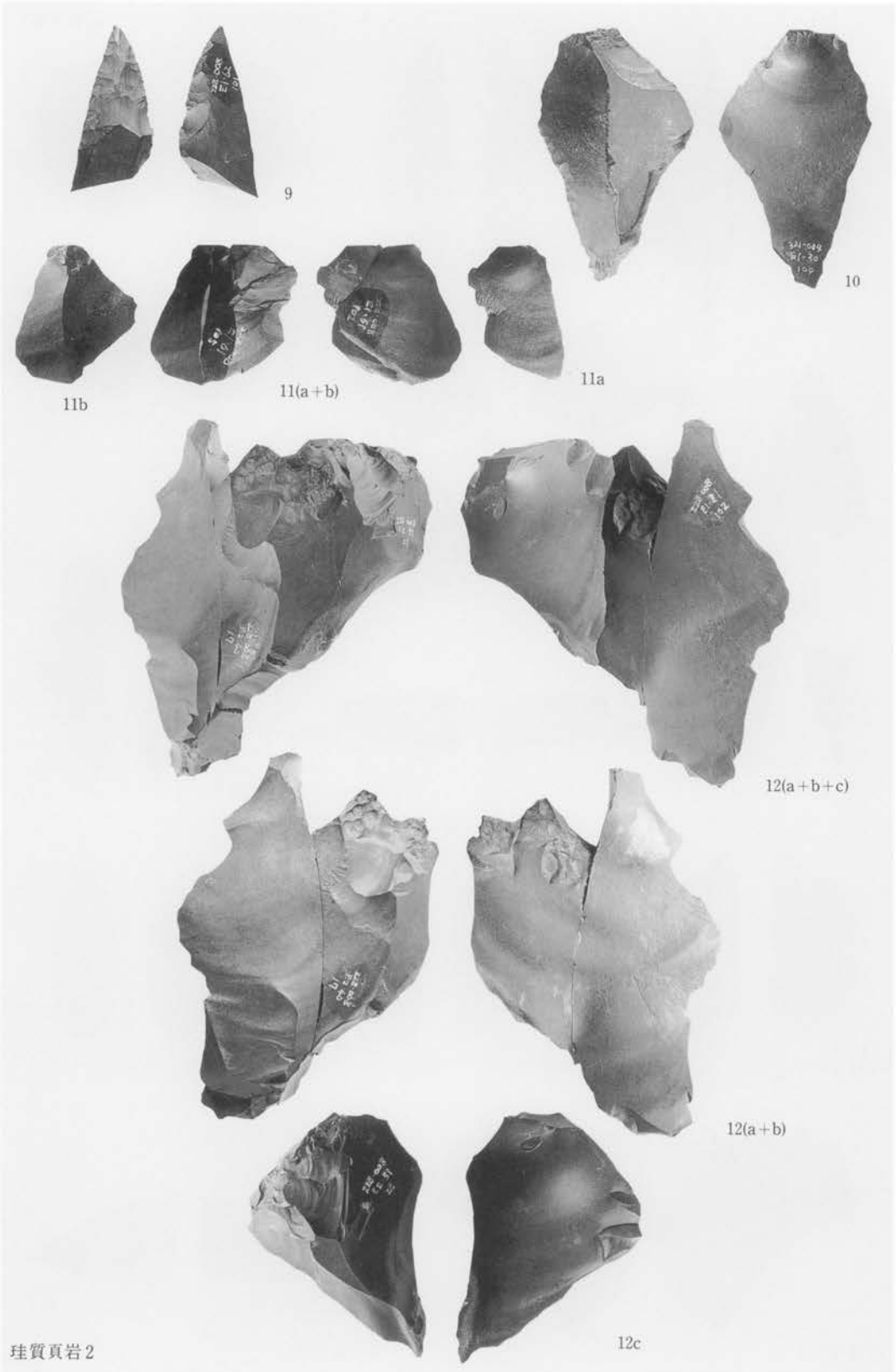
池花南遺跡ブロック外出土石器



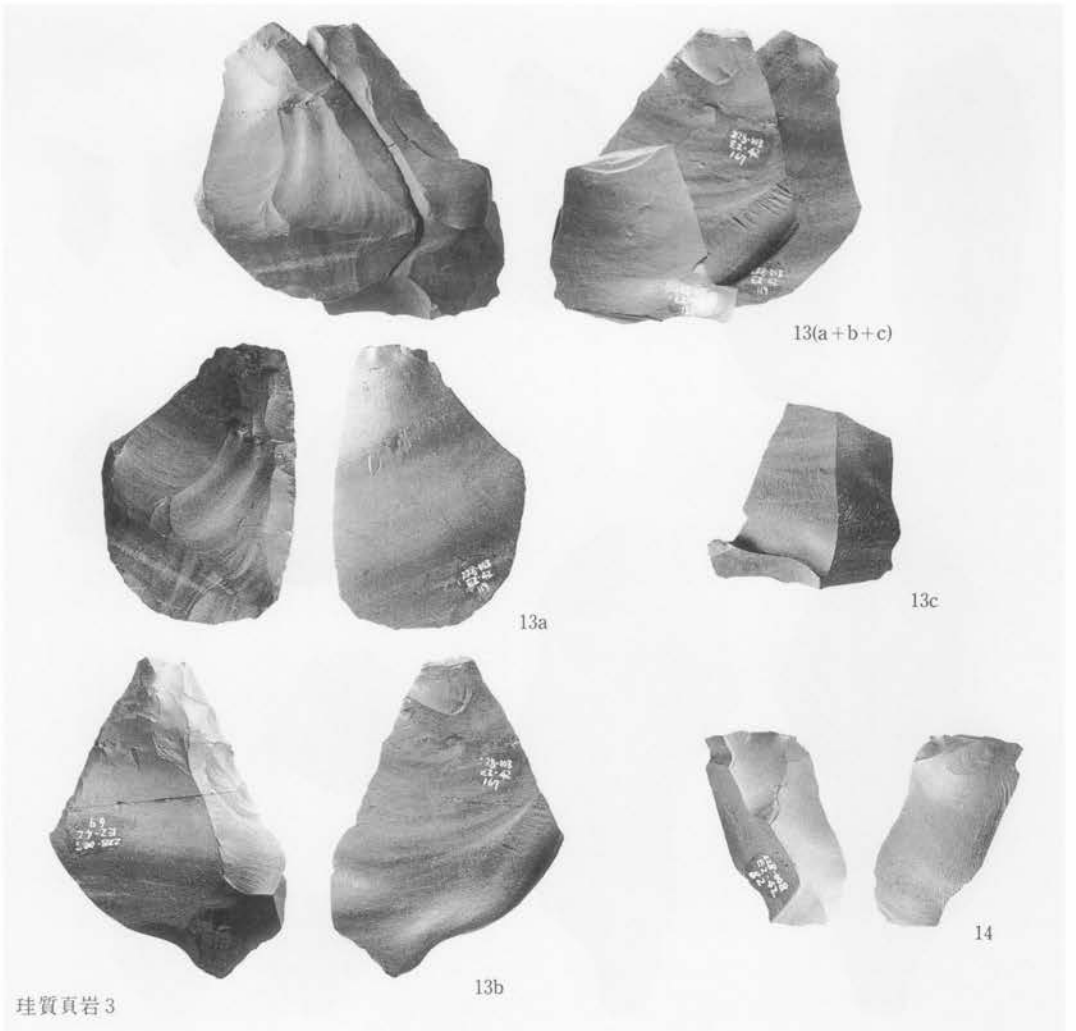


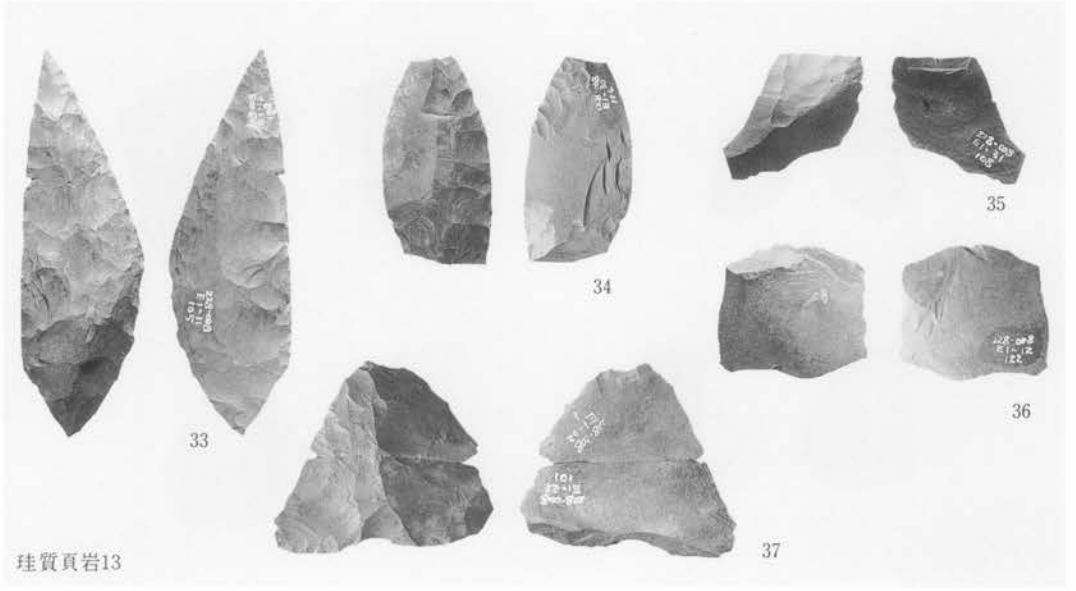


池花遺跡第3文化層出土石器(1)



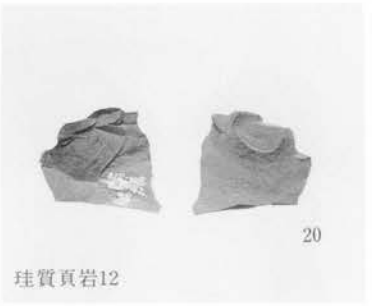
池花遺跡第3文化層出土石器(2)





池花遺跡第3文化層出土石器(3)

池花遺跡第 3 文化層出土石器(4)

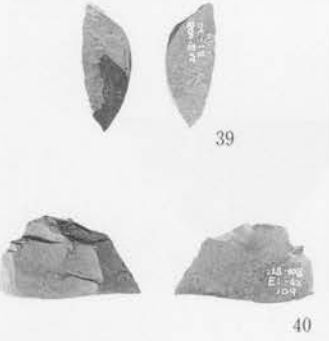


珪質頁岩12

珪質頁岩14

珪質頁岩16

珪質頁岩15



珪質頁岩17

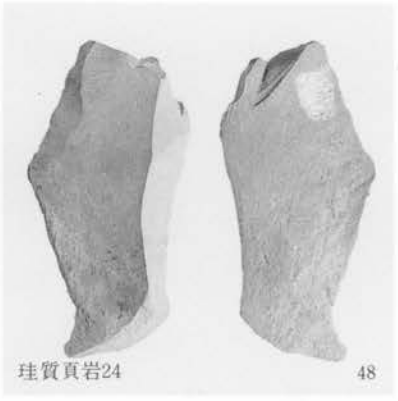
珪質頁岩19

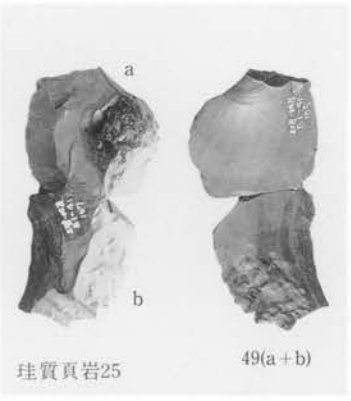
珪質頁岩20

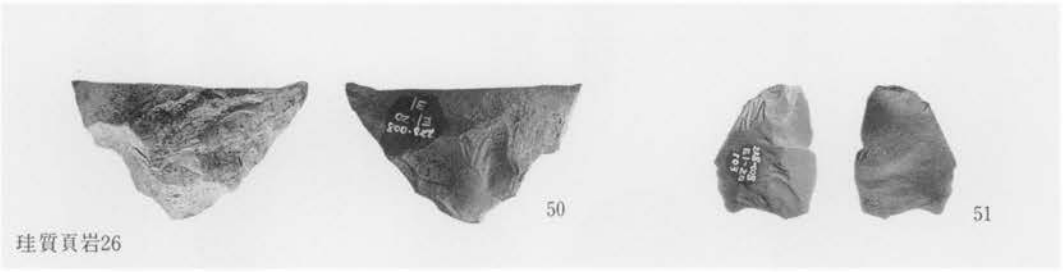
珪質頁岩21

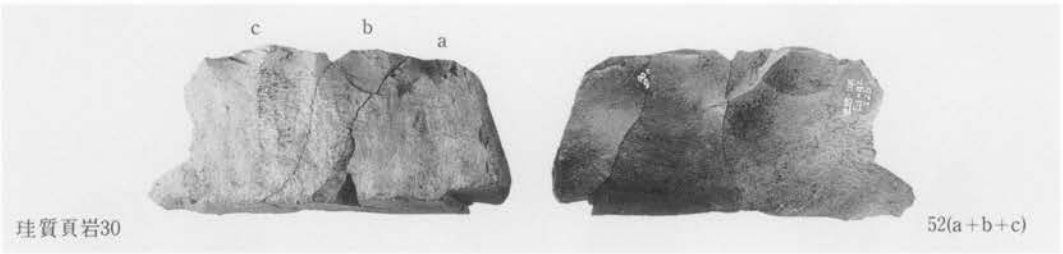
珪質頁岩22

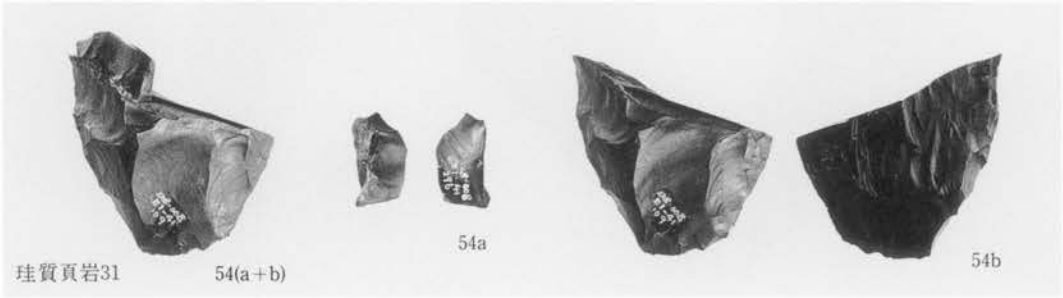
池花遺跡第3文化層出土石器(5)



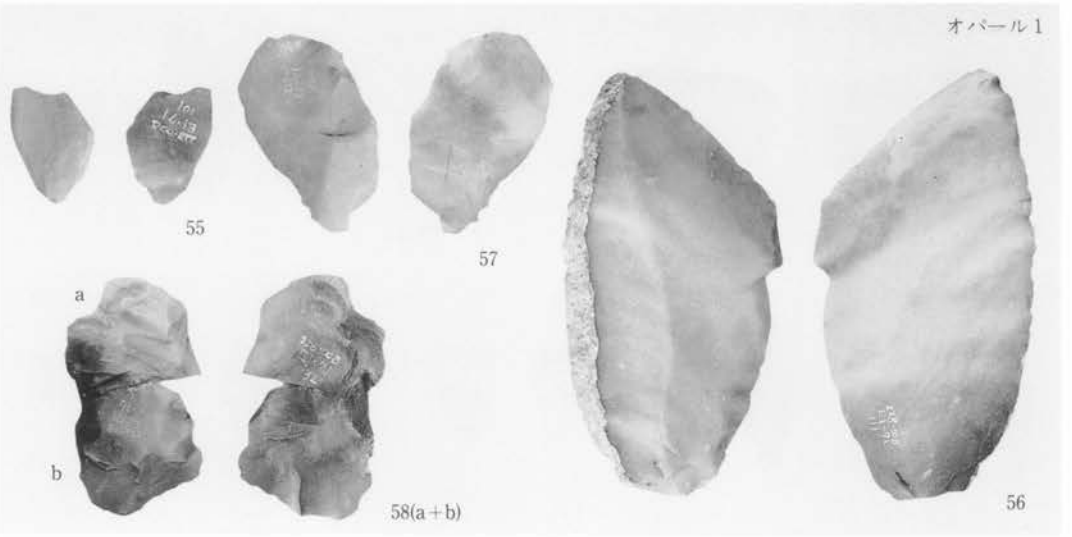


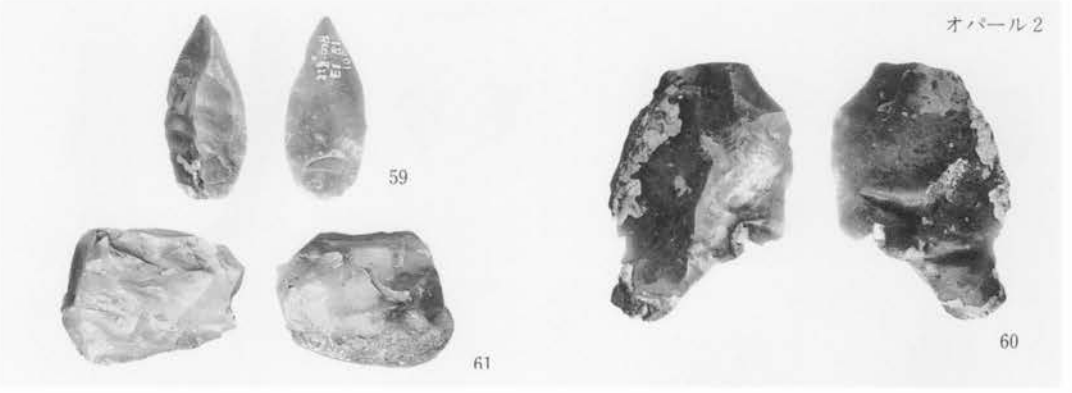




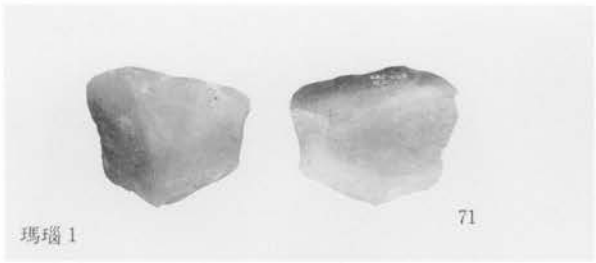


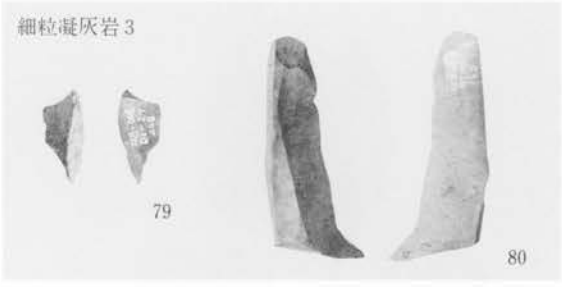
池花遺跡第３文化層出土石器(6)

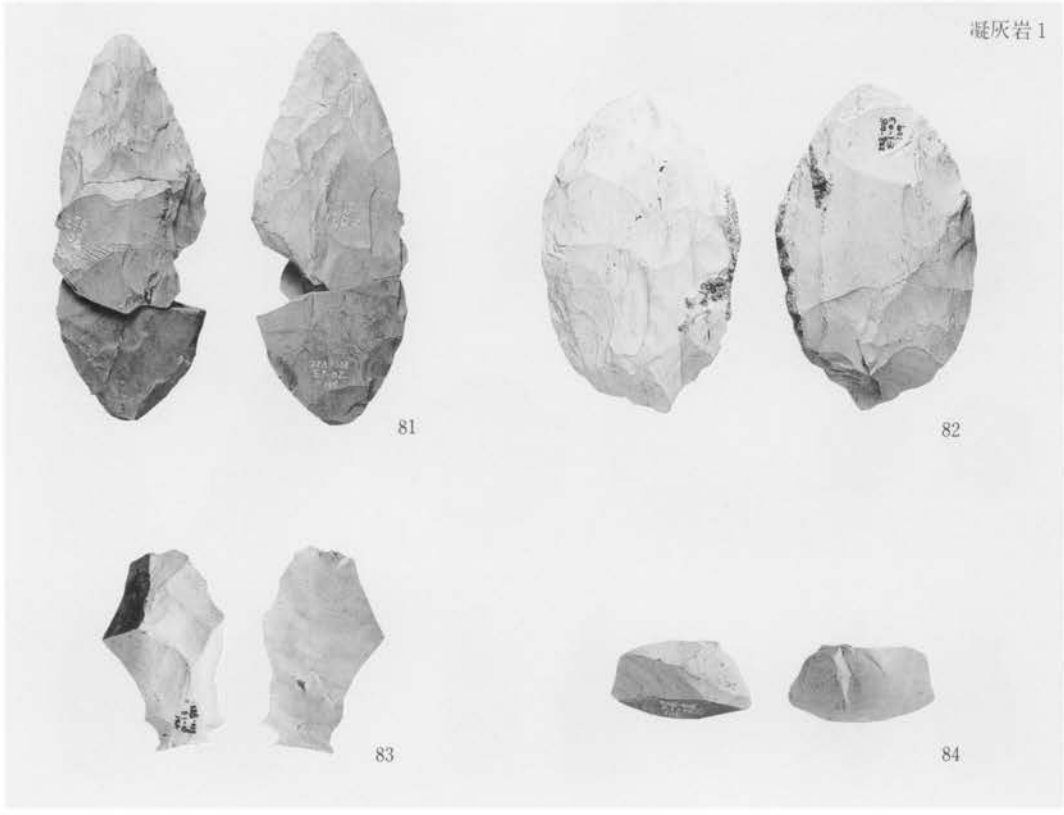




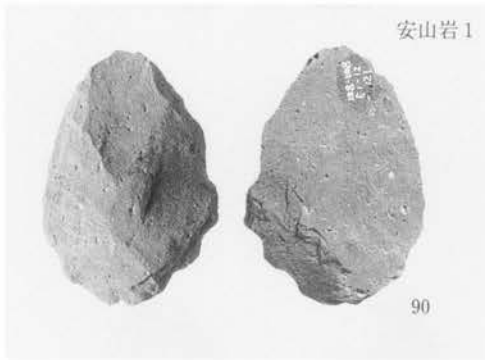
池花遺跡第3文化層出土石器(7)

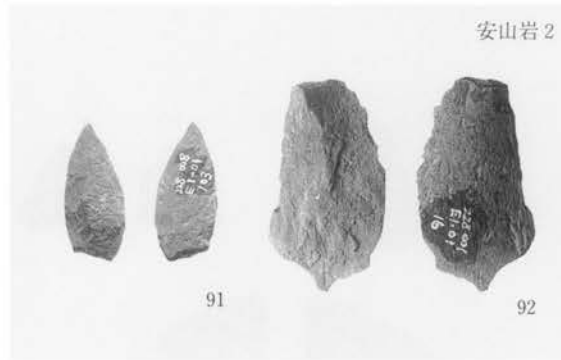


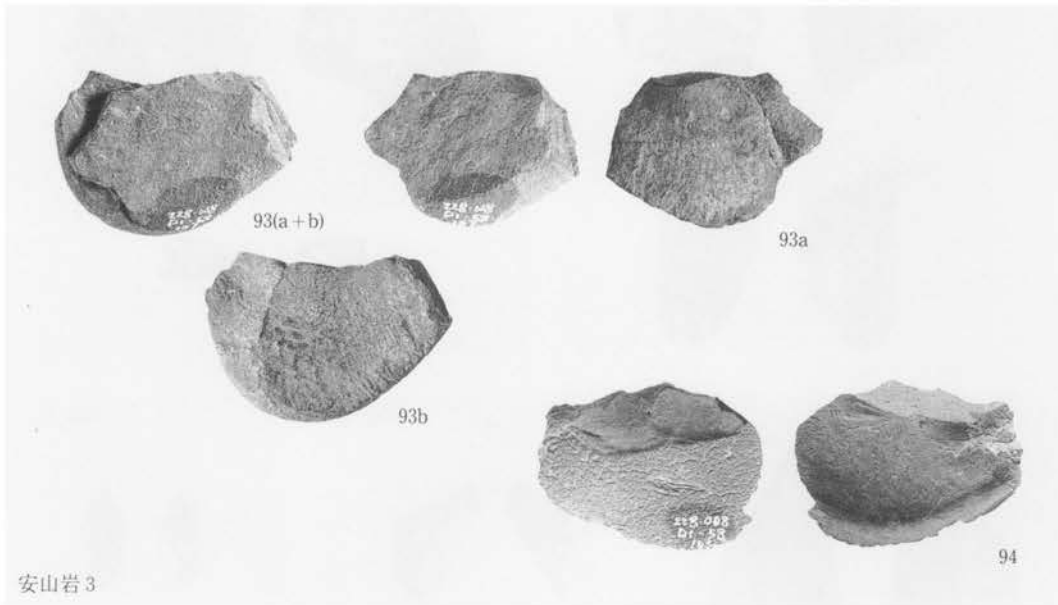




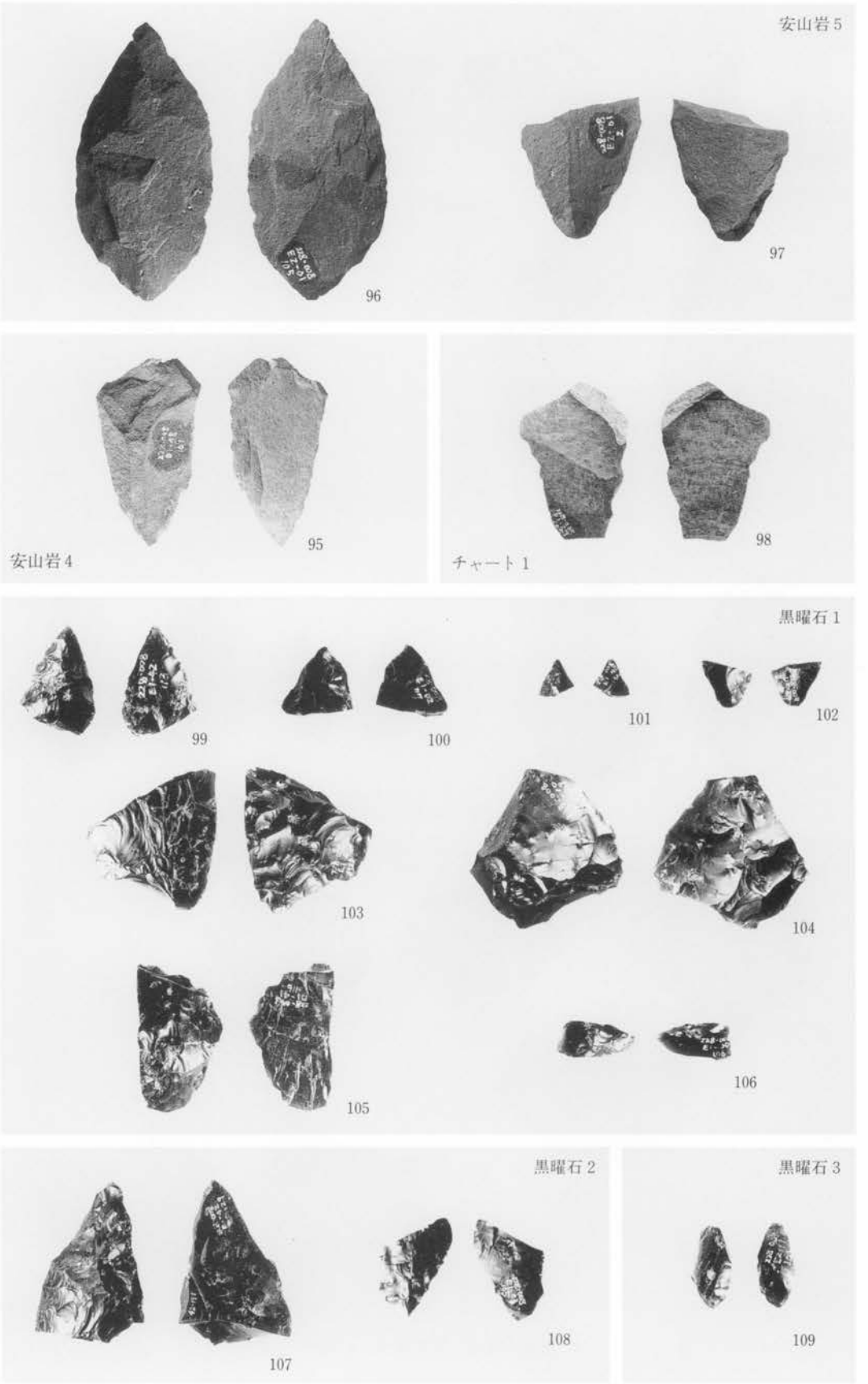
池花遺跡第 3 文化層出土石器(8)







池花遺跡第 3 文化層出土石器(9)



池花遺跡第3文化層出土石器(10)

黒曜石 4

110

黒曜石 5

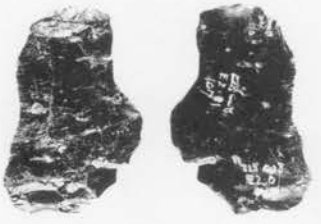
111

黒曜石 6

112

113

黒曜石 7



114

115

116

黒曜石 8

117

黒曜石 9

118

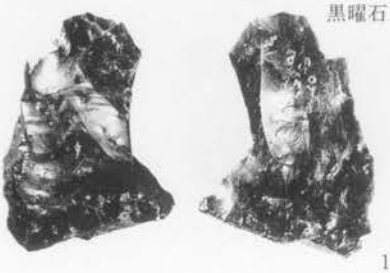
黒曜石10

119

黒曜石11

120

黒曜石12



121

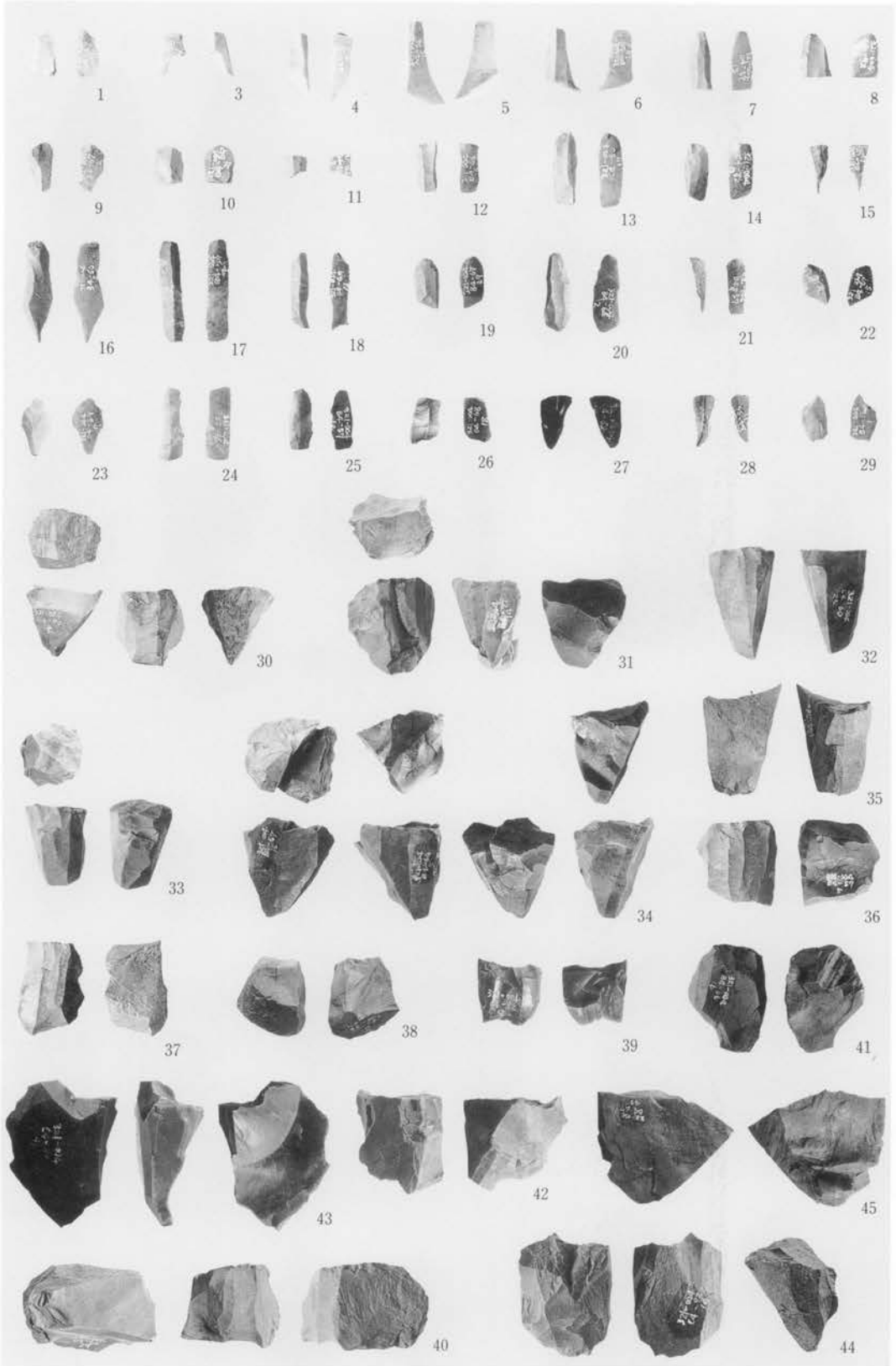
黒曜石13

122

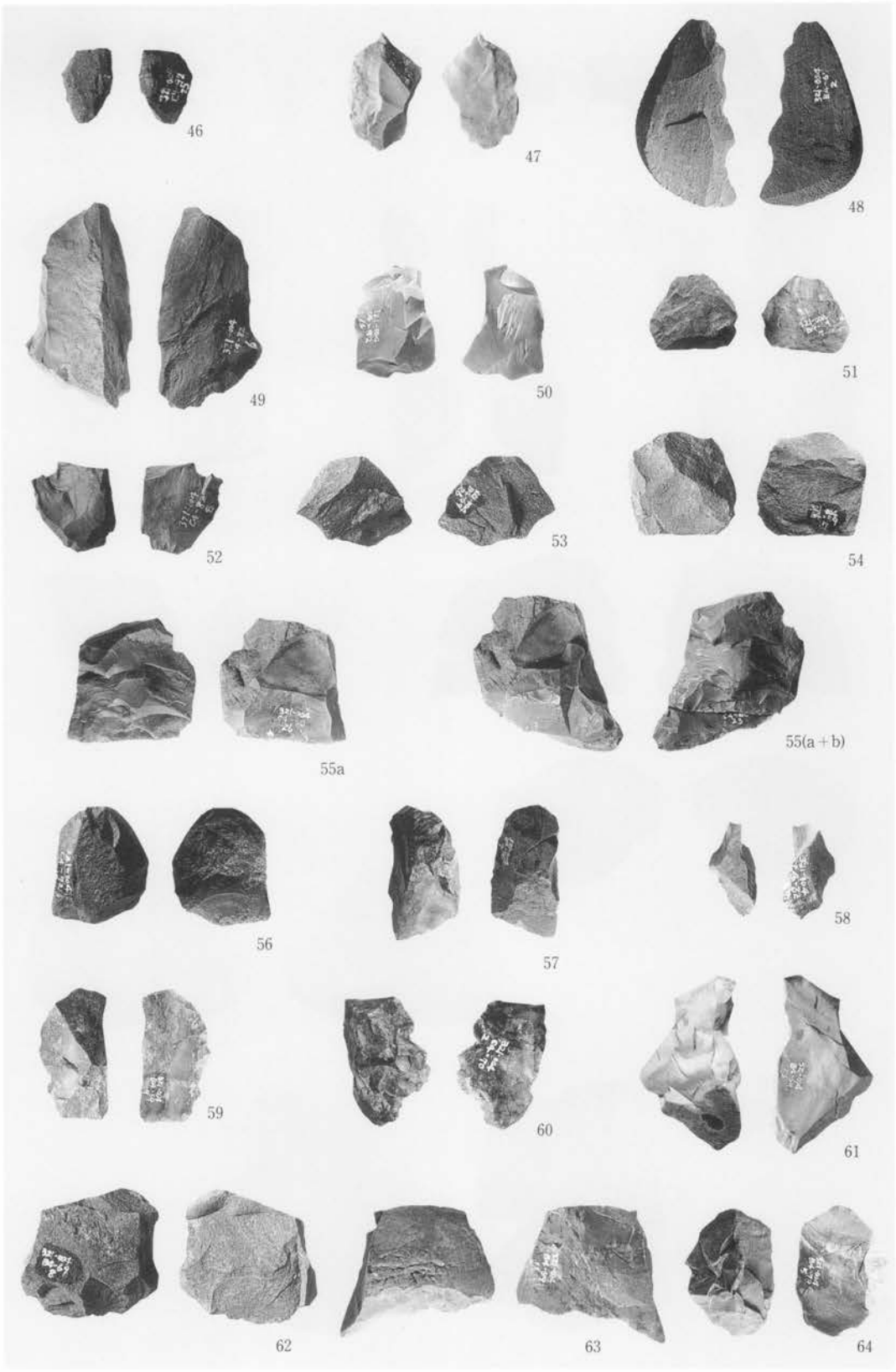
黒曜石14

123

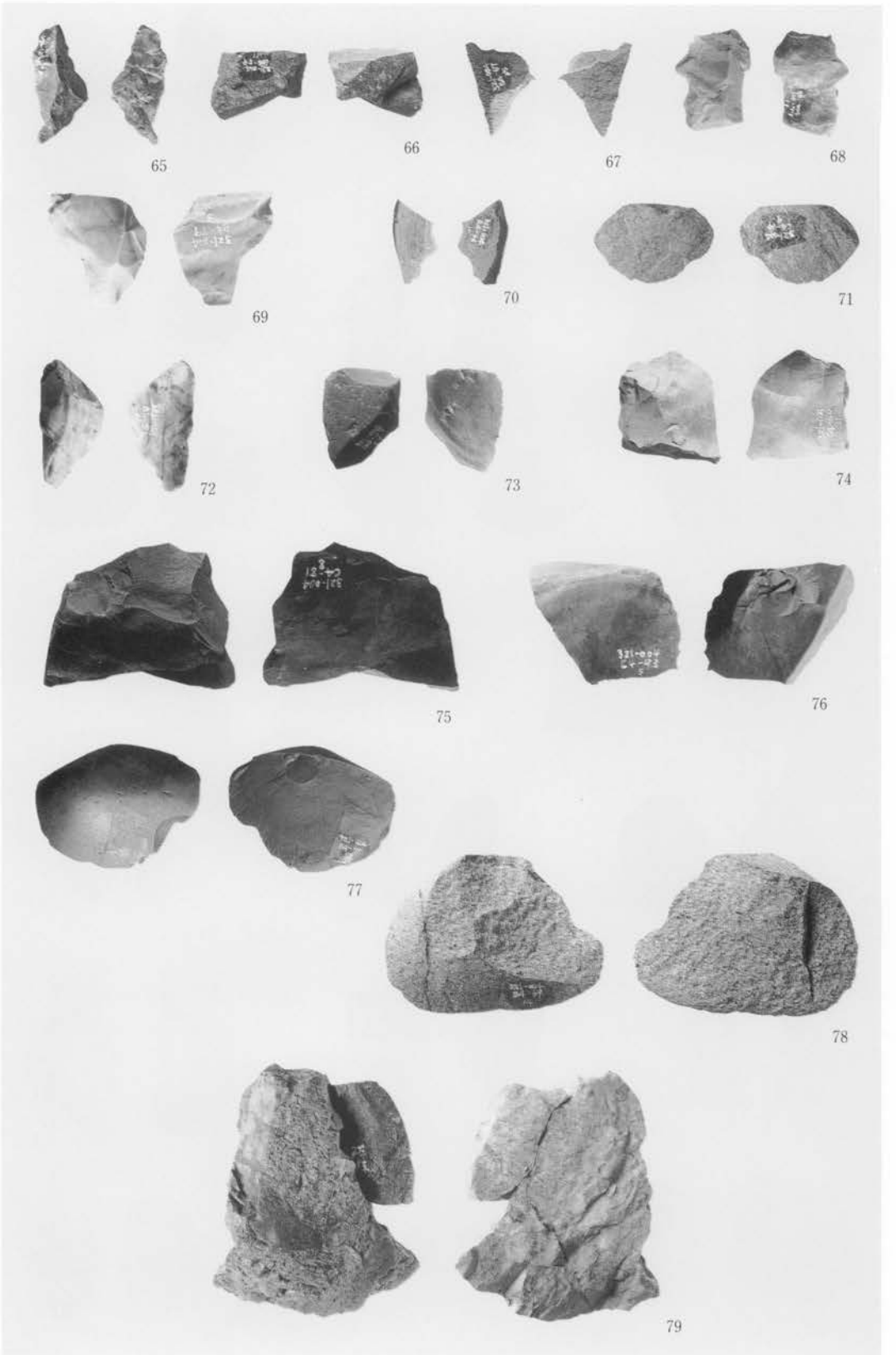
池花遺跡第 3 文化層出土石器(11)



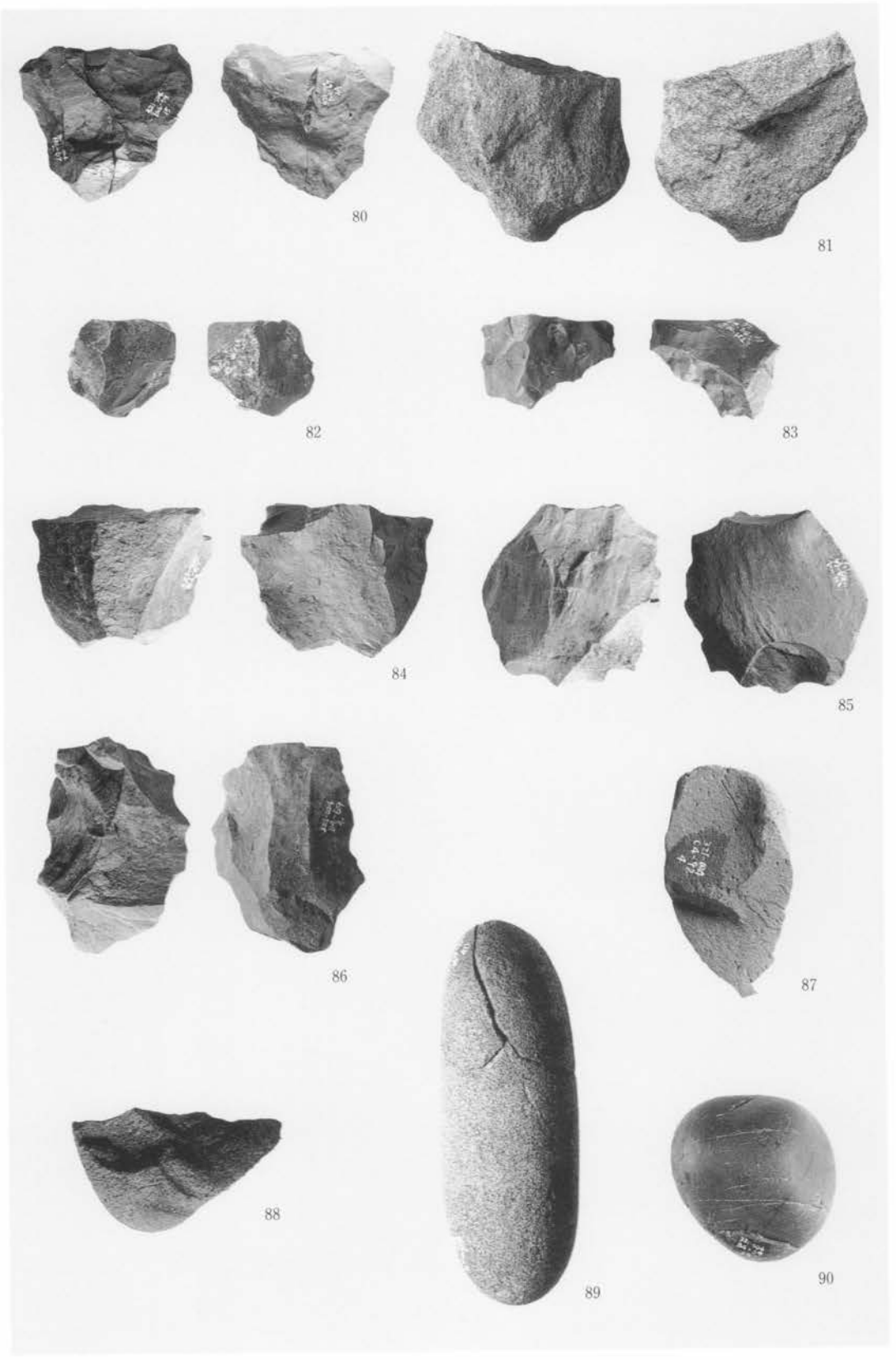
大割遺跡第７文化層出土石器(1)



大割遺跡第7文化層出土石器(2)



大割遺跡第７文化層出土石器(3)



大割遺跡第 7 文化層出土石器(4)

千葉県文化財センター調査報告第200集

四街道市内黒田遺跡群

－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

第　1　分　冊

平成3年3月20日　印刷

平成3年3月30日　発行

発　行　千葉県住宅供給公社
千葉市本千葉町13－1

編　集　財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡字有無番地

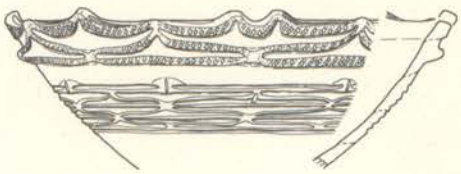
印　刷　有限会社 正　文　社
千葉市都町2－5－5

千葉県文化財センター調査報告 第200集

四街道市内黒田遺跡群

—内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

第２分冊



1991

千葉県住宅供給公社
財団法人 千葉県文化財センター

四街道市内黒田遺跡群

（よつかいどうしうちくろだ）

—内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

第２分冊

１９９１

千葉県住宅供給公社
財団法人 千葉県文化財センター

第2分冊用例

1．第2分冊では縄文時代草創期以降を扱う。第1分冊と同様、遺跡毎に記述を分割せず、時期毎に各遺跡の遺構、遺物を記述し、遺跡群全体の把握が容易となるように試みた。

2．遺物(土器)分布図で使用している記号は、個体数が多い場合、個体毎に任意に記号を変えて表現し、個体識別不能のものについて・で表す。また図中の実線は接合関係を表す。個体数が少ない場合は、個体識別された土器すべてを●で、個体識別不能の土器を○で表し、破線によって同一個体であることを、実線によって接合関係を表した。

3．土器断面については、須恵質のもの、陶器、磁器を黒、胎土に繊維を含むものにスクリーントーンを入れ、それ以外は白抜きとした。

4．土器の中で赤色塗彩されたものについては赤色の網掛を使用した。また釉についてはその種類を問わずスクリーントーン(網)を入れた。なお灯明皿の油煙付着に別種のスクリーントーンを使用している。

5．遺構断面図の土層説明は、基本的に省略した。必要がある場合には本文中に明記するかスクリーントーンによって示してある。

6．本書掲載時に、発掘調査時の遺構番号を変更したものがある。変更した遺構の新旧遺構番号を対照して下記に列挙しておく。

大割遺跡	001⇨SX−01	002⇨SD−02	003⇨(欠番)	004⇨SK−03	005⇨SK−02
	006⇨(欠番)	007⇨SX−02	008⇨(欠番)	009⇨(欠番)	010⇨SI−01
	011⇨SK−06	012⇨SK−07	013⇨SK−04	014⇨SK−05	015⇨(欠番)
	016⇨(欠番)	017⇨(欠番)	018⇨(欠番)	019⇨SX−03	020⇨SX−06
	021⇨SX−05	022⇨SK−01	023⇨SD−02	024⇨SX−04	025⇨(欠番)
	026⇨(欠番)	027⇨(欠番)	028⇨SK−10	029⇨SK−09	030⇨SK−08
池花南遺跡	SK−11⇨SX−19	SK−12⇨SK−11	SK−13⇨SK−12	1号竪穴⇨(欠番)	
池花遺跡	SK−26⇨SK−24	SK-101⇨SK−11			

※欠番の大半は倒木痕など人為的な遺構と判断されなかったものである。

本文目次（第2分冊）

第2分冊用例

目　　次

III. 縄文時代～弥生時代 …… 1
1．素描 …… 1
2．縄文時代草創期 …… 2
3．縄文時代早期 …… 4
4．縄文時代前期 …… 15
5．縄文時代中期 …… 42
6．縄文時代後期前半 …… 52
7．縄文時代後期後半 …… 72
8．縄文時代晩期 …… 128
9．弥生時代 …… 155
10. 縄文～弥生時代の石器・土器底部 …… 192
11. 縄文時代及び時期不明の遺構 …… 213
補論1．縄文時代後晩期における四街道市北部遺跡群の動態 …… 223
補論2．縄文から弥生へ　－晩期後葉土器群の変遷(予察)－ …… 230
補論3．縄文土器観察の二つの視点　－使用痕と輪積痕－ …… 236

IV. 古墳時代以降 …… 242
1．素描 …… 242
2．古墳時代前期 …… 243
3．古墳時代後期 …… 246
4．奈良時代 …… 292
5．近世以降 …… 307
補論4．「物井古墳群」の構造的把握に向けて …… 324
補論5．群集小古墳の設計規格と規制 …… 331

V．跋語 …… 337

第２分冊　挿図目次

第 1 図　有舌尖頭器…… 2
第 2 図　縄文時代早期の内黒田…… 3
第 3 図　池花南遺跡出土撚糸文系土器(１)…… 5
第 4 図　池花南遺跡出土撚糸文系土器(２)…… 6
第 5 図　池花遺跡 E3・E4区撚糸文系土器出土状況 …… 7
第 6 図　池花遺跡出土撚糸文系土器…… 8
第 7 図　沈線文系土器…… 9
第 8 図　池花南遺跡出土条痕文系土器…… 11
第 9 図　池花遺跡 F2区条痕文系土器出土状況 …… 11
第 10 図　池花遺跡 SK－11 …… 12
第 11 図　池花遺跡出土条痕文系土器…… 13
第 12 図　縄文時代前期の内黒田…… 14
第 13 図　池花南遺跡関山期Ａ地点遺物出土状況…… 16
第 14 図　池花南遺跡 SI－01 …… 17
第 15 図　池花南遺跡関山期Ｂ地点遺物出土状況…… 18
第 16 図　池花南遺跡 SI－02 …… 19
第 17 図　池花南遺跡関山期Ａ地点出土土器…… 21
第 18 図　池花南遺跡関山期Ｂ地点出土土器…… 22
第 19 図　池花南遺跡北縁出土関山式土器…… 23
第 20 図　池花南遺跡出土黒浜式土器…… 23
第 21 図　池花遺跡縄文前期後葉Ａ地点遺物出土状況…… 24
第 22 図　池花遺跡縄文前期後葉Ｂ地点遺物出土状況…… 25
第 23 図　池花遺跡縄文前期後葉Ｃ地点遺物出土状況…… 26
第 24 図　池花遺跡縄文前期後葉Ｄ地点遺物出土状況…… 27
第 25 図　池花遺跡縄文前期後葉Ｅ地点遺物出土状況…… 28
第 26 図　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(１)…… 30
第 27 図　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(２)…… 32
第 28 図　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(３)・玦状耳飾…… 33
第 29 図　池花南遺跡 G5・H5区縄文前期後葉遺物出土状況…… 35
第 30 図　池花南遺跡出土縄文前期後葉の土器(１)…… 36

第 31 図　池花南遺跡出土縄文前期後葉の土器(２)…… 37
第 32 図　大割遺跡出土縄文前期後葉の土器…… 38
第 33 図　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(４)…… 38
第 34 図　縄文時代中期の内黒田…… 41
第 35 図　池花遺跡出土縄文時代中期の土器(１)…… 43
第 36 図　池花遺跡 F2区加曽利Ｅ式土器出土状況 …… 44
第 37 図　池花遺跡出土縄文時代中期の土器(２)…… 45
第 38 図　池花南遺跡出土縄文時代中期の土器(１)…… 46
第 39 図　池花南遺跡出土縄文時代中期の土器(２)…… 47
第 40 図　大割遺跡出土縄文時代中期の土器…… 48
第 41 図　大割遺跡出土土器片錘…… 49
第 42 図　縄文時代後期前半の内黒田(大割遺跡)…… 50
第 43 図　縄文時代後期前半の内黒田(池花南遺跡)…… 51
第 44 図　大割遺跡 E4・D5・E5区称名寺期遺物出土状況…… 53
第 45 図　大割遺跡称名寺期集中地点クラスター概念図と個体分有…… 55
第 46 図　大割遺跡 SI－01 …… 56
第 47 図　大割遺跡称名寺期集中地点出土土器(１)…… 58
第 48 図　大割遺跡称名寺期集中地点出土土器(２)…… 59
第 49 図　大割遺跡称名寺期集中地点出土土器(３)…… 60
第 50 図　大割遺跡集中地点外出土称名寺式土器(１)…… 63
第 51 図　大割遺跡集中地点外出土称名寺式土器(２)…… 64
第 52 図　各遺跡出土縄文後期前半の土器…… 66
第 53 図　縄文時代後期後半の内黒田(大割遺跡)…… 69
第 54 図　縄文時代後期後半の内黒田(加曽利Ｂ期の池花、池花南遺跡)…… 70
第 55 図　縄文時代後期後半の内黒田(曽谷期以降の池花、池花南遺跡)…… 71
第 56 図　大割遺跡 E4・E5区加曽利Ｂ期遺物出土状況 …… 73
第 57 図　大割遺跡 E4・E5区出土加曽利Ｂ式土器(１) …… 74
第 58 図　大割遺跡 E4・E5区出土加曽利Ｂ式土器(２) …… 75
第 59 図　大割遺跡集中地点外出土加曽利Ｂ式土器(１)…… 77
第 60 図　大割遺跡集中地点外出土加曽利Ｂ式土器(２)…… 78
第 61 図　池花南遺跡 G6・G7区加曽利Ｂ期遺物出土状況 …… 79
第 62 図　池花南遺跡 G6・G7区出土加曽利Ｂ式土器(１) …… 82
第 63 図　池花南遺跡 G6・G7区出土加曽利Ｂ式土器(２) …… 83

第64図　池花南遺跡 G6・G7区出土加曽利B式土器(3) …… 84
第65図　池花南遺跡 G7区黒曜石製石器ブロック群 …… 85
第66図　池花南遺跡 G7区A～Cブロック出土石器(1) …… 87
第67図　池花南遺跡 G7区A～Cブロック出土石器(2) …… 88
第68図　池花南遺跡南半部加曽利B式土器の分布…… 91
第69図　池花南遺跡 SK－11 …… 92
第70図　池花南遺跡南半部出土加曽利B式土器(1)…… 93
第71図　池花南遺跡南半部出土加曽利B式土器(2)…… 94
第72図　池花南遺跡南半部出土加曽利B式土器(3)…… 95
第73図　池花南遺跡北半部加曽利B期遺物出土状況…… 97
第74図　池花南遺跡北半部出土加曽利B式土器(1)…… 98
第75図　池花南遺跡北半部出土加曽利B式土器(2)…… 99
第76図　池花遺跡加曽利B期A地点遺物出土状況……101
第77図　池花遺跡加曽利B期A地点出土土器……102
第78図　池花遺跡加曽利B期B地点遺物出土状況……103
第79図　池花遺跡加曽利B期C地点遺物出土状況……104
第80図　池花遺跡加曽利B期D地点遺物出土状況……105
第81図　池花遺跡加曽利B期B～D地点出土土器(1)……107
第82図　池花遺跡加曽利B期B～D地点出土土器(2)……108
第83図　池花遺跡加曽利B期B～D地点出土土器(3)……109
第84図　池花遺跡加曽利B期E地点遺物出土状況……110
第85図　池花遺跡加曽利B期E地点出土土器……111
第86図　池花南遺跡北半部曽谷期遺物出土状況……112
第87図　池花南遺跡北半部出土曽谷式土器・他……113
第88図　池花南遺跡南半部曽谷期遺物出土状況……115
第89図　池花南遺跡南半部出土曽谷式土器(1)……117
第90図　池花南遺跡南半部出土曽谷式土器(2)……118
第91図　池花南遺跡南半部安行1期遺物出土状況……119
第92図　池花南遺跡南半部出土安行1式土器……121
第93図　池花遺跡 E2区安行3a 期遺物出土状況 ……122
第94図　池花遺跡 E2区出土安行3a 式土器 ……123
第95図　池花・池花南遺跡出土縄文後期後半の土器……124
第96図　縄文晩期後葉～弥生時代の内黒田……127

第97図　池花南遺跡千網期遺物包含層全体図・特殊遺物出土位置……129
第98図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(1)……131
第99図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(2)……133
第100図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(3)……134
第101図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(4)……136
第102図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(5)……137
第103図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(6)……138
第104図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(7)……140
第105図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(8)……141
第106図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(9)……142
第107図　赤色顔料充填小型壺形土器……142
第108図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉特殊遺物……144
第109図　池花南遺跡荒海期遺物出土状況……145
第110図　池花南遺跡出土荒海式土器……146
第111図　池花南遺跡縄文晩期末葉細密条痕施文土器出土状況……147
第112図　池花南遺跡出土縄文晩期末葉細密条痕施文土器……148
第113図　池花遺跡荒海期遺物出土状況……150
第114図　池花遺跡出土荒海式土器(1)……151
第115図　池花遺跡出土荒海式土器(2)……152
第116図　池花遺跡C1区縄文晩期末～弥生時代初頭遺物出土状況……156
第117図　池花遺跡C1区出土縄文晩期末～弥生時代初頭の土器……157
第118図　池花遺跡弥生中期前半遺物出土状況……158
第119図　池花遺跡出土弥生中期前半の土器(1)……159
第120図　池花遺跡出土弥生中期前半の土器(2)……160
第121図　池花遺跡出土弥生中期前半の土器(3)……161
第122図　池花南遺跡北半部出土弥生中期の土器(1)……163
第123図　池花南遺跡北半部出土弥生中期の土器(2)……164
第124図　池花南遺跡南半部弥生中期前半遺物包含層全体図……166
第125図　池花南遺跡出土絵画線刻土器・弥生中期初頭の土器……167
第126図　線刻画……167
第127図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(1)……169
第128図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(2)……170
第129図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(3)……172

第130図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(4)……173
第131図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(5)……174
第132図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(6)……177
第133図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(7)……178
第134図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(8)……179
第135図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(9)……181
第136図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(10)……182
第137図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(11)……183
第138図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(12)……184
第139図　池花南遺跡弥生中期後半遺物出土状況……185
第140図　池花南遺跡出土弥生中期後半の土器……186
第141図　縄文時代石器出土位置(1)……189
第142図　縄文時代石器出土位置(2)……190
第143図　縄文時代石器出土位置(3)……191
第144図　池花遺跡出土石鏃・石錐・楔形石器……193
第145図　池花南遺跡出土石鏃……194
第146図　大割遺跡出土石鏃……195
第147図　池花遺跡出土礫石器……198
第148図　池花南遺跡北半部出土礫石器(1)……199
第149図　池花南遺跡北半部出土礫石器(2)……200
第150図　池花南遺跡南半部出土礫石器(1)……201
第151図　池花南遺跡南半部出土礫石器(2)……202
第152図　池花南遺跡南半部出土礫石器(3)……203
第153図　池花南遺跡南半部出土礫石器(4)……204
第154図　池花南遺跡南半部出土礫石器(5)……205
第155図　池花南遺跡南半部出土礫石器(6)……206
第156図　池花南遺跡南半部出土礫石器(7)……207
第157図　池花南遺跡南半部出土礫石器(8)……208
第158図　大割遺跡出土礫石器……210
第159図　土器底部(1)……211
第160図　土器底部(2)……212
第161図　池花遺跡SK－01・池花南遺跡SK－12……214
第162図　大割遺跡SK－02・SK－03……215

第163図　大割遺跡 SK－04・SK－05 ……216
第164図　池花遺跡 SK－02・SK－24 ……217
第165図　池花南遺跡 SK－01～SK－05 ……218
第166図　池花南遺跡 SK－06～SK－10・大割遺跡 SK－01 ……219
第167図　大割遺跡 SK－06～SK－10 ……221
第168図　土器の使用痕……238
第169図　土器の輪積痕模式図……240
第170図　古墳時代前期の土器出土位置……243
第171図　池花遺跡出土古墳時代前期の土器……244
第172図　古墳時代後期～奈良時代の内黒田……245
第173図　池花南遺跡 SX－01調査前測量図 ……247
第174図　池花南遺跡 SX－01周溝測量図 ……248
第175図　池花南遺跡 SX－01・SX－02・SX－03土層断面 ……249
第176図　池花南遺跡 SX－02調査前測量図(左)・周溝測量図(右) ……251
第177図　池花南遺跡 SX－02第 1 主体部(横穴式石室) ……253
第178図　池花南遺跡 SX－02第 1 主体部土層断面 ……254
第179図　池花南遺跡 SX－02第 2 主体部(周溝内土壙) ……255
第180図　池花南遺跡 SX－02旧表土上面竪穴遺構 ……256
第181図　池花南遺跡 SX－02第 1 主体部玉類出土状況 ……257
第182図　池花南遺跡 SX－02第 1 主体部鉄製品出土状況 ……258
第183図　池花南遺跡 SX－02土器出土状況 ……259
第184図　池花南遺跡 SX－02出土玉類(1) ……260
第185図　池花南遺跡 SX－02出土玉類(2) ……261
第186図　池花南遺跡 SX－02出土鉄製品(1) ……262
第187図　池花南遺跡 SX－02出土鉄製品(2) ……263
第188図　池花南遺跡 SX－02出土土器(1) ……265
第189図　池花南遺跡 SX－02出土土器(2) ……266
第190図　池花南遺跡 SX－03・SX－12調査前測量図(左)・SX－03周溝測量図(右) ……267
第191図　池花南遺跡 SX－03第 1 主体部 ……269
第192図　池花南遺跡 SX－03第 2 主体部 ……270
第193図　池花南遺跡 SX－03・SX－04・SX－11出土金属製品 ……271
第194図　池花南遺跡各古墳出土土器……272
第195図　池花南遺跡 SX－04調査前測量図 ……274

第196図　池花南遺跡 SX－04周溝測量図 ……277
第197図　池花南遺跡 SX－04・SX－12土層断面 ……275
第198図　池花南遺跡 SX－05 ……278
第199図　池花南遺跡 SX－06 ……279
第200図　池花南遺跡 SX－07 ……280
第201図　池花南遺跡 SX－08 ……281
第202図　池花南遺跡 SX－08主体部 ……282
第203図　池花南遺跡 SX－09 ……283
第204図　池花南遺跡 SX－09主体部 ……284
第205図　池花南遺跡 SX－10 ……285
第206図　池花南遺跡 SX－11 ……286
第207図　池花南遺跡 SX－11主体部 ……287
第208図　池花南遺跡 SX－12周溝測量図 ……288
第209図　池花南遺跡 SX－18 ……289
第210図　池花南遺跡 SX－19 ……290
第211図　大割遺跡 SX－01 ……293
第212図　大割遺跡 SX－02 ……294
第213図　大割遺跡 SX－03 ……295
第214図　大割遺跡 SX－04 ……296
第215図　大割遺跡 SX－05 ……296
第216図　大割遺跡 SX－06 ……297
第217図　池花南遺跡 SX－13・SD－03 ……298
第218図　池花南遺跡 SX－14 ……299
第219図　池花南遺跡 SX－15 ……300
第220図　池花南遺跡 SX－16 ……300
第221図　池花南遺跡 SX－17 ……301
第222図　池花遺跡 SX－01 ……302
第223図　池花遺跡 SX－02 ……303
第224図　奈良時代方墳群出土土器・他……304
第225図　池花遺跡 SD－01～06・09・10 ……308
第226図　池花遺跡 SD－07・08・11・12 ……309
第227図　池花遺跡 B1・B2区近世土壙群 ……311
第228図　池花南遺跡 SD－01・02・03・04 ……313

第229図　大割遺跡 SD－01 ……317
第230図　大割遺跡 SD－02 ……318
第231図　池花遺跡出土近世陶磁器……319
第232図　池花遺跡出土近世金属製品……320
第233図　銭貨拓影……322
第234図　物井古墳群の支群構成……325
第235図　同一規格と考えられる古墳例……332
第236図　物井古墳群における墳丘の規格性……334

付図２　内黒田遺跡群縄文時代～近世遺構配置図
付図６　池花南遺跡千網期遺物出土状況
付図７　池花南遺跡南半部弥生中期前半遺物出土状況（１）
付図８　池花南遺跡南半部弥生中期前半遺物出土状況（２）

第２分冊　表目次

第１表　有舌尖頭器計測表 …… 2
第２表　池花南遺跡 G7区Ａ～Ｃブロック出土石器計測表…… 89
第３表　池花南遺跡出土縄文晩期石剣・玉類・他計測表 ……143
第４表　池花遺跡出土石鏃・石錐・楔形石器計測表 ……195
第５表　池花南遺跡出土石鏃計測表 ……196
第６表　大割遺跡出土石鏃計測表 ……196
第７表　池花遺跡出土礫石器計測表 ……208
第８表　池花南遺跡北半部出土礫石器計測表 ……208
第９表　池花南遺跡南半部出土礫石器計測表 ……209
第10表　大割遺跡出土礫石器計測表 ……208
第11表　縄文後晩期における内黒田・千代田・物井遺跡群の動態 ……226
第12表　池花南遺跡 SX－02出土玉類計測表(1) ……263
第13表　池花南遺跡 SX－02出土玉類計測表(2) ……264
第14表　池花南遺跡 SX－02出土金属製品計測表 ……266
第15表　池花南遺跡 SX－03出土直刀計測表 ……273
第16表　池花南遺跡 SX－03・SX－04・SX－11出土金属製品計測表 ……273
第17表　内黒田遺跡群奈良時代方墳一覧 ……306
第18表　池花遺跡出土近世金属製品計測表 ……321
第19表　銭貨計測表 ……322

第２分冊　図版目次

図版１　１．池花南遺跡 SI－01全景
　　２．池花南遺跡 SI－02全景
図版２　１．大割遺跡 SI－01全景
　　２．大割遺跡縄文後期包含層調査後全景
図版３　１．池花遺跡 SK－11全景
　　２．同遺物出土状況
　　３．大割遺跡 SK－02全景
　　４．大割遺跡 SK－04全景
　　５．大割遺跡 SK－03土層断面
　　６．同全景
図版４　１．大割遺跡 SK－05全景
　　２．池花南遺跡 SK－12全景
　　３．池花遺跡 SK－01全景
　　４．大割遺跡 SK－06、07全景
　　５．大割遺跡 SK－08全景
　　６．大割遺跡 SK－09全景
図版５　１．池花南遺跡 SK－01全景
　　２．池花南遺跡 SK－02全景
　　３．池花南遺跡 SK－03A 全景
　　４．池花南遺跡 SK－03B 全景
　　５．池花南遺跡 SK－04全景
　　６．池花南遺跡 SK－05全景
図版６　１．池花南遺跡 SK－06全景
　　２．池花南遺跡 SK－07全景
　　３．池花南遺跡 SK－08全景
　　４．池花南遺跡 SK－09全景
　　５．池花遺跡 SK－02全景
　　６．池花遺跡 SK－24全景
図版７　１．池花南遺跡 SK－11検出状況
　　２．同断面
　　３．調査風景
　　４．調査風景
図版８　１．池花南遺跡 G7区周辺包含層全景
　　２．石剣出土状況
　　３．赤色顔料充填土器出土状況
図版９　１．池花遺跡 E1区包含層全景
　　２．出土状況
　　３．池花遺跡 E2区安行3a 式土器出土状況
　　４．同
　　５．池花遺跡 E2区包含層全景
図版10　１．池花遺跡 C1区包含層全景
　　２．池花遺跡 F2区包含層全景
図版11　池花南遺跡出土撚糸文系土器
図版12　１．池花遺跡出土撚糸文系土器
　　２．池花南遺跡・池花遺跡出土沈線文系土器
図版13　１．池花南遺跡出土条痕文系土器
　　２．池花遺跡出土条痕文系土器
図版14　池花南遺跡出土関山(新)式土器(１)
図版15　池花南遺跡出土関山(新)式土器(２)
図版16　１．池花南遺跡出土縄文前期中葉の土器
　　２．池花南遺跡出土縄文前期後葉の土器(１)
図版17　１．池花南遺跡出土縄文前期後葉の土器(２)
　　２．大割遺跡・池花遺跡出土
　　縄文前期後葉の土器
図版18　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(１)
図版19　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(２)
　　・玦状耳飾
図版20　１．大割遺跡出土縄文中期の土器
　　２．大割遺跡出土土器片錘
　　３．池花遺跡出土阿玉台式土器
図版21　池花遺跡出土加曽利Ｅ式土器
図版22　池花南遺跡出土加曽利Ｅ式土器
図版23　大割遺跡出土称名寺式土器(１)
図版24　大割遺跡出土称名寺式土器(２)
図版25　１．大割遺跡出土称名寺式土器(３)
　　２．大割遺跡出土称名寺式土器(４)
図版26　大割遺跡出土称名寺式土器(５)
図版27　各遺跡出土称名寺・堀之内式土器
図版28　池花遺跡出土加曽利Ｂ式土器(１)
図版29　池花遺跡出土加曽利Ｂ式土器(２)

図版30　池花遺跡出土加曽利B式土器(3)
図版31　池花遺跡出土加曽利B式土器(4)
図版32　大割遺跡出土加曽利B式土器(1)
図版33　大割遺跡出土加曽利B式土器(2)
図版34　大割遺跡出土加曽利B式土器(3)
図版35　池花南遺跡出土加曽利B式土器(1)
図版36　池花南遺跡出土加曽利B式土器(2)
図版37　1．池花南遺跡出土加曽利B式土器(3)
　　2．池花南遺跡出土加曽利B式土器(4)
図版38　池花南遺跡出土加曽利B式土器(5)
図版39　池花南遺跡出土加曽利B式土器(6)
図版40　池花南遺跡出土加曽利B式土器(7)
図版41　池花南遺跡出土加曽利B式土器(8)
図版42　1．池花南遺跡出土曽谷式土器(1)
　　2．池花南遺跡出土曽谷式土器(2)
図版43　池花南遺跡出土曽谷式土器(3)
図版44　1．池花南遺跡出土安行1式土器
　　2．各遺跡出土縄文後期後半の土器
図版45　池花遺跡出土安行3a式土器
図版46　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(1)
図版47　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(2)
図版48　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(3)
図版49　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(4)
図版50　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(5)
図版51　1．池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(6)
　　2．池花南遺跡出土
　　縄文晩期赤色顔料充填土器
　　3．池花南遺跡出土土器
図版52　池花南遺跡出土土偶・石剣・玉類
図版53　1．池花遺跡D1・E1区出土
　　縄文晩期末葉の土器
　　2．池花遺跡出土縄文晩期末葉の土器
　　(底部・他)
図版54　1．池花南遺跡出土縄文晩期末葉の土器(1)
　　2．池花遺跡C1区出土
　　縄文晩期末～弥生時代初頭の土器
　　3．池花遺跡D2区西半部出土
　　弥生中期前半の土器
図版55　池花遺跡D2・E2区出土弥生中期前半の土器
図版56　1．池花南遺跡出土縄文晩期末葉の土器(2)
　　2．池花南遺跡南半部出土
　　弥生中期前半の土器(1)
図版57　池花南遺跡南半部出土
　　弥生中期前半の土器(2)
図版58　池花南遺跡南半部出土
　　弥生中期前半の土器(3)
図版59　池花南遺跡南半部出土
　　弥生中期前半の土器(4)
図版60　池花南遺跡南半部出土
　　弥生中期前半の土器(5)
図版61　池花南遺跡南半部出土
　　弥生中期前半の土器(6)
図版62　池花南遺跡南半部出土
　　弥生中期前半の土器(7)
図版63　池花南遺跡南半部出土
　　弥生中期前半の土器(8)
図版64　池花南遺跡北半部出土
　　弥生中期前半の土器(1)
図版65　1．池花南遺跡北半部出土
　　弥生中期前半の土器(2)
　　2．池花南遺跡出土弥生中期後半の土器
図版66　1．池花南遺跡出土縄文・弥生土器底部
　　2．池花遺跡出土弥生土器底部
図版67　池花遺跡出土古墳時代前期の土器
図版68　1．有舌尖頭器
　　2．池花遺跡出土石鏃・石錐・楔形石器
図版69　1．池花南遺跡出土石鏃
　　2．大割遺跡出土石鏃
図版70　1．池花遺跡出土石器
　　2．大割遺跡出土石器
図版71　池花南遺跡南半部縄文時代石器(1)
図版72　池花南遺跡南半部縄文時代石器(2)
図版73　1．池花南遺跡南半部縄文時代石器(3)
　　2．池花南遺跡北半部縄文時代石器
図版74　池花南遺跡黒曜石石器製作址出土石器

図版75　1．池花南遺跡古墳群(北半部)
2．池花南遺跡古墳群(南半部)
図版76　1．池花南遺跡SX－01全景
2．同周溝内遺物出土状況
3．同周溝土層断面
図版77　1．池花南遺跡SX－02調査前
2．同全景
図版78　1．池花南遺跡SX－02
墳丘・第1主体部土層断面
2．同第1主体部全景
図版79　1．池花南遺跡SX－02旧表土面竪穴遺構
2．同遺物出土状況
3．同第2主体部土層断面
4．同第2主体部全景
5．池花南遺跡SX－03調査前
図版80　1．池花南遺跡SX－03・SX－12全景
2．SX－03第1主体部
図版81　1．池花南遺跡SX－03第2主体部全景
2．同遺物出土状況
3．同掘り方
図版82　1．池花南遺跡SX－04調査前
2．同全景
3．同土層断面
4．同周溝内遺物出土状況
図版83　1．池花南遺跡SX－05全景
2．同周溝土層断面
3．同周溝内遺物出土状況
図版84　1．池花南遺跡SX－06全景
2．同周溝土層断面・周溝内遺物出土状況
図版85　1．池花南遺跡SX－07・SX－10全景
2．SX－07周溝土層断面
図版86　1．池花南遺跡SX－08全景
2．同主体部全景
図版87　1．池花南遺跡SX－09全景
2．池花南遺跡SX－18全景
図版88　1．池花南遺跡SX－11全景
2．同主体部全景
3．同掘り方
図版89　1．池花南遺跡SX－19全景
2．池花南遺跡SX－13全景
3．池花南遺跡SX－14全景
図版90　1．池花南遺跡SX－15全景
2．池花南遺跡SX－16全景
3．池花南遺跡SX－17全景
4．同土層断面
図版91　1．池花遺跡SX－01全景
2．池花遺跡SX－02全景
図版93　1．大割遺跡SX－03全景
2．大割遺跡SX－04全景
図版94　1．大割遺跡SX－05全景
2．大割遺跡SX－06全景
図版95　池花南遺跡SX－02出土土器(1)
図版96　1．池花南遺跡SX－02出土土器(2)
2．池花南遺跡古墳出土土器
図版97　池花南遺跡SX－02出土玉類
図版98　池花南遺跡古墳出土鉄製品
図版99　1．各遺跡出土8世紀の土器
2．池花遺跡出土近世陶磁器

Ⅲ．縄文時代～弥生時代

１．素描

内黒田遺跡群における縄文時代～弥生時代については、遺構の数量は決して多いとは言えない。大割遺跡で住居跡が１棟、池花南遺跡で住居跡が２棟検出された他、炉穴、陥穴状土坑、土壙が少数検出されているだけである。にも拘わらず遺物量は遺構の数に比して多い。それは調査区内の随所で、縄文時代、殊に後期以降の遺物包含層がほぼ連続的、継起的に形成されているからである。３棟検出された住居跡にしても、短時の居住によって形成された遺跡の中で偶然後世に残る遺構があったというに過ぎないとも言える。しかしながら内黒田遺跡群に継続的な集落遺跡がないとは言え、決して軽視してよいというものではない。縄文時代、そして弥生時代中期前半までを含めて、継続的に営まれた大集落とは別に、小規模な集団で移動を繰り返した遺跡が存在するのは厳然たる事実であり、そういった性格の遺跡をも総体的に把握しなければ縄文時代社会の理解を究めることにはなるまい。

内黒田遺跡群において比較的まとまった遺物包含層が遺されているのは、縄文前期中葉、同後葉、縄文後期初頭、同中葉～縄文晩期初頭、縄文晩期後葉～弥生中期前半であり、全時期を完結的に網羅しているわけではない。しかし隣接する千代田遺跡群、物井地区遺跡群を含めるとほぼ間断なく包含層の形成が繰り返されていることが解る。千代田及び物井地区を合わせた遺跡群の展開については後述するとして、以下内黒田遺跡群における遺構・遺物を時期別に記述する。

2．縄文時代草創期

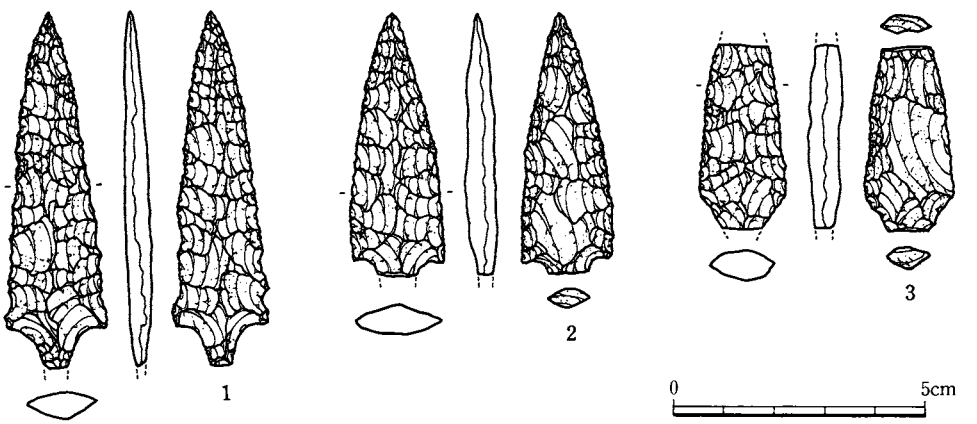
①概観

草創期については遺構は見られず、遺物も殆どなく、僅かに有舌尖頭器が３点出土しているのみである。

②有舌尖頭器（第１図、図版68－１）

大割、池花南、池花各遺跡で１点ずつ出土している。いずれも安山岩製。

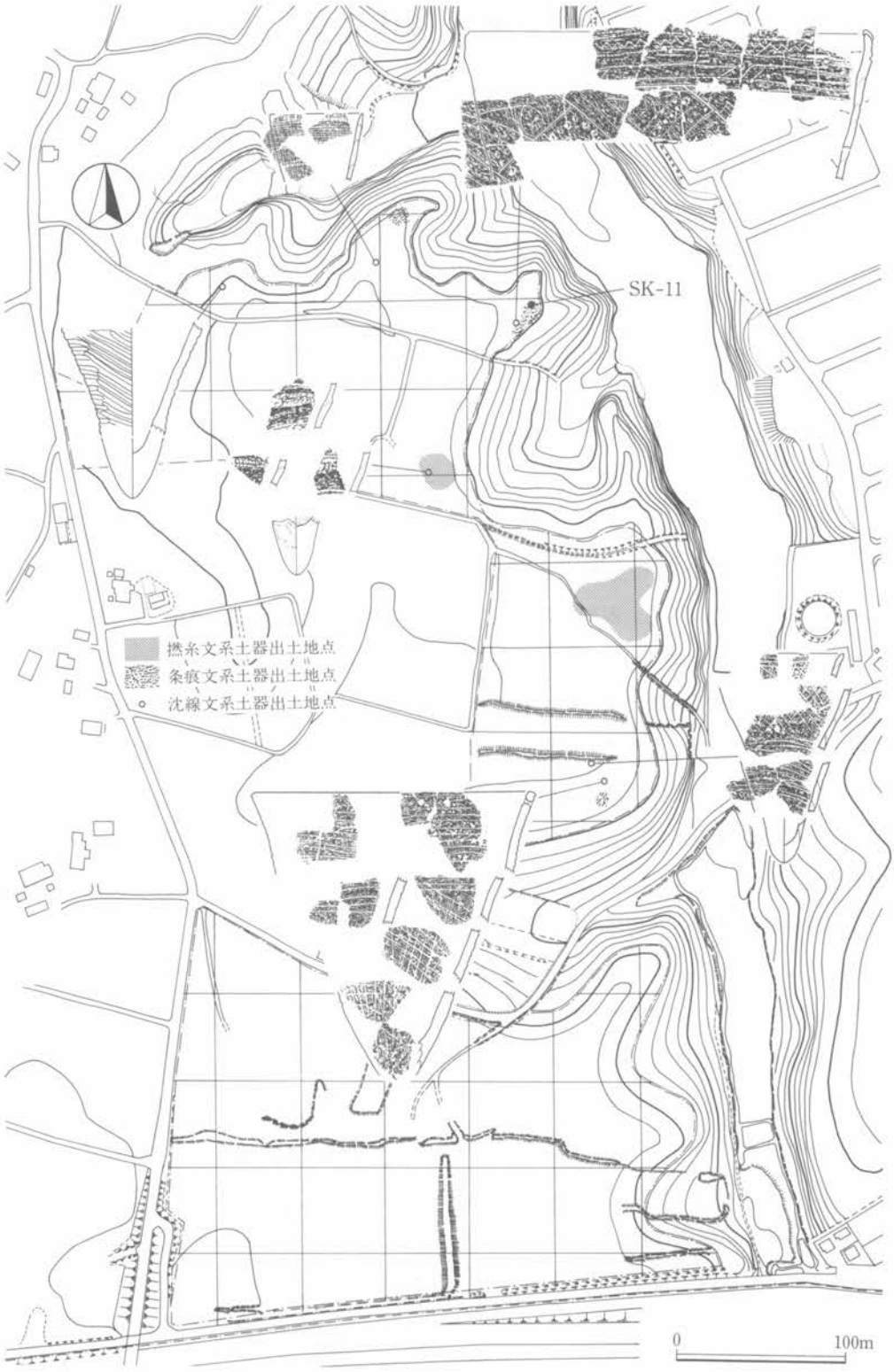
１は大割遺跡Ｃ５区出土。第７文化層（細石器石器群）の出土地点に混入していた。舌部を欠損する。側縁部は若干鋸歯状を呈する。２は池花南遺跡ＳＸ－03周溝内出土であるが、１と同一母岩の可能性がある。やはり舌部を欠損し、鋸歯縁を持つ。１、２とも小瀬ケ沢タイプとしてよいだろう。３は池花遺跡Ｄ１区出土。先端及び舌部を欠損する。１、２とは明らかに別母岩で、逆刺を持たない。調整は１、２に比してやや粗い。



第１図　有舌尖頭器（2/3）

第１表　有舌尖頭器計測表

挿図番号	器種	遺跡	遺物番号	石材	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	欠損
1	有舌尖頭器	大割	C5－10－5	安山岩	70.0	19.3	5.7	6.8	○
2	有舌尖頭器	池花南	SX－03－4	安山岩	51.6	18.8	6.6	6.5	○
3	有舌尖頭器	池花	C1－71－101	安山岩	36.9	17.8	6.8	4.8	○



第２図　縄文時代早期の内黒田（1/4,000）

3．縄文時代早期

①概観（第2図）

池花遺跡及び池花南遺跡で撚糸文系土器、沈線文系土器、条痕文系土器が出土している。

撚糸文系土器は池花遺跡南東隅、Ｅ3～Ｅ4区にかけてと、池花南遺跡SX－02～SX－04下層の2ケ所で小規模な包含層を形成していた。特に池花遺跡の方は分布範囲も狭く、土器の量も少ない。池花南遺跡の方はやや規模が大きかったようであるが、古墳によって半ば破壊されているため、本来の状況を復元できない。両者の土器群の内容には微妙な差がある。

沈線文系土器は一個体ずつ点々と出土している。三戸式土器、田戸下層式土器、田戸上層式土器がある。

条痕文系土器も少量ずつ3ケ所に別れて出土している。中では池花遺跡北東隅、Ｆ2区の資料がまとまっており、伴って炉穴跡（SK－11）が検出されている。

②池花南遺跡撚糸文系土器出土地点

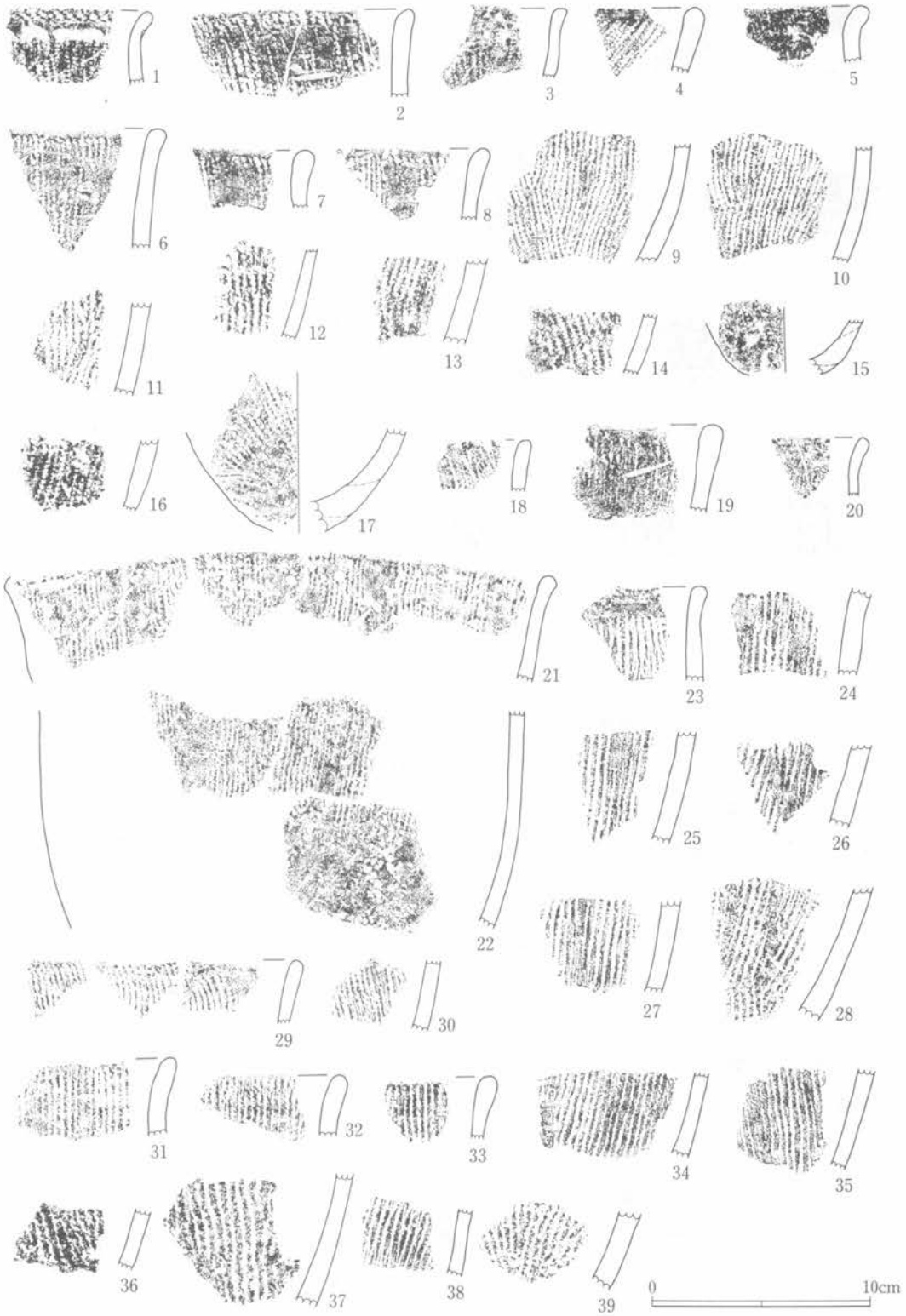
出土状況　早期撚糸文系土器群はＧ5区中央部から古墳群（SX－02～04、12）にかけて分布していた。分布範囲は大略40m四方程度の広範囲に及ぶが、分布密度は極めて散漫であり、古墳封土あるいは古墳周溝覆土中の出土も目立つ。該期遺物包含層は、その中心を台地縁辺部、古墳群下層に持っていたようであるが、そこは縄文前期、同後期、弥生中期の包含層が形成されており、断続的に小規模遺跡の占地が繰り返された地点である。さらには古墳後期に古墳群の造営を経て包含層の半ば以上は破壊されたものと考えられる。

出土土器（第3図、第4図）　計230片余の土器片が出土した。そのうち個体識別されたものに特徴的な単体を含め、26個体の土器を図示する。土器群は大きく縄文施文のものと撚糸文施文のものに分けられる。また縄文を施文する土器には口唇部文様帯があるものとそうでないものがあるが、前者は1点が認められたに過ぎない。

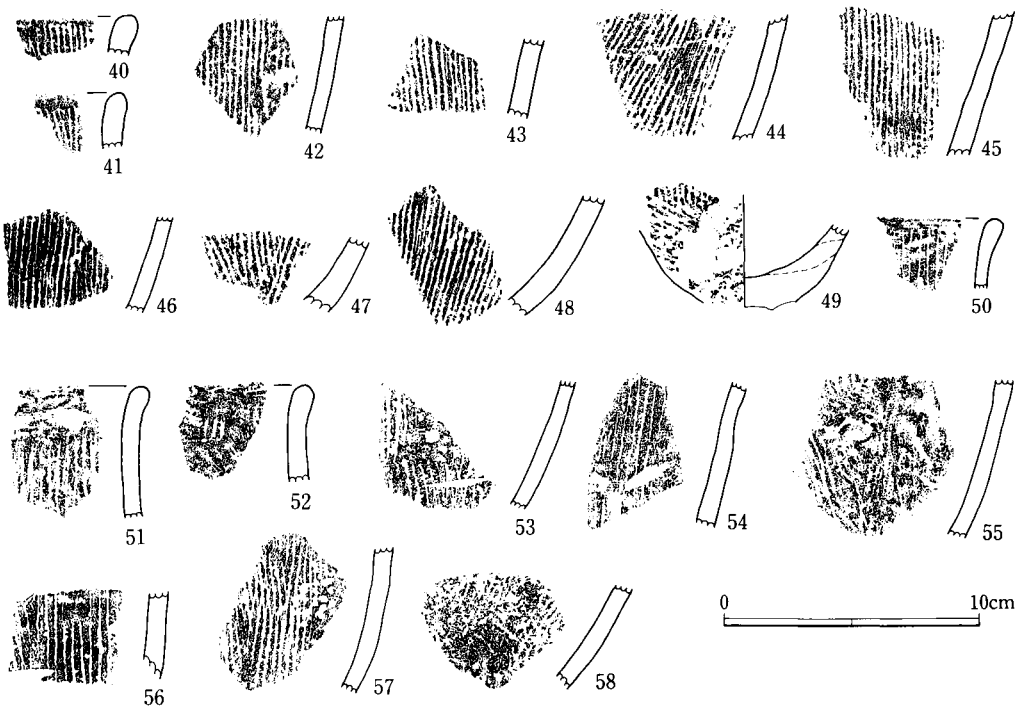
1は口縁端が如意形に外反し、口唇部文様帯が見られるものである。口唇部はあまり肥厚しない。縄文はＲＬ。口唇部のみ横位施文である。

2～17も縄文施文の土器であるが口唇部文様帯がないものである。2～5には単体の口縁部破片を集めた。3、5は縄文が明瞭に残っていないが、2の原体はＲＬ、4はＬＲである。6～10は同一個体。口縁部は僅かに外反し、また端部に若干の肥厚が見られる。原体はＲＬで、口端の施文界には明瞭な稜を生じている。11～13は同一個体。この個体は胴部破片ばかりである。14も胴部、15は底部でいずれも単体資料。16、17も同一個体。縄文はすべてＲＬである。

21～58は撚糸文を施文するものである。口唇部文様帯を有するものは1点も見られなかった。21～22、23～28、29～30、31～35、36～37、40～45、46～49、50～55がそれぞれ同一個体とし



第３図　池花南遺跡出土撚糸文系土器(1)（1/3）



第4図　池花南遺跡出土撚糸文系土器(2)（1/3）

て認められるもので、他は単体である。18～20には口縁部破片を集めた。19は口縁端にかけてなだらかに肥厚し、20は如意形に外反する。施文原体は18がRであるが、他の2点は明確でない。21、22の個体は土器群中最も多量の土器片を検出した。胴部下位から底部は遺存しない。口縁端部のみがやや肥厚しながら僅かに外反する。29、30の個体、31～35の個体、40～45の個体も基本的に同タイプの土器であろう。23～28の個体は口端から1 cm程だけが若干屈曲して外反するもので、またその部分には施文がない。50～55の個体はこれに類似し、とくに51、52の口縁部破片からはそれがよく窺われるが、50のように部分的には曖昧な箇所もあり、器形と施文部位がどれほど意識されていたか若干疑問もある。他の個体はいずれも口縁部片を遺存しないので個別の特徴は判らないが、46～49の個体に1点底部片が含まれている。それは底部外面が剝落しており、内面のような丸底に近いものではなく、尖底になっていたものであろう。なおここに掲載した土器の施文原体は例外なくRである。

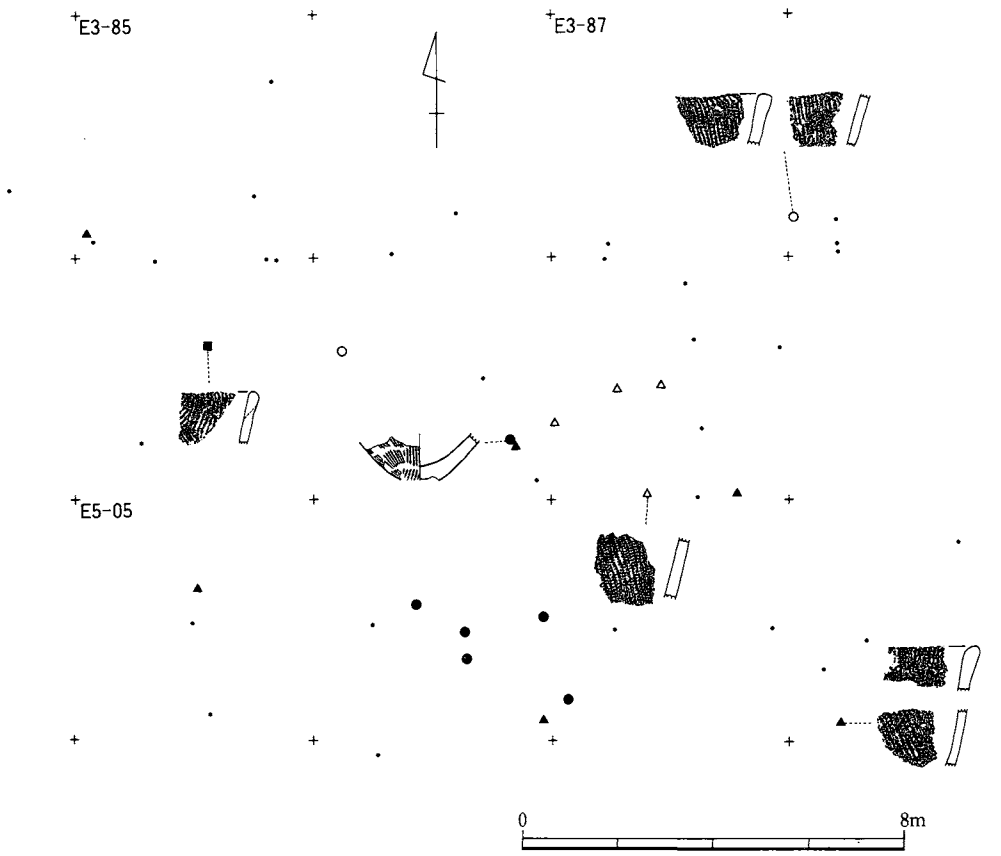
当地点出土土器における縄文施文と撚糸文施文の比率は、掲載した26個体の範囲では縄文10個体（38%）に対し、撚糸文16個体（62%）である。他の破片はここに掲載した土器と同一個体に属すものも多く、個体識別されなかった土器片も識別されたいずれかの個体に属す可能性もあるため、元来の個体数は26個体を倍加するほどではないと思われる。したがって本来的な組成比率は、前記の比率を大きく変えることはあるまい。一括性があるとすれば稲荷台期か。

③池花遺跡撚糸文系土器出土地点

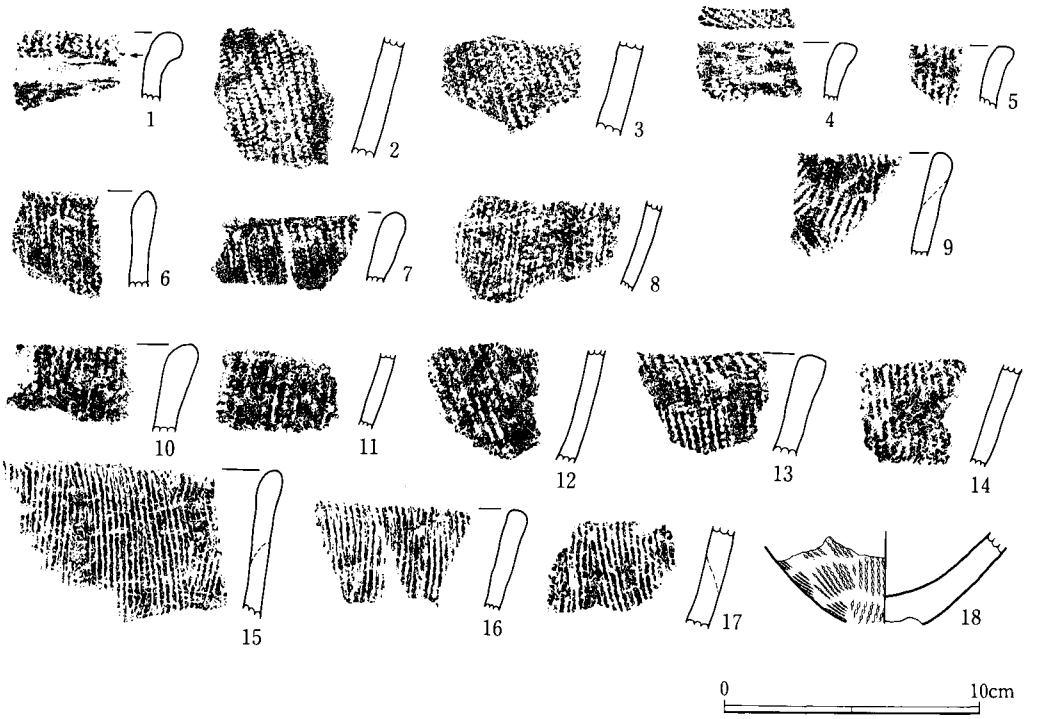
出土状況（第５図）　前節池花南遺跡の撚糸文系土器出土地点から100m余北西、池花遺跡Ｅ３区～Ｅ４区にかけてやはり撚糸文系土器が出土する地点が存在した。分布範囲は狭い。また密度も希薄なため出土点数も少なく、土器片数は79片を数えるに過ぎない。分布図に示したのはある程度集中して検出された部分であるが、いくつかはこの地点から10～20m離れて出土した土器片もある。

出土土器（第６図）　口縁部の単体資料含めて計８個体を図示する。やはり縄文を施文するものと撚糸文を施文するものがある。

１～14が縄文施文のもので１～３、７～９、10～12、13～14がそれぞれ同一個体と認定されたものである。１～３の個体は口唇部のみが肥厚しながら外反し、口唇部外面に縄文帯を持つものである。口唇部文様帯と直下の無文部とは明瞭な稜を以て界される。縄文は口唇部、胴部ともにＬＲである。４は口唇部がやや肥厚して端部に面とりがなされ、上面に縄文帯を持つも



第５図　池花遺跡Ｅ３、Ｅ４区撚糸文系土器出土状況（1/160）



第6図　池花遺跡出土撚糸文系土器（1/3）

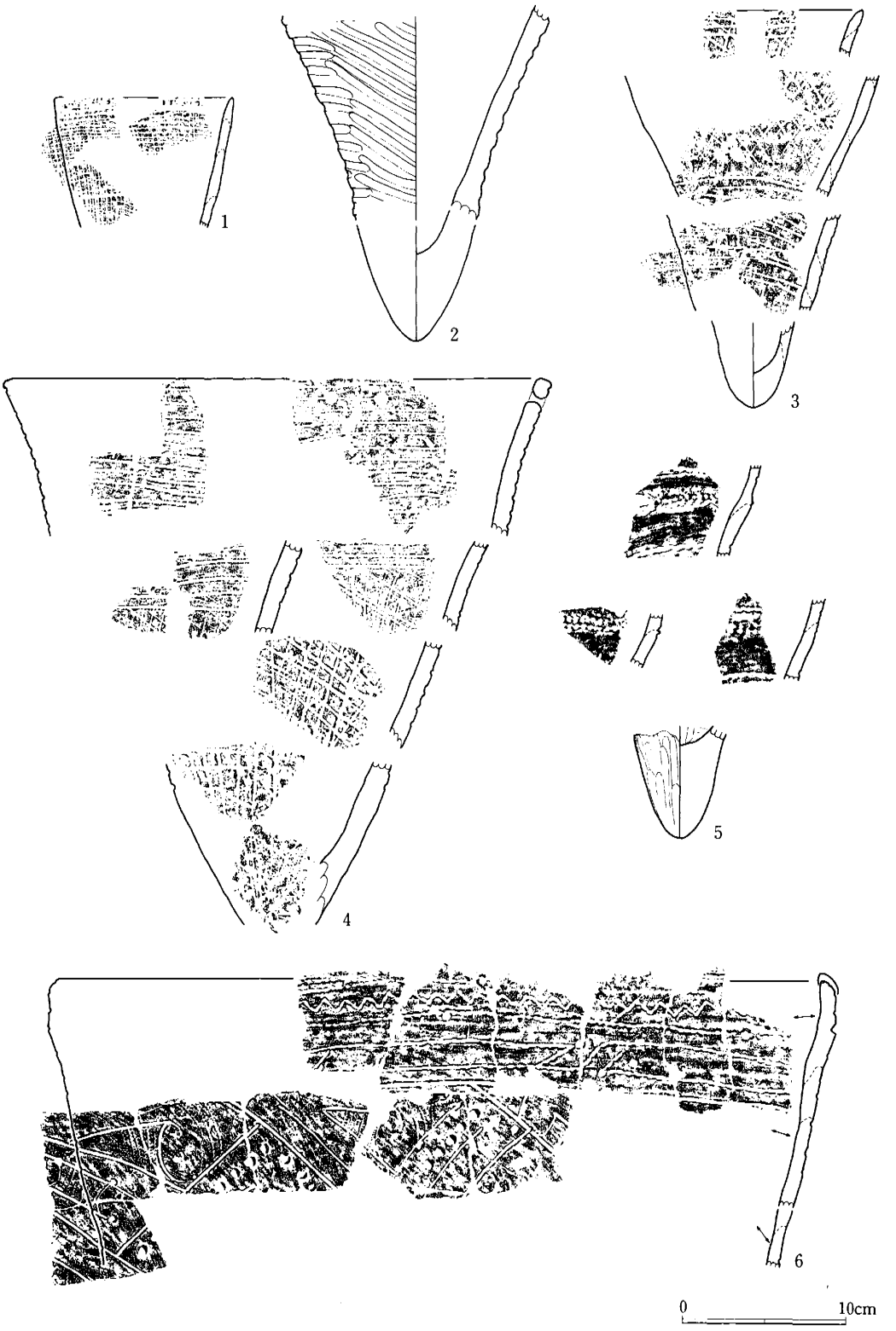
のである。口縁直下にはやはり狭い無文部がある。5は僅かに肥厚しながら外反する端部に刻目のように縄文が横位施文されるものである。4、5ともに施文原体はＲＬ。6～14の4個体は同タイプの土器として把握される。器形は若干開き気味ながら口縁部は殆ど外反しない。口唇部は僅かに肥厚するが体部からはなだらかな線を描く。施文原体はすべてＲＬ。15～18は同一個体で撚糸文を施文するものである。器形は6～14に近似する。底部破片18はやはり底部外面中央が剝落しており、尖底の成形には丸底成形後、小粘土塊を付加したことが窺われる。

縄文施文と撚糸文施文の比率は、図示したものでは縄文が7個体、撚糸文が1個体で明らかに縄文施文が圧倒する。本来的な比率も池花南遺跡で述べたような理由により、この比率と大差はないであろう。一括性があるとすれば（1～3を含め）夏島期。

④沈線文系土器（第7図）

内黒田遺跡群全体で6個体の沈線文系土器が出土している。以下個別に説明する。

三戸式土器（1）　池花遺跡北端部、D1－59区から出土した。口縁部から胴部上半の破片を遺存する。遺存部は縦横の沈線による格子目状の文様で埋めつくされている。横位の沈線はおおよそ規則的に平行を意識して施されるが、縦位の沈線は若干の乱れを生じている。



第７図　沈線文系土器（1/4）

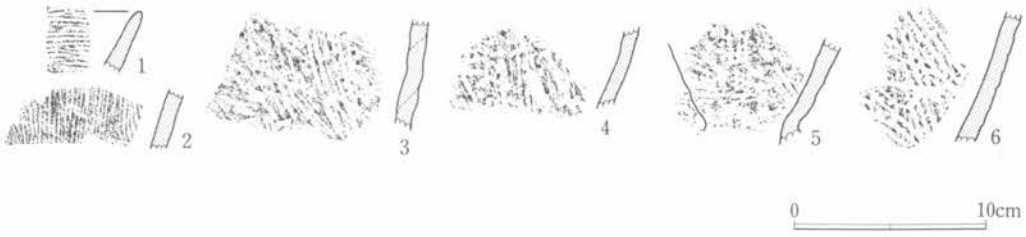
田戸下層式土器（2～4）　2は池花遺跡北縁、C1－71、81区から出土した。15片出土した破片の9片が接合した。遺存部位は胴部下半のみ。遺存部分の上端に水平な沈線の残欠が認められ、それ以上には水平な文様帯が展開していたものであろう。それ以下には非常に太い棒状工具により右下がりの斜位沈線が施される。厚い土器で外面の焼成は良好であるが、内面の焼成は良くない。3は池花南遺跡南縁近く、G7－34区から出土した。口縁部から底部まで遺存するが、破片数が少なく、充分接合しない。口縁部には水平な沈線が3条、胴部上半は斜格子状沈線、胴部下半は再び水平沈線と全体は三つの文様帯に区分される。4も池花南遺跡のG7区ほぼ中央に四散して出土した。3の出土地点からは10m余しか離れていない。これも口縁部から底部近くまでの破片が検出されているが、殆ど接合しなかった。3に比して大型で器厚もある。この個体は口縁部の水平沈線帯が広く、以下は底部近くまで斜格子状沈線が施される。なお口縁部には2箇所に隣接して穿孔が見られる。焼成後の穿孔で補修孔と考えられる。

田戸上層式土器（5、6）　5は池花遺跡E3－95～97区、撚糸文系土器の出土地点に混在して出土した。大型の器形に比して破片数が乏しく殆ど接合しない。胴部破片3片と底部を示す。遺存部位は胴部上半（口縁部に近い）と思われるが、器面の屈曲点があり、水平な稜線上を工具の角で連続した刺突文を施している。同じ稜上につまみあげたような突起が見られる箇所があり、おそらく当間隔に存在したであろう。また屈曲部の上下には棒状工具による押引文が施されている。6は池花遺跡F2－04～37区に散布していた個体で、35片出土し、12片が接合した。推定口径48cmを越える大型の土器であるが、口縁部から胴部上半の一部しか遺存しない。口端から7 cm程は水平基調の文様帯である。5と同様の棒状工具の押引により文様を構成する。口縁部文様帯の下は鋸歯状の斜位沈線を交錯させており、その間に二枚貝腹縁と棒状工具の先端による刺突を施している。また随所に巻貝の先端を用いた刺突を施している。なお口端部には突起が一箇所見られるが、単位など不明である。

⑤池花南遺跡条痕文系土器出土地点

出土状況　早期条痕文系土器はG7区南寄り、台地縁辺でごく少量が出土しただけである。

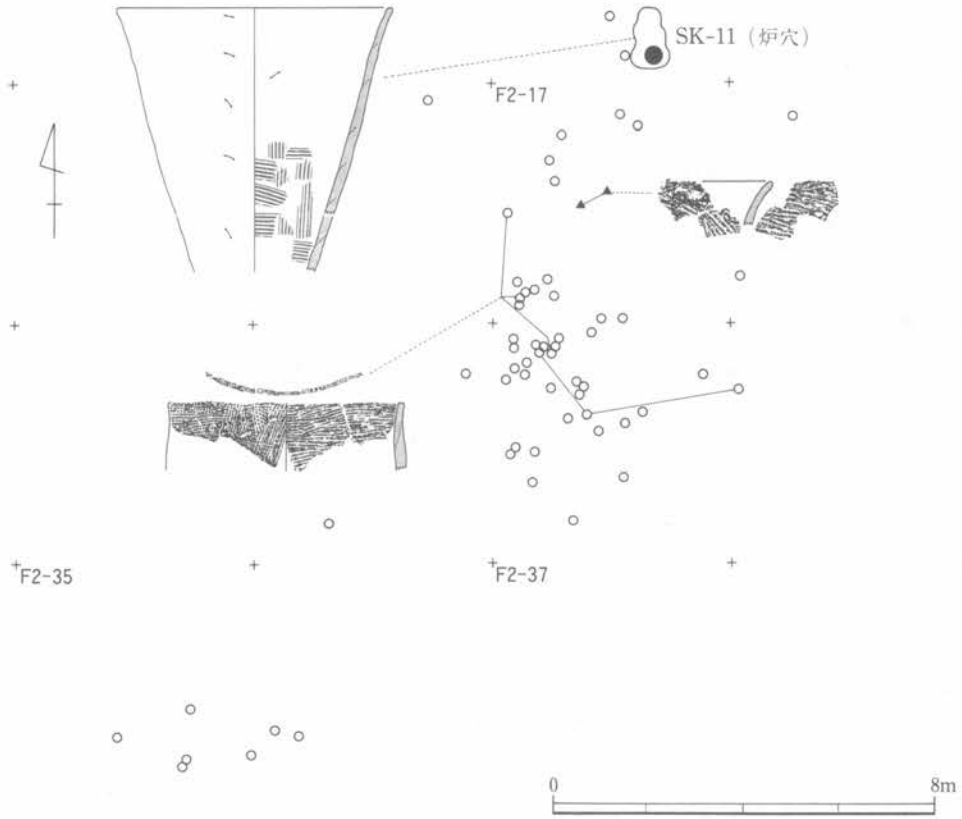
出土土器（第8図）　2個体を図示する。いずれも条痕が施されるだけのものである。1、2は同一個体の口縁部片と胴部片である。条間の細かい貝殻条痕が用いられる。条痕施文は外面に限られるが、口縁部は横位、胴部は縦位に施される。3～6が同一個体である。胴部中位～下位（5は底部近く）の破片で斜位の条痕が施文されている。やはり内面には条痕は施されない。両個体とも胎土に繊維を含むが、3～6の個体により顕著である。



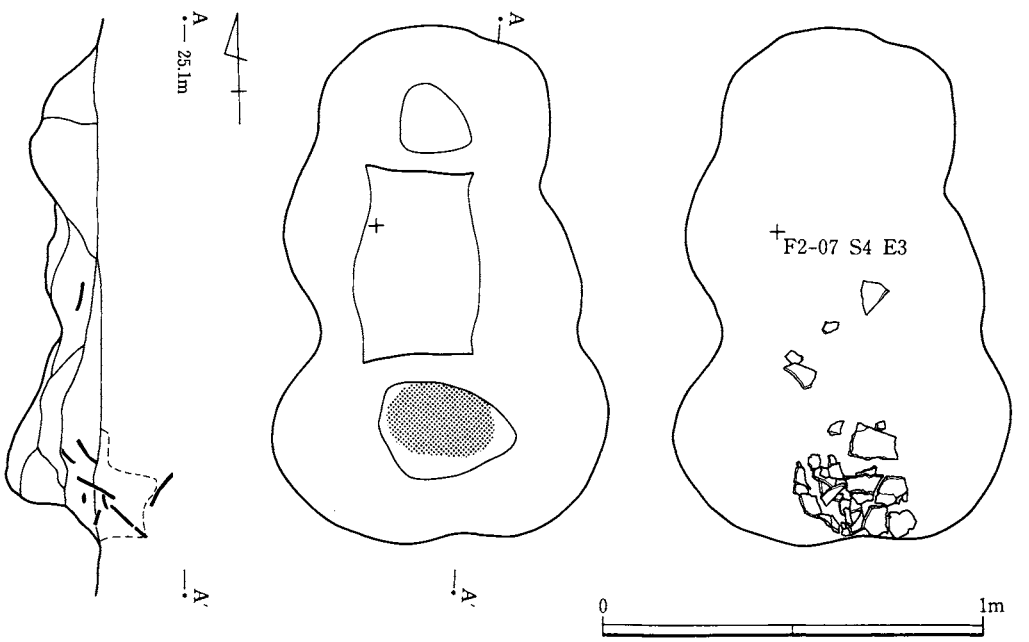
第８図　池花南遺跡出土条痕文系土器（1/4）

⑥池花遺跡 SK－11・条痕文系土器出土地点

出土状況（第９図）　池花遺跡においては条痕文系土器は２地点で出土している。うち１箇所は遺跡北端、E0－92～E1－01区にかけてであるが、出土土器は計40片と少量ですべて同一個体と思われる。もう１箇所は遺跡東端、Ｆ２区東寄りの台地先端にやや集中する部分があり、またそこに接するように条痕文系土器１個体分を出土した炉穴跡（SK－11）が検出された。土器の集中は炉穴の南側数メートルに展開する。出土量はやはり少なく、点数は計62片である。



第９図　池花遺跡Ｆ２区条痕文系土器出土状況（1/160）



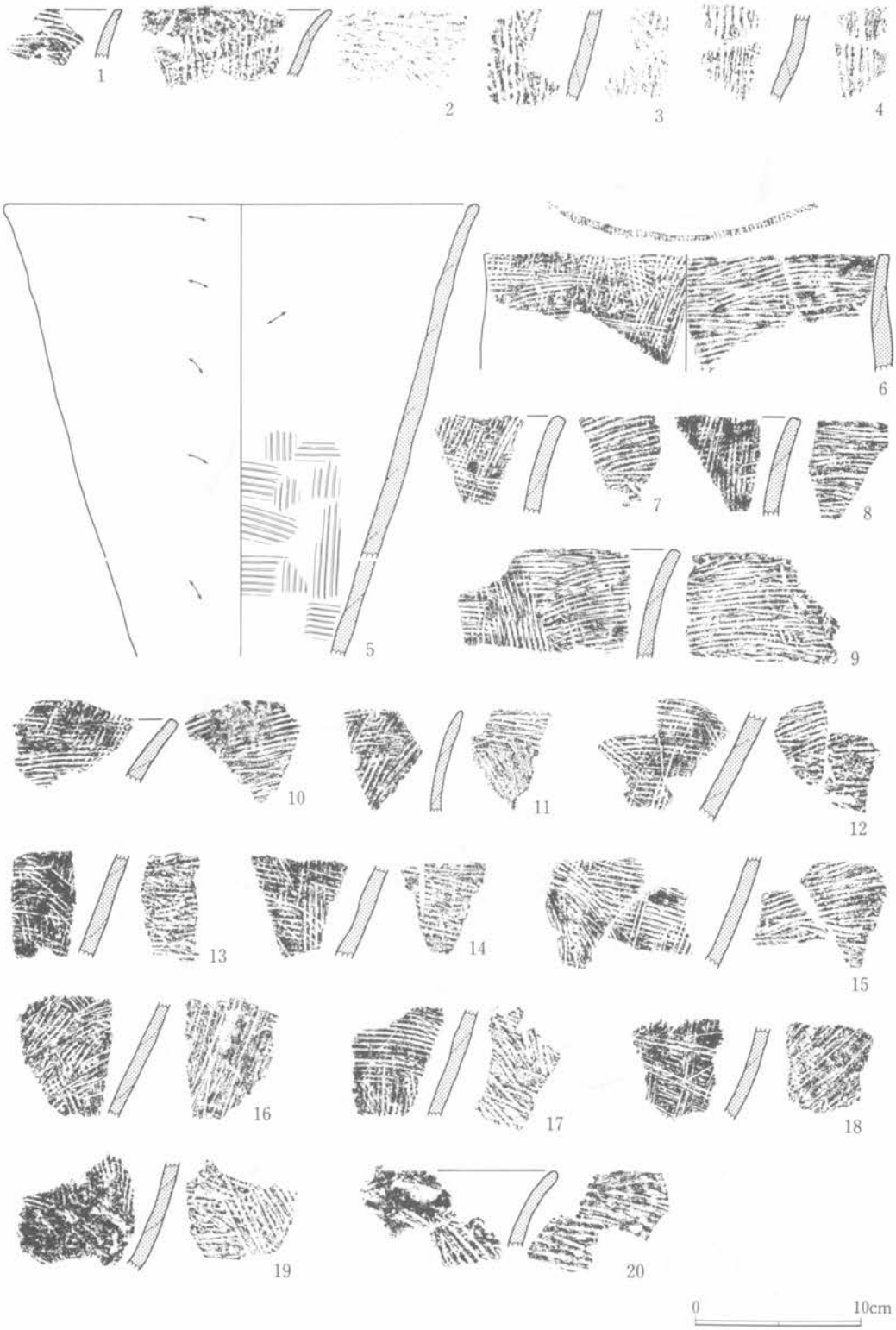
第10図　池花遺跡 SK-11 (1/20)

SK－11（第10図）　内黒田遺跡群で唯一検出された炉穴跡である。平面形は南北方向に主軸を持つ瓢箪形を呈し、長径約1.4m、短径約0.9m を測る。火床部は南側の一段窪んだ部分にあり、その直上の覆土中に浮いて深鉢１個体分が潰れたように出土した。残念なことに調査時までそこには木根があり、遺物の若干の移動や欠失は免れていまい。

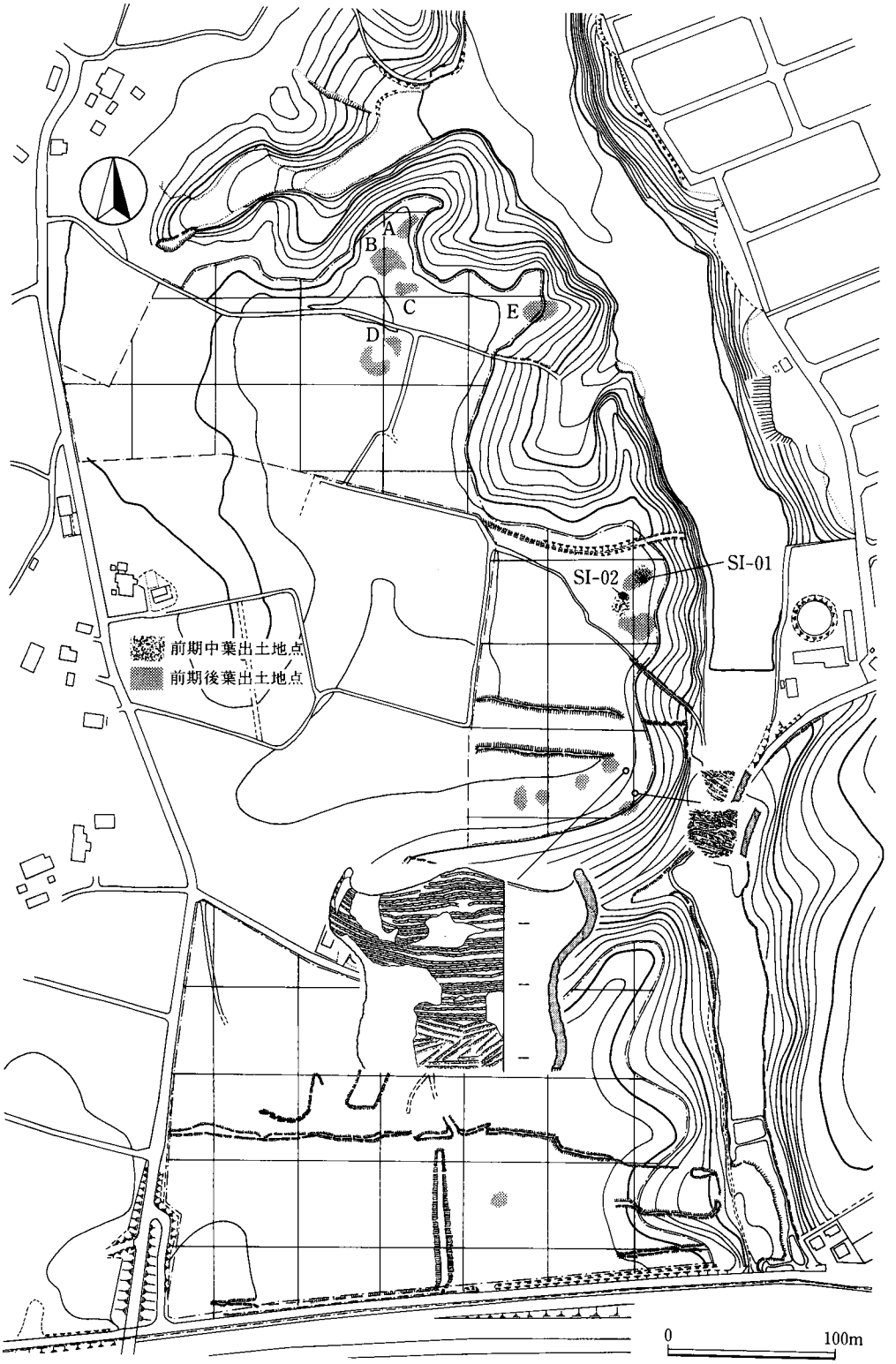
出土土器（第11図）　１～４はＥ０～Ｅ１区にかけて出土したものですべて同一個体である。全体の器形自体比較的開きの大きいものであるが、口縁部はさらにやや外反する。表裏ともに貝殻条痕のみが施される。縦位施文を基調とするが、口縁部は横位施文が主体的である。多量の繊維を含み脆い。

５は炉穴 SK－11から出土したものである。器形は単純で直線的に開く深鉢形。外面は全面がヘラナデによって整形され、内面も上半は同様で下半部にのみ条痕が残される。この土器には二次焼成痕らしい剝落などは見られるが、二次的な吸炭現象による黒化は観察されない。

６～19は同一個体である。Ｆ２区出土遺物の中核をなす。口縁部は10に見られるように部分的に波状になるらしい。実測破片によって口縁部の傾きが異なって判断され、また厚みも異なり、かなり歪みの大きい個体である。表裏とも条痕施文であるが、口縁部内面が横位施文される以外は施文方向が不規則である。20は別個体の口縁部破片。１～４に類似した土器である。



第11図　池花遺跡出土条痕文系土器（1/4）



第12図　縄文時代前期の内黒田（1/4,000）

4．縄文時代前期

①概観（第12図）

内黒田遺跡群においては縄文時代前期でもその前半期に属する遺構・遺物は全く検出されていないが、前期中葉、関山期の後半以降はまとまった資料が得られている。

関山期後半あるいは関山（新）期には池花南遺跡北半部に小規模な集落が営まれ、古墳群下層を中心として住居跡2棟とそれに付随する遺物包含層が調査された。この出土遺物は良好な一括資料である。しかしそれに続く黒浜期の遺構は認められなかった。遺物も池花南遺跡で少量の土器が出土したに過ぎない。

また前期後葉になると、再び一転して池花遺跡においてまとまった遺物包含層が残されている。包含層は池花遺跡北端の張り出し部分から南側へ、およそ100m近くに亙って断続的に展開し、また同遺跡東端にも同期遺物出土地点が検出された。ここではそれらをA地点からE地点の5地点に別けて把握している。池花南遺跡北半部でも、池花遺跡ほどまとまった資料ではないが、関山期の包含層に一部重なるように前期後葉の遺物出土地点が認められており、池花南遺跡南半部や大割遺跡でも微量の前期後葉の土器が出土した。ただ該期は随所に遺物包含層が残されていながら顕著な遺構は一切検出されていない。

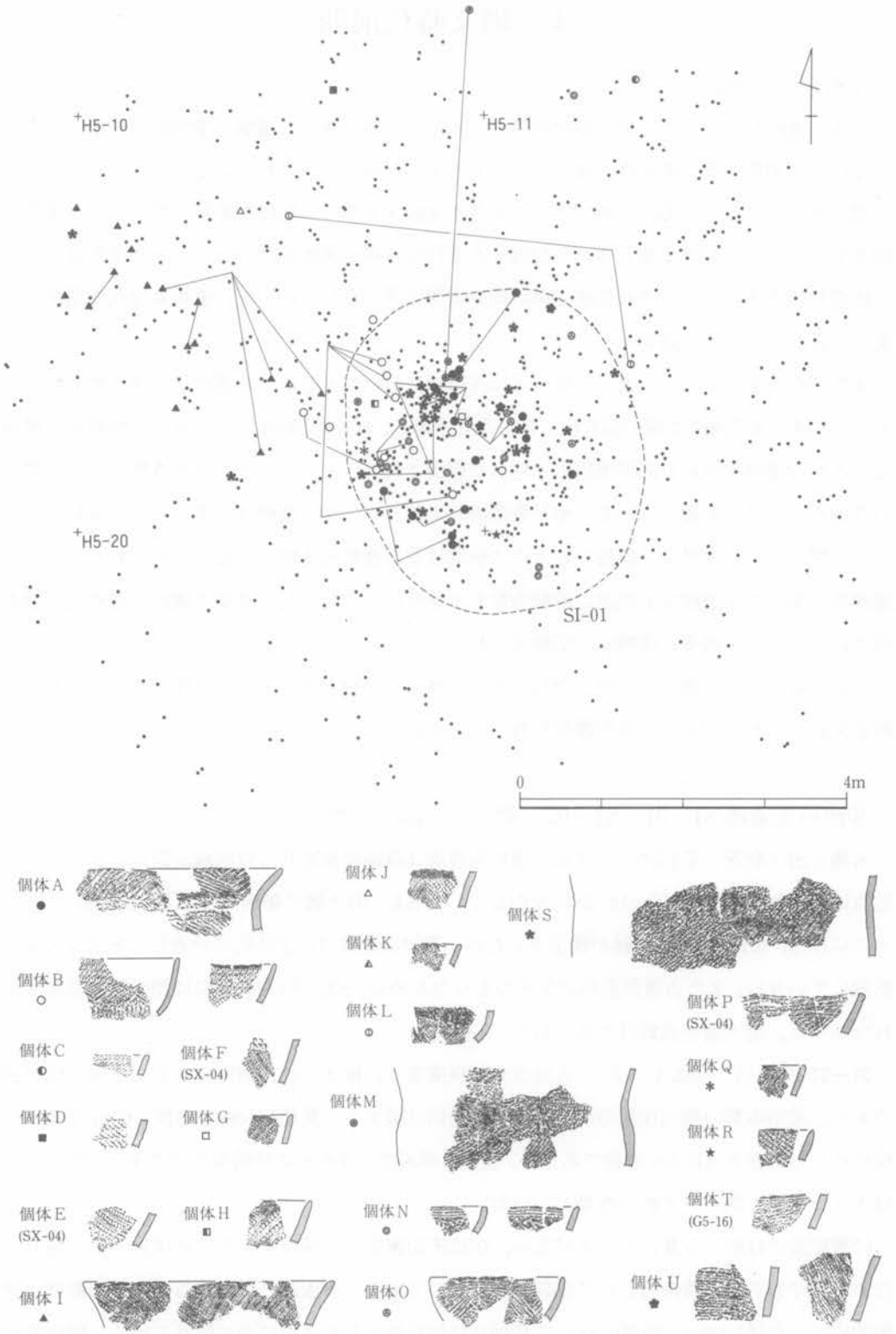
なおこれらの包含層出土土器は浮島式後半～興津式に相当するものを主体とするが、若干の時期差があるものがあり、検討課題を有している。

②池花南遺跡SI－01、SI－02、関山式土器出土地点

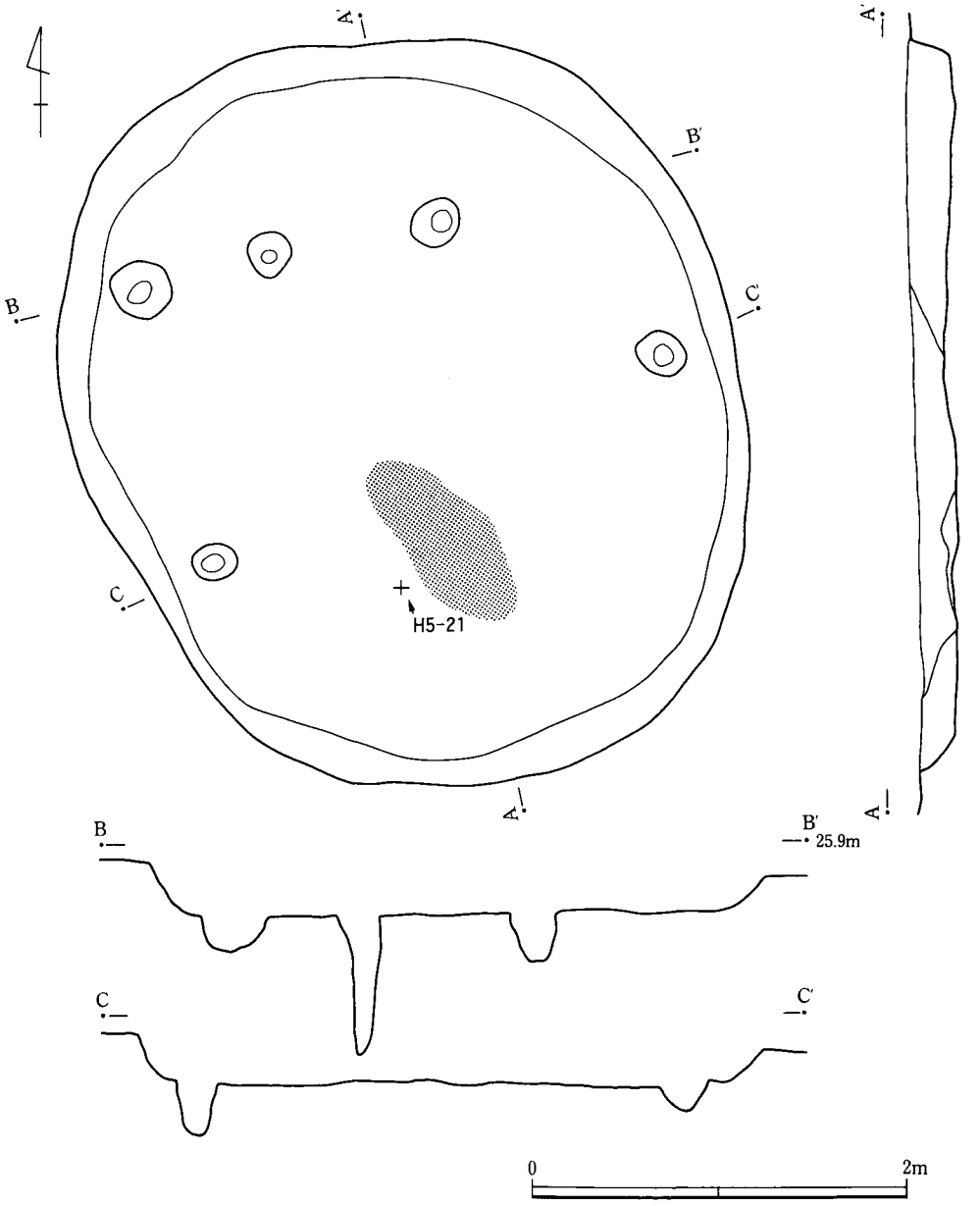
A地点出土状況（第13図）　該期の遺物包含層は遺跡北東寄りの台地縁辺部に所在した。2地点に分かれ、一つはH5－10、20区を中心としたSX－04下層に集中している。A地点とする。そこにはSI－01とした住居跡が検出されたが、遺物は遺構内に主体的に分布し、あまり広くは拡散していない。また古墳築造時の削平があったためか、SX－04周溝外には殆ど遺物は認められなかった。出土遺物点数は土器片148片である。

SI－01（第14図、図版1－1）　A地点やや東南寄りに検出された楕円形を呈する竪穴住居跡である。前期中葉の竪穴住居の形状としては異例に属する。長径4.16m、短径3.60mを測り、検出面からの深さは0.3m未満であった。覆土は単純で、基本的には暗褐色土であり、周辺部にはテフラを多く含んだそれが堆積していた。

付帯施設には炉と5基のピットがある。炉は床面南寄りに検出された。地床炉で殆ど掘りくぼめられておらず、焼床面として確認されたものである。火床部と思われる焼床面の範囲は比較的広く、長径1.06m、短径0.48mで長軸は住居長軸よりもさらに西に振れている。積極的に柱穴と考えられるピットはない。検出されたピットのうち4つは深さ15～30cmで位置も不規則



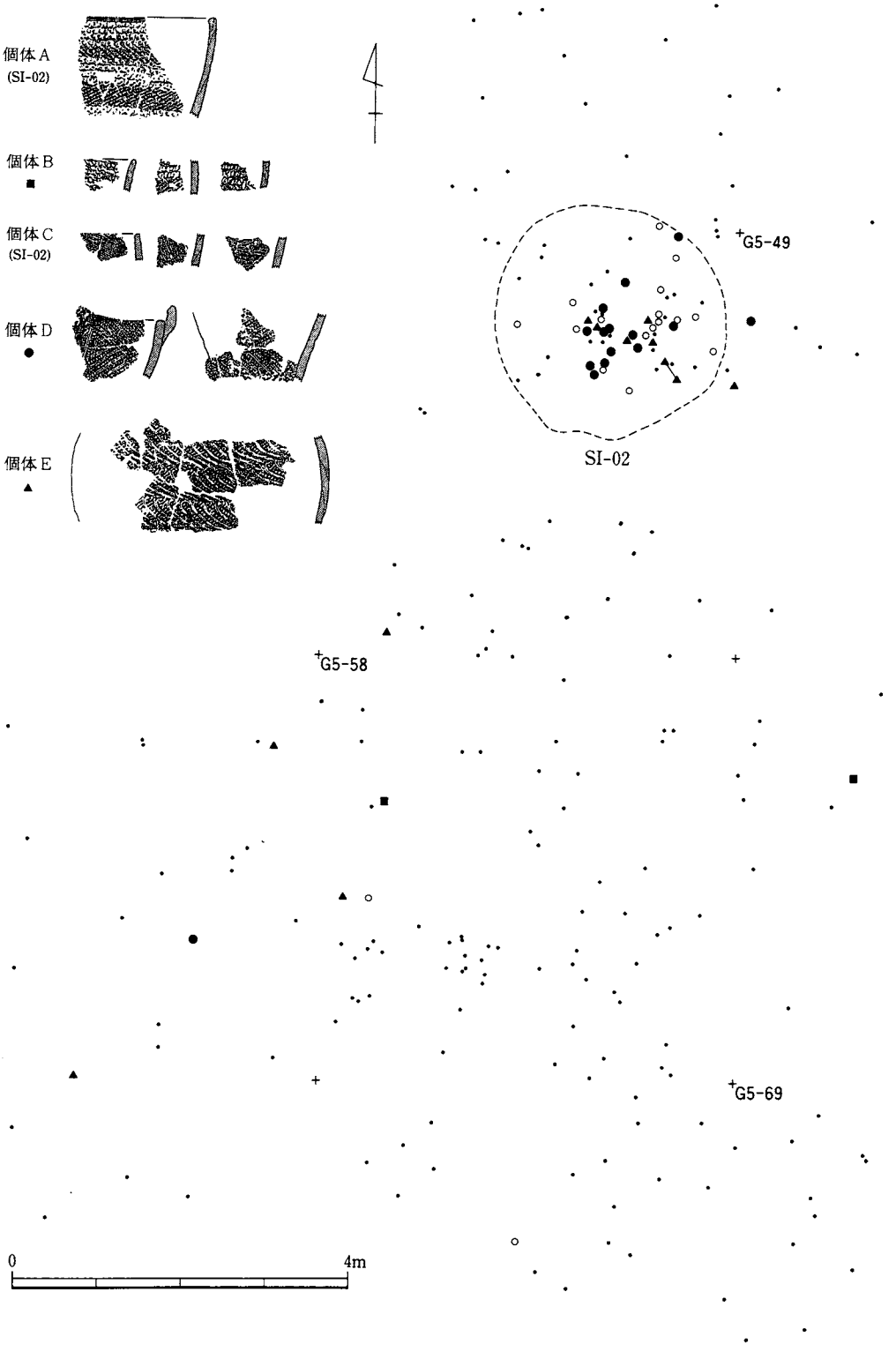
第13図　池花南遺跡関山期Ａ地点遺物出土状況（1/80）



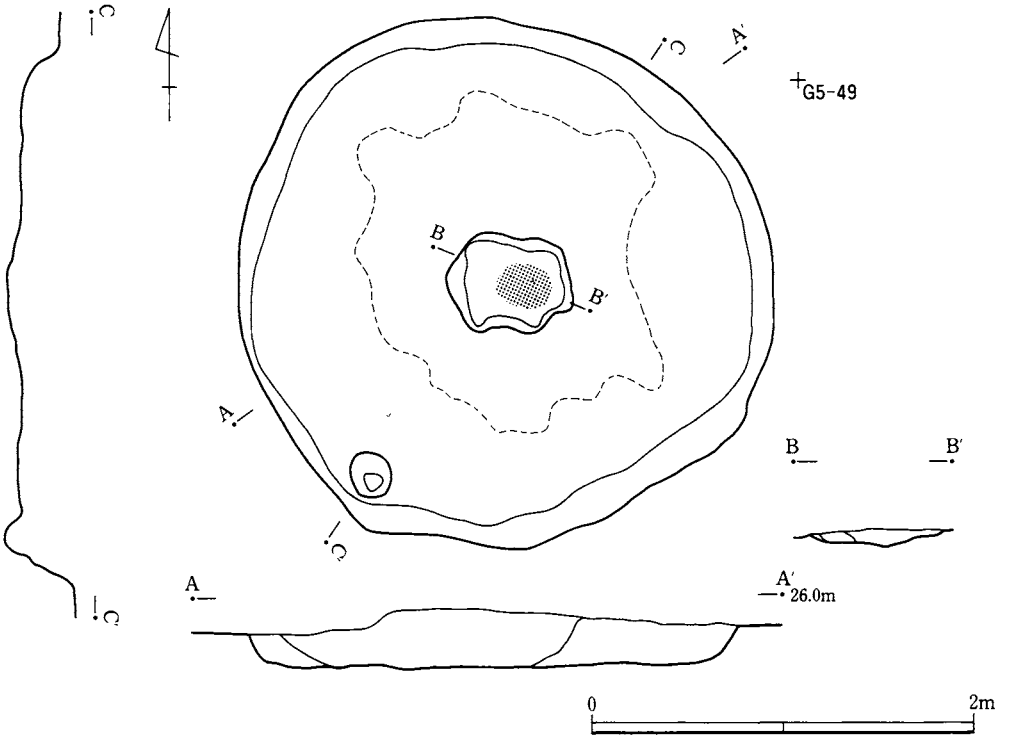
第14図　池花南遺跡 SI-01（1/40）

であった。床面は概ね平坦であるが、周縁部より中央部のほうが僅かに高い傾向がある。また床面の硬化は明瞭には観察されなかった。

B地点出土状況（第15図）　A地点からやや空隙を置いた西南方に関山式土器の散布が認められたものをB地点とする。遺物分布はG5－48区で検出されたSI－02を中心として南に伸びているが、量的にA地点よりも少なく、しかも遺構外では極めて散漫であった。これはSX－02、03といった古墳造営時の影響が大きいと思われ、実際に両古墳の周溝覆土及び墳丘封土内に含



第15図　池花南遺跡関山期Ｂ地点遺物出土状況（1/80）



第16図　池花南遺跡 SI-02（1/40）

まれていた土器片も決して少なくない。

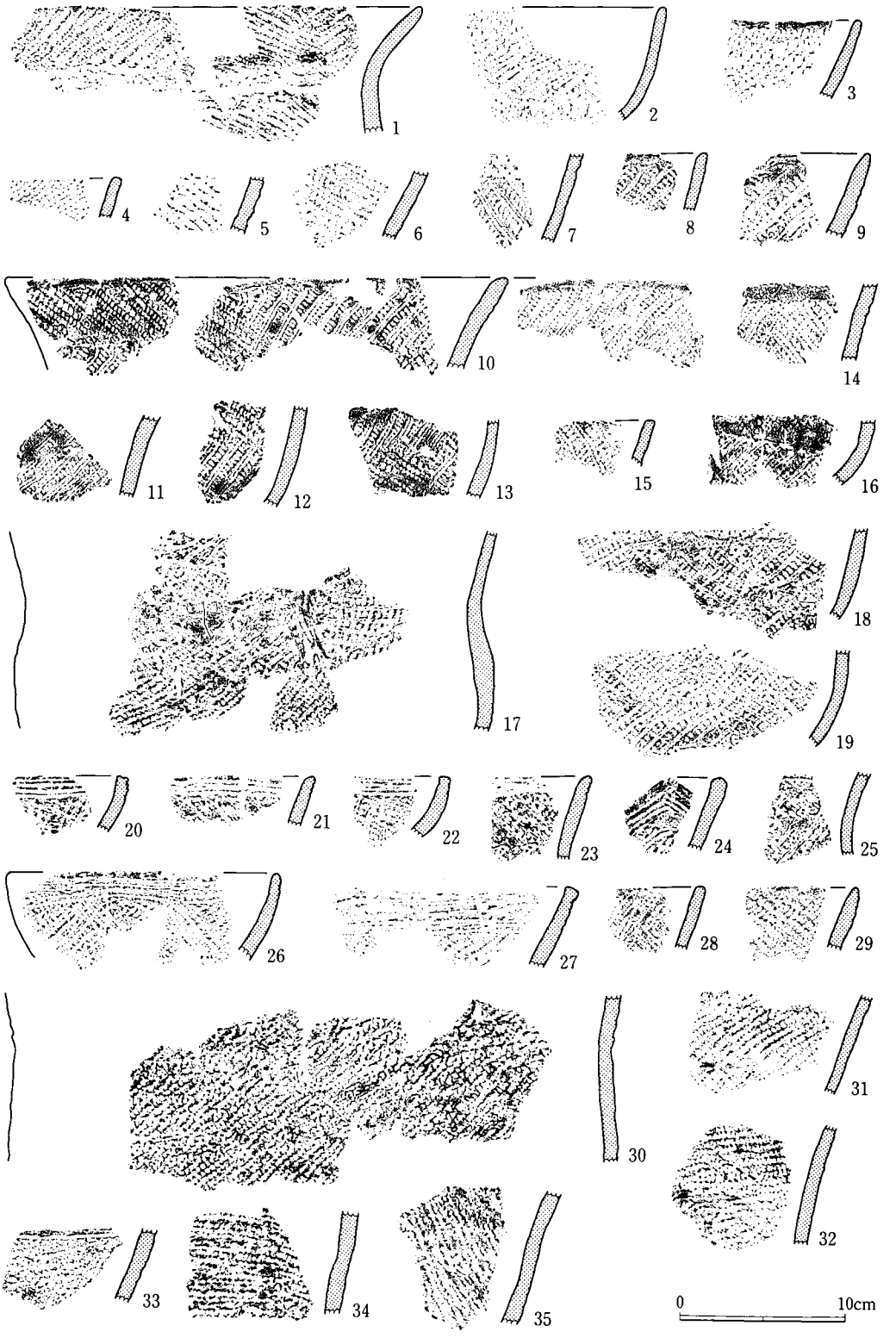
SI－02(第16図、図版１－２)　ほぼ円形を呈する竪穴住居跡である。SI－01と同じく該期の住居跡としては異例と言える平面形状を持つ。小規模な住居跡で東西径2.82m、南北径2.78m を測る。検出面からの深さは0.2～0.3m で、覆土は SI－01のそれに似た暗褐色土が中央部に堆積し、周縁部は同質の土ながらテフラを多く混入していたため、平面プランの検出にはやや困難が伴った。

付帯施設は炉と小ピットが１基確認されただけである。炉は地床炉で、床面中央に浅い皿状の窪みとして営まれている。長径0.68m、短径0.52m。火床部はその中央やや東寄り、およそ0.2×0.3m の焼床面として把握された。柱穴は認められない。西南壁際の小ピットは径0.2m 前後、深さ0.12m でその性格は不明である。床面は概ね平坦で、中央部、炉の周辺に径1.5～1.8m の硬質床面が観察された。

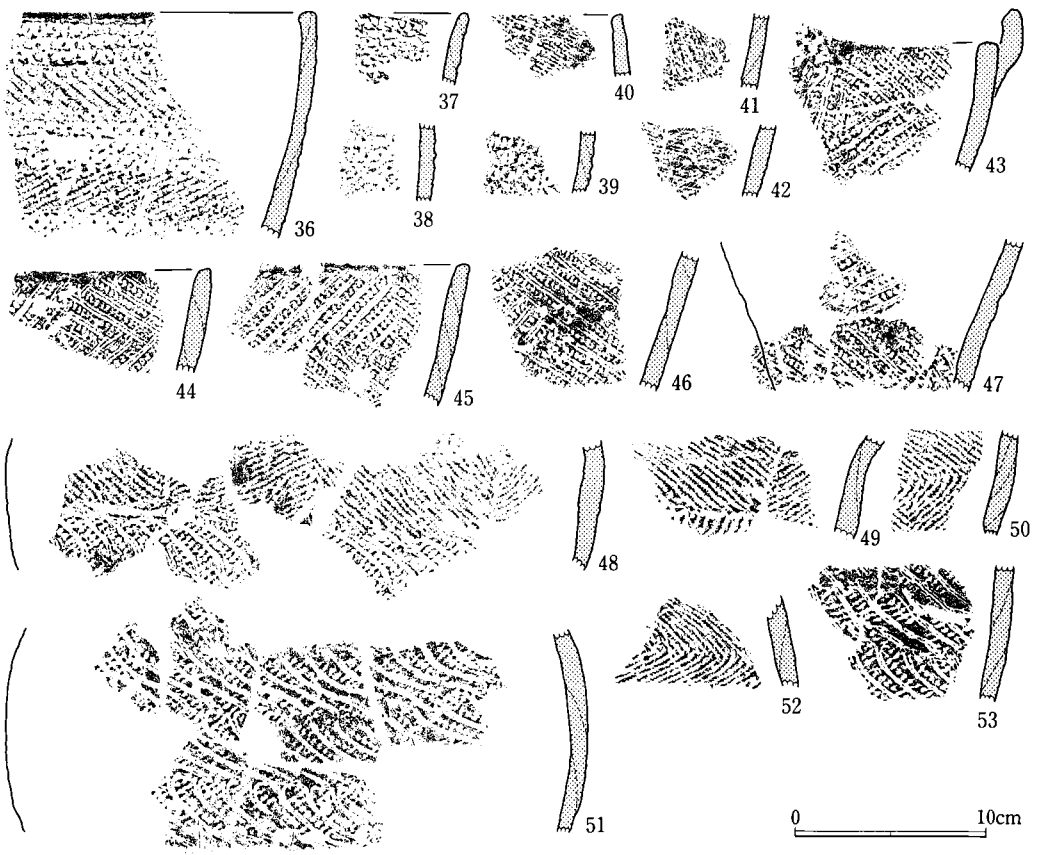
A・B地点以外の出土状況　同時期の遺物の散布は池花南遺跡北縁でも見られた。遺物出土グリッドは G4－77区から G5－16区にかけてであり、また SX－09、18周溝覆土からも出土しているが、遺構は認められず、顕著な集中分布も示さなかった。なお池花南遺跡中央から南半部、池花遺跡、大割遺跡では関山期の遺構、遺物は一切検出されていない。

A地点出土土器（第17図、図版14）　単体破片を含めて21個体を図示する。1および18～19、2～3、10～13、20～25、30～32、34～35がそれぞれ同一個体であり、図示した順に個体A～Uとする。器形の全貌を窺い知ることができるものはない。個体A（1、18、19）は口縁部が目立って外反するもので、口縁部から頸部は反撚ＬＬＲとＲＲＬを交互に横位施文して縦位の疑似羽状縄文を形成している。施文単位の上下界には原体閉端の回転文が意識的に強調されている。胴部はＬＲにＲ2条を左巻きにしたものとＲＬを軸にＲ2条を右巻きにしたものを結び、それを上下逆にしながら交互に施文する。個体B（2、3）は鉢と思われるが、口縁部には4段のループ文が見られ、以下ＲＬにＲ2条を右巻きにした縄巻（付加条）縄文の地文の上に、半截竹管による断続鋸歯文及びコンパス文を施している。個体C（4）と個体D（5）はループ文が施される小破片。また個体F（7）もループ文を持ち、以下は縄巻縄文である。個体E（6）、個体G（8）、個体H（9）、個体J（14）、個体K（15）、個体L（16）、個体Q（28）はいずれも縄巻縄文を施す破片である。個体I（10～13）はＬＲとＲＬを右撚りに撚り合わせたものとＲＬにＲ2条を右巻きにしたものを併用し、それを交互に規則的に施文することによって疑似羽状縄文を得ている。個体M（17）は頸部～胴部破片である。縄文は一見複雑に見えるが、長いＬＲを軸とし、その半分にＲ2条を左巻きしたものを横位施文している。したがって基本としては単節縄文と縄巻縄文は同時に施文されたものである。また一部にＲＬ軸＋Ｌ2条右巻き横位施文の区画をつくっている。個体N（20～25）、個体O（26）、個体P（27）、個体T（33）は半截竹管による沈線文様が見られるものである。個体Nは口縁部に2条の水平な竹管文を持つが、波状口縁をなし、波頂部下には2単位の竹管文が認められる。地文はＬＲ軸＋Ｒ2条左巻きとＲＬ軸＋Ｌ2条右巻きの交互施文らしい。個体Oは比較的小型の浅鉢または鉢。やはり縄巻縄文を地文として口縁部に水平な2条の竹管文を、その下には鋸歯文を施す。個体Pは緩やかな波状口縁をなすもので、個体Oとほぼ同じ文様構成をとるが、口縁部の竹管文は4条。地文はよく判らない。個体Tは破片上端に水平な竹管文の一部が残るのみである。個体R（29）と個体Ｓ（30～32）は単節縄文を施すものと思われるが、個体Ｓは原体閉端の回転文様を意識して1～1.5cm毎に重ねて施文している。手法としてはループと同じであるが、結果として効果的ではない。個体U（34、35）は多条縄文を施すものであろうが原体ははっきりしない。

B地点出土土器（第18図、図版15）　5個体を図示する。個体A（36）は鉢形の土器で出土した破片の殆どが接合したが、全体のごく一部しか復元できない。文様は4段のループ文による文様帯を口縁以下当間隔に多段に亙って施文するものでループ文様帯間はＲＬ、ＬＲが交互に見られる。個体B（37～39）は小片ばかりで接合しないが、やはりループ文を施すもの。個体Aに比して文様が雑である。個体C（40～42）も小片ばかりであり、施文原体には他個体にはない細かい縄文が用いられている。個体D（43～47）は片口の鉢である。43に見られる注ぎ口は過半を欠損している。縄文はＲＬ軸＋Ｒ2条右巻きとＬＲ軸＋Ｌ2条左巻きの交互施文で



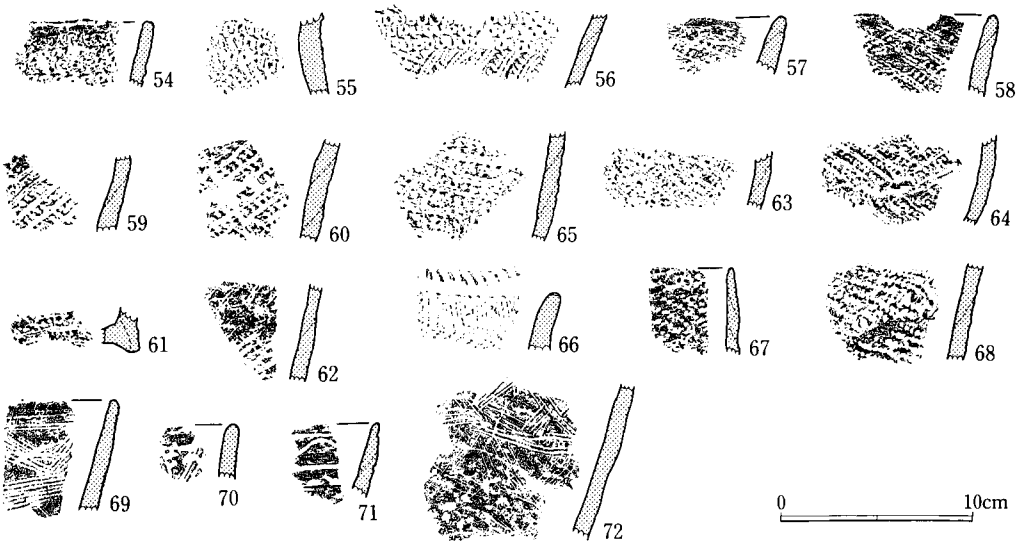
第17図　池花南遺跡関山期Ａ地点出土土器（1/4）



第18図　池花南遺跡関山期Ｂ地点出土土器（1/4）

全面が覆われるらしい。個体Ｅ（48～53）は頸部のくびれを持つ器形で、胴部上半はＲＬとＬＲを交互施文し、胴部下半はＬＲ軸＋Ｌ２条左巻きの短めの原体を用いるが、付加条の巻き方で微妙なカーブを描出している。

その他の出土土器（第19図、図版15）　遺跡北縁部から出土した土器群をまとめた。55～56、59～64がそれぞれ同一個体で、他は単体破片である。54、55～56はループ文が施されたものであり、文様帯以外は縄巻（付加条）縄文である。57～65は縄巻縄文を施している破片である。その施文パターンはＡ、Ｂ各地点出土土器と同様であるのでここで詳述はしない。67、68は単節縄文を持つ破片である。67は口縁部破片であるが、ＬＲの縦位施文らしく、珍しい例と言えようか。68はＲＬ横位施文。66、69～72は沈線施文が見られるもの。半截竹管による施文が行われる。66はＬＲを地文として口縁部に縦位の短い沈線を、口唇部に同じ竹管の原体で刻目状の深い沈線が施されている。69～72は鋸歯文状の文様が描かれるものである。70、71は極小破片のためよく判らないが、69、72は水平な沈線帯の間に鋸歯文が施される。

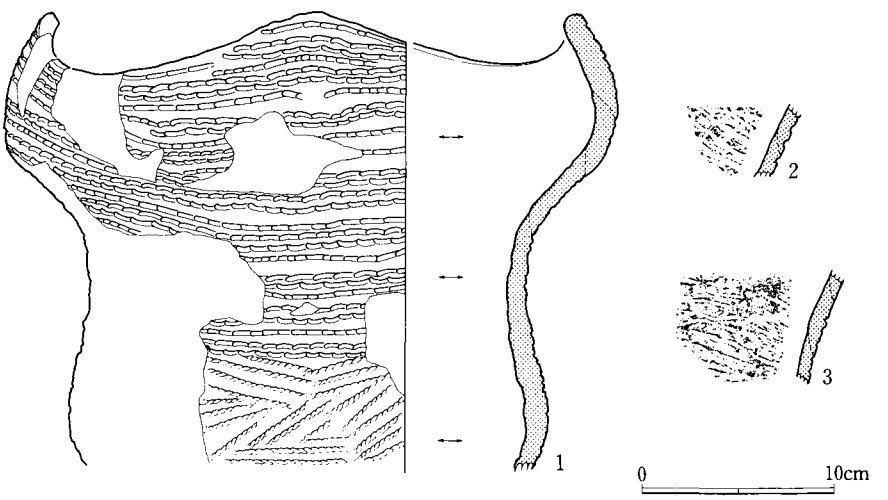


第19図　池花南遺跡北縁出土関山式土器（1/4）

③池花南遺跡出土黒浜式土器（第20図、図版16－1）

池花南遺跡南部、G7～H7区において2個体の黒浜式土器が出土している。量的に乏しく集中地点を形成しないが、2個体は比較的近接しており、共伴するものである可能性もある。

1はある程度まとまって出土した個体で底部こそ遺存しないものの、口縁部はおよそ半周するまで復元された。4単位の波状口縁をなす土器で口縁部は内湾する。口縁部から胴部中位、くびれ部までは半截竹管によるコンパス文と単純な一本の押引文を概ね交互に（部分的にはコンパス文が2本連続する）施文している。胴部下位は太いRの撚糸文で横位あるいは斜位施文



第20図　池花南遺跡出土黒浜式土器（1/4）

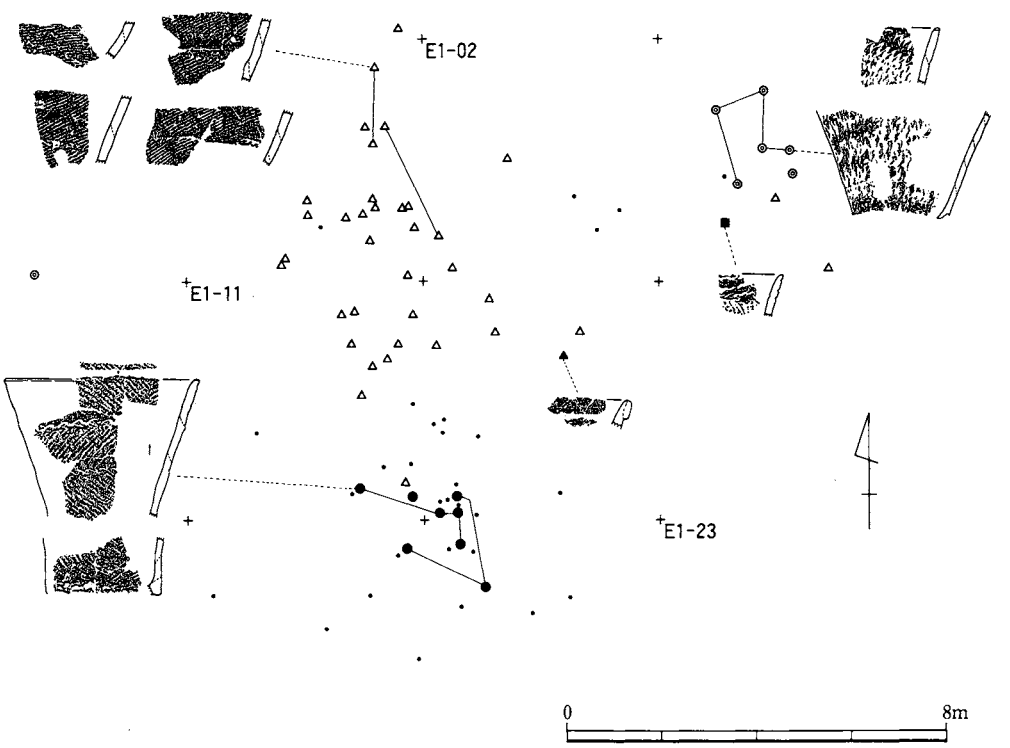
である。2、3は同一個体で、図示した僅か2片のみが抽出されたものである。施文原体は不詳、反撚ＲＲＬか。

④池花遺跡縄文前期後葉Ａ～Ｅ地点

池花遺跡では冒頭に述べたようにその北東部で浮島～興津式土器を主体とする遺物包含層が点在して検出されている。以下地点毎に出土状況を述べ、出土遺物は後に一括して記載する。

Ａ地点出土状況（第21図）　遺跡北端に位置する地点である。E1－03区からE1－21区にかけて分布し、範囲は東西、南北とも13m前後の規模を持つ。遺物点数は多くない。E1－11区東半付近に分布の中心があるが、とくに集中する程ではない。特徴的な単体破片を含めて、個体識別され後に掲載した個体数は5個体である。個体毎に小さくまとまる傾向を持って出土しており、接合関係は狭い範囲でしか認められていない。したがってまた他地点との接合関係及び個体共有関係はない。

Ｂ地点出土状況（第22図）　Ａ地点の南西にやや間隔を置いて、舌状に張り出した部分のほぼ中央に位置する地点である。D1－59、69区、E1－50、60区を中心とし、東西約21m、南北約18mの分布範囲を有する。分布密度は希薄ではないが、Ａ地点同様とくに集中する部分は指摘できない。識別され掲載した土器は単体破片含めて10個体であるが、個体の分布はＡ地点とは



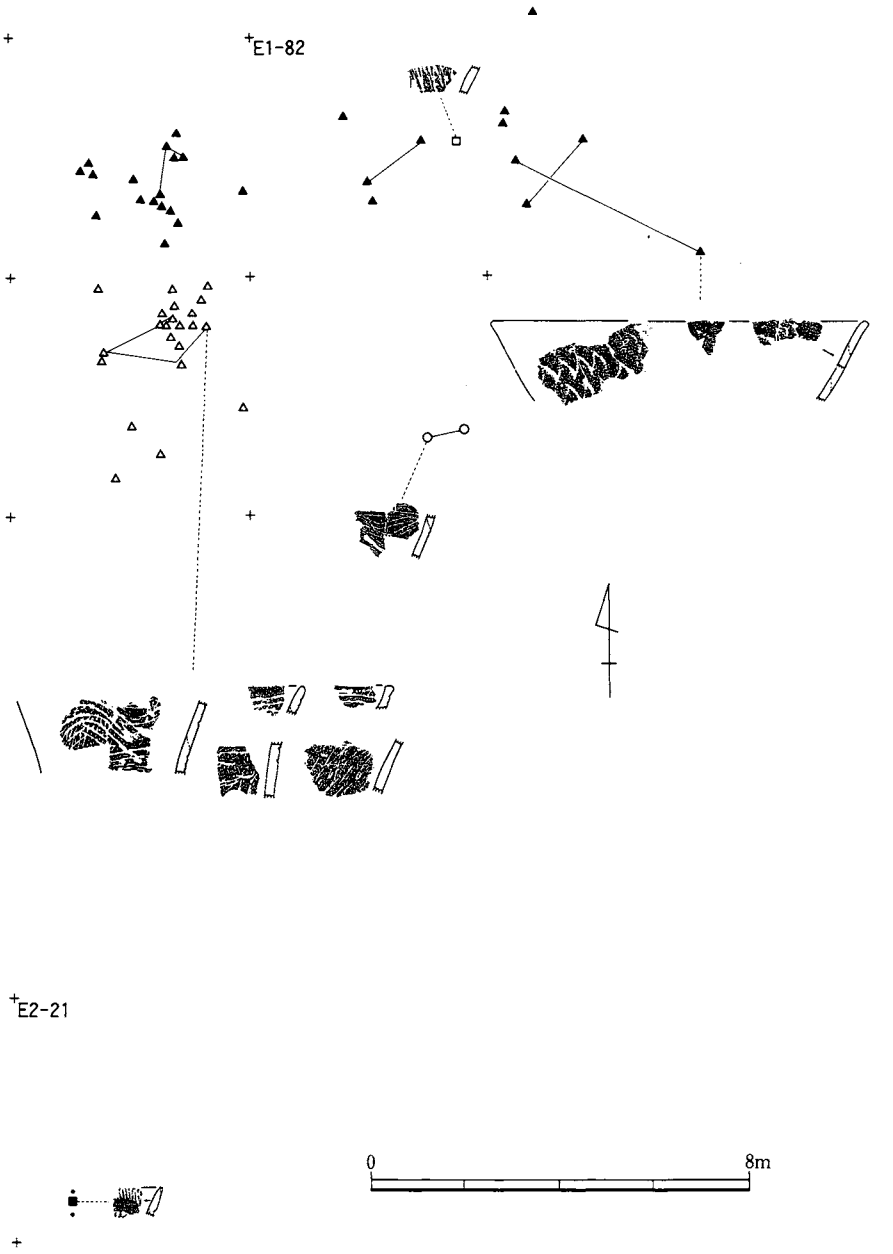
第21図　池花遺跡縄文前期後葉Ａ地点遺物出土状況（1/160）

第22図　池花遺跡縄文前期後葉Ｂ地点遺物出土状況（1/160）

やや異なり、全体に拡散する個体が多い傾向を持つ。それらのうち貝殻文を施す１個体はＣ地点にも分布する。ただそれはＢ地点南寄りとＣ地点北寄りで比較的近い位置関係ではある。

Ｃ地点出土状況（第23図）　Ｂ地点の南東に若干の間隔を置いて検出された地点である。Ａ地点からは南方にあたり、北に向かって舌状に張り出した部分の付け根に位置する。規模は当遺跡５地点のうち最も小さい。E1－81、91区にまとまった集中が見られたが、他は転々と散布するのみである。分布範囲は東西約13m、南北約7.5m を測る。第23図には E2－21区の遺物出土地点も掲載されているが、これはＤ地点との中間的な位置にあたるものである。当地点で識別され掲載した土器は４個体である。

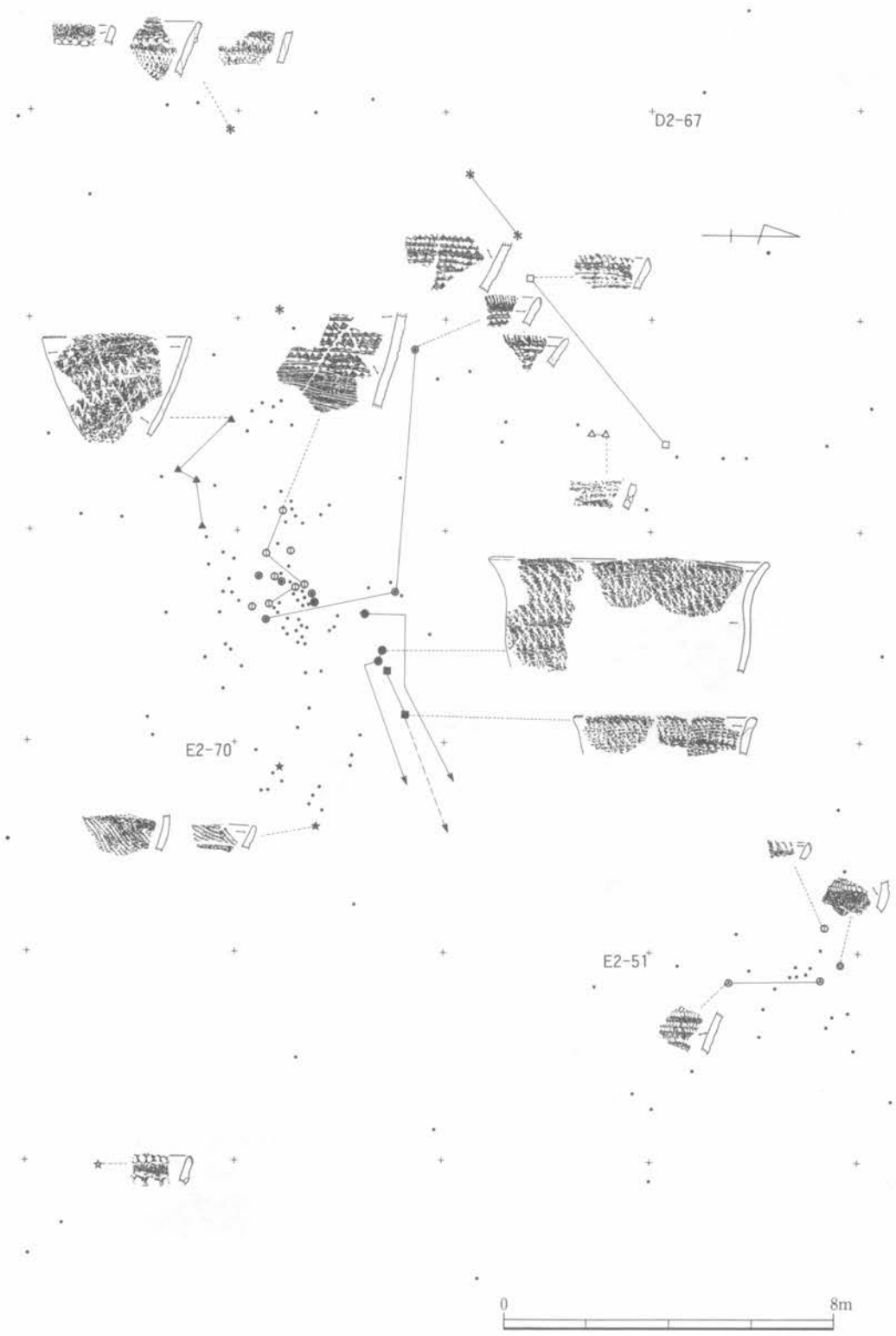
ここまでのＡ～Ｃ地点は先土器時代（池花遺跡第３文化層）及び縄文時代晩期終末の遺物包



第23図　池花遺跡縄文前期後葉C地点遺物出土状況（1/160）

含層と位置的にオーバーラップしていた。それぞれの文化層は表土層からソフトローム層まで遺物が包含されるものであり連続的に調査されたが、間層を挟むような層位的上下関係は勿論認められない。しかし概ね、縄文晩期はII層以上(その上位を中心とする)、縄文前期はII層下位を中心としてIII層上面まで、先土器時代はIII層を中心とする垂直分布を示した。

D地点出土状況（第24図）　A～C地点の南方、該期では最も内奥に位置する地点である。遺物分布はD2－68、69区を中心としており、とくにD2－69区に集中度が高い。またE2－41区

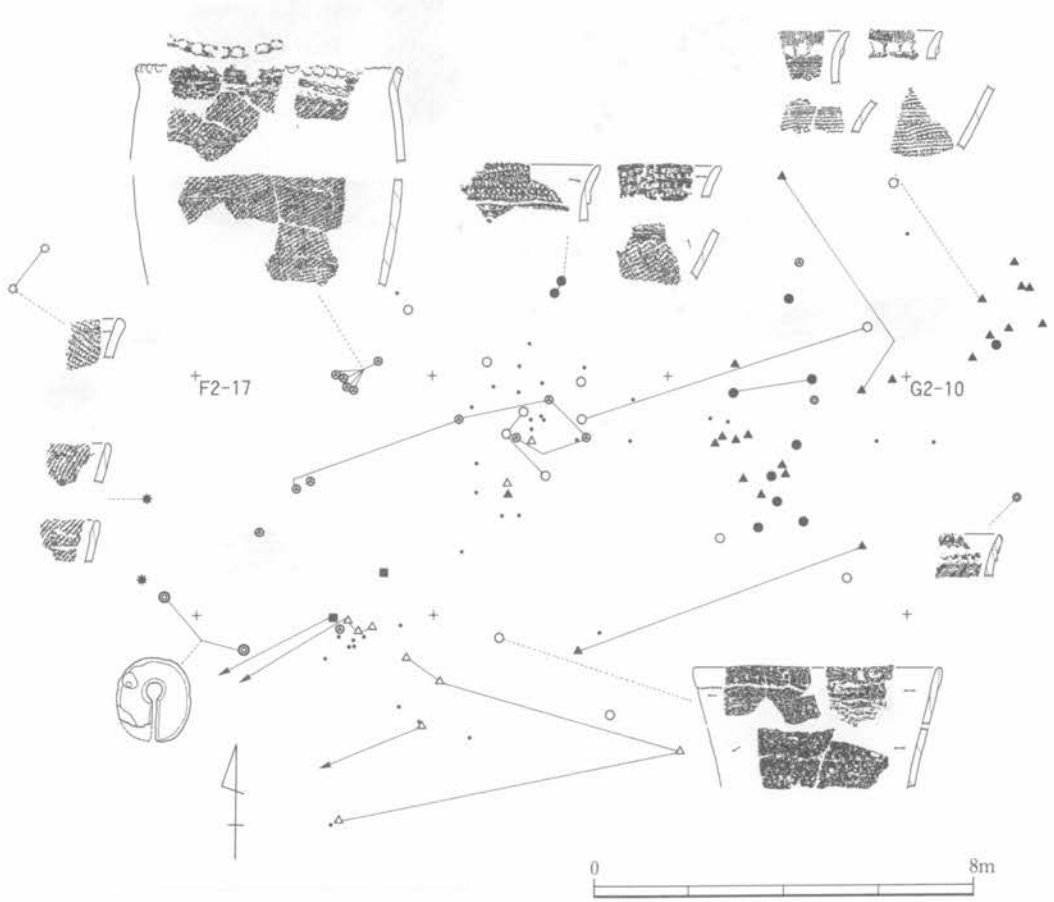


第24図　池花遺跡縄文前期後葉Ｄ地点遺物出土状況（1/160）

を中心としたところとE2－72区に若干の空隙を置いて分布する遺物がある。ここではそれらを含めてD地点と考えているが、その場合の遺物分布範囲は東西およそ28m、南北およそ21mで該期遺物出土地点中最大規模となる。また遺物点数も最も多い。個体識別され図示した土器は、単体破片を含めて12個体を数える。殆どは当地点を越えて分布することはないが、貝殻文を施す土器2個体が100m近く離れたE地点に接合関係を持つことは注目される。

E地点出土状況（第25図）　遺跡東端のF2～G2区、台地が張り出した突端に位置する。遺物は西南西から東北東に長く分布し、F2－27区、F2－18区、F2－19区に土器片のまとまる箇所がある。分布範囲は東西およそ22m、南北およそ13mである。個体の分散、接合関係は地点全体に広がる傾向がある。個体識別され図示された土器は9個体ある。うち2個体はD地点と接合関係を持つものである。この場合、出土した部位に選択性は認められず、とくに意識的に分割廃棄された遺物かどうかは判らない。また当地点西端近くで土製玦状耳飾が2点に割れて出土している。

なおA～E地点で出土した遺物総点数は676点である。



第25図　池花遺跡縄文前期後葉E地点遺物出土状況（1/160）

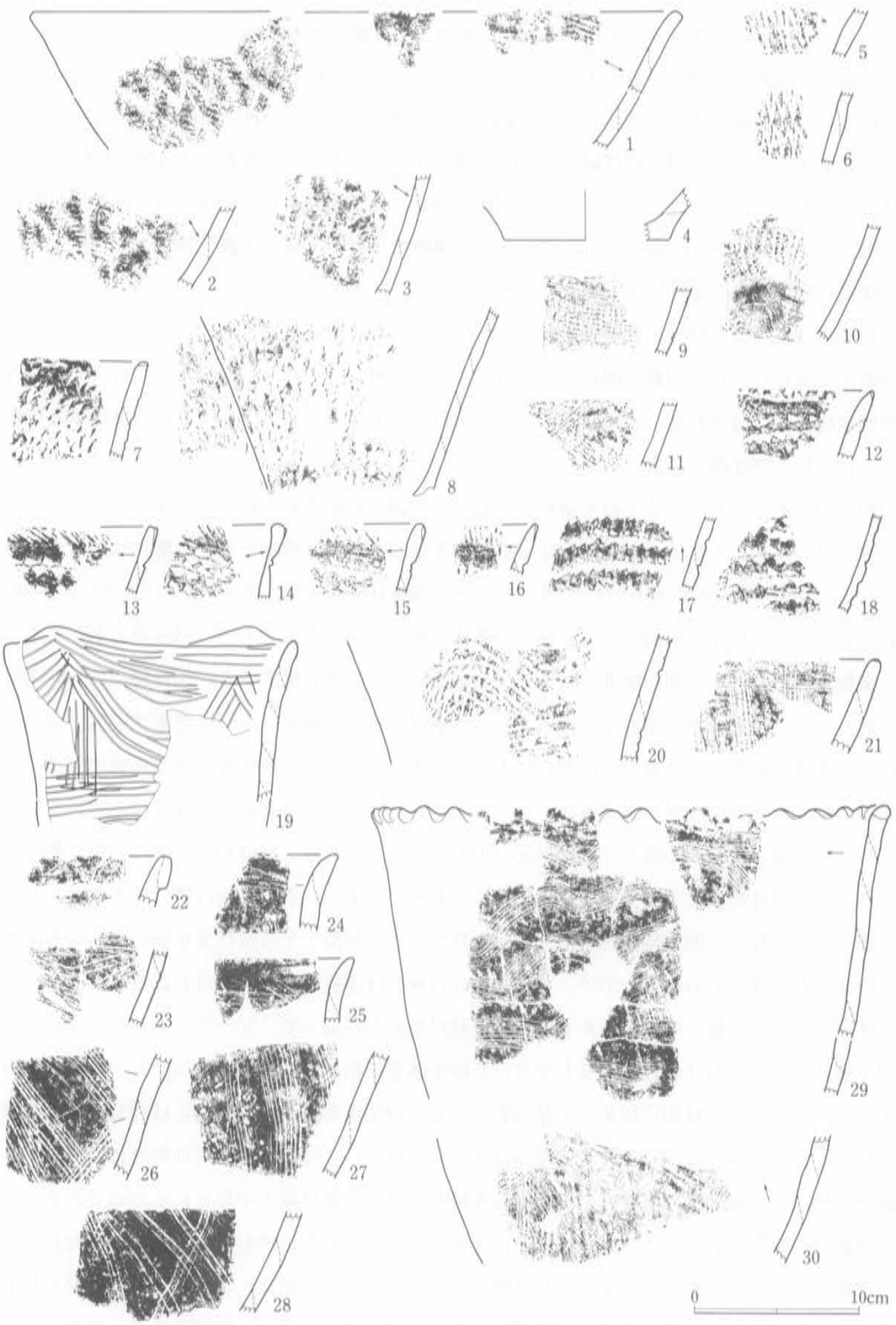
A～C地点出土土器（第26図～第27図、図版18）　便宜上A～C地点出土土器とD、E地点出土土器に別けて記述する。1～42がA～C地点出土土器である。

1～8に貝殻文を施す土器を集めた。1～4、5～6がそれぞれ同一個体。1～4の個体は口縁部が大きく開く器形を持つ。貝殻rockingの間隔は広めでかつ押引気味となっている。5～6の個体、7、8の個体も貝殻rockingを施すが、口縁部7と底部近く8は同一個体の可能性があるものの、両者のrockingの向きが逆となっており問題がある。9～11の個体は貝殻文の別タイプで興津貝塚で優勢なものである。当遺跡では唯一の例。半截竹管による沈線2単位の間に貝殻腹縁による押引文を施している。

12～18に三角文を持つ土器を集めた。うち13～15が同一個体である。12、13～15、16が口縁部破片であるが、12が口縁端部にのみ刻目が入るのに対して、13～15、16の刻目は口端から外面側に沈線状に施される。また13～15のそれが斜位であるのに対し、16のそれはほぼ垂直である。17、18は胴部破片の例。

19～30に条線を施文する土器を集めた。24～28、29～30がそれぞれ同一個体である。一口に条線と言っても、それには半截竹管による沈線を重ねるものと数本一単位の櫛歯状条痕に別けられる。半截竹管を用いるものには19、20、23が、櫛歯状条痕を用いるものには21、23、24～28、29～30がある。19は比較的珍しい2単位の波状口縁を呈する土器である。口縁部と胴部に水平な条線帯があり、その間を連弧文モチーフと垂直線で文様帯を構成する。20は縄文(原体不詳)を地文として持ち、水平条線帯＋波状文という構成。21は口縁部に水平な櫛歯状条痕、以下縦位の同条痕を施す。22は複合口縁を持つ土器である。この例は半截竹管による施文ではなく、先端の鋭い工具で一本ずつ施文されるため、条線を施す土器には含めないほうがよいかも知れない。折り返し部もその直下にも鋸歯文（山形文）が見られる。23は19または20と似た例であろう。24～28は櫛歯状条痕を全面に施すようであるが、そこにあまり規則性は窺えない。対して29～30は同様に全面が櫛歯状条痕で埋められながら、胴部上半は波状文が描かれている。また口縁部が平縁のものが多い中で、この個体の口縁部は連続した押捺が行われる。

縄文が主たる文様となっているものを31～42に集めた。32～35、36～37、39～42がそれぞれ同一個体である。31は口縁部にＲＬを巻いた絡条体を回転させ、その下にはＲＬの横位施文を加える。32～35は口縁部に数条の半截竹管による平行沈線を持つが、地文には縄文が全面に施される。しかし残念ながらその施文原体は明らかではない。36～37は底部は垂直に立ち上がり胴部下位から口縁部まで直線的に開く器形を持ち、外面全面に縄文が見られるものである。口縁端部と口縁部はＲＬでこの原体は以下に連続しない。その下にはＬＲとＲＬを結び合わせた羽状縄文を施文し、またこの上端にも結節を作り結目縄文（綾絡文）とする。38はＬＲとＲＬを交互に施文する。口端の刻目は指頭押捺である。39～42はいずれも胴部破片で、単純にＬＲの横位施文のみ。



第26図　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(1)（1/4）

D、E地点出土土器（第27図～第28図、図版19）　43～86がD、E地点出土土器である。

43～46、68～70は貝殻文を持つ土器で、44～46、69～70がそれぞれ同一個体である。43は比較的直線的に開く深鉢で、体部全面に貝殻文を施し、口縁端には刻目を連続させている。刻みの工具はやはり貝殻腹縁か。44～46は複合口縁を有する土器である。口端には刻目はないが、折り返し部の下端に指頭による押捺を連続させている。以下は貝殻文。68、69～70は口縁部が緩やかに外反するものである。この2個体は施文具がきわめて類似し、焼成、色調ともに近似するため一見同一個体に見えるが、口径と68の口端に刻目が加えられる点が異なる。またこの2個体は共にD、E両地点にまたがって出土したものである。

47～48は同一個体で、44～46に類似した複合口縁を有する土器の破片である。口端と折り返し部下端に指頭による押捺を施している。文様は不明。

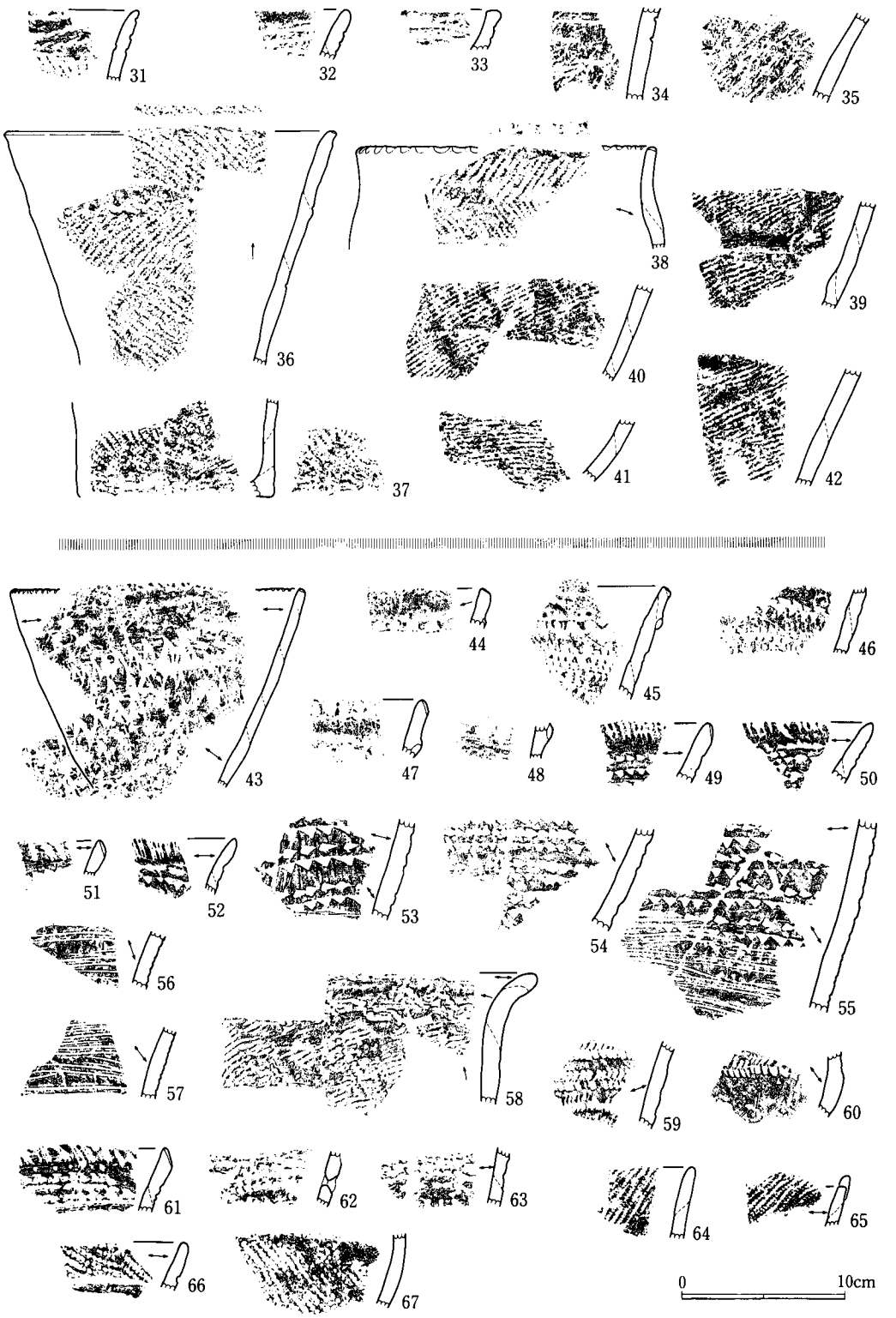
49～57、59～63には三角文またはそれに近い刺突文様を持つ土器を集めた。53及び55～57、59～60、61～63がそれぞれ同一個体である。49～52は三角文が施される口縁部破片である。これらのうち49、50、52が同一個体の可能性があり、また54はその個体の胴部破片である可能性がある。同時に51は53及び55～57と同一個体の可能性がある。後者の胴部下位には半截竹管を用いた条線が施される。これらはいずれもD地点から出土したものであるが、上記の可能性が肯定されれば、三角文の大きさや口唇部の刻目に若干の違いを持つきわめて類似した2個体が存在したことになる。59～60は共に胴部破片で全貌が不明であるが、篦状工具による交互の押引で綾杉文を形成している。61～63は口縁部の形状が三角文を持つ土器と同様であるが、施文は棒状工具の刺突または押引である。

押引文を持つものは他にも2個体ある。71～72は幅の広い複合口縁を有し、半截竹管による刺突乃至押引が全面に施されている。73～76は口縁部に櫛歯状工具を用いた条線帯があり、その下に篦状工具の刺突が加えられる。また以下半截竹管による横位の条線帯、棒状工具による横位の押引文と続く。

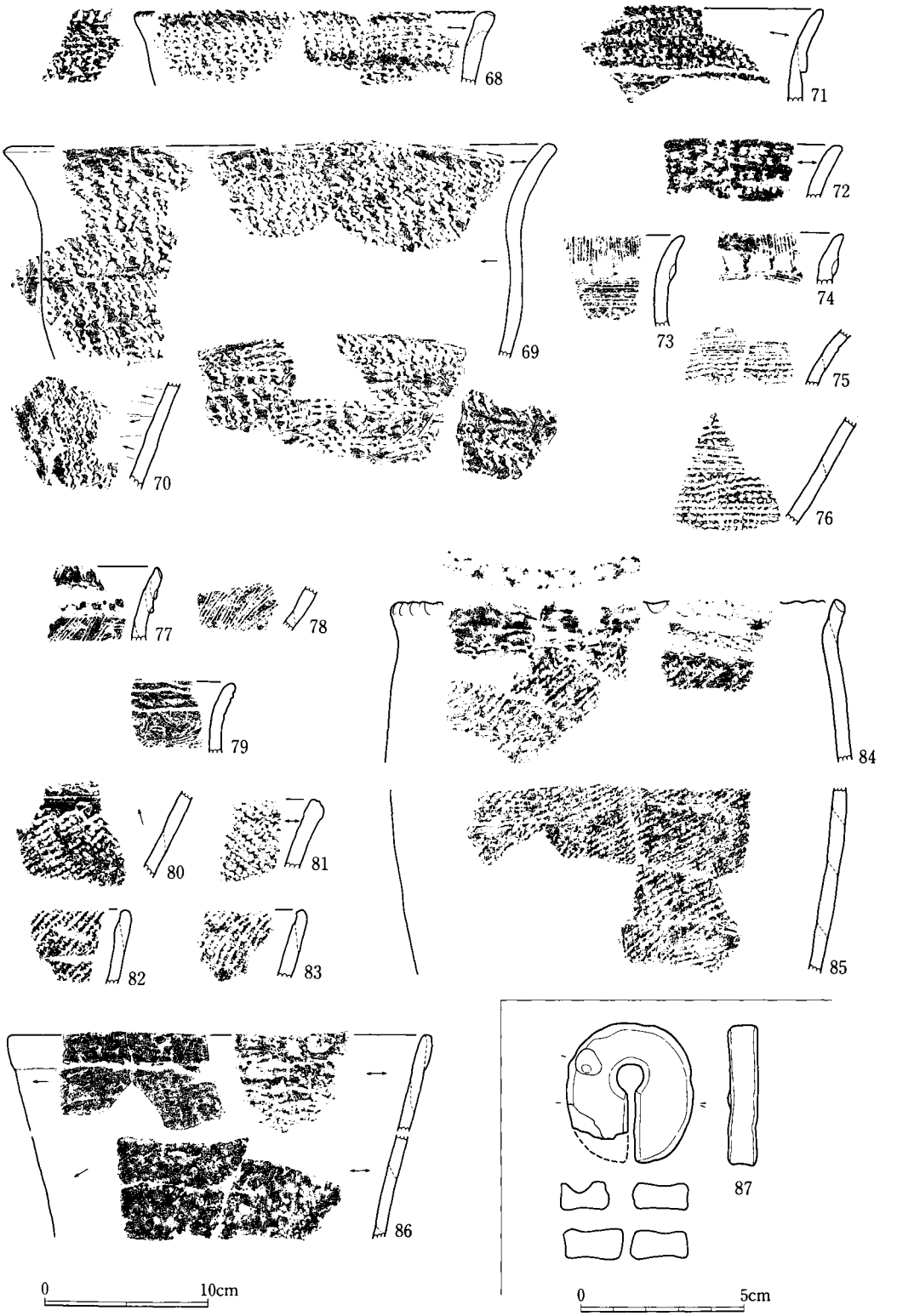
器面全体に条線を施文する土器の存在は明確ではない。中では77～78の個体がそれに該当する可能性がある。折り返し部下端に棒状工具による刻目を有する二段の複合口縁を持ち、半截竹管を用いた条線を施す。

縄文施文が主体となる土器には58、64～65、66～67、79、80、81、82～83、84～85の各個体がある。うち79は地文には無節Lが、口縁部にはLの撚糸文が横位に施され、他の土器とは別タイプのものと言える。また58は無節縄文を持つが、その他はいずれも単節縄文を結び目縄文（綾絡文）が認められるものもある。66口縁部に沈線が、84口唇部に刻目がある以外装飾性に乏しい。86は複合口縁を有するものであるが、全くの無文の個体である。

以上記載した土器群のなかで58、79はやや離れた出土位置を持つものであるが、便宜上D、E地点出土土器に含めた。前者はE2－35、42区、後者はF2－31区からの出土。



第27図　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(2)（1/4）



第28図　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(3)・玦状耳飾（1/2）

なおこの時期の土器の断面観察の結果では、口縁部、底部の一部を除いてほぼ例外なく外傾接合となっており、顕著な現象として指摘することができる。

玦状耳飾（第28図87）　E地点から出土した土製品である。2片接合で一部を欠損するがほぼ全貌を見ることができる。最大長42.0mm、最大幅38.5mm、最大厚8.6mm、重量15.7gを測る。

⑤池花南遺跡G5・H5区縄文前期後葉出土地点

出土状況（第29図）　池花南遺跡においても縄文前期後葉の遺物出土地点が検出されている。位置は前記池花遺跡E地点から直線距離にして150m余り南東の台地縁辺、様々な時期の遺物が検出されている古墳群下層である。全体を見るとSX－04周辺とSX－03周辺の2地点に分かれるが、古墳造営時の削平を考慮すると実際にはより広範囲に遺物包含層が展開していたことも考えられる。第29図に示したのは6個体分の出土状況であるが、識別された個体数は、単体破片を含めて20個体あり、過半が古墳封土内、同周溝内の出土になる。遺物総点数は166点。

出土遺物（第30図、図版16－2、17－1）　42片を図示する。1～13がSX－04周辺出土、14～42がSX－03周辺出土の土器である。

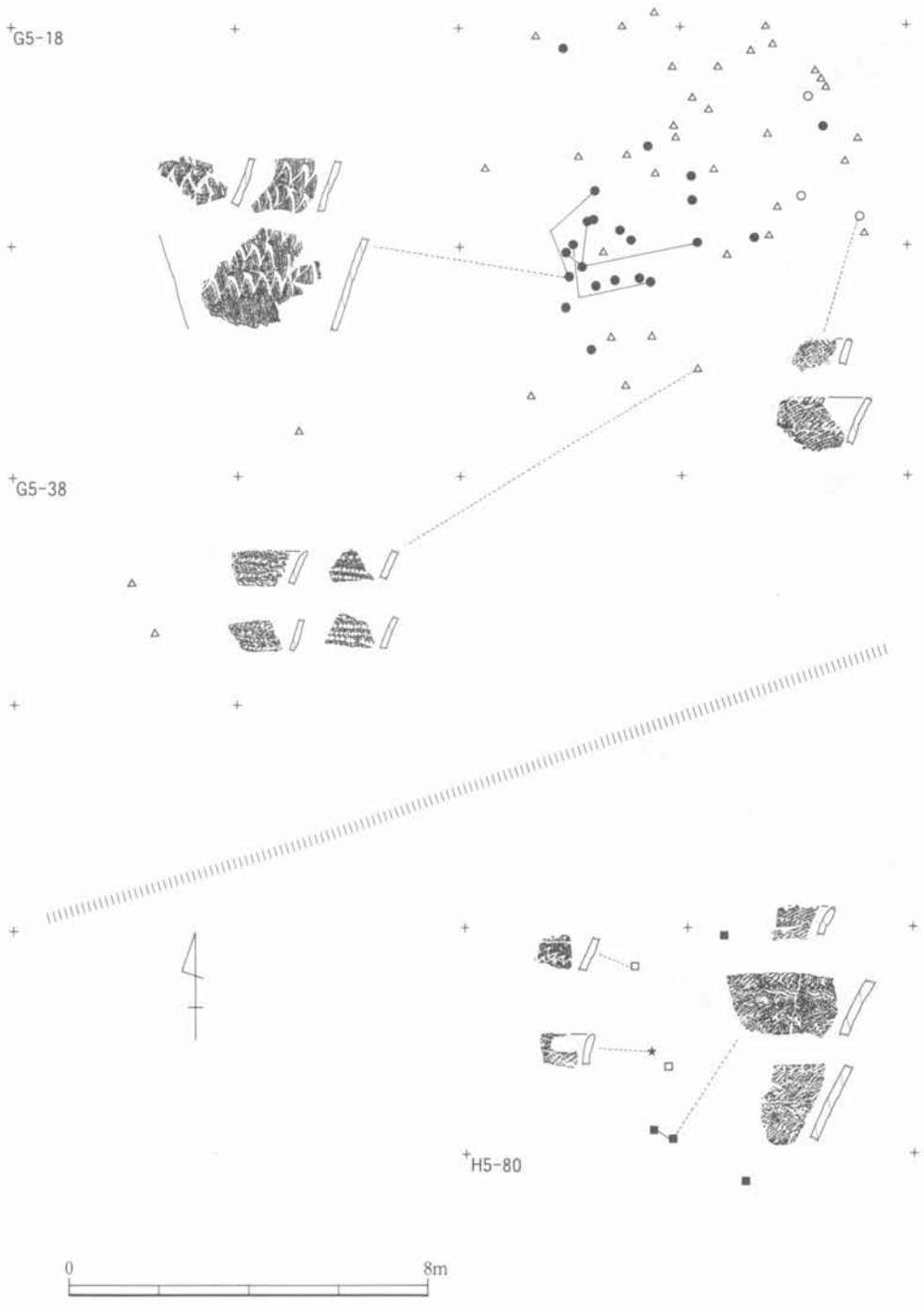
1～3、4、29～31がそれぞれ同一個体で貝殻文を施文する一群である。1～3は底部から口縁部まで直線的に開く器形らしい。4は粗縁でrockingの幅が非常に狭い。5～10が同一個体で三角文を施文するものである。やはり単純な器形を呈するようである。

14は大木系と考えられる土器である。口縁部は一旦開いてから内湾して終わり、部分的に小波状を呈している。頸部は強くくびれ、胴部はまた膨らむが、胴径は口径を超えることはあるまい。頸部以下には沈線による渦巻文他の文様が描かれる。大木5式並行か。

15～17、18～20の2個体は地文こそ違えど同タイプの土器と思われる。15～17はいずれも胴部破片のみで器形が窺えないのが残念であるが、撚糸文（撚り方向不詳）地文で15に竹管の刺突文が認められる。おそらく縦位に連続するであろう。18～20は僅かに外反しながら開く大きな波状口縁を有するもので、縄文RLを地文とし、口縁に4列の半截竹管押引文、波頂部下に縦位に連続する竹管刺突を施している。なお25は同様の器形を持つ土器の波頂部と思われるが、数条の沈線が見える。

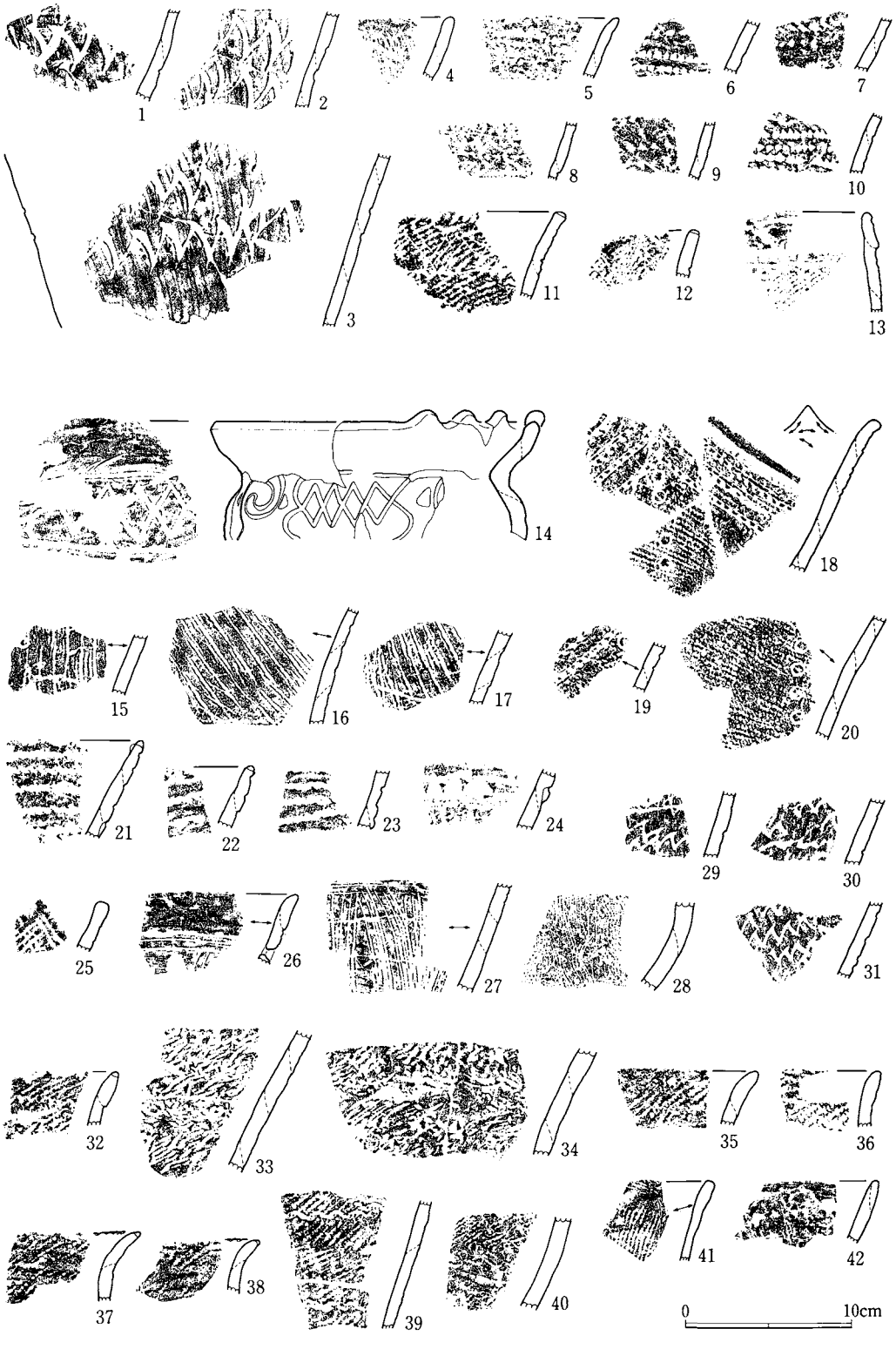
撚糸文は13、21～24の2個体にも認められる。21～24は口端に指頭押捺を施し、幅広い複合口縁を持つが、口縁部に撚糸文Lを横位に施文している。また折り返し部下端は三角形に刻まれている。13も複合口縁を持つ土器で折り返し部からその直下にかけて撚糸文による鋸歯状の文様が描かれる。その口縁部文様帯の下は無節縄文Lが横位施文される。同じ撚紐によるものであろう。

条線が施されるものに26～27、28の2個体がある。26～27は口縁折り返し部を無文とし、以



第29図　池花南遺跡G5、H5区縄文前期後葉遺物出土状況（1/160）

下３本単位の条線を施文するものである。他の土器は縄文施文を主体とするもので、11～12、32～34、37～39がそれぞれ同一個体。うち11～12は口縁部に細い沈線で鋸歯文を描く。縄文は一般にＬＲで、所々に横位の結目縄文（綾絡文）が認められるが、32～34の個体は口縁部のみ



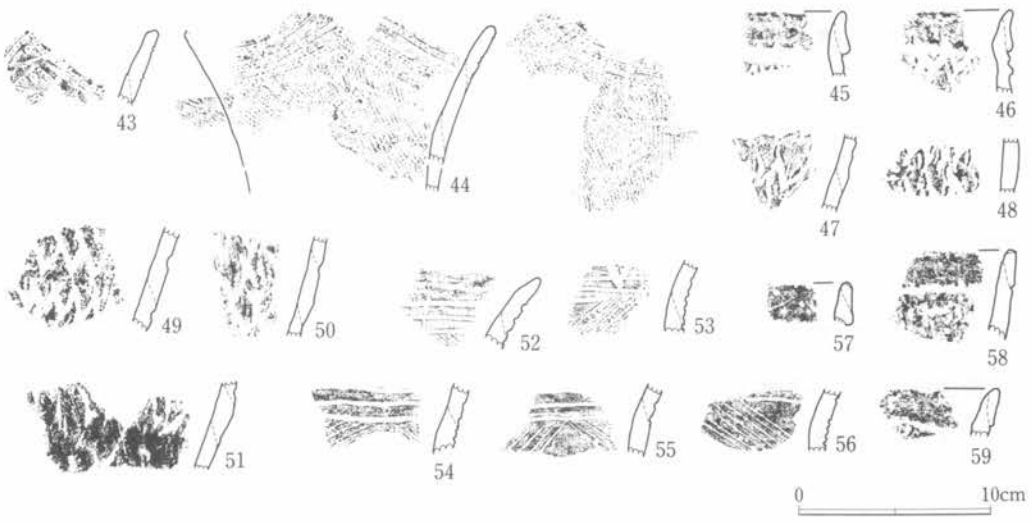
第30図　池花南遺跡出土縄文前期後葉の土器(1)（1/4）

無節Ｌを施文しながら、以下反撚ＬＬを施文する。器形はいずれも単純、簡素であるが、口端には刻目を持つもの（11～12：沈線と同じ篦、32～34：細い棒状工具、37～39：縄）がある。

⑥池花南遺跡南半部出土縄文前期後葉の土器（第31図、図版17－１）

池花南遺跡のＦ７～Ｇ７区においても、縄文前期後葉の土器は台地縁辺に沿って点々と出土している。ただここでは明確な集中地点は形成されていなかった。

５個体の土器を示す。43～44、45～48、49～51、52～56、57～59がそれぞれ同一個体。43～44は前掲18～20と同種の土器でより小型のものである。口縁部には３条の半截竹管による押引文が引かれ、波頂部の下には竹管の刺突が縦位に連続して施文される。地文はＲＬである。該期の粗製の類いに入る土器に用いられる縄文は左撚りが圧倒的であるのにこの種の「諸磯式」系土器にはＲＬが用いられるのは興味深い。45～48、49～51はいずれも貝殻文を持つもので、拓影では見分けがつかないが別個体である。45～48は比較的幅の狭い折り返し口縁を持つ。52～56は沈線＋条線施文の個体。口縁部に３条の水平な沈線を引き、その下に櫛歯状工具で鋸歯状の文様が描かれるらしい。57～59は折り返し口縁を持つ無文の土器。

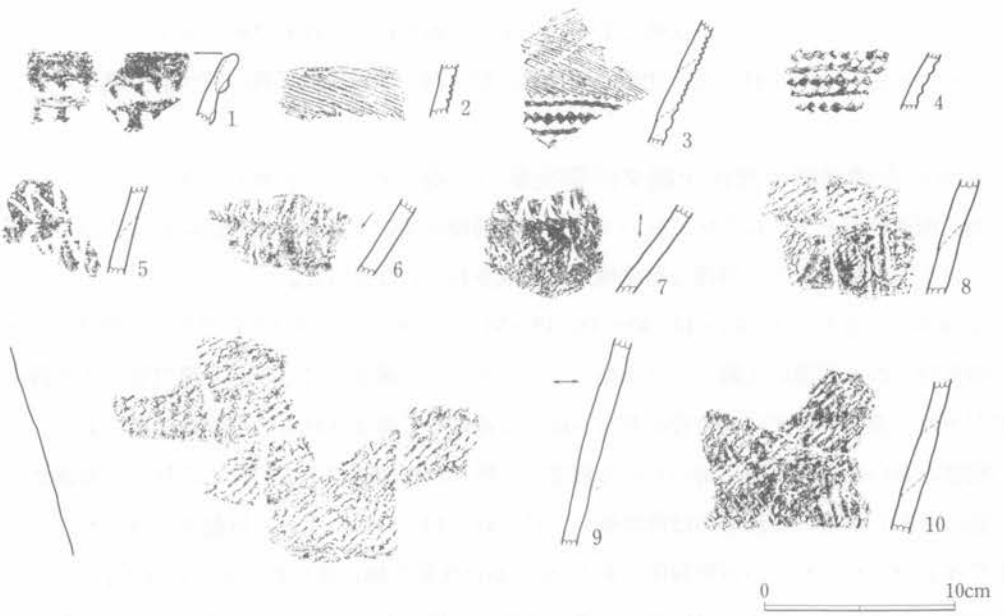


第31図　池花南遺跡出土縄文前期後葉の土器(2)（1/4）

⑦大割遺跡出土縄文前期後葉の土器（第32図、図版17－２）

大割遺跡でも微量ながら縄文前期後葉の土器が出土している。１～４、５～10の２個体があり、前者は遺跡東端のＧ３区、後者はＥ４区から出土した。

１～４は２段（以上）の複合口縁を有するものである。折り返し部下端には指頭押捺が施される。以下半截竹管による羽状条線帯、三角文の文様帯と明確な文様帯区分がなされている。



第32図　大割遺跡出土縄文前期後葉の土器（1/4）

5～10は貝殻文を持つ土器であるが、胴部下半は無節Lの横位施文が行われている。

なお池花遺跡の集中地点外でも1点の同時期の土器片（第33図）が採集されている。

第33図　池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(4)（1/4）

⑧縄文時代前期のまとめ

前期中葉　該期の遺構は、池花南遺跡北半部において住居跡2棟及びそれに付随する周辺の遺物包含層（A地点・B地点）が検出された。時期は関山期新段階としたが、2棟の住居跡相互の関係はどうであろうか。住居跡を含むA地点出土遺物とB地点出土遺物の間には接合関係のみならず個体共有関係も認められない。しかしながらこれは遺構の相対的な独立性を示すのみで、土器の様相からすれば2地点間に時期差があるとは考え難く、総体として同時に残された小集落跡（そして居住空間廃絶後の廃棄空間）と考えておく。

前期中葉の出土遺物は土器だけである。A地点・B地点出土土器を一括資料として、その土器組成は次のようになる。

a．器面全体が縄文施文の大型深鉢。A地点12～13個体（以上）、B地点3個体。

b．ループ文、コンパス文を施す鉢。A地点4個体、B地点2個体。

c．沈線（竹管）文様を加える鉢または浅鉢。A地点2～3個体。B地点は土器個体数が

少ないためか存在しなかった。

aからcに至るにしたがって装飾性が高くなり、また組成の中で、少数の限定された存在となっていく。それぞれは器形も異なり、土器群中の諸機能を体現しているものであろう。当遺跡における前期中葉の遺構、包含層はその前後の時期と重複しておらず、ここで抽出された資料は、精製度の高い土器のバラエティーに欠けるが、良好な一括性を有するものと解したい。

前期後葉　該期については明確な遺構の存在は認められなかったが、池花遺跡と池花南遺跡に多くの遺物出土地点を持つ。ここでの問題は、遺跡の形成が前期中葉のように単純に理解できないことである。池花遺跡の場合、後世の遺物包含層の重複はあるものの、前期遺物包含層は大規模な削平を受けていない。そこでまず、池花遺跡及びその出土遺物を検討したい。

池花遺跡で述べた5地点のうち、包含層形成の同時性が比較的明解であるのがD地点及びE地点である。その間は100m近く離れているが2個体の土器について接合関係、個体共有関係が見られる。また各個体の分布状況はそれぞれの地点の広範囲を占めて散布するものが多く、両地点はほぼ同時性のある生活空間（→廃棄空間）である蓋然性が高いと指摘することができる。一方A～C地点の場合は、各個体の分布が狭い範囲に留まる例が多く、それぞれの地点相互の関係は解釈が容易でない側面がある。しかしこの場合も各地点毎の同時性、一括性は認められてよいように思われる。またB地点とC地点との間には1個体ながら個体共有関係があり、したがってD、E地点のような関係が成立する可能性がある。ここで敢えて一歩進み、B、C地点（A地点出土遺物も参考とする）とD、E地点の出土資料をそれぞれ一括性のものと仮定して両者を比較してみたい。

A～C地点出土土器の基本組成は次のようになる。

a．貝殻文の土器（rocking・押引）

b．三角文の土器

c．条線施文の土器（半截竹管・櫛歯状）

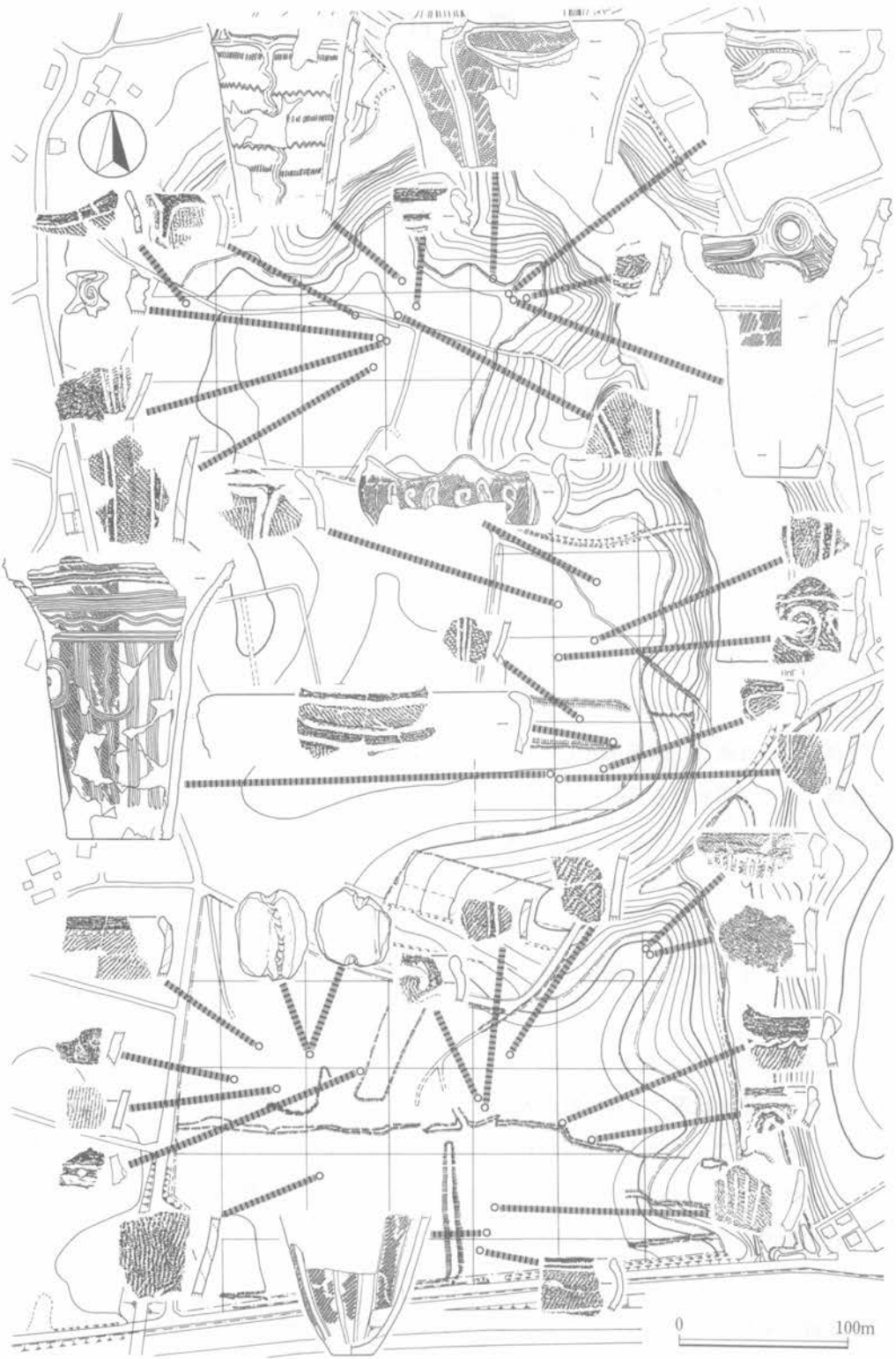
d．口縁部撚糸文施文の土器

e．縄文施文の土器

これにD・E地点出土土器の組成を比較すると、まずaの貝殻押引のものとcの櫛歯状施文具のものが欠落することが解る。またD・E地点に独自に含まれるものとして無文の土器がある。組成以外の特徴としては、折り返し状複合口縁がD・E地点に目立つ程度であろうか。ここでD・E地点に欠落するとした貝殻押引と櫛歯状条線は、まさしく興津式土器の特徴そのものであり、換言すればA～C地点に新しい要素が含まれていることになる。また複合口縁は古い要素と考えることもできる。したがってD・E地点とA～C地点は、隔絶的ではないが前者から後者への時間差を想定することができる。前者を浮島期の終末に、後者を興津期に比定すべきであろうか。

池花南遺跡の場合はその北半部の資料が比較的まとまっているが、古墳群下層を分布域としていたため、本来の包含層が充分な状態で把握できない。しかも出土土器群には新旧の要素が混在しており、2時期に亙って占地された可能性もあるため、ここでは分析の対象とはできない。

いずれにしても当遺跡群では、浮島期後半以降しばらくは小集団の一時的な占地が度々行われたと考えることができ、2～3単位の遺物集中を地点を変えながら残したのであろう。



第34図　縄文時代中期の内黒田（1/4,000）

5．縄文時代中期

①概観（第34図）

今回報告する池花、池花南、大割の3遺跡とも縄文時代中期の遺物を出土している。対岸に所在した千代田遺跡群Ⅰ、Ⅱ区において加曽利E期の住居跡及び遺物包含層が報告されているのと対応するかのようである。時期は中期初頭の土器と思われるものから加曽利E式土器までがあるが、多くは加曽利E式土器である。それらの殆どは土器が個体毎に点々と散布するに過ぎず、遺構を含めまとまった遺物包含層を形成してはいなかった。唯一の例外と言えるのは池花遺跡のF1、F2区で、加曽利E式土器4個体が比較的近接して検出されていることであるが、それとて実際に同時期の遺物として把握されるのは2個体のみで、時期の異なる遺物が偶然隣接していたに過ぎない。その中で陥穴状土坑SK－01のほぼ上面に検出された加曽利EⅢ式土器がある。この事実のみを以て遺構の年代を決定することはできず、ここでは一応池花遺跡SK－01を縄文時代中期のものと断定しないで、後に他の時期不明の遺構と併せて記述することとする。以下各遺跡毎に出土土器及び出土状況を述べる。

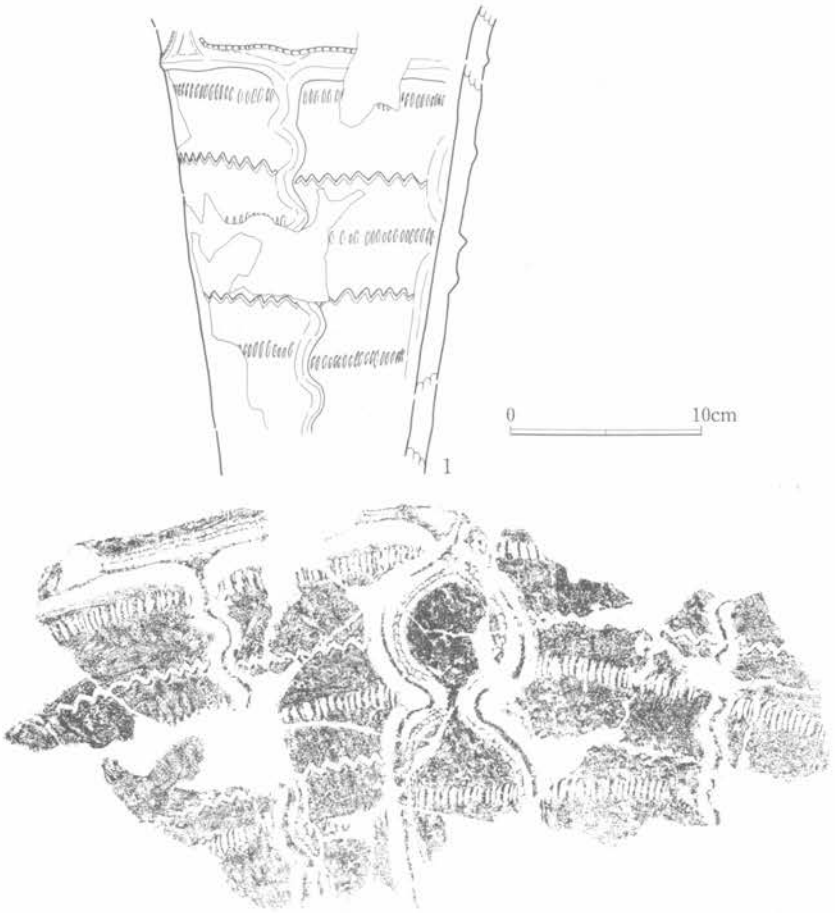
②池花遺跡出土阿玉台式土器（第35図、図版20－3）

池花遺跡E1区において阿玉台式土器が1個体だけ出土している（1）。出土破片の殆どすべてが接合し、口縁部及び底部を欠失するが、胴部はほぼ全周近くまで接合する。胴部の地には貝殻腹縁によると思われる爪形文と細い竹管あるいは棒状工具に山形文を交互に施す。口縁部文様帯と胴部文様帯を区切ると思われる粘土紐貼り付けによる隆帯があり、また隆帯は4箇所で胴部に垂下するが、波状に垂下するものと円弧を描いた後にX字状に垂下させるものを2単位ずつ交互に貼り付けている。口縁部文様帯の隆帯内側、X字状垂下隆帯の内側には竹管あるいは棒状工具による押引文を施す。阿玉台1b式土器か。

③池花遺跡出土加曽利E式土器

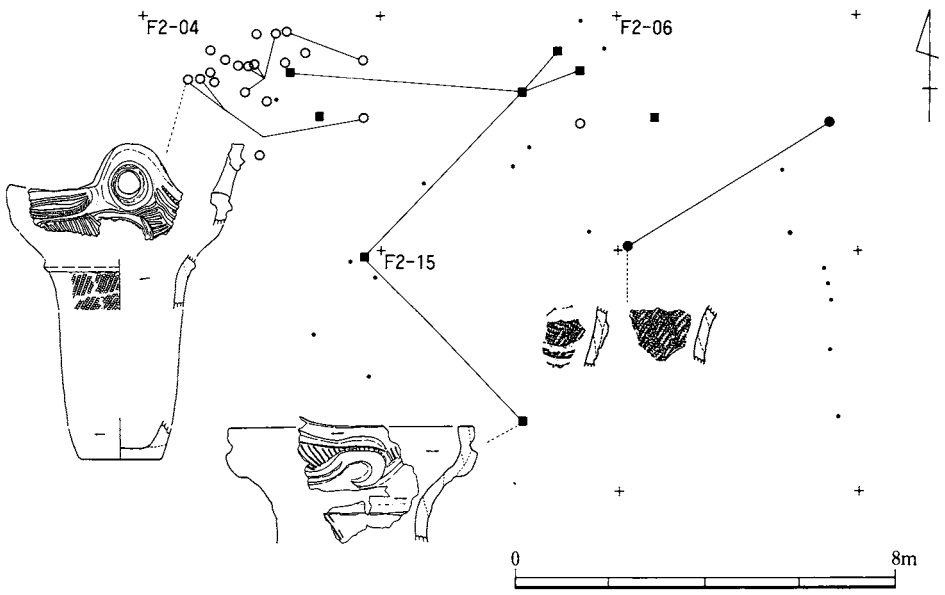
F1、F2区出土状況　土器は概ね散発的に出土しているが、遺跡東端の張り出し部分に当たるF1～F2区では4個体の加曽利E式土器がややまとまって出土している。1個体はF1－72～82区に検出されたSK－01（後述）の検出面から出土した（12）他、F2－04区から16区にかけて比較的集中して出土した（第36図）。出土点数は50点であるが、その中から3個体を識別し、図示した（2、3、7～8）。

出土土器（第37図、図版21）　2、3はF2区から隣接して検出されたものである。いずれも断片的にしか遺存しない。2は円環状の一対の把手を有し、隆帯と沈線、押引文を組み合わせて口縁部文様帯を構成し、頸部下には一条の隆帯、以下胴部はRLの縦位施文となる。3も



第35図　池花遺跡出土縄文時代中期の土器(1)（1/4）

基本的には２に類似したものと思われるが、頸部無文部の存在が確認される。共に加曽利ＥⅠ式土器。４～５も２、３に隣接して出土した破片であるが、時期はやや新しく比定されよう。６～８は同一個体と考えられるもので、D2－59及びE2－50区（４、６）とD2－88区（５）の２地点から出土している。４は橋状把手、５は胴部、６は底部直上で口縁部、底部と胴部は分割して廃棄されたものか。縄文は複節ＬＲＬを縦位施文する。加曽利ＥⅡ式土器。９はE3－13区出土の口縁部小片。10～11は同一個体で４～６の個体と隣接して検出されたもの。底部に網代痕。垂下沈線間に短い沈線が断続的に施される。４～６と同時期か。12は前述のようにSK－01上面から出土したものである。口縁部は強く内湾し、沈線区画内はＲＬ横位施文。口縁部文様帯直下から胴部文様が始まり、沈線区画内ＲＬ縦位施文、区画間は丁寧に研磨される。加曽利ＥⅢ式土器。13～14は同一個体でＤ２区とＥ２区に離れて出土した。口縁部文様帯の消失した段階のものであろう。区画内はＬＲＬを施文するが、その方向は斜位で胴部の縄文施文原則もまた崩れている。13には内外面に赤彩の痕跡が顕著に残るが、14では観察できなかった。加



第36図　池花遺跡Ｆ2区加曽利Ｅ式土器出土状況（1/160）

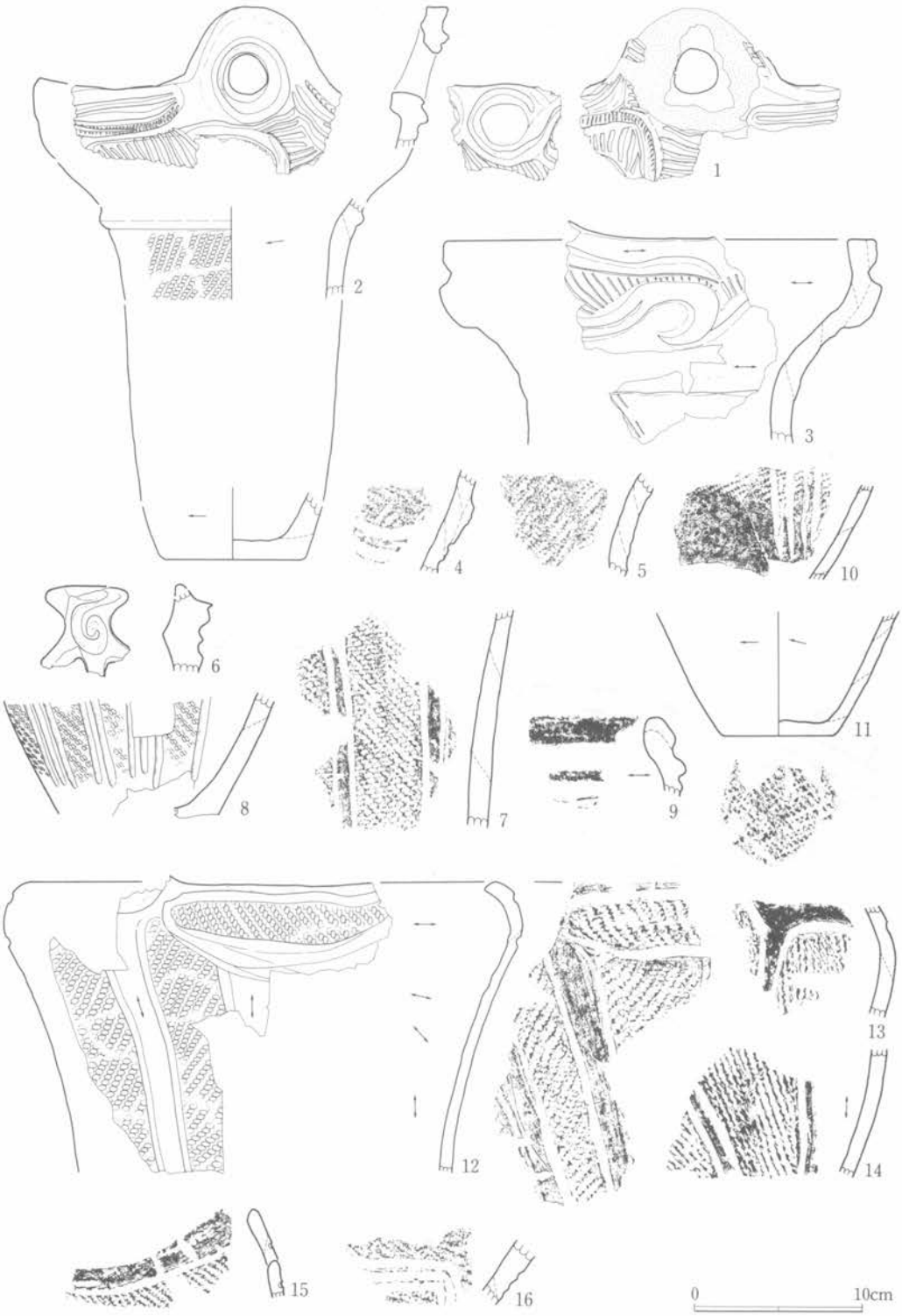
曽利ＥIV式土器としておく。15は遺跡西部のＢ２区で出土したもので、波状口縁を持ち、口縁部に沈線をそしてその沈線内に連続的な円形刺突を施す。16は表面採集品。

④池花南遺跡加曽利Ｅ式土器（第38図、第39図、図版22）

池花南遺跡では縄文時代中期の遺物が集中的に出土した地点はない。出土遺物はすべて加曽利Ｅ式土器であった。以下個体毎に記述する。

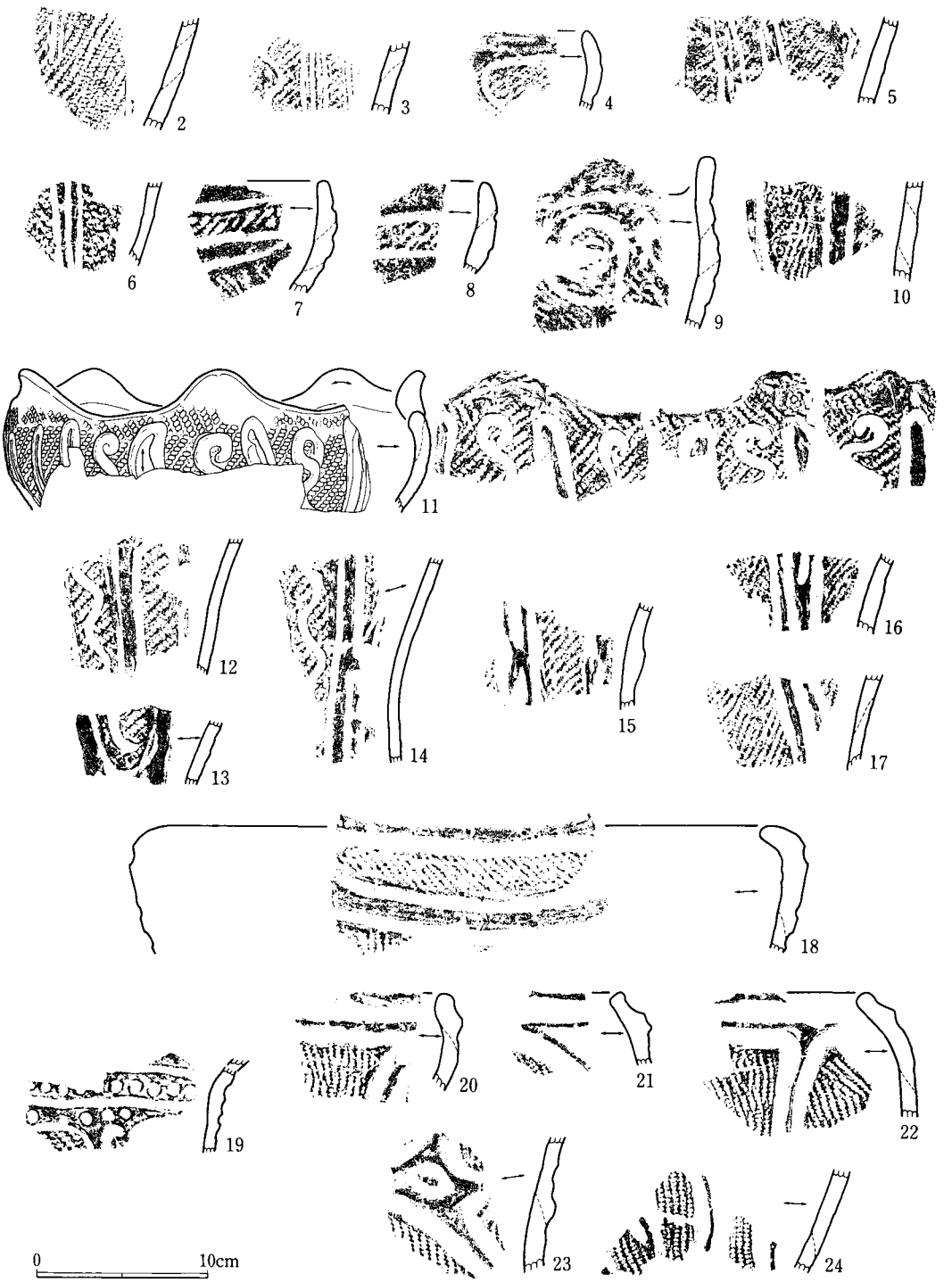
１はＦ７区東端で出土したもので、口縁部のみ全く遺存しなかったが他の部分はほぼ復元された。口縁部下、頸部上位には遺存する限り３条の、台形状の断面形を呈する隆帯が巡り、以下沈線による頸部文様帯が形成される。胴部は沈線を垂下させるが、Ｕ字状、渦巻状の文様を添加する。沈線はすべて半截竹管によって施され、３条の部分はその中央の沈線が重ね描きされている。地文は遺存部分全体がＬＲの縦位施文である。本例は加曽利ＥＩ式土器であるが、東北日本の強い影響を見る（大木8a式相当）ことができる。

２は１に隣接して検出された破片であるが別個体である。やはり垂下沈線は半截竹管によって施される。１と同段階のものか。３～９にはＥII式段階に比定されそうな破片を集めた。うち６～９は同一個体である。対して10は沈線間が広くなり研磨されており、より新しい段階のものである。11～14は同一個体で遺跡北部のＧ５区で出土した。５単位の波状口縁をなす。ＲＬ横位施文の名残はあるものの基本的に口縁部文様帯はなく、磨消による無文区画と波状沈線を垂下させる。波状沈線の頭部はＳ字状になる。加曽利ＥIII式後半。15～17の個体は胴部破片



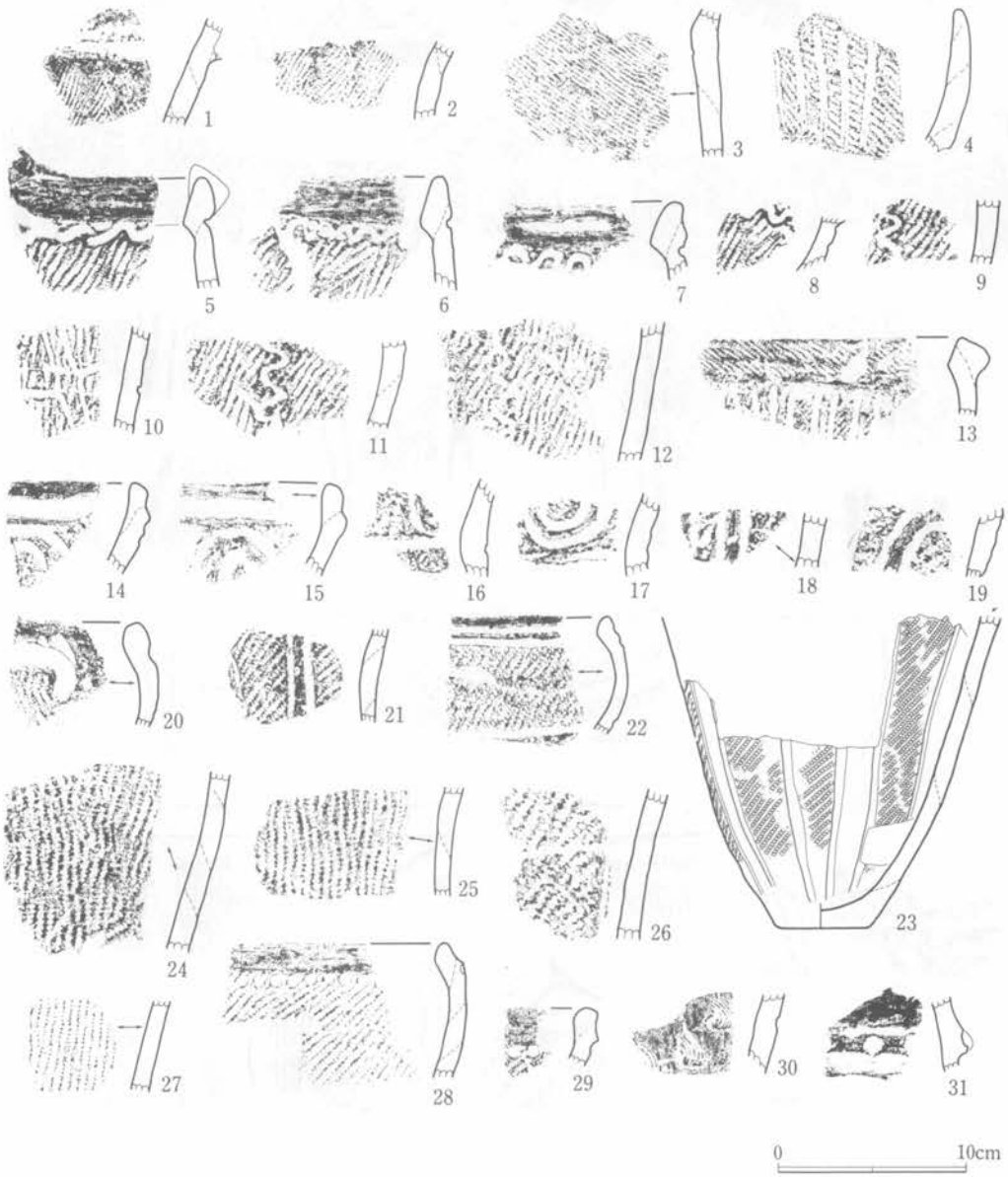
第37図　池花遺跡出土縄文時代中期の土器(2)（1/4）

第38図　池花南遺跡出土縄文時代中期の土器(1)（1/4）



第39図　池花南遺跡出土縄文時代中期の土器(2)（1/4）

のみの出土である。拓影では単なる沈線に見えるが、実際は沈線間の無文部に隆帯が付加されたもので、その上にさらに太い沈線が施される。18は口縁部破片で橋状把手が付く可能性がある。19は頸部破片で沈線間に円形刺突を持つ。地文はＬＲＬ。以上の３個体は遺跡南部、SX－01、SD－01覆土中に含まれていたもので、いずれも加曽利ＥⅢ式前半に相当するか。20と21～24の個体はどちらも口縁部文様帯を持たず、隆帯を貼り付ける土器である。前者はG6－12区、後者はG5－50、60区の出土。加曽利ＥⅢ式後半と言えようか。



第40図　大割遺跡出土縄文時代中期の土器（1/4）

⑤大割遺跡出土土器（第40図、図版20－１）

大割遺跡についても縄文時代中期の遺物集中地点を一切持たず、断片的な資料が点々と検出されているだけである。池花遺跡、池花南遺跡に比して出土遺物の時期幅は若干広いが、逆に出土量はさらに少ない。以下個体毎に記述する。

縄文中期初頭に相当すると思われる土器を１～３に集めた。うち１～２は同一個体で、ＲＬの縦位施文の上に縦位の綾絡文が認められる。１の上位には幅広い粘土接合面が露呈しており、また貼り付けられた一部が遺存する。３も同様の土器であろうが、施文原体はＬＲ(縦位)。胎土には石英粒が非常に目立ち、３にはさらに多量の雲母粒が含まれている。いずれも遺跡北東端、G1－60区からの出土である。

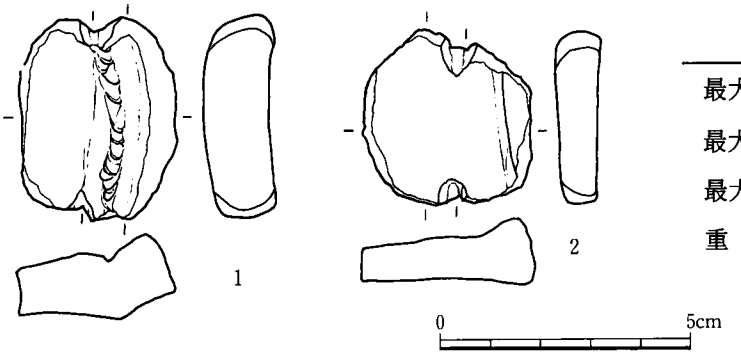
４は阿玉台式土器の矩形を呈する把手部分である。右縁の過半と上縁の一部は遺存しているが、左縁は欠損している。地文はＬＲで沈線には半截竹管状施文具を用いる。

５～12、13の２個体を加曽利ＥⅠ式段階のものと考える。５～12は口縁の内側を肥厚させ、口縁外面の無文部直下に交互刺突の残存形態である波状沈線を施す。また胴部には縦位の波状沈線を持つ。地文はＲＬ。13は粘土紐貼り付けにより口縁外面を肥厚させ、その直下から沈線を並列して垂下させる。地文はＲＬで、口縁部は横位施文、胴部は縦位施文。この両者の出土地点はかなり離れている。

14以下には加曽利ＥⅡ（？）～ＥⅢ式土器及び時期不詳の破片を集めた。14～19、24～25、28～29が同一個体である。とくに説明は不要と思われるので省略する。

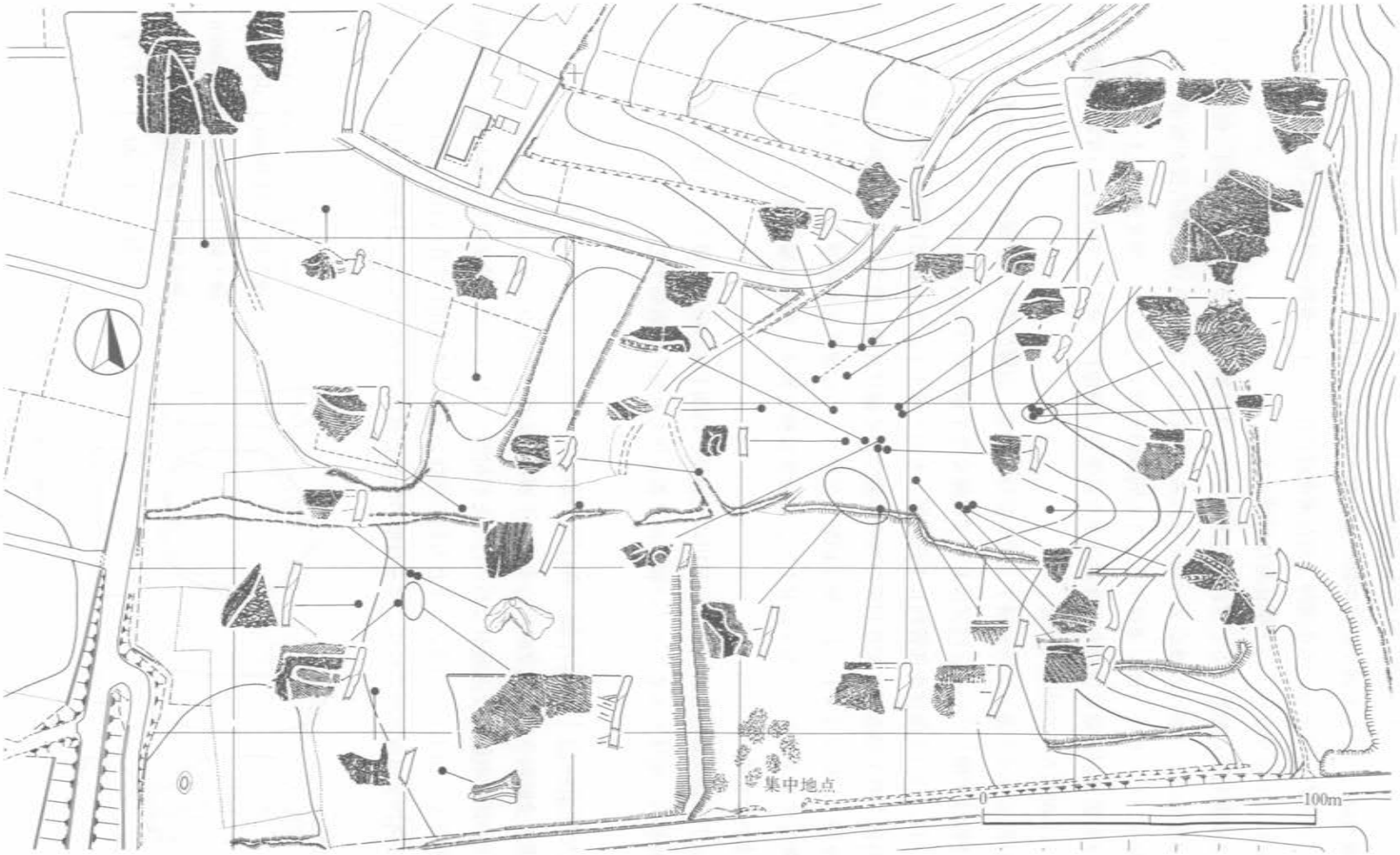
⑥大割遺跡出土土器片錘（第41図、図版20－２）

内黒田遺跡群全体で縄文時代の土錘、土器片錘の類いは２点しか出土していない。これは縄文時代中期に継続的な占地がなかったことが起因していようか。唯２点の土器片錘は大割遺跡C2－80区から出土している。いずれも同一個体の土器片を利用して作られたもので、１にはいわゆる角押文が施されており、阿玉台期の所産と見ることができる。計測値は以下の通り。



	1	2
最大長	41.0mm	33.8mm
最大幅	31.8mm	33.5mm
最大厚	13.9mm	13.6mm
重　量	17.9g	12.7g

第41図　大割遺跡出土土器片錘（2/3）



第42図　縄文時代後期前半の内黒田（大割遺跡）（1/2,000）

第43図　縄文時代後期前半の内黒田（池花南遺跡）（1/2,000）

6．縄文時代後期前半

①概観（第42図、第43図）

縄文時代後期以降は、検出された資料の量が中期以前に比べて飛躍的に増すため、後期を前後半に別けて記述する。縄文時代後期前半は称名寺期から堀之内期までとする。

称名寺期は遺構、遺物が大割遺跡に集中する。他には池花南遺跡で断片的に土器片が出土しているに過ぎない。大割遺跡ではその南縁中央のＥ４・Ｅ５区に住居跡１棟を含む遺物包含層が展開し、該期の土器群としてきわめて良好な一括資料を得ている。また少量の石鏃などの石器を伴っていると見られるが、石鏃については、加曽利Ｂ期の遺物包含層と一部重複していることもあって帰属時期の決定は難しい。Ｅ４・Ｅ５区集中地点以外でもほぼ遺跡全域に称名寺式土器が分布していたが、顕著な集中地点を形成することはなく、遺物包含層としての本調査は実施していない。しかし出土土器各個体の分布は、半径10m 以内という指標で見ると数個体ずつが集まる傾向があり、それぞれになんらかの生活、作業空間が存在したことは否定できない。池花南遺跡でも称名寺式土器は遺跡南端に数個体がまとまり、南に隣接する大割遺跡からの連続として把握されよう。

堀之内期になるとまた内黒田遺跡群内の遺物の分布（遺構はない）はきわめて希薄になり、池花南遺跡と大割遺跡で少量の土器が出土しているだけである。

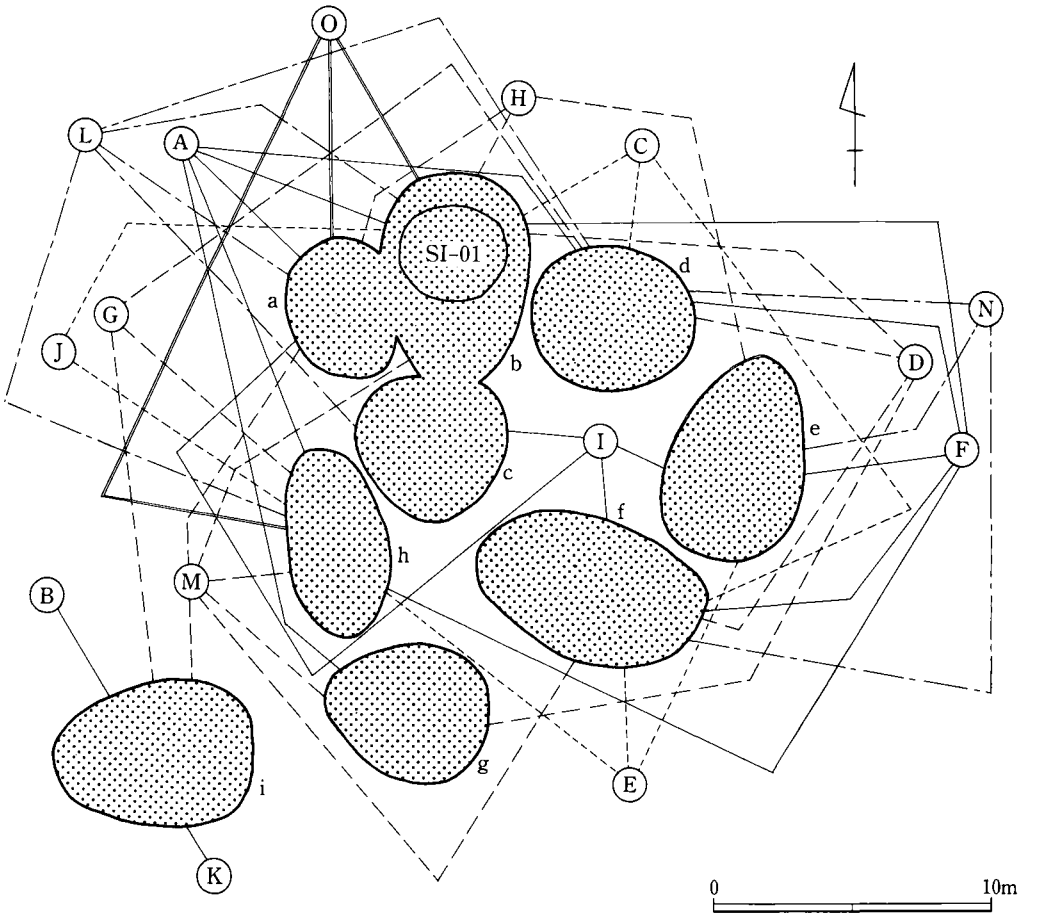
内黒田遺跡群の東側にかつて広がっていた千代田遺跡群では、千代田IV区に縄文後期前半の遺構、遺物が集中していたが、その前段階の加曽利ＥIV期を含めて大割遺跡で希薄な時期、称名寺期の新しい段階から堀之内期の遺構、遺物が目立ち、逆に大割遺跡で濃密な時期が希薄であるという注目すべき現象が窺える。

②大割遺跡 SI－01、Ｅ４・Ｅ５区称名寺式土器出土地点

出土状況（第44図）　集中地点は E4－80区から E4－93区、E5－00区から E5－13、21区、D5－28区から D5－29区に検出された。遺物分布範囲は東西28m 弱、南北23m 程である。この出土地点は、特定の土器個体の集中的な廃棄に起因する見掛けの遺物集中が集合したかたちとなっている。勿論それらの遺物集中は独立的に分離されるものではない。ここではそれらをクラスターの名で呼び、クラスターａからクラスターｉまでを設定する。クラスターｂからは竪穴住居跡 SI－01が検出されている。住居跡からは称名寺式土器の他に打製石斧、石棒片と思われるものなどの遺物が出土しているが、とくに住居跡内に遺物量が多い傾向はない。

称名寺式土器と判断された土器の殆どが個体識別され、15個体（Ａ～Ｏ）を数えるが、多くの個体の接合関係がかなり広範囲に及んでいる。クラスターの設定概念図と個体の分布状況の模式図は第45図に示した。

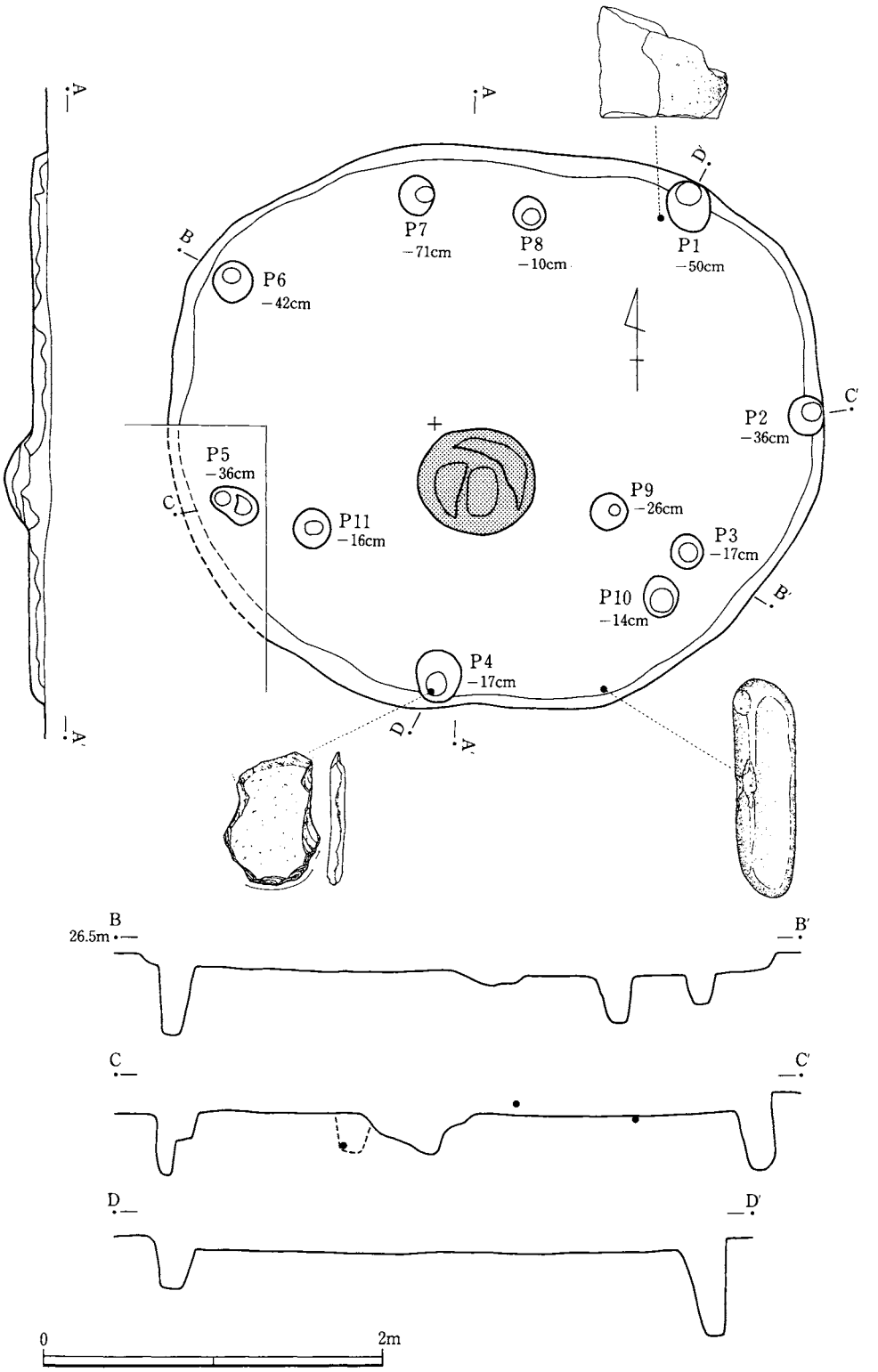
第44図　大割遺跡E4．D5．E5区称名寺期遺物出土状況（1/160）



第45図　大割遺跡称名寺期集中地点クラスター概念図と個体分布

SI－01（第46図、図版２－１）　楕円形を呈する小型の竪穴住居跡である。長径（東西）3.88m、短径（南北）3.30m を測る。遺物包含層の調査中に検出された関係上、検出面は掘り込み面よりも下位になってしまったようで、壁高にして10cm 分程度しか把握されなかった。覆土は褐色～暗褐色を呈するやや粘性のある土で、床面はローム上面に達せず、したがって地山との土色の違いは顕著ではない。また新期テフラの覆土への混入があるようであるが、覆土の観察を充分行いうる状況になかったため、明確ではない。

付帯施設には柱穴他のピット群及び炉がある。炉は住居中央からやや南寄りに検出された地床炉である。炉も楕円形を呈し、東西径0.70m、南北径0.62m、床面からの最深は0.24m を測る。中央部は特に深く掘り窪められ、その東西両側にテラス状の部分が認められるが、焼面は中央部だけでなくテラス状部分にも見られる。柱穴は壁際に巡る。柱穴がほぼ当間隔に設置されたものならばＰ１～Ｐ７の７基が主柱穴に相当しよう。しかしその掘り込み深度は一定ではなく、床面から17cm～71cm とばらつきが見られる。深度は北側のＰ７が71cm で最も深く、南側に巡



第46図　大割遺跡 SI-01 （1/40）

るにしたがって浅くなり、Ｐ２とＰ５は36cm、Ｐ３とＰ４は17cmである。また柱穴は僅かに内傾するものが多い。これらの事実は上屋構造を復元する上できわめて興味深い資料となろう。床面は平坦で踏み締めの痕跡である床面の硬化も認められたが、床面のうちで硬度の違いははっきり観察されない。周辺に行くにしたがって漸次硬度が減少するとだけ指摘しておく。

出土土器（第47図～第49図、図版23～25－１）　15個体（個体Ａ～個体Ｏと仮称する）を図示する。当出土土器群は一括性が強く、組成も明確であるため、まず称名寺式土器の分類を示し、それにしたがって記述する。

ａ．磨消縄文または沈線区画内列点や条線。さらに以下に細分する。

ａｉ．小型で精製度が高く、胴部のくびれは強め。往々にして把手が付く。

ａii．大型品。

ｂ．器面全体が縄文施文のもの。単節か無節。

ｃ．ほぼ全面に縄文が施されるが、口縁部に無文帯があるもの。さらに以下に細分する。

ｃｉ．無文帯下に隆帯が巡るもの。

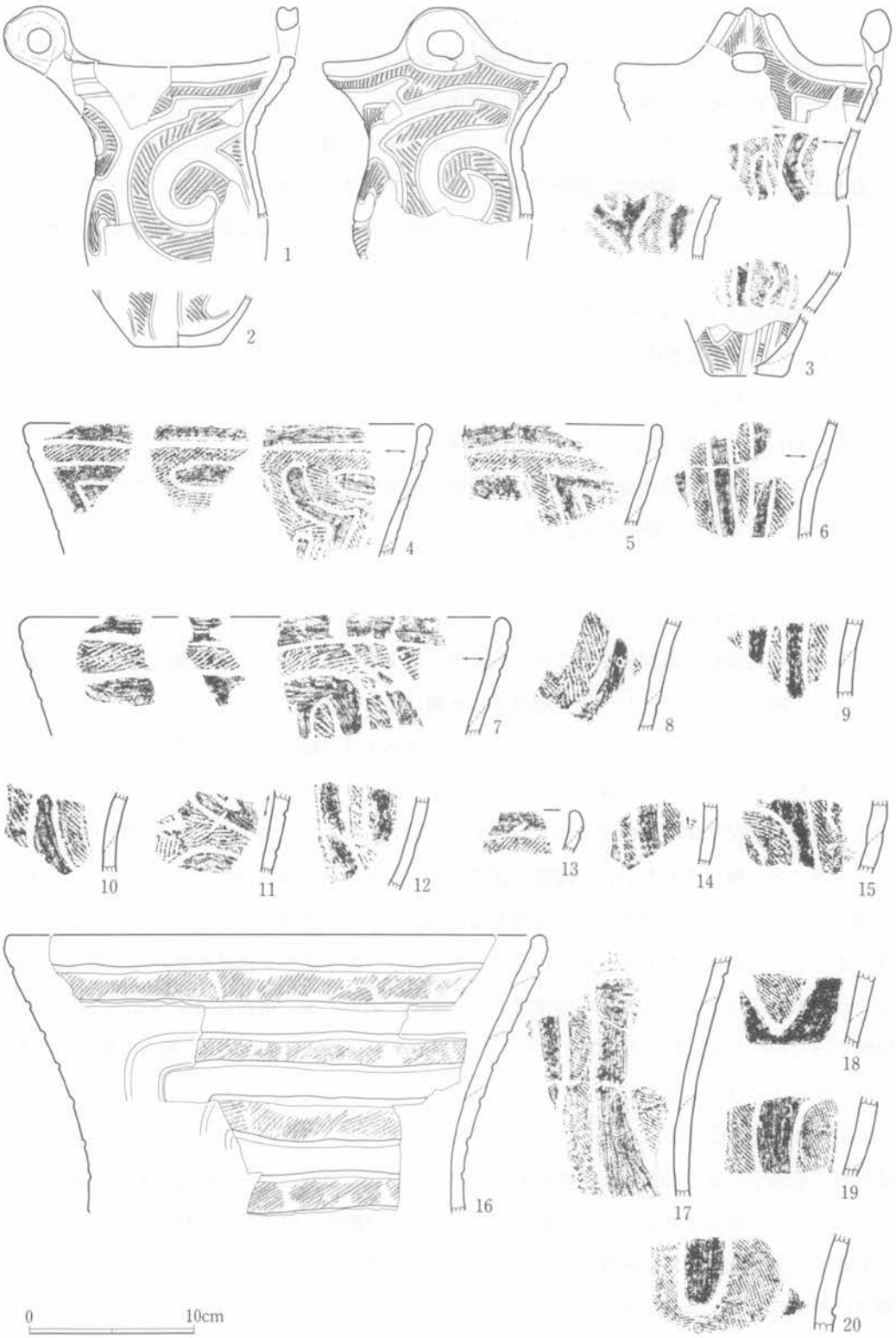
ｃii．無文帯下に一条の沈線が巡るもの。

ｄ．器面全体が条痕施文のもの。

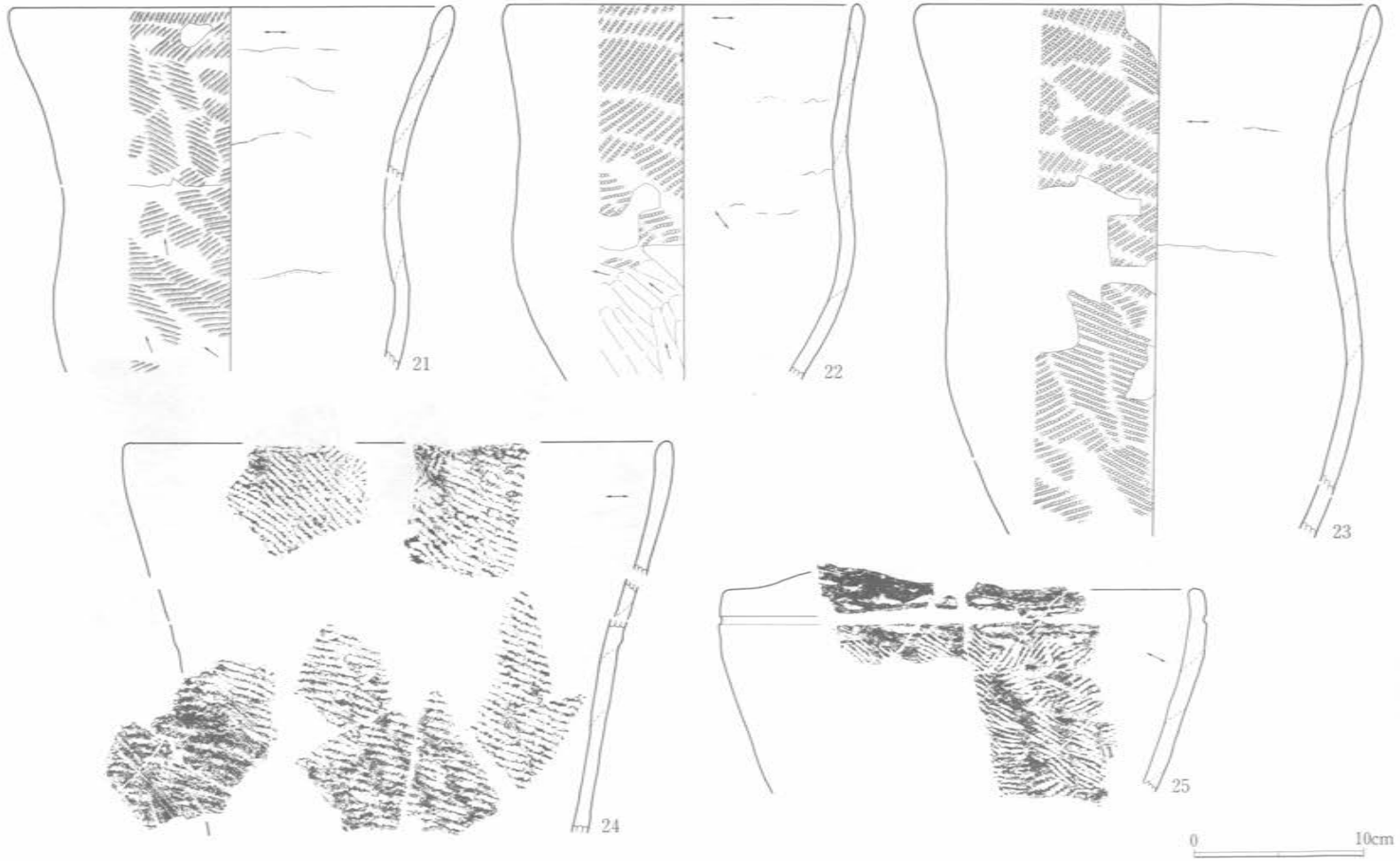
ｅ．ほぼ全面に条痕が施されるが、口縁部に無文帯があるもの。通常無文帯下には一条の沈線が巡る。ただし当出土地点にはｅ類は見られない。

ａｉ類には個体Ａ（１～２）、Ｂ（３）がある。個体Ａは口縁部に一対の環状の把手を有するが、その把手は上から見て口縁に直交するものと平行するものが対になる。文様は器体に比して大きめの渦巻文を中心に構成される。縄文はＬＲである。クラスターｂの住居内とクラスターｇ～ｈで多く検出されたが、口縁部、底部はクラスターｂ、胴部は他のクラスターに分布する傾向があり、あるいは意識的な分割廃棄の可能性がある。個体Ｂは胴部片が少なく全貌は不詳であるが、個体Ａに類似した器形を有するであろう。把手はやや形状が異なり、縄文区画帯がここにも及んでいる。これは「中津II式」的要素であろうか。遺存部分が少なく文様構成は明解ではない。７字文系モチーフとスペード文系モチーフの組み合わせか。縄文は細かいＬＲ。クラスターｉのみから出土した。

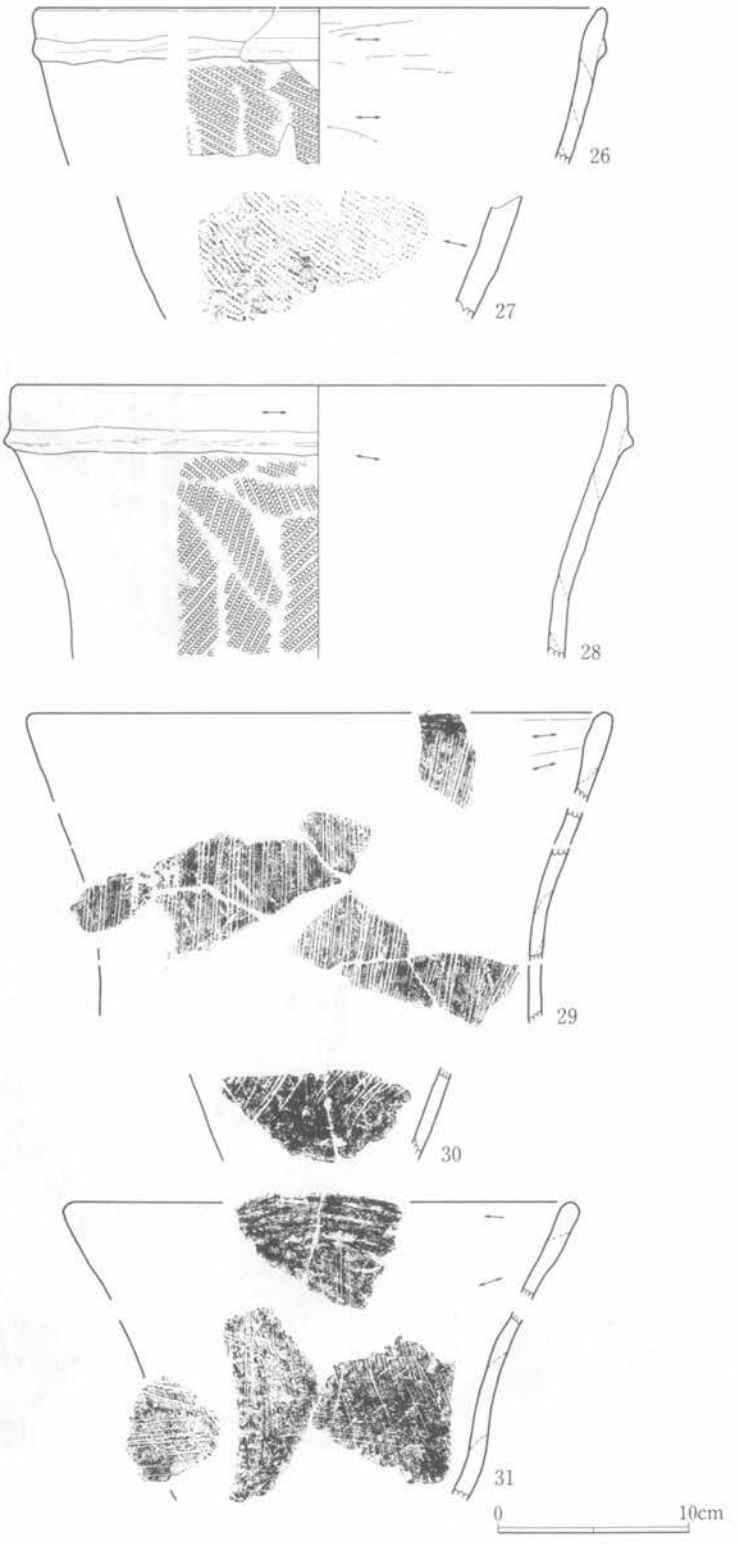
ａii類には個体Ｃ（４～６）、Ｄ（７～12）、Ｅ（13～15）、Ｆ（16～20）がある。個体Ｃは口縁部から胴部中位までの破片が遺存するが、あまり接合しなかった。文様は比較的複雑な構成をとるらしい。縄文は細かいＬＲである。出土状況は分散的。個体Ｄは個体Ｃに類似した土器であるが、区画沈線がより曲線的で、また長く垂下するＪ字文モチーフを主体とするらしい。縄文はやはりＬＲ。クラスターｄとｈから主体的に出土した。個体Ｅは出土破片数が４点と最も少量しか遺存しなかった個体である。縄文はＬＲで、一見個体Ｄに酷似するが別個体。出土状況は分散的であった。個体Ｆも胴部下位から底部を遺存しなかった。文様構成の全体像は不



第47図　大割遺跡称名寺期集中地点出土土器(1)（1/4）



第48図　大割遺跡称名寺期集中地点出土土器(2)（1/4）



第49図　大割遺跡称名寺期集中地点出土土器(3)（1/4）

詳であるが、長く垂下するＪ字文モチーフが主体になって構成されるか。18はスペード文の一部かと思われる。縄文は無節Ｌ。クラスターｅを中心にクラスターｂ（住居跡SI－01内）にも分布した。

ｂ類には個体Ｇ（21）、Ｈ（22）、Ｉ（23）、Ｊ（24）がある。個体Ｇは無節Ｌを施文する個体である。口縁部は横位施文、胴部上位は縦位施文に近くなり、胴部下位は斜位施文、以下箆削りとなる。主としてクラスターｄとクラスターｉ双方から出土しているが、相互の接合関係は認められず、意識的な分割廃棄の可能性がある。個体ＨはＬＲを用い、口縁部から胴部にかけて横位施文から斜位施文になり、胴部下位は箆削り。クラスターｂ～ｃを中心に分布していた。個体Ｉも単節ＬＲを用い、施文原理は前２個体とほぼ同一である。最も多量の破片を遺存した個体で大半が接合し、底部を除きほぼ全体が復元された。クラスターｆを中心に分布していた。個体ＪはＬＲを施文することでは個体Ｈ、Ｉと同じであるが、口縁部に横位施文せず、胴部までほぼ縦位に施文されるところに若干の相違が認められる。比較的分散した出土状況を示したが、クラスターｈに若干のまとまりがあった。

ｃｉ類は個体Ｋ一個体だけである。緩やかな波状口縁をなしていたと思われるが、その単位は破片数が少ないため不明。口縁部は横位に研磨され、その下に比較的幅広の沈線が巡る。沈線下には縄文が施されるが、その原体には無節Ｌが用いられる。胴部上位は縦位施文であろう。クラスターｉから集中出土した。

ｃⅱ類には個体Ｌ（26～27）、個体Ｍ（28）がある。ともに口縁部が横位に研磨され、その下に断面三角形状の隆帯が貼り付けられている。以下縄文施文となるが、個体ＬはＲＬがほぼ完全に縦位施文されるのに対し、個体ＭはＬＲで隆帯直下は横位施文である。称名寺期以降縄文の撚り方向は左撚りに転換するが、個体Ｌは施文方向を含めて加曽利Ｅ期の残影を最も色濃く留めるものと言うことができる。いずれも出土状況は分散的。

ｄ類には個体Ｎ（29～30）、個体Ｏ（31）がある。個体Ｎは櫛歯状原体による条痕を口縁部から胴部までほぼ縦位に施している。個体Ｏは各条が繊細な櫛歯状原体を用い、口縁部のやや下からやはりほぼ縦位に条痕を施すが、胴部中位になると横位の条痕と交錯し、きわめて粗雑な印象を受ける。個体Ｎはクラスターｄを中心に、個体Ｏはクラスターａを中心に分布していた。

以上の土器の断面観察の結果は、15個体中内傾接合が13個体、外傾接合が２個体であった。縄文中期加曽利Ｅ式土器の胴部は殆どが外傾接合であるが、加曽利ＥⅣ式段階から原則は崩れだす。そして称名寺期に至って内傾接合に転換すると考えられるが、当土器群において外傾接合であったのは個体Ｌ、Ｍ、換言すればｃ類だけである。粘土接合面の傾斜は器形によって制約される側面が大きいとは言え、この事実はｃ類の系譜を考える上できわめて示唆的と言わなければならない。またさらに言えば、称名寺式土器の主要器種の系譜が前代からの一系的なものでないことも示していようか。

③大割遺跡集中地点外出土称名寺式土器

出土状況　大割遺跡では前述のＥ４～Ｅ５区以外でも称名寺式土器、あるいは称名寺期の可能性が高い土器が一定量出土している。それらはとりわけ集中地点を形成することはなかったが、巨視的に見れば数個体ずつまとまっているものもある。２個体以上近接して出土した地点は以下に列挙するとおりである。

B4－27～B4－29区・C4－00～C4－20区：４個体、E2－67～E2－86（84）区：３個体、E3－09区：２個体、E3－26～E3－28区：５個体、E3－68・F3－40区～F3－60区：４個体、F3－07～F3－08区：４個体、F3－63区：３個体

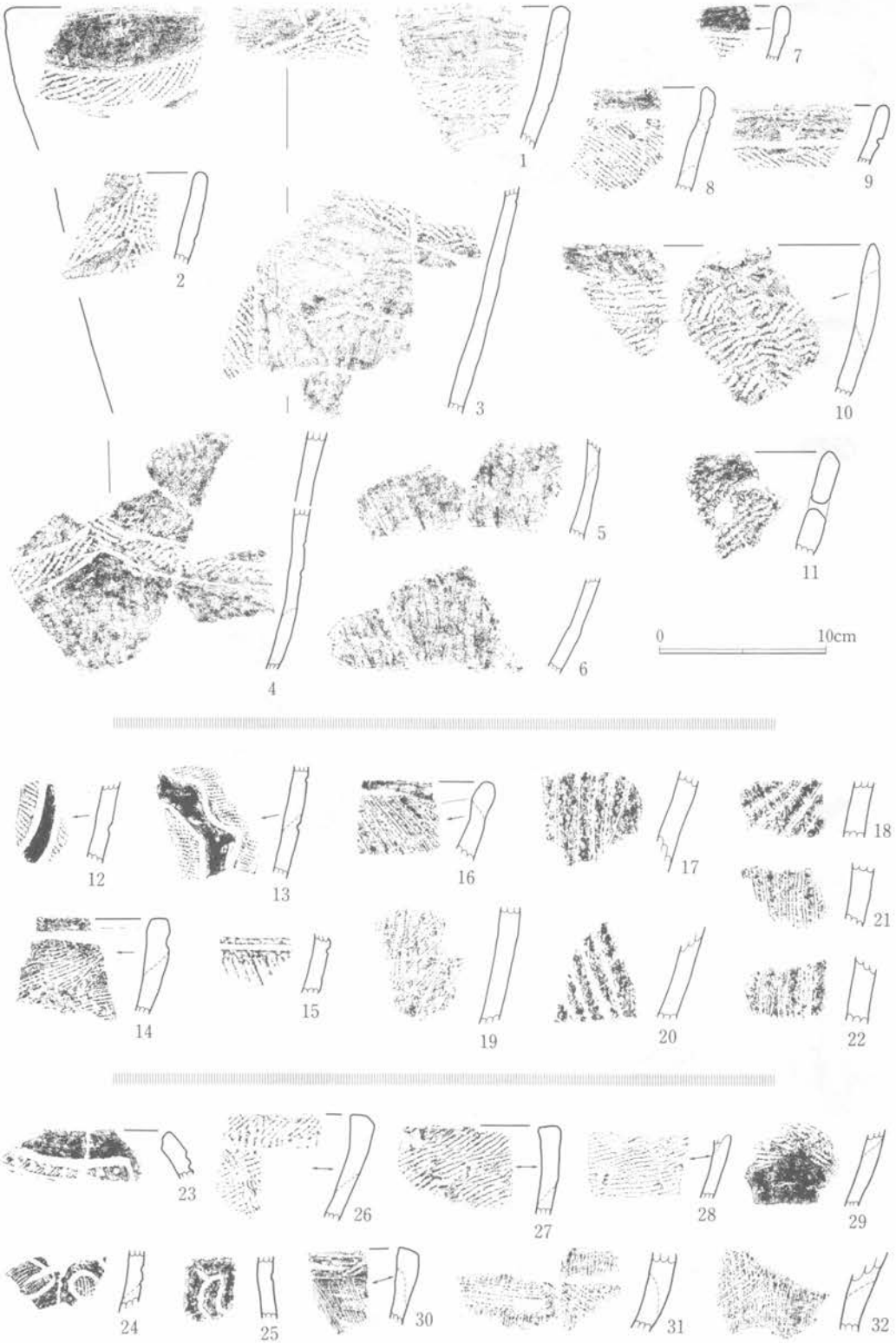
出土遺物（第50図～第51図、図版25－２～26）　上記の比較的近接して出土した個体群がそれぞれ一括性を有しているとは言い難いかも知れないが、ここではそれらをまとめて述べる。

１～11がF3－07・08区で出土したもので、１～６、８・９、10・11がそれぞれ同一個体である。１～６は口縁部は平縁であるが、口縁部下に連弧状の区画を持ち、その頂部からＪ字状文を垂下させ、さらにその下にも連弧文を施すものと考えられる。西日本系の文様構成を持つものとして大割遺跡では稀少な存在である。７は口縁部の細片しか遺存しないもの。以上２個体の縄文原体はＬＲである。８・９は口縁に無文帯を持つ全面縄文施文の土器で、無節Ｌの縦位施文を施している。10・11は全面縄文施文の土器である。縄文は前個体と同じくＬ。

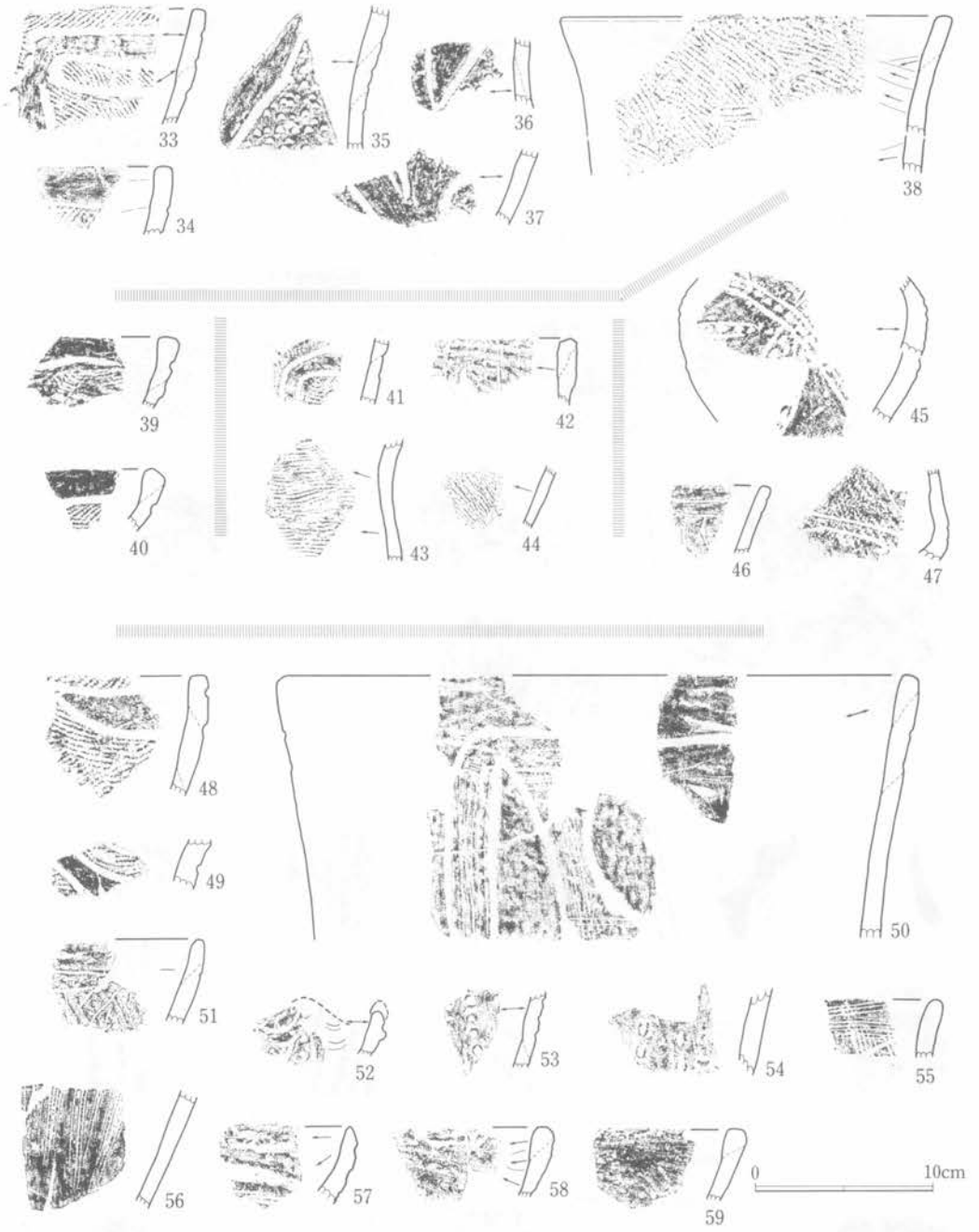
12～22はE3－68・F3－40～60区で出土した一群である。12・13、16～22がそれぞれ同一個体である。12・13は磨消縄文を持つ個体であるが、文様構成は明らかではない。縄文はＬＲ。14は幅の狭い口縁部無文帯の下に太い沈線を巡らせ、以下櫛歯状条痕を施すものである。前記分類ではＥ４～Ｅ５区になかったｅ類に相当する。15は口縁を欠損するが、沈線下に一条単位の「条線」を施文するもの。その施文具は沈線のそれと同じである。16～22も同種の土器と言えようか。この場合口縁部下に沈線は見られない。また一条単位の「条線」は細く鋭く、あまり規則的ではない。

23～32はE3－26～28区で出土した一群である。26～29、30～32がそれぞれ同一個体である。23は注口土器かと思われる。口縁下には磨消縄文による文様が展開するが、小片のため構成は不詳。縄文は細かいＬＲで、その上に当間隔の円形の列点が認められる。24も同様に磨消縄文を持つ精製度の高い土器であるが、やはり小片であるため器形すらよく判らない。しかし23と縄文原体、胎土などが酷似しており、同一個体の可能性は否定できない。25は沈線区画の内側に縄文、列点等が見られないもの。26～29は全面縄文で覆われる個体。施文原体はＬである。30～32は櫛歯状条痕を施す個体。

33～38はB4－27～29、C4－00～20区で出土した一群である。35～37が同一個体である。33は全体の文様構成は明確ではないが、口縁部に無文帯がなく胴部文様と連続している点が「中津Ⅰ式」的要素として指摘でき、１～６とともに西日本的色彩が濃い。34は磨消縄文を持つ土器



第50図　大割遺跡集中地点外出土称名寺式土器(1)（1/4）



第51図　大割遺跡集中地点外出土称名寺式土器(2)（1/4）

の小片。35～37は沈線区画内に刺突充塡を行うものである。列点ではなくこのような形のものは本例が唯一となる。38は全面縄文施文の個体で、口縁部からＬＲの縦位施文となっている。

39、40はE3－09区で出土したもの。ともに磨消縄文の個体で、39がＬ、40がＬＲを用いる。

41～44はE2－67～86区で出土した一群である。43・44が同一個体。41は渦巻文を主体とする

文様を持つと思われる土器。42は遺存部分に限っては無文の土器である。43・44は無節Ｌをほぼ縦位に施文するもので胴部破片しか出土していない。

44～46はF3－63区で出土した一群である。44はごく一部しか遺存しないが、注口土器であろう。２本の沈線を縦横及び斜めに交錯させ、その区画内に沈線と同じ施文具で列点を施している。45及び46は２条単位の細い沈線で文様を描く。46の地には縄文が見られるが、両者は同一個体の可能性がある。

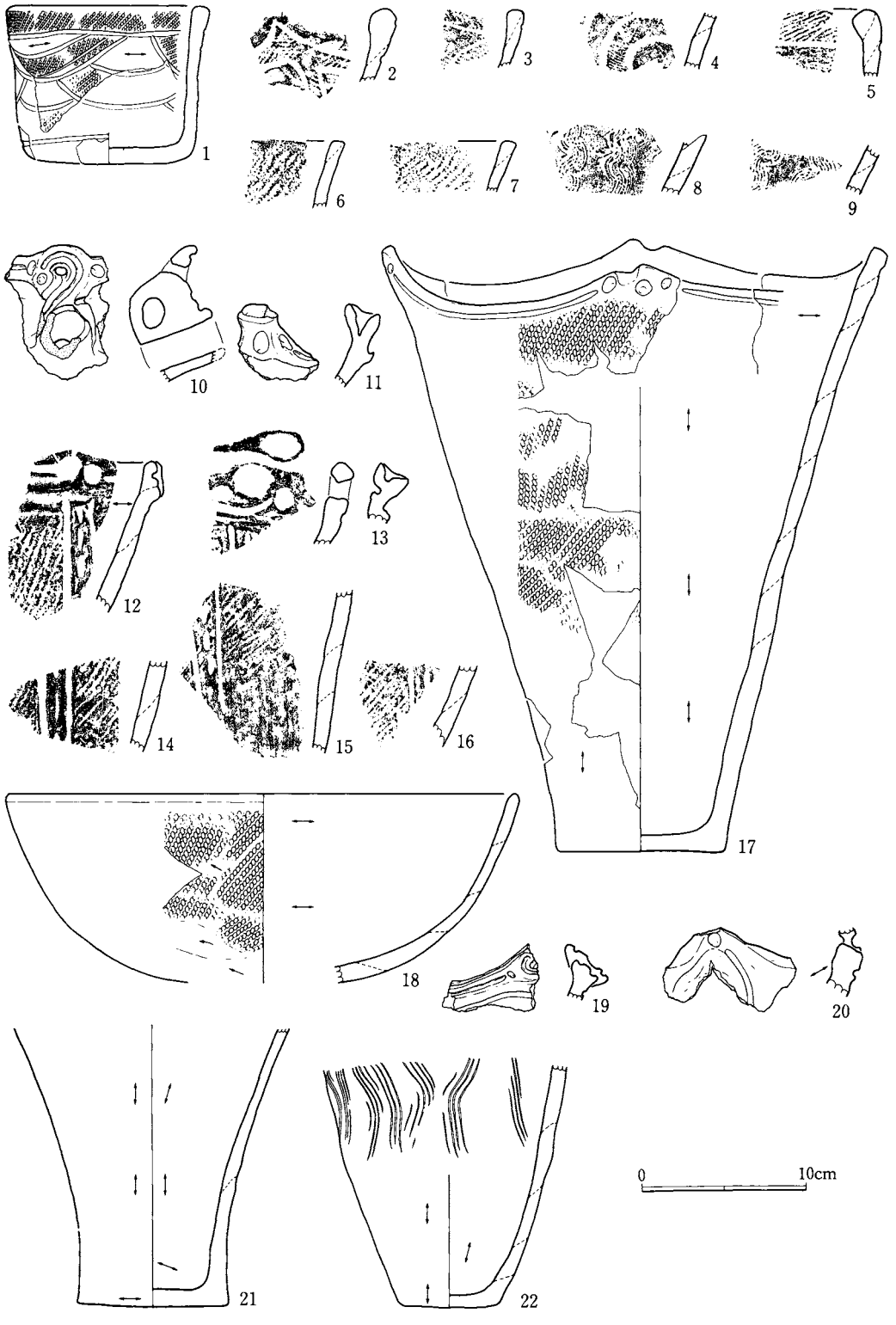
以下は単独出土の土器片である。48は全体の文様構成が明らかでないのが残念であるが、33と同じく口縁から文様が連続する西日本的要素を具える土器である。縄文は若干粗めのＬＲ。49は磨消縄文で渦巻文を描くものらしい。50は沈線区画内に条痕を施文するもので当地域での出土は珍しい。またかなり大型の個体である。51は46に類似し、２本単位の細い沈線による文様が認められる。52・53は同一個体である。52は波頂部で、２本の沈線で連弧状の区画と垂下する区画が見え、垂下する方に列点が加えられている。しかし胴部小片53には列点が縦位に連続しているものの、沈線区画は見られない。54は「雨垂れ」状の列点が施される破片である。55～57までは櫛歯状条痕が施文されるものである。いずれも別個体。55は口縁に横位施文、以下縦位施文となるのに対し、57は口縁には条痕は見られず、また無文部下に明瞭な沈線も施されずに横位条痕施文が開始されている。58、59は無文の破片である。しかし57のような例もあるので単に無文とはできない。

④各遺跡出土縄文時代後期前半の土器（第52図、図版27）

池花南遺跡において少量の称名寺式土器が、そして各遺跡において堀之内式土器、あるいは称名寺期から堀之内期に相当すると考えられる土器が少量出土している。ここではそれらを一括して紹介しておく。

１～18が池花南遺跡出土の土器である。９までが称名寺期のものか。１は口縁部に縄文帯があり、以下磨消縄文による連弧文によって覆われるコップ状の土器である。２～４は同一個体である。磨消縄文による渦巻文を主たる文様要素として持つ土器と思われるが、全体の構成は判らない。５はやはり磨消縄文を持つと思われる小片。６・７は同一個体で縄文施文で覆われる土器。上記４個体の施文原体はいずれもＬＲ。８・９も同一個体で、これは加曽利Ｅ期の可能性も充分あるものである。櫛歯状施文具によって縦位の波状文が施されている。

10～17は堀之内式土器である。12～16が同一個体。10は注口土器の口縁部から注口部までの破片である。注口部直上は把手となる。11は波頂部に付く把手部分の破片である。注口状を呈する。12～16は口縁部に１条の沈線が巡り、所々肥厚して円形の刺突を持つ。また13のように環状の把手となる箇所があり、それらが交互に現れるものであろう。それらの単位の直下には２条の縦位沈線とその間を埋める列点が施される。地文の縄文はＬＲかとも思われるが不明瞭



第52図　各遺跡出土縄文後期前半の土器（1/4）

である。17は4単位波状口縁を呈する土器で、器体の半ばを遺存しほぼ全貌を復元できた。すべての波頂部の左側に浅く刻みが入り、周りの3箇所に円形の刺突を持つ。また口縁部には1条の沈線が全周している。器面は縄文ＬＲが横位施文されるのみ。

18はボール状の浅鉢で明確に時期比定が困難なものである。縄文はＬＲ。胎土など堀之内式土器に類似する要素がある。

19～21が大割遺跡出土土器である。19、20はともに堀之内式土器の口縁部（波頂部）破片である。19は口縁部が「く」字形に内折するもので沈線が巡る。波頂部は著しく肥厚し「Ｃ」字形の沈線と円形刺突が組み合わせられる。また20も同様に「Ｃ」字形沈線を持つものらしい。21は底部から胴部へ外反しながら開く器形を有する土器であるが、施文部分を遺存しないため時期比定ができない。堀之内期から加曽利Ｂ期と思われ、とくに加曽利Ｂ式土器の可能性も濃厚であるが、便宜上ここに掲載しておく。

22は池花遺跡出土土器である。櫛歯状条痕を施された胴部下半～底部で、称名寺期から堀之内期、おそらく堀之内期の所産と思われるがやはりこれも細かい時期比定ができない。

⑤縄文時代後期前半のまとめ

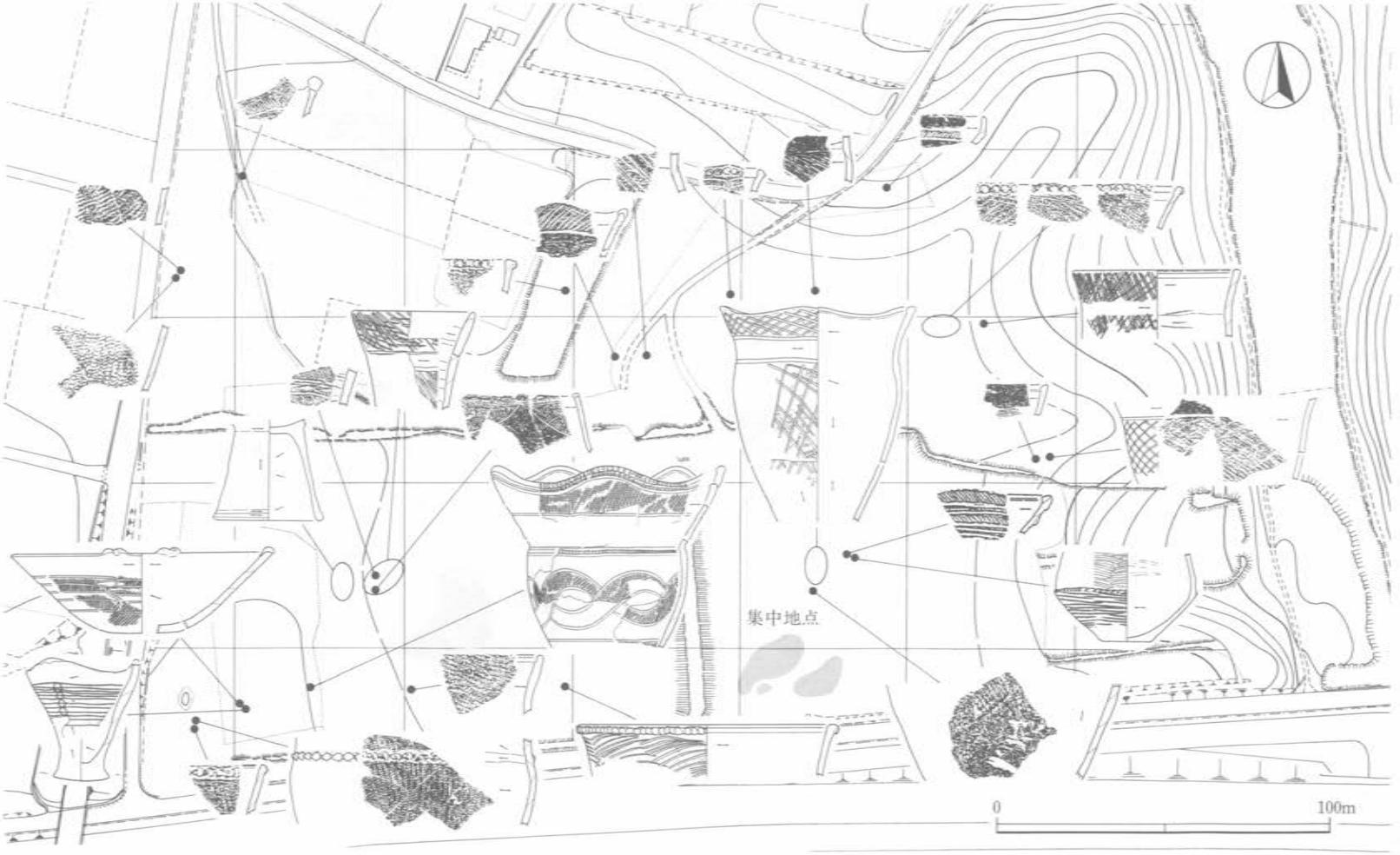
ここでは主として大割遺跡の称名寺期集中地点についてまとめておく。

Ｄ５・Ｅ４・Ｅ５区の集中地点は径20m余に亙って展開していたが、そこで見られた接合関係や土器個体の分布状況から、遺物廃棄の同時性は明らかであろう。かかる遺跡の最終的な在り方は廃棄空間であるが、問題の第一は廃棄空間として機能する以前の遺跡の性格如何であろう。当地点からは竪穴住居跡1棟が検出されている。居住空間の機能が停止してそこに廃棄行為がなされる場合、掘り込みのある遺構が存在すればそこに集中的に遺物が廃棄されるのはよく見られる。当地点においてもSI－01とその周辺は廃棄行為の一つの核（クラスターｂ）が置かれている。しかし核は一つに留まらず多数存在するのは既に触れたとおりである。とりわけ複数個体が廃棄され、しかも他クラスターとの個体分有が認められる場合は、そこに意識的な集中廃棄がなされたと見るべきであろう。そしてそこは廃棄行為者にとって意味ある空間～住居を始めとする生活・作業空間あるいは祭祀的空間等～であったろう。当地点については「炉」を備えた「住居」は1棟に過ぎなかったにしても、その南にほぼ円形に展開する空間には何らかの施設（状況によっては検出が容易でない）が存在した可能性があり、明確な遺構が確認されずとも包括的に考えなければならないことは言をまたない。

住居跡SI－01を翻って見るに、その特筆すべき点として柱穴深度の顕著な傾斜が挙げられよう。それだけの事実から上屋構造を復元するのは至難ではあるが、しかし住居規模と相まって上屋の「簡易性」を想定することは許されるであろう。このことは当地点の所謂camp site的性格を如実に物語る。大割遺跡の近傍に所在する称名寺期の遺跡には千代田遺跡群Ⅳ区があり、

比較的継続的な性格を有する。そこでは加曽利ＥⅣ期から称名寺期初頭の資料が検出されているが、「称名寺Ⅰ式」後半の資料がやや乏しい。無論ここで断言すべきではないが、大割遺跡で今回報告する資料は千代田遺跡群の動態をある程度補完するものである可能性が充分である。しかしながら大割遺跡当地点はあくまで一単位集団の季節的な居住を考定すべきであるし、また大割遺跡では当地点に前後する時期の資料も断片的ながら検出されており、季節的な占地が当遺跡において繰り返されていたであろう。この地域にテリトリーを有する集団の動態については周辺遺跡の調査の進展を待ってさらなる考究がなされねばならない。

問題の第二は当地点出土土器群の編年的位置についてであるが、称名寺Ⅰ式後半とするだけでここでは敢えて言及しない。それに代わって触れておきたいのが土器一括資料の抽出の方法である。継続的な〝大規模集落〟で出土する資料には重層的な混在があることは言うまでもあるまい。そこから「遺構内出土」を示準として資料が抽出される。しかしそれでも混在資料を客観的に除外するのはたやすいことではないし、遺構が単位となると土器組成が網羅されて廃棄乃至遺棄されていることは稀であろう。一方短時の居住の結果形成された小規模〝遺物包含層〟は接近した時期の資料が混在することが少なく、また混在資料の除外も容易である。しかも単なる遺構一括資料に比して、一時に廃棄された資料を総括、つまり土器組成を包括した資料を得ることが可能である。以上のような理由で小規模〝遺物包含層〟の出土資料は、調査段階、整理段階とも決しておろそかにされるべきでないどころか、遺構一括資料を凌駕する良好な資料として昇華させることも困難ではないのである。



第53図　縄文時代後期後半の内黒田（大割遺跡）（1/2,000）

第54図　縄文時代後期後半の内黒田（加曽利Ｂ期の池花・池花南遺跡）（1/2,000）

第55図　縄文時代後期後半の内黒田（曽谷期以降の池花・池花南遺跡）（1/2,000）

7．縄文時代後期後半

①概観（第53図～第55図）

ここでは加曽利B期以降を扱うが、下限は便宜上縄文時代晩期初頭（安行3a期）までとする。内黒田遺跡群では縄文時代後期後半を通じて住居跡等の遺構は検出されていないが、3遺跡ともに随所に遺物包含層が形成されており、安行2期を除いて豊富な資料を得ている。

加曽利B期は池花遺跡、池花南遺跡の台地縁辺部、大割遺跡南縁中央から多くの出土地点が点在して検出された。大割遺跡の場合は集中地点は加曽利B2式土器主体であったが、遺跡全体では加曽利B1式土器から加曽利B3式土器まで混在していた。池花南遺跡では、地点による若干の様相は異なるが、加曽利B2式土器でも古相を示す段階が主体となる。また池花遺跡は加曽利B3式土器を主体として出土しており、短時の占地が、少しずつ地点を変えながら、繰り返し行われていったようである。なお池花南遺跡南半部の加曽利B式土器出土地点に重なるように、黒曜石の粗製剝片が集中的に残されているブロック群が確認されている。

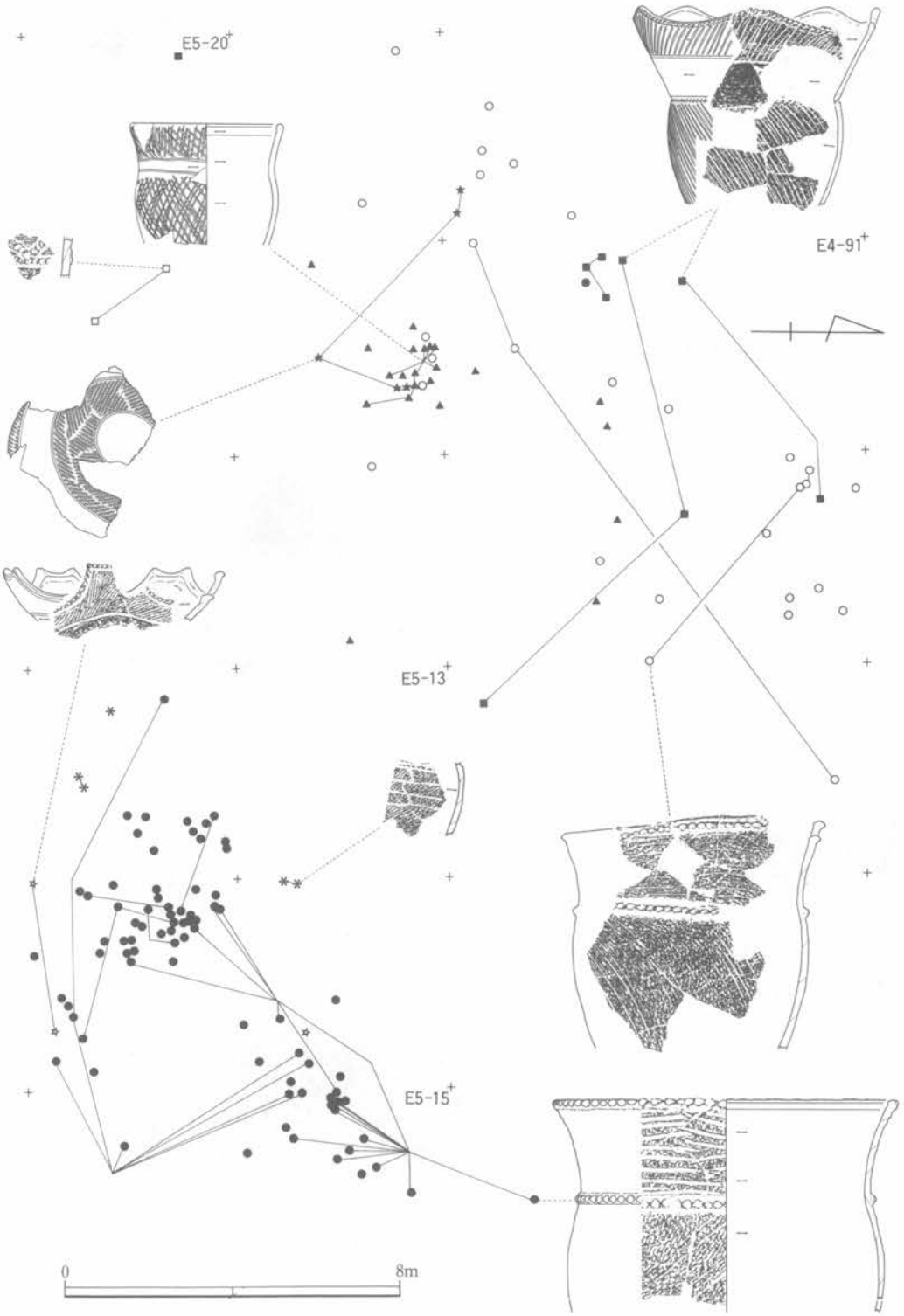
曽谷～安行1期は池花南遺跡の南半部に遺物包含層が認められた。この池花南遺跡南半部は縄文時代～弥生時代を通して最も重層的に遺物包含層が残されているところでもある。それ以外では該期の遺物はごく断片的であった。

安行3a期には池花遺跡に小規模な遺物包含層が形成されている。しかし安行2期は内黒田遺跡群の空白期であり、また安行3a期以降も内黒田遺跡群にはしばらく集団の占地の痕跡が見られなくなる。

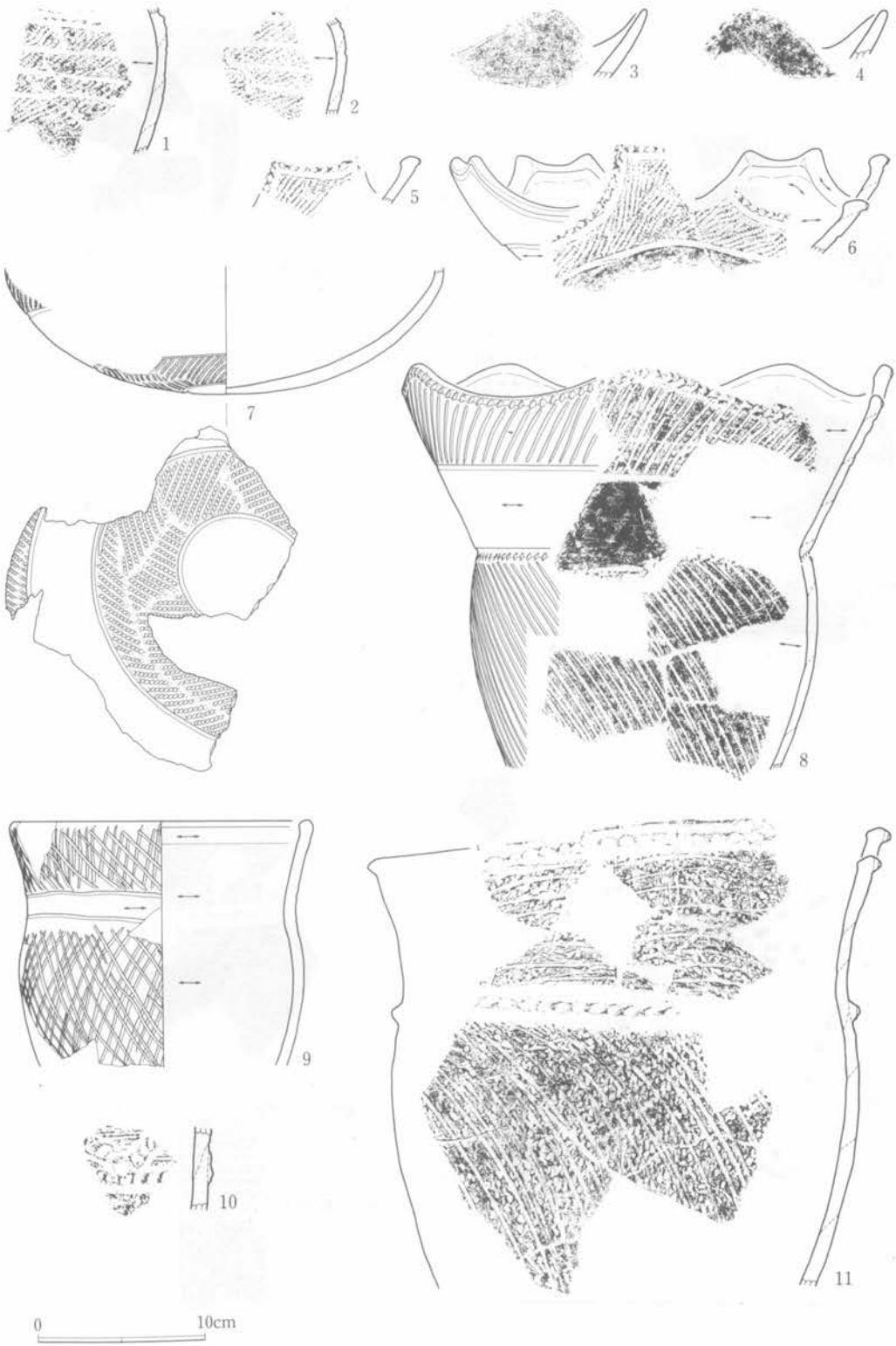
隣接の千代田遺跡群ではIII区、IV区及び八木原貝塚で加曽利B期以降後期末に至る豊富な遺構、遺物が確認されており、また千代田V区では加曽利B1期と後期末から晩期前半の資料が豊富に検出されている。さらに物井地区御山遺跡などでも該期に関しては多くの資料が得られており、後期前半同様に総体的な検討、把握が必要とされる。

②大割遺跡E4・E5区加曽利B式土器出土地点

出土状況（第56図）　大割遺跡では最も加曽利B式土器が集中した地点で、大きく2箇所に分かれ、相互には個体を分有しない。一方はE4－91～93区、E5－00～03、10～11、20～21区、一部D5－19区に分布し、長径24m、短径12mの楕円形の分布範囲を持つ。6個体が含まれる。他方はE5－14～15、23～25区に分布し、長径13m、短径7mの楕円形の範囲を有する。個体数は少なく3個体のみ。仮に前者をA地点、後者をB地点とする。両者の出土土器を比較するとB地点の方が古相を示しているようで、全体を一括のものと考えるには問題があるかも知れないが、少なくともA、B各地点毎ではまとまった資料であると言えるか。なお当地点は称名寺期の遺物包含層と一部重複していたが、出土レベルの差は殆ど皆無であった。



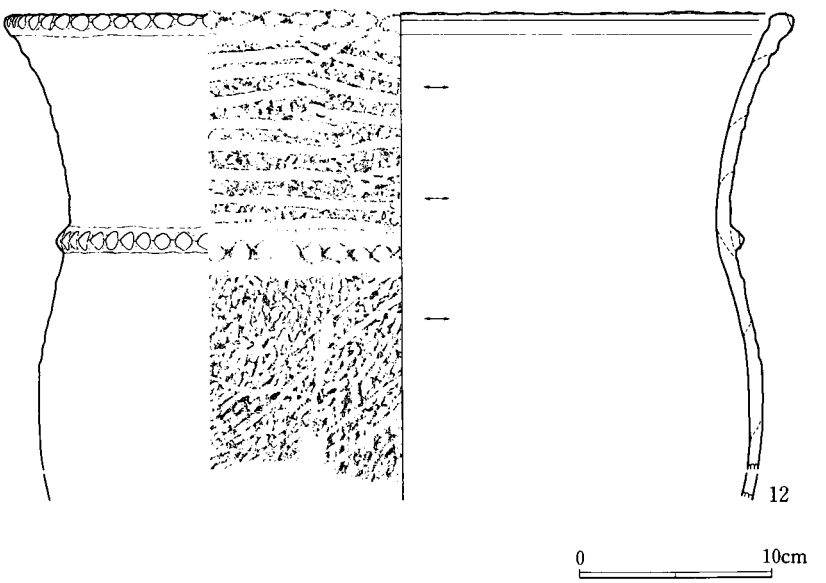
第56図　大割遺跡Ｅ４・Ｅ５区加曽利Ｂ期遺物出土状況（1/160）



第57図　大割遺跡E4・E5区出土加曽利B式土器(1)（1/4）

出土土器（第57図、第58図、図版32）　全体は加曽利Ｂ２式土器の範疇に収まる。１～２、３～４、５～６がそれぞれ同一個体である。Ｂ地点出土の個体は１～２、５～６、12。１～２は胴部上半破片で、縄文（ＬＲ）の地文の上に４条の水平沈線を施しその沈線間に波状の沈線を垂下させる。また肩部には刻目を連続させている。５～６は５単位の波状口縁を持つ土器で口唇部にはやはり刻目を連続させる。口縁内側はかなり肥厚する。縄文はＬＲで、１条の沈線の下は丁寧に研磨されている。１～２と５～６は、確証はないが同一個体の可能性がある。12は粗製の大形品である。推定口径41cm余り。口縁端部と肩部に２条の突帯を貼り付け、上に指頭押捺による刻目を施す。地文は粗いＲＬと思われ、頸部には太い棒状工具による横位条線が、胴部には竹管状工具によると思われる２本単位の斜位条線が施される。

Ａ地点出土の個体は３～４、７～11である。３～４はD5－19区から出土した波頂部の破片２点で、他に同一個体と思われる土器片は見当たらなかった。７は浅鉢底部～胴部である。渦巻状をなすと思われる磨消縄文による文様を持つ。研磨は非常に丁寧。８は条線施文の土器。５単位の波状口縁を持ち、口縁端に刻目を施す。頸部に無文帯があり、その上下に区画沈線で界されて斜位の条線が施されるが、頸胴界にも刻目が見られる。９は斜格子状条線を持つ土器。頸部には２条の沈線に区画された無文帯がある。口縁内面には凹線が巡る。10は突帯を貼り付ける粗製土器の小片である。全体の文様構成が不明なのは残念であるが、口縁部、肩部だけでなく頸部にも突帯による装飾を持つものである。11は口縁部と肩部に突帯を貼り付ける個体。地文は粗いＬＲで頸部は横位、胴部は斜位の条線が入る。



第58図　大割遺跡Ｅ４・Ｅ５区出土加曽利Ｂ式土器(2)（1/4）

③大割遺跡集中地点外出土加曽利B式土器、他

出土状況　前述の集中地点以外での加曽利B式土器は、分散的にしか検出されていない。称名寺式土器の場合のように数個体がまとまるような傾向は少ない。2～3個体がまとまる地点を列挙すれば、A2－76区で2個体、A5－47区で2個体、B4－56～68区で3個体、B5－30区で2個体、E4－44～64区で3個体などがあり、共伴として矛盾はないものがあるが量的に乏しい。また総体として時期差も大きく、加曽利B1式土器からB3式土器、さらに1点ではあるが安行1式土器もある。

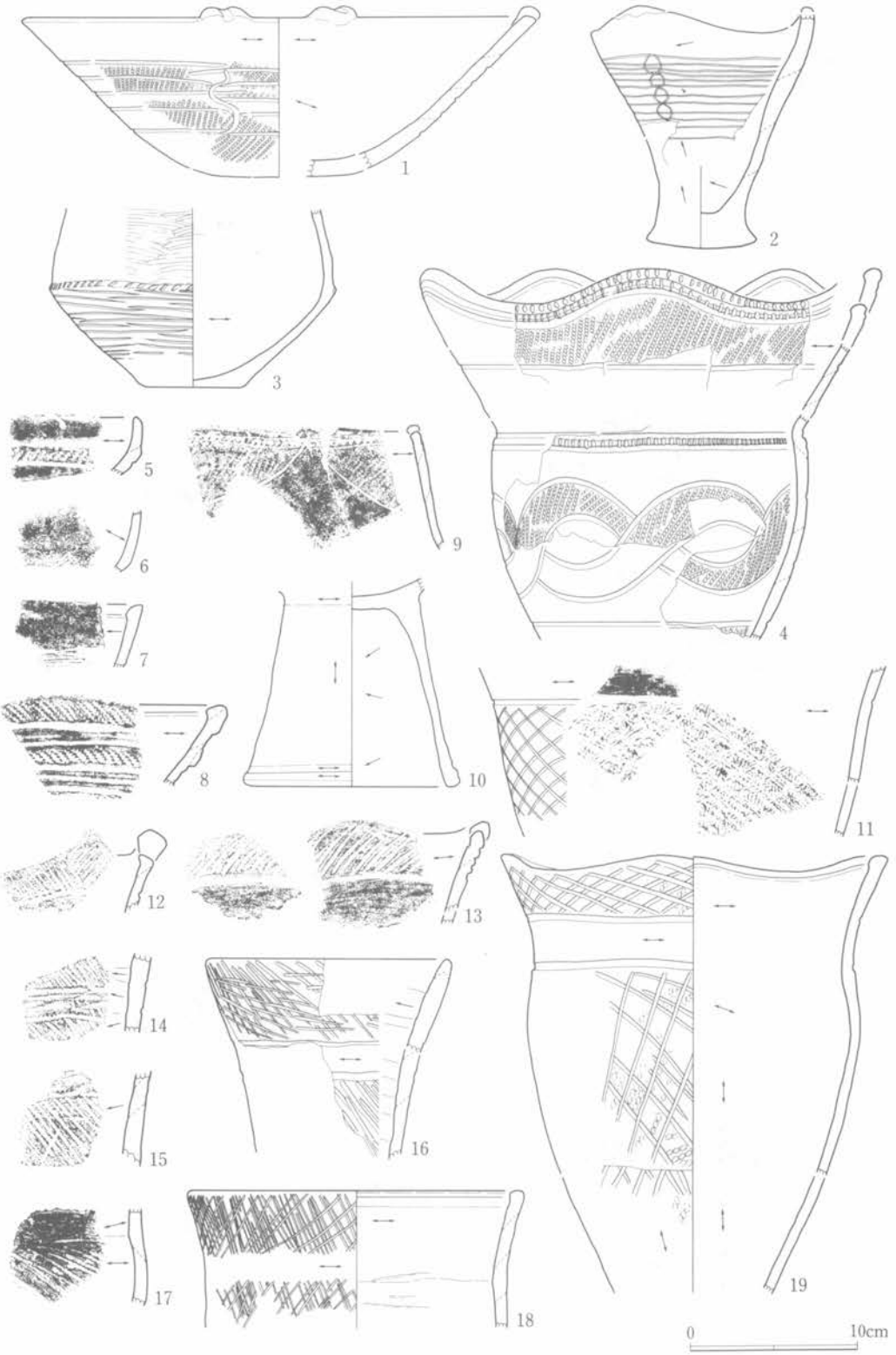
出土土器（第59図、第60図、図版33）　6～7、14～15、20～21、25～27、28～29、31～39がそれぞれ同一個体である。1は浅鉢で口端に貼り付け文を有する。遺存度は1/3程度のため、単位数は不明。口縁部は研磨され、以下LRを地文として5条の水平沈線を施しその間に波状沈線を垂下させる。2は1と同一グリッドから出土したもので3単位波状口縁をなす小型品。体部には12条の細い水平沈線を引き、波頂部下の沈線間に同様の細い沈線で8字文を加える。3は胴部中位で「く」字形に屈曲する鉢である。屈曲部に篦による刻目が連続し、胴部下半に鋭い篦による条線が施される。屈曲部以上は横位の研磨。千代田遺跡群IV区から瓜二つの土器が出土している。4は5単位の波状口縁を有するB3期の典型的な深鉢であるが、胴部文様が通常半単位ずつずらせた連弧の組み合わせであるのに対し、2本の縄文帯が8字状に交差する特異なもの。安行期には時折施文されるが加曽利B期には類例は見当たらない。

縄文施文の破片を5～9に示す。5は浅鉢の小片で、口縁下の屈曲部に縄文帯が見える。6～7は全貌が不明であるが、口縁部7は波状を呈し、その下に条線が施される。6は胴部下位で下端が屈曲し、縄文施文が認められる。8は安行1式の帯縄文系浅鉢で、同一個体の破片がもう1片あるだけで、他にこの時期の遺物は検出されていない。9は口縁に連弧線を持つ土器の破片である。

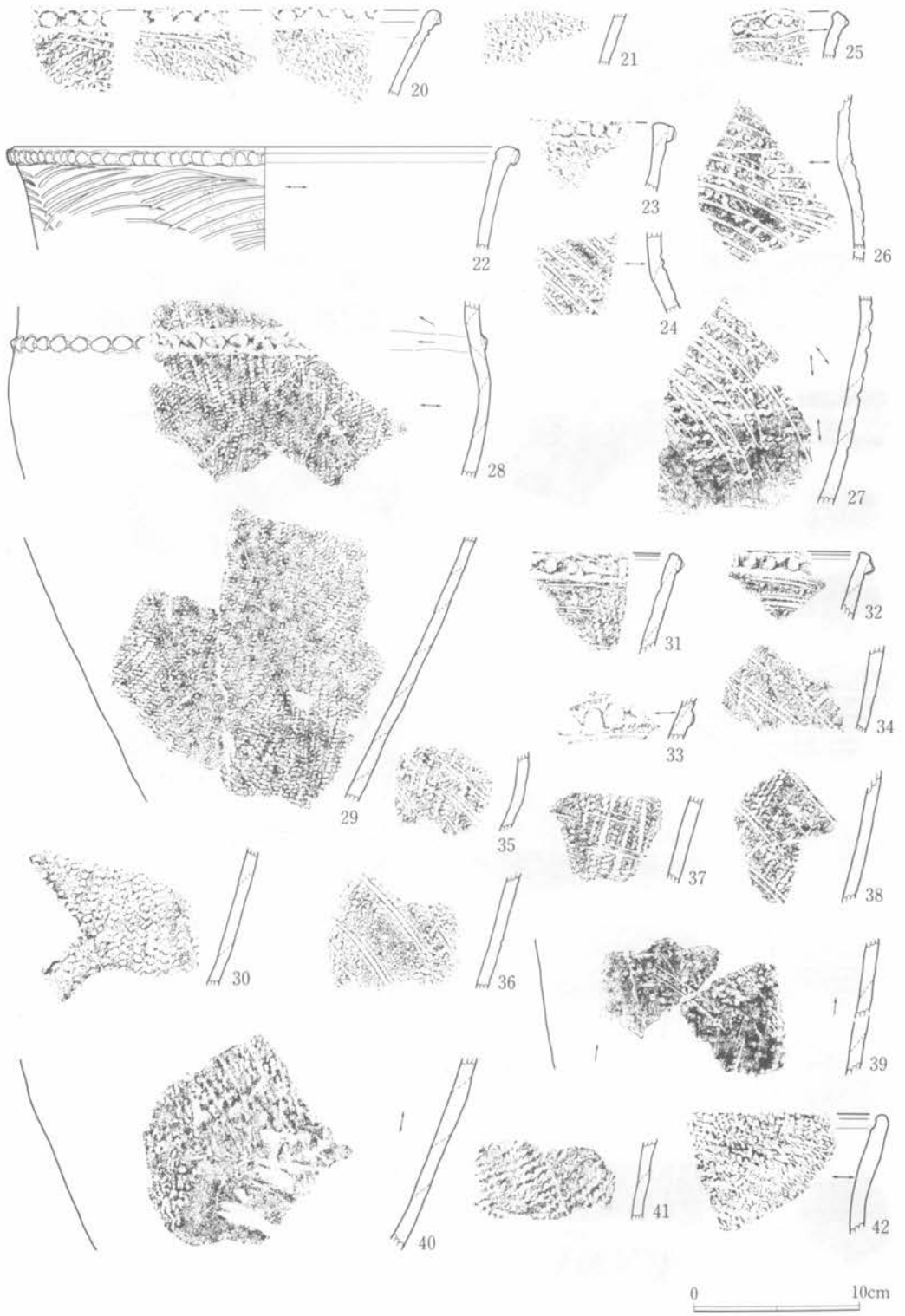
10は台付の土器脚部である。加曽利B期後半に比定されようが施文部が遺存しなかった。

11～19に斜条線、斜格子条線施文の土器を集めた。11は中でも丁寧に作られた土器である。撚りのしっかりしたRLを地文とし、頸部無文帯の研磨は丁寧。斜格子条線は胴部下位に及ばない。12、13、14～15は斜条線を持つ。12、13は波状口縁をなし、12の波頂部は著しく肥厚する。16は格子を意識しているが、施文が雑になっている。17は無文部区画沈線が明確でないものである。18、19は斜格子条線を施す土器であるが、18には無文部区画沈線が見られない。19は4単位波状口縁を有する。

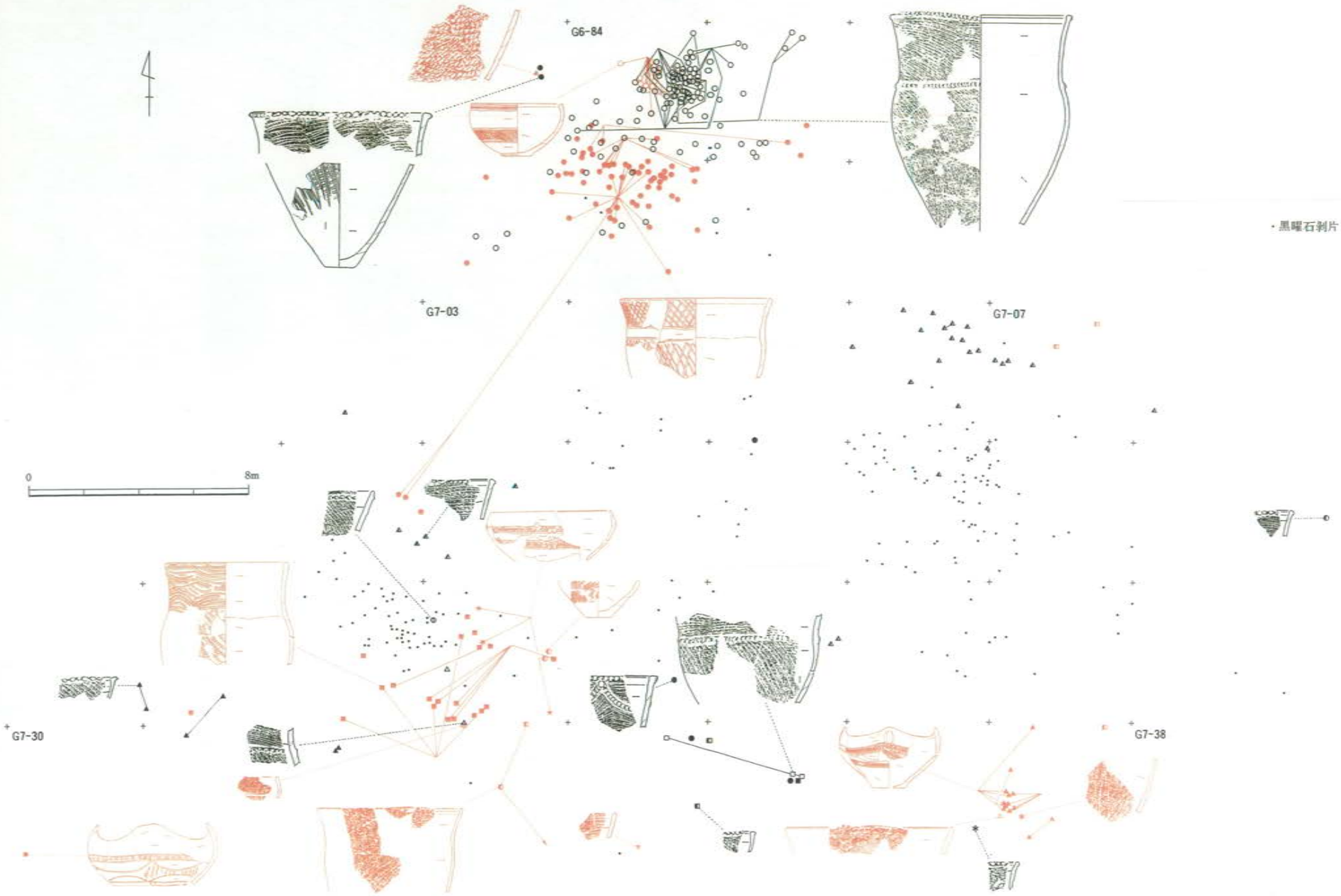
20以下には所謂「紐線文」あるいは縄文施文のみの粗製土器を示す。大きく分けて条線を加えるものとそうでないものがあり、また条線施文の中にも半截竹管を施文具とするものと1本ずつ施文するものがある。半截竹管施文によるものに20～21、31～39、1本単位のものに22、24、25～27、40がある。25～27は肩部に突帯を持たない。突帯の上にはいずれも刻目が施して



第59図　大割遺跡集中地点外出土加曽利Ｂ式土器(1)（1/4）



第60図　大割遺跡集中地点外出土加曽利Ｂ式土器(2)（1/4）



第61図　池花南遺跡G6・G7区加曽利B期遺物出土状況(1/160)

いるが、すべて指頭押捺によっている。口縁部突帯の貼り付け位置には口端から下がるものは認められない。地文となる縄文はＲＬ７個体、ＬＲ４個体でＲＬが圧倒する。

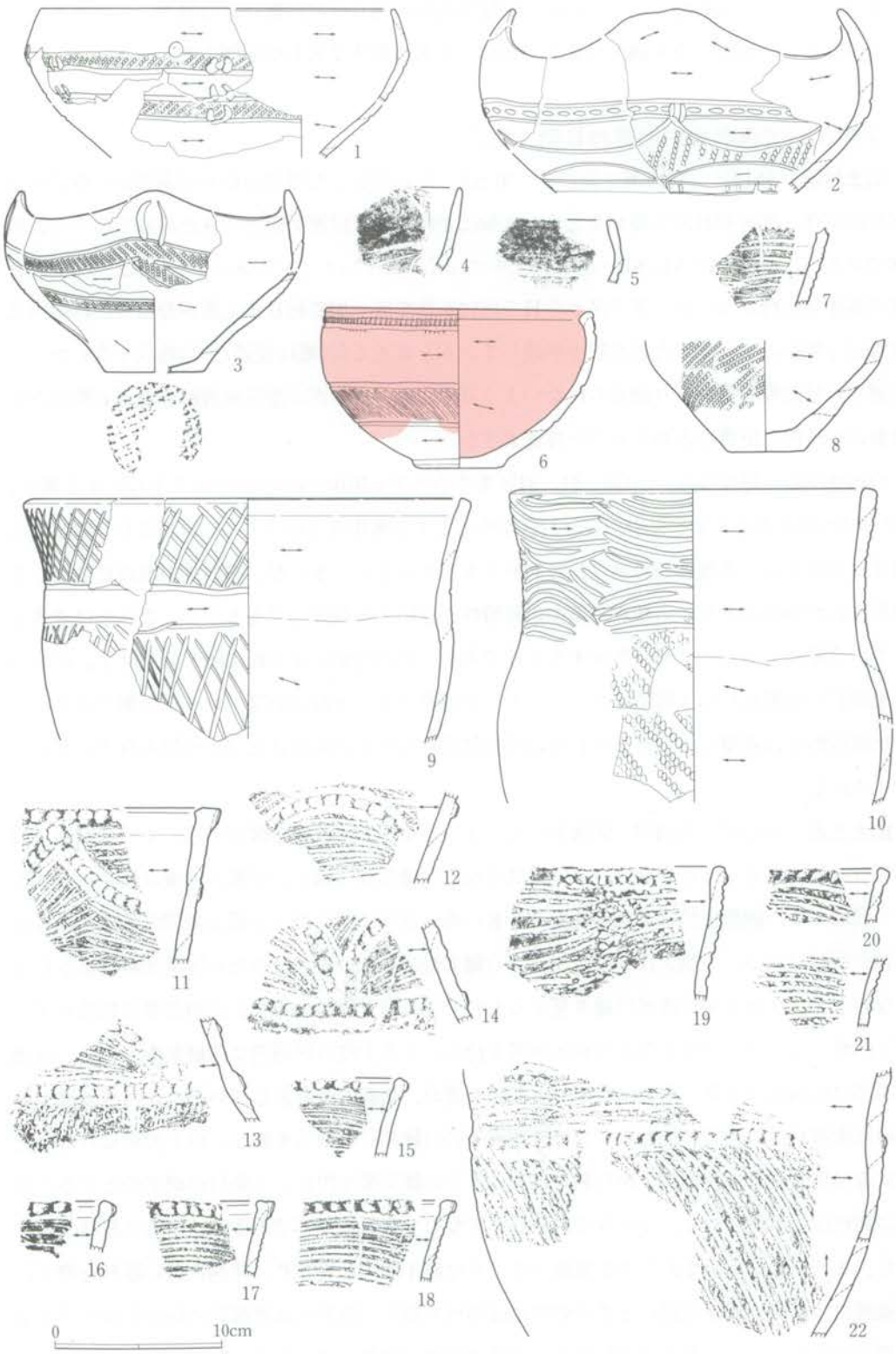
④池花南遺跡南半部加曽利Ｂ期Ａ地点

出土状況（第61図）　遺跡南半部の、古墳ＳＸ－01が所在した周辺のＧ６区南部からＧ７区北部に28個体の加曽利Ｂ式土器がまとまって検出された。原位置を図示できたのはそのうち25個体であるが、他にＳＸ－01、ＳＤ－01の覆土中にふくまれていたものがある。またＳＸ－01周辺ほどの集中度を持たないが、Ｆ７区からＨ７区にかけて広く加曽利Ｂ式土器が分布し、巨視的に見れば３箇所のまとまった包含層を形成していると言える（詳細は後述）。当地点を含めた出土土器からは時間差はあまり認められないように思われ、当地点は池花南遺跡加曽利Ｂ期遺物包含層の中核的な位置を占めるものと言えようか。

分布状況は一様ではない。G6－84、94区を中心とする集中、G7－06、07を中心とする集中、G7－12～23を中心とする集中、G7－37区を中心とする集中などがあり、その間にも分散的に土器片は分布する。各個体の分布は比較的狭くまとまるものが多いが、複数集中地点に分散して検出された個体があり、当地点各集中の同時性を証明する現象と言えようか。これらは全体として、途絶はあるものの環状を呈するようである。その内側には土器は殆ど分布せず、代わって黒曜石の粗製剝片が３箇所のブロックとして分布する。土器の廃棄ブロックと剝片のブロックは直接的には重複しないが、それらの分布状況からすると両者は充分に相関を有するものと考えられる。

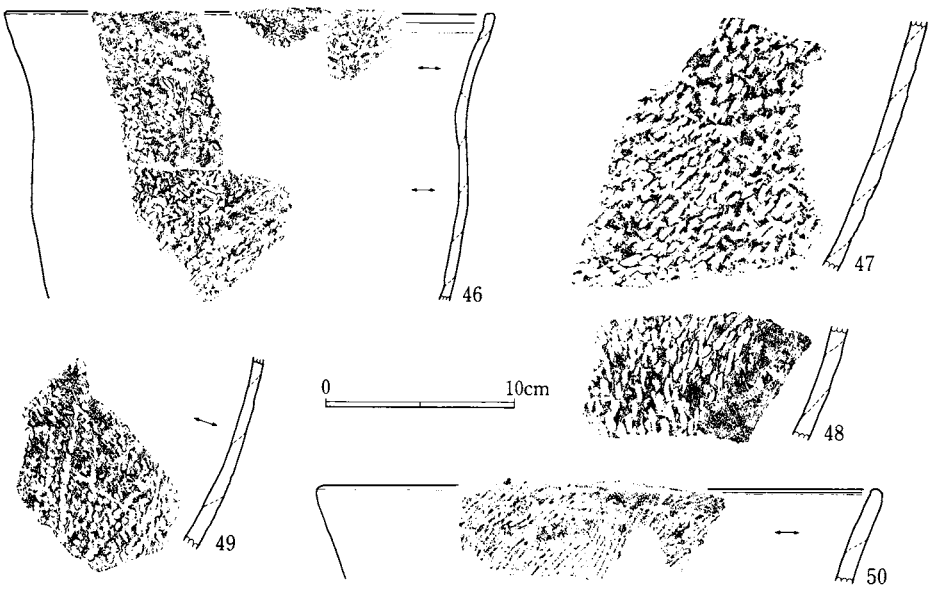
出土土器（第62図～第64図、図版35～37－１）　１～６に浅鉢を図示する。４～５が同一個体で計５個体ある。１は平縁で、よく研磨される口縁部は内傾し、胴部との境は僅かに段状となり屈曲する。胴部上位に２条の縄文（ＬＲ）帯が巡り、縄文帯上と縄文帯間の無文帯に()状沈線が縦位に並ぶ。()状文は５単位か。上の縄文帯の上側は段となるため区画沈線は施されていない。２、３は４単位波状口縁を呈するものでよく似た器形を持つ。口胴部界は屈曲せず、円く内湾していく。２は２条の沈線区画帯を持ち、うち上位の区画内に連続刺突を施す。区画帯の間には縄文（ＬＲ）地文に上下から弧線を連ね、弧線内を磨消している。また波頂部下の沈線区画帯には()状文が加わる。３は波頂部下の口縁部に()状文を施し、以下波形に合わせた縄文帯が施文され、波頂部下から右下がりにさらに縄文帯を出し、２条目の縄文帯とする。底部に網代圧痕が見られる。４～５は口縁部小片なので全貌は不詳であるが、やはり波状口縁を持ち、また口縁部下は１のように屈曲する。６は前４個体と異なり、球胴に近い器形を持つ。口縁部には２条の沈線を巡らせてその間には刻目を施し、胴部には沈線間に斜位条線を施す文様帯を有する。この土器には内外面とも赤彩の痕跡が顕著に残されていた。

７は条線施文の胴部破片である。肩部には刻目が施される。８は縄文が施文される底部破片



第62図　池花南遺跡G6・G7区出土加曽利B式土器(1)（1/4）

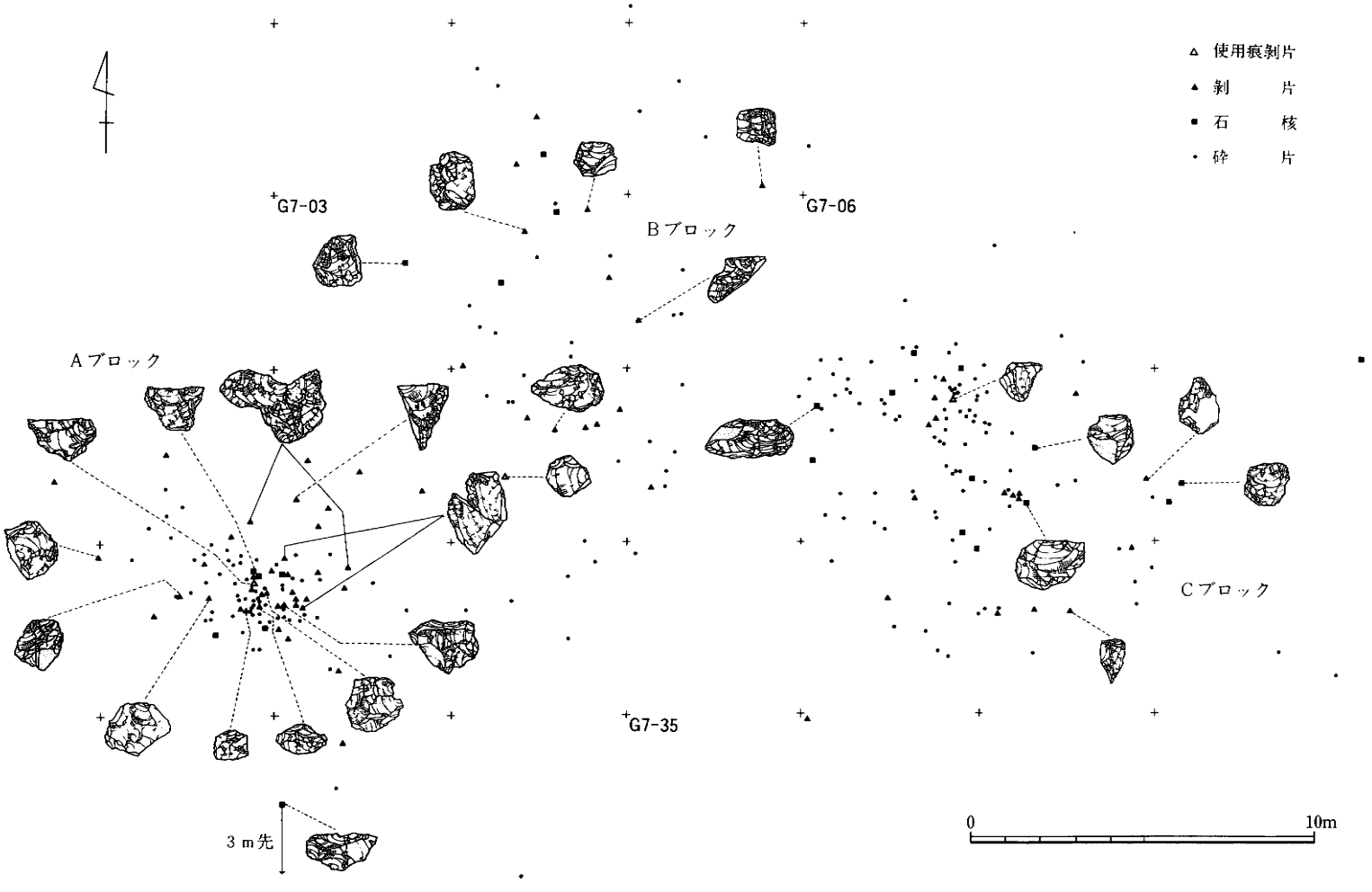
第63図　池花南遺跡Ｇ6・Ｇ7区出土加曽利Ｂ式土器(2)（1/4）



第64図　池花南遺跡G6・G7区出土加曽利B式土器(3)（1/4）

である。遺存部の上端は擬口縁であるが、器形等よく解らない。9は頸部無文帯を持つ条線施文の個体で当地点唯一のものである。条線は斜格子状となる。10は壺とされる土器である。緻密な胎土と堅緻な焼成を特徴とし、口頸部には太い沈線で上下からの弧線が描かれ、胴部には大粒の縄文（RL）が施されている。

11～45は突帯を持つ「紐線文」系土器である。11～14、15～16、17～18、20～21、24～26、27～29、30～36、37～38、39～40、42～43がそれぞれ同一個体。縄文地文の上に条線を施文するものが圧倒的で、全15個体のうち条線を持たないものは44、45の僅か2個体に過ぎない。また条線施文の土器の殆どは口縁部と肩部に2条の突帯を有すると考えられ、肩部の突帯を有さないと思われるのはおそらく27～29の1個体だけである。これらの土器群のなかで特徴的なのは11～14の個体で、2条の突帯の他に口縁部突帯と肩部突帯の上下から弧状に連続する突帯を貼り付けている。条線は概ね口縁部は横位で以下斜位、そして縦位に近くなるが、肩部の突帯を境にして施文方向が変わるものとそうでないものがある。23のように条線を施文した後に突帯を貼り付けるものがあり、施文方向の変化の有無は施文順序に起因するものであろう。突帯にはすべて刻目が施されている。刻目には指頭によるものと篦状工具によるもの、棒状工具によるものがあるが、22、23、30～36、37～38など篦状工具によるものが多いのが当地点の特徴と言えようか。地文の縄文は条線が密に施されてよく判らないものが多いが、RLの方が多用されるように思える。また44は他の土器とは様相が異なり、器形が直線的で撚りがしっかりした縄文（RL）が施され、突帯は口端からやや下がったところに巡る。他の土器とは別器種と考えるべきであろうか。



第65図　池花南遺跡G7区黒曜石製石器ブロック群（1/200）

46以下には全面縄文施文のみの土器を示す。47～48が同一個体である。いずれも単純器形を示すもので、46、47～48、49はＬＲ、50はＬと左撚り縄文が多用されている。内面は研磨されており、46や50に見るように口縁部に凹線が巡るか、あるいは僅かに段状になるのは該期の通例と同じである。

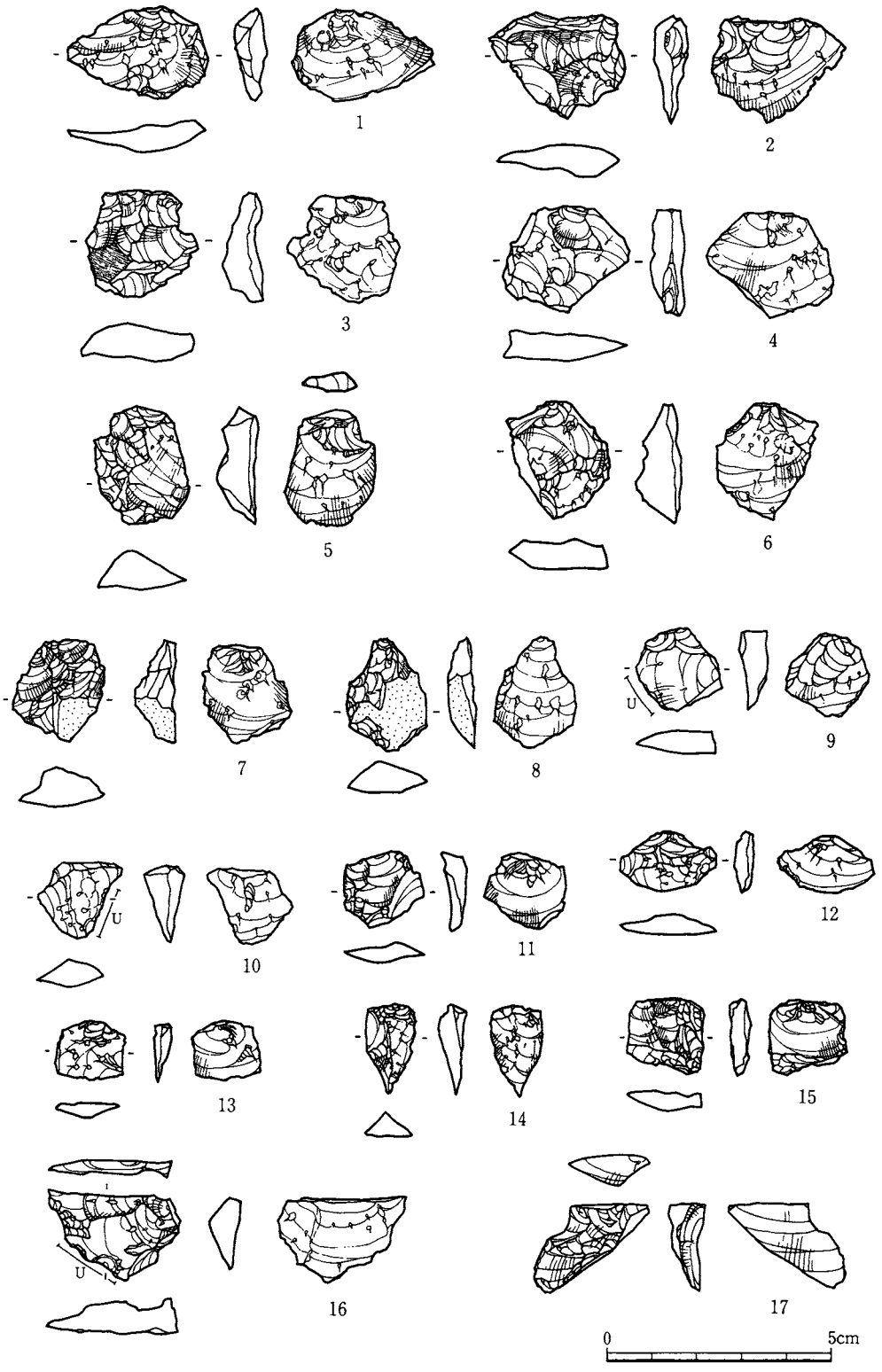
⑤池花南遺跡Ａ地点内石器集中

前出の土器出土地点のほぼ内側に黒曜石製の剝片、砕片他が集中して検出された。ここでは加曽利Ｂ式土器の分布と相関があるものと見て、加曽利Ｂ期に形成された石器製作空間として報告する。

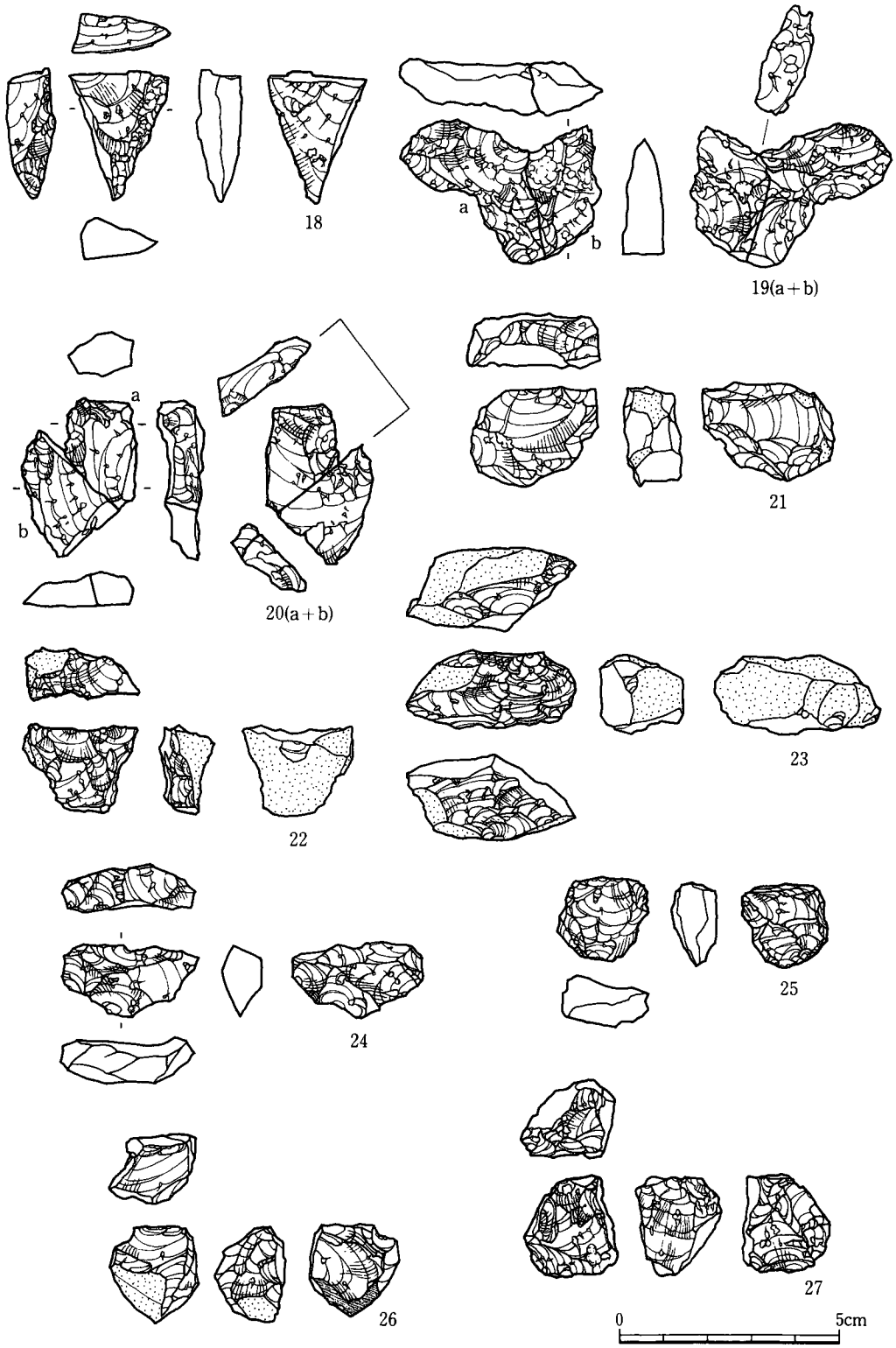
出土状況（第65図）　検出位置はG6－94～96、G7－03～07、11～18、22～28、33区であるが、遺物の分布は明らかに３つの集中を持っている。西からＡブロック、Ｂブロック、Ｃブロックとする。Ａブロックは最も集中度の高いブロックである。中央に密度の高い部分があり、南西側を除く周囲に遺物は拡散するが、広くは及ばない。遺物点数109点、分布範囲は東西10.5m、南北9.8m を測る。Ｂブロックは逆に最も散漫な分布を示すブロックである。内部で密度が高くなる部分はなく、むしろ中央部は希薄になる。遺物点数54点、分布範囲は東西11.7m、18.5m を測る。Ｃブロックは北寄りに高密度の部分を持つブロックである。出土点数が最も多く、Ａブロックよりも広く拡散する。遺物点数125点、分布範囲は東西16.3m、南北13.8m を測る。付近はII ｂ層（新期テフラを含む）よりも上が削平されていたためか、垂直分布は上下幅をあまり持たない。また加曽利Ｂ式土器との出土レベル差が認められない上に、縄文時代～弥生時代の他の時期の遺物とのレベル差も認められないため、敢えて無意味な垂直分布図は呈示しない。この点は土器を主体とする包含層でも同様である。

出土遺物（第66図、第67図、図版74）　剝片、砕片、石核がある。しかしこの呼称は便宜的なものである。当ブロック群の使用石材は気泡が多い非常に粗悪な黒曜石であり、一般的な剝片剝離を行いえていない。代わって用いられるのが両極打法で、遺物の大半はそれによって砕けたものと見てよい。故に剝片と砕片の区分は、石器としての使用に堪えうるものかどうかというきわめて主観的な基準に頼らざるをえず、剝片は最大長、最大幅ともに１ cm を越えることが最低条件である。したがって実際には剝片と砕片の区別は明確でない。またさらに顕著な特徴として、加工痕を持つものが皆無という点が挙げられる。元来の石材の粗悪さによる制約として、石鏃のような微細な調整を伴う定型的な石器の製作は不可能であり、縁辺を刃部として未加工のまま用いられたことは想像に難くない。また石鏃と同等の機能を有したものもありえよう。以下図示した石器について述べるが、剝片や石核（両極石核）を網羅して呈示したのではなく、出土遺物の代表的なものを示したものであることをまず記しておく。

１～20が剝片である。うち15までは positive bulb を残しているもの。不定形で比較的幅広の



第66図　池花南遺跡Ｇ７区Ａ～Ｃブロック出土石器(1)（2/3）



第67図　池花南遺跡Ｇ７区Ａ～Ｃブロック出土石器(2)（2/3）

第2表　池花南遺跡G7区A～Cブロック出土石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	使用痕
1	剥片	G7－04－31	黒曜石	21.0	30.9	6.5	3.01	—
2	剥片	G7－13－95	黒曜石	24.4	29.0	8.0	3.53	—
3	剥片	G7－12－16	黒曜石	24.1	25.7	8.0	3.93	—
4	剥片	G7－12－68	黒曜石	23.7	28.5	6.0	3.96	—
5	剥片	G6－94－64	黒曜石	26.2	20.7	8.2	3.48	—
6	剥片	G7－11－15	黒曜石	26.2	23.6	9.5	4.24	—
7	剥片	G7－12－81	黒曜石	22.6	19.4	8.5	2.52	—
8	剥片	G7－07－102	黒曜石	25.5	18.1	5.0	2.06	—
9	使用痕剥片	G7－04－71	黒曜石	16.5	18.0	6.5	1.85	○
10	使用痕剥片	G7－06－175	黒曜石	17.8	19.2	8.5	1.58	○
11	剥片	G6－94－7	黒曜石	15.7	19.0	3.8	1.10	—
12	剥片	G7－12－50	黒曜石	13.2	21.2	3.5	0.98	—
13	剥片	G7－12－149	黒曜石	14.0	15.9	3.5	0.65	—
14	剥片	G7－17－120	黒曜石	20.3	11.3	5.5	0.81	—
15	剥片	G6－85－9	黒曜石	16.5	16.8	4.9	1.35	—
16	使用痕剥片	G7－12－10	黒曜石	20.5	28.6	7.5	2.70	○
17	使用痕剥片	G6－95－51	黒曜石	18.8	19.0	7.7	2.18	○
18	剥片	G7－03－34	黒曜石	30.0	23.5	11.5	4.49	—
19a	剥片	G7－02－6	黒曜石	41.1	22.5	10.1	6.52	—
19b	剥片	G7－13－8	黒曜石	20.6	32.9	11.0	4.72	—
20a	剥片	G7－13－26	黒曜石	26.0	17.8	7.5	3.52	—
20b	剥片	G7－13－56	黒曜石	25.6	25.5	10.9	3.83	—
21	石核	G7－07－170	黒曜石	22.5	30.2	11.0	8.46	—
22	石核	G7－12－3	黒曜石	21.5	27.8	12.5	6.04	—
23	石核	G7－06－63	黒曜石	18.5	38.5	20.2	13.66	—
24	石核	G7－33－4	黒曜石	17.2	30.8	9.5	4.24	—
25	石核	G7－08－20	黒曜石	19.2	20.9	10.5	3.71	—
26	石核	G7－07－90	黒曜石	22.1	23.1	16.0	6.06	—
27	石核	G6－93－28	黒曜石	24.6	20.5	24.9	10.65	—

剝片が得られており、長幅比の極端な大小は認められない。これらのうち9と10には刃こぼれ状の微細剝離が観察され、かなり小型の剝片でも刃器として使用されたことが窺われる。

上記のような小型の剝片群に対して、明らかに折断が用いられた剝片群がある。折断の結果剝片の大きさは前述の小型剝片群と等しくなっている。16は末端側が残されたもので、一部に刃こぼれ状の剝離痕が見られる。また左縁と折断面は先鋭な尖頭部をも作りだしている。17も同様に剝片を横断して折断されている。またこれは末端を斜めに折断し、その反対側の左側に使用痕と思われる微細剝離が残されている。18は剝片を横断する折断と縦断する折断が併用されて整美な三角形をなすものである。左縁は厚みのある折断面であるが、末端は鋭い尖頭部を形成しており、刺突を第一義的な機能とするものか。19、20は2点の剝片が折断面で接合したものである。19bや20bなど折断によって尖頭部を生かそうとした企図が窺われる。

21以下に石核を示す。21～23の3点は多面体を呈し、多方向からの剝離痕を有する。両極打

撃が打撃軸を変えて繰り返されたものであろう。23には小剝離の連続する潰れが顕著である。24～27は上下からの剝離痕が明確なものを集めた。25などは楔形石器と呼称しても違和感はないが、その性格は両極石核である。

資料総数は原位置が明らかなものが289点で、SX－01周溝一括遺物64点を加え、計353点である。剝片、砕片、石核の各ブロック毎の点数は以下の通りである。

	Aブロック	Bブロック	Cブロック
剝片	39	13	17
使用痕剝片	1	2	1
砕片	64	35	94
石核	6	4	13
計	110	54	125

これらについて母岩別分類を試みた。おそらく4～5個体が主体になっているように思われた。しかしながらいずれもきわめて酷似した粗悪黒曜石であるために、ある程度確実性のある母岩別分類を行いえず、母岩別資料分析を断念した。

ここで報告した資料は、おそらく池花南遺跡南半部における加曽利B期遺物包含層の性格を如実に物語るものに相違ないが、石鏃等の製作を目的としないかかる粗製剝片群は、近隣地域においていまだ報告例が知られていない。「Tool」が認められない故の軽視はなされるべきでないことは言うまでもない。類例の増加が望まれる。

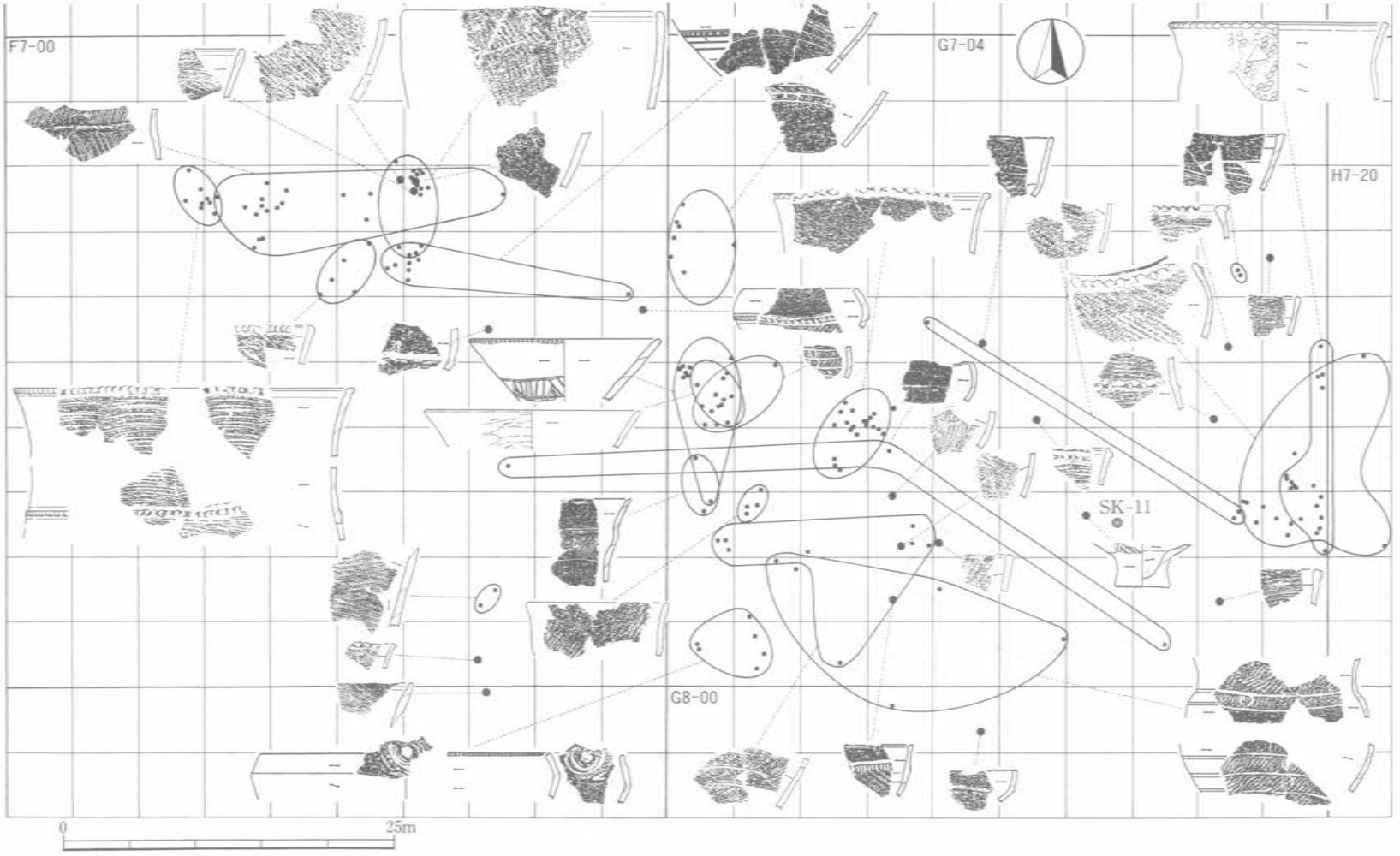
⑥池花南遺跡SK－11、南半部加曽利B期B～D地点

出土状況（第68図）　前述のG6区南端からG7区北半で検出された加曽利B式土器及び黒曜石製粗製剝片の集中地点（A地点）の南側や西側でも、それに連続するように広く加曽利B式土器が分布していた。集中地点とは言っても最も多くの個体がそこで検出されたというだけで、現実には土器片の分布はF7区北半からG7区のほぼ全域で途絶することはない。しかしまた土器片の分布状況は大きく見て3つにまとまりを持っており、B、C、D地点とする。

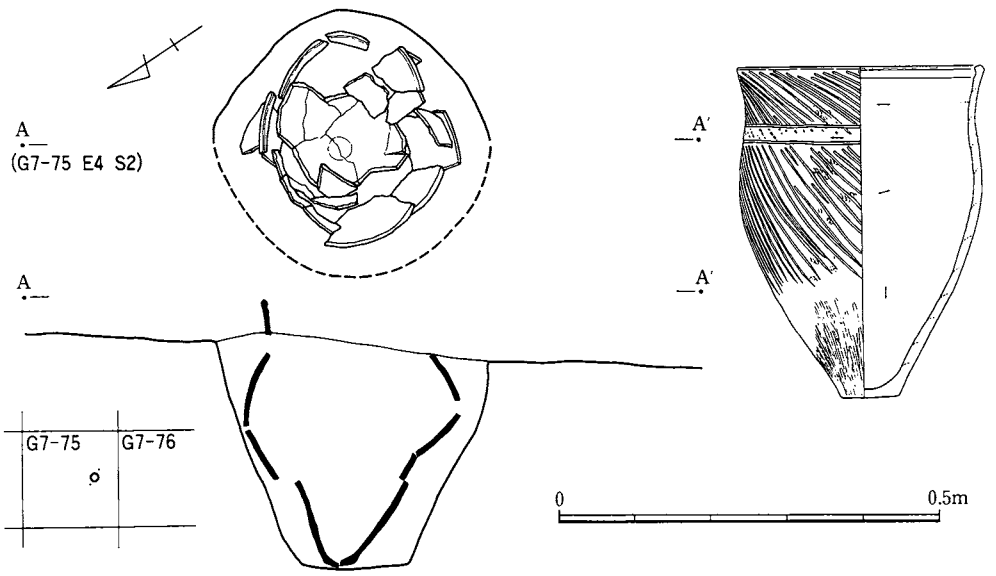
F7区北半の集中をB地点とする。F7－22～36区に主体的に分布し、そこに8個体が検出され、やや離れて1個体が出土した。池花南遺跡南半部では最も独立的な地点である。しかしC地点から一部の破片を出土した個体もある。

G7区南西部の集中をC地点とする。個体数は多いが分布範囲も広く、集中範囲を特定できない。中ではG7－50区の集中度が高い。広範囲に拡散する個体が目立ち、集中の周縁部にも点々と土器片が出土している。A地点及びD地点との境界が不明瞭である。

G7区南東部の集中をD地点とする。集中度、個体数とも最小である。中ではG7－79区の集中度が高かった。またC地点とD地点に分かれて分布する個体が認められた。A地点との境界



第68図　池花南遺跡南半部加曽利Ｂ式土器の分布（1/500）



第69図　池花南遺跡 SK-11 （埋甕）(1/10)

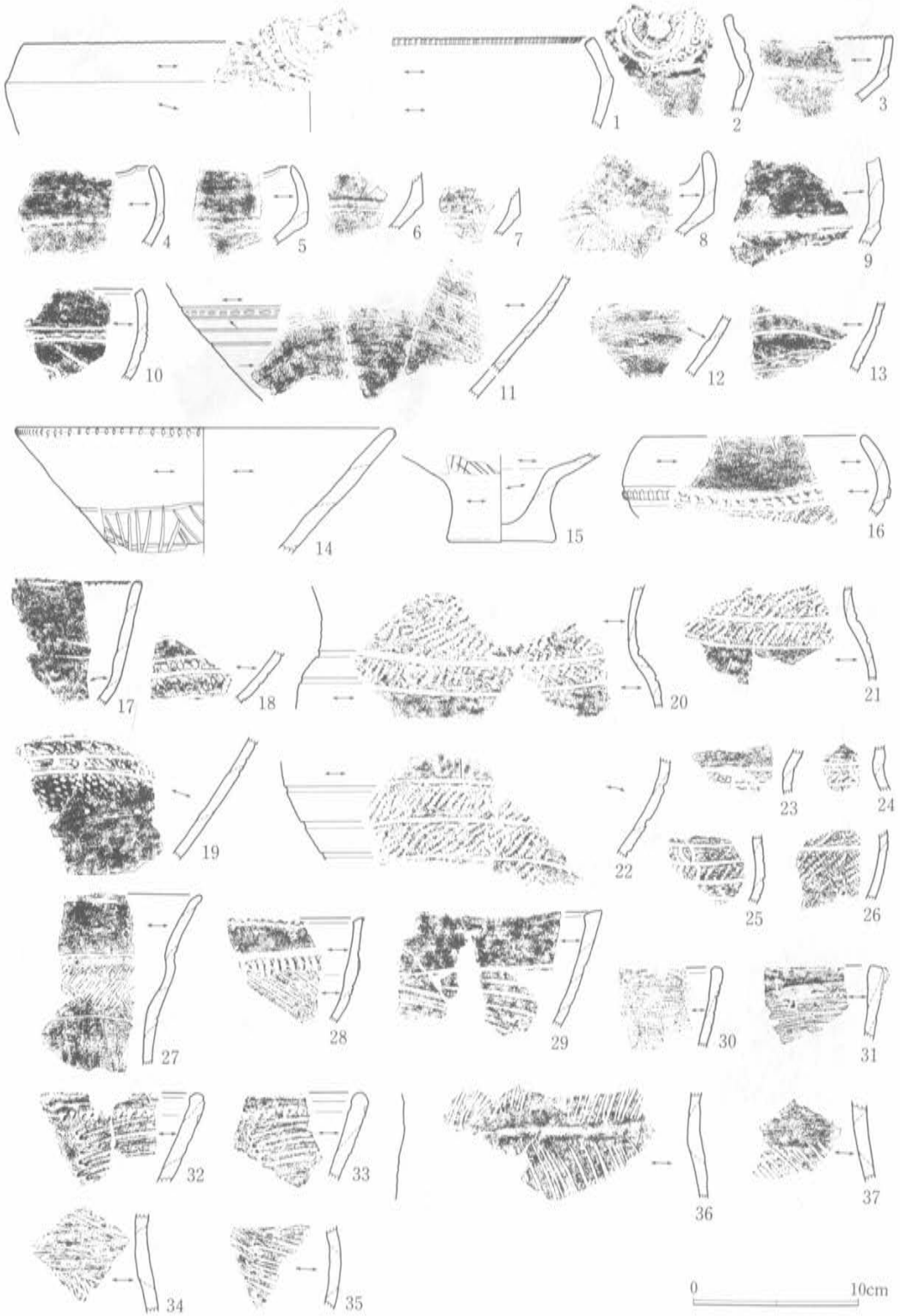
が不明瞭である。なおC地点とD地点の中間に埋甕SK－11が検出されている。

SK－11（第69図、図版７－１・２）　G7－75区で検出された加曽利B期の埋甕である。器高約35cm の深鉢（甕）を正位で直立させて埋設していた。掘り方の直径はおよそ37cm で、土器の口径25.6cm を10cm 余り上回るだけである。土器内部からの出土遺物等はない。

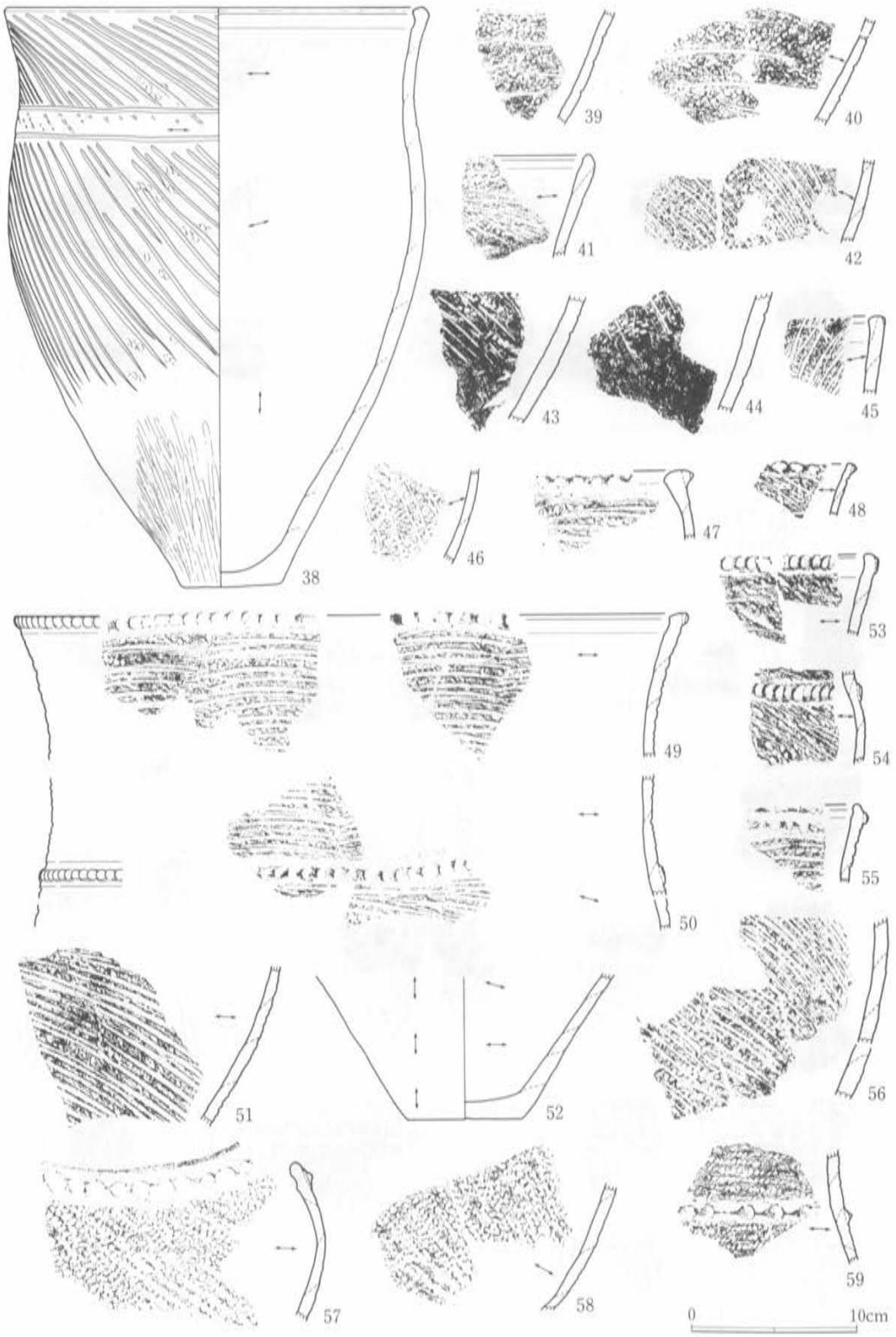
出土土器（第70図～第72図、図版37～39）　全地点の出土土器を一括して説明する。１～13、16、18～19が口縁部が内傾する浅鉢である。１～２、４～７、10～13、18～19がそれぞれ同一個体。１～２、３、４～７、８、９の５個体は口胴部界が屈曲するものである。１～２や９は屈曲部が削り出し段のようになる。１～２には最低２単位のC字状沈線と竹管刺突を組み合わせた文様を持つ突起が付く。口端が遺存しない９を除き、端部には刻目が施されるか小波状または波状口縁となる。この種の土器は遺跡北半部でも出土している。10～13、18～19は沈線による区画帯が見られるもので、いずれも区画帯内は列点が施される。10～13は同種の土器に通例見られる縄文を持たず２条の列点区画の間に沈線文様を施すが、そのモチーフは不詳。16は口縁部が円く内湾するもので、口胴部界に２条の沈線を巡らせその間に列点（刻目）を有する。以下縄文ＬＲ。

20～22、23～24の２個体は縄文（いずれもＬＲ）地文の上に沈線を巡らせ、沈線間に()状文を施文するものである。20～22の胴部最大径付近は研磨されているが、この個体は器形がよく判らない。

条線を施文する土器は数多い。それらの中で精製度の高いものは14、15、27～29である。14



第70図　池花南遺跡南半部出土加曽利Ｂ式土器(1)（1/4）

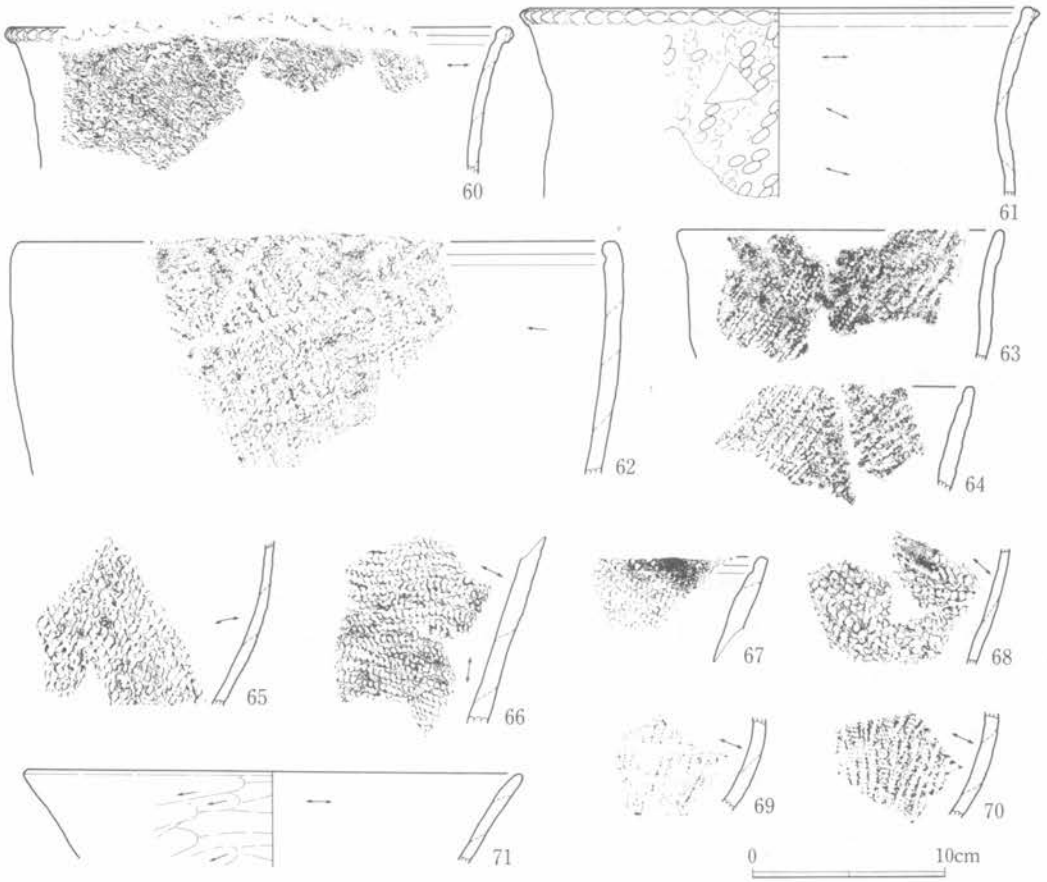


第71図　池花南遺跡南半部出土加曽利Ｂ式土器(2)（1/4）

は直線的に大きく開く器形を持ち、口端に刻目、胴部中位に条線（沈線）帯を有する。15も14に類似した条線を施文する個体で、一見台付土器に見えるが内面は中央部が深くなっている。また27も14と同様の区画された条線帯を持つ土器である。以上の土器の条線はいずれも鋸歯状の文様を意識しているであろう。遺存部分に条線は見られないが17もあるいは同種のものか。他方28、29は口縁に無文帯を持ち、１条の沈線を巡らせた下は斜位の条線を施文するもの。

30、32以下46までは条線を施文する精製度の低い土器である。32～33、34～37、39～40、41～42、43～44がそれぞれ同一個体。この中で頸部に無文帯を持つ個体に34～37と38がある。38は埋甕SK－11に用いられていた土器で、胴部下位を除き全面に斜位の条線を施した後に頸部に２条の沈線を引き、その間を研磨しているが、一部の条線は残っている。他の個体は縄文地文の上に疎な条線を施す39～40、43～44、46と密な条線を施すそれ以外があるが、前者は突帯が付く可能性が強く、別器種と見ておくべきであろう。また後者は時期的に降る可能性が強いものがある。

31と47以下61までに突帯を巡らせる土器を集めた。49～52、53～54、55～56、57～58がそれ



第72図　池花南遺跡南半部出土加曽利Ｂ式土器(3)（1/4）

ぞれ同一個体である。大別して縄文地の上に条線を施文するものと縄文だけを施文するものがある。前者には条間が密な個体が多い。肩部に突帯が付くかどうかは不明のものもあるが、条線が施文される土器については47のような器形を除いて突帯を2条巡らせることが多いと思われる。縄文施文のみの個体は57以下であるが、これらは59を除いて突帯は口縁部に1条巡るだけであろう。これらのうち59の突帯は、刻目が間隔を置いて施される特徴的なものである。さて上記土器群に用いられる縄文施文原体にはＬＲとＲＬがあるが、とくにどちらかに偏る傾向は見いだせない。

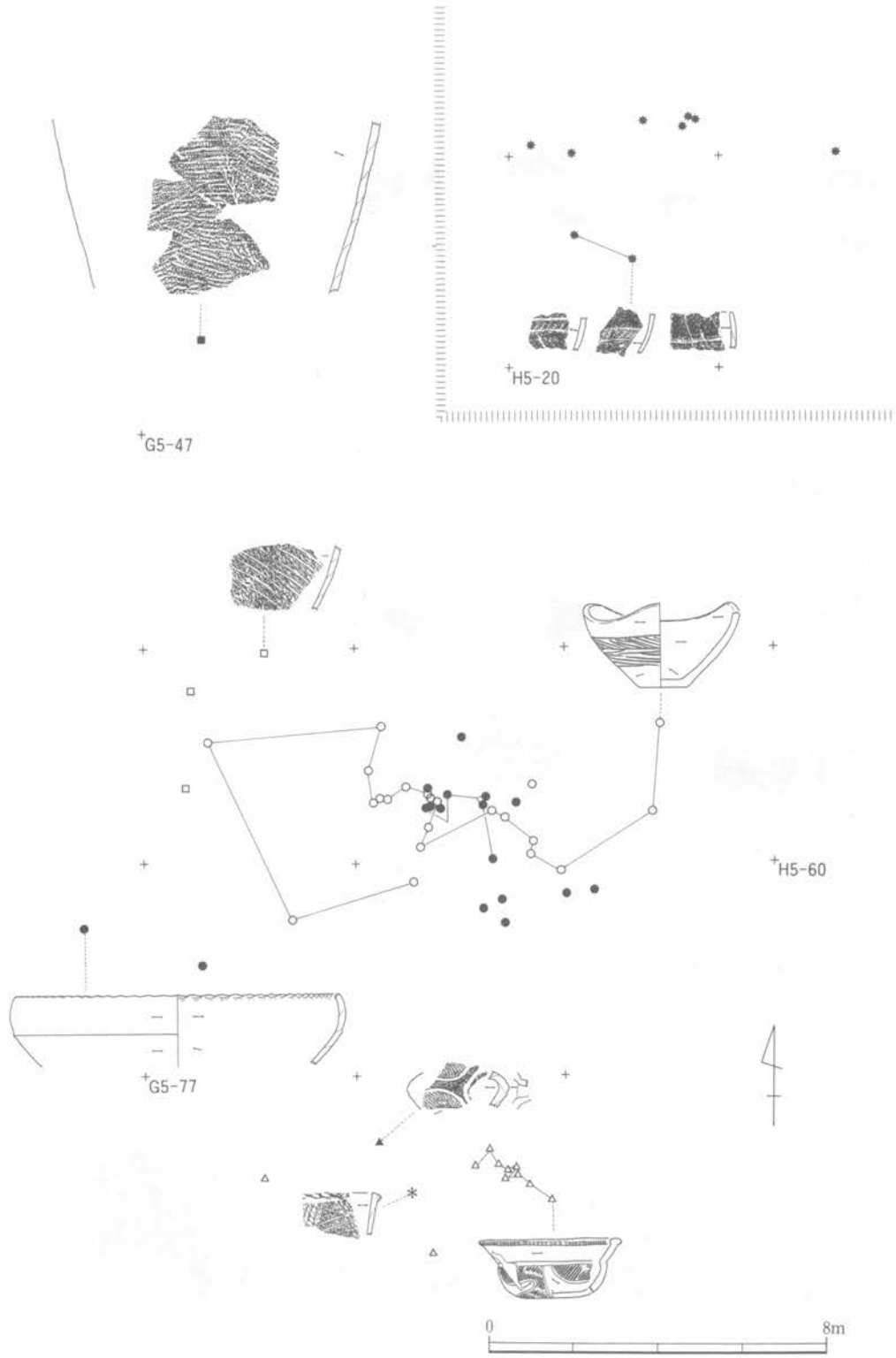
62以下は突帯を持たない土器片である。70までは全面に縄文を施すもの、71は無文のもの。縄文を施す胴部破片には本来突帯を有する個体も有りえよう。63～64、69～70がそれぞれ同一個体である。またその2個体の縄文はＬＲで、他の5個体はＲＬとなっている。71は口縁部が強く外反すると思われるもので、内面は平滑に研磨されているが、外面は横位の篦削りによって仕上げられている。

⑦池花南遺跡北半部加曽利Ｂ式土器出土地点

出土状況　池花南遺跡の北半部もＧ5区を中心に広範囲に加曽利Ｂ式土器が分布していた。ここでは古墳群造営の影響もあってか、量的に集中出土する傾向は薄く、識別された個体数もあまり多くはなかった。しかし分布状況は一様ではなく、大きく見てSX－03周辺とSX－09・18周辺の2箇所にまとまるようである。ただ、まとまるとは言っても古墳封土や周溝覆土から一括遺物として出土したものが多いため、その原位置を示すことができるものは多くなく、中ではSX－03下層の出土状況を第73図に掲げるに留める。なお南半部の該期出土地点との中間のＧ6区北部では殆ど見るべき資料を検出していない。

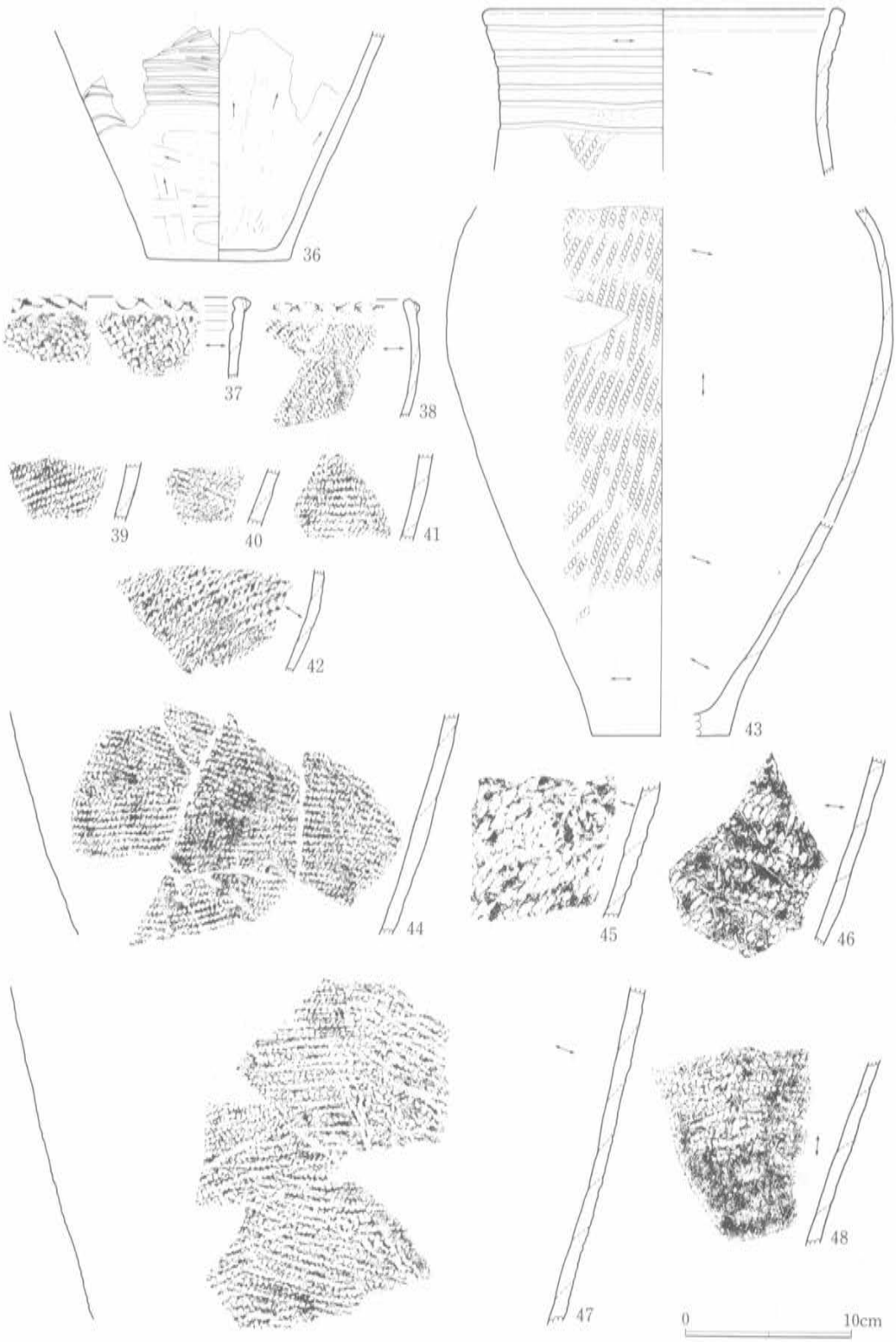
出土土器（第74図、第75図、図版40・41）　Ｇ5区以北の出土土器を一括して述べる。1～6は口縁部が内湾する浅鉢で3～6が同一個体である。1は無文で、口端には棒状工具によって口縁に斜交する刻目が施され、口縁下は若干段装飾気味となる。2は口縁下に2条の沈線が巡るものである。3～6は口縁下にやはり段があり、以下数本の縄文帯が巡るらしい。縄文はＬＲ。また特定の箇所には口縁部から()状の沈線が施文されている。7は緩やかな波状口縁をなし、幅広の沈線を巡らせた下はＬＲが横位施文される。8、9の2個体は同様の文様構成を持つが、9が浅鉢となるのに対し、8は口径が小さくコップ状の土器となるかも知れない。ともに口端に小さな刻目を連続させ、直線的に開く口頸部は研磨、胴部に丁寧な磨消縄文による文様を施す。なお8の頸胴部界沈線直下には竹管による刺突が連続する。10は3単位波状口縁を有する浅鉢である。体部中位に条線による文様帯を持つ。11は注口土器の破片である。注口の一部は遺存するが、文様構成は不詳。

12～22に条線施文を主体とする土器を集めた。14～17、18～19、20～22がそれぞれ同一個体



第73図　池花南遺跡北半部加曽利Ｂ期遺物出土状況（1/160）

第74図　池花南遺跡北半部出土加曽利Ｂ式土器(1)（1/4）



第75図　池花南遺跡北半部出土加曽利Ｂ式土器(2)（1/4）

である。12は波状口縁を持つ土器で、その単位は不詳。口端外面に円形刺突を施し、その下に2本の沈線で区画された斜位条線帯が見られる。13は口縁内面が肥厚した後、口端が屈曲して僅かに外反するもので、口縁直下の狭い無文部の下に横位の条線が緩く弧を描くように施されている。14～17も口端の形状がやや異なるものの同種の土器と考えられる。ただし仕上げはやや粗い。18～19、20～22はともに斜格子条線を施す個体である。胴文下半まで遺存しないため器形はよく判らないが、遺存部分は直線的な形状を持つ。18～19の方は口縁部が無文帯となっているが、20～22は口縁部に斜条線帯があり無文部を挟んで斜格子条線が施文されている。

23以下38までが所謂「紐線文」土器で、28～29、32～33がそれぞれ同一個体である。通例、条線施文の有無によって二分されるが、まず半截竹管状施文具によると思われる2本単位の条線が施されるものに23、27、28～29の3個体がある。その中には23、27のように突帯の頂部が先鋭で刻目の幅が広いものがあり、古相を示す要素かと思われる。一方1本単位の条線を施す土器には24、25、26、30、31、32～33、34、35、36があり、個体数は最も多い。上記の各個体を通じて突帯の刻目は指頭押捺が多く、地文はＬＲが多い。37、38は突帯を持ちながら条線を施されない土器である。38は口縁部が外反せずむしろ内湾し、他の個体とは異なるタイプとすべきか。39～42、44～48は縄文施文のみの破片を集めたものである。うち39～41が同一個体。いずれも胴部下位の破片であるため、各個体の全体像は不明であるが、突帯が付加されるものもあるものと思われる。縄文原体はやはりＬＲが圧倒的である。

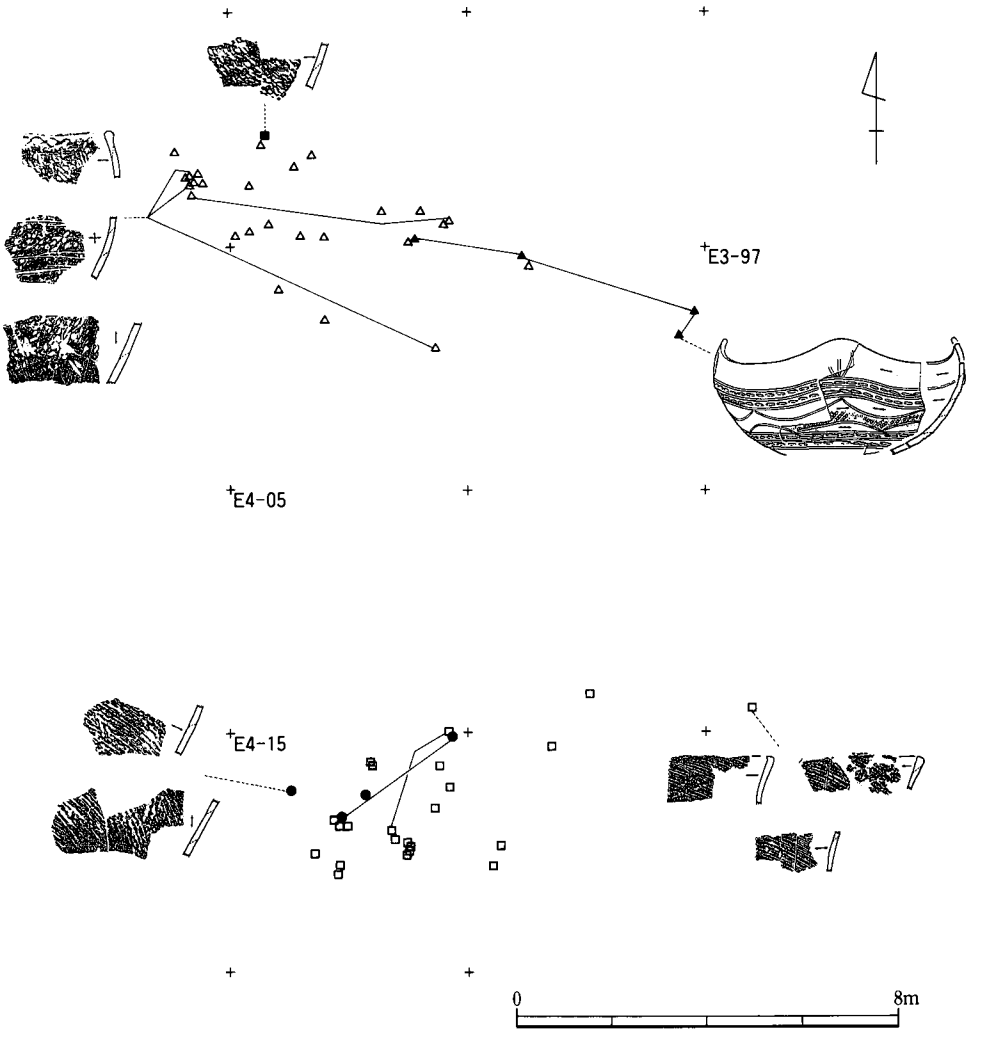
43は壺とされるもの。器形、焼成の良さなどＧ7区で出土した例と類似しているが、口頸部文様が平行沈線である点が異なり、むしろ本例の方が他遺跡の類例に近い。ただこの土器も他の一般的な深鉢とは明らかに別器種であるものの、壺とするには口頸部径が大きい。

上記の土器群の一括性については何とも言い難いが、大きな時期差は認められない。総体としてはＢ1期の要素を少し残した加曽利Ｂ2式段階と考えられるか。

⑧池花遺跡加曽利Ｂ期Ａ地点

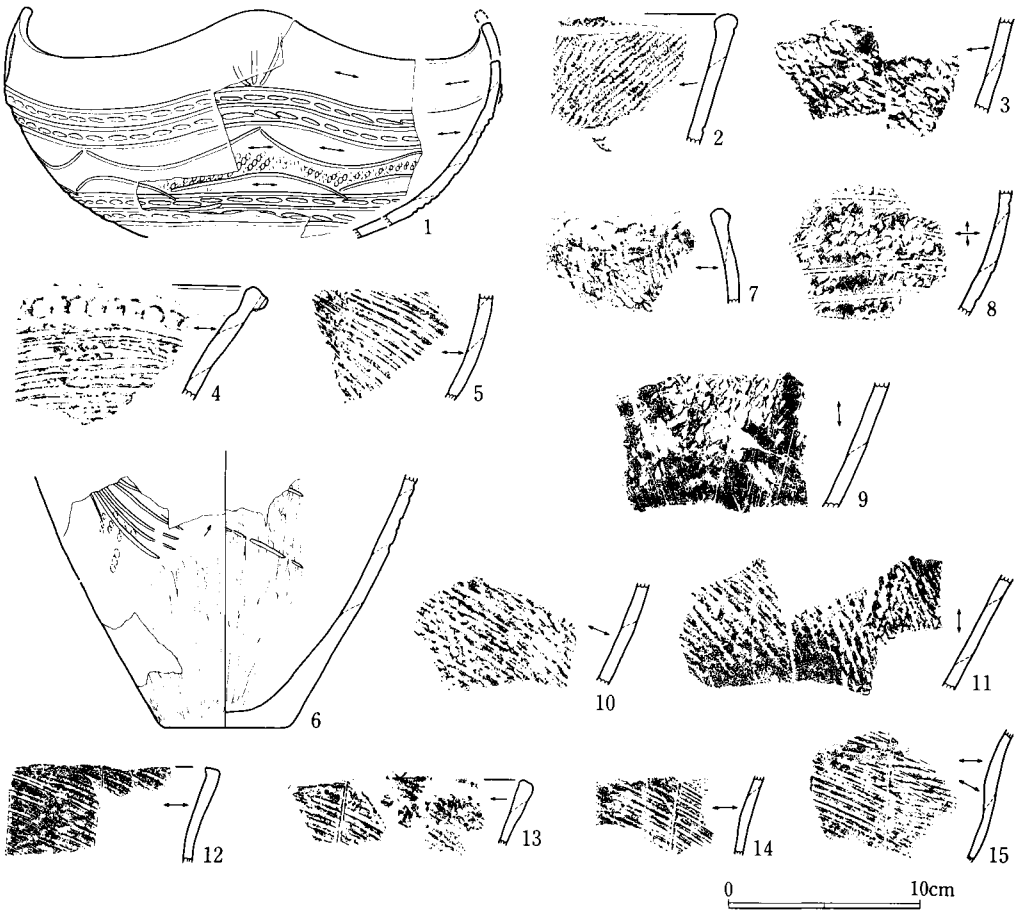
出土状況（第76図）　池花遺跡では加曽利Ｂ式土器を出土した遺物包含層は、Ｅ1区からＥ2区に南北に並ぶもの（ここでは3地点に分けＢ～Ｄ地点とする）と、Ｆ2区から一部Ｇ2区にかかるもの（Ｅ地点）の各地点が調査され、加曽利Ｂ期でも新しい段階の土器群を出土している。また遺跡の南東隅のＥ3区からＥ4区にかけても加曽利Ｂ式土器を出土した地点があり、そこをＡ地点とする。

Ａ地点はE3－84～96区、E4－06･15～16区で5個体がまとまって検出され、またそこからやや北に離れたE3－46～57区で3個体が検出されている。それらのうち1個体はE3－56区とE3－85区で接合関係を持つため、実際は計7個体となる。ただしこれら土器群の一括性は、曽谷期（以降）の土器が含まれるため疑問となるが、2時期の重複であろうか。



第76図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ａ地点遺物出土状況（1/160）

出土土器（第77図、図版31）　4～6、7～9、10～11、12～15がそれぞれ同一個体である。1は4単位波状口縁を有する浅鉢。池花南遺跡で類似の土器が出土しており、時期的な指標となるものであろう。口縁部はよく磨かれ、その下に口縁に合わせた波状を呈する3条の沈線とその間に2列の列点が施される。沈線間の列点は胴部下位にも認められるが、それらの文様帯間には上下から半単位ずつずらせた弧状の沈線と縄文ＬＲが充塡される。また波頂部下の口辺には（｜）状の沈線文様が加えられる。成形、調整及び焼成ともきわめて良質。2は口縁部内側が肥厚し、外面は沈線間にＬＲが横位施文されている。3以下は粗製土器を示す。3は粗い縄文が施される破片で、E3－56区とE3－85区で接合した個体である。4～6は口縁部～胴部上半は飛散して破片数も少なかったが、胴部下半～底部は正位でやや低位から検出され、単独の

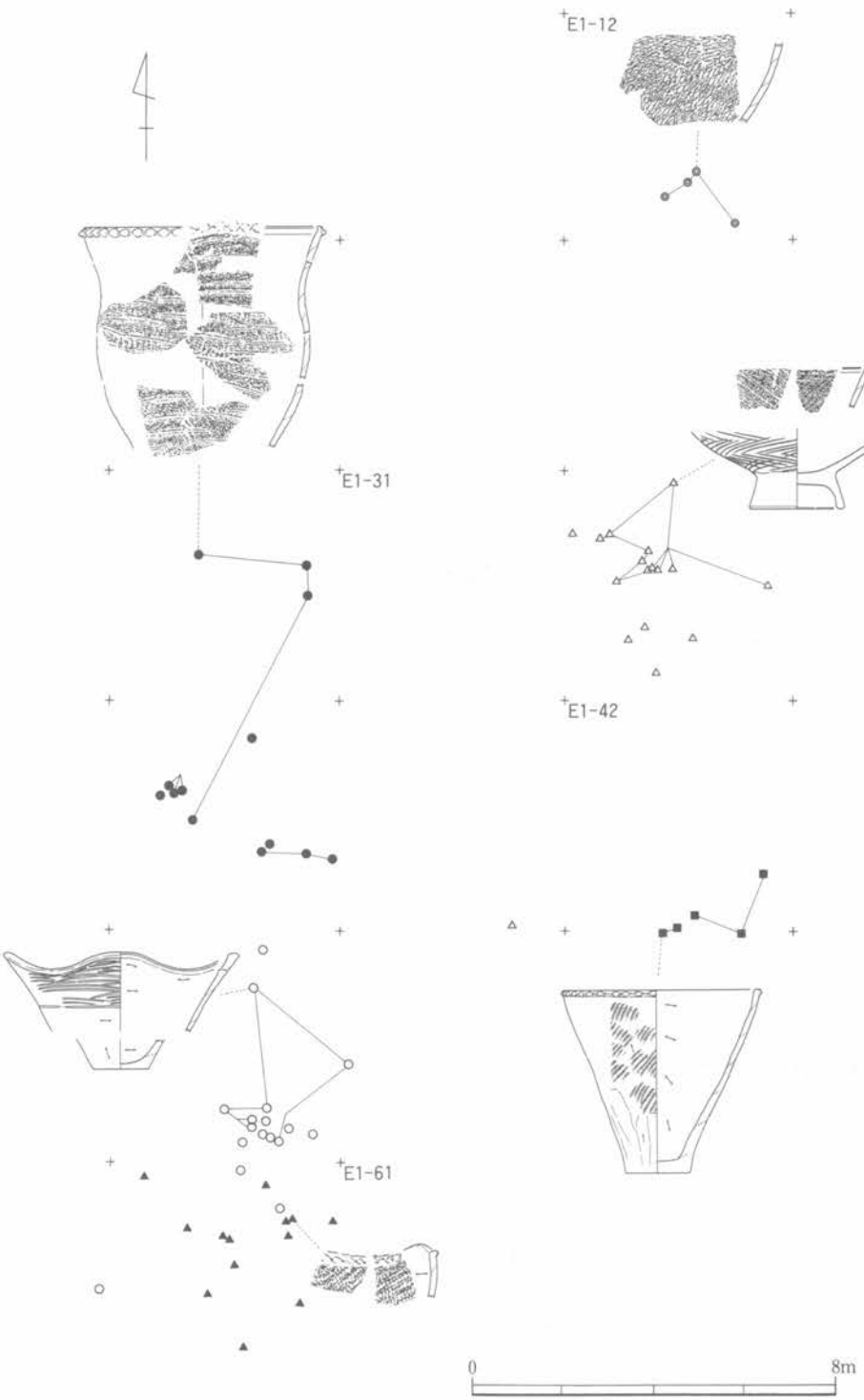


第77図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ａ地点出土土器（1/4）

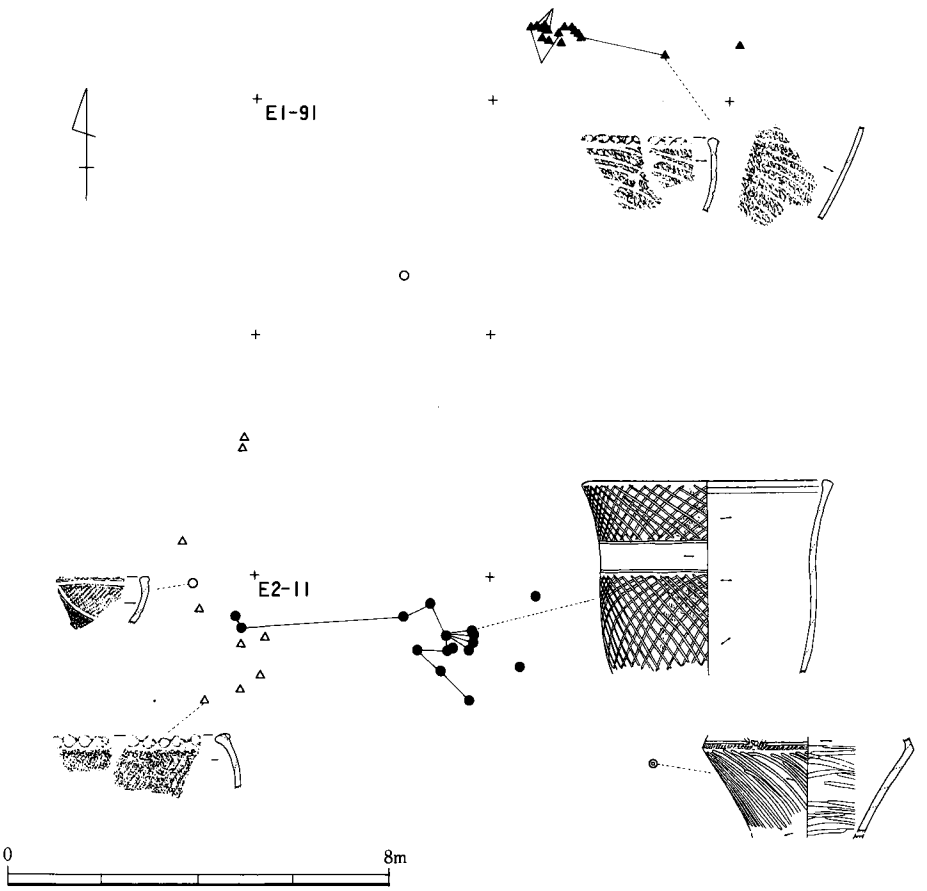
埋甕であった可能性がある。口縁部に指頭押捺による刻目を伴う突帯を持ち、口頸部には横位の、胴部には斜位の条線が密に施されている。底部近くは内外面とも丁寧な研磨。７～９も同様に口縁部突帯を有する土器であるが、この個体は口縁部が内湾するタイプである。縄文地文の上に条線が施文されるがその間隔は広く不規則らしい。10～11は胴部下位の破片で粗い縄文の上に間隔の比較的狭い条線を持つものである。12～15は明らかに新相を示す土器である。器面が条線で覆われており、口縁部から胴部にほぼ縦位の先鋭な施文具による沈線が等間隔に施文されている。

⑨池花遺跡加曽利Ｂ期Ｂ～Ｄ地点

遺跡北端に台地が張り出した部分からその付け根、そしてやや内奥まで南北に連続的に加曽利Ｂ式土器の出土が見られた。分布密度、集中度は低く、個体毎に点々と並ぶような印象を与える。ここでは仮にＥ１区北半をＢ地点、Ｅ１区南端からＥ２区北端をＣ地点、Ｄ２区からＥ



第78図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ｂ地点遺物出土状況（1/160）



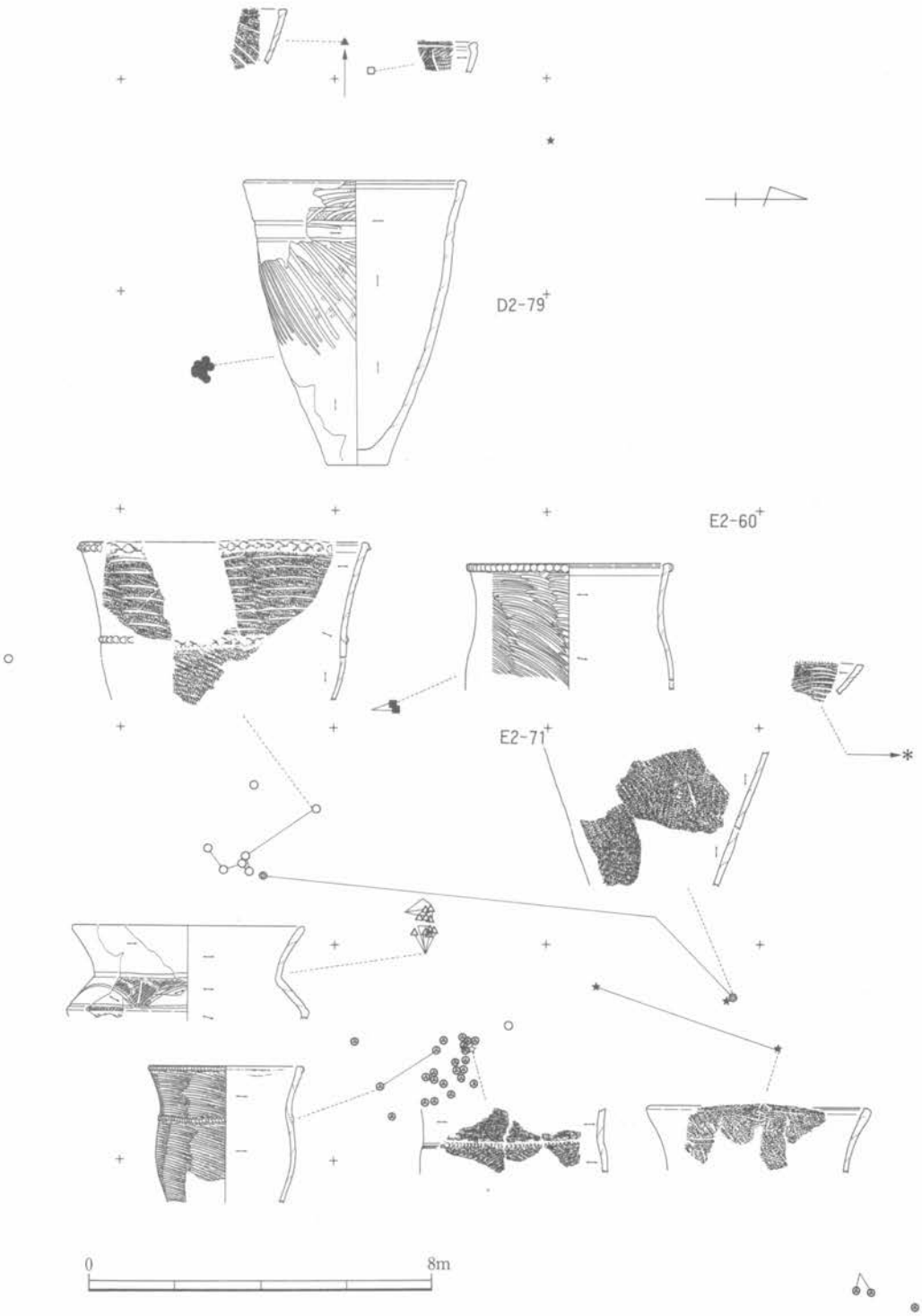
第79図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ｃ地点遺物出土状況(1/160)

２区南半をＤ地点として述べるが、その３地点間の空隙が若干広いだけで、それぞれが独立的であるとも全体が連続的であるとも言えない。

Ｂ地点出土状況（第78図）　E1－12区からE1－60区まで南北に長く分布している。識別された個体数は６個体でこれを上回ることはない。各個体の分布範囲は重なることはなく、個体毎に独立的に廃棄されている。

Ｃ地点出土状況（第79図）　E1－82区に１個体、E2－10～12区に４個体の土器が分布する。個体数はこの５個体を越えることはない。E1－10～12区では３個体がまとまって出土しており、以北の出土状況とやや異なる。

Ｄ地点出土状況（第80図）　D2－67～87区、E2－41～80区に12個体が、やや離れてD2－35区とE2－44区に１個体ずつが分布している。Ｅ２区でややまとまる箇所が見られるが、基本的には個体毎に拡散すると言えるであろう。

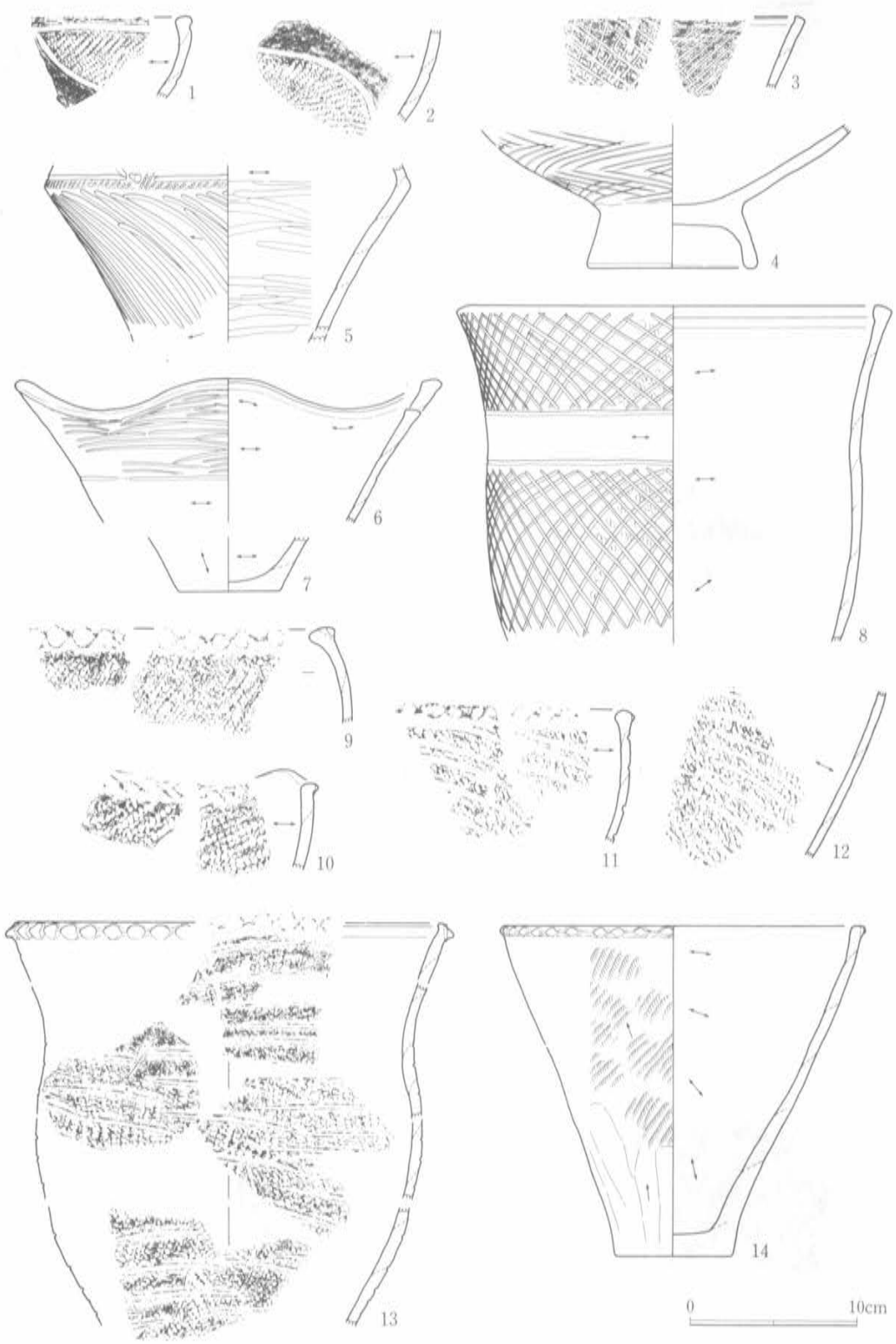


第80図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ｄ地点遺物出土状況（1/160）

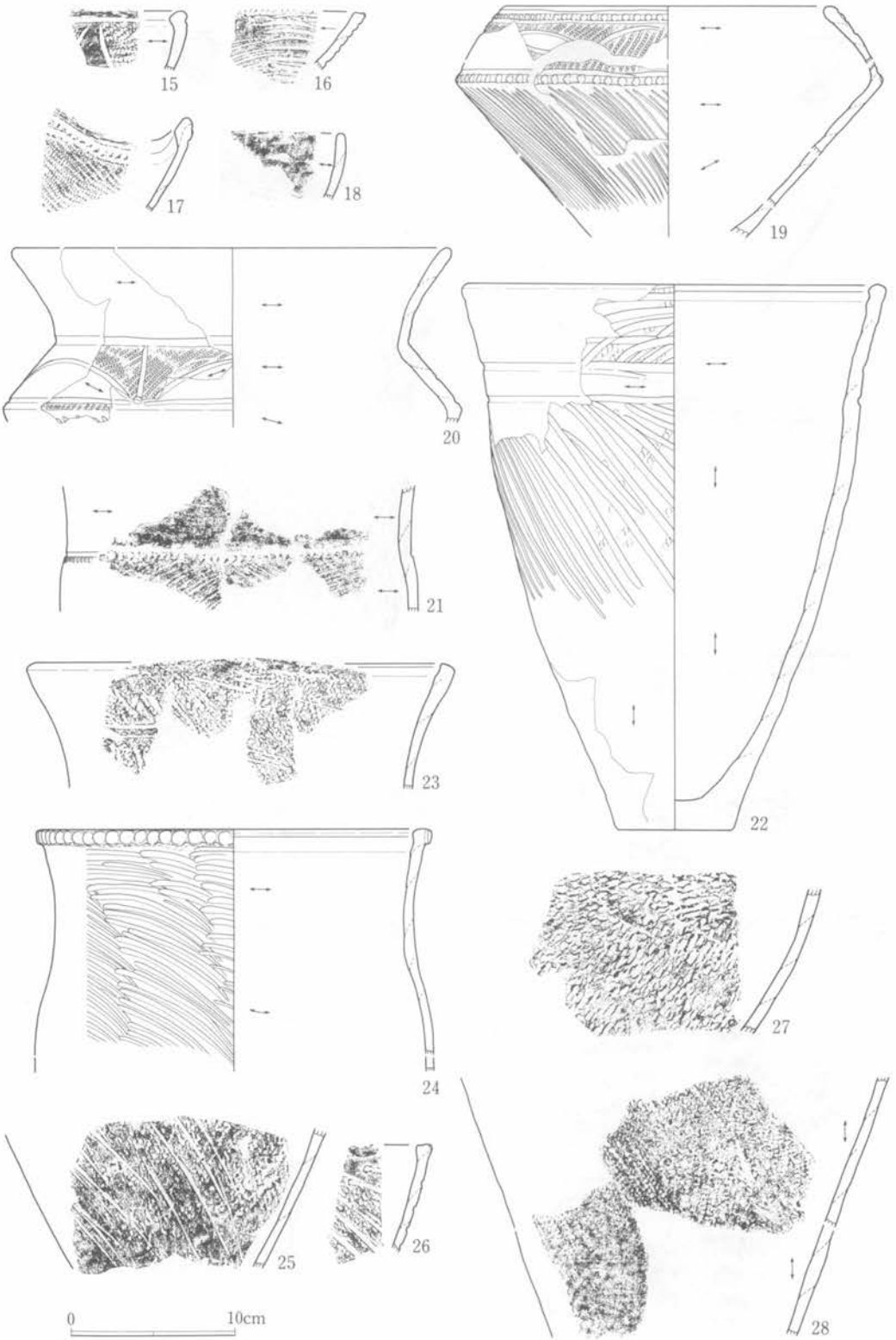
出土土器（第81図～第83図、図版28～30）　1～2、3～4、6～7、11～12、25～26がそれぞれ同一個体である。14まではB、C地点出土土器。

1～2は部分的にしか遺存しないが磨消縄文による美麗な浅鉢である。縄文はLR。3～4は台付浅鉢で、口頸部は斜条線の所と部分的に斜格子条線の所があり、下半は横位羽状文を形成している。地文はない。条線の施文具は先鋭なものを用いる。5は算盤玉状の屈曲点をもつ土器で、20と同一個体の可能性を有するが、推定径が異なり断定はできない。銚子市八祖遺跡に全く同一と言ってよい程の酷似品がある。6～7は4単位波状口縁を呈する土器である。口縁部は横位の緩やかな弧を描く条線を施文し、以下沈線で区画されて無文帯がある。8は頸部に無文帯を持つ斜格子条線施文の土器。斜格子文は乱れることなく比較的丁寧に施される。地文はRL。9～14に突帯を持つものを集めた。口縁が内湾するものが多いが、9は中でも強く内湾する。10は逆に湾曲が弱く、波状口縁をなすものらしい。以上2個体は体部にLRを施文している。11～12はやはり口縁部が内湾するものであるが、条線を施文する点が前2個体と異なる。地文はRLかと思われる。13も条線を施す個体である。この場合比較的短い条線を横位に連ねるように施文する。条間は広い。口縁は内湾していない。地文はLR。9～13の4個体の突帯は口縁部のみに巡ると考えられ、刻目は指頭押捺によっており、いずれもよく似る。対して14は底部から口縁部まで直線的に開いて立ち上がる形状を持ち、突帯の刻目はやや間隔を置きながら棒状工具で施される。縄文はLの横位施文であるが、類似の土器の中では無節縄文は珍しい例と言えよう。この個体は一般に加曽利B式土器でも古相を示すものとされる。他の個体と時期差を持つものか。

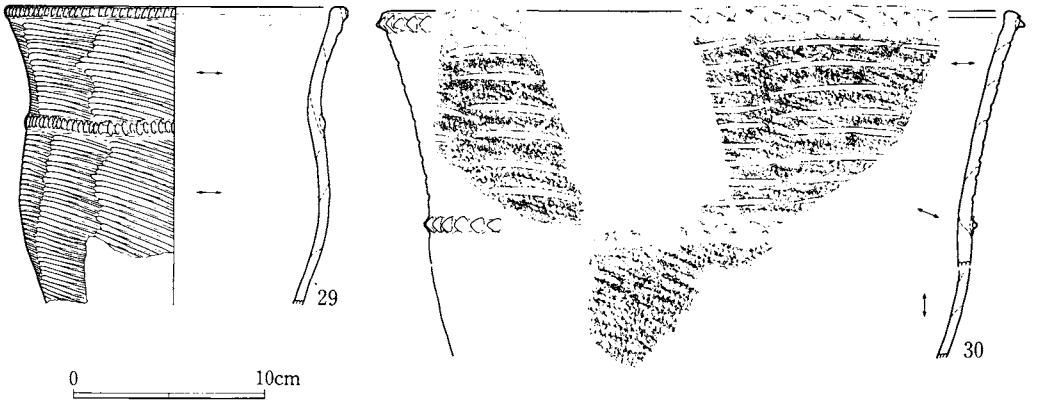
15～29はD地点出土土器である。15～18に小破片を集めた。15の磨消縄文を持つものは1～2と同種の土器と考えられる。16は横位の条線を持ち、浅鉢だとすれば台付か。17は波状口縁の破片でおそらく5単位の波状をなすと思われる。縄文はRL。18は無文の口縁片であるが、内外面とも丁寧に研磨されている。19、20の2個体は前述の5と同種の土器である。両者とも算盤玉状の屈曲を持つが、19は口縁が内傾して終わるのに対し、20はさらに外反する口縁部が加わる。また胴部下半が斜位条線で共通するが、上半の文様は20が下からの弧線と垂直線の組み合わせであるのに対し、19は木葉形の沈線を連続させる。これらの類例は先に触れた通り銚子市八祖遺跡に多数あるが、文様モチーフは弧線が主体で、19に共通する器形を持つものでも木葉形モチーフを用いるものはない。21は頸胴部界のくびれ部に沈線を巡らせ、上に研磨された無文帯、直下に連続刺突、以下条線施文となるもの。22は斜条線施文の土器で、頸部無文帯を境に条線の傾きが逆転する。23以下は精製度の低い土器群である。うち23はRL地文の上に半截竹管による条線を不規則に施文する。施文が規則的でないのは新しい要素ではあるが、竹管施文自体が古い要素であるので、この個体は他の土器と組成するには矛盾があり、分離されるべきものである。他の個体は、胴部下位しか遺存しない27（縄文施文のみ）を別として、突帯



第81図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ｂ～Ｄ地点出土土器(1)（1/4）



第82図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ｂ～Ｄ地点出土土器(2)（1/4）



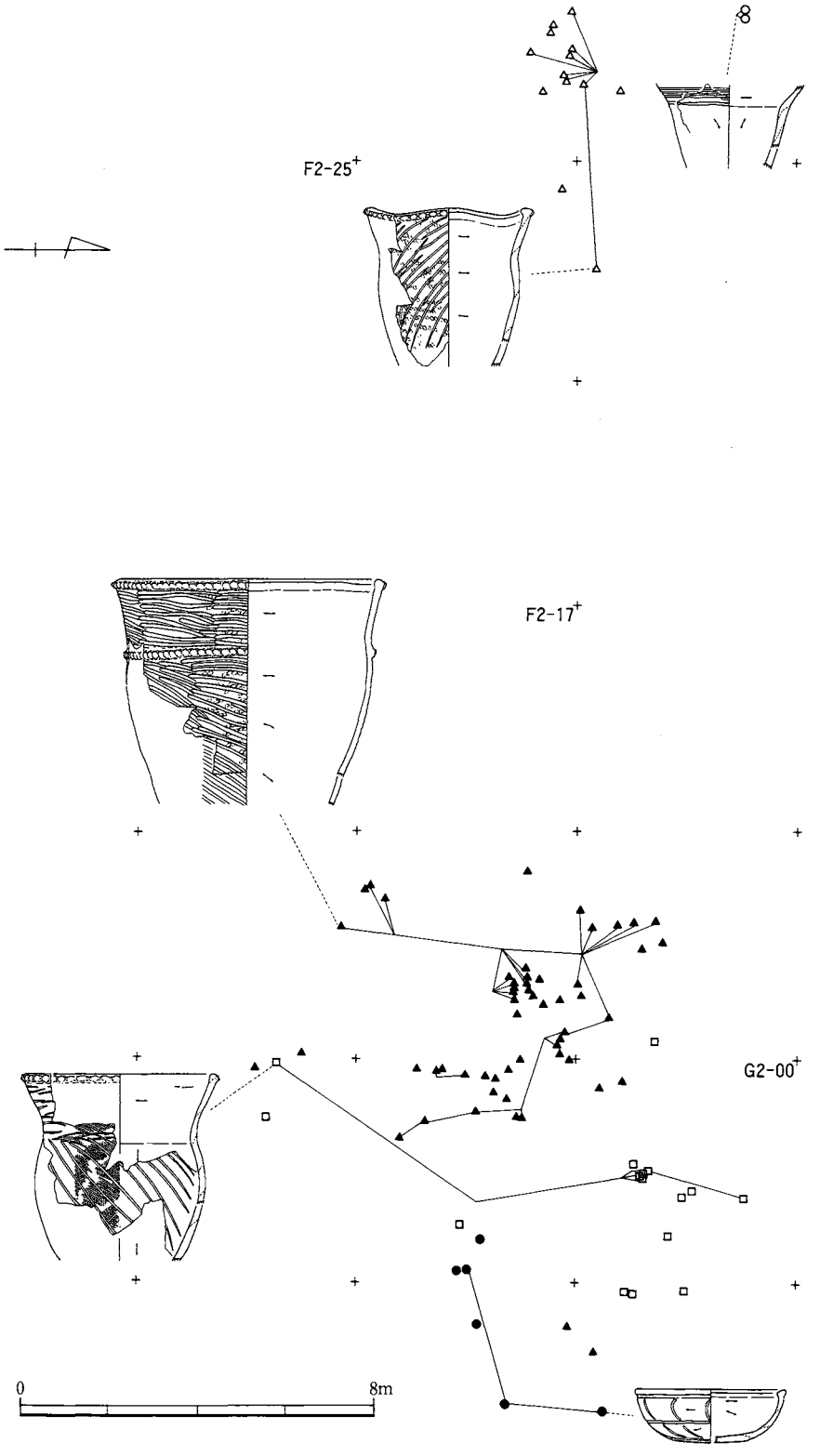
第83図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ｂ～Ｄ地点出土土器(3)（1/4）

を持たないもの（25～26）、口縁部に１条の突帯を持つもの（24）、口縁部と肩部に２条の突帯を持つもの（28、29）がある。25～26は口縁端がやや肥厚し、上端が面取り気味となり、ＬＲ地文に斜位の条線が施される。24、28は全面が条線で埋めつくされるが、28については突帯が低くなり、爪形の刻目が施されるなど新しい要素を具えている。29はＲＬ地文で口頸部のみ横位の条線を規則的に連続させている。

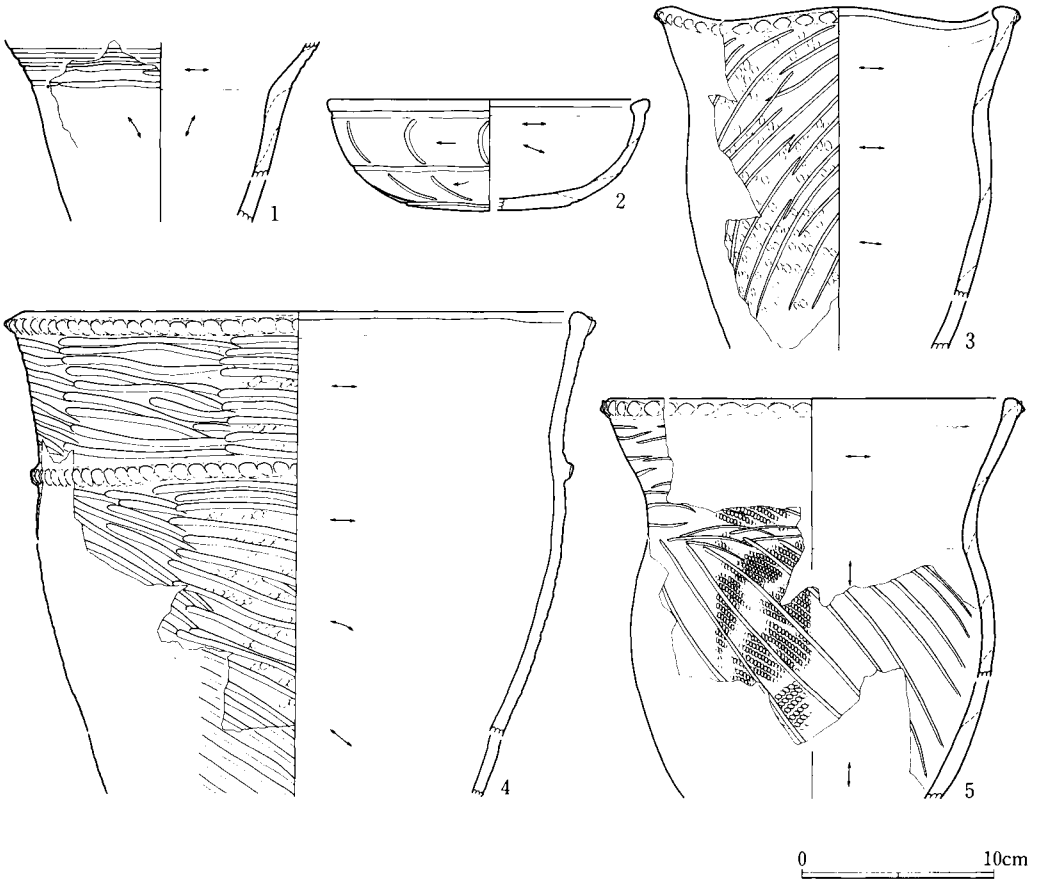
⑩池花遺跡加曽利Ｂ期Ｅ地点

出土状況（第84図）　前記Ｂ～Ｄ地点からやや離れ、遺跡の東端の張り出し部分に所在した出土地点をＥ地点とする。分布は２箇所に分かれ、識別された土器としてはF2－04・14区で２個体、F2－08～29区、G2－00・10区で３個体が検出されている。個体数はこれを大きく上回ることはあるまい。各個体の分布は広く飛散することなく比較的小さくまとまる。また他地点との個体分有も認められない。当地点出土土器は一括資料と考えて矛盾はないかと思われる。

出土土器（第85図、図版30）　１は残念なことに全体の器形が不明。遺存部分の上位で外にやや屈曲し、屈曲部以上には４条の平行沈線が認められる。他は内外面ともよく研磨される。２は小型の浅鉢である。口縁部内面が肥厚し、外面には口縁部から底部にかけて３条の沈線が等間隔に巡っている。それらの沈線の間には三日月状沈線が２段に施されている。この土器は外面の地が研磨されておらず、仕上げがやや粗雑な印象がある。３～５の３個体は突帯を巡らせる所謂「紐線文」土器である。うち３は４単位波状口縁を有するもの。突帯は口縁部に１条巡っており、粗いＲＬを地文として左下がりの斜位条線が粗に施される。４は大型の土器で、口縁部と肩部に２条の突帯を持っている。地文は粗いＬＲで全身に太い条線が比較的密に施文されている。５は外反した口頸部と球形に近い胴部を持つ土器である。口縁内面の凹線は殆ど消失している。地文の縄文はＲＬであるが、この種の土器としては原体の撚りがしっかりした



第84図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ｅ地点遺物出土状況（1/160）



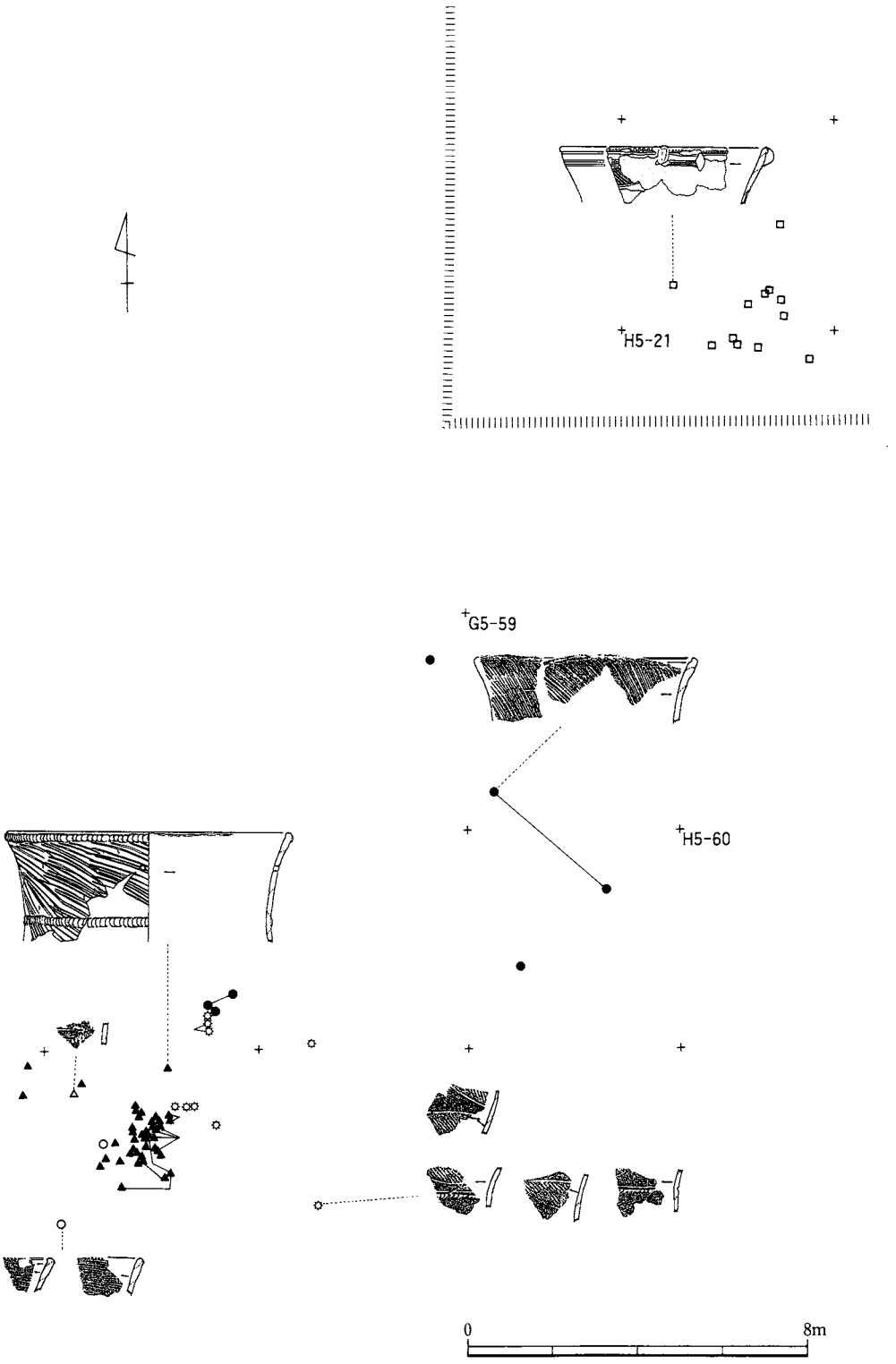
第85図　池花遺跡加曽利Ｂ期Ｅ地点出土土器（1/4）

細かい縄文である。また条線は口頸部が横位で短いものを連続させ、胴部が斜位となるが、条線も繊細で丁寧な印象を与える。また条線自体は３のそれとよく似ている。これら特に５は類似の土器の中では装飾的要素が強いと言えるかも知れない。

⑪池花南遺跡北半部曽谷期出土地点

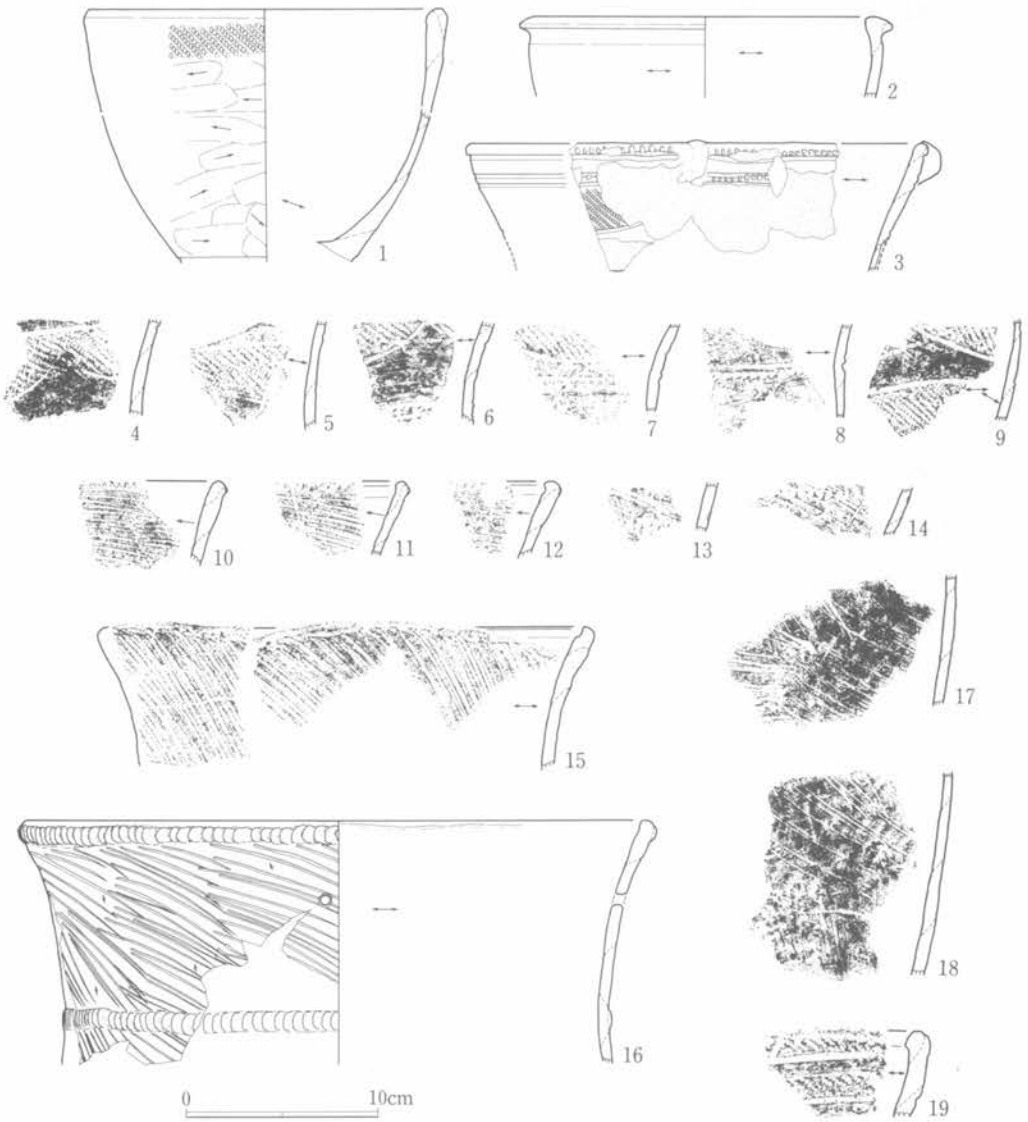
加曽利Ｂ３式土器を出土しなかった池花南遺跡では、安行期への過渡期である曽谷期には再び遺物包含層が形成されるようになる。その占地は、他の多くの時期と同じく古墳群下層のＧ５区に小規模な包含層が、Ｇ７・Ｈ７区に広範囲の包含層が検出され、Ｇ７・Ｈ７区の方は規模を縮小しながら安行１期へ継続（と言っても断続はあろうが）していくようである。

出土状況（第86図）　Ｇ５区付近ではＳＸ－03下層で数個体の土器が出土している他、ＳＸ－02の封土内及び周溝内、またＳＸ－04の下層であるＨ5－11・21区で点々と土器の出土を見ている。殊に集中するのがＳＸ－03下層のＧ5－77区周辺で、識別されたもので４個体がごく狭い範囲に分布する。なおＧ５区でも安行１期に入ると思われる土器も僅かにある。



第86図　池花南遺跡北半部曽谷期遺物出土状況（1/160）

出土土器（第87図、図版42－１）　１～３はそれぞれやや離れて単独に近い形で出土したものであるが、１、２についてはSX－02の封土から出土しており原位置を留どめるものではない。１はボール状の鉢で口縁部が緩やかに肥厚し、口縁直下に区画なしの縄文（ＲＬ）帯があり、以下篦削りによって仕上げられている。２は所謂瓢形土器である。口縁端外面に突帯を作り出してその下は凹線と言うより削り出し技法に近い。３は深鉢口縁部片である。曽谷期の特徴である耳形の突起を付加している。表面は剝落が激しく文様構成は不詳であるが、弧線が連続するらしい。４～18はSX－03下層で検出された土器である。４～９、10～14、16～18がそれぞれ同一個体。４～９は３に類似した土器の破片で、縄文も同じくＲＬ。ごく緩やかにしかくびれ



第87図　池花南遺跡北半部出土曽谷式土器　他（1/4）

ない頸胴部界の沈線下には3の口縁部と同様の連続刺突が施されている。なおこれらの破片のうち4は1点だけ離れてG6－08区から出土している。10～14、15はともに条線で覆われる土器である。10～14には口端と頸胴部界に刻目（刺突）が加えられる点が異なる。16～19は口縁部と肩部に2条の突帯を持つ土器である。体部は篦削りの上に密な条線が施文される。また頸部には焼成後の穿孔が見られる。

19は1点だけ出土した安行1式と思われる帯縄文の土器である。出土地点もやや離れ、SX－18の周溝内に包含されていた。

⑫池花南遺跡南半部曽谷期出土地点

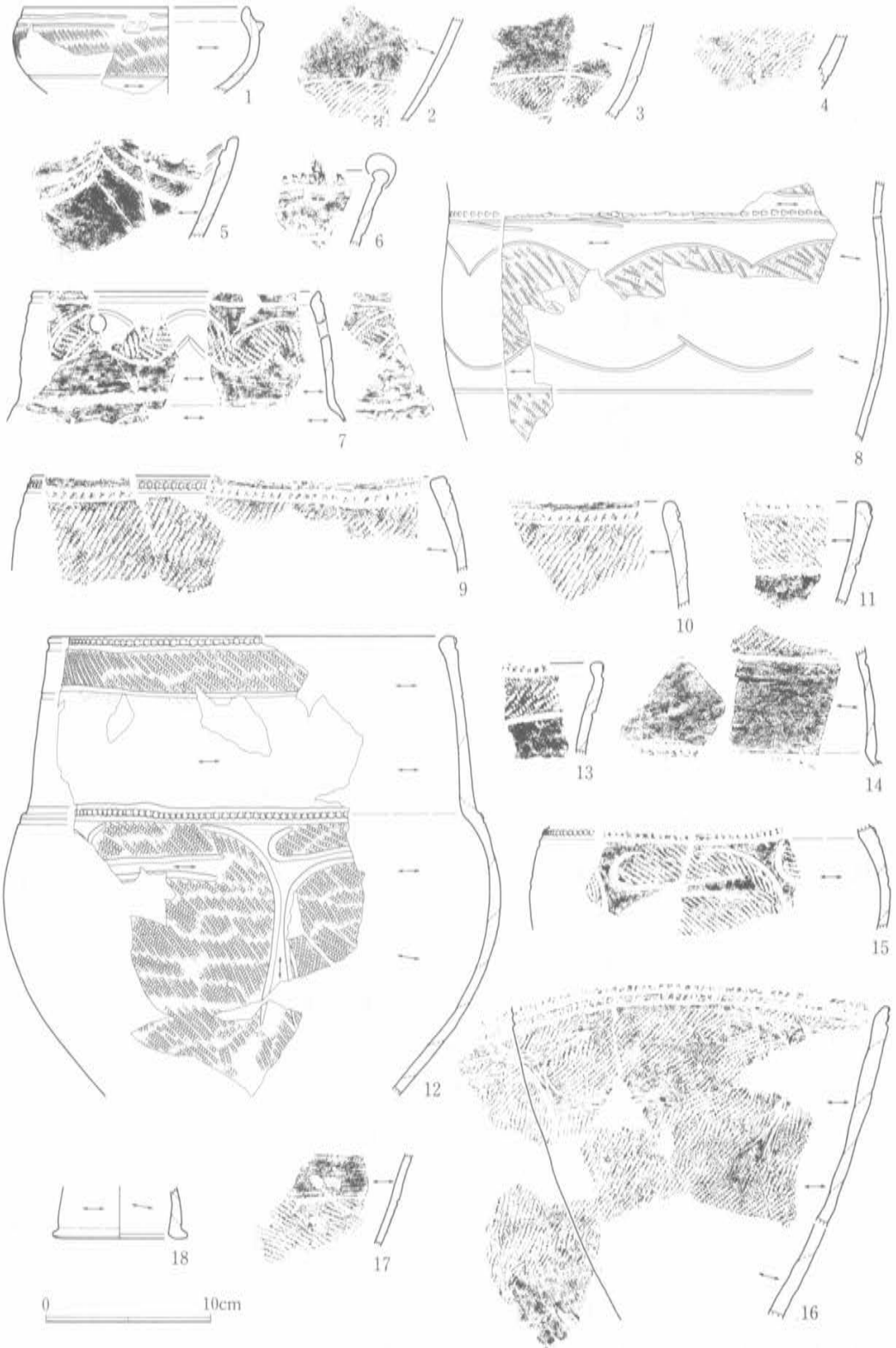
出土状況（第88図）　遺跡南半部ではG7区を中心としてその周辺のG6・F7・H7各区の広い範囲で曽谷式土器が出土している。しかし個体数は22個体で分布密度は低く、多数の個体が集中する地点を見いだすことはできない。即ち出土土器各個体の分布は独立的であると言える。しかしながらそれぞれの個体では出土範囲が広範囲に及ぶ例が多い。10mを越える接合関係も多く、またG6－74・84区とG7区北半に接合関係、または個体分布を持つものが複数個体あり、分散した出土状況を有する土器群ながら同時性を持つものもかなり含まれていよう。なお該期の場合、前段階たる加曽利B3期の包含層が遺跡内に形成されていないため加曽利B期との分離は容易であるが、安行1期の包含層は同地区内に形成されているため、後段階との分離は困難である。

出土土器（第89図、第90図、図版42－2・43）　1は口縁部が内湾する小型の浅鉢である。口縁外面には2条の沈線が巡り、2条目に横長の突起を付する。その単位は不明。沈線下は縄文（RL）帯となり、またその下端も沈線で区画されている。2、3、4はいずれも酷似し、幅3 cm前後の縄文帯を巡らせる破片であるが別個体である。全体の器形はあまり深くはならないと思われる。5は波状口縁波頂部の破片である。口縁部の波形に沿って弧線で繋がれた縄文帯があり、無文帯の下に沈線が認められるが、以下類例に乏しく不明。6も口縁部破片で口端外面に連続刺突を施す。また口縁に直交する形で突起が加えられる。口縁部下無文帯の下には沈線区画された縄文帯が巡るらしい。

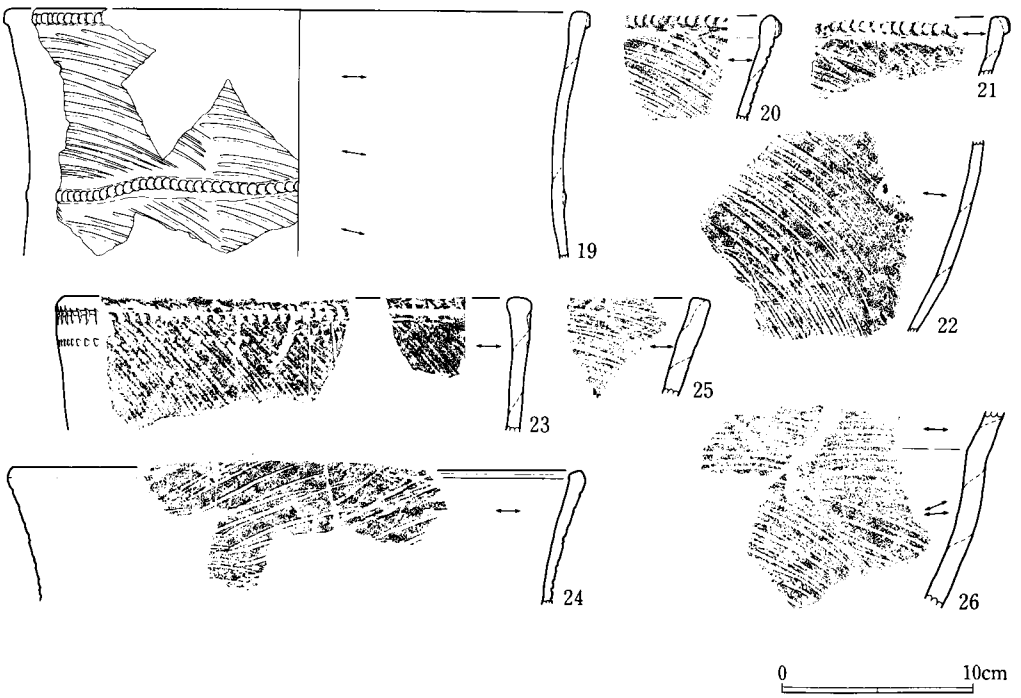
7、8は弧線モチーフを用いる土器である。いずれも器形、文様の全貌は不詳であるが、上下半単位ずつずらせた連弧線によって区画される縄文帯を口頸部と胴部に有する。両者の相違点は、7の口頸部がやや内傾気味で該期に通有の器形であること、肩部が削り出し段になっているのに対し、8の頸部は開き気味で肩部に連続刺突と沈線をもつことが挙げられる。8の胴部下位には沈線で界されて縄文が施されている。なお7の縄文はRLであるが、8の場合L軸にL左巻きの縄巻き（付加条）縄文となる。

9～15は口縁部に刻目を持ち、以下縄文帯を有する一群である。また肩部にも沈線間の刻目

第88図　池花南遺跡南半部曽谷期遺物出土状況（1/240）



第89図　池花南遺跡南半部出土曽谷式土器(1)（1/4）



第90図　池花南遺跡南半部出土曽谷式土器(2)（1/4）

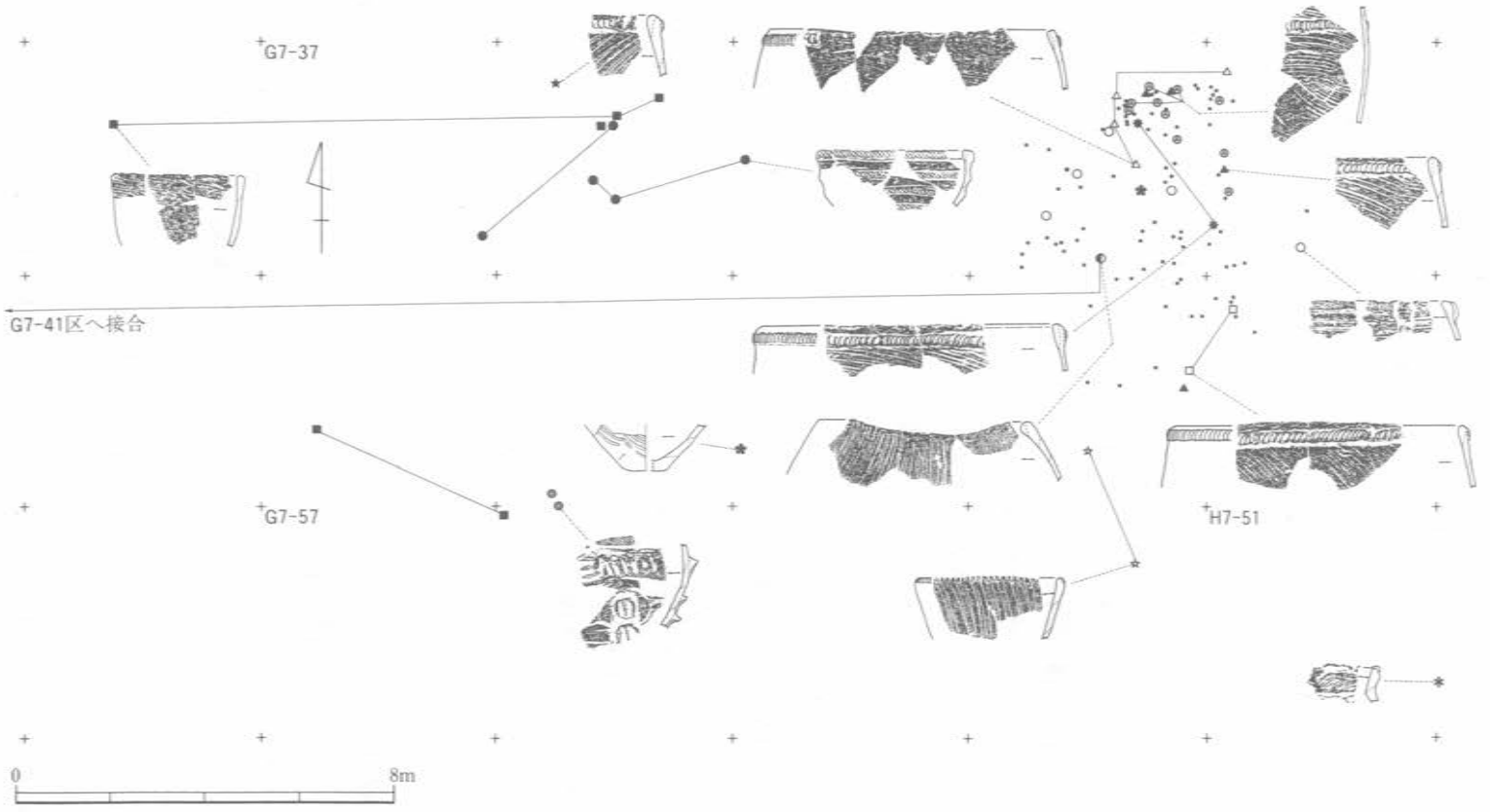
を持つ。9～10が同一個体。これらのうち11、13の2個体は口縁部が外傾する点で例の少ないものである。あるいは一括しないほうがよいか。また9～10は縄文帯の幅が広い。胴部が遺存するのは12、15の2個体である。それらは曲線を組み合わせて一部狭い曲線間を磨消して文様を構成しているが、両者の文様構成は全く同一である。胎土の違いなどから別個体と判断されたものであるが、同一の製作者を考定すべきであろうか。それらの土器と類似した文様を施文する個体に16がある。この土器は底部から口縁部まで単純に開くもので、口縁には2条の沈線が巡り、また刻目も2列施されている。上記土器群の縄文はＲＬとＬＲが相半ばする。

17は一見2～4に類似するが、おそらく深鉢であろう。頸部に相当すると思われる無文帯はよく研磨されている。18は台付土器の脚部である。

19以下は条線施文の粗製土器である。20～22、25～26がそれぞれ同一個体。19、20～22は突帯を有するもので、刻目の加え方、条線など両者はよく近似する。23は突帯を持たず、口縁部に2列の刺突（刻目）を連続させる。また24、25～26は粗縁のものである。

⑬池花南遺跡南半部安行1期出土地点

出土状況（第91図）　安行1式段階の遺物包含層も曽谷期に引き続き池花南遺跡南部のＧ7・Ｈ7区に占地する。曽谷期が広範囲で分散的な分布状況を示したのに対して、安行1期には分



第91図　池花南遺跡南半部安行１期遺物出土状況（1/160）

布範囲が縮小し、逆に分布密度はやや高くなっている。グリッドで言うとG7－36区からH7－50区がほぼ分布域になるが、とくにH7－30～40区に集中的に分布する傾向が窺える。個体毎の分布状況を見ると、やはり曽谷期とは異なり広く四散する個体が少ないのが判る。ただ曽谷期のところでも述べたが、曽谷式土器と安行1式土器の分布域が重複しているため出土状況だけから両期の資料を分離するのは困難であり、胎土や文様、器形の特徴から両者を分離したものであることを付記しておく。

出土土器(第92図、図版44)　計21個体を図示する。4～5、6～7、14～17、20～23、25～26がそれぞれ同一個体である。1は出土土器群の中で最も精製度の高いものと言え、「豚鼻」状突起等の装飾が施されるが、全体の器形、文様構成等は不詳。2～7は帯縄文系土器である。2、3は浅鉢で2は4条の縄文帯が削り出しと沈線によって形成されるのに対して、3は沈線を持たず、削り出しのみによって縄文帯が形成される。4～5は「紐線文」系土器と同様の器形を持つ土器であるが肩部以上には縄文帯が数条巡り、口縁部はやや幅広の縄文帯になり、その上には「芋虫」状突起が加えられる。6～7は縄文帯が認められる小片である。8は口縁部に幅広縄文帯が形成されている破片で、小突起乃至小波状をなすもの。上記各個体の縄文は3、8がＬＲで他はＲＬである。

9～23には突帯を巡らせる「紐線文」系土器を集めた。9個体あるが、いずれもおそらく2条の突帯と地に条線を施すだけの単純なものである。突帯は条線を施文した後に貼り付けられている。突帯の刻目は爪形の連続が一般的であるが、13のように深く刺突するもの、18のように棒状工具によるものもある。

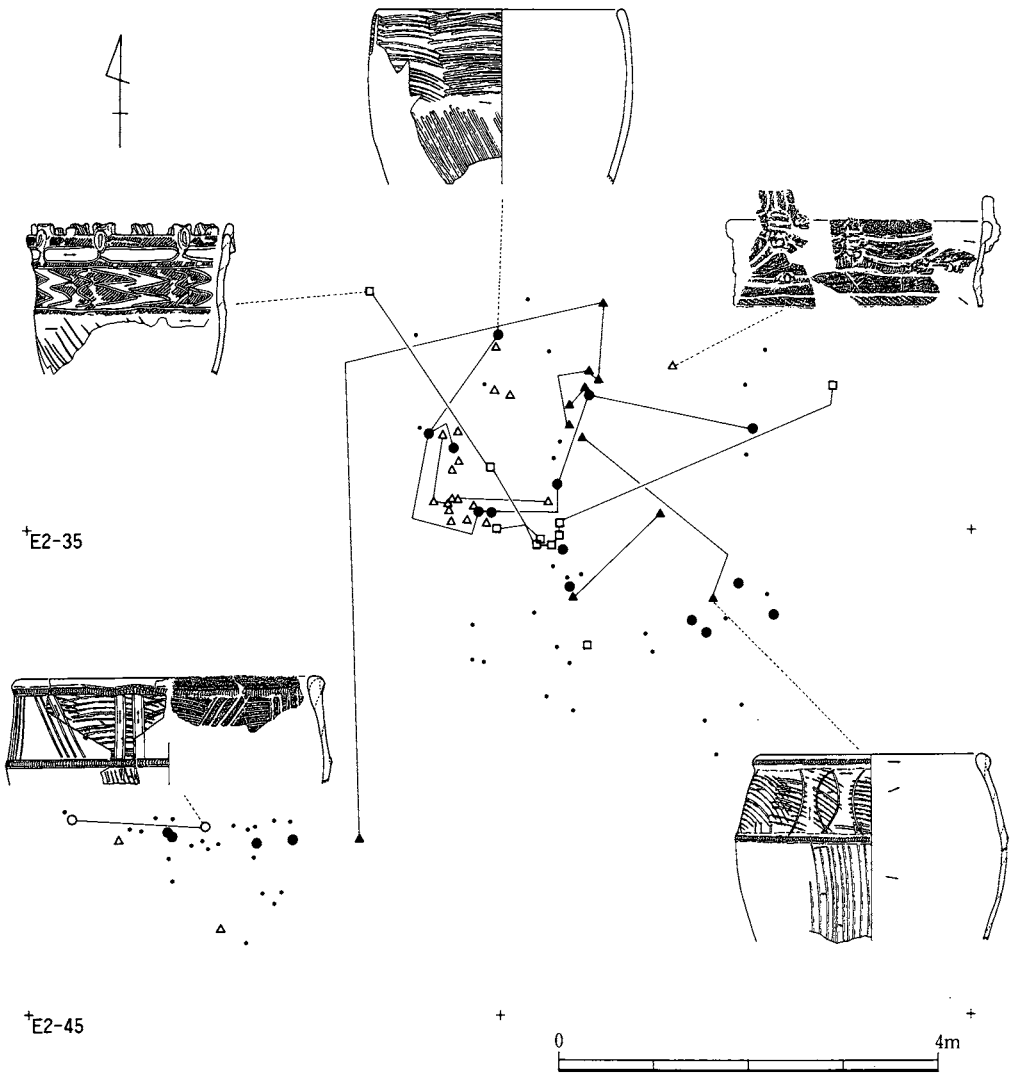
24～29は突帯を持たない粗製土器を集めた。これらに施される条線は24、25～26、28に見るように垂直あるいはそれに近い斜位であるものがあり、うち24、25～26の2個体は口端に刻目を有している。また24、27はかなり小型の土器になる。30には底部破片を1点だけ図示する。

⑭池花遺跡Ｅ2区安行3a期出土地点

出土状況(第93図)　内黒田遺跡群においては安行2期のまとまった遺物包含層形成されていない。しかしその直後の安行3a式土器は池花遺跡北東部で出土している。その出土位置はE2－25～36区で、6個体が狭い範囲に集中して検出された。この前後の時期の遺物は周辺では全く検出されておらず、当出土地点の集中度から言っても資料の一括性は疑い得ない。これら土器群を安行3a式土器に比定したが、安行2式土器の要素と安行3a式土器の要素を併せ持ち、過渡期の土器群として位置付けることができようか。

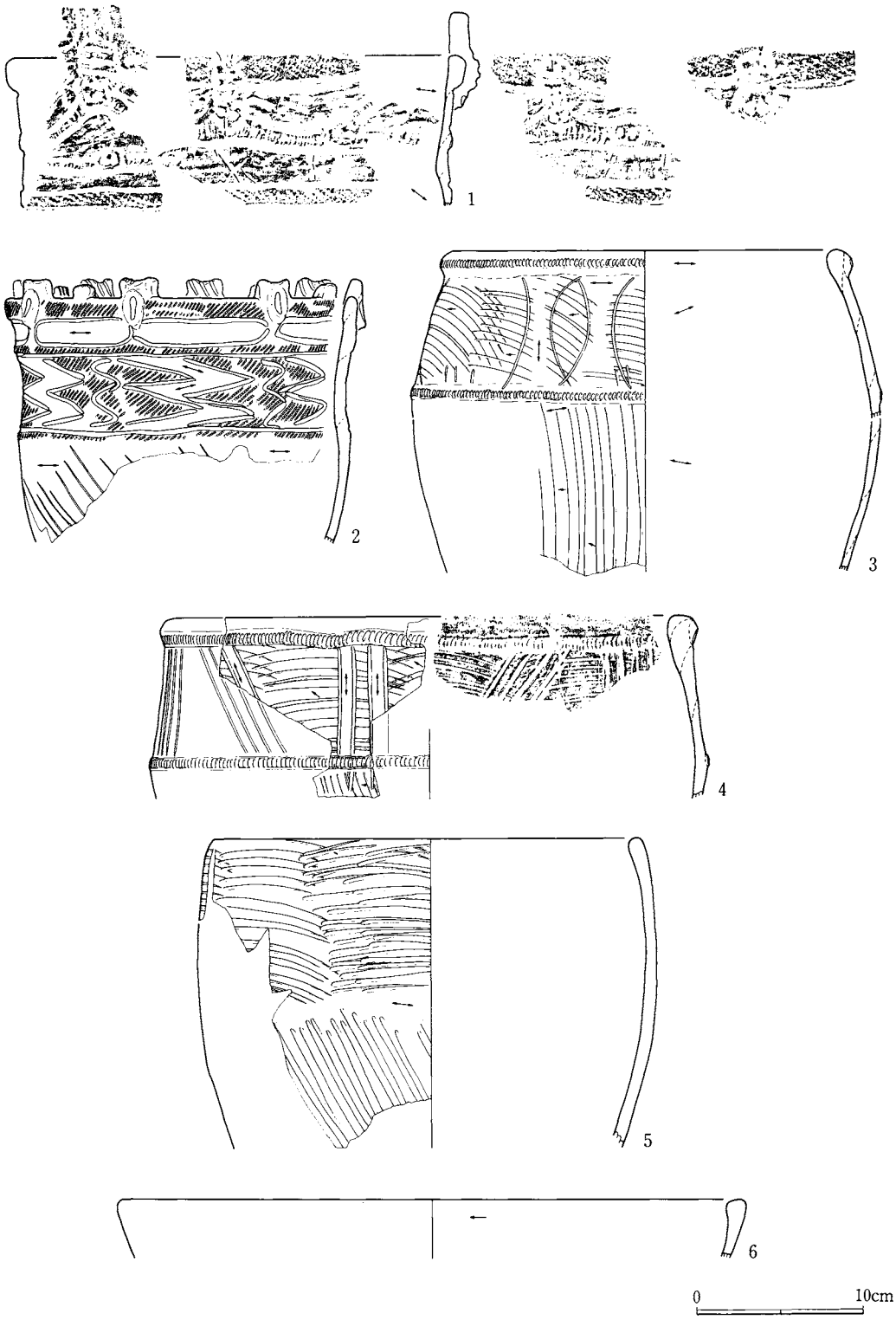
出土土器(第94図、図版45)　「精製土器」として2個体、「粗製土器」として4個体がある。前者はいずれも平縁の土器である。1は矩形の偏平な把手を有する土器で、把手の単位は不詳であるが、把手下と把手間に「芋虫」状突起を持つ。頸部文様帯には偏平な突帯が離合しなが

第92図　池花南遺跡南半部出土安行１式土器（1/4）



第93図　池花遺跡Ｅ2区安行3a期遺物出土状況（1/80）

ら巡り、「豚鼻」状突起が加えられる。以下肩部の縄文帯が遺存する。2はやや魚尾形を呈する把手7単位を有するもの。それらの外面直下には長楕円形の突起が付く。また前述の把手の間には一つ置きの4箇所に小型の矩形把手が加わる。口縁部の縄文帯の下には枠状の無文帯があり、頸部文様帯としては鋸歯状及び波状沈線を組み合わせ、一部規則的に縄文を磨消す。胴部は条線施文のみである。3は口縁部と肩部に突帯を持つ土器である。頸部には緩やかな弧状を描く斜位の、胴部には縦位の条線を施し、突帯を貼り付けた後頸部に)(状の沈線を2単位ずつ描いている。また沈線間は一部縦位に条線が磨消される。4は基本的に3と同種の土器であるが、頸部文様に斜行沈線と垂直沈線が組まれるのと口頸部が砲弾状に内湾しない点が異なる。



第94図　池花遺跡Ｅ2区出土安行3a式土器（1/4）

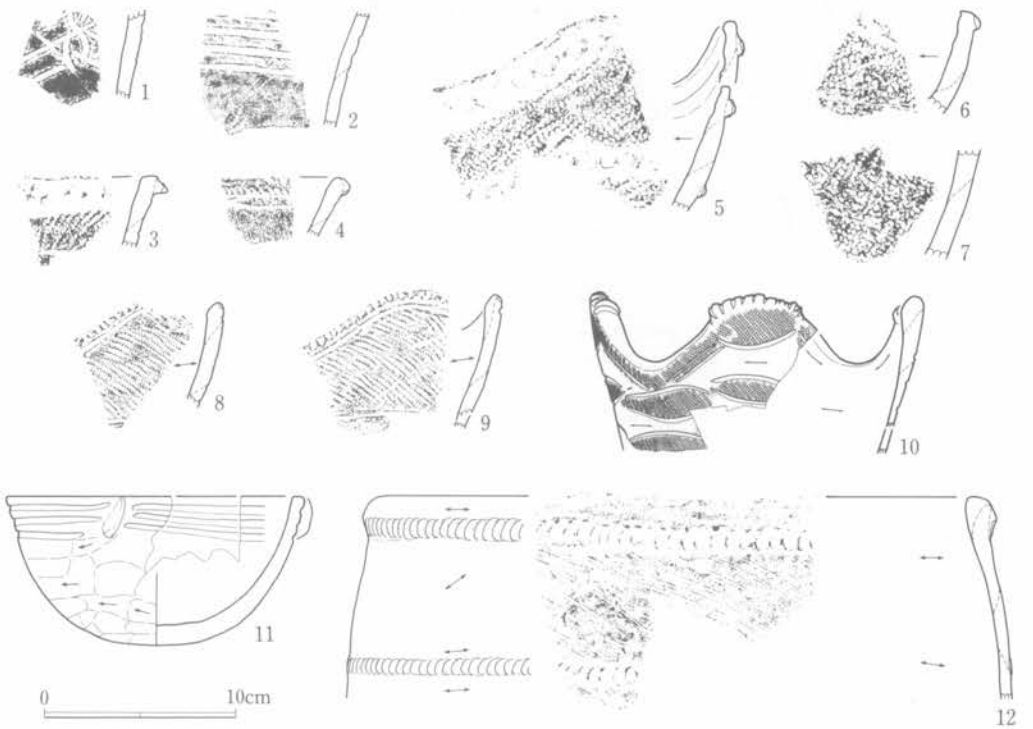
また頸部沈線は突帯貼り付け以前に施文されている。5は突帯を持たない条線施文のみの個体である。頸部は横位、胴部は斜位の条線が施されている。6は口縁部しか識別されなかった個体である。条線は確認されなかった。

⑮池花南、池花遺跡単独出土及び表採の後期後半の土器（第95図、図版31の一部・図版44－2）

1～4が池花南遺跡の表面採集品で1～2が同一個体である。1～2はおそらく波状口縁をなすものであろう。平行沈線は波頂部下で頂点を作り、そこに8字状の沈線が垂下すると考えられる。外反しながら開く器形。3は口縁部に細く高い突帯を持ち、ＬＲの地文に条線を施す土器。4は条線の地は箆削りで突帯部に爪形の刻目が施される。曽谷期か。

5～7は池花遺跡C3－61・62区で出土した破片で、同一個体。波状口縁を持つ「紐線文」土器で、遺存部分に認められる2条の突帯も波状を呈し、口縁内面には凹線2条が見られる。加曽利Ｂ期でも古い段階に比定できよう。

8～9は池花南遺跡F6－22区で出土した破片で、加曽利Ｂ3期の波状口縁を呈する土器の波頂部破片である。縄文はＬＲ。



第95図　池花・池花南遺跡出土縄文後期後半の土器（1/4）

10は池花南遺跡G7－06区で出土した4単位波状口縁を有する土器で、胴部下半～底部を遺存しない。この土器の文様モチーフは、やや崩れてはいるが東北地方に盛行する「弧線連結文」に近いもので、近傍の遺跡に類例を見ないものである。しかし口縁部の縄文帯や原体ＲＬ、器形、断面形は在地の要素で構成される。時期は安行１～２期に比定されよう。

11、12は池花遺跡D1－69～E1－60区から出土したものである。11はボール形の椀で口縁部に３条の沈線と耳状の突起が認められる。12は地に斜条線、口縁部と肩部に突帯を持つ土器。この両者は曽谷～安行１期に相当すると思われるが、近接して出土しており組成するものである可能性が高い。

⑯縄文時代後期後半のまとめ

加曽利Ｂ期　遺跡群中最も古相を示す土器を出土したのは大割遺跡で、量的には少ないがその南西部から加曽利Ｂ１式土器を検出した。また池花遺跡でもその北端で加曽利Ｂ３式土器に混在して古相を示す土器が出土している。しかし両者とも非常に断片的な資料で、Ｂ１期にも短時の占地があった可能性が指摘されるに過ぎない。

加曽利Ｂ２式土器は大割遺跡の集中地点、池花南遺跡の南半部、同北半部で豊富に出土している。特に池花南遺跡ではＧ７区北部（Ａ地点）を中心として、広範囲に遺物包含層が展開していた。ここで時期的なメルクマールとなるのは２種の浅鉢である。第一は口胴部界で屈曲するもので、口端は刻目が小波状となり多くは無文。第二は口縁部が円く内湾するもので、胴部上位に文様帯を有し時に波状口縁となる。ともにＢ１期から続くもので加曽利Ｂ期前半を代表する器種であるが、前者は無文化が進み、後者は波状口縁が３単位から４単位となるなどの新しい要素を含んでおり、Ｂ２期前半に位置付けるのが妥当であろう。池花南遺跡における出土土器の主体は、遺跡北半部あるいは池花遺跡Ａ地点までも含めて、あまり大きな時期差はないように思われる。そうすると広範に展開する遺物包含層は、該期に繰り返し反復占地が行われたかそれとも集団の規模が大きかった故か、いずれの結果なのか。池花南遺跡南半部においては各地点間に少量ながら分有される個体があり、Ａ～Ｄ地点（と言ってもそれぞれが完全に分離されるものではないが）の共時性を顕現しているように思える。単なる土器の四散を過大評価すべきでないかも知れないが、遺跡の核と見られるＡ地点では石器製作が行われていることを考え合わせると、当遺跡南半部の該期包含層はたとえ季節的であったとしても集団の拠点的な占地がなされたと見るべきであろう。住居跡は検出されていないが埋甕が存在することもそれを肯定する材料である。

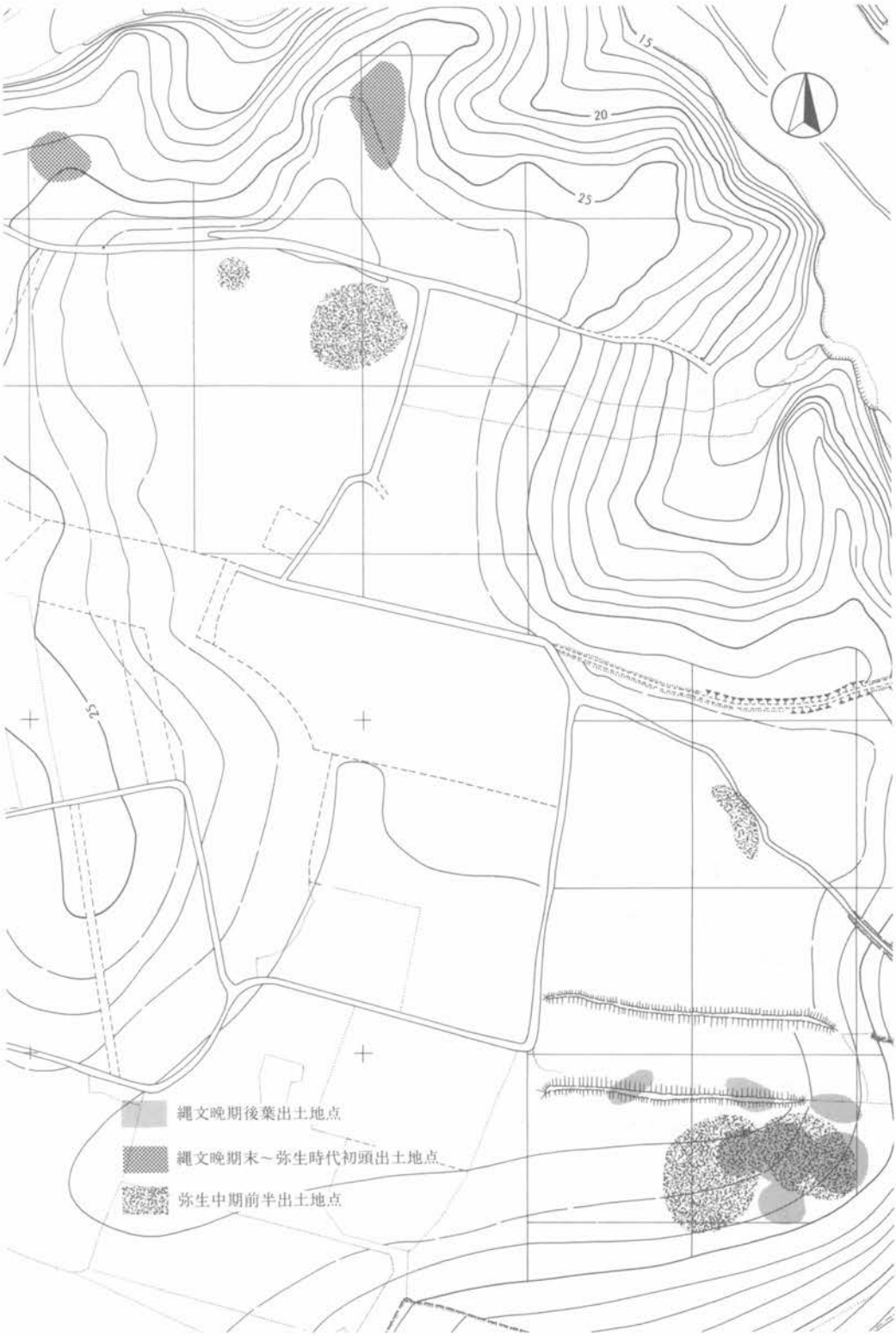
大割遺跡の集中地点でも加曽利Ｂ２式土器が出土しているが、ここでは５単位波状口縁を持つ土器が２個体存在する。５単位波状口縁はＢ２期に始まりＢ３期へと継続する要素である。第57図１～２と５～６が同一個体であることを前提とすると、１～２に残る古い文様要素から

してあまり新しい段階に位置付けることはできまいが、池花南遺跡出土土器群とは様相が異なる点があり、両遺跡の直接的な関連を示す材料はない。わずかな時期差を以て形成されたものであろう。

池花遺跡ではその北縁から東縁に点々と土器を出土する地点（B～E地点）が確認された。主体となるのは加曽利B３式土器で大割遺跡、池花南遺跡とは明らかな時期差が窺える。中でB～D各地点出土土器に時期差は感じられず、ある程度広範囲の集団の占地を想定させるものがあるが、遺物分布が分散的であり、一時的なcampであったものか。

曽谷～安行期　後期末葉になると遺物包含層の形成は池花南遺跡に集約されていく。曽谷期では遺跡北半部には数個体が分布するのみで、遺跡南半部で広範囲に曽谷式土器の分布が認められた。ただ広範囲と言っても出土状況はきわめて分散的で、その点では池花遺跡における加曽利B３期包含層に類似する。遺跡北半部と南半部の関係はよく判らないが、それぞれ一時期に形成されたものであろう。安行１期にはさらに分布範囲を狭めて遺跡南半部に包含層が形成されている。曽谷期から安行１期の間には当然断絶はあろうが、campを形成するにあたって特定の地点が意識されていたことは疑い得ない。そしてこの後、当遺跡群はしばらく断絶し、晩期初頭に至って、池花遺跡にごく一時的な占地がなされるに過ぎなくなる。

縄文時代後期後半における内黒田遺跡群の動態を以上に通観した。加曽利B１期は堀之内期に引き続いて集団占地の痕跡が明らかでないが、続く加曽利B２期前半をピークとして加曽利B３期、曽谷期、安行１期、安行3a期の５期、包含層の規模を徐々に小さくしながら断続的に占地が繰り返されていた。後期前半においても述べたが、隣接の千代田遺跡群の動態は後期後半あるいは晩期に至るまで内黒田遺跡群の動態とよく補完しあっている。内黒田遺跡群で豊富な資料が得られた加曽利B２～３期の千代田遺跡群では、勿論断絶しているわけではないがあまり充分な資料を検出していない。しかし内黒田遺跡群において衰えが目立つ安行１～２期は逆に千代田遺跡群に遺構を含む豊富な資料が検出されている。加曽利B１期の資料はまだ全体に豊富ではないが、千代田遺跡群に隣接する物井地区で調査されている遺跡において検出例がある。このように内黒田遺跡群周辺地域では、あたかも集団の拠点の移動を推測させるような象徴的な現象を抽出することができ、近い将来縄文時代後期～晩期における一集団の動態を復元することが可能かもしれない。



第96図　縄文晩期後葉～弥生時代の内黒田（1/2,000）

8．縄文時代晩期

①概観（第96図）

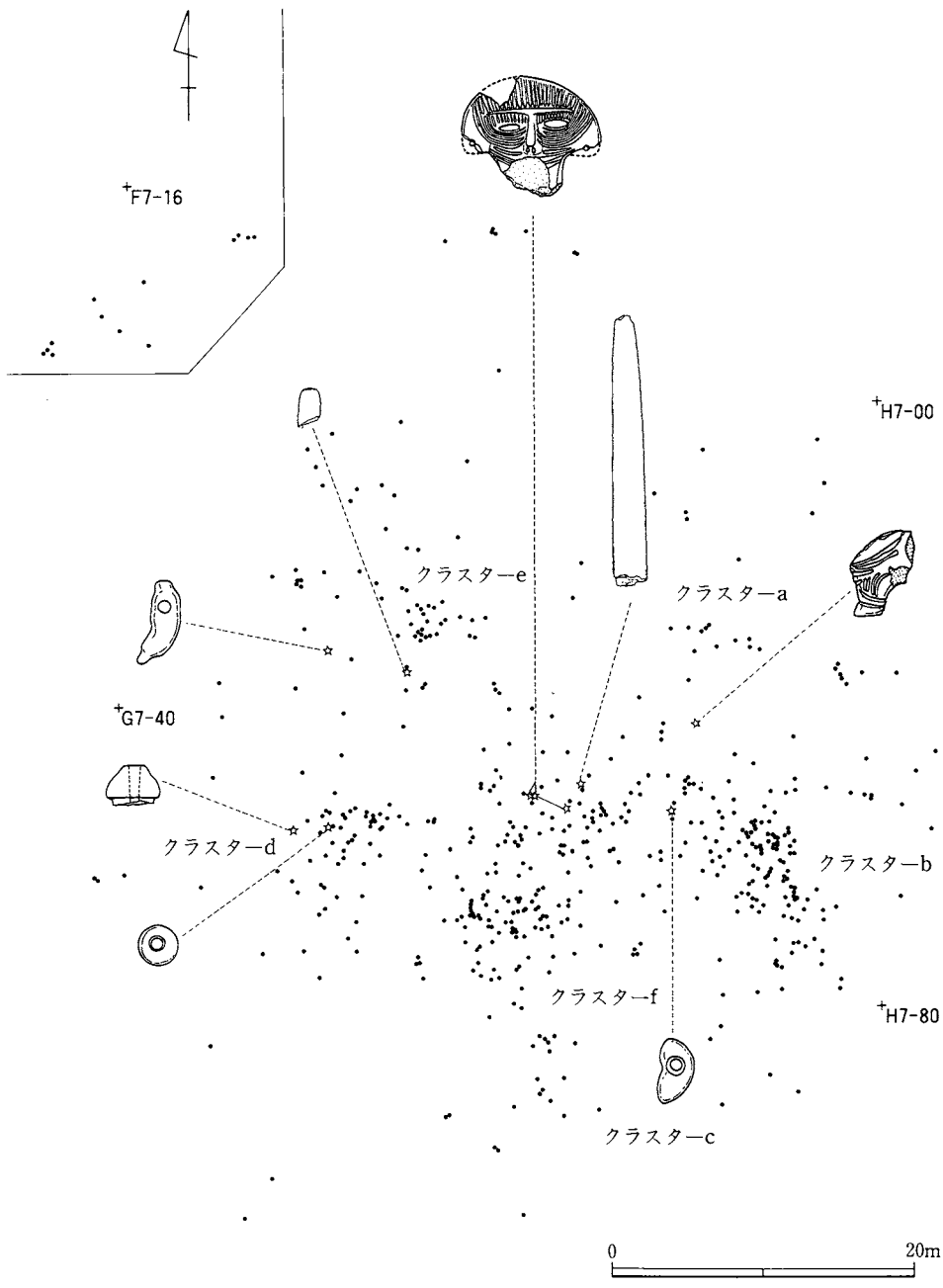
内黒田遺跡群では、前述した6個体の安行3a式段階と考えられる土器を除けば、縄文時代晩期前葉～中葉の遺物は一切検出されていない。その段階の遺跡は近傍では千代田遺跡群のV区があり、安行2期以降前浦期まで継続して、比較的安定した拠点遺跡の様相を呈している。しかし所謂「浮線文」系土器段階になると一気に活況を失う。それに代わるようにして形成されているのが池花南遺跡の遺物包含層である。遺物の分布は遺跡南半部の広範囲に及び、土器に加え、土偶、石剣などの特殊遺物も含まれる。所謂「千網」期の所産である。

しかしここも継続的に営まれたものではなく、「浮線文」系土器のより新しい段階には他へ拠点を移してしまう。そして「荒海」期の古い段階まで内黒田遺跡群内には殆ど何の痕跡も残されなくなる。ちょうどその時期の遺跡として調査されたのが物井地区の御山遺跡であり、主体となる時期が内黒田遺跡群と重複しないのは興味深い。「荒海」期の新しい段階になるとまた池花遺跡北縁部で小規模な遺物包含層が検出されている。この時期は池花南遺跡でも断片的な資料を出土しているが、周辺でもまだまとまった遺跡が確認されていない。池花遺跡ではさらに新しい時期に相当すると思われる土器群の出土地点も確認されており、弥生時代初頭に位置付け得る可能性が濃厚である。さらに池花南遺跡に須和田期の大規模包含層があり、時期的にはある程度連続性があるものであろうが、ここでは従来縄文時代晩期とされていた荒海期までを扱うこととする。

②池花南遺跡縄文晩期後葉（千網期）出土地点

出土状況（第97図、付図6、図版75）　浮線文を施文する浅鉢によって代表される土器群を検出したのは遺跡南部、G7区一帯である。遺物分布範囲は広く、東西55m、南北60mを越える。またやや離れてF7区からも少量の土器が出土している。遺物点数も多く、土器個体数は識別されただけで70個体近く認められる。G7区の分布状況は、当然ながら密度が一様でないが、一つの核がありその周辺に行くにしたがって疎になるのではなく、幾つかのブロックに分かれるようである。外縁に点在する遺物はともかくとして、集中範囲は見方にもよるが6単位を考えることもできる。それをクラスターa～fとする（第97図）。

a～fの6つのクラスターは周縁にa～eの5つのクラスターがほぼ等間隔に並び、中央にクラスターfが位置する5弁の花形を呈する。遺物点数は中央のクラスターfが最も多く、周縁部クラスターの点数はそれに劣るが、多寡の差が激しく、クラスターaとクラスターcはとくに点数が少ない。廃棄空間に現れたこのようなクラスター群は、居住単位を表現するものなのであろうか。特殊遺物が特定のクラスターに集中することはないが、中央のクラスターfに



第97図　池花南遺跡千網期遺物包含層全体図・特殊遺物出土位置（1/500）

は有髯土偶の顔面部分と石剣が検出され、やや離れクラスターａ及びｂ寄りに土偶の腕部分と勾玉状垂飾品が検出されており、祭祀的性格を帯びた空間が中央に位置した可能性がある。

ここでクラスターａ～ｆを設定したが、土器各個体の分布は個別クラスターを越えるものが多い。接合関係は豊富であるが、広範囲に亙るものも目立つ。したがって資料全体の一括性を

示唆する可能性もあるが、もし異なる時期の遺物が重複していたとしても分布状況からそれを分離するのは困難である。

出土土器（第98図～第106図、図版46～51）　確実に千網期前後に位置付けられる土器として識別された68個体、該期の所産と思われる赤色顔料を充塡した小型壺１個体を図示する。したがって縄文時代晩期から弥生時代初頭に頻出する細密条痕施文の土器は胴部小片の場合帰属時期が判定不能のものが多く、ここで紹介する土器には含まれない。しかし細密条痕施文の口縁部破片などでは千網期に位置付けうるものは存在しなかった。

主要器種として浅鉢、壺、甕、深鉢がある。甕及び深鉢の呼称については研究者によって相違が見られるため、ここで本書の分類基準を明言しておく。この分類は単純なものであるが、両者には撚糸文施文の土器において重要な相違が存する（後述）。

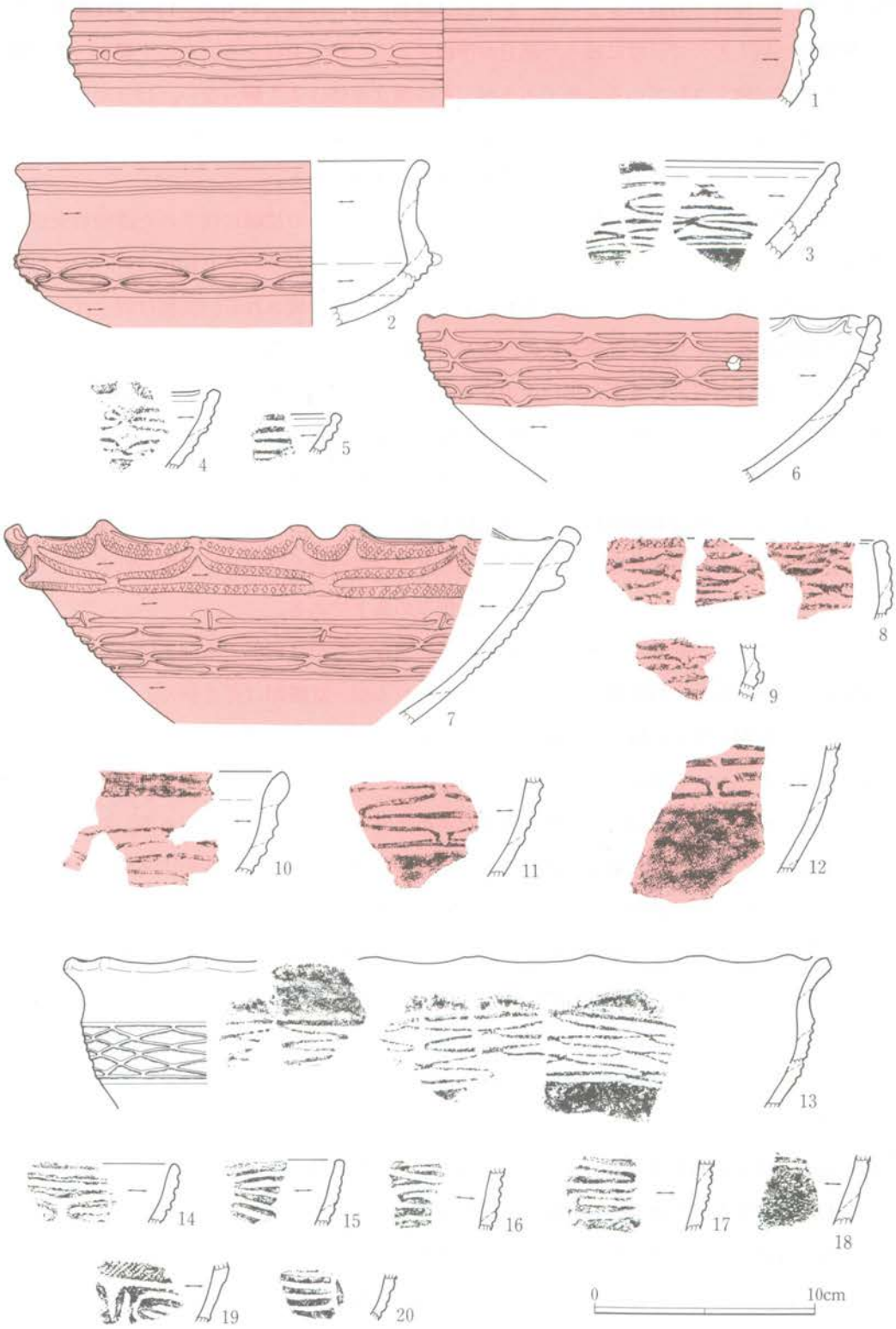
甕　：肩が張り、頸部と胴部の区別が明解なもの

深鉢：頸部の区分ができない単調な器形を有するもの

まず中核部分のクラスターａ～ｆから出土した土器を報告する。１～25は浅鉢である。４～５、８～９、10～12、14～18がそれぞれ同一個体で、全17個体ある。それらのうち13までと19が浮線文施文の土器と分類できよう。１は外面に口縁部から連続する文様帯を持ち、その中位に変則的なメガネ状浮線文を施す。また口縁内面には２条の凹線が認められる。内外全面赤彩される。２は肩部より外湾しながら立ち上がる口頸部を持つ浅鉢で、口縁部に２条の沈線、頸部は研磨された無文帯、胴部上位に３分岐浮線文を持つ。外面全面赤彩。上記２個体は浮線文浅鉢の中でも古相を呈するものと言えよう。

12までの６個体は所謂ハンガー状浮線文を施文するものである。３、４～５、６の３個体は単純に開く器形を持ち、口縁部から浮線文による文様帯が始まる。３は平縁であるが、４～５、６は小波状口縁をなし、４～５の外面端部に狭い縄文帯が見られる。３と４～５の口縁内面には１条の凹線が、６の内面には連弧状に波頂部間を結ぶ、つまみ出した隆帯が巡る。６には焼成後の穿孔があり、その外面は文様帯以上の赤彩が顕著。他の個体ははっきりと赤彩の痕跡を残さない。７は３～６と同種の器形と言いうるが、口縁部に縄文が施文される文様帯があり、無文帯を挟んで浮線文による胴部文様帯が巡る。口縁は１単位と２単位が交互に現れる小波状口縁となり、口縁部文様帯の下半はハンガー状の浮線をなす。縄文はＬＲ。胴部文様帯の文様連結部の一部に縦位の短い沈線（刺突）が見られる。外面赤彩。８～９は２分岐ハンガー状浮線文を施文する点で他の個体と異なり、また器形も口縁部が内傾し、あるいは浅鉢でないかも知れない。口端に縄文帯を持ち、内外面赤彩される。10～12は口縁部が外湾し、無文帯を挟んで浮線文帯を持つものである。ハンガー状浮線文は連結部に刺突を施しており、新しい要素を備えるものと言えよう。外面赤彩。

13は「氷Ｉ式」系の器形と文様を持つ個体である。口縁部は小波状をなし、波頂部を押さえ



第98図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(1)（1/3）

ており、胴部文様は2分岐ハンガー状、あるいは菱形に近い浮線文である。14～18は変形工字文を彫刻的に施すもので、故に残った部分が浮線のような印象を与える。この土器にはまず地文として縄文が施文されているようであるが、その施文原体はよく解らない。19は矩形の連子窓風の浮線を連結しているもの。破片の上部には細かいＬＲが施文される部分がある。20は19に一見類似した破片であるが、施文は浮線文ではなく沈線である。

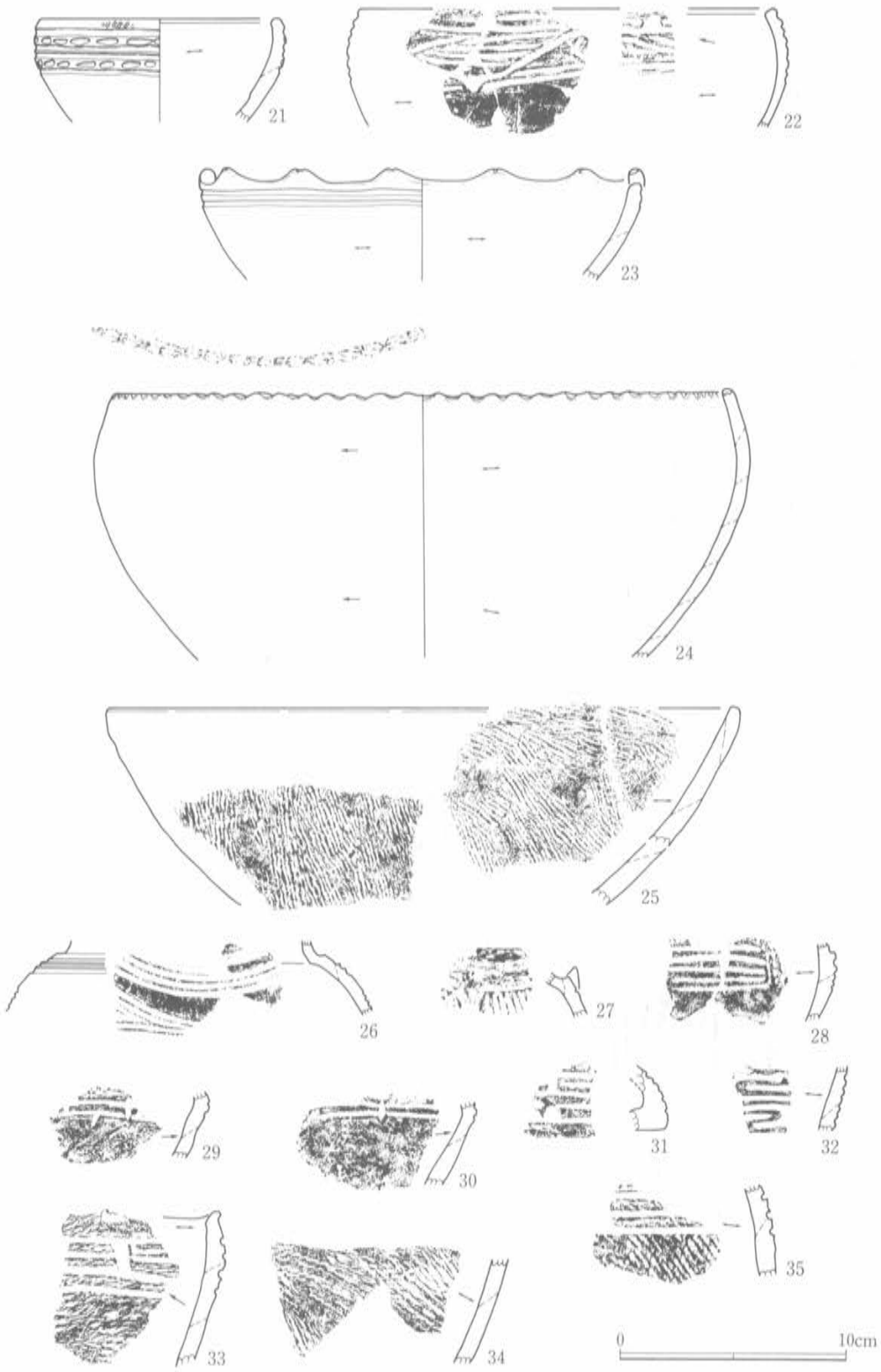
21～23は沈線文を施す浅鉢を集めた。21は小型のもので2条の沈線に挟まれた連続刺突が2単位巡っている。しかしこれはメガネ状浮線文が意識されていたものかも知れない。22は口縁部が円く内湾する器形を有し、口縁から胴部上半に文様帯が形成される。文様は斜位沈線と間を埋める横位沈線、そして一部渦巻状の沈線が見られるが、文様帯の上端と下端はきわめて浮線的である。23は口縁部に2条の平行沈線を巡らせるもので、小波状口縁を呈し、波頂部に刻目を加えている。以上3個体は赤彩の痕跡は観察されなかった。

24、25は粗製の浅鉢で、胎土は23までと全く異なり、甕、深鉢に近い。24は22と同じような円く内湾するボール状の器形を持つ。口端は絡条帯の圧痕によると思われる刻目が施される。これも甕のあるものに施されるものと同じ。25は外面全面が撚糸文（Ｒ）で覆われる。24、25とも内面は横位に研磨されるが、24の外面は箆削りのままである。

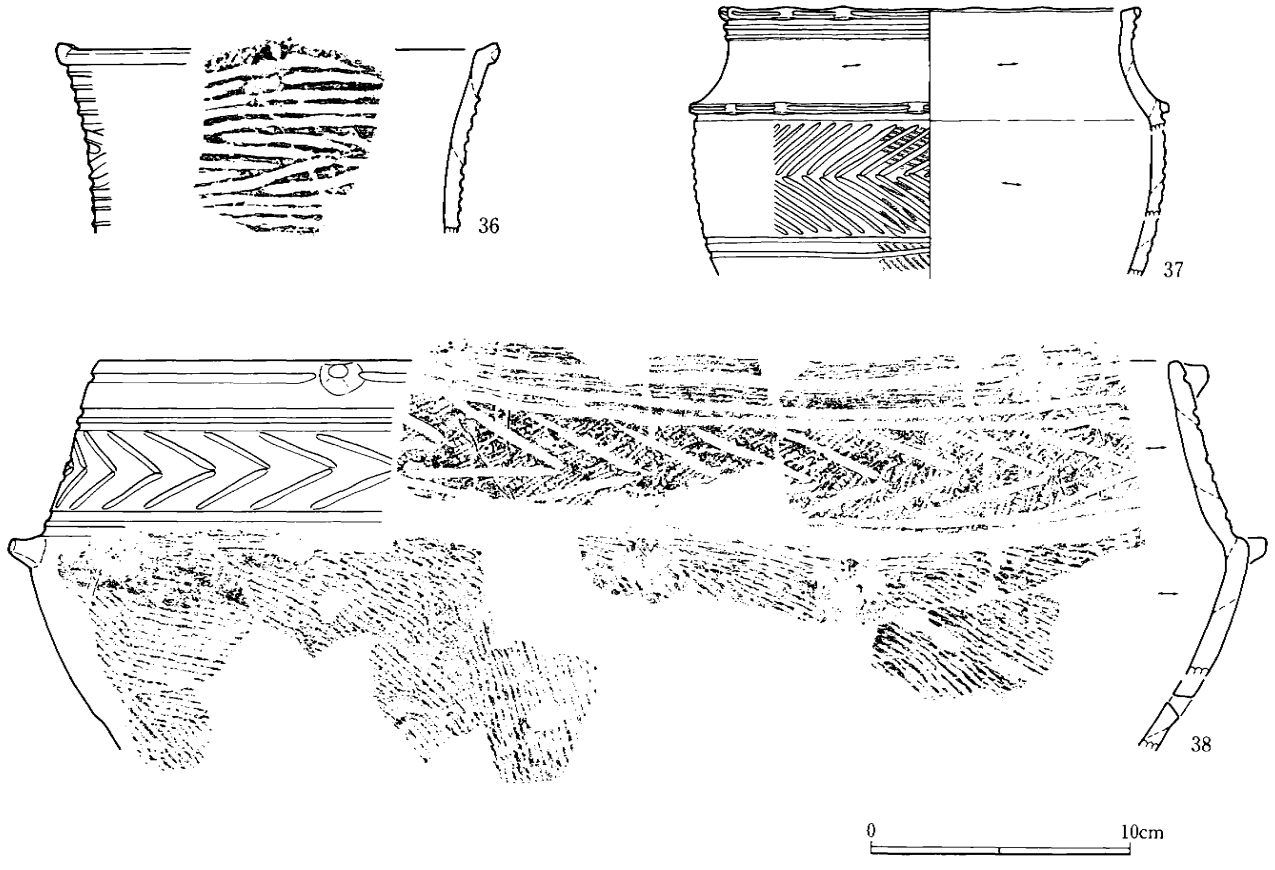
26は壺で、薄手かつ非常に丁寧に作られている。遺存するのは肩部～胴部上位の一部だけで文様構成も不詳である。肩部は3条の沈線が重ねられるが、沈線間はごく狭く、浮線状となっている。また胴部文様も同様の〝沈線〟によって描かれているが、構成不明ながら浮線文とすべきものであろう。27も壺肩部破片である。肩に突起がおそらく等間隔に施され、胴部には連子状の浮線文が窺える。なおこの個体は頸部が黒色処理されている可能性がある。28も壺と思われ、沈線による連子状文と刺突が認められる。29～30は同一個体で、器形、文様構成等不詳のもの。しかし14～18と非常によく似ており、同じ個体の可能性がある。

31～35に工字文を施文する土器を集めた。うち33～34が同一個体である。31は底部破片と思われる。筒形に近い形状の土器か。32は半ば浮線化し流水文風となるもの。他に破片がなく器形を窺い知ることはできない。33～34は撚糸文（Ｒ）地文の深鉢である。口縁は小波状を呈し、直下に工字文が巡る。文様帯は口縁部下に存在するだけらしい。35は縄文（Ｒ）地文の甕と考えられる。

36～38に羽状文を施文する土器を集めた。36は口縁外面に細い縄文帯を持ち、4条の沈線を施した下に羽状文を巡らせている。37は口縁部文様帯、頸部無文帯、胴部文様帯の区分がなされ、口端と肩部に2個一単位の突起を持つ。口縁部には沈線が施文されるが、その下の無文部が削り出されているため、浮線となる。羽状文は胴部文様帯に幅広く施される。またこの地文として撚糸文（Ｒ）が認められる。この土器は現在のところ南関東の初出であるが、桐生市の千網谷戸遺跡では酷似品が知られている。38は大型の甕、または鉢。羽状文は疎で頸部に巡っ



第99図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(2)（1/3）



第100図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(3)（1/3）

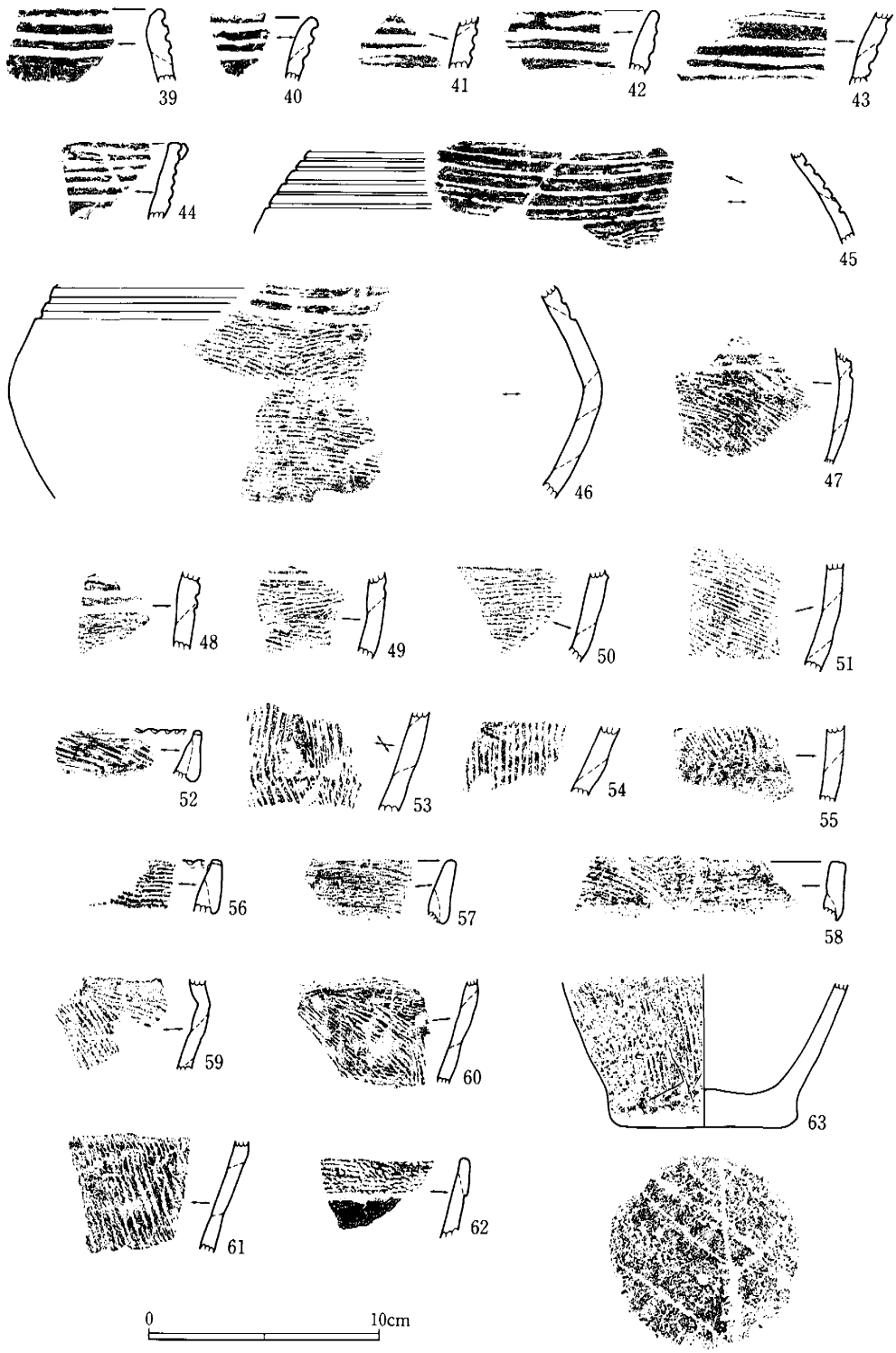
ている。37と同様口縁部と肩部に突起が貼り付けられるが、こちらは1個ずつ等間隔に施されるようである。口縁部には沈線の地文として横位の撚糸文（R）が、胴部にも撚糸文が施文されるが、頸部の地文には縄文（LR）が施されている。

39～51に平行沈線を施す土器を集めた。器形はいずれも甕と思われるが、45などは球胴に近くなり、一概に決することはできまい。40～41、48～51がそれぞれ同一個体である。39～43の4個体はいずれも口縁部に数条の沈線を巡らせるものと思われる。その下の頸部は研磨された無文帯となり、さらに肩部に数条の沈線が巡るのが通例であるが、残念ながら当遺跡では口縁部から肩部まで連続して遺存する個体はなかった。44も口縁部破片である。これには口端に間隔を置いて突起が付加されるようであるが、氷Ⅰ式土器に見るものとはやや異なる。45以下51までの4個体は肩部から胴部の破片である。いずれも胴部には撚糸文が施文されている。それらの原体は例外なくRで、沈線間は意識して消されているが、46や48など研磨が充分でなく撚糸文が一部残っている。

52から81までは撚糸文を施すだけの所謂「粗製土器」である。殆どが複合（折り返し）口縁を持つが、器種としては甕と深鉢の両者がある。52～55、57～58、64～67、68～69、70～71、72～73、75～77、78～79、80～81がそれぞれ同一個体。まず52～62には器形の全貌が不詳の小片を集めた。これらのうち59、60、62が甕である。また口端に刻目を持つ個体に52～55、56がある。これらの中で62は特異で、施文原体が非常に密に巻き付けたLとなっている。63は底部のみ。木葉痕が認められる。

遺存度の高いものでは甕が64～73の4個体、深鉢が74～81の4個体ある。64～67は口端に絡条体による刻目を巡らせている。頸部上位は外反するが口縁部は僅かに内傾気味。撚糸文はRで口縁部と肩部は横位、胴部は縦位の施文方向になる。68～69、70～71は口頸部の形状がやや異なるが、口端に刻目を持たないことで共通し、また撚糸文の施文方向でも口縁部がほぼ横位で胴部が斜位となり、肩部と胴部の区分がない。装飾性ということでは前個体より若干劣ると言えよう。72～73は複合(折り返し)口縁を持たない稀少例である。口唇部には幅約1 cmの斜位撚糸文を施文する。また肩部と胴部の区分があり、肩部の施文方向は横位である。一方深鉢の中では74の器形が特徴的である。他の個体がすべて直線的に開く器形を持つのに対し、これはなだらかな丸みを帯びて口縁が内傾に向かっている。また口端に刻目を有する点でも相違が認められる。刻目は64～67と同様のもの。他の3個体はみな近似し、撚糸文の施文方向も口縁がほぼ横位、胴部が縦位に近い斜位で共通する。ただ75には突起が認められ、その頂部には刺突が施される。単位は不明。

82は大洞系の土器で、他の個体とは胎土、焼成とも全く異なり、おそらく搬入品であろう。波状口縁を呈する浅鉢で、上方から見ると菱形に近い楕円形をしている。口端には波頂部に長1短2一単位の刺突が施され、その間を沈線で繋ぐ。口縁部には波形に合わせた2条の沈線が



第101図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(4)（1/3）

第102図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(5)（1/3）

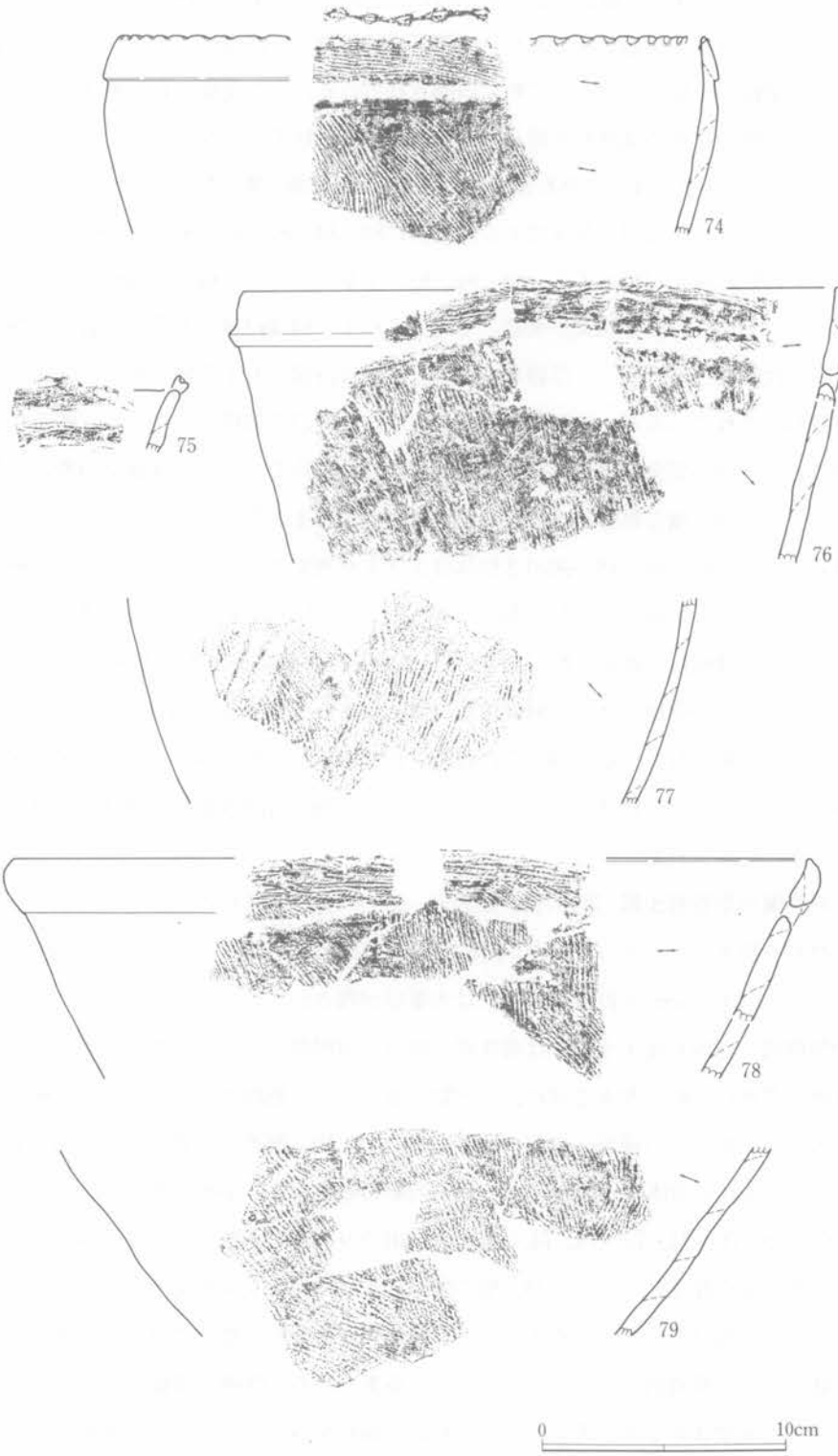
第103図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(6)（1/3）

巡り、底部近くにも3条の沈線が巡る。胴部には波頂部下に3条の沈線による山形の文様が描かれる。底部には渦巻文が描かれており、所謂「浮線渦巻文」に相当しよう。焼成は石製品と見まがう程の堅緻さを見せ、全面が丁寧に研磨されている。また全面赤彩が施されていたと思われるが、ごく僅かにその痕跡かと思われる箇所があるだけであった。

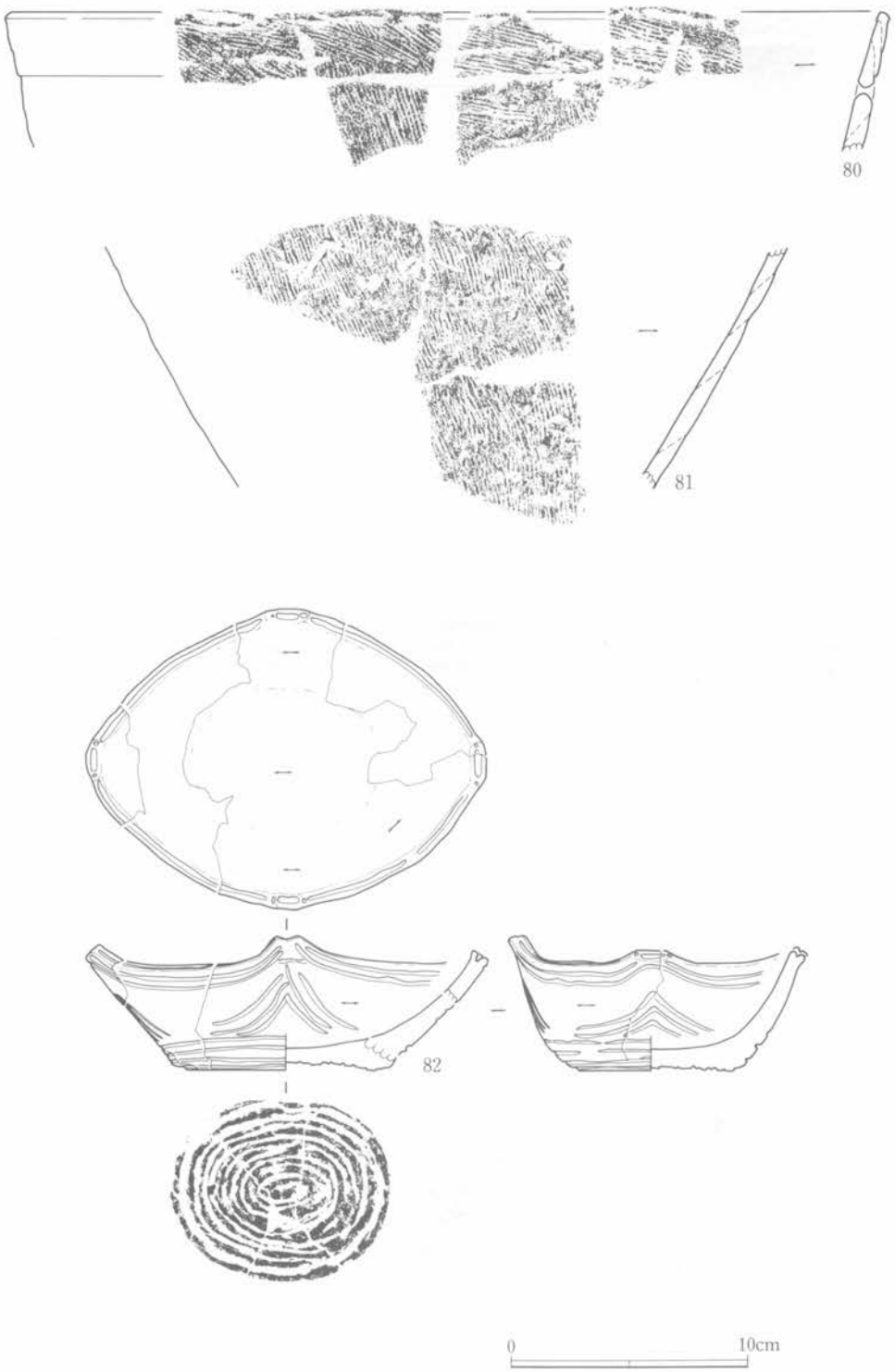
83以下はクラスターａ～ｆから外れた地点より出土した土器を集めた。85～86、88～90、91～93、95～96、97～98がそれぞれ同一個体である。浅鉢に83、84、87、95～96、97～98の5個体がある。そのうち器形の復元ができるのが83と84。83は小型の土器で口縁下に器体に比して太い沈線が巡り、その上に「く」字状文が連続して施文される。84は口縁に6条の沈線（凹線）を巡らせている。沈線間はごく狭く、浮線状をなす。沈線は内面にも1条施される。3条目の沈線内から穿孔がなされているが、これは焼成前になされたもので補修孔ではなく、蓋その他の存在を推測させる。内外面全面に赤彩の痕跡を残す。87は細片でレンズ状浮線文の断片が残るのみ。95～96、97～98の遺存部分には平行沈線が施文され、また内面にも凹線、あるいは段状の成型が認められる。85～86、88～90の2個体は工字文が施文される土器である。85～86は浮線的な仕上がりとなり、口縁には突起と刺突が施されるが、器形不明。88～90は甕である。なおこの個体の胎土と焼成は浅鉢82と酷似している。91～93は撚糸文が施される胴部破片であるが、肩部に沈線が巡るのが確認できる。94は波状口縁を呈する土器の波頂部破片であり、波形に沿って4条の沈線が描かれている。99以下は複合（折り返し）口縁を持つ土器の口縁部破片を集めた。99のみ口端に刻目（棒状工具による）が施され、100～102は頸部の無文帯が遺存し、器種としては甕に分類される。

赤色顔料充塡小型壺形土器（第107図、図版51－2）　G7－66区から正立して出土した。内部には赤色顔料を混ずる土が入っていた。本体も赤彩されるが、きわめて小型の土器で器高5.8cm、最大径6.3cm、口径3.3cmを計る。底部には木葉痕が残されている。

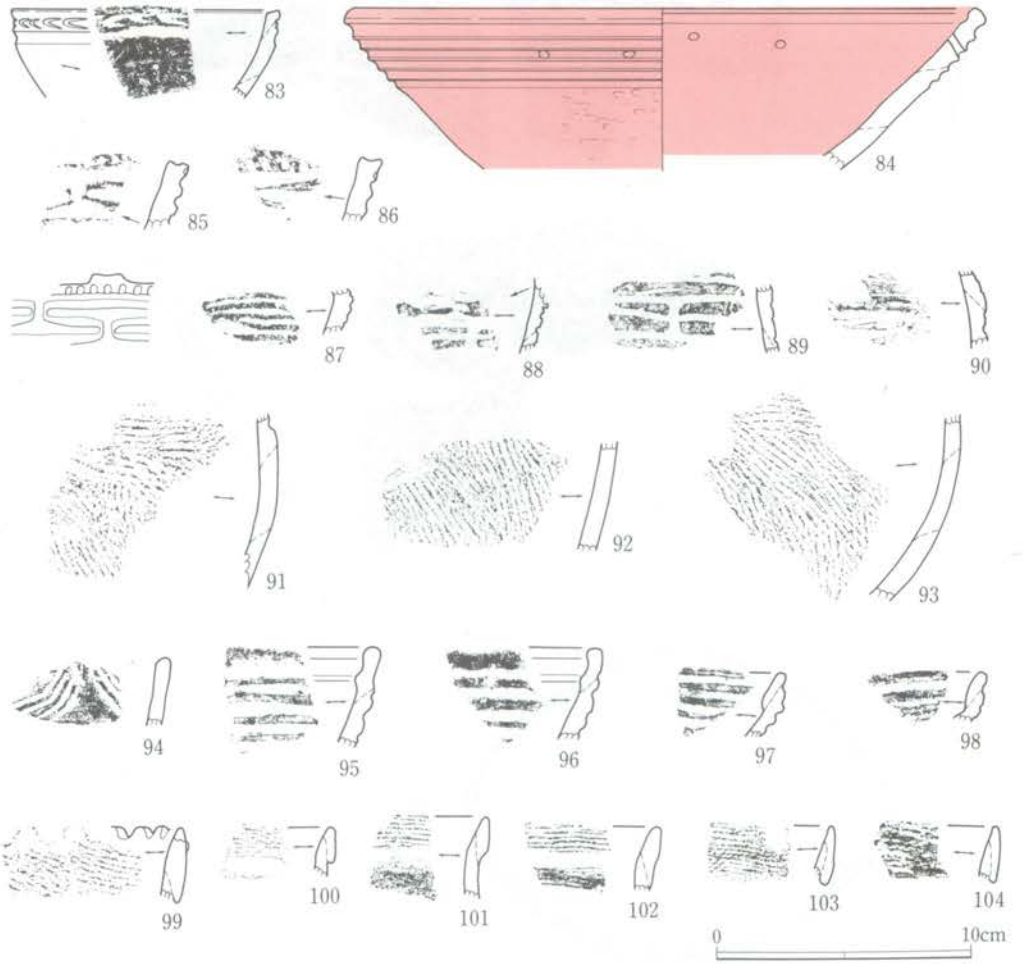
土器の使用痕　当地点出土土器には興味深い使用痕が観察される。土器の使用痕は通常二次焼成の痕跡、煮沸の痕跡（吹きこぼれ、炭化物固着）として把握されるが、ここで観察されるのは煮沸痕の方である。口縁部と肩部～胴部上半に炭化物の顕著な付着がある。当土器群の中で煮沸痕が認められる個体は、煮沸痕かどうかの判断に微妙なものを残す例もあるが、36、48～51、64～67、68～69、70～71、72～73、74、91～93、101の9個体である。このうち36は少なくとも遺存部位に撚糸文を施文していないが、他の個体はすべて撚糸文を施文する。ここで煮沸機能は撚糸文施文の土器にあることが判る。しかし興味深いのはその事実ではなく、撚糸文施文土器でも深鉢には殆ど煮沸痕が認められないという事実である。明確に深鉢と判断される大きく遺存する個体は4個体あるが、そのうちやや特異な器形を持つ74については煮沸痕が認められたが、他のより一般的な深鉢と考えられる直線的に開く器形を持つ土器にはまったく煮沸痕は残っていなかった。他方、甕では撚糸文施文のみの土器だけでなく撚糸文施文に平行沈線が加



第104図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(7)（1/3）



第105図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(8)（1/3）



第106図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(9)（1/3）

第107図　赤色顔料充塡小型壺形土器（1/2）

えられる土器にも煮沸痕が観察された。したがって「撚糸文を施す」「甕」という二つの属性が重なった土器に主として煮沸機能が帰属し、それらよりさらに装飾性の低い深鉢は別の機能を与えられた器種ということになる。つまり「撚糸文が施文される複合口縁の土器」では一括できないのである。

特殊遺物（第108図、図版52）　当地点の出土遺物には土器以外に土偶、石剣、玉類がある。1は有髯（黥面）土偶の頭部である。顔面のほぼ全貌を把握できる遺存状況であるが、口部分を剝落している。耳鼻を結ぶ線以上は半円形を呈し、鋭い沈線で黥面が描かれる。耳部は穿孔されるが、左右とも孔部から欠損する。頭部の形状や黥面及び耳の表現などは成田市荒海貝塚出土品や藤岡市沖II遺跡出土品に類似しているが、それらでは省略されている眉がはっきりと隆起して表現されている。時間と共に省略化が進行すると仮定すれば、上記2遺跡例のより原初形態を示すものと考えることができる。2は土偶の腕部分である。上腕は丸みを帯び、肘で屈曲して垂下、末端に手の表現がある。沈線で文様が描かれるが、その施文具は1のそれとよく似ており、また胎土も近似する。これまで有髯（黥面）土偶、殊に1のような頭部形状を持つ土偶の腕は明確な例がなく、接合しない限り同一個体か否か断じ切れない。

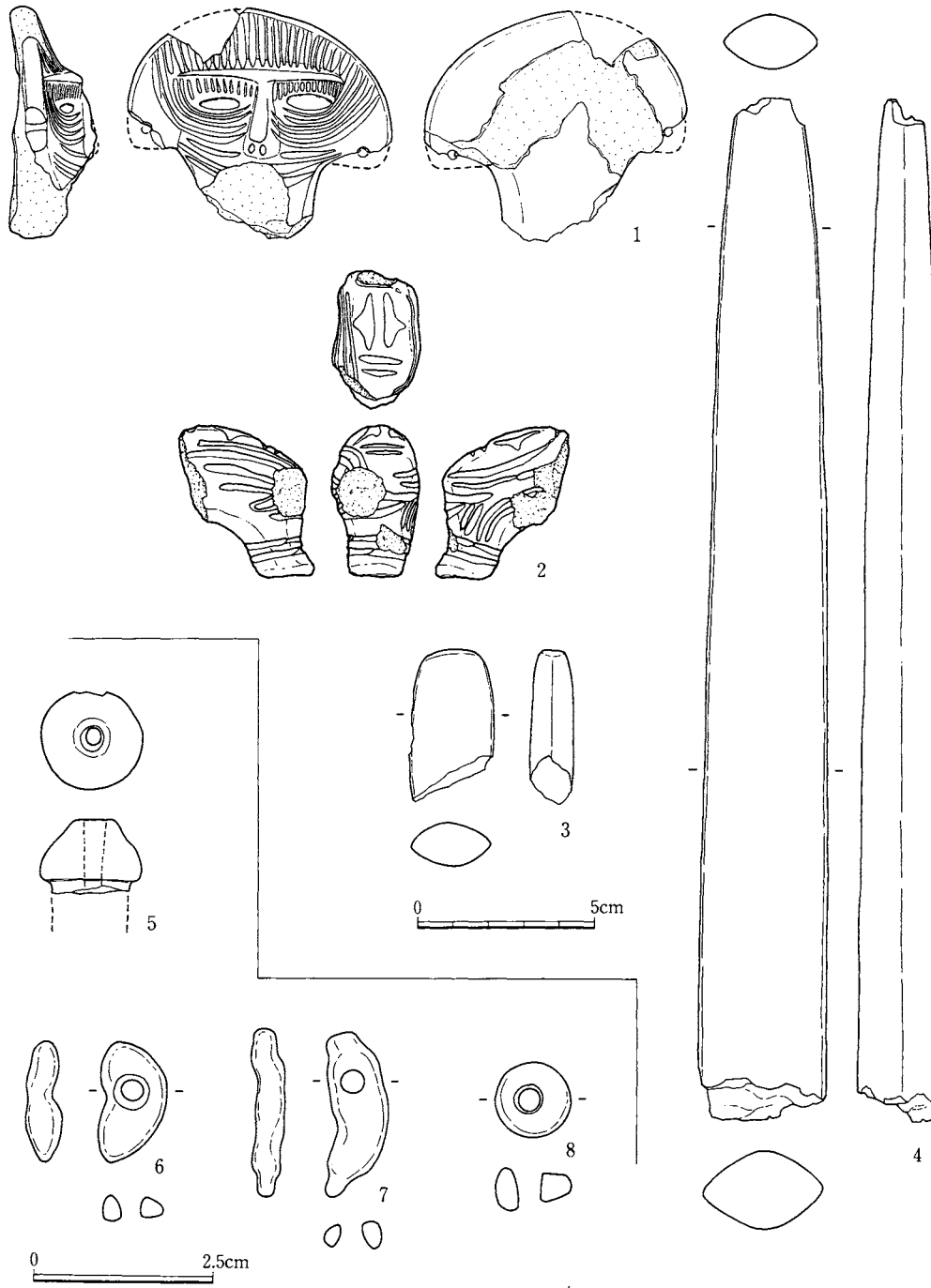
3、4は石剣である。3は先端のみ、4は先端と基部を欠損する。別個体。いずれも断面形は分厚いレンズ状を呈しており、ともに側縁は丸みを帯びている。5は性格不明の土製品である。頭部を遺存するものと思われ、中央に貫通孔が穿たれている。非常に小型であるがあるいは男根を模したものかも知れない。6～8はいずれも軟玉製の石製品である。6は鮮やかな翡翠色の勾玉状垂飾で、側面観はやや落花生状を呈する。7も勾玉状垂飾でくすんだ緑灰色を呈している。頭部と末端はややいびつで乳頭状になる。8は淡い緑色の臼玉状の製品で、左右の厚さがかなり異なり、首飾りにおける連接を意識したものとなっている。

第3表　池花南遺跡出土縄文晩期石剣・玉類・他計測表

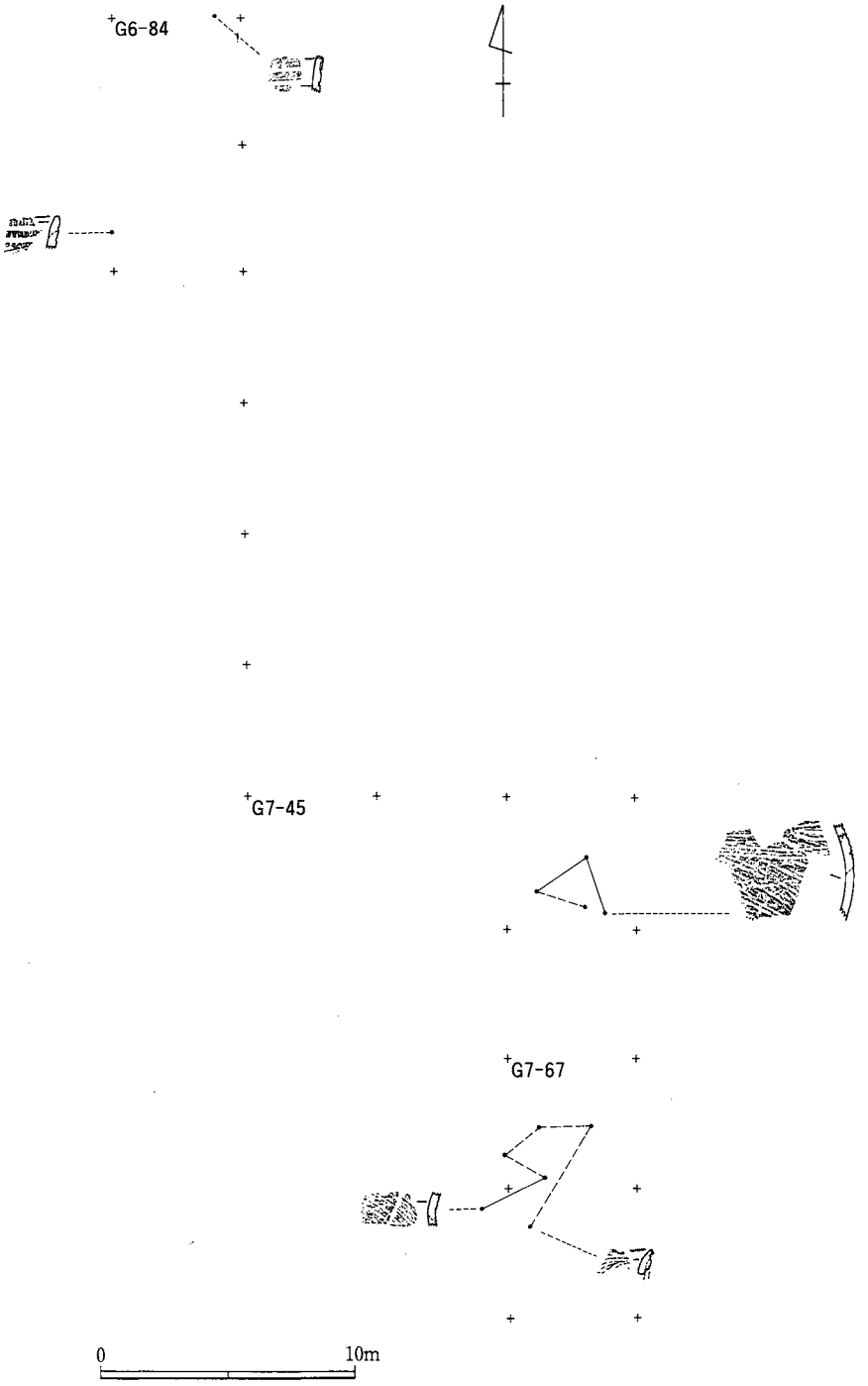
挿図番号	器　種	遺物番号	石　材	最大長㎜	最大幅㎜	最大厚㎜	重　量g
3	石　剣	G7－33－102	砂　岩	42.0	23.8	12.3	13.75
4	石　剣	G7－56－295	片岩系？	282.8	36.0	23.2	329.52
5	男根状土製品？	G7－52－128	－	11.7	径14.7	－	1.83
6	勾玉状石製品	G7－57－65	軟　玉	16.5	9.3	4.9	0.89
7	勾玉状石製品	G7－32－38	軟　玉	22.9	8.7	4.3	1.06
8	臼玉状石製品	G7－52－176	軟　玉	外径10.6	孔径3.1	6.1	0.83

③池花南遺跡出土荒海式土器

出土状況（第109図）　遺跡南半部のG6区からG7区にかけて荒海期に位置付けうると考えられる土器が点在した。小片が多く集中地点を形成しない。またSX－01周溝覆土内及びSD－



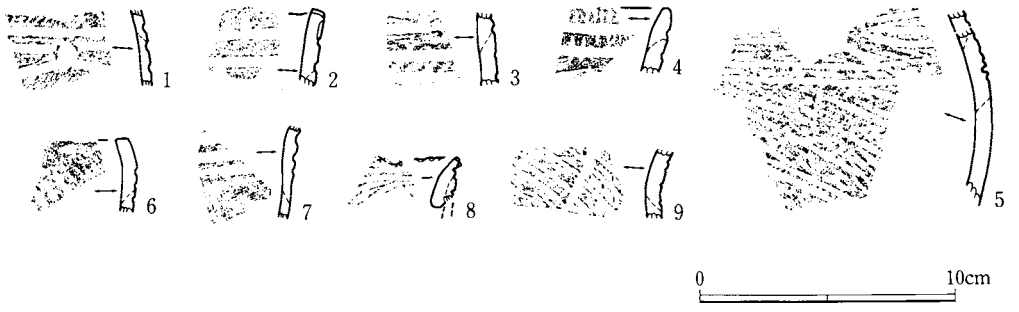
第108図　池花南遺跡出土縄文晩期後葉特殊遺物（1/2, 1/1）



第109図　池花南遺跡荒海期遺物出土状況（1/300）

01覆土内にも土器片が含まれていたが、原位置を留める土器の分布も考慮するとあるいはSX－01辺りが分布の中心であったとも思われる。ここで呈示するのは8個体である。

出土土器（第110図、図版54－1）　変形工字文系の沈線文様を施す土器が4個体ある。うち1と3は水平な沈線と斜行沈線の連結部に縦位の短い沈線（刺突）を加えることによって変形工字文とする。2は小片で文様構成が明確には判らないが、平行沈線の随所に1、3と同様の刺突を加えるらしい。変形工字文からさらに変化したものであろう。5は1、3に類似するが沈線で匹字状の文様を描く。また最も下位の沈線2条の間に列点が施される。これについては池花遺跡出土土器にも見られ、注目に値する。地文は1がLRまたはL、2はなし、3がL、5が茎束条痕である。4、7も小片で文様構成が不詳だが、ともに平行沈線が認められるものである。4にはそれにくわえて縦位の細く不揃いな沈線が施される。また7の外面は赤彩されている。6は破片の下位に3条の斜位沈線が認められる。8・9は同一個体で口縁部8には刻目が施されている。体部は斜行沈線で覆われ沈線間に列点が施されるが、2条の空白と2条の列点施文が繰り返されるようである。



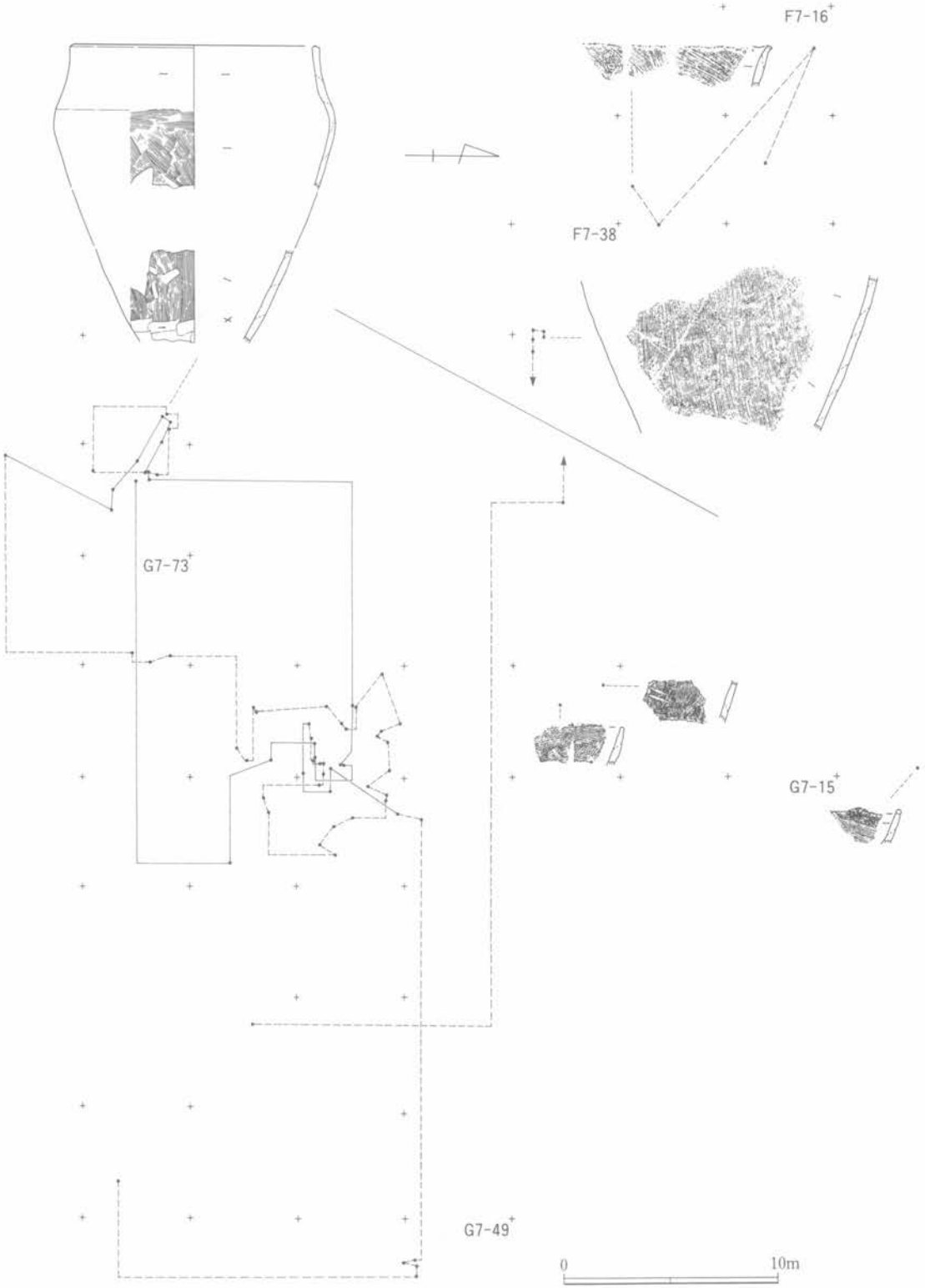
第110図　池花南遺跡出土荒海式土器（1/3）

④池花南遺跡出土縄文晩期末葉細密条痕施文土器

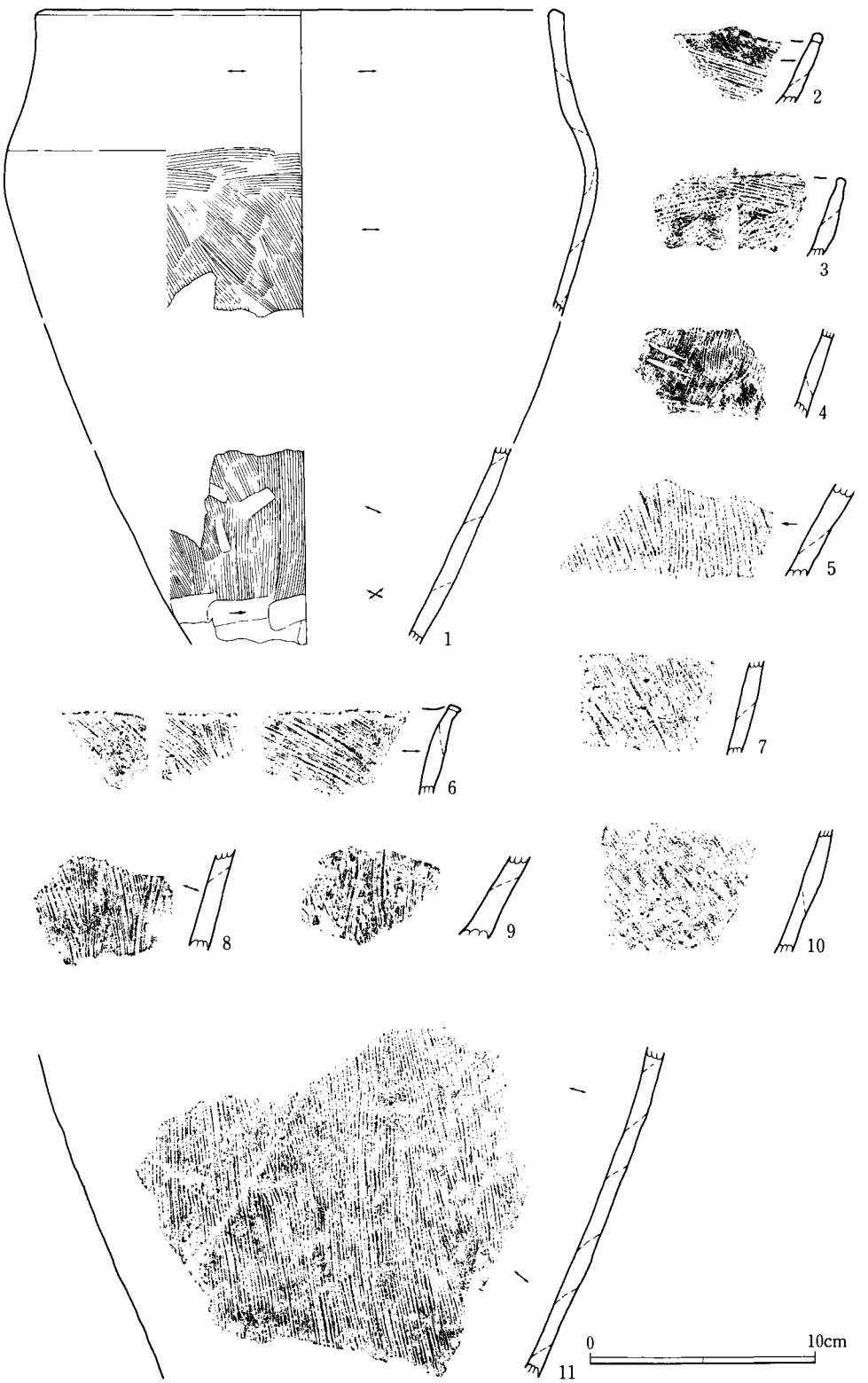
池花南遺跡では縄文時代晩期から弥生時代に頻出する細密条痕を施文する土器が多量に出土している。それらの大半は弥生時代に帰属するものと判断されたが、ここで報告する1のように縄文晩期の遺跡に類例が存在するものがあり、それによく似た刷毛目状条痕を施す土器の一部を別に紹介しておくこととする。

出土状況（第111図）　F7区とG7区に分布は分かれるが、あくまで「点在」である。ただし1は破片数が多く、G7－71～72区とG7－54～55区に分布の核をもちその間に接合関係もある。また11の個体はF7区からG7区の東部まで、接合はしないものの破片が分散する。

出土土器（第112図、図版56－1）　6～10が同一個体。1は口頸部が内傾する甕である。口頸部は横位に研磨され、肩部以下はほぼ全面条痕施文となり、底部近くは箆削りが観察される。



第111図　池花南遺跡縄文晩期末葉細密条痕施文土器出土状況（1/300）



第112図　池花南遺跡出土縄文晩期末葉細密条痕施文土器（1/3）

条痕は肩部が横位、以下斜位から縦位となる。成田市荒海貝塚や同市殿台遺跡に多くの類例があるが、通常小波状や突起が付く口縁を有することが多いようである。2、3も口縁部であるが、1と異なり頸部無文部を持たない深鉢である。2のような突起も荒海貝塚出土資料に類例がある。6～10は口縁部から斜位の細かい刷毛目状条痕が施されているもので、ごく弱い小波状口縁をなしている。やはり荒海貝塚に類例が見られる。11は大型土器の胴部破片でおそらく1と同種の甕になると考えられる。

⑤池花遺跡縄文晩期末葉（荒海期）出土地点

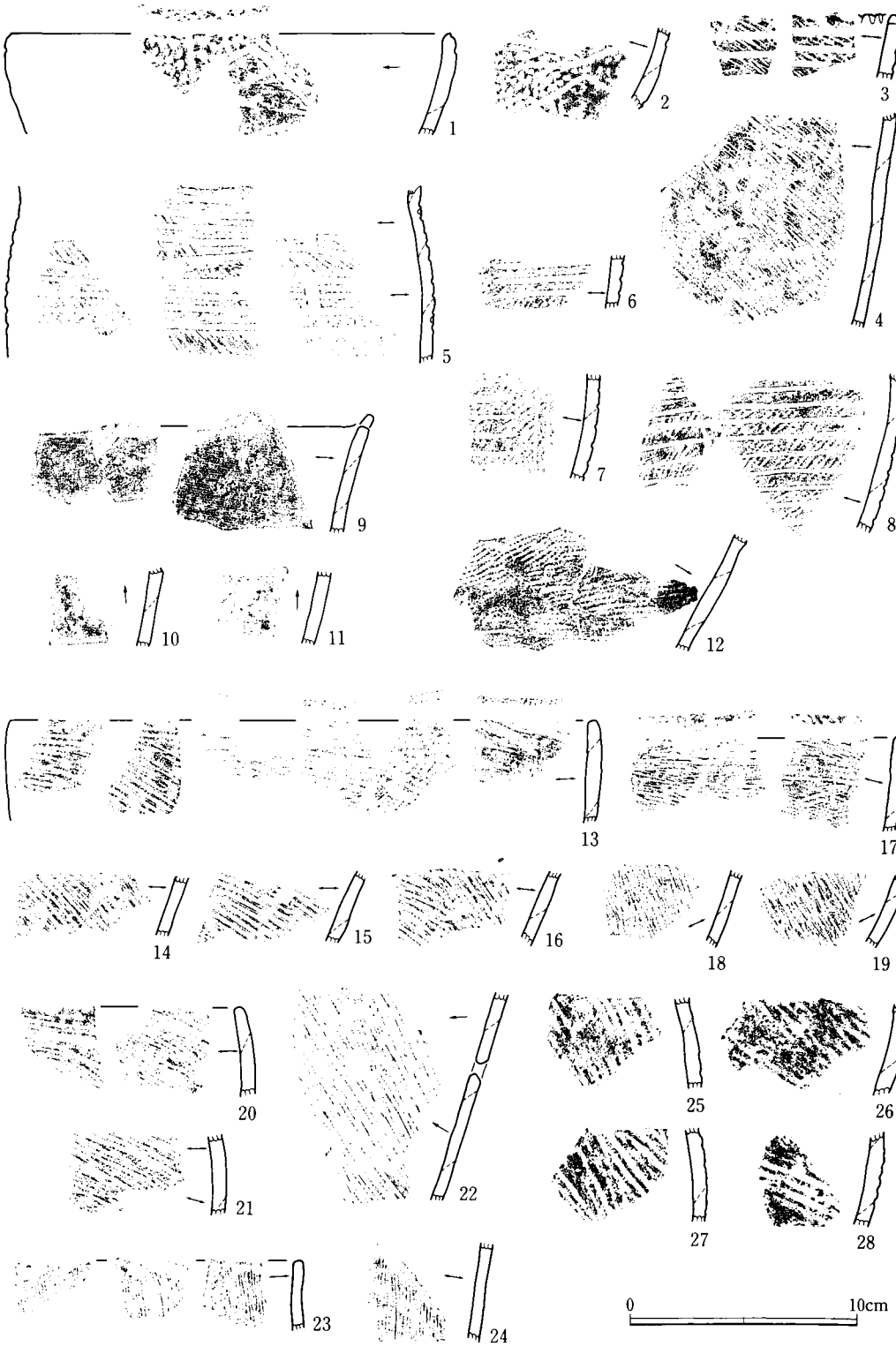
出土状況（第113図）　池花遺跡北端部のD1区～E1区において荒海式土器に比定される土器群がある程度まとまって出土した。土器片の分布密度は明確な粗密の差を持っており、最も集中するのはE1－10～21区である。またD1－29区とE1－40区にもそれぞれ集中する核が認められる。ここでそれらの核を中心とした集中区をクラスターａ～クラスターｃと呼称する。クラスターａには最も多くの個体が分布するが、この中核部分に存在した個体の一つは接合関係は認められないもののクラスターｃにも多量に存在する。むしろクラスターｃはこの個体によって形成されると言える。また他にも1片ながらクラスターａに分布する個体の破片がクラスターｃで検出されており、クラスターａとクラスターｃの共時性は指摘されてよい。一方クラスターｂと他のクラスターとの関係は微妙である。クラスターｂに主体的に分布する個体がクラスターａにも4片含まれるなど、強い関係を推測させる要素はあるが、クラスターｂとクラスターａは隣接しており破片が四散すれば当然分布は重なる。尤も出土土器からは全く時期差は認められず、クラスターａ～ｃが同時に形成されたものと考えてよいと思われる。

出土土器（第114図、第115図、図版53）　識別された計13個体と底部8個体分を図示する。1～2、3～4、6～8、10～11、13～16、17～19、20～22、23～24、25～28がそれぞれ同一個体。

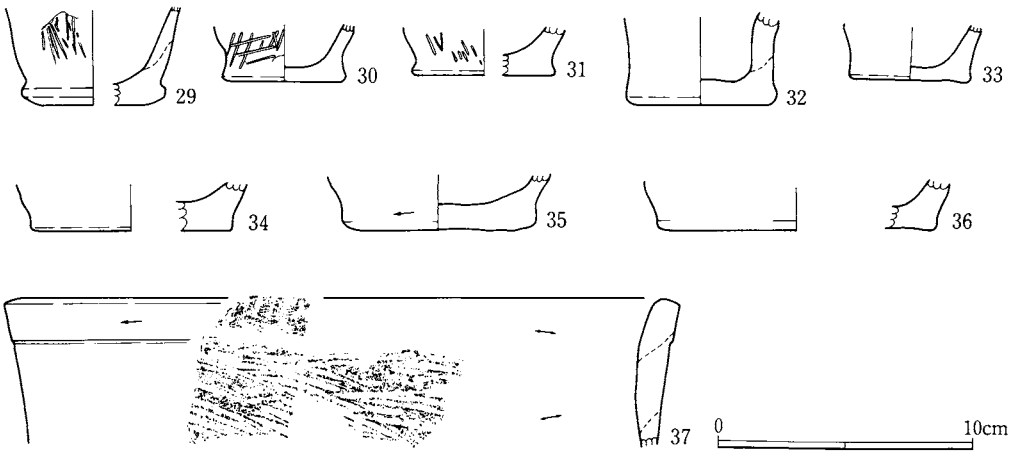
1～2は浅鉢と思われるが、浅鉢だとすると当地点唯一のものである。椀状の単純な器形を持ち、沈線で山形文を連続させ、刺突を充塡する。刺突充塡が行われる区画は口縁部と胴部に2帯あり、口縁部は三角形をなしているが、胴部のそれはレンズ状を呈しているようである。刺突は器面に垂直に施されるのではなく、片側から斜位に施されている。また口端上面には縄文が施文されている。原体はＬＲ。なお地の仕上げは平滑でなく、粗い篦なで痕が残る。

3～4は口縁部に数条の沈線を巡らせる深鉢である。口端には棒状工具による刻目が加えられる。地には全面斜位の茎束条痕が施されていると考えられる。5も前個体と同じく地に茎束条痕が施されるが、頸部無文部を持つ甕である。また胴部上位の沈線文様は変形工字文を形成している。文様帯上端と下端には沈線で挟まれた列点が巡る。この列点は池花南遺跡で見られた例（第110図5）と同様のものである。荒海式土器には沈線間の列点が施文されることがある

第113図　池花遺跡荒海期遺物出土状況（1/160）



第114図　池花遺跡出土荒海式土器(1)（1/3）



第115図　池花遺跡出土荒海式土器(2)（1/3）

が、このように水平に施文されるものは遠賀川式（系）土器の沈線間列点に似た印象を与える。7～9は縄文を地文とする甕である。口縁部は遺存しない。胴部には横位、多条の沈線が巡るが、それは途中で切れ、2条（以上）の縦位沈線とそれに沿った列点が施文される。地文の施文原体はＬＲ。9は無文の甕口頸部である。口端には突起が付くが、このような突起は該期の遺跡に類例が多い。10～11は2条一単位の沈線で弧状の文様が描かれているものであるが、文様構成は全く不明。沈線間には茎束条痕と思われる条線が残されている。当個体の類例は見当たらない。12は縄文が施文されるだけの破片である。胴部下位と思われ、原体はＬＲである。6～8の縄文と酷似し、同一個体の可能性も否定できないが確証もない。

13以下24までの4個体は条痕施文の深鉢である。13～16のみ貝殻条痕を用い、他は細密条痕（茎束条痕）である。13～16と17～19の口端には胴部の条痕と同じ原体によると思われる押捺が行われる。4個体とも器形は共通し、口縁部は直立か僅かに内傾、胴部は砲弾形をなす。この器種は前代の土器群の中に系譜を求めることはできない。類例を求めるとしたら、施文される条痕の原体は異なり施文原則も守られていないが、器形は樫王式土器に組成する砲弾形深鉢そのものである。類似の深鉢が多く検出された遺跡は近傍地域にはなく、直接対比できる資料はない。25～28もまた貝殻条痕を施文する個体である。この個体は胎土が他と全く異なり、大粒の石英粒を多量に含む他に雲母片も目立って含んでおり、さらに条痕の原体も異なる。東海地方からの搬入品かと考えられる。

29～36は同時期の土器底部を集めた。29～31は底部近くまで条痕が施されている。37は他の個体とはやや離れてE1－60～61区で検出されたもので、時期的に異ならないと判断されたためここに掲載する。厚みのある土器で、一見複合（折り返し）口縁に見えるが、削り出しによって段成形されたものである。段以下にはほぼ横位に茎束条痕が施される。

⑥縄文時代晩期後葉のまとめ

縄文晩期～弥生時代各期の遺物包含層は規模の大小、遺物量の多寡はあっても多地点に拡散する傾向は少なく、特定地点以外で単独出土する遺物もあまり見られない。ここで問題にしたいのはそれら各地点出土資料の一括性の有無如何である。晩期後葉として報告したまとまった地点は千網期の池花南遺跡と荒海期の池花遺跡であるが、池花遺跡の荒海式土器については一括性のある土器群としてよいであろう。池花南遺跡の千網式土器についてはどうであろうか。先にも少し触れているが、千網期の遺物として述べた土器群には特に浅鉢において新旧の要素が混在している。これらを無条件に同時期の遺物として一括するのは問題があろう。そこで遺物包含層の分布状況を再び見ておきたい。

最も多数の土器片を出土したクラスターｆの中で破片数として大きな割合を占めるのが38、72～73の２個体である。38はクラスターｆでまとまって廃棄されているが、その東側のクラスターｄにおいても相当数の破片がまとまって廃棄される。また72～73はクラスターｆの出土量を上回る程の破片数がクラスターｂでも出土している。両個体とも漫然と各クラスターに分布が広がるのではなく、それぞれのクラスターに集中して廃棄された状況、すなわち意識的な分割廃棄が行われたことが窺われる。とすると各クラスターは見かけ上の単位とは言え、それぞれ共時性を以て廃棄された遺物集中である可能性が強くなる。他のクラスター間についても広範な接合関係などから晩期後葉として抽出された遺物群は一括性が認められることになる。浅鉢、殊に組成の主体となる浮線文施文の浅鉢は比較的中央部のクラスターｆ北半に集中する傾向を見せる。ということは全体の遺物分布の在り方から遊離した存在ではありえず、やはりそれぞれの個体が他の土器と組成する可能性が強いことになる。

クラスターｆに分布した浮線文浅鉢は１、２、３、６、７、13の６個体ある。沈線施文の浅鉢では22、23が含まれる。また７は８～９、10～12が分布したクラスターｅにも分かれて出土したが、その間に接合関係がある。さらに４～５、14～18、24はクラスターｂに、25、82はクラスターｄに分布した。これらは特殊遺物の分布と重複する傾向があるが、土偶と石剣が出土したクラスターｆ北半への集中が著しい。これには浅鉢に帰納する機能とクラスターｆの空間の性格が関係しているのかも知れないが、同時にこの集中分布を偶然で説明するのはきわめて困難である。単なる土器廃棄ではなくある特定の行為によってこれらの土器群が残されたとしても、この場所が数十年単位で機能しつづけることも考えがたい。したがってこれら出土資料の一括性を否定するのも困難ということになろう。当土器群の時間的な位置は、中心的器種の比較から中部高地における「離山段階」、東北地方における大洞Ａ式後半に並行させて捉えうるが、群総体に含まれる新旧要素は併存しうる蓋然性はまた充分であろうと思われる。むしろかかる出土状況の遺物群を、文様要素だけで簡単に分離、分解することは不当である。

次に池花遺跡出土「荒海式土器」の時間軸上の位置についてであるが、南関東地方で最も近

い様相を示す土器群に市原市唐沢遺跡出土資料がある。条痕施文の深鉢、条痕地文で変形工字文系の沈線文様を施す甕の近似性は明らかである。唐沢遺跡では丸子式並行期の壺が出土している。その壺と他の土器との関係は充分明らかにされていないが、土器群総体としてもかなり新しい段階にしか位置付けられまい。池花遺跡出土土器群の位置もおのずと決定されよう。しかしその場合、条痕施文の深鉢の類似を指摘した樫王式土器とは編年上の差が生ずる。当土器群と樫王式土器の深鉢は無関係と考えるべきなのであろうか。

冒頭にも述べたが、池花南遺跡の千網期包含層と池花遺跡の荒海期包含層の間には相当の時間が介在している。池花南遺跡で検出された荒海式土器やそれに含まれる可能性の強い条痕施文土器は池花遺跡の荒海式土器とほぼ同時期の所産であろう。比較的長時間に亙って集団は内黒田遺跡群を離れたことになるが、土器編年の面でも集団領域内の拠点移動の面でもこれを補完する良好な資料が他遺跡で検出されており、それについては後述したい。

9．弥生時代

①概観

内黒田遺跡群では前述の縄文時代晩期後葉に続いて、弥生時代中期初頭（？）から中期後半までの資料が検出されている。南関東地方において特に須和田期とそれ以前は、今日まで資料が乏しく、それも再葬墓が圧倒的であったため研究上多面で制約があった。ここで検出された須和田期とその前後の資料はやはり特筆されるべき重要性を持つであろう。

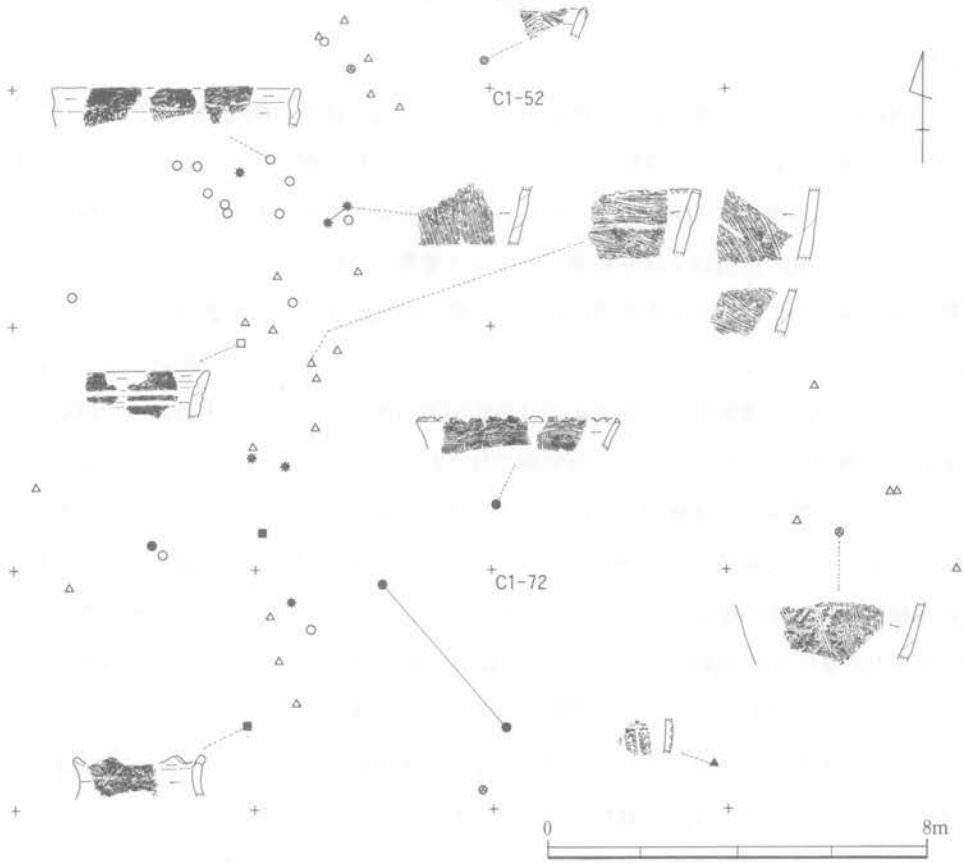
内黒田遺跡群の中では、まず池花遺跡Ｃ１区で縄文時代晩期の色彩を濃厚に有する土器群が少量ながら出土している。時期的には近接する池花遺跡Ｄ１・Ｅ１区の荒海式土器に近いものであろうか。また池花遺跡Ｄ２・Ｅ２区では須和田期前後に並行すると思われる土器群を出土した遺物包含層が確認されているが、南関東ではこれまでに知られていない種の土器群で注目に値する。池花南遺跡では遺跡南部のＧ７区で、その北縁を除くほぼ全域に中期初頭から所謂須和田式土器を含む大規模な包含層が検出されている。主体は須和田式土器であるが、特に甕と深鉢が豊富で、該期の組成について新しい知見をもたらした。また池花南遺跡の北部、Ｇ５区ではSX－02墳丘内や周溝内から弥生時代中期の土器が出土した。池花遺跡Ｄ２・Ｅ２区出土土器群に後続すると思われるような土器群で、やはり南関東ではあまり例が知られていない。そしてさらに中期後半宮ノ台期並行の土器が少量池花南遺跡で出土しているが、所謂足洗式土器を含み、宮ノ台式土器とはやや様相を異にするものである。

なお以上のように多様な時期、多様な土器群が検出されているが、確実に弥生時代に帰属すると思われる遺構は確認されなかった。

②池花遺跡Ｃ１区縄文晩期末～弥生時代初頭出土地点

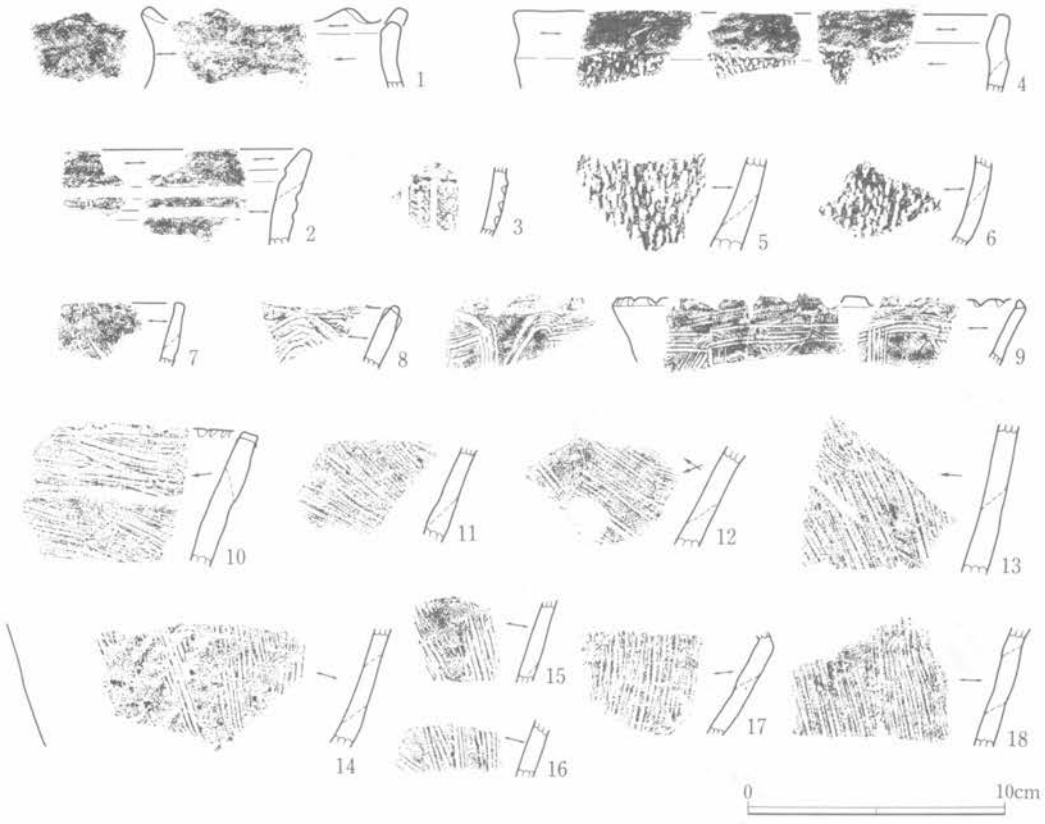
出土状況（第116図）　池花遺跡北縁、小支谷最奥部に張り出した部分で荒海式土器とは異なる土器群が出土した。荒海式土器を出土したＤ１・Ｅ１区は、東側に隣接した張り出し部である。土器分布範囲は東西19.4m、南北16.2m で分布密度は低い。土器片総数が少ないため、すべてが個体識別されたが、総個体数は11個体である。接合関係は乏しい。しかし各個体は土器分布域の全域に散布していた。

出土土器（第117図、図版54-２）　４～６、10～13、14～16がそれぞれ同一個体である。１は当地点唯一の壺である。口縁部破片が２点検出されている。小波状口縁をなし、外面は丁寧に研磨されている。内面は口端近くは研磨されるが以下箆削り仕上げとなる。これに近い壺形土器は成田市荒海貝塚、未報告であるが当遺跡近傍、物井地区の四街道市御山遺跡にある。２は口縁外面に太い２条の沈線を巡らせる甕である。また内面にも１条の沈線が巡る。胎土、焼成とも１によく似る。３は肩部付近の小片である。器形は不明。頸部は無文で、胴部には縦位



第116図　池花遺跡Ｃ1区縄文晩期末～弥生時代初頭遺物出土状況（1/160）

の沈線が走り、沈線間に列点刺突が施されている。４～６は短い口頸部を有する甕で、頸部及び内面は横位に丁寧に研磨されている。胴部全体には細かい刺突が施されるようである。この個体も１及び２と焼成ともによく似ている。７は無文の口縁部破片。内外面とも研磨は丁寧。８は半截竹管による波状文あるいは山形文を施文する土器で小波状口縁を呈する。９は甕口縁部で端部は鋭くつまみ上げられたような形状を示し、棒状工具による刻目が施される。文様は４本一単位の櫛歯状施文具で描かれるが、遺存部位からは規則性が窺えず構成は不明である。10～13は細密条痕を施す深鉢である。全体に厚みがあり、口縁部はわずかな段を形成する複合口縁を呈するが、段を境にした施文の変化等はなく殆ど複合口縁の名残というべきであろう。条痕は茎束状の原体を用い、右下がりの斜位に施されている。また口端には条痕施文原体による刻目が加えられる。14～16、17、18も茎束条痕を施す土器の破片である。うち17は肩部の屈曲が見え、頸部は無文。



第117図　池花遺跡Ｃ1区出土縄文晩期末～弥生時代初頭の土器（1/3）

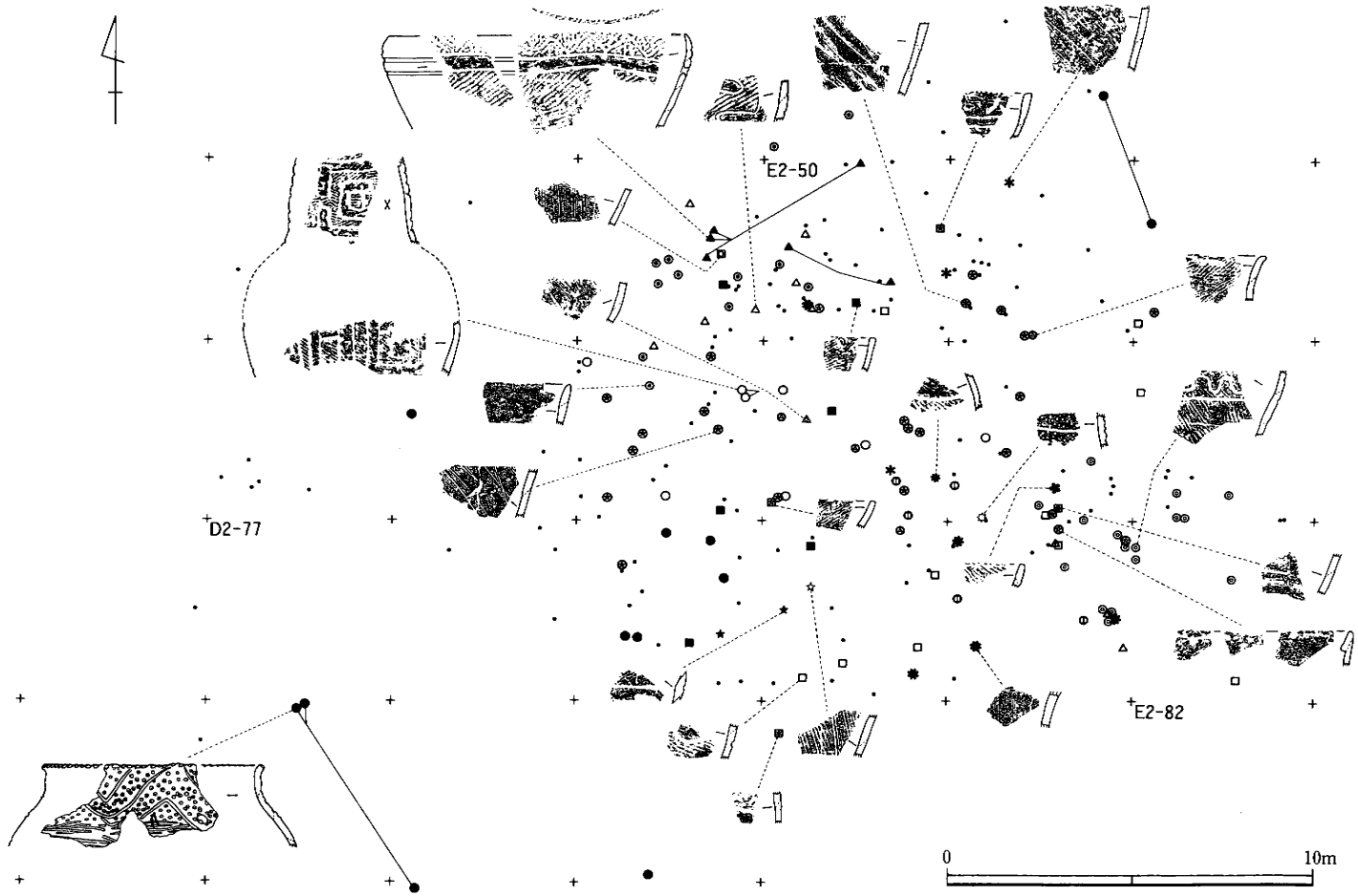
③池花遺跡Ｄ２・Ｅ２区弥生時代中期前半出土地点

出土状況（第118図）　荒海式土器出土地点の南方、台地やや内奥に弥生土器の分布が見られた。２箇所の遺物集中があり、一つはＤ２区東部からＥ２区西部にかけてで、やや離れて分布する土器を除けば東西24m、南北20m の楕円形に分布している。分布域の中での粗密はあまりなく、均質に分布する。多くの個体はこの集中分布域内に広く拡散しているが、ただ接合関係は非常に乏しかった。

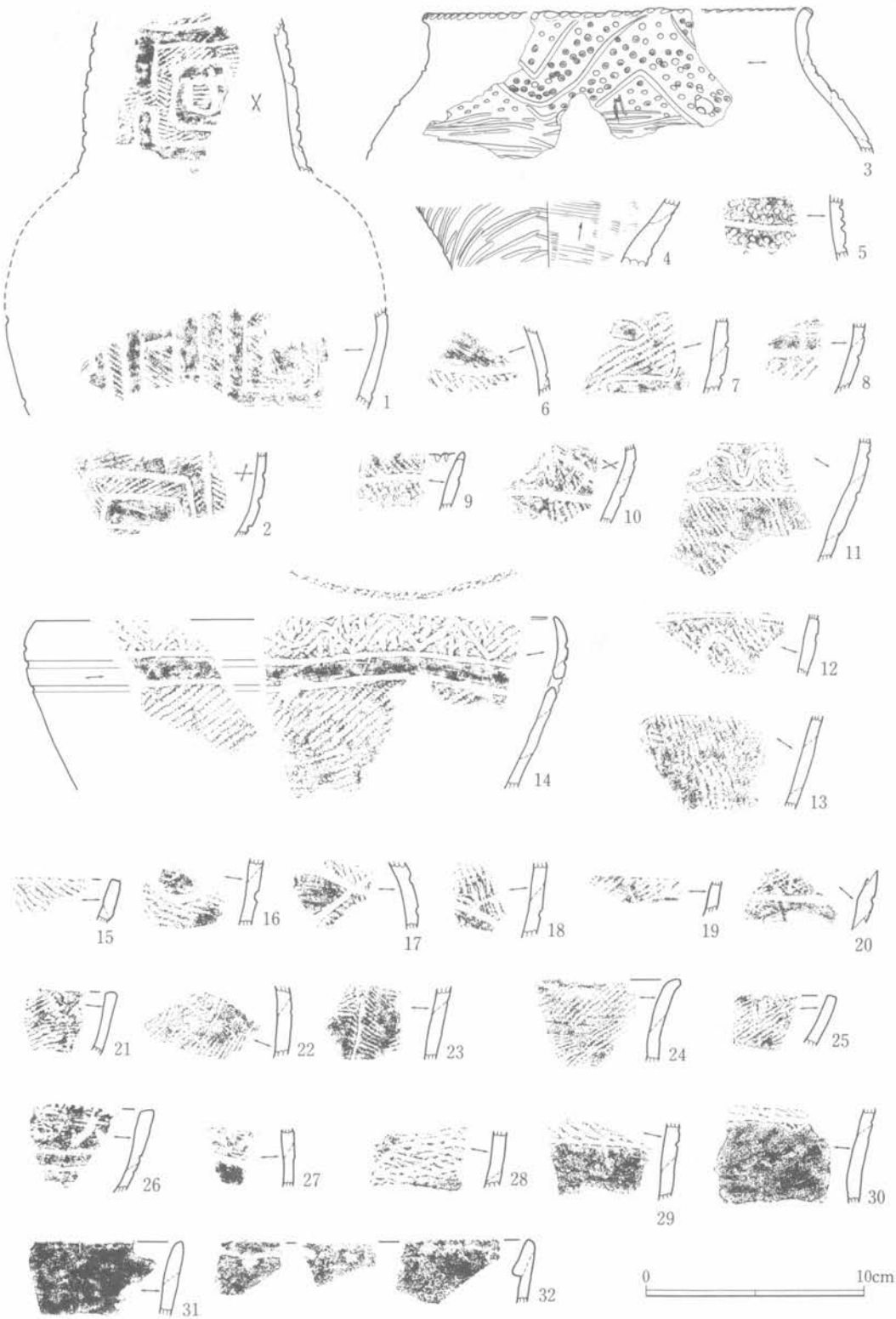
もう一箇所は D2－31～42区にかけて分布した。径10m 程度に比較的まとまっていたが、この集中箇所については各グリット一括で遺物を取り上げたため、分布状況を示せない。

上記２つの集中の間にまたがって分布した個体は存在しなかった。したがって両者は全く別単位として把握されるべきものである。

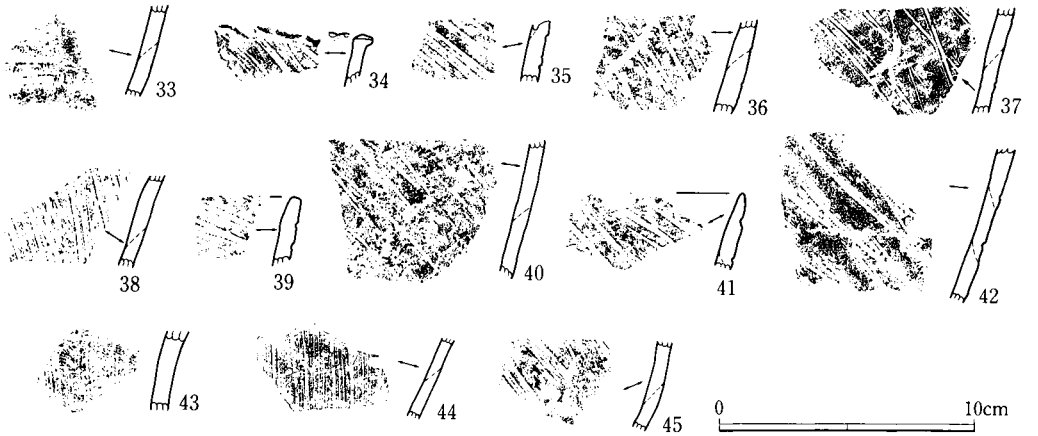
Ｄ２区東部～Ｅ２区西部出土土器（第119図～第120図、図版54－３、55）　１～８、16～18が壺である。うち１～２、３～４それぞれ同一個体。１～２は重四角文をモチーフとした文様を有し、沈線区画の中をＬＲ縄文で充填する。頸部は細く長く、胴部はほぼ球形を呈するものと思われる。３～４は広口、短頸の壺である。胴部はやはり球形に近い形状であろうか。この



第118図　池花遺跡弥生中期前半遺物出土状況（1/200）



第119図　池花遺跡出土弥生中期前半の土器(1)（1/3）



第120図　池花遺跡出土弥生中期前半の土器(2)（1/3）

土器は口縁部から肩部にかけて沈線で山形文を描き、その間を竹管状工具の刺突で充填する。肩部以下はおそらく底部まで一本単位の擬似条痕が施されている。なおこの土器の肩部に3箇所の焼成後穿孔が認められるが、その間隔はおよそ等しく果たして単なる補修孔かどうか。5も刺突文を持つ壺の破片で、横位の沈線が認められる。刺突は非常に細い竹管状工具によっている。6～8、16～18はいずれも沈線区画内磨消縄文を施す壺である。皆断片的であるため、文様構成は明らかではない。縄文は6、17、18がＲＬ、7、8、そしておそらく16がＬＲ。

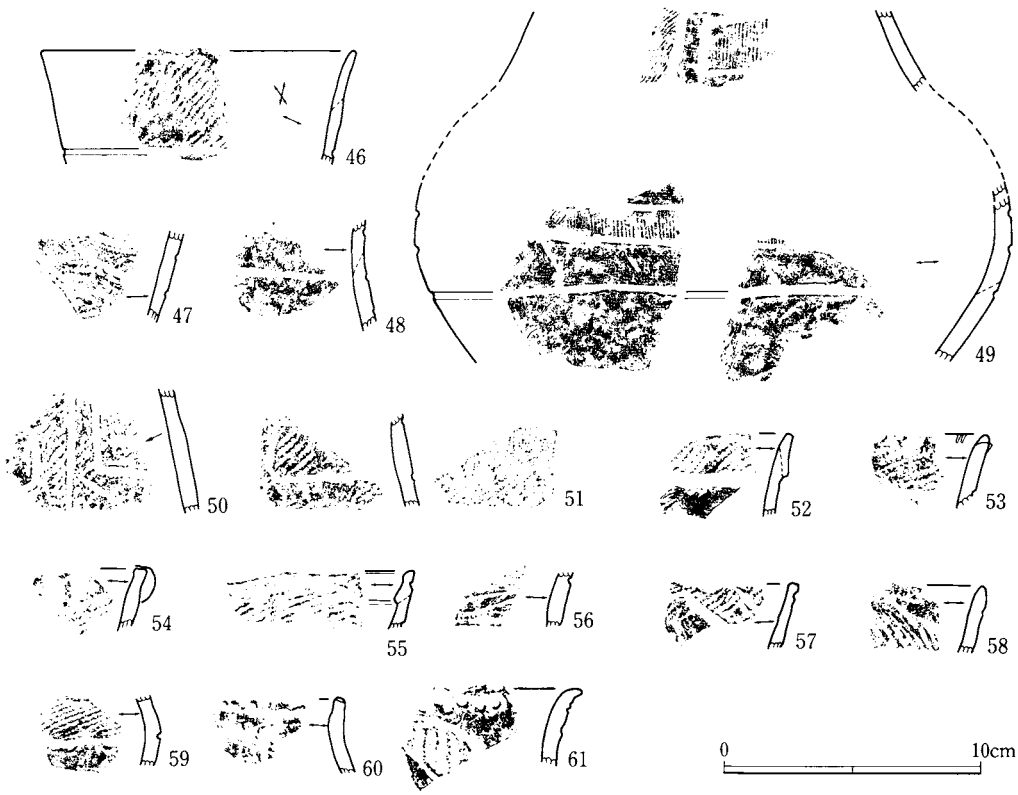
9～15、19以下が甕、深鉢である。25までに縄文を施文するものを集めた。うち9～13、19～20、21～23がそれぞれ同一個体である。9～13は中でも装飾性の高いもので、口端には刻目を施し、縄文ＲＬを地文として口縁直下に2条の沈線を描き、その間に波状沈線を巡らせる。14も前個体と類似するものであるが、口端は刻目ではなくて縄文ＬＲを施文し、口縁下の2条の沈線間は磨消による無文帯となる代わりに、無文帯上に沈線による山形文を巡らせ、その上下に縦位の短い刺突を2つずつ施す。他の個体では19～20に前2個体に類した横位沈線が施されるが、縄文の施文に丁寧さがなく、また21～23には一部に波状文が施されるようであるが、それは浅く粗雑である。24、25は平縁の個体。縄文はすべてＬＲかＲＬの単節を用いる。

26は口端に刻目を持ち、体部に浅い粗雑な沈線を有する破片。27は削り出しによる段装飾を持ち、削り残した部分に鋭い刺突文を施している。28～30は同一個体で、深い沈線による斜格子風の文様帯を有するものである。33は横位の断続的な沈線を施し、沈線の端部を沈線施文具で刺突するものである。これらの土器は器形、全体の文様構成等が不詳のものが多い。無文の土器には31、32の2個体がある。32は内面折り返しの複合口縁を持つ。

34以下は条痕または条線施文の土器である。34～37、39～40、41～42、43～44がそれぞれ同一個体。34～37は口縁に刻目を施すもので、体部には1本を単位とする条線が見られる。施文

には竹管状工具が用いられたことが窺える。39～40、41～42はいずれも幅広の竹管状施文具を用いて2本を単位とした条線が施されている。口端はともに平縁。38、43～44、45の3個体は細密条痕が施された土器で、原体はいずれも茎束状のものと思われるが、38は4本単位で深く鋭い。

D2区西部出土土器（第121図、図版54－3）　壺または確実に壺と見られるものに46～49及び59があり、48は49と同一個体の可能性がある。46は口縁部の破片で薄手に作られており、外面には無節縄文Lが施文され、その下に沈線が巡っている。47は胴部破片で、RL地文の上に沈線で曲線文様が描かれる。縄文は磨消されない。48、49は沈線で重四角文が描かれるもので、49には区画内に擬縄文（カナムグラ回転圧痕）が施されている。胎土には特徴的に大粒の砂粒が含まれている。59は胴部の張った部分の破片と思われ、横位の沈線があり、縄文（LR）が施される部分と無文部が認められるため、区画内の縄文施文（充填らしい）と考えられる。50～51も壺の可能性を持つ個体である。沈線で描かれる文様は重四角をモチーフとするらしい。地文には縄文LRが施され、47と同様磨消されない。52～58、60～61が甕、深鉢である。うち55～56が同一個体である。全体に縄文が多用される傾向がある。52は外面折返しの複合口縁を持ち、



第121図　池花遺跡出土弥生中期前半の土器(3)（1/3）

口端及び折返し部に縄文ＬＲを施している。頸部及び内面は非常に丁寧に研磨される。53は口端と外面にＬＲ縄文を施すが、口端には断続的に刻目も入る。口縁直下には横位の沈線が認められるが、小片のためいかなる文様が構成されるか不明。54はやはり縄文（ＬＲ）を施す土器であり、口縁部に耳状の突起を付することに特徴がある。口端には細かい刻目が見られ、また突起の右側に斜行する沈線が認められる。55～56は内面折返しの複合口縁を有する。外面には沈線で曲線文様が描かれ、区画内に縄文Ｌが施文されている。57は口端と外面に縄文ＬＲが施され、数条の山形沈線が巡るようである。縄文は一部磨消されているが、58は唯一条痕施文の個体で、細かい貝殻条痕が用いられている。60は破片内では無文であるが、口端に規則的に刻目が施されるもの。61は表面採集資料で当地点に帰属すると思われるもの。口縁が小さく外反する器形を呈し、その直下には竹管を用いた刺突が、さらにその下には沈線による木葉状(？)の区画文があり、縄文が施文されている。

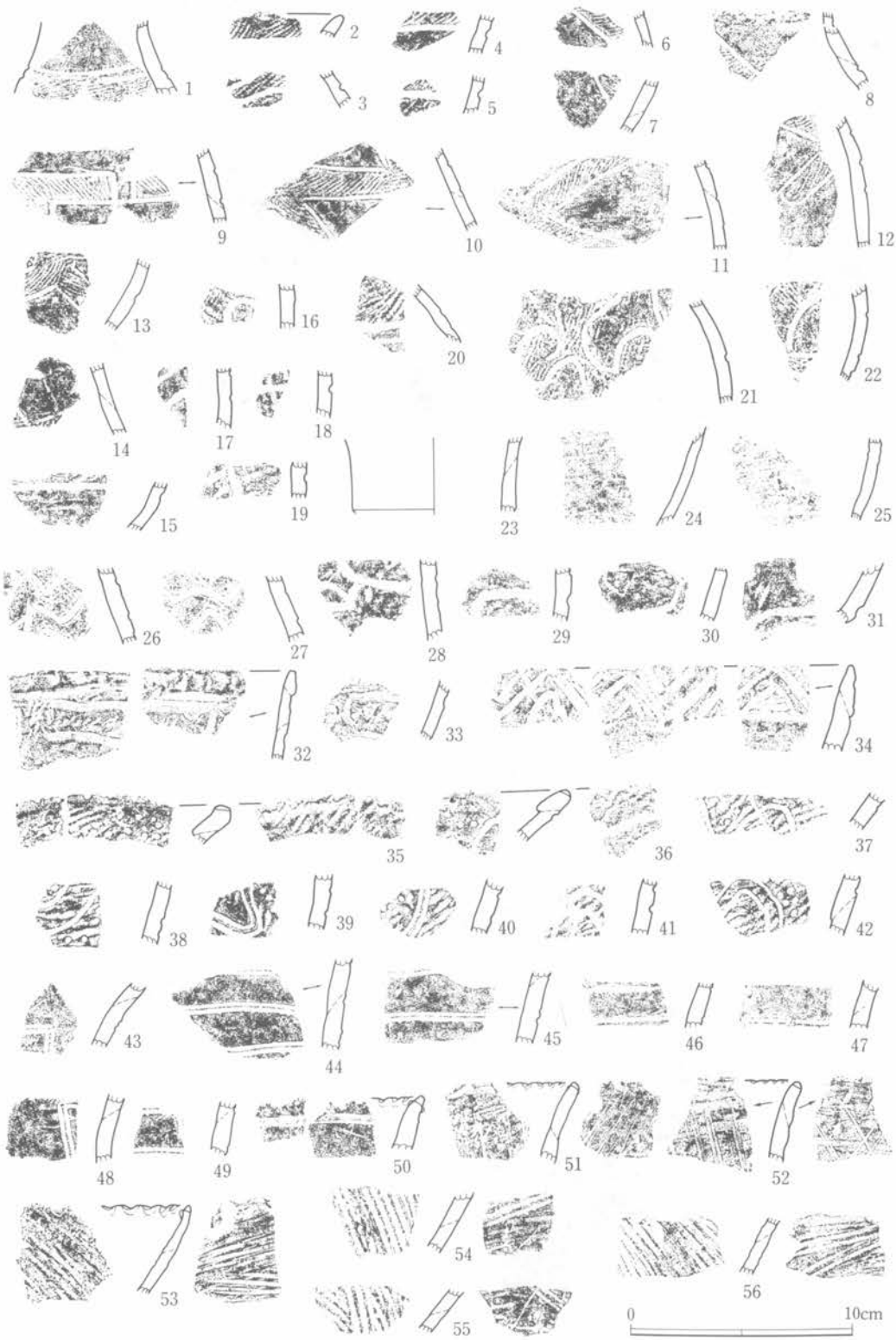
④池花南遺跡北半部弥生時代中期出土地点

出土状況　池花南遺跡では南半部において弥生土器を豊富に出土する遺物包含層が展開していたが、北半部でも弥生土器は出土している。出土地点は古墳ＳＸ－02下層にほぼ限られ、それも墳丘や周溝内出土の遺物が非常に多い。したがってここで遺物の分布図を示すことはできないが、元来あまり広範囲に分布しないがかなりの集中度を持った遺物包含層が形成されていたと考えることができる。

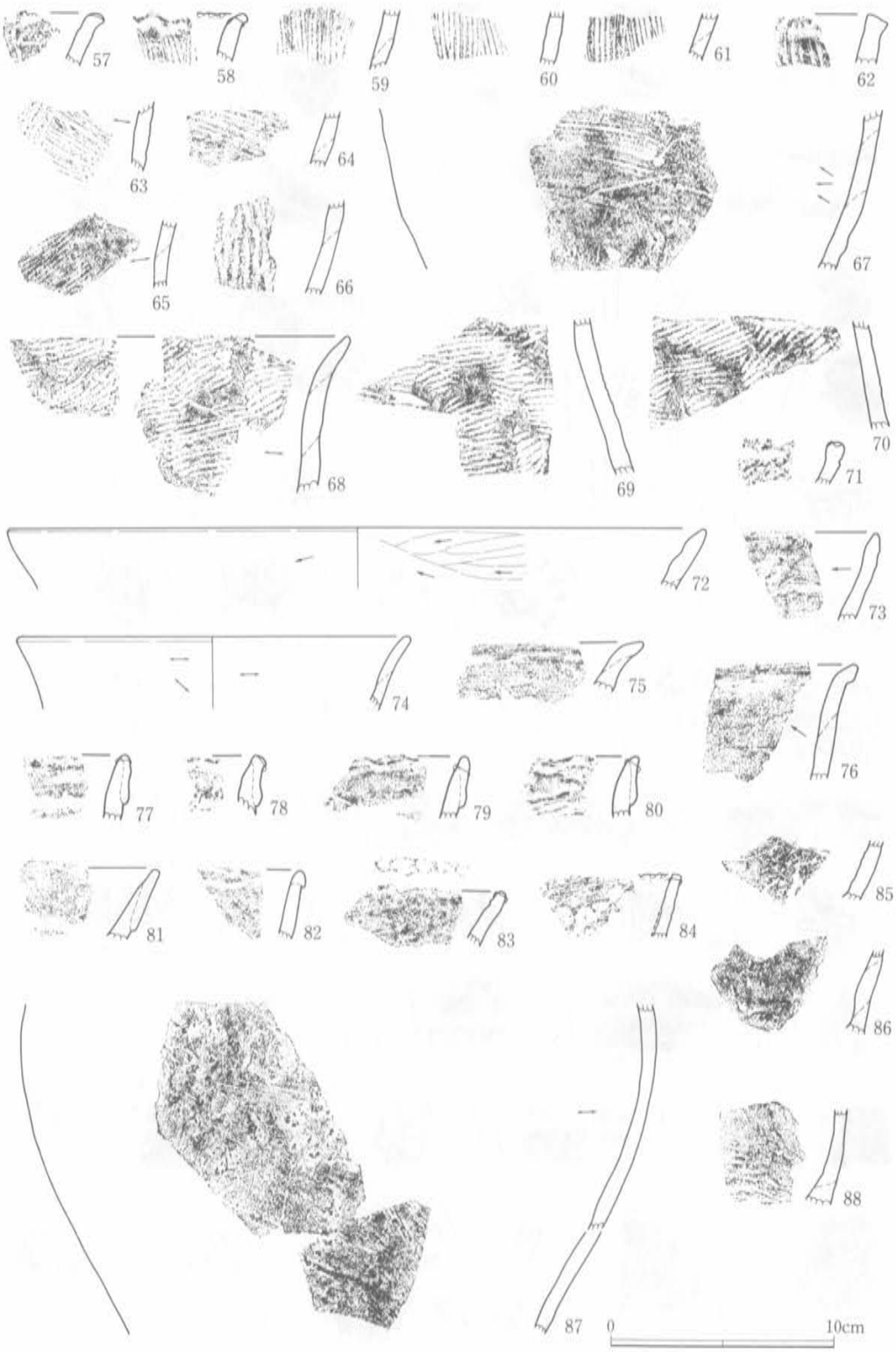
出土土器（第122図、第123図、図版64、65－１）　１～25までが壺と考えられる。そのうち２～４、16～19、21～22、24～25がそれぞれ同一個体である。１は壺頸部片で、頸部は無文であるが、２条の横位沈線以下肩部にかけては細かい縄文ＬＲが施されている。内面は剝落が著しい。この個体は他とは異なる砂っぽい胎土を用い、色調もやや異なるため、搬入品の可能性がある。２～４はいずれも小片で器形は不詳であるが、縄文（ＬＲ）と沈線によって文様が構成される。６から14までの９個体は、繊細な磨消縄文を持つものである。文様は工字状（９）、三角連繋（10）、菱形連繋（11）、Ｘ字状（12）、紐結状（13）など多様であるが、全体の印象は一見して北関東～南東北風であると言えよう。15、16～19、20、21～22も縄文を有する壺の胴部破片であるが、前掲各個体と比較するとかなり粗い縄文を用いる。16～19、21～22は磨消縄文ではない。23は壺頸部である。遺存部分に特に文様はないが、下位には横位沈線が残り、その部分で破損している。24～25はいずれも胴部下位の破片で、胎土の共通性から15と同一個体の可能性があるものである。１本を単位とした条痕風の条線が施される。

26～27、28～31はそれぞれ同一個体で、壺、甕双方の可能性を持つものである。前者には数段の波状文が、後者には構成不明の沈線文様が描かれる。

32から50までは文様を有する甕（あるいは深鉢）である。32～33、35～42、43～49がそれぞ



第122図　池花南遺跡北半部出土弥生中期の土器(1)（1/3）



第123図　池花南遺跡北半部出土弥生中期の土器(2)（1/3）

れ同一個体。32～33は幅の狭い外面折返しの複合口縁を有し、その直下に粗雑な長方形の沈線区画が描かれて、沈線と同じ工具で鋭い刺突を充塡する。34はやや幅広の外面折返しの複合口縁を持ち、折返し部に3条の山形沈線を施文する。35～42は口縁部が大きく外反する土器で、内面折返しの複合口縁を有する。口端には刻目を持ち、外面と内面折返し部には地文として縄文L、外面は場所によって間隔が異なるが2本一単位の沈線を描き、随所に刺突を施している。43～49は幅の狭い竹管状工具で沈線文様を描く。重四角モチーフか。50はやや外反する口端に刻目を持ち、その直下に32～33と同種の沈線が見えるもの。

51から67までは条線または条痕施文の土器を集めた。そのうち51～52、53～56、58～61がそれぞれ同一個体。51～52は浅い粗雑な条線を内外面に施すもの。口端には刻目が巡る。53～56は浅鉢のような器形か。口端にやはり刻目が施され、内外面とも貝殻条痕が施文されている。またこの個体と同様に貝殻条痕を有するものに66がある。他は細密条痕施文の土器であるが、注目すべきは63で、条痕が縦位の羽状を呈していると思われる。なお53～56、58～61、66、67の外面には炭化物が顕著に付着していた。

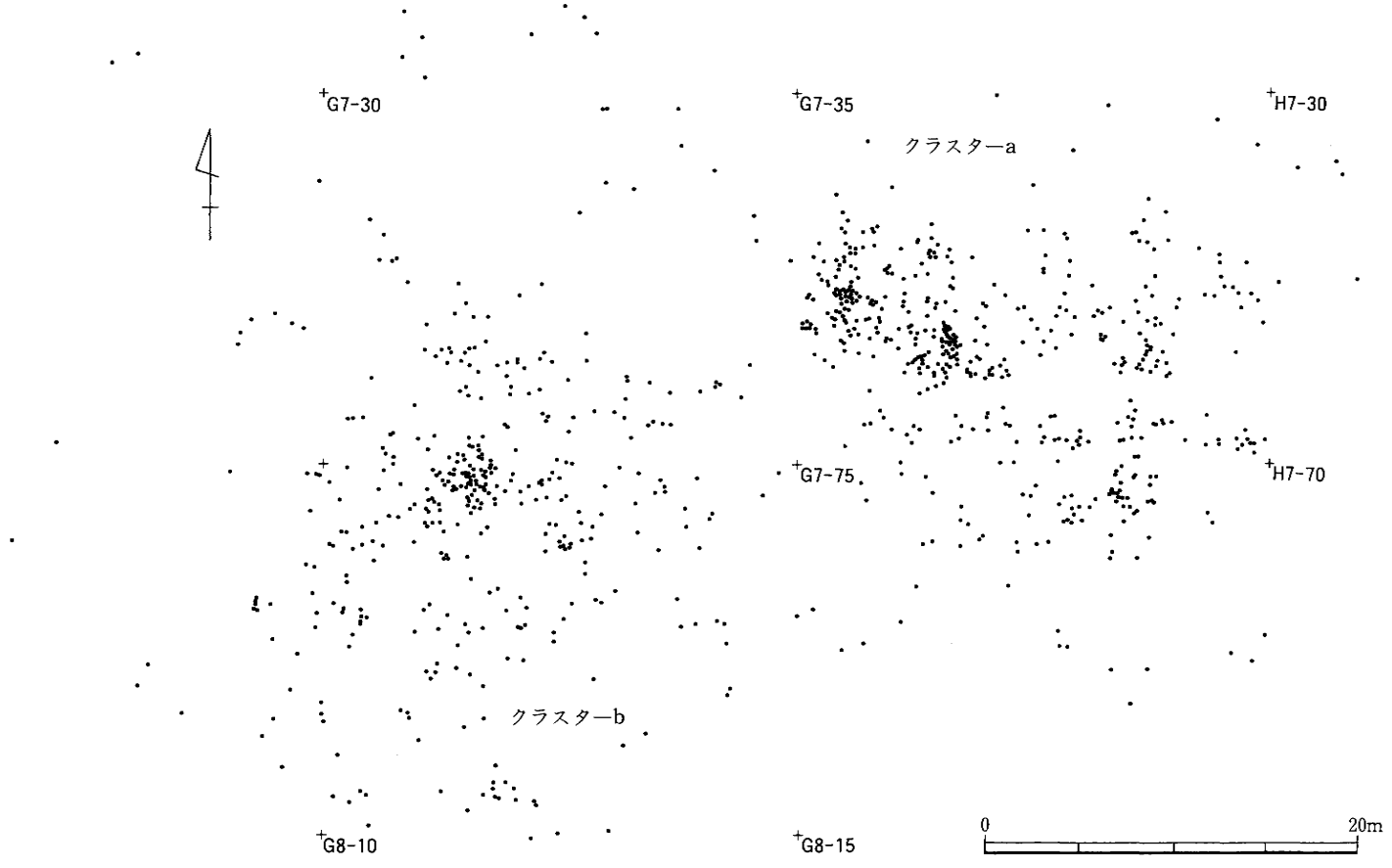
68～71は縄文施文の土器で、68～70が同一個体である。口縁部形状、刻目の有無の相異はあるが、ともに無節縄文Lを施すことで共通する。68～70外面には炭化物の付着が観察された。

72以下に無文の土器を集めた。77～80、85～86がそれぞれ同一個体である。中で外面折返し複合口縁を持つものとして77～80、81、口端に刻目を持つものとして77～80、83、84があり、若干の装飾性があると言えるが、偶然か必然か折返し口縁を有する個体には炭化物の付着が認められず、別器種として区別されていた可能性はある。

⑤池花南遺跡南半部弥生時代中期前半出土地点

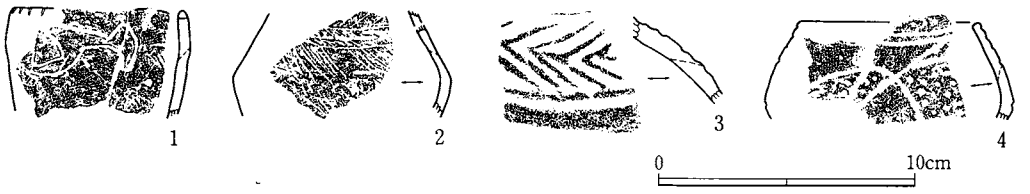
出土状況（第124図、付図7、付図8）　池花南遺跡の南半部、G7区を中心として、かなり広範囲に弥生時代中期前半の遺物が分布していた。出土遺物の主体は所謂須和田式土器で、分布範囲はおよそ東西70m、南北45mに及び、出土土器の個体数も百を越える。分布範囲が広いため、その詳細は別刷図としたが、全体の分布状況を単純にドットで表現したのが第124図である。最も遺物が集中する地点がG7－55～56区とG7－71～72区を中心とした2箇所にあることは一目瞭然であろう。遺物分布はそれぞれの地点を核に径30m前後の2つのまとまりを形成している。ここでG7－55～56区を中心としたまとまりをクラスターa、G7－71～72区を中心としたまとまりをクラスターbとする。ただ両者は完全には分離できない。また2つのクラスターから少し離れて分布する土器で、若干時期が異なる（遡る）と思われるものもある。

クラスターaとクラスターbの間に接合関係は認められなかった。識別された各個体の分布を見ても、2つのクラスターに分布すると言い切れる個体は僅少である。勿論中間的な位置に分布する個体は、拡散によって両クラスターに属するように見えるものもある。ここで把握さ



第124図　池花南遺跡南半部弥生中期前半遺物包含層全体図（1/400）

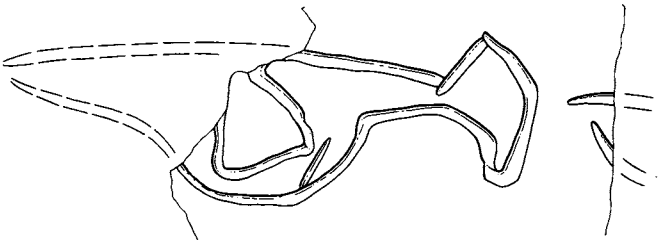
れた2つのクラスターは、あくまで今日まで遺存した見かけの単位ではあるが、その内容は相互に独立的であったと指摘されてよいだろう。しかし同時にこの事実は、当遺物包含層形成過程の解釈に複雑さを与える。例えば、2つの遺物集中が別の単位によって同時に形成されたものであるのか、時期を異にして形成されたものであるのかという問題がある。そういった問題点については出土土器群について見てから再び考察したい。



第125図　池花南遺跡出土絵画線刻土器・弥生中期初頭の土器（1/3）

特殊な土器（第125図、図版56－2）　まず主体となる土器群を報告する前に、全体の中では特殊な位置にある土器に触れておきたい。

1はG7－80区（表土中）とG7－93区から出土した2片が接合したもので、きわめて小型の特殊な鉢である。口端には刻目が施される。この土器は他の須和田式土器に組成するものと思われるが、その特殊な点として、外面に認められる線刻絵画が挙げられる。絵画は左側の一部を欠失しており、そのために断定することはできないが、鳥を意匠したものであることは確実であろう。右側が頭部で嘴が下方を向いており、膨らんだ腹部には翼を表現していると考えられる三角形が見える。尾部の表現、足が描かれたか否かは失われて不明であるが、頭部の右方に別の線刻画の一部が認められ、それは尾部の先端であると推定される。したがってこの土器には2羽以上の鳥（？）が描かれていたことは疑い得ない。鳥杆習俗あるいはそれに類するものは、鳥形木製品などから弥生時代の祭祀の一つとして重要な位置を占めていたと考えられるが、それは稲作とともに去来したものとされる。池花南遺跡における鳥線刻画の存在は、一つの象徴的存在ではあろう。



第126図　線刻画（原寸）

2はH7－41区、3はH7－31区から、遺物集中とは少し離れて出土したもので、いずれも横位羽状文を施文された壺形土器である。2は算盤玉状に張った胴部を持つ小型壺で、繊細な横位沈線と斜行沈線が羽状に描かれている。3は肩が非常に張る器形を持つと思われる土器の肩

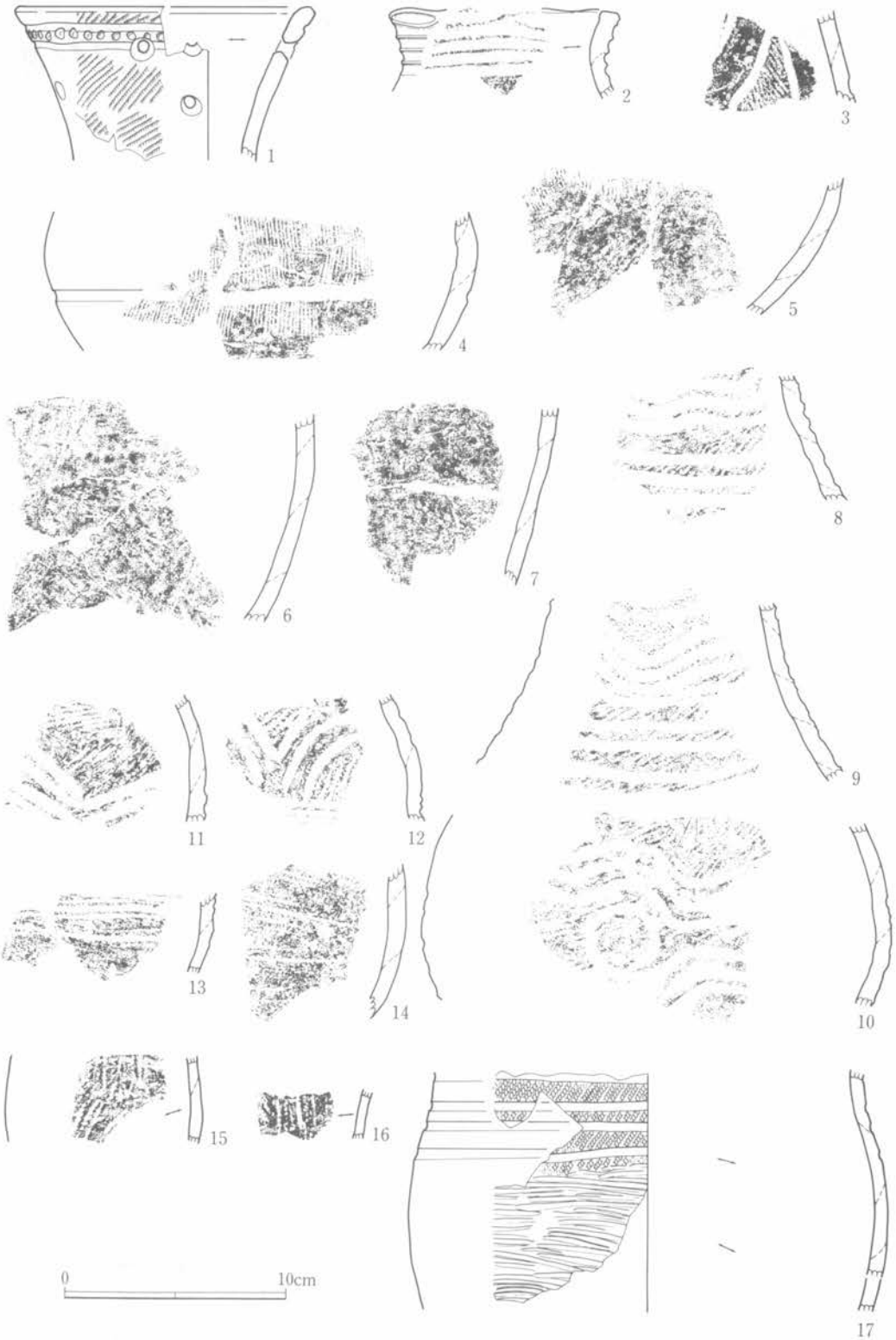
部破片で、太い横位沈線により区画された文様帯に、同様の太描沈線で羽状文が描かれる。両者はその文様要素から弥生時代中期初頭に位置付けられ、出土位置も接近していることから共時性のあるものと思われる。

4はG6－94区から出土したもので、無頸壺と言い得るものである。口縁直下に2条の沈線が巡り、口端との間に横位に列点刺突が施される。胴部には2条の沈線で8字状の文様を横位に連続して描き、区画内に刺突を充填している。沈線と刺突に用いられる施文具は同一。集中地点からはかなり離れて出土しているが、この土器も中期初頭から須和田期の間に位置付けられよう。

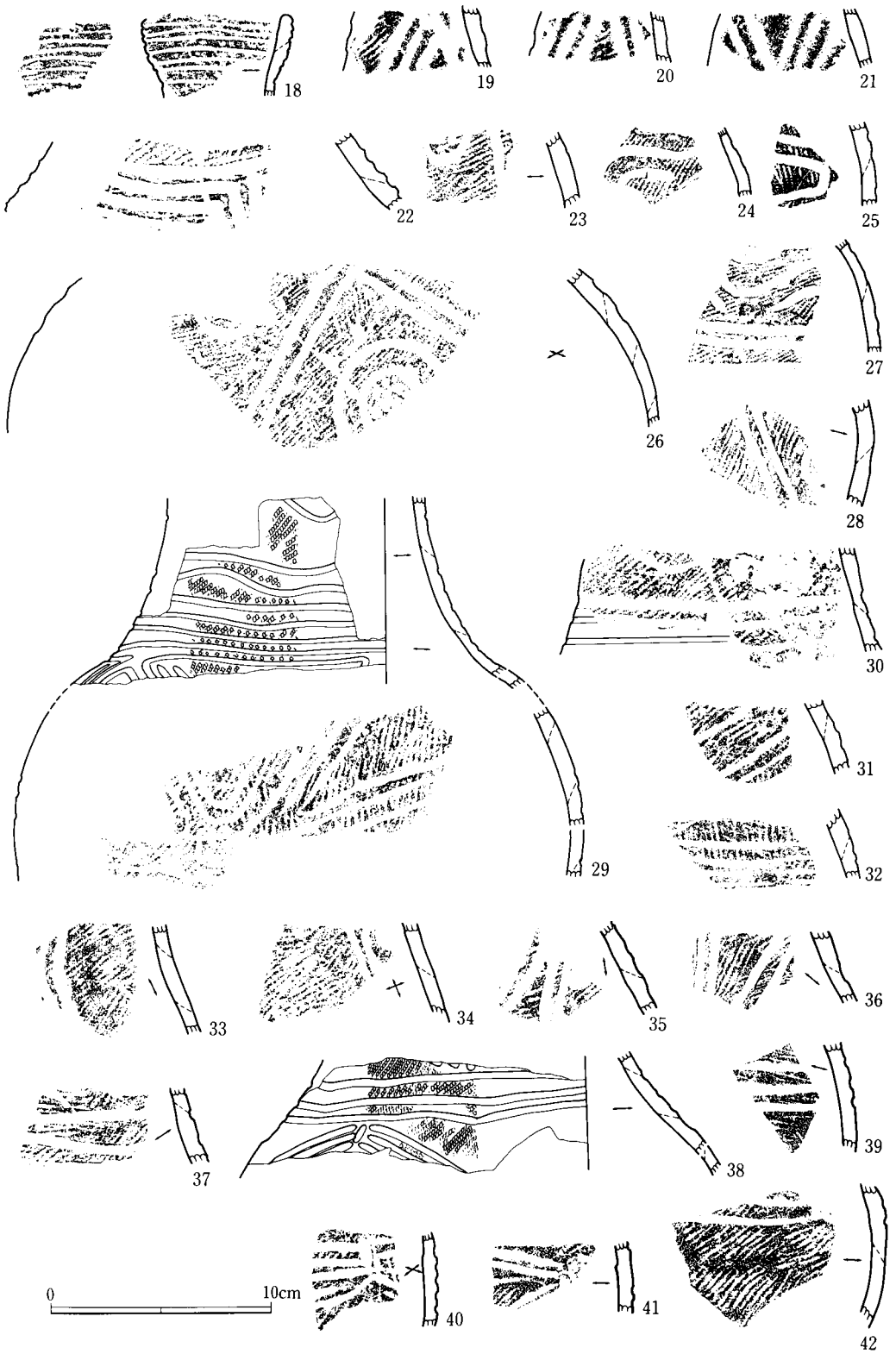
須和田式土器（第127図～第138図、図版57～63）　池花南遺跡南半部で出土した弥生土器は、その殆どが須和田式土器の範疇に入ると考えられるものであった。まず縄文地文＋太描沈線を特徴とする壺、甕から報告する。1～17は主としてクラスターaから出土した土器で、14までを壺、15以下を甕とする。4～7、8～14、15～16がそれぞれ同一個体。

1はラッパ状に開く壺口頸部である。無節Lを地文とし、口縁直下に2条の沈線を巡らせてその間に列点刺突を施す。約1/2を遺存するが、そこに計5箇所の焼成後穿孔が認められた。おそらくこの土器は短い口頸部と肩部の張りが強い長い胴部を持つと思われ、関東北東部の初期弥生土器に通じるものと言える。2も壺口縁部である。小波状口縁を呈し、口端外面をメガネ状浮線文風に仕上げる。その下には密な間隔で4条の平行沈線を巡らせている。3は壺頸部の破片である。拓影では一見称名寺式土器の如くであるが、胎土等全く異なる。小片のため文様構成は不詳であるが、LRを地文とした磨消縄文である。4～7はクラスターaとクラスターbに完全に分かれて分布する稀少な例であるが、破片数は多いものの胴部しか遺存しない。胴部下位を除いて擬縄文（カナムグラ回転圧痕）を地文にし、太い沈線で「Ω」状文が描かれる。8～14は地文がLR縄文で、3条を一単位とした太い沈線で波状文、円形文、連弧文を組み合わせている。胴部下位は、まず水平に条痕を施文した後、以下斜位の条痕を施す。西関東の例とはかなり隔たりがあるものの、「平沢型土器」に近い要素を具えている。15～16は小型甕か壺頸部である。地文はLR。17は頸部～肩部に数条の太い沈線を施文する甕で、地文はLR。胴部にはほぼ横位に茎束条痕を施している。いわゆる細頸の壺ではないが、胎土は壺にきわめて類似する。

18～60には主としてクラスターbから出土した壺を示す。19～21、23～28、29～32、33～42、46～49、50～52、53～60がそれぞれ同一個体である。これらのうち地文に縄文を用いるものはすべてLRである。18は口縁部が若干袋状に膨らむ破片で、7条の細い沈線を巡らせている。19～21はいずれも頸部破片で、縄文地文の上に3条一単位の沈線で三角文を描く。22は肩部破片。文様は重四角文か。23～28は胴部破片ばかりが遺存するが、縄文地文の上に2本一単位の沈線で三角文と円形文を組み合わせているらしい。円形文は二重円と一重円が交互に施文され



第127図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(1)（1/3）

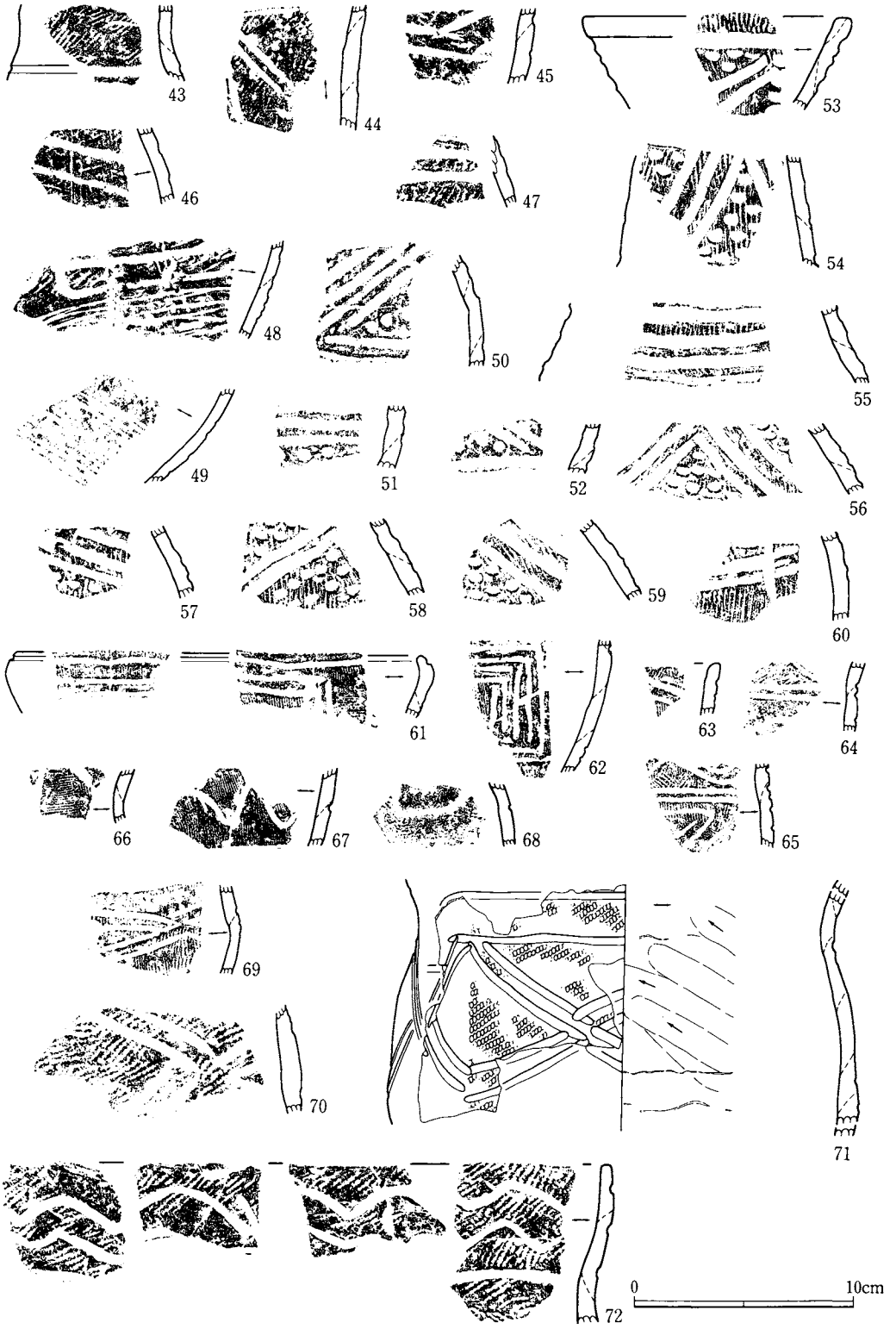


第128図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(2)（1/3）

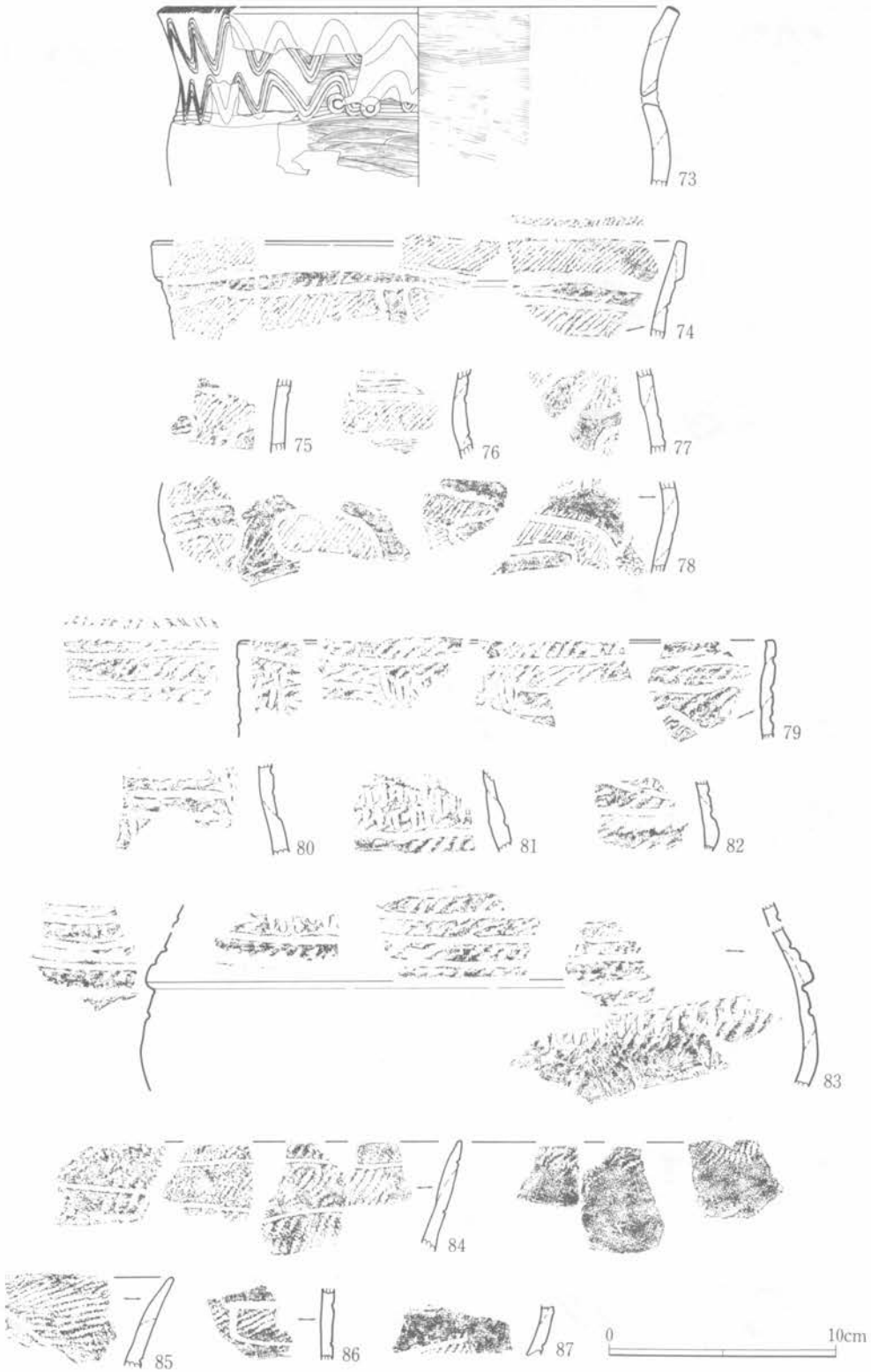
るものと思われるが、いずれにも円内に刺突充填が認められる。29～32は頸部から胴部中位までの破片がある。頸部には平行沈線と波状文、胴部には三角文が描かれる。この個体には刺突文は用いられない。33～42も頸部から胴部中位にかけての破片が遺存する。基本的に平行沈線と三角連繋文の組み合わせであるが、胴部の三角連繋文は文様連結部に縦位の短い沈線(刺突)を加えるタイプである。前個体では沈線の施文単位が明確ではなかったが、当個体は他の多くの個体に見られるように3条が一単位となっている。43と44はともに縄文を地文とする頸部破片である。前者には1条の横位沈線が見られるのみであるが、後者は2条一単位の三角連繋文が施文されている。この三角連繋文は垂直方向にも沈線が走っており、従来南関東では例を見ないものと言えよう。45は胴部破片である。文様構成は不明。46～49は縄文を地文として沈線文様を描く土器であるが、その構成は不詳である。胴部下半は「条痕」施文となるが、これは一条単位の擬似条痕と言うべきものである。50～52、53～60の2個体は三角連繋文＋刺突充填の文様構成をとるものである。ともに棒状工具による3条一単位の太い沈線を描き、同じ施文具によって刺突するが、器面への当たり方にやや差がある。50～52には地文が認められないが、53～60の個体には地文にカナムグラ回転圧痕が施されている。

61から72は、主としてクラスターbから出土した太描沈線を特徴とする甕及び鉢である。61～62、63～65、66～67、70～71がそれぞれ同一個体である。61～62は口縁部が僅かに内湾する鉢で、口端近くに1条の沈線が巡り、以下擬縄文（カナムグラ回転圧痕）を地文として重四角文が描かれている。63～65もカナムグラ回転圧痕を地文とする土器で、小ぶりの甕と考えられるもの。くびれの部分に2条の横位沈線が巡り、胴部に三角文、口頸部に波状文乃至三角文が施される。66～67も同様にカナムグラ回転圧痕を地文とする甕で、沈線で波状文を描く。68は撚糸文(R)を地文とするもの。文様構成は不明。69は甕で、前掲の3個体と同じく細かいカナムグラ回転圧痕を地文とする個体。文様は次に述べる70～71と同様の菱形連繋文であろう。70～71は縄文LRを地文とする甕である。口頸部の文様はよく解らないが、胴部には2条を単位とする沈線で菱形連繋文が描かれている。内面には篦削りの痕跡がよく残る。72はLRを地文として口縁部に太い沈線で波状文が巡らされている甕である。口頸部の屈曲は複段になると思われ、そうだとすると佐倉市岩名天神前遺跡の例に近いものとなる。

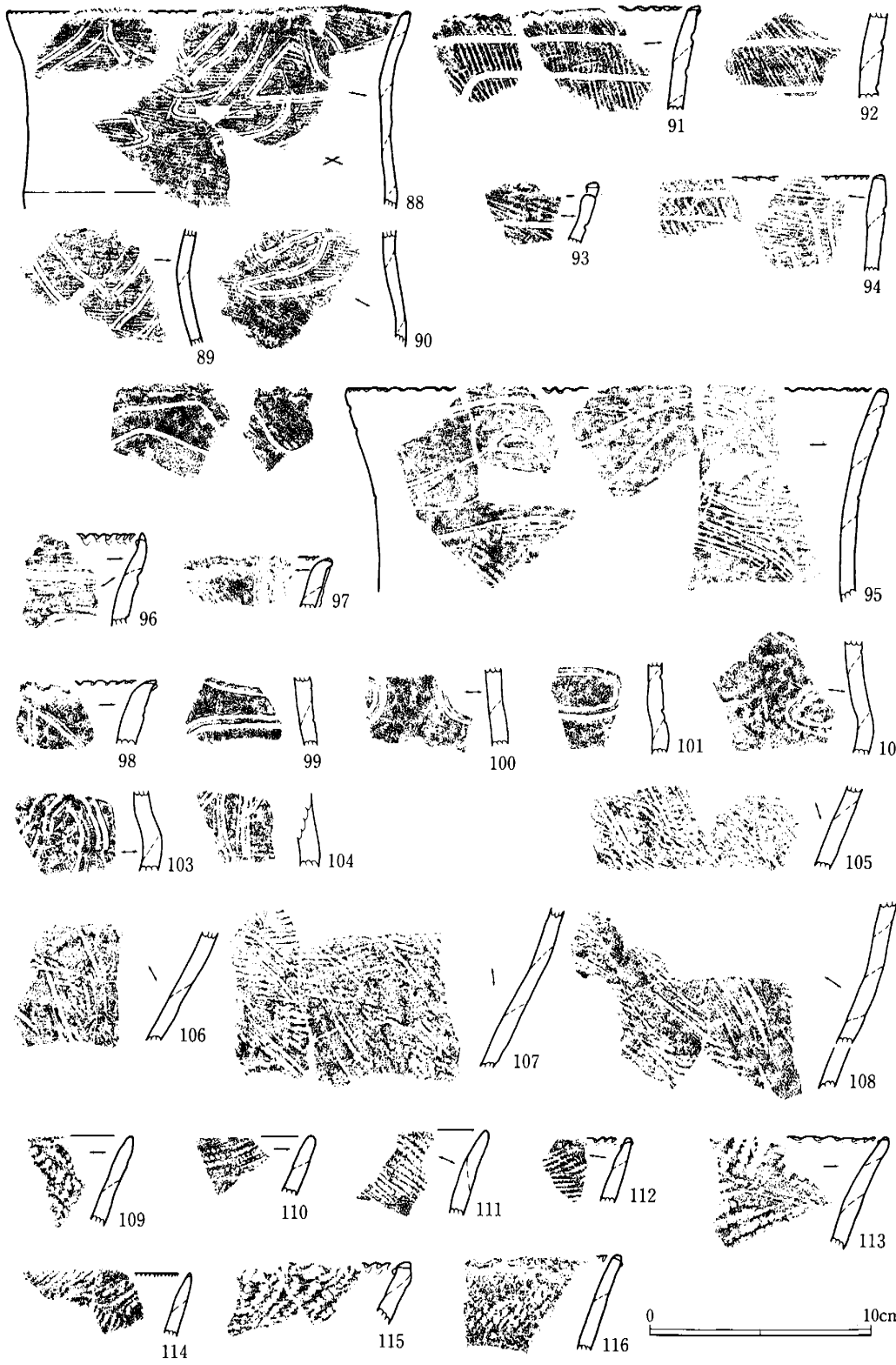
73以下108まで主としてクラスターaから出土した有文の甕について述べる。74～78、79～83、88～90、91～92、98～104、105～108がそれぞれ同一個体である。73は非常に細かい刷毛目状条痕を地に、半截竹管状工具によって口頸部に2段の波状文、肩部に横位沈線を巡らせる。また口端部には細かい刻目を施している。この個体のプロポーションと複段波状文という文様要素は、櫛描文と竹管文の相違はあるが、長野県新諏訪町遺跡の例に共通すると言える。むしろ類例は他にないほど乏しい。74～78は外面折返しの複合口縁を有する土器で、口端、折返し部と頸部～胴部の沈線区画内に縄文Lを充填している。胴部文様はよく判らないが、頸部文様は工



第129図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(3)（1/3）



第130図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(4)（1/3）



第131図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(5)（1/3）

字状の区画になると思われ、岩櫃山式土器に組成する甕に類似していると言える。79～83は無節縄文Lを地文とする甕で、口端には縄文原体を押捺している。文様は竹管状工具で施され、横位沈線、山形文、縦位の短い刺突を組み合わせている。肩部には段装飾が認められるのも特徴的である。84は口縁部破片でLRを地文として細い横位沈線を巡らせる。また口縁内面にも縄文の施文がある。85、86、87もそれぞれ縄文地文の上に沈線文様を描くが、いずれも小片のため構成は明らかでない。88から95までの5個体はいずれも細密条痕を地文とする点で共通するものである。93に小突起が付く他は口端に細かい刻目が施されている。沈線文様は88～90が崩れた三角文、91～92、94が重四角文、95が大きな波状文である。これらは荒海貝塚出土の雑描文を施す甕に器形が類似している。相違点としては、口端の刻目の有無、口頸部にも条痕が施されることが指摘できるが、系譜は一連のものと考えておきたい。96、97は口縁部小片である。96には条痕が見られないが、95までの各個体と共通する器種であろう。97はやや特殊と言え、浅く粗雑な沈線以外に縦位の貼り付け文が特徴的である。全体としてはいかなる構成をとるものであろうか。98～104も88～96の6個体と同様の甕である。口端には刻目が施され、竹管状工具で不可解な沈線文様が描かれる。105～108は縄文（LRか）地文の上に半截竹管による条線を斜行させる。

109から116までは、主としてクラスターaから出土した縄文施文の甕口縁部片を集めた。縄文はLRが用いられることが多く、また口端に細かい刻目が施されることが多いと言える。

117から138までは主としてクラスターb出土の有文の甕を集めた。117～120、121～124、129～130、134～136、137～138がそれぞれ同一個体。クラスターaで見られた条痕地文の上に沈線文様を描く甕は殆どない。117～120は楕円形または不定形の沈線区画に縄文（LR）を充塡するものである。部分的に沈線区画のない所にも縄文が施されている。また口端には細かい刻目が認められる。121も前個体に類似するものであろう。122～124は口端に刻目を持ち、偏平な篦状施文具で矩形の沈線区画を描き、その中に同じ工具で刺突を充塡するものである。この土器の地文には反撚縄文（LLか）を用いている。125は口頸部に重四角文を連続させるもの。口端にはやはり棒状工具による刻目を施す。126は125と同一個体の可能性がある胴部破片で、下位に波状文を、その上に「凹」状の沈線文様を描いている。127は施文に半截竹管状工具を用いる。遺存度が小さいため、文様構成は不詳であるが、刺突または縦位の短い沈線を多用する。128は沈線で山形文または縦位の羽状文を施文する個体である。129～130は細く鋭い沈線で方形の文様を描くようであるが、その描き方は粗雑である。131はクラスターbでは唯一条痕を地文とする甕である。文様は浅く粗雑な沈線で山形文乃至鋸歯文を横位に巡らせている。132は前掲122～124のような浅くやや幅広の沈線文様を施す口縁部破片。133は胴部小片で半截竹管による斜位の条線を施し、それに平行する列点刺突が見える。134～136、137～138の2個体は特徴的な耳状の突起を付加する土器である。前者は口縁部に突起を持ち、粗雑な沈線と竹管状工具による刺突

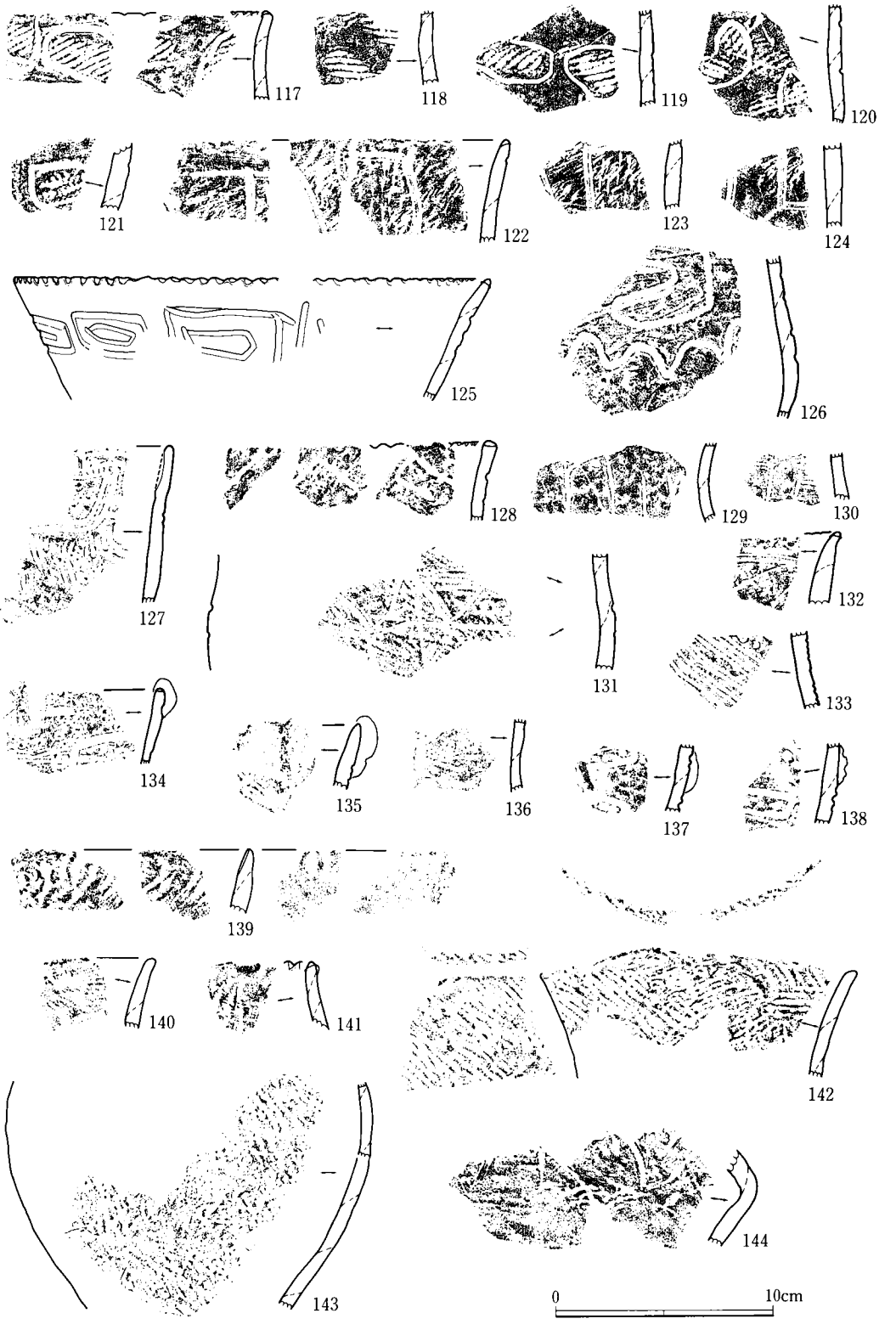
文を組み合わせるらしい。後者はしっかりした沈線区画の中に列点状に刺突を施す他、突起の側面にも刺突を施している。

139から143は縄文のみを施文する土器である。縄文の原体はさまざまであるが、それ以上に口端の仕上げはバラエティーに富んでいると言える。139は口縁内面に縦長の刻目が施されている。141の口端は比較的例の多い棒状工具による刻目が、142の口端には縄文（器面と同じ無節R）が施文される。143は口頸部が遺存しないので何とも言い難いが、他の甕と考えられる土器とは異なってかなり丸みを帯びた器形を有しており、壺であった可能性は否定できない。144もは「く」字形に折れた断面形を呈する土器で、一般的な甕とは異なった土器ではなかったかと思われる。この土器には部分的に地文として縄文が施され、張った肩部に粗雑な沈線で山形文乃至波状文が描かれている。

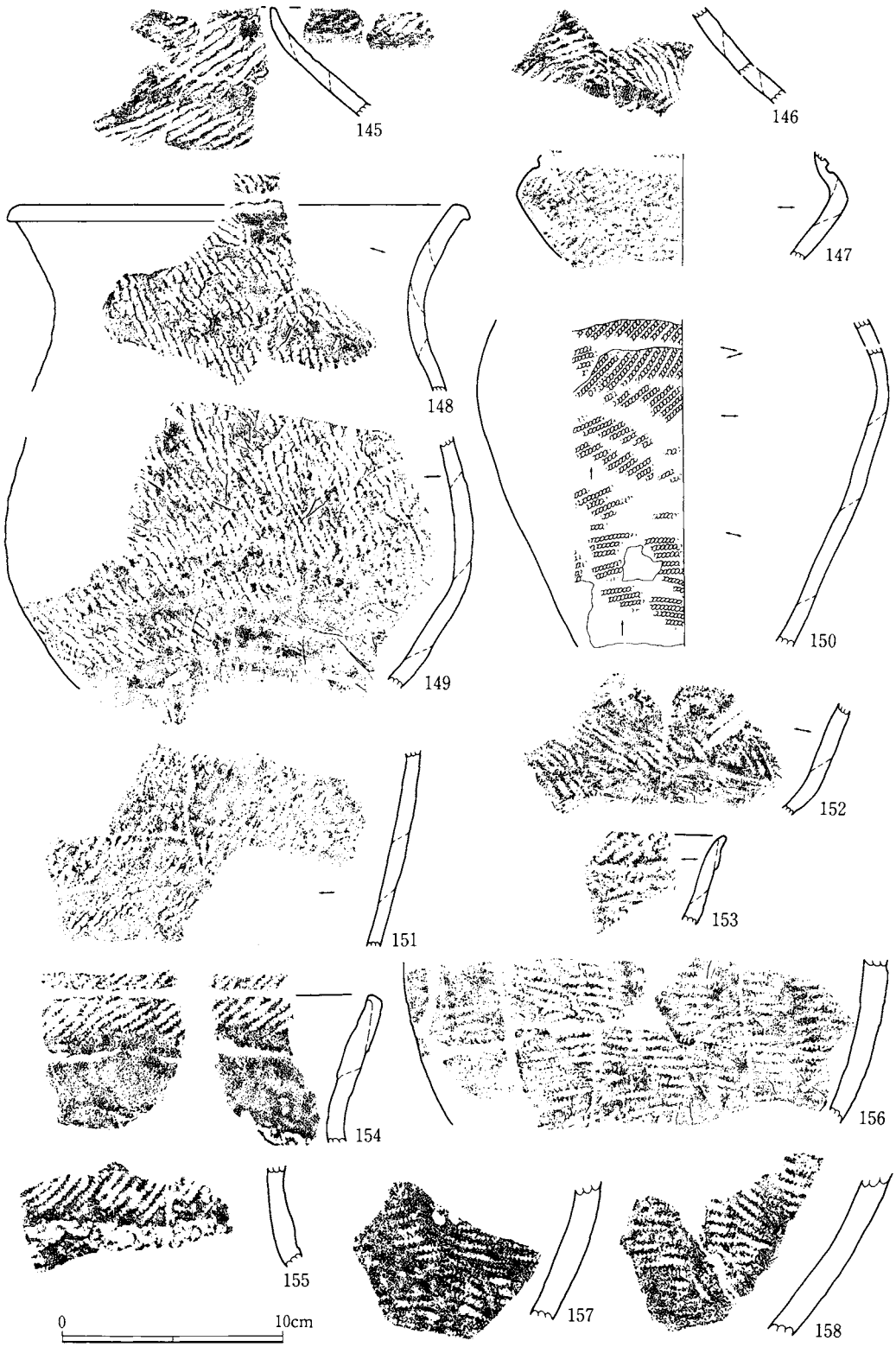
145から161までは縄文を施文する土器群である。145～146、148～149、154～158がそれぞれ同一個体である。145～146は短頸壺あるいは無頸壺と言うべき個体であろうか。かなり大型の土器と思われ、肩部以上が著しく内傾して口縁部が僅かに立ち上がる。外面及び口縁内面には無節縄文Lが施される。147は縄文LRを施す個体で、肩部が144と同様の「く」字形に屈曲し、その上に太く深い沈線を巡らせるもの。148～149は、頸部がくびれて口縁部が外反し、胴部最大径はかなり下位にあるものである。施文原体はRで、口端にも同じ縄文が施される。なおこの個体の胴部下位には炭化物が顕著に付着していた。150は胴部のみ遺存するが、長胴で肩部以上が内傾し、関東北東部にある縄文施文の壺に似た器形を持つものと言える。施文原体はLR。この個体は、外面胴部下位に被熱による赤化が、中位以上に炭化物の付着及び黒化が観察された。151及び152は胴部破片で、前者にはLR、後者にはRが施されている。これらにも炭化物の付着は認められる。153、154～158の2個体は折り返し複合口縁を有する土器である。折り返し部に施される縄文はいずれもLRであるが、153には頸部にも施文がなされ、154と155には横位結目縄文が施される。これらが果たして弥生土器かどうかという疑問が皆無なわけではないが、結目縄文は明らかな須和田式土器である72にも見られ、その点で矛盾はない。159から161は縄文施文の小片である。

162、163、165、166の4片は有文の小片である。162と163には地文がなく、沈線によって文様が描かれるらしい。165と166はともに竹管状工具による短い沈線状の刺突が施される土器であるが、前者には地文として縄文Lが認められるのに対し、後者には地文がない。

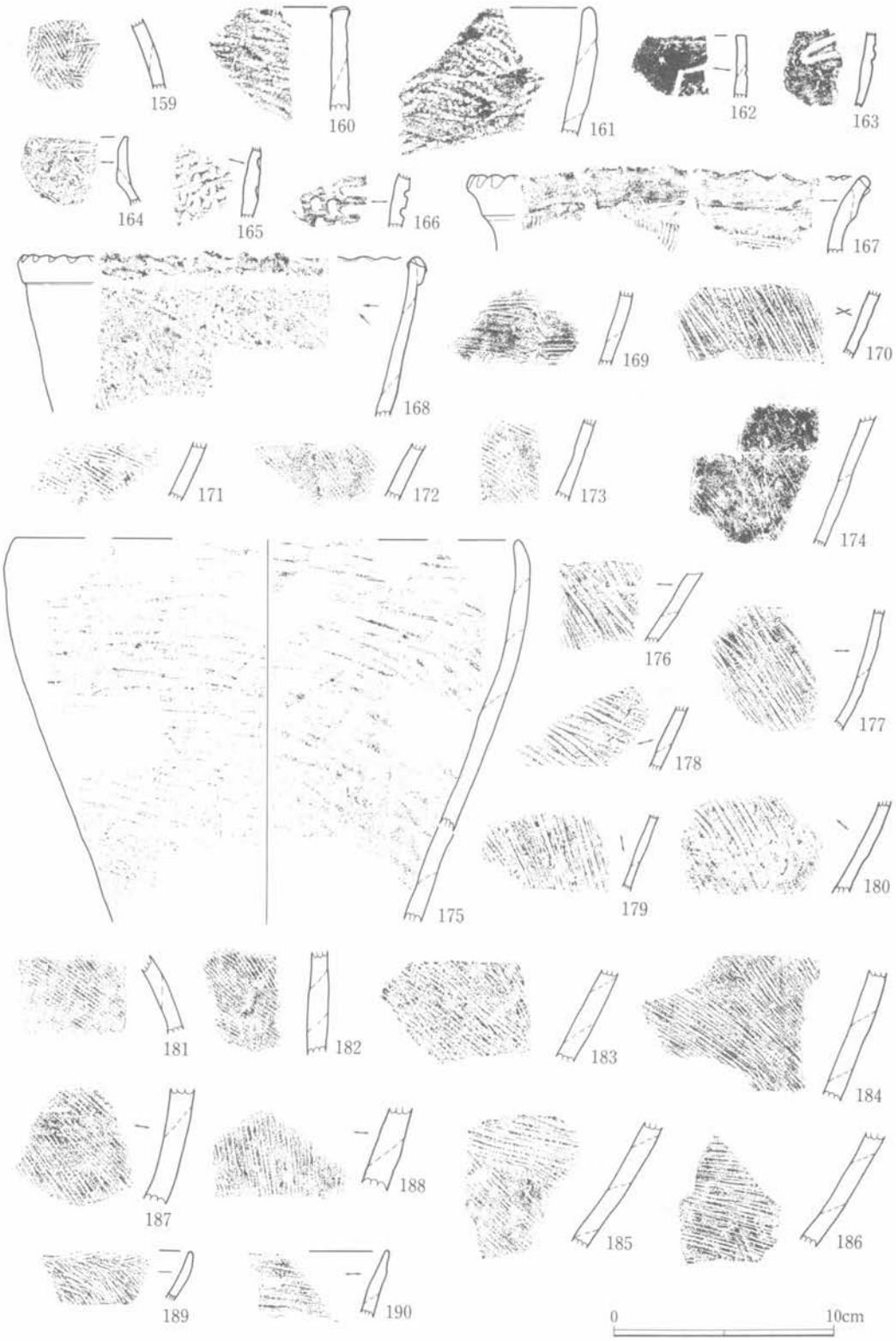
164、167以下193までは条痕施文の土器である。いずれも甕、深鉢である。171～173、176～179、181～182、183～186、187～188がそれぞれ同一個体。167と168は折り返し複合口縁を有する甕である。どちらも口端に篦状工具による押捺（刻目）が施されている。167には折り返し部直下に縦位に鋭い印象の茎束条痕が認められるが、部分的に横位に篦が当たっており、何らかの文様が描かれていた可能性はある。168も幅の狭い折り返し部直下から条痕が始まるが、この個体



第132図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(6)（1/3）



第133図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(7)（1/3）

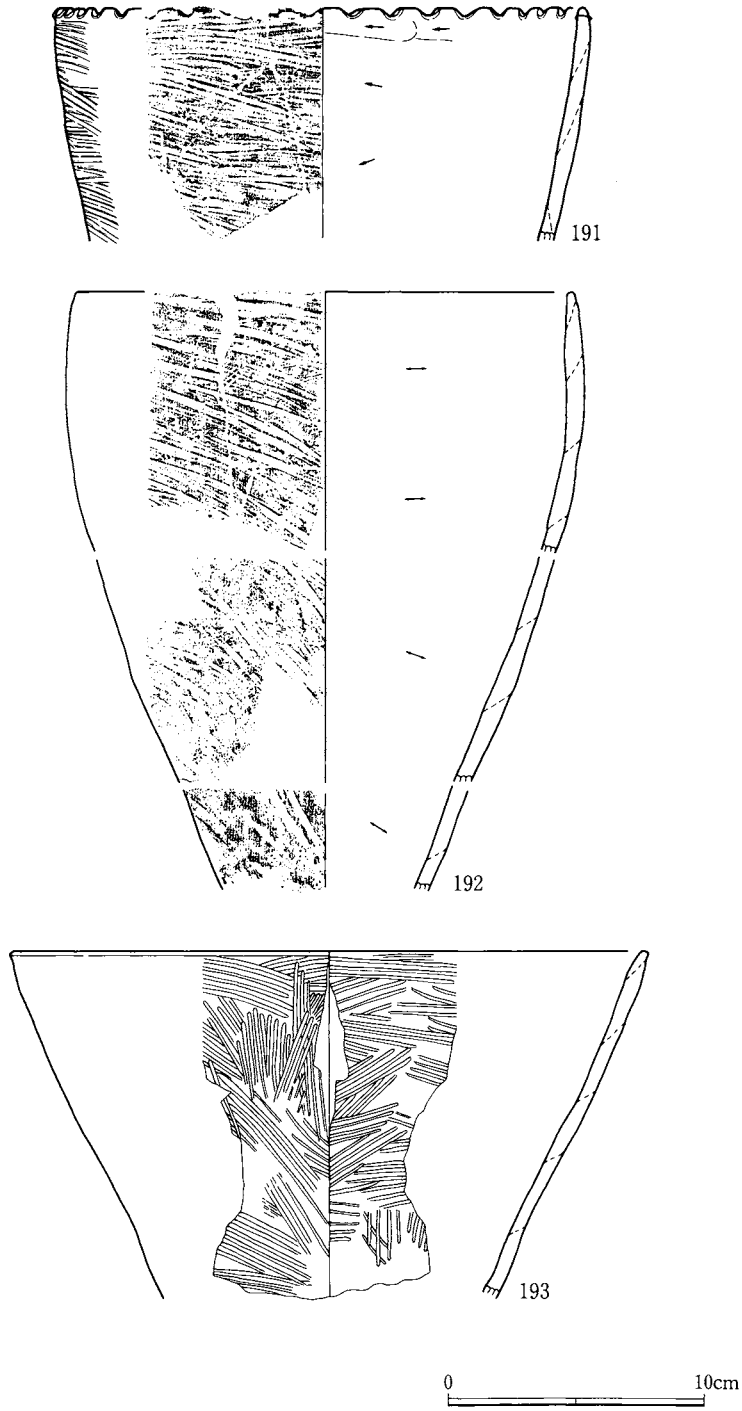


第134図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(8)（1/3）

の条痕は茎束状原体によると思われるものの、浅くはっきりしていない。なお168の口縁部外面に炭化物が付着していた。169、170はともに胴部破片で茎束条痕を施文するものである。うち170の条痕は条及び条間がやや広く、一定して貝殻に近い印象を与える。171～173は貝殻条痕を施す個体である。稀少例。174は茎束条痕を施した後に表面になでを加えているため、半ば条痕は消えている。175は内外面が条痕で覆われる深鉢である。単純な器形で、口縁部に至って僅かに内湾する砲弾形を呈する。条痕は内外面とも同じで、原体は篦状乃至板状のものではないかと思われるが、意図的なものか一見貝殻条痕風である。胴部下位にはかなり炭化物の付着がある。この個体の条痕に類似したそれを施す破片が180である。176～179も似ているが、こちらは茎束状原体ではないかと考えられる。181～182に施されるのは非常に条間の揃った茎束条痕で、各条は細く鋭く、整った櫛歯状原体を用いたものであろうか。これに似た条痕を施すものに187～188がある。183～186はより柔らかい印象の茎束条痕を施す個体である。189と190は口縁部小片である。どちらも口端が薄く仕上げられ、刻目他の装飾を持たない。189の条痕は条間にかなり乱れがあり、茎束条痕としても粗雑なもの。190に施されている条痕は175のそれに似ている。これら粗縁の深鉢は共通の器種として把握されよう。

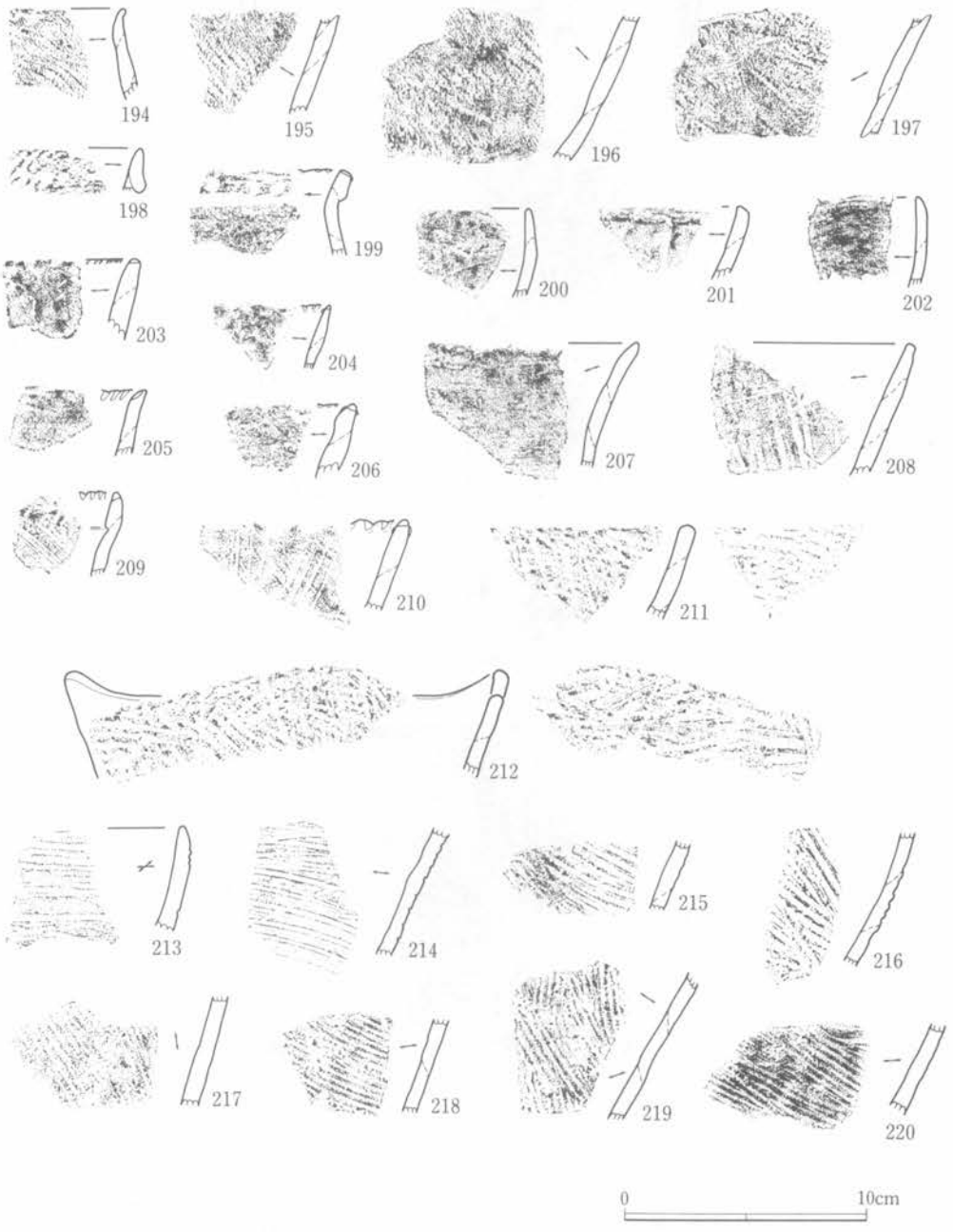
これまで述べたのは主としてクラスターａに分布したものであるが、クラスターｂで出土した191、192の両者も前記175によく似た深鉢である。191は体部外面全面にに茎束条痕を施文するものであるが、この個体は口端に棒状工具による刻目を巡らせていることに大きな特徴がある。同じ個体の胴部下半の破片を見ると、条痕施文方向が水平から斜位に変化するのと胴部下位には炭化物の付着があることが判る。192は粗縁、砲弾形の器形を呈する。体部は一見条痕施文されるが、これは一条を単位としており、擬条痕あるいは条線施文と言うべきである。前個体は内面篦削り仕上げであったが、この個体の内面は平滑に磨かれている。これまで数個体報告してきた条痕施文の深鉢は、池花遺跡で出土したような、荒海式土器の新段階に組成する砲弾形条痕深鉢の系譜を引くものであることは確実であろう。193はやや特殊で、直線的に開く器形を有する鉢である。内外面条痕施文で、比較的整った茎束状原体を用いる。

194から220まではクラスターｂから出土した小片を集めた。194～197、211～212、215～216、217～220がそれぞれ同一個体である。194～197は口頸部が内傾する粗縁の甕で、外面全面に縄文ＲＬが施されるらしい。198は口縁部小片で、外面折り返し複合口縁を持ち、縄文ＬＲが施文される。199も幅の狭い複合口縁を持つ個体であるが、無文で口端に刻目を施す。また折り返し部には連続的に指頭で押さえた跡を残している。200から207はいずれも無文の口縁部破片である。先端がつまみ上げられたような平縁を呈するもの（200、201、202）、口端に細かい刻目を加えるもの（203、204、205、206）、口縁がやや大きく外反するもの（207）がある。208以下は条痕施文の土器である。208はほぼ縦位に太く粗い茎束条痕を施す。209と210は、各条が細く粗雑な茎束状原体で共通し、ともに口端に刻目を加えているが、209の口縁内面は折り返し状複合

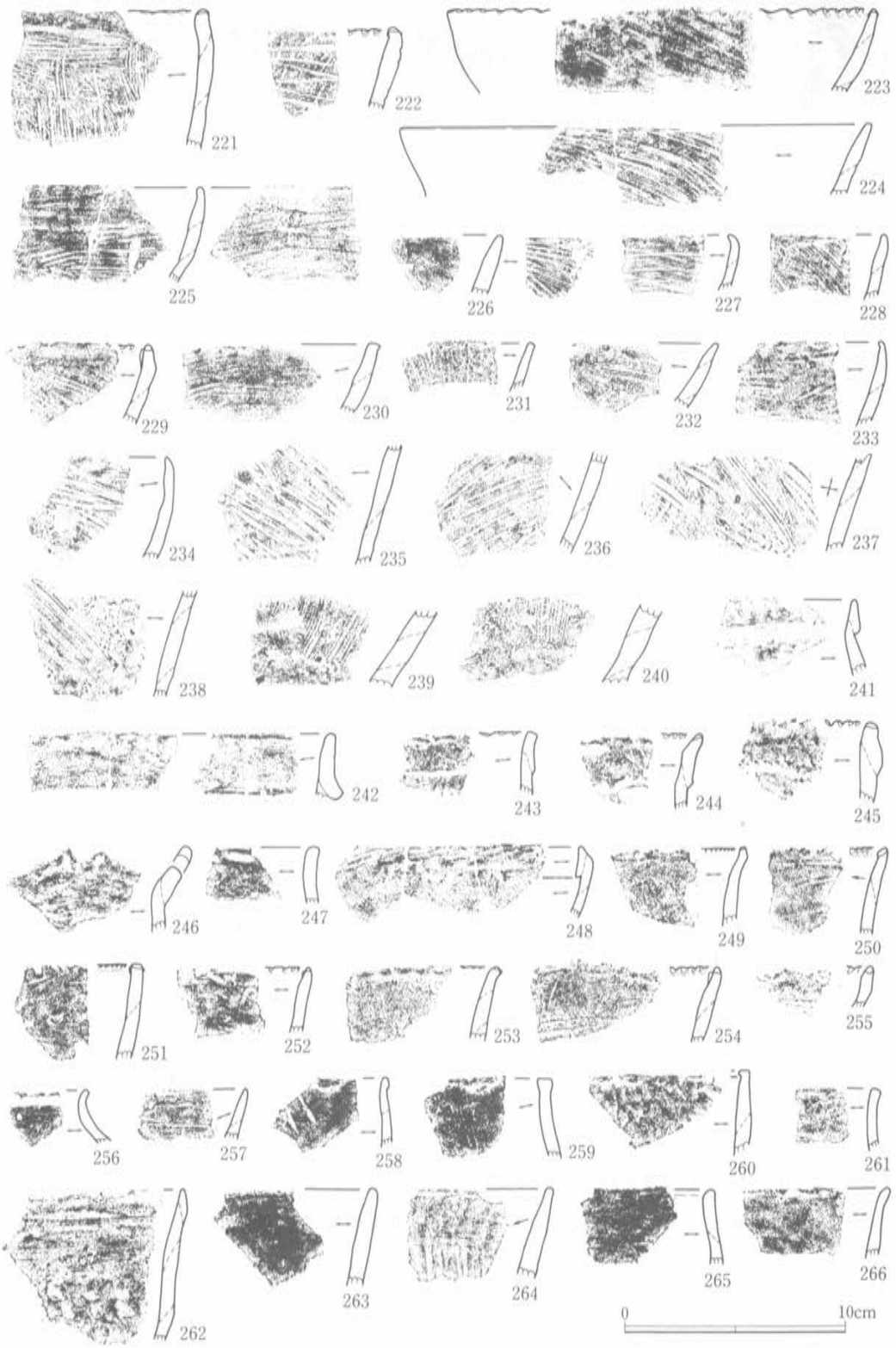


第135図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(9)（1/3）

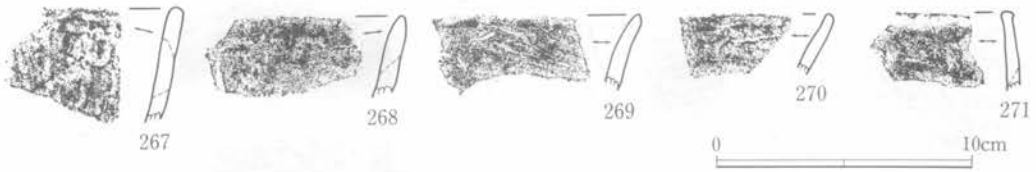
口縁となっている。213と214は深く鋭い印象を与える条痕で、特に214は条間が揃った櫛歯状のものである。211～212、215～216、217～220の3個体はいずれも貝殻条痕を施文する土器である。貝殻条痕を用いる個体は、前出171～173にこの3個体を加えて池花南遺跡南半部全体で4個体しかない。そのうち211～212は波状口縁を呈する小ぶりの土器で、内外面に条痕が施される。しかし波状の単位は不詳。この個体は拓影では一見早期条痕文系土器のように見えるが、



第136図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(10)（1/3）



第137図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(11)（1/3）



第138図　池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(12)（1/3）

胎土は全く異なり、容易に区別される。

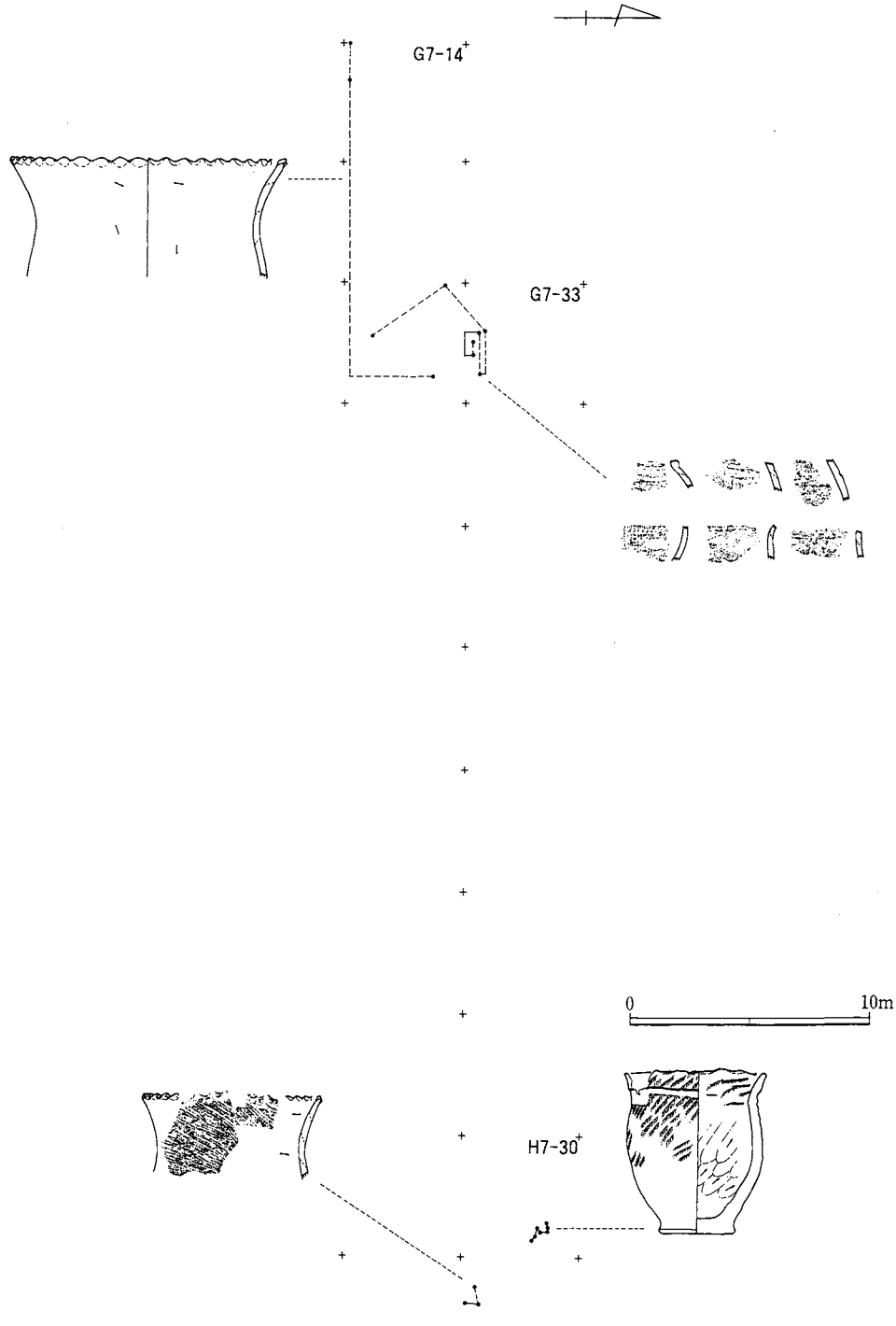
221以下はクラスターａから出土した小片を集めた。うち234～238、246～247がそれぞれ同一個体である。ただし246～247は、縄文時代晩期の可能性が強く、少なくとも須和田式土器からは除外されなければならない。

221から240までが条痕施文の土器である。ここに示した例にはいずれも茎束条痕が施されている。それらのうち、221、222、223、229の口端に刻目が加えられるが、その有無によって器形の違い等は指摘できない。241以下はすべて無文の口縁部破片である。うち241から245は外面折り返しの複合口縁を持っている。また243から245には口端の刻目が加えられる。246～247は口縁に小突起を付加するものであるが、これは前述のように弥生土器に加えないほうがよい。248は数少ない内面折り返し複合口縁を持つ土器である。その他の破片では、249から256の口端に刻目が施され、257以下は平縁である。平縁の中には口端が薄くなるものと口端に面取りがなされているものがある。

⑥池花南遺跡出土弥生時代中期後半の土器

出土状況（第139図）　多量の弥生時代中期前半の土器を出土した池花南遺跡南半部では、弥生時代中期後半、宮ノ台期の土器も少量ながら出土している。個体数としては僅か４個体で、須和田式土器の出土地点からやや外れて、２個体がG7－33、41～43区で、残る２個体がH7－30～31区で出土しており、位置的には２地点に分かれていたと言うことができる。それぞれは組成するものとしても矛盾はないが、数量があまりに少ないため、詳しい言及は控えたい。

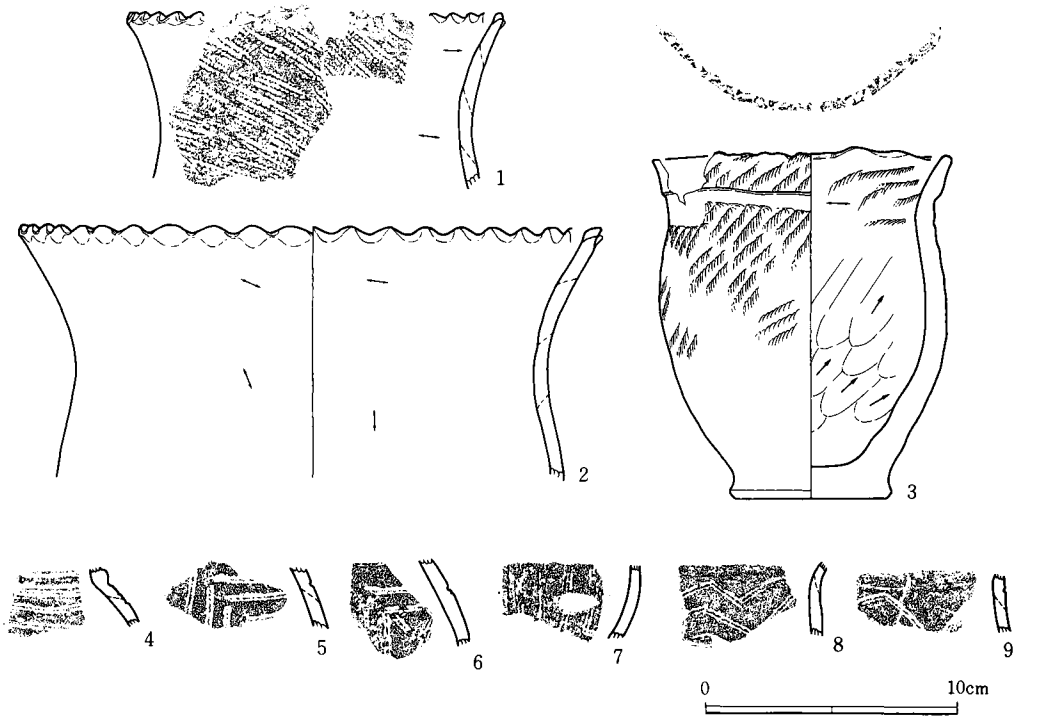
出土土器（第140図、図版65－２）　１、２は宮ノ台式土器に通有の器形を持つ甕である。いずれも口縁部が外反し、口端は表裏から交互に押捺を加えている。ただし２は内外面とも磨かれて無文であるが、１は宮ノ台式土器の甕にはない縄文が施文されている。原体はＬ３本を右撚りに撚り合わせたもので、一部器面に当たらずに縄文が抜ける部分があるようである。３は複合口縁を有する小型甕で、口縁と胴部に無節縄文Ｌが施文されている。また口端には原体が回転せずに押捺され、口縁内面にもＬの施文がある。胴部内面は斜位の篦削りで仕上げる。この土器は類例が乏しく、果たして該期に含められるかどうか問題が残るが、弥生中期前半以前には比定できまい。ちなみにこれに近いものは木更津市清水谷遺跡で出土しているが[註]、そこで



第139図　池花南遺跡弥生中期後半遺物出土状況（1/300）

は神奈川県三浦市遊ケ崎遺跡出土甕形土器との類似から須和田式段階と考えられているようである。4～9は同一個体で、明らかに足洗式系の土器である。小片ばかりで接合せず、器形も不詳であるが、細い半截竹管状施文具によって重四角文、山形文が描かれている。

註 杉山晋作・他『千葉県木更津市清水谷遺跡』　清水谷古墳発掘調査団　1975



第140図　池花南遺跡出土弥生中期後半の土器(1/3)

⑦弥生時代のまとめ

以上見てきたように、内黒田遺跡群では弥生時代中期に至っても集団の占地は続き、大小の遺物集中が残されている。ここで検討すべき問題は、それぞれの地点及び出土土器の時期的な位置付けであろう。

ここで報告した地点のうち、池花遺跡Ｃ１区出土の土器群が最も古い段階に位置することは疑うべくもない。また逆に最も新しい土器群は池花南遺跡の宮ノ台期の土器であるが、その間の弥生時代中期前半の編年的序列については難しい問題がある。宮ノ台期以前の遺物集中は遺跡群中に３箇所ある。池花遺跡Ｄ２・Ｅ２区の遺物集中、池花南遺跡Ｇ５区（SX－02下層）の遺物集中、池花南遺跡Ｇ７区の遺物集中である。池花南遺跡Ｇ７区の場合は須和田式土器を主体としているが、池花遺跡Ｄ２・Ｅ２区と池花南遺跡Ｇ５区からは磨消縄文を施文する壺に代

表される土器群が出土している。それらは時期的に大きく隔絶しないことは想定されるものの、各地点間の関係については、一部でメルクマールとなる器種に連続性が窺えないために、相互の比較だけでは簡単には判断し難いものがある。

まず池花南遺跡G７区の土器群について見てみよう。ここの場合、クラスターａとクラスターｂ両者の土器に若干の差が認められる。クラスターａ出土土器の基本組成は、①有文の壺、②縄文のみを施文する壺、③壺に類似した胎土と施文の甕、④条痕地文の有文甕、⑤縄文地文の有文甕、⑥条痕、縄文、あるいは無文の甕、⑦条痕深鉢によって構成されると言える。ここで注目されるべきは多様な甕形土器であろう。既に述べたが、特に有文の甕には古い要素を具える土器が多く、岩櫃山式土器との関連が想定されるもの、荒海貝塚における雑書文甕の系譜を引くと思われるものなど弥生時代中期初頭あるいはそれに近い年代が与えられそうである。また条痕甕、深鉢も荒海期の新しい段階の条痕深鉢や北関東の岩櫃山式段階の条痕甕、深鉢との関連性が想定される。壺については量的に少なく、須和田式土器の典型的な壺は基本的に含まれないと考えてよい。おそらく第127図４～７は、クラスターａの主体を本来構成した土器群からは除外されよう。一方クラスターｂ出土土器の基本組成は、クラスターａの構成と比較した場合、②が欠如し、また④も基本的に存在しない。しかし壺は多く、その施文には三角連繋文や刺突文が広く用いられている。地文として特徴的なのはカナムグラ回転圧痕で、クラスターａとクラスターｂに分散して分布する４～７を除いてクラスターａ出土土器には全く認められない。このカナムグラ回転圧痕は、南東北から北関東でも盛行するが、弥生時代中期の初めには殆ど認められておらず、明らかに後出的要素と言えよう。またクラスターａで弥生時代中期初頭の年代を想定した数種の甕がクラスターｂでは見られないことを考え合わせると、両クラスターの主体的部分に時期差が存在することは歴然である。

次に池花南遺跡G５区出土の土器群についてはどうであろうか。ここでの最も特徴的な器種は、繊細な磨消縄文を施文する壺である。このような縄文の繊細さや沈線区画文様及び沈線自体の幅の狭さなどの特徴は、南東北における南御山II式段階の特徴と一致し、弥生中期でも中葉に位置することになる。そこでこれらの土器群を、池花南遺跡G７区やH７区から出土した宮ノ台期の土器群の前段階に置きたい。

残るは池花遺跡D２・Ｅ２区出土の土器群である。ここの土器群も磨消縄文を施す壺で代表されるが、沈線区画文様の特徴、比較した場合の縄文の粗さなどから、池花南遺跡G５区出土土器群よりも明らかに古い段階に置かれる。これも南東北に対比させれば、棚倉式（南御山Ｉ式）段階に比定されよう。福島県地方では、棚倉式段階に須和田期の関東系土器が共伴すると言われるが、もし棚倉式土器、南御山Ｉ式土器と須和田式土器が並行関係にあるとすれば、池花遺跡D２・Ｅ２区出土資料と池花南遺跡G７区クラスターｂ出土資料の関係をどう考えればよいであろうか。池花南遺跡G７区クラスターａとクラスターｂの土器群は連続性があること

が想定されるから、時期差があるとすれば池花遺跡Ｄ２・Ｅ２区を後段階と考えるべきであろう。ただ可能性としては低いが、全く異なる出自の集団が、あまり間隔を置かずに両遺跡に占地した可能性も考慮すべきであろうか。

以上編年的序列を試みた結果は次のとおりである。尤も池花遺跡Ｃ１区の位置付けは、資料的制約があって確定的なものではない。

弥生時代前期末葉：池花遺跡Ｃ１区

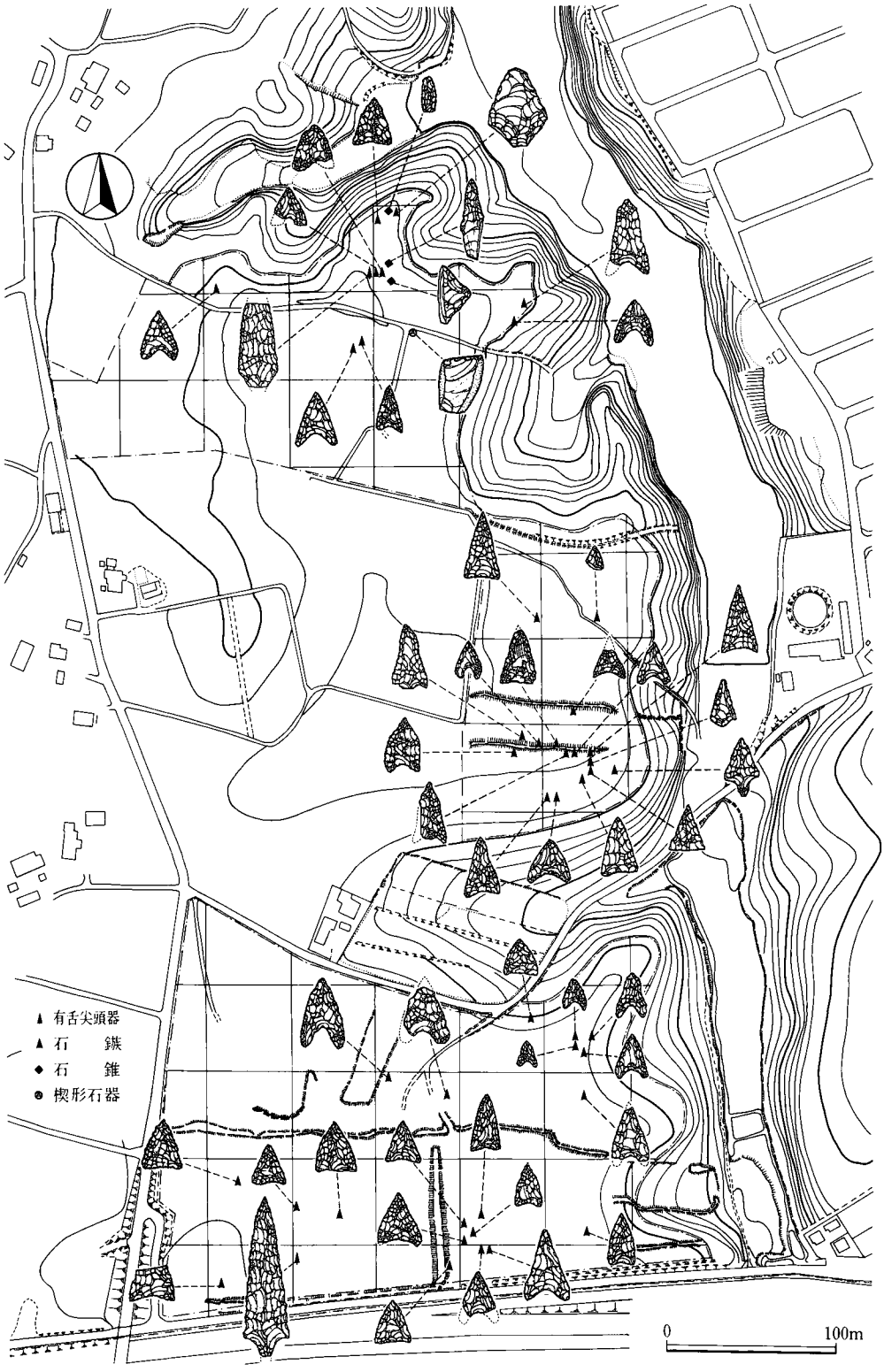
弥生時代中期初頭：池花南遺跡Ｇ７区クラスターａ

弥生時代中期前葉：池花南遺跡Ｇ７区クラスターｂ、池花遺跡Ｄ２・Ｅ２区

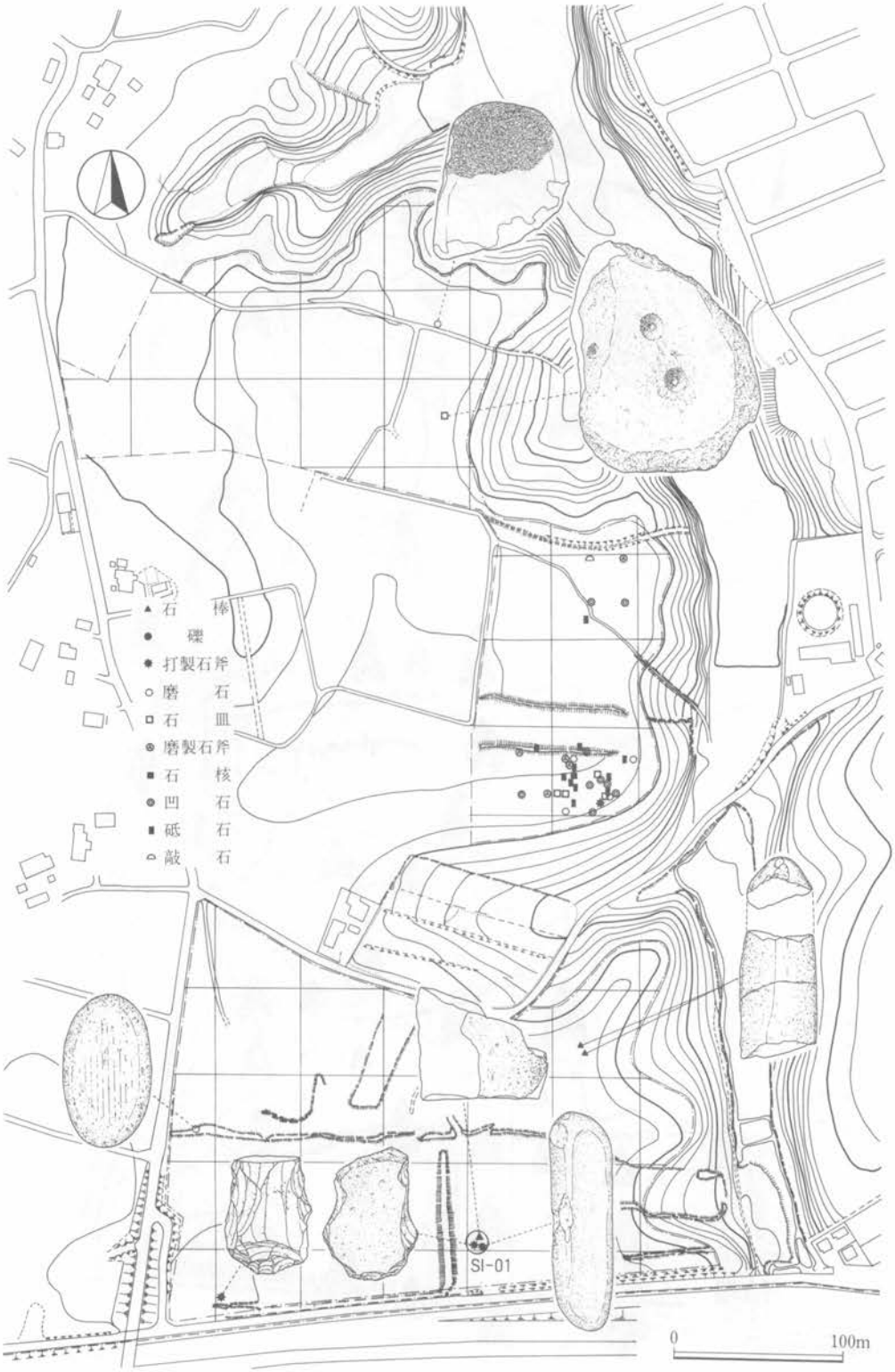
弥生時代中期中葉：池花南遺跡Ｇ５区

弥生時代中期後葉：池花南遺跡南半部の一部

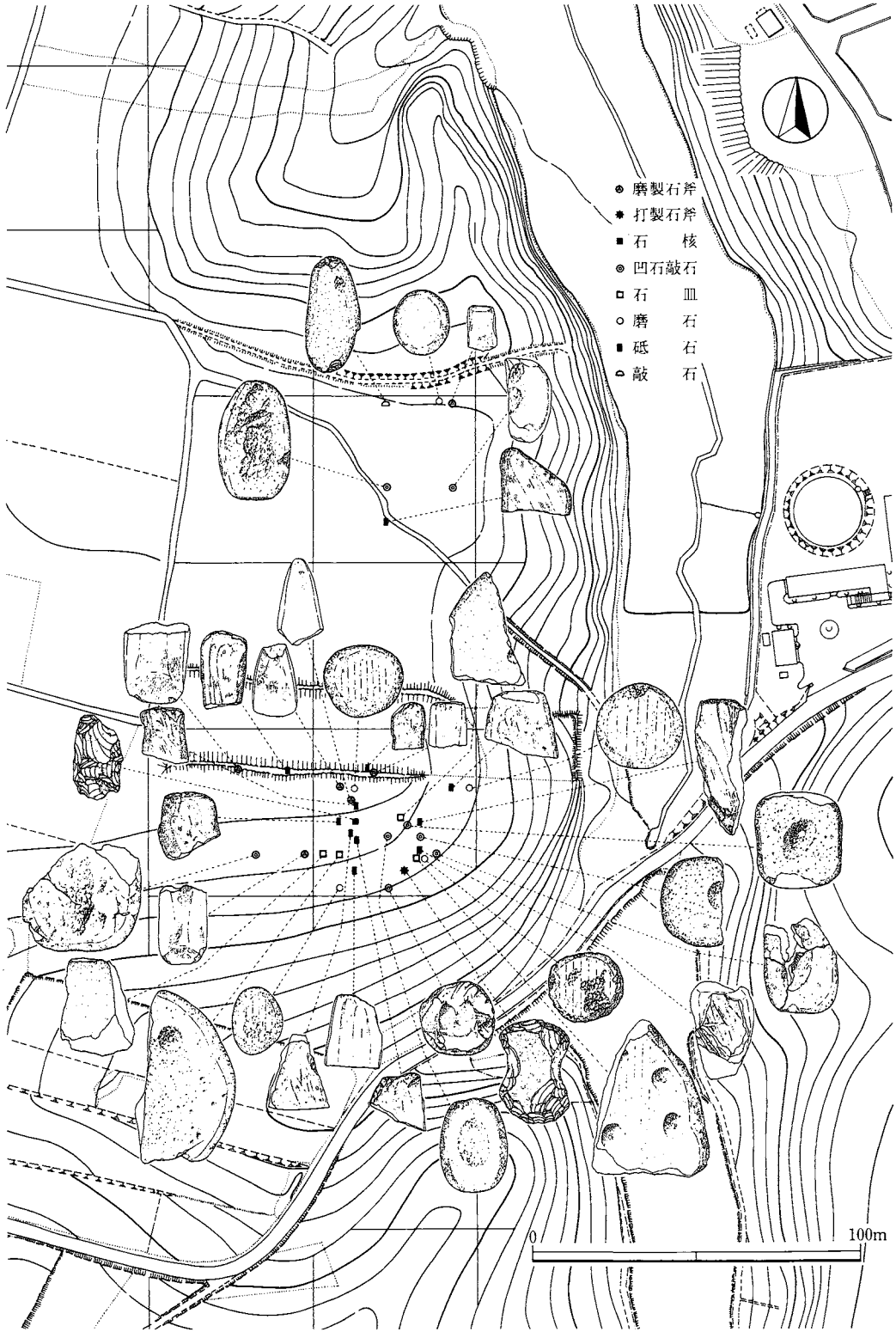
この中でまとまった遺物集中が存在、あるいはかつて残されていたと思われるのは、弥生時代中期初頭から中葉までである。それらは径20～30mのほぼ円形に分布することで共通し、それぞれ一単位集団の生活空間が展開していたものと考えられる。各遺物集中の形成は、さほど時間を置かずになされているかも知れないが、しかし単に連続的に継起するのではなく、集団の移動の一環で反復して占地されていたのであろう。ただ池花遺跡及び池花南遺跡が所在する台地が拠点的な場として意識されていた可能性がある。



第141図　縄文時代石器出土位置(1)（1/4,000）



第142図　縄文時代石器出土位置(2)（1/4,000）



第143図　縄文時代石器出土位置(3)（1/2,000）

10. 縄文～弥生時代の石器・土器底部

①概観（第141図～第143図）

大割、池花南、池花各遺跡で多くの縄文～弥生時代の石器が出土している。縄文時代後期後半に帰属するものとして報告した黒曜石製石器群とその出土地点を除くと、石器を製作した地点は検出されていない。したがっていずれも石器だけでは集中地点を形成せずに出土したものである。相対的に石器が多く出土した範囲は池花遺跡北縁、池花南遺跡南縁、大割遺跡Ｅ４・Ｅ５区などにあるが、それらはやはり土器集中と重複している。しかしその殆どで複数の時期の土器が出土しているため、石器の時期を正確に決定するのは不可能である。よってここでは先述した縄文草創期の有舌尖頭器及び池花南遺跡の縄文後期黒曜石製石器群以外の縄文～弥生時代（主として縄文時代）の石器をまとめて報告することにする。また併せて正確な時期決定のできない土器底部のうち、特徴的なものもここで報告する。

出土した石器には石鏃、石錐、磨製石斧、打製石斧、石皿、磨石、敲石、砥石などがある。石鏃は各遺跡で概ね均等に出土しているが、石錐については池花遺跡北縁に集中する。ここには縄文前期後葉と縄文晩期後葉の包含層があり、石錐は晩期のものである可能性がある。また礫素材の石器、殊に砥石やある種の敲石（凹石）は池花南遺跡南縁に圧倒的に集中している。池花南遺跡南縁では縄文後期後半、縄文晩期後葉、弥生中期前半の包含層が認められ、したがってこれらの石器はそれらいずれかの時期の所産である可能性がある。

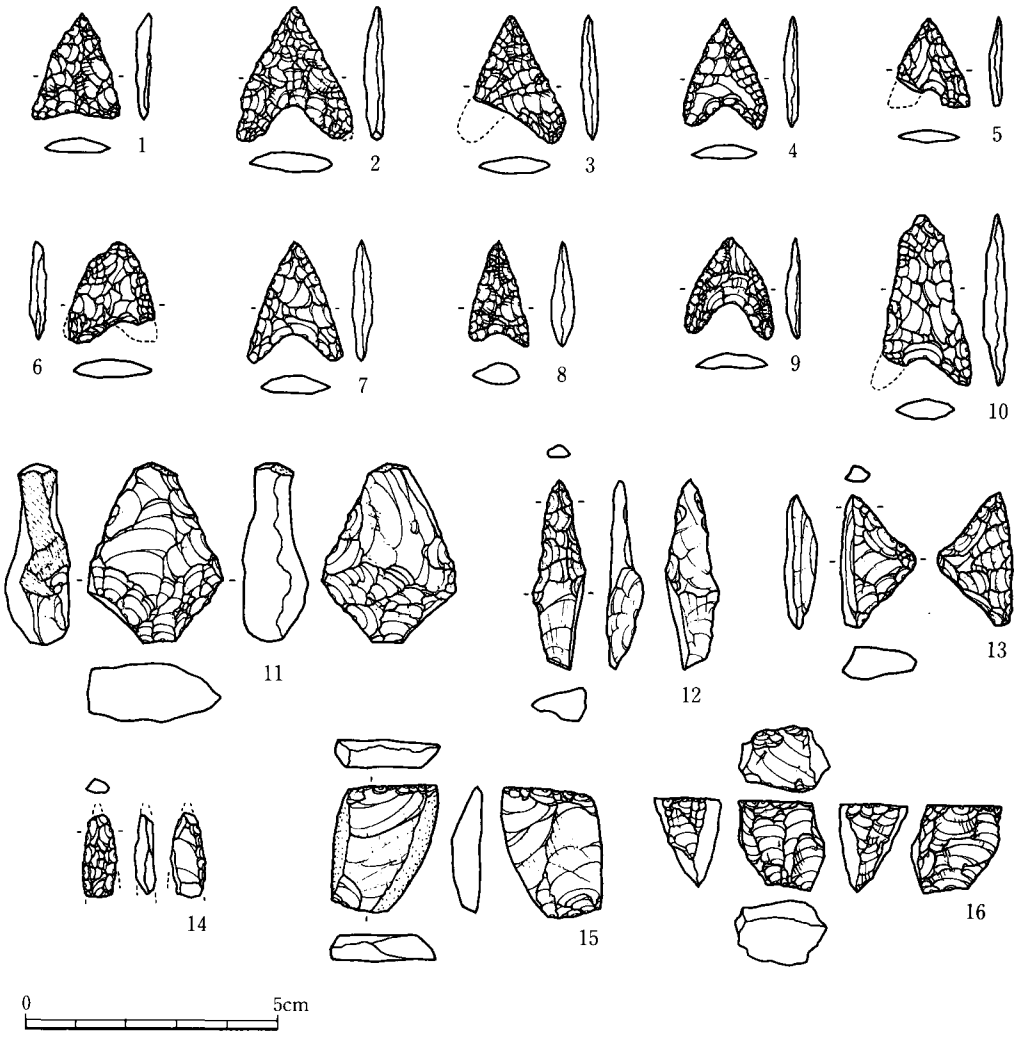
②池花遺跡出土石鏃、石錐、楔形石器（第144図、図版68－２）

石鏃（１～10）　すべて無茎鏃である。凹基を主体とするが、１は抉りがきわめて浅く平基として差し支えあるまい。凹基の抉りは深いものが多く、とくに９は長脚気味と言える形状を示す。長幅比による形態の違いでは、１～７、９が短身、８、10が長身とできるが、10は特徴的で尖頭部が鋭角的でなく、すぐに屈曲してわずかに内湾気味の長い側縁となる。

石鏃未製品（11）　分厚い横長剝片素材であると思われ、基部及び右側縁の加工によって概形が整えられている。有茎の石鏃を目指したものである。

石錐（12～14）　いずれもＥ１区から出土している。12は基本的に片面加工で、基部は微細な調整がなされず折断で整形されている。14は錐部のみの破片で先端をも欠失している。13は石鏃とも考えられるものであるが、あえて石錐とした。左側縁は折断で整形され、さらに片面には調整が施される。尖頭部は断面菱形に近い。

楔形石器（15、16）黒曜石製の16は両極石核と言うべきか。

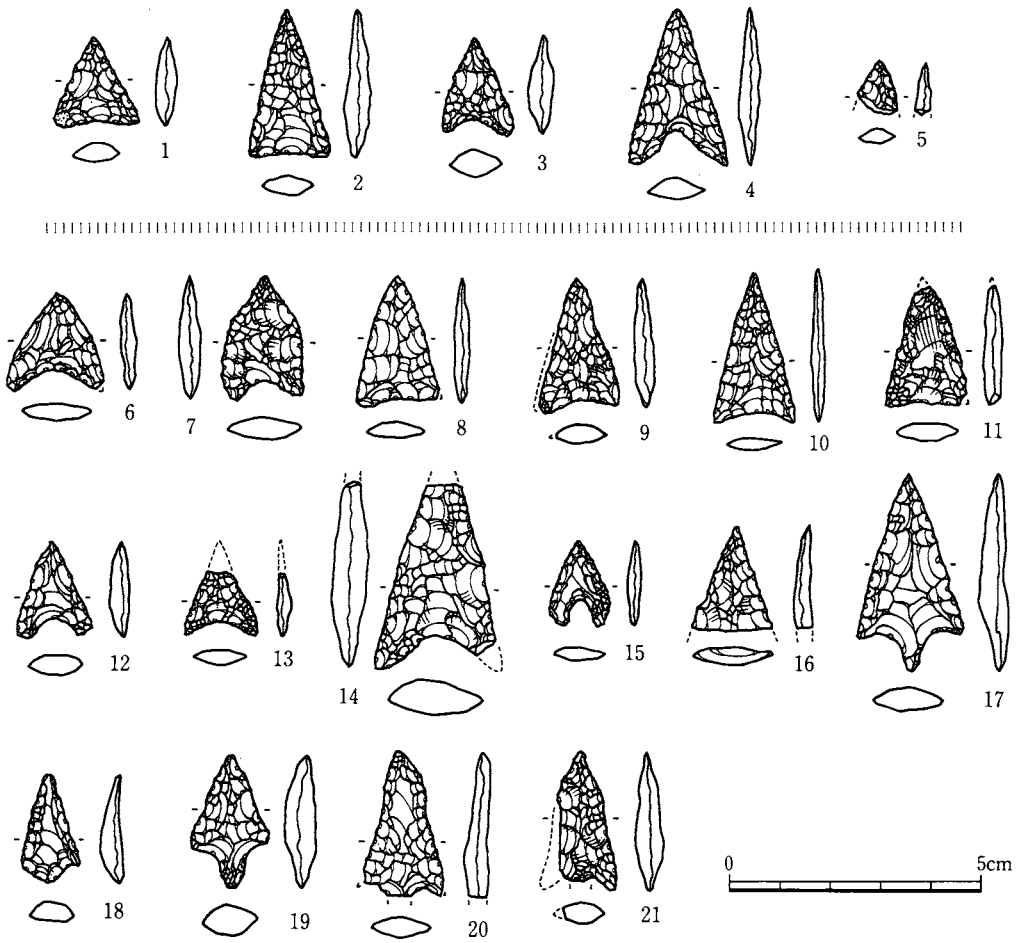


第144図　池花遺跡出土石鏃・石錐・楔形石器（2/3）

③池花南遺跡出土石鏃（第145図、図版69－1）

北半部出土石鏃（1～5）　出土地点は大きく見て遺跡北半部と遺跡南半部に分かれる。北半部では古墳周溝内を含め5点出土している。チャート製の1、2は平基及び平基長身、黒曜石製の3、4は凹基及び凹基長身である。

南半部出土石鏃（6～21）　遺跡群中で最も豊富なバリエーションを有する。基部を遺存しない16を除き、無茎の6～15と有茎の17～21に分けられる。無茎鏃には凹基が多いが、8～11の4点は比較的長幅比が大きく平基か抉りの小さな凹基でよく相似している。凹基の中では7は側縁が大きく膨らみ、特徴的な形状を持つ。有茎鏃は縄文晩期の遺物分布範囲のみから出土しており、その帰属時期を示唆しているようである。中でも21、22の2点は側縁有段の俗称「飛行機鏃」で、縄文晩期後葉に特徴的な形態を示していよう。



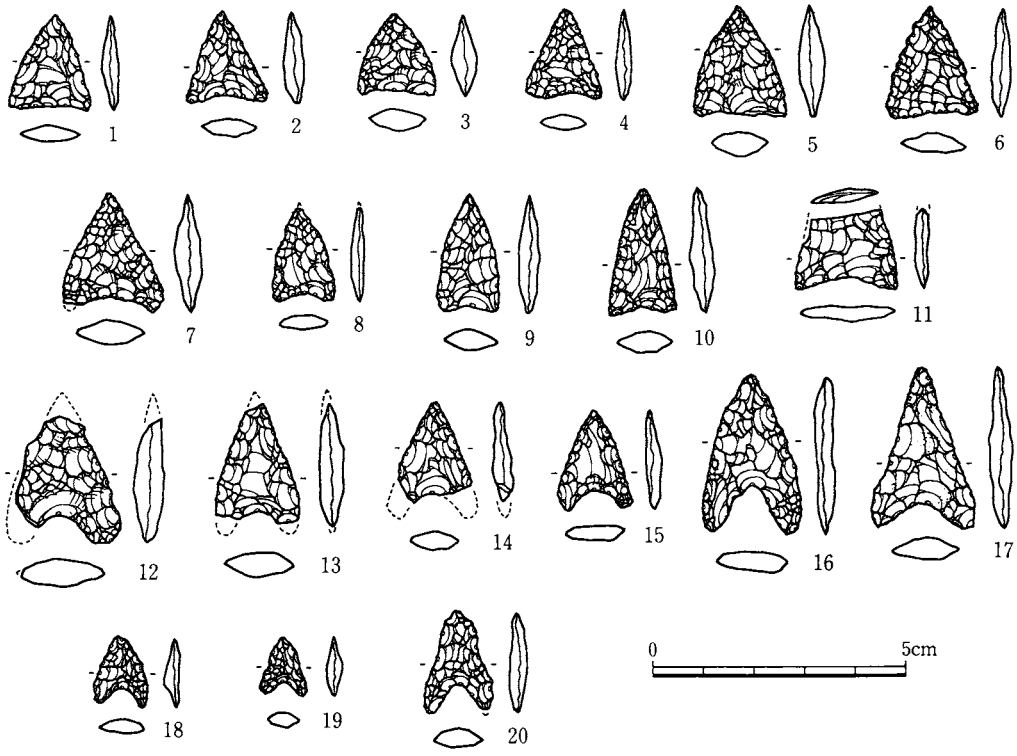
第145図　池花南遺跡出土石鏃（2/3）

④大割遺跡出土石鏃（第146図、図版69－２）

すべて無茎鏃ばかり20点出土している。遺跡群中における特徴としては、平基及び弱い凹基が多いということが挙げられる。１～11がそれに該当するが、殊に１～６あるいは７は本質的な差は皆無の一群であろう。これら平基及び弱い凹基の石鏃はその殆どが遺跡南縁で出土している。対して凹基鏃の多くは遺跡北部で出土しており、Ｆ２区の４点は比較的集中分布していると言えよう。Ｆ２区から出土したのは15、18～20であるが、非常に小型の18～20は質的によく似たチャートを素材としており、また形態的にも類似性を有するもので、同時期の所産である可能性が濃厚である。なお18と19は同一母岩である可能性もある。

⑤池花遺跡出土礫石器（第147図、図版70－１）

池花遺跡においては、先述の石鏃・石錐等小型の石器を除くとあまり見るべきものを出土し



第146図　大割遺跡出土石鏃（2/3）

第4表　池花遺跡出土石鏃・石錐・楔形石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損
1	石鏃	E1−10−101	黒曜石	22.0	17.9	3.0	0.8	—
2	石鏃	D2区表採	黒曜石	27.5	22.9	3.9	1.6	○
3	石鏃	SD−10−37	黒曜石	27.2	18.7	3.8	1.1	○
4	石鏃	C1−91−1	チャート	23.0	16.8	3.0	0.9	—
5	石鏃	E1−70−102	チャート	18.2	14.7	2.2	0.5	○
6	石鏃	E1−70−104	黒曜石	20.9	17.4	3.3	0.9	○
7	石鏃	D2−67−12	安山岩	24.6	19.4	4.0	1.2	—
8	石鏃	D2−58−7	黒曜石	20.7	12.4	4.6	0.8	—
9	石鏃	F2−36−2	黒曜石	20.2	17.6	2.8	0.6	—
10	石鏃	F2−17−57	チャート	33.6	18.5	4.6	2.2	○
11	石鏃未製品	E1−02−106	チャート	34.7	26.2	11.5	10.5	—
12	石錐	E1−61−2	安山岩	36.6	11.6	7.2	2.2	—
13	石錐	E1−81−107	安山岩	20.6	10.5	6.2	2.1	—
14	石錐	E1−01−102	チャート	16.7	7.4	4.2	0.6	○
15	楔形石器	E2−44−2	チャート	24.8	19.4	5.6	3.6	—
16	楔形石器	E2−10−85	黒曜石	16.4	18.6	12.9	3.3	—

第5表　池花南遺跡出土石鏃計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損
1	石鏃	SX−03−3	チャート	18.5	16.9	4.4	1.0	—
2	石鏃	F5−79−5	チャート	30.0	16.4	4.7	1.6	—
3	石鏃	SX−09−1	黒曜石	20.4	14.8	5.0	0.9	—
4	石鏃	SX−03−3	チャート	32.3	20.8	4.5	1.7	—
5	石鏃	G5−76−5	黒曜石	11.1	8.0	3.2	0.2	○
6	石鏃	G7−81−87	チャート	19.3	19.4	3.3	0.8	○
7	石鏃	F7−36−9	黒曜石	24.2	16.5	4.3	1.4	—
8	石鏃	G7−64−135	チャート	25.4	16.9	3.3	1.1	○
9	石鏃	G7−80−41	黒曜石	25.7	16.5	4.8	1.4	○
10	石鏃	G7−35−29	チャート	29.8	16.2	2.7	0.9	—
11	石鏃	G7−21−27	黒曜石	24.3	16.6	3.8	1.3	○
12	石鏃	G7−33−42	安山岩	19.9	15.2	4.3	1.0	—
13	石鏃	G6−83−1	チャート	12.8	14.8	3.1	0.4	○
14	石鏃	表面採集	黒曜石	38.2	24.8	7.1	4.4	○
15	石鏃	F7−29−10	チャート	16.5	12.3	2.4	0.4	—
16	石鏃	G7−55−171	黒曜石	20.8	16.7	3.8	0.8	○
17	石鏃	SD−01−2	凝灰岩	30.7	21.7	5.8	3.1	—
18	石鏃	G7−58−443	チャート	26.4	16.0	6.4	1.8	—
19	石鏃	G7−45−47	頁岩	21.3	12.3	4.6	1.0	—
20	石鏃	F7−17−18	チャート	28.5	16.3	5.0	1.8	○
21	石鏃	G7−32−16	黒曜石	27.6	14.8	5.5	1.4	○

第6表　大割遺跡出土石鏃計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損
1	石鏃	D5−28−53	チャート	19.3	17.2	3.4	0.8	—
2	石鏃	E4−70−1	チャート	18.6	16.3	4.4	0.9	—
3	石鏃	E2−38−1	黒曜石	16.5	15.5	5.5	1.0	—
4	石鏃	C4−50−1	黒曜石	18.7	15.7	3.2	0.7	—
5	石鏃	C4−65−1	黒曜石	22.3	18.2	5.6	1.7	—
6	石鏃	B4−23−1	黒曜石	22.0	18.4	4.0	1.0	—
7	石鏃	E4−90−88	黒曜石	24.0	19.9	5.6	1.6	○
8	石鏃	E4−81−24	黒曜石	18.9	12.8	2.8	0.6	—
9	石鏃	F4−84−1	瑪瑙	23.6	12.6	4.3	1.0	—
10	石鏃	E4−62−1	黒曜石	25.2	13.3	4.7	1.2	—
11	石鏃	B4−41−2	チャート	15.9	20.2	3.1	1.0	○
12	石鏃	D3−28−1	黒曜石	26.4	21.6	6.2	2.6	○
13	石鏃	F3−24−1	チャート	23.5	17.3	4.7	1.7	○
14	石鏃	E5−02−49	チャート	19.7	15.0	4.5	1.0	○
15	石鏃	F2−74−3	黒曜石	19.9	15.4	2.8	0.6	—
16	石鏃	D3−01−1	チャート	31.4	19.7	4.4	2.2	—
17	石鏃	E5−03−7	安山岩	32.6	20.7	5.0	1.9	—
18	石鏃	F2−53−1	チャート	13.4	11.0	2.8	0.3	—
19	石鏃	F2−63−6	チャート	12.1	9.4	3.7	0.3	—
20	石鏃	F2−55−3	チャート	20.6	13.9	3.8	0.7	○

ていない。1は石皿状の石器で脆い雲母片岩を使用している。表面には円孔が3箇所にみられる。またこの石器は表面が剝落している箇所を除いて全体に火熱を受けている。2は偏平な楕円礫の半欠である。表面は平滑であるが調整痕、敲打痕等は認められない。しかし被熱の痕跡はきわめて顕著であった。被熱痕は片側が表面黒化し、もう一方の表面が赤化するというものである。いずれも単独出土に近い状況であるが、1は接近して加曽利B式土器が2個体出土している。

⑥池花南遺跡北半部出土礫石器（第148図、第149図、図版73－2）

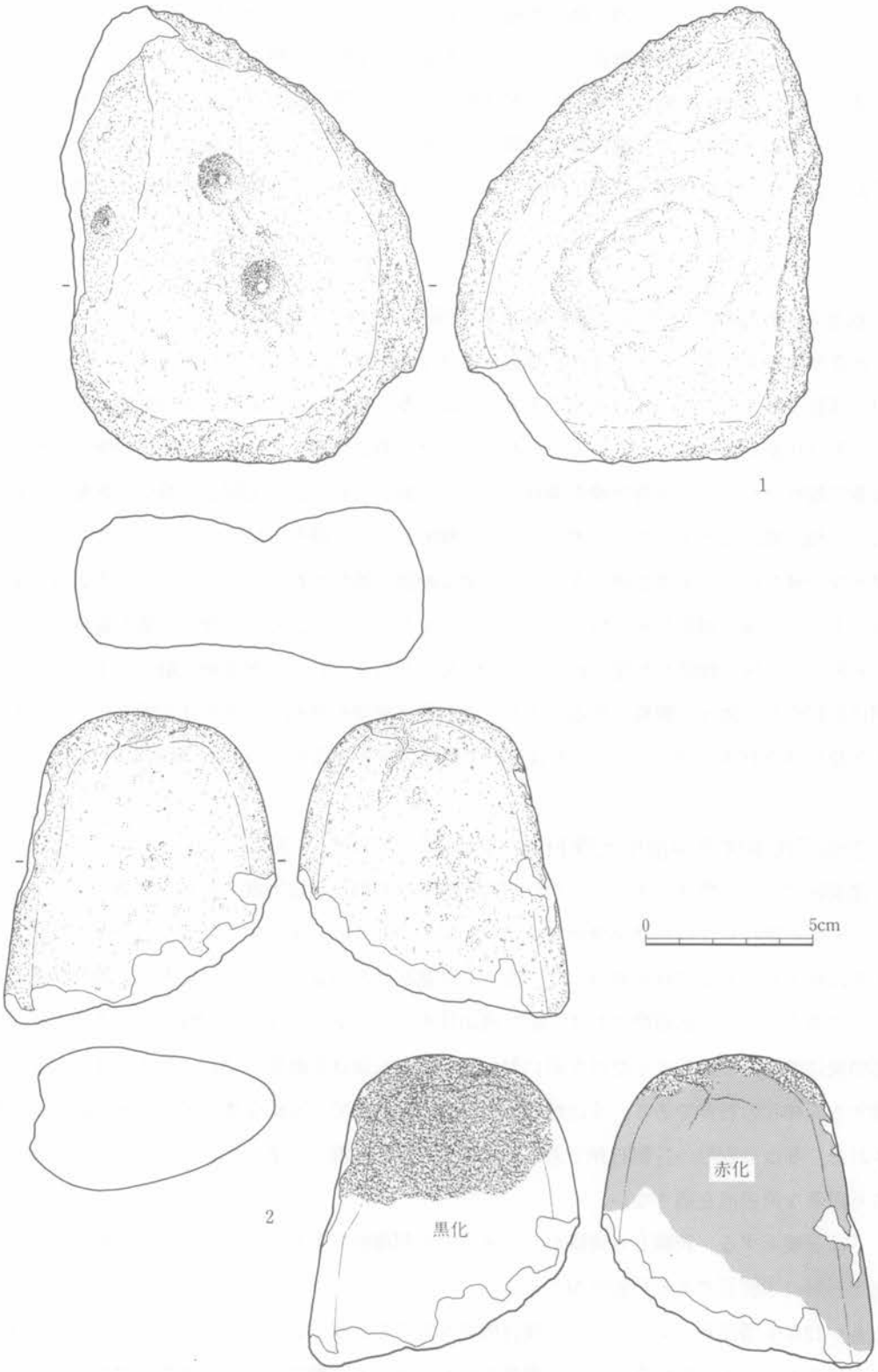
池花南遺跡北半部でも、先述の石鏃以外には小礫を除けば見るべき石器は少ない。加工、使用の痕跡を残すものなど6点を図示する。1は小型の磨製石斧である。両刃気味の形状をなすが、刃は片側から付けられている。ただし刃部は全般に欠損している。全身に研磨時の擦痕が顕著に観察される。2は長円礫を素材とし、一応敲石としたが、上端と下端から剝離痕が見られ、両極加撃に起因するものと考えられる。機能としては楔形石器に近い。3は磨石とする。偏平な円礫を用い、平坦面側にきわめて平滑な磨面が観察される。4は敲石で、表裏及び右側面、下端に2種の顕著な敲打痕が認められる。また一方左側面には平滑な磨痕が観察され、この石器には3種の機能が想定される。5は一般に凹石とされ、表面中央に敲打による凹み、周囲に敲打痕及び擦痕が観察される。またこの石器は表裏が被熱（中央寄りが顕著）しており、赤化及び外面剝落が認められる。6は砥石である。非常に偏平で、細粒、緻密な砂岩を用いる。

⑦池花南遺跡南半部出土礫石器（第150図～第157図、図版71～73－1）

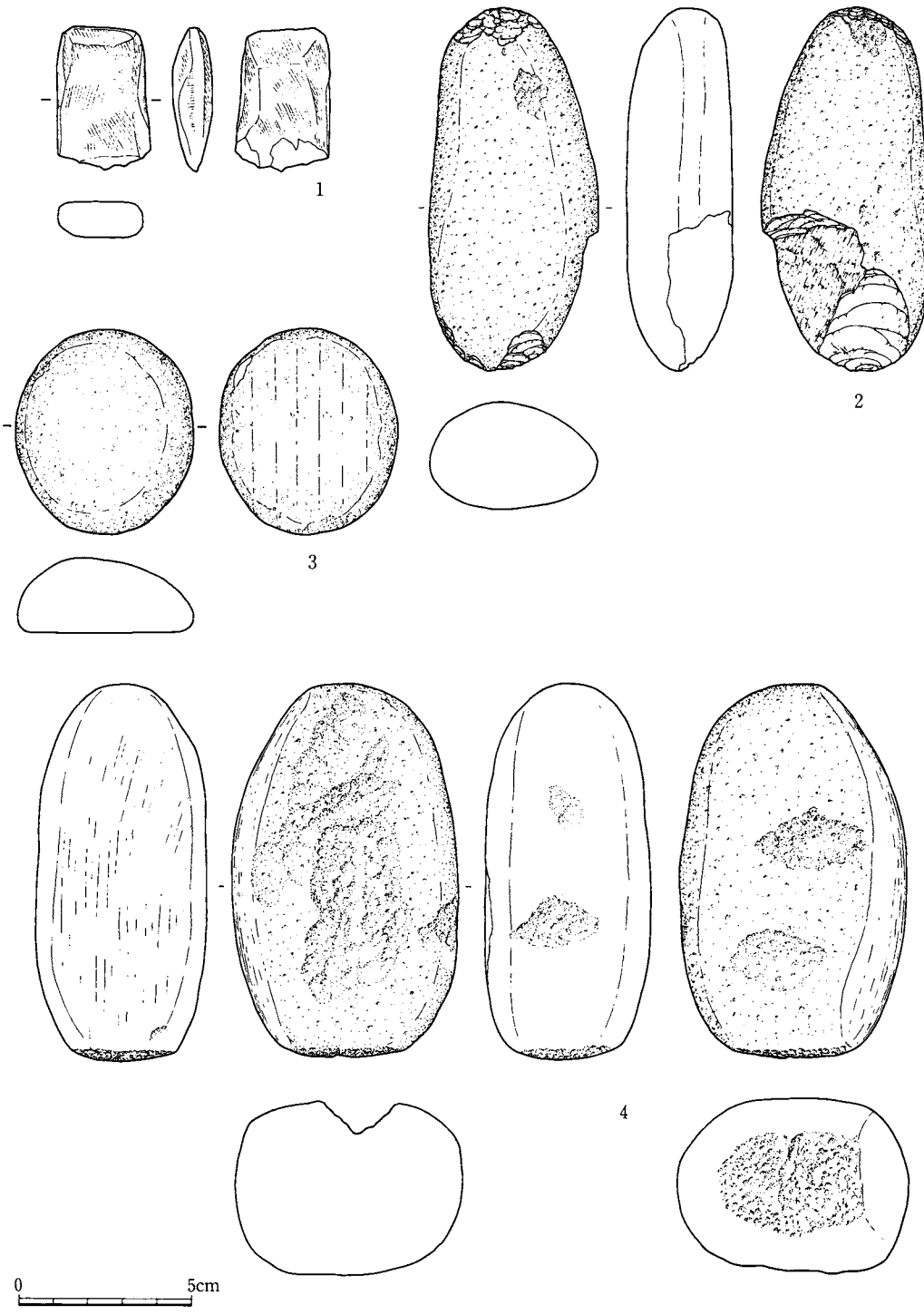
他遺跡に比して数量が多い。しかしやはり厳密な時期比定は困難である。磨製石斧は5点ある。刃部が遺存しない石斧を含めていずれも両刃であろう。1は中では大型の分厚い伐採斧。刃部は鈍化及び刃こぼれが進行している。2は基部のみが遺存するものである。概形は敲打によって整えられ、一部研磨されずに敲打痕が残る箇所がある。3は両側縁が平行するもの。刃部中央は直線的で鈍化するだけなのに対し、刃部左右端は剝離痕が認められる。4は刃部を欠損する乳棒状の石斧である。5は蛇紋岩製の美麗なもので、刃部全体に等しく刃こぼれが観察される。6は分銅形の打製石斧である。両側縁には着柄痕が見事に残っているが、刃部はどちらも顕著な使用痕を残さない。

7は石核とする。表裏とも周縁からの求心的な剝離痕で覆われている。勿論石槍などの両面加工石器の未製品である可能性がある。

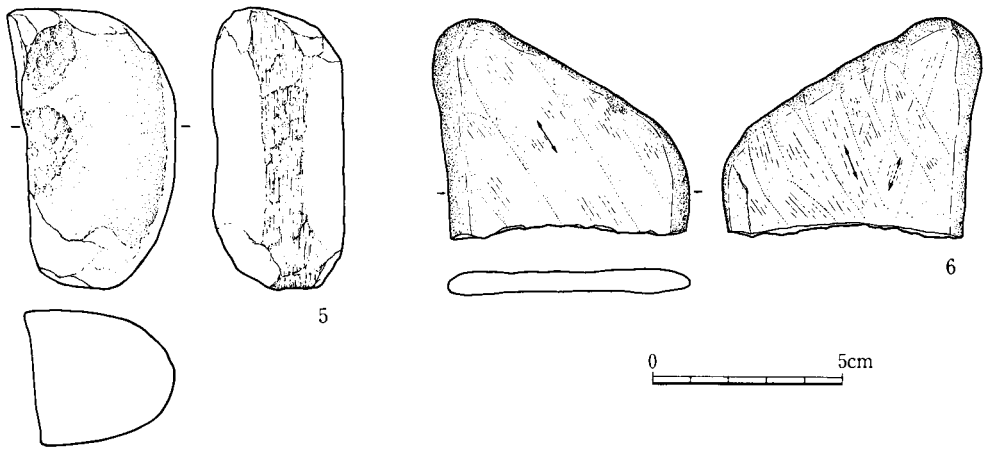
8～12は所謂凹石である。しかし複合機能を有する石器であることは言うまでもない。8は表裏に凹み、上下に敲打痕、左右に磨痕を持つ。9も8に類似するが、側面の磨痕がなく、代わって右側面にも凹みが見られる。10は表裏及び左右側面に凹み、上下に敲打痕というよりき



第147図　池花遺跡出土礫石器（1/2）



第148図　池花南遺跡北半部出土礫石器(1)（1/2）



第149図　池花南遺跡北半部出土礫石器(2)（1/2）

わめて粗い擦痕が認められる。11は砂岩製で有溝砥石としての機能が付加されている。12は上下左右に敲打痕が残される。

13～17は石皿である。完形品はないが、遺存度がきわめて低いと思われる16を除く4点に円孔が認められる。17には4箇所に円孔がある。また他の石皿にも複数存在したことが推定される。この円孔は明らかに回転運動によって形成されたものであるが、石皿としての機能との関係の有無は判然としない。

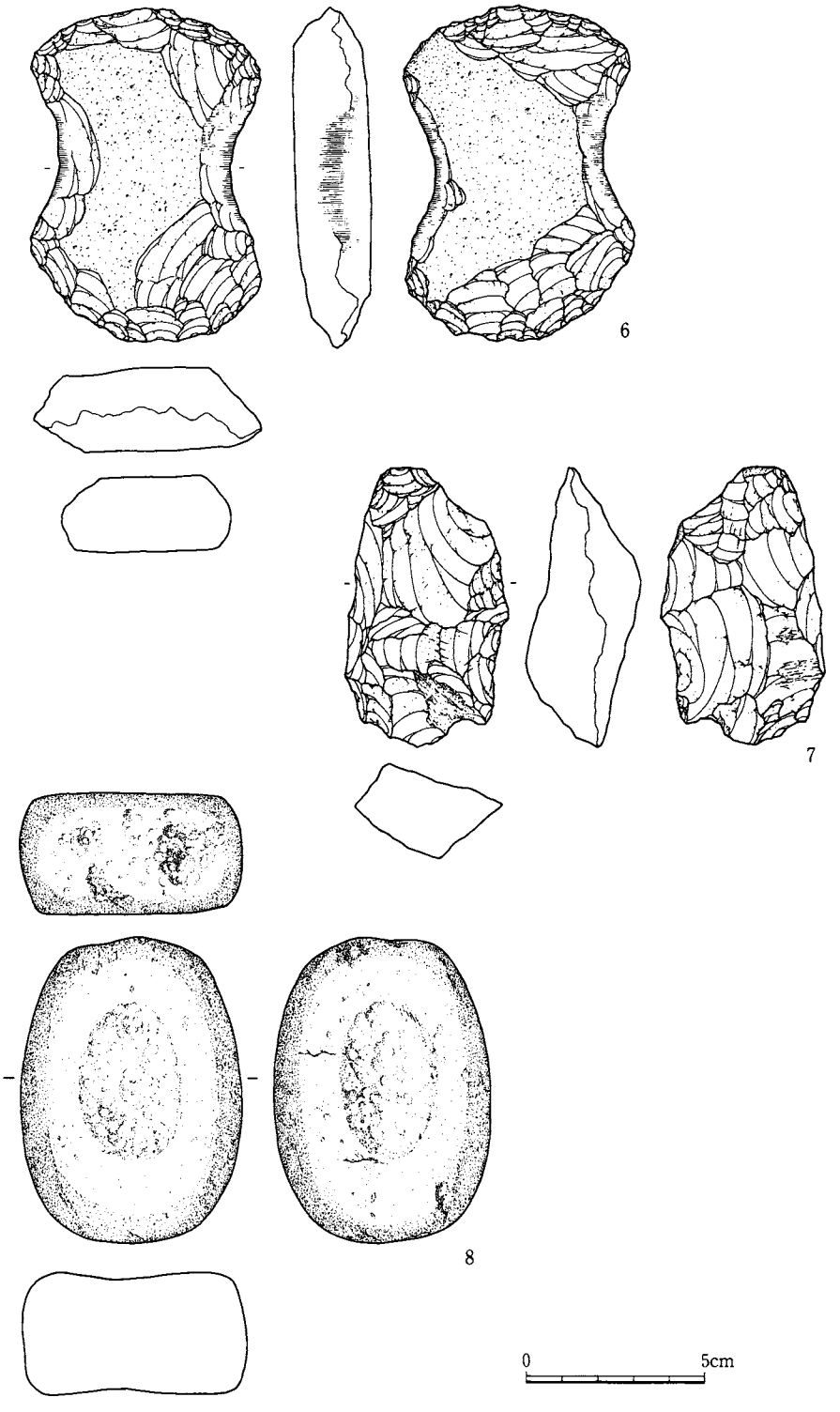
18は大型の礫を素材とするもので、一部に敲打痕が認められるものである。全体に被熱の痕跡が観察される。19～23に円礫を集めた。20、21を敲石、19、22、23を磨石とする。しかし顕著な敲打痕を有する石器でも明らかな磨痕を合わせ持っている。このように複合機能を有する石器が多く、石器の呼称は便宜的なものにならざるを得ない。

24～35は砥石である。粗粒、細粒の差はあるがいずれも砂岩が用いられる。使用痕は溝状になるものはない。ただ使用痕の単位幅については1 cm～2 cmの間に収まっている。

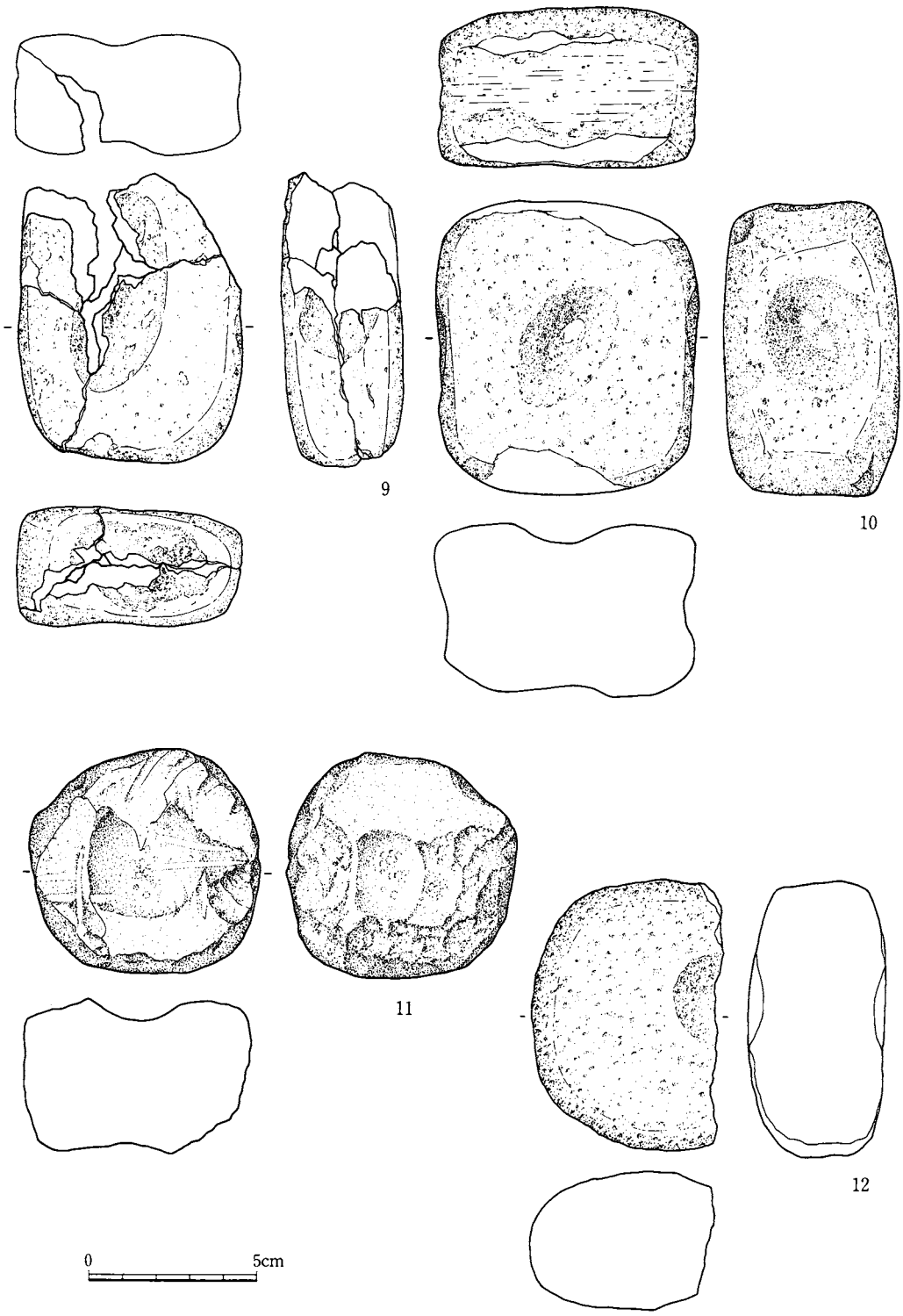
⑧大割遺跡出土礫石器（第158図、図版70－2）

1～3がSI－01出土石器である。1は分銅形の打製石斧で、節理で割れやすい薄い板状の粘板岩を使用している。自明のことであるが、石材、形状とも加撃に弱い。両側縁には着柄痕が顕著に残る。また刃部の使用痕も明瞭で、鈍磨しわずかな光沢を帯びている。2は一見すると単なる礫片であるが、残る表面はきれいな円弧を描いており、巨大な石棒の断片である可能性が強い。3は長身やや偏平な礫である。表面には凹みが見られるが、これは敲打等によって生じたものではなく、全体が被熱痕を帯びていることからしても火熱によって剝落したものと考えることができる。しかしその性格は明らかではない。

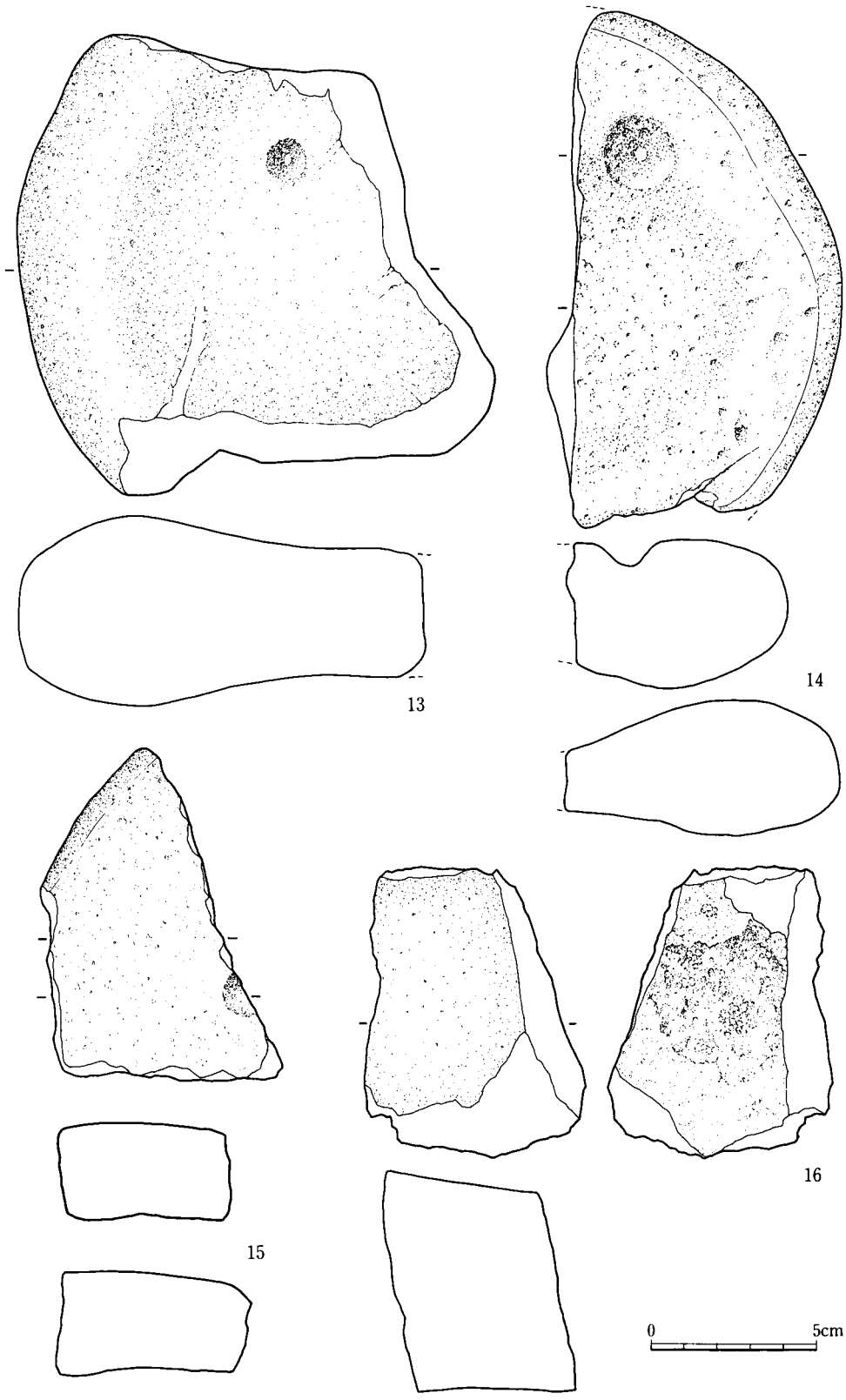
第150図　池花南遺跡南半部出土礫石器(1)（1/2）



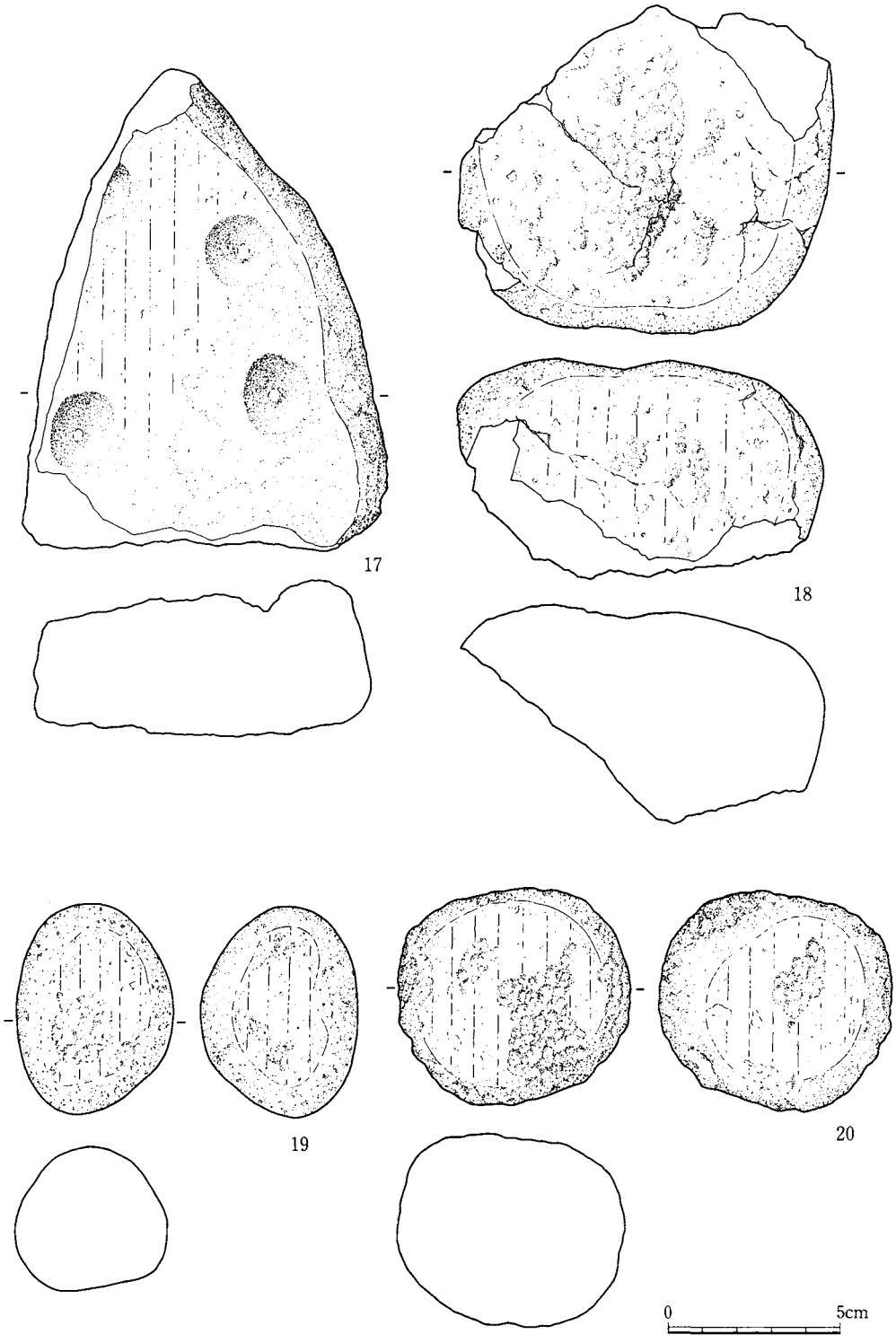
第151図　池花南遺跡南半部出土礫石器(2)（1/2）



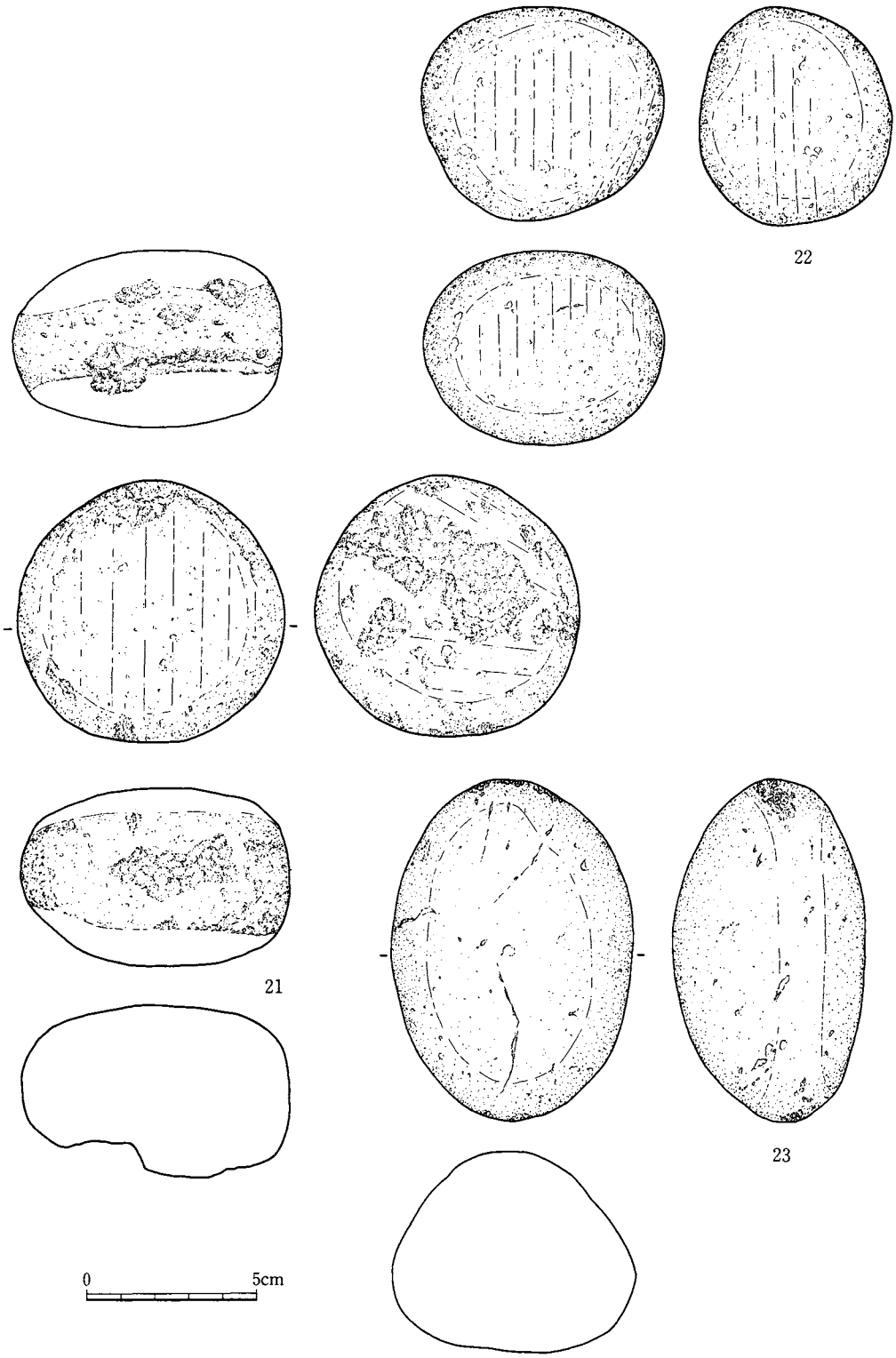
第152図　池花南遺跡南半部出土礫石器(3)（1/2）



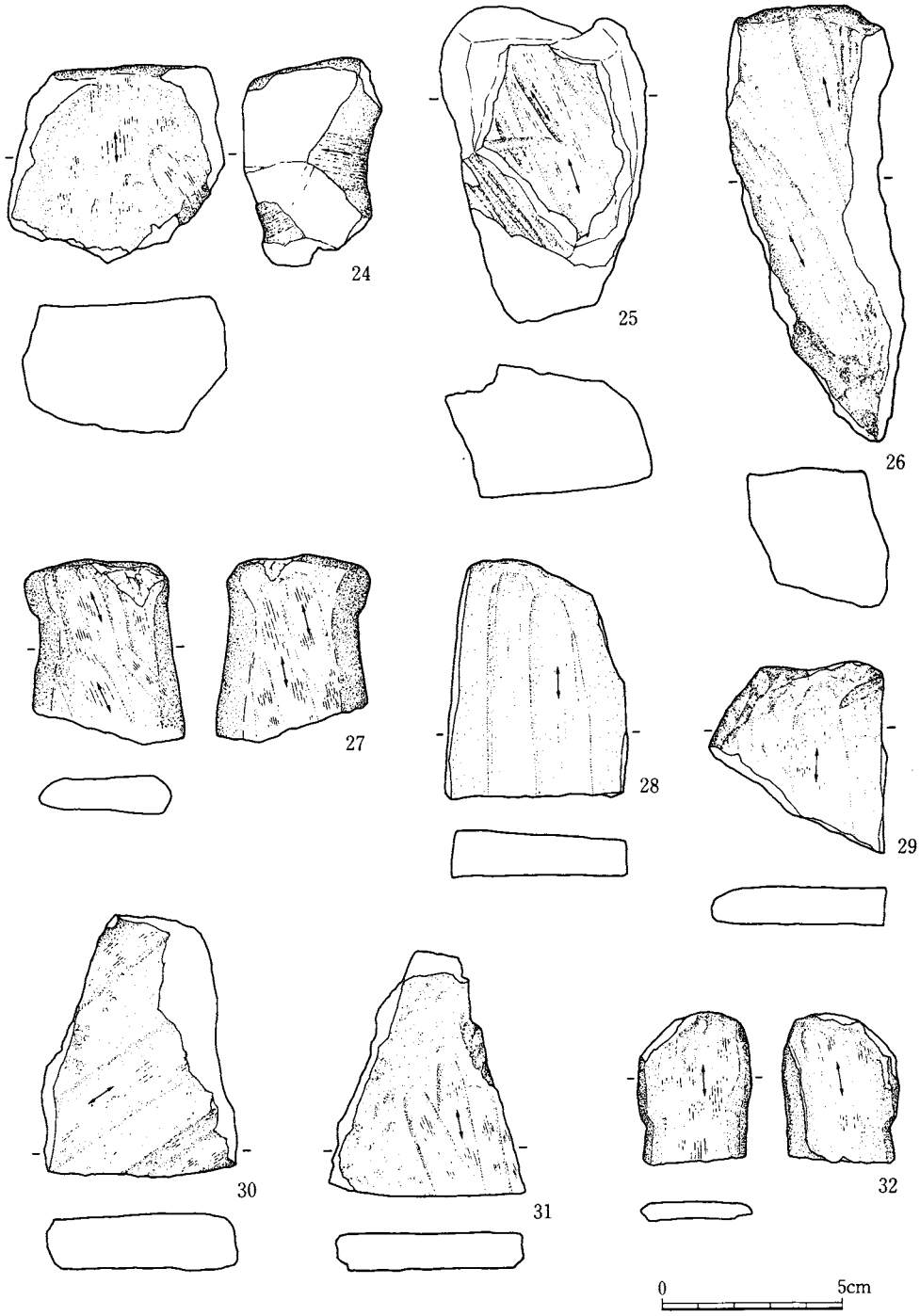
第153図　池花南遺跡南半部出土礫石器(4)（1/2）



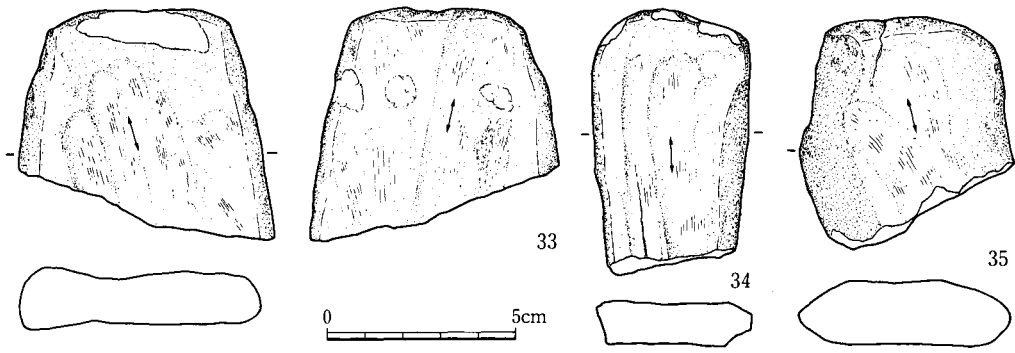
第154図　池花南遺跡南半部出土礫石器(5)（1/2）



第155図　池花南遺跡南半部出土礫石器(6)（1/2）



第156図　池花南遺跡南半部出土礫石器(7)（1/2）



第157図　池花南遺跡南半部出土礫石器(8)（1/2）

第７表　池花遺跡出土礫石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損
1	石皿	D３−46−２	雲母片岩	135.3	111.0	37.4	861.4	○
2	？	D２−46−７	凝灰角礫岩	90.5	81.7	47.3	429.0	○

第８表　池花南遺跡北半部出土礫石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損
1	磨製石斧	G５−08−１	頁岩	41.0	26.8	10.0	18.9	○
2	敲石	G５−04−２	安山岩	103.9	49.9	31.2	214.7	—
3	磨石	G５−07 一括	不明	57.6	52.0	20.8	85.2	—
4	敲石	SX−02−50	安山岩	106.4	66.7	50.0	534.0	—
5	凹石	G５−58−20	砂岩	76.0	40.0	34.7	157.2	○
6	砥石	G５−74−15	砂岩	57.9	67.6	7.5	37.3	○

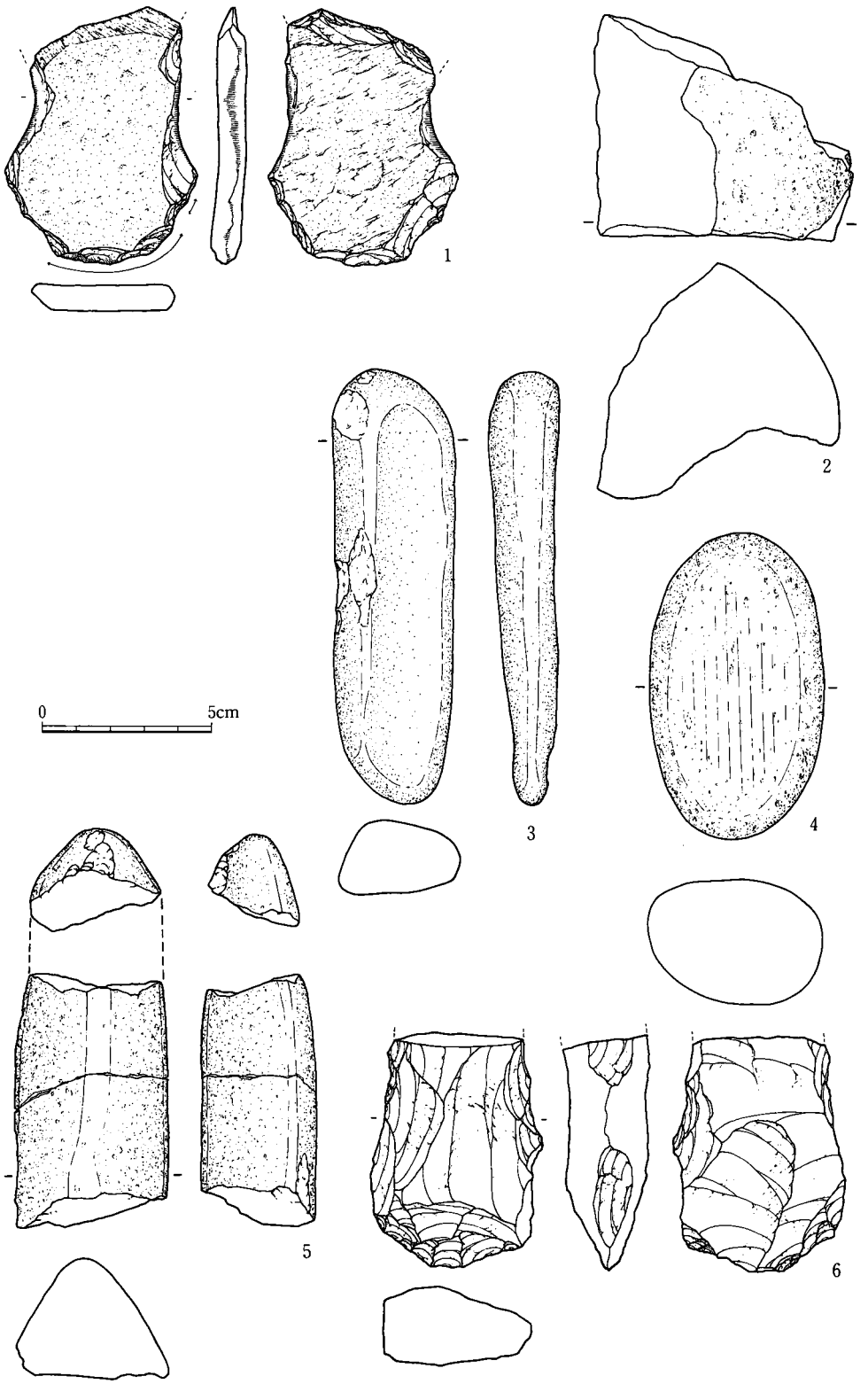
第10表　大割遺跡出土礫石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損
1	打製石斧	SI−01−20	粘板岩	78.1	56.9	9.8	51.2	—
2	石鏃？	SI−01−６	礫岩	65.0	80.4	71.0	350.0	○
3	礫	SI−01−16	砂岩	126.6	37.0	20.2	130.3	—
4	礫	A２−76 一括	安山岩	90.8	52.5	37.3	248.9	—
5 a	石棒	F２−53−５	角閃安山岩	39.4	32.1	21.6	23.3	○
5 b	石棒	F２−63−４ F２−64−４	角閃安山岩	72.6	44.9	33.6	166.5	○
6	打製石斧	B５−60−１	ホルンフェルス	68.6	51.0	24.2	114.0	—

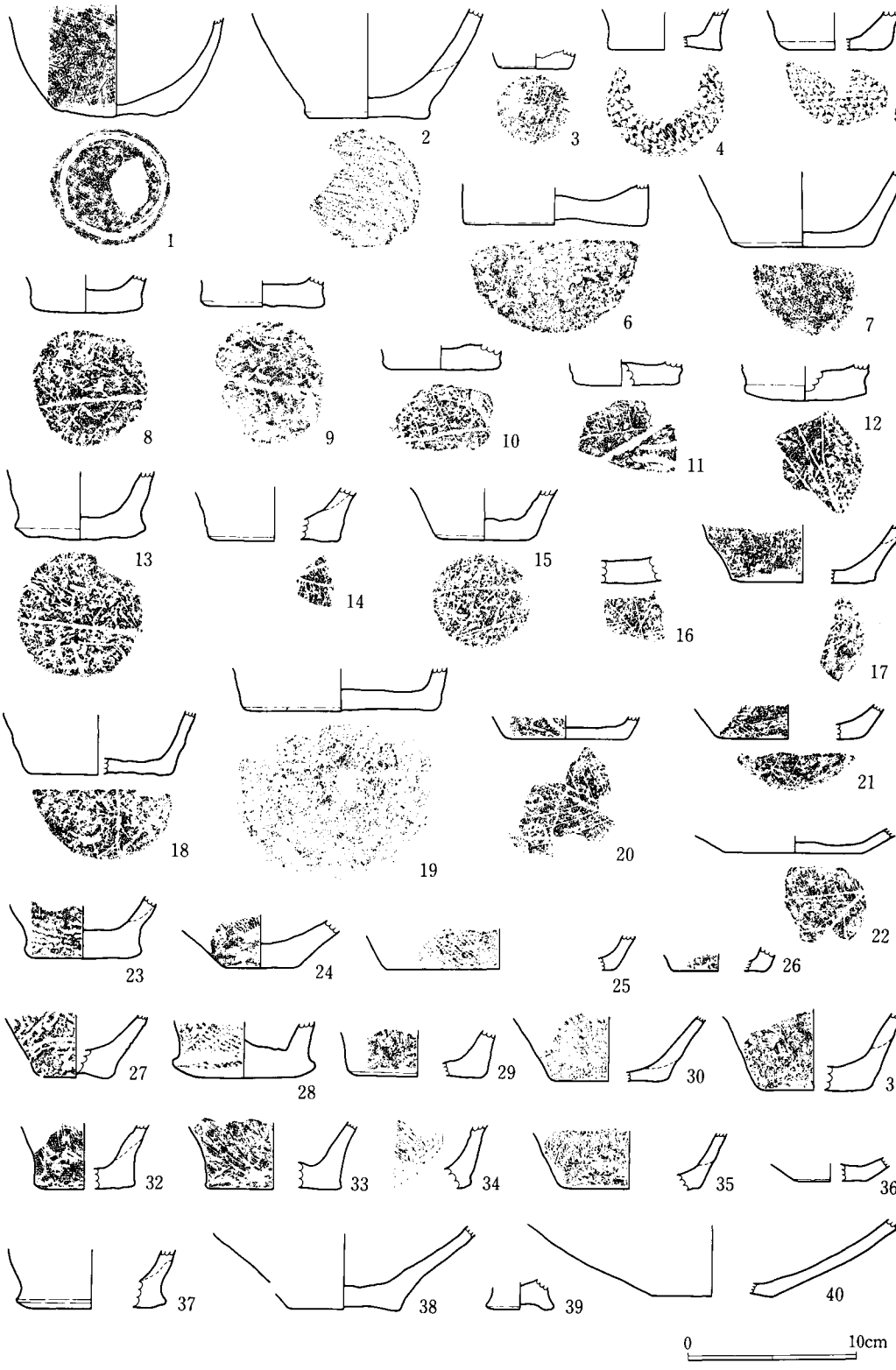
第9表　池花南遺跡南半部出土礫石器計測表

挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	欠損
1	磨製石斧	F7－25－34	閃緑岩	74.7	59.4	40.4	230.3	○
2	磨製石斧	G7－23－130	石英斑岩	41.6	34.7	22.0	46.7	○
3	磨製石斧	F7－79－30	緑泥片岩	69.2	44.0	29.3	144.8	○
4	磨製石斧	G7－42表土	ホルンフェルス	77.0	41.1	28.9	132.2	○
5	磨製石斧	G7－31－19	蛇紋岩	64.9	40.4	19.6	76.0	○
6	打製石斧	G7－85表土	砂岩	94.8	64.1	22.1	188.7	－
7	石核	G7－52－57	粘板岩	77.9	44.9	27.0	83.5	－
8	凹石	G7－64－98	砂岩	83.4	62.4	32.4	313.7	－
9	凹石	G7－77－25, 29, 33, 34, 200, 233	流紋岩	85.6	67.8	34.8	253.2	○
10	凹石	G7－55－324	砂岩	85.1	77.1	49.4	562.0	－
11	凹石	G7－94－3	砂岩	68.0	65.1	45.0	257.2	－
12	凹石	G7－66－146	砂岩	79.6	56.0	40.6	286.7	○
13	石皿	H7－表採	閃緑岩	145.0	138.0	55.7	1615.1	○
14	石皿	G7－71－632	石英斑岩	154.0	89.0	43.4	795.0	○
15	石皿	G7－55－405	安山岩	101.2	69.4	31.1	223.6	○
16	石皿	G7－70－40	不明	85.0	57.5	73.5	547.0	○
17	石皿	G7－76－180	雲母片岩	140.0	106.5	49.8	934.0	○
18	敲石？	F7－76－43	石英斑岩	108.0	98.0	66.4	734.0	○
19	磨石	G7－91－16	石英斑岩	60.9	44.8	41.0	160.0	－
20	敲石	G7－76－205	安山岩	68.2	60.9	57.0	315.0	－
21	敲石	G7－39－46	安山岩	79.2	77.1	51.0	449.0	－
22	磨石	G7－32－39	安山岩	71.5	64.9	56.0	345.0	－
23	磨石	SD－01－2	チャート	99.3	71.8	56.0	544.0	－
24	砥石	SX－01－4	砂岩	59.0	53.5	38.5	133.2	○
25	砥石	G7－76－197	砂岩	56.8	86.9	33.9	218.0	○
26	砥石	G7－56－653	砂岩	122.9	49.1	38.9	250.4	○
27	砥石	G7－42－1004	砂岩	51.5	40.4	12.7	34.2	○
28	砥石	G7－82－64	砂岩	65.9	53.6	14.6	62.2	○
29	砥石	G7－62－161	砂岩	51.9	48.4	10.7	35.2	○
30	砥石	SX－01－5	砂岩	73.9	57.5	16.0	84.9	○
31	砥石	G7－62－72	砂岩	67.3	55.2	10.7	48.5	○
32	砥石	G7－23－39	砂岩	41.9	31.9	5.4	11.3	○
33	砥石	G7－38－32	砂岩	64.5	62.8	16.6	97.3	○
34	砥石	F7－28－10	砂岩	68.8	41.7	11.0	57.0	○
35	砥石	G7－51－91	砂岩	60.7	55.3	17.0	67.6	○

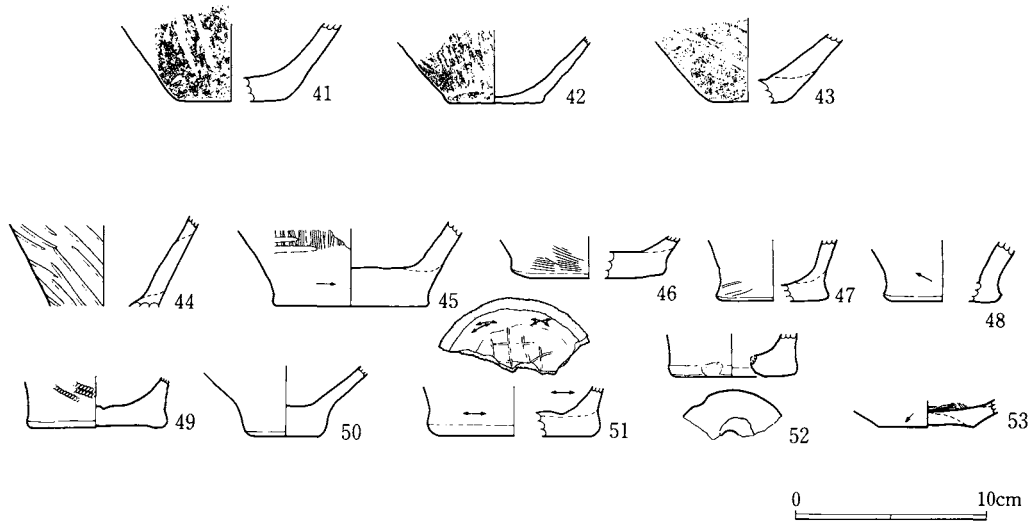
4は整った長楕円形を呈する礫である。多孔質安山岩で風化が進んでいるため明瞭ではないが、表裏に僅かに磨痕が観察される。5は断面三角形を呈する石棒または石剣である。やはり断片的にしか遺存しない。6は短冊状の打製石斧である。1よりもかなり厚みがあり、強靱な石材を使用している。ただ風化が進み、着柄痕や使用痕は明瞭でない。



第158図　大割遺跡出土礫石器（1/2）



第159図　土器底部(1)（1/4）



第160図　土器底部(2)（1/4）

⑨土器底部（第159図～第160図、図版66）

各遺跡で多数検出された土器底部のうち、池花南遺跡、池花遺跡出土で底面に圧痕があるもの、何らかの施文があるものなどを選んで一括して示す。すべて縄文時代後期から晩期そして弥生時代の所産である。１～43が池花南遺跡、44～53が池花遺跡の出土。

１は時期の確定はできないが、底面外周に沈線が１条巡るという特徴的なものである。体部外面には縄文（ＬＲ）が施文される。２、３は篦による調整痕が非常に顕著に残る。

４～６は網代圧痕を残すもの、７は布圧痕を残すものである。７については須和田式土器の底部である可能性が強い。

８～22は木葉圧痕を残すものである。外面に文様が認められるものがあり、20には沈線が、17、21には細かい縄文が施文されている。

23～35は外面に文様が認められる例を集めた。23～26、28、35は縄文、27は沈線、29～34は条痕が施される。これらは縄文晩期後葉から弥生時代に比定されるか。36～40はとくに文様、圧痕は残さないが、36、38、40は浅鉢の底部であり、39は小型土器の底部で底面が目立って凹むものである。37は23や28と同様に底部円盤が胴より張り出す形状を持っている。41～43は条線が認められ、底部の形状からしても縄文後期末葉の可能性が強いであろう。

44～53に池花遺跡の弥生時代中期の土器底部の可能性が強いものを集めた。44は一本単位の条線が施される。45～47は条痕が、49は縄文が施文されている。特徴的なのは51で内面に格子状をなす篦記号風のごく浅い沈線が認められる。52は甕底部である。中央に焼成前の穿孔がなされている。なお外面に、遺存部では１箇所の浅い凹みが見られる。53は浅鉢か。内面に条線が施されている。

11. 縄文時代及び時期不明の遺構

①概観

ここでは帰属時期が決定できない遺構または細かい時期比定ができない縄文時代の遺構を扱う。遺構の種別としては所謂陥穴状土坑と性格不明の土坑がある。

陥穴状土坑は池花遺跡で1基、池花南遺跡で1基、大割遺跡で4基が検出されている。大割遺跡で3基が比較的近い位置関係にあるが、集中して分布することはない。

性格不明の土坑については焼土を混入するものが分散的に検出されている他、縄文時代晩期後葉や弥生時代中期前半の遺物が広範に分布した池花南遺跡南半部で覆土に黒色土を含むことで共通する土坑がいくつか見られ、殊に縄文時代晩期の遺物が黒色土層中に多く含まれていたことからあるいは縄文晩期後葉の遺構の可能性がある。

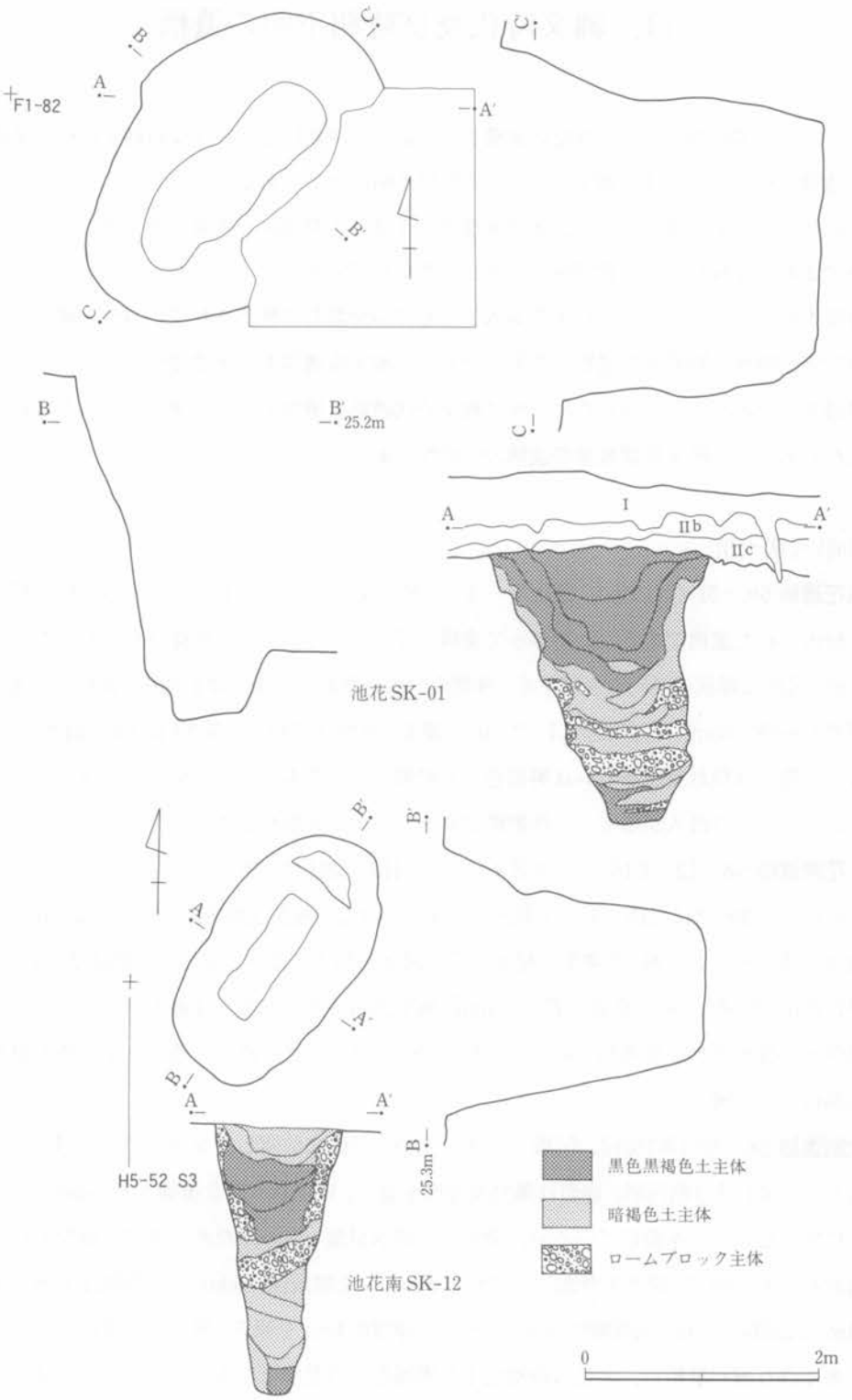
②陥穴状土坑

池花遺跡 SK－01（第161図、図版4－3）　F1－72～82区に位置し、先土器時代の確認調査中に検出された遺構である。したがって遺構上面プランは完全には把握されなかった。上端は楕円形、底面は幅狭の長円形を呈する。確認面の最高位からの深さは2.82m、調査時に遺存した範囲での長径3.05m、推定短径2.1～2.2m を測る。底面は平坦で、長さ約2.0m、最大幅約0.7mとなる。覆土は概ね黒色あるいは黒褐色土と暗褐色土を基本とし、下位になるほどローム粒、ロームブロックの混入が増え、一部壁際にロームブロック層が認められた。

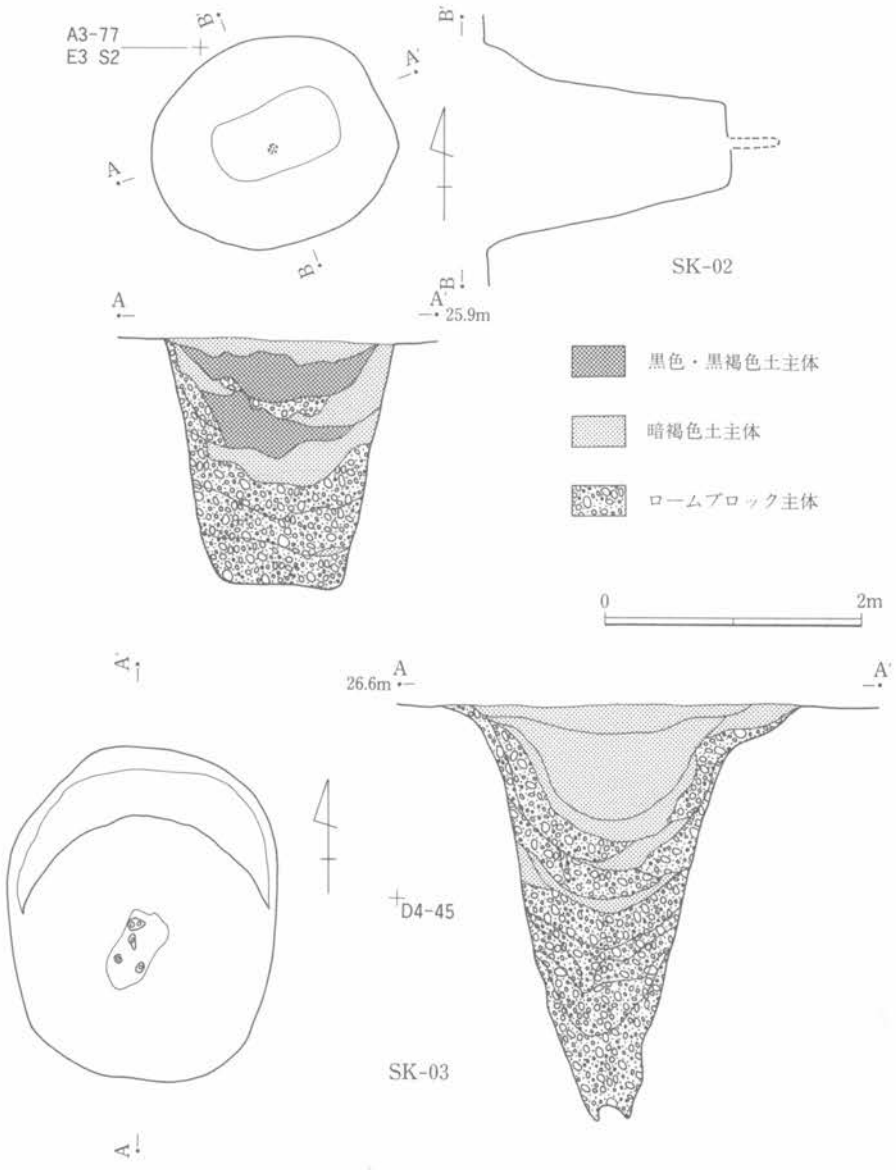
池花南遺跡 SK－12（第161図、図版4－2）　H5－52区に位置し、ソフトローム層上面で確認された。上端形状は長楕円形乃至隅丸長方形を呈する。池花遺跡 SK－01と同様、底面は平坦で幅狭の長方形であるが、北東側の壁面上位に段状を呈する箇所がある。上端長径2.31m、上端短径1.27m、最深2.25m、底面の長さ1.10m、幅0.35m を測る。覆土は最も下位にしまりのない黒褐色土、覆土下半は暗褐色土にローム粒、ロームブロックを混じ、覆土上半は概ね暗褐色土と黒褐色土の互層となる。

大割遺跡 SK－02（第162図、図版3－3）　A3－77区に位置し、ソフトローム層上面で確認された。上端形状は楕円形、底面は隅丸長方形を呈し、いずれも前2遺構より長幅比が小さい。中央に狭小なピットを設けているが、調査時に涌水が激しかったため、その正確な形状の実測は断念せざるを得ず、深さを計測したに留どまった。上端長径1.90m、上端短径1.64m、深度は1.91m、底面長1.00m、底面幅0.58m、小ピット深度0.40m を測る。覆土の下位にロームブロックを多く含む層が堆積し、上位は暗褐色土と黒褐色土の互層となる。また下位に一部しまりのない黒褐色土が見られた。

大割遺跡 SK－03（第162図、図版3－5、6）　D4－34～35区に位置し、やはりソフトロー



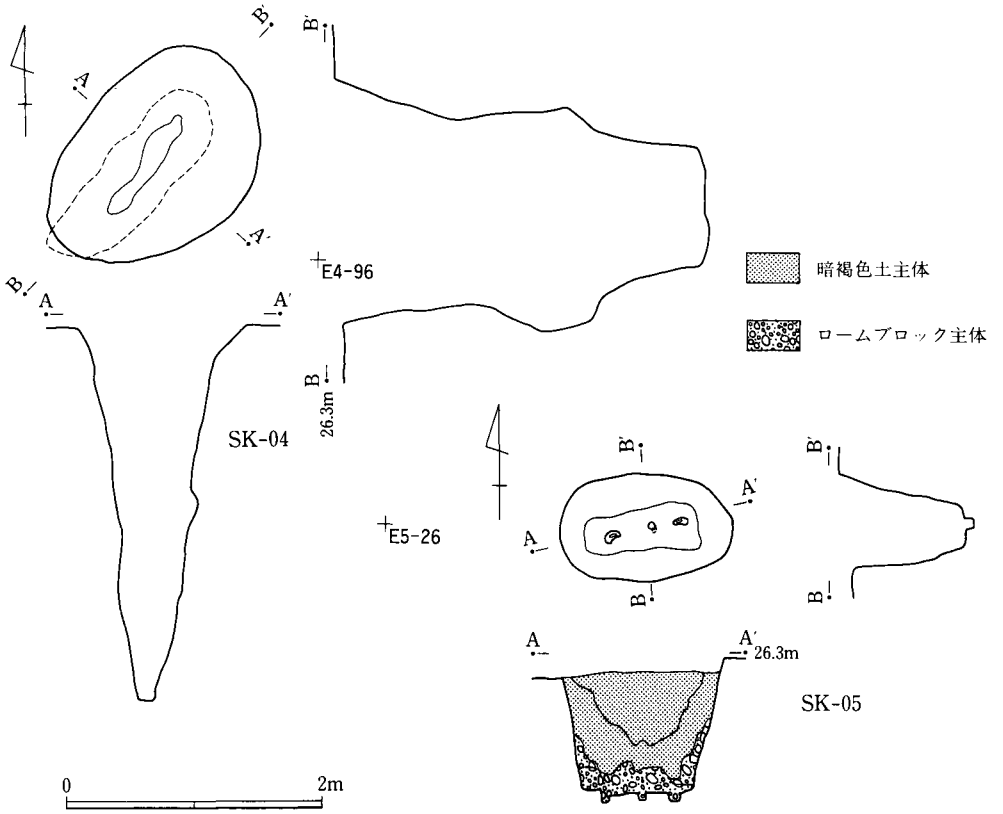
第161図　池花遺跡 SK-01　池花南遺跡 SK-12（1/60）



第162図　大割遺跡 SK-02・SK-03（1/60）

ム層上面で確認された。上端形状は楕円形、底面形状はきわめて狭い楕円形を呈する。また北側壁面上位はやや段状となっている。底面に狭小なピットを4箇所に設ける。上端長径2.59m、上端短径2.10m、最深3.10m、底面長径0.65m、底面短径0.32m、小ピットの深度は10cm前後を測る。覆土は暗褐色土を主体とし、下位になる程ローム粒、ロームブロックの混入が増える。

大割遺跡 SK－04（第163図、図版3－4）　E4－85区に位置する。検出面は他の陥穴状土坑と同様である。上端形状は楕円形、底面は比較的平坦で非常に幅が狭い。また壁面中位で長軸方向にやや膨らむ。上端長径1.93m、上端短径1.38m、最深2.96m、底面長径0.94m、底面の幅



第163図　大割遺跡 SK-04・SK-05（1/60）

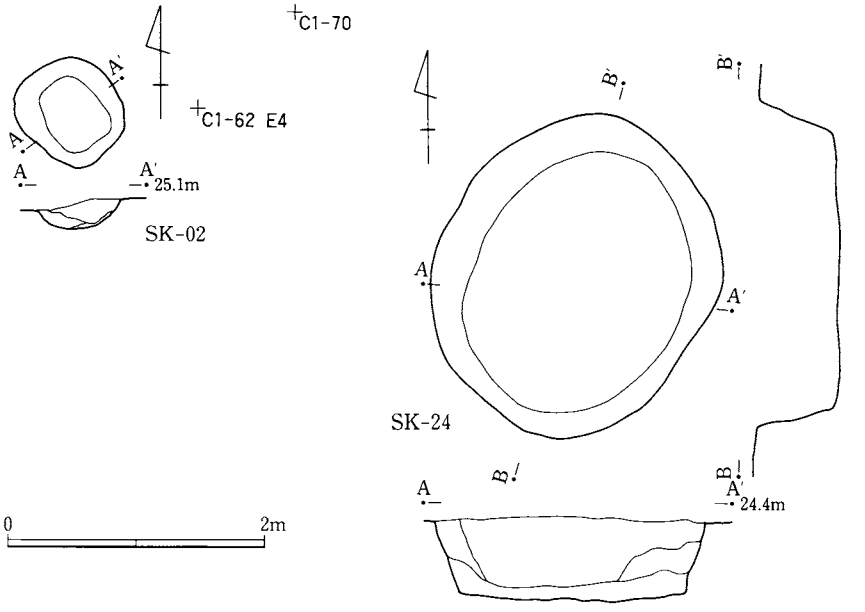
は0.1～0.2m を測る。覆土の状況は大割遺跡 SK－03と同様であった。

大割遺跡 SK－05（第163図、図版４－１）　E5－16～26区に位置する。検出面はソフトローム層上面であったが、掘り込み面はそれよりやや上位であったようである。上端形状は長楕円形、底面はほぼ長方形を呈し、底面には３箇所の小ピットが長軸上に並ぶ。上端長径1.36m、上端短径0.88m、最深0.94m、底面長0.88m、底面最大幅0.36m、小ピットの深度は10cm 未満である。覆土は最下位にロームブロックを多量に含むしまりのない土が堆積し、それより上位は暗褐色土を基本とする。

③性格不明の土坑

池花遺跡 SK－02（第164図、図版６－５）　C1－52～62区に位置する。略円形プランの小規模な土坑である。掘り込みは浅い椀状を呈する。長径0.84m、短径0.77m、最深0.23m を測る。覆土は黒褐色土～暗褐色土。

池花遺跡 SK－24（第164図、図版６－６）　前掲 SK－02に近接し、C1－70区に位置する。やはり円形に近いプランを持つが、底面は概ね平坦で、立ち上がりの明確な急斜な壁面を有する。



第164図　池花遺跡 SK-02, SK-24（1/60）

長径2.56m、短径2.16m、最深0.64m を測る。覆土は底面付近にローム粒、ロームブロックが主体となる層があり、上位には黒褐色土が堆積する。

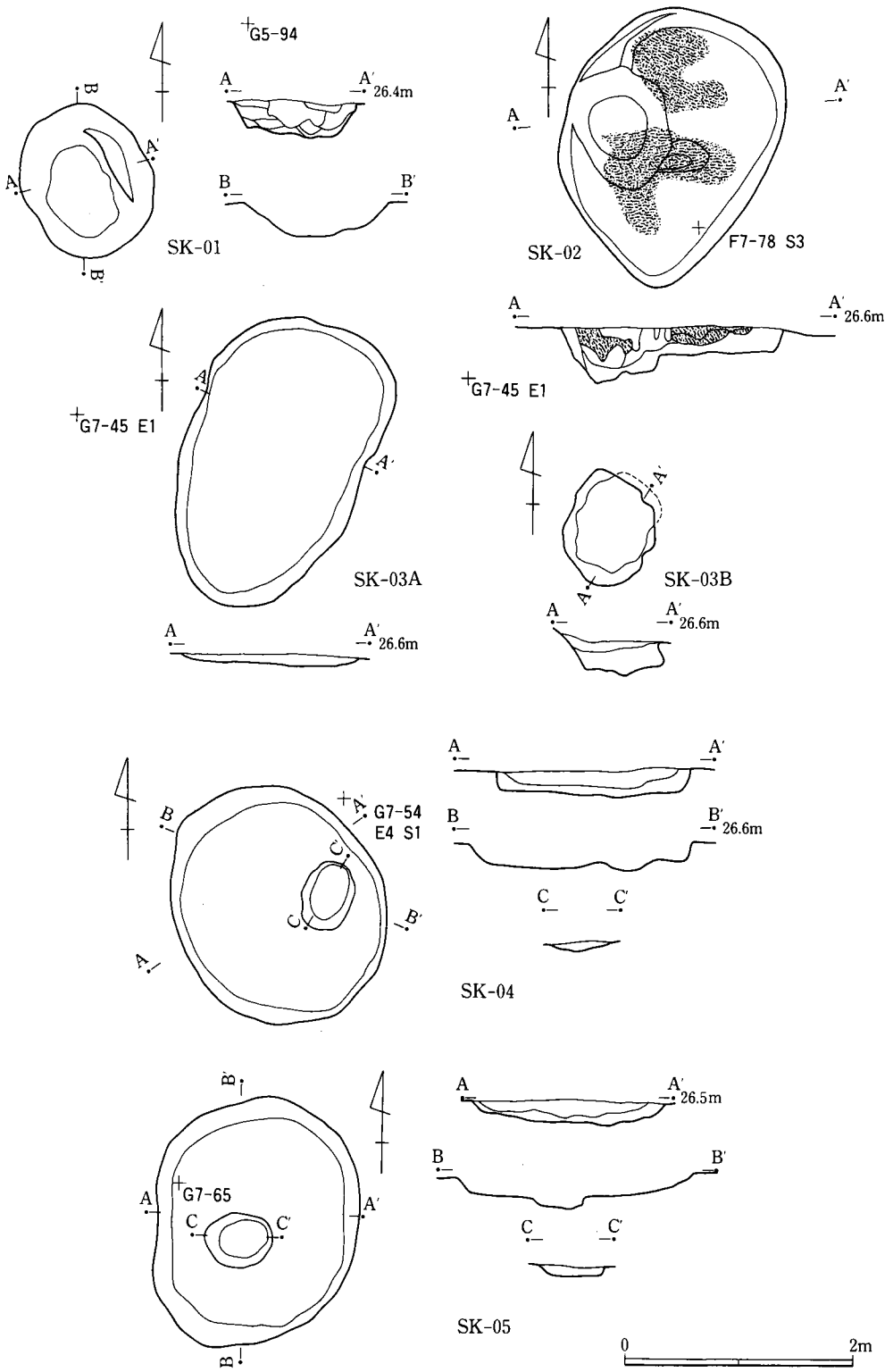
上記池花遺跡の２基の土坑は、弥生時代初頭に位置するかと考えられる土器を主体的に出土したＣ１区で検出されたものであるが、明確に伴う遺物はなく、時期判定の手段はない。

池花南遺跡 SK－01（第165図、図版５－１）　G5－93区に位置する。楕円形プランの小規模土坑である。ほぼ椀状の掘り込みであるが、東側に小さなテラス面を持つと言えなくはない。長径1.34m、短径1.15m、最深0.35m を測る。中心部に焼土ブロックが見られたが、底面に焼けた痕跡は認められなかった。

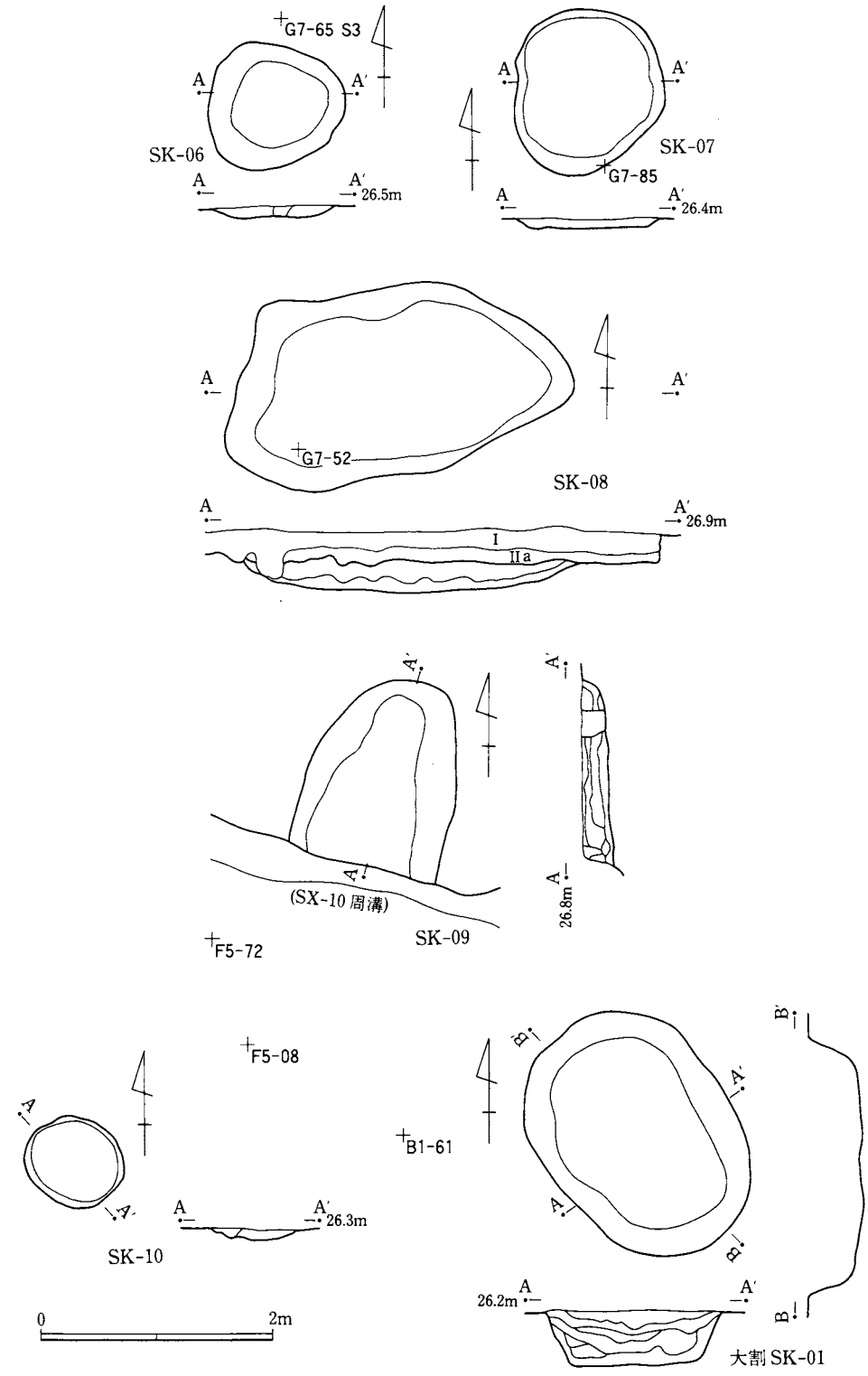
池花南遺跡 SK－02（第165図、図版５－２）　F7－77～78区に位置する。略楕円形を呈する土坑である。基本的に底面は平坦で皿状の土坑であるが、西壁に接するように一段深い円坑が検出された。中央付近には広く焼土粒、焼土ブロックが認められた。長径2.50m、短径1.86m、最深0.47m、平坦面の深さ0.25m を測る。

池花南遺跡 SK－03A（第165図、図版５－３）　G7－35～45区に位置する。浅い不整楕円形の土坑である。底面は比較的平坦できわめて浅い。長径2.61m、短径1.64m、最深0.11m を測る。覆土は黒褐色～暗褐色土。土器片少量が出土しているが、時期判定できるものが存在しない。

池花南遺跡 SK－03B（第165図、図版５－４）　SK－03A 底面下に検出された小規模土坑である。ほぼ楕円形を呈するが壁面底面ともに不整。一部オーバーハングする。上端長径1.02m、短径0.80m、最深0.33m を測る。覆土は暗褐色土であるが、焼土粒や焼土ブロックを混入する。



第165図　池花南遺跡 SK-01～SK-05（1/60）



第166図　池花南遺跡 SK-06～SK-10，大割遺跡 SK-01（1/60）

池花南遺跡 SK－04（第165図、図版５－５）　G7－54区に位置する。楕円形を呈する土坑。底面はほぼ平坦で浅く、東寄りに浅い凹みを持つ。長径2.17m、短径1.83m、最深0.22m、内部の凹み長径0.61m、短径0.44m、最深0.09m を測る。覆土は上位に黒褐色土、下位に暗褐色土、内部の凹みに焼土粒、木炭粒を含む。土器片が出土している。それが明確に時期を示すかどうかは判らないとしても、縄文晩期の所産である可能性が強い。

池花南遺跡 SK－05（第165図、図版５－６）　G7－55～65区に位置する。楕円形を呈する土坑である。中央やや西寄りに浅い凹みを持ち、前記 SK－04と酷似した形状である。外形長径2.23m、短径1.77m、最深0.20m、内部の凹み長径0.58m、短径0.47m、最深0.11m を測る。また覆土も前記 SK－04と全く同一である。多くの土器片が出土しているが、遺構内外での粗密の差はなく、したがって遺物の出土状況はあくまで包含層の断片でしかない。しかしやはり縄文晩期の所産である可能性は濃密であると言える。

池花南遺跡 SK－06（第166図、図版６－１）　G7－64～65区に位置する。不整円形の小規模皿状土坑である。長径1.20m、短径1.10m、最深0.11m を測る。覆土は黒褐色土。

池花南遺跡 SK－07（第166図、図版６－２）　G7－74～75区に位置する。やはり不整円形の小規模皿状土坑。長径1.44m、短径1.33m、最深0.08m を測る。覆土は黒褐色土。

池花南遺跡 SK－08（第166図、図版６－３）　G7－41～52区に位置する。不整楕円形の皿状土壙である。長径3.07m、短径1.66m、最深0.28m を測る。覆土は黒色～黒褐色土。

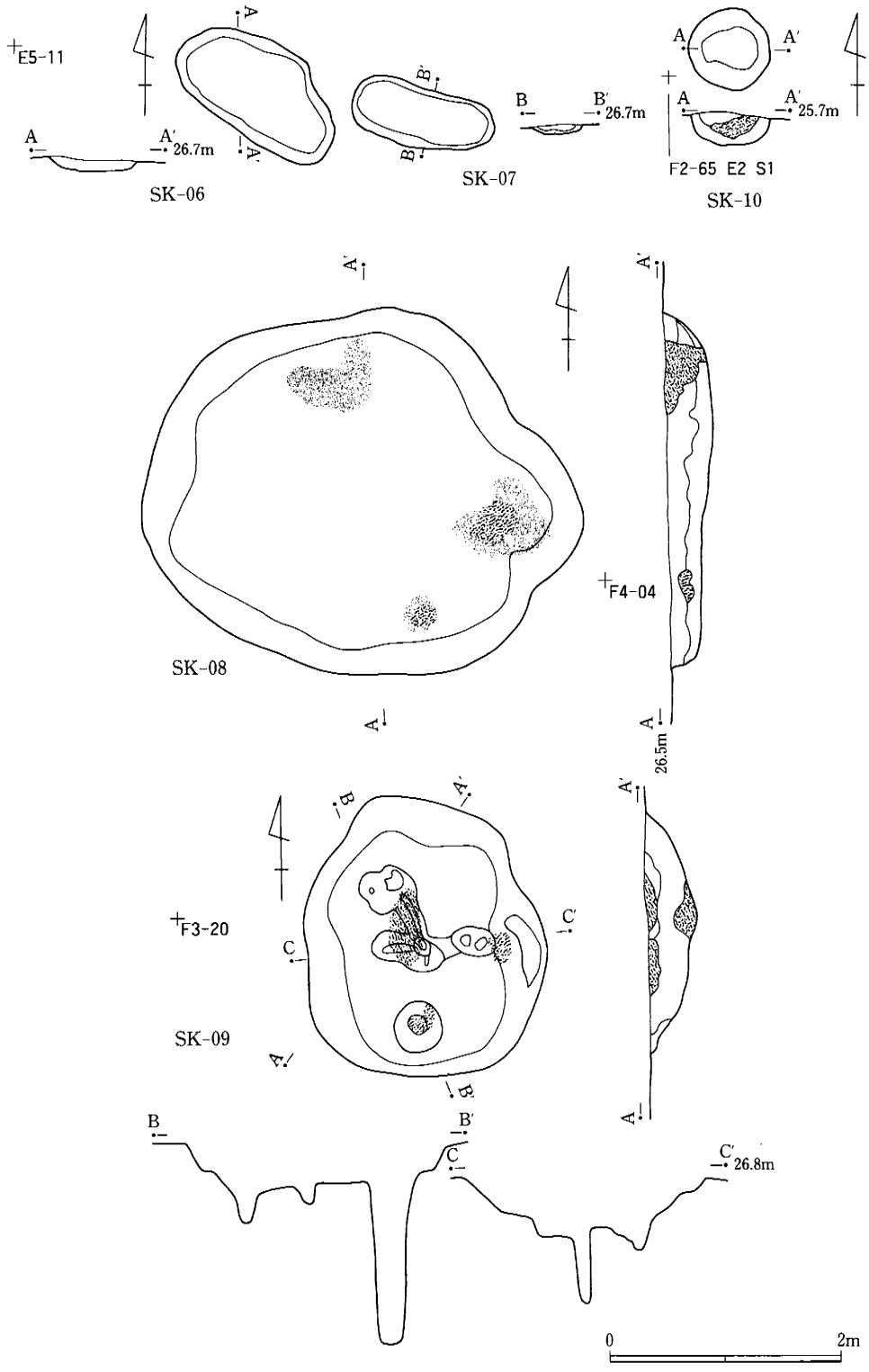
池花南遺跡 SK－09（第166図、図版６－４）　F5－62区に位置する。古墳 SX－10の周溝内側で検出され、周溝によって半ばを破壊されたものである。本来長楕円形を呈する土坑であったらしい。底面は比較的平坦である。長軸方向遺存長1.65m、遺存部幅1.32m、最深0.27m を測る。覆土は暗褐色～黒褐色土を基本とするが、最上層を除き多量の焼土の混入を見る。

池花南遺跡 SK－10（第166図）　F5－07区に位置する。ほぼ円形の小規模皿状土坑である。長径0.84m、短径0.76m、最深0.09m を測る。覆土は黒褐色土を基本とし、焼土を混入する。

上記池花南遺跡検出の土坑群のうち、G７区検出の SK－03～08はその覆土、形状の類似性から同時期に帰属させうる可能性があり、また性格も似たものであろう。

大割遺跡 SK－01（第166図）　B1－51～61区に位置する。楕円形の整った形状を示す土坑で、平坦な底面を有する。壁面も整って急斜であり、土壙墓の可能性を否定できない。覆土は暗褐色～黒褐色土を基本とし、底面付近に壁面の流れであるローム土が堆積しているが、土層断面からは遺構の性格を示す材料はない。長径2.20m、短径1.62m、最深0.48m を測る。

大割遺跡 SK－06・SK－07（第167図、図版４－４）　E5－11区に位置する。ともに不整長円形を呈する浅い土坑である。両者はきわめて近接して所在した。覆土には焼土及び木炭粒が目立って含まれることでも両者は共通している。しかし焼床面は見られない。SX－06は長径1.56m、短径0.83m、最深0.10m、一方 SX－07は長径1.26m、短径0.53m、最深0.08m を測る。付



第167図　大割遺跡 SK-06～SK-10 (1/60)

近には称名寺期及び加曽利B期の包含層が存在したが、この2遺構からは遺物が出土しておらず、時期決定の手段はない。

大割遺跡 SK－08（第167図、図版4－5）　F3－93～F4－03区に位置する。やや大型の、竪穴遺構とでも称すべき土坑である。底面は概ね平坦であるが、一部やや凹められている。3箇所に濃密な焼土ブロックが認められた。長径3.83m、短径3.14m、底面は0.35m前後の深さを持つが、最深は0.52mを測る。

大割遺跡 SK－09（第167図、図版4－6）　F3－10～20区に位置する。やや不整楕円形の土坑である。壁面は緩斜で底面は中央がやや下がり気味。前記SK－08と同様、顕著な焼土ブロックが認められ、覆土中にも焼土粒が多く含まれるが、焼土ブロック自体は底面からかなり浮いた状態にあり、火床と思われるものも存在しない。中央と南壁際に深く垂直に掘り込まれたピットが検出され、また浅いピットや溝状の掘り込みが縦横に交錯する。しかしその性格は不明と言わざるをえない。長径2.51m、短径2.15m、底面最深0.37m、最も深い南側のピットの深さは底面から1.41mを測る。

大割遺跡 SK－10（第167図）　F2－65区に位置する。略円形の小規模椀状土坑である。覆土の全体に焼土を含むが、殊にその中位は焼土ブロックを主体としている。前記各遺構と同じく火床面はない。径0.68～0.73m、最深0.27mを測る。

補論１．縄文時代後晩期における四街道市北部遺跡群の動態

①四街道市北部の遺跡群

内黒田遺跡群とその東側に展開する鹿島川低地に至るまでの台地上には、近年調査が進んだからでもあるが、縄文時代の遺跡が広範囲に存在することが知られている。具体的には内黒田遺跡群、千代田遺跡群、物井地区遺跡群であり、その中核的位置には八木原貝塚が所在する。また縄文時代の中でも特に後期から晩期にかけての遺跡は各期に亙って存在し、個別の遺跡の存続期間は短くとも、遺跡群総体で見れば全く途絶することはないと言って過言ではない。しかもある時期に多数の遺跡が並立するのではなく、それぞれの時期には中心的な遺跡が認められる。従ってこの地域はある一つの集団の領域であり、その中で移動を繰り返した結果として遺跡群が形成されたと考えられる。無論この地域の考古学的調査は現在も続行中であり、今後さらに新しい知見が加えられていくであろうが、ここで今後の叩き台として現時点で把握される遺跡群の動態をまとめてみるのも無意味ではないだろう。時期は縄文中期末以降に絞る。

②各遺跡の概観

まずそれぞれの遺跡で遺構が検出されるか、またはまとまった遺物包含層が形成されている時期を通観しておく。

池花遺跡　遺構は検出されていない。まとまりのある包含層としては、加曽利Ｂ３期、安行3a 期、荒海（新）期、弥生時代初頭、弥生時代中期前半に形成されている。ただ加曽利Ｂ式土器についてはＢ３式土器を主体とするものの、中にかなり古相を示す土器も混ずる。なお弥生時代の２時期については他に例が乏しい土器群であるため、編年的位置付けが難しい。

池花南遺跡　称名寺式土器、堀之内式土器が点々と検出されたが、まとまりのある包含層としてはまず加曽利Ｂ２（古）期に成立して大規模な展開を見せるものがある。加曽利Ｂ３式土器は皆無であるが、再び曽谷期に占地されて安行１期へと続き、千網期、須和田期にも大規模包含層が形成されている。加曽利Ｂ２期には埋甕があり、また千網期の可能性がある土坑群が検出されている。

大割遺跡　まず称名寺１期に包含層が形成される。これには住居跡が伴っている。この住居跡の存在する地点が最も集中度が高く遺物量も多いが、遺跡全体に称名寺式土器が数個体ずつ点在した。次に加曽利Ｂ２期にも包含層が形成されるが、称名寺期の地点をほぼ踏襲していると言ってよい。

千代田遺跡群Ⅰ区　内黒田遺跡群の対岸の北寄り。加曽利Ｅ３期の住居跡が検出されているが、後期には加曽利Ｂ１式土器が断片的に出土しただけである。

千代田遺跡群Ⅱ区　池花遺跡、池花南遺跡の対岸に相当する。やはり加曽利Ｅ３期の集落跡

が検出されている。後期以降の遺構、遺物は全く報告されていない。加曽利E期については、内黒田遺跡群でも各遺跡でE I～E III式土器が少量ずつ出土している。

千代田遺跡群III区　縄文時代の遺構は検出されていない。土器は量的には多くないが、加曽利EIV期、加曽利B 1～2期、曽谷期、安行1期のものが出土している。

千代田遺跡群IV区　八木原貝塚と同一台地上に所在した遺跡で、一連のものと考えてよい。中期末葉から後期前葉、後期後葉の多くの遺構が確認されており、継続的な性格を持つ遺跡と言うことができる。加曽利EIV期については住居跡2棟と小竪穴5基、称名寺期については住居跡2棟と集石遺構1基、堀之内期については住居跡1棟が検出された。後期後葉になると一部加曽利B 3期から曽谷期、安行1期の多数の小竪穴群がある。住居跡は安行1期のものが2棟、安行2期のものが1棟が検出されているが、小竪穴群はむしろ曽谷期のものが多く、曽谷期の居住空間もこの付近に存在したであろう。他の時期の遺構、遺物は稀薄で、加曽利B 1期の小竪穴が1基確認された以外は、加曽利B 2式土器、安行3a 式～前浦式土器が少量出土しているに過ぎない。

八木原貝塚　公園として保存されているが、これまでに一部発掘調査が行われている。公表された資料は些か不充分なものであるが、堀之内（2式）期から曽谷期までの遺構、遺物が検出されている。

千代田遺跡群V区　千代田IV区や八木原貝塚のある台地の北側に谷を挟んで立地した。晩期前葉を中心とした遺跡である。住居跡及び住居跡状遺構は4棟が検出され、うち2棟はおそらく安行3a期の所産と考えられる。また炉が検出されなかった住居跡状遺構も晩期の土器が出土したと報告されている。のこる1棟の住居跡は加曽利B期のものであるが、他に堀之内1式土器、加曽利B 1式土器が少量出土する。後期後葉の遺構、遺物はなく、安行2期から再び占地されるようで、前浦期まで包含層の形成が続く。また晩期後葉浮線文土器も微量ながら出土している。

千代田遺跡群VI区・VII区　殆ど見るべき遺構、遺物がない。

御山遺跡　千代田IV区の東南東に位置する遺跡で、1984～1985年度に調査された。加曽利E II～EIV式土器が少量出土しているが、まとまった包含層の形成は加曽利B期に開始される。出土した土器の主体は加曽利B 1式土器で出土地点は大きくは2地点に分かれる。加曽利B期後半には衰微してしまうが、また安行1期になって少量の土器を出土している。その後大規模な遺物包含層が形成されるのは晩期後葉の浮線文土器群の段階（後半）で、住居跡、墓壙を伴っており、荒海期まで規模を縮小することなく続く。また弥生時代中期初頭と考えられる土器も出土している。

清水遺跡・新久遺跡　御山遺跡の西側に隣接する遺跡である。清水遺跡と新久遺跡は県道を挟んで呼び分けているが実質上は同じ遺跡と考えてよい。1986年度に調査され、その整理作業

が殆ど未着手であるため詳しくは判らないが、縄文時代後期に、御山遺跡とほぼ同じ頃に隆盛を迎え、加曽利B期前半と安行1期の土器が目立つ。他に加曽利EIII式土器や称名寺式土器が断片的に見られた。

出口・鐘塚遺跡　千代田遺跡群の南方、内黒田遺跡群と物井地区遺跡群との中間地点に位置する。この遺跡は1986～1987年度に調査されたが、やはり整理作業が未着手である。縄文中期以前が比較的充実し、前期黒浜～興津期(特に浮島期)、中期阿玉台期などの遺物が目立つ。他の多くの遺跡と同様に加曽利EII～EIII式土器及び加曽利B1～安行1式土器が出土しているが、加曽利B2期（前後）の遺構を検出している。加曽利B式土器以外は少量。

物井地区では他に棒山・呼戸遺跡、小屋ノ内遺跡などが調査されており、縄文時代の遺構、遺物包含層が検出されているが、現在のところそれらの内容を知るに至っていない。

③時期毎の動態

前記の各遺跡の「盛衰」を一覧したのが第11表である。遺跡群総体で見れば、縄文中期後葉以降は全く途絶がないと言ってもよい。表からも判るように、この遺跡群の中で明らかに中心的な位置を占めるのが千代田遺跡群IV区である。特に縄文中期末から後期末までかなり継続的に集落が営まれているようである。一方その周辺にある遺跡は、ある時期には遺構が残され、あるいは多量の遺物が残されるが、殆どの場合短期で遺跡の形成が終了している。また多くの遺跡ではそういった時期が複数回訪れているが、興味深いことに、特定の台地上においてある時期に遺構、遺物が集中した地点に、後の時期になって再び集中地点が形成されることが多い。その間には数十年あるいは長い場合には百年以上の時間が想定されるにせよ、この事実から集団の占地が特定の地点を意識して行われたと考えてよいのではないだろうか。この背景としては、遺構や遺物集中が反復して形成される地点が単に利便性があったというよりも、特定の集団領域の中で、その集団自体に伝世的に意識されていた地点と言うことができないだろうか。また逆に、継続的に集落が営まれ続けたように見える千代田遺跡群IV区のような遺跡も、数百年に亙って集団が定住したことなど考えられず、移動、断絶の時間を伴いながらしかし何度も反復して拠点的に占地された遺跡と見ることができよう。ここで拠点的、中心的な遺跡とその周辺に点在する多くの遺跡の在り方の違いを、次のように措定しよう。勿論集団の拠点は移動することもあり得るが、ここでの「拠点遺跡」の意味はより総体的に見た時のそれである。

拠点遺跡＝見かけの継続占地…継続的反復占地

周辺遺跡＝一時的占地あるいは断続的反復占地

縄文時代の集団は拠点的な場所を持ちながら、特定の季節、あるいはより長い期間に亙る移動を領域内で繰り返したであろう。それを見る良好な資料がいま眼前にある。

縄文中期末葉　この四街道市北部遺跡群では、縄文中期で加曽利EII期以前の遺構、遺物集

第11表　縄文後晩期における内黒田・千代田・物井遺跡群の動態

	大割	池花	池花南	千代田Ⅰ区	千代田Ⅱ区	千代田Ⅲ区	千代田Ⅳ区	八木原貝塚	千代田Ⅴ区	御山	清水・新久	出口・鐘塚
加曽利EⅠ	○	○	○									
加曽利EⅡ	○	○	○							○		○
加曽利EⅢ	○	○	○	◉	◉					○	○	○
加曽利EⅣ						○	◉			○		
称名寺(1)	◉		○				◉				○	
称名寺(2)	○						○					
堀之内(1)			○				◉		○			
堀之内(2)												
加曽利B1	○			○		○	○		○	○	◎	○
加曽利B2	○	○	◉			○	○		◉	○	○	◉
加曽利B3	○	◎					◉					
曽谷		○	◎			○	◉			○		○
安行1			○			○	◉			○	○	○
安行2							◉		○			
安行3a		○					○		◉			
安行3b							○		○			
前浦							○		○			
千網			◉							○		
(+)									○	◉		
荒海		○	○							◎		
弥生(初期)		○	○							○		
須和田		○	◎									○
宮ノ台			○									

◉ 遺構を伴う遺跡
◎ 遺構が不明確な大規模遺物集中
○ 遺物集中あり
○ 遺物を出土

※報文では詳細が不明のため表記方法を変えた。

中を検出した遺跡はない。縄文中期の遺構を持つ遺跡は千代田Ⅰ区と千代田Ⅱ区で、ともに加曽利EⅢ期と考えられる住居跡が1棟ずつ検出されている。両遺跡は連続する台地上に存在したが、その間の時期差の有無は微妙である。大規模な遺跡の存在は現在のところ認められないが、該期の土器を少量出土する遺跡は非常に多く、広範囲に集団の活動が展開されたことが推測される。

加曽利EIV期になると遺物を少量でも出土する遺跡も激減するが、対して千代田IV区に小竪穴を伴うような集落が形成されている。活動の様態は拠点的、安定的と言い得ようか。

縄文後期前半　称名寺期に至っても千代田IV区の集落が継続（完全な継続とは言えないように思われる）している。しかし大割遺跡にも住居跡及び遺物集中を伴う短期の居住が認められ、また遺跡全体に称名寺式土器が少しずつまとまりながら分布しており、複数回の占地が想定される。ここで断定は避けたいが、該期は千代田IV区を概ね拠点としながら、大割遺跡を副次的な活動の場として移動を反復していた可能性が濃厚である。

堀之内期はやはり千代田IV区で住居跡が検出されているが、必ずしも拠点的、継続的な様相を示さず、また遺跡群全体についても遺構、遺物が稀薄である。おそらく八木原貝塚を含めて未知の、活動拠点としての遺跡が隠れているのであろう。

縄文後期後半　加曽利B期の遺跡は急増する。ただ確実に加曽利B期の住居跡と考えられるものは千代田V区の1棟しかない。加曽利B1式土器をまとまって出土する遺跡は物井地区にある。連続する台地上の御山、清水・新久の各遺跡がそれで遺物包含層が複数箇所に形成される。それらが継起的なものか、並立したものであるかは検討の余地があるが、いずれにせよ該期の拠点は御山遺跡から清水・新久遺跡にかけての地域であった可能性が高い。

加曽利B2期には先述の千代田V区の住居跡以外に池花南遺跡がまとまった遺跡として注目される。遺物包含層の面積や出土遺物量では現在のところ群を抜いていると言ってよい。時期的には加曽利B2期でもB1期の様相を残した古い段階に位置付けられ、御山遺跡などに後続する拠点的な遺跡となるかも知れない。またB2期には他に土坑を伴う出口・鐘塚遺跡や大割遺跡など多くの遺物集中が形成されているが、これは複数拠点が存在したと言うより、住居跡があまり検出されない点から見ても頻繁な移動の結果と考えるほうがよいであろう。

加曽利B3期にはまた遺跡が減少する。池花遺跡でやや分散的ではあるが遺物集中が形成されているが、遺跡群全体としても遺物量は少ない。ただこのころから千代田IV区が再び拠点化される可能性があり、未検出の遺跡を含めて該期の掌握にはいま少し資料の集積を待たなくてはならない。

曽谷期には八木原貝塚を含めた千代田IV区が、確実に拠点的な集落として機能していることが、住居跡はともかくとして多数の小竪穴群の存在から推定される。他遺跡では殆ど断片的な資料しか得られていないが、ただ池花南遺跡のみ広範囲に遺物が分布する包含層が検出されている。千代田IV区との関係は、称名寺期の千代田IV区と大割遺跡の関係と同様のものか。

安行1期においても千代田IV区の拠点的性格は些かも揺らがない。遺跡群の中で該期の遺跡はやはり加曽利B期に比べて少ないが、池花南遺跡と御山遺跡～清水・新久遺跡に小規模な遺物集中が残されており、副次的な活動を置いた遺跡がやや分散的になったと言うことができるだろうか。

安行2期は千代田IV区で1棟の住居跡が検出されているだけと言って過言でない。しかし千代田V区においても土器の検出は見られ、晩期に入ってむしろ拠点がV区に移動することからその先鞭はここにつけられていると考えることもできる。

縄文晩期前葉～中葉　前述したように晩期に入ると千代田V区の優位性が目立ち、安行3a期にはV区に住居跡が残される。その以前、安行2期から安行3a期への過渡段階において池花遺跡に小規模な遺物集中があり、短時の占地が行われている。しかしその後は前浦期まで千代田V区と千代田IV区以外では全く遺物を出土していない。その2遺跡のうち千代田IV区では遺構は検出されず遺物量も少ないのに対し、千代田V区で検出された遺構は安行3a期の住居跡だけであるが、相対的な遺物量は多い。したがって現状では千代田V区を主、千代田IV区を従として移動を反復していたと考えられる。

縄文晩期後葉　千代田IV区、千代田V区は前浦期までで断絶し、それに代わるように出現するのが池花南遺跡である。ここでは千網期（後半）の大規模な遺物集中が見られ、残念ながら住居跡は検出されなかったものの、該期の可能性がある土坑群や祭祀的遺物などから拠点的な居住空間であったのは明らかである。しかし千代田V区の前浦式土器とはまだ少しの隔たりがあり、他に未知の遺跡があることも確実である。

浮線文土器に代表される時期を3段階に分けるとすれば、池花南遺跡は概ねその第2段階に相当しようが長期には継続せず、第3段階には御山遺跡が出現する。御山遺跡ではその時期の住居跡などを伴う遺物集中が見られるが、実は前段階にも地点を異にして小規模な遺物集中を形成しており、第3段階の居住域形成前の池花南遺跡からの一時的移動であることも考えられなくはない。この御山遺跡は拠点的な遺跡として荒海期の古段階まで続くが、千代田V区でも少量の該期の土器が報告されており、やはりこの時期にも副次的な遺跡をともなって短時の移動が繰り返されていたのであろう。

御山遺跡の終焉の後、池花遺跡に荒海期新段階の包含層が形成されている。しかしこれには遺構はなく、遺物量も少ないし、また短時で終わってしまい、これに後続する遺跡が不分明になる。

弥生時代　前述のように縄文時代の終末との繋がりがよく解らないが、弥生時代初頭と思われる遺物を出土したのは池花遺跡である。隣接する地点の荒海期の遺物集中との関係については、出土する土器にあまり共通点がないため言及できない。これ以後の遺跡は御山遺跡の少量の資料を除いて池花、池花南遺跡にほぼ限られていく。しかも須和田期の池花南遺跡のみ拠点的な遺跡と認め得るだけで他は小規模な遺物集中を残すだけである。弥生中期の後半になると鹿島川の彼岸には大崎台遺跡を始めとする一大遺跡群が確認されており、此岸でも山梨相ノ谷遺跡などがある。弥生中期前半以前についても、鹿島川沖積地のより近くで遺跡が確認される可能性が残されていよう。また出口・鐘塚遺跡の古墳周溝内から須和田式土器の破片が出土し

ていることなどから、勿論まだ遺跡群内に未検出の遺跡が存在している可能性も濃厚である。

⑤まとめ

以上当遺跡群における縄文中期末以降の遺跡の「盛衰」を通観した。縄文時代から弥生時代への過渡以降はまだ不分明な点が多いが、中期末から晩期末までの集団の動態がある程度明らかになりつつあると言える。ここで通観した結果、遺跡群の在り方に大略次の2つのパターンが指摘できるように思われる。

その第一は、拠点的な遺跡が比較的固定していて、それと少数の周辺遺跡の間を反復移動したと考えられるパターンである。加曽利EIV期から称名寺期、あるいは曽谷期から安行1期が典型的と言える。

第二には拠点的な遺跡そのものが移動したと推測させるパターンである。この時には一時的な占地が行われた遺跡も増加している。加曽利B期が典型的である。これを一見すると、遺跡数の増加からあたかも集団の分立があったかのようであるが、実際はそうではなく短期の移動が広範に繰り返されたからと考えておきたい。

この2つのパターンの相違には、自然的な生産諸条件を含めて社会的な要因が大きく関与しているであろうことは言うまでもあるまい。しかしその要因の具体的な内容となると簡単には明らかにできまい。それよりもいまできること、そして必要なことは、こういったパターンの推移が他地域でも普遍性を持ち得るか、それとも多様な在り方のうちの一つなのかを明らかにし、そして何よりも個別の遺跡を越えた縄文時代の集団領域の具体像を構築していくことである。今後当地域の調査の進展にしたがって、当遺跡群の動態を個々の遺跡の立地条件等も考慮しながらより詳らかに追及すると同時に、他地域の遺跡群との比較検討を行っていきたい。

千代田遺跡群の文献

1　米内邦雄・宮入和博『千代田遺跡～千葉県印旛郡四街道町～』　四街道千代田遺跡調査会　1972
2　米内邦雄『千代田遺跡発掘調査概報』　四街道遺跡調査会　1977
3　米内邦雄『八木原貝塚調査報告書』　四街道遺跡調査会　1978

物井地区の遺跡群についてはすべてが未報告であるが、今回担当者のご厚意によって御山遺跡、清水遺跡、新久遺跡、出口・鐘塚遺跡の縄文時代の資料を実見することができた。

補記　今後上記のような検討をより精緻に実践していくためには、遺構を伴わず、多量の遺物も出土しない遺跡の軽視を改めなければならない。かかる〝目立たぬ〟遺跡においても遺物分布の把握、つまり遺物集中の一括性やその単位を把握するべく努めなければならない。さらに言えば、このような遺跡は短い期間で廃絶され、しかも連続的に遺物が重層することがないために、場合によっては非常に良好な一括遺物を得ることが可能であろう。それは継続的な集落遺跡での複数時期の〝混在〟を排除する操作が不要であるだけでなく、単なる遺構一括遺物よりも、ある時点で集団によって廃棄された遺物群を総括することが可能であるからである。

補論２．　縄文から弥生へ～晩期後葉土器群の変遷（予察）～

①はじめに

縄文時代の終末、そして弥生時代の開始という時代画期の解明は、全国的に見ると近年目覚ましい成果を得つつあると言える。殊にここ数年来は、以前資料的に恵まれなかった東日本において、豊富な知見が得られている。ところが房総においては、荒海貝塚を始めとする重要な遺跡を持ちながら、この問題についてこれまで殆ど踏み込むことができなかったと言って過言でない。尤も関東地方全般について見ても、弥生土器成立以外の諸相が充分明らかにされたとは言い難いが、房総では弥生土器の成立についてさえも論及することができなかった。その理由は簡単で、最古の弥生土器とされてきた須和田式土器と縄文時代晩期の土器を繋ぐ資料、須和田式土器の生成過程を示す資料の欠如が障害となっていたからに外ならない。

今回報告する内黒田遺跡群では、縄文時代晩期後葉から弥生時代中期の土器群が、複数地点から小期毎にまとまって出土するという良好な資料を得ることができた。また内黒田遺跡群とほぼ並行して調査された、近傍の物井地区御山遺跡[1]の資料を加えると、概ね一貫した流れを追うことができる。加えて最近は県内各地で該期の資料の発見、報告例が増加している趨勢にある。ここでは内黒田遺跡群で得られた資料を中心としながら、他遺跡の資料も援用して、房総半島における縄文時代晩期後葉の土器群の変遷と、弥生土器成立に至る過程を追ってみたい。

②浮線文土器群の成立期

1980年代に入り、晩期後葉に中部から南東北にかけて盛行する所謂「浮線文土器群」の編年的整理が行われた。中部高地においては、松本盆地の遺跡で代表させれば、女鳥羽川段階⇨離山段階⇨トチガ原段階と編年され、離山段階を氷Ｉ式古段階、以下氷Ｉ式は中段階、新段階と細分された。また女鳥羽川段階が大洞C_2～A式、離山段階が大洞A式、氷遺跡の主体部分である氷Ｉ式中段階以降が大洞A'式に対比された。この細分は設楽博己の精緻な研究[2]によってなされたもので、細部の相違はあったとしても、今日これを大きく否定する見解は出されていない。勿論晩期浮線文土器の研究は他にもなされているが、浮線文の型式学的研究に終始するものが多く、土器群の変遷が充分把握されるに至っていないので、ここでは設楽編年を示準として考えることにする。

浮線文土器群の第１段階、女鳥羽川段階に対比される良好な資料は未だ見られない。それは時期的に限定された一括性を持つ資料がないということであって、前浦期以前から継続的に存在する拠点遺跡においては前後の時期の資料に混じて報告されている。例えば大多喜町堀之内上の台遺跡[3]や銚子市余山貝塚[4]などの出土土器に含まれている。それらは横浜市杉田遺跡[5]・杉田Ｄ類土器の一部と共通した様相を持つ、口縁部が内弯あるいは内傾し、レンズ状付帯文を施文

する浅鉢により代表される。また松本市女鳥羽川遺跡[6]や辰野町樋口五反田遺跡[7]出土の浅鉢ともきわめて共通性の高いものである。かかる浅鉢は前浦期の後半に出現する、杉田C類土器及び茨城県桜川村殿内遺跡[8]・殿内BIII式土器の浅鉢から直接的に継起することは明らかである。しかし房総ではいまのところそれらに組成する土器群が明確ではないし、豊富な資料を出土した杉田遺跡でも、土器群の分離が充分でないと言える。

内黒田遺跡群周辺では該期の資料はなく、前段階では千代田遺跡群V区が前浦期の前半で断絶している。前浦期で断絶する遺跡は多く、この事実はまた重要な問題を提起していよう。

③浮線文土器群の展開

離山段階、大洞A式後半に対比される土器群でまとまったものは、今回報告した池花南遺跡出土資料である。池花南遺跡の土器群には多様な浮線文浅鉢が含まれるが、複段構成の流麗な三分岐ハンガー状浮線文が主体となり、それをメルクマールとすることができる。古い要素を持つ浅鉢として第98図1、2が存在するが、当遺跡においては分離する必然性がなく、伴う可能性が強いと判断した。両者とも様相として横浜市杉田遺跡の資料に近いものがあるのに対して、ハンガー状浮線文を持つ個体には福島県会津高田町下谷ケ地平C遺跡出土土器群[9]に非常に近いものが多い。あるいは系譜の上では出自の異なるものが共存しているのかも知れない。池花南遺跡で前述の浅鉢に伴う土器群は先に詳述したとおりであるが、条痕施文の土器が伴出しないことに注意したい。またそれと関連するが、甕、深鉢は、浅鉢程に中部高地や東海～西関東との関連性が高くなく、北関東～南東北と共通した様相を呈している。池花南遺跡と同じ段階か若干先行すると思われる資料に、千葉市房地遺跡出土土器群がある[10]。量的にはさほど多くないらしいが、良好な資料である。所謂千網式土器（薗田芳雄の言う千網I式）は、房総では今のところこの2遺跡の土器群が典型的なものと言える。厳密に言えば、千網式土器の様式内容は今日まで明確に規定されたことがなく、通俗的には浮線文＝千網式と捉えられがちである。千網式については現在飯島義雄と外山和夫が再検討を行っており[11]、千網式という用語は飯島らの成果が出るまで積極的な使用を控えるべきであると考える。関東地方では桐生市千網谷戸遺跡を除いて、全般にこの段階の良好な遺跡が少ない。中では埼玉県嵐山町花見堂遺跡で房地遺跡の段階に対比される浮線文土器群を出土している。この資料は池花南遺跡の直前段階に置くことができるかも知れない。これらの遺跡と離山遺跡は、微妙な時間的ずれがあったとしても、ほぼ相前後する時期の所産と考えることができる。

なお内黒田遺跡群周辺では物井地区御山遺跡で大洞A式並行期の土器が断片的に出土している。うち浅鉢の一個体は長野県大町市一津遺跡[12]鉢E1にきわめて類似し、浮線文からすると池花南遺跡第98図7に先行する資料であると考えることができる。

池花南遺跡に後続する遺跡はかなり増加する。四街道市では物井地区御山遺跡第I・II地点

があり、成田市荒海貝塚[13]、同市殿台遺跡[14]もこの段階に開始されると考えてよい。また上総では市原市武士遺跡[15]がある。他地方との編年対比では、大洞A'式期前半、氷Ⅰ式中段階以降ということになるが、この段階は遺跡の個性が大きい点を指摘することができる。それは端的に言えば、中部地方、氷Ⅰ式土器の影響の強弱による差異と言える。

前記各遺跡のうち御山遺跡の土器群は、相対的に中部・東海からの影響が弱いものである。浅鉢に施される浮線文について見れば、3～4本の浮線を一単位とするレンズ状のモチーフが卓越し、杉田D類土器の新しい部分や新島田原遺跡[16]の浮線文浅鉢に共通する要素を有しているが、それらの遺跡と比較すれば口縁外帯が未発達で、同時に下位の文様帯との間の無文帯も明確になっていない。また甕、深鉢については前段階のものを継承しており、特に氷Ⅰ式土器で主体を占める、口縁部や肩部に平行沈線を巡らせる土器の量が少ない点において大きく異なっていると言えよう。

御山遺跡に対して成田市殿台遺跡の土器群は、氷Ⅰ式土器の影響が強く、浅鉢に施される浮線文は菱形を呈するものが多く、口縁外帯と直下無文帯が発達している。また平行沈線を有する甕、深鉢は主体的な存在となっている。全く未公表の市原市武士遺跡出土土器群についてはわずかに瞥見しただけで、現在詳細は不明であるが、ここでは氷Ⅰ式土器そのものに近い内容を有しており、筆者の印象では駿河山王遺跡[17]の土器群に近いようであった。これら3遺跡の間に全く時期差がないとは言い切れないが、ほぼ同じ段階と考えることができる土器群のこのような差は遺跡の立地条件に左右されたものと考えられないだろうか。すなわち御山遺跡は下総台地の内陸部に位置するのに対し、殿台遺跡は利根川に近く、武士遺跡は東京湾に近い。殿台遺跡では利根川水系を通じて北関東から中部高地、武士遺跡は海上の道を通じて西関東から東海地方とそれぞれ交流を取りやすい。したがってそれぞれ別ルートで西方からの強い影響を浮けた可能性も否定できまい。

この段階には組成上壺が若干増加する傾向がある。少なくとも御山遺跡ではそれが明確であった。また武士遺跡では樫王式土器（壺）が、御山遺跡では樫王式土器の可能性がある東海系条痕文土器と遠賀川系土器（在地）が出土している。この段階の西方の影響力は、氷Ⅰ式土器を介した弥生文化の間接的な波及に外ならず、そして遺跡による様相の差異は、房総という地域総体に徐々に影響が及ぶのではなく、拠点的な人的交流によって急速に浸透しつつあったことを物語るものと言えよう。

④荒海式土器の成立と展開

先述の御山遺跡第Ⅰ・Ⅱ地点出土土器群に後続する良好な資料が、同じ御山遺跡の第Ⅲ地点で得られている。その土器群の特徴を端的に言えば、浮線文施文の浅鉢の著しい退潮である。それはすなわち浅鉢自体の激減であり、従来の晩期後葉における土器様式の規定如何に拘わら

ず、この段階でそれまでの土器組成が崩壊することは議論の余地がない。筆者はこの段階以降を荒海式土器と考えたい。御山遺跡で少量残存する浅鉢には、沈線を重ねてレンズ状あるいは三角形のモチーフを描くものがあり、新島田原遺跡との共通性が指摘できる。壺の一部には浮線による意匠は残るが、興味深いのは頸部に1～2条の刻目突帯を持つ壺が存在することで、これを以て畿内第Ⅰ様式の半ばに対比させることもあながち無謀とは言えまい。甕には前段階と共通のものも含まれるが、施文率は高くなる。ここで特徴的なのは列点、特に沈線間列点の出現である。ところで当土器群には変形工字文、三角連繋文の類いが一切認められない。この土器群に対比される単純な一括資料は、県内外とも現在のところ見当たらないので明断できないが、浮線文浅鉢激減当初の段階は荒海式土器のメルクマールとされた三角連繋文はまだ出現していない可能性がある。しかし浅鉢の減少とこの直前段階を含めた壺の増加は、他の地方の弥生土器成立と見事に符合する現象であり、この背後に重要な画期を認めるべきである。荒海式土器という様式をこの段階以後に設定すべきであるという理由はまさにこの一点にある。時間的対比としてはおそらく水神平式土器成立頃に相当し、北関東地方における南大塚遺跡[18]、沖Ⅱ遺跡[19]などに並行するかやや先行することになるであろう。ただ中部高地や北関東地方あるいは西関東地方と異なり、東海系条痕文土器の系譜上にある壺を組成せず、また壺の比率は未だ相対的に低いところに留まっており、はたして他地方と同様にこの段階を弥生土器の成立とすべきかどうかはさらに今後検討を要する。

同じ御山遺跡の第Ⅳ地点ではさらに異なった土器群が出土している。地点間に若干の混在を含むと思われるが、この地点だけに特徴的な事象は、三角文、菱形文、刺突充填などの出現である。全体として小片が多いため組成が不明瞭であるが、前段階に位置すると思われる第Ⅲ地点の土器群と大きく変わることはないであろう。問題は御山遺跡では三角文や菱形文の出現が唐突に見えることである。しかしやはりこの土器群の対比資料もきわめて不足していて、かかる変遷の予想を検証することは難しい。四街道市で荒海式土器を出土した遺跡は他に池花遺跡がある。量的には僅少であったが、条痕施文の土器を主体にした土器群で、類似性から市原市唐沢遺跡出土資料[20]に対比され、荒海期でもその末期に位置するであろうことは既に本文中で述べた。予見的には御山遺跡第Ⅳ地点よりも新しい段階と考える。しかし唐沢遺跡出土資料も一括性の検証はなされておらず、問題がある。

そもそも荒海式土器を出土する遺跡は、荒海貝塚を除けば断片的な資料が非常に多く、山武姥山貝塚や余山貝塚など晩期の拠点的な遺跡ではある程度まとまった資料が得られていても、前後の時期との混在資料であって、客観的に分離することはできない。荒海貝塚の報告資料でもある程度その傾向はあろう。荒海式土器とされる土器群の中で、上下幅の狭い菱形文が多段にわたって施文される土器を特徴的に含む資料がある。先述の唐沢遺跡を始め、山田町高宮台遺跡[21]、佐倉市大崎台遺跡C地区[22]、東金市道庭遺跡[23]、成田市殿台遺跡、茨城県殿内遺跡などに認

められ、新しい段階の特徴であると理解されている。道庭遺跡では水神平式土器が伴っているようであり、高宮台遺跡では須和田式土器に類似した破片が含まれ、それはそれで妥当性のある見識であると思われるが、はたしてそれらがいかなる土器と組成するかは今のところ明らかではない。また荒海貝塚で注視された雑書文施文の甕も、当の荒海貝塚以外ではその存在が不明瞭である。先に池花南遺跡で出土した弥生土器中のある種の甕に、雑書文甕の系譜を持つと予想しており、それが正しければやはり雑書文施文の甕は荒海式土器でも最末期に措かれるであろうが、事実はどうか。いずれにしろ荒海式土器の展開とその次の段階への移行は、多くの遺跡それぞれで複雑な様相を示し、今後複数の良好な一括性を持つ資料が得られない限り整然とした理解は困難であろう。

⑤弥生土器の成立をどこに求めるか

これまで概観してきた中で土器群の変化の画期を求めると、第一は浮線文土器群の成立であり、第二は浮線文浅鉢の組成主体からの欠落と壺の若干の増加である。またさらに次段階の画期としては須和田式土器成立における壺の飛躍的増加である。浮線文土器群の成立時には、中部高地において石器組成の一大変化が知られ、農耕への傾斜が強まることが確認されている。また荒海式土器段階での浅鉢の欠落時は、東日本一般の弥生土器の成立と合致した時期であろう。しかし他地方と比較した場合、壺の組成主体へ参画が不充分であると言える。これは再葬墓の成立時期とも符合した現象であると考えられ、この点については今後も議論を重ねる必要があろう。筆者としても力量の限界から現段階では以上のような中途半端な言及しかできないが、今後さらに考究を重ねるべく努力したい。

註1 資料実見
『千葉県文化財センター年報No.10』(財) 千葉県文化財センター 1986
『千葉県文化財センター年報No.11』(財) 千葉県文化財センター 1987

2 設楽博己「中部地方における弥生土器の成立」『信濃』34－4 1982

3 寺門義範『千葉県夷隅郡大多喜町堀之内上の台遺跡』 夷隅郡教育委員会 1979

4 資料実見
『千葉県文化財センター年報No.14』(財) 千葉県文化財センター 1989

5 杉原荘介・戸沢充則「神奈川県杉田および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』2－1 1963

6 松本市教育委員会『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』 1972

7 長野県教育委員会『昭和47年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－上伊那郡辰野町(その1)』1973

8 杉原荘介・戸沢充則・小林三郎「茨城県・殿内(浮島)における縄文・弥生両時代の遺跡」『考古学集刊』4－3 1969

9 芳賀英一「下谷ヶ地平B・C遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅳ』 福島県教育委員会 1986

10　千葉市教育委員会　田中英世氏のご教示による
11　飯島義雄「千網式土器の再検討（1）」『群馬県立歴史博物館紀要』5　1984
外山和夫・飯島義雄「千網式土器の再検討（2）」『群馬県立歴史博物館調査報告書』4　1988
外山和夫・飯島義雄「千網式土器の再検討（3）」『群馬県立歴史博物館調査報告書』5　1989
12　設楽博己・他『一津』　大町市教育委員会　1990
13　西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚（第一次調査）」『学術研究』23　1974
西村正衛「千葉県成田市荒海貝塚（第二次調査）」『学術研究』24　1975
14　寺内博之・喜多圭介・他『成田市郷部北遺跡群調査概要』　成田市郷部北遺跡調査会　1984
15　資料実見
『千葉県文化財センター年報No.13』（財）千葉県文化財センター　1989
16　杉原荘介・大塚初重・小林三郎「東京都（新島）田原遺跡における縄文・弥生時代の遺跡」『考古学集刊』3－3　1967
17　笹津海祥・他『駿河山王』　富士川町教育委員会　1975
18　大塚昌彦「南大塚遺跡」『群馬県史　資料編2』　群馬県　1986
19　設楽博己「関東地方の〈条痕文系〉土器」『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題　資料編1』
愛知考古学談話会　1985
20　木對和紀『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（財）市原市文化財センター　1987
21　青木幸一・他『高宮台遺跡』　高宮台遺跡調査会　1985
22　柿沼修平・他『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』　佐倉市大崎台B地区遺跡調査会　1987
23　調査担当の小高春雄氏ご教示および資料実見

補論３．縄文土器観察の二つの視点　～使用痕と輪積痕～

①問題の所在

一般に土器を観察する時、縄文土器においてはその施文技法が重点的に観察され、また土師器などにおいてはその調整技法が子細に観察される。言うまでもなく施文、調整は土器を分類する上で根幹となる事項であり、いかなる土器においてもそれらの観察は決しておろそかにされてはならない。またそれらに加えて通常使用痕の観察が行われる。これは当然ながら個々の土器の機能を最も直接的に示す痕跡であり、普通二次的な被熱痕や煤の付着等として残されることが多い。しかし多くの報告書において報文中や観察表等に土器使用痕の観察結果が記載されるにもかかわらず、それが大きく問題にされることはあまりない。中部高地の縄文時代研究において、縄文中期農耕論に関連して藤森栄一らのグループ以降継続的に着目されている程度である。それは遺存度の大きい土器で使用痕が肉眼的に明瞭に観察される例が相対的に少ないこと、また器種分類との対比が困難であることが理由として挙げうるかも知れない。ただ後者については、縄文土器においては器種が比較的未分化で分類が困難であり、従って分類示準が施文に偏ることに少なからず問題があろう。

もうひとつ別の視点として土器の断面観察がある。主として輪積痕が観察されるが、この観察結果が記載されている報告書は少ない。殊に縄文土器の記載においてより少ない。また輪積痕が図示されているものでは、器面に対して直交する接合面、あるいは上端が円い接合面が描かれることが多い。しかし報告者の観察ではそのような接合面を持った輪積痕は稀であり、接合面が器面に対して著しく斜交する、内傾接合あるいは外傾接合の例が圧倒的に多い。土器の成形において、接合面での割れを極力防止するためには接合面を大きく取ることが有効で、しかも内湾、外反いずれにしても曲面を形成する際には、粘土紐（帯）を外側か内側かどちらかに付加して捻りあげるのが合理的である。かつて西日本の突帯文土器から遠賀川式土器への転換時、内傾接合と外傾接合の交替が注目された。家根祥多によるこの研究については、100％断言できないとする意見もあるが、朝鮮無文土器との対比においてきわめて興味深い成果を得ている。このように重要な問題を提起する可能性を孕んだ輪積痕の観察がこれまでとかく軽視されてきたのは残念と言う他はあるまい。

以上２点掲げた土器観察の視点について、本書で特に詳細なデータを提供できるわけではないが、縄文時代研究の上で重要な問題を提起すると思われる観察結果２項を改めて提示して、使用痕及び輪積痕観察について注意を喚起したい。

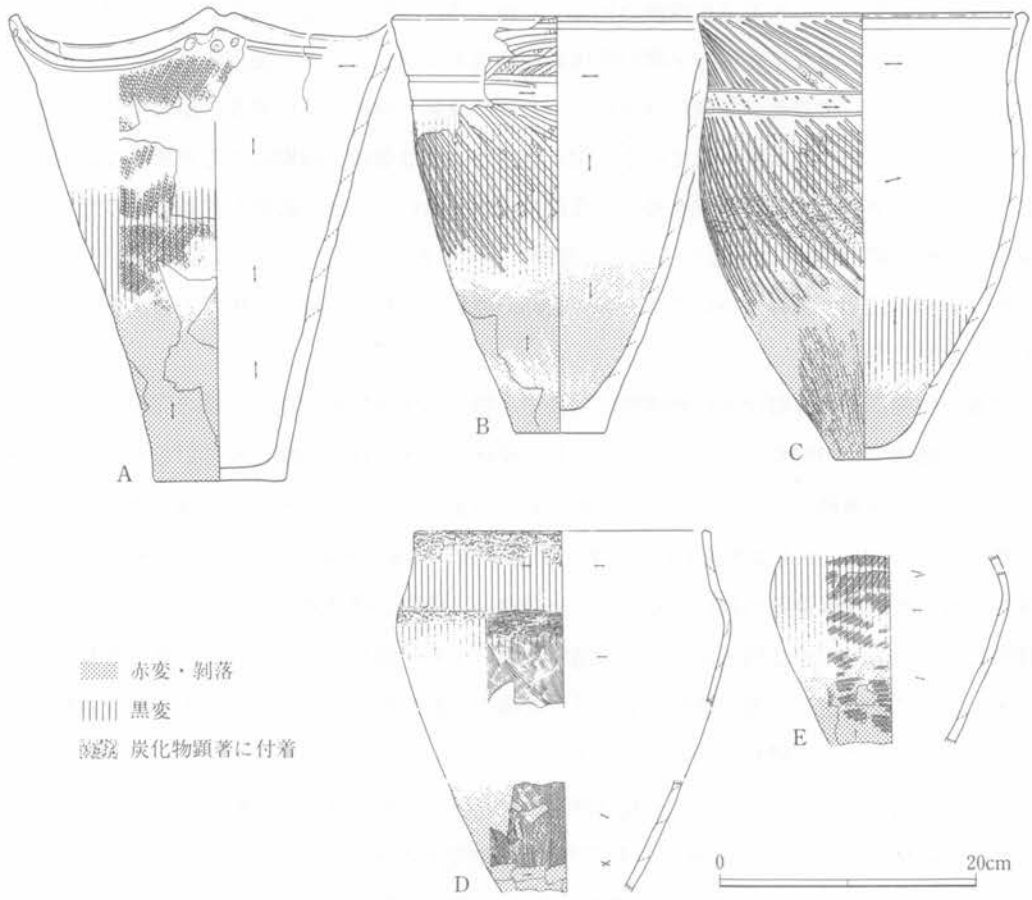
②土器使用痕の観察

土器の使用痕のまとまった観察結果を提示した例として、青沼博之及び宮城孝之の報文があ

る。青沼は長野県原村居沢尾根遺跡の報告で、縄文時代中期井戸尻III式期から曽利II式期までを主体とする完形及び準完形の土器83個体の使用痕を図示している。使用痕は内面においては炭化物（オコゲ）付着及び黒変、外面においては口縁部～胴部の煤付着及び胴部下位～底部の著しい熱変が一般的に観察されている。図示された中では個体、時期による差異はないと言ってよいが、やや特徴的な使用痕を残す有孔鍔付土器を除いて他は一般的な深鉢ばかりで、また使用痕（煮沸痕）が観察されない土器との器種としての差の有無については言及されていない。しかし曽利I式期の浅鉢については一部に底部の著しい損耗が一種の使用痕として報告されており、注目してよい。

宮城は印旛郡酒々井町伊篠白幡遺跡の報告で、縄文時代後期堀之内I式期の完形及び準完形の土器32個体の使用痕を図示している。殆どが深鉢で、他に鉢と分類されているものが3個体ある。居沢尾根遺跡のような内面の炭化物付着は顕著ではないが、それと同様の痕跡（炭化物付着の残留）として黒変は普遍的に見られ、外面下位の熱変（赤変）、その上位の黒変（煤吸着）等の状況は居沢尾根遺跡の場合と変わることはない。伊篠白幡遺跡では炭化物の付着は外面口縁部に見られるものが2個体ある。この遺跡においても「器種」と使用痕の関係は言及されないが、このことは逆に土器の機能の上では、文様や器形の多少の差はあっても明快な器種分化が指摘できないことを窺わせるものと言えようか。

当内黒田遺跡群から出土した完形及び準完形の土器で明瞭な使用痕が観察されるものを例示したのが第168図である。Aは堀之内I式土器で、池花南遺跡から出土したものである。外面の底部から1/3までが赤変し胴部中位が黒変しており、強い火熱を受けたものであることは疑いないが、内面には顕著な使用痕は残されていない。Bは池花遺跡出土の加曽利B式土器で、外面の使用痕はAと全く同様である。また内面には底部から胴部下位に器面剝落等被熱の痕跡が観察される。Cは池花南遺跡出土の加曽利B式土器で、前2個体よりもさらに顕著な使用痕が残されている。外面はA、Bと基本的に変わらないが、胴中位の黒変部分のさらに中央には炭化物が帯状に付着する。これによりかかる二次的な黒変は煮沸時の吸炭によることは明らかである。一方内面は底部に剝落が目立ち、そのやや上位に帯状に黒変した部分がある。これは所謂「オコゲ」の残留と見られる。これら3個体の縄文後期の土器については青沼や宮城が報告した観察結果の多くに合致するものである。Dは池花南遺跡出土の縄文晩期最終末と考えられる土器で、胴部中位が少し欠失する。外面胴部下位は顕著に赤変するが、胴部中位には遺存部分からの推定であるがあまり明らかな使用痕がなく、肩部以上が黒変、特に口縁部と肩部に炭化物の付着が目立っている。Eは池花南遺跡出土の弥生中期前半の土器で、やはり肩部以上に顕著な黒変が認められる。このような在り方は居沢尾根遺跡や伊篠白幡遺跡でも認められるが、内黒田遺跡群では一般に炭化物を付着させた土器は圧倒的に晩期以降に多く、その部位も口縁部と肩部である。僅かな資料からではあるが、使用痕の在り方が後期と晩期では異なっていると



第168図　土器の使用痕（1/6）

すれば、土器の使用に変化が現れたことになるが、他遺跡ではどうであろうか。この問題の検討にはより広範囲に資料を集成しなければなるまい。しかしここではこれ以上は触れず、別に池花南遺跡の縄文時代晩期の土器から観察された興味深い事実を指摘しておきたい。

③池花南遺跡出土千網式土器の使用痕

池花南遺跡から出土した千網式土器は量的なまとまりを見せ、多様な器種を含んでいたが、それらの中で煮沸痕と思われる使用痕（炭化物付着等、曖昧な黒変は除く）を残した土器は9個体ある。列挙すれば第100図36、38、第101図61、63（これは底部だけの個体で強い赤変及び剝落）、第102図64～67、68～69、第103図70～71、72～73、第104図74である。それらの特徴としては羽状文を持つ甕、鉢、撚糸文施文の甕ということになる。他の土器との対比で見れば、浅鉢、壺には煮沸痕が見られず、また有文の甕、鉢では羽状文を施すものだけに煮沸痕が観察され（3個体中2個体）、平行沈線や工字文を施す甕には顕著な使用痕が認められない。一般に

複合口縁（折返口縁）を持つ撚糸文施文の「粗製土器」では、小片は別として器形が判別できる個体で見る限り、甕に顕著な煮沸痕が認められ、深鉢、鉢では74にしか煮沸痕が残されていない。ここで見る使用痕（煮沸痕）は63を除いていずれも外面口縁部から肩部そして胴部に炭化物が付着し、また底部まで遺存する72～73では内面胴部下位に黒変及び炭化物の付着と底部外面の熱変が、38でも胴部下位の破片と思われるものの内面に黒変及び炭化物の付着が観察された。これらは皆共通して「オコゲ」、「吹きこぼれ」、煤吸着が残存したものと考えることができる。

以上の事実から考慮しなければならないことの第一は器種の呼称である。特に撚糸文施文の土器群については器形によって明確な使い分けが行われていたと推定される。鉢、深鉢のうち74に煮沸痕が観察されたが、これは75～81に示した煮沸痕を残さない深鉢、鉢とは器形及び口端に刻目を施す点で異なっており、製作時にも一線が画されていよう。もはやこれら本来目的とする機能が異なる土器群を「粗製土器」などという安直な呼称で一括できないことは明白である。撚糸文施文の甕は、機能としてはより装飾性の高い羽状文施文の甕、鉢と共通性を持つことになる。第二に考慮する必要があるのは、縄文時代晩期にはそれ以前の長い時代よりもかなり器種分化が進んだ可能性があることである。この器種分化は特定の器形、特定の施文に対して特定の機能が与えられるということであり、文様の多様性等とは直接的に対応はしないであろう。しかしこれらを実証するにはやはり池花南遺跡単独の資料ではあまりにも不充分で、今後器種分類に際して使用痕観察と連繋した視座が必要であるとともに、時期毎、地域毎の比較検討がなされねばならない。

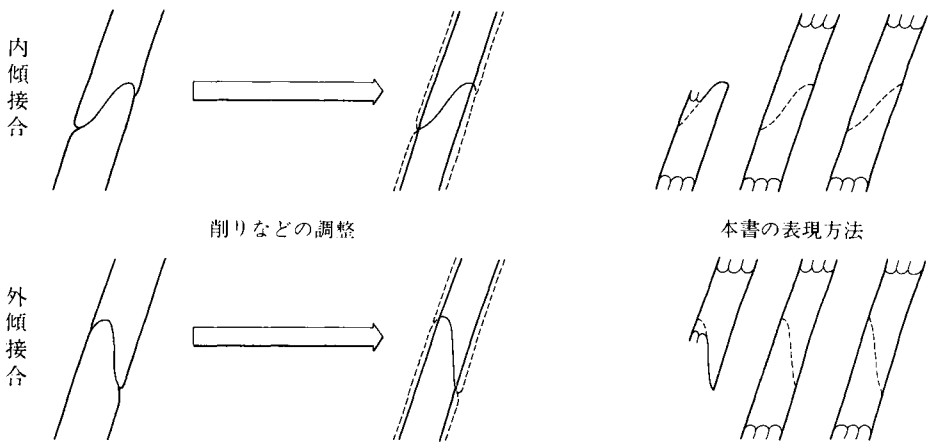
④輪積痕の観察

内黒田遺跡群で出土した縄文土器、弥生土器については、それらの大半において断面に輪積痕が観察された。すべての土器で粘土紐（帯）接合痕が明瞭なのではないが、胎土中の砂粒等の流れる方向によって内傾接合か外傾接合かを見、器面の微妙な形状によって接合部位が判断されるものもある。勿論粘土紐の幅をいずれの土器においても決定するのは不可能であるが、しかし少なくとも内傾接合であるか外傾接合であるかの判断は難しくはない。

このようにして輪積痕を観察すると、時期によって内傾接合と外傾接合の頻度が異なることが解る。ここで内黒田遺跡群で出土した土器のうち、ある程度その傾向が判別できる時期の土器における内傾接合と外傾接合の比を列挙してみたい。ここで示す個体数は内傾か外傾かを明確に判別できないものは除いてあり、個体内で部分的に逆転する場合は主として用いられる接合方法に従う。また明記しない限り池花、池花南、大割各遺跡の資料を合計してある。

縄文前期後葉（浮島・興津期）　内傾８個体：外傾39個体

前期後葉は外傾接合が多い。殊に興津期に比定される池花遺跡Ａ～Ｃ地点出土土器で見ると



第169図　土器の輪積痕模式図

さらにその比率は高い。ただし器形、施文による差は認められない。

加曽利E期　内傾6個体：外傾9個体

資料数は少ないが、やはり外傾接合が優勢であると言える。報告者が実見した他遺跡の加曽利E式土器についても外傾接合が多かった。例えば隣接する物井地区御山遺跡の阿玉台～加曽利E期の土器は、判別可能なものはすべて外傾接合であった。

称名寺期（大割遺跡集中地点）　内傾13個体：外傾2個体

逆転する。集中地点以外の土器では遺存度が悪いものが多く明確でないものもあるが、内傾接合が優勢な状況は大割遺跡集中地点以外の土器を加えても揺るがない。

加曽利B期　内傾147個体：外傾0（1？）個体

100%内傾接合と言ってよい。ただ個体によって肩部の一部に外傾接合が用いられることがあるが、それらにしても全体で見れば内傾接合によって作られている。

曽谷～安行1期　内傾45個体：外傾0（1？）個体

加曽利B期と同様。池花遺跡出土の安行3a式土器でも内傾接合4個体に対し外傾接合は皆無であった。

晩期後葉以降についても基本的に内傾接合で作られている。ただ加曽利B期などで肩部の傾斜変換点のみ外傾接合が用いられていたものが、肩部以上全体が外傾接合で作られる傾向が認められる。

早期については資料の絶対数が少なく傾向を読み取ることはできないが、全体として縄文前期、中期には外傾接合が優勢で、後期以降内傾接合が圧倒的に優勢になる。これには器形自体の影響があると思われるが、外傾接合と内傾接合の転換点が称名寺期にあることは確実であろう。既述したことであるが、大割遺跡称名寺期集中地点出土土器のうち、外傾接合を用いる土

器が2個体あり、本書の分類ではｃⅱ類としたものである。ｃⅱ類は加曽利Ｅ式土器からの系譜を最も直接的に体現する土器であり、それらが外傾接合を用いているのはきわめて象徴的な現象と言わなければならない。当遺跡群においては加曽利ＥⅣ式土器は出土しておらず、果たしてその段階に外傾接合が主体的であったかは他遺跡の例に拠らざるを得ないが、残念ながら外傾か内傾かの輪積痕が示されている例は殆どない。ただ経験的に報告者の観察で外傾が多いと言えるのみである。また称名寺式土器に優勢となる内傾接合は新来の要素と予想しているが、中部以西の中津式土器やその前後の土器群についても輪積痕の観察が行われている例が殆どなく現在のところ対比は不可能である。しかしこれはその結果如何によっては重大な問題を提起する可能性があり、今後充分に検討される必要がある。

⑤まとめにかえて

以上述べた土器観察の二つの視点は、これまで観察されていても一部でしか問題にされていなかったり、またはあまり観察されていなかった事項である。したがってここで内黒田遺跡群出土土器の観察結果を提示したとて、他遺跡の資料との対比ができず、詳しく論を展開することができない。しかし土器の使用痕観察からは器種の機能、器種構成の変化が、輪積痕観察からは土器製作の系譜（したがって人的な動きまで）が追える可能性がある。ここでそれらに対する注意を喚起することでまとめとしたい。

註1　武藤雄六「生活用具としての土器」藤森栄一編『井戸尻』　中央公論美術出版　1965
武藤雄六・小林公明・他『曽利』　富士見町教育委員会　1978

2　家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』　帝塚山考古学研究所　1984

3　青沼博之編『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－原村その4－昭和51・52年度』　長野県教育委員会　1981

4　宮城孝之・他『酒々井町伊篠白幡遺跡』　千葉県文化財センター　1986

Ⅳ. 古墳時代以降

1．素描

内黒田遺跡群中では弥生時代後期の遺構・遺物は一切認められず、近隣の千代田遺跡群と同様空白の時期となっている。内黒田遺跡群ではこの傾向は古墳時代に入っても続き、古墳時代前（～中）期のうちは顕著な遺構・遺物は残されていない。しかし池花遺跡の北縁には断片的に土器が検出されている。対岸の千代田遺跡群Ⅴ区では、規模はさほど大きくはないが、それに前後する時期の集落跡が調査されており、何らかの関係を窺わせる。

本格的に当遺跡群の占地が開始されるのは古墳時代後期、6世紀後半に入ってからである。まず池花南遺跡に古墳群の造営がなされていく。いずれも比較的小規模な円墳ばかりで、あまり大きな時期幅を持たずに形成されたものである。この古墳群は対岸の「千代田古墳群」と時期的に一部重複し、一連のものとして考えるべきであろう。

当遺跡群を含めた周辺の古墳群（全体を物井古墳群とする）では墓域を移動しながら連綿と造墓活動が続くが、内黒田遺跡群域では7世紀に入ると墓域としての占地が途絶え、何の痕跡も残されていない。しかし8世紀に入って再び造墓活動が開始される。通常「方形周溝（状）遺構」と呼ばれてきた小規模方墳群で、池花、池花南、大割各遺跡に検出されている。

平安時代以降は長期間空白の時期が続き、再度この地に遺構が残されたのは近世以降と考えられる溝状遺構と土壙群のみであった。したがって古墳時代以降でまとまった資料は6世紀～8世紀の古墳群ということになる。後に詳述するが当遺跡群に造営された古墳は、百基単位で群集する「物井古墳群」の一部であり、他の時期と同様、隣接する千代田遺跡群や物井地区で調査が続けられている遺跡群との総括的な把握が必要となる。

2．古墳時代前期

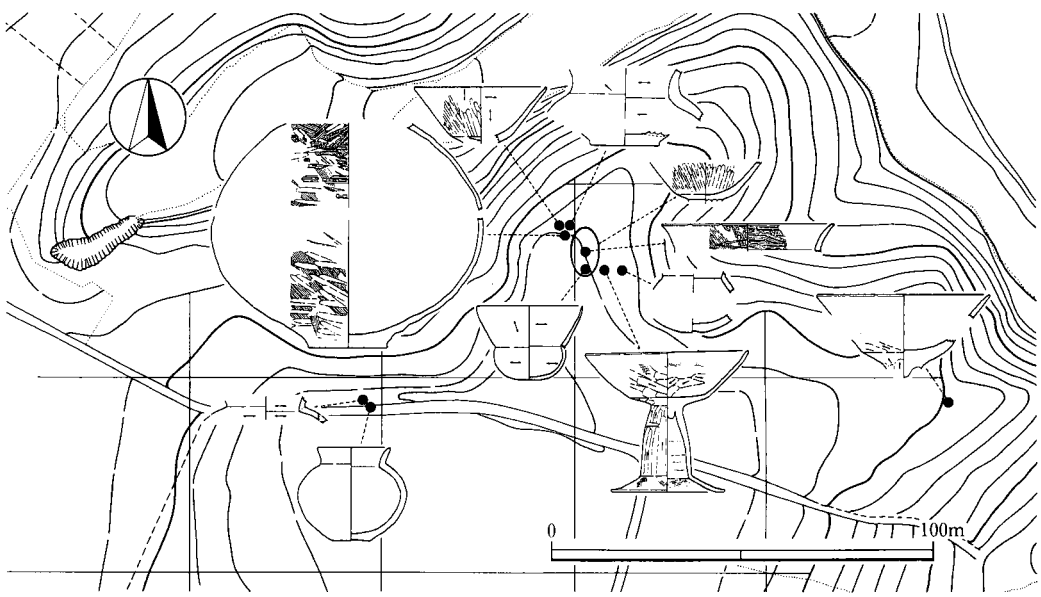
①概観（第170図）

五領～和泉式土器に比定される土器が池花遺跡で断片的に出土しているだけである。出土地点は遺跡北端近くのD1－29、E1－20～42区にややまとまりがあり、他にＢ２区及びＦ２区で微量の土器が出土した。その出土地点の性格は判然としないが、少なくともＤ１～Ｅ１区に関して、何らかの意味のある空間であったとだけは言えるであろう。

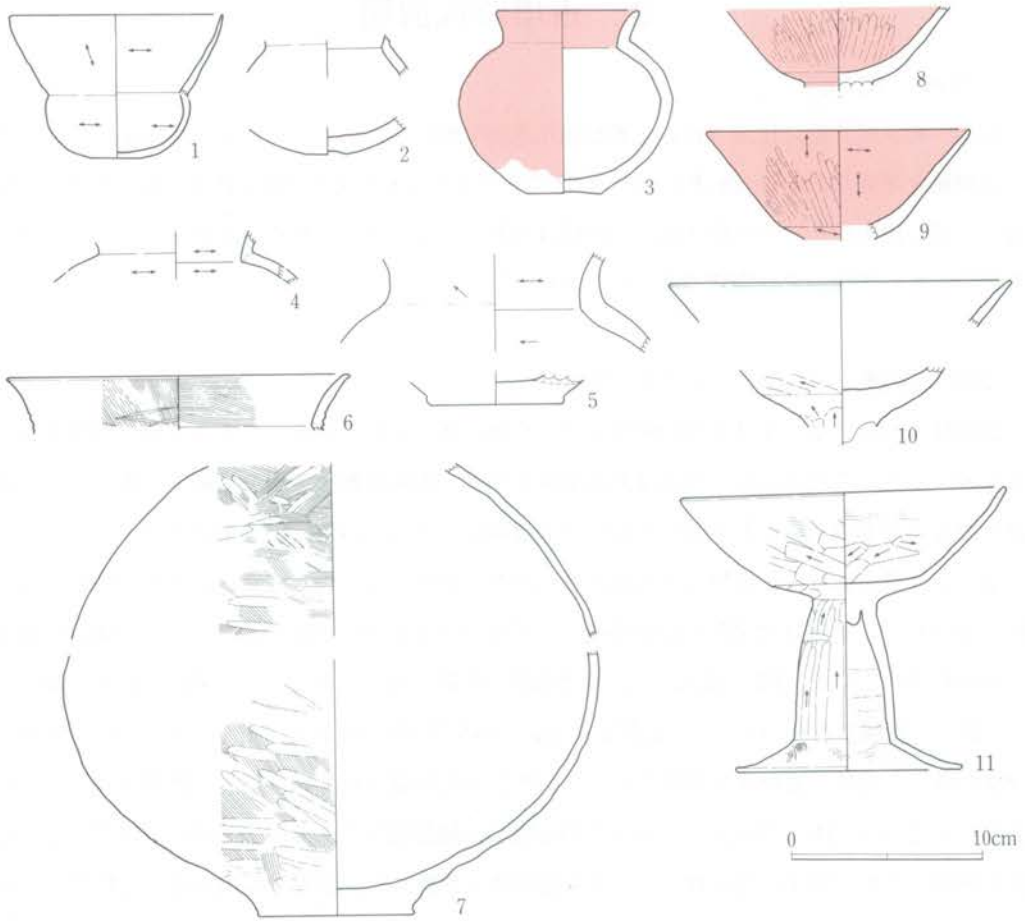
②池花遺跡出土土器（第171図、図版67）

11個体を図示する。１は小型の坩である。全体に薄い土器であるが、大きく開く口頸部はとくに薄く仕上げられている。底部は丸底気味の平底。器面調整は丁寧な篦磨きであるが、口頸部外面のみが垂直に近い右下がりの斜位で他は横位となっている。E1－40区出土。

２～７は甕である。２は肩部と底部の破片があるが接合しない。底部は小さな凹底となる。E1－40区出土。３はほぼ完形品の小型甕。外面ほぼ全面が赤彩されており、また内面は口縁部のみ赤彩されている。B2－19区出土。４は頸部～肩部の破片である。この個体は壺かも知れない。横位に研磨されている。３に近接したSK－06及びSD－09からの出土。５は頸部～肩部の分厚い破片と底部を遺存する個体である。口頸部内面が磨かれている以外は篦削りによって仕上げられている。D1－29区出土。６は大型の甕の口縁部破片である。７と同一個体である可能性も考慮したが、復元口径が異なっており別個体と判断した。器面には内外面とも刷毛目が施



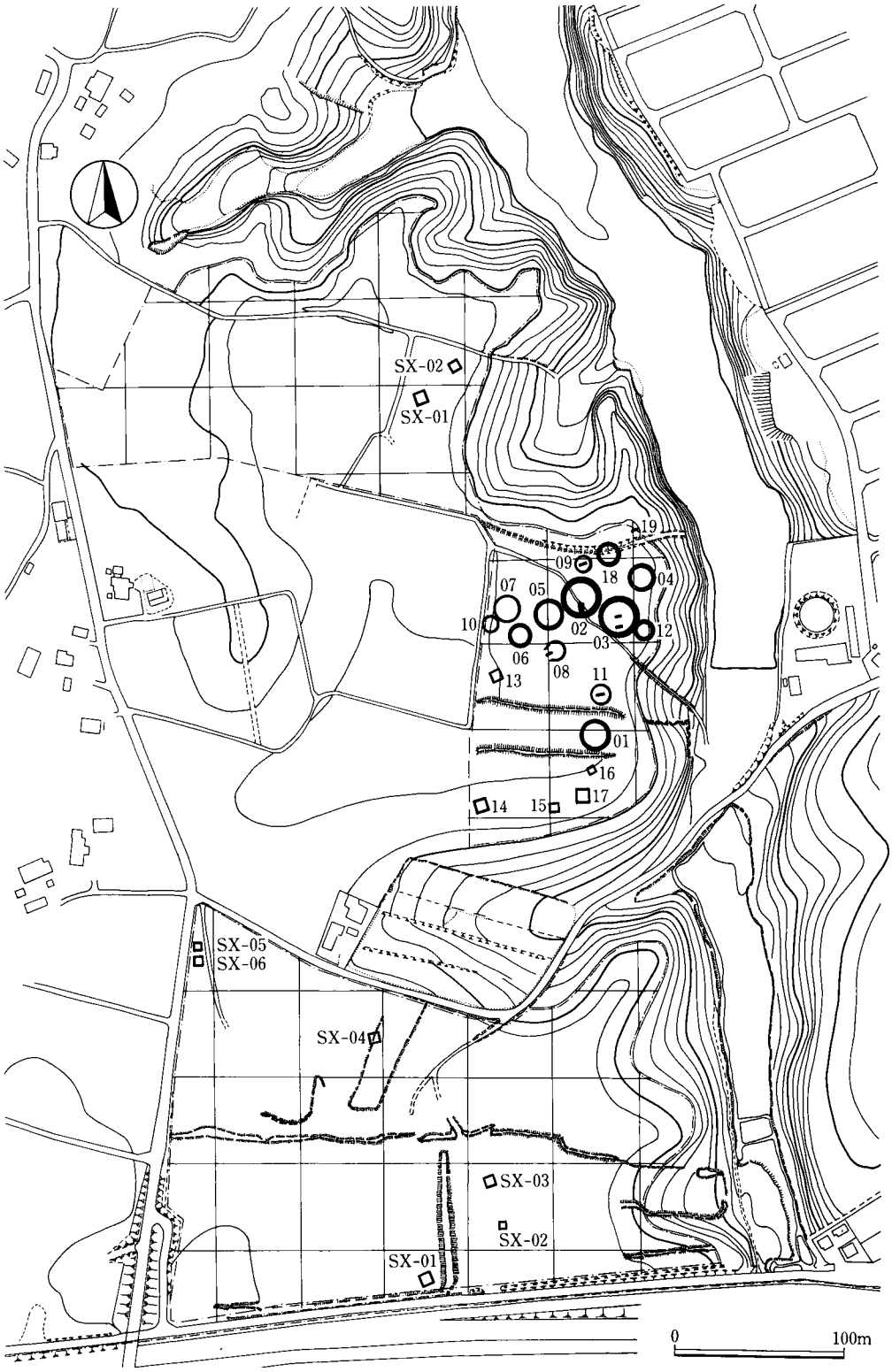
第170図　古墳時代前期の土器出土位置（1/2,000）



第171図　池花遺跡出土古墳時代前期の土器（1/4）

されており（外面は斜位、内面は横位）、また外面にはその上に沈線状の篦跡が残っている。E1－30区出土。7は6と同種の甕と思われる土器の肩部～底部である。最大径は胴部のやや下位に位置し、また口径も比較的小さいため、口縁形状が不明ながら器種としては壺と考えておくべきかも知れない。なお胴部中位は接合しない。外面にはほぼ全面に亙って刷毛目が施されているが、篦状工具によって所々消されている。D1－29区出土。

8～11は高杯である。8、9の両者は杯部の形状が口径に比してやや深めに作られていることで共通する。また内外面とも丁寧に篦磨きで仕上げられ、赤彩の痕跡もよく残っている。8はE1－20～40区、9はD1－29区の出土。一方10、11は口径がやや大きく相対的に杯部が浅い形状を示し、脚部のみならず杯部にも篦削りで仕上げられた部分がある。また11は脚部下端と杯部上端に刷毛目を残し、杯部内外面とも篦削りで仕上げられている。10、11の2個体には赤彩の痕跡は窺われない。10はF2－19区、11はE1－41区の出土である。



第172図　古墳時代後期～奈良時代の内黒田（1/4,000）

3．古墳時代後期

①概観（第172図）

池花南遺跡に群集墳が形成されている。それら以外に住居跡等の遺構は全く検出されず、古墳外の地点から遺物が検出されることもなかった。古墳は、墳丘あるいはその痕跡を遺存していたものは5基（ＳＸ－01、02、03、04、12）であったが、帆立貝形古墳と推定されるものを含めて円墳13基が築かれ、また墳丘も周溝も検出されないが埋葬施設が単独で検出されたもの1基があり、計14基を数える。遺跡内の分布は北半部に集中し、最も規模の大きいものが台地縁部寄りに営まれている。また遺跡南縁には古墳時代後期の古墳は見られない。遺跡西側の台地奥部については、試掘を行っているが遺構の検出はなく、古墳群の分布は途切れる。古墳の規模は小規模なものが多く、最大の例で周溝内縁径約18mであり、最小の例では周溝内縁径6m強を測るに過ぎない。当遺跡群付近では最も小さな古墳が群集する一群である。

後期群集墳としては以前から「物井古墳群」、「千代田古墳群」が知られており、また物井地区の調査によって次々に新発見の古墳が確認されている。ここで報告する池花南遺跡の古墳群はそれらと一体となった一大群集墳（以下本書ではそれら全体を〝物井古墳群〟と総称する）を形成し、その最も西側に位置する支群として位置付けられるものである。

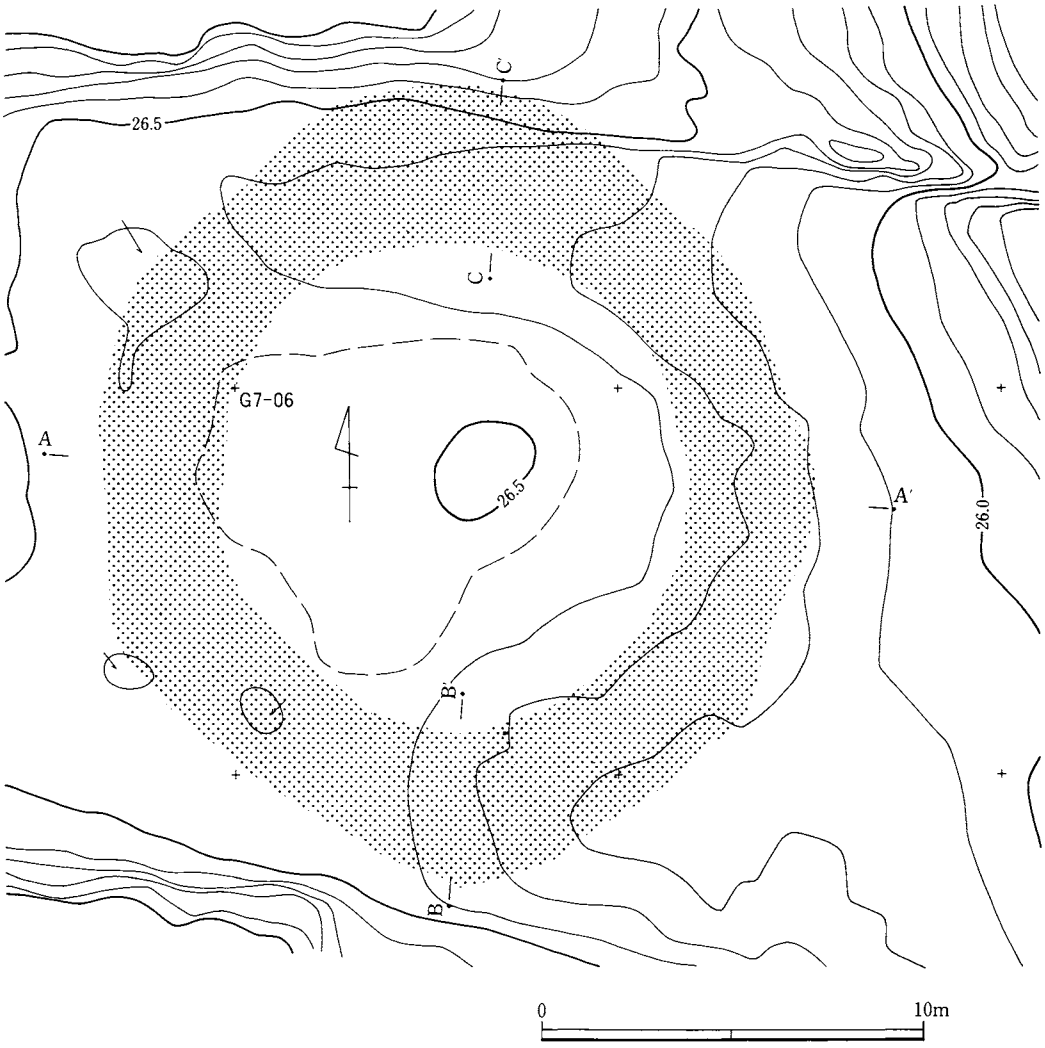
②池花南遺跡 SX－01

調査前の状況（第173図）　かつて近世の塚、「池花塚」として認識されていた地点である。遺跡を横断する形で帯状に削平されて牧草地となっていた部分に位置したため、低平な地膨れとしてわずかに痕跡を遺存しただけである。盛土部分は全く残さず、墳丘築成時の旧表土層も認められない。ただ削平された時期が新しかったため、地表面においても土色及び草色の違いで周溝の範囲が確認された。

平面形及び周溝（第174図、図版76－1、3）　円墳である。周溝内縁径12.3～12.7m、外縁径18.4～20.9mを測る。周溝断面形は皿状を呈し、あまり深くは掘り込まれていないが、墳丘側の立ち上がりは急斜をなす。なお周溝覆土中位に焼土の混入が目立った。

埋葬施設及び付帯施設　検出されなかった。

出土遺物（第194図1、図版96）　周辺が縄文時代遺物包含層であったため、縄文土器及び縄文時代の石器の混入が目立ったが、古墳に伴う遺物は南西の周溝内から杯1点が出土しただけである。杯は周溝底から僅かに浮いた位置にあった。口縁部がほぼ直立し、端部がやや外反するものである。赤彩の痕跡は観察されなかったが、赤彩されていた可能性は充分考えられる。口縁外面と内面は丁寧に研磨される。

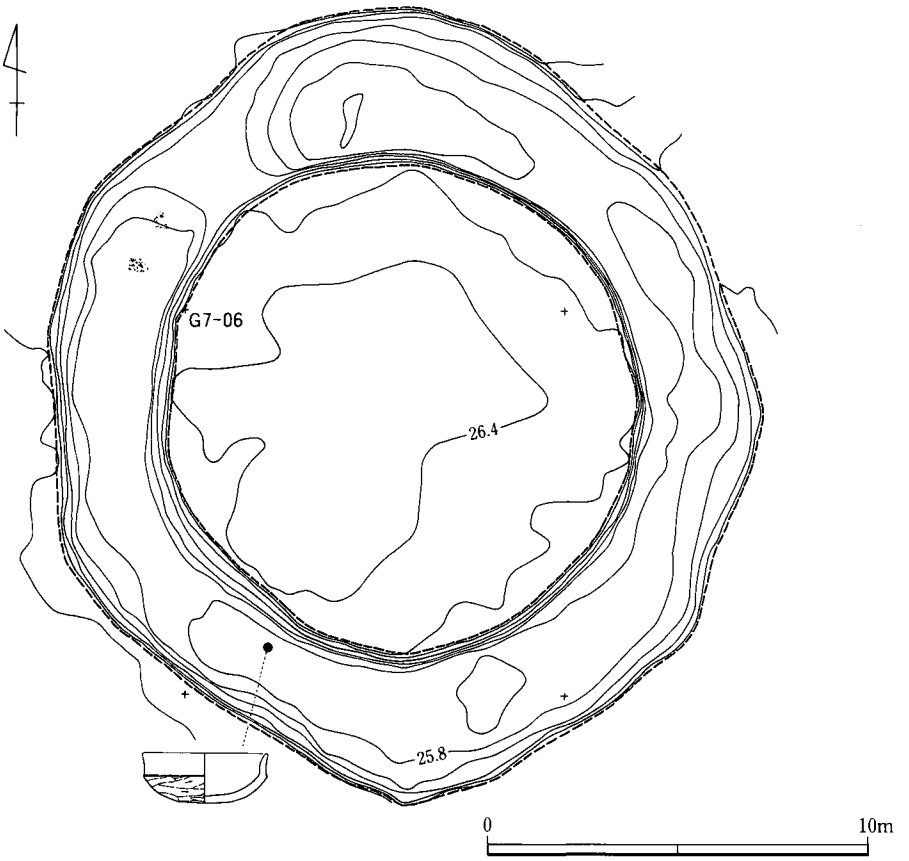


第173図　池花南遺跡 SX-01 調査前測量図（1/200）

③池花南遺跡 SX－02

調査前の状況（第176図左、図版77－１）　深い篠竹藪中に所在したためか、調査に伴って伐採を行うまであまりその存在を知られていなかった。当遺跡中では最も高く墳丘を遺存していた古墳である。しかしこの古墳を境にして南西側ではかつて耕作がなされていたらしく、本墳の墳丘も西側及び南側の２面を削られている。対して中央から北東側の遺存は良好であった。墳丘中央と周辺の比高はおよそ1.4m を測る。

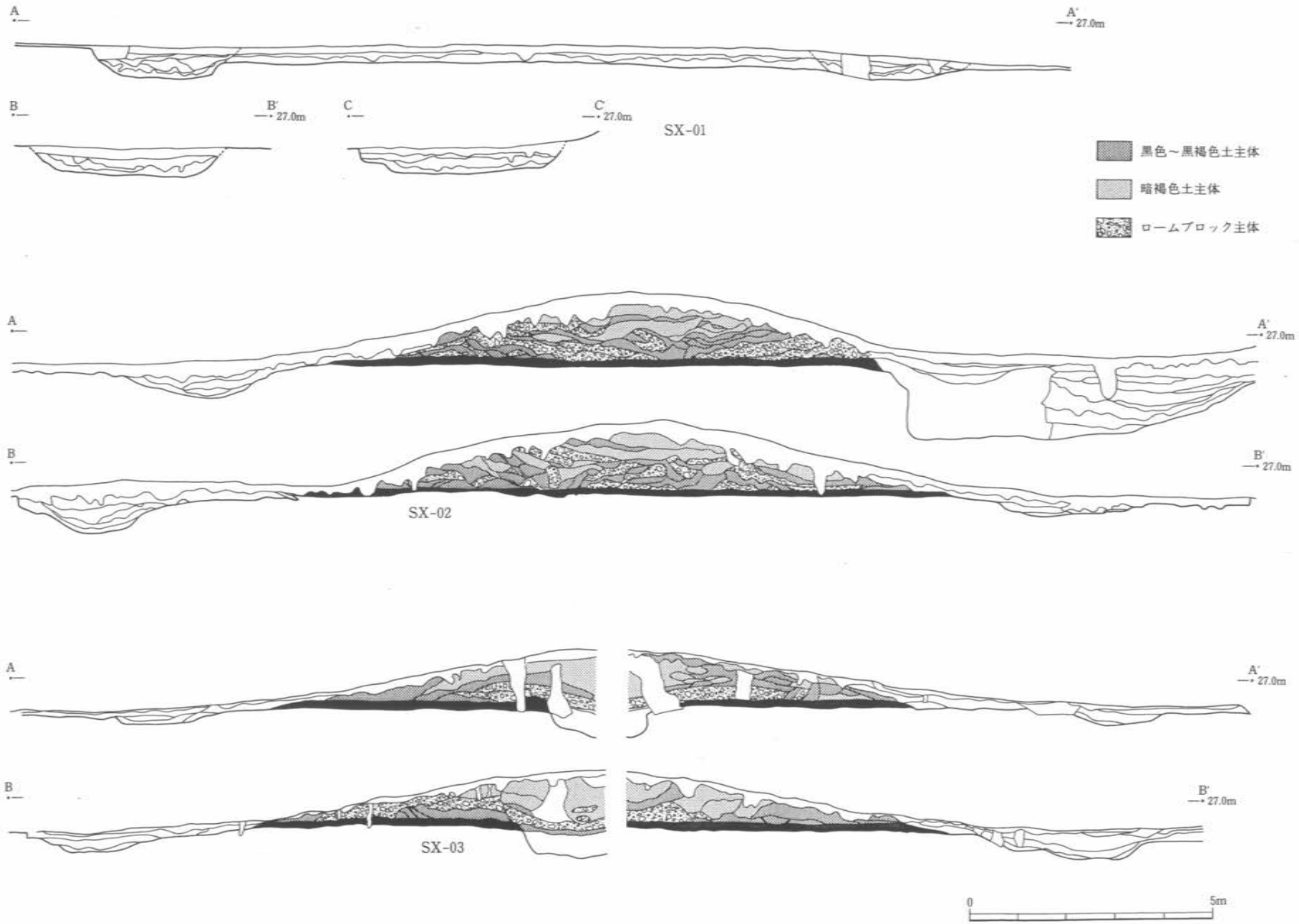
平面形及び周溝（第176図右、図版77－２）　周溝は２箇所で途切れているが円墳である。周溝内縁径17.8～18.4m、周溝外縁径22.9～24.0m を測る。周溝幅は２～３ m あるが、掘り込みは石室前庭を除いて深くなく、最深で0.7m 程である。また深さは均一ではない。旧表土面は墳



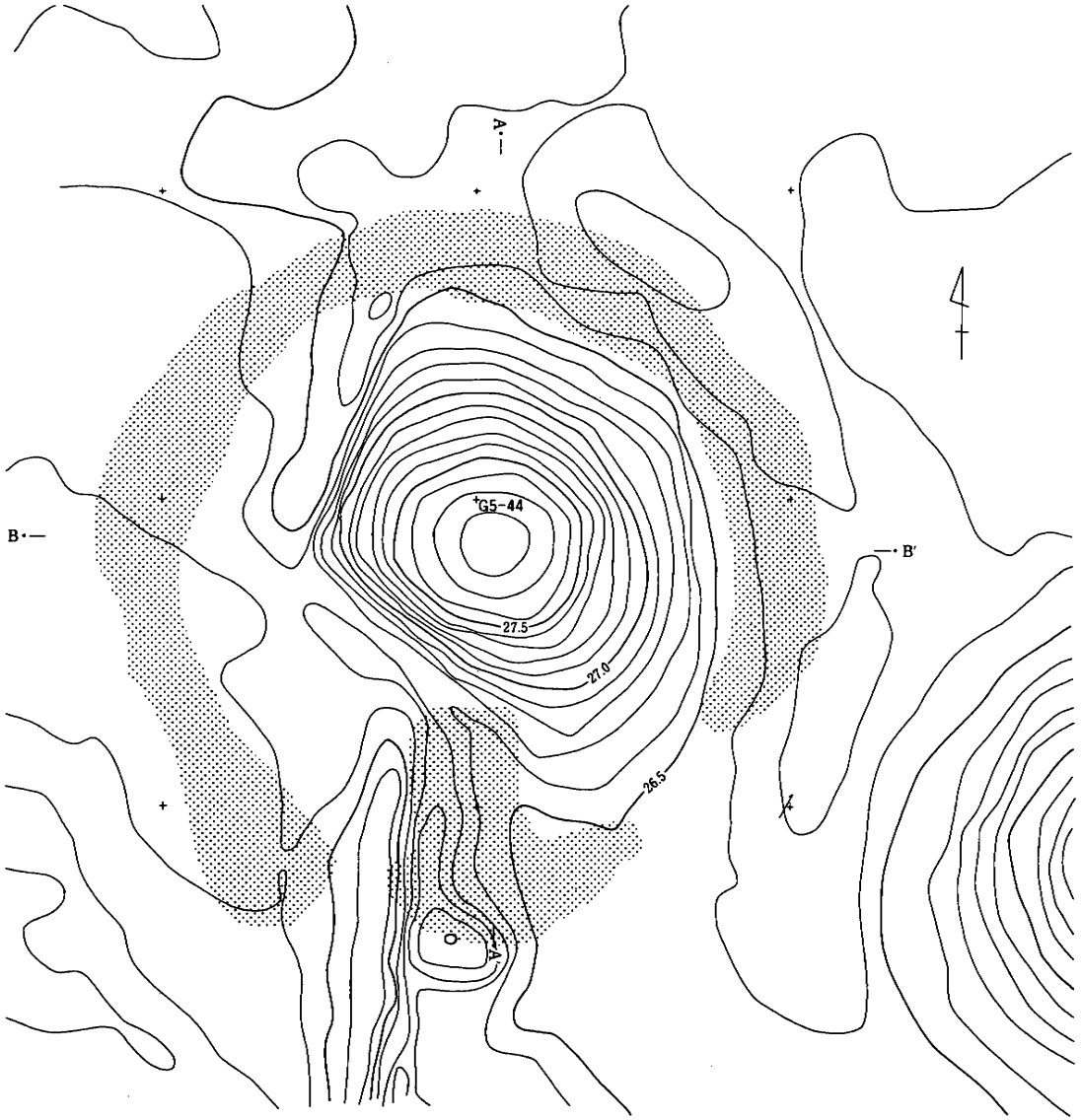
第174図　池花南遺跡 SX-01 周溝測量図（1/200）

丘削平と同時に南西側を削られている。遺存度の高い部分における周溝内縁から旧表土面外縁までの距離は1.1～3.7m で、その比高はおよそ0.3m 前後である。石室前庭の左右はいずれも周溝が途切れているが、東側の方が大きく途切れ、あるいは SX－03を意識した可能性がある。また西側の周溝が一部幅狭となっているのは明らかに SX－05の存在が意識されていよう。そうすると群中でも新しく築成された古墳ということになる。

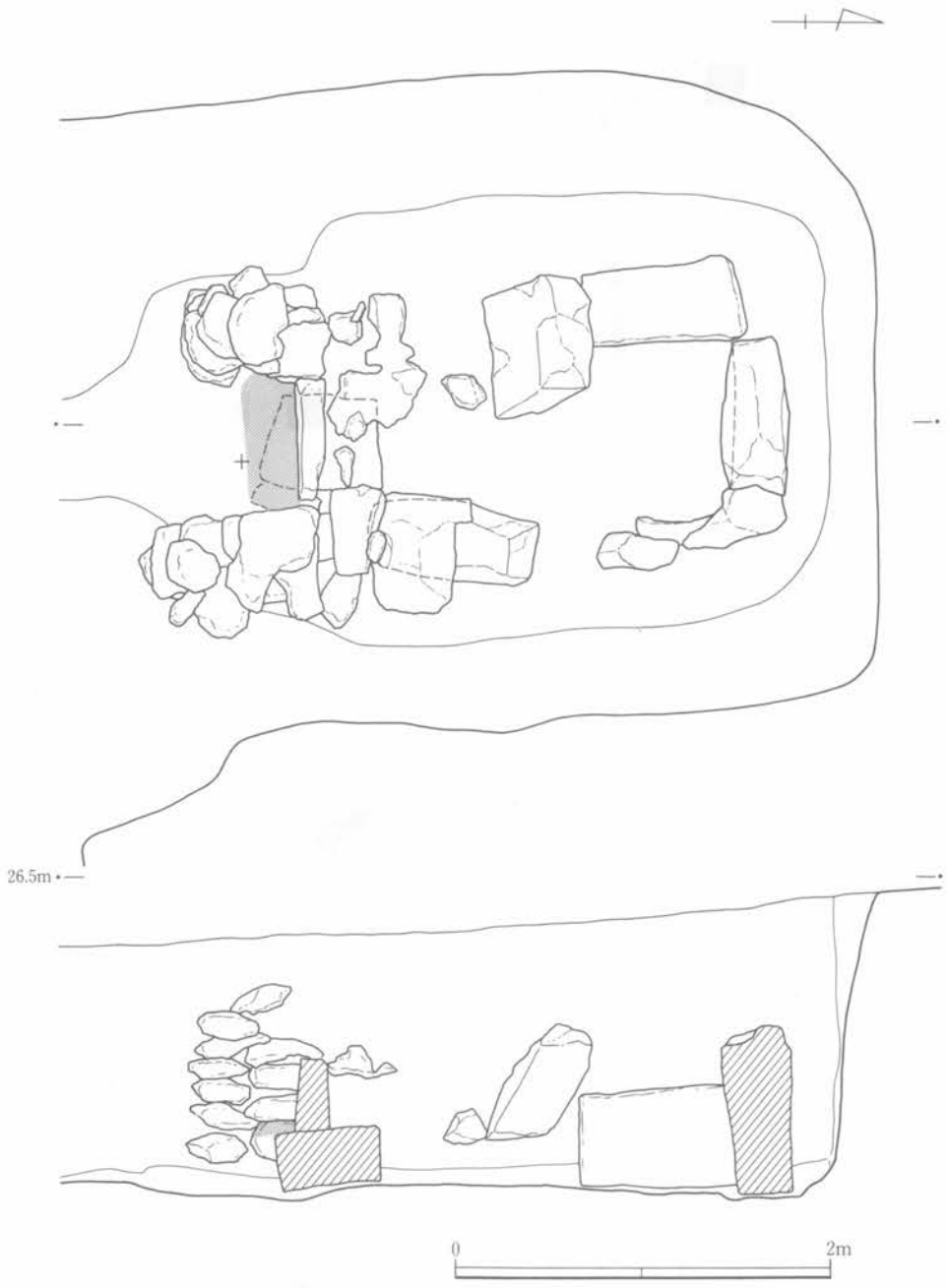
第１主体部（第177図～第178図、図版78－２）　ほぼ正確に南面する横穴式石室である。盗掘によると思われる破壊が著しく旧状を留めない。土層断面観察では玄室部分を正確に狙って盗掘されたことが知れる。遺存した部分から判断するに両袖式の横穴式石室で、きわめて小規模なものである。玄門閉塞石下に置かれた石から奥壁までで計測した玄室内法長は1.83m、両側壁が原位置にあると思われる地点で測った玄室内法幅は0.90m を測る。使用石材は脆い黄灰色～黄褐色の軟質砂岩で、玄室には切石を用いている。玄室床面には褐色粘質土が敷かれていたらしい。羨道の遺存度も良好ではないが側壁には偏平かつ不整形の石材を積み上げている。本来的にもあまり整美なものではあるまい。裏込は概ね白色粘土とローム土を互層にして突き



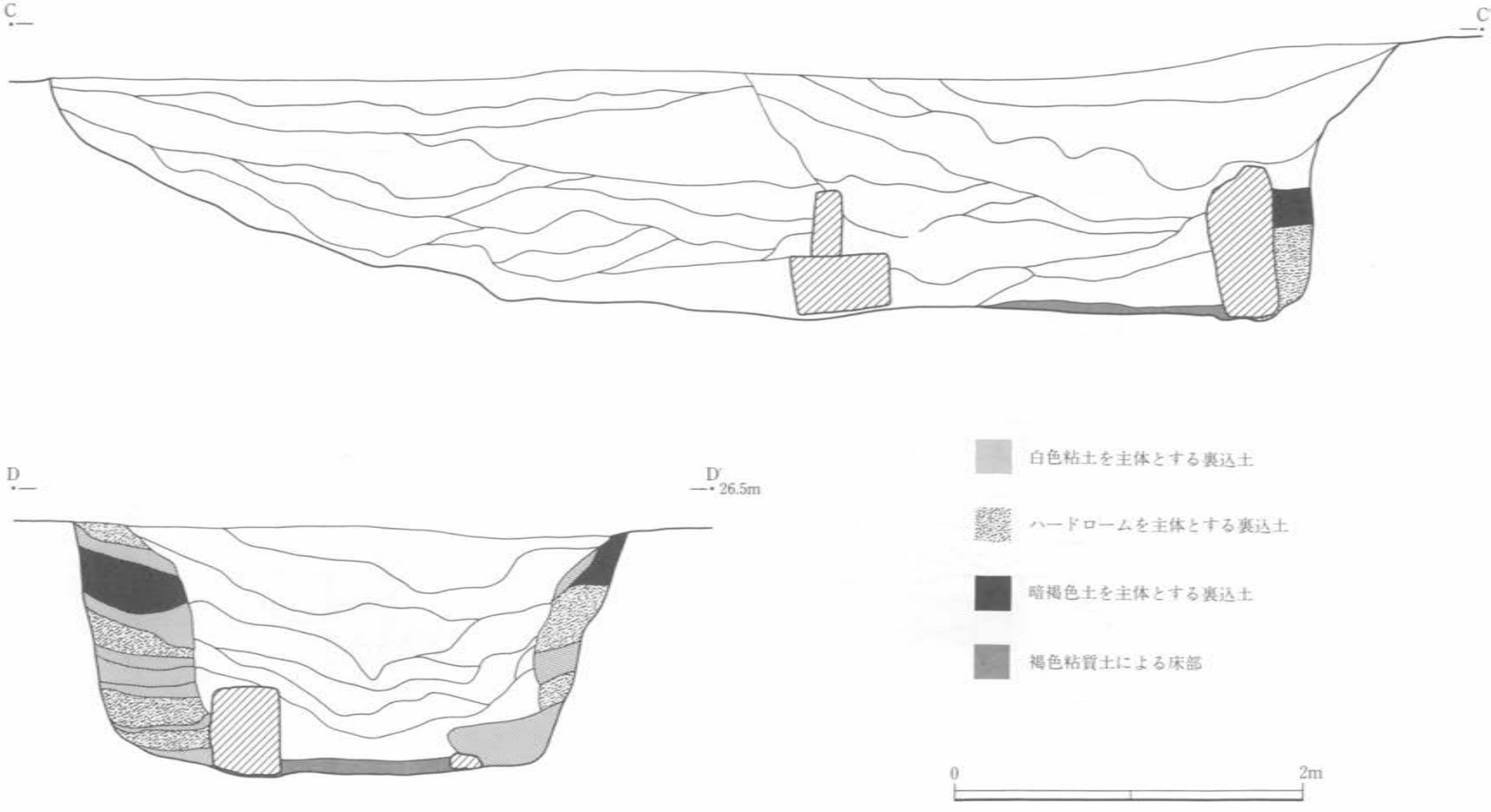
第175図　池花南遺跡 SX-01・SX-02・SX-03 土層断面（1/100）



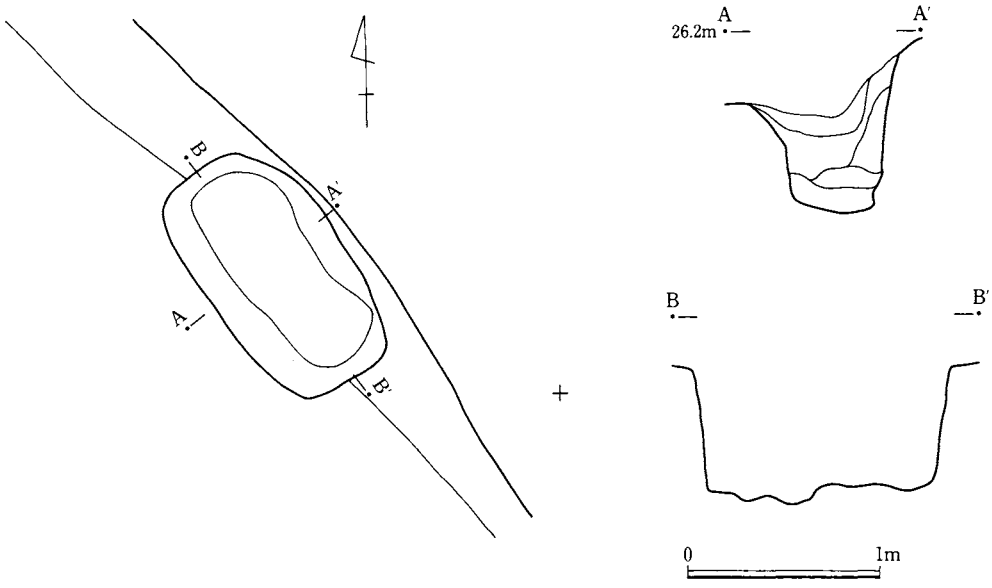
第176図　池花南遺跡 SX-02 調査前測量図(左)・周溝測量図(右) (1/200)



第177図　池花南遺跡 SX-02 第 1 主体部（横穴式石室）（1/40）



第178図　池花南遺跡 SX-02 第 1 主体部土層断面（1/40）



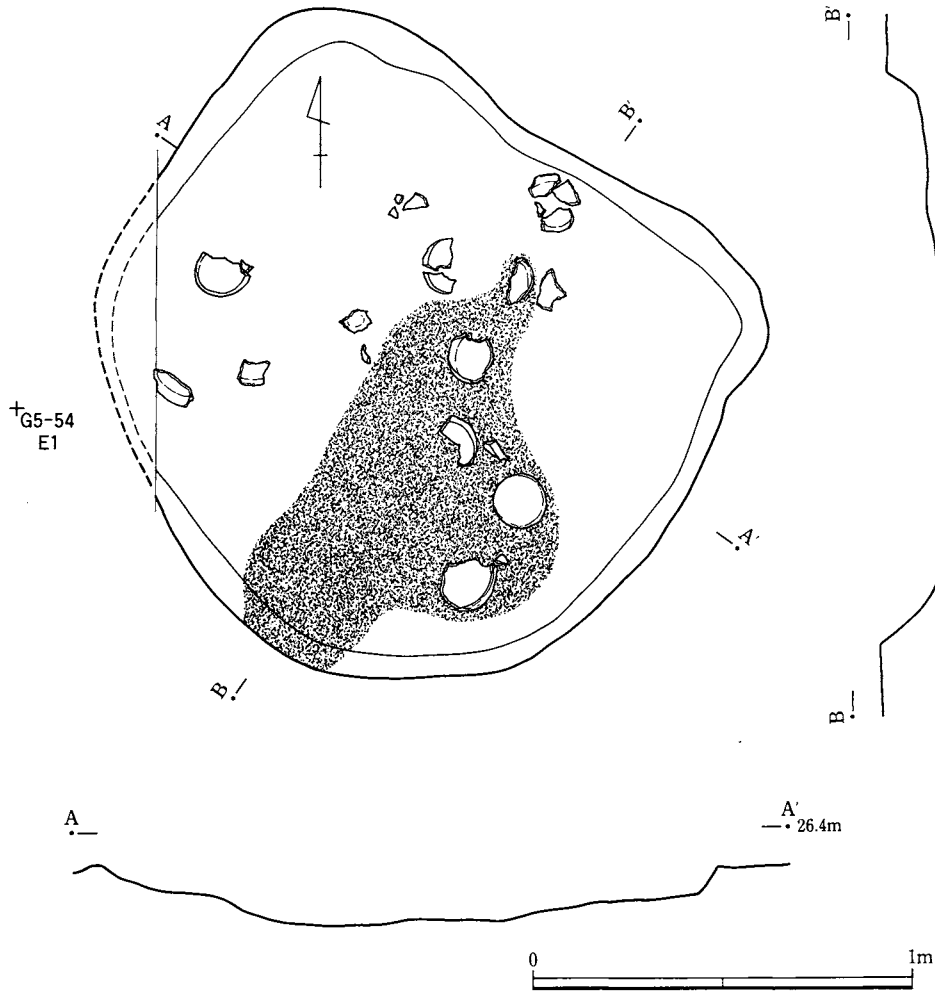
第179図　池花南遺跡 SX-02 第２主体部（周溝内土壙）（1/40）

固めている。掘り方は墳丘側地山面から最深1.63m 掘り込まれているが、石室前面の周溝は掘り方から連続して前庭部となっており、なだらかに傾斜して浅くなる。あるいは階段状に整形されていたかも知れないが明言できるほどの痕跡はない。石室内外は遺物多数（後述）。

第２主体部（第179図、図版79－３、４）　周溝内土壙である。第１主体部の西、周溝南西部の墳丘側に位置する。ほぼ長方形を呈するもので、有天井構造を持つものではない。長径1.36m 短径0.74m、墳丘側からの深さ0.82m を測る。覆土は最下位に小ハードロームブロックを混じたローム土層があるが、明らかに人為的埋土と判断され、棺床と考えられる。その上位にはローム粒を混入した暗褐色～黒褐色土が堆積する。出土遺物はない。

竪穴遺構（第180図、図版79－１、２）　旧表土面上南東寄りに皿状の浅い掘り込みを持つ遺構が検出された。多数の土師器杯と焼土ブロックが出土している。遺構は不整隅丸方形を呈しており、長径1.65m、短径1.55m、最深0.16m を測る。この遺構は、出土土器が石室内出土土器と接合する事実から見て古墳に伴うことは明確である。また墳丘築成前に営まれていることから造墓時の何らかの祭祀施設と考えるべきであろう。

遺物出土状況（第181図～第183図）　多数の玉類、鉄製品、土師器、須恵器が出土している。古墳に伴うそれらの遺物が出土したのは主として第１主体部（石室及び前庭）と竪穴遺構からであり、殊に玉類と鉄製品については第１主体部内に限られている。第１主体部内の玉類及び鉄製品の出土状況に関しては、分布傾向はほぼ一致し、また玄室部分の土層堆積と合致している。これは盗掘後の二次堆積に起因することは明らかである。土器群については、須恵器が主として石室及びその前庭に、土師器（すべて杯）が主として竪穴遺構及びその周辺に分布した。

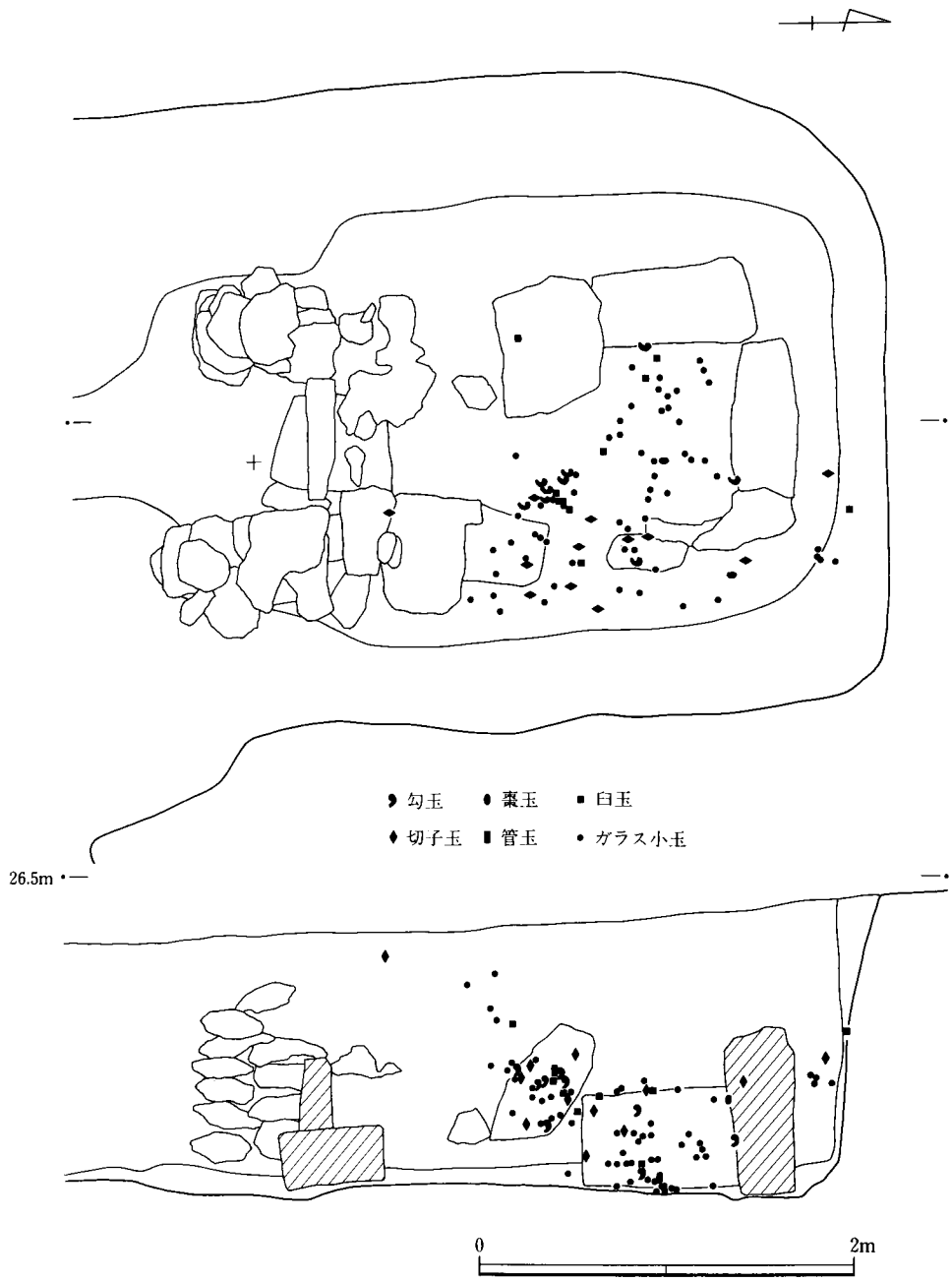


第180図　池花南遺跡 SX-02 旧表土上面竪穴遺構（1/20）

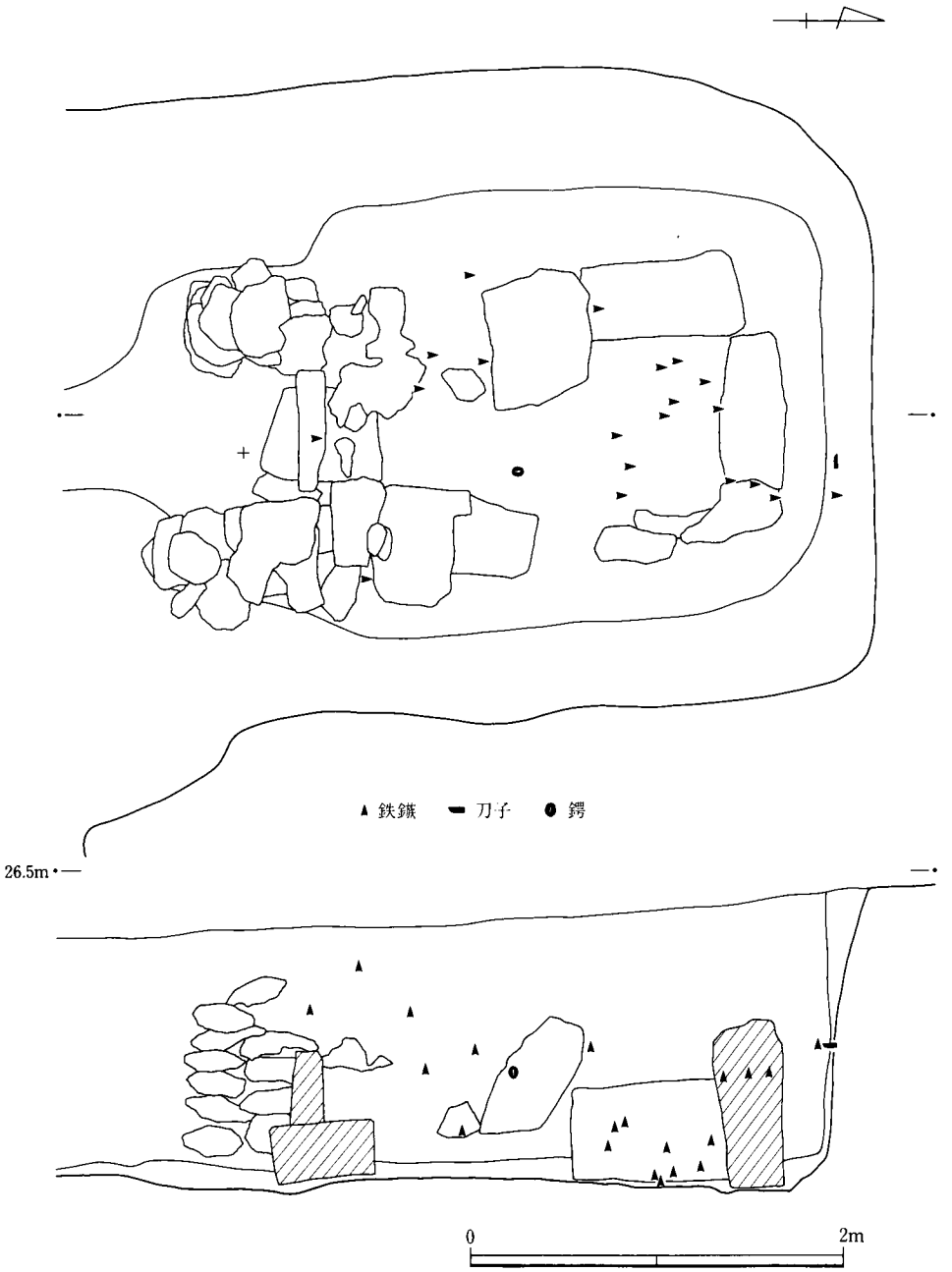
これは前者が副葬品として、後者が造墓時の祭祀に供されたものとしての性格を顕現していよう。しかし玄室部分の土器は玉類などと同様原位置を留めていない。なお周溝内からは古墳に伴う目立った遺物は出土しなかった。

玉類（第184図、第185図、図版97）　勾玉９点、切子玉12点、管玉１点、棗玉２点、臼玉９点、ガラス小玉87点がある。一点毎の詳細については計測表に譲る。勾玉は７点が瑪瑙製、２点が水晶製であるが、石材による形状の相違は認められない。腹側から見て右側から穿孔されているもの６点（１～６）、左側から穿孔されているもの３点（７～９）がある。切子玉は11点までは水晶製であるが、21は（細粒）凝灰岩製で稀少な例と言えよう。すべて片側穿孔である。

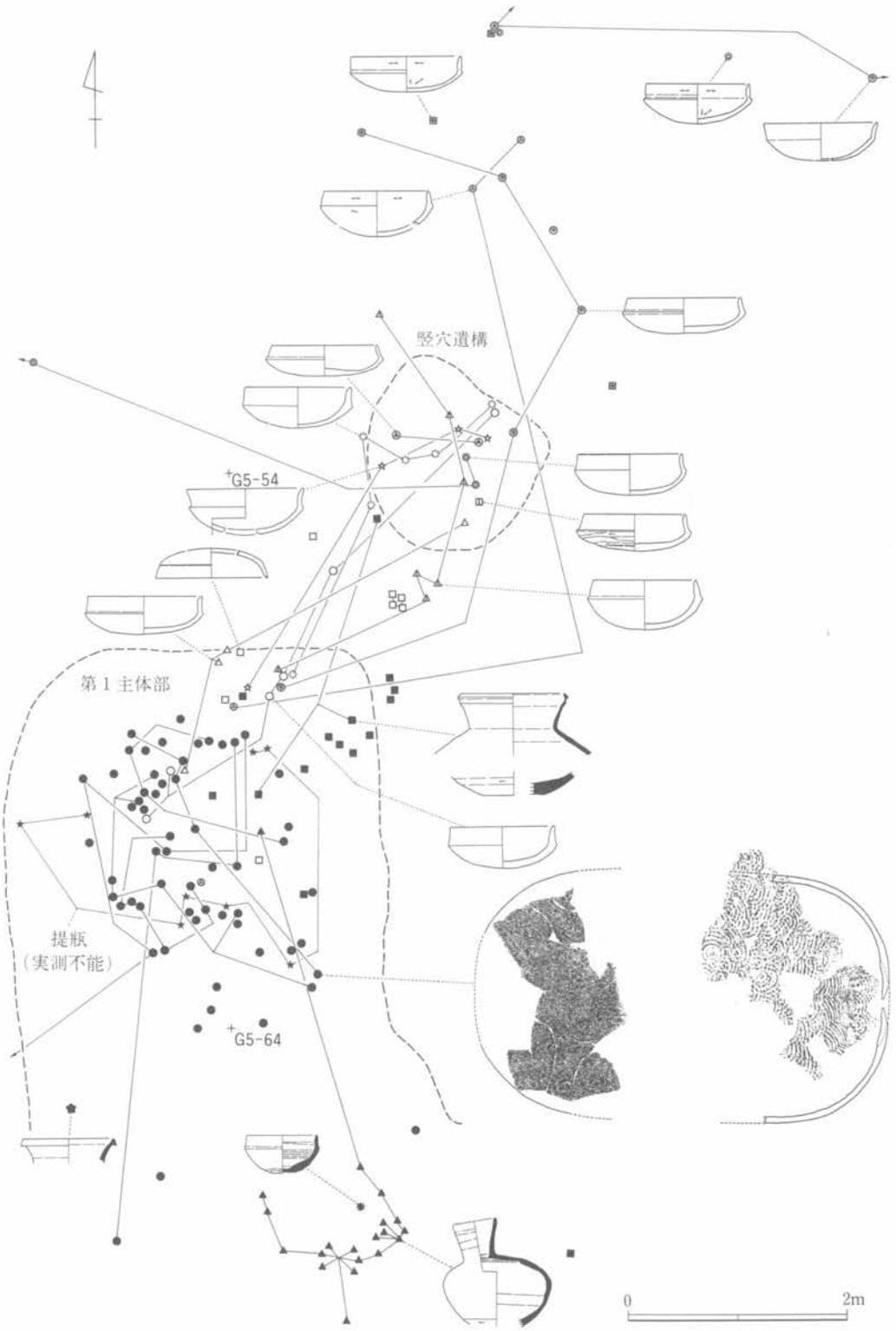
金属製品（第186図、第187図、図版98）　すべて鉄製武具と工具で、鉄鏃、直刀の鍔、刀子、性格不詳の環状鉄製品がある。盗掘の結果の残欠できわめて断片的な資料しか残さない。鉄鏃



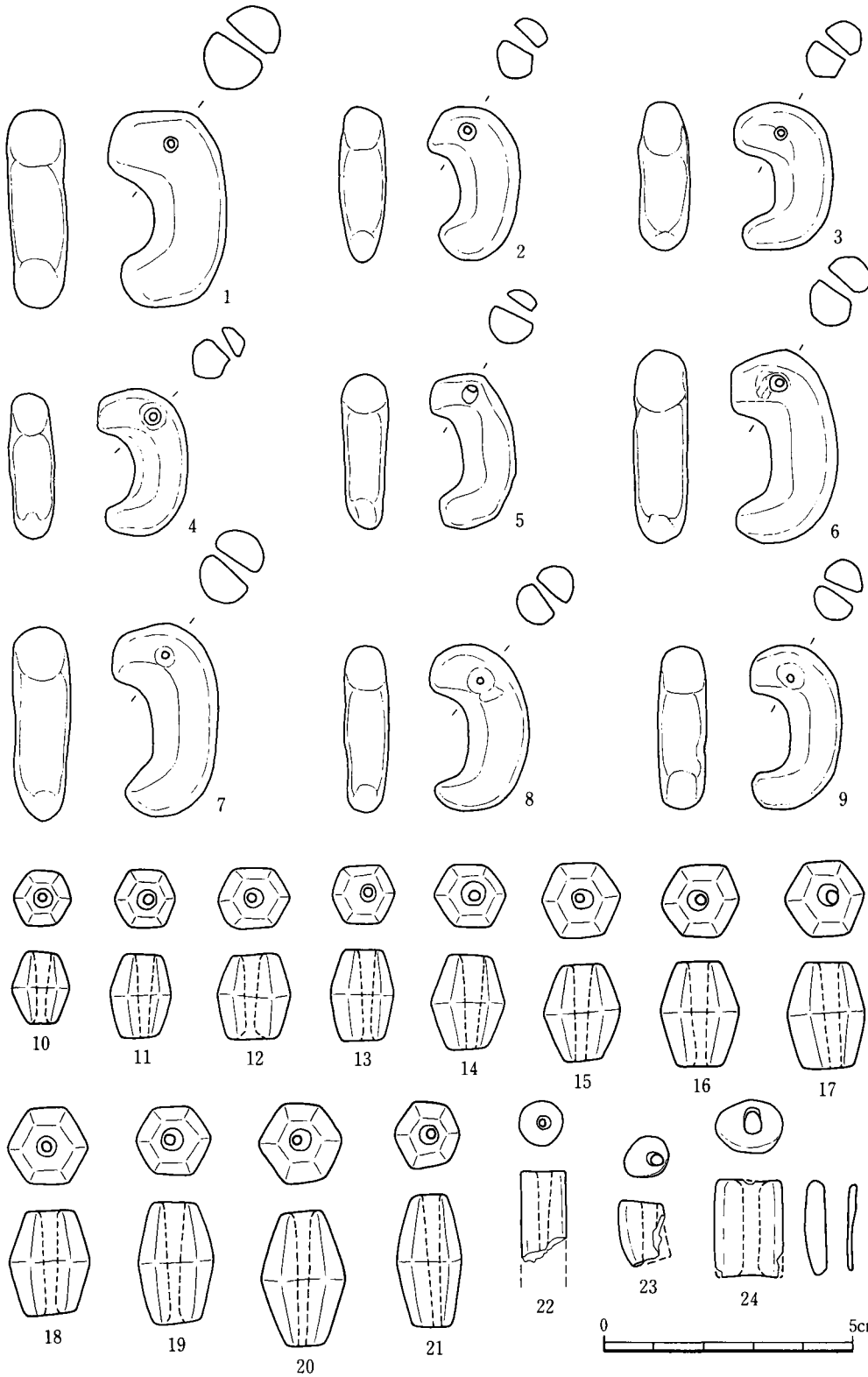
第181図　池花南遺跡 SX-02 第 1 主体部玉類出土状況（1/40）



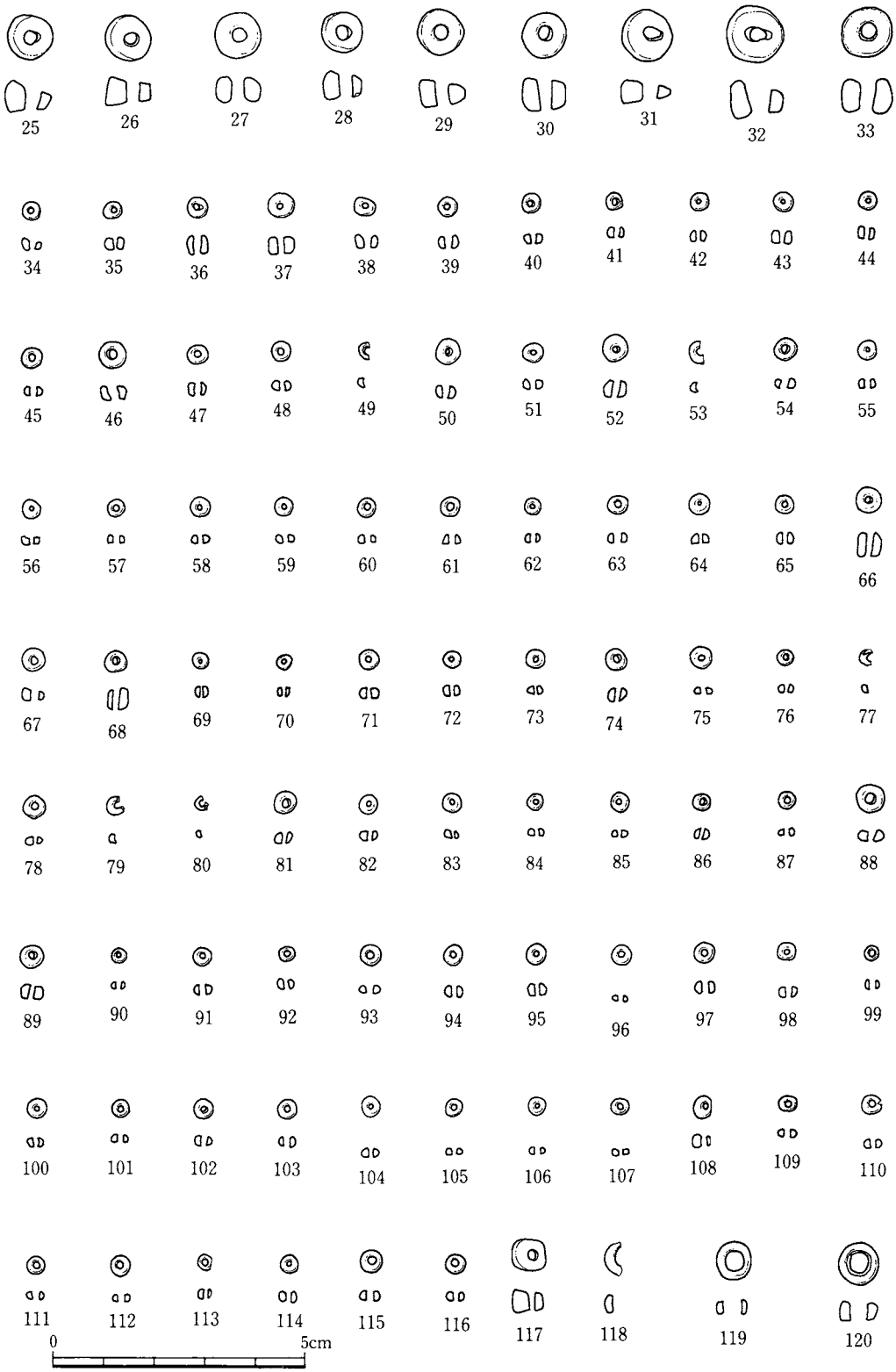
第182図　池花南遺跡 SX-02 第 1 主体部鉄製品出土状況（1/40）



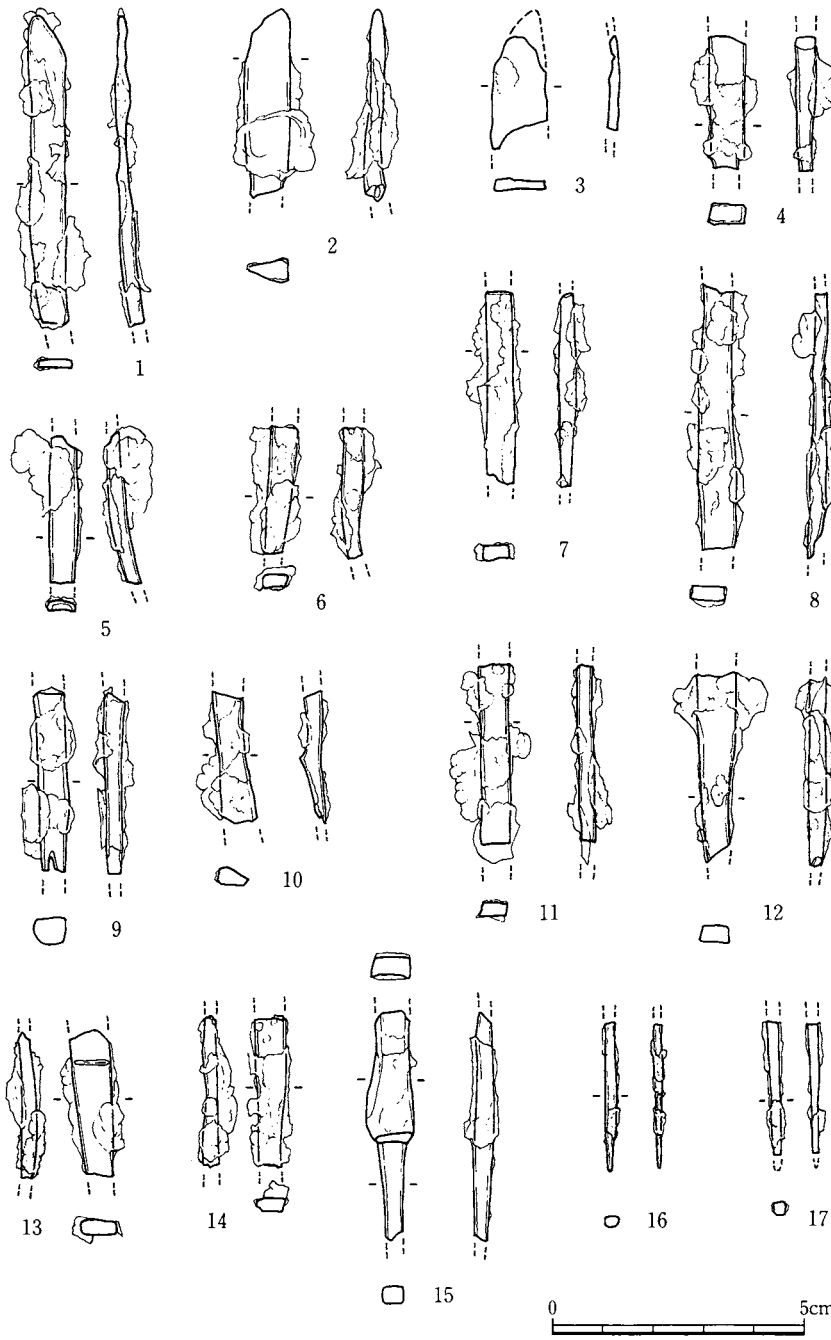
第183図　池花南遺跡 SX-02 土器出土状況（1/60）



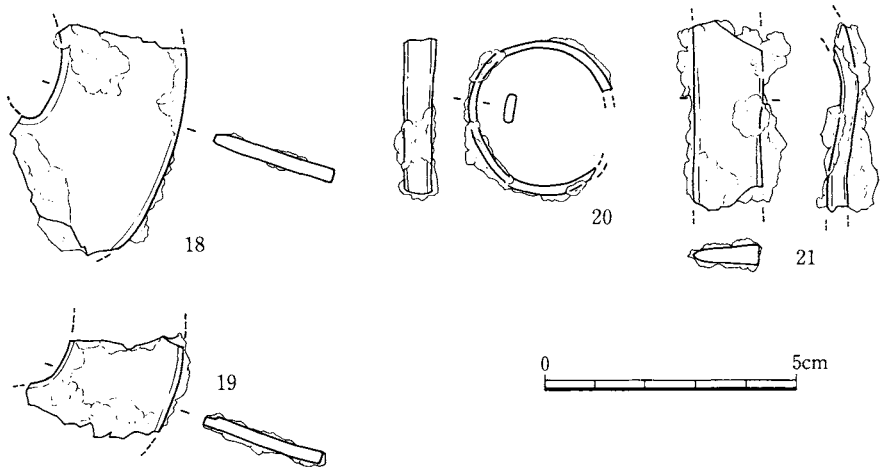
第184図　池花南遺跡 SX-02 出土玉類(1)（3/4）



第185図　池花南遺跡 SX-02 出土玉類(2) (3/4)



第186図　池花南遺跡 SX-02 出土鉄製品 (1) (3/4)



第187図　池花南遺跡 SX-02 出土鉄製品(2)（3/4）

は片刃矢式の棘篦被鏃であるが、完形品はない。18、19は鍔断片で、同一個体の可能性はあるが判然としない。20は性格不詳の環状鉄製品である。太刀金具であろうが、完全な環状を呈しており、断定できない。21は刀子の断片であろう。

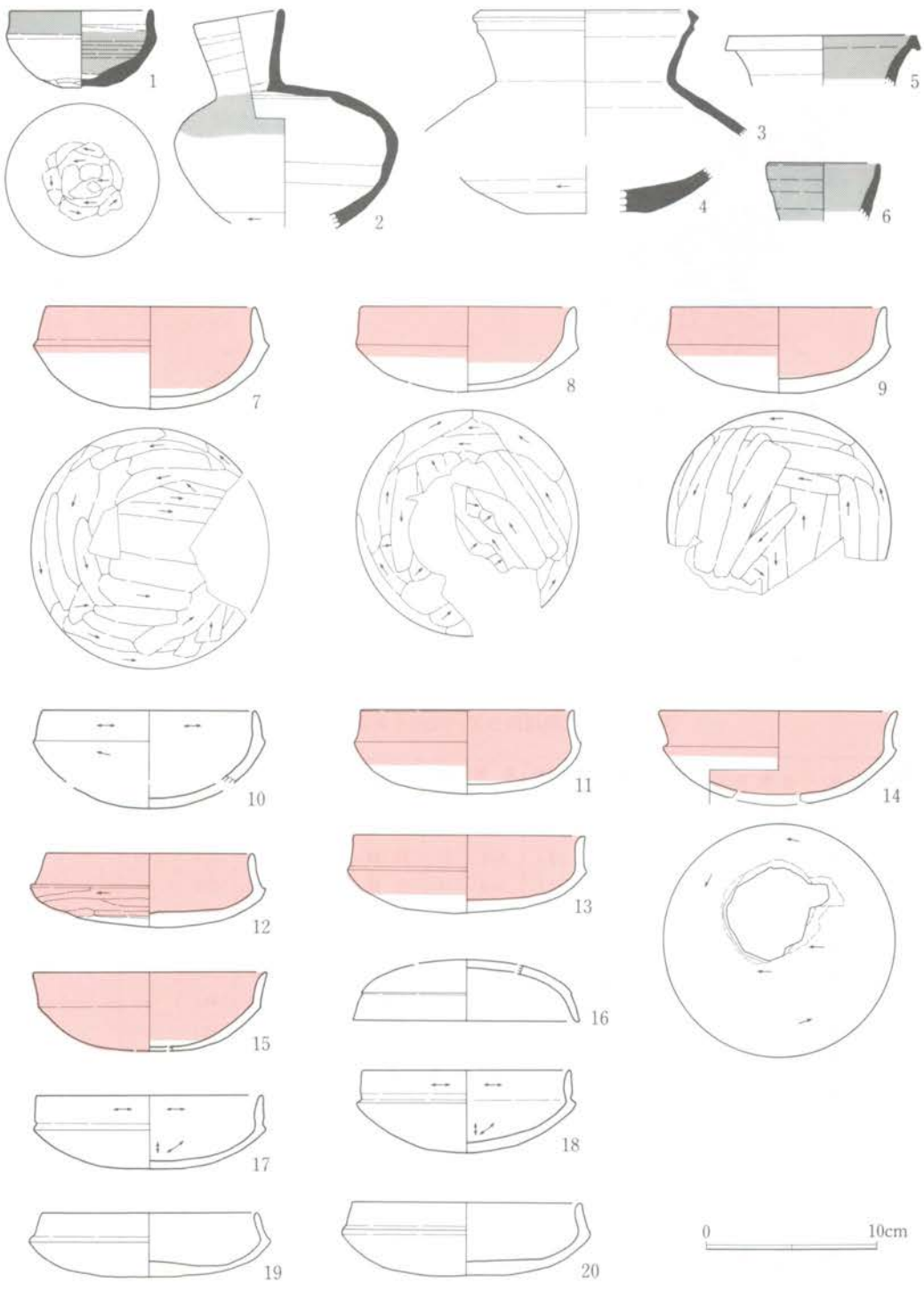
土器（第188図、第189図、図版95、96－１）　須恵器６～７個体、土師器14個体が出土している。１～６及び21が須恵器である。１は小型の杯とするが、受部の形状が土師器的なもの。口径に比して器高は高い。底部外面は手持ち篦削りによって仕上げられている。２は平瓶で、底部を欠失する。以上２個体は石室前庭に置かれていたものと思われる。３、４は同一個体の

第12表　池花南遺跡ＳＸ－02出土玉類計測表(1)

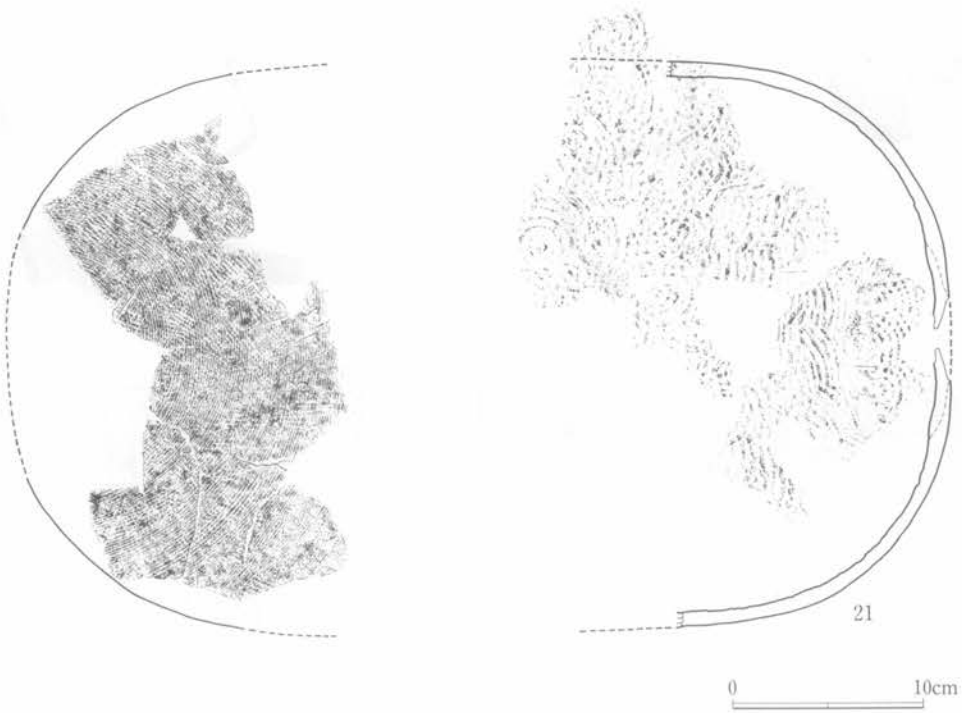
挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長mm	最大幅mm	最大厚mm	重量g	挿図番号	器種	遺物番号	石材	最大長mm	径mm		重量g
1	勾玉	ＳＸ－02－337	水晶	40.1	22.0	12.2	16.57	13	切子玉	ＳＸ－02－346	水晶	18.1	12.9		3.90
2	勾玉	ＳＸ－02－228	水晶	31.1	17.9	9.6	7.24	14	切子玉	ＳＸ－02－261	水晶	19.1	14.6		4.56
3	勾玉	ＳＸ－02－227	瑪瑙	30.1	18.2	10.0	7.32	15	切子玉	ＳＸ－02－288	水晶	19.6	15.8		5.77
4	勾玉	ＳＸ－02－304	瑪瑙	29.1	17.9	8.8	5.55	16	切子玉	ＳＸ－02－314	水晶	21.0	15.5		6.42
5	勾玉	ＳＸ－02－292	瑪瑙	29.9	17.4	9.1	5.26	17	切子玉	ＳＸ－02－233	水晶	21.8	16.0		6.78
6	勾玉	ＳＸ－02－242	瑪瑙	37.8	21.3	10.3	11.57	18	切子玉	ＳＸ－02－294	水晶	20.8	16.4		7.25
7	勾玉	ＳＸ－02－426	瑪瑙	37.4	21.2	11.0	10.73	19	切子玉	ＳＸ－02－285	水晶	24.0	15.1		7.20
8	勾玉	ＳＸ－02－238	瑪瑙	32.6	18.8	9.4	7.54	20	切子玉	ＳＸ－02－226	水晶	26.6	17.1		9.18
9	勾玉	ＳＸ－02－240	瑪瑙	31.8	13.4	10.4	7.64	21	切子玉	ＳＸ－02－336	凝灰岩	26.1	13.6		5.54
								22	管玉	ＳＸ－02－224	碧玉	18.1	9.2		2.54
				最大長mm	径mm		重量g								
												最大長mm	長径mm	短径mm	重量g
10	切子玉	ＳＸ－02－244	水晶	14.0	11.5		2.27								
11	切子玉	ＳＸ－02－80	水晶	17.0	12.0		3.12	23	棗玉	ＳＸ－02－360	琥珀	13.6	1.0	0.9	0.55
12	切子玉	ＳＸ－02－283	水晶	17.0	14.3		4.54	24	棗玉	ＳＸ－02－302	琥珀	19.0	13.7	10.6	1.83

第13表　池花南遺跡ＳＸ－02出土玉類計測表(2)

挿図番号	器種	遺物番号	石材	外径 mm	内径 mm	最大厚 mm	重量 g	挿図番号	器種	遺物番号	石材	外径 mm	内径 mm	最大厚 mm	重量 g
25	臼玉	ＳＸ－02－248	滑石	9.3	2.9	6.4	0.74	73	小玉	ＳＸ－02－364	鉛ガラス	4.0	1.3	2.1	0.03
26	臼玉	ＳＸ－02－255	滑石	9.1	3.1	6.1	0.63	74	小玉	ＳＸ－02－419	鉛ガラス	4.5	1.4	2.6	0.06
27	臼玉	ＳＸ－02－277	滑石	9.3	3.3	6.9	1.50	75	小玉	ＳＸ－02－420	鉛ガラス	4.1	1.3	2.1	0.04
28	臼玉	ＳＸ－02－284	滑石	8.8	2.8	7.8	0.70	76	小玉	ＳＸ－02－421	鉛ガラス	3.8	1.2	2.0	0.03
29	臼玉	ＳＸ－02－225	滑石	10.2	2.5	5.6	0.68	77	小玉	ＳＸ－02－423	鉛ガラス	—	—	—	0.04
30	臼玉	ＳＸ－02－313	滑石	10.2	2.8	7.0	0.79	78	小玉	ＳＸ－02－425	鉛ガラス	4.3	1.6	2.3	0.05
31	臼玉	ＳＸ－02－386	滑石	9.7	3.1	5.8	0.72	79	小玉	ＳＸ－02－428	鉛ガラス	4.0	—	—	0.03
32	臼玉	ＳＸ－02－424	滑石	10.2	3.3	8.5	1.74	80	小玉	ＳＸ－02－429	鉛ガラス	—	—	—	0.01
33	臼玉	ＳＸ－02 一括	滑石	11.2	3.1	8.1	2.15	81	小玉	ＳＸ－02－433	鉛ガラス	4.9	1.4	2.9	0.08
34	小玉	ＳＸ－02－220	鉛ガラス	3.7	1.1	2.2	0.04	82	小玉	ＳＸ－02－434	鉛ガラス	4.1	1.2	3.0	0.06
35	小玉	ＳＸ－02－221	鉛ガラス	3.8	1.1	2.7	0.04	83	小玉	ＳＸ－02－436	鉛ガラス	3.8	1.0	2.3	0.03
36	小玉	ＳＸ－02－222	鉛ガラス	4.6	1.1	3.4	0.10	84	小玉	ＳＸ－02－437	鉛ガラス	3.5	0.8	1.9	0.01
37	小玉	ＳＸ－02－234	鉛ガラス	5.3	1.1	3.4	0.13	85	小玉	ＳＸ－02－438	鉛ガラス	3.9	1.1	2.0	0.02
38	小玉	ＳＸ－02－236	鉛ガラス	4.5	1.2	3.0	0.07	86	小玉	ＳＸ－02－441	鉛ガラス	3.6	1.2	2.9	0.05
39	小玉	ＳＸ－02－237	鉛ガラス	4.0	1.2	2.6	0.05	87	小玉	ＳＸ－02－442	鉛ガラス	3.6	1.3	2.2	0.03
40	小玉	ＳＸ－02－246	鉛ガラス	4.1	1.3	2.1	0.04	88	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	5.5	1.6	2.2	0.09
41	小玉	ＳＸ－02－247	鉛ガラス	3.4	1.2	2.6	0.04	89	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.9	1.2	3.4	0.11
42	小玉	ＳＸ－02－249	鉛ガラス	4.0	1.2	2.5	0.04	90	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.2	1.1	2.1	0.03
43	小玉	ＳＸ－02－258	鉛ガラス	4.1	1.3	2.4	0.04	91	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.9	1.0	2.4	0.05
44	小玉	ＳＸ－02－259	鉛ガラス	3.8	1.1	2.7	0.04	92	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.2	1.2	1.8	0.03
45	小玉	ＳＸ－02－260	鉛ガラス	4.1	1.3	2.0	0.05	93	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.3	1.5	2.3	0.04
46	小玉	ＳＸ－02－261	鉛ガラス	5.7	2.1	2.7	0.11	94	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.9	1.4	2.8	0.04
47	小玉	ＳＸ－02－270	鉛ガラス	4.1	1.3	2.7	0.05	95	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.2	1.2	3.0	0.05
48	小玉	ＳＸ－02－279	鉛ガラス	4.0	1.4	2.1	0.04	96	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.9	1.2	2.1	0.04
49	小玉	ＳＸ－02－286	鉛ガラス	3.8	—	2.0	0.02	97	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.4	1.3	3.0	0.07
50	小玉	ＳＸ－02－289	鉛ガラス	5.3	1.4	2.7	0.09	98	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.8	1.3	2.0	0.04
51	小玉	ＳＸ－02－291	鉛ガラス	4.2	1.2	2.1	0.04	99	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.3	1.3	2.5	0.04
52	小玉	ＳＸ－02－293	鉛ガラス	6.6	1.3	4.0	0.17	100	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	2.6	1.2	2.6	0.04
53	小玉	ＳＸ－02－299	鉛ガラス	4.5	—	2.4	0.04	101	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.6	1.3	1.9	0.02
54	小玉	ＳＸ－02－312	鉛ガラス	4.8	1.3	2.4	0.07	102	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	1.2	1.2	3.0	0.06
55	小玉	ＳＸ－02－232	鉛ガラス	4.0	1.3	2.4	0.05	103	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.1	1.1	2.7	0.04
56	小玉	ＳＸ－02－333	鉛ガラス	3.5	1.3	1.7	0.02	104	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.6	1.1	1.8	0.03
57	小玉	ＳＸ－02－334	鉛ガラス	3.7	1.1	1.9	0.03	105	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.7	1.4	1.9	0.03
58	小玉	ＳＸ－02－335	鉛ガラス	4.0	1.2	2.0	0.04	106	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.0	0.9	2.9	0.05
59	小玉	ＳＸ－02－338	鉛ガラス	3.9	1.3	2.0	0.03	107	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.8	1.3	2.0	0.03
60	小玉	ＳＸ－02－347	鉛ガラス	4.2	1.4	2.0	0.03	108	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.5	1.1	4.4	0.07
61	小玉	ＳＸ－02－348	鉛ガラス	3.8	1.3	2.2	0.03	109	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.6	1.3	1.9	0.02
62	小玉	ＳＸ－02－349	鉛ガラス	3.5	1.1	1.9	0.03	110	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.0	0.9	2.2	0.04
63	小玉	ＳＸ－02－350	鉛ガラス	4.3	1.4	2.3	0.05	111	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.6	1.3	2.1	0.03
64	小玉	ＳＸ－02－351	鉛ガラス	4.2	1.1	2.5	0.05	112	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.9	1.6	1.8	0.03
65	小玉	ＳＸ－02－352	鉛ガラス	3.9	1.2	2.5	0.05	113	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.3	1.1	2.8	0.03
66	小玉	ＳＸ－02－354	鉛ガラス	5.2	1.3	5.4	0.19	114	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.4	1.4	1.7	0.03
67	小玉	ＳＸ－02－355	鉛ガラス	4.7	1.6	3.3	0.10	115	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	4.6	1.6	3.1	0.09
68	小玉	ＳＸ－02－356	鉛ガラス	4.6	1.3	4.6	0.12	116	小玉	ＳＸ－02 一括	鉛ガラス	3.9	1.0	3.0	0.06
69	小玉	ＳＸ－02－357	鉛ガラス	3.6	1.1	2.6	0.03	117	小玉	ＳＸ－02－290	鉛ガラス	7.4	1.8	4.5	0.27
70	小玉	ＳＸ－02－361	鉛ガラス	2.9	1.0	2.0	0.02	118	小玉	ＳＸ－02－262	鉛ガラス	—	—	—	0.34
71	小玉	ＳＸ－02－362	鉛ガラス	4.2	1.2	2.8	0.06	119	小玉	ＳＸ－02－263	鉛ガラス	7.3	5.1	3.1	0.29
72	小玉	ＳＸ－02－363	鉛ガラス	3.7	1.1	2.4	0.04	120	小玉	ＳＸ－02－432	鉛ガラス	8.2	4.5	4.1	0.58



第188図　池花南遺跡 SX-02 出土土器(1)（1/4）



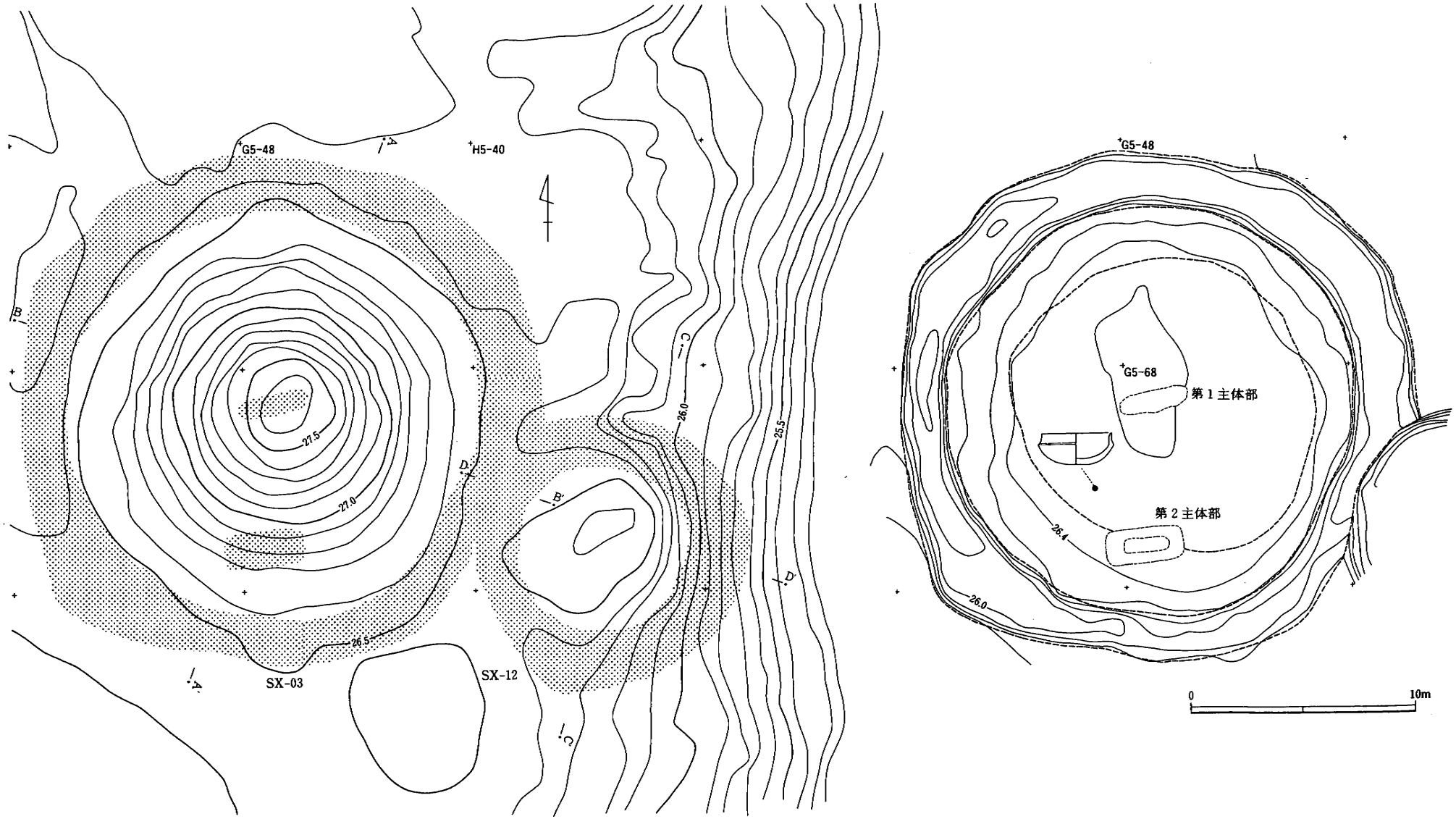
第189図　池花南遺跡 SX-02 出土土器(2)（1/4）

第14表　池花南遺跡ＳＸ－02出土金属製品計測表

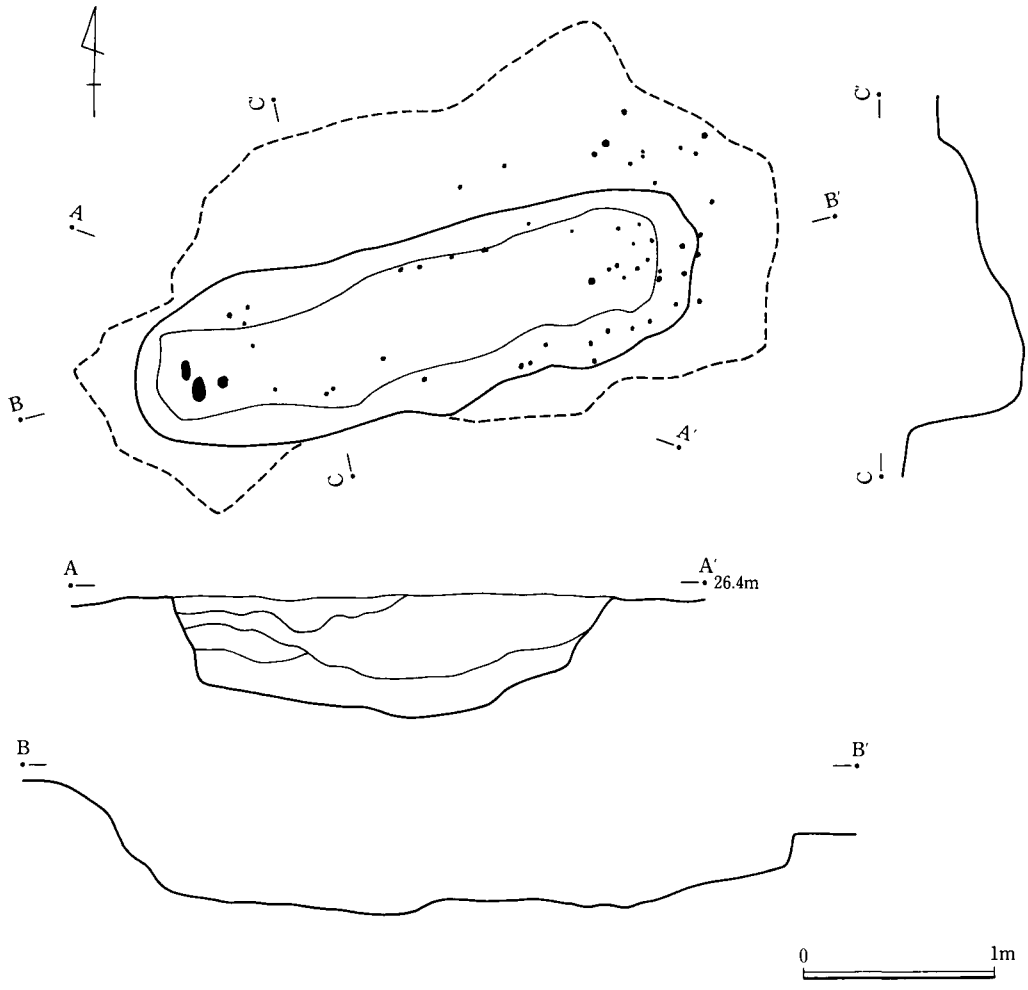
挿図番号	器種	遺物番号	残存長 mm	鏃身長 mm	鏃身幅 mm	重量 g	挿図番号	器種	遺物番号	残存長 mm	鏃身長 mm	鏃身幅 mm	重量 g
1	鉄鏃	ＳＸ－02－287	63.6	—	7.0	3.86	12	鉄鏃	ＳＸ－02－344	35.8	—	—	2.52
2	鉄鏃	ＳＸ－02－147	37.7	31.0	12.5	4.11	13	鉄鏃	ＳＸ－02－331	27.8	—	—	2.42
3	鉄鏃	ＳＸ－02－431	22.6	—	10.1	0.69	14	鉄鏃	ＳＸ－02－269	29.9	—	—	2.15
4	鉄鏃	ＳＸ－02－345	26.3	—	—	2.96	15	鉄鏃	ＳＸ－02－353	44.1	—	—	2.69
5	鉄鏃	ＳＸ－02－149	30.4	—	—	2.09	16	鉄鏃	ＳＸ－02－430	28.8	—	—	0.38
6	鉄鏃	ＳＸ－02－250	25.4	—	—	2.49	17	鉄鏃	ＳＸ－02－427	26.0	—	—	0.59
7	鉄鏃	ＳＸ－02－422	37.5	—	—	2.17	18	鍔	ＳＸ－02－239	44.1	—	—	13.78
8	鉄鏃	ＳＸ－02－439	52.0	—	—	3.32	19	鍔	ＳＸ－02－416	18.4	—	—	4.89
9	鉄鏃	ＳＸ－02－280	35.4	—	—	2.65	20	不明	ＳＸ－02－411	—	—	—	3.53
10	鉄鏃	ＳＸ－02－300	25.5	—	—	1.71	21	刀子	ＳＸ－02－252	38.0	—	—	8.70
11	鉄鏃	ＳＸ－02－251	38.8	—	—	3.05							

口縁部と底部、5は単体資料でいずれも甕である。6はおそらく提瓶の口頸部である。この破片は原位置不明であるが、実測不能の提瓶胴部が石室内で出土しており、同一個体の可能性が強い。21は横瓶である。相対的に破片数は多いが、大型の土器のため充分接合しない。

土師器はすべて杯及び杯蓋であった。16は口端の面取り、肩部の形状から明らかに蓋と判断されたものである。16を除く杯身13個体は微妙な形状の相違によって幾つかに分類可能ではあ



第190図　池花南遺跡SX-03・SX-12調査前測量図(左)・SX-03周溝測量図(右)(1/200)



第191図　池花南遺跡 SX-03 第 1 主体部（1/40）

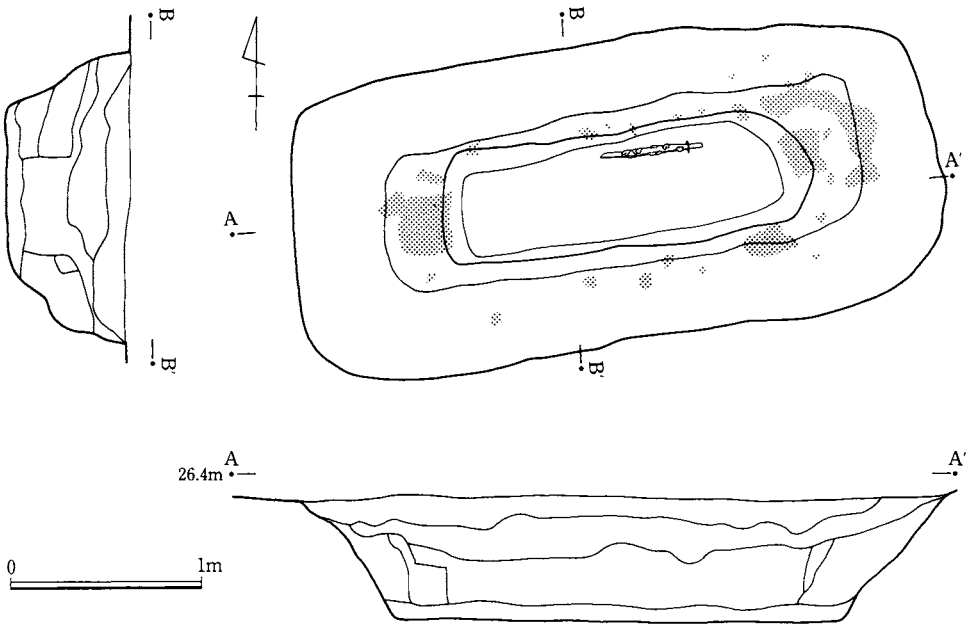
るが、ここでは敢えて細かい分類は控えておく。これらのうち 8 個体に赤彩の痕跡が残されている。他の個体でも本来的に赤彩されていたものもあろう。しかし中で特徴的な形態を有する17、18の 2 個体は赤彩されない器種か。

④池花南遺跡 SX－03

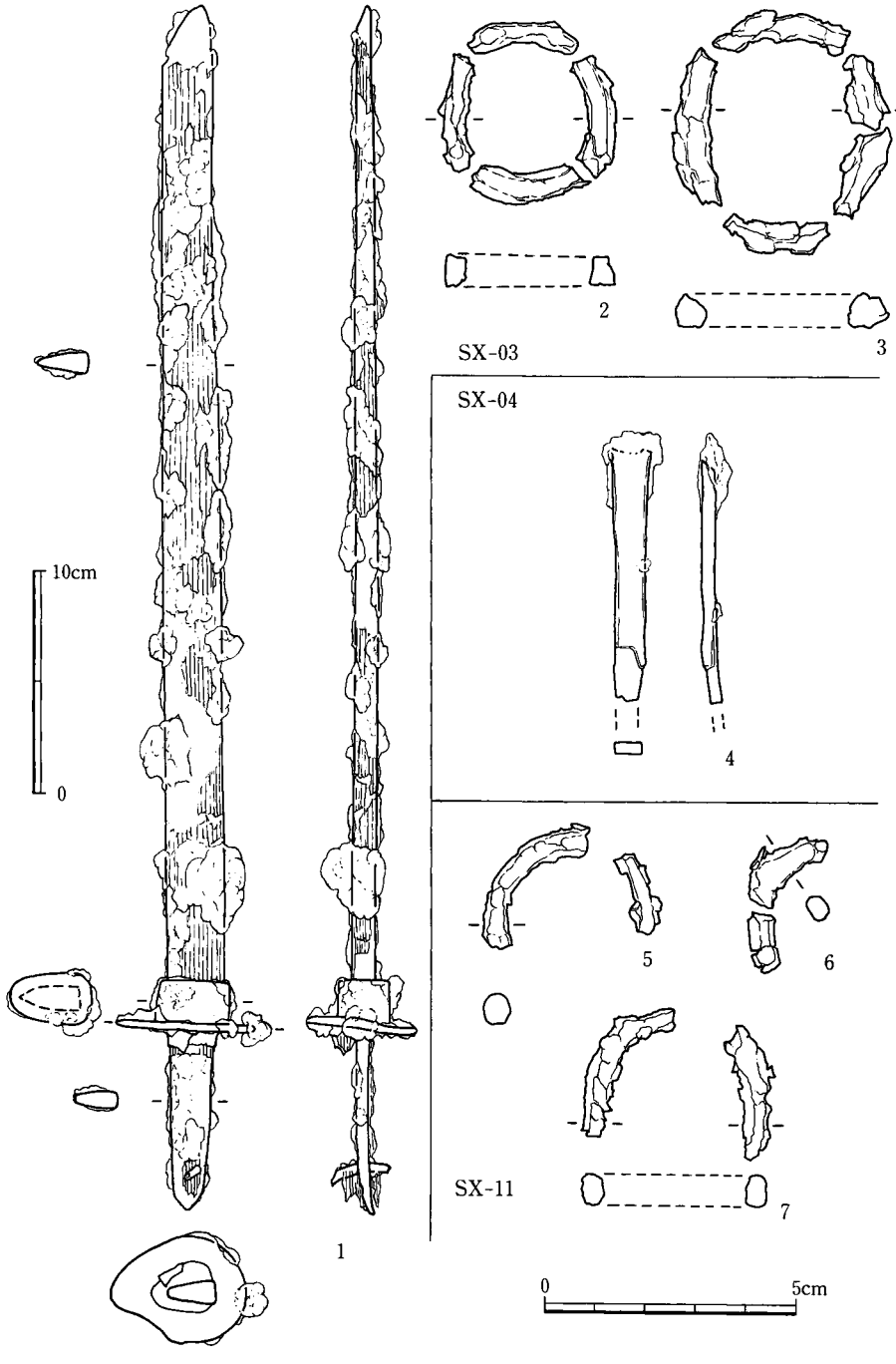
調査前の状況（第190図左、図版79－ 5）　SX－02の東側に隣接しており、SX－04とともに最も遺存度が良好であった古墳である。やはり公的に存在が知られていなかったもので、伐採時に確認された。周辺との比高およそ1.2m を測る墳丘を遺存し整った円形を呈していたが、さらに東に SX－12が隣接しており、別の遺構とすると予想される周溝の位置が完全に重複してしまうため、あるいは前方後円墳等の可能性を考慮して調査を開始した。

平面形及び周溝（第190図右、図版80－１）　整美な円墳である。周溝内縁径17.8～18.2m、周溝外縁径22.9～24.5m を測る。SX－02と異なり周溝は全周し深度差も少ないが、全体に浅く最も深い地点でも0.5m 前後の深さを持つだけである。周溝内縁からの比高0.2～0.3m で旧表土面が認められた。旧表土面の長径はおよそ14m。周溝内縁から旧表土面外縁までは西側が広く東側が狭い傾向があり、その幅は1.3～3.4m である。SX－12との関係は果たして別遺構であったが、予想された通り周溝は重複していた。周溝の深さは SX－12の方が深い。そのため SX－12が一見 SX－03を切っているように見えるが、土層断面の観察では先後関係は全く確認できなかった。これは造営時期が近接していたことを示していようが、また両墳周溝の共有は意識されていたはずであり、SX－02周溝が SX－05周溝を避けて構築されていたのとは対照的である。両墳被葬者の密接な関係を考定すべきであろうか。

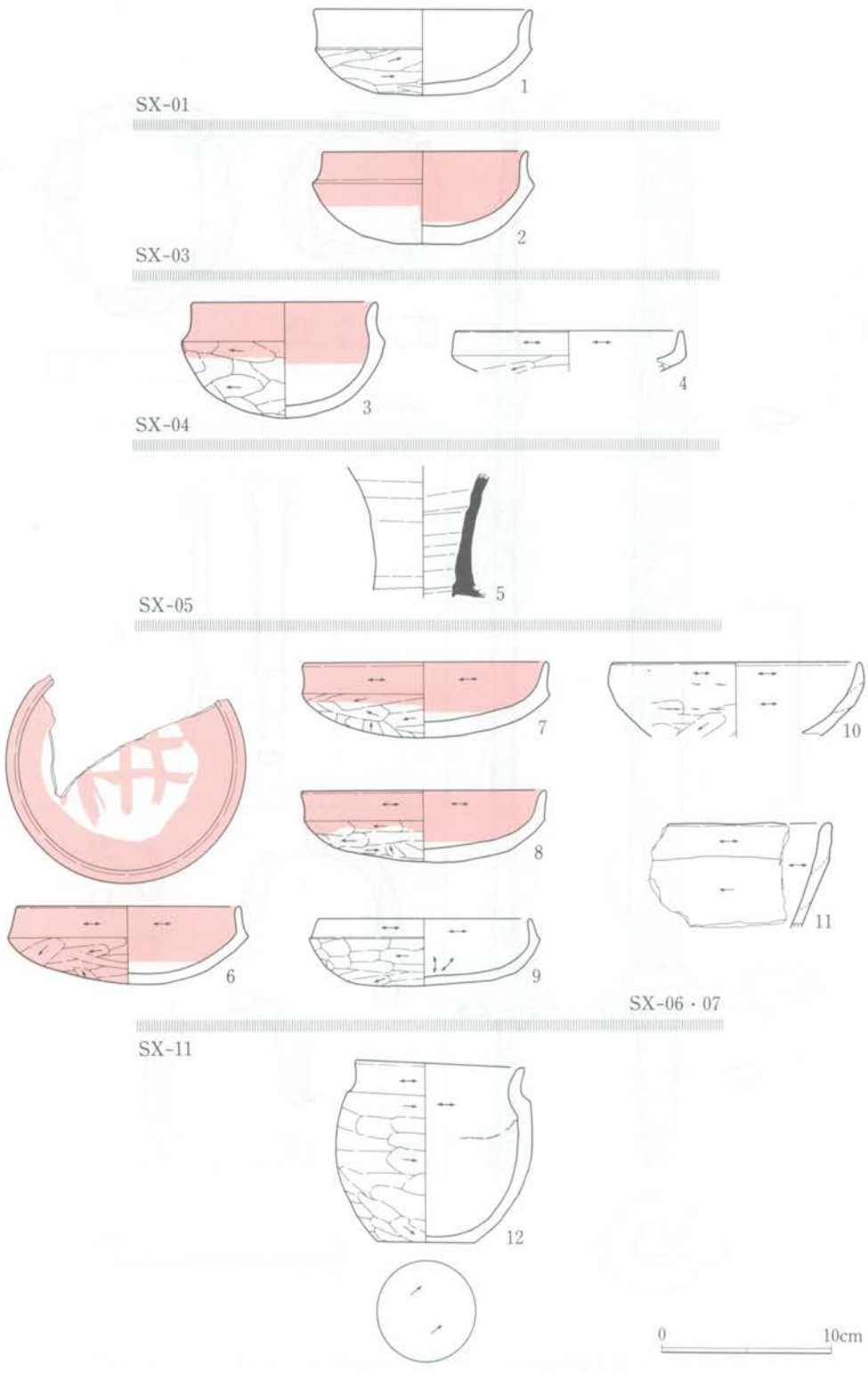
第１主体部（第191図、図版80－２）　墳央部で検出された。墳丘の調査時、墳丘中央部の土層の二次堆積が観察され、盗掘孔であることは予想されていた。しかし該期の古墳の場合、墳頂部に埋葬施設が営まれるのが通例であるため、確証が得られぬまま調査を進め、旧表土面の精査を行った段階で白色粘土ブロックが散布していたことから当施設の存在が確認された。本来的に旧表土面を切り込んで営まれた木棺直葬土壙である。ただ盗掘によると思われる攪乱が激しくその痕跡を辛うじて留めるのみと言える状況であった。ほぼ東西に主軸方位を置いているが、東端がやや北側に振れている。木棺裏込に用いられたと考えられる粘土は四散し、無論



第192図　池花南遺跡 SX-03 第２主体部（1/40）



第193図　池花南遺跡 SX-03・SX-04・SX-11 出土金属製品（1/3, 3/4）



第194図　池花南遺跡各古墳出土土器（1/4）

棺部の痕跡は皆無である。撹乱を受けていない掘り込み残存部分は長さ3.12m、幅0.95m。

第2主体部（第192図、図版81）　南側の墳裾、旧表土面外縁付近で検出された。ほぼ東西に主軸を置く木棺直葬土壙である。第1主体部から見てほぼ正確に南方に位置し、およそ5mの距離を置いている。また主軸方位の振れもほぼ等しい。棺部は正確に遺存しているわけではないが、まとまった粘土ブロック間で計測すれば長さ1.8m強、幅約0.6mであり、殊に長さについてはSX－02第1主体部玄室内法長と合致し、また当墳周溝内縁径の1/10に等しくなるのは注目に値する。掘り方は最大長3.45m、最大幅1.59m、検出面からの深さは0.64mを測り、底面全体に明褐色粘質土を6～8cmの厚さで均一に敷きつめ棺床としている。なお副葬品として棺部床面から柄を東に向けて直刀1振、原位置を留どめずかなり浮いて錫環2点が出土している。

出土遺物（第193図1～3、第194図2、図版96、98）　第193図1～3が第2主体部から出土した副葬品である。直刀1は小ぶりのもので比較的遺存が良好であり、また刀身には木質がよく付着していた。詳細は計測表に示す。2、3は錫環である。腐食により破砕した状態で出土している。

第194図2は土師器杯である。内外面とも赤彩されている。出土位置は第2主体部近くの北西寄りで旧表土面上で検出された。他に土器は出土していない。

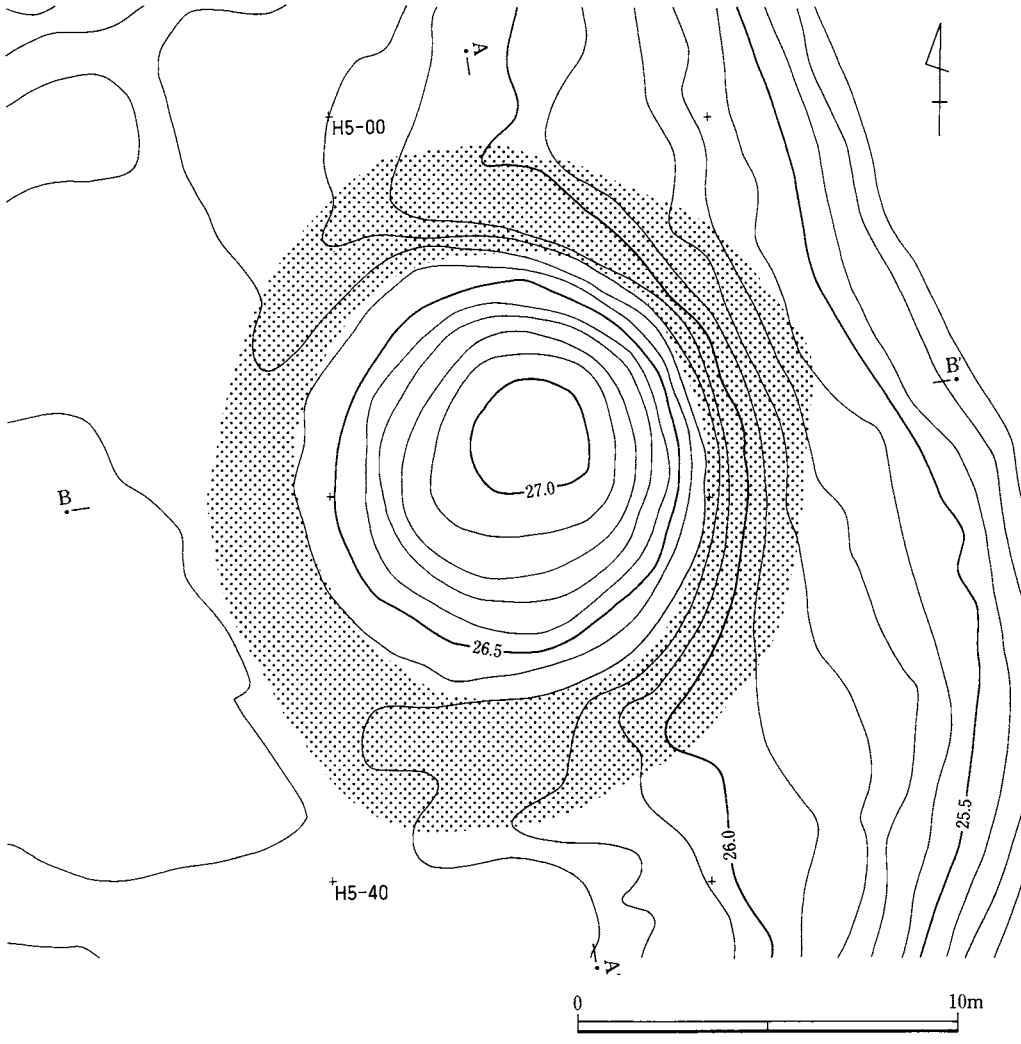
なお当墳周溝内から、物井古墳群において石棺材として多用される雲母片岩の破片が出土している。きわめて断片的なものであるが、当墳あるいは他の隣接した古墳に石棺を用いた埋葬施設が存在した可能性を示すものであろう。ただ当墳第2主体部には石材の抜き取り痕は認められず、破壊されていた第1主体部及びその周囲にも全く石片が見られなかった。

第15表　池花南遺跡SX-03 出土直刀計測表（単位㎜）

全　長	539.7	切羽長	15.5	鍔長径	59.7	柄　長	79.5
刃渡長	437.2	切羽長径	32.4	鍔短径	47.5	柄　幅	18.3
刀身幅	25.5	切羽短径	23.7	鍔　厚	3.5	柄　厚	6.3
背　幅	10.3					目釘長	25.4

第16表　池花南遺跡SX-03, SX-04, SX-11 出土金属製品計測表

挿図番号	器種	遺物番号	残存長 ㎜	重量 g	挿図番号	器種	遺物番号	残存長 ㎜	重量 g
2	錫環	SX－03－8	－	7.55	5	錫環	SX－11－2	－	4.83
3	錫環	SX－03－7	－	9.26	6	錫環	SX－11－4	－	2.39
4	鉄鏃	SX－04－3	53.1	2.97	7	錫環	SX－11－3	－	3.64

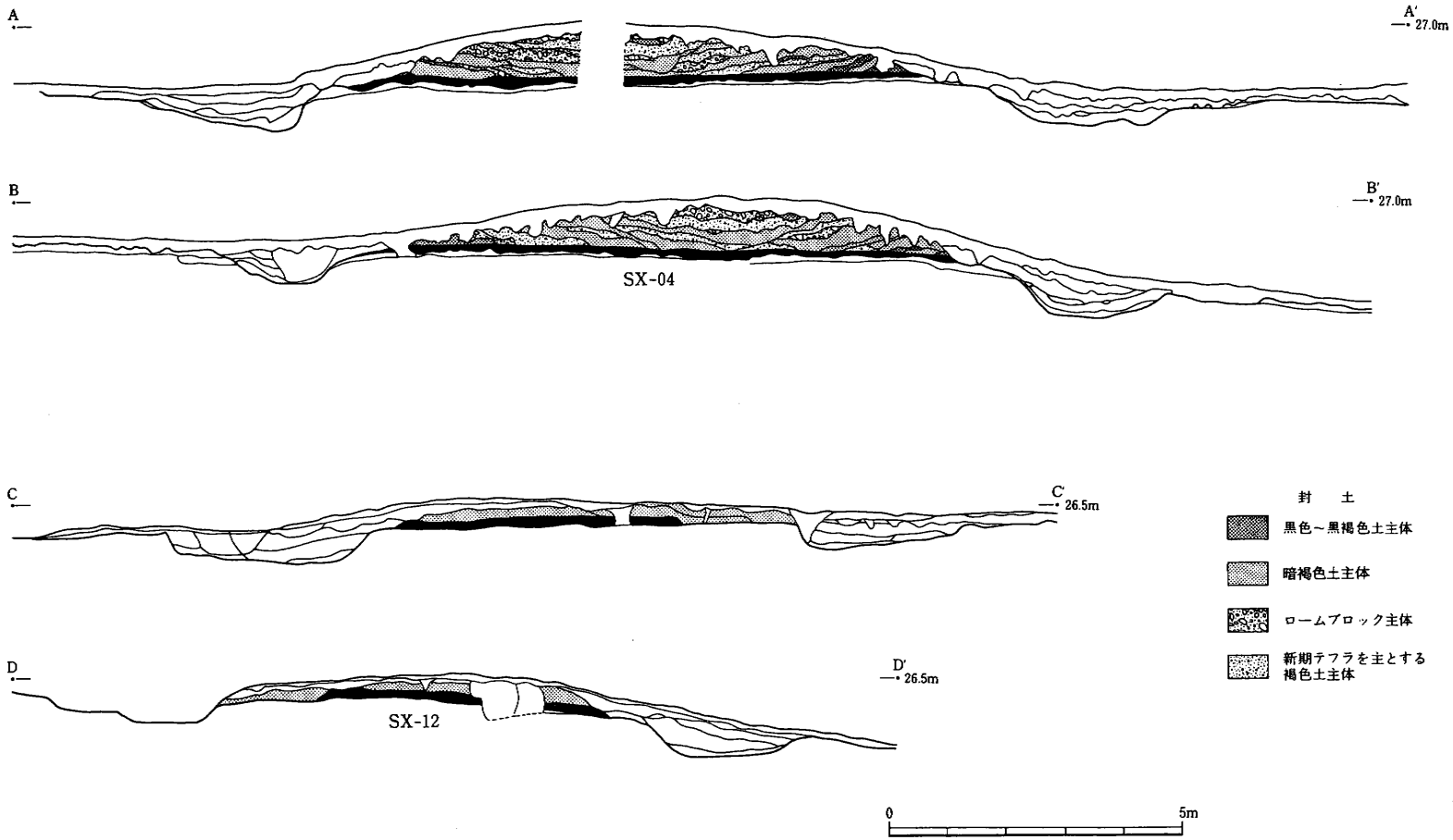


第195図　池花南遺跡 SX-04 調査前測量図（1/200）

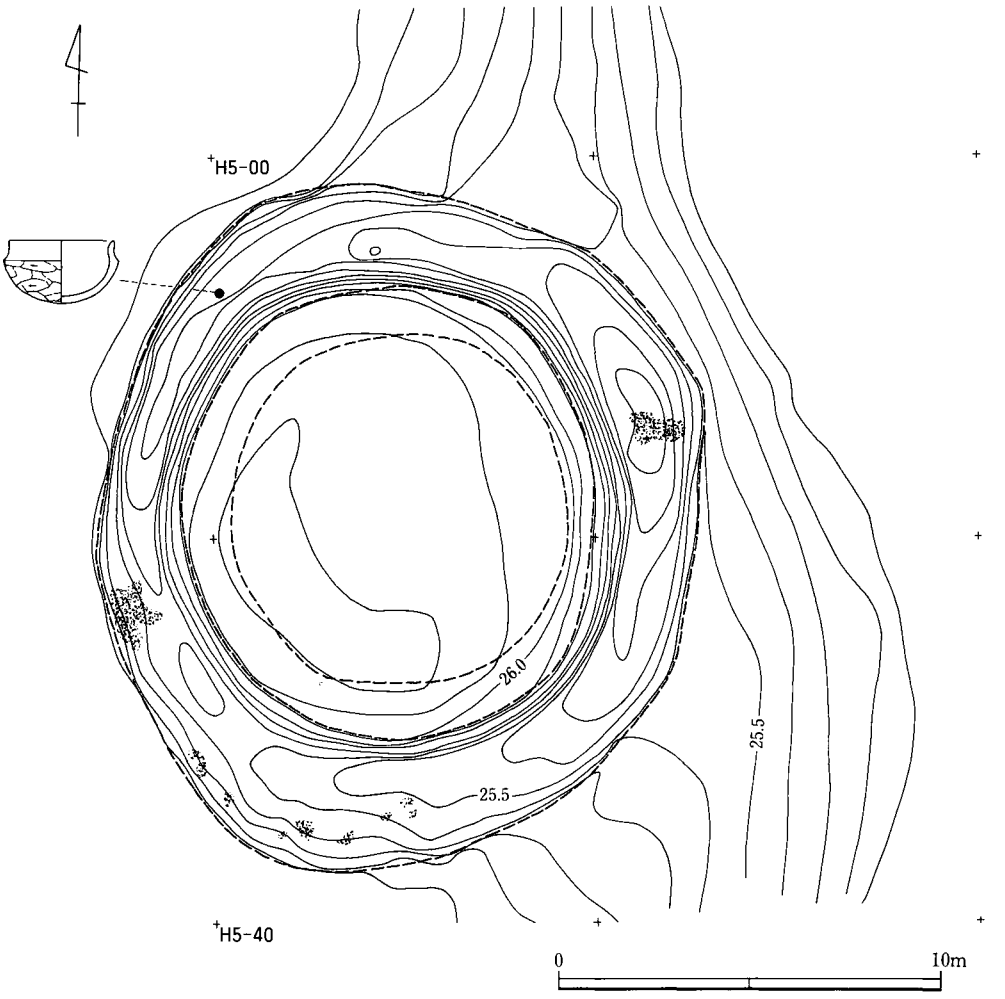
⑤池花南遺跡 SX－04

調査前の状況（第195図、図版82－１）　SX－03の北東方に所在した古墳で、SX－03同様墳丘は当古墳群の中では良好に遺存していた。遺存した墳丘は整った円形を示していたが、当墳は台地の最も縁辺の傾斜地にに築かれているため東側から見た墳丘は高く見えた。したがって周辺との比高は地点によって異なるが、北側と南側ではおよそ0.9m であった。

平面形及び周溝（第196図、図版82－２）　円墳である。周溝内縁径11.2～11.8m、周溝外縁径16.9～18.0m を測る。東西方向に地形の制約がある故に若干南北径が長く、東西径が短い。周溝幅は狭い箇所でおよそ２ m、広い箇所では3.7m あり、墳丘側が急斜をなすが全体にしっかりした掘り込みを持つ。その深度に大きな差はなく、元来低い位置にある東側の周溝がむしろ



第197図　池花南遺跡 SX-04・SX-12 土層断面（1/100）

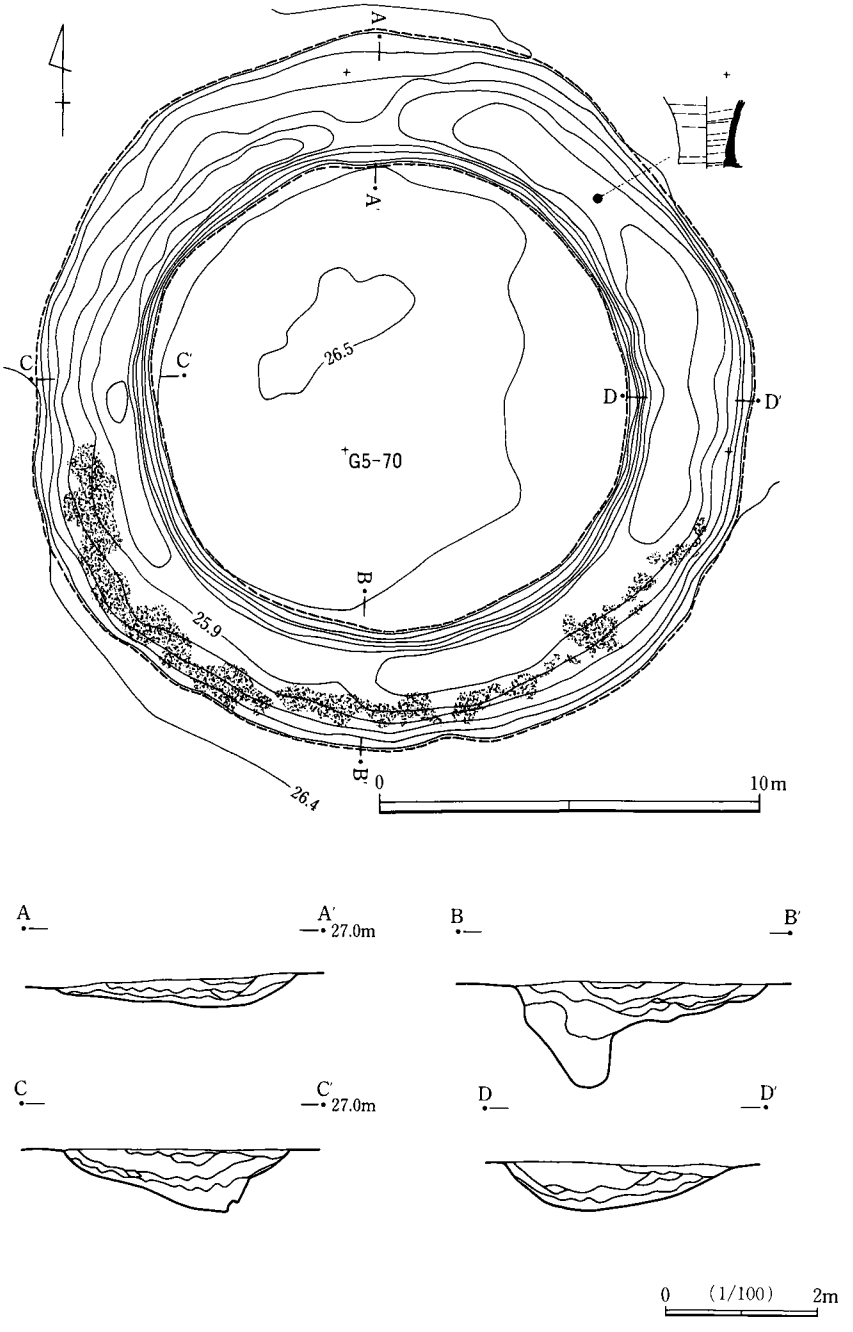


第196図　池花南遺跡 SX-04 周溝測量図（1/200）

より深く掘り込まれており、最深約0.9m。周溝内縁から0.7～1.5m の位置に旧表土面が確認された。旧表土面自体も東西方向に傾斜しており西側（南西側）が高い。なお周溝覆土中位中央には焼土ブロックが広範に認められる。これは群内の中規模の古墳で比較的深い周溝を有する古墳に共通する現象である。

埋葬施設及び付帯施設　検出されなかった。

出土遺物（第193図 4 、第194図 3 ～ 4 、図版82－ 4 、96、98）　北西側の周溝底面から僅かに高い位置で土師器椀 1 点と南西側封土内から土師器杯 1 点が、また南西側周溝覆土中かなり浮いた位置で鉄鏃の破片 1 点が出土している。第194図 3 は椀で内外面とも赤彩されており、他古墳から出土しているような赤彩の杯と本質的には大差ないものであろうが、器高が高いため椀とした。 4 は杯小片である。第193図 4 鉄鏃は篦被部分の破片である。



第198図　池花南遺跡 SX-05（1/200，1/100）

⑥池花南遺跡 SX－05

調査前の状況　全く何の表象もなかった。以下 SX－12を除いて同様の状況であったため各古墳とも本項は省略する。

平面形及び周溝（第198図、図版83－1～2）　SX－02に近接して存在した円墳である。周溝

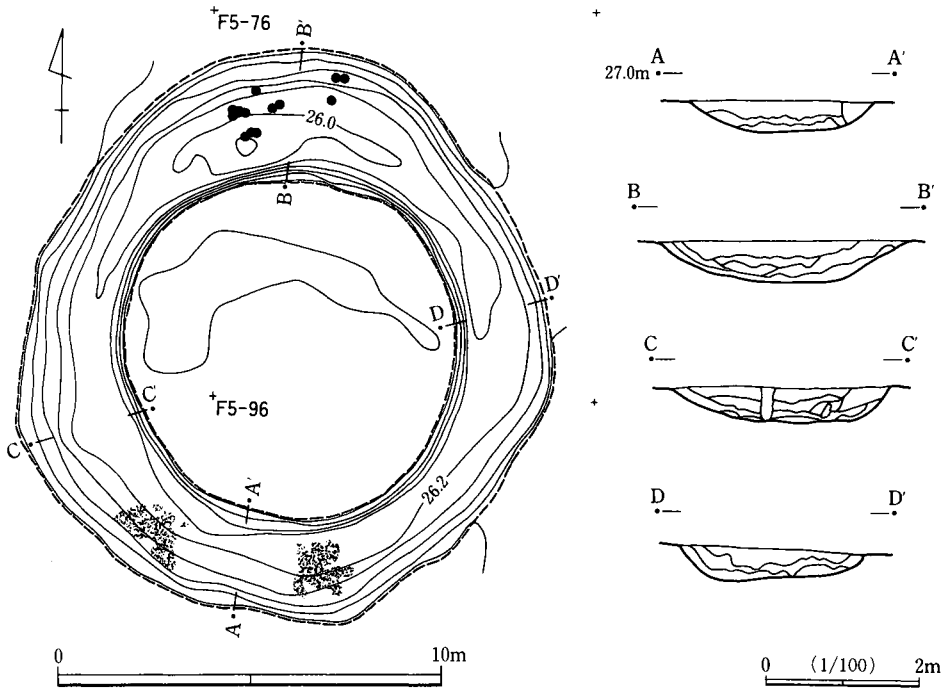
内縁径12.2～12.8m、周溝外縁径18.6～19.5m を測る。この数値は SX－01にきわめて近似したもので SX－02と SX－03の関係同様注目すべき現象であろう。周溝の掘り込みには若干の高低差が認められ、深度0.4～0.8m を測るが、周溝幅は 3 ～3.5m 内外で整った形状を有している。周溝南側中央墳丘寄り、土層断面Ｂ－Ｂ′にかかる部分に深く掘れる箇所があったが、調査の結果古墳築造以前の古い倒木痕あるいはそれに類するものと判断された。なお周溝覆土中位に焼土ブロックが目立ち、特に南半部で顕著であった。

埋葬施設及び付帯施設　検出されなかった。

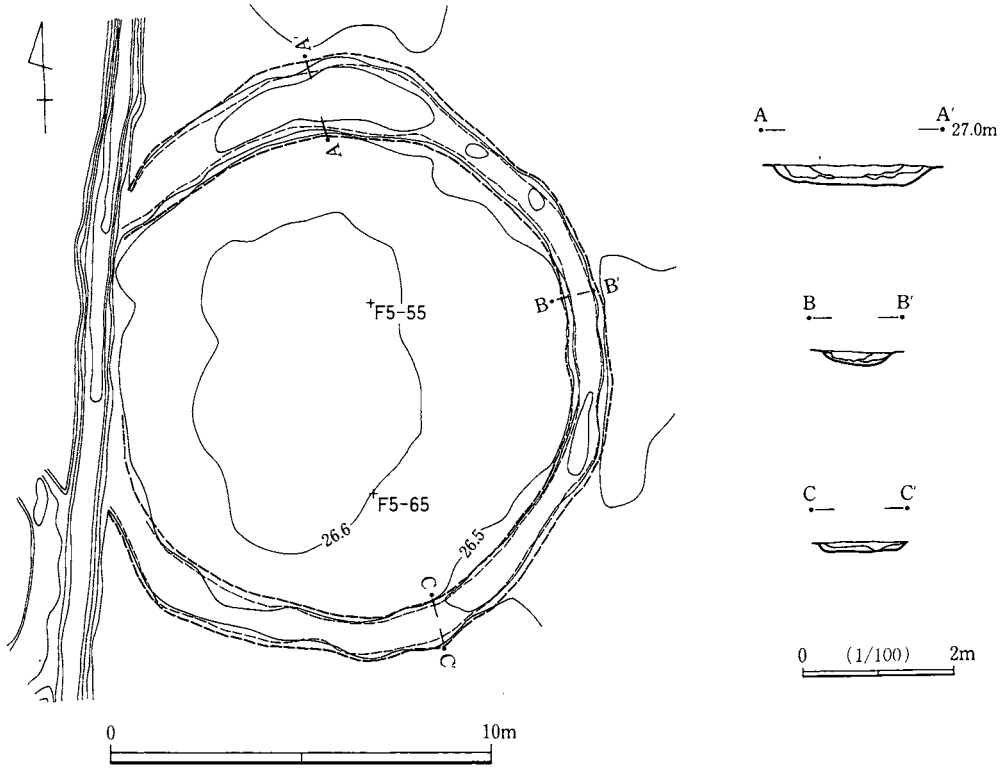
出土遺物（第194図５、図版83－３、96）　北西側周溝中央、底面からかなり浮いて須恵器長頸瓶が出土した。頸部破片のみで特徴的な事項はよく判らない。他に古墳時代の遺物は一切出土していない。

⑦池花南遺跡 SX－06

平面形及び周溝（第199図、図版84－１）　円墳である。前掲 SX－05の南西、SX－07の南東に位置する。小規模で周溝内縁径8.6～8.9m、周溝外縁径13.3～14.9m を測る。墳丘の規模は小さいが周溝の幅は２～３ m 以上で相対的に広い。その深度は0.4～0.6m で比較的高低差も少なく整っていると言えようか。SX－04や SX－05と同じく周溝覆土中位には焼土ブロックや焼



第199図　池花南遺跡 SX-06（1/200, 1/100）



第200図　池花南遺跡 SX-07（1/200，1/100）

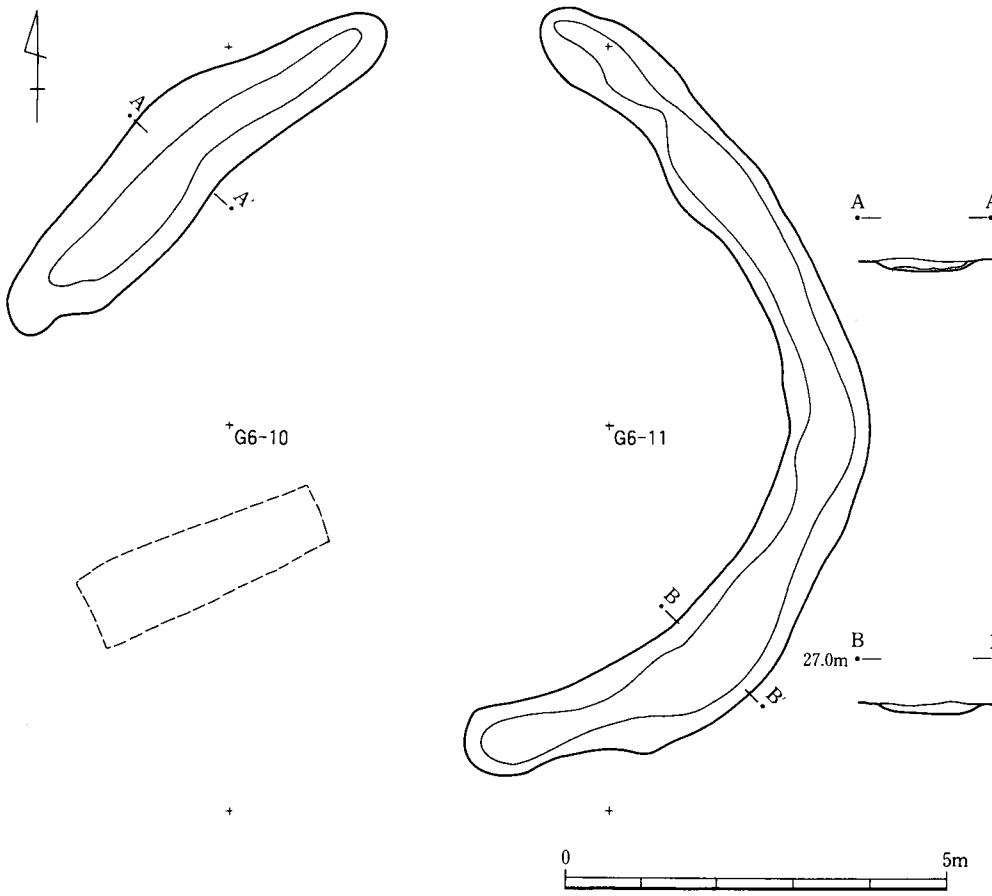
土粒が目立った。またこの古墳では北側の周溝において、焼土とほぼ同じレベルで土師器杯が集中的に出土している。したがって焼土の堆積は古墳造営から長い時間を置いていないと考えられよう。またこのことは他の古墳にも敷衍して差し支えないであろう。

埋葬施設及び付帯施設　検出されなかった。しかし北側周溝の土器集中は何らかの祭祀的営為の場と考えられるかも知れない。

出土遺物（第194図 6 ～11、図版84－ 2 ～ 3 、96）　図示できるものは土師器 6 個体がある。いずれも北側周溝内覆土中位で出土したもので、古墳造営時ではなく周溝が埋まり始めてしばらく経過した時期のものである。 6 ～10は杯で、うち 6 ～ 8 は内外面を赤彩される。とくに 6 の底部内面には井桁状（格子状）の記号乃至文様が描かれる。他方赤彩されない 9 は口頸部の幅が狭く、10は「受部」の屈曲を持たないもので前記 3 個体とはやや性格の異なる器種と考えるべきであろう。11は大型の鉢の小片と見られる。なお10はSX－07周溝から出土した破片と接合したものである。

⑧池花南遺跡 SX－07

平面形及び周溝（第200図、図版85）　円墳である。西側にSX－10が隣接し、またその両墳



第201図　池花南遺跡 SX-08（1/100）

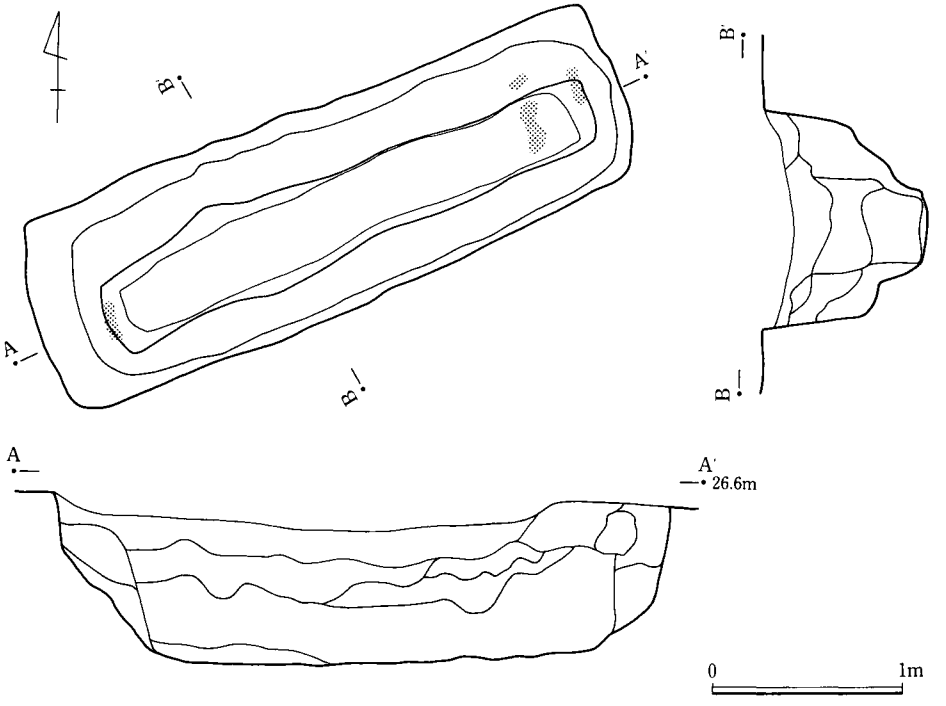
は溝 SD－03に切られている。周溝内縁径12.5～12.7m、周溝外縁径14.5～15.8m を測る。周溝は狭くかつ浅い、最深で0.3m に満たない。隣接して検出された SX－10が、きわめて小規模ながらしっかりした周溝の掘り込みを保持していることなどから当墳のみが削平を受けているとは考えられず、本源的に狭小な周溝しか有していなかったと思われる。それを前提として、周溝内縁径で見た墳丘径は SX－01及び SX－05にほぼ等しい。周溝の掘削を簡略化してまでも墳丘径を合致させているとするならば、その規制力は重大であったと見なければならない。

埋葬施設及び付帯施設　検出されなかった。

出土遺物　前記 SX－06の項で述べたように、当墳周溝内で出土した杯片が SX－06出土杯片と接合している（第194図10）。他に古墳時代の遺物は出土しなかった。

⑨池花南遺跡 SX－08

平面形及び周溝（第201図、図版86－１）　SX－05の南に位置する小規模古墳である。周溝が



第202図　池花南遺跡 SX-08 主体部（1/40）

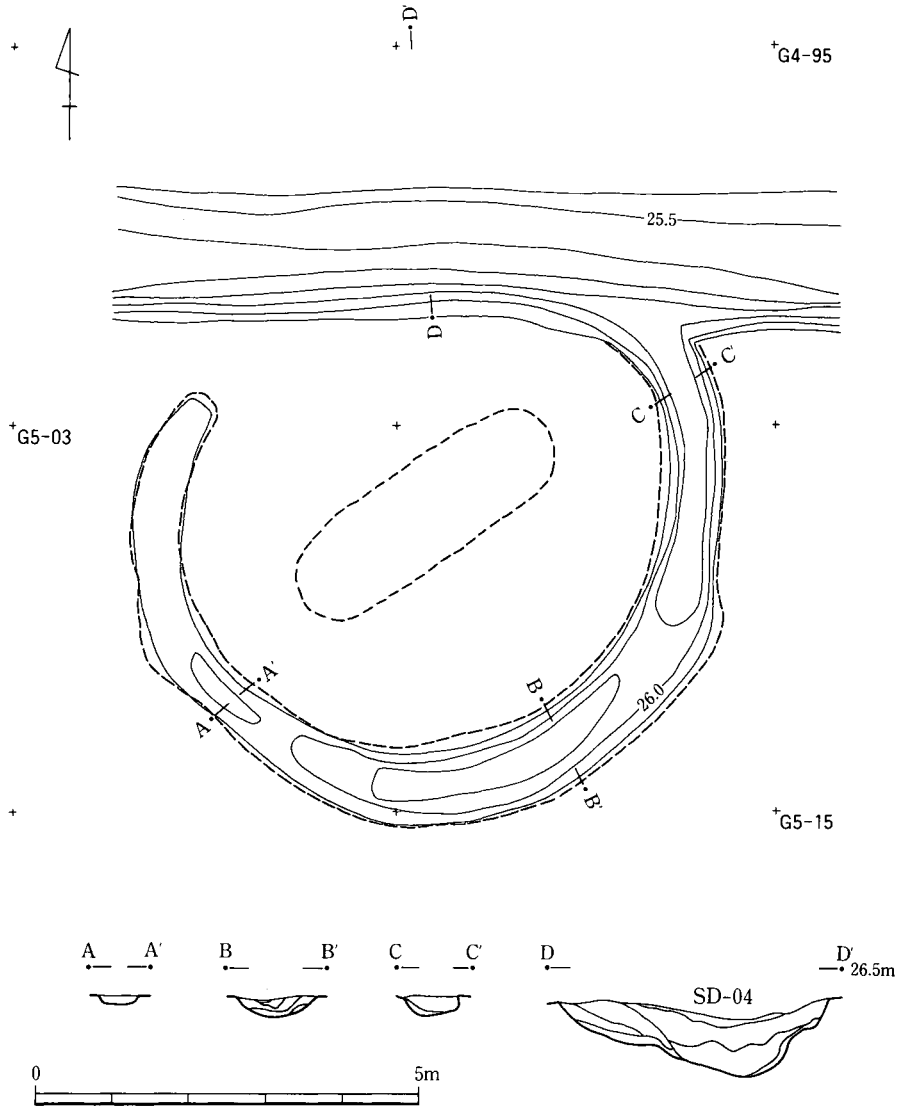
全周せず墳形は不明確であるが、円墳であるとすると後述する主体部の位置が周溝と重複することになり、また主体部の主軸方位から考えても、帆立貝形の墳形を持っていたものと推定される。周溝は浅く、途切れる箇所があって形状が不整であるが、後円部周溝内縁径8.3～8.4m、周溝外縁径10.6～10.8m 程度を測る。

主体部（第202図、図版86－２）　木棺直葬土壙である。古墳南西側の墳裾に位置し、その長軸方向は概ね東西を向くが、帆立貝形古墳とした場合の主軸方向に合致し、東端がやや北に振れている。掘り方は比較的整った長方形を呈し、木棺安置部分がさらに一段低く掘り込まれている。掘り方最大長3.36m、最大幅1.13m、検出面からの最深0.87m。底面は平坦であった。しかし棺床としての粘質土は殆ど用いられていない。木棺裏込めには白色粘土が用いられているが、元来少量であったものか木口部分に僅かに残るのみでしかも原位置から少し動いているらしい。土層断面から判断された棺部は、長さ2.80m、幅0.46m を測る。

出土遺物　皆無。

⑩池花南遺跡 SX－09

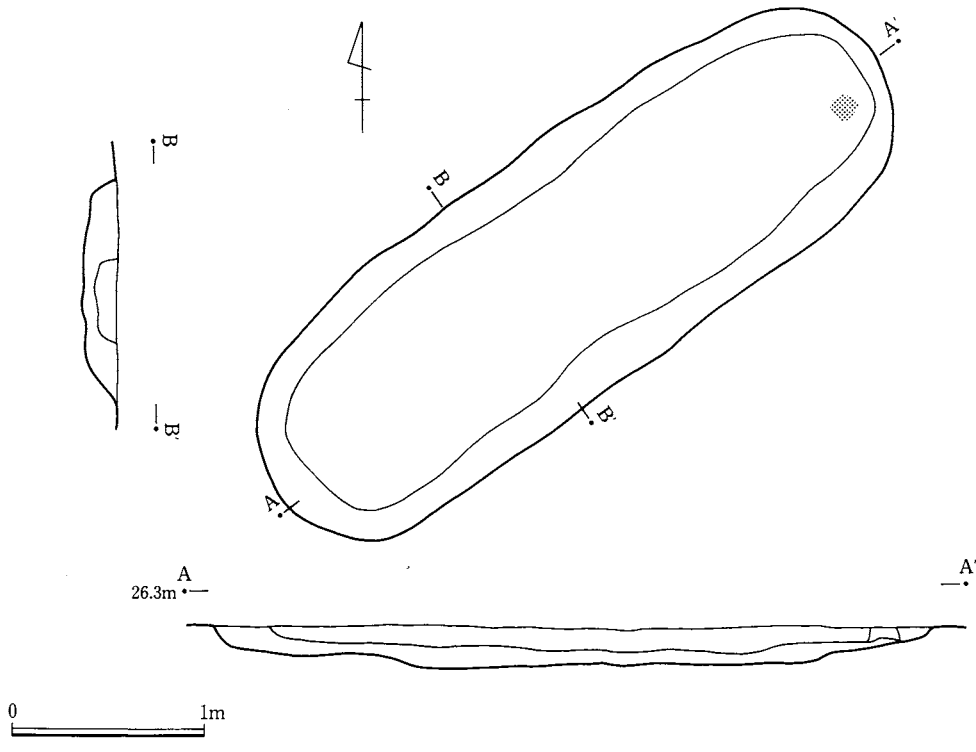
平面形及び周溝（第203図、図版87－１）　SX－02の北に位置する小規模な円墳である。北側の一部を溝 SD－04に切られている。周溝内縁径6.1～6.5m、周溝外縁径7.8～8.2m を測り、群



第203図　池花南遺跡 SX-09（1/100）

中で最も小さい。周溝は、その幅に大きな変動はなく0.6～1.2m であるが、掘り込みは南東側で深く西側で浅くなり、北西側では遂に途切れる。ただ北側は SD－04によって破壊されているため本来の状況は判らない。

主体部（第204図）　中央に埋葬施設が検出された。主軸を北東－南西方向に置く木棺直葬土壙である。検出面からの掘り込みは非常に浅く、墳丘が小規模で低かったことが幸いして墳頂部から掘り込まれた土壙が残ったのであろう。これは結局掘り方の底面近くを検出しえたに過ぎず、棺部は辛うじて残っていたとしても形状等を把握するのは不可能であった。掘り方最大長3.91m、最大幅1.31m を測る。



第204図　池花南遺跡 SX-09 主体部（1/40）

出土遺物　周溝内から土器片が出土しているがすべて縄文土器で、古墳に伴うと考えられる遺物は検出されなかった。

⑪池花南遺跡 SX－10

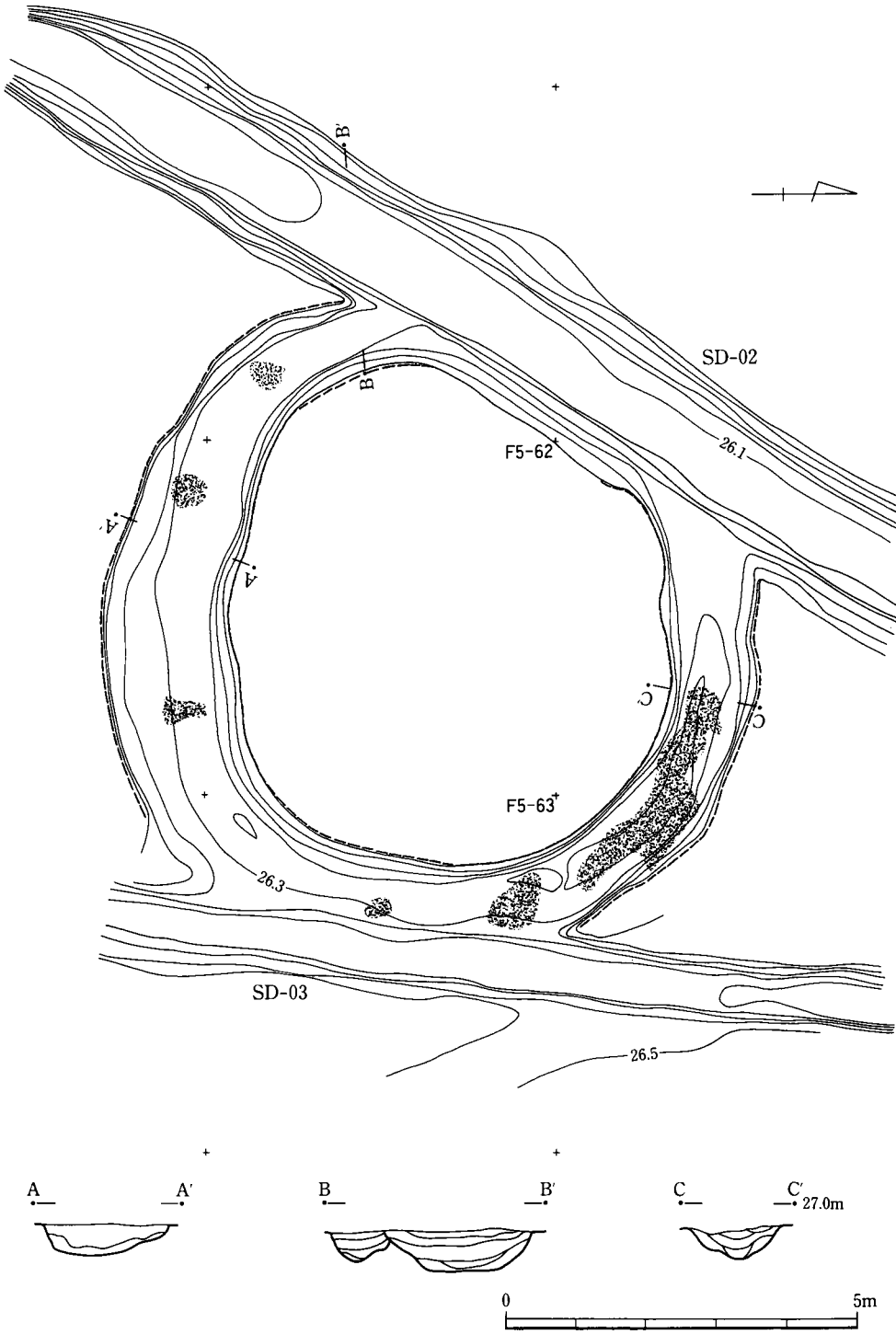
平面形及び周溝（第205図、図版85－1）　SX－07の西側に隣接した小規模な円墳である。南側で SK－09を切り、西側を SD－02、東側を SD－03に切られている。若干東西に長い楕円形を呈しており、周溝内縁径6.4～7.1m、周溝外縁径9.3～9.4m を測る。SX－09とともに群中で最も小さい古墳の一つである。しかし周溝の掘り込みは SX－09に比して均しく深く、概ね0.4～0.5 m の深さを持つ。周溝覆土中位以上には焼土ブロックが目立った。

埋葬施設及び付帯施設　検出されなかった。

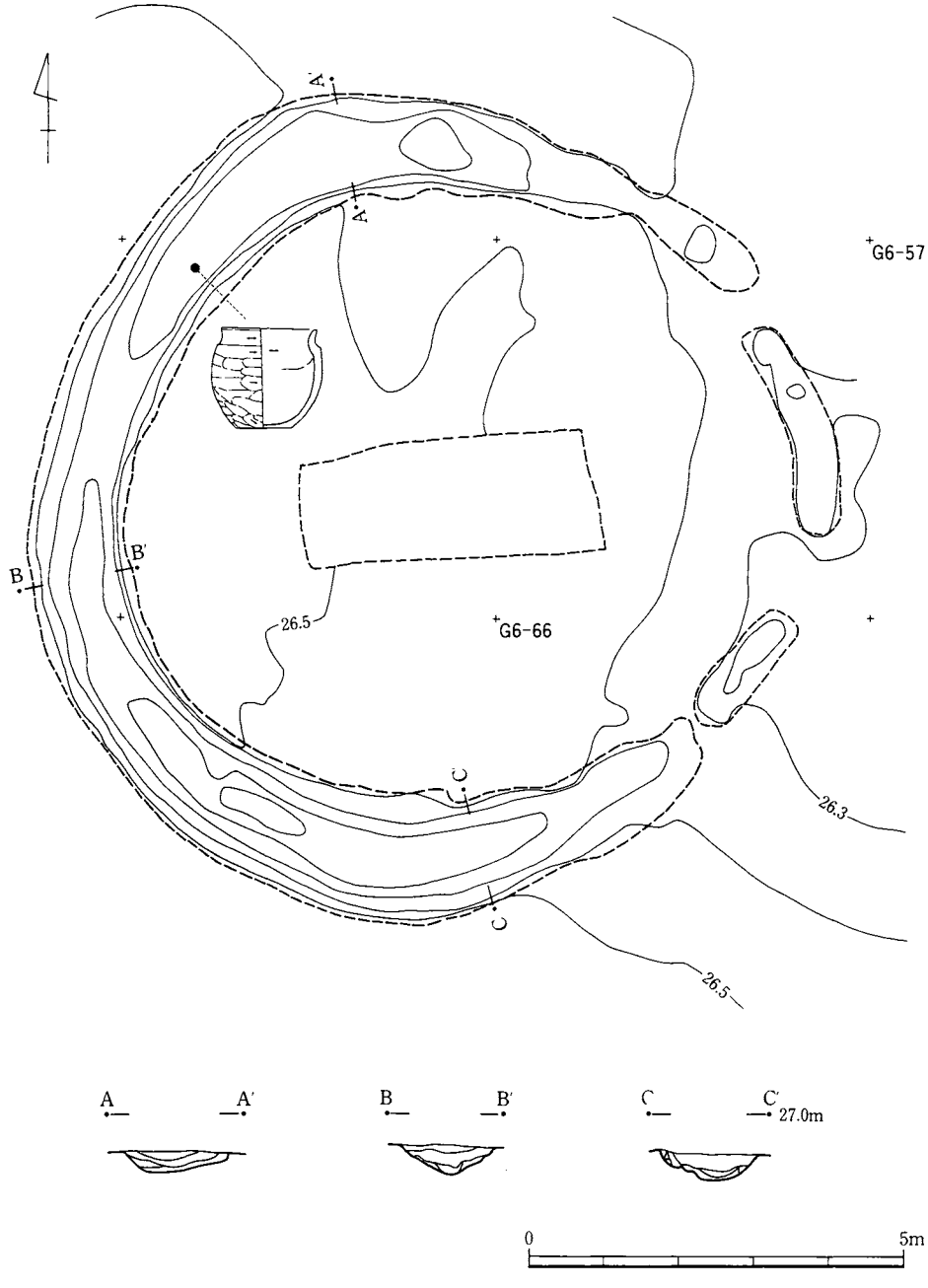
出土遺物　調査中に周溝内から土師器杯が出土したことを確認していたが、おそらく盗難によって紛失した。6～7世紀代のものである。

⑫池花南遺跡 SX－11

平面形及び周溝（第206図、図版88－1）　SX－01の北側に所在した円墳である。当墳と遺跡

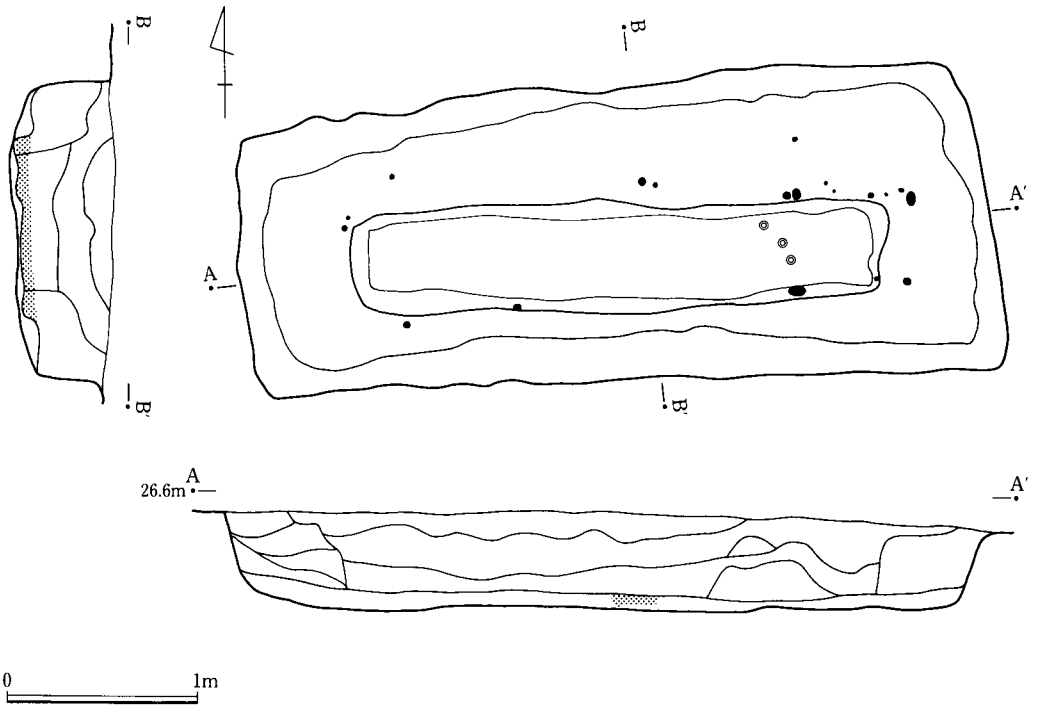


第205図　池花南遺跡 SX-10 （1/100）



第206図　池花南遺跡 SX-11（1/100）

北部に展開する各古墳との間にはかなり空隙があり、強いて言えば当墳と SX－01は南群を構成することになる。ややいびつな形状を有し、東西径が大きい。周溝内縁径8.0～8.8m、周溝外縁径10.2～11.0m を測る。墳形はやや異なるが SX－08とほぼ同じ規模の古墳と言えよう。周溝は西半部で広く深く、東半部で狭く浅く、所によって途切れる。ただ周溝底面のレベルは大差な

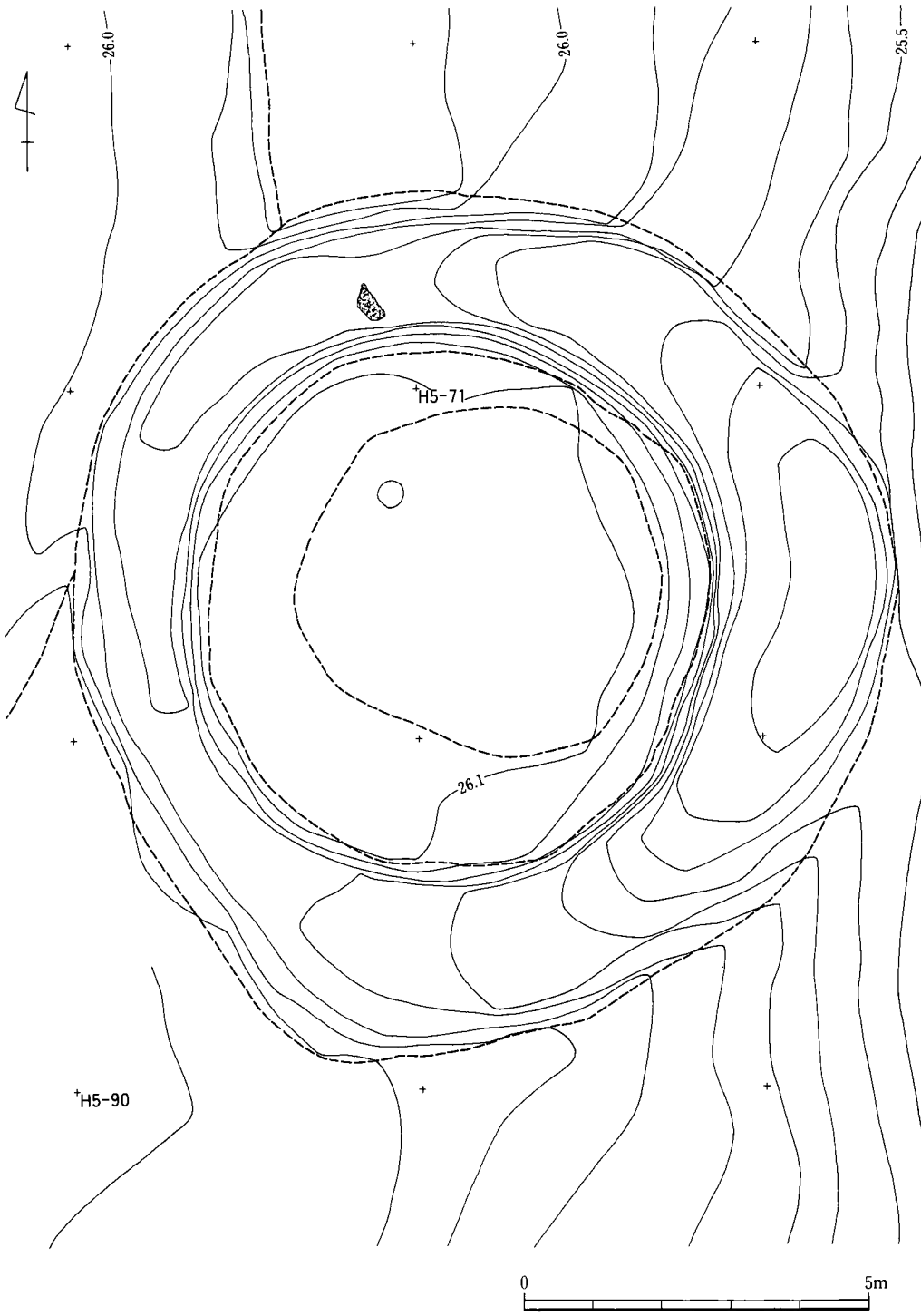


第207図　池花南遺跡 SX-11 主体部（1/40）

く、この地点の現地形が西から東に傾斜しているため生じた現象であろう。周溝掘り込みの最深はおよそ0.4m である。

主体部（第207図、図版88－２、３）　ほぼ中央で検出された木棺直葬土壙である。大略東西方向に主軸を置いている。掘り方は長方形で東端の幅が西端の幅に比して大きい。掘り方最大長4.08m、東端幅1.64m、西端幅1.37m を測る。検出面からの深さは最大0.51m である。これは墳丘が余程低平でない限り墳頂部から掘削されていることはありえず、墳丘築成以前に旧表土面から掘り込まれたものであろう。底面には褐色粘質土がほぼ一定の厚さで敷かれ棺床を形成している。裏込めに粘土の使用は少なかったが、土層断面観察から棺部が明瞭に検出できた。その規模は長さ2.80m、幅0.56m 程で幅はともかく長さでSX－08主体部の棺部と見事に合致する。なお棺部東寄りで錫環３点が出土している。出土レベルはいずれも上位で原位置を保持するものかどうか不明であるが、頭位方向を示す可能性はある。

出土遺物（第193図５～７、第194図12、図版88－４、96、98）　主体部から錫環３点、周溝内から土師器小型甕１点が出土している。第193図５～７は錫環である。SX-03第２主体部で出土したものと同様、いずれも腐食により破砕している。第194図12は小型甕である。周溝底より僅かに浮いた状態で出土している。



第208図　池花南遺跡 SX-12 周溝測量図（1/100）

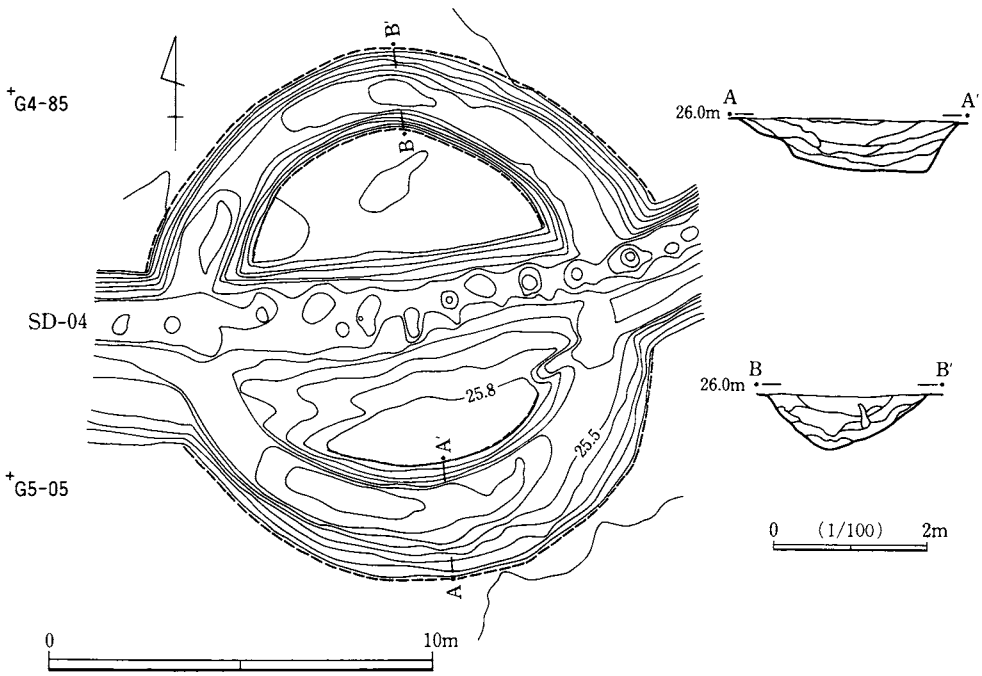
⑬池花南遺跡 SX－12

調査前の状況（第190図） SX－03の東に接して小規模なマウンドが観察されたため、先述のように前方後円墳１基、円墳２基の両者の可能性を想定した。高さは約0.4m あった。

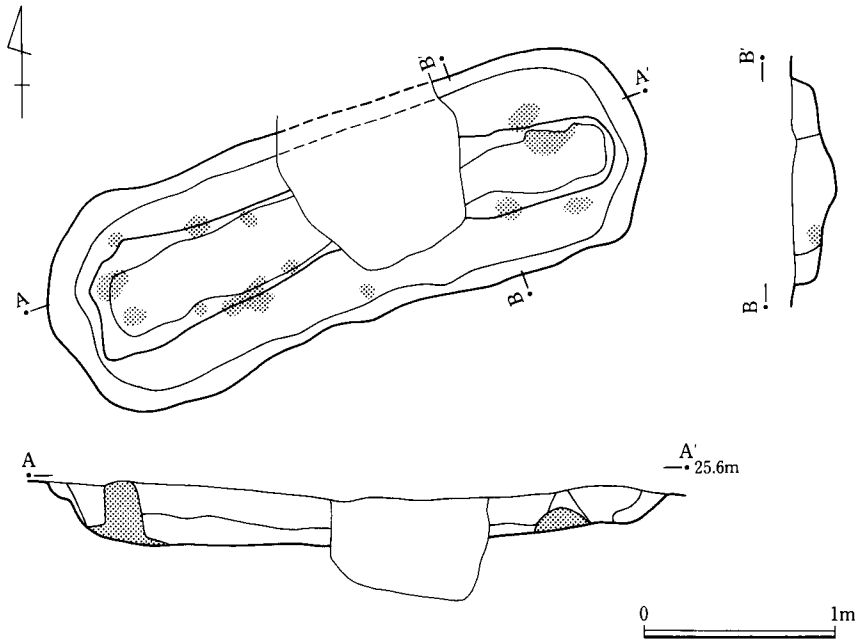
平面形及び周溝（第208図、図版80－１） 傾斜地に所在した小規模な円墳である。周溝内縁径7.2～7.5m、周溝外縁径11.8～12.6m を測る。SX－03の項で述べたように当墳と SX－03は周溝を重複させている。土層断面観察では覆土を共有しており、先後関係は判断されない。しかし掘り込みは当墳周溝の方が深く、先に構築された古墳の周溝が埋まっていないことを前提とすれば、当墳の方が新しいと考えるのが自然であろう。全体に周溝掘り込みの幅、深さは墳丘規模に比して充分ある。かなりの斜面に構築されているため低い東側では低レベルまで掘り下げられているが、そこでは周溝内縁から0.7m の比高を有しむしろ相対的にも最も深い地点となっている。盛土部分の遺存はあまり良好ではなかったが、旧表土面は明確に把握された。やはり斜面のため旧表土面外縁から周溝内縁までの距離は西側で広く、東側で狭くなっているが、比高の大きさは逆である。

埋葬施設及び付帯施設 検出されなかった。

出土遺物 土器片が多く出土したが縄文土器ばかりで、古墳に伴う遺物は皆無であった。



第209図 池花南遺跡 SX-18（1/200, 1/100）



第210図　池花南遺跡 SX-19（1/40）

⑭池花南遺跡 SX－18

平面形及び周溝（第209図、図版87－２）　SX－09の東側に所在した円墳である。周溝を遺存した古墳としては最も北側に位置する。しかし残念なことに中央部を東西に溝 SD－04が横走しており、もし墳央墳丘下に主体部が構築されていたとしてもすでに破壊されている。規模は周溝内縁径8.4～8.6m、周溝外縁径13.0～13.6m を測る。墳丘規模に対して周溝は比較的深くまた広く、最深は0.7m を越える。平面形の数値は SX－06のそれに近く、また周溝内縁径に限れば SX－08や SX－11にも近い。

埋葬施設及び付帯施設　検出されなかった。

出土遺物　縄文時代の土器、石器を多く出土したが、古墳に伴う遺物は皆無であった。

⑮池花南遺跡 SX－19

平面形及び周溝　埋葬施設だけが単独で検出され、周囲には周溝あるいはその痕跡は全く検出されず、墳形は不明である。果たして本来的に周溝や墳丘がなかったのか。

主体部（第210図、図版89－１）　木棺直葬土壙である。一部撹乱坑によって破壊されている。ほぼ東西方向に主軸を置き、東端がやや北に振れる点は SX－02以外の古墳の主体部すべてと共通する。掘り方は木口側が丸みを帯びた長方形で、最大長3.28m、最大幅1.20m を測り、検出面からの最深は0.35m である。仮に SX－11主体部のように墳丘下より掘り込まれていれば、か

なり削平されていることになり、もし周溝が浅ければそれは遺存しない可能性も考えられる。白色～黄白色粘土ブロックが検出されたがそれはやや原位置から動いているようであった。推定される棺部の規模は長さ2.86m、幅0.45～0.55mである。勿論本来の木棺の正確な計測値であるべくもないが、SX－08やSX－11主体部に近い数値を示すのは決して偶然ではあるまい。

出土遺物　皆無。

⑯池花南遺跡の古墳群のまとめ

時期　古墳造営時期を示すまとまった資料はSX－02出土土器群があるだけである。実年代比定は研究者によって若干の差があるかも知れないが、6世紀後半の枠内であるのは疑いないであろう。他の古墳ではSX－06周溝でまとまった土器群があり、SX－02より新相を示す。しかし周溝覆土中位～上位という出土状況からは、古墳造営時点からある程度時間が経過していることが想定される。またSX－03、SX－04などで出土した土器は、断片的な資料ながらSX－02出土土器群との時間差を認めることができない。ここで見方を変えると、SX－02はその周溝の形状からSX－05より後に築造された可能性が強いが、逆にSX－05周溝が意識されるということはその間に大きな時間が介在しないことを示していよう。結局当古墳群は6世紀後半に集中的に造営されたものと見ておくのが妥当であろう。その場合、物井古墳群全体の中では現在知られている限り、古い支群の一つということになる。

構成　一見すると中核的位置にある規模の大きなSX－02、SX－03を中心に構成されているように見える。ただ繰り返し述べているように、SX－02はSX－05より後に築造された可能性が強く、その場合、SX－02は古墳群（支群）占地の契機的存在ではあり得ない。また後に補論で述べるような基準尺の問題から、SX－02やSX－03は群中では新しく築造されたものと見たい。

ところで、池花南遺跡の円墳群の分布は、SX－03、SX－08とSX－11の間に若干の空白があって、あるいは2群に分けて考えられるかも知れないが、南側の2基のうちSX－01と全く同一と言ってよいプランを持つSX－05が北側、多数群集する側にあり、その両者は築造時期が接近していることが想定される。この2基の場合、単一単位の2世代の造墓活動とは考え難く、複数の造墓単位が存在したことは確実である。また当古墳群の造営年代幅を3世代を越えるものと見るのはおそらく不可能であるから、造墓単位の数は少なくとも4単位以上であったろう。ここで古墳を造墓単位毎に確実にグルーピングすることは無理であるが、単位間の墳丘規模の差は歴然とあったことになり、それは造墓単位相互の社会的関係を反映したものであろう。

4．奈良時代

①概観

奈良時代の内黒田遺跡群は、古墳時代後期と同様墓域として占地されている。墓域を構成するのは通常「方形周溝（状）遺構」の名で呼ばれる小規模な方墳群で、奈良時代～平安時代初期の房総半島においては普遍的な墓制である。古墳時代の古墳群は池花南遺跡に集中的に築かれていたが、該期になると大割、池花南、池花各遺跡に分散的に営まれる傾向にある。遺構数は遺跡群全体で13基であり、その内訳は大割遺跡6基、池花南遺跡5基、池花遺跡2基である。規模は最大の例で周溝内縁一辺長6 m。出土遺物量は通例どおり稀少であるが、少量出土した土器は概ね8世紀代の年代を示しているようである。当遺跡群では明確な埋葬施設を検出し得たものはなかった。

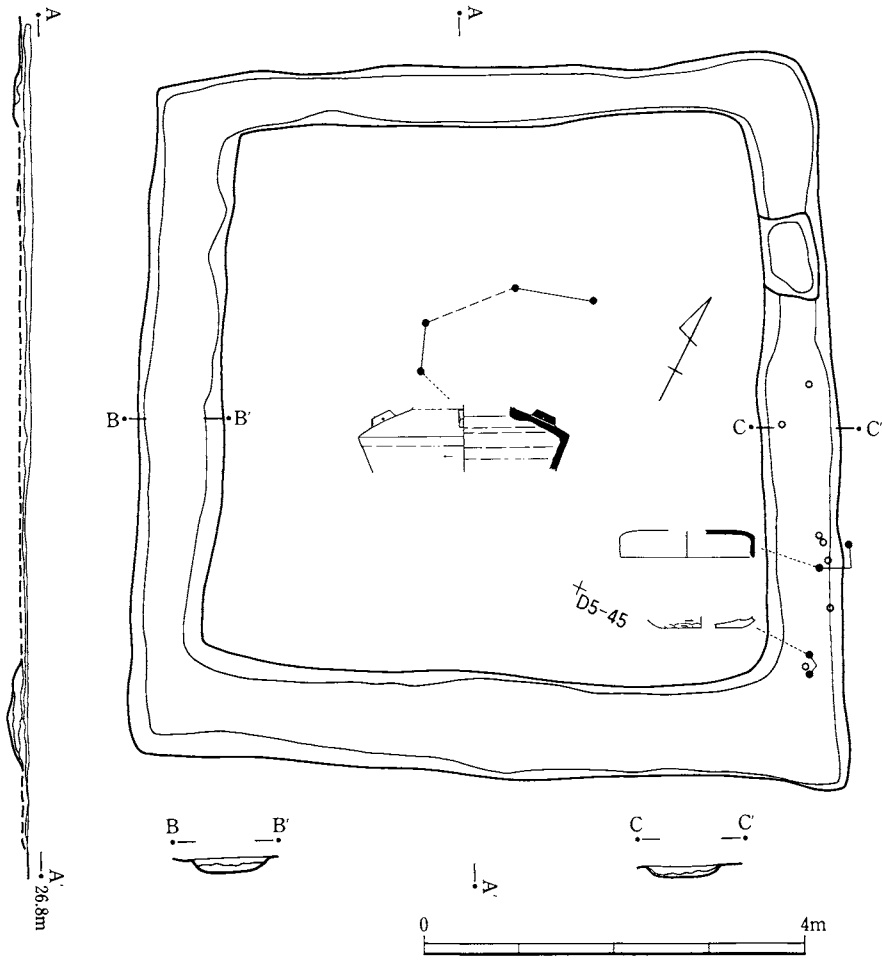
該期の遺構としては周辺の遺跡群においても小方墳群が調査されており、総体として古墳時代の物井古墳群の占地を継承して営まれていることが確認されている。ただ古墳時代、殊に7世紀代は墓域が比較的まとまりながら移動していたが、該期になると物井古墳群全体としても墓域の形成が分散的になる傾向が窺える。この事実は重大な問題を提示していよう。

②大割遺跡 SX－01

平面形及び周溝（第211図、図版92－1） 大割遺跡南縁中央、東関東自動車道側道に接する位置に検出された。コーナー形状のしっかりした方形であるが、南辺と東辺が長く、若干いびつで台形に近いとは言える。南辺と東辺で周溝内縁長6.0m、北辺、西辺で5.4m を測り、周溝外縁では長い南東辺側で一辺7.6m を測る。しかしこの地点は調査前は野球場として使用されていたため削平が激しく、当然ながら周溝の原状を遺存してはいない。したがって検出面から底面まではきわめて浅く、最深で0.2m に満たない。底面は平坦で両壁の立ち上がりは比較的急斜をなす。東辺北寄りに長方形の小さな掘り込みを認めたが、それとて検出面からの深さが0.16 m 程度しかなく、周辺より僅かに低いというに過ぎないため、その性格は判然としない。なお当墳周溝は東西南北を示さず、北辺を基準とすれば西にかなり振れている。

埋葬施設 検出されなかったが、後述のように火葬墓を埋葬主体としていたと思われる。

出土遺物（第224図1～3、図版99－1） 方台部中央及び東辺周溝内から須恵器、土師器の小片が出土している。周溝内はともかく方台部の遺物は原位置を留めるものではないが、そこで検出されたのは四耳壺で、周溝内から蓋も出土しており、蔵骨器であった可能性は濃厚である。出土遺物のうち図示可能な3個体を示す。2が四耳壺、1が2の蓋と考えられるものである。蓋は約1/5、身は肩部付近の約1/4しか遺存していない。両者とも施釉は意図的なものであろうか。3は土師器杯底部である。砂粒を多量に含んだ特徴的な胎土を用い、焼成が甘く非常



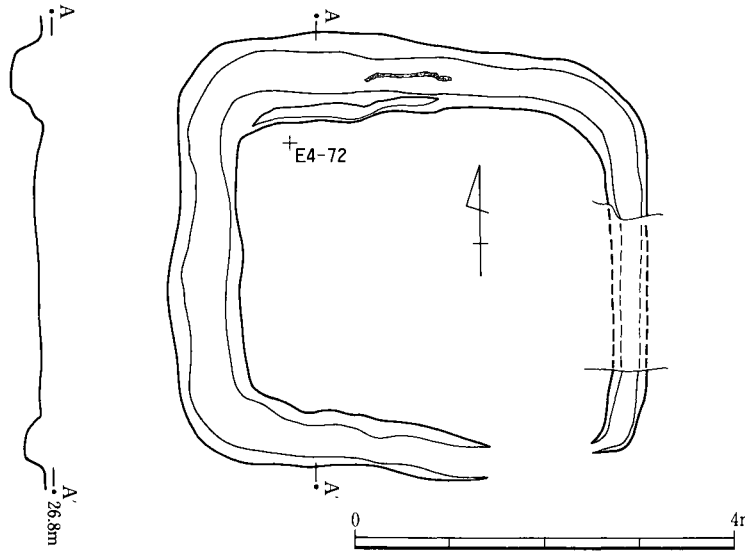
第211図　大割遺跡 SX-01（1/80）

に脆いが、外面は手持ち篦削り、内面は横なでの痕跡が残る。

③大割遺跡 SX－02

平面形及び周溝（第212図、図版92－２）　SX－01の北東約50m に位置した方墳。東西に長いやや長方形気味の形状を有する。検出地点の地形は平坦であるが、周溝は北西側が深く南東側が浅くなっており、南辺周溝の東半は途切れる。また東辺周溝は一部攪乱により失われている。したがって墳丘規模の計測値は決して正確ではないが、周溝内縁で東西長4.0m、西辺長2.8m、東辺長3.4m を測り、また周溝外縁の規模は東西5.1m、南北4.6m を測る。北辺周溝の西半は狭いテラス状の段状構造を持ち、さらに北辺周溝中央に底面から僅かに浮いて炭化材が出土している。炭化材は細い棒状のもので性格、機能は判然としない。

出土遺物　先述の炭化材以外、土器等は全く出土しなかった。



第212図　大割遺跡 SX-02（1/80）

④大割遺跡 SX－03

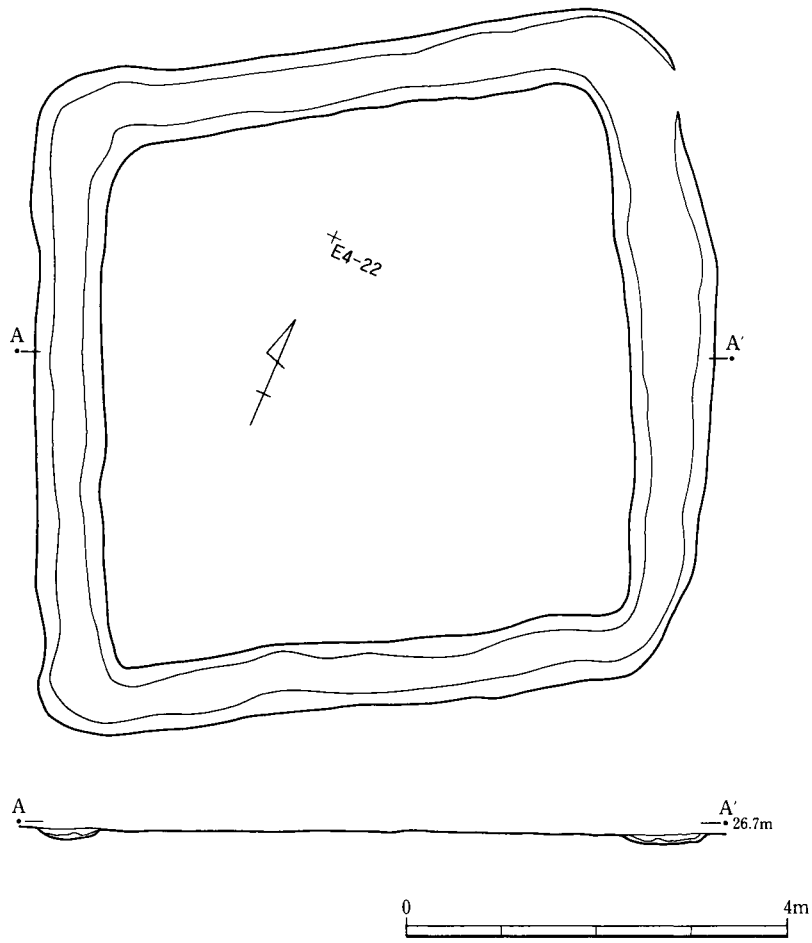
平面形及び周溝（第213図、図版93－１）　SX－02の北方およそ20m の位置に所在した方墳。各辺の長さはほぼ等しいが、北西－南東方向につぶれた格好をしており、言わば菱形を呈している。周溝内縁での一辺の長さは5.3～5.6m、周溝外縁では7.1～7.2m を測る。検出面における周溝の幅は比較的一定しており、また深さも然りで全体に僅か0.1m 余りである。当墳も SX－01同様周溝各辺が示す方位は東西南北に対して少し振れている。その傾きは SX－01に概ね等しいと言える。

出土遺物　遺構に伴うと思われる遺物は皆無であった。

⑤大割遺跡 SX－04

平面形及び周溝（第214図、図版93－２）　大割遺跡北部Ｃ２区、当遺跡と池花南遺跡を界する谷奥部に面するように位置する。SX－03と SX－05、06の中間の位置ではあるが、双方とも100m を越える隔たりがある。比較的整った方形を呈するが南北方向にやや長い。周溝内縁で東西長4.4m、南北長4.6m を測る。また周溝外縁では東西長5.9m、南北長6.2m を測る。周溝底面は平坦で、幅、深さとも概ね一定しているが、検出面からは極めて浅く、最も深くとも0.1m を若干上回る程度である。

出土遺物　遺構に伴うと思われる遺物は皆無であった。



第213図　大割遺跡 SX-03（1/80）

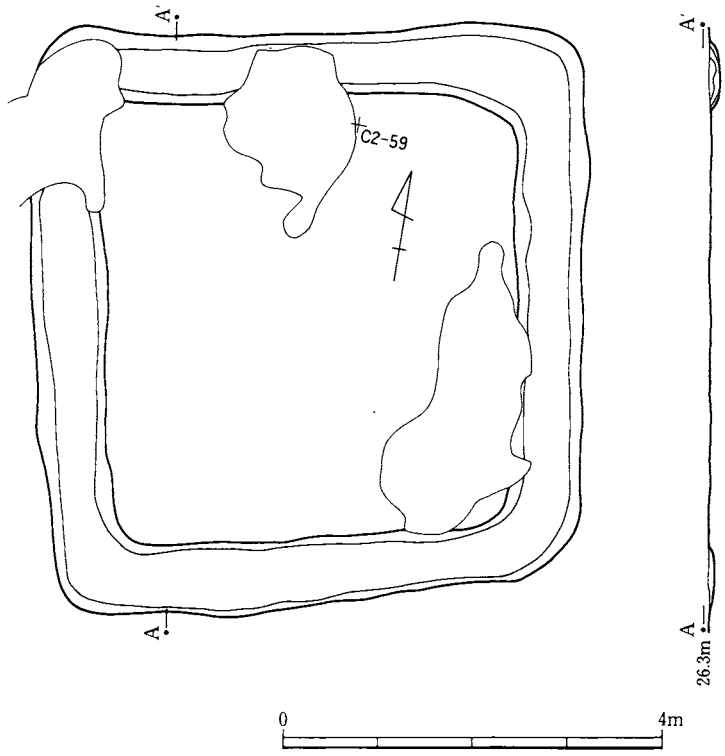
⑥大割遺跡 SX－05

平面形及び周溝（第215図、図版94－1）　大割遺跡北西端に位置する。すぐ南側には僅かな間隔を置いてSX－06が存在するが、方位の合致性等から明らかにこの2基は密接な関連を有するものと思われる。さて当墳はSX－02とともに遺跡中では最も小型のもので、若干隅丸気味の方形を呈し、周溝内縁で東西最大長、南北最大長とも3.5m、周溝外縁で東西4.7m、南北4.6mを測る。周辺は木根による攪乱が著しく遺存状態は良好なものではない。そのため北辺の一部が浅くなって途切れている。しかし検出面における周溝は広狭差が大きくなく、また深さ0.1m強程度で概ね一定で、元来の周溝の掘り込みが比較的整然たるものであったことを窺わせる。

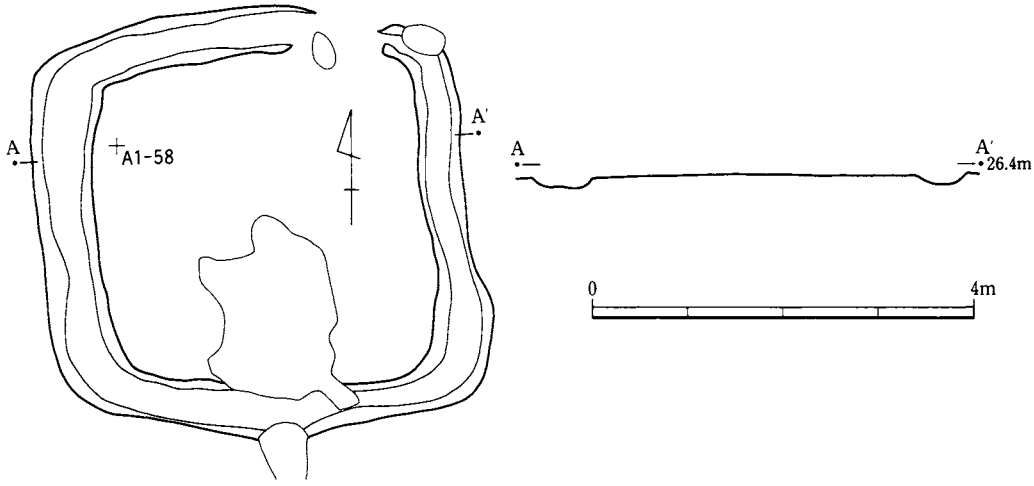
出土遺物　遺構に伴うと思われる遺物は皆無であった。

⑦大割遺跡 SX－06

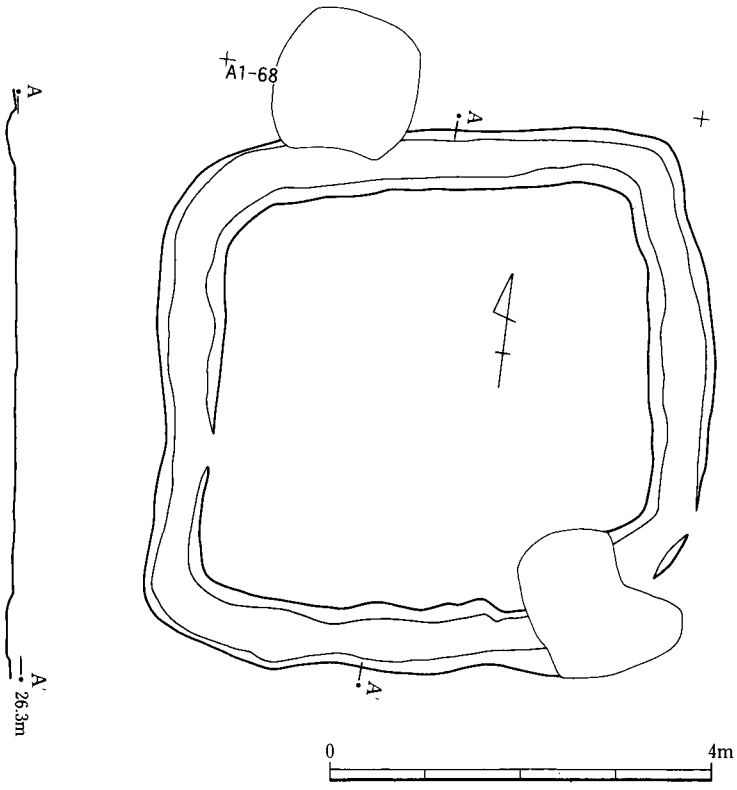
平面形及び周溝（第216図、図版94－2）　SX－05のすぐ南側で検出された方墳である。隅丸



第214図　大割遺跡 SX-04（1/80）



第215図　大割遺跡 SX-05（1/80）



第216図　大割遺跡 SX-06（1/80）

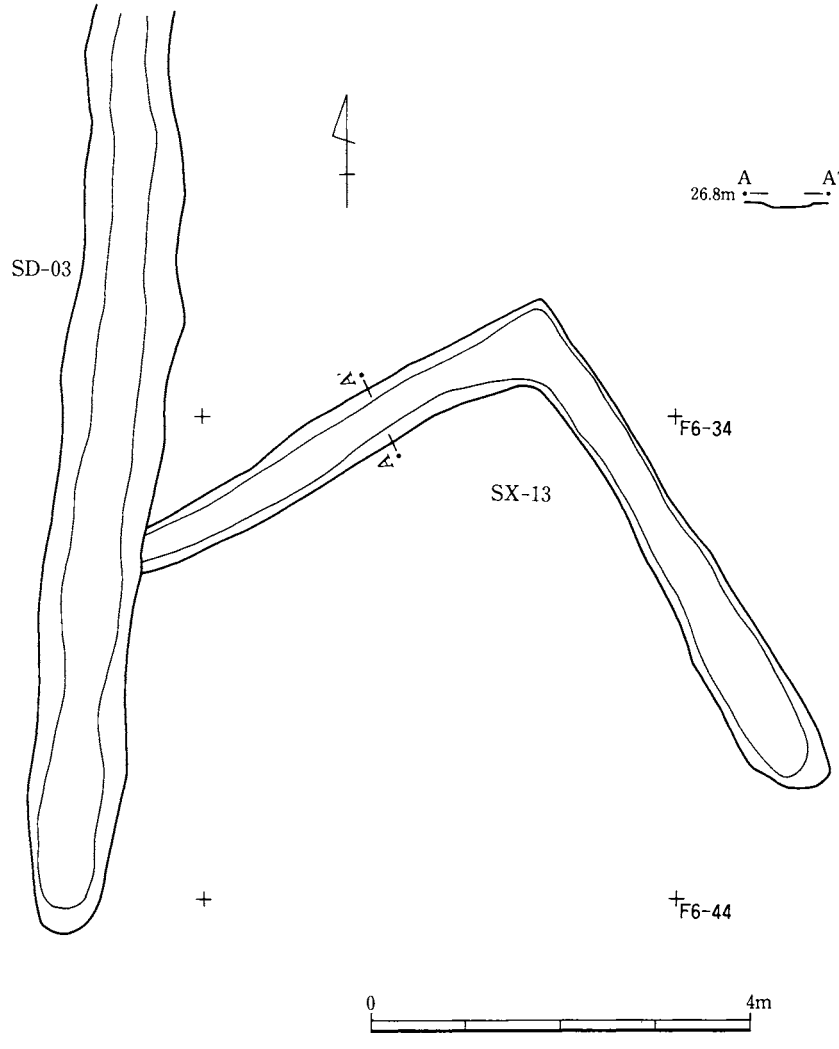
気味のコーナー形状など SX－05に類似する。また遺存状況も同様で、木根による攪乱が目立ち、随所で浅くなって途切れ気味となる。北西－南東方向に若干つぶれた形状を呈し、規模は SX－05よりもやや大きく、周溝内縁の東西長4.7m、南北長4.4m、周溝外縁で東西、南北とも5.8mを測る。他の該期方墳と同様検出面における周溝の幅や深さはほぼ一定であるが、殆ど周溝底面に近い部分しか遺存しておらず、深くとも0.1m を越えない。

出土遺物　遺構に伴うと思われる遺物は皆無であった。

⑧池花南遺跡 SX－13

平面形及び周溝（第217図、図版89－２）　遺跡中央西縁、古墳時代の SX－06、07、10の南方に所在した小方墳。池花南遺跡では最も奥部にあり、他の方墳群からすると独立的な位置を占める。図に見るように周溝北コーナー、北西辺、北東辺は遺存するが、西コーナーは SD－03に切られ、また周溝南半は削平の結果か全く遺存しない。したがって全体の規模は不明である。遺存部分の周溝幅は0.5～0.8m であるが、検出面からはきわめて浅く0.1m にも満たない。しかし北コーナーの形状などは比較的整美なものと言えようか。

出土遺物　遺構に伴うと思われる遺物は皆無であった。

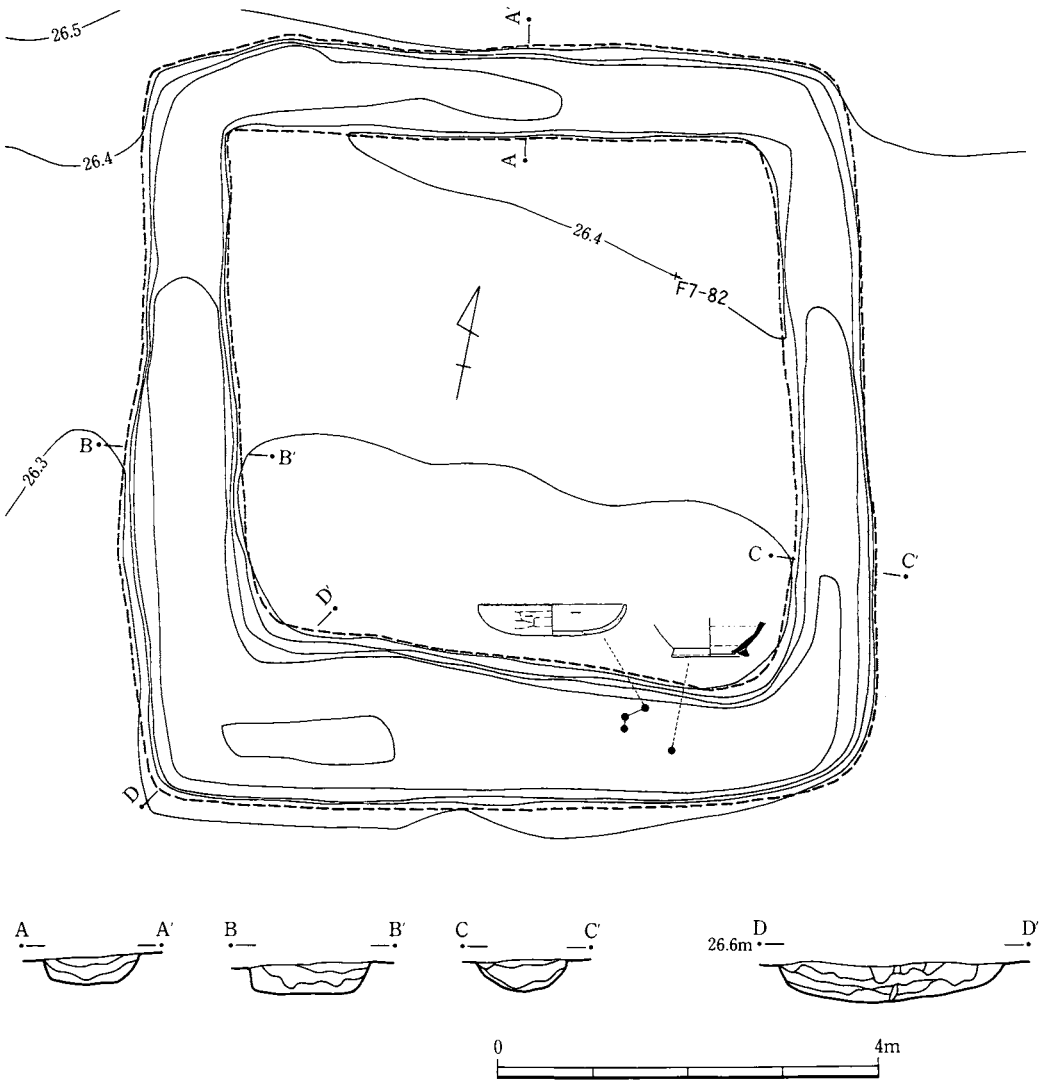


第217図　池花南遺跡 SX-13・SD-03（1/80）

⑨池花南遺跡 SX－14

平面形及び周溝（第218図、図版89－3～5）　遺跡南縁西端に所在した方墳。大割遺跡の諸例や池花南遺跡 SX－13に比して遺存状態は良好である。周溝は北側が狭く南側が広い傾向があるが、南辺西半は特に広く、そのため墳形はいびつなものとなっている。規模は周溝内縁で東西長5.8m、東辺長5.7m、西辺長5.2m、周溝外縁で東西最大長8.0m、南北最大長8.1m を測る。また検出面からの周溝の掘り込みは最大0.4m を測る。周溝の立ち上がりは急斜をなすが、北辺と西辺、南辺の周溝底面は平坦なのに対し東辺の周溝底面は断面椀状を呈する。

出土遺物（第224図4、5、図版99－1）　南辺周溝内から須恵器及び土師器の破片が出土している。出土レベルは覆土中位。4は土師器杯である。近接して出土した3片が接合した。浅



第218図　池花南遺跡 SX-14（1/80）

い皿状に近いもので口縁部は粗縁、外面は篦削り、内面は丁寧な研磨。5は須恵器でおそらく長頸瓶の底部である。断面三角形の高台を貼り付ける。内外面横なで。

⑩池花南遺跡 SX－15

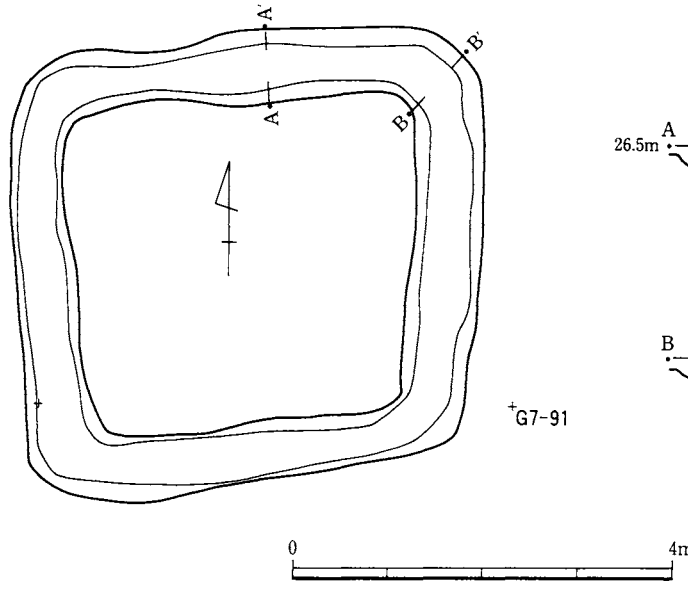
平面形及び周溝（第219図、図版90－1）　SX－14の東40m弱の位置に検出された方墳。小規模な方に属し、平面形状は若干南辺が短い逆台形を呈する。規模は周溝内縁で北辺長3.7m、南辺長3.4m、南北長3.5m、周溝外縁で東西長5.1m、南北長4.7m を測る。大割遺跡 SX－02や同 SX－05と同等の規模を持つと言えようか。検出面における周溝はやはり幅と深さに大きな差を持たず、深度は0.1～0.2m を測る。立ち上がりは比較的緩斜であった。なお各辺周溝はほぼ

正確に東西南北を指している。

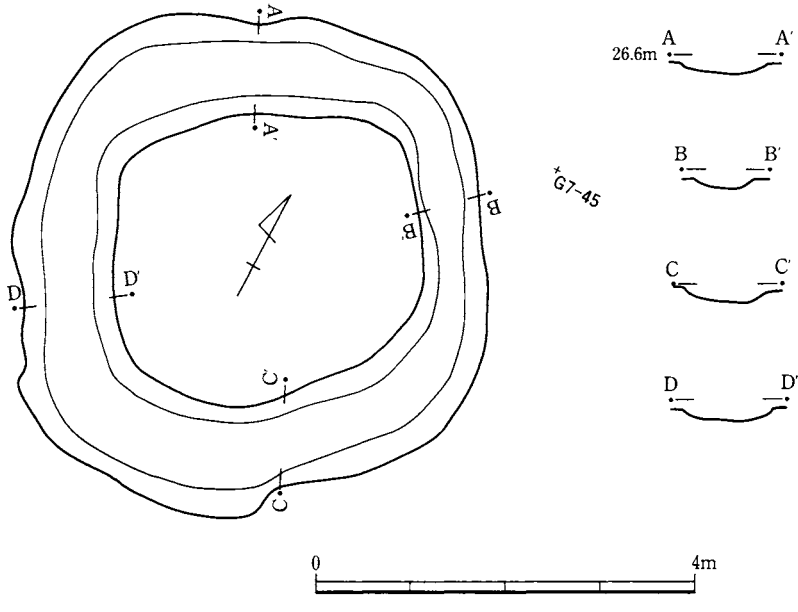
出土遺物　遺構に伴うと思われる遺物は皆無であった。

⑪池花南遺跡 SX－16

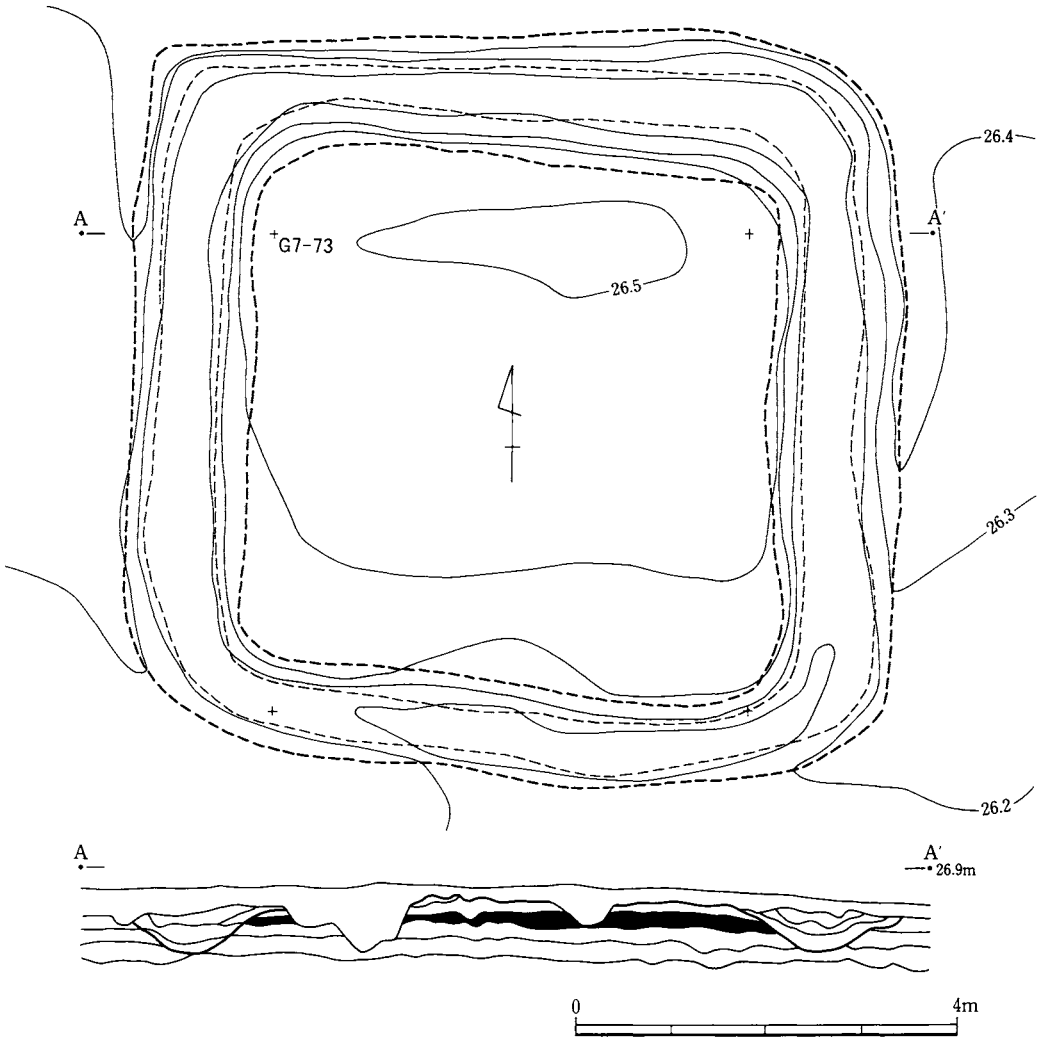
平面形及び周溝（第220図、図版90－２）　古墳時代の SX－01の南、SX－17の北ちょうど中



第219図　池花南遺跡 SX-15（1/80）



第220図　池花南遺跡 SX-16（1/80）



第221図　池花南遺跡 SX-17（1/80）

間の地点で検出された方墳。双方の間隔は10m を切る。遺跡群中で最も小規模なものである。平面形状は隅丸方形で、むしろ不整円形と言った方が近いかも知れない。規模は周溝内縁で東西長3.3m、南北長3.0m、周溝外縁で東西長5.0m、南北長5.2m を測る。検出面における周溝は北東側で狭く南西側で広いが、その深さはほぼ一定で、僅か0.1m 前後を測るに過ぎない。周溝の立ち上がりは内縁側外縁側いずれも比較的緩斜である。

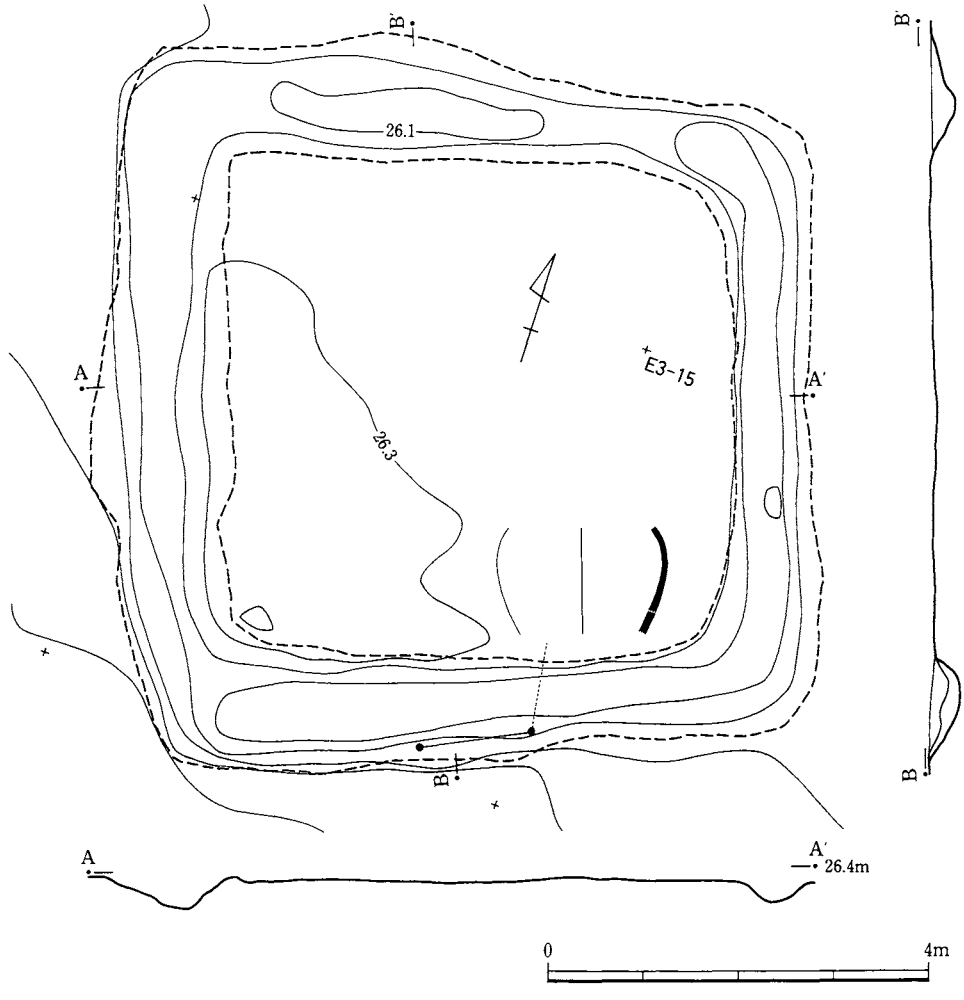
出土遺物（第224図６、図版99－１）　周溝内から須恵器杯１個体（６）が出土している。ただし原位置は不明である。杯は底部に手持ち篦削り痕を残し、他は横なで。

⑫池花南遺跡 SX－17

平面形及び墳丘、周溝（第221図、図版90－３、４）　SX－16の南、SX－15の東に位置する。

ほぼSX－14に匹敵する平面規模を有する。調査前にすでに低平な地膨れが認められたため、表土からの土層断面観察を行った。その結果旧表土と考えられる黒色～黒褐色土とその上に封土と考えられる薄い土層(遺存したその高さは0.2m程で、上位に新期テフラ土を基本とする明褐色土、下位に黒褐色土）が確認された。周溝覆土は墳丘のより上位から流れ込んだ状況を示している。旧表土整形面で計測した平面規模は、周溝内縁で東西長5.7m、南北長5.5m、周溝外縁で東西長8.1m、南北長7.9mを測る。また周溝掘り込みの深さは0.3m余りを測る。当墳は他の該期の方墳と相違して周溝底面形状が平坦でなく立ち上がりも緩斜である。掘り込みの在り方に本来的な差があったものであろうか。なお当墳は僅かながら封土を遺存したため、埋葬施設の検出に努めたが検出されなかった。

出土遺物　遺構に伴う遺物は皆無であった。



第222図　池花遺跡SX-01（1/80）

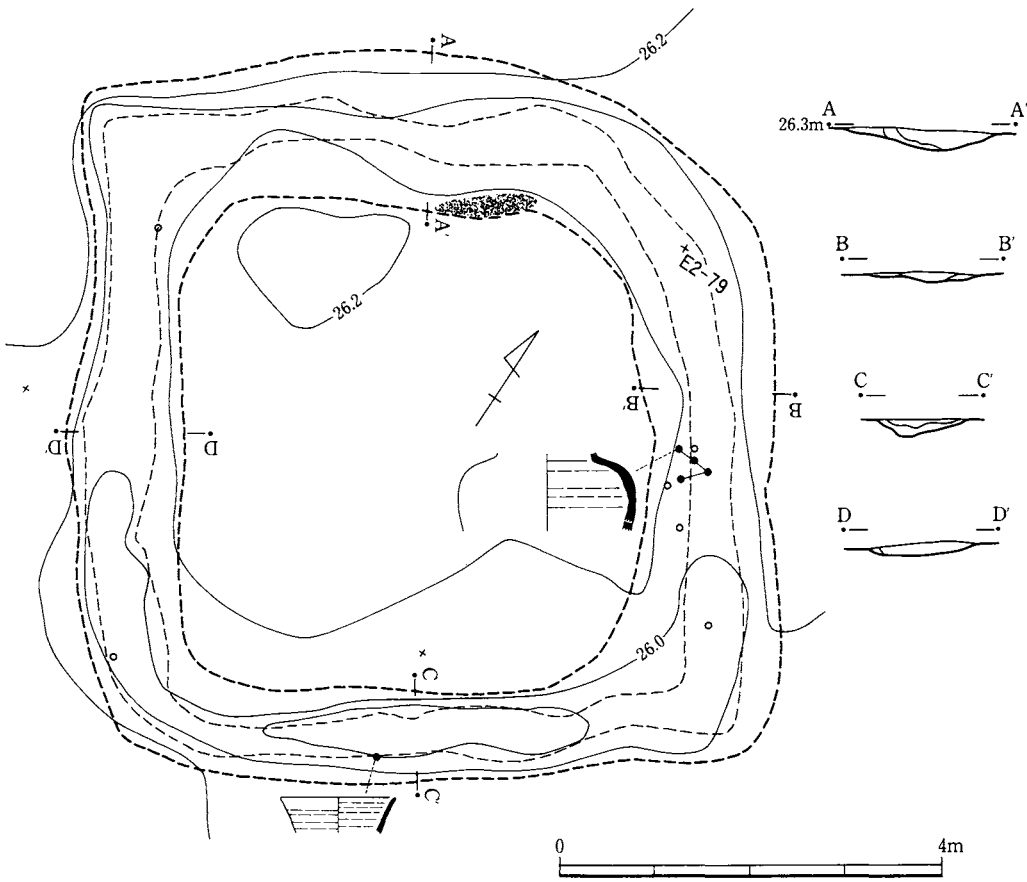
⑬池花遺跡 SX－01

平面形及び周溝（第222図、図版91－1） 池花遺跡東縁、E3区に位置する。比較的整った形状を示す方墳で、周溝内縁で東西長5.5m、南北長5.1m、周溝外縁で東西、南北とも7.6mを測る。池花南遺跡 SX－17と同様、周溝幅に極端な広狭差はないが、周溝底面はあまり平坦ではなく、また高低差もある。概して北半が浅く南半が深い傾向がある。立ち上がりもあまり急斜ではない。周溝掘り込みの深さはおよそ0.3m前後である。

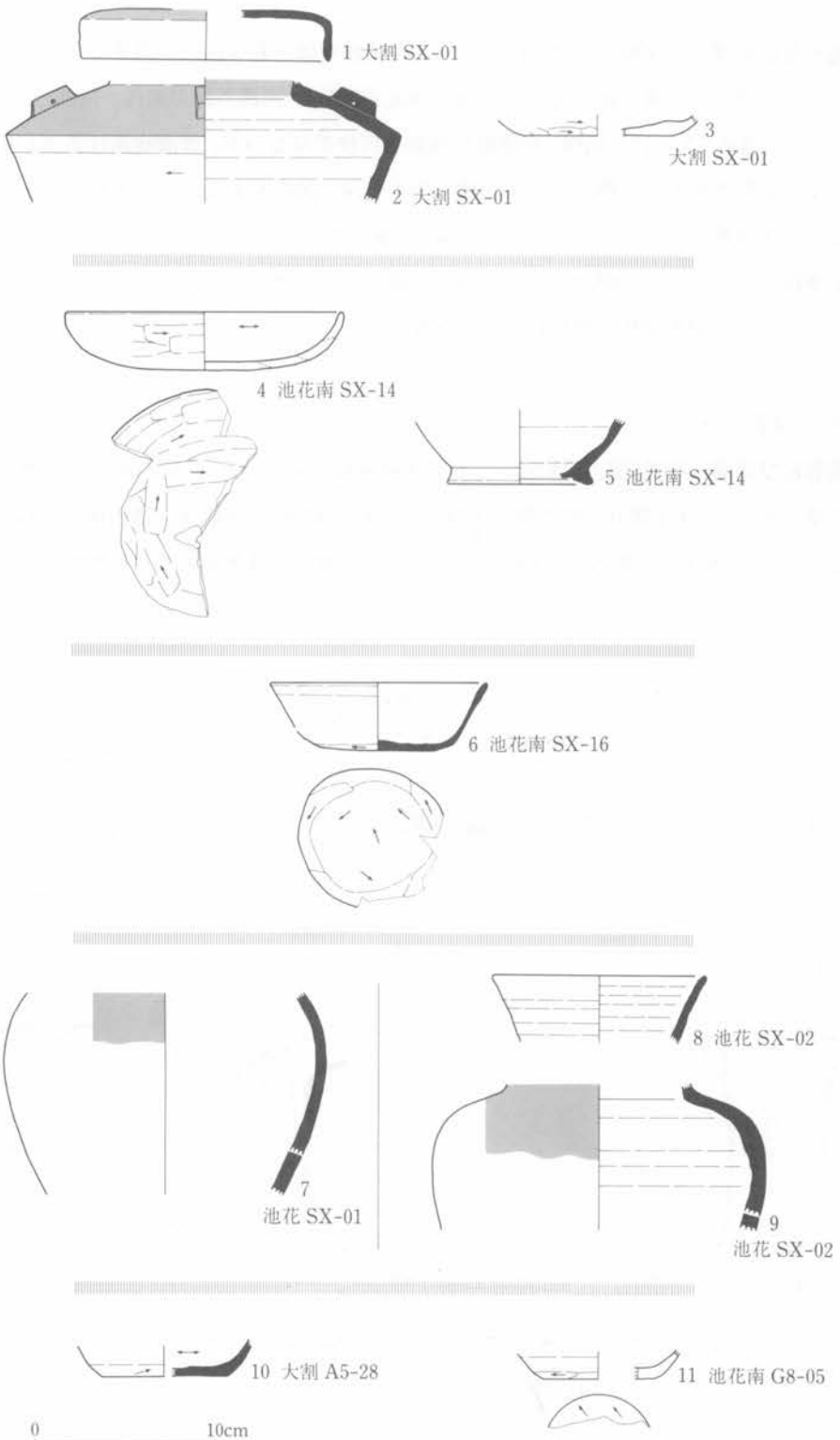
出土遺物（第224図7、図版99－1） 南辺周溝内から須恵器片が出土している。7は長頸あるいは広口の瓶の胴部破片と思われる。2点接合。

⑭池花遺跡 SX－02

平面形及び周溝（第223図、図版91－2） 遺跡東縁、SX－01の北東約20mの位置に検出された方墳である。形状は隅丸方形で特に東側にその傾向が強い。規模は周溝内縁で東西長5.0m、南北長5.1m、周溝外縁で東西長7.4m、南北長7.6mを測る。周溝はあまり整然たるものとは言



第223図 池花遺跡 SX-02（1/80）



第224図　奈良時代方墳群出土土器，他（1/4）

えない。極端な広狭差はないものの形状はやや不整である。また検出面における深さは幅の広さの割に非常に浅く、最深で0.2mを測るに過ぎない。周溝の立ち上がりは緩やかである。

出土遺物（第224図８、９、図版99－１）　東辺及び南辺周溝内で須恵器片が出土している。接合し実測可能な２個体を図示する。８は杯で、底部を欠失する。９は広口瓶の肩部から胴部上半の破片である。４点接合したが、他にも同一個体の小片が出土している。

⑮その他の遺物（第224図10、11、図版99－１）

10と11はともに杯底部破片である。10は須恵質、11は一見土師質であるが、いずれも須恵器としてよいものである。底部はどちらも手持ち篦削りがなされている。10は大割遺跡A5－28区から、11は池花南遺跡G8－05区から出土している。11の出土地点は方墳群から近い位置であるが、10の出土地点付近には該期方墳は勿論、他種の遺構もなく、また同時期の遺物も一切認められない。

⑯奈良時代の方墳群のまとめ

時期　当遺跡群で調査された13基の方墳は、遺物を全く出土しなかったものも多いが、数基の出土遺物から８世紀代の所産であることは疑うべくもない。遺物の出土状況はやや曖昧であるが、当遺跡群の状況から見て、奈良時代の遺物が遺構と全く無関係に混入していることはあり得まい。それらの遺物（土器）は遺構造営時に置かれたかまたはあまり時間差を持たないものであり、遺構の年代を知る上である程度の示準となるものであろう。出土土器個々で見ると池花南遺跡SX－14出土の４が古相を示し、新相を持つ池花南遺跡SX－16出土の６まで、８世紀第１乃至第２四半期から同第４四半期までの時期幅がある。出土遺物の僅少さと出土状況の曖昧さはやはり細かい年代比定に障害ではあるが、ここで見る限り当遺跡群の造墓期間は半世紀あるいはそれをやや上回る期間に亙って、すなわち２～３世代の間墓域の形成が続いたと考えることができる。

群構成　個々の遺構の細かい年代比定が不可能で築造順序等が想定できないため、群構成についての微細な分析は無理である。分布状況を見ると、池花遺跡SX－01、SX－02の２基、池花南遺跡SX－14～SX－17の４基、大割遺跡SX－02、SX－03の２基、大割遺跡SX－05、SX－06の２基がまとまっていると言えようか。殊に池花遺跡の２基や大割遺跡のSX－05とSX－06がグルーピングされることは明らかであろう。先に造営期間を２～３世代と想定したが、ここに認められるような分布傾向は、複数の単位がそれぞれの墓域を持って２（～３）世代に亙って造墓活動を行った結果と考えて差し支えあるまい。

方墳の規模　ここで報告した遺構群は、他遺跡の例に漏れず周溝外縁で測っても一辺10mに満たない小規模なものばかりであった。それらの規模を示す計測値を第18表にまとめたが、そ

の数値に数段階があることが解る。最大のグループは池花南遺跡SX－14、SX－17、大割遺跡SX－01、SX－03の4基である。池花遺跡の2基はそれらより若干小さい。最小のグループには池花南遺跡SX－15、大割遺跡SX－02、SX－05の3基がまとまり、池花南遺跡SX－16のみがそれらよりさらに小さい。中間のグループとして大割遺跡SX－04、SX－06の2基がある。かかるグルーピングは、相対的に遺存条件が悪くなる故に6～7世紀の円墳や帆立貝形古墳ほどの明瞭さを有さないが、造墓活動にも一定の規格性が背景にあることを窺わせるものである。

第17表　内黒田遺跡群奈良時代方墳一覧

遺構名		周溝内縁計測値	周溝外縁計測値
池花遺跡	SX－01	5.5－5.1	7.6－7.6
	SX－02	5.0－5.1	7.4－7.6
池花南遺跡	SX－13	――	――
	SX－14	5.8－5.2～5.7	8.0～8.1
	SX－15	3.4～3.7－3.5	5.1－4.7
	SX－16	3.3－3.0	5.0－5.2
	SX－17	5.7－5.5	8.1－7.9
大割遺跡	SX－01	5.4～6.0－5.4～6.0	7.6－7.8
	SX－02	4.0－2.8～3.4	5.1－4.6
	SX－03	5.7－5.6	7.2－7.0
	SX－04	4.4－4.6	5.9－6.2
	SX－05	3.5－3.5	4.7－4.6
	SX－06	4.7－4.4	5.8－5.8

5．近世以降

①概観

内黒田遺跡群では、奈良時代に墓域として占地された後、平安時代から中世にかけては全く何の痕跡も残されていない。しかし近世（～近代）になると溝状遺構（あるいは道路状遺構)、土壙群といった形で生活の痕跡が認められる。

大割遺跡及び池花南遺跡では溝状遺構が検出されている。その時期は確定できず、近世以降と推定されるに過ぎない。明確な近世の遺物は僅かに銭貨が見られるだけである。

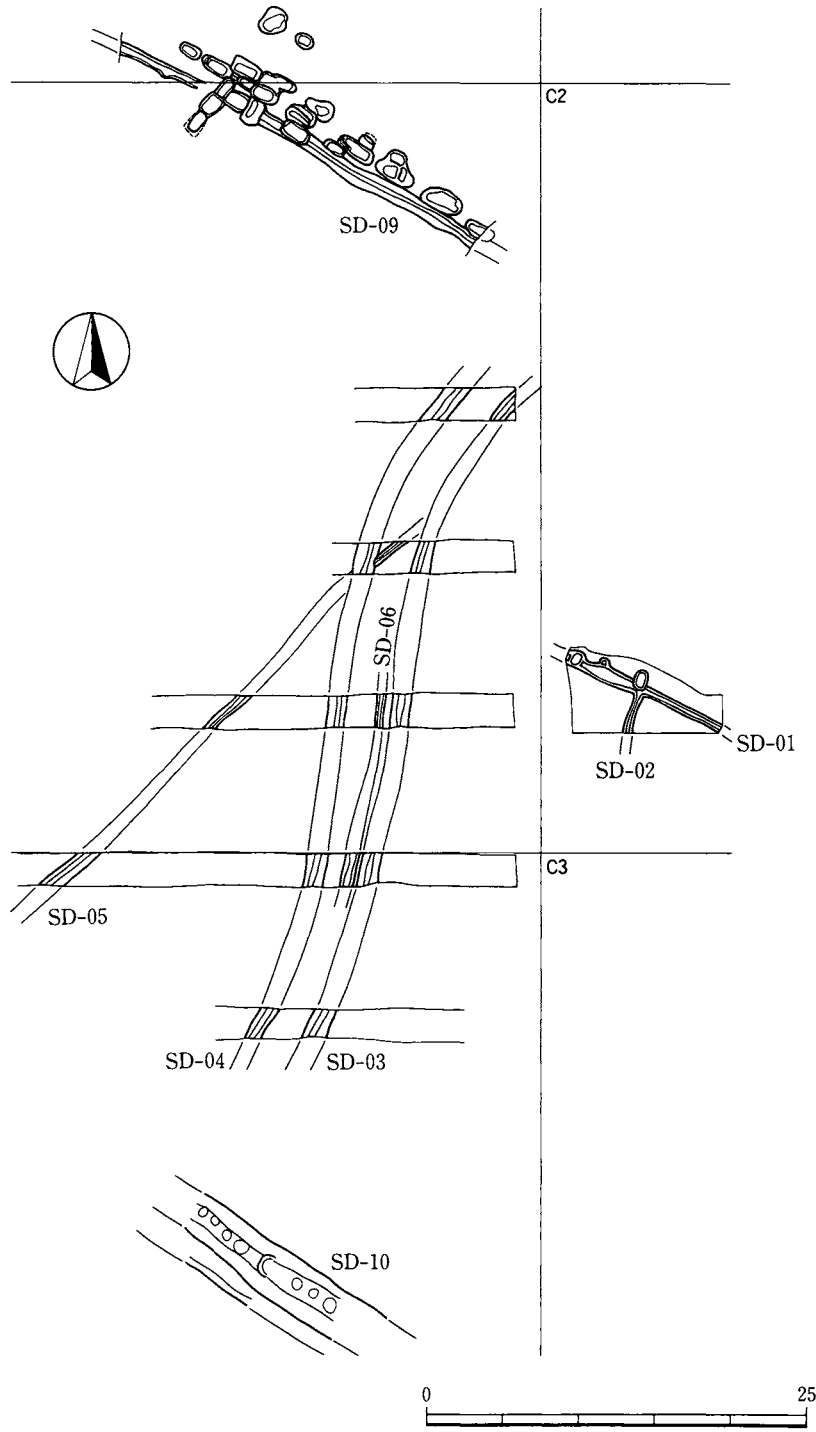
池花遺跡では遺跡西半部に溝状遺構が縦横に走るのが確認されており、さらにその北部においては溝状遺構SD－09に沿うようにして土壙群が検出された。また遺物はSD－09及び土壙群、SD－10、他から18～19世紀の陶磁器、金属製品などが出土した。

②池花遺跡検出の溝状遺構（第225図、第226図）

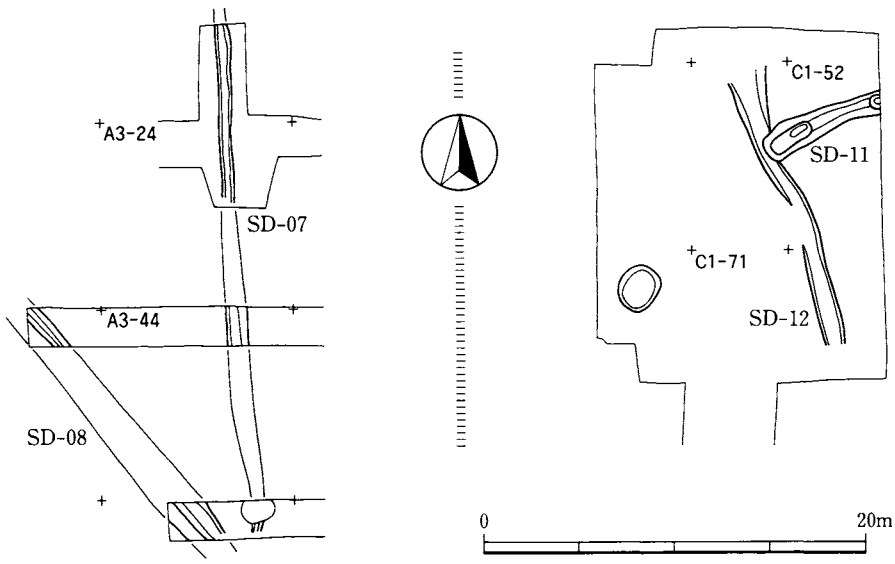
SD－01・SD－02　SD－01はC2－70区からC2－82区に検出された。東南東から西北西方向に走る。確認トレンチで検出された付近11m分を調査したが、さらに東西に延びる。しかし周囲の確認トレンチでは検出されていない。幅は0.4～1.0m、検出面からの深さは0.1～0.2m。覆土はしまりの弱い黒褐色土が主体となっている。随所に浅い土坑状の掘り込みが付随するようであるが、それらの性格は判然としない。C2－71区でSD－02とほぼ直角に交差する。遺物は僅少であるが、西寄りのところから透明釉灯明皿(平皿)が出土している。SD－02はC2－82区で検出された。SD－01と直交するが、以北には延びておらず、代わって長方形の土壙状の掘り込みが認められた。幅は0.4～0.6m、検出面からの深さは0.1m、土壙状の掘り込みは長径1.3m、短径0.8m、深さ0.3mを測る。調査は一部(2.5m分)に留まり南側はさらに延びていたが、周辺の確認トレンチからは検出されていない。覆土はSD－01と共通で、新旧関係は認められず、時を同じくして埋積したものと考えられる。遺物は出土していない。

SD－03・SD－04・SD－06　B2区からB3区にかけて、やや蛇行しながら概ね南北に平行して走る溝状遺構である。調査は確認トレンチで検出された範囲に留めた。SD－03とSD－04は2m余りの間隔を置いて平行しており、ともに幅1.0～1.4m、深さ0.2～0.4mで覆土を含めて共通性の高いもの。南北50mに亙って存在が確認されているが、その先は南北とも隣接トレンチで検出されていない。またSD－06はB2－87区及びB3－07区で検出され、SD－03とSD－04の間をSD－03に沿うようにして走るもので、幅0.4～0.9m、深さ0.1～0.2mを測る。SD－03・04と関係する遺構であろうが、掘削された距離は本来的に短かったと思われる。いずれからも遺物は殆ど出土していないが、SD－04で陶器椀が見られ、時期を推測させる。

SD－05　前掲3遺構と同様B2区からB3区で検出された。北東から南西方向に走っており



第225図　池花遺跡 SD-01～06・09・10（1/500）



第226図　池花遺跡 SD-07・08・11・12（1/400）

B2－67区でSD－04と交差することが確認されたが、その先後関係はよく判らなかった。これもトレンチ部分の調査に留めたため、34m 分の存在は確認されているが両端ともさらに先に延びる。幅は0.5～1.0m、検出面からの深さは0.1～0.2m を測る。覆土は黒褐色土単一であった。遺物は出土していない。

SD－07　遺跡西端、A 2 区を南北に走る溝状遺構である。やはり確認トレンチで検出された部分の調査を行った。したがって27m 分の存在は確認しているが、さらに北側に延びていたらしい。幅は0.6～1.1m、検出面からの深さは深いところで0.1m 余り、浅いところで 5 cm 程度である。遺物は出土していない。

SD－08　SD－07の西側に検出されたもので北西から南東方向に走る。やはりトレンチ部分以外の調査を行っていないため、全貌は不詳。幅0.7～1.3m、深さ0.1m 前後を測る。この遺構には明らかな硬化面が見られ、道路として機能していたことは確実である。遺物は出土していない。

SD－09　B 2 区北部で検出されたもの。これに接して検出された土壙群とともに後述する。

SD－10　遺跡南縁で検出された溝状遺構である。これは近年に至るまで道路として機能していたものであり、過半が調査区を界するものとなっている。また池花南遺跡 SD－04と同じ遺構である。調査はごく部分的に、B3－45区から B3－57区に留めた。幅は4.5m 前後でほぼ一定しており、検出面からの深さはおよそ1.0m を測る。遺構の南側ではテラス状の段をなしていたが、土層断面の観察からは当初やや浅い溝が掘削され、後に少し北にずれてより深い溝が掘削されたことが判る。遺物は北側の新しく掘削された方で瓦及び19世紀後半代の陶磁器が出土しており、当初掘削されたのは19世紀前半以前に遡るものと考えられる。

SD－11・SD－12　調査区北縁、C1－51区からC1－72区で検出された。SD－11は東西に走るもので6.5m分の調査を行ったが、東側はさらに延びる。また西側はSD－12との交差点を限りとする。幅1.0～1.6m、深さ0.1～0.2mであるが、2箇所で土壙状の掘り込みが認められた。SD－12はほぼ南北に走るもので15m分を調査しえた。幅0.9～2.0m、深さは0.1m前後を測る。両遺構とも遺物を出土しなかったが、SD－01・02、SD－09とそれに接する土壙群に類し、時期も近いものである可能性がある。

③池花遺跡SD－09・土壙群（第227図）

SD－09　遺跡北縁近くで検出された溝状遺構で、B1－94区からB2－29区までの約27m分を調査した。西側は調査区外に延び、また東側もさらに延びていたと思われるが、他の確認トレンチには連続する溝状遺構を検出することができなかった。その幅0.6～1.3m、検出面からの深さ0.2～0.4mを測る。調査した範囲内では当遺構に接するか遺構内に切り込んで多くの土壙が検出されている。土壙群との新旧関係は、SK－08との重複においては当遺構が新しい。

土壙群　溝状遺構SD－09に沿うようにして概略長方形を呈する土壙が21基（半欠1基含む）検出された。その多くは長軸方向をSD－09に平行させ、また残りはSD－09に対して直交方向に営まれており、SD－09と土壙群は密接な関係を持っていたことは明白である。

SK－03　瓢箪形の平面形を持つ。長2.1m、幅1.4m、深さ1.1m。

SK－04　隅丸長方形。長1.8m、幅0.9m、深さ0.8m。

SK－05　隅丸長方形。SK－17とSK－23に挟まれる。遺存長1.5m、幅1.2m、深さ0.6m。土壙群中で唯一馬骨を出土した。

SK－06　北側と東側に段状の構造を持つが、3基の重複であるのか元来複合的な形状を持ったものか判らない。長2.7m、幅1.9m、深さ0.9m、中段部分の深さ0.7～0.8m。

SK－07　SK－06と同様やや複雑な形状を示す。北側に張り出した部分の壁面は少しオーバーハングしており、有天井構造か。長2.6m、幅2.0m、深さ0.9m、北側の張り出しの深さ0.8m。

SK－08　隅丸長方形。長2.0m、幅1.2m、深さ0.7m。

SK－09　SK－03とSK－08に挟まれる。概ね隅丸長方形。北側に段状構造を持つ。長2.1m、遺存幅1.4m、深さ0.5m。

SK－10　やや不整の隅丸長方形。長2.8m、幅1.4m、深さ0.7m。

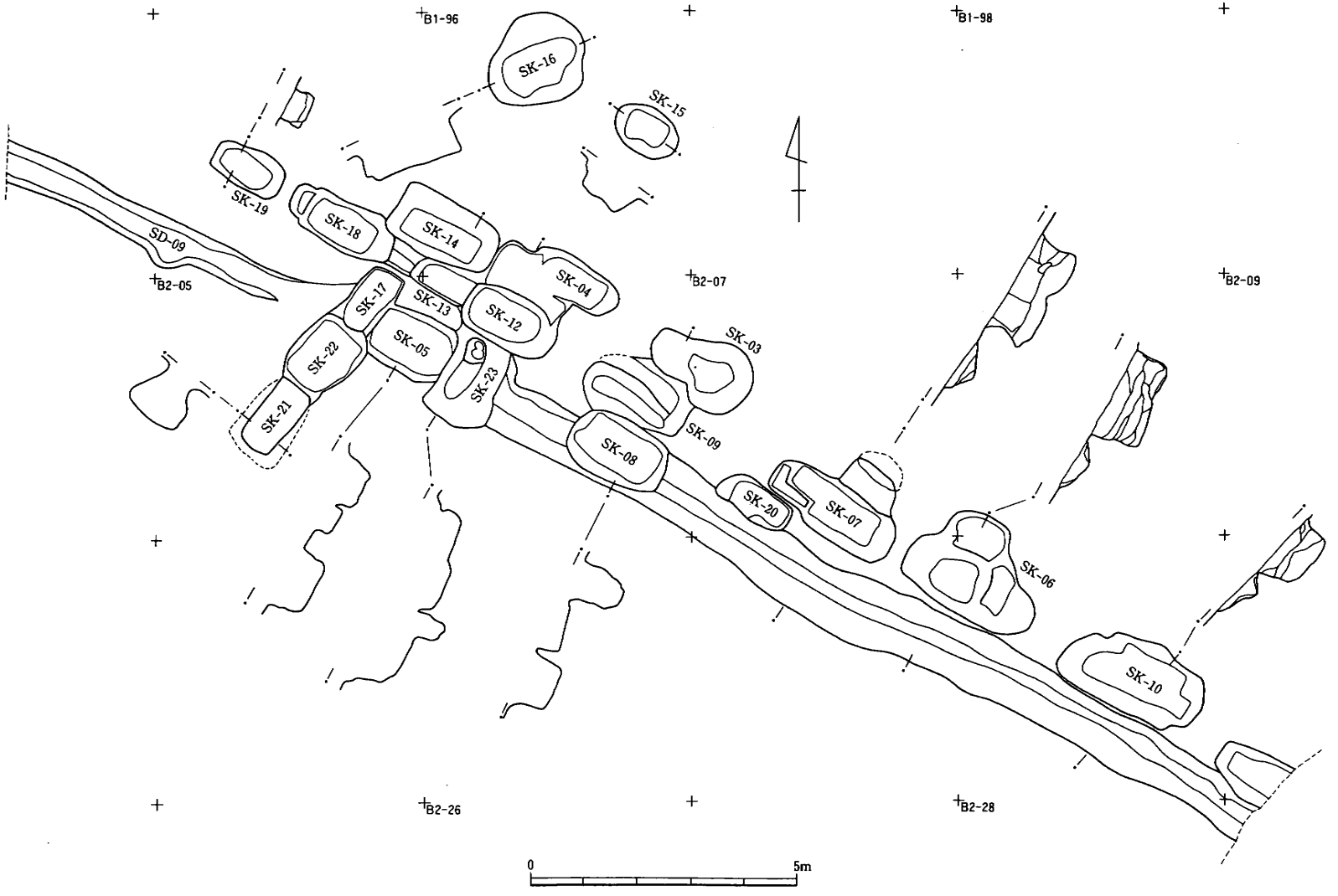
SK－12　隅丸長方形。SK－04、SK－13、SK－23に接する。長1.9m、幅1.0m、深さ0.7m。

SK－13　隅丸長方形。SK－12、SK－14に接する小型の遺構。長1.2m、幅0.6m、深さ0.3m。

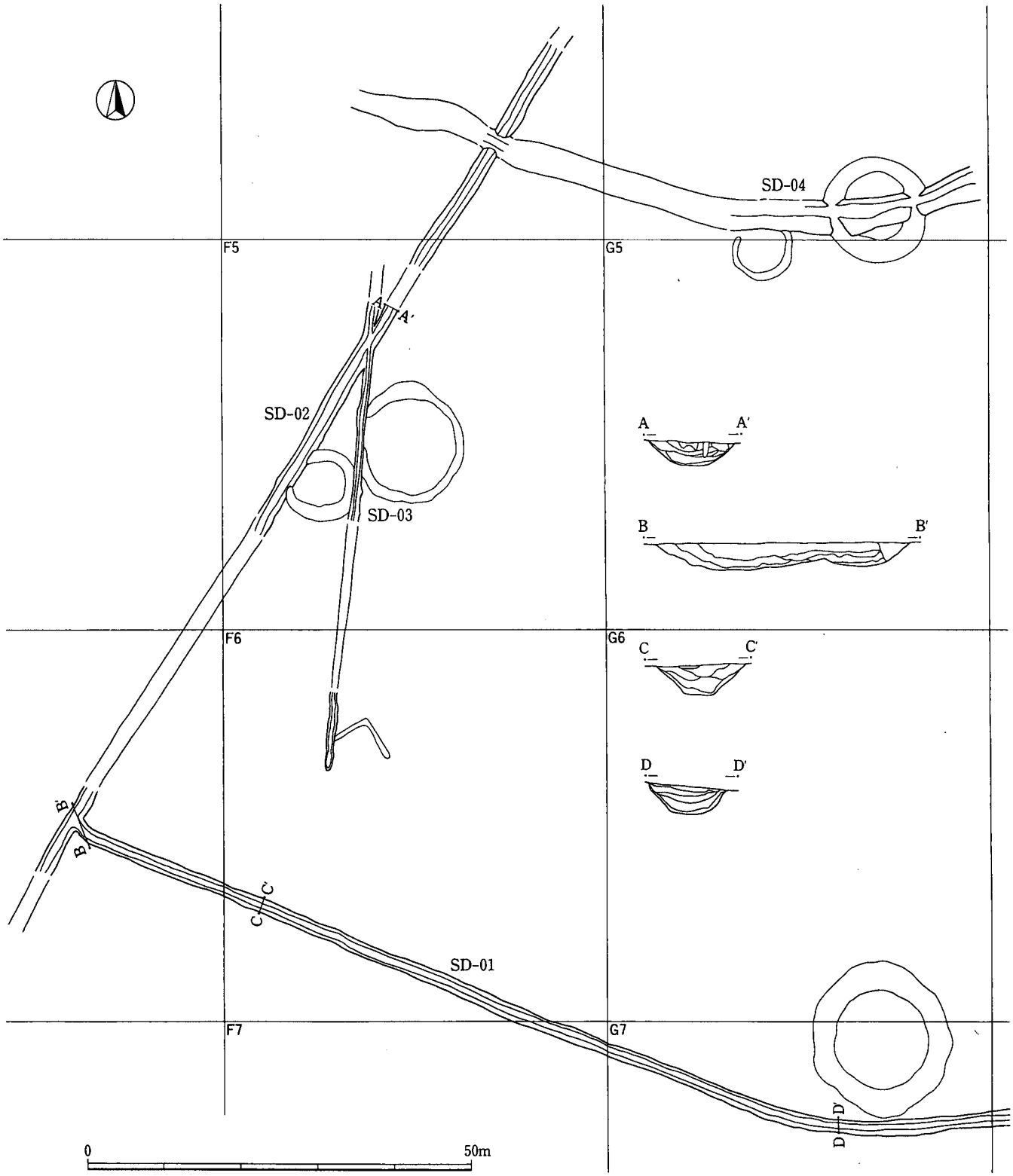
SK－14　隅丸長方形。長2.1m、幅1.2m、深さ0.6m。

SK－15　楕円形。他の土壙群とはやや離れた位置にある。長1.3m、幅0.9m、深さ0.4m。

SK－16　不整楕円形。SK－15とともに他の土壙群とはやや離れ、また他の土壙群、SD－09



第227図　池花遺跡Ｂ１・Ｂ２区近世土壙群（1/100）



第228図　池花南遺跡 SD-01・02・03・04（1/750，断面1/120）

に対して主軸方位が斜行する。長2.0m、幅1.8m、深さ0.7m。

SK－17　隅丸長方形。SD－09に直交する。長1.3m、幅0.8m、深さ0.6m。

SK－18　隅丸長方形。西側に段状構造が見られる。長2.2m、幅0.9m、深さ0.7m、西側の中段の深さは0.3m。

SK－19　隅丸長方形。長1.4m、幅0.8m、深さ0.5m。

SK－20　隅丸長方形。SK－07、SD－09に隣接する。長1.5m、幅0.7m、深さ0.1m と浅い。

SK－21　隅丸長方形。SK－22に接する。SK－22側を除く三方の壁面はオーバーハングし、袋状をなす。長1.6m、幅1.1m、深さ1.0m。

SK－22　隅丸長方形。SK－17と SK－21に挟まれる。長1.6m、幅1.2m、深さ0.9m であるが、隣接する SK－21と比較するとそれぞれの検出面からの深さでは当遺構の方が浅いが、絶対的な深度では当遺構の方が深い。

SK－23　隅丸長方形。SD－09と直交し、SK－05、SK－12と接する。底面東寄りに小孔が見られるが、これは攪乱か。長1.8m、幅1.3m、深さ1.0m。

上記の土壙群及び溝状遺構 SD－09からは近世(18～19世紀)の陶磁器、鉄釘が出土しており、大まかな年代比定は可能である。またいずれもロームブロックを混じた腐植土を覆土としており、切り合い関係は認められるものの、接近した時期に営まれしかも人為的に埋められたものであることは明らかである。しかしそれらの性格については、SK－05で馬骨が出土した事実が示唆的ではあるが、決して明確とは言い難い。

④池花南遺跡検出の溝状遺構（第228図）

SD－01　遺跡南部を東西に走るもので、ほぼ全面を調査し得た。東端はＧ８区の台地端部で急傾斜が始まる地点まで続きさらに延びていた。Ｇ７、Ｆ７、Ｆ６、Ｅ６区を通り西端は SD－02（大割遺跡 SD－02）に合流する。その間およそ131m。当遺構は概ね西北西から東南東に走るが、古墳 SX－01周溝に接する地点でやや向きを変え、SX－01を巻き込むように走る。当遺構構築時点では SX－01の墳丘は完全に遺存し、また意識されていたのであろう。遺構の幅は1.5～2.2m、検出面からの深さは0.5～0.6m を測り、概ね断面逆台形の非常に整った形状を示している。覆土は締まった黒褐色土を主体として、最上位には砂質を帯びた黒褐色土が堆積する。出土遺物は多いが、それは先土器時代～弥生時代の遺物集中の北縁を貫通しているためであり、当遺構の構築時期を明確に示す遺物は認められなかった。

SD－02　遺跡西縁を北北東から南南西に走るもので、北端は斜度が急になる地点よりさらに延びる。Ｅ６区で SD－01と分岐するが、土層断面では両者の先後関係は認められず、覆土が同時に埋積した可能性が強い。Ｆ４区では SD－04に、Ｆ５区で SD－03に切られ、またＦ５区では SX－10を切っている。全掘はしていないが、南方にはさらに延びて大割遺跡まで続く（大割

遺跡SD－02)ことを確認している。非常に直線的に構築されている溝状遺構である。遺構の幅は1.8～2.3m、検出面からの深さは0.5m程度を測り、その規模はSD－01にほぼ等しいと言える。断面形も逆台形に近く、覆土もほぼSD－01に共通している。遺物は少なく、池花南遺跡内では遺構の構築時期を推定させるものはない。

SD－03　Ｆ５区からＦ６区にかけて南北に走る溝状遺構。所謂〝根切溝〟である可能性が濃厚である。他の遺構と重複する部分のみ調査した。幅1.0～1.4m、検出面からの深さは0.5m前後を測る。遺物は皆無である。

SD－04　遺跡北部を東西に走る。Ｇ４区でSX－09及びSX－18を、Ｆ４区でSD－02を切り、さらに池花遺跡南縁へと延びる。池花遺跡SD－10と同じ遺構である。池花南遺跡では他の遺構と重複する部分だけを調査したが、池花遺跡の項で述べたように、近年まで道路として使用されており、しかも当遺跡内では明らかな凹みとして残っていたためその位置は明らかであった。既述のように２段階に掘られており、その状況は池花遺跡における観察と同じ。底面には小孔が連続して穿たれていた。SX－18付近では幅３～４ m、検出面からの深さは0.6～0.9mであった。池花南遺跡ではあまり遺構の時期を示す遺物は出土していない。

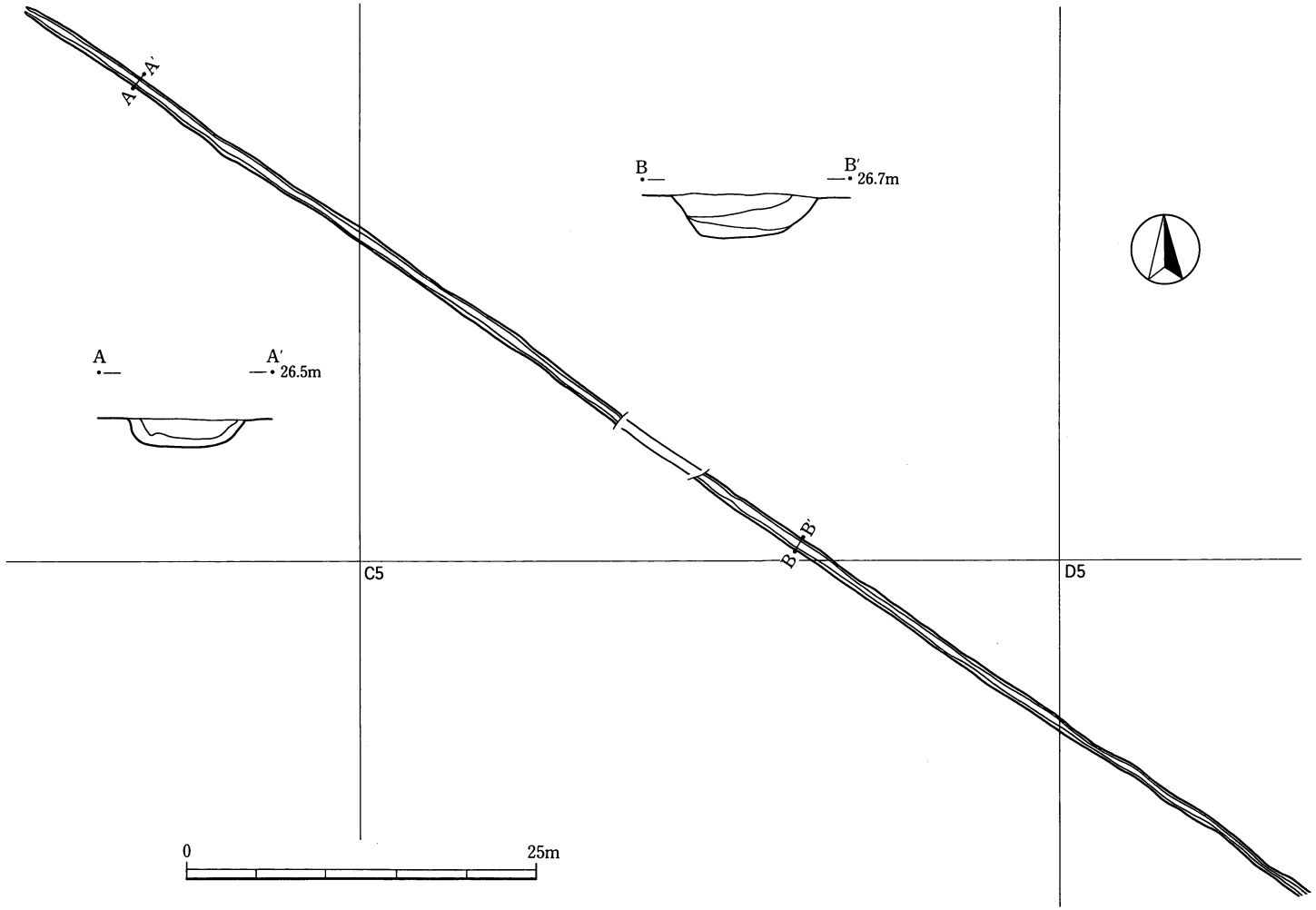
⑤大割遺跡検出の溝状遺構（第229図、第230図）

SD－01　遺跡Ｂ４区からＣ４、Ｃ５、Ｄ５区にかけて北西－南東方向に走る溝状遺構である。非常に直線的で、硬化面が観察され、おそらく道路であろう。覆土は暗褐色土を主体とするが、上面は野球場となっていたため圧されている。検出、調査された長さは112m、幅0.6～0.9m、検出面からの深さ0.1～0.25mを測る。時期を示す遺物は出土しなかった。

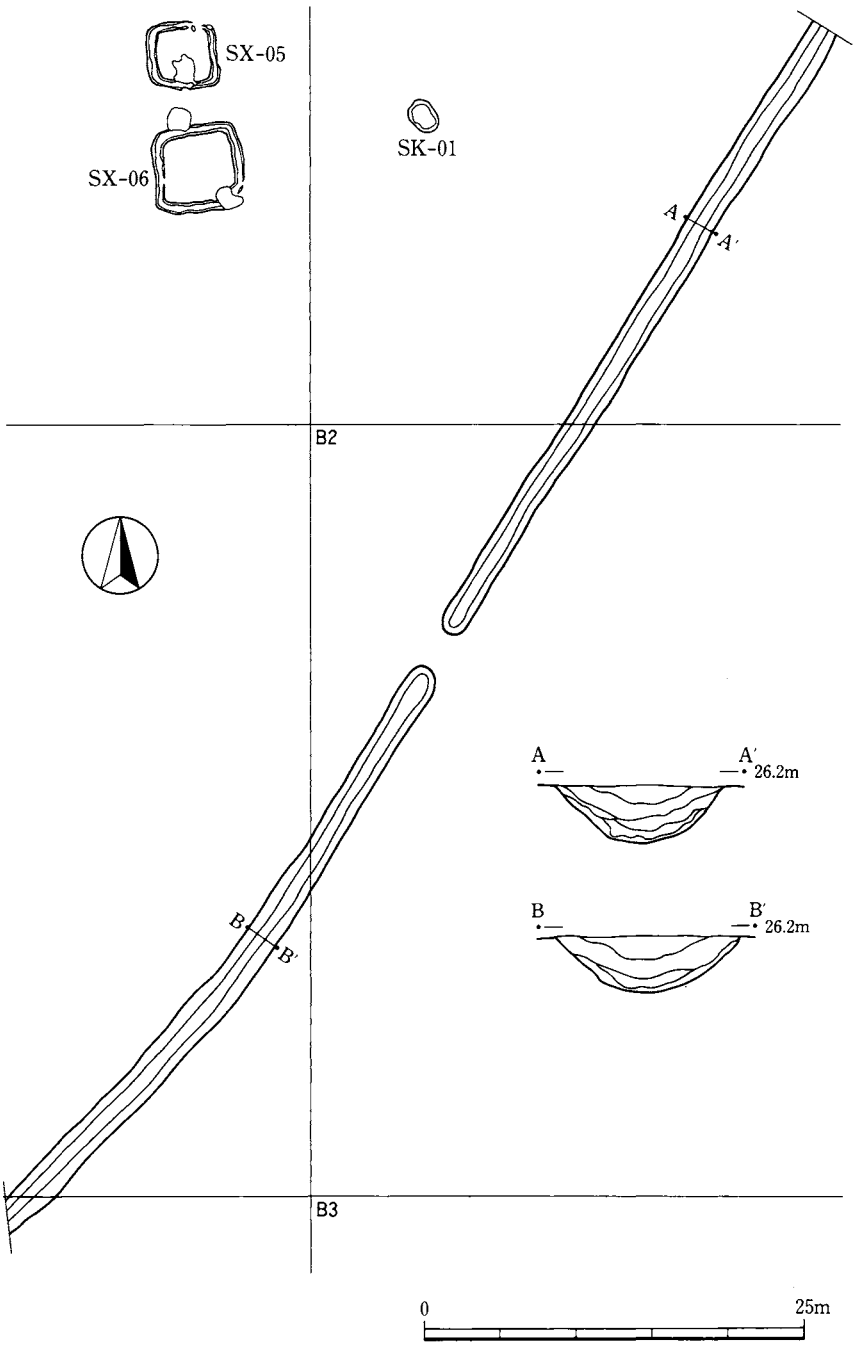
SD－02　遺跡西縁、Ｂ１、Ｂ２、Ａ２区にかけて北東－南西方向に走る溝状遺構である。これは明らかに池花南遺跡SD－02から連続する遺構であり、さらに西側の調査区外へ延びている。調査し得たのは95m分であるが、遺構の幅1.6～2.3m、検出面からの深さ0.6m前後と池花南遺跡での検出部分とあまり違わず、断面形、覆土の状況もほぼ等しかった。ただ興味深いのは大割遺跡調査区のほぼ中央が間隔2.6mのブリッジ状に途切れていることである。その周辺を精査したが、付随する施設は検出されなかった。溝状遺構そのものの性格と合わせてその性格もまた不明である。遺物は少量の縄文土器、土師器に混じて近世の所産と思われる陶磁器の小片が出土したが、その部分は木根による攪乱もあって果たして遺構の年代を示すものかどうか判別が難しい。

⑥遺物

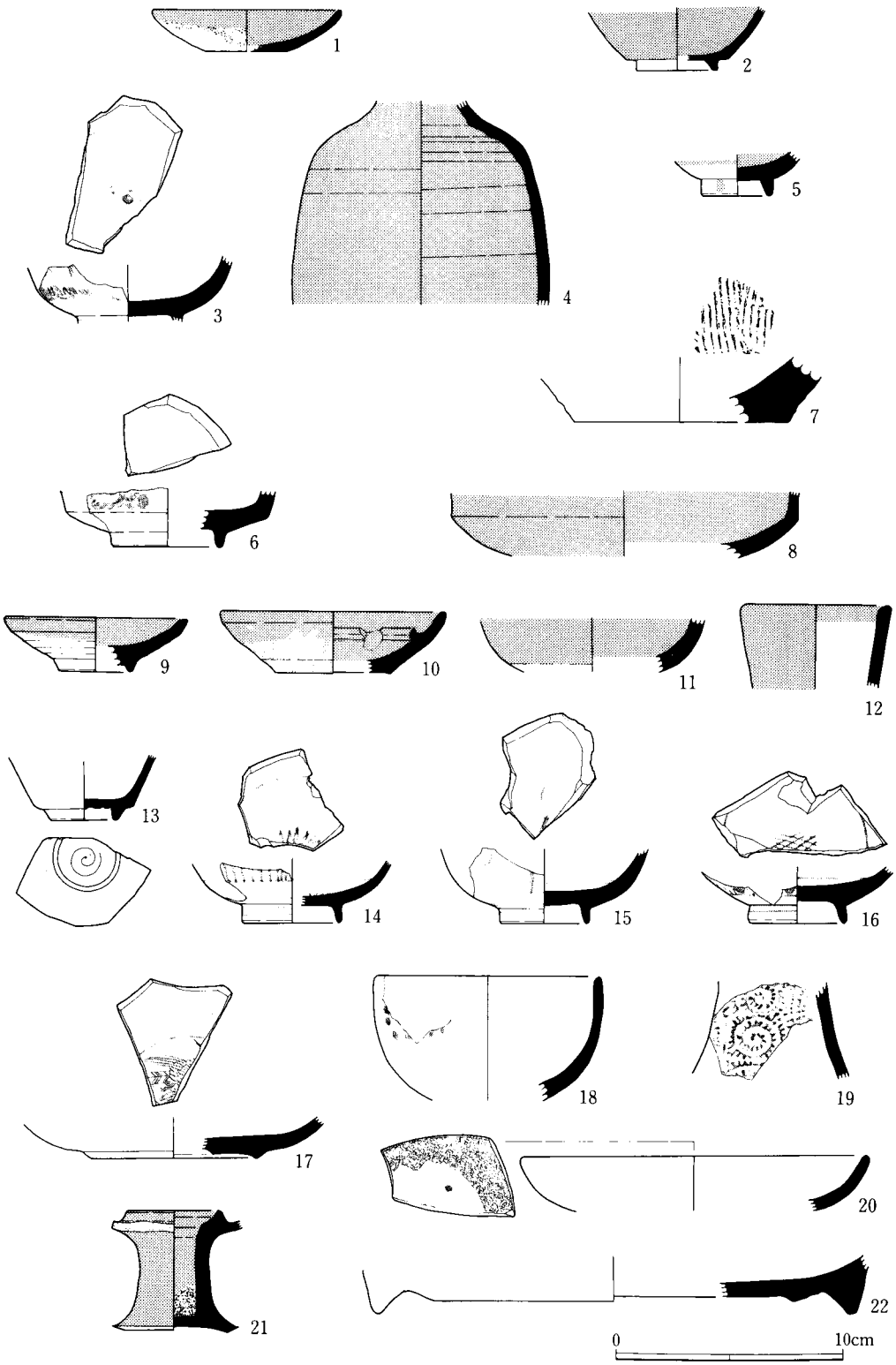
近世以降の遺物はその殆どが池花遺跡から出土したものである。出土地点は遺跡北西部の溝状遺構及び土壙群、遺跡南縁を走るSD－10(池花南遺跡SD－04)、そしてＤ２～Ｅ２区とＥ３



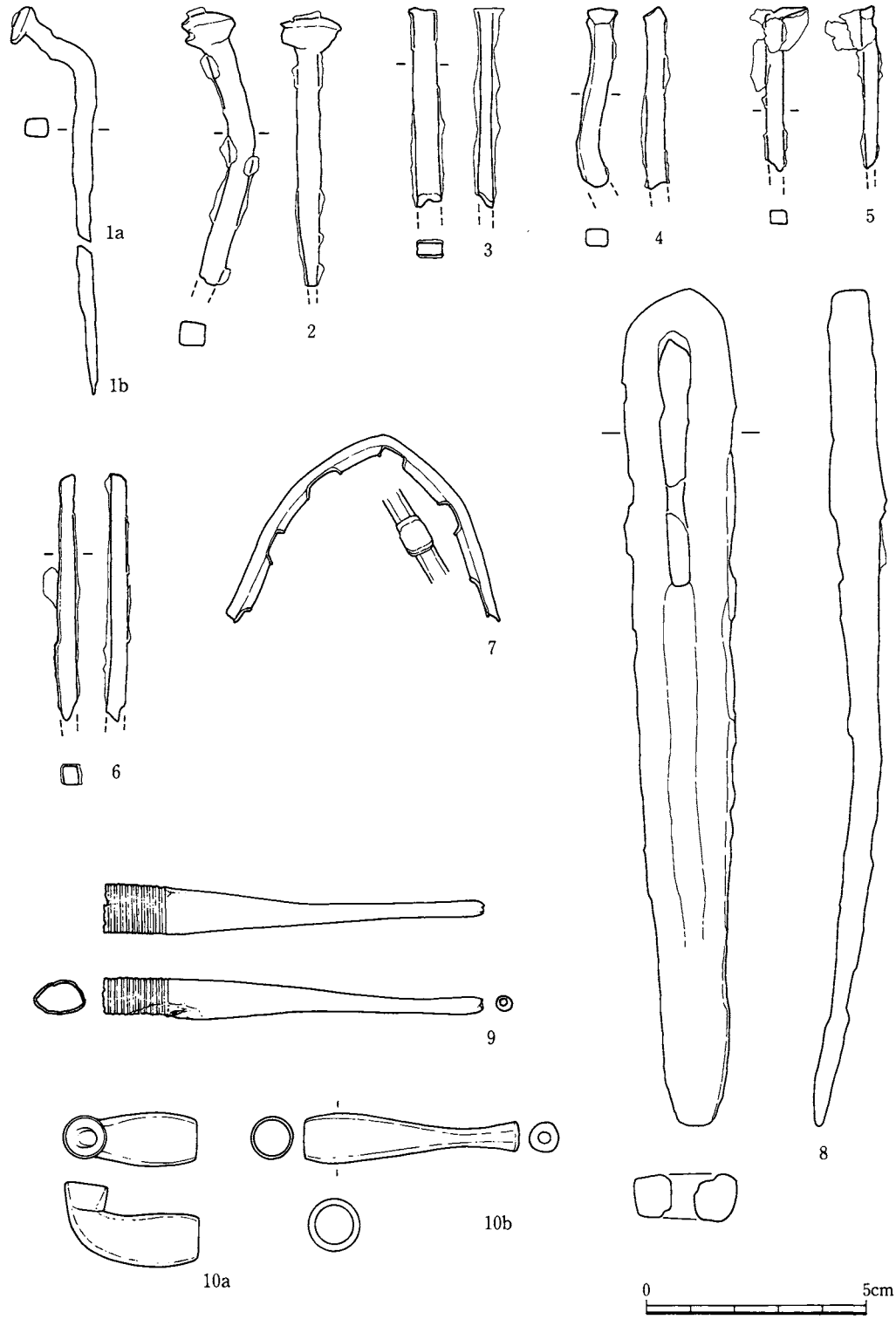
第229図　大割遺跡 SD-01（1/500，断面1/40）



第230図　大割遺跡 SD-02（1/500，断面1/80）



第231図　池花遺跡出土近世陶磁器（1/3）



第232図　池花遺跡出土近世金属製品（2/3）

～E４区の包含層に分かれる。

陶磁器（第231図）　土壙群で24点、SD－09で３点、それらの周辺のB2区で20点、SD－01で１点、SD－03で１点、SD－04で４点、SD－10で陶磁器27点、D２区東部～E２区西部で摺鉢を主体に22点、E3区南部～E4区北部で15点、他３点と計120点が出土している。うち図示可能な22点を示す。

１はSD－01、２はSD－04出土のものである。１は透明釉灯明皿（平皿）で外面の施釉は口辺のみである。油煙の付着が顕著に認められる。２はやはり透明釉の椀である。これらはいずれも18世紀後半以降の所産である。

３～８が土壙群出土の一群である。磁器椀が２点あり、３がSK－03、６がSK－10の出土で、これらは18世紀代のものと思われる。４は灰釉の徳利でSK－05出土、５はSK－07、８はSK－18出土でともに灰釉系の椀、７は摺鉢底部でSK－13から出土している。土壙群出土の陶磁器は全体に池花遺跡の中では古相を示し、また重複関係がある溝状遺構SD－09出土の陶磁器は、ここに図示していないが19世紀に降るもので、遺構の観察結果と先後関係は合致する。

９、11～17、20、21がSD－10出土、10、18、19、22がE３区南部の出土である。９は灰釉の皿で、外面には口辺のみの施釉となり、また内面には重ね焼きの痕跡が顕著に残る。10は鉄釉が施された灯明皿（受け付皿）である。外面下位は釉はぎがなされている。11は灰釉椀、12は緑釉椀である。12の内面は口辺だけしか施釉されない。13～16、18は磁器椀、17、20は磁器皿、19は蛸唐草文が施された磁器瓶でいずれも19世紀のもの。特に20は19世紀前半には遡り得ない。21は灰釉が施された灯明皿（有脚受け付皿）で、内面下位に油煙の付着が認められる。22は三

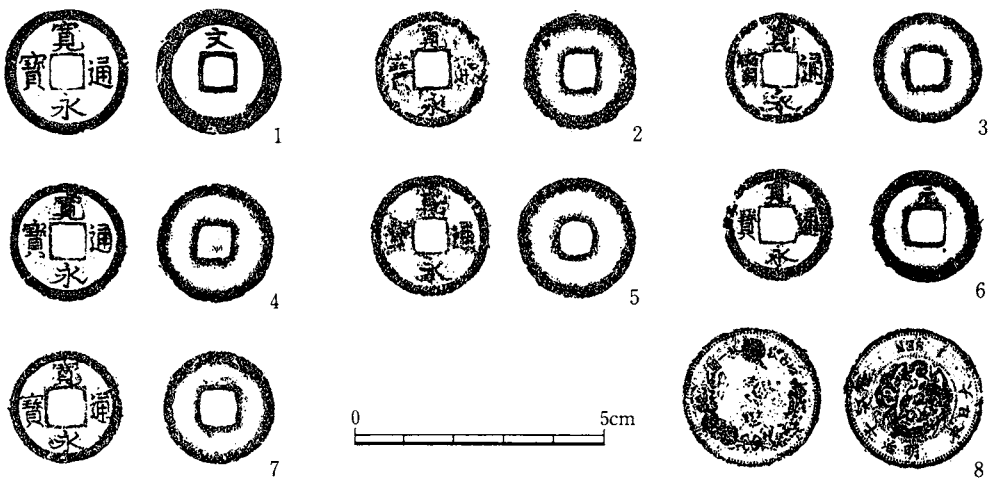
第18表　池花遺跡出土近世金属製品計測表

挿図番号	器種	遺物番号	残存長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	頭部径 mm		重量 g
1a	鉄　釘	SK－21－1	54.8	5.0	4.4	8.0		3.84
1b	鉄　釘	同　上	33.8	—	—	—		1.05
2	鉄　釘	D２－79－86	61.6	5.5	4.5	11.5		7.76
3	鉄　釘	SK－08－1	45.8	4.9	4.2	—		3.38
4	鉄　釘	SK－09－3	40.1	5.3	4.3	—		3.87
5	鉄　釘	SK－05－8	35.7	3.6	3.4	—		2.03
6	鉄　釘	E３－96－7	55.0	4.1	3.4	—		3.86
			最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	身幅 mm	身厚 mm	重量 g
7	不明(青銅製品)	E４－07－2	43.8	62.2	—	4.7	4.1	11.87
8	不明(鉄製品)	SD－04－2	188.9	20.8	6.1	—	—	52.01
			最大長 mm	最大径 mm	火皿径 mm			重量 g
9	煙管吸口	E２－72 一括	86.9	11.7	—			4.94
10a	煙管火皿	E４－07－1	31.0	—	10.0			8.23
10b	煙管吸口	同　上	50.0	10.0	—			6.55

足が付く陶器で大型のもの。外面に灰釉が見られる。

金属製品（第232図）　釘、煙管等が出土している。1～6は鉄釘で、2と6を除き土壙群からの出土である。7は青銅製品、8は鉄製品であるが、ともに性格不明。9、10は煙管で9がE2区、10がE4区から出土した。

銭貨（第233図）　池花、池花南、大割各遺跡から出土しているが、池花遺跡出土が多い。しかし遺構に伴うものはない。別表の通り。



第233図　銭貨拓影（2/3）

第20表　銭　貨　計　測　表

挿図番号	種　別	遺跡	遺物番号	面				背		輪厚	肌厚	重量g
				輪外径	輪内径	郭外径	郭内径	輪内径	郭外径			
1	新寛永銅一文寛文期亀戸銭	大　割	C3-07-2	24.92	20.48	6.59	5.89	18.33	6.78	1.33	0.67	3.98
2	新寛永銅一文元文期平野新田銭	池　花	C1-81-5	22.88	19.21	7.69	6.54	17.50	8.75	1.18	0.83	2.44
3	新寛永銅一文元文期日光銭	池　花	F2-14-18	21.80	17.68	7.18	6.39	16.45	8.87	0.80	0.51	1.82
4	新寛永銅一文元文期秋田銭	池花南	G7-51-128	23.25	19.25	7.40	6.42	17.61	9.17	0.90	0.50	1.96
5	新寛永銅一文宝永期亀戸銭	池　花	表面採集	24.02	19.53	7.19	6.36	18.00	8.67	1.06	0.79	3.18
6	新寛永銅一文寛保期高津銭	池　花	表面採集	22.19	17.47	7.75	6.82	16.25	8.50	0.99	0.61	1.89
7	新寛永銅一文元文期十万坪銭	池　花	表面採集	22.02	17.76	8.20	7.30	16.87	8.91	0.80	0.45	1.62
8	竜・一銭銅貨（明治16／1883）	池　花	D2-57-17	27.87	－	－	－	－	－	1.24	－	6.55

※単位は重量を除きmm。各径は長径と短径の平均値、厚さは4点計測の上平均値を記載した。

⑦近世以降のまとめ

出土遺物から見て18世紀に営まれたと考えられるのが池花遺跡の土壙群である。全貌を把握したとは言い難いが、非常に狭い範囲に密集する。池花遺跡に見られる溝状遺構は道路と考えられるものも含めて19世紀代のものと思われる。他に池花遺跡では大きく見て2箇所に陶磁器

類が廃棄されている場所がある。D2～E2区では摺鉢を主体とし、E3～E4区では仏具を含む多種の陶磁器があるが、いずれもいかなる空間であったのか判然としない。

池花南遺跡SD－02(大割遺跡SD－02)と池花南遺跡SD－01は19世紀代の溝状遺構に切られていることからその年代の下限は明確であるが、より確かな時期や性格は不明である。ただ大割遺跡で細片ながら陶磁器が出土していることから近世の所産である可能性はある。

補論４．『物井古墳群』の構造的把握に向けて

①『物井古墳群』の呼称

これまで述べてきたように内黒田遺跡群では６世紀及び８世紀の古墳が、周溝を持たないものも含めて各遺跡で27基調査された。これらの古墳群は、より巨視的に見ると物井地区御山遺跡や小屋ノ内遺跡を今のところ東限とする一大古墳群の一部を構成し、その西端に位置するものである。周辺の古墳群はこれまで現千代田１丁目付近に所在した「千代田古墳群」と出口鐘塚遺跡から新久遺跡にかけての周辺に所在した「物井古墳群」の名で呼ばれてきた。しかし当該地域の発掘調査が進むにつれて、古墳の分布はかつて知られていたよりも広がりを持つことが確認されつつあり、また全体が一連の古墳群をなしていることも明らかとなっている。そこで本書では、内黒田遺跡群、千代田遺跡群、物井地区で調査されている遺跡群に広がる古墳群を総体として『物井古墳群』と呼称することを提唱したい。

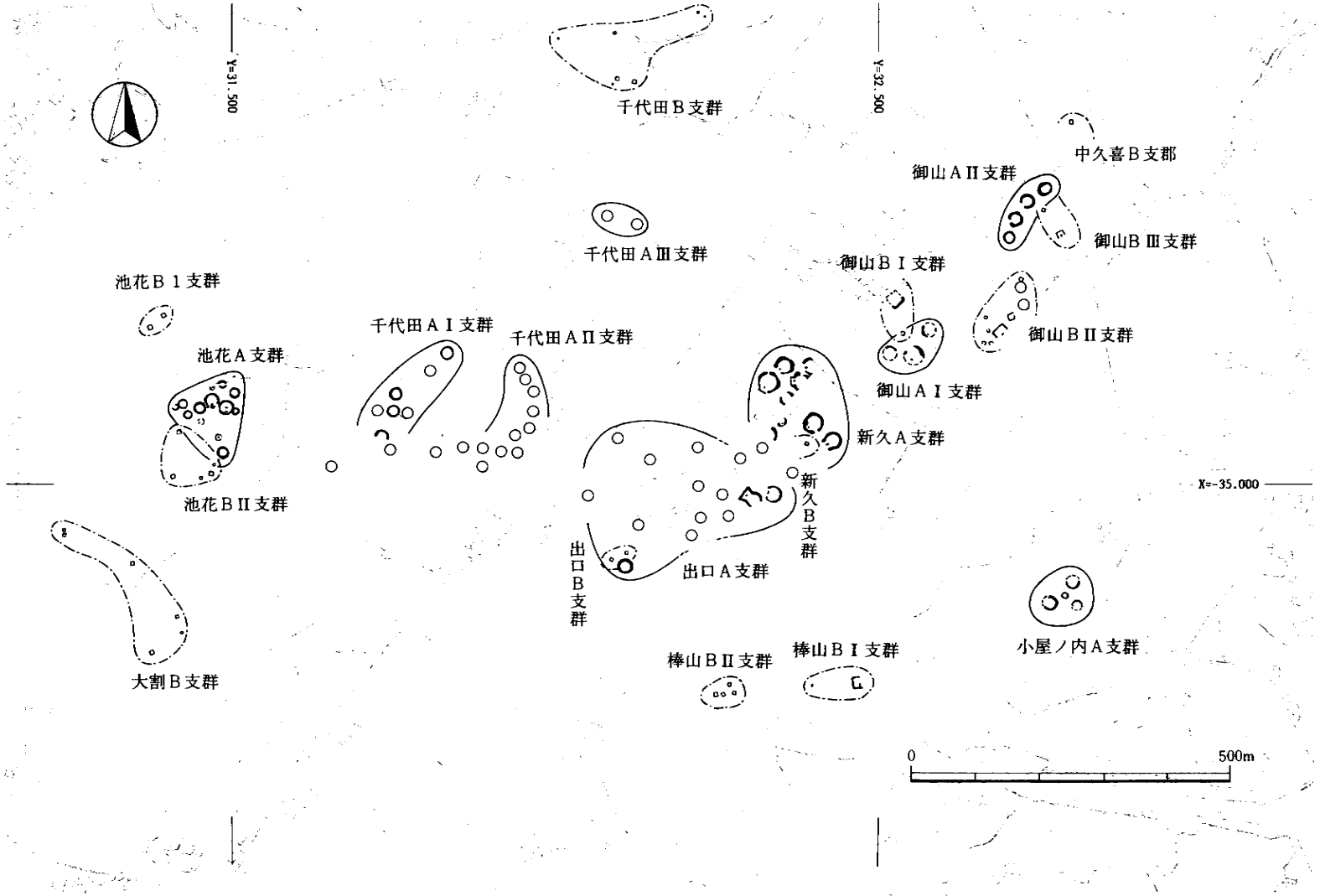
ここで言う物井古墳群は、現在把握されている限りで東西1.6km、南北1.1kmに及ぶ範囲に分布し、６～７世紀の古墳75基、古代国家成立以後の小規模墳を含めると120基近くの古墳が確認されている。未調査の地点もまだ多いため実数はこれを遥かに上回ることは疑いない。その造墓活動が続いた時期は、６世紀の後半から奈良時代、一部平安時代にかかるものと思われ、全体で200年余りの時期幅を持つことになる。当然、その間無秩序に古墳が造営されたのではないし、この大古墳群の背後の集団の構成、動向を反映したものであるはずである。現在のところ古墳群の中核部分の実態が充分明らかにされていないし、調査された古墳でも細かい時期比定ができないものが多く詳密な分析は不可能であるが、現時点で掌握される物井古墳群の群構成を今後の調査研究の前提として整理しておくことは、〝遺跡名の改称〟を提起した本書の責務でもあろう。

②支群把握の試み

当古墳群においてもある程度のまとまりを持った小群（支群）がさらに集合して全体を構成している。ここでは試みに仮の支群を設定し、支群毎にその特徴を列挙してみたい。支群名に付したＡ、Ｂは、墳形の違いが時期差を顕すことを前提としたもので、Ａが円墳や帆立貝形古墳などで構成される支群、Ｂが方墳で構成される支群とする。まず円墳主体の支群から述べる。

池花Ａ支群　池花南遺跡で調査された円墳群である。周溝が検出されなかったSX－19を含めて14基と古墳数は多いが、小規模な円墳が多い。推定される時期は６世紀後半代で物井古墳群の中で最も古い支群の一つと考えられる。埋葬施設は横穴式石室、木棺直葬土壙があり、墳央部の地山を切り込んで設けられるものが目立つのが特徴的である。

千代田Ａ１支群　千代田遺跡群で最も西寄り、内黒田遺跡群と千代田遺跡群を界する谷に面



第234図　物井古墳群の支群構成(1/10,000)

する一群とする。いずれも円墳で、埋葬施設として墳頂部に木棺直葬土壙が検出されている[1]。時期判定に資する遺物が殆どないが、補論5で述べるように池花南遺跡SX－02、SX－03と同一の設計企画を持つと思われる1号墳の存在、そして墳頂部の埋葬施設が一般的であるなどやはり6世紀後半、降っても7世紀初頭の年代が与えられよう。

千代田AII支群　千代田AI支群の東側（物井側）の一群で、4基が調査され、埋葬施設として箱形石棺が検出されている[2]。埋葬施設の位置は墳裾で、古墳の年代を判定できる遺物は乏しいが池花A支群や千代田AI支群よりも明らかに新しく、7世紀代に造営された群であるのは間違いない。なお未調査の古墳も多くあり、それらについては千代田AI支群と当支群の分離が困難である。

千代田AIII支群　千代田遺跡群IV区に所在した2基の古墳をAIII支群とする。ただし古墳の所在は報告されている[3]がその内容については全く解らない。

出口A支群　かつて物井古墳群とされていたものの西半部を包括する。千代田AII支群の南東に位置する。調査された古墳としては「物井1号墳」、出口・鐘塚遺跡で円墳1基、出口（1）遺跡で古墳周溝のごく一部、出口（2）遺跡で前方後円墳1基、円墳1基があるが[4]、面的な構成については充分な把握がなされていない。したがってこれを2～3群に分けうる可能性が残されている。埋葬施設として箱形石棺及び木棺直葬土壙が検出されている。当群は物井古墳群で唯一、埴輪を持つ古墳が多い支群である。造営時期は古いもので6世紀後半、石棺の導入されたものは7世紀前半であろうか。

新久A支群　かつて物井古墳群とされていたものの東半部を包括する。清水遺跡、新久遺跡として調査が進行中で、帆立貝形古墳6基、円墳3基(うち1基は帆立貝形古墳の可能性あり)が確認されており[5]、さらに数は増加する見込み。帆立貝形古墳の場合、張出し部に箱形石棺を設けて中心的な埋葬施設としている。また2基ずつほぼ同一主軸方位を以て築かれたグループが存在するようである。比較的大規模な古墳（帆立貝形）が集中する支群である。造営時期は7世紀前半代であろう。

御山AI支群　新久A支群の北東方で御山遺跡として多数の古墳が調査されている。台地の形状に合わせて古墳の分布はまとまり、その最も西南側に存在した一群をAI支群とする。円墳3基が調査されており、埋葬施設として墳裾に石棺を持っている。うち1基からは金銅装太刀を含む多数の副葬品が出土しているが、その石棺からは成年男女、未成年者とりまぜて6体以上の人骨が出土している[6]。造営時期はおそらく7世紀前半から半ばで、その場合西側の新久A支群と重複することになるが、墳形などの相違が見られる。

御山AII支群　御山遺跡の北東端に4基の円墳が並んで検出されているものをAII支群とする。墳丘を遺存しなかった古墳では埋葬施設は検出されなかったが、墳丘を遺存した1基からは墳頂に木棺直葬土壙が確認されている[7]。また古墳の規模は新久A支群や御山AI支群に比し

て小規模である。造営時期は6世紀末から7世紀初頭かと考えられる。

小屋ノ内A支群　新久遺跡や御山遺跡の南東方、やや離れて所在する小屋ノ内遺跡で調査されている一群を小屋ノ内A支群とする。比較的小規模な円墳4基が確認されているが、調査中であるため詳細は不明である。

円墳群は現在のところ上記9支群にまとめられる。次に方墳群について述べる。

池花BⅠ支群　池花遺跡で調査された2基の方墳を池花BⅠ支群とする。いずれも小規模で埋葬施設を検出したものはない。8世紀後半代に造営されたものであろう。

池花BⅡ支群　池花南遺跡で調査された5基の方墳を池花BII支群とする。極めて小規模なものを含む。やはり埋葬施設は検出されていない。出土土器に8世紀前半のものから8世紀後半のものがある。

大割B支群　大割遺跡で調査された6基の方墳を大割B支群とする。散漫、分散的な分布状況を示す。池花BⅠ、池花BII支群と同様埋葬施設を検出したものはない。しかし蔵骨器に用いられたと思われる四耳壺を出土したものがある。8世紀前半に位置付けられようが、他に土器を出土したものはなく、群としての造営年代を推定するのは難しい。

千代田B支群　千代田遺跡群V区で調査された7基の方墳[8]を千代田B支群とする。いずれも小規模であり、分散的な分布傾向を示す。しかし2基あるいは3基でまとまるものがあり、その点大割B支群などと同様である。3号方形周溝遺構と4号方形周溝遺構で断片的に土器が出土しているが、3号方形周溝遺構出土の須恵器甕（6世紀代）は古墳時代集落跡からの混入であろう。他方4号方形周溝遺構出土の長頸瓶の年代を信頼すれば、8世紀末前後になる。

出口B支群　出口・鐘塚遺跡で調査されたもののうち、その北半に所在したものを出口B支群とする。小規模な方墳2基によって構成される。埋葬施設、遺物は検出されていない[9]。

新久B支群　新久遺跡で1基だけ小規模方墳が検出されている[10]。元来単独で営まれたものではなく近傍の未調査区に未確認の方墳が存在していよう。

棒山BⅠ支群　棒山・呼戸遺跡で方墳1基、墳丘ならびに周溝が確認されない石棺状の埋葬施設1基が調査されている[11]のを以て棒山BⅠ支群とする。方墳の埋葬施設は石室状の石棺であり、墳丘、周溝の規模は8世紀代の方墳に比較して大きく、7世紀後半代（末）の所産と考えたいが、それを裏付ける遺物も得られている。

棒山BⅡ支群　出口・鐘塚遺跡南半で検出された方墳群[12]を棒山BII支群とする。付近の字名は鐘塚であるが、棒山遺跡及び棒山・呼戸遺跡の名で調査された遺跡と連続した同一台地上に立地する。むしろ遺跡としても出口部分と分離されるべきであろう。いずれも小規模な方墳4基によって構成される。埋葬施設は検出されず、造営時期も確定できない。

御山BⅠ支群　御山遺跡西端部の一群である。方墳2基が検出されたが[13]、うち1基はごく部分的な調査に留まる。当群はさらに未調査区に展開していよう。2基の規模には大きな格差が

ある。埋葬施設は検出されず、時期を判定する遺物も出土していない。

御山ＢⅡ支群　御山遺跡中央部の一群である。大小の方墳７基が調査されている[14]が、未調査区を挟み、しかも高い墳丘を遺存する古墳が存在している。７基の中では１基の規模が群を抜いている。また埋葬施設が検出されたのはその１基のみで、箱形石棺を用いている。７世紀後半（末）から８世紀に造営された群と推定されるが、時期を確定する手段に乏しい。

御山ＢⅢ支群　御山遺跡東端部の一群である。方墳２基が調査されている[15]。うちやや規模が大きい１基には横穴式木槨と考えられる埋葬施設が検出されている。８世紀代の須恵器が出土している。

全体として８世紀の古墳が殆どを占めると思われるが、方墳群は上記11支群にまとめうる。

③物井古墳群の形成過程

ここで以上見てきた支群構成をもとに物井古墳群の変遷を概観しておきたい。勿論微細な分析には障壁が大きく、あくまで概括に過ぎない。

第１期　まず最初に古墳が築成されはじめるのは６世紀後半であると推定される。一概に断定しうるかどうかは問題が残るにしても、墳頂あるいは墳央に木棺直葬土壙を持つ円墳群が古い一群であると思われ、池花Ａ支群、千代田ＡⅠ支群、御山ＡⅡ支群がそれに相当する。小屋ノ内Ａ支群は内容が未知のため除外する。また出口Ａ支群の一部も古く位置付けられる可能性がある。というのは埴輪を持つ古墳が存在し、さらに補論５で触れるが、出口・鐘塚遺跡検出の円墳が池花南遺跡ＳＸ－02、ＳＸ－03、千代田１号墳と同一規格で築造されているからである。また、御山ＡⅡ支群の019号跡は池花南遺跡ＳＸ－01、ＳＸ－05、ＳＸ－07と同一規格で築造されている。これらの年代としてはおそらく７世紀初頭までであろう。そこでこの時期を物井古墳群の第１期とする。第１期には、〝可能性〟の枠内であるが、４支群が併存していたことになる。中で埴輪を持つ出口Ａ支群の優位性を認めることができようか。

第２期　第２期は７世紀中葉までと考える。墳裾に埋葬施設を営む古墳が一般的になり、また箱形石棺を多用するようになる。この時期に築造されたと思われる古墳は千代田ＡⅡ支群、出口Ａ支群、新久Ａ支群、御山ＡⅠ支群に含まれている。ただし出口Ａ支群と新久Ａ支群は一連のものと考えることができるかも知れない。ここで明らかなのは、前段階で拡散していた墓域が中央寄りに展開してくること、そしてその中核に位置する新久Ａ支群～出口Ａ支群に帆立貝形古墳と前方後円墳が目立っていることである。第１期において出口Ａ支群の優位性を指摘したが、それを継承して造営が続いたと見ることもできる新久Ａ支群は、他に対してより一層の優位性を保持していると言うことができるであろう。また御山ＡⅠ支群は御山ＡⅡ支群を継承し、千代田ＡⅡ支群は千代田ＡⅠ支群を継承していると考えることができるだろうか。その場合池花Ａ支群の動態が不明瞭である。なお新久Ａ支群の２基ずつのグルーピングはおそらく

2世代の継起的な築造を示し、またそれが群の造営期間を示唆してもいよう。

第3期　一般に房総半島では7世紀後半に墳形の方墳への転換が行われる。物井古墳群で今日までに知られた方墳は大半が奈良時代の所産と思われる小規模なもので、6～7世紀代の円墳に匹敵する規模を持つ方墳は御山ＢＩ支群、御山ＢII支群、棒山ＢＩ支群に1基ずつと、僅かしか認められない。殆どが調査区外にある御山ＢＩ支群の002号跡はともかくとして、御山ＢII支群の054号跡、棒山ＢＩ支群の棒山・呼戸遺跡SX－001の埋葬施設は位置、形態とも前段階のそれの系譜上にあり、連続性は明らかであると思われるが、いずれも明確な時期判定の手段を有さない。ここでは7世紀後葉の年代を与え、物井古墳群第3期と考えたい。御山遺跡の2基の方墳は御山ＡＩ支群を継承して営まれた可能性があるが、第3期の短さや未確認の古墳の存在を考慮したとしても該期古墳はあまりに少ない。特に千代田ＡII支群や出口Ａ支群～新久Ａ支群を継承するものが不明である。ただ忽然と出現する棒山ＢＩ支群が新久Ａ支群などから出自するものかも知れない。この間の動態は古代国家形成期の複雑な政治的動向を反映するものなのであろうか。

第4期　奈良時代に入って一般的となる小規模な方墳は広範囲に多数が築かれている。該期に帰属すると思われる方墳を含む支群は10群に及び、そのすべてが同時に造墓活動を行ったのでないとしても、かなり分散的に並立していたことは否定できない。つまり前段階の状況から一変させることになる。まとまった支群としては御山ＢII支群～御山ＢIII支群、棒山ＢII支群、大割Ｂ支群、池花ＢII支群、千代田Ｂ支群があるが、御山遺跡のみ第3期の方墳とともに群集し、他は第4期の方墳のみで群集している。第4期の方墳だけで群集する支群では2～3基が1単位として把握できる傾向があり、再三述べるように2～3世代の間造墓活動が続いた結果であろうと考えられる。

④物井古墳群の背景

物井古墳群の背後の集団が全体として同族関係にあることは異論はあるまいが、その集団はまた古墳群の分布から見ると、さらに4単位程の小集団からなっていたと考えられる。それらの小集団の中では第1期～第2期にかけて出口Ａ支群及び新久Ａ支群に墓域を持った集団が明らかに優位にある。物井大集団の首長権はおそらくこの小集団に帰属していたものと考えることができる。しかしかかる小集団も複数の造墓単位の集合体であり、今のところ傑出した単位を見いだすことはできない。また他の支群にも御山ＡＩ支群の015号跡に見るように、豊富かつ良質な副葬品を出土した古墳があり、大きな格差は認められない。あるいはそれだからこそ首長権を保持する集団の表現として特殊な墳形が限定的に用いられたとも思われる。

第3期になって古墳の造営は一気に限定されたことが窺えるが、これは言い換えれば集団の一般成員は自らの造墓活動を行わなくなり、小集団首長層以上の古墳のみが営まれたことにな

る。しかしこのような状態は長く続かず、第4期になると各小集団それぞれ複数単位の、小規模でまるで弥生時代中期の「方形周溝墓」のように等質的な古墳を営むようになる。勿論物井古墳群を営んだ集団は元来自然生的な共同体であり、律令国家成立後もその共同体的関係が裁ち切られることはないが、その上位に強い政治的権力が出現し共同体全体を包括する形で支配－被支配関係に組み込まれることにより、共同体内部の階層秩序は弛緩することになる。それが再び小単位毎に造墓活動を開始した契機の一つとなっていよう。

註 1　米内邦雄・宮入和博『千代田遺跡－千葉県印旛郡四街道町－』　四街道千代田遺跡調査会　1972

2　米内邦雄『千代田遺跡発掘調査概報』　四街道遺跡調査会　1977　田川良『四街道市千代田12号墳発掘調査報告書』　四街道市教育委員会　1989

3　註1文献

4　中島広顕・葛西功・他『千葉県四街道市物井1号墳』　四街道市教育委員会・物井古墳発掘調査会　1982　千葉県文化財センター年報No.12　1987　千葉県文化財センター年報No.14　1989

5　千葉県文化財センター年報No.11　1986

6　千葉県文化財センター年報No.10　1985　註5文献

7　註6文献

8　註1文献

9　千葉県文化財センター年報No.12　1987

10　註5文献

11　千葉県文化財センター年報No.14　1989

12　註9文献

13～15　註6文献

補論５．群集小古墳の設計規格と規制

①問題の所在

既に個々の古墳を報告する際などに少し触れているが、内黒田遺跡群で調査された古墳には明らかに同一の規模を有するものがある。これに着目した発端は、池花南遺跡SX－02及びSX－03調査中に、両墳の規模が一致することに気付き、またその墳丘径が試みに高麗尺で計算すると50尺と考えられたことにある。この数値は谷を隔てて築かれていた千代田１号墳でも見事に合致し決して偶然の産物でないこと、また他地域でも千葉市平山古墳などに同一規模のものがあり、しかもそれらの時期がほぼ一致するであろうことも確認された。このことから群集墳を構成する個々の古墳の築造に際して、特定の基準尺を用いた設計規格が存在した可能性は濃厚であると考えられる。

②同一規格と考えられる古墳のグループ

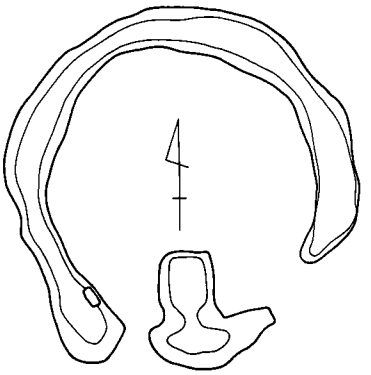
まず池花南遺跡で検出された円墳群から検討する。前述したSX－02とSX－03について見ると周溝内縁で計測した墳丘径はそれぞれ17.8～18.4m、17.8～18.2mでその差はないに等しい。この両者は埋葬施設こそ違えども、墳丘は同一の規格で営まれたものと思われる。さらに他に目を転じると、千代田１号墳及び出口・鐘塚遺跡SX－001が同一規格であると考えられ、周溝内縁径はそれぞれ17.9～18.4m、17.8～18.5mである。物井古墳群内に４基の、また一支群内に２基の同一規格の古墳が営まれていることになる。

池花南遺跡で上記の古墳より一段小規模なものにSX－01、SX－05、SX－07がある。この３基の周溝内縁径はそれぞれ12.3～12.7m、12.2～12.8m、12.5～12.7mでやはり見事な一致を示している。これらとほぼ同じ規模を有するのが御山遺跡019号跡（御山ＡII支群）で周溝内縁径は12.2～12.6mを測る。これは物井古墳群の東西両端に同一規格の古墳が存在したことを意味する。なお池花南遺跡SX－04も近い規模を持つが、地形の制約からか墳形がいびつになっており、計測値はやや小さくなる。

池花南遺跡でさらに小さい古墳にSX－06、SX－08、SX－11、SX－18の４基がある。それらの周溝内縁径はそれぞれ8.6～8.9m、8.3～8.4m、8.0～8.8m、8.4～8.6mでほぼ一致すると言えるがややばらつきも大きい。無論古墳規模が小さくなるにつれて遺存条件や地形の制約に左右される度合いは相対的に大きくなるから、ここはやはりほぼ規模の等しい古墳が同一支群内に４基も存在することの意味を重要視するべきであると考えられる。

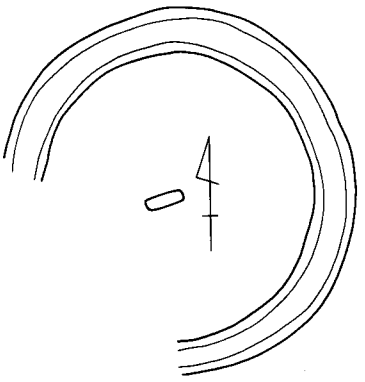
池花南遺跡の他の古墳はさらに小さく、墳丘規模には規格性が認められない。

上に列挙した古墳を一覧したのが第235図であるが、少なくとも池花南遺跡（池花Ａ支群）ではそれら３段階の規格の間に中間的なものはSX－04を除いて存在せず、各古墳が明確な規模の

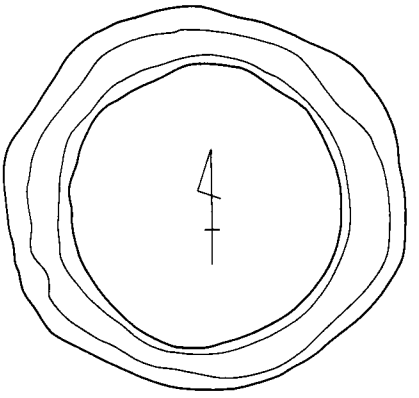


池花南SX-02

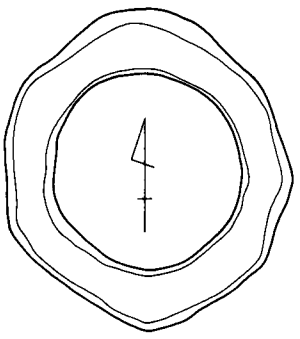
池花南SX-03



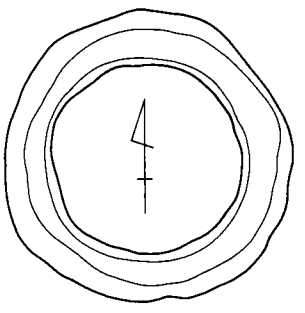
千代田１号墳



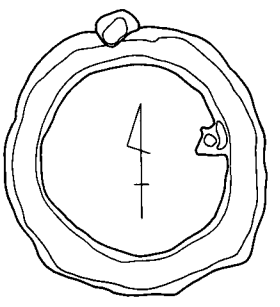
出口鐘塚001



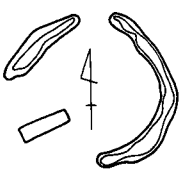
池花南SX-01



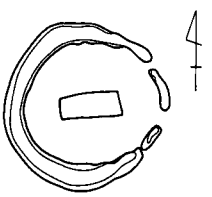
池花南SX-05



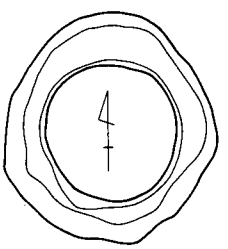
御山019



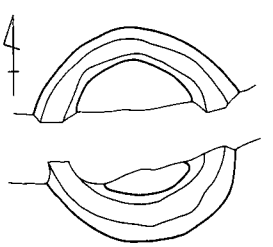
池花南SX-08



池花南SX-11



池花南SX-06



池花南SX-18

第235図　同一規格と考えられる古墳例（1/500）

規制の上に成立していることを確信させる。では他の支群ではどうであろうか。

池花A支群と同様第1期の支群とし、池花A支群の古墳と同一規格の古墳を含んでいた御山AII支群には019号跡の他に、020号跡、036号跡、042号跡の3基の円墳が存在した。それらの周溝内縁径はいずれも15mあまりで見事な合致性を示している。多くの古墳が調査されている新久A支群では清水遺跡001号跡、003号跡、004号跡の3基、新久遺跡003号跡、017号跡の2基がそれぞれ同一規格と考えられ、また後者の規格には隣接する御山AI支群の015号跡及び出口A支群の出口(2)遺跡SX－002が属しているようである。最大規模の清水遺跡002号跡には匹敵する規模の古墳が現在のところ認められない。

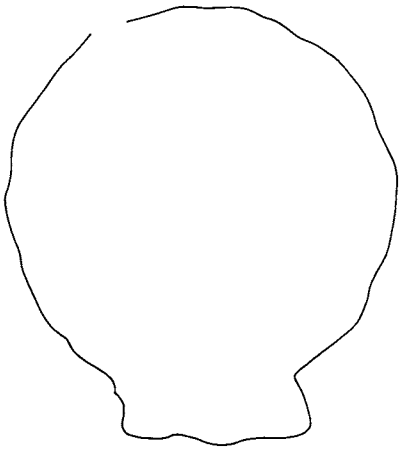
これまでに述べた古墳の規格性を各グループ毎に重ね描きして一覧したのが第236図である。これらのグループに属さない古墳も皆無ではないが、大半の古墳がこのようにグルーピングされることは即ち設計規格が厳然と存在したことを如実に立証するものと思われる。

③基準尺の問題

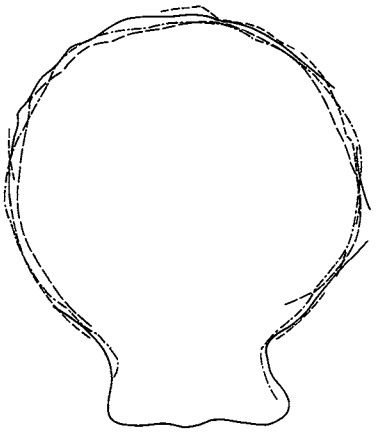
先に池花南遺跡SX－02などの径が高麗尺50尺プランで設計されている可能性を述べたが、もし高麗尺が用いられたとするならばどの程度の普遍性があったものか、また他の尺度が用いられたとすればいかなる基準尺であったのか。

高麗尺が35.6cmとすると50尺で17.8mとなり、池花南遺跡SX－02他にとって非常に整った数値を得ることになる。埋葬施設ではSX－02の石室内法長及びSX－03第2主体部の木棺部長がおよそ1.8mと推定され、高麗尺5尺であったと考えられる。この1.8mという数値が見られる埋葬施設は多く、例えば千代田AI支群3号墳木棺長、千代田AII支群3号墳、12号墳の石棺内法長などの他、御山遺跡、清水遺跡、新久遺跡検出の石棺内法長や周溝内土壙長に1.8m前後のものが数多い。尤も古墳時代の標準的な日本人を伸展で安置する場合、1.8mという長さは適当であると言えるが、それでもなお1.8mが多用されることは決して偶然とは言えまい。また古墳外形について見ると、清水遺跡の3基の帆立貝形古墳後円部内径は19m強から20mで55尺、そのうち004号跡の内縁推定主軸長は25mで70尺、同遺跡002号跡の後円部内径は25.2mで70尺、同内縁主軸長は28.8mで80尺、池花南遺跡SX－01他の周溝内縁径は35尺と推測される。このように第1期～第2期の古墳では外形、埋葬施設ともに高麗尺を使用して築かれた蓋然性は充分であると言えよう。

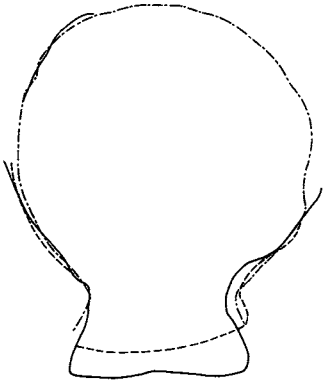
しかし池花南遺跡でも御山遺跡でも高麗尺で割り切れない数値を持つ古墳が存在するのも事実である。例えば池花南遺跡SX－08、SX－11、SX－19の木棺長はおよそ2.8m(確かに8尺弱であるが)で前述の埋葬施設とは大きな隔たりがある。墳丘規模にしても高麗尺25尺に近いがしかしそれよりも小さく、釈然としない。さらに御山遺跡020、036、042号跡の場合は墳丘径が15～15.5mで高麗尺では到底考えられない数値である。ここで着目したいのはこれらはいずれ



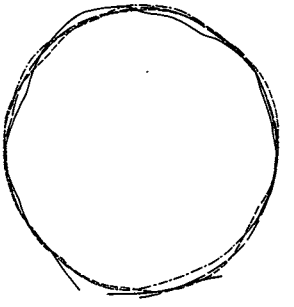
清水002



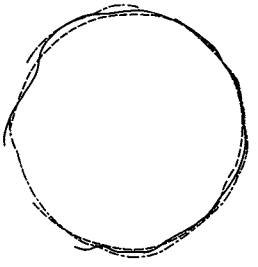
新久003
御山015A
新久017
出口(2)002



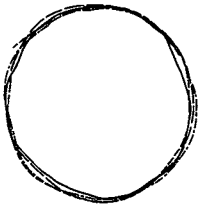
清水004
清水003
清水001



池花南SX-02
千代田1号墳
池花南SX-03
出口、鐘塚001



御山042
御山020
御山036



御山019
池花南SX-01
池花南SX-07
池花南SX-05

池花南SX-11
池花南SX-06
池花南SX-18
池花南SX-08

第236図　物井古墳群における墳丘の規格性（1/500）

も第1期に営まれたとしたものであることである。したがってここではやや強引ではあるが高麗尺導入以前の古墳である可能性を考慮しておきたい。しかしそれらの基準尺は判然としない。

④古墳造営時の規制力

設計基準尺としての高麗尺使用の当否は別としても、古墳造営時に厳然とした規格が存在した可能性は強い。古墳の規格性が現実のものならば、それは即ち造墓主体に対して共同体内の規制力が働いていたことを意味する。第236図に示した7段階は下位4段階が第1期、上位3段階が第2期のものであるが、同時期の古墳における墳丘規模の差は間違いなく存在していたと思われる。ここで重要なのは墳丘規模の規制力が共同体内のどのレベルで働いたものか、換言すれば各古墳の規模の決定には、物井大集団の意志が働いたか、各小集団毎に規制されたかという問題である。

支群を超えて同一規格の古墳が存在することはまず確実である。しかしそれは同一基準尺が使用されたことを証明するだけで、物井古墳群全体が統一的に規制されていた証左とは言い得ない。ここで新久A支群と御山AI支群に注目してみたい。新久A支群では6基の帆立貝形古墳が築かれているが、うち後円部径の最小規格のものが清水遺跡001号跡、003号跡、004号跡の3基で、新久遺跡003号跡、017号跡がやや大きく、清水遺跡002号跡が最大規格となっている。最小規格と中間規格、中間規格と最大規格それぞれの差はほぼ等しい。一方御山AI支群で中核的位置にある御山遺跡015号跡は新久A支群における中間規格にほぼ等しい。御山遺跡015号跡は周溝の遺存が悪く墳形が正確には判らないが、埋葬施設が周溝に平行して営まれており、主軸に平行（したがって周溝とは直交方向）して埋葬施設が営まれる帆立貝形古墳ではなく円墳であったことは確実である。このことは御山AI支群を営んだ集団は新久A支群でも最大規模の002号跡に次ぐ規模の古墳を築くことができたが、しかしこれら両支群の差は円墳と帆立貝形古墳という墳形の差によって峻別されていたことを意味していよう。しかもなお良質な副葬品を有する古墳でありながら、新久A支群に含まれる古墳の規模を超えることはできなかったものと考えられる。ここに見る墳形と規模の規制は、物井大集団の意志によって決定されたと認めることができる。また墳形によって表現された小集団間の格差は、補論4でも述べた通り、大集団首長を輩出した小集団と他の小集団の格差として見るべきであろう。

以上物井古墳群において古墳築造時に厳然たる規格が存在した可能性とその意味を考えてきた。使用された基準尺についてはまだ不確定要素が大きいが、少なくとも当古墳群内では古墳の規模や墳形に統一的な規制力が働いていたことは明確である。今回は報告者の力量不足から検討の対象を物井古墳群の古墳に限ったが、他の古墳群においても群構成の分析と同時に個々の古墳の規格性を検討する必要があろう。当該地域について言えば物井古墳群周辺の小規模群集墳や佐倉第三工業団地造成に伴って調査された古墳群がある。とりわけ物井古墳群の東方お

よそ5 kmを隔てた、「岩富古墳群」と称すべき佐倉第三工業団地内の古墳群は印旛沼南岸、鹿島川流域最大の群集墳であり、その検討は物井古墳群の検討結果と比較対照することによって、単一群集墳レベルを超えた地域社会の構造を明らかにすることに繋がる。佐倉第三工業団地内の遺跡群は現在順次調査報告書が刊行されつつあり、今後物井古墳群のより詳細な分析と合わせてさらに広域的な考察に努めていきたい。

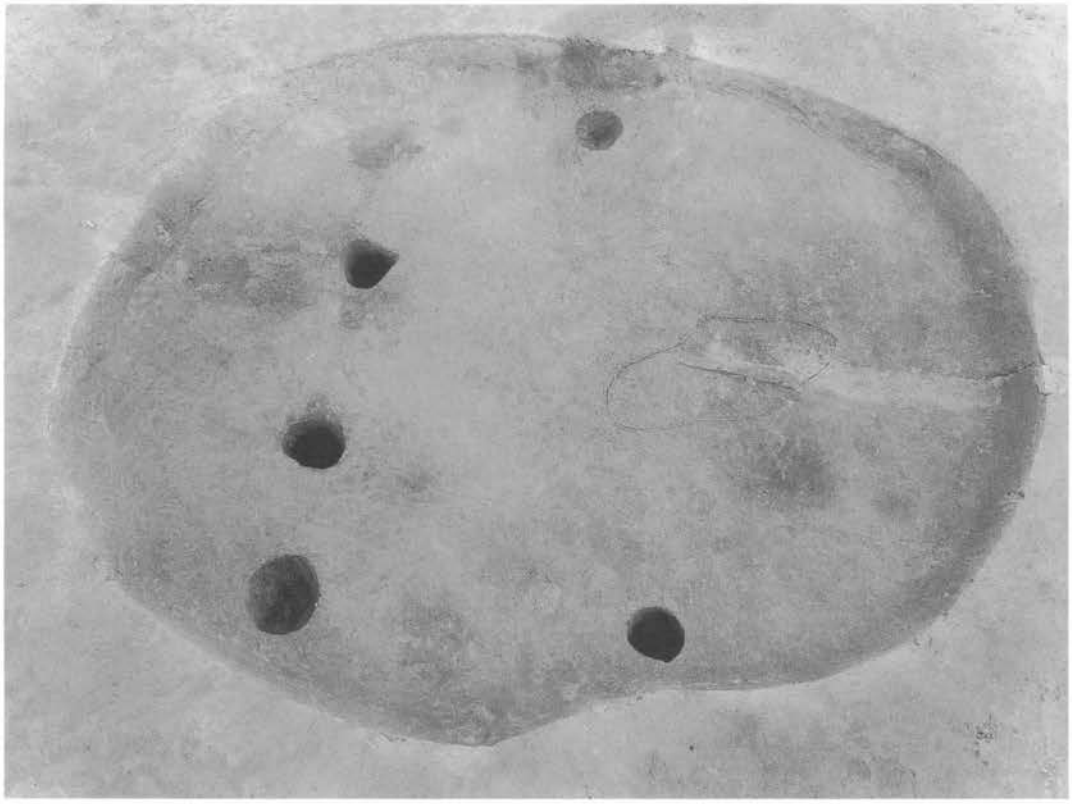
V. 跋　語

ここまで述べきたったように、今回の内黒田遺跡群の調査では、非常に広範な時代に及んできわめて多岐に亙る成果が得られている。その概要については各時代毎の素描及び本文中で述べてきているし、またそれぞれの分野に求められる今後の課題についても触れているのでここでは重複は避けたい。

本書の中で、とくに縄文時代、弥生時代の記述は、従来の当センターの調査報告書の多くとは若干方針を異にする部分があると思われる。勿論その要因としては遺跡の持つ性格に左右された部分が大きく、それによって調査方針が規制されたためでもある。しかし遺構が少ないかあるいは全くなく、遺物がある程度のまとまりを持って散布する遺跡をいかに扱うか、その扱いの軽重の差でもあろう。また遺構が豊富に検出される遺跡においても、本書で採ったような整理方針は有効でないとは言えまい。今日、発掘調査を行って検出される遺構は、遺跡が本来保持していた生活空間のごく一部であることはあらためて言うまでもない。一方で遺物分布は遺構の範囲を越えて広く残されるが、それが全く無秩序であることはなく、最終的に単純な廃棄空間として機能したものであっても、それ以前の空間の機能の何らかの反映がある可能性がある。そうであるならば、遺跡から出土した遺物群を眼前にしてまず最初になすべきことは何か。同時期ではないかと判断される遺物群を抽出したならば、文様等にしたがって土器片を分類、そして分離することではなく、何よりも個体識別であるはずである。そして次には個体の分布状況が把握されなければならない。竪穴住居跡が多数検出される遺跡では、通常遺構内においてその作業が行われ、遺構外の遺物は、遺構外出土という形で従属的に扱われることが多いが、遺構は遺跡の持つ空間のごく一部であるという観点に立てば、遺跡全体の遺物群の分布を検討する中で遺構内出土遺物が扱われなければならない。また、調査報告書によっては、任意に選択された「実測遺物」の分布のみが掲載されていることがあるが、本書では個体識別された遺物についてはいかに小破片のみの個体であっても掲載する努力を払った。

上記のような理念を基に整理作業を行った結果が本書である。現実には、それによって多大な成果を引き出し得たかというと、それぞれの遺跡の意味付けにおいては成功したとは言い難いかもしれない。ただかかる試みは規模の大小、遺構数や出土資料の多寡に拘わらず個々の遺跡を正当に評価した上で、遺跡間の関係及び遺跡群間の関係をもより具体的に捉えるという目標の下に行うものである以上、多くの資料の蓄積が肝要である。またさらに起点となる発掘調査においても、かかる目標を念頭においてなされねばならない。ここで述べたこと（やや抽象的な表現となったが）は一部の研究者にとっては言うまでもない当然のことであろうが、報告者自身の反省もかねてあえて強調しておきたい。

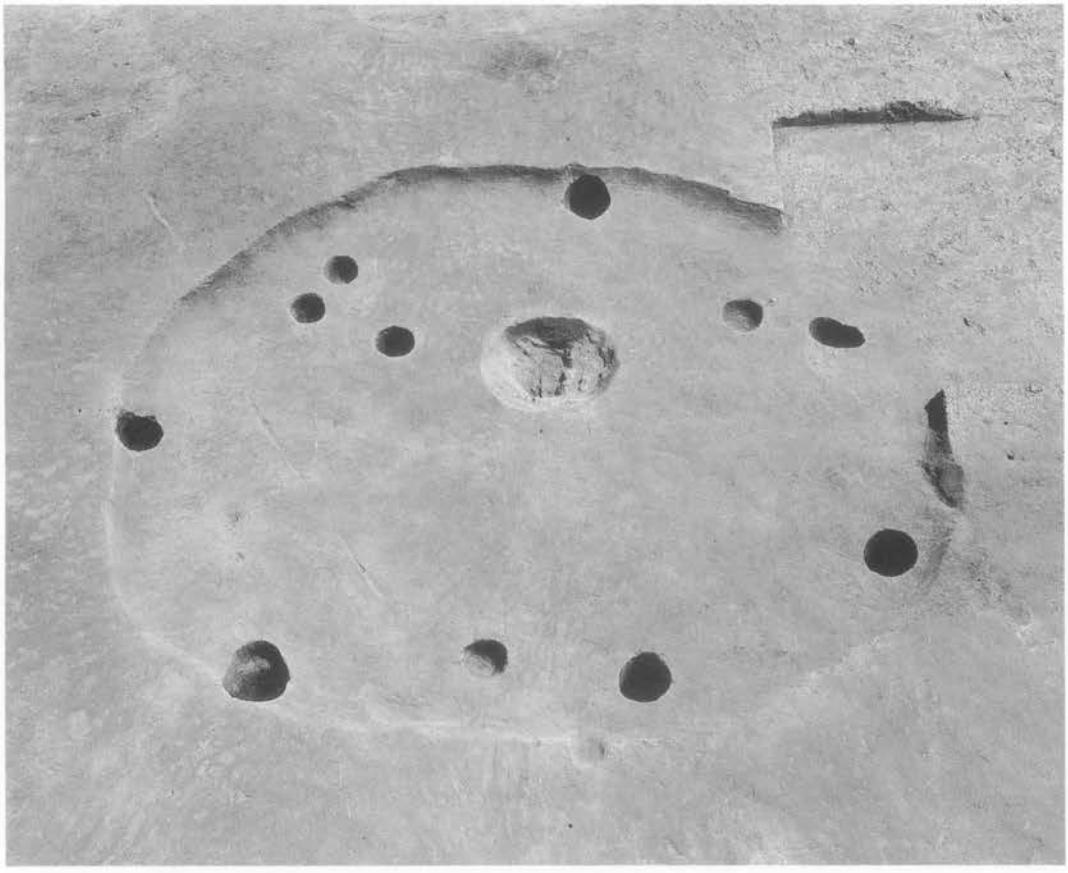
写　真　図　版



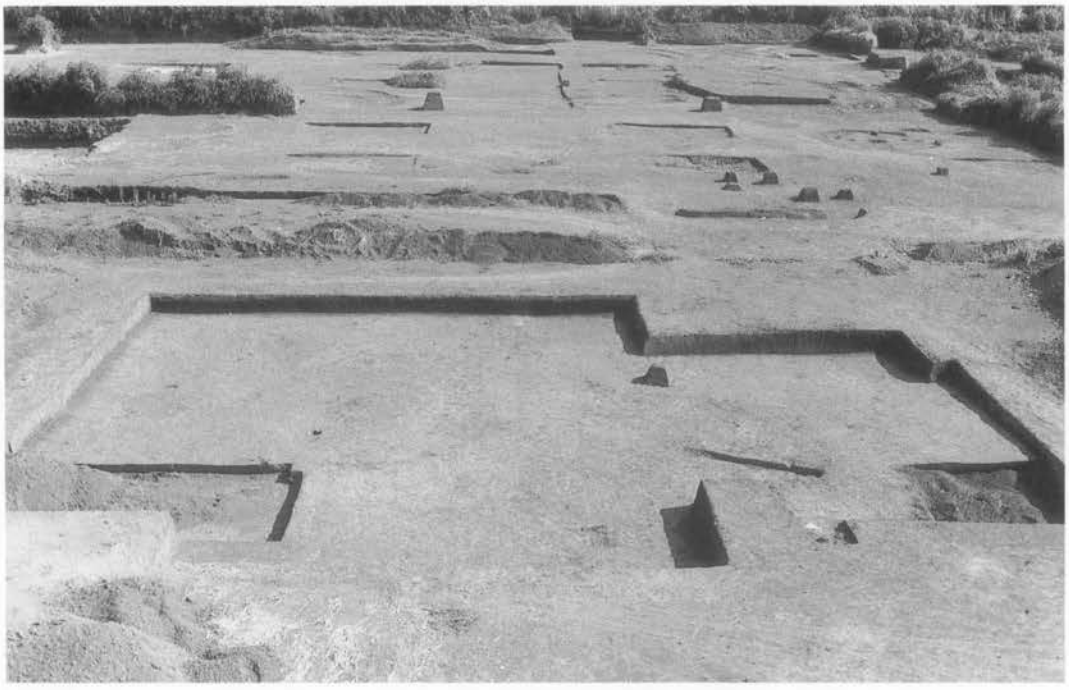
1．池花南遺跡 SI-01 全景

2．池花南遺跡 SI-02 全景

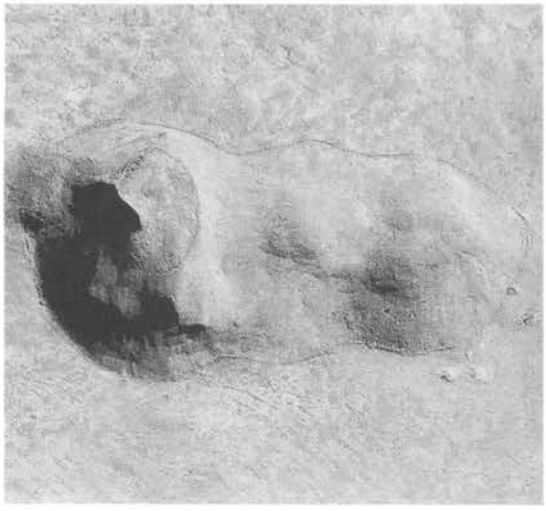
図版　2



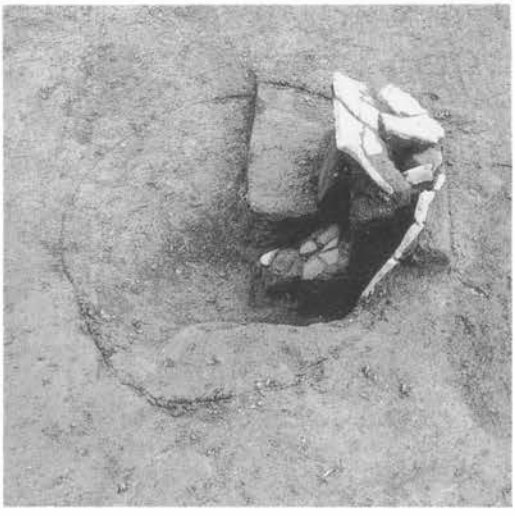
1．大割遺跡 SI-01 全景



2．大割遺跡縄文後期包含層調査後全景

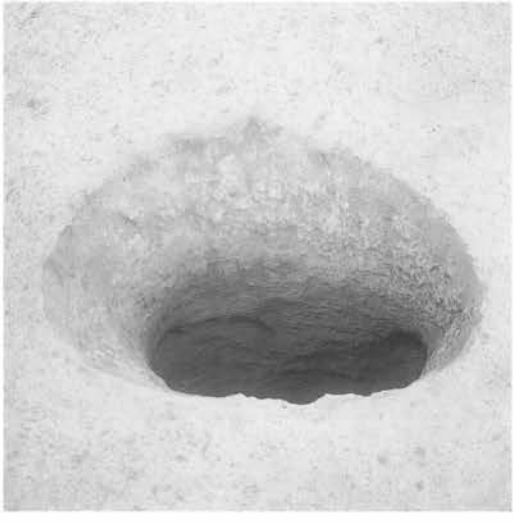


1．池花遺跡 SK-11 全景



2．同左遺物出土状況

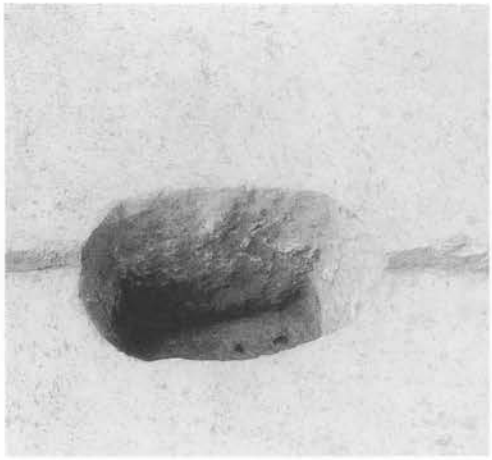
3．大割遺跡 SK-02 全景



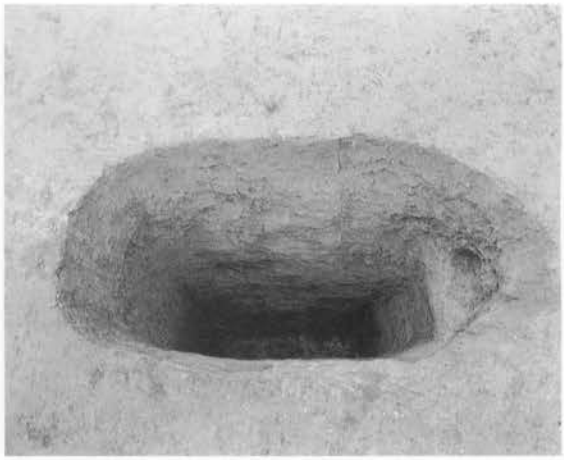
4．大割遺跡 SK-04 全景

5．大割遺跡 SK-03 土層断面

6．同左全景



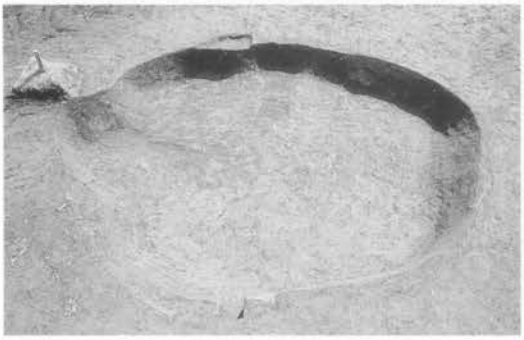
1．大割遺跡 SK-05 全景



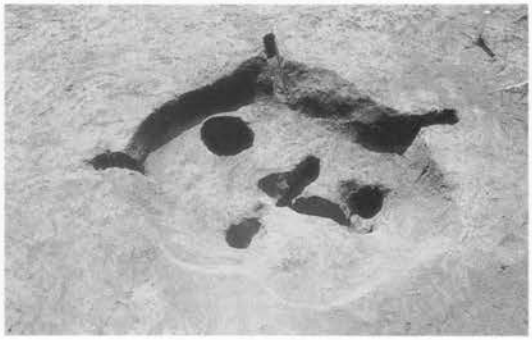
2．池花南遺跡 SK-12 全景

3．池花遺跡 SK-01 全景

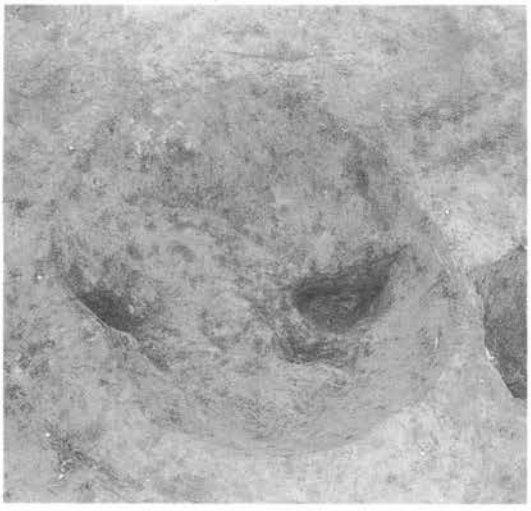
4．大割遺跡 SK-06, 07 全景



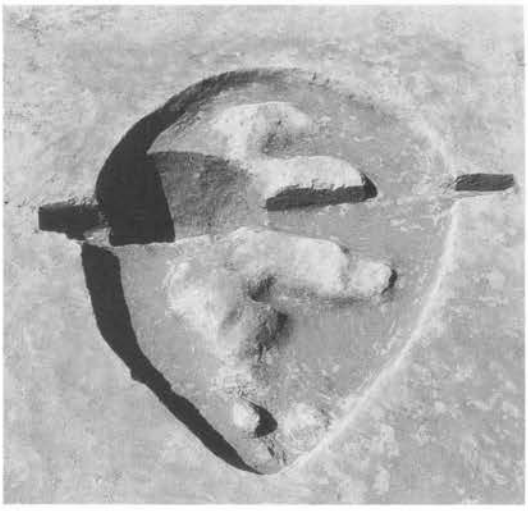
5．大割遺跡 SK-08 全景



6．大割遺跡 SK-09 全景



1．池花南遺跡 SK-01 全景



2．池花南遺跡 SK-02 全景

3．池花南遺跡 SK-03A 全景

4．池花南遺跡 SK-03B 全景

5．池花南遺跡 SK-04 全景

6．池花南遺跡 SK-05 全景

1．池花南遺跡 SK-06 全景

2．池花南遺跡 SK-07 全景

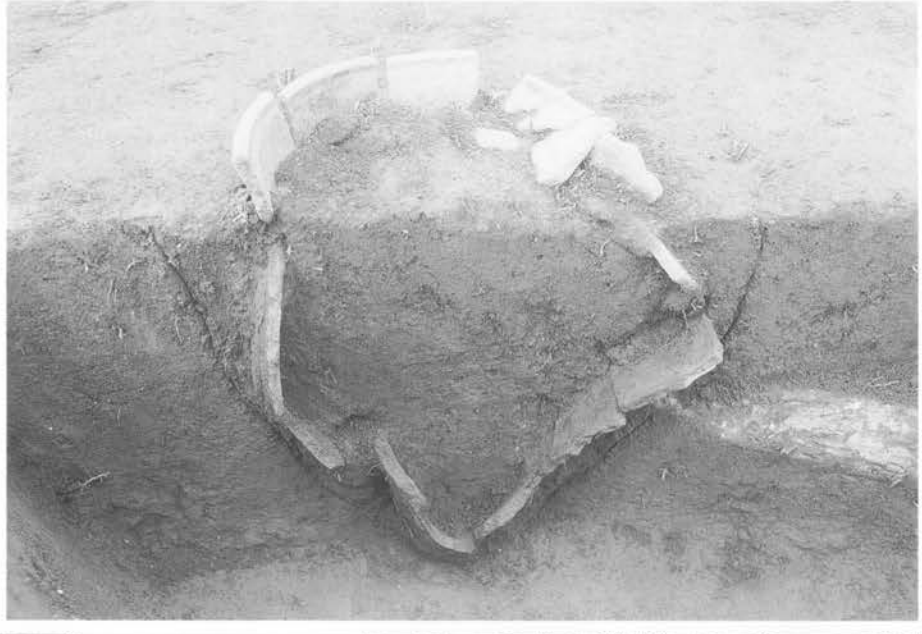
3．池花南遺跡 SK-08 全景

4．池花南遺跡 SK-09 全景

5．池花遺跡 SK-02 全景

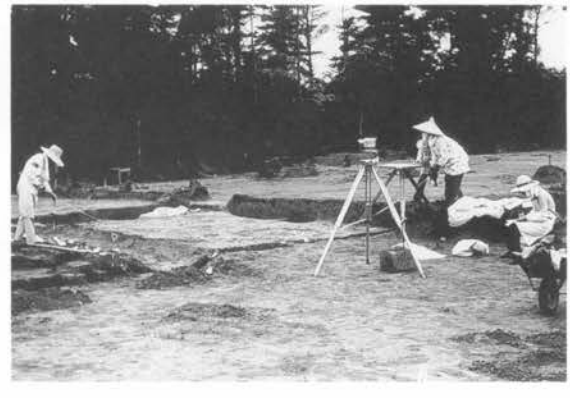
6．池花遺跡 SK-24 全景

1．池花南遺跡
SK-11
検出状況



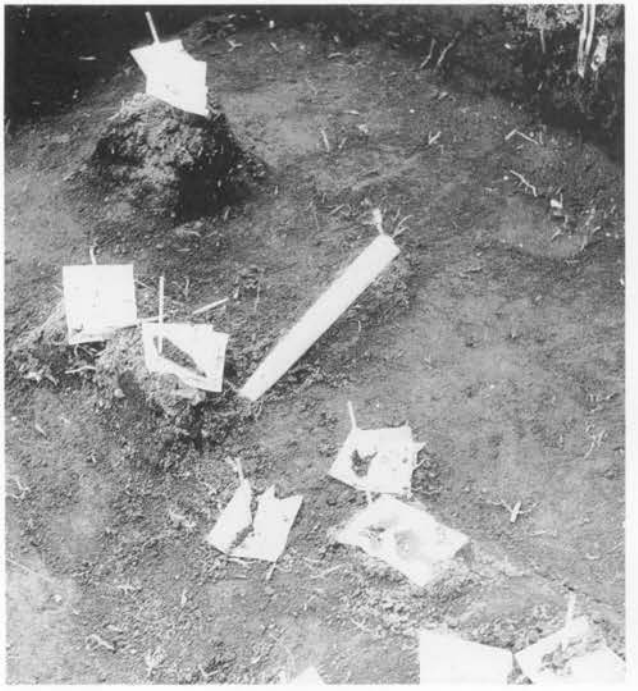
2．同上断面

3．調査風景



4．調査風景

1．池花南遺跡G7区周辺包含層全景



2．石剣出土状況

3．赤色顔料充填土器出土状況

1．池花遺跡E1区包含層全景

2．出土状況

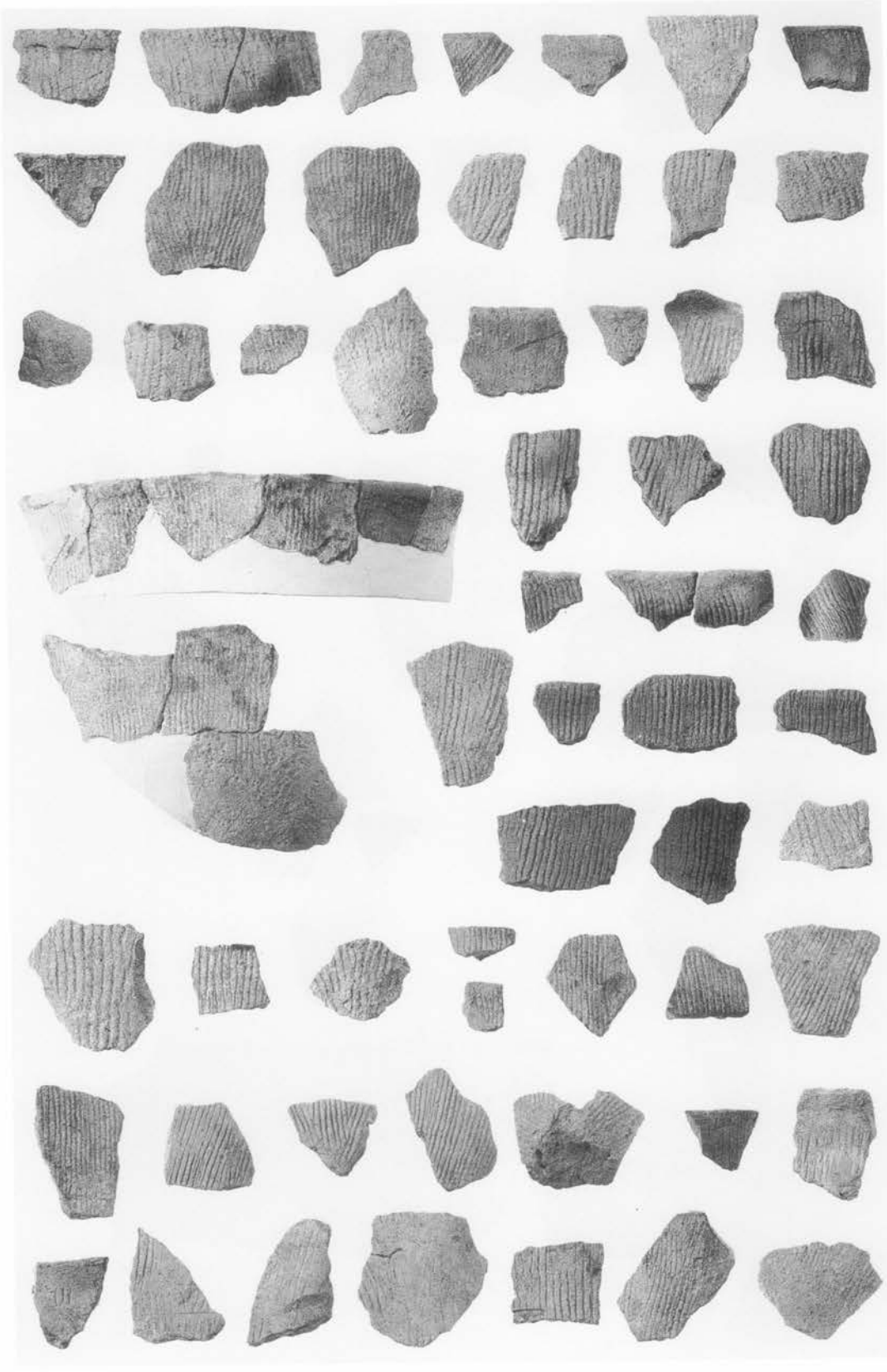
3．池花遺跡E2区安行3a式土器出土状況

4．同左

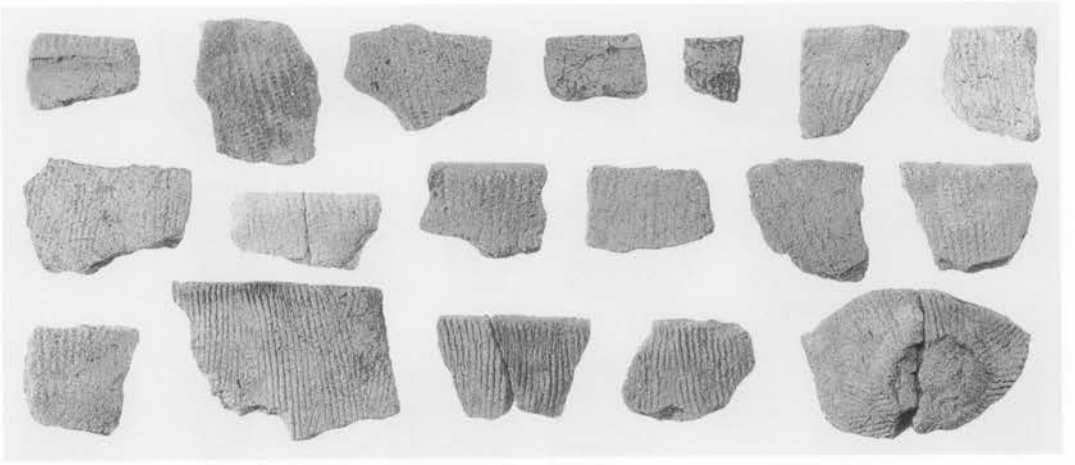
5．池花遺跡E2区包含層全景

1．池花遺跡C1区包含層全景

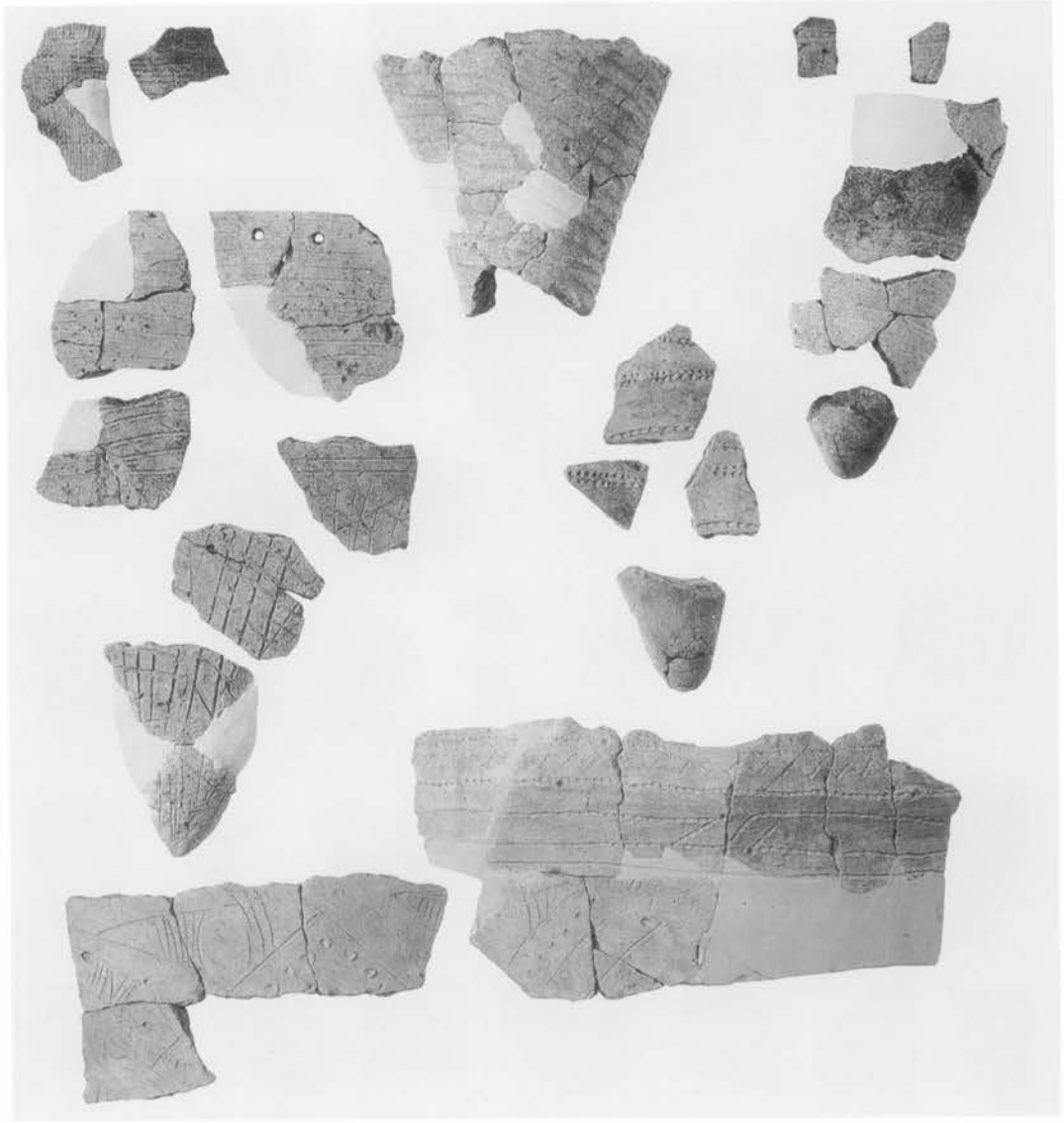
2．池花遺跡F2区包含層全景



池花南遺跡出土撚糸文系土器

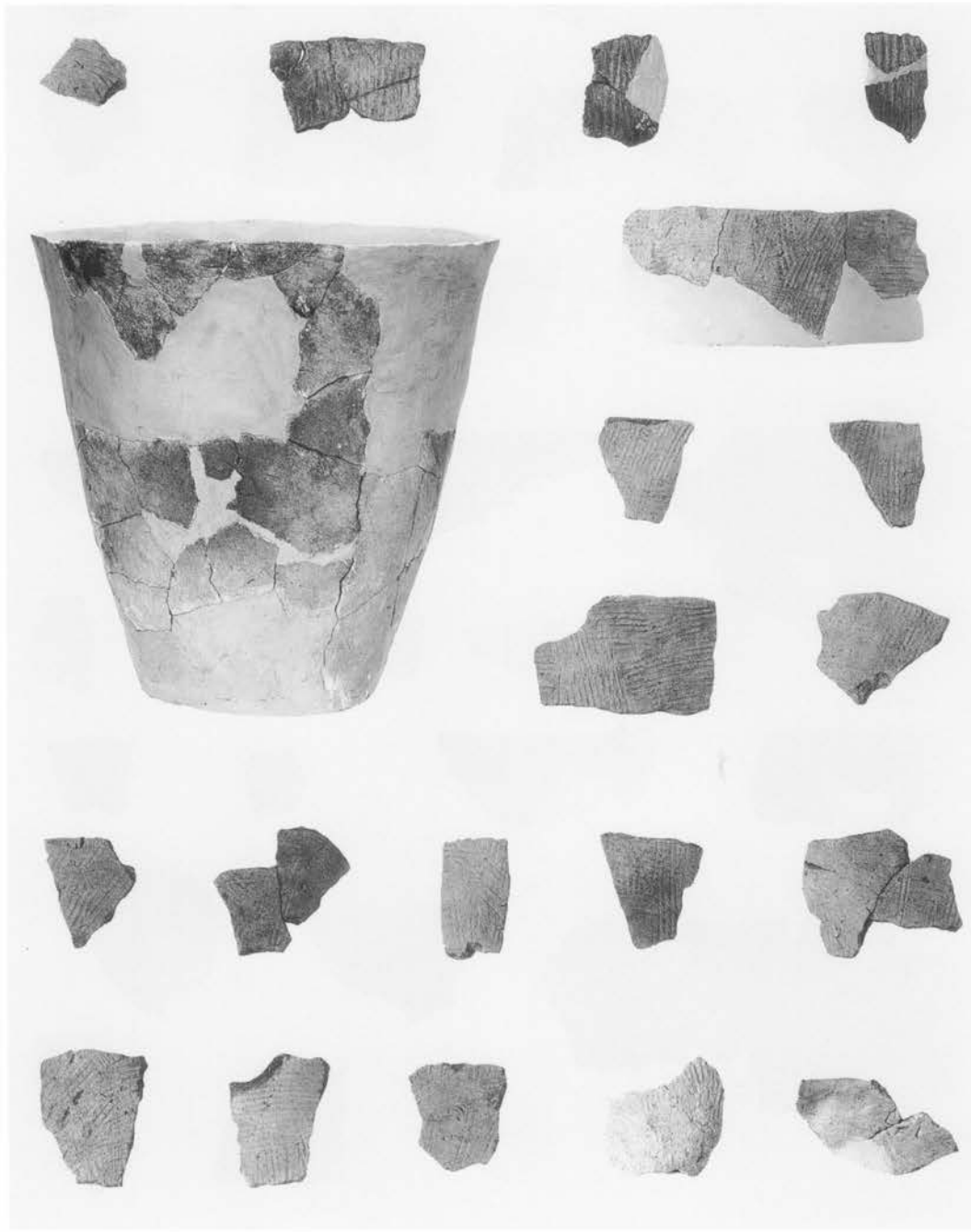


1．池花遺跡出土撚糸文系土器

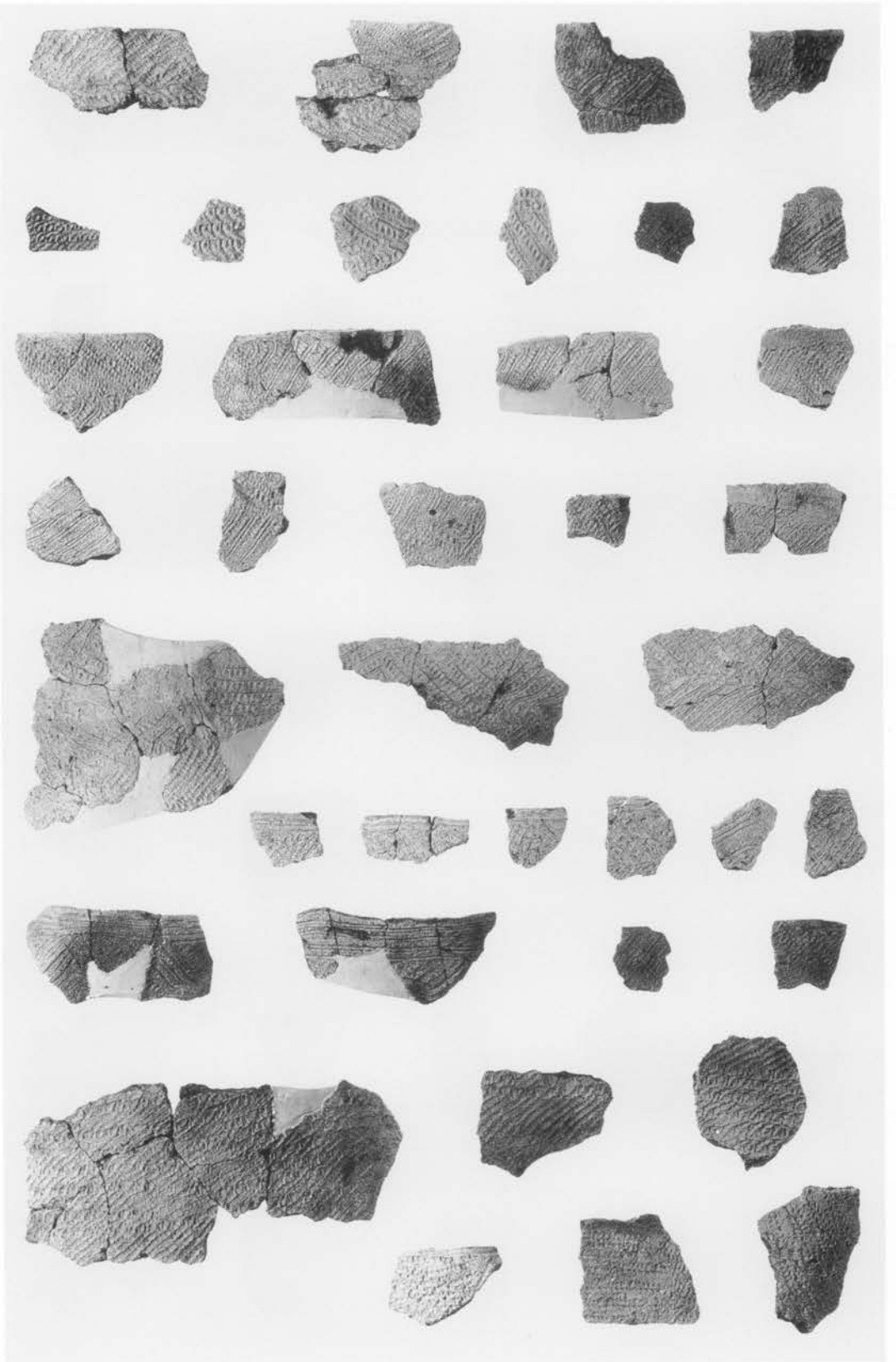


2．池花南遺跡・池花遺跡出土沈線文系土器

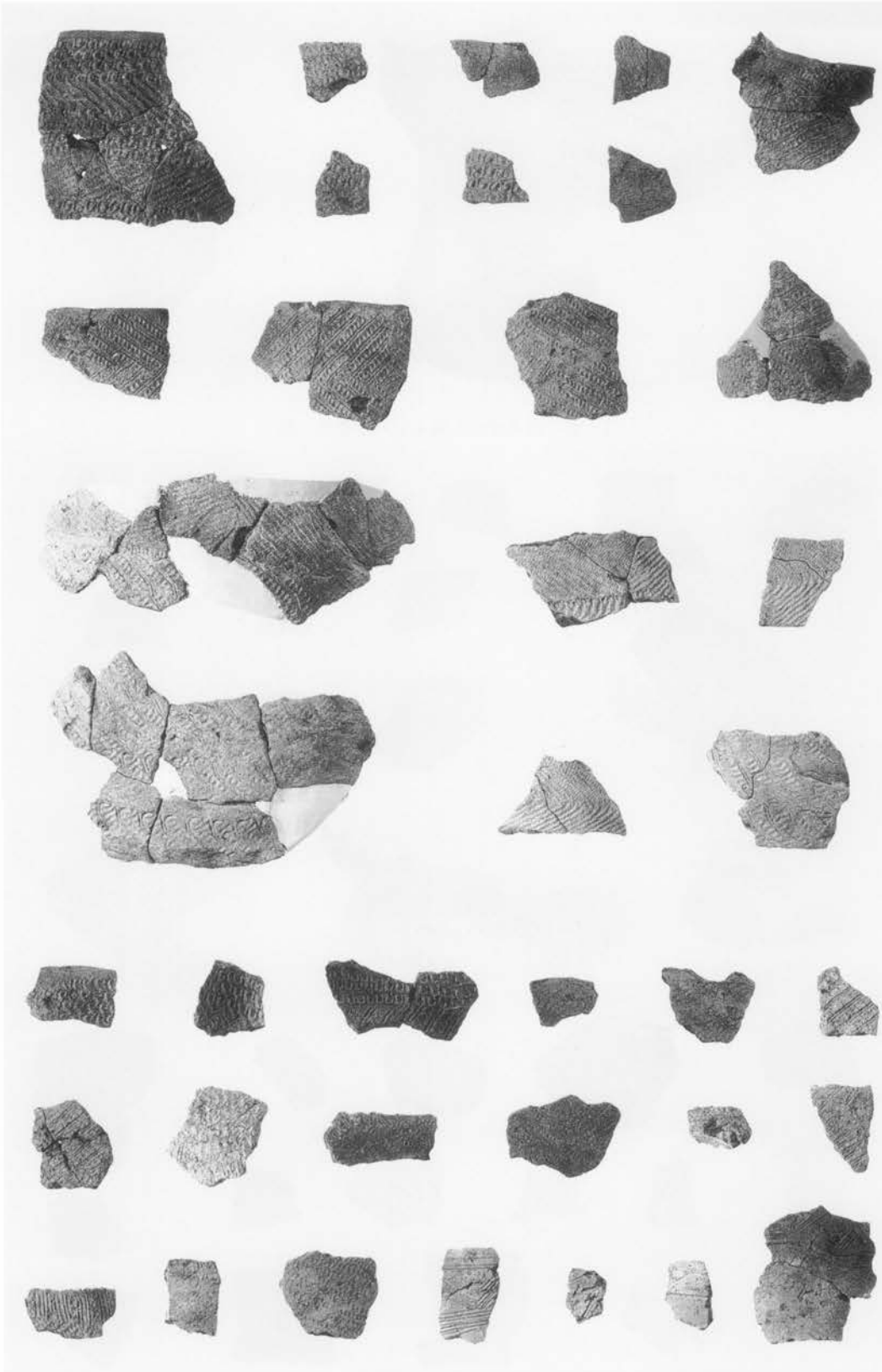
1．池花南遺跡出土条痕文系土器



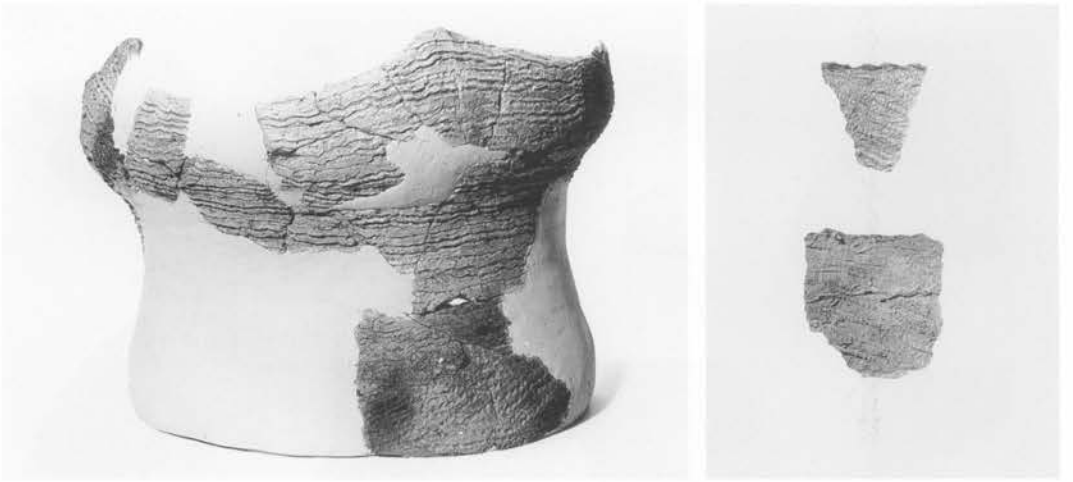
2．池花遺跡出土条痕文系土器



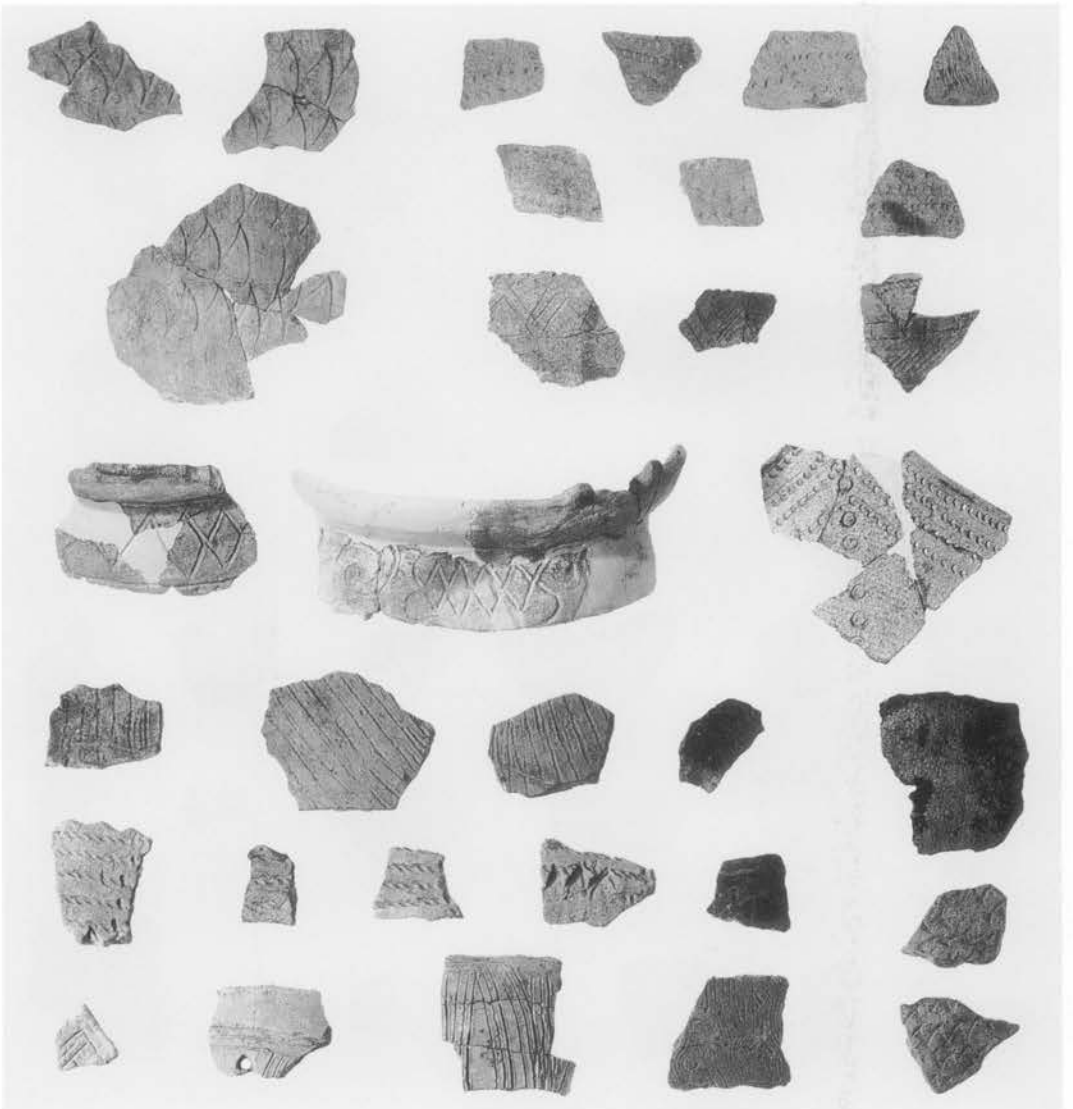
池花南遺跡出土関山(新)式土器(1)



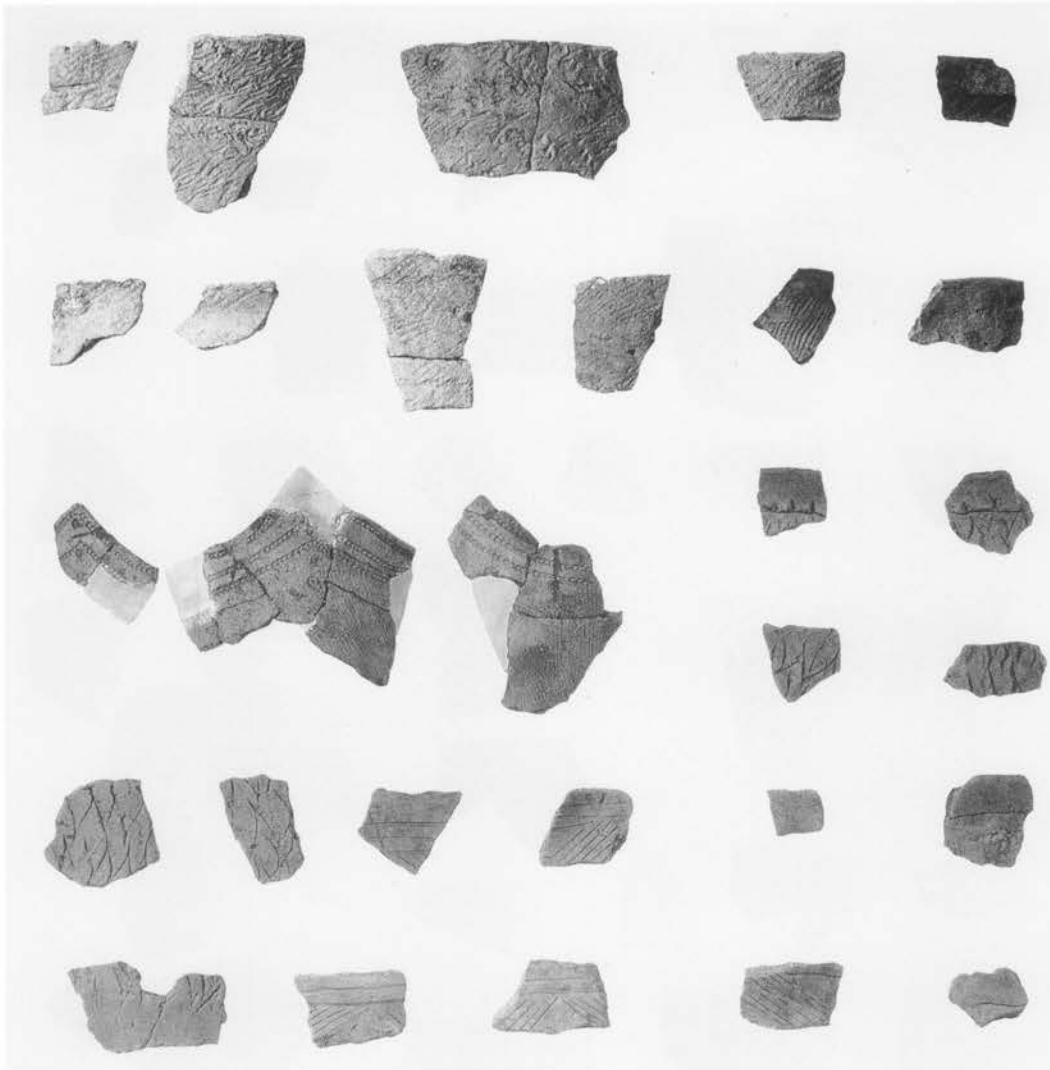
池花南遺跡出土関山（新）式土器(2)



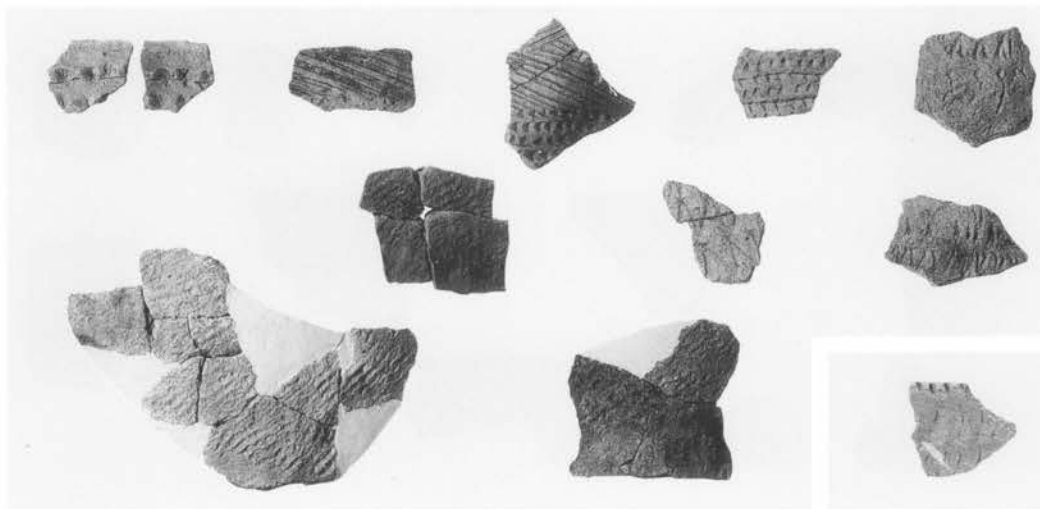
1．池花南遺跡出土縄文前期中葉の土器



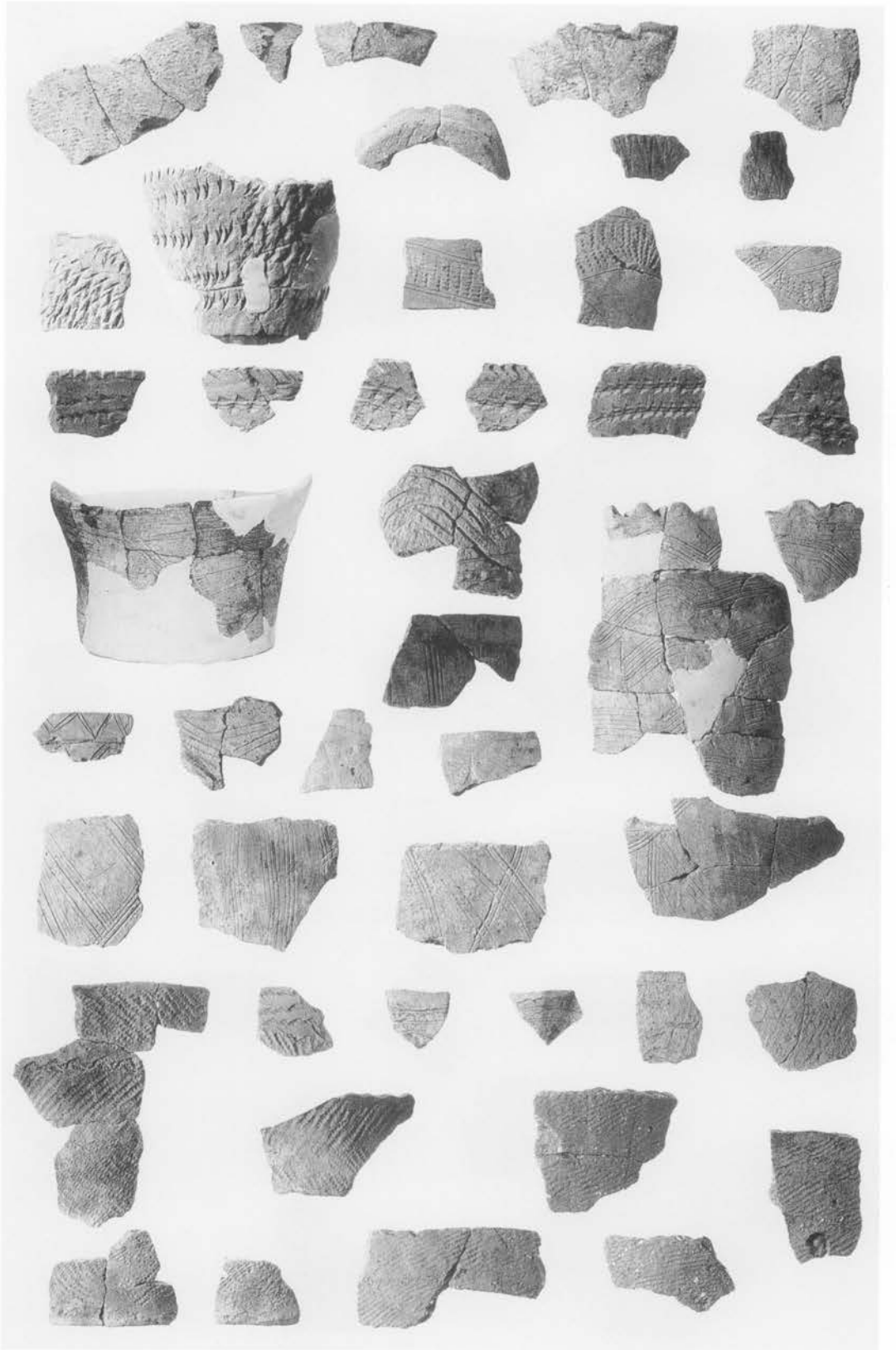
2．池花南遺跡出土縄文前期後葉の土器(1)



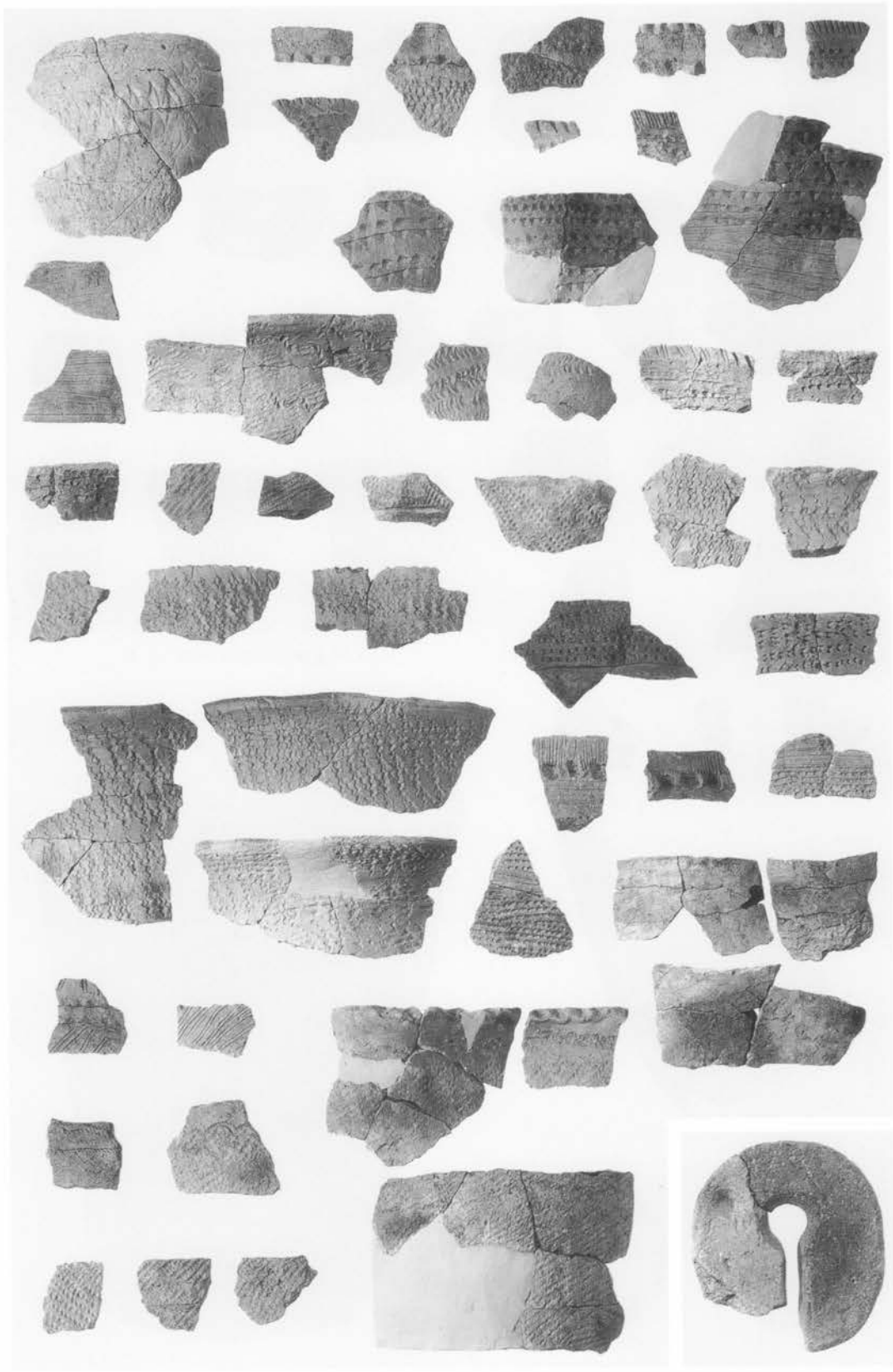
1．池花南遺跡出土縄文前期後葉の土器(2)



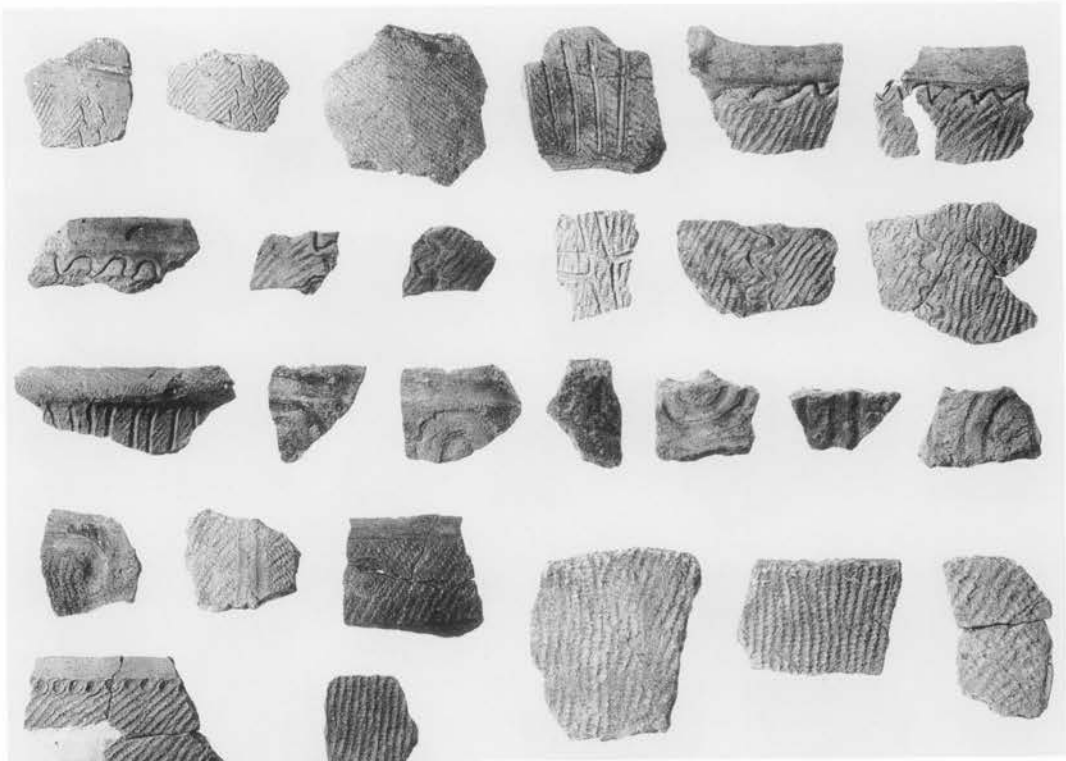
2．大割遺跡・池花遺跡出土縄文前期後葉の土器



池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(1)



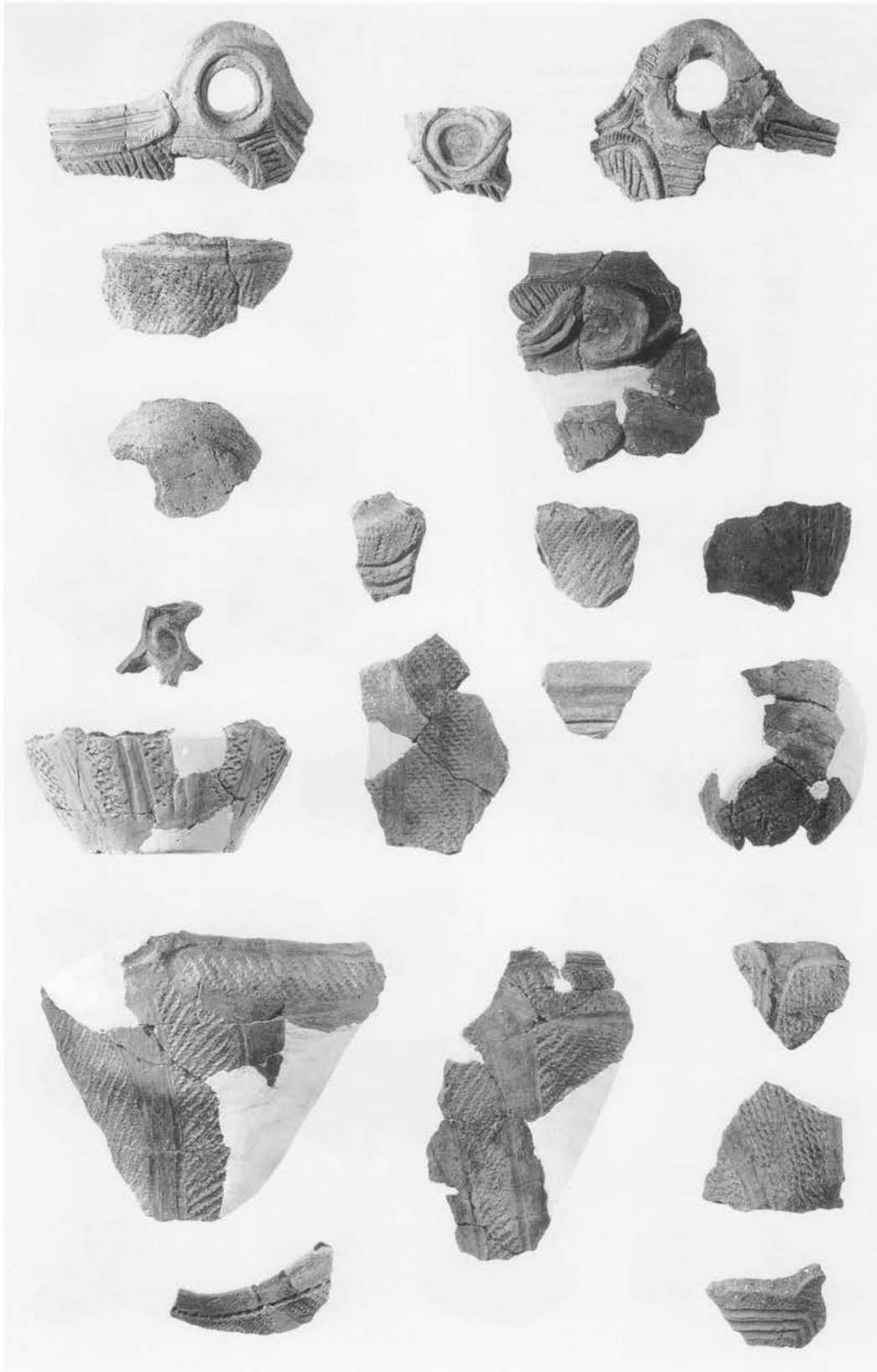
池花遺跡出土縄文前期後葉の土器(2)・玦状耳飾



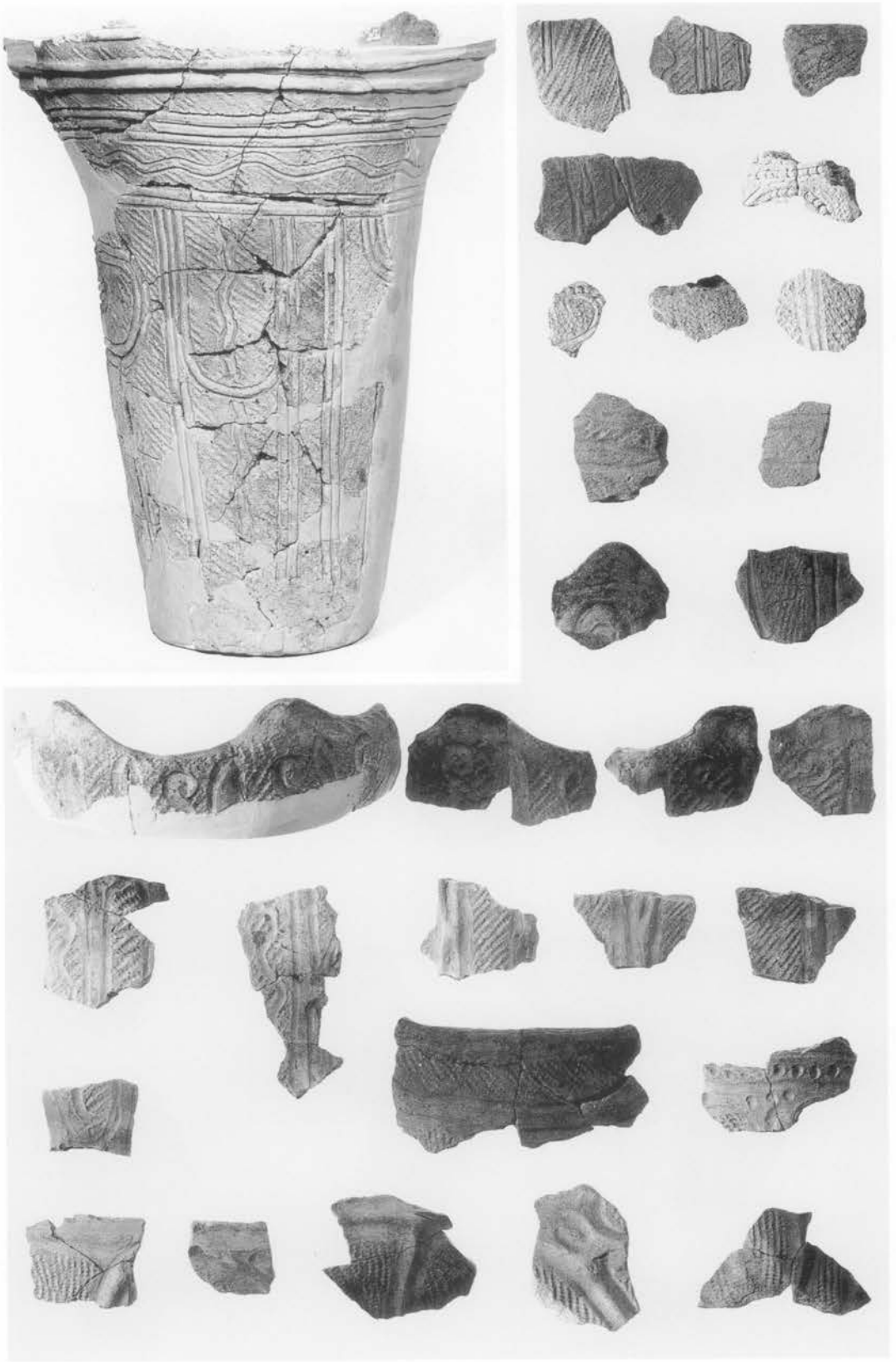
1．大割遺跡出土縄文中期の土器

2．大割遺跡出土土器片錘

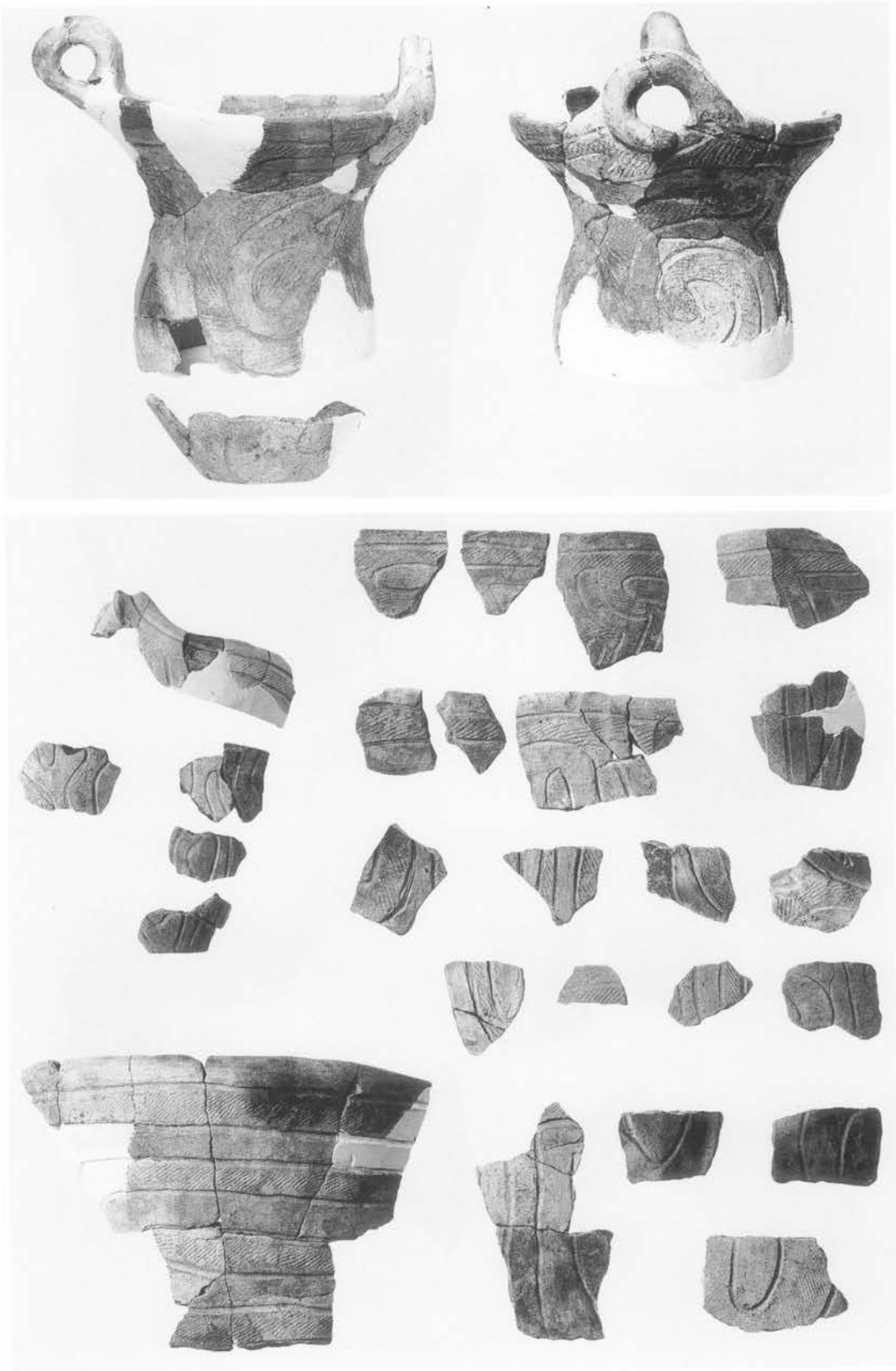
3．池花遺跡出土阿玉台式土器



池花遺跡出土加曽利Ｅ式土器

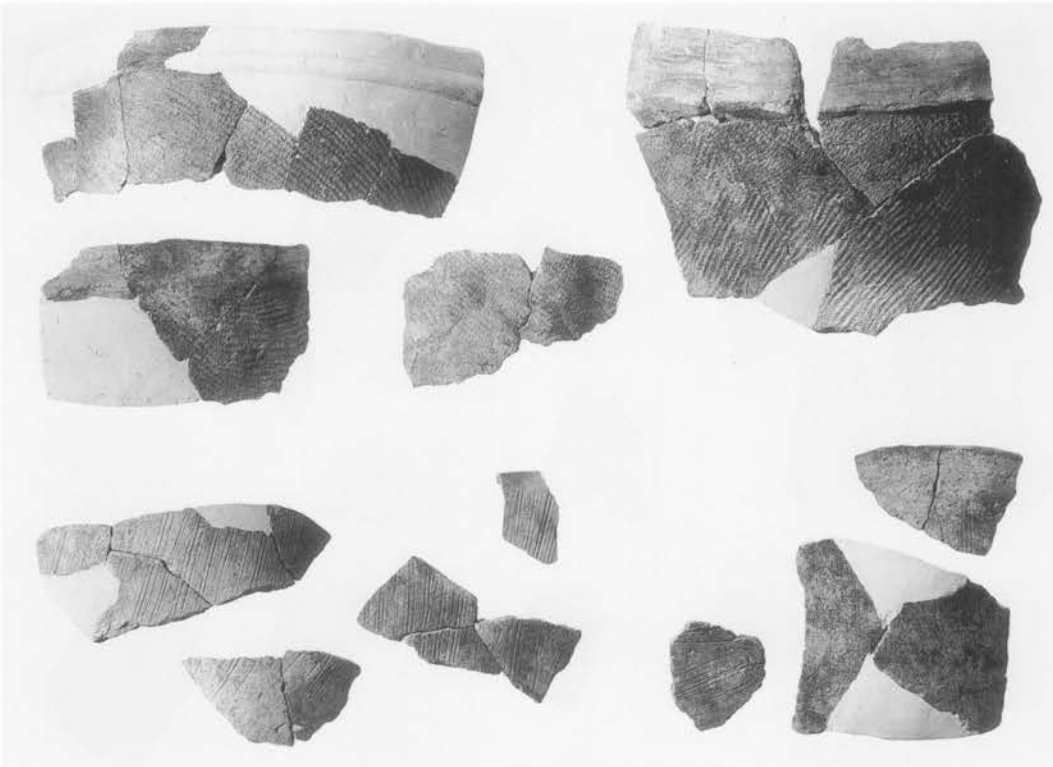


池花南遺跡出土加曽利E式土器

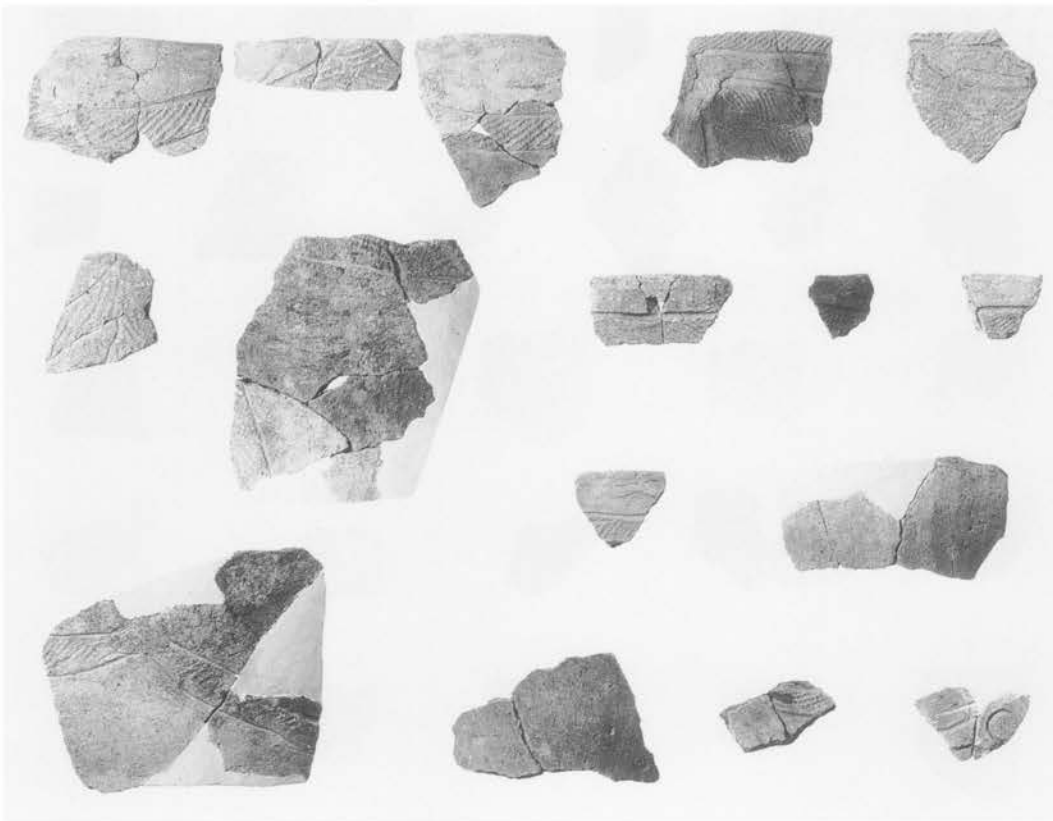


大割遺跡出土称名寺式土器(1)

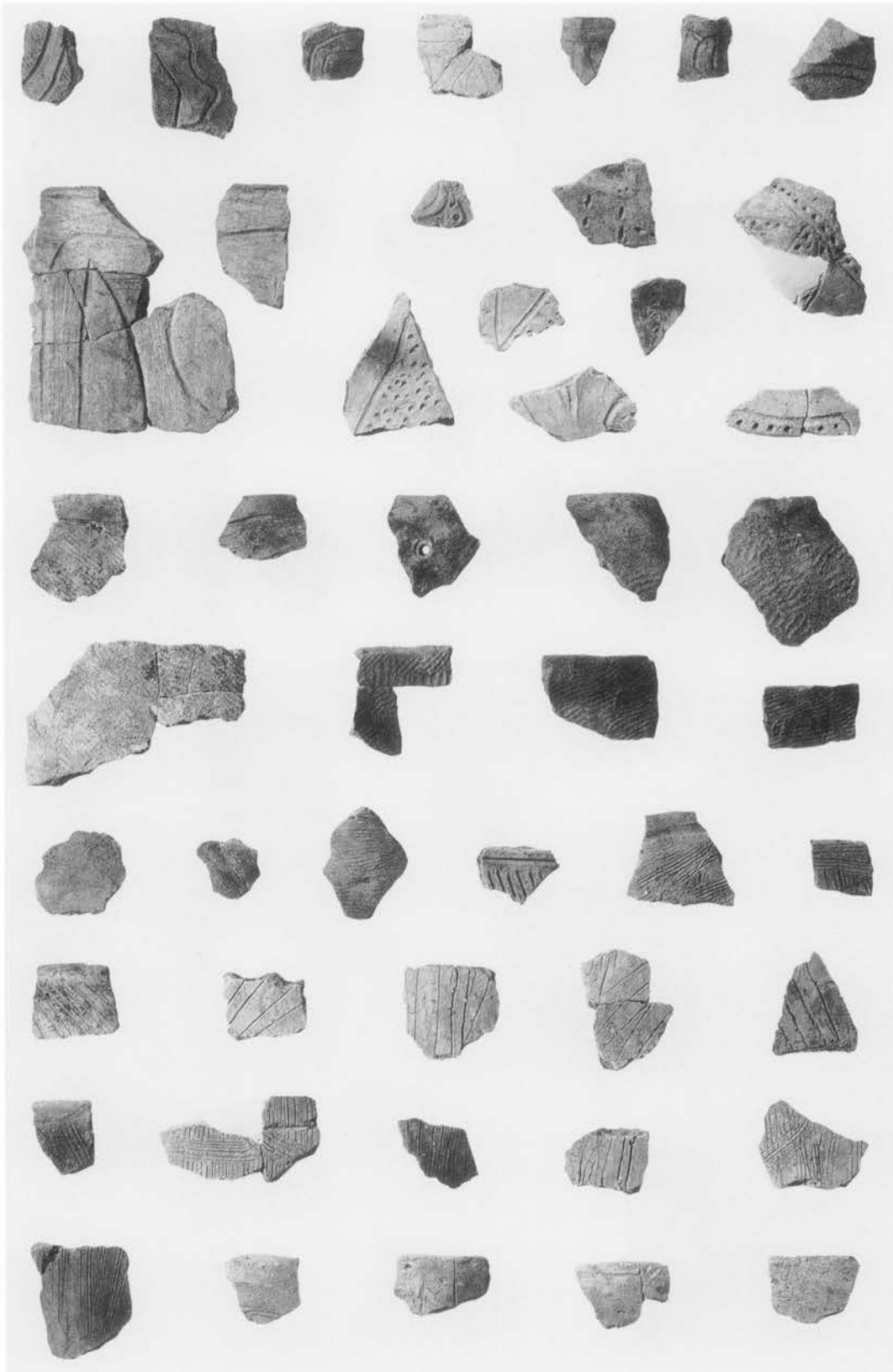
大割遺跡出土称名寺式土器(2)



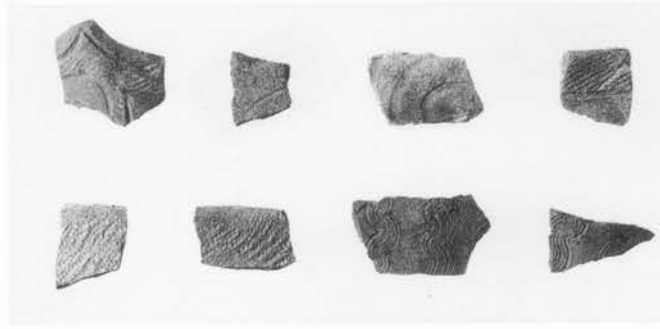
1．大割遺跡出土称名寺式土器(3)



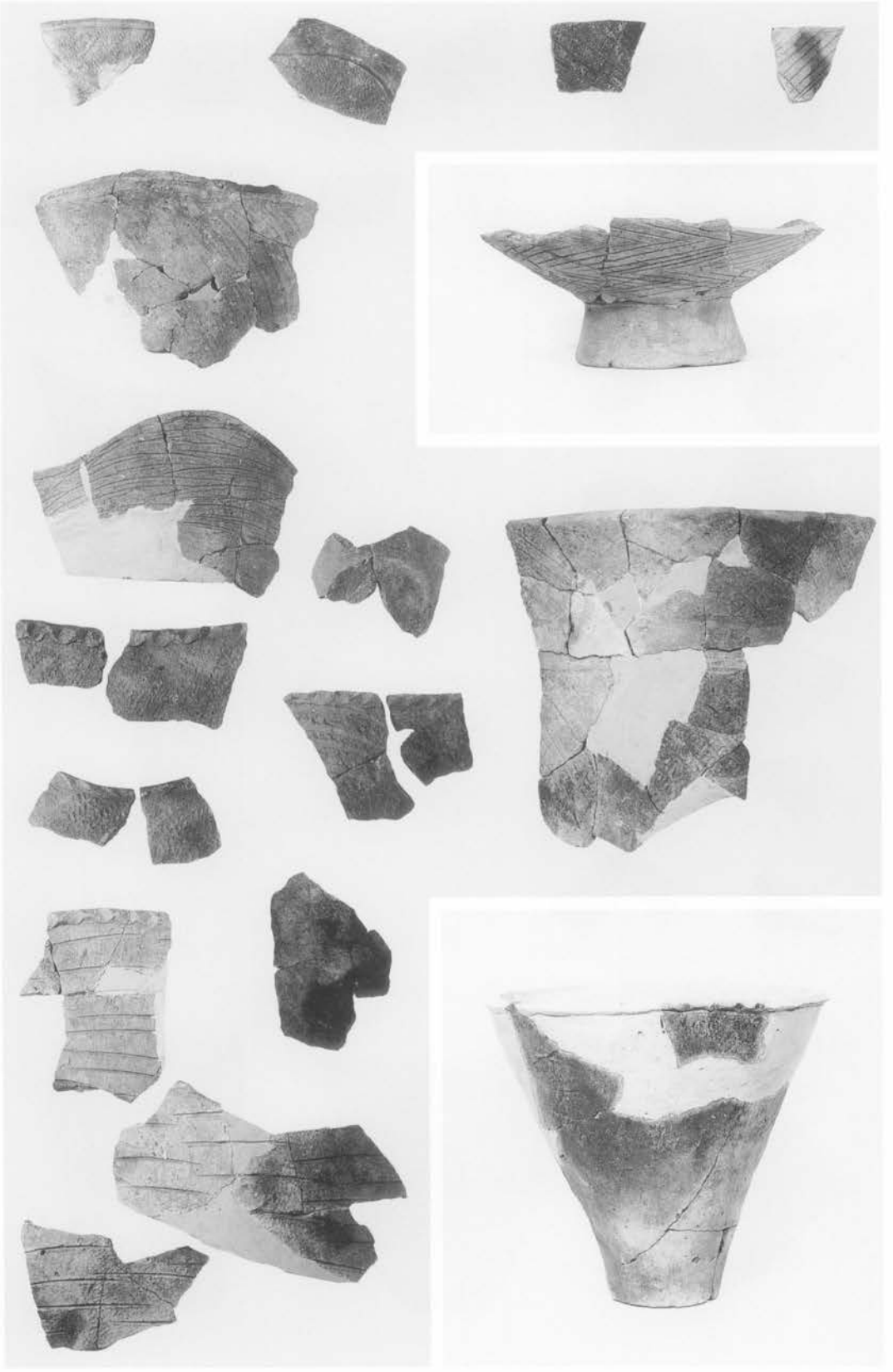
2．大割遺跡出土称名寺式土器(4)



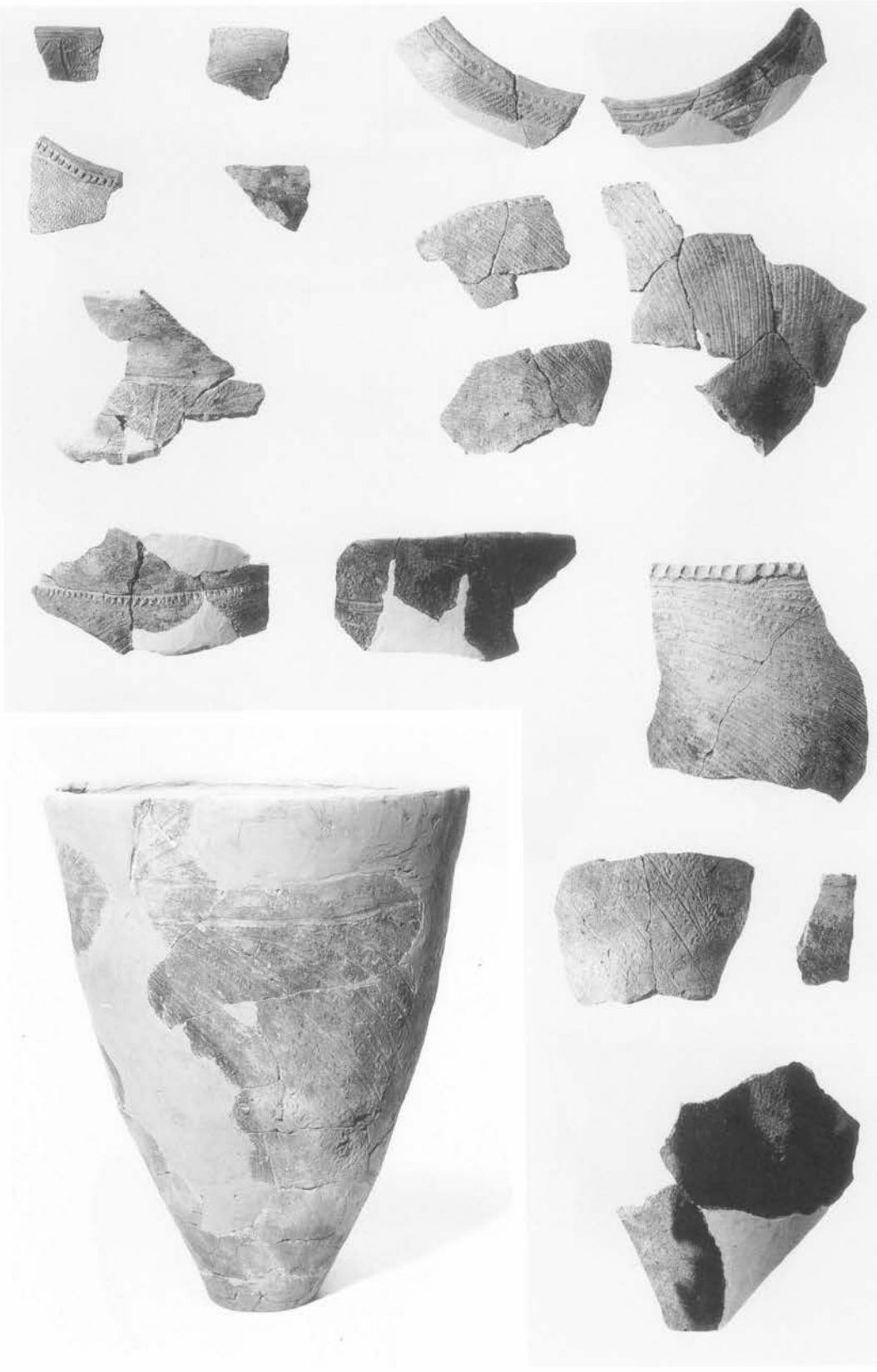
大割遺跡出土称名寺式土器(5)



各遺跡出土称名寺・堀之内式土器

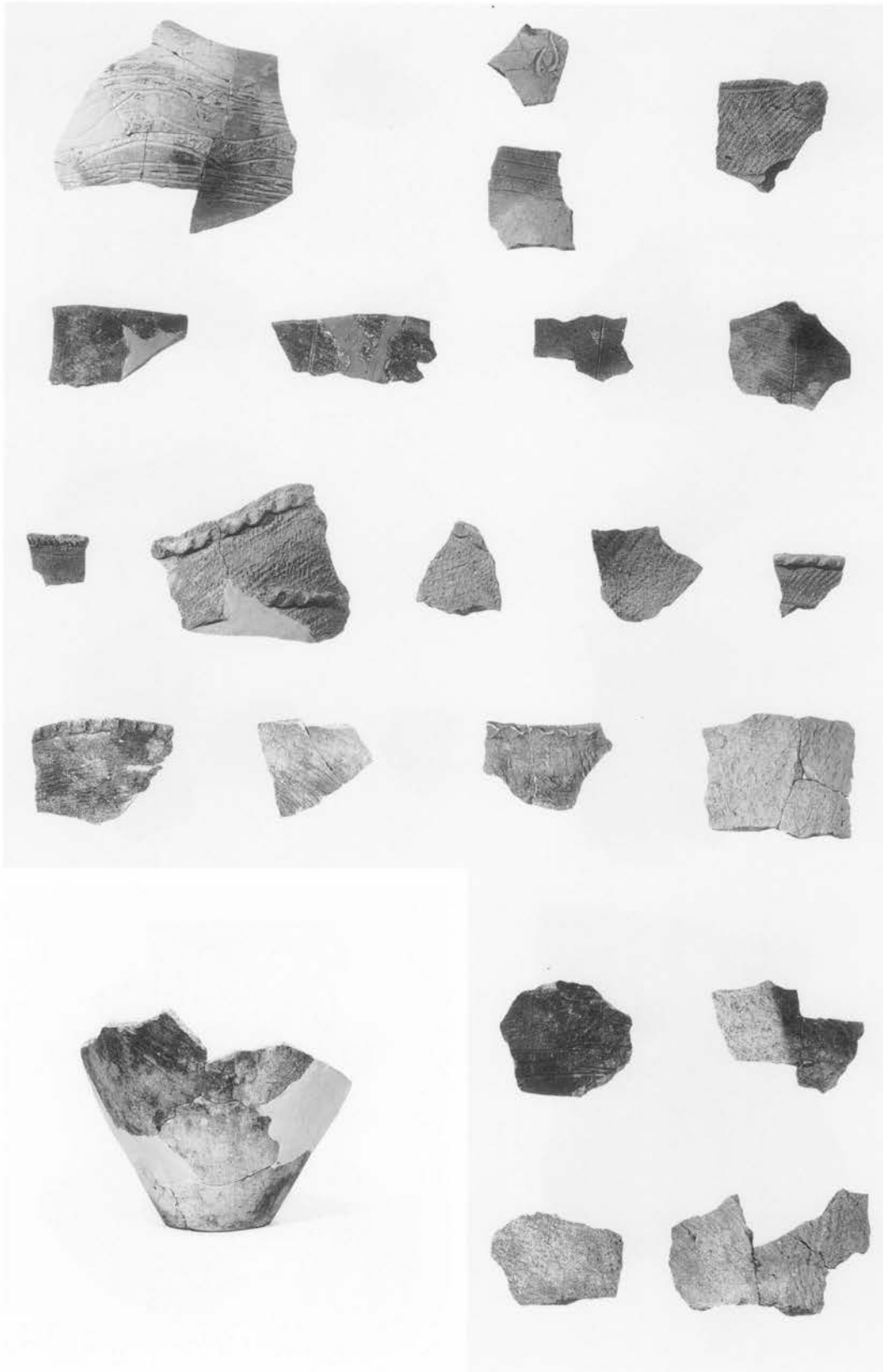


池花遺跡出土加曽利Ｂ式土器(1)

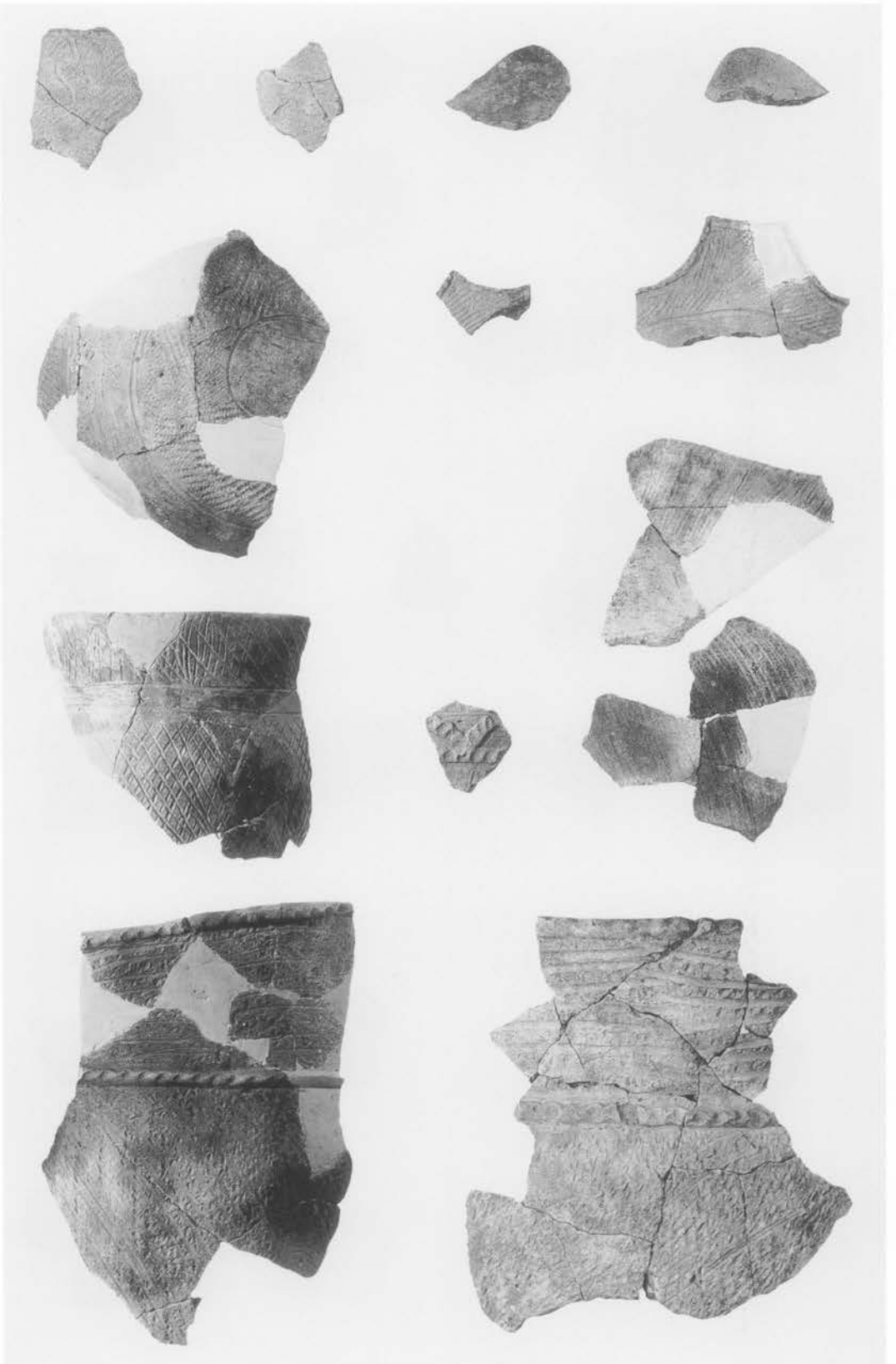


池花遺跡出土加曽利Ｂ式土器(2)

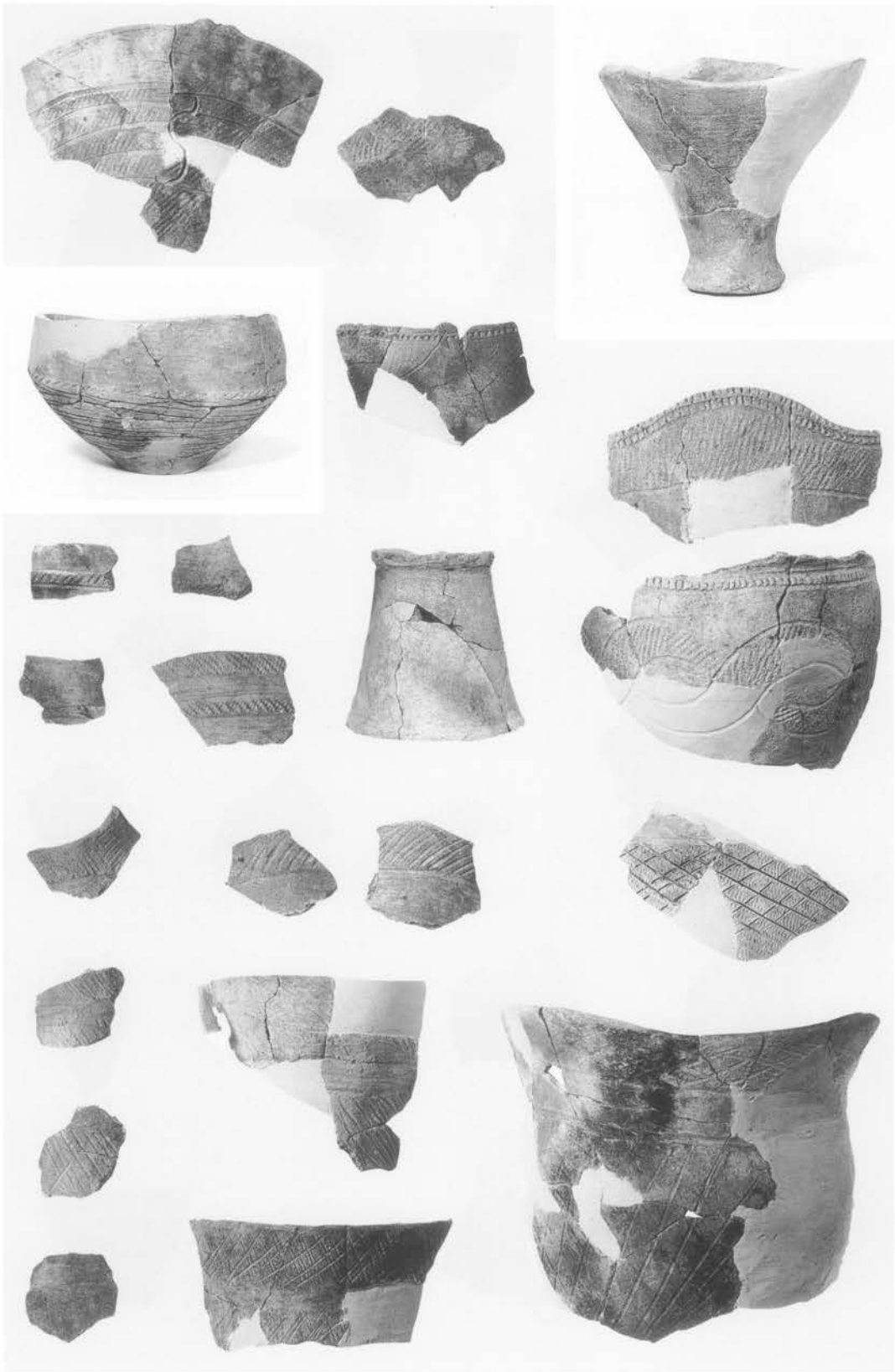
池花遺跡出土加曽利Ｂ式土器(3)



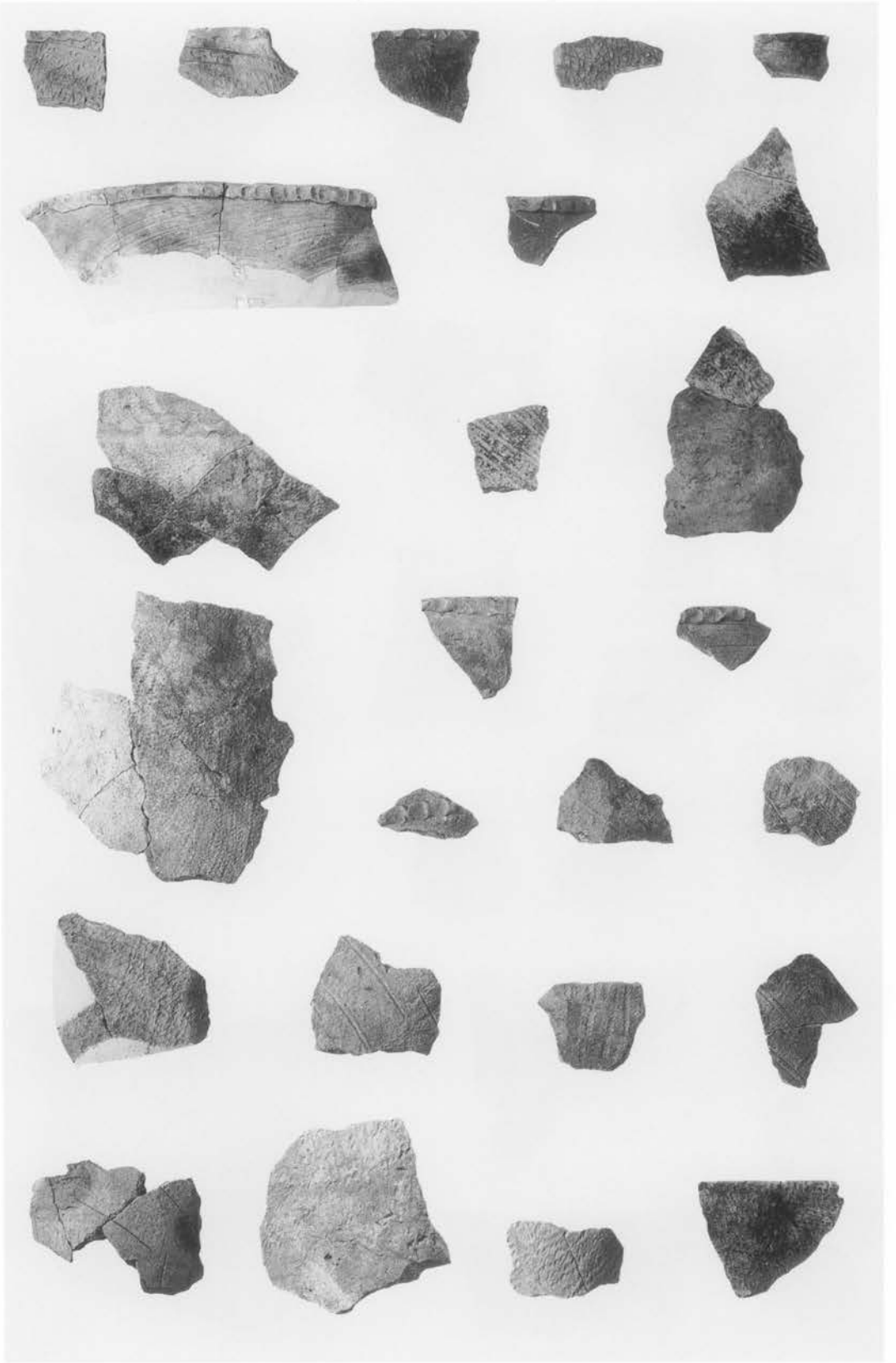
池花遺跡出土加曽利Ｂ式土器(4)



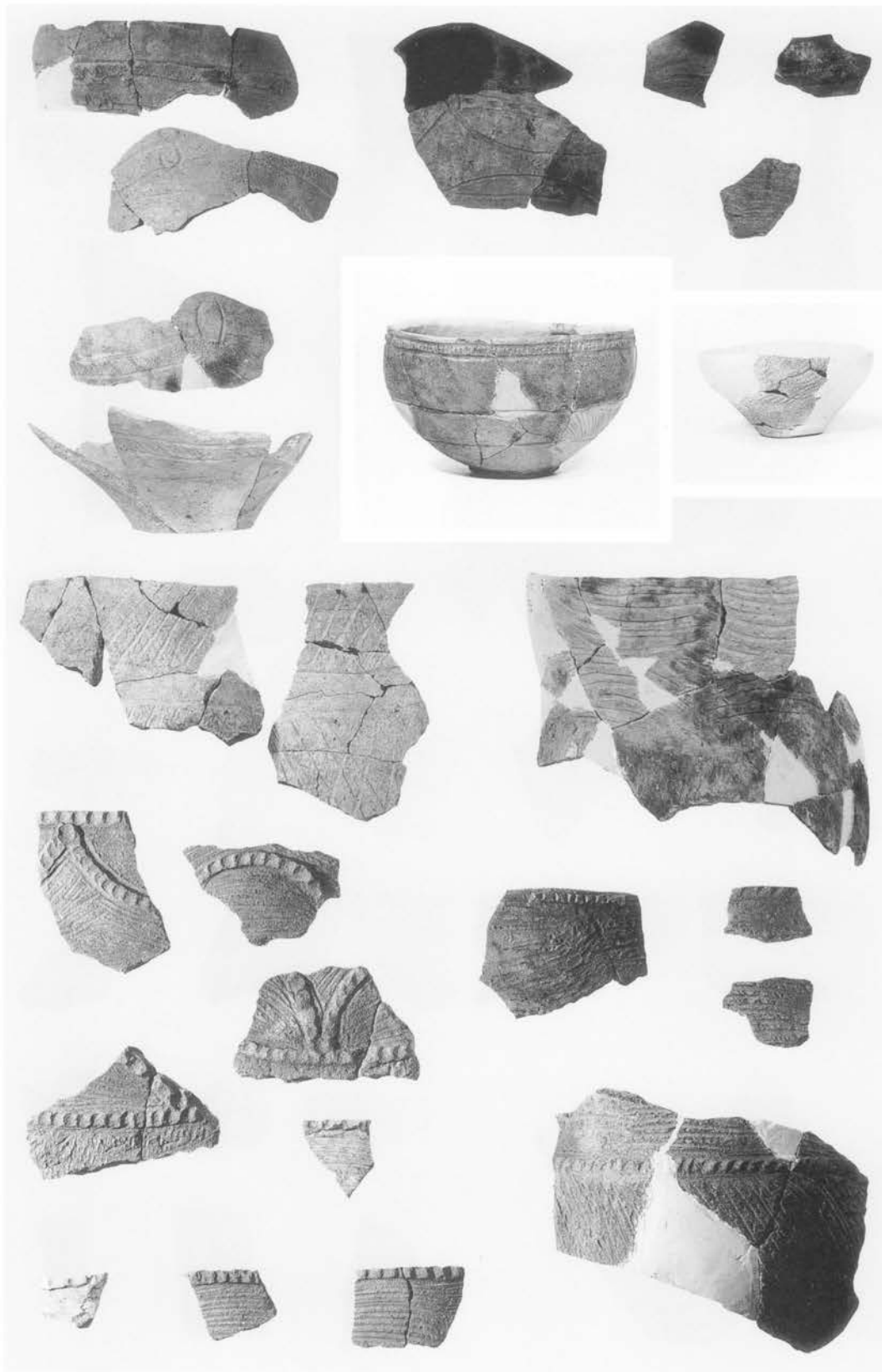
大割遺跡出土加曽利Ｂ式土器(1)



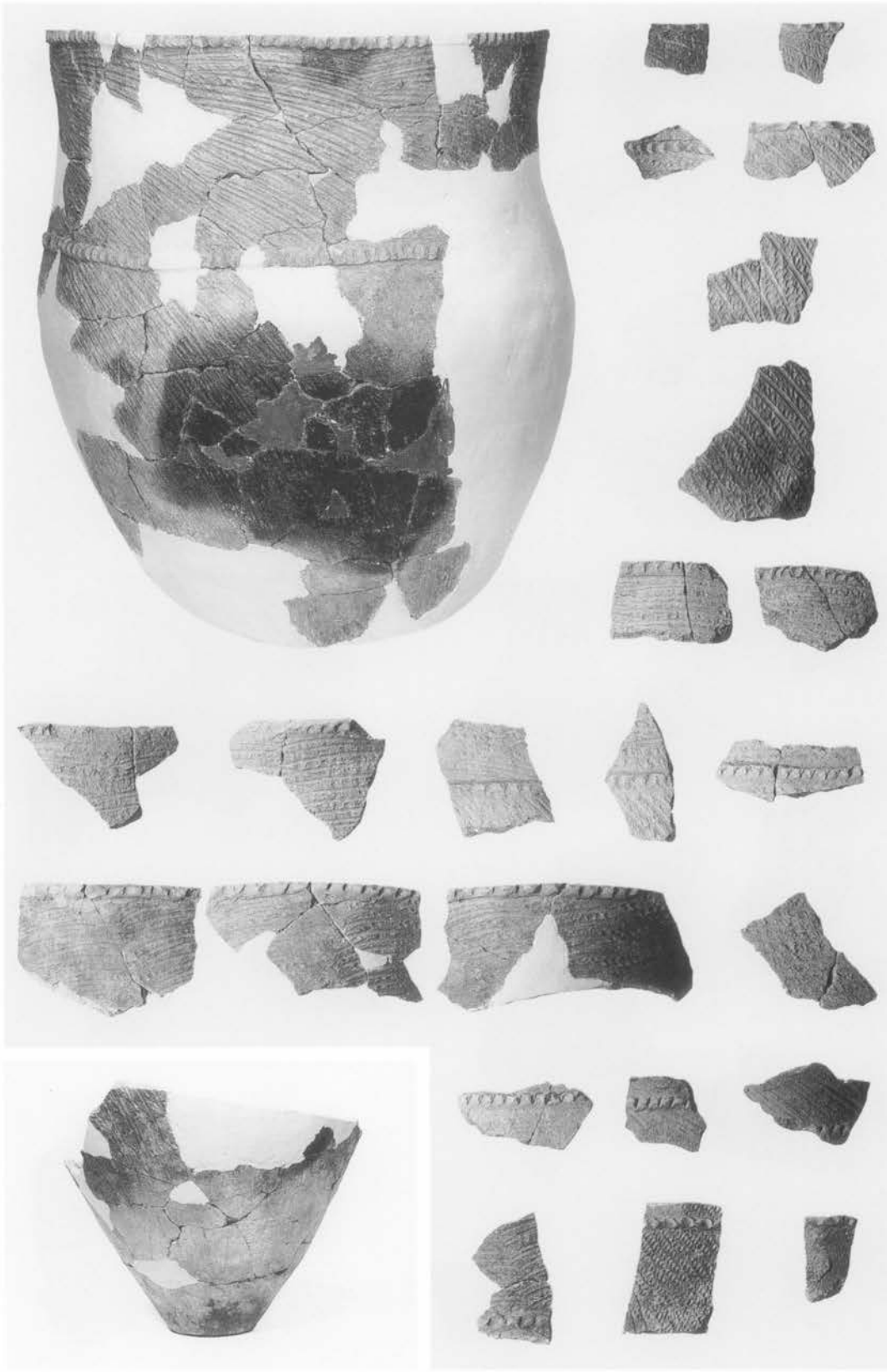
大割遺跡出土加曽利B式土器(2)



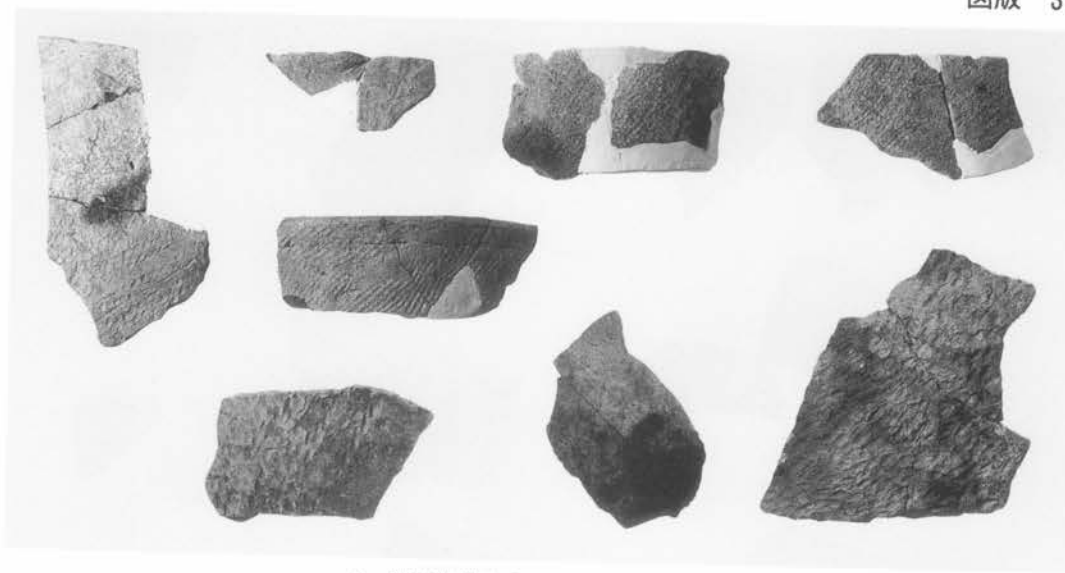
大割遺跡出土加曽利Ｂ式土器(3)



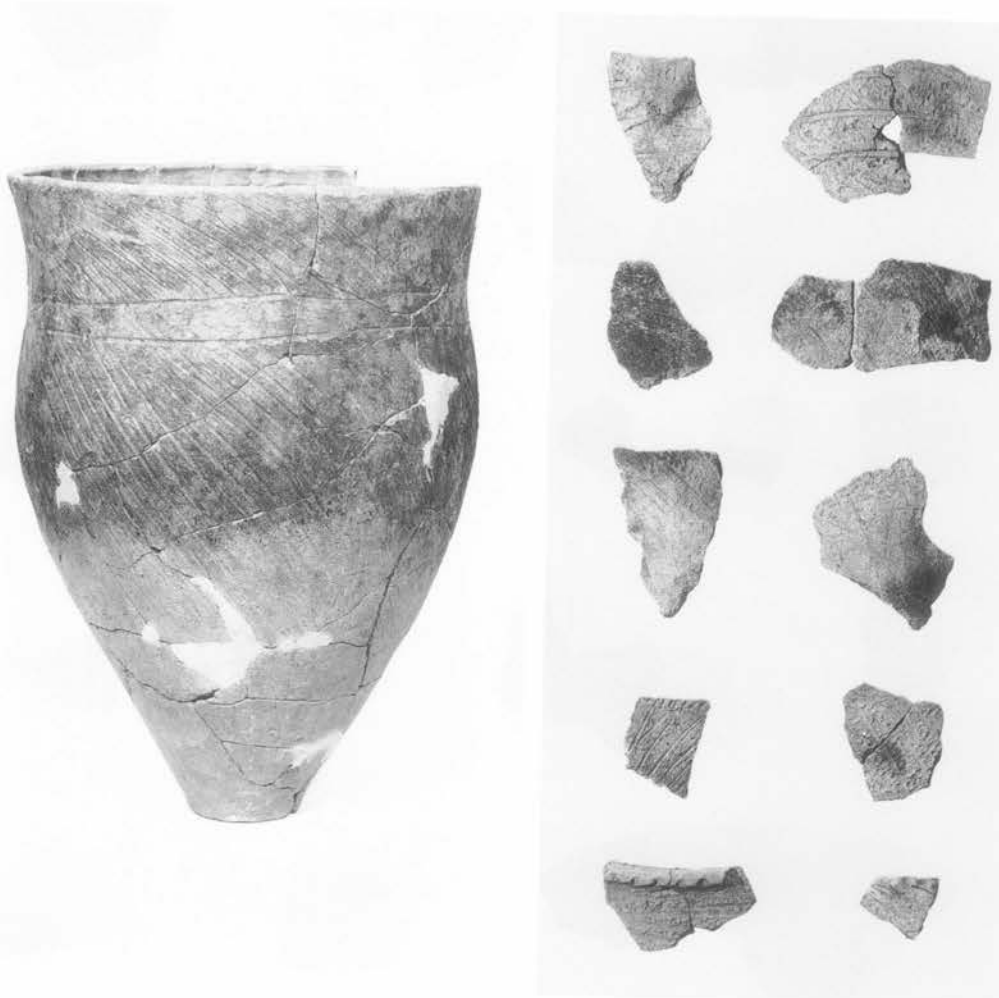
池花南遺跡出土加曽利Ｂ式土器(1)



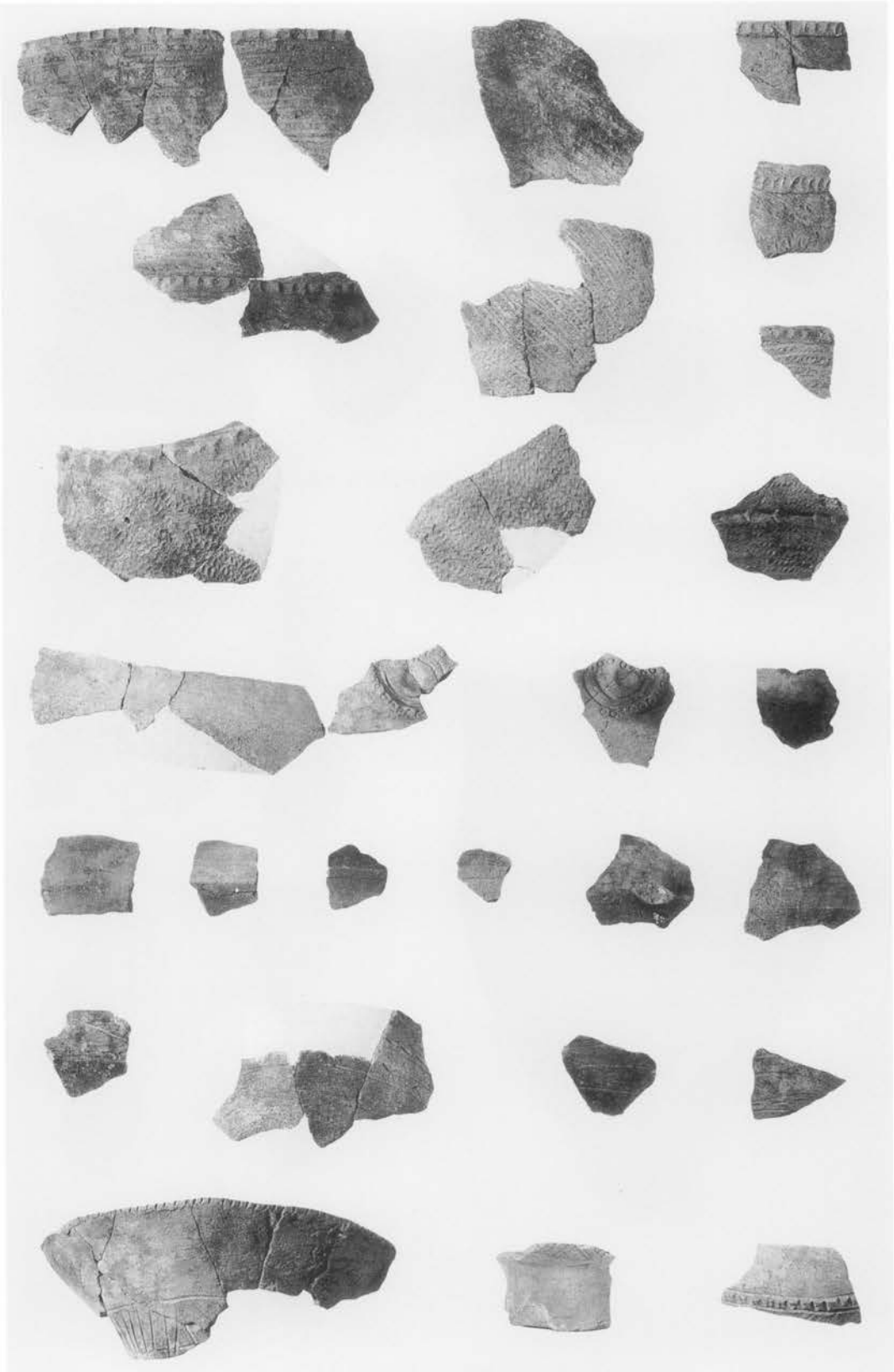
池花南遺跡出土加曽利Ｂ式土器(2)



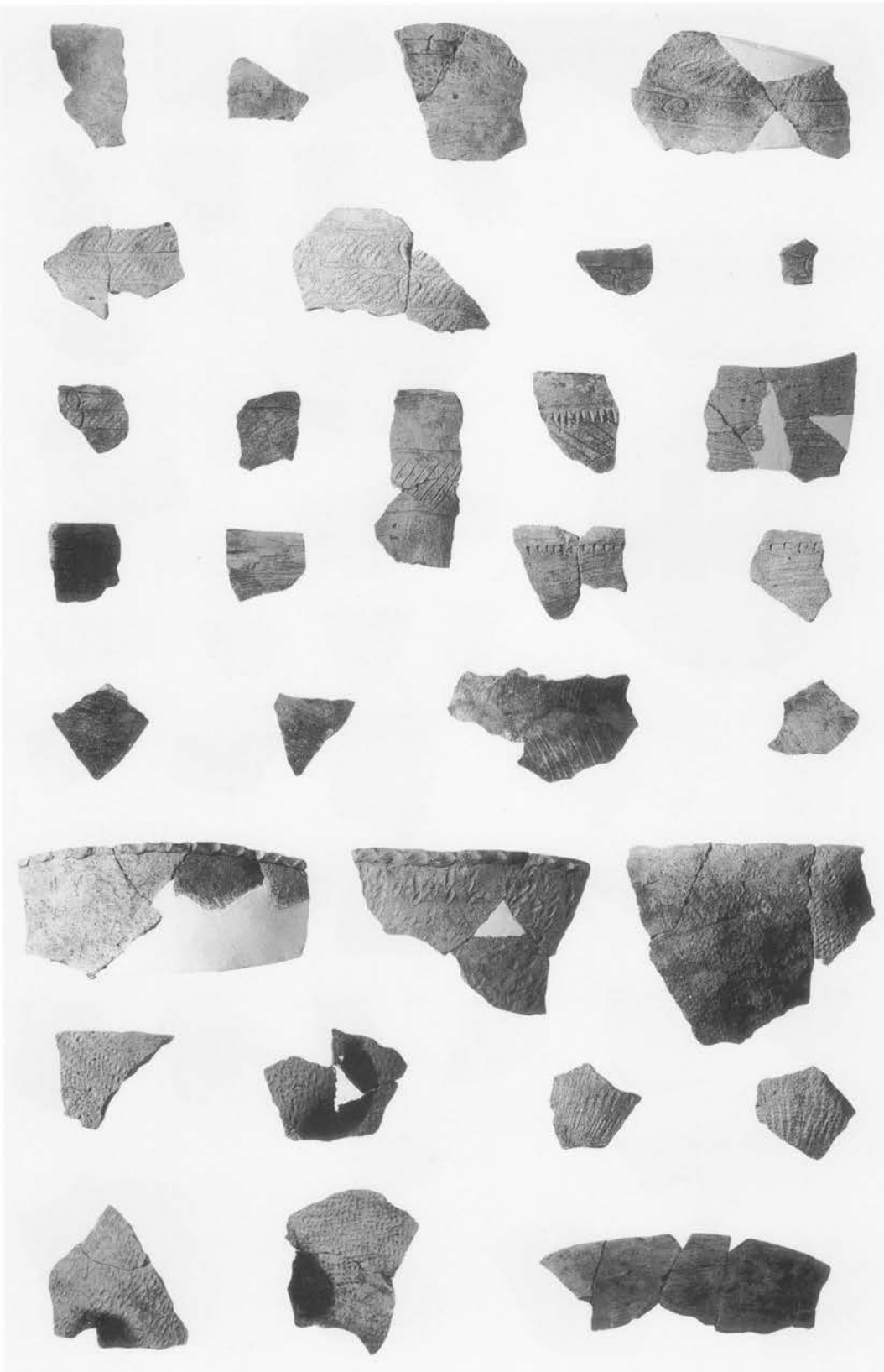
1．池花南遺跡出土加曽利B式土器(3)



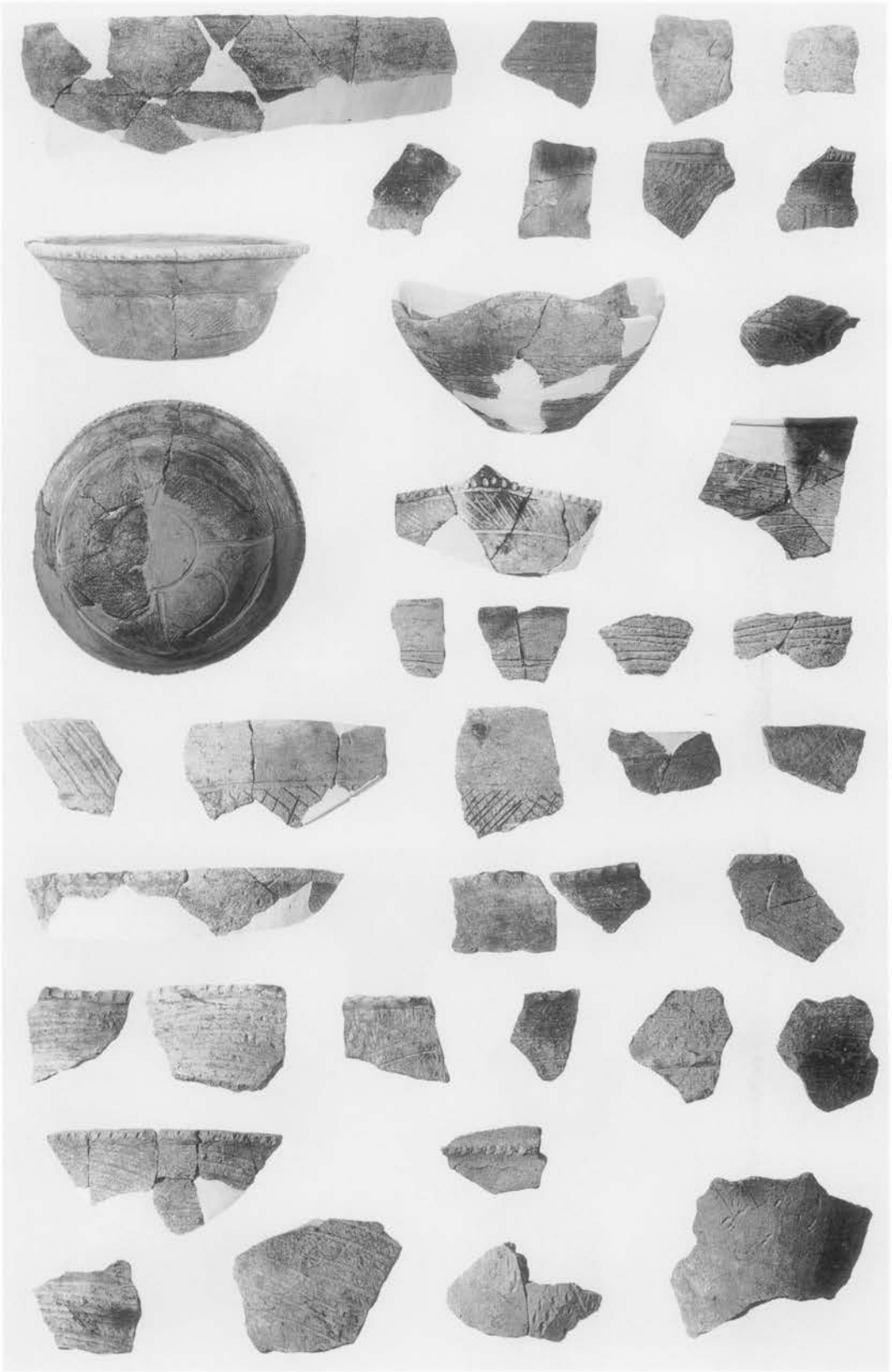
2．池花南遺跡出土加曽利B式土器(4)



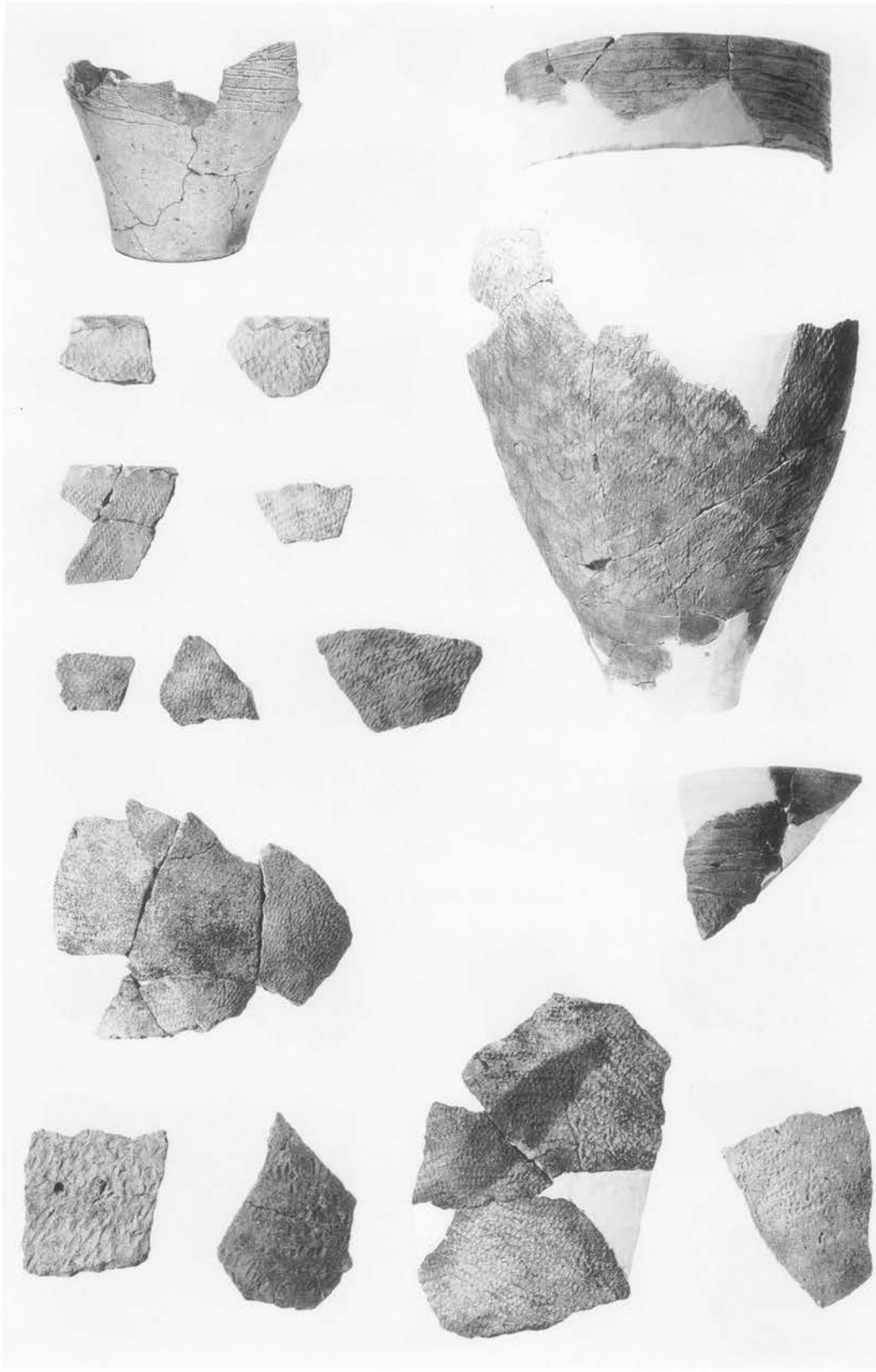
池花南遺跡出土加曽利Ｂ式土器(5)



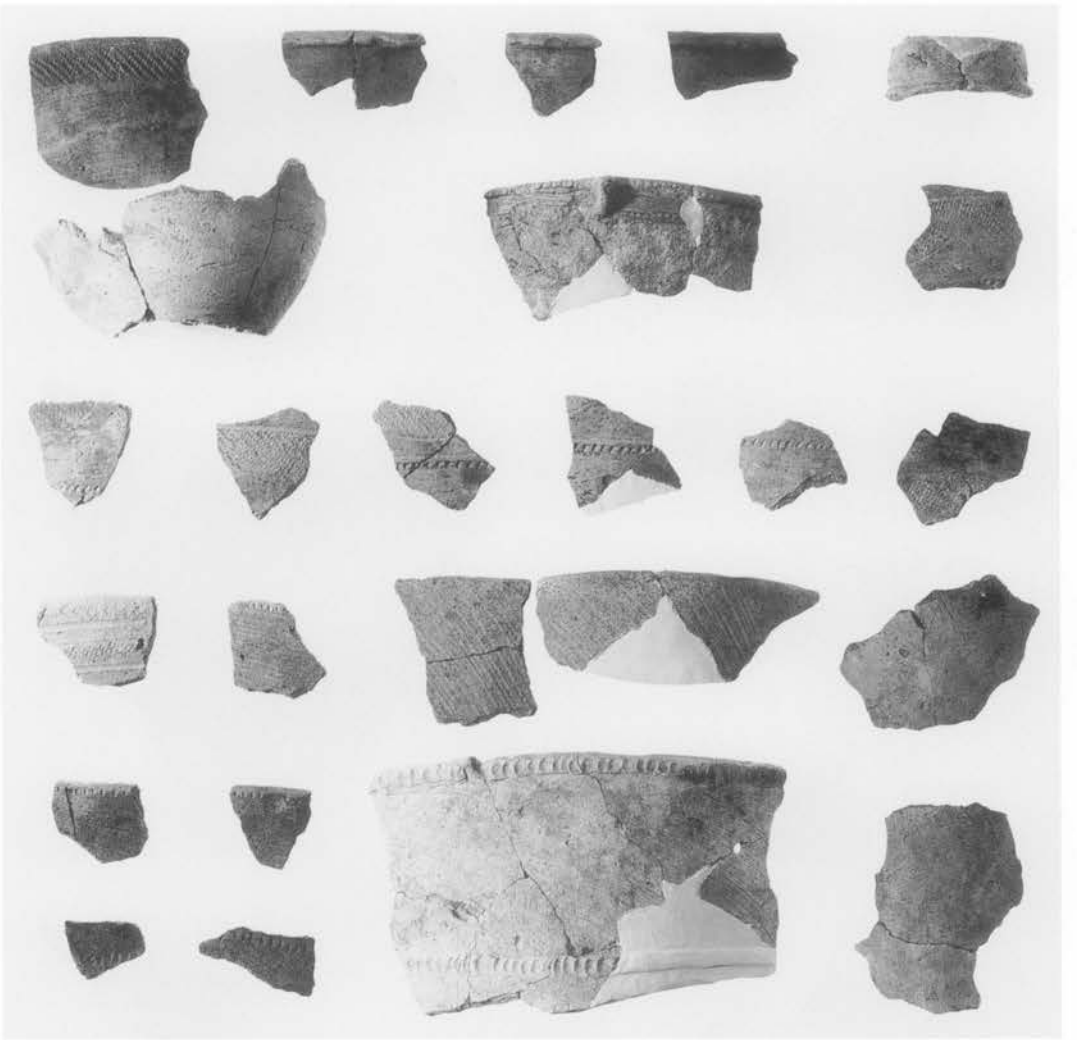
池花南遺跡出土加曽利Ｂ式土器(6)



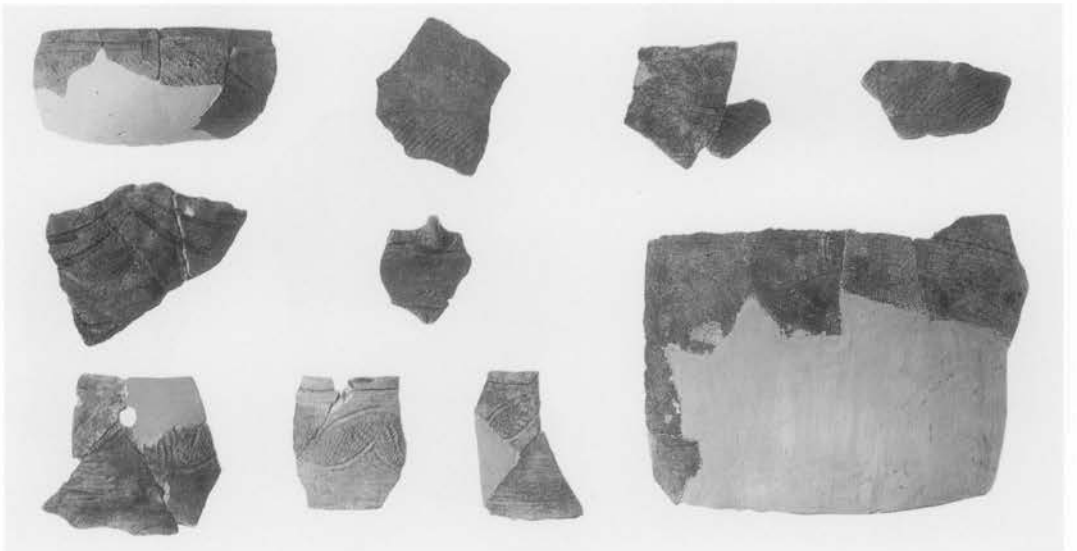
池花南遺跡出土加曽利Ｂ式土器(7)



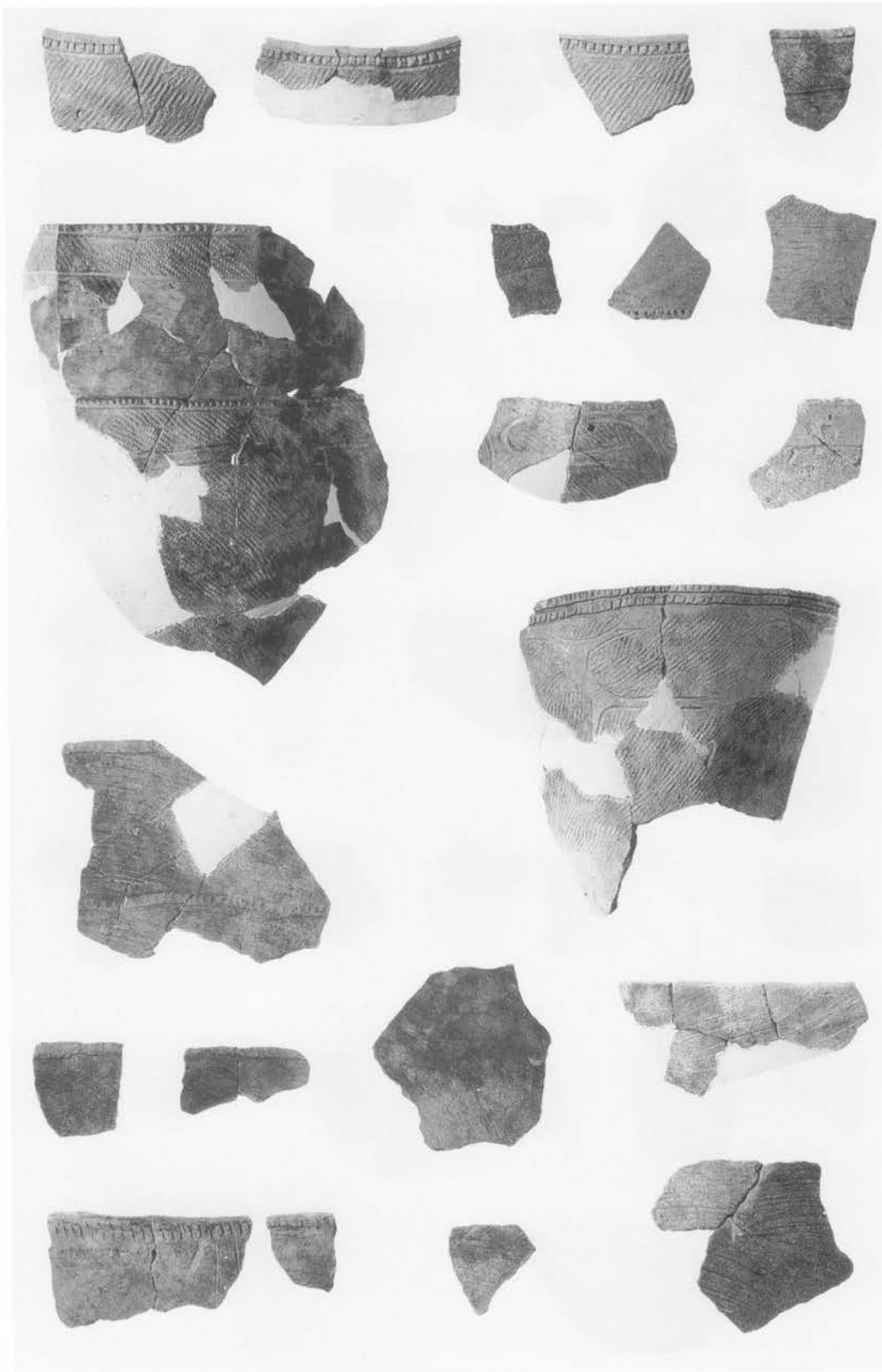
池花南遺跡出土加曽利Ｂ式土器(8)



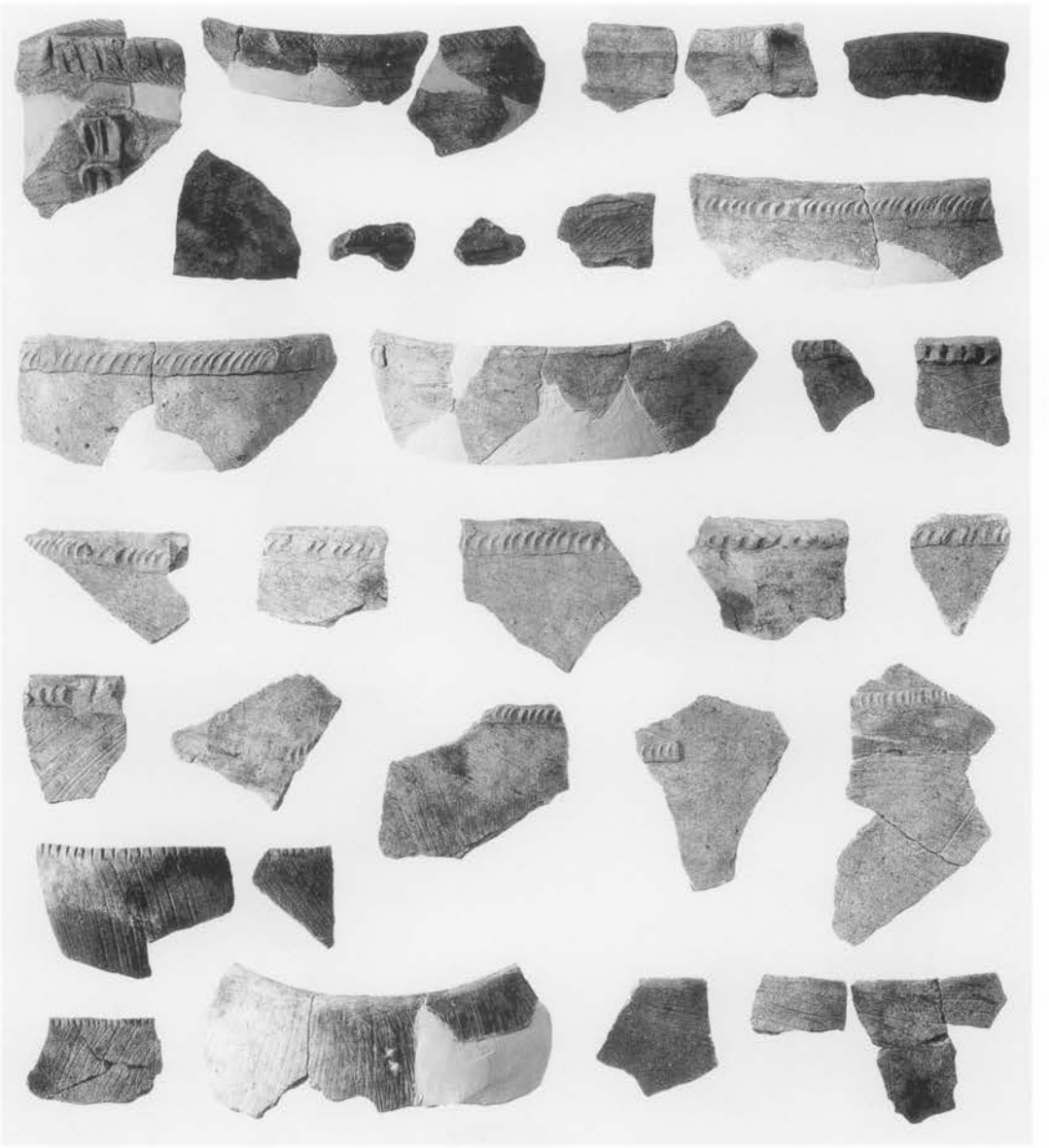
1．池花南遺跡出土曽谷式土器(1)



2．池花南遺跡出土曽谷式土器(2)



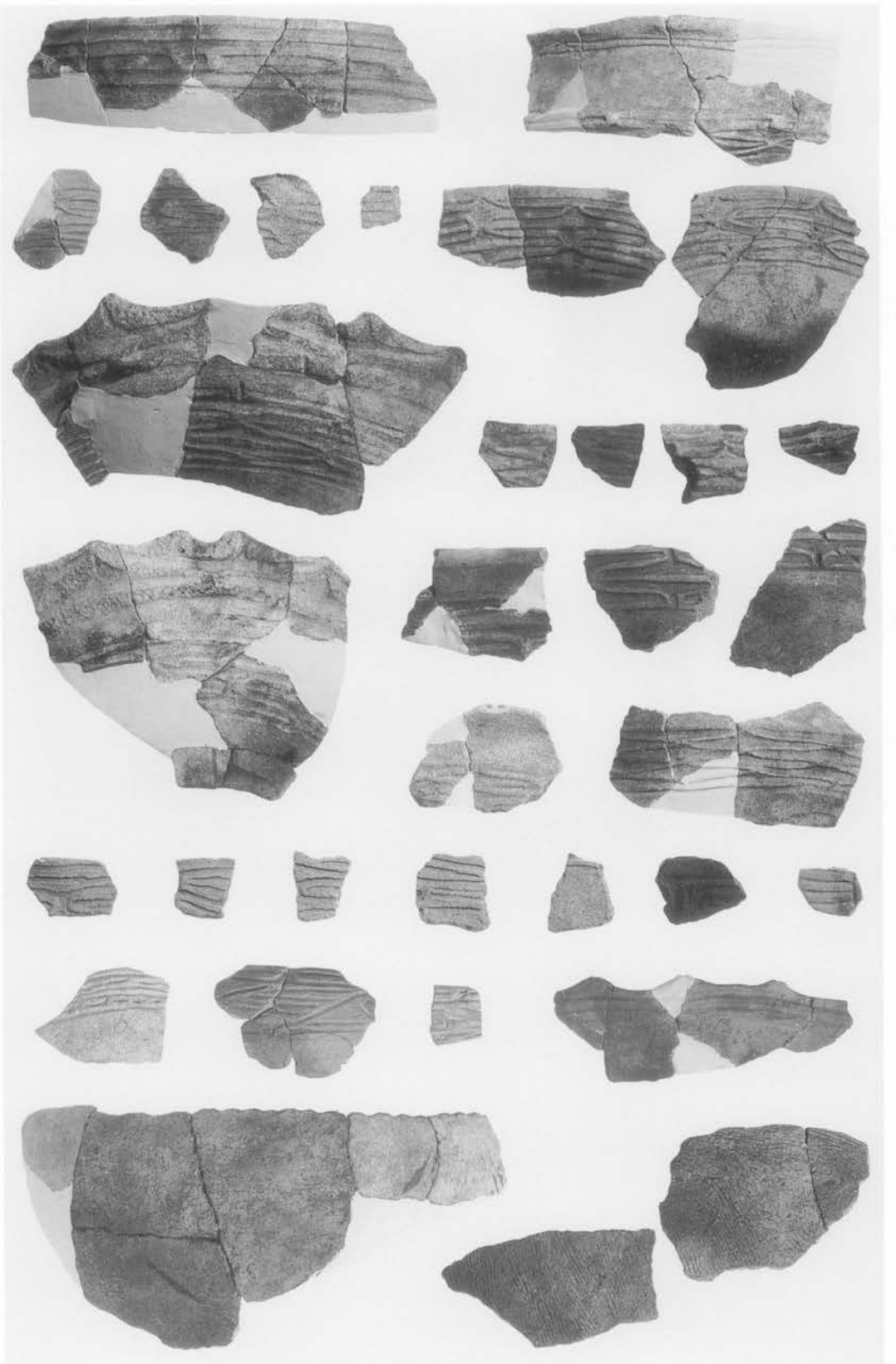
池花南遺跡出土曽谷式土器(3)



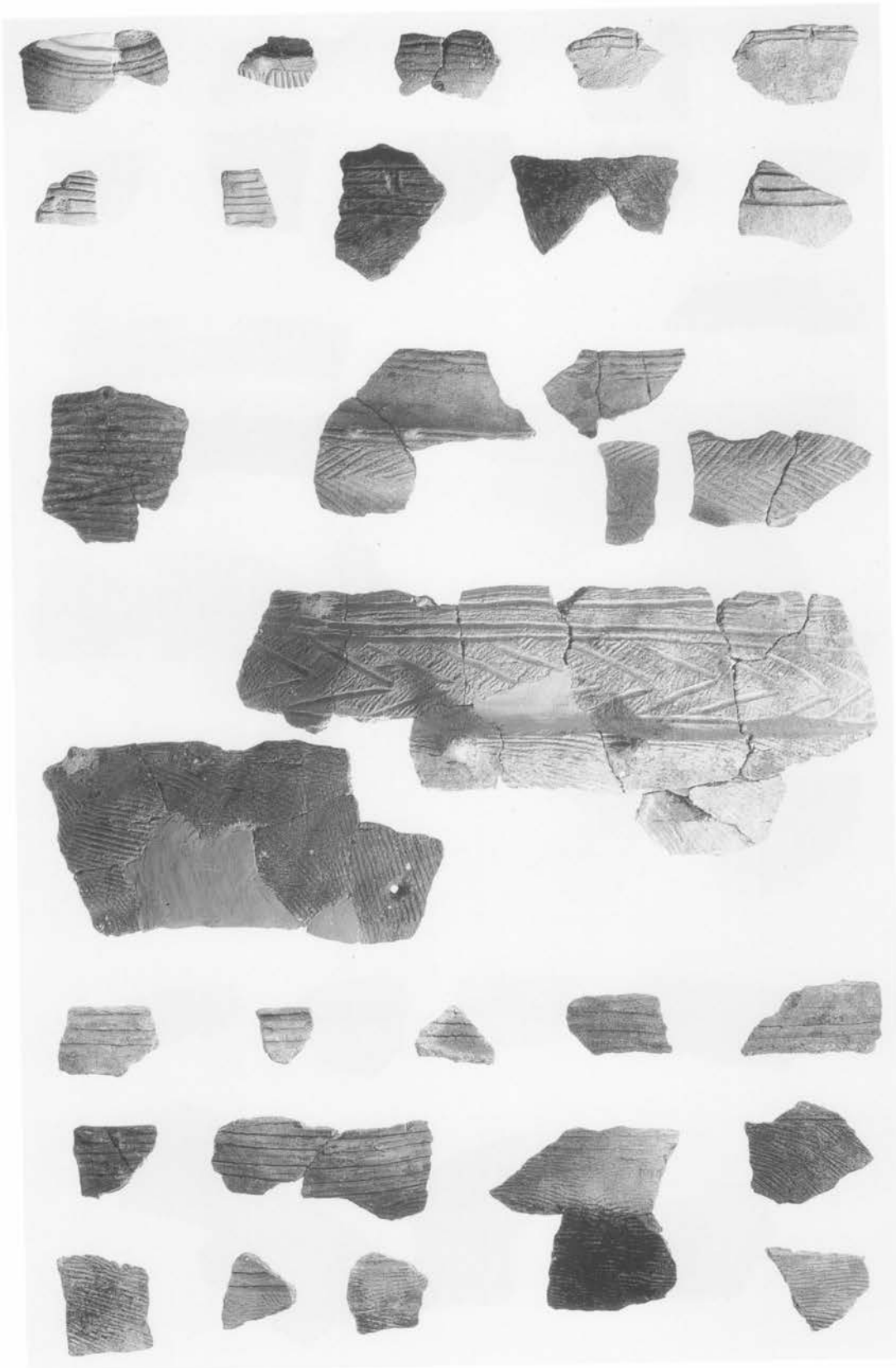
1．池花南遺跡出土安行１式土器

2．各遺跡出土縄文後期後半の土器

池花遺跡出土安行3a式土器



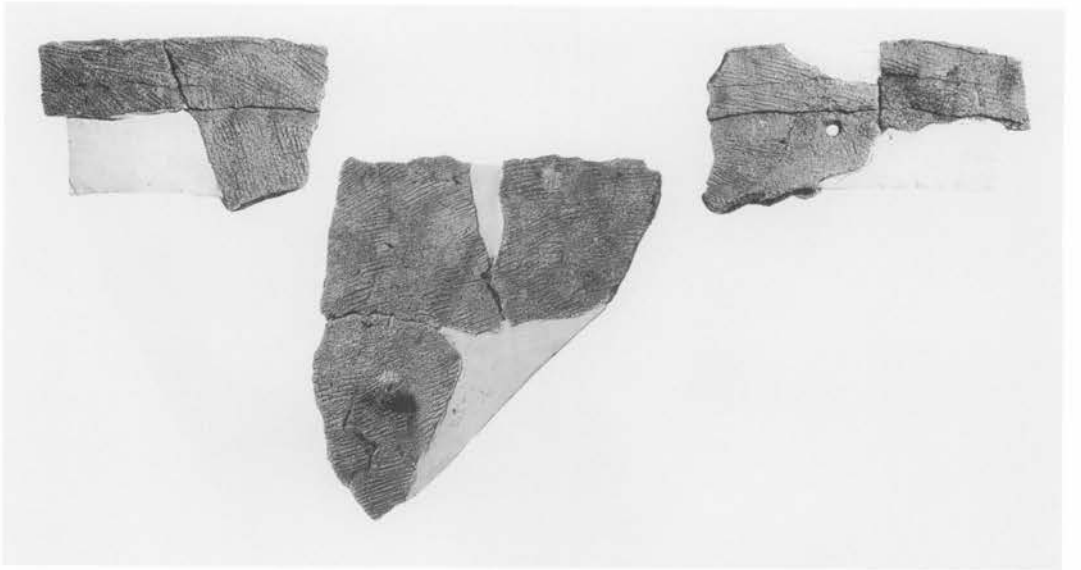
池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(1)



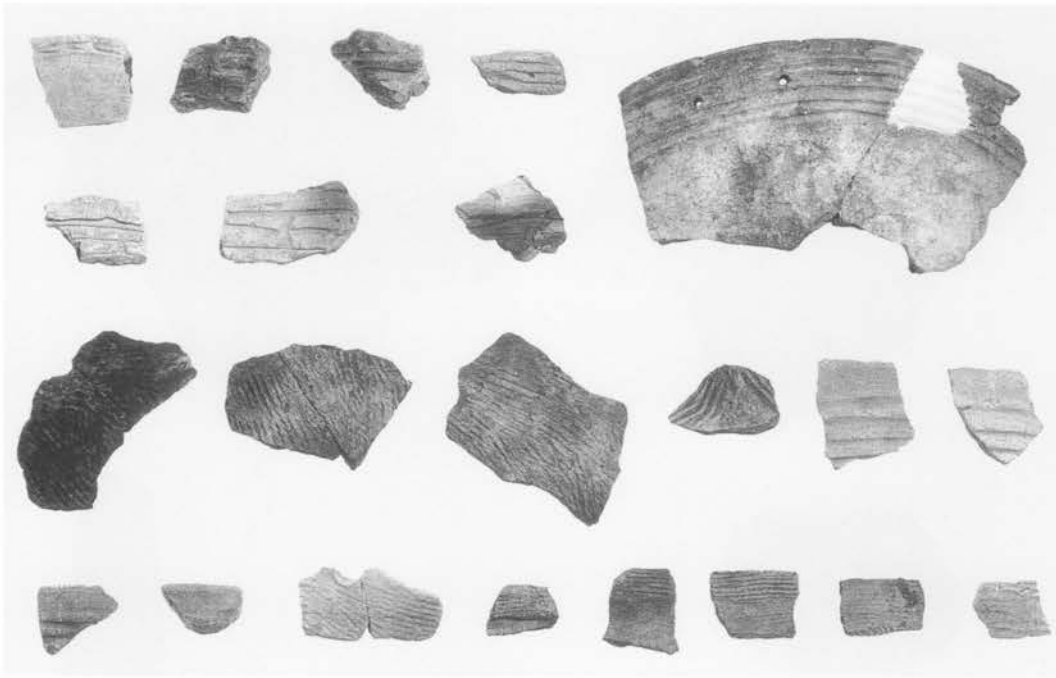
池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(2)

池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(3)

池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(4)



池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(5)

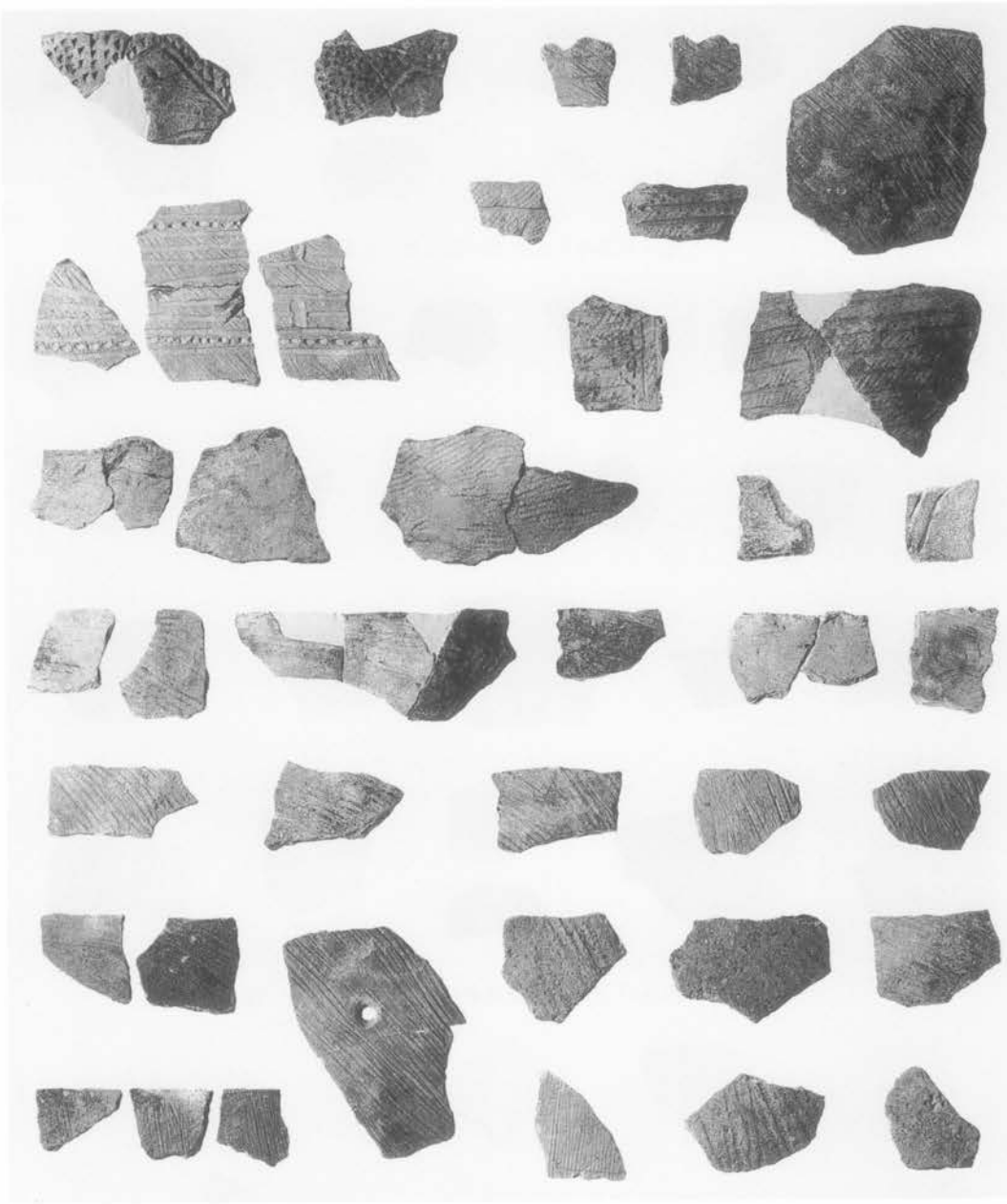


1．池花南遺跡出土縄文晩期後葉の土器(6)

2．池花南遺跡出土縄文晩期赤色顔料充填土器

3．池花南遺跡出土土器

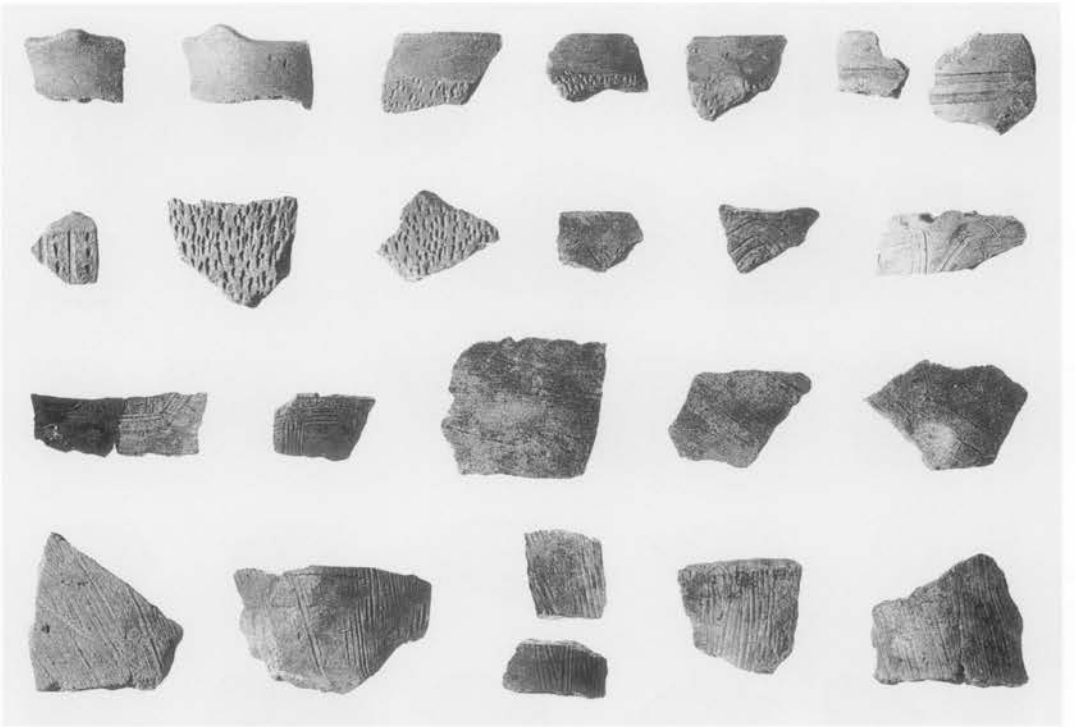
池花南遺跡出土土偶・石剣・玉類



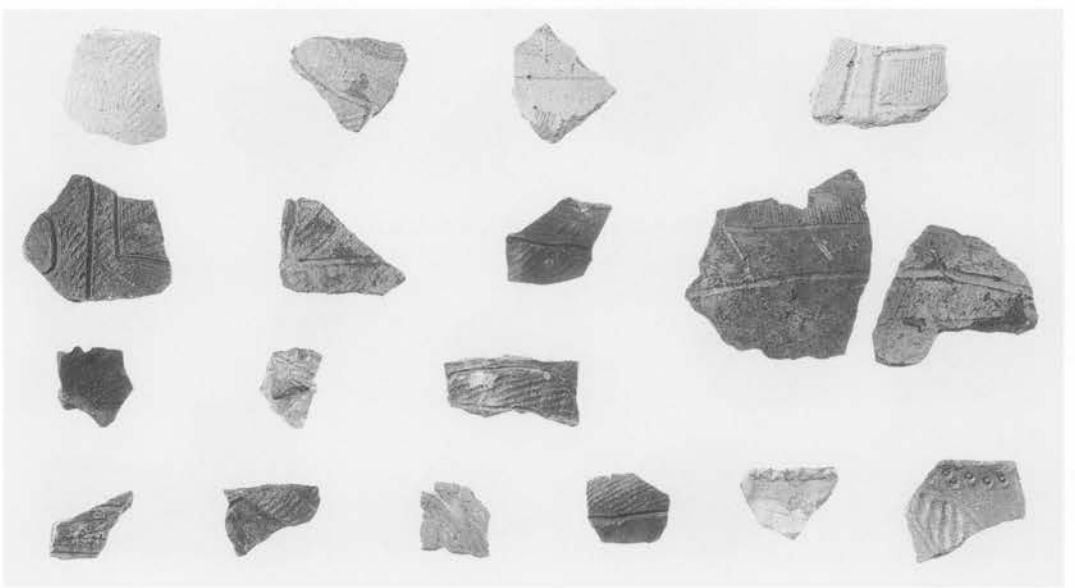
1．池花遺跡 D1･E1 区出土縄文晩期末葉の土器

2．池花遺跡出土縄文晩期末葉の土器（底部・他）

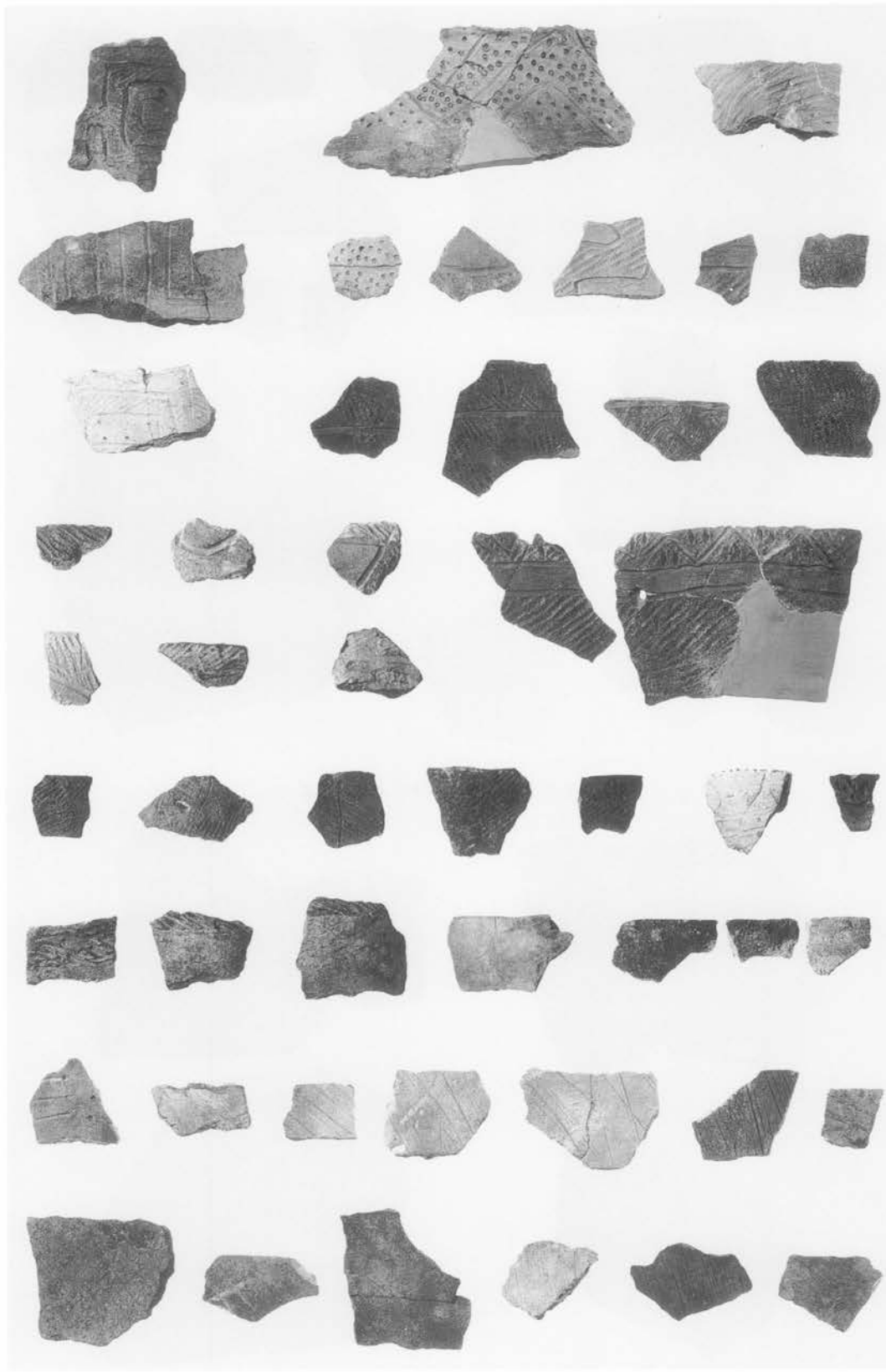
1．池花南遺跡出土縄文晩期末葉の土器(1)



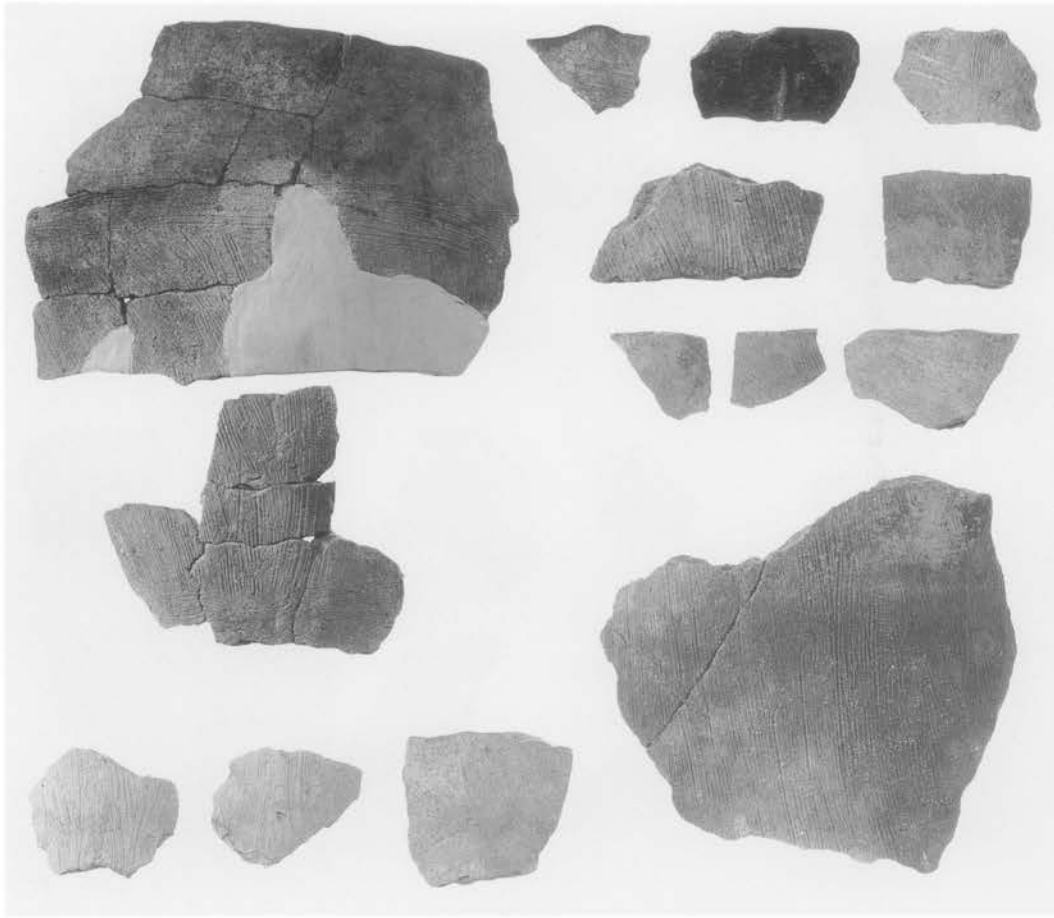
2．池花遺跡C1区出土縄文晩期末～弥生時代初頭の土器



3．池花遺跡D2区西半部出土弥生中期前半の土器

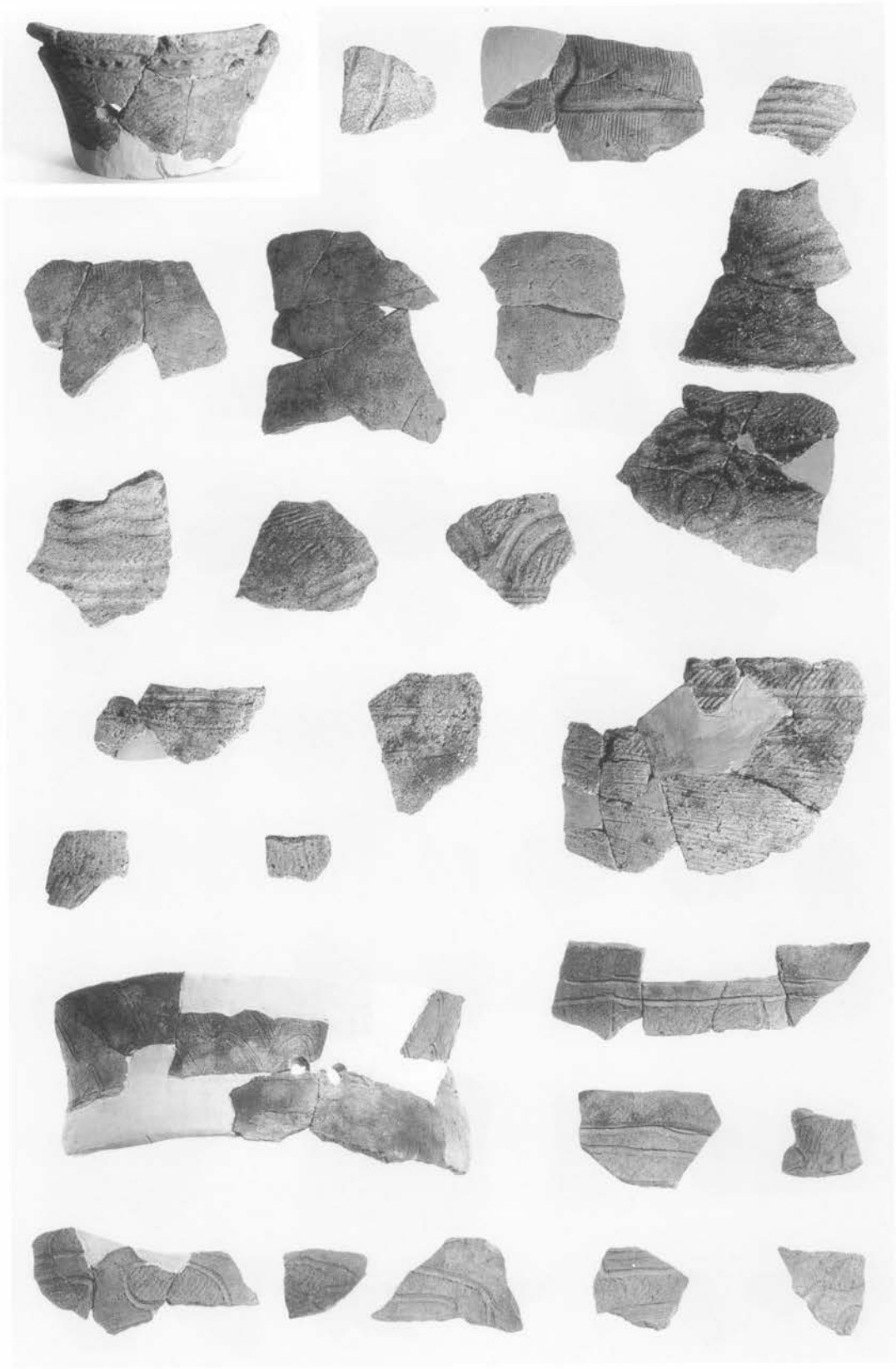


池花遺跡 D2・E2 区出土弥生中期前半の土器

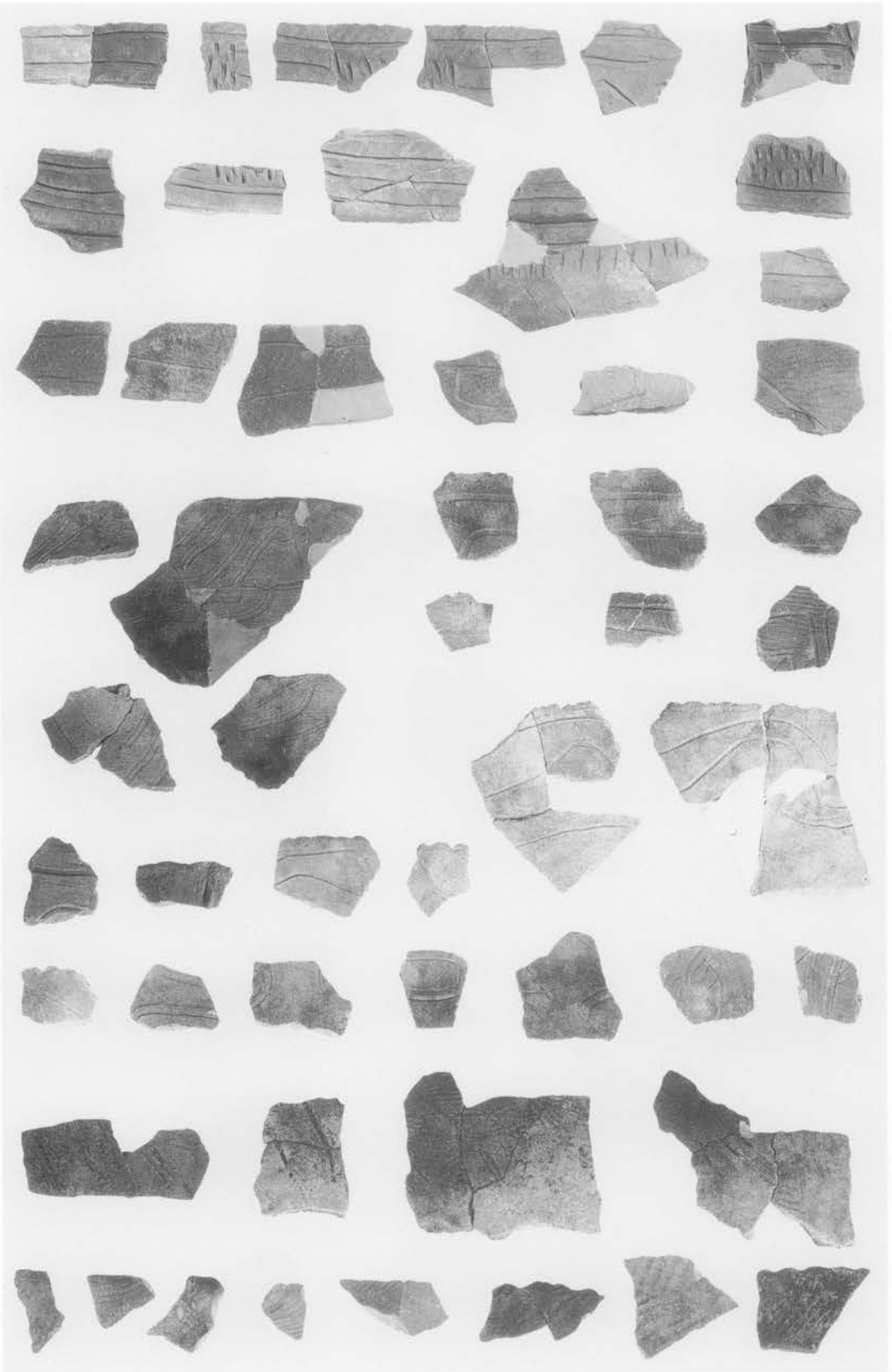


1．池花南遺跡出土縄文晩期末葉の土器(2)

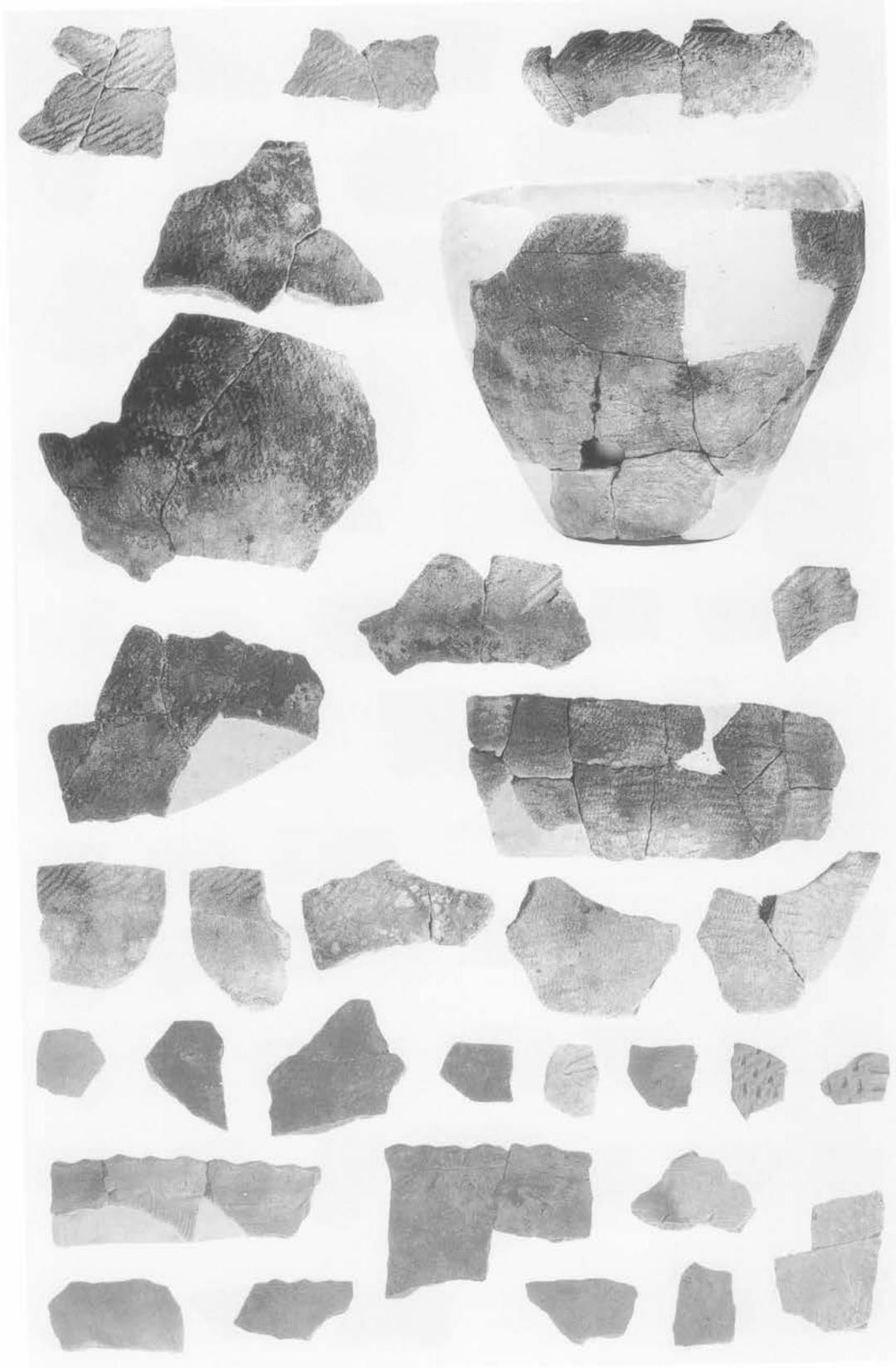
2．池花南遺跡出土弥生中期前半の土器(1)



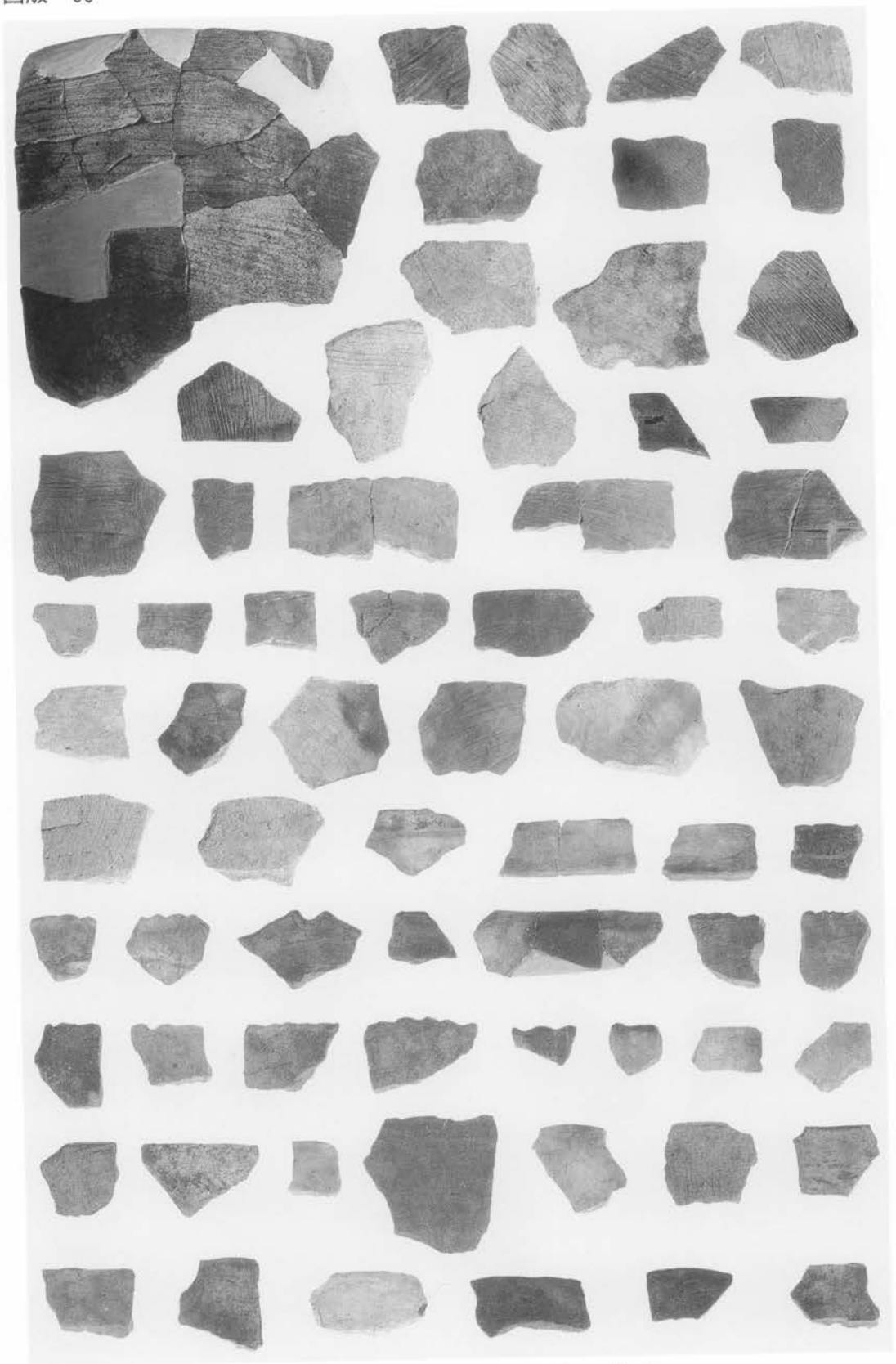
池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(2)



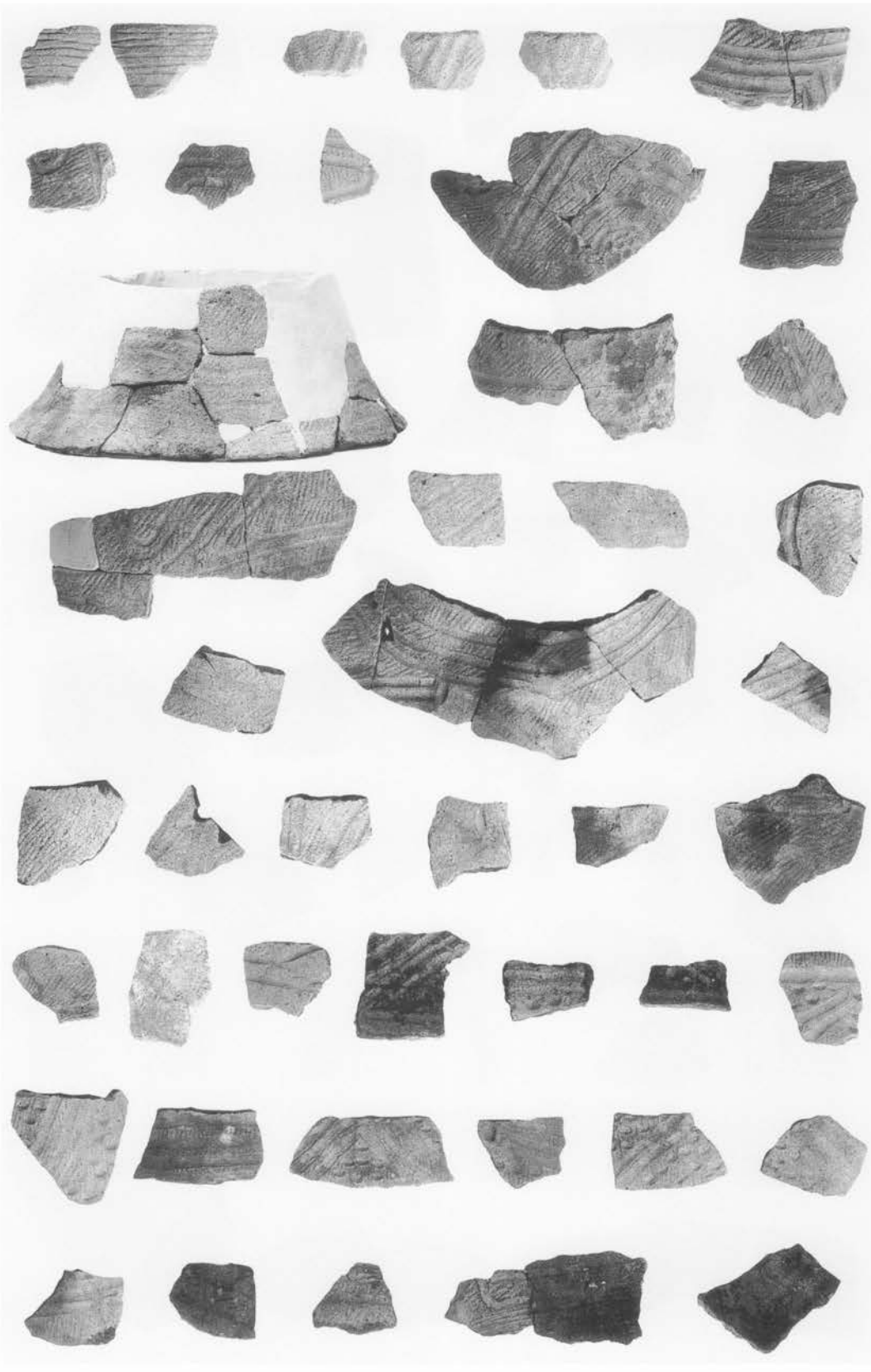
池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(3)



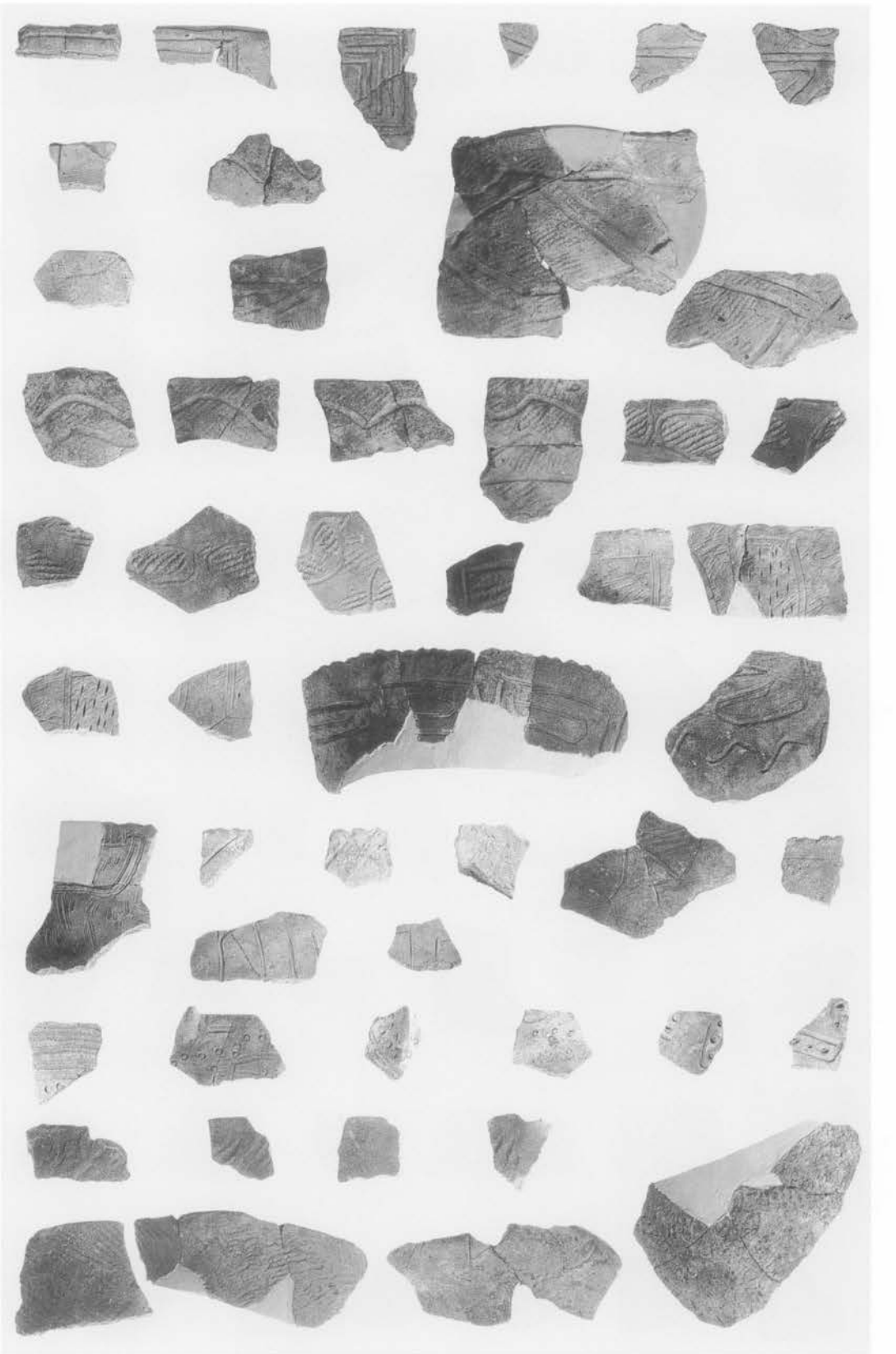
池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(4)



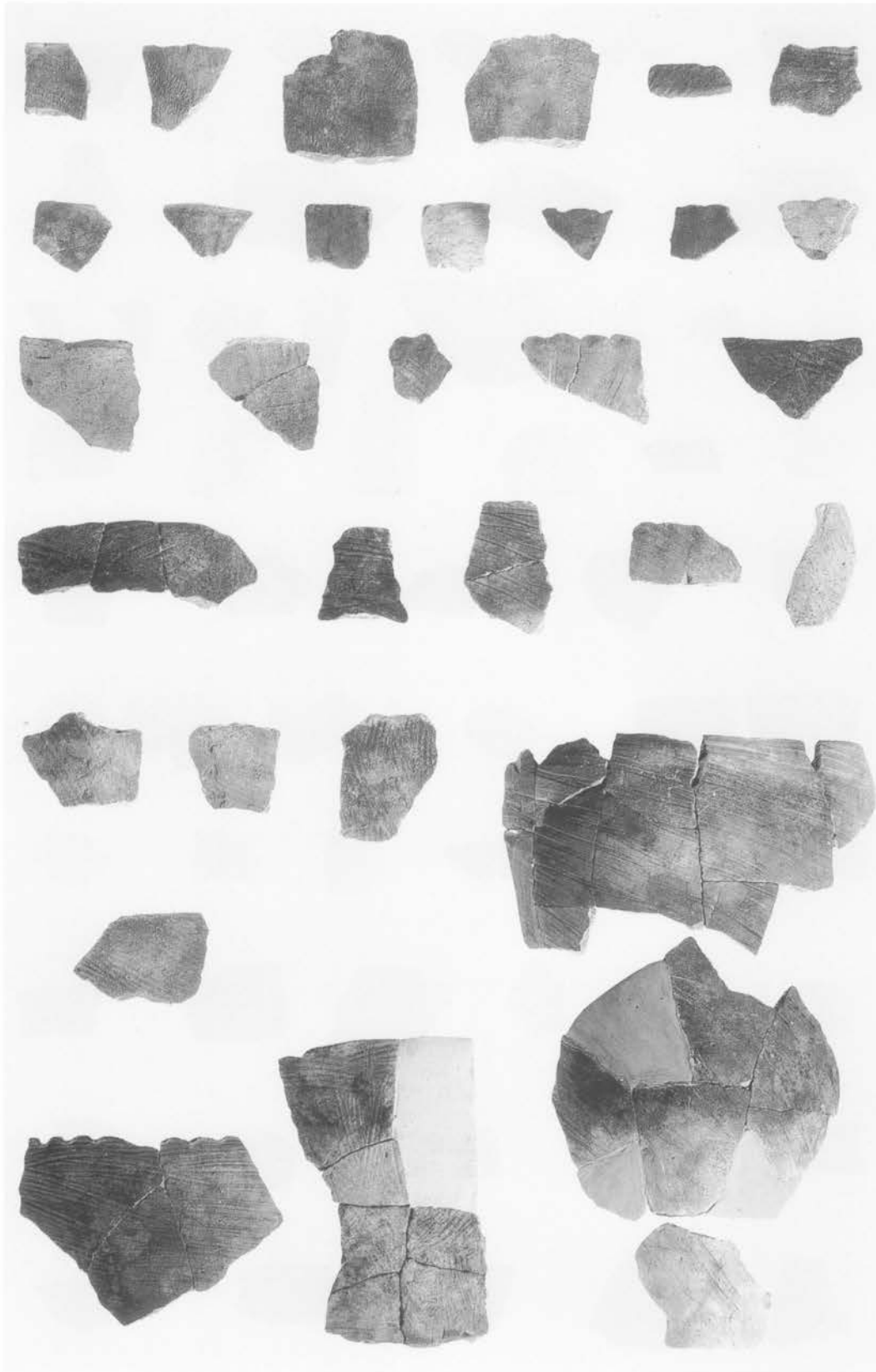
池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(5)



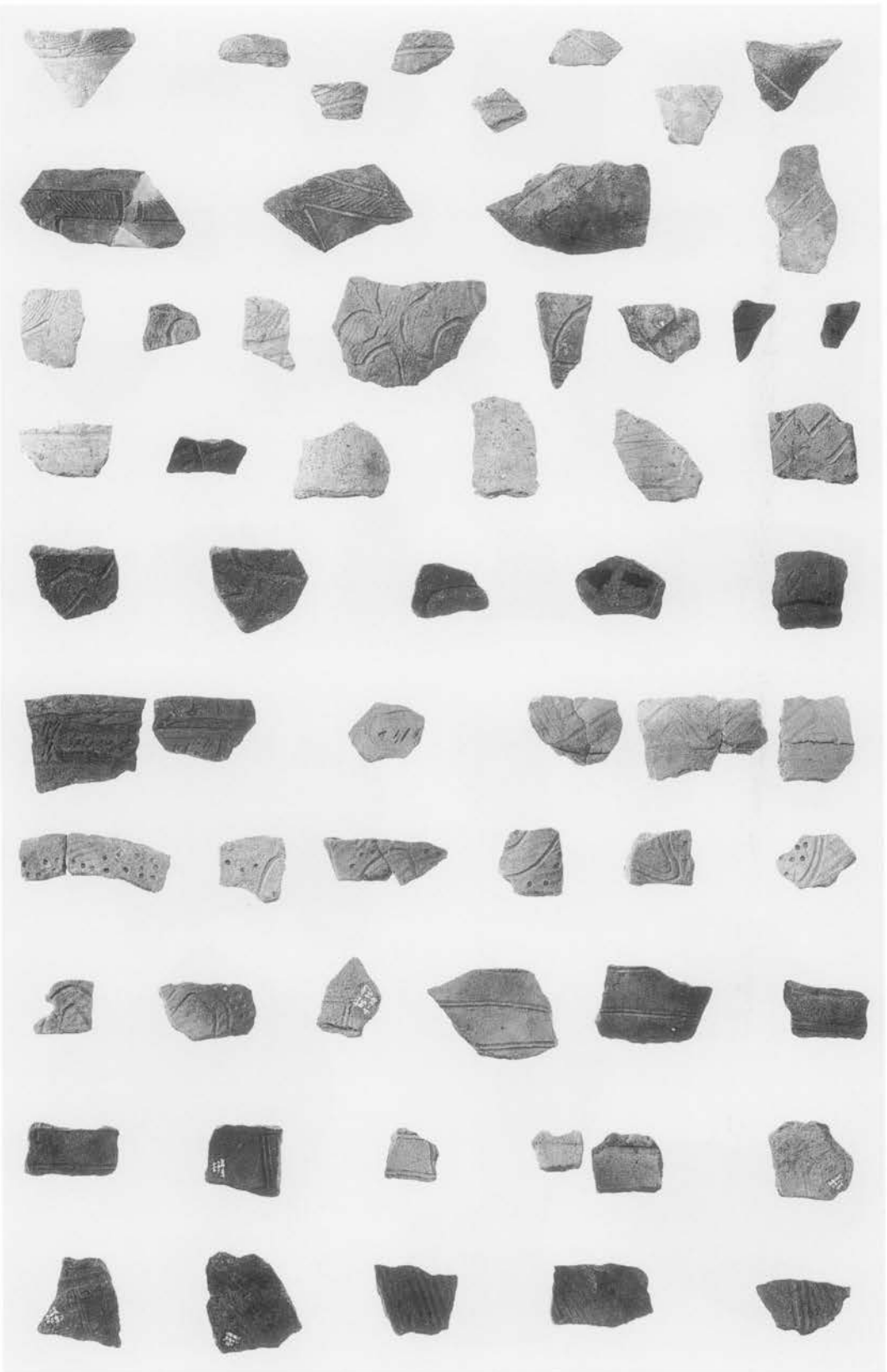
池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(6)



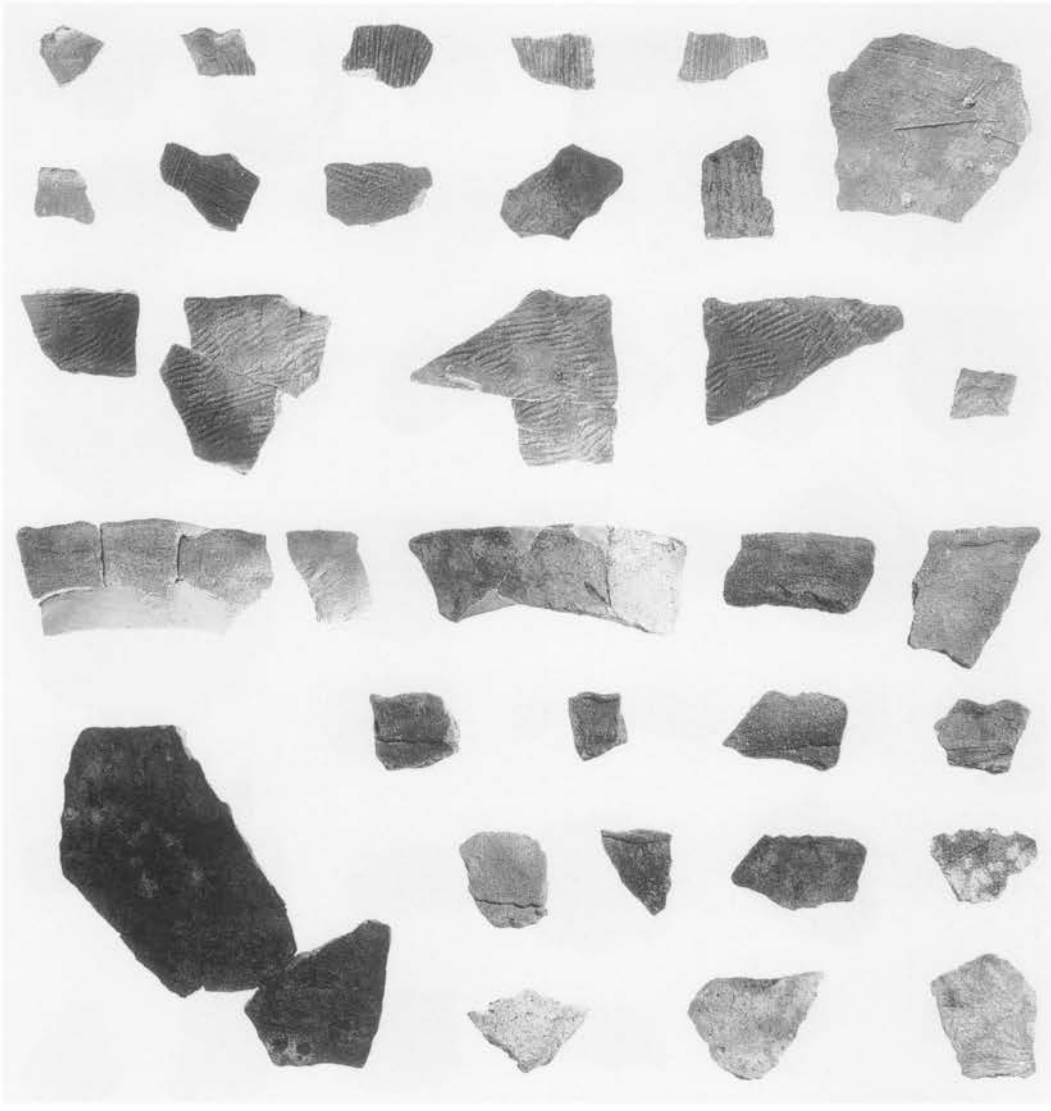
池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(7)



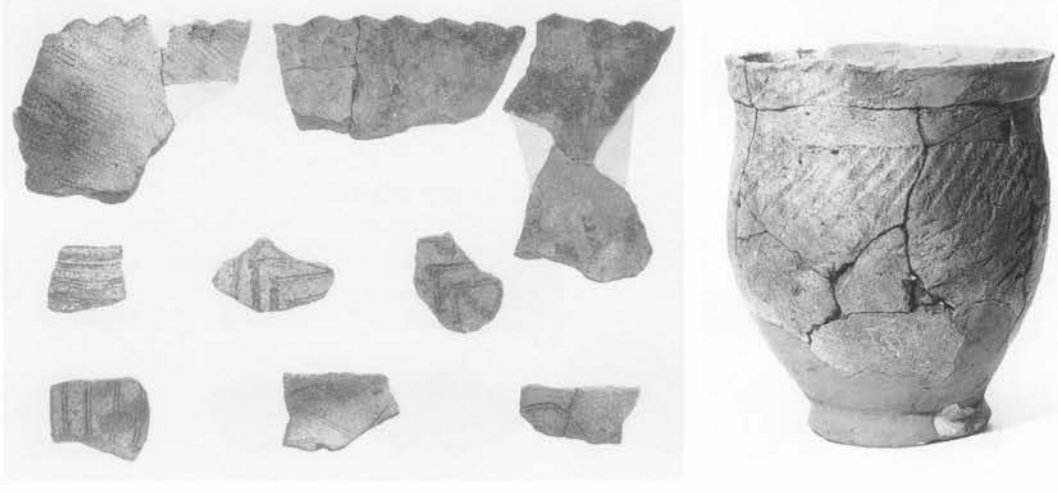
池花南遺跡南半部出土弥生中期前半の土器(8)



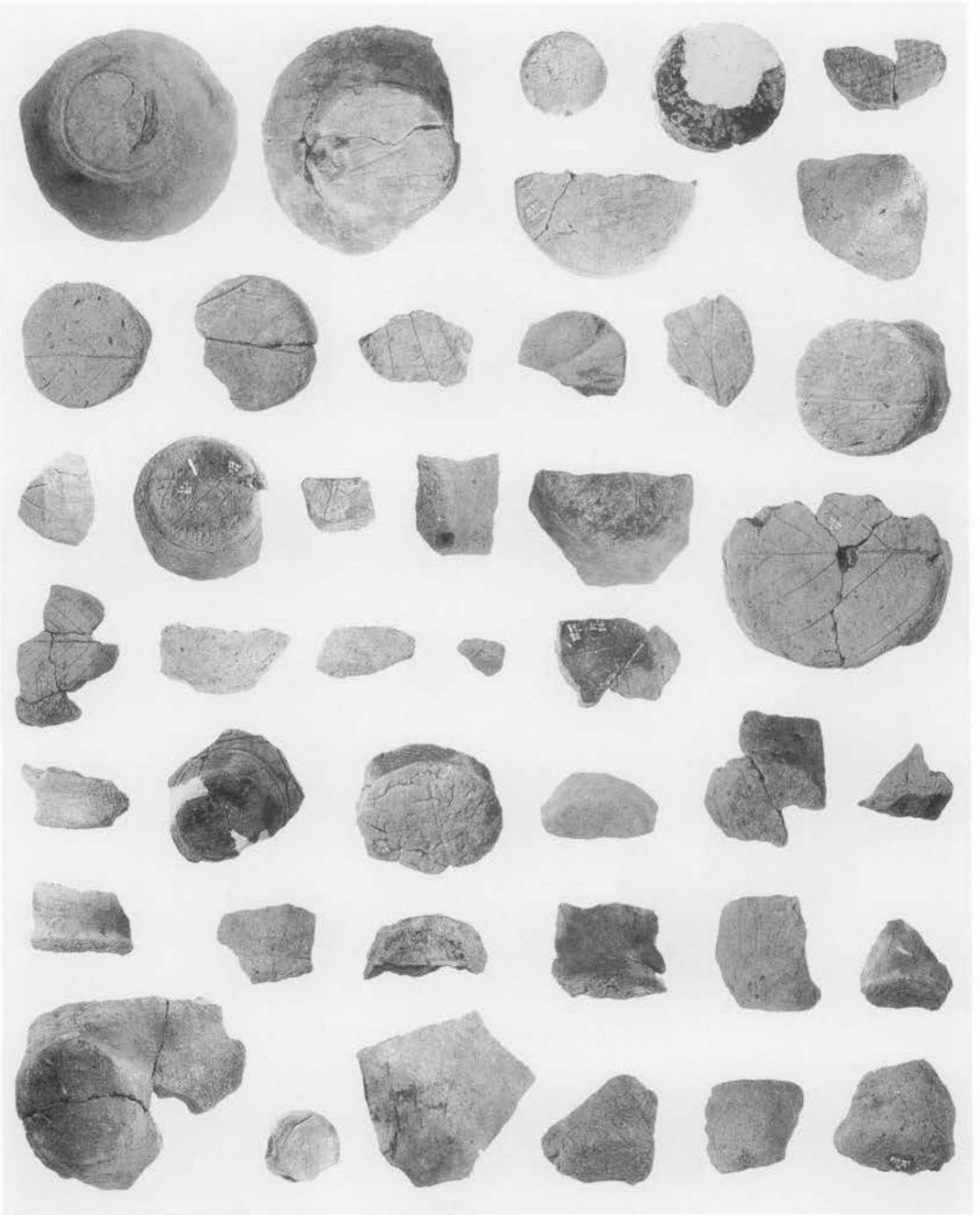
池花南遺跡北半部出土弥生中期前半の土器(1)



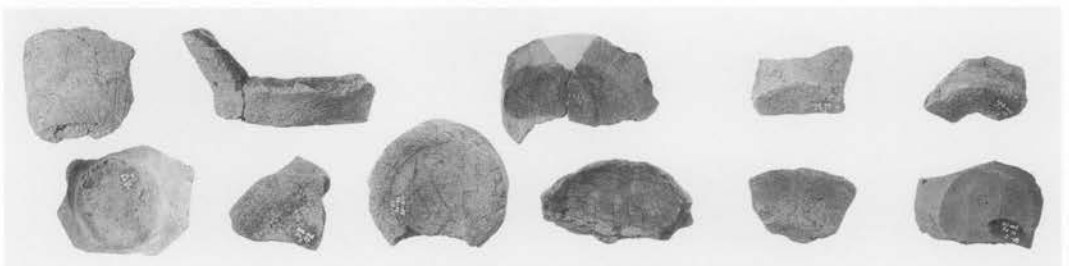
1．池花南遺跡北半部出土弥生中期前半の土器(2)



2．池花南遺跡出土弥生中期後半の土器



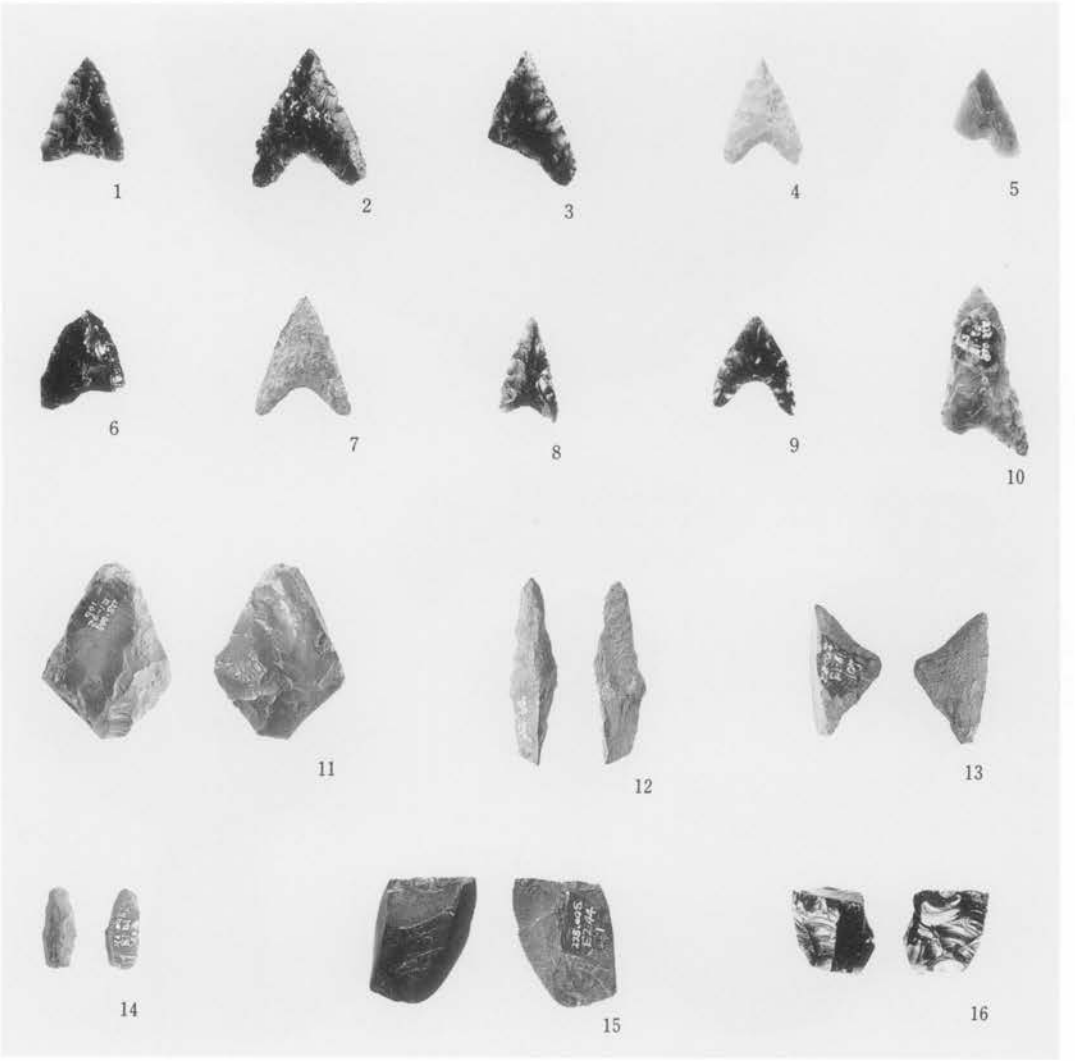
1．池花南遺跡出土縄文・弥生土器底部



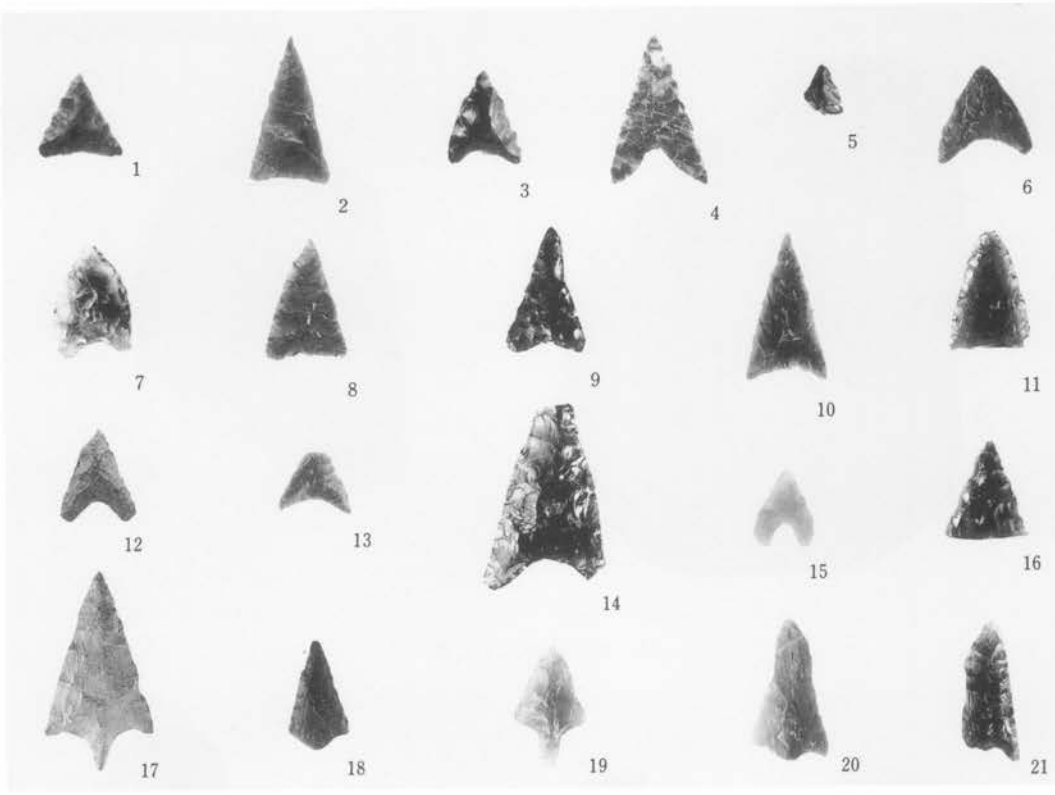
2．池花遺跡出土弥生土器底部

池花遺跡出土古墳時代前期の土器

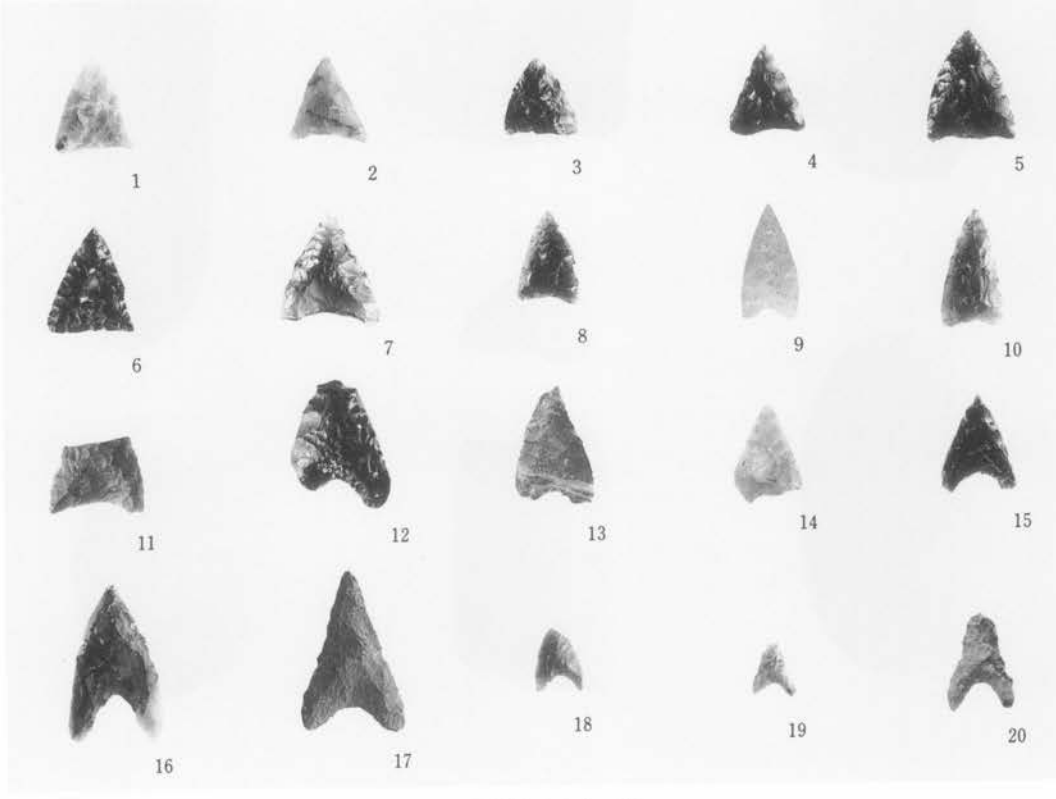
1．有舌尖頭器



2．池花遺跡出土石鏃・石錐・楔形石器

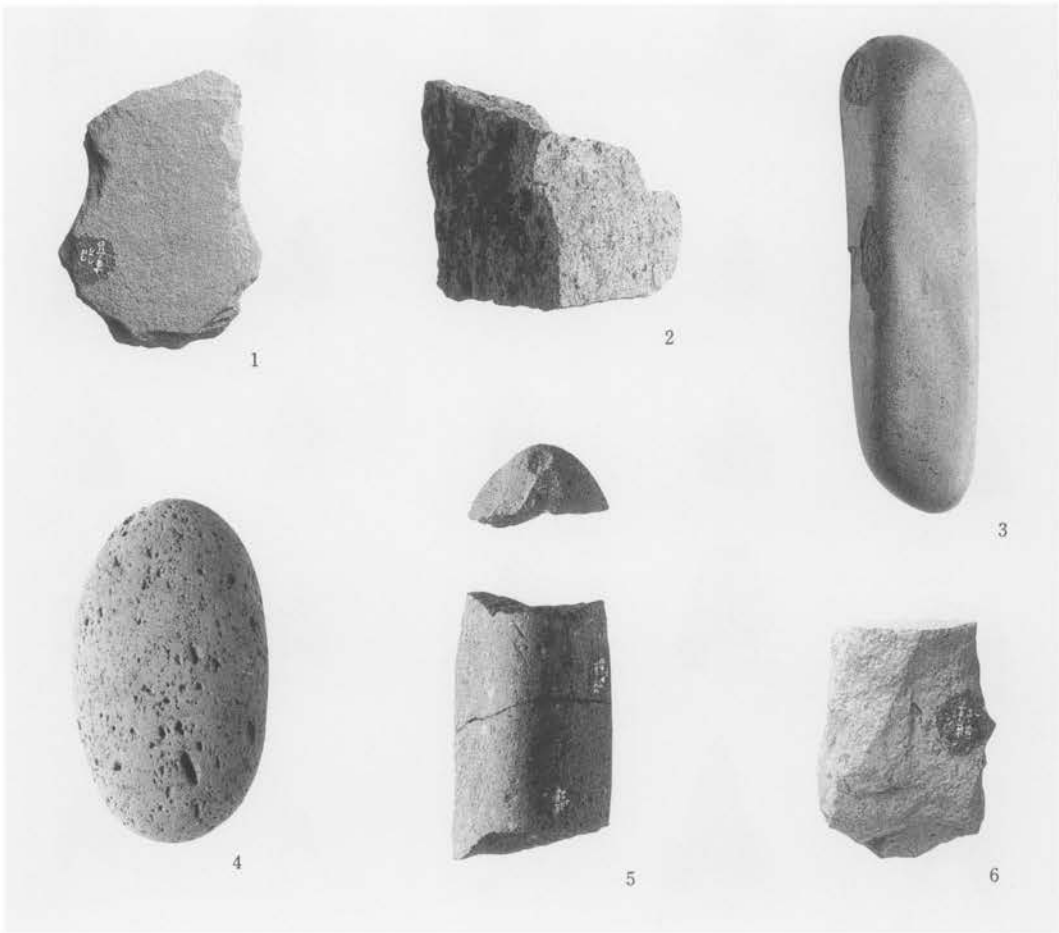


1．池花南遺跡出土石鏃

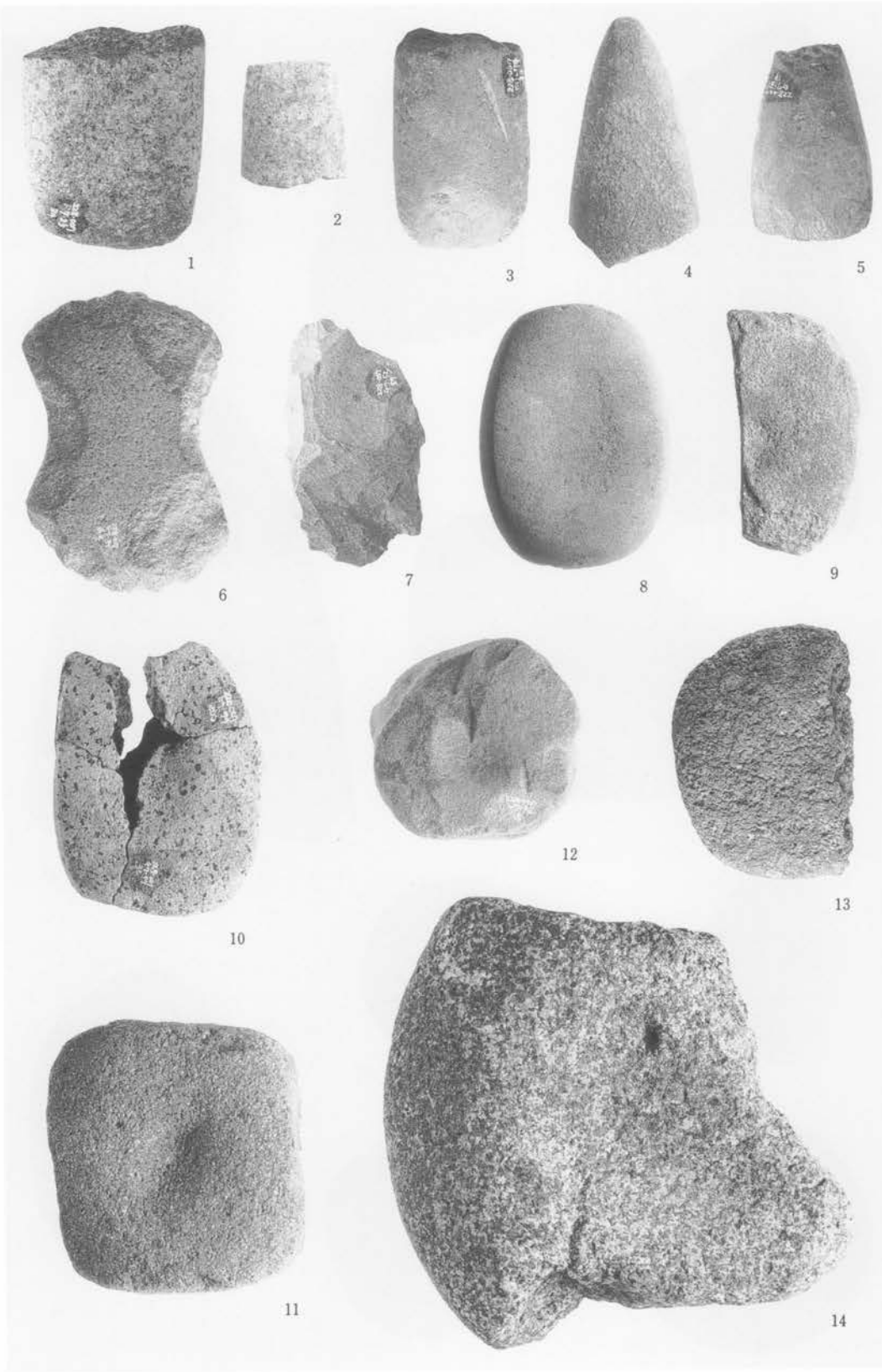


2．大割遺跡出土石鏃

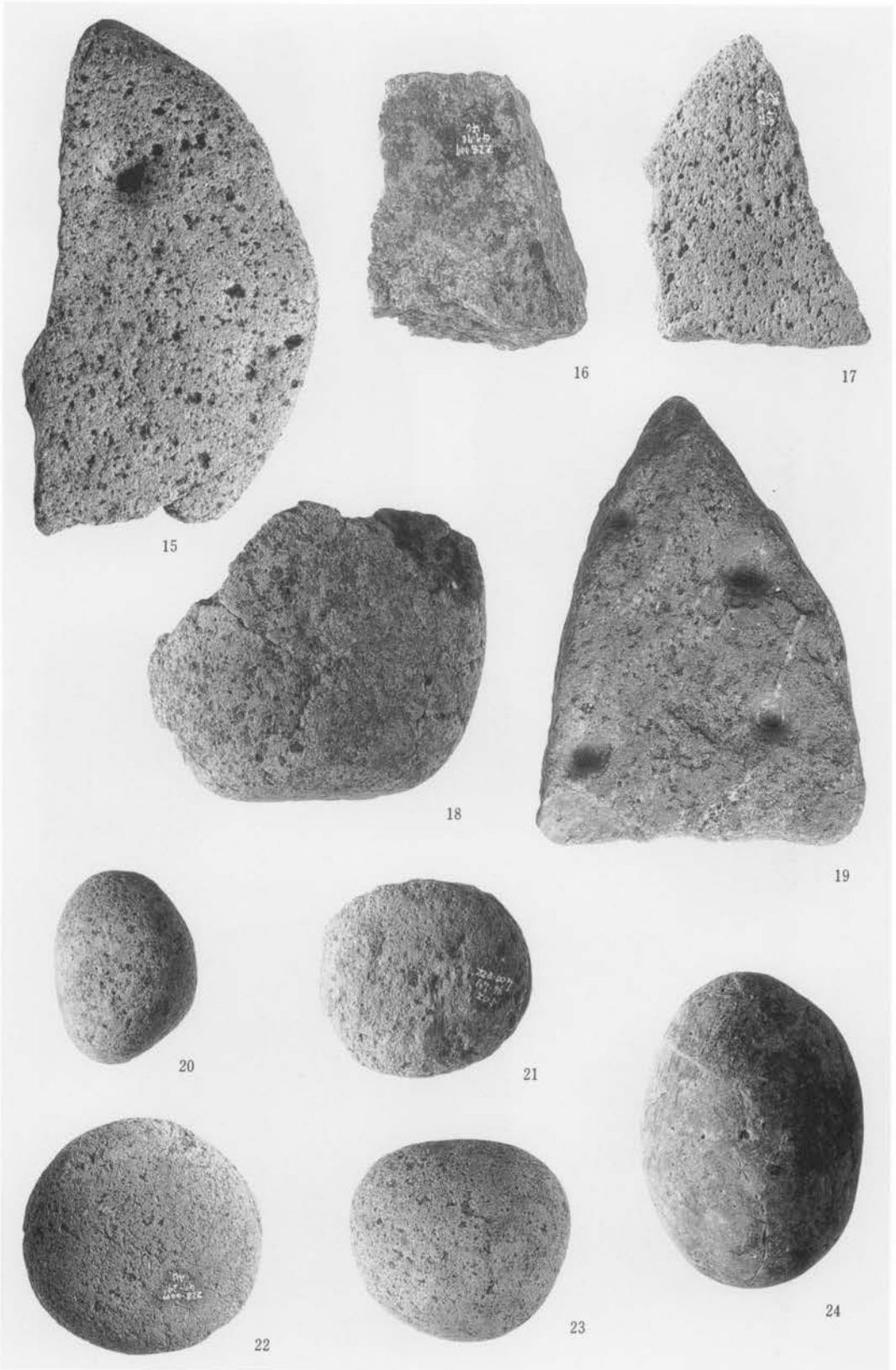
1．池花遺跡出土石器



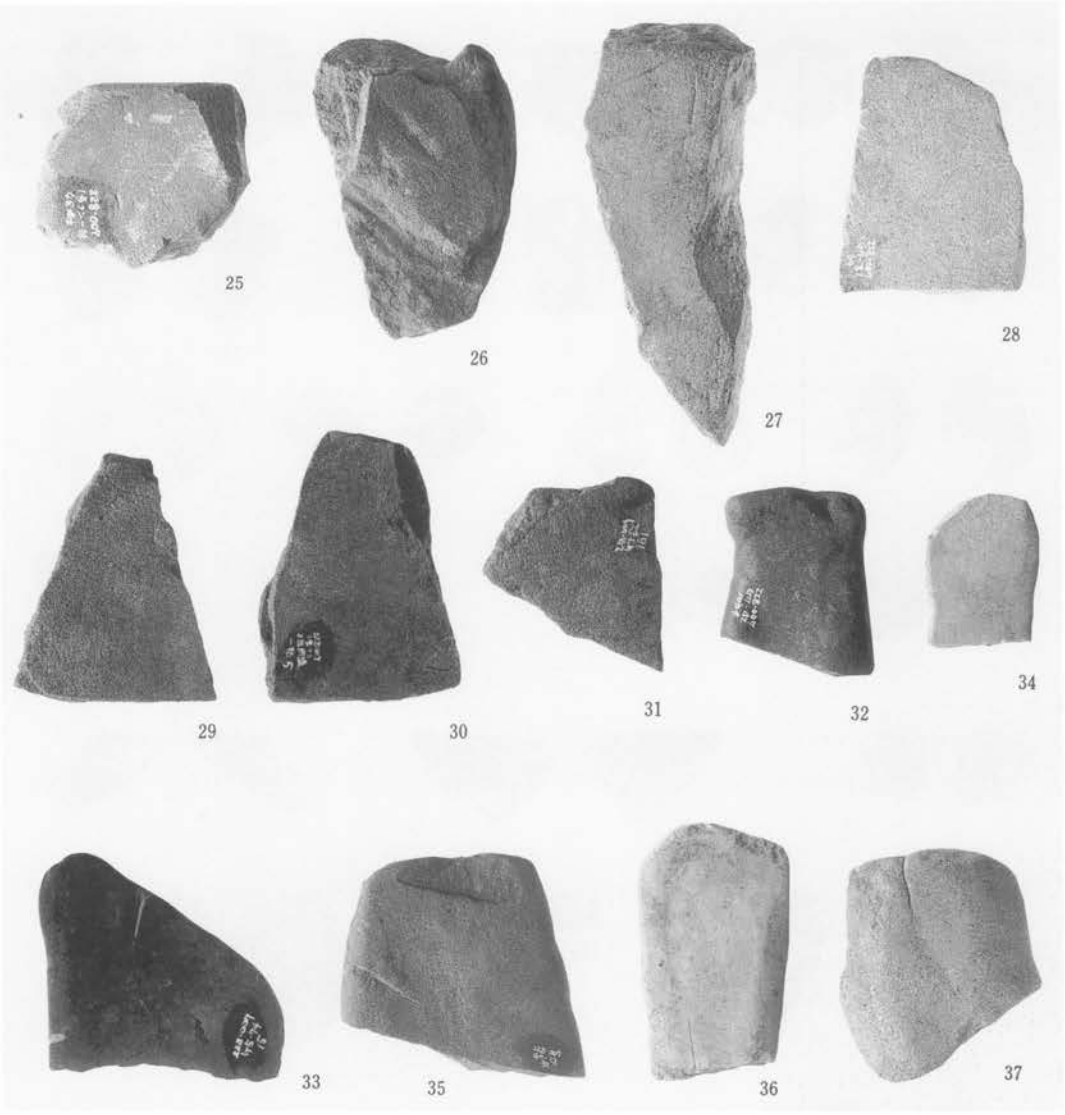
2．大割遺跡出土石器



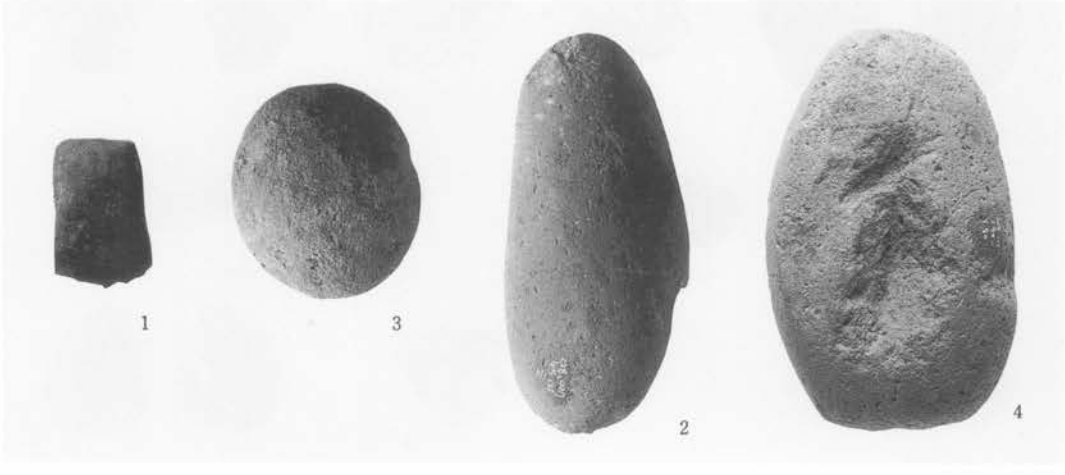
池花南遺跡南半部縄文時代石器(1)



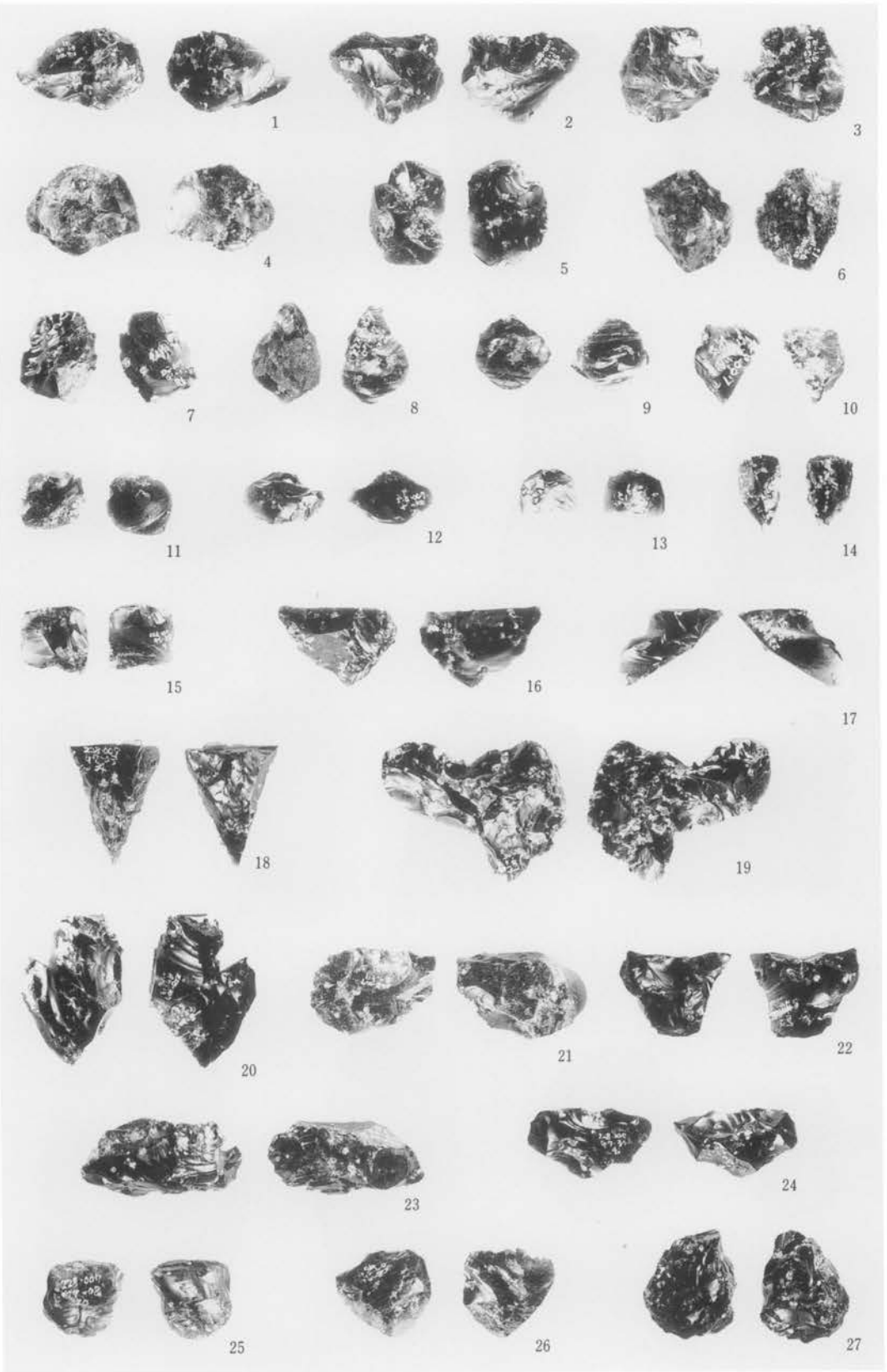
池花南遺跡南半部縄文時代石器(2)



1．池花南遺跡南半部縄文時代石器(3)



2．池花南遺跡北半部縄文時代石器



池花南遺跡黒曜石石器製作址出土石器

1．池花南遺跡古墳群（北半部）

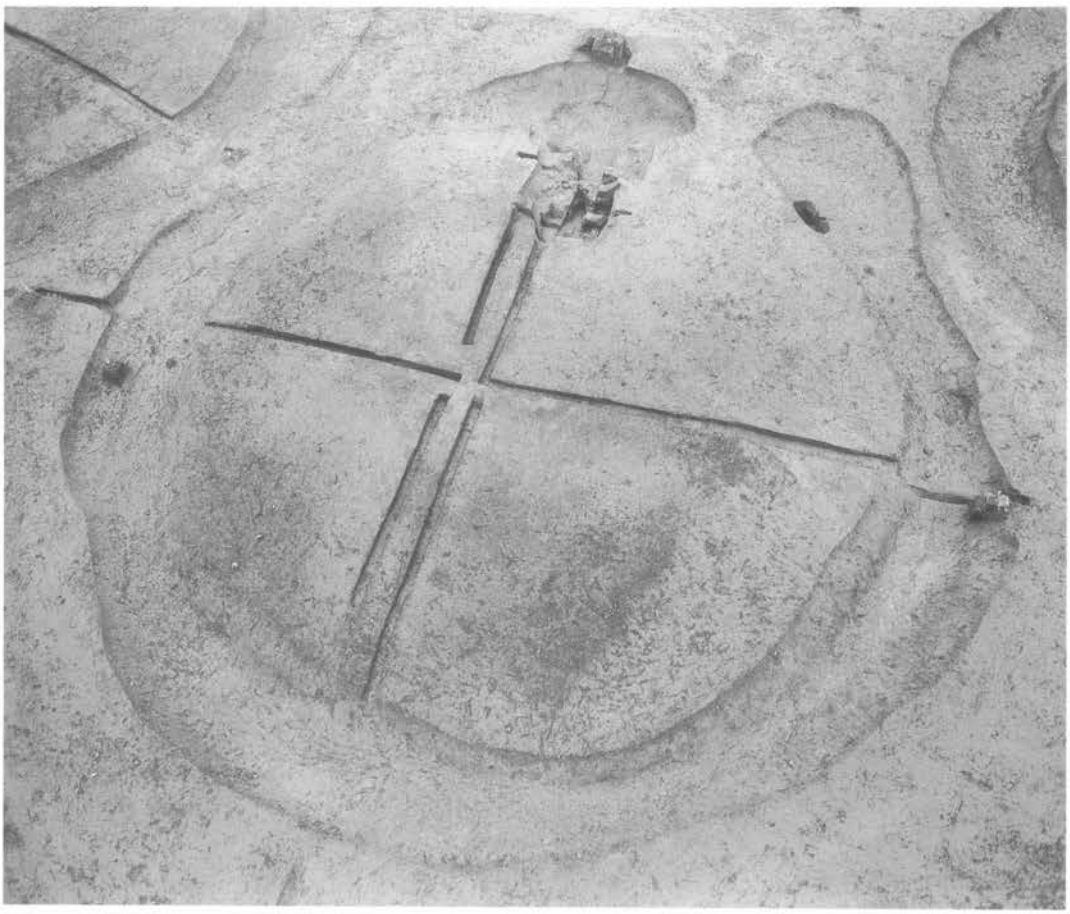
2．池花南遺跡古墳群（南半部）

1．池花南遺跡 SX-01 全景

2．同周溝内遺物出土状況

3．同周溝土層断面

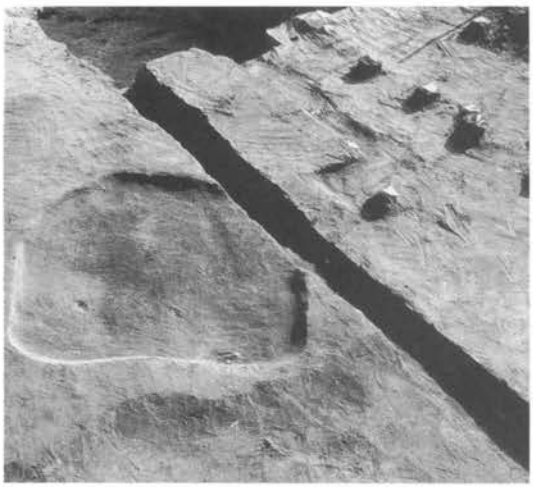
1．池花南遺跡 SX-02 調査前



2．同全景

1．池花南遺跡 SX-02 墳丘・第 1 主体部土層断面

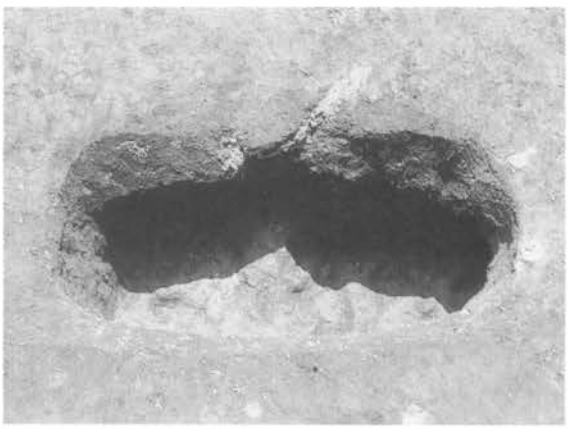
2．同第 1 主体部全景



1．池花南遺跡 SX-02 旧表土面竪穴遺構

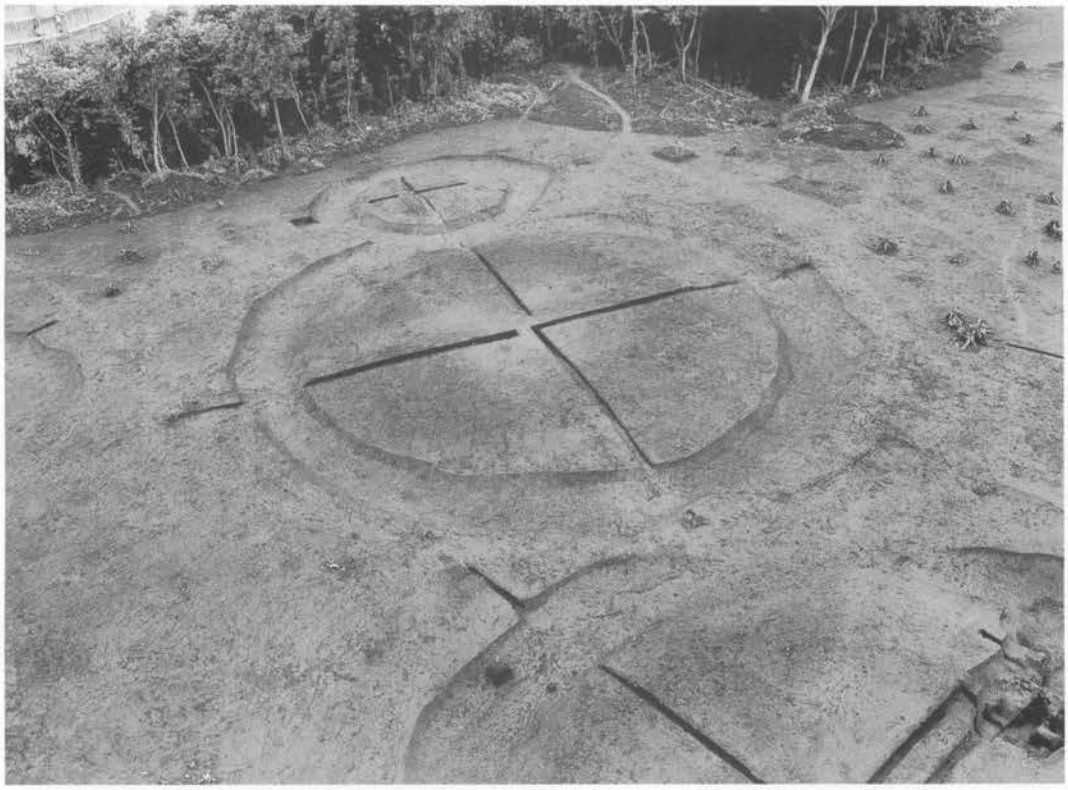
2．同遺物出土状況

3．同第 2 主体部土層断面

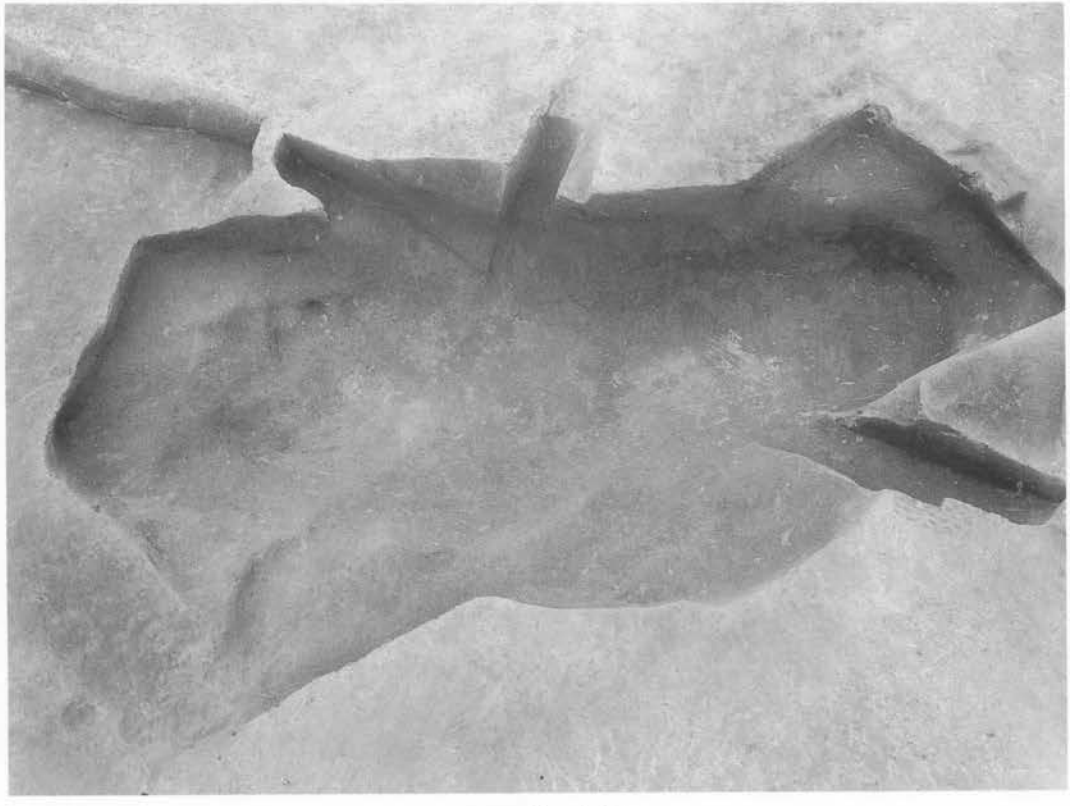


4．同第 2 主体部全景

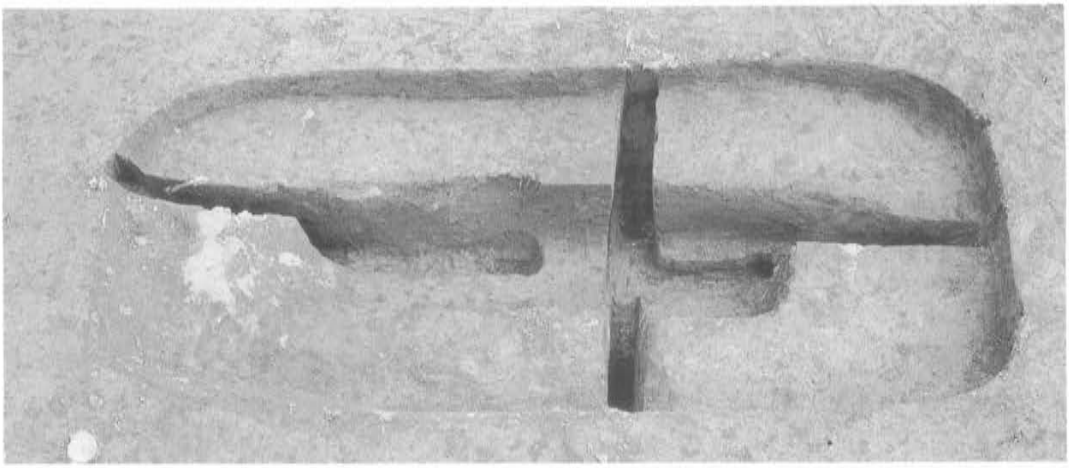
5．池花南遺跡 SX-03 調査前



1．池花南遺跡 SX-03・SX-12 全景

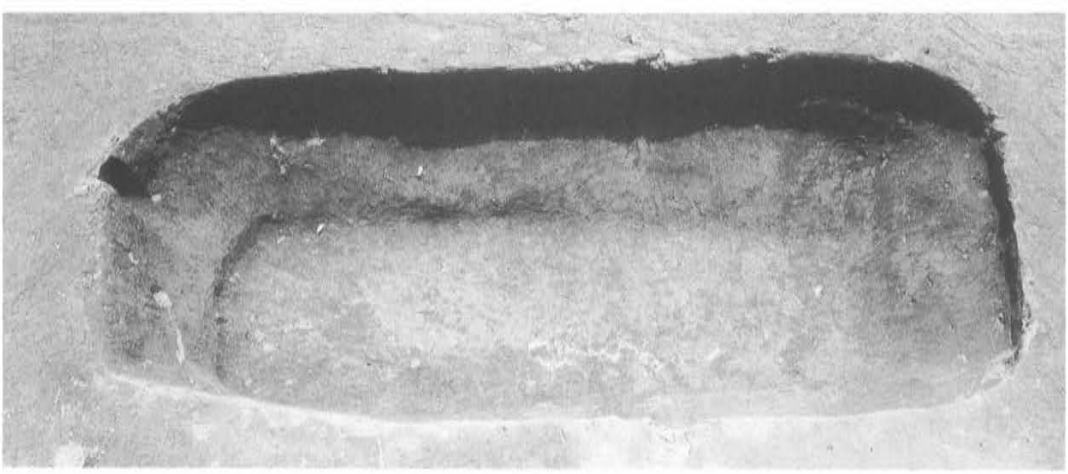


2．SX-03 第 1 主体部



1．池花南遺跡 SX-03 第 2 主体部全景

2．同遺物出土状況



3．同掘り方

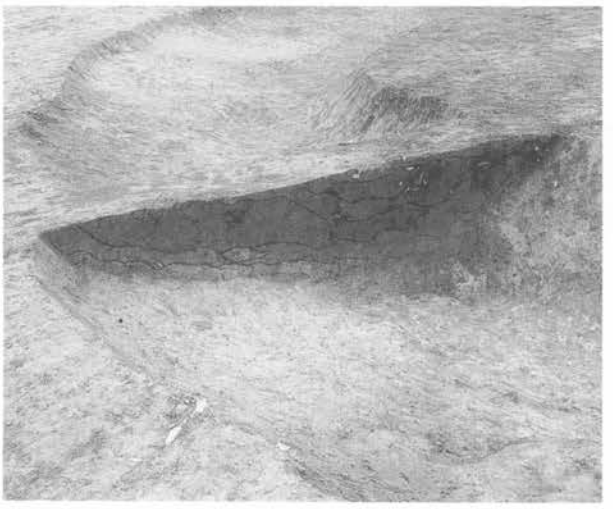
1．池花南遺跡 SX-04 調査前

2．同全景

3．同土層断面

4．同周溝内遺物出土状況

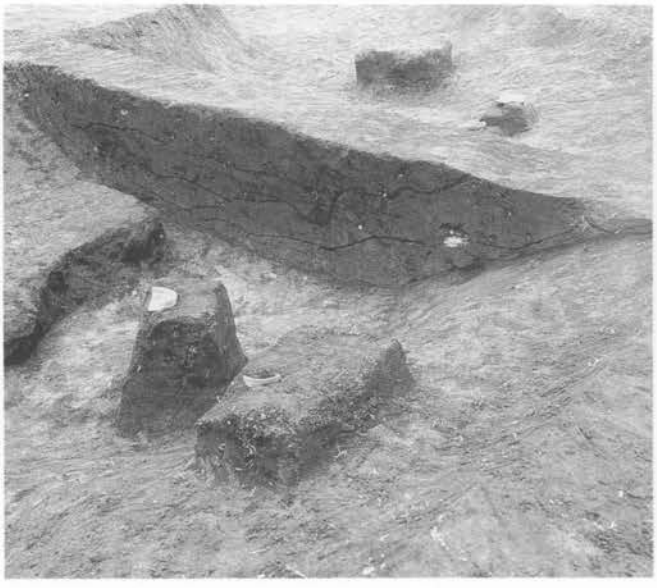
1．池花南遺跡 SX-05 全景



2．同周溝土層断面

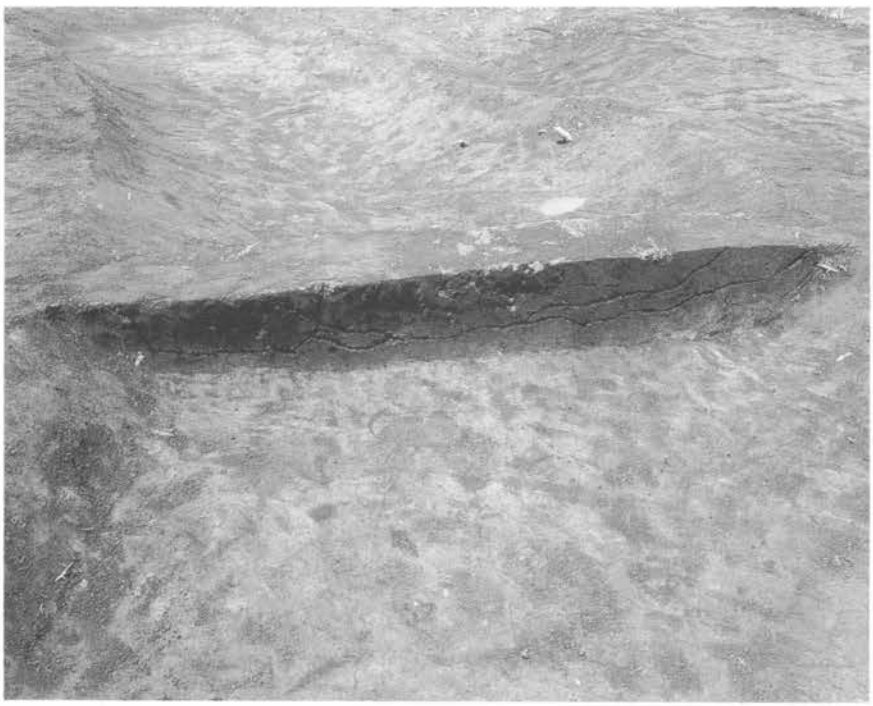
3．同周溝内遺物出土状況

1．池花南遺跡 SX-06 全景



2．同周溝土層断面・周溝内遺物出土状況

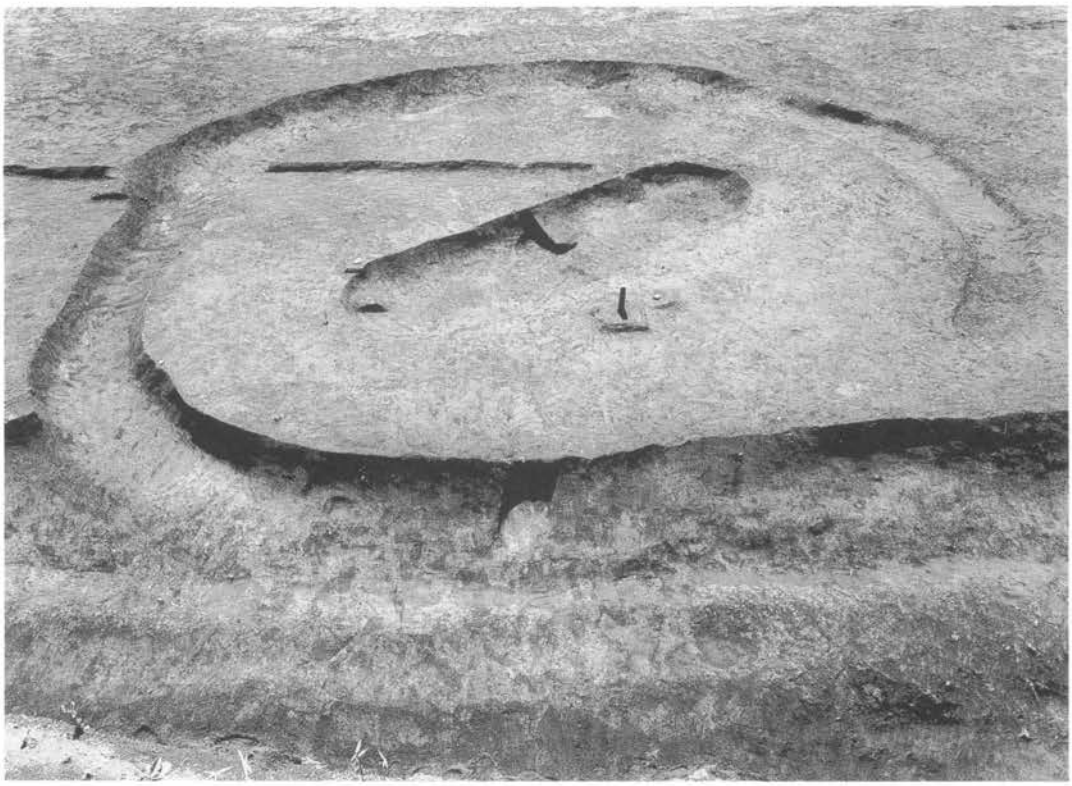
1．池花南遺跡 SX-07・SX-10 全景



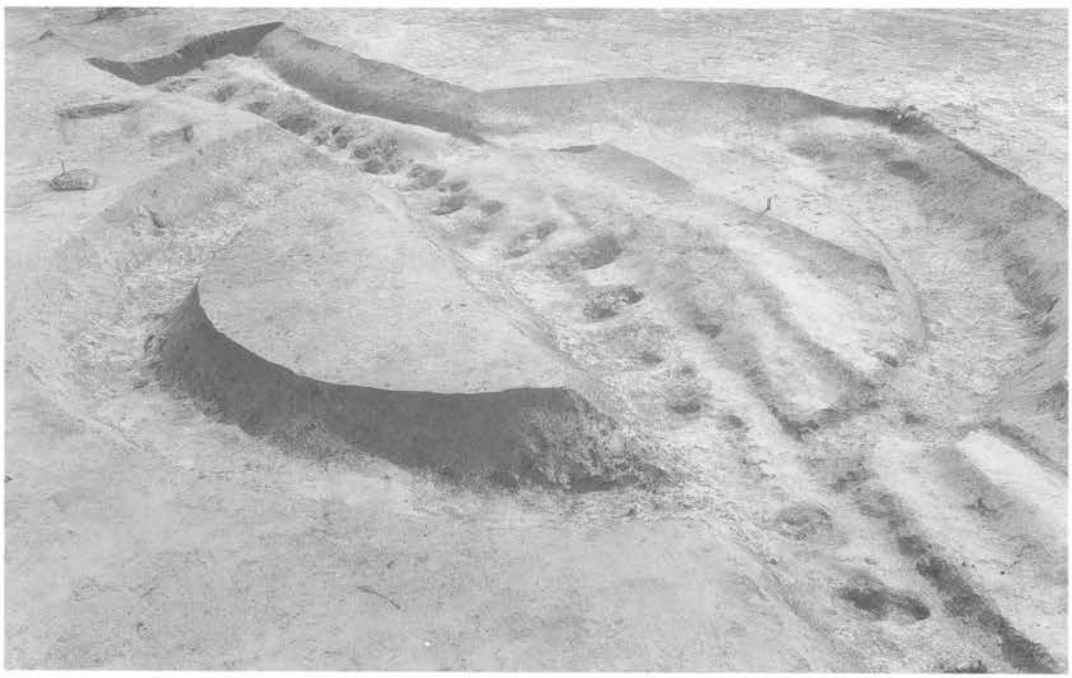
2．SX-07 周溝土層断面

1．池花南遺跡 SX-08 全景

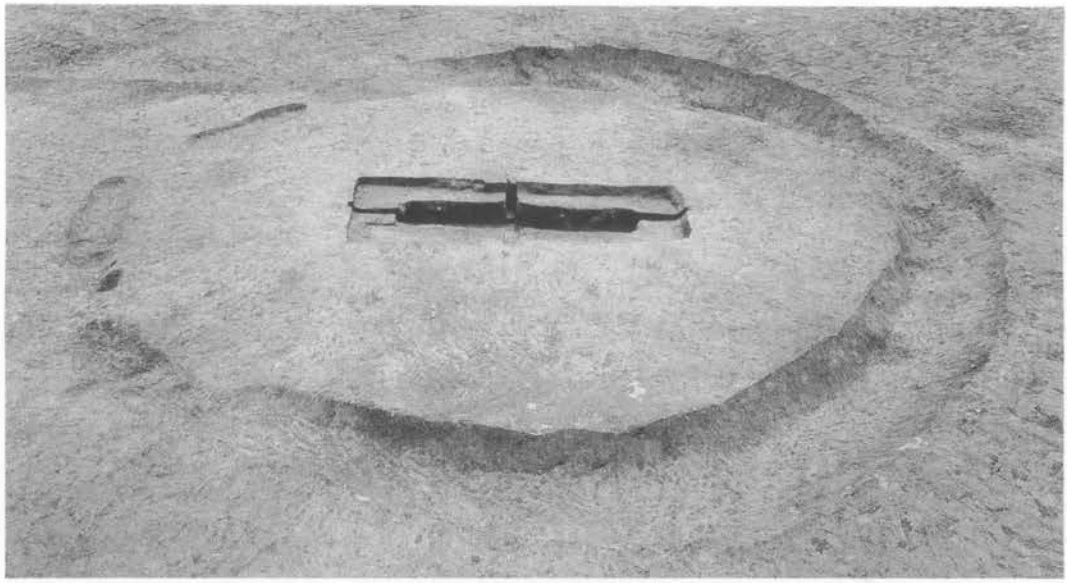
2．同主体部全景



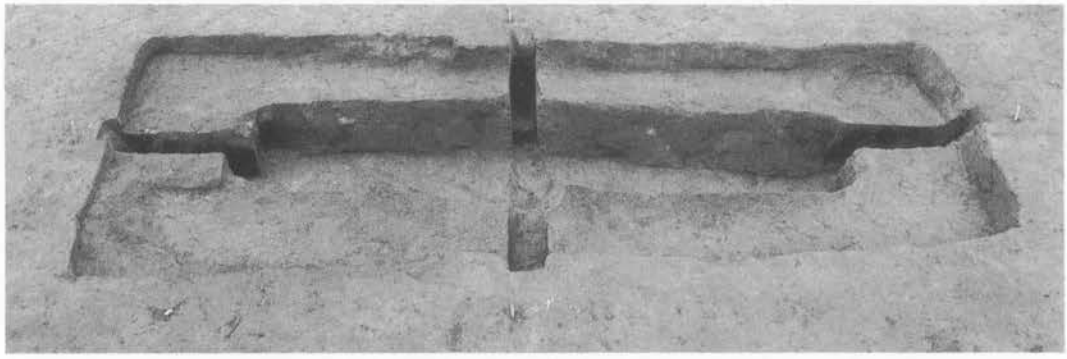
1．池花南遺跡 SX-09 全景



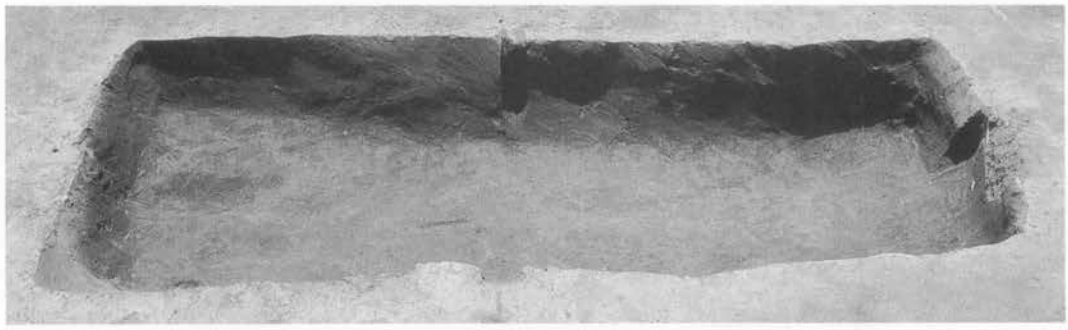
2．池花南遺跡 SX-18 全景



1．池花南遺跡 SX-11 全景

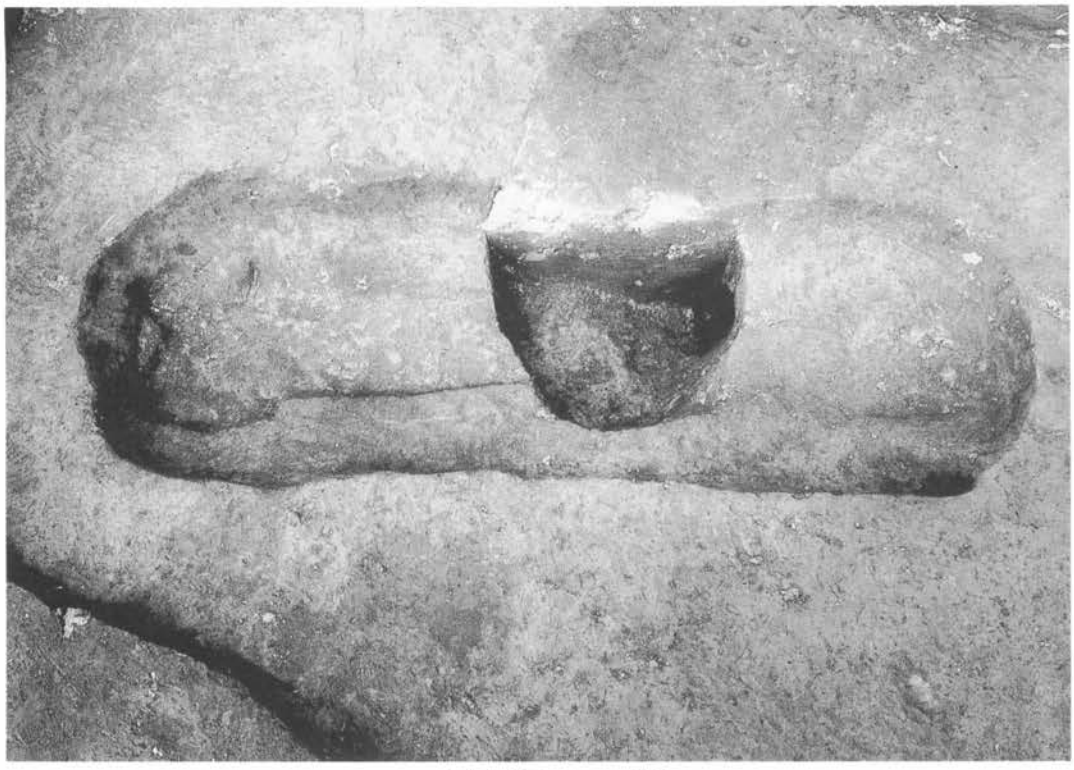


2．同主体部全景



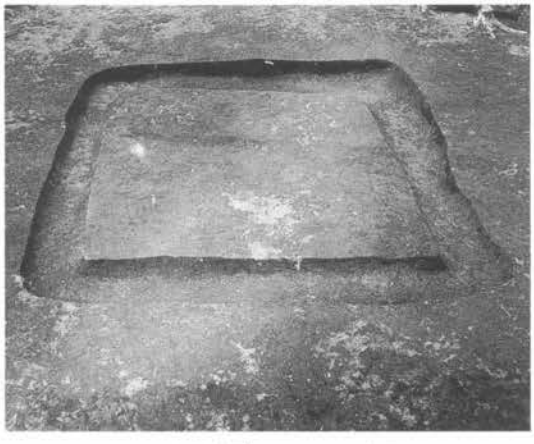
3．同掘り方

4．同周溝内遺物出土状況

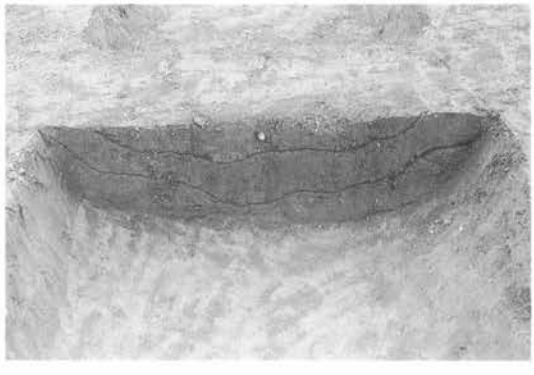


1．池花南遺跡 SX-19 全景

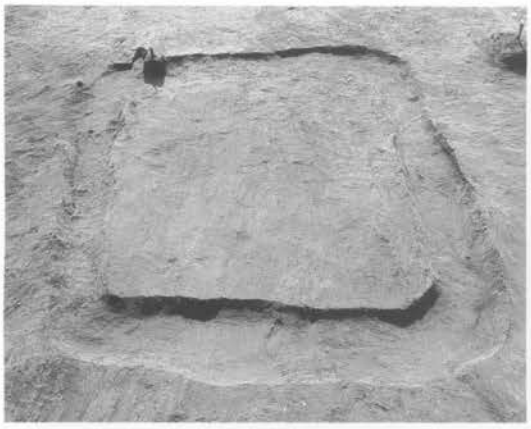
2．池花南遺跡 SX-13 全景



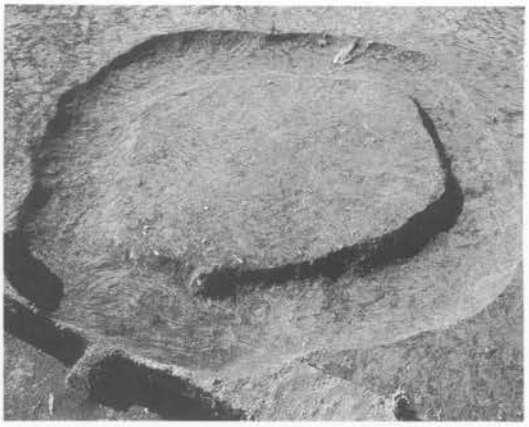
3．池花南遺跡 SX-14 全景



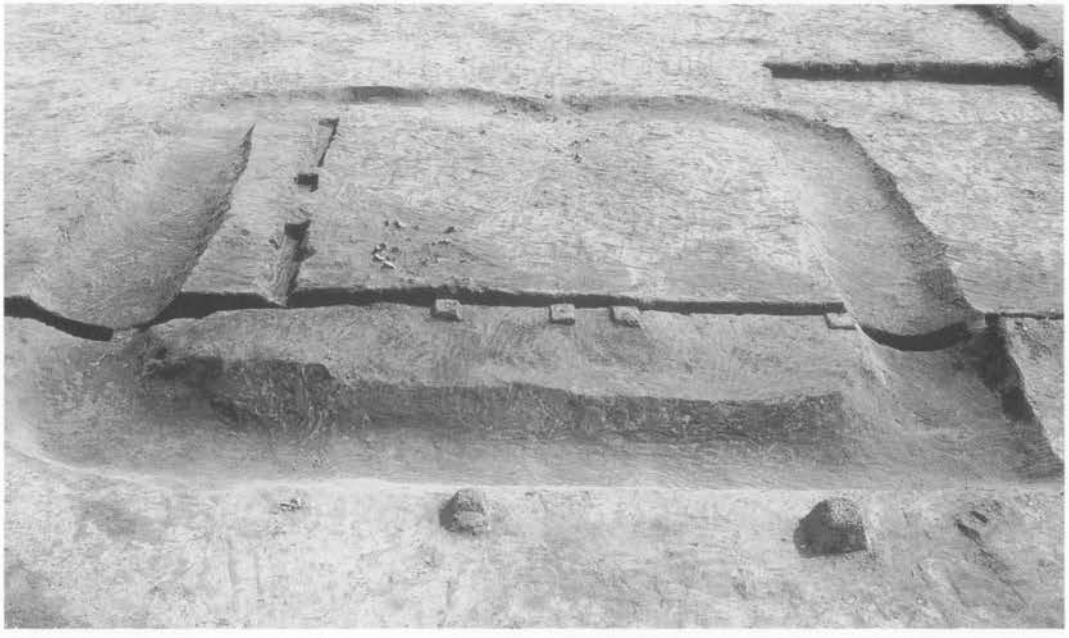
4．同周溝土層断面



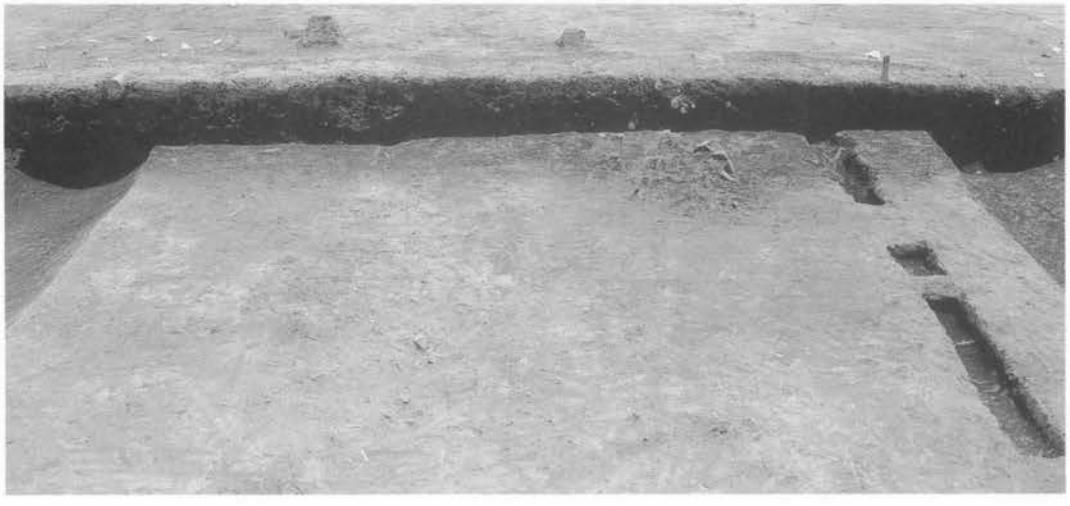
1．池花南遺跡 SX-15 全景



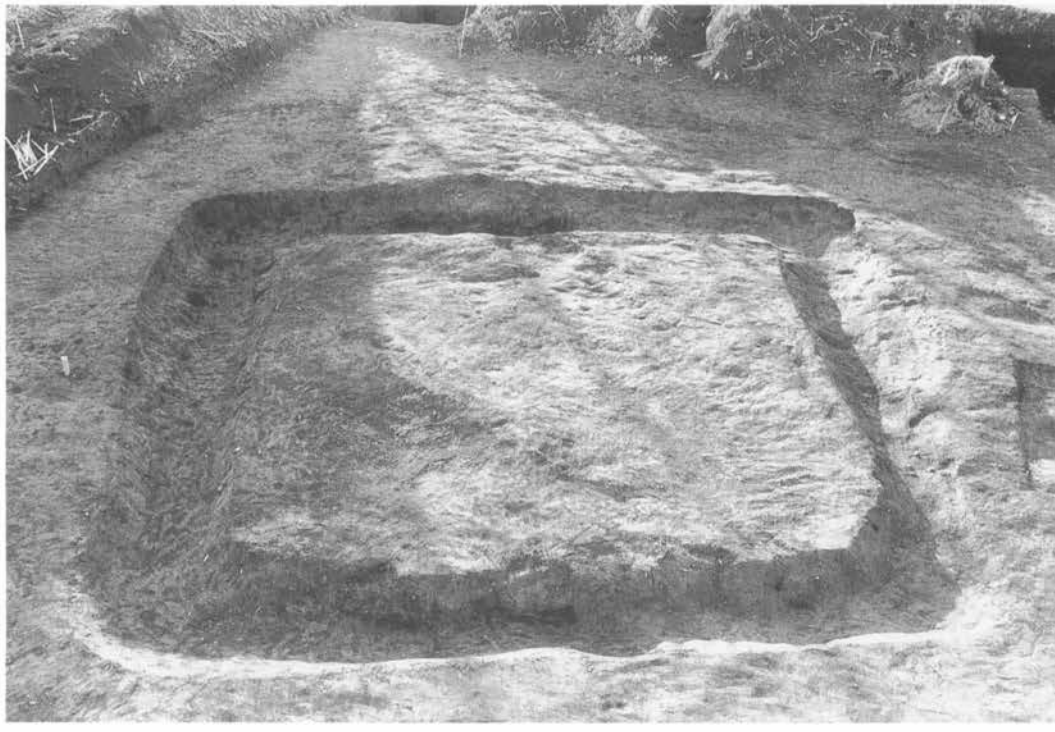
2．池花南遺跡 SX-16 全景



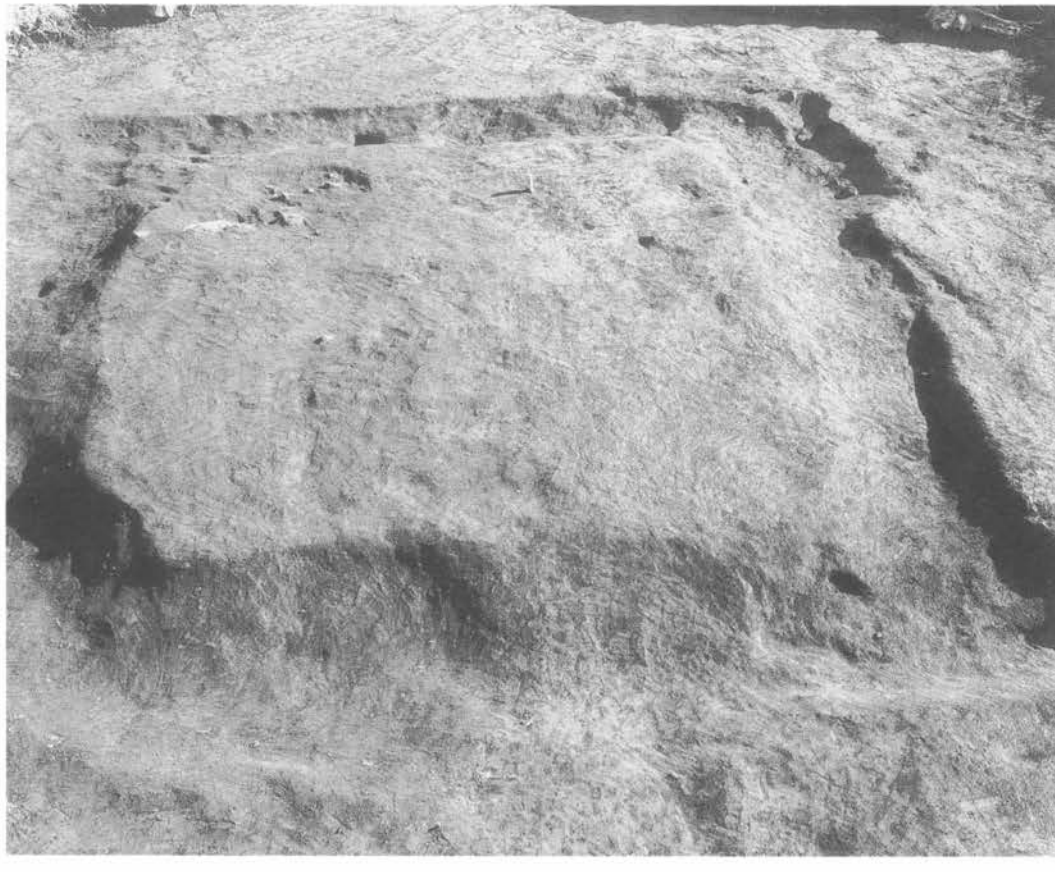
3．池花南遺跡 SX-17 全景



4．同土層断面

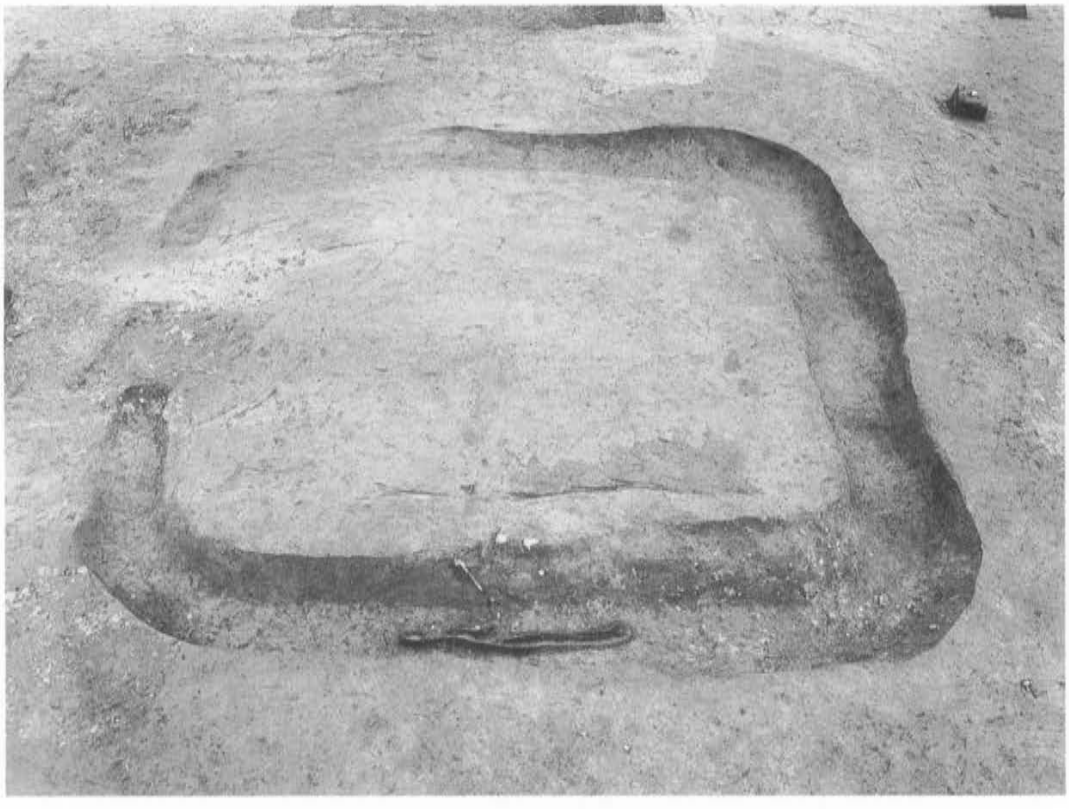


1．池花遺跡 SX-01 全景



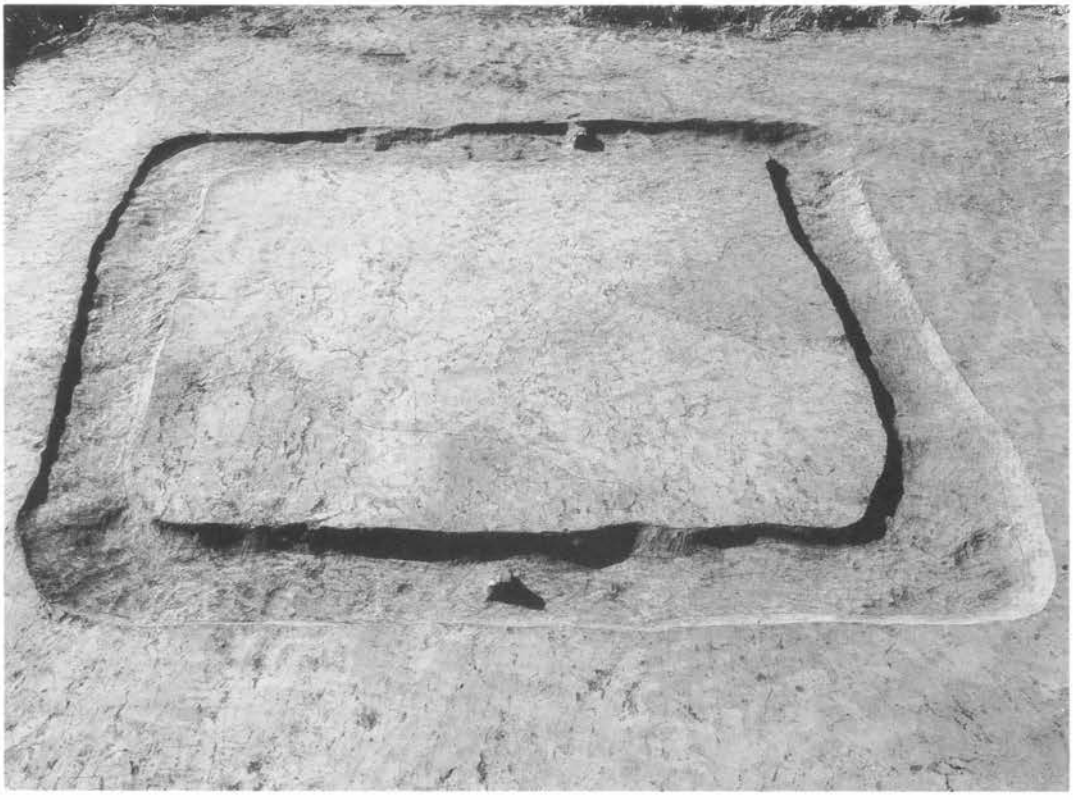
2．池花遺跡 SX-02 全景

1．大割遺跡 SX-01 全景



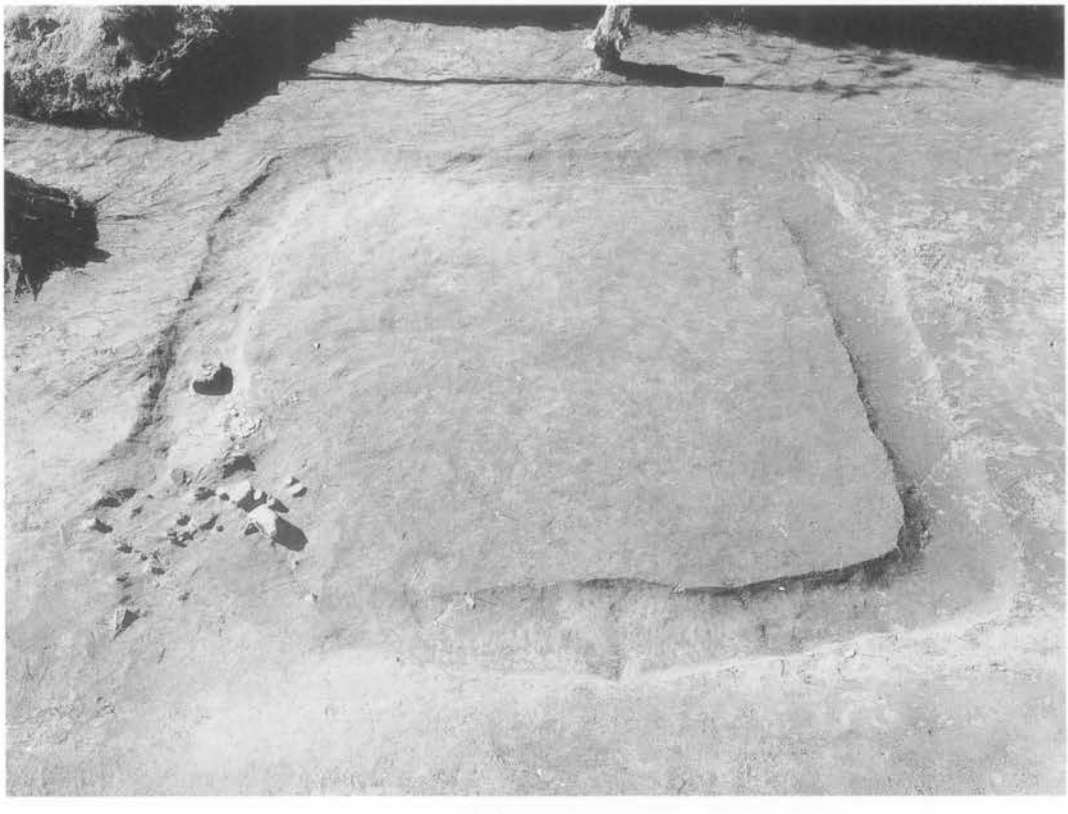
2．大割遺跡 SX-02 全景

1．大割遺跡 SX-03 全景



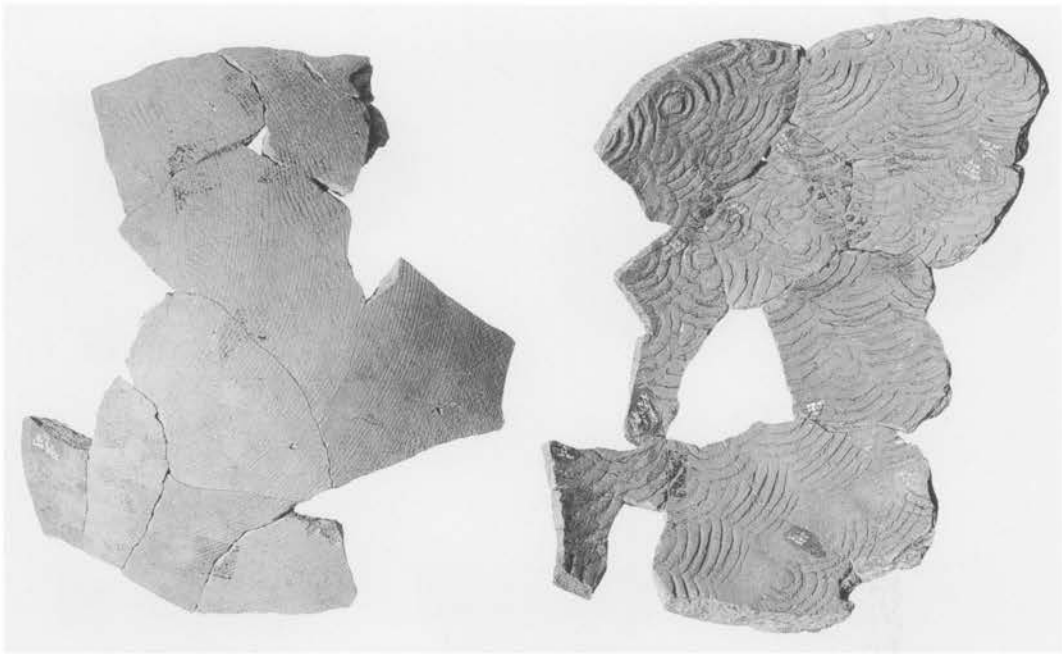
2．大割遺跡 SX-04 全景

1．大割遺跡 SX-05 全景



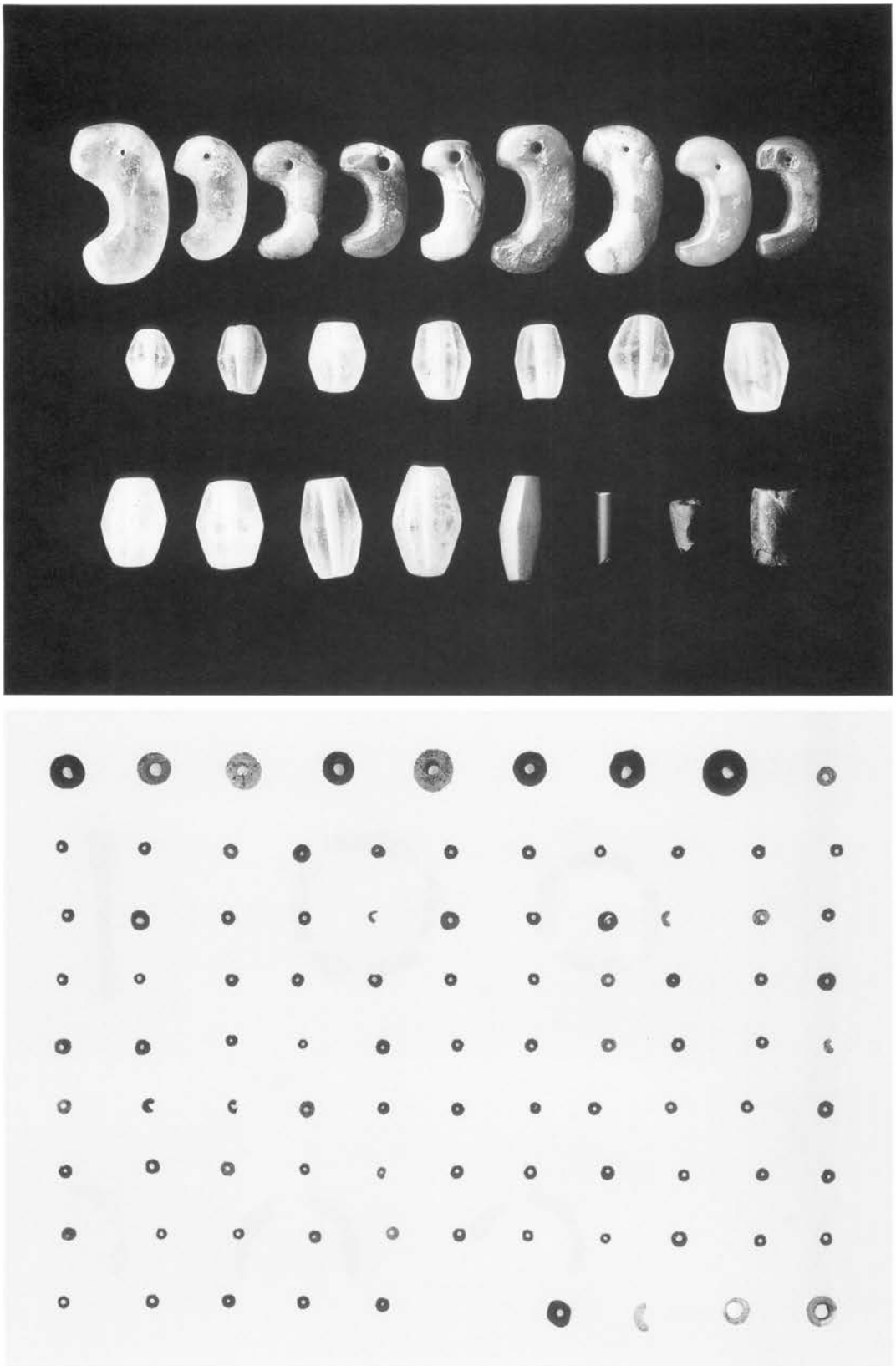
2．大割遺跡 SX-06 全景

池花南遺跡 SX-02 出土土器(1)

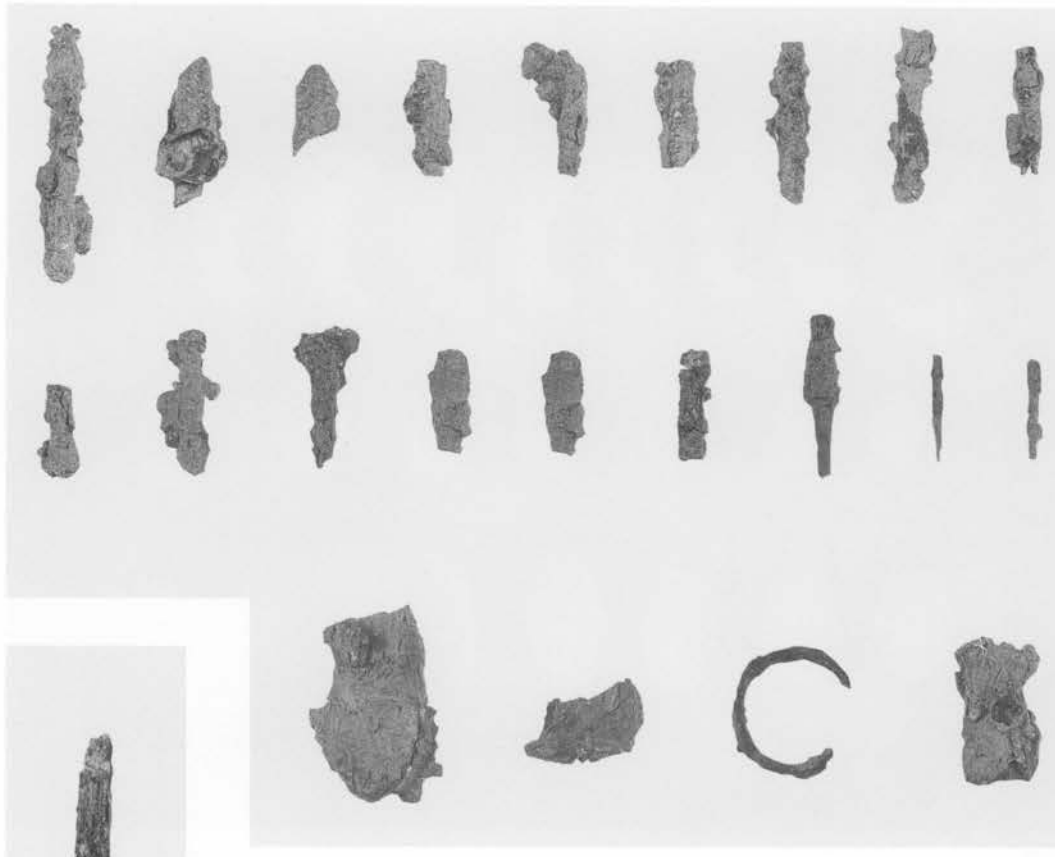


1．池花南遺跡 SX-02 出土土器(2)

2．池花南遺跡古墳出土土器



池花南遺跡 SX-02 出土玉類



SX-02

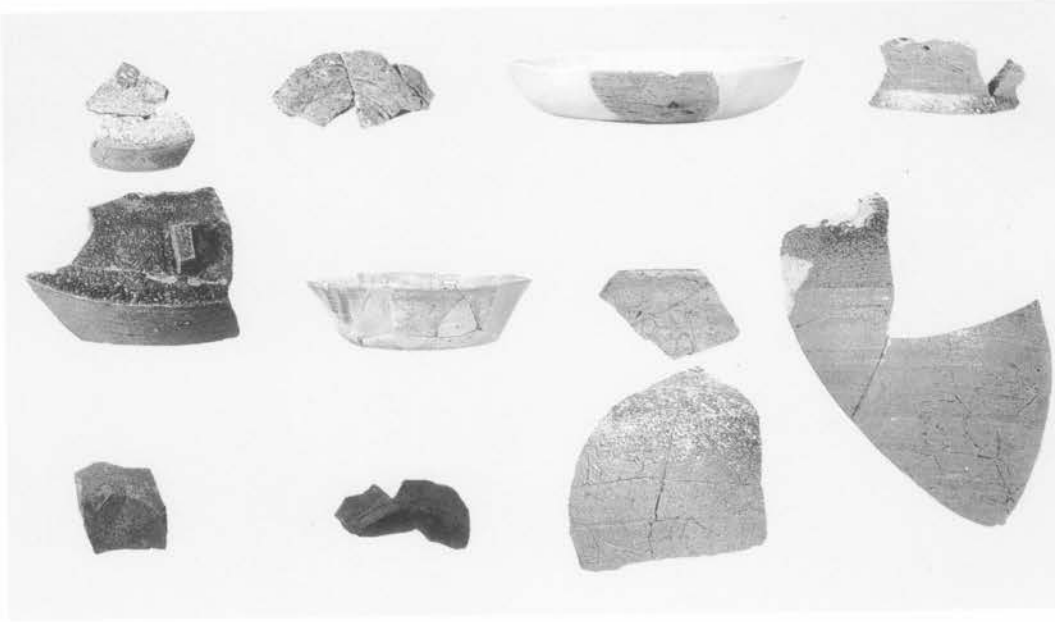
SX-03

SX-03

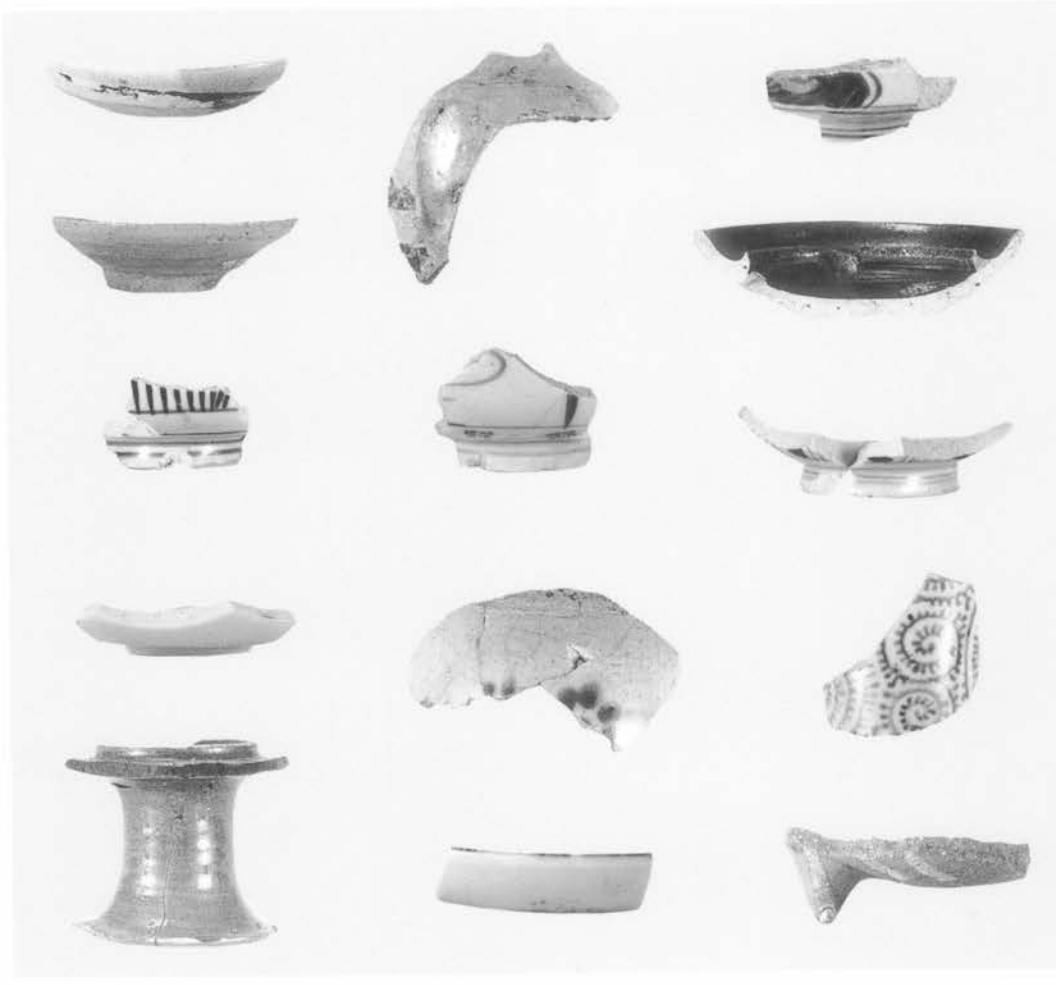
SX-04

SX-11

池花南遺跡古墳出土鉄製品



1．各遺跡出土８世紀の土器



2．池花遺跡出土近世の陶磁器

付図１　内黒田遺跡群先土器時代発掘区及び検出ブロック配置図（1/2,000）

付図２　内黒田遺跡群縄文時代～近世遺構配置図（1/2,000）

G5-57 G5-58 G5-59 H5-51 H5-52

G5-69 H5-61 H5-62

G5-77 G5-78 G5-79 H5-72

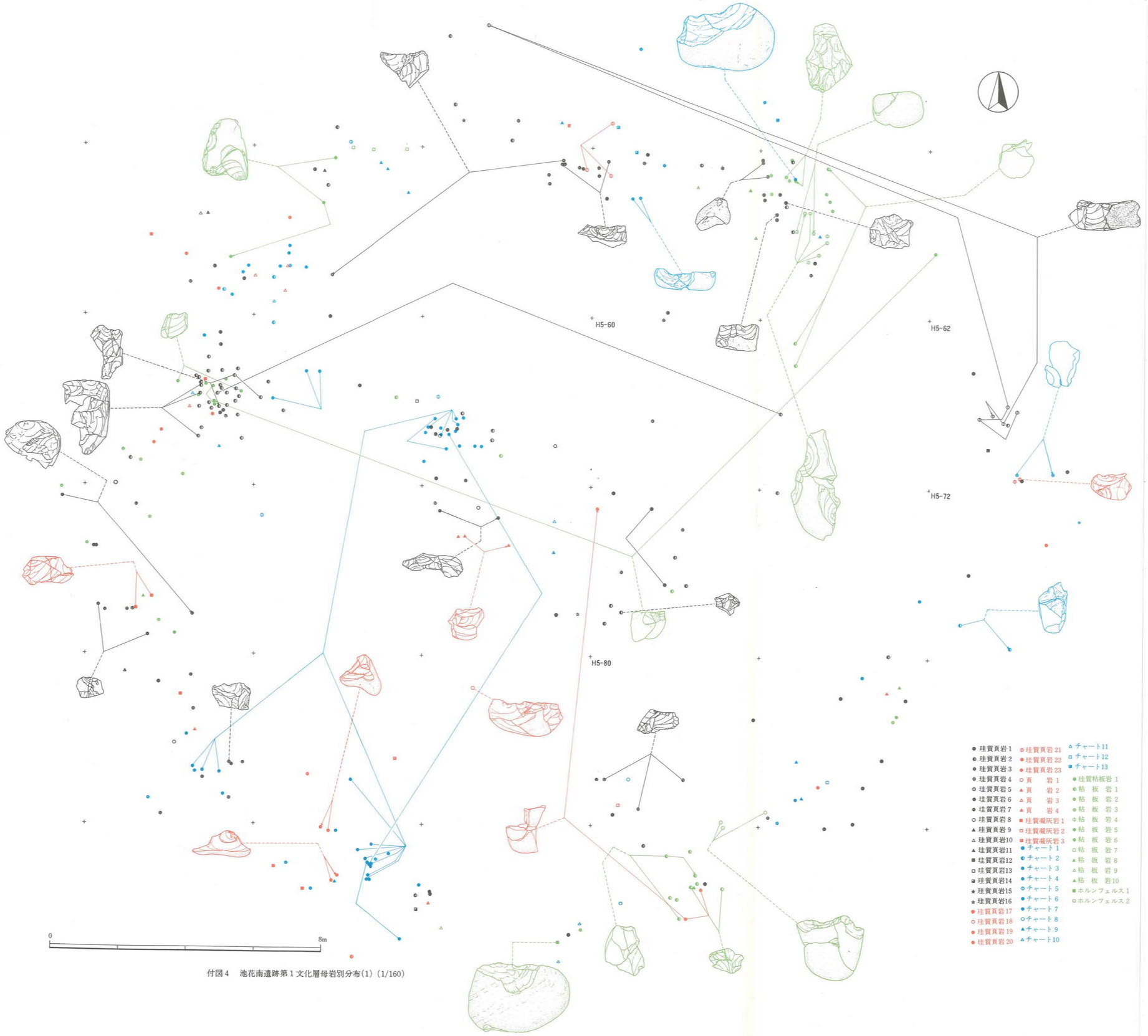
G5-87 G5-88 G5-89 H5-80 H5-81

G5-97 G5-98 G5-99 H5-90 H5-91

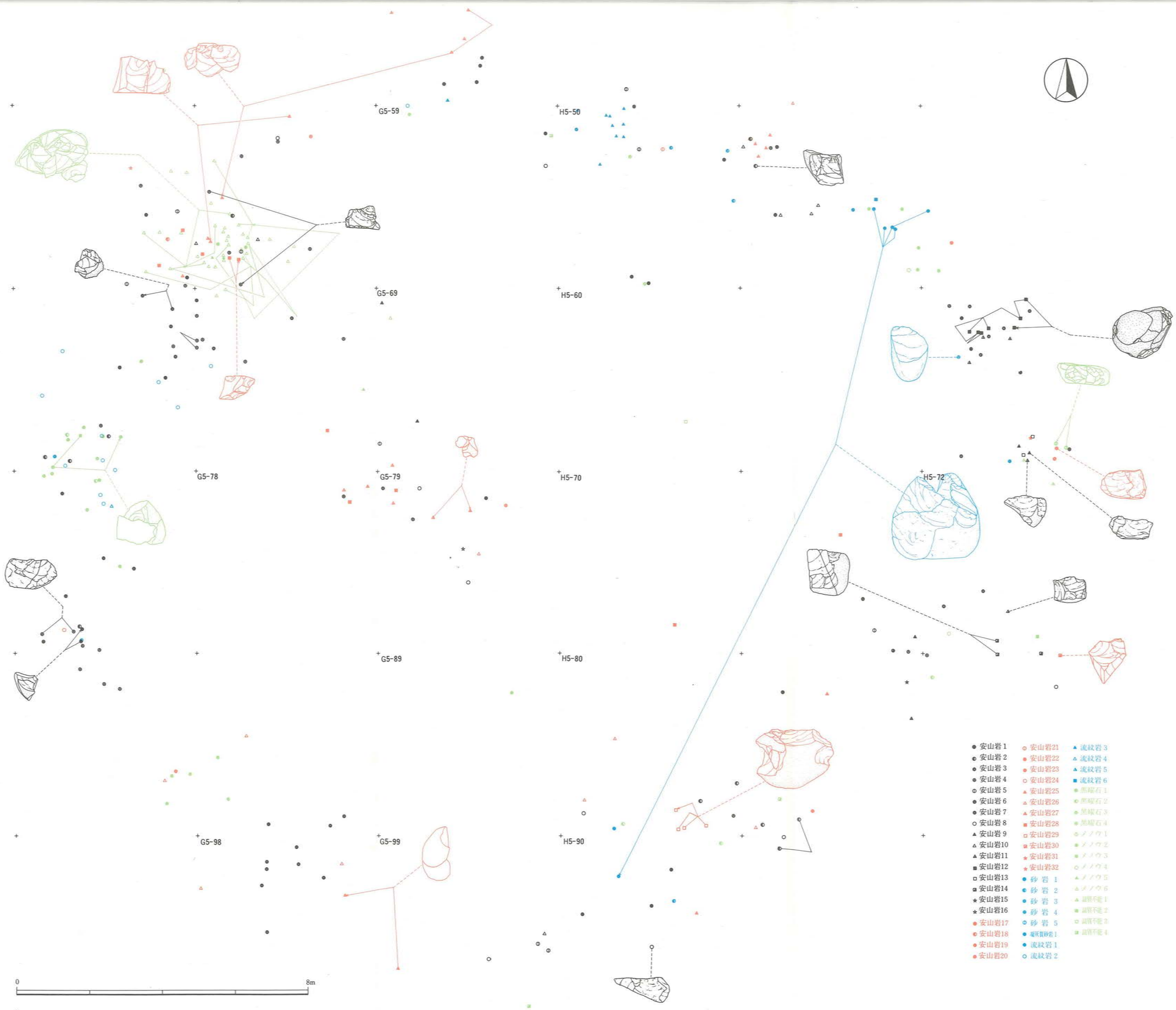
0 8m

△ 台形様石器・ナイフ形石器
● 削　器
Ⓟ 石　斧
⊗ 楔形石器
○ 加工痕のある剥片・使用痕のある剥片
● 剥　片
• 砕　片
■ 石　核
⌓ 敲　石
□ 礫

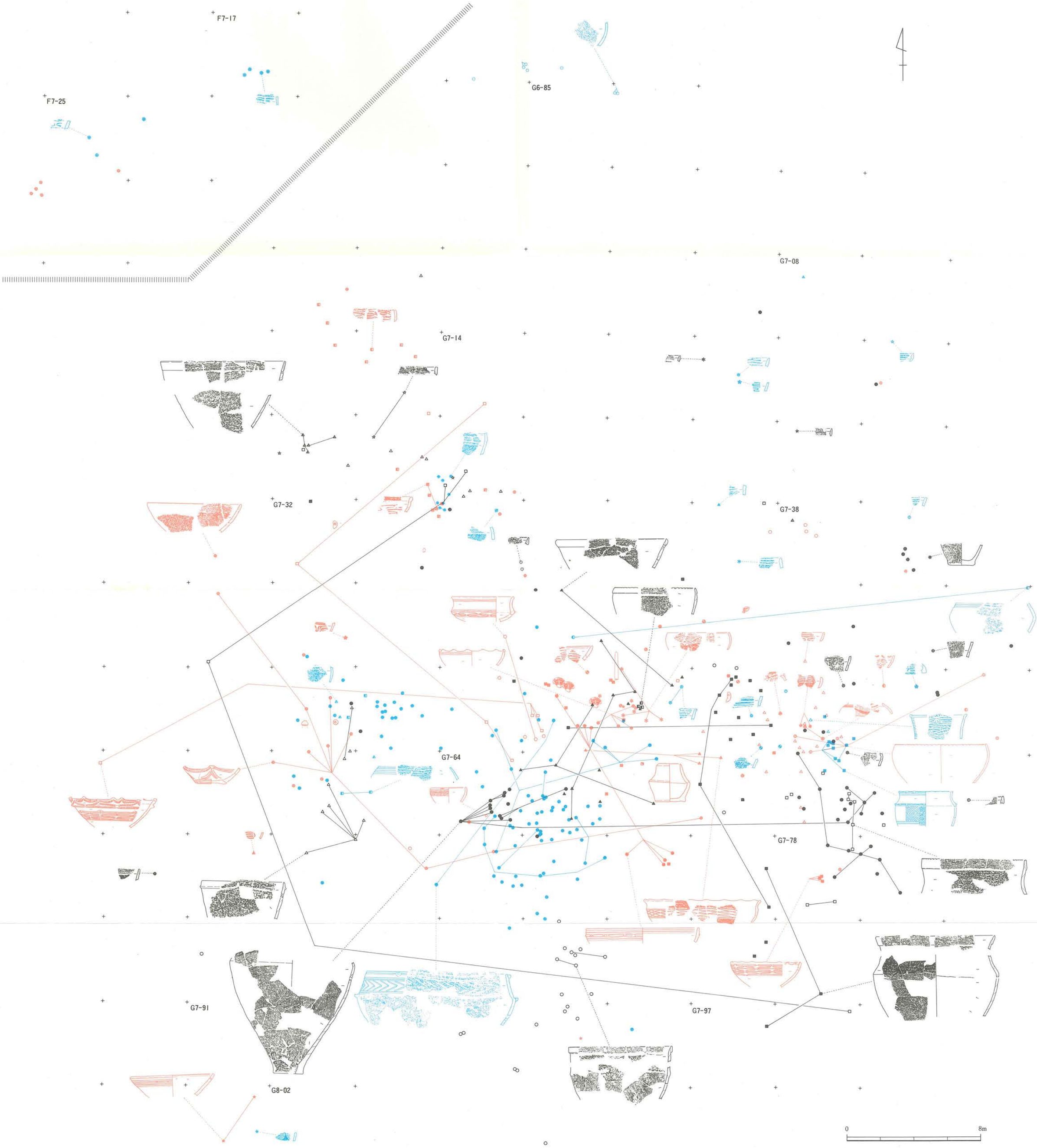
付図３　池花南遺跡第１文化層環状ユニット遺物分布図



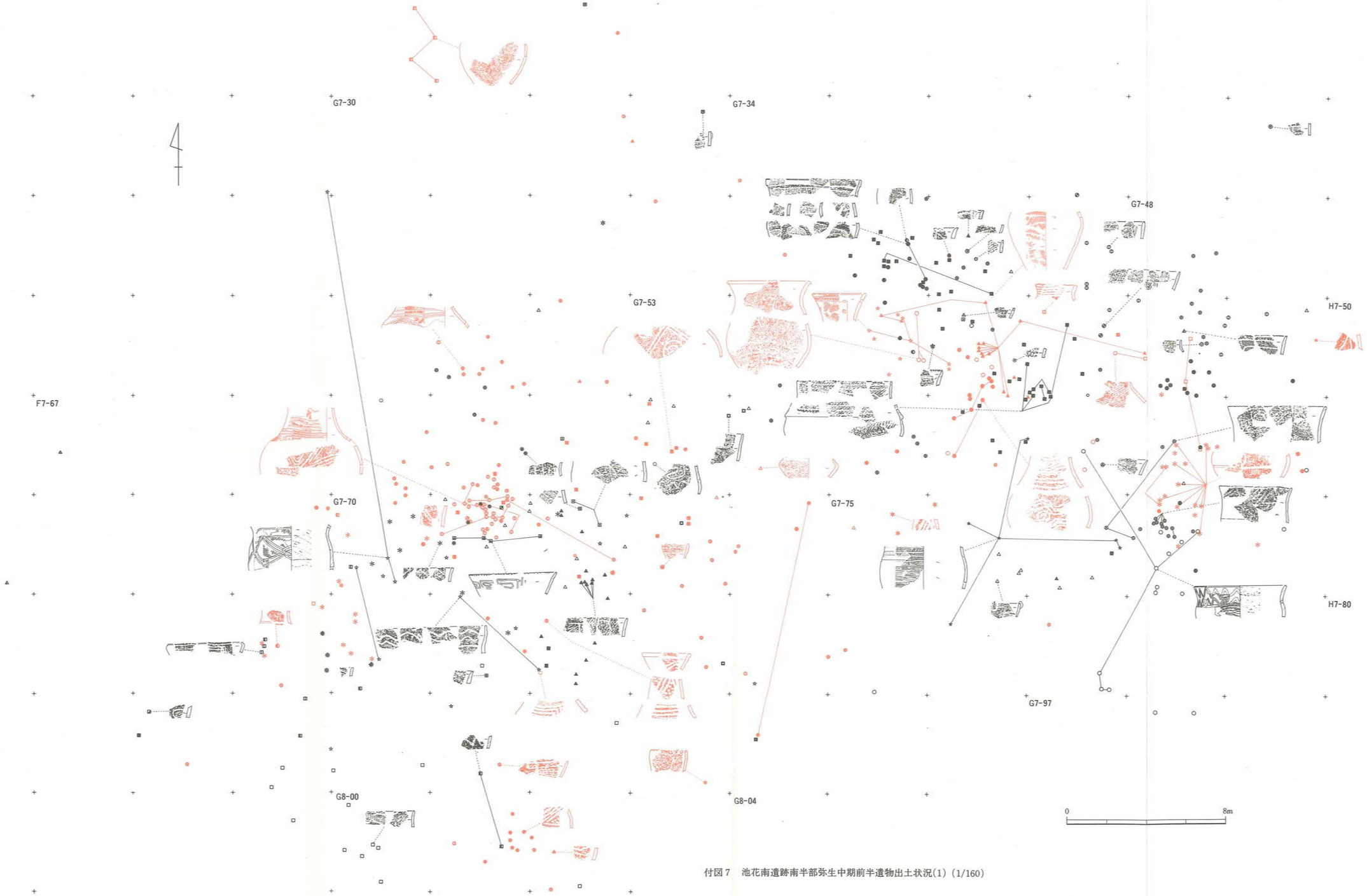
付図4　池花南遺跡第1文化層母岩別分布(1)(1/160)



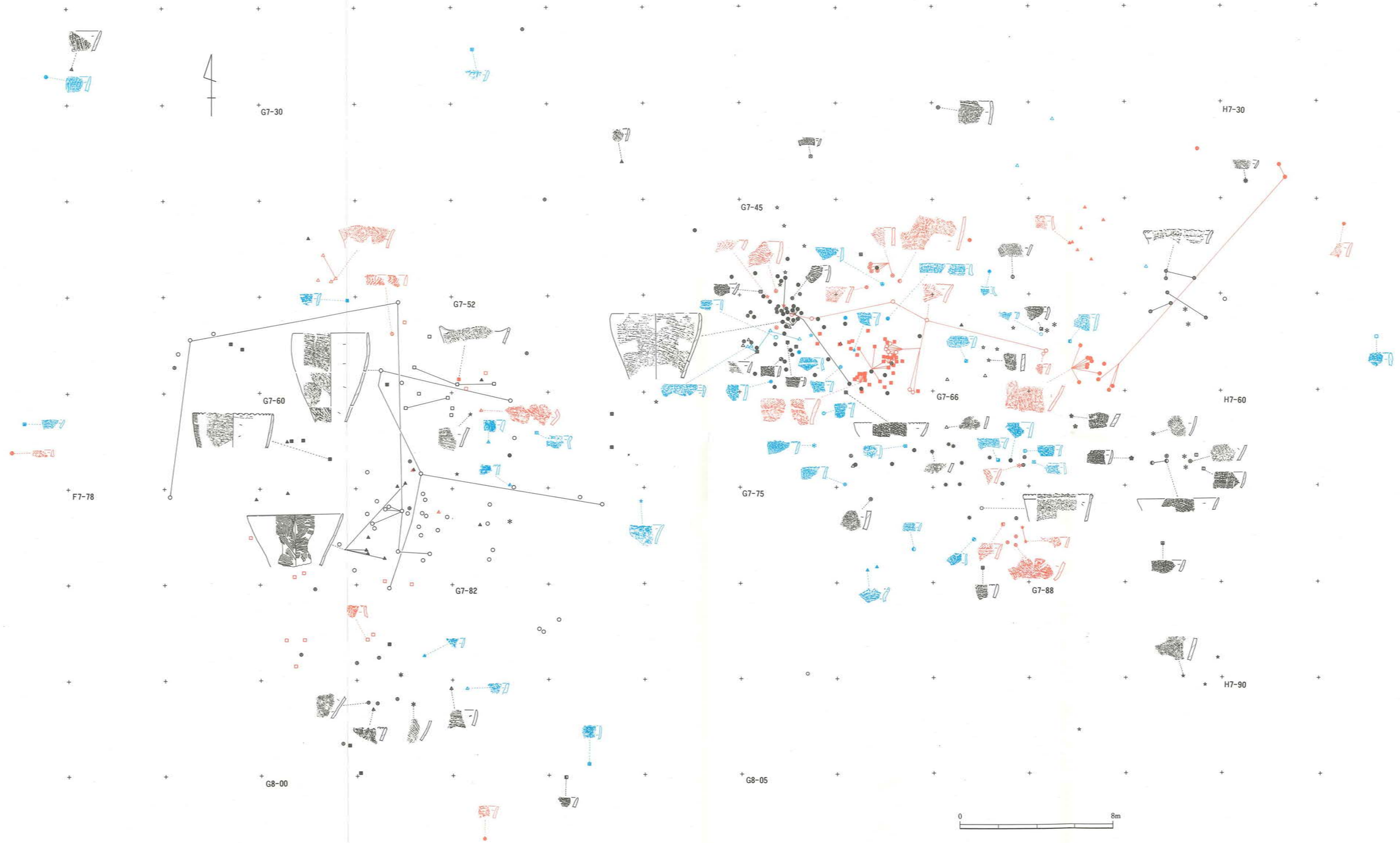
付図5　池花南遺跡第1文化層母岩別分布(2)（1/160）



付図 6　池花南遺跡千網期遺物出土状況（1/160）



付図7　池花南遺跡南半部弥生中期前半遺物出土状況(1)（1/160）



付図 8　池花南遺跡南半部弥生中期前半遺物出土状況(2)（1/160）

千葉県文化財センター調査報告第200集

四街道市内黒田遺跡群

－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－

第　2　分　冊

平成3年3月20日　印刷

平成3年3月30日　発行

発　行　千葉県住宅供給公社
千葉市本千葉町13－1

編　集　財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡官有無番地

印　刷　有限会社 正　文　社
千葉市都町2－5－5